【５月コミカライズ開始！２巻６／１０発売！】ガイスト×レブナント　クソザコモブな俺は、相棒の精霊を美少女に進化させて最強に！

サンボン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
https://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【５月コミカライズ開始！２巻６／１０発売！】ガイスト×レブナント　クソザコモブな俺は、相棒の精霊を美少女に進化させて最強に！

【Ｎコード】
Ｎ４６１３ＧＺ

【作者名】
サンボン

【あらすじ】
【ＴＯブックス様より第２巻が６／１０発売！】
【５月からコミカライズも開始です】

「つーか、何で俺が序盤で主人公にやられるクソザコモブ扱いなんだよ……」

国内有数の学校“国立アレイスター学園”への入学を明日に控え、ノリで自分の名前である“望月ヨーヘイ”をエゴサした結果、偶然見つけた『攻略まとめサイト』で自分がゲームの最序盤で主人公にやられるザコキャラ設定であることを知った。

というか、ここがゲームの世界？　そんな訳ねーだろ！　しかも俺は、世界でも一万人に一人しかいない“精霊（ガイスト）”使いなんだ！　いわばエリート中のエリートなんだよ！

ということで、俺は『まとめサイト』を無視して入学式を迎えるんだけど……。

『まとめサイト』にあった通り、同じクラスになり、同じ名前と容姿のヒロインや仲間候補がいて、同じ担任の先生になった。

ここまで来ると、さすがに俺も認めるしかない。
ここはゲームの世界で、俺達はそのゲームのキャラクターなんだと。

ということは、俺は本当に『主人公が転校した時に真っ先に絡んでくるクソザコモブ』なのか！？
いや、そんなの認めない！　だったら……！

「［ゴブ美］……俺達は強くなるぞ！　強くなって、あのクラスの連中を全員見返して、そして……！」

夏休み明けには、このゲームの主人公が学園に転校してくる。
その前に。

「この俺が、その主人公を逆に返り討ちにしてやるよ！」

これは、ゲームのザコキャラとしての運命に抗う男と、そんな男に使役される醜いゴブリンのような精霊（ガイスト）の、共に最強を目指す物語。

※書籍化に伴い、タイトルを変更いたしました。
旧タイトル「ガイスト×レブナント～エゴサした結果、ここがゲームの世界で自分が主人公にあっさり倒されるクソザコモブだと知った俺は、偶然見つけた『攻略まとめサイト』を駆使して強くなって、主人公達を見返してやる！～」
※５／３１　ローファンタジー日間一位！６／３週間一位！６／１５月間二位！ありがとうございます！
※カクヨムでも連載しています。

クソザコモブ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クソザコモブ

「はあ！？　どういうことだよ！」

既に夜の十一時を過ぎているというのに、俺はスマホの画面を眺めながら思わず大声で叫んだ。

だけど、叫びたくなった俺の気持ちも理解して欲しい。

だって。

「つーか、何で俺が序盤で主人公にやられるクソザコモブ扱いなんだよ……」

そう呟くと、スマホを放り投げて俺は頭を抱えた。

といっても、別に俺がクソザコモブだなんて事実はどこにもない。

いやむしろ、俺は選ばれた人間なのだから。

「ハア……エゴサなんかするんじゃなかったよ……」

溜息を吐き、投げ捨てたばかりのスマホを拾い上げてもう一度画面を見る。

そこには、『“ガイスト×レブナント”攻略まとめ』と銘打たれたページが表示されていた。

というか、冗談交じりに検索サイトから自分の名前を入れてエゴサしたら、こんな訳の分からないところがヒットするなんてな……。

しかも、ジュブナイル学園ファンタジーＲＰＧのキャラクターの一人として。

で、興味が湧いた俺は当然、俺と同姓同名のキャラクターの情報を見ると、俺の名前……“望月（もちづき）ヨーヘイ”と一緒に、その評価が書かれていた。

『“国立アレイスター学園”の一年生。主人公が転校した時に真っ先に絡んでくるザコで、使役する“精霊（ガイスト）”の能力は学園中最弱。なのにゲームでは一応ボス扱いで、クリア特典によって二周目以降は仲間キャラクターとして編成可能に。だが、能力最弱な上に“精霊（ガイスト）”がクラスチェンジしても毛の生えた能力程度しか進化しないので、使うだけ無駄』

そう……散々な言われようである。

だが、それ以上に気になったのが。

「……なんで俺の名前だけじゃなくて、明日から通う学校の名前や精霊（ガイスト）のことまで一致してるんだ？」

いや、“国立アレイスター学園”は国内有数の精霊（ガイスト）使い養成校だし、精霊（ガイスト）を題材にしたゲームを作ろうって考えた奴がいるのも理解できる。

なのに、なんで俺の個人情報が勝手にゲームに使われてるんだよ。

しかも、俺が精霊（ガイスト）の力に目覚めたのは中学二年の時……つまり、去年だ。

そこからゲームまで作って、『攻略サイト』まであるなんて、ちょっとおかしい。

何より……。

「そんなタイトルのゲーム、リリースされてないんだけど……」

俺はスマホの画面を見ながら首を傾げる。

じゃあ一体、このまとめサイトは誰が作った？

「……ま、俺のことを知ってるっつーか、ひがんでるヒマな奴がストレス発散で作ったんだろーなー」

多分、それが答えだろう。

俺はスマホ画面をフリックし、『攻略サイト』を斜め読みしながらそう呟いた。

まあ？　俺はこの国……いや、世界でも数少ない精霊使いなワケだから？　嫉妬するのもしょうがないとは思うけどな！

そう考えると少しだけ気分が晴れた俺は。

「出ろ、［グリーンオーガ］」

おもむろに精霊を召喚した。

すると、俺の目の前に緑色の小さな人型の精霊が現れる。

まあ、見た目はお世辞にもカッコ良くはないが、腐っても精霊。

ハッキリ言って、人間の数倍強い。

使役できる人間だって、一万人に一人いるかいないかだしな。

だけど。

「せっかく俺が［グリーンオーガ］ってカッコイイ名前つけたのに、

『攻略サイト』じゃ［ゴブ美］、だもんなあ……」

俺は思わず肩を落とす。

いや、『攻略サイト』曰く、俺の精霊は『属性：ゴブリン（♀）』って書いてあるんだよ……。

俺はチラリ、と精霊を見ると。

「なあ……お前、実は女なのか？」

って、問い掛けたところで精霊が答える訳ねーか。

などと思ったが。

『……（コクリ）』

……頷いたよ。

「じゃ、じゃあお前、属性はゴブリンで、女ってことでいいんだよな！？」

『……（コクコク）』

おおお……ここにきて新しい発見だ……。

だ、だけど、そうするとこの『攻略サイト』、実はかなりすごいんじゃねーか？

というより。

「本当に、一体誰が……」

ここまでくると、このサイトそのものが気味悪く思えてきた。

なんで本人である俺が知らないような情報まで、こんな詳細に書

かれてるんだよ。
誰が？　何の目的で？
「ま、まあ、たまたま一緒だったってだけだろ！　偶然だ偶然！」
俺はブンブン、と頭を左右に振り、思考を切り替えた。
これ以上考えたところで、どうせ俺の理解なんか追いつかないしな。
とはいえ……俺は一つだけ確認したいことがあった。
「なあ……お前、［グリーンオーガ］って名前、好き？」
『……（フルフル）』
精霊（ガイスト）はかぶりを振る。
「……じゃあ、［ゴブ美］は？」
「……（コクコク！）」
あああああ！　やっぱりコイツは［ゴブ美］だった！
チクショウ！　俺が考えた名前なんかより、よっぽど嬉しそうにしやがって！
「ハア……じゃあ、今からお前の名前は［ゴブ美］な……」
『！』
俺の言葉で、［グリーンオーガ］改め［ゴブ美］が手に持つ木の棍棒を振り回してはしゃぐ。
そんな［ゴブ美］の姿を見て、俺は乾いた笑みを浮かべるのが精

一杯だった。

クソザコモブ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

「ガイスト×レブナント」書籍版は２０２２年1月8日にＴＯブックス様より発売！
イラストはＨＩＭＡ先生！どうぞよろしくお願いします！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ゲームの世界（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
新連載第二話！

ゲームの世界

「くあ……」

うるさく鳴り響くスマホのアラームを止めて欠伸（あくび）をすると、俺はベッドから降りて窓のカーテンを開ける。

「うむうむ！　絶好の入学式日和だな！」

そう、今日はいよいよ俺が“国立アレイスター学園”に入学する日だ。

“国立アレイスター学園”は、俺と同じ精霊（ガイスト）使いが一堂に集まり、通常の高校で学ぶことに加え、精霊（ガイスト）に関する様々なことを学び、鍛える我が国有数の養成機関だ。

そして、晴れてこの学園を卒業した暁には、その後は国の要職に就くなど、第一線で活躍することになる。

まあ、この学園に入学が決まった時点で、既にエリートへの道が約束されているのだ。

「ムフフ、可愛い女の子はいたりするかなー……って」

そういえば、『攻略サイト』には主人公の彼女候補となるヒロインがかなりいたなあ。

まあ、さすがにそこまで偶然一致するなんてことはないだろうけど。

俺は学園指定の制服に着替え、リビングへと向かう。

すると。

「「あ……」」

俺を見るなり、父さんも母さんも、気まずそうな表情を浮かべる。

そんな両親の態度は、俺の精霊（ガイスト）が発現してからこの一年間ずっとだ。

俺も無言でテーブルに着くと、用意されていた朝食のうち、トーストだけをかじる。

というか……相変わらず気分悪い。

「……ごちそうさま」

結局俺は一口だけトーストをかじり、あとは全て残した。

そして、無言のまま洗面台に向かって歯磨きと洗顔を済ませた。

「おし！」

俺は気合いを入れるために両頬をパシン、と叩いた。

何つっても、今日は入学式で学園生活初日だからな。他のみんなに後れを取る訳にはいかない。

ということで、俺はヒューズボックスを背負って玄関に向かうとスニーカーを履く。

「行ってきます」

聞いているかどうかも分からない両親にそう告げると、返事を待たずに俺は家を出た。

……心配しなくても、寮が決まればこんな家、すぐに出て行ってやるよ。

◇

「おおー！」

学園の校門に着くなり、俺は思わず校舎を見上げた。

さすがは国の威信をかけて設立した学園だ。

周辺にある建物と比べても、圧倒的に立派だった。

おっと、こんなところでボーッとしてるもしょうがない。

サッサと中に入って、俺のクラスとか確認するか。

だけど。

「……まさか、『攻略サイト』に載ってたように、“一一二”だったりしないよな……？」

いや、もちろん俺も『攻略サイト』なんて信用してないし、絶対にあり得ないと思ってるけど……その、なあ……。

俺はおそるおそる下駄箱の前に張り出されているクラス名簿を確認する。

「マ、本気（マジ）かよ……」

俺のクラスは、“一一二”だった。

「じゃ、じゃあクラスメイトは！？」

慌ててクラス名簿の名前を確認するが……『攻略サイト』に載っていた、ヒロインや主人公の仲間になる奴の名前が確かにあった。

「は……はは……」

何だよコレ……そんなことって、あんのかよ……。

俺は乾いた笑みを浮かべたまま、フラフラとした足取りでこれから世話になる教室へと向かった。

教室に入ると、『攻略サイト』に載っていた特徴通りのヒロイン達がいた。

黒髪ロングで眼鏡を掛けた、クラス委員長の“悠木（ゆうき）アヤ”。

少しチャラい感じのお調子者で、主人公の親友となる“加隈（かぐま）ユーイチ”。

そして……銀髪をハーフアップにまとめ、後に“アレイスターの聖女”と呼ばれる“木崎（きざき）セシル”。

他にもヒロインや仲間キャラは多くいるが、残りはクラスや学年が違っていたり、先生だったりするから、クラスメイトではこの三人だ。

「じゃあ……本当に……」

俺はポケットからスマホを取り出し、ブクマしてあった『攻略サ

イト』を開く。
そして、俺のことが記されているページにある評価。
『主人公が転校した時に真っ先に絡んでくるクソザコモブ』
俺は……本当にクソザコモブなのか？
……って、イヤイヤイヤ！　こんなの偶然！　偶然に決まってんじゃん！
そんな言葉を信じたくなくて、俺は打ち消すように必死でかぶりを振る。
その時。
「みなさん、入学おめでとうございます」
教室に入ってきた、栗色の髪をボブカットにしたものすごい美人。
もちろん、俺はその女性を知っている。
「これから一年間、あなた達の担任となります“伊藤（いとう）アスカ”です」
そう……そして、主人公の恋人となるヒロイン候補の一人でもある。
「詳しい自己紹介は後でします。まずは、これから入学式ですので講堂に向かいましょう」
先生は教室の前で俺達を出席番号順に整列させると、先生を先頭に講堂へと向かう。

すると。

「よう、なんか顔色悪いぞ？」

隣の男子生徒が、少し心配そうに声を掛けてきた。

「いや、別に……」

「あ、そう」

それどころじゃない俺は適当にあしらうと、その男子生徒は少し不機嫌そうに前へと向き直った。

男子生徒には悪いが、本当に俺はそれどころじゃないんだ。

俺は必死で頭の中で考えを巡らせるが、どう考えても導き出される答えは一つになってしまう。

もう認めるしかない。

――ここはゲームの世界で、俺達はそのゲームのキャラクターなんだと。

ゲームの世界（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

笑い者（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
新連載三話目！

笑い者

「……君達は君達自身の精霊（ガイスト）と共に、この学園生活を実りある素晴らしいものになることを祈念して、私の挨拶といたします」

この学園のトップである“藤堂（とうどう）ライドウ”学園長の式辞が終わり、来賓の祝辞（ここは割愛）へと続くんだけど。

学園長はイケオジである。繰り返す、学園長はイケオジである。大切なことなので二回言ってみた。

……まあ、今はそれは置いといて。

それよりも、来賓の祝辞もいつの間にか終わったことだし、俺は壇上に上がった生徒会長に注目しよう。

彼女の名前は“藤堂サクヤ”。

その名字から分かる通り、学園長の一人娘だ。

そして……物語のラスト直前で主人公の前に立ちはだかる、俺と同じボスキャラだ。

とはいえ、俺はクソザコモブ設定であるのに対して、彼女はラスボス直前に立ちはだかる最強キャラっていう位置付けらしいけど。

そして、このゲームに登場する女性陣の中で、唯一主人公の仲間にならないキャラだ。

先生も人妻も、主人公の仲間（もとい彼女）になるというのに。

まだ俺も『攻略サイト』を全て読んでないから分からないけど、

ひょっとしたら彼女にも何か理由があるのかもしれないな。

「ていうか主要の女性キャラ、全員可愛いなあ」

俺は生徒会長のその凛とした姿を眺めながら、そんな感想を思い浮かべていると。

「「「……」」」

……周りにいる女子数人が、無言で俺を睨みつけていた。なんで？

「……以上で、お祝いの言葉といたします」

あ、生徒会長の祝辞が終わった。

で、当然一年の代表が答辞を述べるんだけど……うん、男だし放っておこう。

「以上を持ちまして、アレイスター学園の入学式を閉会いたします」

無事入学式も終わり、俺達は拍手の中退場する。

で、そのまま教室へと移動して各自席に着いた。

「では、改めまして。私は一一二の担任の“伊藤アスカ”です。『国語』と『精霊（ガイスト）の理論と実践』について教えます。みんな、よろしくね」

「「「「「よろしくお願いします！」」」」」

先生の自己紹介を受け、俺達も一斉に挨拶を返す。

「それじゃ、出席番号順に一人ずつ自己紹介してもらおうかな。あ、そうそう、自分の精霊（ガイスト）についても、召喚しながら簡単に教えてね」
「はい！　俺は……」

そうして、クラスメイト達の自己紹介が始まった。
だけど……みんなの精霊（ガイスト）、スゲーカッコイイか可愛いんだけど。

……俺のはゴブリンだしなあ。

「ハイハイ！　俺は“加隈ユーイチ”！　精霊（ガイスト）は［トリックスター］でっす！　みんなヨロシク！」

とまあ、軽いノリで自己紹介をした主人公の友人キャラ。
だが、さすがに主要キャラだけあって、使役する精霊（ガイスト）は全体的に能力が高くて、かなり強力なんだよなあ……俺の［ゴブ美］と違って。

「うふふ……“木崎セシル”と申します。精霊（ガイスト）は［グルヴェイグ］です。どうぞよろしくお願いします」

恭しく一礼するメインヒロインの一人。
当然男子生徒はそんな彼女の容姿に釘付けになる。あ、もちろん俺も。
そんな彼女の精霊（ガイスト）は、『攻略サイト』によると聖属性と光属性のスキル……つまり、回復系に特化していると書いてあった。

その後も自己紹介が続き、次はいよいよ俺の番。
ま、まあみんなの精霊（ガイスト）もすごいけど、俺の［ゴブ美］だって……！

そして。

「お、俺はその、“望月ヨーヘイ”です！　精霊（ガイスト）は［ゴブ美］でしゅ！？」

チクショウ、舌噛んだ。

そ、それよりも……みんな、何でシーンとしてるんだ？

「プ」

「ププ」

「「「「「ワハハハハハハハハハハハ！」」」」」

クラスメイトの一人が吹き出すと、それにつられてみんなが一斉に爆笑した。

え？　え？　俺が舌噛んだの、そんなに面白かったのか？

「な、何だよその精霊（ガイスト）は！　まんまゴブリンじゃねーか！」

「しかも聞いた？　名前、［ゴブ美］だって！　ウケル！」

「この圧倒的雑魚感、ある意味すごいよねー！」

「「「「「ワハハハハハハハハハハハ！」」」」」

……みんなは、俺の［ゴブ美］がそこまで面白いらしい。

「……［ゴブ美］、戻れ」

『……』

肩を落とした［ゴブ美］は、俺の指示通りその場から消えた。

「いやー、あのゴブリンのおかげで、次の自己紹介メッチャ気が楽なんだけど！」

その後も、クラスメイト達の自己紹介は続く。
そんな中、俺は俯いたままジッと机を見つめていた。

「はい。それじゃ自己紹介も終わったところで、今度はみなさんにこちらを支給します」

そう言うと、先生はスマホを俺達にかざした。

「先生！　スマホなら私達持ってますよ？」
「フッフッフ、これはスマホじゃありません。この小型端末は“ガイストリーダー”といって、みなさんの学園での活動記録や　精霊（ガイスト）のステータスが確認できる特別仕様なのです！」
「「「「「おおおお！」」」」」

クラスメイト達の歓声が上がる。
確かに、精霊（ガイスト）のステータスが見れるっていうのはすごい。

「では、出席番号順に取りに来てください」

先生の元へ順番に行き、そのスマホを受け取る。

「全員受け取りましたね。では、私の指示に従ってガイストリーダーを操作してください」

俺達は先生の言う通りに端末を操作すると、ステータス表みたいなものが表示された。
といっても、まだ何も記載されてないけど。

「では次に、精霊（ガイスト）を召喚してガイストリーダーの画面に触れさせてステータス判定をしてください」

また［ゴブ美］を召喚するのか……少し、嫌だな……。
端末を握りしめて俺が躊躇（ちゅうちょ）している間に、クラスのみんなは精霊（ガイスト）を召喚して画面に触れさせていた。

「おお！　俺の［トリックスター］、結構強いじゃん！」
「わー！　木崎さんの精霊（ガイスト）、すごいステータス！」
「うふふ、ありがとうございます」

みんなガヤガヤと自分の精霊（ガイスト）のステータスを見せ合っている。
今なら、そんなに注目されずにすむかも。

俺はコソコソと教室の隅に移動すると、［ゴブ美］を召喚すると。

「おい見ろよ！　ゴブリンのステータス判定するみたいだぞ！」

目聡く見つけた友人キャラ……加隈が、俺を指差しながら叫んだ。

「本当だ！　超気になる！」
「いや、でもゴブリンなんだから、多分ステータス低いと思うよ？　むしろ最弱？」
「バッカ、だから面白いんじゃん！」

……好き勝手言いやがって。

「せ、先生、俺の精霊（ガイスト）のステータス判定は、家に帰ってからでもいいですか……？」

俺はおずおずと先生に尋ねる。
だけど。

「いいえ、ここでステータス判定を行ってください」

先生は有無を言わせないといった様子で、俺の申し出を拒否した。

「……［ゴブ美］、ここに触れてくれ」

俺の指示通り、［ゴブ美］が端末の画面に触れる。

すると。

――――――――――――――――――――

名前　：ゴブ美

属性　：ゴブリン（♀）

ＬＶ　：３

力　　：Ｇ

魔力　：Ｇ

耐久　：Ｇ

敏捷　：Ｅ－

知力　：Ｆ

運　　：Ｇ

スキル：【集団行動】【繁殖】

――――――――――――――――――――

……目も当てられないような能力値が表示された。

いや、『攻略サイト』であらかじめ見てるから知ってるけど、それでも、こうやって表示されると悲しいものがある。

というか、スキル【集団行動】と【繁殖】ってなんだよ！　精霊（ガイスト）は単体だろうが！

「なーなー、俺達にもゴブリンのステータス見せてくれよ」
「い、嫌だ！」

調子に乗った加隈が、執拗に絡んでくる。

その時。

「あっ！」

何故か学級委員長……悠木が俺のガイストリーダーを奪った。

「か、返せ！」
「……ふうん、本当にゴブリンって弱いんだ」

ポツリ、とそう呟いた後、興味を失くしたように俺に端末を返した。

「なあなあ、ステータスどうだったんだよ！」
「……属性はゴブリン、レベル３、力Ｇ、魔力Ｇ、耐久Ｇ……「や、やめろ！」」

俺は悠木の言葉を大声で遮る。
コイツ、何のつもりだよ！

「ワハハハハハハハハハハ！　本当にクッソ弱いじゃんかよ！」
「お、お腹が……！」
「ウ、ウケル……！」

［ゴブ美］のステータスを悠木に晒され、クラス全員が笑い転げる。

「コ、コラコラ、そんなこと言っちゃダメでしょ！　……ププ」

形だけ窘めているが、先生は必死で笑いを堪えていた。

「っ！」

俺は机に掛けてあるカバンを手に取ると、笑いの渦の中、教室を飛び出して行った。

笑い者（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

見返してやる！（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
新連載四話目！

見返してやる！

「ハアッ……ハアッ……！」

俺は家へ向かって全力で走る。

あの教室から、逃げるように。

あの笑い声から、逃げるように。

家に到着し、勢いよく玄関の扉を開けると。

「あ……お、お帰り……」

遠慮がちに母さんが声を掛けるが、俺の様子がおかしいのに気付き、途中で言うのを止めていた。

俺はそんな母さんを無視し、自分の部屋に飛び込んだ。

「ハアッ……ハアー……」

部屋の扉を閉め、息を整えるために深呼吸をする。

「あー……［ゴブ美］」

俺は［ゴブ美］を召喚すると、シュン、とあからさまに落ち込んだ様子を見せていた。

まあ……あれだけディスられたらなあ……。

だが、じゃあ俺は落ち込んでいるかと問われれば、実はそうでも

なかったりする。
　というのも、元々［ゴブ美］のステータス自体は『攻略サイト』で知ってたから、こうなることは少なからず予想していた。
　それに。
「このクソザコモブの俺設定では、今日の出来事があって自信失くして、それで転校してきたばかりでレベルの低い主人公にチョッカイ掛けたんだろうなー……」
　などと分析もしていた。
　ただ、だからといって先生を含めたクラスの連中のあの態度が許せる訳じゃない。
　正直、はらわた煮えくり返ってる。
　だから。
「なあ、［ゴブ美］……強く、なりたいか……？」
「！　（コクコク！）」
　俺の問い掛けに、［ゴブ美］は強く頷いた。
　その瞳に、涙を湛えながら。
「そうか……」
　そんな［ゴブ美］を見て、俺は決心する。
　だったら……強くなってやろうじゃねーか！
　幸いなことに、俺には偶然見つけた『攻略サイト』がある。

そこには、当然最強キャラの育成方法についても詳しく載せられていた。
まあ、キャラ別育成の中に、俺達の名前はなかったけど。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩く。

「［ゴブ美］……俺達は強くなるぞ！　強くなって、あのクラスの連中を全員見返して、そして……！」

夏休み明けには、このゲームの主人公が学園に転校してくる。

その時は。

「この俺が、その主人公を逆に返り討ちにしてやるよ！」

俺は天井に向かって拳を高々と突き上げた。

◇

ということで。

「まずは、強くなるための計画を立てないと」

俺はスマホをいじりながらそう呟く。
ただでさえ主人公が転校してくるまで、五か月もないんだ。
だったら余程効率的に能力を上げていかないと、結局俺はクソザコモブ認定のままになっちまう。

なにせ……主人公はまごうことなきチートな精霊（ガイスト）を持ってやがるからな。

「とにかく、まずは己を知るところからだな。えーと……」

ガイストリーダーを取り出し、また［ゴブ美］のステータスを確認する。

――――――――――――――――

名前　：ゴブ美

属性　：ゴブリン（♀）

ＬＶ　：３

力　　：Ｇ

魔力　：Ｇ

耐久　：Ｇ

敏捷　：Ｅ－

知力　：Ｆ

運　　：Ｇ

スキル：【集団行動】【繁殖】

――――――――――――――――

……うん、何度見ても悲しくなってくる。

一応、精霊（ガイスト）は一定以上のレベルになると、クラスチェンジすることができる。

まあ、より上位の種族や階級に進化するんだけど、その時に能力値も大幅に上昇する仕様だ。

なお、［ゴブ美］についても［レッドキャップ］か［ホブゴブリ

ン］にクラスチェンジをすることが可能だ。
ただし、［レッドキャップ］のクラスチェンジにはレベル五十、［ホブゴブリン］はレベル二十が必要になるけど。

本当は、あの精霊《ガイスト》にクラスチェンジしたいけど、この世界では絶対に不可能だから。

「ウーン……手っ取り早く能力を上げるなら［ホブゴブリン］だけど……」

確かに今の［ゴブ美］と比べれば、少ないレベルでの能力の上昇は魅力ではある。
だが……主人公やヒロイン、仲間達の精霊（ガイスト）に比べたら、圧倒的に能力差があるからなあ……。

「なあ［ゴブ美］、お前は［レッドキャップ］か［ホブゴブリン］だったら、どっちにクラスチェンジしたい？」

強くなろうとやる気になり、シャドートレーニングの真似事をしている［ゴブ美］に尋ねてみるが、［ゴブ美］は困った表情を浮かべた……って、俺、よく［ゴブ美］の表情が読めたな。

「じゃあさ、［レッドキャップ］希望だったら俺の右手、［ホブゴブリン］希望だったら反対の左手を指してくれ」

そう言うと、俺は両手を［ゴブ美］の前に差し出した。

すると。

「……そっか。［ゴブ美］は［レッドキャップ］がいいんだな」

「……（コクリ）」

［ゴブ美］が静かに頷く。

だったら、ちゃんとその希望を尊重しないとな。

「よし！　それじゃ、［ゴブ美］は［レッドキャップ］へのクラスチェンジを目指すってことで」

「（コクコク！）」

さて、そうなると……。

俺は『攻略サイト』から［レッドキャップ］のステータスを見る。

――――――――――――――――

名前　：レッドキャップ

属性　：レッドキャップ（♀）

ＬＶ　：５０

力　　：Ｆ

魔力　：Ｆ

耐久　：Ｆ

敏捷　：Ｃ＋

知力　：Ｅ－

運　　：Ｆ

スキル：【集団行動】【繁殖】【斧術】

――――――――――――――――

ウウーン……やっぱりそんなに強くない。

しかも、レベル五十も上げてこれだからなあ……。

だけど。

「ま、別にクラスチェンジだけが能力アップの方法じゃないんだ。とにかく、急ピッチで強くならないと」

『攻略サイト』のあるページを眺めながら、俺は呟く。

「……死なないようにしないと、だな」

俺は無謀とも思える［ゴブ美］の強化プランに、思わず戦慄を覚えた。

見返してやる！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

領域（エリア）見学（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今日も一挙四話更新です！

領域（エリア）見学

「くあー……眠い……」

次の日の朝、俺は眠いまぶたをこすりながら、重い足取りで学園へと向かっている。

昨日あんなことがあって行きづらくはあるんだが、それでも俺は行くしかない。

だって。

「学園に行かないと、“領域（エリア）”に入れないからなあ……」

そう、［ゴブ美］のレベルを上げるためには、領域（エリア）という場所に現れる“幽鬼（レブナント）”と呼ばれる敵を倒さないといけない。

この幽鬼（レブナント）、倒すと“幽子（ゆうし）”に変わり、“マテリアル”をドロップする。

その幽子（ゆうし）を一定以上吸収することで、精霊（ガイスト）はレベルアップできるのだ。

「といっても、入学したばっかりの俺が入れる領域（エリア）なんて、初心者用の領域（エリア）一択だろうけど」

俺は昨日の夜、あのまとめサイトを穴が開く程に何度も読み返した。

その結果、今の俺が入れそうな領域（エリア）が、学園にある初心者用の領域（エリア）だけだった。

もちろん、学園の外にも領域（エリア）はいくつもあるが、今の［ゴブ美］の能力じゃ、速攻で死んでしまうだろう。

それに……結果的に、［ゴブ美］の育成には、初心者用の領域（エリア）が最適だった。というか、これしか思いつかなかった。

「ホント、この攻略サイト様様だな……」

これがなかったら、［ゴブ美］を強くしようと張り切ったところで、どうやっても主人公にやられる運命しかなかった。

結局のところ、学園最弱の俺が唯一有利なのは、このまとめサイトで得た情報だけってことだ。

もちろん、最大限活用させてもらうとしよう。

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか学園に着いた。

で、教室に入ると。

「「「「「「……」」」」」」

クラスの連中が俺を見たかと思うと、ガヤガヤした雰囲気が一瞬だけ微妙な空気になる。

といっても、すぐに元の雰囲気に戻り、クラスは賑やかさを取り戻した。

そんな中。

「よう！　なんか昨日は悪かったな！」

後ろから背中をポン、と叩き、加隈ユーイチがニッ、と笑った。
まあ、コイツが何も考え無しな性格だというのは分かったが、昨日の今日でよく俺に声を掛けられるな。

「……別に」

面倒なので、俺は半ば無視するように自分の席へ向かう。

「チェ、感じワリーな」

いや、それは俺の台詞なんだけど。
つーか、少しは空気読めよ。

「……フン」

すると今度は、俺の席の横を通りかかった悠木アヤが、俺を一瞥してから鼻を鳴らした。
オイオイ、俺がオマエに一体何をしたっていうんだよ。というか、昨日勝手に［ゴブ美］のステータスをみんなにバラしたの、俺は絶対に許さないからな。

「うふふ、みなさんおはようございます」

教室に入るなり、木崎セシルが笑顔で挨拶をした。

「「「おはようございます！」」」

おおう……クラスの男子連中が一斉に挨拶を返しやがった。
……ま、まあ、その気持ち分からなくはないけど。

俺はチラリ、と木崎のほうへと見やると。

「！　……（ニコリ）」

うおお!?　俺の視線に気づき、笑顔を向けたぞ！
ヤバイ……結構ドキドキした……。

――キーンコーン。

しばらくして朝のチャイムが鳴り、クラスの連中は全員席に着くと、先生が教室に入ってきた。

「みなさん、おはようございます」
「「「「「おはようございます」」」」」

にこやかに挨拶をする先生。
で、昨日俺が教室を飛び出したっていうのに、俺を一瞥もしないのな。
まあ、空気として扱ってくれたほうが俺としても助かるけど。

「それでは昨日お伝えした通り、今日の午前中は早速領域（エリア）の見学をします。これからの皆さんの学園生活の中心になりますので、しっかり見学してください」

おお……！　まさか、今日から領域（エリア）に入れるとは思いもよらなかった！
というか、昨日そんな大事な話をしてたんなら、先生もちゃんと連絡くらいして欲しいよな……。

まあ、俺が勝手に飛び出したんだけど。

それから、先生の案内で領域（エリア）のある場所……コンクリートブロックでできた小さな小屋のような建物の前に来た。

そしてそこには、既に他のクラスの連中も来ていた。まあ当然か。

「え、ええと、先生これ……？」

加隈が小屋を指差しながら、おそるおそる先生に尋ねる。

「はい、こちらが今日見学してもらう領域（エリア）です」

「「「「「えええええええ！？」」」」」

先生の言葉に、クラス全員が驚きの声を上げた。

他のクラスの連中はというと、既に聞かされているのか、驚いた様子もなく澄ました顔で俺達を見ていた。中には、同意するかのようにウンウン、と頷く奴もチラホラいた。

「ちゃんと中は広いですから。それと、今日見学するのは初心者用ですので安心してください」

いや、『攻略サイト』で確認したけど、［ゴブ美］の能力だと素の状態で行ったらかなりギリギリなんだけど。

先生、［ゴブ美］のステータスを知っている上で言ってるんですよね？

「では、昨日の班分けの通りに分かれてください」

先生がそう言うと、クラスメイト達はぞろぞろと移動し、五人一組に分かれる。

昨日いなかった俺は、当然一人だけあぶれていた。

「え、ええと先生、俺は……？」

俺はおずおずと先生に尋ねるが。

「……あなたは昨日、自分勝手に集団行動を乱しました。そのような行動をされると、今後の領域（エリア）探索においても、他の生徒に迷惑を掛けることになるんです。よって、あなたはペナルティとしてソロで見学してもらいます」

「はあ！？」

い、いや、何言ってんだよこの先生は！

「それに先程も言いましたが、ここは初心者用の領域（エリア）です。普通の生徒であれば、危険な目に遭うことなんてありませんよ」

そう言うと、先生は俺を見ながら嘲笑した。

……ああ、そうか。

コイツ、［ゴブ美］のステータスを知った上で、俺をソロで行かせて痛い目に遭わせようってつもりか。性格悪いな。

「……分かりました」

俺は落ち込んだフリをして、すごすごと先生から離れた。

ハッキリ言ってこの先生は最低だが、俺としては好都合だ。

だって。

これで心置きなく、俺は初心者用の領域（エリア）を探索できるから。

領域（エリア）見学（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

始まりと終わりの遺跡（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

始まりと終わりの遺跡

「よし、次！　……って、お前は一人なのか？」

順番になり扉の前へと出ると、他のクラスの先生が俺を見て心配そうに尋ねる。

「……はい」

「な、なんだったらうちのクラスに四人の班があるから、そこに入るか？」

ううん、俺を本気で心配してくれている。

うちのあのクソみたいな担任とは大違いだ。泣きそう。

「だ、大丈夫です！　行ってきます！」

「あ、オ、オイ！」

俺は勢いよく扉を開け、中へと飛び込んだ。

「おお……！　ここが初心者用の領域（エリア）か……！」

俺は初めて入る領域（エリア）に感嘆の声を漏らす。

この初心者用の領域（エリア）のタイプは“遺跡”。

三つの階層で構成されており、一階層当たりの広さも大したことはない。

出てくる幽鬼（レブナント）も雑魚（といっても、俺には強敵だが）しかおらず、手に入るアイテムなんかもクズなものばかり。

ハッキリ言ってこの見学が終われば、一年生の全員が次の領域（エリア）…一年生にとって必須要件となる、“グラハム塔”領域（エリア）の攻略に集中して、誰もこの初心者用の領域（エリア）に来る奴なんていなくなるだろうけど。

だが、俺達が強くなるためには、初心者用の領域（エリア）こそが重要なんだ。

……この、“始まりと終わりの遺跡”領域（エリア）が。

「さて……それじゃ、行きますか。［ゴブ美］」

俺は軽く伸びをした後、［ゴブ美］を召喚して目的の場所……第一階層にある、とある部屋へと向かう。

この領域（エリア）のマップは、昨日の夜に全て叩き込んである。

もちろん、その先も。

なにせ、領域（エリア）では普通のスマホは電波が届かないからなあ。覚えるしかない。

ガイストリーダーなら領域（エリア）内であっても使用可能だけど、そこから『まとめサイト』のことが学園にバレても困るしな。

で、俺と［ゴブ美］は目的の部屋にたどり着いたんだけど……うん、何もないな。

「ここにアレがないと困るんだけど……」

俺の心に不安がよぎる。

だけど……なんとしても見つけないと、俺達は前に進めないんだ。

「［ゴブ美］、怪しい場所がないか調べてみてくれ。俺も調べるから」

「……（コクリ）」

俺と［ゴブ美］は手分けして部屋を調べる。

あの『攻略サイト』には、アレはこの部屋に出現するとだけしか書いていなかった。

とにかく、探すしかない。

「アレアレ～？　アイツ、こんな部屋で何やってんだ？」

「アレじゃない？　あのゴブリンじゃこんなところの幽鬼（レブナント）も倒せないから、隠れてるんじゃない？」

「「アハハハハハハハ！」」

クラスメイトの班が俺達を見るなり嘲笑（あざわら）うが、俺は聞こえないフリをして無視を決め込んだ。

すると興味を失くしたのか、連中はその場から去って行った。

「ふう……」

俺は深く息を吐く。

そうだった。“扉”を見つけても、他の連中にバレないようにしないと……。

「［ゴブ美］、とりあえずはアレを探すのは止めて、部屋の入口で誰か来ないか見張っておいてくれ」

「（コクコク！）」

［ゴブ美］は部屋の調査を止め、入口に張り付いてキョロキョロと辺りを確認する。

よし、俺も部屋の調査を再開……って、早速誰かが通りかかるのか、［ゴブ美］が身振り手振りでジェスチャーする。

部屋の入口から覗いてみると、加隈、悠木、そして木崎のメインキャラ三人を含めた班だった。

「お！　アイツ、こんなところで何やってんだ？」
「……フン、興味ない」

加隈はまるで遠くを眺めるように額に手をかざし、悠木は相変わらず鼻を鳴らしながら侮蔑するような視線を送ってきた。

そして、木崎は。

「望月さんは、その……お一人、なんですか？」
「っ！？」

木崎は俺の元へ駆け寄ってくると、おずおずと上目遣いで尋ねた。
まさか声を掛けられるとは思わなかった俺は、息を飲む。

「あー、アスカ先生に昨日の罰として、一人で見学させられてんだっけ？」

加隈も俺の傍に来ると、さして興味もなさそうにしながら問い掛けてきた。

「……時間の無駄だし、二人共早く行くわよ」
「ちょ、冷たくね？」

悠木の心無い言葉にツッコミを入れるも、同じく興味がないであろう加隈は、悠木の後を追ってこの場を離れていく。
まあ、そうだろうな。

なのに。

「その……もしあなたが良ければ、私達の班に入りませんか？」
「「「はあ！？」」」

木崎……さんの言葉に、他の四人が驚きの声を上げた。
もちろん、拒否する意志を込めて。

「ちょ、何考えてんの！？　同じ班に入れる意味ねーじゃん！」
「……そうね。お荷物が一緒にいたら迷惑なだけよ」
「ですが、さすがに領域（エリア）を新入生一人でいるなんて、危険ですし……」

四人は説得するが、納得のいかない木崎さんはそう訴える。

何だよコレ……木崎セシルって、本当に“聖女”みたいじゃないか……。

「木崎さん、その……俺なら大丈夫だから」
「で、ですが……」

なおも食い下がろうとする木崎さんに、俺はゆっくりとかぶりを振った。

「ほ、本当だよ。それよりも、その……誘ってくれて、ありがとう……」
「あ……わ、分かりました……ですが、本当に気をつけてくださいね？」
そう言うと、木崎さんは何度もこちらを振り返りながら離れて行った。
「木崎さん……」
俺はそんな彼女の背中を、見えなくなるまでずっと眺め続けていた……って。
「そうだった、そんなことよりもアレを見つけないと！」
俺はかあ、と熱くなる感情をごまかすかのように、慌てて部屋の中へと振り返るが。
「……」
……何故か［ゴブ美］の奴が俺をジト目で睨んでいた。
「……何だよ」
そう言うと、［ゴブ美］はプイ、と顔を背け、見張りもしないで部屋の隅で座りこんでしまった。
アレ……ひょっとしてヤキモチ焼いてんのか？
「ま、まあまあ、今のは単に、彼女が俺のことを同情しただけだろ

う？」

俺は［ゴブ美］によく分からない言葉をかけながら近寄……っ！？

――ガコン。

足を踏み込んだ瞬間、突然床の一部が沈み込んだ。

そして。

「これが……！」

俺達の眼の前……つまり、部屋の中央に扉だけが現れた。

始まりと終わりの遺跡（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

生徒会長、藤堂サクヤ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

生徒会長、藤堂サクヤ

「これが……！」

俺の目の前……つまり部屋の中央に扉だけが現れた。

これこそが、『攻略サイト』に書いてあった、真のラスボスのいる“ぱらいそ”領域（エリア）へと繋がる扉。

俺達が探し求めていたものだ。

この扉、本来なら二周目にしか現れないものだけど、あいにくこの世界に二周目はない。

なら、ひょっとしたら見つけられるんじゃないか、と期待して探してみたけど……。

「どうやら俺達は、その賭けに勝ったみたいだ」

とはいえ、これはまだスタートラインに立つことができたってだけだ。

ここから先は、本当に命がけでつらい作業を繰り返すことになる。

だけど。

「これで……俺達は強くなることができる」

俺は、作った握り拳に力を込める。

見ると、［ゴブ美］も興奮しているのか、棍棒をブンブンと振り回していた。

さーて、と。

俺は扉の元へと近づこうと足を一歩踏み出した。

すると。

「へ！？」

なんと、目の前にあった扉が突然消えてしまった！？

「ど、どういうことだ！？」

俺は扉があった場所を調べる。

けど、変わった点はどこにも見受けられない。

「そ、そんな……！」

思わずガックリとうなだれた。

も、もう一度よく考えてみよう。

あの扉は、どうやって現れた？

「確か……［ゴブ美］に近づこうとした時に、急に床が沈み込んで……って、もう答えが出てんじゃん！？」

俺は扉が出現した時にいた場所へと戻り、床を確かめるようにつま先で踏んだ。

――ガコン。

「あー……床のこの部分が、扉を出現させるスイッチになってんのか……」

また現れた扉を見て、俺はホッと胸を撫で下ろす。

だけど、こんな単純な仕掛けなのに、今までよく見つからなかったな……。

「まあ、ここが第一階層で領域（エリア）の序盤も序盤だっていうことと、初心者用で何の価値もないからだろうなあ……」

後は、床が沈み込む箇所がピンポイント過ぎて、普通に上を歩いただけじゃスルーしちまうのかもな。

実際、沈み込んだ床は、一辺五センチくらいのマスしかないし。

とにかく。

「さて、それじゃ……」

扉を見据えながらそう呟くと、［ゴブ美］が覚悟を決めた表情になる。

「この部屋から出て第三階層まで探索するかー」

「……（ズルッ）」

おお……［ゴブ美］がズッコケたぞ。

というか、まだ他の一年生達が見学中だし、下手に扉を出現させて“ぱらいそ”領域（エリア）に行っている間にその扉を見られてしまう可能性がある。

だから、本格的に“扉”の向こうへと行くのは、みんながいなく

なった放課後以降ってことだ。

「まあ、まずはこの初心者用の領域（エリア）を攻略しとこうぜ」

「……（コクリ）」

［ゴブ美］は渋々といった様子で頷いた。

◇

――キーンコーン。

放課後になり、みんなが帰り支度を始める。

もちろん俺も、いそいそと教科書やノート、筆記用具をヒューズボックスの中にしまい、席を立つと。

「あ、望月さん。また明日です」

木崎さんがそう言って、ニコリ、と微笑んだ。

「え、あ、う、うん……その、また明日……」

俺は嬉しいやら恥ずかしいやら、そんな感情になってしまい、急いで教室を出た。

ううう……やっぱり木崎さん、いい人だ……。

これが主人公とやらの毒牙にかかるだなんて、なんだか許せん。

とはいえ。

「はあ！？　木崎さん、あんな奴にいちいち話しかけてやる必要ねーよ！」
「そうそう、勘違いして木崎さんに迷惑かけるんじゃ……」
「……その時は、この私が鉄槌を下す」

背中越しに俺への罵詈雑言が飛び交っており、その中には加隈や悠木の声もあった。
……別に、オマエ等に言われたところで何とも思わねーよ。

俺はダッシュで校舎を出ると、拳大の石を拾って初心者用の領域（エリア）の前へとやって来た。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩くと、扉を開けて中に入……「君、そこで何をしている？」……へ？

突然声を掛けられ振り返ると、口の端を持ち上げ、腕組みしている女子生徒がいた。

「初心者用の領域（エリア）に入ろうとする生徒がいるなんて、珍しいな」

ワインレッドのウェーブのかかったセミロングの髪に、少し切れ長で真紅の瞳、整った鼻筋に血に染まったかのような紅い唇。
素肌は陶磁器のように艶やかで白く、そのスタイルはモデル並み……いや、それ以上。

そんな圧倒的な美少女こそ、生徒会長である“藤堂サクヤ”、その人だった。

「そ、その、今日の授業でせっかく見学できたので、もっと中をよく見ようと思いまして……」

俺は彼女に対し、咄嗟に言い訳を口にする。

「ん？　ああ、君は新入生なのかな？」

「は、はい！　一一二の“望月ヨーヘイ”です！」

藤堂先輩の問い掛けに、俺は直立不動で自己紹介した。

「なるほど。新入生にとっては、確かに初めての領域（エリア）だ。もう一度見てみたいと思うのも自然だな……よし！　せっかくだから、この私が案内してあげよう」

「へ……？」

思わぬ申し出を受け、俺は思わず呆けた声を漏らしてしまった。

「なあに、遠慮することはない。それに私も、入学時以来一年振りだからもう一度見てみたくなっただけだからな」

そう言って、藤堂先輩が微笑んだ。

うわあ……木崎さんも可憐で清らかなイメージだけど、藤堂先輩の場合は何というか……うん、まるで芸術品のように綺麗だ。

「さあ、せっかくの時間がもったいない。早く行こう」

「わ！　ちょっ！？」

俺は藤堂先輩に手を引っ張られながら、初心者用の領域（エリア）の扉をくぐった。

生徒会長、藤堂サクヤ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

可能性（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

可能性

「……」

現在、初心者用の領域（エリア）の第三階層。

藤堂先輩の精霊（ガイスト）のとてつもない強さと美しさに、俺は声を失っていた。

確かにここは、数ある領域（エリア）の中で一番レベルが低いけど、それを差し引いても圧倒的だった。

「うん……やはり初心者用の領域（エリア）だから歯ごたえはないものの……ふふ、懐かしいな」

先輩が微笑む中、彼女の精霊（ガイスト）……［関聖帝君（かんせいていくん）］が青龍偃月刀（えんげつ）で薙ぎ払うと、幽鬼（レブナント）はたちまち爆散してその姿を幽子とマテリアルに変える。

「？　どうした？」

そのすさまじさに口を開けて呆けていた俺達に、先輩は不思議そうに尋ねた。

「はえ！？　あ、ああいえ……先輩がすごすぎて……」

「ふふ、そうか。確かに私の［関聖帝君］は、この学園でも最強に近いからな」

俺が度肝を抜かれたことに気を良くしたのか、先輩は嬉しそうに

微笑んだ。

「せっかくだから、ステータスも見せてあげよう」

そう言うと、先輩がガイストリーダーを取り出し、画面をタップした。

「ほら」

「おお……！　すごい……！」

――――――――――――――――

名前　：関聖帝君

属性　：軍神（♀）

ＬＶ　：６７

力　　：ＳＳ

魔力　：Ｃ

耐久　：Ｓ＋

敏捷　：Ａ

知力　：Ａ＋

運　　：Ｂ

スキル：【一刀両断】【乱戦】【大喝】【威圧】【統率】【物理耐性】【状態異常無効】【水属性弱点】

――――――――――――――――

うおおお！　なんだよこのステータス！　シャレにならんぞ！

でも、確か『攻略サイト』では先輩の精霊（ガイスト）はレベルが八十を超えていて、最強スキルの【千里行】があったはず。

つまり、まだ先輩も成長途中だってことだ。

まあ、先輩はラスボス直前の最後の敵だし、主人公達相手にたった一人で戦った訳だからな……これくらいのステータスあって当然だろう。

でも。

「そ、その……弱点まで書いてありますけど、俺に見せても良かったんですか？」

俺は先輩におずおずと尋ねる。

「ふふ、気にしなくていい。見られて困るようなものでもないし、それに、君は私と戦うつもりなのかな？」

「とと、とんでもない！」

先輩の言葉に、俺は慌てて首を左右に振った。

というか、こんな化け物みたいな先輩と戦ったら、それこそ俺の命がいくつあっても足らない。

「ふふ、そうか。それはそうと、さっきから私ばかりが幽鬼（レブナント）の相手をしていては君も退屈だろう。ここから帰りまでは、君にお願いしようかな」

「あ、お、俺……」

先輩にそう言われ、俺は少し躊躇（ちゅうちょ）してしまう。

先輩の精霊（ガイスト）のあんな姿を見せつけられた後で、俺の［ゴブ美］を見たら……。

「？　どうした？」
「あ、い、いえ……何でもありません……」
俺は、帰りの道中で幽鬼（レブナント）が現れないことを必死で祈りながら、足早に進む。
だけど。
「ん、では頼むぞ」
「は、はい……」
チクショウ、やっぱり出やがった……。
俺は唇を噛みながら、覚悟を決める。
……今さら誰かに馬鹿にされたところで、俺達は見返すくらい強くなるんだ。
だから、先輩に見限られたって……！
「［ゴブ美］！」
意を決し、俺は［ゴブ美］を召喚する。
「行け！」
「（コクコク！）」
［ゴブ美］は力強く頷くと、その素早さを活かして最弱の幽鬼（レブナント）である“ホーンラット”に襲い掛かる。
ホーンラットは小さく素早い幽鬼（レブナント）のため、なかなか当たりづらいが、一応［ゴブ美］もスピードタイプのため、同じ速さで追い詰め

る。
ただ……攻撃力が弱いため、ホーンラット相手にすら、倒すまでに数回ダメージを与えないといけない。
だから、仮に幽鬼（レブナント）が複数だった場合は、こちらが圧倒的に不利になる。

つまり、俺達はこんな初心者用の領域（エリア）ですら、攻略するのも命がけだってことだ。

ホーンラットを倒し、［ゴブ美］が意気揚々と俺の元へと駆け寄って来る。
でも、俺の顔を見た途端、心配するような表情を見せた。

「……終わりました」

俺は無理やり声を絞り出し、先輩に告げる。

多分、先輩は俺に失望しただろう。
わざわざ俺のために初心者用の領域（エリア）の探索を買って出てくれたのに、俺達があまりにも弱いから。

「ふむ……なかなか興味深いな」
「……え？」

だけど、先輩から出てきた言葉は予想していないものだった。
てっきり先輩からは、馬鹿にするような言葉か、あるいは心のこもっていない慰めの言葉をかけられるものだと思っていたのに……。

「そ、その、興味深い……とは？」
「ん？　ああいや、そのように精霊（ガイスト）と心を通わせているなんて、珍

しいと思ってな」
「ああ……」
それはそうだ。
俺と［ゴブ美］は、一緒に強くなろうと心に誓った、いわば分身なんだから。
「ふふ……人によっては精霊（ガイスト）を便利な道具程度にしか考えていないというのに、君……いや、君達には非常に好感が持てるよ」
「あ……」
意外だった。馬鹿にされると思っていた。
でも、先輩はこんな俺達をそんな風に評価してくれた。
「そ、その！　［ゴブ美］の見た目に、何も思わないんですか？　俺達の弱さに、何も感じないんですか？」
俺はよせばいいのに、先輩に強く問い掛ける。
クラスの連中や担任の先生だって、俺達を見て嘲笑（ちょうしょう）し、ゴミを見るような視線をぶつけてきたんだ。
だから、先輩だってそう思ってるはずだって……！
「？　何を言っている。精霊（ガイスト）の強さなんて、これから鍛えてレベルが上がれば、強くなっていくじゃないか。それに、クラスチェンジをすればさらに飛躍的に強くなる。まだ入学したばかりの段階で見限るなんて、それこそ愚の骨頂だろう」
先輩はさも不思議そうに、そして、当然とばかりにそう告げた。
「見た目に関しても、私は君の精霊（ガイスト）は可愛いと思うぞ？」

そう言うと、先輩がニコリ、と微笑んだ。

「あ……ああ……！」

もちろん、先輩は［ゴブ美］のレベルが上がっても……クラスチェンジをしても、ほとんど強くならないことを知らない。

だから先輩のその言葉は、その事実を知っている俺にとって、ある意味残酷で無責任だってことも理解している。

でも……それでも……。

「あああああああああああ……っ！」

「お、おい！？　望月くんっ！？」

俺は、先輩のその言葉が……嬉しかったんだ。

可能性（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩の申し出（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今日も四話投稿です！

先輩の申し出

「グス……す、すいません……」

しばらく大泣きした後、ようやく落ち着いた俺は、目をこすりながら藤堂先輩に謝罪する。というか、いきなり泣き出してかなりカッコ悪いな……まあ、それは今さらだけど。

「ほ、本当に驚いたぞ……だけど、何か理由があるのか？　私でよければ相談に乗るぞ？」

先輩は心配そうに俺の背中をさすりながらそう話しかける。
そして、先輩の俺を見るその瞳は柔らかくて、とても温かった。

「い、いえ……大丈夫です……！」
「そ、そうか……」

俺はこれ以上先輩に心配かけたくなくて、無理やり笑顔を作った。
先輩も俺の思いに気づいたのか、それ以上は何も聞いたりしなかった。

「さ、さあ！　それじゃあ帰りましょう！　ここから先は、俺と「ゴブ美」が露払いしますから！」
「あ、ああ、それじゃ任せるよ」
「はい！」

俺は気合いを入れるために、両頬をパシン、と叩いた。

「さあ！　行くぞ［ゴブ美］！」
『（コクコク！）』

［ゴブ美］も先輩の言葉が嬉しかったんだろう。
幽鬼（レブナント）相手に、かなり気合いが入っていた。

そして。

「ふう……」

領域（エリア）の扉の前までたどり着き、俺は額の汗をぬぐった。
ここまで、幽鬼（レブナント）はそれなりに出現し、時には複数出現した場合もあったが、上手く一対一になるように戦略を立てながら戦ったおかげで、特に危なげなく倒すことができた。

これからの育成計画を踏まえても、対幽鬼（レブナント）の戦法が確立できたのは、大きな収穫だったな。

「望月くん」

俺が満足していると、藤堂先輩が真剣な表情で声をかけてきた。

「え、ええと、どうしました……？」

先輩のただならぬ様子に、俺はおそるおそる尋ねる。

「君がこの初心者用の領域（エリア）に入ったのは、今日の授業での見学を含め、これが二回目だと思うが、間違いないな？」
「は、はあ……」

質問の意図が分からず、俺は気の抜けた返事をした。
俺、なにかやらかしたのかなあ……。

「君の幽鬼（レブナント）との戦い方は、明らかに一対一を想定したものだった。幽鬼（レブナント）と戦うのは今日が初めてであるにもかかわらずだ」
「あー……」

そういうことか……。
確かに、見学では五人……最低でも四人の班で見学するから、一対一で幽鬼（レブナント）と戦う機会なんてほぼない。
なのに、俺は苦もなく一対一で戦っていた。それも、手慣れた様子で。

「改めて聞こう。君は、どうしてこうも見事に一人で戦えたんだ？」
先輩は有無を言わさないとばかりに俺を見据える。
やっぱり……答えないと駄目かー……。

「……実は、担任の先生から、初心者用の領域（エリア）の見学は一人でするようにって言われまして……」
「それはどうしてだ？」
「はい……」

俺は昨日と今日の出来事について話した。

昨日の教室での自己紹介の際に、クラスメイトや担任の先生から［ゴブ美］の見た目とステータスを馬鹿にされ、いたたまれなくなって勝手に教室を飛び出して家に帰ったこと。
そして、今日の見学についての説明の時、担任の先生から団体行動を乱した罰として、初心者用の領域（エリア）を一人で見学するように指示

されたこと。

「……だから俺は、見学の時も幽鬼（レブナント）と常に一対一で戦っていて、それで……」

「そうか……分かった、ありがとう」

先輩はそう言って頷いた。

だけど、真紅の瞳は怒っているようにも見えた。

「……なあ、望月くん」

「？　はい……」

「君さえよければ、また一緒に領域（エリア）の探索に付き合っても良いか？　もちろん、この初心者用の領域（エリア）だけでなく、“グラハム塔”領域（エリア）なども含めて、な」

「っ！」

先輩の予想外の申し出に、俺は思わず息を飲んだ。

もちろんそれは、俺達が今後強くなる上で、ものすごくありがたい申し出だった。

「は、はい！　もちろんです！　……ですが、多分俺は、しばらくはこの初心者用の領域（エリア）を中心に探索……いえ、訓練をすると思いますので、ここ以外の領域（エリア）の探索の時にお願いしてもいいですか？」

俺はせっかくの先輩の申し出に対し、申し訳ないと思いながらもそう答えた。

だって、俺達の最大の目的は、“ぱらいそ”領域（エリア）にあるんだから。

「ふふ、もちろんそれで構わないとも。私はこの学園の領域（エリア）はほぼ全て踏破しているから、君にとって有益だと思うぞ」

「！　は、はい！　ありがとうございます！」

俺は先輩に向かって深々とお辞儀をした。

それを見た［ゴブ美］も、俺にならってお辞儀をする。

「うん、やはり君達はいいな。これから楽しくなりそうだ」

そう言って先輩は優しく微笑むと、手を振りながら去っていった。

「さて……じゃあ行くか」

『……（コクリ）』

先輩の背中を見送り、俺達はまた初心者用の領域（エリア）に入ってあの部屋へと向かう。

そして。

「さあて……いよいよだ。［ゴブ美］、準備はいいか？」

『（コクコク！）』

「よし、じゃあ行こう！」

俺と［ゴブ美］は、“ぱらいそ”領域（エリア）へと繋がる扉をくぐった。

先輩の申し出（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

第一歩（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

第一歩

扉の向こう側は、心が奪われそうになるほど神秘的な空間だった。

熟した実のなる木々が立ち並び、清らかな水が流れる小川、今まで見たことがないような美しい花……。

大理石で建てられた純白の神殿もあり、ここはまさに“楽園（パライソ）”そのものだった。

「ここに、真のラスボスがいるのか……」

俺はそう呟くが、実は、俺的にはその真のラスボスを倒すつもりはこれっぽっちもない。

あの『攻略サイト』によると、元々この領域（エリア）はゲームクリア報酬の一つで、要は本編では物足りないゲーマーのための腕試し用として用意されたものなのだ。

なので、この領域（エリア）に出現する幽鬼（レブナント）は圧倒的に強く、今いるこの一番最初の階層でも、最低レベルが八十となっている。

つまり……最終決戦の藤堂先輩クラスが雑魚扱いということだ。

「……絶対に見つからないように、慎重に行くぞ」

『……（コクリ）』

俺の言葉に、［ゴブ美］が緊張した様子で頷いた。

俺達は、『攻略サイト』のマップの通り進む。

少しだけ遠回りになるが、このルートなら敵に遭遇せずに目的の場所にたどり着けるらしい。というか、俺が頭の中で何度もシミュレーションして導き出したものだ。

「大丈夫だよ、［ゴブ美］。絶対に上手くいくはずだから」

俺は［ゴブ美］にそう言いながら、ゆっくりと進んで行く。

……いや、今のは自分に言い聞かせただけだな。

「っ！？」

十字路に差し掛かり、通路の向こうに彫刻の女性像のような姿をした幽鬼（レブナント）がいた。

でも、実際の能力は圧倒的で、先輩の［関聖帝君］が可愛く見えるほど……といっても、［関聖帝君］はそもそも可愛いんだけど。

とはいえ。

「これも『攻略サイト』の通り、だな」

もちろん、ここに幽鬼（レブナント）が配置されていることは、『攻略サイト』にバッチリ書かれていた。

当然、そのやり過ごし方も。

「［ゴブ美］……今、あの幽鬼（レブナント）は向かって左を向いているから、この後すぐに右に九十度回転するはず。そうして後ろを見せた瞬間に、一気に向こうの通路まで走り抜けるぞ」

『（コクコク！）』

俺達は唾を飲み込み、通路の陰からジッと幽鬼（レブナント）を見つめる。

「っ！　今だ！」

幽鬼（レブナント）が後ろを見せたタイミングと同時に、俺達は向こう側の通路目がけて全力で走る。

一気に走り切ると、すぐに幽鬼（レブナント）の様子を確認するが……。

「ふう……どうやら上手くいったみたいだな」

深い息を吐いて安堵すると、俺は［ゴブ美］とハイタッチする。

ここから先は、もう幽鬼（レブナント）と遭遇するところはないはず。

俺達は引き続き慎重に進んで行き、そして。

「着いた……！」

そこは、通路の行き止まりだった。

だけど、ここにこそ俺達が求めるものがあるんだ。

「さて……それじゃ」

俺は行き止まりの壁へと向かって、床を丁寧に確認しながら進む。

――カチリ。

「……ここか」

床がほんのわずかに沈み込むと、目の前に古ぼけた木箱が現れた。

俺はヒューズボックスからあらかじめ入れておいた拳大の石を取

り出し、沈み込んだ床に置いた。

「さあ……目的の物が入っていてくれよ……！」

木箱の前に立ち、俺はおそるおそる木箱の蓋を取ると。

「おお……！」

『……！』

中には、俺達が求めていた物……“疾走丸”が入っていた。

“疾走丸”は、精霊（ガイスト）がこれを飲めば、ほんの少しだけ速度のステータスを上げることができるという消費アイテムだ。

といっても、疾走丸自体は珍しいものでもなく、初心者用の領域（エリア）の次に難易度の低い“グラハム塔”領域（エリア）でも、大体一つ二つは手に入れることができる程度の価値でしかない。

だけど、俺達にとってはここで入手することに意味があるんだ。

「［ゴブ美］」

『……（コクリ）』

名前を呼ぶと［ゴブ美］は頷き、木箱から疾走丸をつまむと、それを口に入れて飲み込んだ。

「どうだ……？」

俺はおそるおそる［ゴブ美］に尋ねる。

すると……［ゴブ美］は舌を出しながら顔をしかめた。

どうやら疾走丸は思いのほか不味いみたいだ……って、そういう

ことじゃなくて！

「俺が聞きたいのは、どこか身体に変化とかはないかってことだよ！」

そう言うと、［ゴブ美］は確かめるように身体を動かしてみるが、あまり変わっていないのか、［ゴブ美］は首を傾げて肩を竦めた。

「まあ……ほんの少ししか上がらないらしいしな……」

俺は少しだけ落胆する。

でも、俺達にはもう、これしか残されていないんだ。

ということで。

「よし。［ゴブ美］、急いでこの領域（エリア）から出るぞ」

『（コクリ）』

俺達は来た道を戻り、例の幽鬼（レブナント）をやり過ごして初心者用の領域（エリア）へと戻った。

「け、結構疲れたなあ……」

俺は膝に手を置き、少し肩を落とした。

いや、既に初心者用の領域（エリア）の探索をしていることと、“ぱらいそ”領域（エリア）の幽鬼（レブナント）に対する緊張（ストレス）もあり、疲労感が半端ない。

でも。

「さーて……もう一回、“ぱらいそ”領域（エリア）に行こうか」

『！　（フルフル）』

［ゴブ美］は俺の前に立ち、両手を広げてかぶりを振った。

「……なんだよ、ひょっとして俺の身体を気遣ってくれてるのか？」

『……（コクリ）』

どうやらそういうことらしい。

「ハハ、ありがとな。でも、ここで手を抜く訳にはいかないんだ。俺と［ゴブ美］が強くなるために。だから、さ」

『……』

そう言って［ゴブ美］の頭を撫でてやると、［ゴブ美］は渋々と言った表情で両手を下ろした。

「さあ、もう一回行くぞ」

『……（コクリ）』

俺とゴブ美は扉をくぐり、またあの行き止まりへと向かうと、そこには一回目の時と変わらず木箱が置かれていた。

「よし！」

それを見て、俺は思わずガッツポーズをする。

何故なら、これこそが俺達が強くなるための必須条件なのだから。

木箱の傍に駆け寄って俺は蓋を開けると、中には疾走丸が入っていた。

「『攻略サイト』の通り、だったな……」

あの『攻略サイト』に書かれていた内容。

それは……ゲームのバグで、床の仕掛けを踏み込んだままにしておいて領域（エリア）から出ると、その仕掛けは未作動扱いとなって、“ぱらいそ”領域（エリア）を出入りするたびに何度でも疾走丸が復活するというものだった。

とはいえ、疾走丸の効果自体が大したものでもなく、しかも初心者用の領域（エリア）を除くどの領域（エリア）でも見つかることから、全く重宝されていなかったらしいけど。

でも。

「……それでも、俺達にとっては唯一の可能性なんだ」

たとえ疾走丸をいくつも飲んでも、強化できるステータスは『敏捷』だけしかない。

だけど、たった一つだけでも、主人公を超えることができるんだ。

「さあ、［ゴブ美］」

『（コクリ！）』

［ゴブ美］が今日二つ目となる疾走丸を飲み込む。

俺達は今日、強くなるための第一歩を踏み出したんだ。

第一歩（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

因果応報（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

因果応報

「くあ……」

次の日の朝、けたたましく鳴るスマホのアラームを止め、いつもの時間に目を覚ました。

「あー……まだ昨日の疲れが抜けてない……」

結局昨日は、疾走丸を五つも取りに行ったからなあ。
俺はガイストリーダーを手に取り、画面をタップする。

……うん、［ゴブ美］のステータスはピクリとも変化してない。
といっても、画面に表示されているステータスはアルファベットで大まかに示したものだから、ほんの少ししか能力アップしない疾走丸を五つ程度飲み込んだところで、そう簡単に変化が見える訳ないんだけど。

まあいいや……サッサと支度して、学園に行こう。

俺は制服に着替え、リビングへと向かう。

「お、おはよう……」
「……」

今日も母さんは、窺(うかが)うように俺の顔色を見る。

ハア……本当に、母さんに言ってやりたいよ。

俺の［ゴブ美］は精霊最弱（ガイスト）で、そんなビクビクする必要なんてないってことを。

俺は無言のまま椅子に座り、テーブルに用意されている朝食を食べる。

だけど……今朝も朝食を美味しいと感じることはなかった。これは、この半年の間ずっとだ。

結局俺は今日も朝食を残し、洗面台に向かって歯磨きと洗顔をした。

「行ってきます」

身支度を整え、何の感情もこもっていない挨拶をして、家を出る。

当初は寮に入るって意気込んでたけど……あの様子じゃ、家にいるより居心地が悪そうだ。しばらくは保留にしよう。

学園に着き、下駄箱で上履きに履き替えて教室へと入ると。

「お！　ゴブリンが来たぞ！」

俺を見るなり、加隈が嬉しそうにそう叫んだ。

完全に俺はイジられ要員、カースト底辺に成り下がったな……。

まあ、二学期になったら見返すから別にいいけど。

俺は加隈のそんな言葉を無視し、自分の席に座った。

「ハア……ホント、もう学園辞めたら？　才能ないんだし」

俺の横を通り過ぎ様に、今度は悠木がそう呟く。
というか、席も離れてるのにわざわざそんなことを言いに来るなんて、暇なのかよ。

「みなさん、おはようございます」

俺は木崎さんの声に反応し、教室の入口へと視線を向ける。

「！　……（ニコリ）」

あ……木崎さん、今日も俺を見て微笑んでくれた。
俺はたったそれだけのことで気合いが入る。我ながら単純だなあ……。

――キーンコーン。

朝のチャイムが鳴り、クラスメイト達が一斉に席に着く。
だけど。

「……先生が来ない」

既にチャイムが鳴って五分が経過しているが、一向に先生が教室に来る気配がない。

「オイオイ……アスカ先生が俺達のクラスの遅刻第一号かよ」

加隈の奴が冗談交じりにそう口にすると、クラスの連中はドッ、と笑った。
俺には何が面白いのか分からないけど。

とはいえ、本当にどうしたんだ？

――ガラ。

お、ようやくお出ましか。

先生は扉を開けて中に入って来ると、何故か俺をキッ、と睨みつけた。

えー……何で俺が先生に睨まれないといけないんだよ……。

「それでは朝のＨＲを始めます。その前に……望月くんはＨＲが終わったら職員室に来てください」

「……はい」

何だよ、朝からいわれのない説教でもするつもりか？

俺は憂鬱（ゆううつ）な気分で聞き流していると、時間がおしていたこともあって、あっという間にＨＲは終わった。

「失礼しまーす……」

俺は先生に言われた通り、職員室へとやって来ると。

「ああ、君が望月くんだね。待っていたよ」

職員室の窓際真ん中に座る先生が、慌てて駆け寄って来た。

多分、席の位置的に教頭先生っぽい。

「じゃあ、今から応接室に行こうか」

「へ？」

なんで応接室なんかに行くんだ？
職員室で説教されるんじゃないのか？

俺は首を傾げながら教頭先生？　の後についていき、応接室へと入った。

すると……中には入学式の時に見た学園長と担任の伊藤先生、そして。

「藤堂先輩！？」
「やあ、おはよう」

何故か、先輩がこの場にいた。
い、一体どういうこと！？

「はは、まあ望月くんもソファーにかけなさい」
「は、はい、失礼します……」

学園長に促され、俺はソファーに座る。

「単刀直入に聞こう。君がこの伊藤先生に罰としてたった一人で初心者用の領域（エリア）を見学させられたとの報告を受けたんだが、それは事実かな？」

学園長がニコニコしながら俺にそう問い掛けた。
というか……。

チラリ、と先輩を見やると、先輩はニコリ、と俺に微笑み返してくれた。
あ……昨日話したこと、先輩が学園長に言ってくれたのか……。

「……はい」

俺は小さい声で肯定すると、先生の肩がビクッとなった。

「……伊藤先生、これはどういうことかな？」

「あ、そ、それはその……」

ニコニコしていた雰囲気から打って変わり、学園長は鋭い視線で先生を見やると、先生がしどろもどろになった。

「学園長。私が彼から聞いたところによると、彼は入学式の日に多くのクラスメイト達から精霊（ガイスト）の能力と容姿を馬鹿にされ、あろうことか範（はん）を垂れるべき担任教師からも、嘲笑（ちょうしょう）に晒（さら）されたとのことです」

「ほう……」

「しかも、それによっていたたまれなくなって教室を飛び出した彼に、あろうことか集団行動を乱した罰と称して初心者用の領域（エリア）にソロで送り込むという愚行を犯したのです」

そう言うと、先輩は先生をキッ、と睨んだ。

「ふむ……？」

「あ、あのあのあの……も、申し訳ありませんでした！」

とうとう観念したのか、先生は学園長に向かって深々と頭を下げた。

「謝罪すべきはこの私ではなくて、彼じゃないのかね？」

「う……」

学園長にギロリ、と睨まれ、先生は身体を硬直させた。

「ハア……伊藤先生、これは一歩間違えたら命にかかわっていたんですよ？　その自覚はあるのですか？」

「で、ですが、あそこは初心者用の領域（エリア）で、比較的……「何だね？」

……い、いえ、何もありません……」

とうとう先生は俯（うつむ）いたまま黙ってしまった。

「とにかく、伊藤先生の処分については追って決めることにします。望月くん……このたびは本当に申し訳ありませんでした」

すると、学園長が俺に向かって深々と頭を下げた。

「ちょ、ちょっと!?　お、俺はもう気にしてませんから、お願いですから頭を上げてください！」

「……今晩にでも、君のご両親にも正式に謝罪に向かわせてもらうよ」

学園長は頭を上げると、とんでもないことを言い出した!?

「そ、それもいいですから！　本当に！」

「そういう訳にはいかない。私達は、ご両親から大切な子どもを預かっているんだ。謝罪するのは当然のことだよ」

「ふふ。望月くん、君は気にしなくていいんだ」

学園長の後に続いて先輩がそう言うと、優しく微笑んだ。

チクショウ、先輩にそんな笑顔で言われたら、もう何も言えない……。

「わ、分かりました……」
「今後このようなことがないよう、私達もしっかりと指導するよ……では、もう教室に戻ってもいいよ」
「はい……」
俺は席を立ち、唇を噛みながら肩を震わせる先生を一瞥した後、応接室を後にした。

因果応報（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

母の想い（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

母の想い

昼休みが終わり、俺は授業……をサボって初心者用の領域（エリア）の扉の前に来ていた。

正直、あの教室は居心地が悪すぎる。

藤堂先輩のおかげで先生は学園長に注意されたものの、授業中に恨みがましい視線を延々と送り続けてくるし……。

とはいえ、クラスの連中が俺を馬鹿にしたりすると、あくまで形だけではあるがたしなめるようになった。

まあ、所詮は形だけでしかないので、クラスの連中はお構いなしに俺をイジリ続けてたけど。

「よし！　じゃあ今日のノルマは疾走丸十個入手と、同じ数だけ初心者用の領域（エリア）の踏破な！」

『（コクコク！）』

俺は気合いを入れるためにパシン、と頬を叩くと、意気揚々と扉を開けて中に入った。

◇

「ふふ、お疲れ様」

ノルマを達成して外へと出ると、何故か藤堂先輩が待ち構えていて、微笑みながら労（ねぎら）いの言葉をかけてくれた。

「あ、ありがとうございます！」
『（コクコク！）』
で、単純な俺はそんな先輩の優しさが嬉しくて、満面の笑みでお礼を言った。
それは［ゴブ美］も同じらしく、何度も首を縦に振っていた。

「ところで……先輩はどうしてこちらへ？」
「ん？　ほら、朝に父……学園長が言っていただろう？　君のご両親に夜にでも謝罪すると」
「ああ……」

そういえばそうだった……。
俺としては、うちの両親とは関係がこじれてるから、余計な波風を立てるようなことはしたくないんだけどなあ……。

「だから、私も君と一緒に行こうと思ってな。まあ、学園長からそう頼まれた、というのもあるが」
「そうだったんですか……」

ウーン……ますます申し訳なくなってきた。

「ということで、さっそく君の家に向かうとしよう」
「あ、は、はい……」

俺は先輩の後について行き、初心者用の領域（エリア）の小屋を後にする……って、自分の家に帰るのに、俺が先輩の後ろって一体……。

「え、ええと……？」

学園の門まで来ると、なんというかその……高級外車が停まってるんですけど？

「さあ、乗りたまえ」

先輩は後部座席のドアを開けると、そう言ってニコリ、と微笑んだ。

い、いや、まさかとは思ったけど、本当にこれで家に行くんですか！？

「で、ですが、ここまでしていただかなくても！？」

「何を言うんだ、これくらい当然だよ。ホラホラ、早く乗りたまえ」

俺は先輩に背中を押され、後部座席に乗り込む……って、うわあ、革張りのシートってこんな感じなのかあ……。

「では、彼の家までお願いします」

「かしこまりました」

先輩が声をかけると、運転手さんは俺の家に向かって車を走らせる。

「ところで、望月くんは今日もずっと初心者用の領域（エリア）で訓練していたのか？」

「はい。俺は弱いですから、人一倍頑張らないといけませんので」

「ふふ、そうか。そういえば知っているか？」

いたずらっ子のように微笑みながら先輩が尋ねたので、せっかくだし俺もそれに乗ってみる。

「？　何ですか？」
「ああ。実は一年生の必須である“ダグラス塔”領域（エリア）がゴールデンウィーク明けの月曜日から探索解禁になるんだが……その前に、二年生が一年生数人を引率して第一階層だけ見学するんだ」

ああ、そういえば『まとめサイト』にもそう書いてあったっけ。
たしか主人公が転校してきた際も、引率した先輩（もちろんメインヒロインの一人）とのイベントを経て仲間になるんだっけ。

「それで、だな……コホン、その時はこの私が君を引率することになったんだ」
「えええええ!?」

いや、さすがにこれには驚いた。
まさか、先輩が俺の引率をしてくれることになるだなんて。

「で、ですが、それを俺に言っても大丈夫なんですか？　こういうのって、公平にするために当日まで教えないっていうのが一般的なんじゃ……」
「ふふ、もちろんそうだとも。だから、な？」

そう言うと、先輩は人差し指を口に当て、「シー」という仕草をした。
そんな先輩は、普段の凛とした姿と違い、すごく可愛くて、俺は目を奪われてしまった。

「そういうことだから、楽しみにしていてくれ」
「はい！　俺、すごく嬉しいです！」
「ふふ、そう言ってくれて、私も嬉しいよ」

すると、いつの間にか車は俺の家に到着した。
家の前には黒塗りの高級外車が一台停まっているから、学園長達も既に来ているみたいだ。

「さあ、行こうか」
「は、はい……」

うう……自分の家に帰るだけのに、すごく緊張する……。

「た、ただい……「そんな話、到底許せません！」」

俺はおそるおそる玄関のドアを開けるなり、母さんの怒号が聞こえてきた。
母さんがここまで大声で怒鳴ったところ、俺は今まで一度も聞いたことがない。

「た、大変だ！？」

俺は慌てて靴を脱ぎ、みんながいるリビングへと急ぎ……って！？

「……まあ、待つんだ。今君が入ってしまうと、余計に話がこじれそうだからな」
「せ、先輩……」

先輩に制止され、俺はリビングの扉の前で立ち止まる。

「……とにかく、しばらくは様子を窺(うかが)おう」
「は、はい……」

俺と先輩は、リビングの傍に立ち、中の会話に聞き耳を立てた。

「今回はこちらの不手際で、誠に申し訳なく思っております……」
「謝って済む問題ですか！　一歩間違っていたら、あの子が怪我を負っていたかもしれないんですよ!?　それどころか、最悪死んでしまうことだって……！」
「誠に、仰る通りです……」

怒り散らす母さんに、学園長がただ謝罪する声が聞こえる……。

「本当だったら、私はあの子を学園なんかに行かせたくなかった！　でも……あの子に精霊が発現して、嬉しそうにはしゃいで、止められなくて……！」

母さん……。

「学園長さん、知っていますか？　あの子の精霊、見た目がすごく醜いんです」
「……」
「私にはそんな残酷なこと言えませんでしたけど、学園に行けば同じ精霊使いである生徒達が、あの子の精霊を見て心無い言葉を投げかけると思っていました。それで、あの子が傷つくことも」

母さん、そんなこと考えてたのか……。

［ゴブ美］が可愛くないとハッキリ言われたのはショックだけど。

「そしたら案の定傷つけられて、先生であるはずのあなたが一緒になってあの子を馬鹿にして！」
「あ、いえ、私は……」
「違うって言うんですか！　じゃあなんで、傷ついて教室を飛び出してしまったあの子に、そんな危険な目に遭わせるような真似がで

きるんですか！　言ってくださいよ！」
「あ、う……」
母さんに正論で責められ、先生が言葉を失う。
「……とにかく、もうあの子を学園になんて通わせることはできません。謝罪も受け取れません。どうぞお引き取り下さい」
母さんがついさっきまでとは打って変わり、静かに、だけど有無を言わせないといった口調でそう言い放った。
「……ふふ、いいお母様じゃないか」
先輩がポン、と俺の肩を叩き、柔らかい表情を浮かべる。
「はい……そうですね……」
俺は初めて母さんの心の内を聞いた。
今まであんなにオドオドしたりしてたのは、俺の精霊（ガイスト）にビクビクしてたんじゃなくて、ただ、俺のことを心配してて……。
「それで……君はどうすんだ？」
先輩が真紅の瞳で見つめながら問い掛ける。
俺は……。
「ま、待ってよ母さん！」
「っ！？　ヨーヘイ！？」

俺はリビングに飛び込むと、母さんが驚いた様子で俺の名前を呼んだ。

見ると、学園長と教頭先生、担任の先生が頭を下げたままだった。

「俺……確かに母さんが言った通り、クラスの連中に馬鹿にされたりしたよ。先生にもひどい扱いを受けた。でも、さ……こんな俺の精霊（ガイスト）を、褒めてくれた人もいるんだ。それだけじゃない、こんな俺達の、可能性を信じてくれた人がいるんだ。だから」

そう言うと、母さんが俺から視線を逸らしながら唇を噛んだ。

「だから……俺、これからも学園に通いたい。じゃないと俺は、もう強くなれなくなってしまうから。藤堂先輩が、信じてくれたように」

「「っ！」」

俺の言葉に、母さんと……後ろにいる、先輩が息を飲んだ。

「……本当にヨーヘイはそれでいいの？」

「ああ」

「後悔……しない？」

「しない。だから……」

すると、母さんは学園長へと向き直る。

「……もう二度と、こんなことがないようにしてください。それで、今回は学園の謝罪を受け取ります」

「本当に、申し訳ありませんでした！」

母さんの言葉に、学園長達が改めて謝罪を述べた。

「母さん……ありがとう」
「……しょうがないでしょ？」
震える声でそう言うと、母さんは泣きながら苦笑した。

母の想い（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩の大喝（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

先輩の大喝

――ピピピ。

「んう……スマホは……」

俺は布団をかぶったまま、手探りでスマホを探すと……お、あった。

スマホの画面を見やり、アラームの停止ボタンをタップした。

「ふわあ……朝、かあ……」

俺は軽く伸びをして欠伸（あくび）をすると、ベッドから降りて制服に着替える。

「ウーン……なんか気まずいなあ……」

リビングに向かう中、俺はそんなことを呟く。

いやだって、昨日あんなことがあったのに、ねえ……。

しかも、俺が母さんの思いを勘違いして、勝手に壁みたいなの作ってたのに、いきなり態度変えるっているのもなあ……。

「お、おはよう……」

とりあえず、俺はリビングに入るなり挨拶する。

まずは、ここから始めてみよう。

「おはよう」

すると母さんは、昨日までとは違い、遠慮することなく朝の挨拶をしてくれた。

多分、母さん的には一番気になっていた俺へのヘイトの事実を知っちゃったからだろうなあ。

で、俺はいつものように席に着くと。

「いただきます」

手を合わせ、用意されている朝食を口にする。

でも……今日は、本当に久しぶりに美味しいと思った。

「ごちそうさま」

俺は朝食を全て平らげて洗面台へと向かうと、歯磨きと洗顔をして身支度を整える。

そして。

「行ってきます」

俺は一年振りに、両親に向けてそう告げると。

「行ってらっしゃい」

母さんが、返事をしてくれた。

◇

学園に到着し、教室に入ると。

「お！　今日もゴブリン登場だ！」

「ハア……本当に目障り」

加隈がふざけながらそんなことをのたまい、悠木が俺の席を横切りながらそんなことを呟く。

というか何なの？　毎朝のコレ、オマエ等のルーティーンなの？

「おはようございます」

「「「「「おはようございます！」」」」」

木崎さんの登場に、クラスの男子が一斉に元気に挨拶する。もちろん、この俺も。

もはやこのクラスでの木崎さん人気は留まるところを知らない。

そのうちこの学園を席巻するかも……って、その前に藤堂先輩という強大な壁が立ちはだかってたわ。

「！　……（ニコリ）」

うおおお！　今日もコッチ見て微笑んだ！

うん、これで今日の一日が素晴らしいものになることは確定だな。

――キーンコーン。

お、チャイムだ。

するとクラスメイト達は、自分の席に着いた。

けど。

「オイオイ！　昨日に続いて今日も先生遅刻かよ！」

ハイハイ、加隈うるさい。

オマエも昨日と同じだから。もう誰にもウケてないから。気づけ。

――ガラ。

アレ？　伊藤先生じゃない……。

「えー、伊藤先生は急病のため、しばらく学園を休むことになりました。それまでの間、学年主任のこの私が兼任することになったので、よろしく」

「「「「「えー！？」」」」」

「静かに！」

あれー……ひょっとして、昨日の一件で先生のメンタルがやられたんだろうか……。

だとしたら……うん、別に何とも思わない。むしろ、もう戻ってこなくてもいいくらい。

主人公だって、別にヒロインが一人いなくなったところで困らないだろうし。

「では、ＨＲを始めるぞ」

ま、これでほんの少しは、この教室も居心地がよくなったらいいけど……うん、無理だな。

◇

「失礼、望月くんはいるか？」

昼休みになった途端、藤堂先輩がうちのクラスを尋ねて来た！？

「おーいゴブリン、お呼びだぞー」

「「「「アハハハハハハハハ」」」」

加隈のふざけた呼び声に、クラスの連中が一斉に笑う。

ハア……俺は別にもう気にしてないけど、先輩を巻き込む訳……

「今言った者、そこに直れ！」……うおっ！？　先輩が怒った！？

「貴様！　名前は！」

「へ！？　あ、あの……“加隈ユーイチ”っす……」

「では加隈くんに聞こう。今の言葉はどういう意味だ？」

先輩にすごまれ、加隈が視線を泳がせながらしどろもどろになる。

「早く答えないか！」

「ハ、ハイ！　アイツの精霊（ガイスト）がゴブリンなので、そう呼んでいます！」

「ほう？　なら加隈くんの精霊（ガイスト）の名前はなんだ？」

「ウ、ウス！　［トリックスター］っす！」

加隈はオドオドしながらも、少し得意げに自分の精霊（ガイスト）の名前を告げた。

それこそ、俺の［ゴブ美］なんかよりはるかにカッコイイと思ってるんだろう。奇遇だな、俺もだ。

だけど。

「フン、実力も伴っていないのに大層な名前だな」
「っ！？」
先輩は口の端を吊り上げ、鼻を鳴らして嘲笑った。
多分、俺が馬鹿にされたから、その意趣返しをしてくれているんだろう。
でも……そんな態度、先輩らしくないですよ。
「全く……実力が伴わない奴ほど吠えるとはよく言った……「せ、先輩！　俺に用なんですよね！」……む、あ、ああ……」
先輩と加隈の間に割って入ると、先輩が少し戸惑った。
「で、でしたらここじゃなくて、別の場所に行きましょう！　そうしましょう！」
「あ、う、うむ……」
俺は先輩の手を引き、一緒に教室を出る。
すると先輩は教室を出る直前で、クルリ、と翻ると。
「いいか、よく聞け！　この私の大切な後輩である彼を……“望月ヨーヘイ”を侮辱してみろ！　青龍偃月刀の錆にしてくれる！」
「「「「「っ！？」」」」」
先輩の一喝に、クラス全員が息を飲んだ。
「ふふ……さあ、行こうか」

先輩は俺へと向き直ると、微笑みながら俺の背中をポン、と叩いた。

「！　はい！」

俺は先輩の後に続き、教室を離れた。

先輩の大喝（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

強くなる理由（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

強くなる理由

教室を出た後、俺と藤堂先輩は食堂へとやって来た。

国が誇るアレイスター学園だけあって、食堂で提供される料理は一流のレストランにだって負けないくらい美味い……らしい。

というのも、俺はまだ食堂で食べたことはないのだ。だから、今日が初体験というやつだ。

「ふふ、望月くんは何にしたんだ？」

「俺ですか？　俺はＢランチにしました」

「そうか。私は迷ってＡランチにしたんだが、君がよければ、その……」

先輩が上目遣いでおずおずと尋ねる。

というか先輩……そんな仕草、反則ですよ。

「あはは、でしたら食べ比べしましょうか」

「！　う、うむ！」

俺の言葉に、先輩の表情がぱあ、と明るくなった。

うわあ……たまらないなあ……。

食券と交換してランチを受け取り、俺と先輩は席に着く。

「しかし……君もお人好しだな。君が止めなければ、あの男にもっと言ってやったものを……」

先輩は開口一番、そんなことを言って苦笑した。

「イヤイヤ、それこそ止めてください……」

「む、どうしてだ？　あの男は、相応の報いを受けるべきだろう？」

俺がそう言うと、先輩は少し不満そうな表情を浮かべる。

「そ、その……俺の勝手な思いですけど、先輩にはあんなこと、して欲しくないんです」

「……それは、どうしてだ？」

「はい……俺の中の先輩は、凛としていて、優しくて、強くて、綺麗で、カッコ良くて……その……あ、憧れなんです……って、先輩？」

「あ、あうあうあうあう……」

見ると、いつも自信満々な先輩が顔を真っ赤にして俯いてしまっていた。

「そ、その、君はいつもそんなことを誰かに言っているのか……？」

「まさか！　こんなこと言うのは先輩だけですよ！」

「あううう！？　……わ、分かったからもうこれ以上は……！」

「？」

先輩が両手で顔を覆ってしまった……と、とにかく先輩も嫌がっているし、これ以上余計なことを言うのはやめよう。

「そ、それで、先輩は俺に何の用事があったんですか？」

俺は話を逸らすため、先輩にそう尋ねる。

「あう！？　あ、そ、そうだったな……コホン、実は君のクラスの担任の伊藤先生のことだ」
「先生の？」
ああー、そういえば先生、体調崩してしばらく来ないんだっけ。
「うむ。彼女は今回の件の責任として、中間テストが終わるまで謹慎処分となった」
「……アレ？　先生は急病だって、堀内先生から聞きましたけど？」
「ああ、さすがに本当のことを言うと、生徒達に影響が出ることを考慮して、表向きにはそういう理由にしているんだ」
「ああ、なるほど」
確かに、先生が処分を受けて謹慎になりましたー、なんて知れたら、その後の先生と生徒の関係がおかしなことになるもんなー。
「本当は、担任そのものをすげ替えるという話もあったんだが、いかんせん君達が入学してからまだ四日しか経っていないからな。代わりを務める先生の確保を含め、さすがに厳しかったみたいだ」
「ですよねー……」
いや、俺としては担任が替わろうが替わるまいが、今さらどうでもいい。
だって……いずれは強くなって、見返してやるつもりだから。
「だけど先輩、そんなこと俺に教えても良かったんですか？」
「ん？　ああ構わない。むしろ、当事者である君は知っておくべきだからな。君のお母様にも、教頭先生から改めて処分結果を伝えることになっているしな」
「そうですかー……」

うん、とりあえずこの件は、これで終わりかな。

「おっと、話ばかりしていて、食べるのを忘れてしまっていたな。さあ、食べよう」

「はい！　いただきます！」

「うむ、いただきます」

それから俺と先輩は、談笑しながらランチを楽しんだ。

……あ、もちろんランチはシェアしたけど、ね。

◇

先輩とのランチを終えた俺は、教室へと戻って来ると。

「「「「「……」」」」」

……うん、見事に空気が重い。

まあ、先輩に一喝されたらそうなるよなあ。それに、確かあの「関聖帝君」には【大喝】スキルもあったし。

「……チッ」

んで、一番の被害者である加隈は、俺を見るなり顔を背けて舌打ちした。

朝やさっきみたいに、いきなりゴブリン呼ばわりされるよりかはましか。

「……」

悠木も悠木で、いつもみたいに俺の席の横をわざわざ通り過ぎて皮肉を言ったりすることもなく、ただ俺を睨みつけている。というかいっそ見るなよ。

……ハア。

俺は机に掛けてあるヒューズボックスを取ると、無言で教室を出て行った。

こんな雰囲気の中で授業を受けたいなんて到底思わないし、それに俺達には、強くなってアイツ等を見返してやるっていう至上命題があるんだからな。

いや、それ以上に。

「俺を信じてくれる先輩に報告するんだ。強くなった、俺達を」

そう呟いてから気づく。

強くなろうって決めてからまだ四日しか経ってないのに、いつの間にか強くなるための理由が増えてしまっていることを。

「……ハハッ」

俺は思わず笑うと、軽い足取りでいつもの初心者用の領域（エリア）へと向かった。

強くなる理由（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

グラハム塔領域（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

グラハム塔領域

それから俺は、毎日初心者用の領域（エリア）をひたすら踏破するとともに、“ぱらいそ”領域（エリア）で疾走丸を［ゴブ美］に飲ませ続けた。

で、今のステータスはこうだ。

――――――――――――――――

名前：ゴブ美

属性：ゴブリン（♀）

ＬＶ：２０

力：Ｇ

魔力：Ｇ＋

耐久：Ｇ

敏捷：Ｂ－

知力：Ｆ＋

運：Ｇ

スキル：【集団行動】【繁殖】

――――――――――――――――

くそう、レベルを二十まで上げたのに、疾走丸で伸ばした『俊敏』以外、ほぼステータスが変わってねえ……

と、とはいえ、やっぱり疾走丸を毎日十個ノルマで飲ませ続けたおかげで、他のステータスと比べて圧倒的に成長した。継続こそ力だ。

「それで……一応、［ホブゴブリン］にクラスチェンジできるけど、あくまでも［レッドキャップ］を目指す。それでいいな？」

俺は改めて［ゴブ美］に問い掛ける。

レベルアップに必要な幽子量（ゆうし）が少ない［ゴブ美］でも、初心者用の領域（エリア）の幽鬼（レブナント）ではレベル二十までに一か月かかった。

［レッドキャップ］にクラスチェンジするとなれば、さらにあと三十のレベルアップが必要だ。しかも、レベルを一つ上げるごとに必要となる幽子の量はさらに多くなる。

つまり、俺は［ゴブ美］にその覚悟を問うたのだ。

だけど。

『（コクコク！）』

うん、［ゴブ美］はアッサリ首を縦に振った。それだけ［ゴブ美］の意志は固いんだろう。

……いや、それは俺も同じ、だな。

「よっし！」

俺は気合を入れるため、パシン、と両頬を叩いた。

「じゃあ今日も、初心者用の領域（エリア）の踏破と“ぱらいそ”領域（エリア）で疾走丸の入手をするぞ！」

『（ブンブン！）』

はは、［ゴブ美］も棍棒を振り回して気合い充分だ。

と言っても、レベルアップに関しては明後日からのゴールデンウィークが明ければ、一つの目途が立つんだけどな。

だって……いよいよ“グラハム塔”領域（エリア）が解禁になるんだから。

「［ゴブ美］……強く、なろうな」

『♪』

そう言って頭を撫でてやると、［ゴブ美］は気持ちよさそうに目を細めた。

◇

ゴールデンウィークが明けてすぐの月曜日。

一年生はいよいよ、二年生に進級するための条件の一つ、“グラハム塔”領域（エリア）への攻略が始まる。

「ふふ、楽しみだな」

「先輩！」

“グラハム塔”領域（エリア）の扉の前で緊張していると、藤堂先輩がポン、と俺の背中を叩いた。

「ということで、今日の見学は君と私で行くぞ」

「はい！」

うん、あらかじめ先輩からは教えてもらってはいたけど、先輩と一緒に回れるってだけで安心感が半端ない。

それに……先輩にこの一か月の成果を見てもらうんだ。

「よし！　では一一一から入れ。今日の目的はあくまで見学だから、

第一層までだからな」

一番手の班が、二年生の先輩と一緒に領域（エリア）内へと入って行く。

なお、今日の見学は基本的に一班当たり一年生三人に引率の二年生一人という編成だ。

といっても、俺は先輩と二人きり、だけどな。

理由？　察しろ。

「ふふ、“グラハム塔”領域（エリア）は私ならソロで危なげなく攻略できるからな。望月くんは安心していい」

「はは、もちろん心配なんてしていませんよ」

「本当か？　さっき声をかけるまで、結構緊張していたように見えたが？」

先輩がニヤニヤしながら僕の顔を覗き込む。

くそう、その通りですよ。

「ふふ……だが、時には強がりだって必要な時もある。それに、そんな強がりを言えるということは、初心者用の領域（エリア）での訓練、上手くいっているのだろう？」

「あはは……」

あー、どうやら先輩には全てお見通しみたいだ。

本当に、かなわないなあ……。

「次、“夏目（なつめ）”班！」

「「「「はい！」」」」

お、どうやら木崎さん達の班が中に入って行くみたいだ。

なお、木崎さん、加隈、悠木の三人に、二年生の“夏目ハルカ”先輩の四人編成となっている。

そしてこの夏目先輩も、もちろんメインヒロインの一人だ。

モスグリーンのメッシュが入ったウルフカットで長身スレンダーのモデル体型。

『攻略サイト』によると、そのサバサバしたボーイッシュな性格は男女共に人気が高いらしい。

「次、藤堂班！」

おっと、俺達の班が呼ばれたぞ。

「ふふ、では行こう！」

「はい！」

俺と先輩は、“グラハム塔”領域（エリア）の扉を意気揚々とくぐると。

「おお……」

初めて入る“グラハム塔”領域（エリア）の雰囲気に、俺は思わず声を漏らした。

この“グラハム塔”領域（エリア）は六十階層で構成されており、一層当たりの広さは初心者用の領域（エリア）の約二倍。

出現する幽鬼（レブナント）も上の階層に進むにしたがって強くなっていく。

なお、この領域（エリア）の踏破に必要となるレベルの目安は三十となっている。

「つまり……俺にとってはレベルが九十あったとしても踏破は難し

い、ってことだ」

俺は正面を見据えながらポツリ、と呟く。

クラスでの俺の評価からも分かる通り、俺とパーティーを組んでくれるような奴がいるわけがないからな……。

であれば、俺はソロでこの“グラハム塔”領域（エリア）を攻略しないといけないってことだ。

そうなると、［ゴブ美］のステータスも考慮して踏破に必要なレベルの二倍……いや、三倍は必要になる。

すると。

「……心配するな。この私が、必ず君を強くしてみせる。必ずだ」

先輩が俺の背中をバシン、と強めに叩き、力強く頷いた。

「先輩……はい！」

そうだ。

俺にはこんなに優しくて、強くて、綺麗で……最高の先輩がついているじゃないか。

それに、あの『まとめサイト』だってある。

ギュ、と拳を強く握りしめ、俺は“グラハム塔”領域（エリア）の踏破に向けての第一歩を踏み出した。

グラハム塔領域（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩同士の賭け事（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

先輩同士の賭け事

――ザシュ。

第一階層に出現する幽鬼（レブナント）、“グリーンスライム”を藤堂先輩の「関聖帝君」が一刀に切り伏せると、その姿を幽子とマテリアルへと姿を変えた。

「あ……レベルが上がった」

幽子は先輩と半分ずつに分けられてしまうが、それでも初心者用の領域（エリア）にいる幽鬼（レブナント）よりもかなり上の強さであるため、その幽子の量も倍以上みたいだな。

「ふふ、やったな」

「はい！」

俺はガイストリーダーを眺めながら、微笑む先輩に返事をした。

「しかし、君の［ゴブ美］は大分偏（かたよ）った成長の仕方をしているな」

ガイストリーダーに表示されている［ゴブ美］のステータスを眺めながら、先輩はそう言った。

「あはは……ど、どうしてでしょうかね……」

俺は誤魔化すように、苦笑しながら頭を掻いた。

先輩になら、“ぱらいそ”領域（エリア）のことについて話してもいいんじ

やないかとは思っている。
でも……あの領域（エリア）の攻略に必要となる最低レベルは八十。それも、五人編成のパーティーが全員そのレベル以上っていう条件だ。
いくら先輩でも、今の段階で危険にさらすわけにはいかない。

俺が強くなって、先輩の横に立てるようになるまでは……。

「？　望月くん？」
「へ？　あ、ああいえ、つい考えごとをしてしまいました……」
「ふむ、そうか。だが、あの初心者用の領域（エリア）だけでよくぞここまでレベルを上げたな。本当に……君はすごい」
「あ……」

先輩の言葉に、俺は自分の胸襟をギュ、と握る。
ああ……先輩は、本当に俺が欲しい言葉をいつもくれる。

俺も、先輩にこの恩返しをしないと、な。

「先輩！　行きましょう！」
「ふふ……ああ！」

俺は先輩と共に、第一階層を見学した……んだけど。

「ゲッ！」
「……」
「あ！　望月くん！」

……よりによって、加隈達と鉢合わせしてしまった。

「へえ……生徒会長様が直々に今回の一年生の引率に名乗りを上げ

たって聞いたけど、まさかそんなゴブリンの面倒を見るためだったなんてね」

夏目先輩はチラリ、と［ゴブ美］を見やると、口の端を持ち上げながら先輩にそう話しかけた。

「ふふ……そうだな、君の言う通りだ」

先輩はそっと目を瞑ると、微笑みを浮かべながら首肯した。

「ふーん……アタシには、彼にそんな価値はないと思うけど？」

「……」

俺の傍に寄ると、背の高い夏目先輩は前かがみになりながら俺の顔をジロジロと覗き込んだ。

というか、少し感じ悪いな……。

「ふ……だとしたら、君の見る目がないのではないか？」

「へえ……言うじゃん」

先輩がニヤリ、と笑うと、夏目先輩も同じく笑みを返した。

「なら、アタシと勝負しない？　この彼のゴブリンが一学期終了まで……そうだね、可哀想だから一年生の平均くらいまでステータスが伸びたら、アンタの勝ち。平均に届かなかったらアタシの勝ちってことで」

そう言うと、夏目先輩がニタア、と口の端を吊り上げた。

あー……これ、［ゴブ美］のステータスを加隈か悠木のどちらかから聞いたな。

「先輩、こんな賭けに付き合う必要……「いいだろう」……ちょ！？　先輩！？」

俺はこの分が悪い賭けを断るよう先輩に告げる前に、アッサリと了承してしまった！？

いや、もちろん俺も強くなるつもりだけど、それでも一学期終了までに平均値は想定してなかったんですけど！？

「キャハハ！　すごい自信だね！」

「もちろんだ。彼は……望月くんは、私の期待に応えてくれるはずだ！」

先輩も先輩で、自信満々に答える。

「キャハハハハハ！　そんなに自信があるんだったら、彼ができなかった時にはアンタに何してもらおっかなー♪」

夏目先輩は伸ばした人差し指の先を口元に当て、鬼の首を取ったかのように嬉しそうに考える仕草をした。

「そうだ！　じゃあこんなのどう？　彼が達成できなかったら、アンタは生徒会長を辞めるの！　まあ、学園長の娘だからって、その特権活かして就いた役職だから、別にいいよね？」

まるで勝ち誇るかのように、夏目先輩……いや、夏目は先輩の顔を覗き込む。

「ああ、もちろん構わない」

「！　聞いた？　君達も聞いたよね！」

言質を取ったとばかりに、木崎さん達三人へと振り返って同意を求めると。

「ハイっす！　俺、確かに聞きました！」
「……ええ、生徒会長はハッキリと言ったわ」
「そ、そうですね……」

加隈は嬉しそうにビシッと敬礼ポーズを取り、悠木は含み笑いをした。
そんな中、木崎さんだけは困惑した表情を浮かべながらも、それを認めた。

「キャハハ！　彼等が証人だからね！　今さら『ヤッパリ無理です』なんて、通用しないから！」
「ふふ、だから構わないと言っている。むしろ君こそ、彼が達成できた時は何を差し出してくれるのだ？」
「いい度胸じゃない！　その時は、アタシが素っ裸でアンタと彼に土下座してあげるわよ！」

ええー……というか、そんなの俺や先輩にとって何もメリットないじゃん……。

「ふふ、君の裸と土下座なんて何の価値もないけど、その条件で構わないぞ」
「っ！　キャハハ！　言うじゃない！　あー、早く一学期が終わらないかなー！　さあみんな、もうこの二人には用はないから、早く行きましょ！」
「「はい！」」
「は、はい……」

嬉しそうにこの場を離れていく夏目達。
そんな中、木崎さんだけは心配そうな表情で何度もこちらを振り返っていた。
はあ……木崎さん、癒される……って!?

「せ、先輩！　ほ、本当にいいんですか!?」
「ああ、構わない。だけど……これは私と彼女、二人の賭けだから君は勝敗なんか気にしなくていい。ただ君達は、今まで通り一生懸命強くなるために頑張るだけでいいんだ」

そう言って、先輩はニコリ、と微笑む。
先輩があんな風に言ったのだって、俺達が弱いせいなのに……俺達のこと、気遣って……。

「……先輩、お願いがあるんです」
「ふふ……何だ？」
「休日はこの学園が閉まっているから、領域（エリア）に入ることができません。ですので、俺が休日でも入ることを許可していただけませんか？」
「ああ、私が学園と掛け合おう」
「それと……その時は、先輩も一緒に来てくれませんか？」
「ふふ、もちろんだとも。君の成長を、是非とも傍で見させてくれ」

元々主人公が転校してくるまでに、強くなるって決めていたんだ。
それが、ほんの二か月程度早まっただけだ。

だから、それまでに絶対に強くなってみせる。

俺を信じてくれた、先輩のために。

先輩同士の賭け事（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

未来の聖女様のお願い（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

未来の聖女様のお願い

あの見学の日以降、俺は以前にも増して領域（エリア）での訓練に勤しんでいる。

初心者用の領域（エリア）の踏破と疾走丸の調達はこれまでの十回から二十回に増やし、土日は藤堂先輩と一日中“グラハム塔”領域（エリア）の探索を行っていた。

なので、平日は放課後だけじゃ到底時間が足らず、その分を午後からの授業をサボることで確保していた。

もちろん、下手をしたら留年につながるおそれもあるので、サボる授業は選んでいるけど。

「そうだ！　そこで切り返すんだ！」

「はい！」

そして今日も、俺は先輩と一緒に“グラハム塔”領域（エリア）を攻略していた。

といっても、第十階層までしか行かないけど。

「ハア……ハア……ところで先輩、第十階層より上の階層にはどうして行かないんですか？」

第十階層の幽鬼（レブナント）である“ミニマムオーク”を何とか倒し、俺は息を切らしながら先輩に尋ねた。

「ん？　ああ、中間テストが終わるまでは、第十階層までにしているんだ」

先輩の言葉に、俺はハッと気づく。
つまり、“グラハム塔”領域（エリア）の踏破をちょうど三学期が終わるタイミングに合わせているのか。
俺が、無理なく成長できるように。

「本当に……先輩は優しいですね」
「あう！？　きゅ、急に何を言い出すんだ！？」

あはは、先輩照れてる。
本当に、可愛いなあ……。

「む、随分と余裕じゃないか。だったら、あそこにいるミニマムオーク三体、君達だけで倒してくるんだ！」
「ヒイイ」

チクショウ、やぶへびだった！

俺と［ゴブ美］は、眉毛を吊り上げる先輩に見守られながら、かろうじてミニマムオーク三体を倒した。

◇

「うむうむ、何とか赤点は取らずに済んだな」

中間テストが終わり、返ってきた答案用紙を眺めながら頷く。
一応全教科赤点は免れたけど、ほぼ平均点以下だからな……こ、これも強くなるまでの辛抱だ……「ふむ……これはいかんな」……って！？

「せ、先輩！？」

いつの間にか先輩が俺の背後に立って答案用紙をしげしげと眺めていた。

「望月くん、もちろん強くなることも大事だが、それと同じく、勉学も大切だぞ？」

「は、はい……」

くそう、正論過ぎて返す言葉がない。

「とはいえ、君は強くなるためにその全ての時間を削ってしまっているのも事実だ。なので期末テストの際は、この私が君の勉強を見てあげよう」

「ええ！？」

い、いや、先輩の申し出は俺としては願ったりだけど、その……土日すら先輩の貴重な時間をもらっているのに、これ以上先輩に迷惑をかけるわけには……。

「……ひょっとして、迷惑だったか？」

そう悩んでいると、先輩は少し寂しそうな表情を浮かべ、おずおずとそう尋ねた。

「ま、まさか！　迷惑どころか、先輩に申し訳なさ過ぎて……」

「べ、別に君が気に病む必要はない！　これは、私が好きで申し出ているだけだからな！　うん！」

俺が迷惑だって思っていないことに安堵したのか、先輩はむしろ

俺に詰め寄り大丈夫だとアピールする。
というか先輩、こんなの可愛すぎですよ……！
「じゃ、じゃあその……お願いします」
「！　う、うむ！　任せてくれ！」
先輩はぱあ、と満面の笑みを浮かべると、そのたわわな胸を叩いた。すごい揺れてる……。
「？　望月くん？」
あ、ヤベ。このままじゃ先輩の胸を見てたの、バレてしまう。
「と、ところで先輩、急にうちのクラスに来てどうしたんですか？」
俺は無理やり話を逸らすため、先輩にそう尋ねた。
「おっと、そうだった。実は今度の土曜日、少し用事が入ってしまってな……それで、悪いがその日は一緒に領域（エリア）に行けそうにないんだ……」
「あ、そ、そうでしたか……」
先輩のその言葉に、俺は少し気分が沈んでしまった。
もちろん、訓練ができないこともあるが、それ以上に先輩に逢えないのが……。
「あ、あああああ！？　そ、その、よ、用事が早く終わり次第……た、多分昼の二時過ぎには私も来るから！」
「ほ、本当ですか？」

焦りながらそう告げる先輩に、落ち込んでいた俺は急に心が軽くなった。

「う、うむ！　だから君は、一人で“グラハム塔”領域（エリア）に入っていてくれ。あ、ただし、行くのは第五階層までだぞ！」

「は、はい！」

よかった……土曜日も、先輩に逢える……！

俺は嬉しくて、小さくガッツポーズをした。

「あ……ふふ、そんなに喜んでくれたら、その……私も嬉しい」

先輩はその白い頬を赤く染めながら、口元を緩めた。

チクショウ！　先輩、本当に可愛すぎだろ！

「で、では、私も教室に戻ろう」

「あ、はい！　ありがとうございました！」

「ああ」

先輩は手を振りながら自分の教室へと戻っていく。

途中、何度もこちらを振り返りながら。

もちろん俺も、先輩の姿が見えなくなるまで廊下で手を振り続けていた。

「さて、と」

先輩の姿が見えなくなり、俺は教室へと戻ると。

「も、望月さん」

木崎さんが何故か俺の席で待ち構えていた。
それも、いつもの聖母のような優しい表情ではなく、いつになく真剣な面持ちで。

「え、ええと、どうしたの？」
「実は、折り入ってお話が……」

そう言うと、木崎さんは俺の制服の袖を引っ張って、廊下へと連れて来た。

「そ、それで話って？」
「あの……も、もしよかったら、私と一緒に“グラハム塔”領域（エリア）に行ってくれませんか？」
「はえ！？」

木崎さんのまさかのお願いに、俺は思わず変な声を出してしまった。

「え、ええと、どうして……？」
「そ、その……実は私、あの見学の日以降、“グラハム塔”領域（エリア）に入っていないんです……それで、偶然あの藤堂先輩との会話を聞いてしまって……」
「ああー……」

確かに俺は毎週土日、あの領域（エリア）に入ってるからなあ。回数だけなら、うちのクラス……いや、一年生の中でも圧倒的に俺のほうが入ってるはずだ。

「で、でも、加隈や悠木と一緒に入ったりしないの？　あの二人と

一緒のほうが……」
「で、できれば、望月さんにお願いしたいんです……あの二人とは、たまたまよく一緒の班になったりしますけど、望月さんとはこんな機会でもないと……」
そう言うと、木崎さんは少し恥ずかしそうにしながら俯いた。
うう……確かに俺としても、木崎さんと一緒に探索できたら嬉しいし、それに……二人ならより“グラハム塔”領域の踏破が圧倒的に楽になる。
何より一年の必修要件は、一年生だけでの踏破だから。
「うん……分かった。俺でよければ……」
「！　ほ、本当ですか！」
「うあああああ!?」
木崎さんがぱあ、と笑顔を浮かべ、その可愛い顔を俺の顔に思いっ切り近づけた。
あ……いい匂いがする……。
「そそ、それで、いつにする?」
このままだと理性がもちそうになかったので、俺は木崎さんから慌てて離れ、そう尋ねた。
「あ、はい。平日は色々と用事があるので、できれば休日が……」
「ああー……そういえば、さっき俺と先輩の話を聞いてたって言ってたもんね」
でなければ、休日なんて頼んだりしないか。

俺が休日に学園の領域（エリア）に入れるのだって、あくまで先輩のおかげであって、それ以外の生徒は入れたりしないんだから。

「……分かった。じゃあ今度の土曜日の午前中でもいい？」
「は、はい！　でしたら、朝の八時でもいいですか？」
「あ、う、うん……」

くそう、木崎さんのサファイアのようなこんなキラキラした瞳に抗える奴がいるなら見てみたい。

「うふふ！　楽しみです！」
「あ、あはは、そうだね……」

……ま、まあ、先輩は午後二時まで用事でいないから、いいよな。などと、俺は嬉しそうに微笑む木崎さんを眺めながら、心の中で訳の分からない言い訳を繰り返していた。

未来の聖女様のお願い（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

抗えない（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

抗えない

次の土曜日。

俺は学園の校門前で木崎さんが来るのを待っている。

といっても、まだ朝の七時半だし、木崎さんはまだしばらくは来ないだろう。

というか。

「はは……習慣っていうのは恐ろしいな……」

そう、俺は決して木崎さんとの“グラハム塔”領域（エリア）探索が待ち遠し過ぎて、こんな三十分も前に来ているわけじゃない。

これは藤堂先輩と待ち合わせする時、いつも先輩は待ち合わせ時間の一時間前には来ているからだ。

だから俺も、いつも待ち合わせの一時間前に来るようになって……。

「はは、むしろ先輩が俺に逢うのが待ち遠しくて……って、そんなわけないか」

うん、先輩は俺みたいなクソザコモブと違って、完璧美少女だからな。単に先輩の几帳面で優しい性格から早めに来てるだけだ。勘違いするな、俺。

などと考えていると。

「望月さん、おはようございます！」

待ち合わせの十五分前、木崎さんは女神のような笑顔を湛えながらやって来た。

というか、今日も超可愛い。ごはん三杯いける。

「お、おはよう」

「ひょっとして……待たせてしまいましたか……？」

俺が先に来ていたからか、木崎さんが不安そうに尋ねる。

「あはは、お、俺も今来たばっかりだから……」

「そ、そうですか……よかった……」

俺がそう言うと、木崎さんはホッと胸を撫で下ろした。

「そ、それじゃ早速行こうか」

「はい！」

俺はいつものように校門の横にある通用門をくぐると、木崎さんもその後に続く。

ここは、先輩が俺のためにっていつも開けておいてくれるよう、用務員さんに頼んでくれてあるのだ。

「うふふ、楽しみです！」

木崎さんは俺の隣で嬉しそうに微笑む。

「えー、で、でも、木崎さんだって見学の時に入ってるんだから、そうでもないんじゃ」

「だって、今日は第二階層より上だって行くんですから！」
「あー、確かに」

といっても、先輩の言いつけ通り今日は第五階層までしか行くつもりはないけど。

「あ、そうです！　探索を始める前に、お互いの精霊（ガイスト）のステータスを確認しておきませんか？　お互い知っていたほうが、探索もスムーズですし！」
「ああ、そうだね」

確かに彼女の言う通りだ。
俺は制服のポケットからガイストリーダーを取り出すと、画面を木崎さんに見せた。

「わ！　すごいレベルです！」

俺の［ゴブ美］は、今じゃレベルが四十一になっていた。
これも全部、先輩のおかげだ。

「あ、私の［グルヴェイグ］のステータスです」

そう言うと、木崎さんはおずおずとガイストリーダーの画面を見せてくれた。

――――――――――――――――
名前　：グルヴェイグ
属性　：女神（♀）
ＬＶ　：１３
力　　：Ｆ

魔力　：Ｂ＋
耐久　：Ｄ
敏捷　：Ｄ－
知力　：Ｂ
運　　：Ｂ
スキル：【聖属性魔法】【光属性魔法】
【闇属性魔法無効】【回復量増加】【誘惑】
――――――――――――――――

……うん、知ってる。『まとめサイト』で見たし。
ちなみに、知ってることと素直に受け入れることは別だからな。

「あ、あはは、木崎さんの精霊（ガイスト）すごいね……」
「とんでもない！　望月さんの精霊（ガイスト）だって、すごいレベルじゃないですか！」

確かに、レベルだけは、ね……。

俺は無理やり微笑みを作りつつ、そっと心の中で涙を流しながら、
“グラハム塔”領域（エリア）の扉をくぐった。

◇

「［グルヴェイグ］！　【ライトアロー】です！」

木崎さんがそう叫ぶと、［グルヴェイグ］の掌から光の矢が飛び出し、幽鬼（レグナント）の身体を貫通した。

「うふふ、やりました！」

木崎さんが嬉しそうに飛び跳ねる。
それに合わせて、その……木崎さんの先輩にも負けない程の大きな胸がたゆんたゆんしてる……。

「だ、だけど木崎さんなら、この第五階層だって余裕だね」
「うふふ……そう言っていただけるど、その、嬉しいです……」

木崎さんが少し恥ずかしそうにしながらはにかんだ。
というか、可愛い。超可愛い。

「え、ええと、とりあえずは第五階層も一通り見て回ったし、もう戻ろうか」
「ええ！？　そ、その、もっと上の階層まで行きましょうよ！」

俺がそう提案すると木崎さんは反対し、さらに上を目指そうと言ってきた。

「で、でも、今日は休日だし、何かあったら……「だ、大丈夫です！　まだ第五階層ですし、それに、望月さんは第十階層まで探索した経験があるんですよね？」
「ま、まあ……」

というか、いつも先輩と一緒だから常に第十階層まで行ってるけど……。

「お、お願いです！　私を第十階層まで連れて行ってください！」
「うあああ！？」

木崎さんは俺の腕にしがみ付き、瞳を潤ませながらお願いする。
というか、顔がメッチャ近い！？　しかも胸！　胸が当たってる

!?

「……駄目、ですか……？」

うう……こんなの、抗える男はいるんだろうか……いや、いないな。

というか、抗う気力そのものがなくなっていく感じだ。

「わ、分かったよ……ただし、本当に第十階層までだからね？　俺もそれ以上の階層には行ったことないんだから」

「！　あ、ありがとうございます！」

「うあああああああ！？」

き、木崎さんに抱きしめられてしまった……！

というわけで、結局俺は木崎さんと一緒に第十階層を目指すことになった。

でも……俺の心が、どうしても彼女に抗えないんだよ……！

抗えない（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

本性（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

本性

第六階層以降も、俺と木崎さんは順調に進んで行く。

というか、木崎さんは既に“グラハム塔”領域（エリア）の中盤くらいまではソロで行けるだけの実力があるので、今さら俺と［ゴブ美］の同行はもはや不要なんじゃないかと思えてくる。泣きそう。

と、とはいえ、俺も少しはいいところを見せようと。

「あ、木崎さん。ここは罠が仕掛けられてるから、迂回して進もう」

と、『攻略サイト』と藤堂先輩からのありがたい情報を惜しみなく披露した。

いやまあ、こんな第十階層にも満たないような場所の情報なんて、すぐに不要になるだろうけど。

「うふふ、やっぱり望月さんと一緒に来て正解でした」

「え、あ、そ、そう？」

でも、木崎さんはそんなことでも喜んでくれて、俺はさっきから照れるばかりだ。

……彼女だったら、これから先も一緒に領域（エリア）探索に行ってくれるかな。

そんな淡い期待を考えながら、さらに進んで行くと。

「……ここが第十階層だよ」

「ここが……」

とうとう俺の最高到達地点である第十階層にたどり着いた。

「ここから先は幽鬼（レブナント）も一段強くなっているから、今日の探索はここまで……「【ホーリーインパクト】！」……って、ええ！？」

そんなことを言っている間に、木崎さんは現れたミニマムオークを一撃で粉砕した。

「やりました！　この階層でも私の［グルヴェイグ］は充分通用するみたいです！」

「は、はは、そうだね……」

チクショウ、［ゴブ美］なんかミニマムオークを倒すのに最低十回以上攻撃しないとけないのに。

「ゴ、［ゴブ美］……俺達はゆっくり強くなろうな……」

『……（コクリ）』

俺と［ゴブ美］は乾いた笑みを浮かべながら、第十階層で幽鬼（レブナント）を蹂躙する木崎さんを眺めていた。

◇

「さて……それじゃ、今度こそ戻ろうか」

「……」

俺がそう言うと、木崎さんは少し思いつめたような表情を見せる。

そして。

「そ、その！　もしよろしければ、第十一階層より上も目指しませんか？」

「ハイ！？」

木崎さんの口から飛び出した言葉に、俺は驚きの声を上げた。

「ダ、ダメダメダメ！　さっきも言った通り、俺もまだ第十一階層より先には行ったことがないんだ！　今日はここまでにしよう！」

「で、ですが！　この第十階層でも危なげなく攻略できました！　私と望月さんなら、絶対に第十一階層以降も攻略できます！」

俺は全力で木崎さんの申し出を拒否したが、それでもなお先へ進もうと、彼女は俺に詰め寄る。

うう……か、顔が近い……。

「ね……？」

そして、木崎さんは俺の手を強く握ると、潤んだサファイアの瞳で俺を見つめた。

あ、あれ？　……やっぱり俺、彼女の言葉を拒否できない……。

「わ、分かったよ……」

「ほ、本当ですか？」

「ただし！　危なくなった時点で、その時は今度こそ有無を言わさず引き返すからね！」

「は、はい！　ありがとうございます！」

「うあああ！？」

彼女は突然俺の身体を抱きしめ、俺は思わず変な声を上げてしまった。

はあ……俺、何やってんだ……。

◇

「うふふ、まさかこんなところまで来れるなんて、思ってもいませんでした……」

「は、はは……」

結局俺達は、第十一階層どころか第二十階層も踏破し、次の階層へと向かう階段の前までたどり着いてしまった。

いや、もちろん『攻略サイト』の情報を駆使して、最も危険が少ないルートを選びながら来たっていうのもあるけど、それにしても……。

俺はチラリ、と木崎さんを見る。

「〜〜♪」

鼻歌を漏らしながらご機嫌な様子の木崎さん。

ハッキリ言って、ここ第二十階層までに現れた幽鬼（レブナント）も、彼女の相手ではなかった。

これが、メインヒロインとクソザコモブの差、なのか……。

『……（ギュ）』

すると、［ゴブ美］が俺にしがみつきながら、無理やり笑顔を作った。

はあ……全く俺は……。

「……そうだな。俺達は、こっから強くなるんだもんな」

俺は［ゴブ美］の頭を優しく撫でてやると、［ゴブ美］も嬉しそうに頬ずりした。

「っ……望月さん、では次の階層に向かいましょう！」

「え……？　あ、うん……」

木崎さんが元気な声でさらに先へと俺達を促したので、俺は少し戸惑いながら、あいまいな返事をした。

だけど……木崎さん、今俺達を見て顔をしかめてなかったか？

「うふふ♪」

……ま、気のせいか。

「じゃあ、今まで通り俺達が先に階段を昇って第二十一階層の様子を窺うから、木崎さんは合図をしたら来て」

「分かりました」

ということで、俺と［ゴブ美］は階段を昇って第二十一階層へとたどり着く。

俺達は木崎さんに比べたら圧倒的に弱いけど、それでも敏捷のステータスだけは今やクラスでも一番……のはず。

なら、せめて斥候の役目くらいは……「【レイバースト】！」……っ！？　ナニイッ！？

――ドオオオンンン……！

背後から木崎さんの魔法を唱える声と、激しい衝撃音が響き渡った。

「き、木崎さん!?　大丈夫か!?」

俺は慌てて階段を駆け下りると……階段が塞(ふさ)がっている!?

「木崎さん!　木崎さん!?」

俺は瓦礫(がれき)の向こうに向かって必死に叫ぶ。

クソッ!　俺が彼女の強さを過信しないでもっと気をかけていれば……!

その時。

「うふふ……」

「っ!　木崎さん!　無事だったか!」

彼女の笑い声が聞こえ、俺はホッと胸を撫で下ろす。

よかった……彼女が無事で……。

その時。

「アハハハハ!　本当に馬鹿ですね!　お人好しというか、何も考えていないというか!」

「え……き、木崎さん……?」

突然高笑いをする彼女に、俺は戸惑ってしまう。

「アハハハハ……ハア、あなたのおかげでスムーズに第二十階層ま

で来れましたし、そのことについては感謝しますよ？　まあ、第十階層までしか行ったことがないと言っておきながら、ここ第二十階層まで詳細に知っていた……つまり、この私を騙したのは許せませんが」

「は！？　え、ど、どういうこと……！？」

もう何がなんだか、訳が分からない……。

一体、彼女は何を言ってるんだ……！？

「馬鹿なあなたに簡潔かつ丁寧に説明して差し上げますね。あなたがあの藤堂先輩と一緒に“グラハム塔”領域（エリア）に一緒に攻略していることを知って、利用しようと思ったんです」

「っ！？」

木崎さんから放たれた言葉に、俺は衝撃のあまり息を飲んだ。

「案の定あなたはこの領域（エリア）を難なく進んで行きました。そんなすばしっこいだけの、醜く弱い精霊（ガイスト）で。まあ、それもあの藤堂先輩に攻略法を教えてもらったからでしょうけど」

「……」

「そしてそれは、あなたが行ったことがないからと頑（かたく）なに嫌がった第十一階層以降も同じでした。まあ、そのおかげで一学期中に攻略する予定の第二十階層まで来れましたけど」

はは……そっか、つまり彼女は、第二十階層までを攻略するために俺を利用して……。

「……じゃあ、この階段を塞（ふさ）いだのも」

「うふふ、私ですよ」

「どうして……」

「正直言いますと、あなたがキモチワルイんですよ。私が周囲の目を気にして何も言えないことをいいことに、ジロジロと……オマケに、ちょっと優しい言葉をかけただけで勘違いして」

そう言うと、彼女……木崎セシルは舌打ちした。

「まあ？　あなたが休日に“グラハム塔”領域（エリア）に来ていることはみんな知っていますし、仮にここで不慮の事故があって、大怪我……最悪死んでしまったとしても、仕方ないと思いませんか？」

「っ！　テメエ！」

俺は瓦礫に向かって思わず叫んだ。

チクショウ！　俺はまんまとこのクソ女に利用されて、オマケに嵌（は）められて……！

「うふふ……生きてここから出られたらいいですね？　まあ、仮に生きて出られたとしても、もうこの学園にいられないでしょうけど。だって……あなた、クソザコモブですもの。では、ごきげんよう」

その言葉を最後に、もう……瓦礫の向こうから声が聞こえることはなかった。

本性（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

低階層を目指して（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「チクショウ……チクショウ……！」

俺は瓦礫に拳を何度も叩きつけながら、木崎セシルへの恨みを呟く。

『……（フルフル）』

「……［ゴブ美］」

［ゴブ美］は俺の腕をつかんで止めると、くしゃくしゃの顔でかぶりを振った。

「はは……俺みたいな馬鹿がマスターだなんて、お前も最悪、だよな……」

『！　（フルフル！）』

俺が自虐めいてそう言うと、［ゴブ美］は首を大きく振って全力で否定してくれた。

そして。

『……！』

［ゴブ美］は瓦礫を一つずつ取り除いていく。

力は最弱、身体だって小さいくせに。

「［ゴブ美］……はは、そうだよな……俺が死んだら、お前も死ん

じゃうんだもんな」

精霊（ガイスト）と精霊（ガイスト）使いは、いわば一心同体だ。

精霊（ガイスト）が傷つけば、精霊（ガイスト）使いが傷つくし、その逆もしかりだ。

だから。

「そうだ、な……俺はここで落ち込んだり、恨みがましいこと言ってる暇はないよな……！」

『！（コクコク！）』

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩いた。

「［ゴブ美］、この瓦礫をとっとと退けて、この“グラハム塔領域（エリア）”から脱出するぞ！　そんで、強くなって……あのクソ女を後悔させてやるんだ！」

『（コクコク！）』

そこから俺達は、一心不乱に瓦礫の撤去をした。

今の時間は朝の十一時。藤堂先輩が合流するって言ったのは午後二時だ。

つまり……ここでジッとしたまま先輩の助けを待っていたら、それこそあのクソ女の思い通り、俺達はここでくたばっちまう。

「何としてでもここを抜けないと……！」

俺は必死で瓦礫を取り除く。

そのせいで俺の両手はもうボロボロだけど、構っている余裕はない。

――ガラ。

「っ！　光だ！」

瓦礫を取り除き続けた結果、ほんの小さな隙間ができ、そこから光が漏れた。

「よし！　この穴をもっと広げるぞ！」

『（コクコク！）』

俺達はその穴を中心としてさらに瓦礫を取り除いていく。

そして。

「行けた！　やったぞ！」

『！』

かろうじて俺の身体が通り抜けられるだけの穴の大きさになり、俺と［ゴブ美］はハイタッチした。

「あはは……［ゴブ美］、両手がボロボロじゃないか」

『……！　……！』

「はは、俺も同じだってか？　そうだな」

俺達はふざけて笑い合いながら、瓦礫の穴を通り抜けた。

少しでも、悲しい思いを引きずらないように。

◇

「［ゴブ美］！　コッチだ！」
『！　（コクリ！）』
“グラハム塔”領域（エリア）の第十六階層。
この階層の幽鬼（レブナント）、“コモドドラゴン”二体と交戦している［ゴブ美］に声をかけて指示を出す。
［ゴブ美］も俺の声を聞くなり強く頷いてその身体を翻（ひるがえ）すと、その俊敏さを活かして俺の傍（そば）へと戻って来た。
すると、当然コモドドラゴン達も追いかけてくる。
だが。
「ハハ、バーカ」
『『ッ！？』』
俺は床に仕掛けられている罠を発動させると、コモドドラゴン達は突然現れた穴の中に落ちた。
「［ゴブ美］！　今だ！」
『（コクリ！）』
［ゴブ美］は穴へと近づくと、這い上がろうともがくコモドドラゴンに向かって棍棒を何度も叩きつける。
何十回とそれを繰り返すと、コモドドラゴンは幽子（ゆうし）とマテリアルに変化した。
「ふう……やったな！」

『！』

俺と［ゴブ美］はハイタッチをする。

ここまで俺達は『攻略サイト』に載っていた各階層ごとの罠を上手く活用すると共に、［ゴブ美］のその素早さを活かした戦法で時には幽鬼（レブナント）と戦い、時にはやり過ごしてここまで戻って来た。

「さあ……次は第十五階層だけど……」

そう……第十三階層から第十五階層は、俺達にとって鬼門だったりする。

何故なら……それらの階層にいるのは、大量の“ゴブリン”なのだから。

もちろん［ゴブ美］に同族意識があるわけじゃなく、向かって来たら容赦なく戦うつもりではあるが……いかんせん、数が圧倒的に多いのだ。

行きはあのクソ女の魔法で蹴散らしたが、帰りはそうはいかない。

特に手に持つ棍棒しか攻撃手段を持たない［ゴブ美］にとっては、集団との戦闘が最も苦手なのだ。

「……でも」

俺は『攻略サイト』の情報を思い出し、脱出プランを練る。

あとは……気合いで何とかするしかない。

「よし！　［ゴブ美］、行くぞ！」

『（コクリ！）』

俺達は意を決して、第十五階層へと繋がる階段を下りた。

だけど……誰が、こんな結果を予想していただろうか。

「……」

『……』

『『『『ギャギャギャ♪』』』』

……うん、まさかゴブリンが、全員［ゴブ美］に付き従うことになるとは思わなかった。

いや、行きはあのクソ女が問答無用で魔法をぶっ放したからアレだけど、何というか、その……。

「……ここで、［ゴブ美］の能力が発揮されるだなんて」

『……（コクリ）』

そう……［ゴブ美］が持つ数少ないスキルの一つ、【集団行動】。

これが同族であるゴブリンをテイムする能力だったなんて、誰が分かるんだよ！

むしろ［ゴブ美］本人もどうしていいか分からず、肩を落としちゃってるじゃないか！

「あ、あははー……まあそのおかげで、第十三階層まで何の問題もなく降りられるんだけど、な」

『……』

俺とゴブ美は微妙な顔をしたまま、ゴブリンのいる階層を下りて行った。

低階層を目指して（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

また、大変申し訳ありませんが、本作のみ感想欄を閉じさせていただきました。
理由は活動報告に掲載しておりますので、なにとぞご理解の程よろしくお願いします。

憧れの女性（ひと）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

憧れの女性（ひと）

「あ、あはは～……またな～……」
『……（ヒラヒラ）』
『『『『ギャギャ……』』』』

第十二階層へと繋がる階段の前で、俺と［ゴブ美］は名残惜しそうにする大量のゴブリン達に見送られた。
な、なんだかなあ……。

だけど。

「あと……十二の階層を下りれば……いや、第十階層にさえたどり着ければ……！」

そう、第十階層までは藤堂先輩と一緒だったとはいえ、もう何度も踏破している。
そこまで行けば、俺達はやっと帰れるんだ。

「［ゴブ美］、あと少しだ！　気合い入れていくぞ！」
『（ブンブン！）』

俺の檄（げき）に、［ゴブ美］が棍棒を振り回して応えた。

「よし！　行こう！」

俺達は階段を下りて第十二階層へと足を踏み入れた。
第十一階層と第十二階層は、数は少ないが強敵の“ストーンウル

フ〝がいる。
このストーンウルフ、身体が石な上に属性が狼だから、今の［ゴブ美］ほどじゃないにしろとにかく素早い。
「まあ……何とかやり過ごしながら階段を目指すしかないな……」
正直、ストーンウルフは［ゴブ美］が勝てる幽鬼（レブナント）じゃない。
エンカウントしたら……俺達は確実にやられてしまう。
俺達は慎重に第十二階層のフロアを進んで行く。
途中、ストーンウルフの姿を見かけた際はすぐに壁に隠れ、ストーンウルフが立ち去るのを待つか迂回してやり過ごした。
だけど。
「チクショウ……よりによって……！」
何とか時間をかけてたどり着いた第十一階層へと繋がる階段の前には、三体のストーンウルフが寝そべっていた。
まるで……俺達を待ち構えているかのように。
「どうする……このままストーンウルフが立ち去るまで待つか？それとも……」
一か八かで、あのストーンウルフの間を駆け抜けて階段を下りるか。
ストーンウルフが立ち去るのを待つ場合、それがいつになるのか全く読めない。最悪、あの場所から動かない可能性だってある。

じゃあ、決死の覚悟でストーンウルフの間を駆け抜ける場合……
［ゴブ美］ならそれも可能だが、この俺はそんなの無理だ。
あっという間に追いつかれ、そして……。

最悪の状況が俺の脳裏に浮かぶ。

「っ！　ダメだ！　もっとよく考えろ！」

俺はブンブン、と頭を振って思考をクリアにする。
そういえば、今何時だ？

ポケットからスマホを取り出して画面を見ると、時刻は昼の十二時半を表示していた。

「……先輩がこの“ダグラス塔”領域（エリア）にやって来るのは午後二時。あと一時間半、だ……」

最悪、それまでここで待ち続けるか？
でも。

「いや……先輩は俺達が第十二階層まで来てるだなんて知らない。第五階層まで行って俺達の姿が見えなかったら、帰ったものだと判断してこの領域（エリア）から立ち去るだろうな……」

つまり、俺達は先輩を当てにできないってことだ。

「上の階層の時みたいに、この階層の罠を利用して落とすか……？」

そう考えるが、無理だということにすぐ気づく。
あれは跳躍もできないコモドドラゴンだからこそできた戦法だ。

ストーンウルフだと、穴なんて軽々と飛び超えてしまう。

「で、俺達はその勢いのままストーンウルフにガブリ、とやられてしまうな……」

ダメだ、この戦法も使えない。

とはいえ、この階層にある罠は落とし穴が三か所あるだけだ。しかも、俺達にはストーンウルフを倒す方法が……いや、まてよ？

「確か、落とし穴の場所は……」

階層の中央にある十字路と、ゴブリン達のいる第十三階層へつながる階段付近、そして……。

「っ……ははっ！」

俺は思わず笑みを漏らす。

これなら……ストーンウルフを倒せないまでも出し抜くことができるかもしれない！

「［ゴブ美］……これは、俺とお前の連携こそがカギだ。だから……」

『……（コクリ）』

［ゴブ美］が覚悟を決めた表情を見せる。

ああ……やってやろう。

そして、俺達は帰るんだ！

◇

「おい」
『『『ッ！』』』
俺と［ゴブ美］は、階段の前に陣取るストーンウルフの前に姿を見せると、寝そべっていた三体は素早く起き上がり、唸り声を上げ始めた。
「はは、何だよ。俺達とやり合おうってのか？」
『『『……グルル』』』
俺が煽るように嘲笑を浮かべながら肩をすくめると、ストーンウルフはジリ、ジリ、と俺達と間合いを詰めてきた。
どうやら俺の挑発に乗ってくれたみたいだ。とはいえ、間を詰められて一気に飛び掛かられてしまったら、あっという間にやられてしまう。
だから。
――ダッ！
『『『ッ！？』』』
俺と［ゴブ美］はクルリ、と踵を返すと、一目散に走って逃げ出した。
当然、ストーンウルフも俺達を追いかけてくる。
そうだ、もっと俺達を追いかけてこい。
突き当たりの角を曲がり、そのまま真っ直ぐに進むと……目の前

は行き止まりだった。

「クッ……！」

俺達は行き止まりの一番奥まで行くと、壁に背を向けて迫り来るストーンウルフを見据える。

「まだだ……まだ……！」

みるみる近づいてくるストーンウルフと俺達との距離とタイミングを見計らうと、ストーンウルフが床を力強く蹴って飛び掛かってきた。

「っ！　今だ！」

俺は床を思い切り踏み込み、仕掛けられている罠を発動させると。

『『『ッ！？　ギャウッ！？』』』

ストーンウルフ達の視界から俺達が突然消え、勢い余って行き止まりの壁に頭から激突した。

「よし！」

俺は落とし穴に落下する直前、その穴の縁にかろうじて指をかけながら歓喜の声を上げる。

だけど……その指がずるり、と一本ずつはがれ、そして。

「っ！？」

俺の身体は落とし穴の中へと落ち……なかった。

「はは……ナイスタイミング」

『（コクコク！）』

穴の上から、［ゴブ美］が俺の腕をしっかりとつかんでくれていたから。

今回の作戦は［ゴブ美］がカギだった。

俺が罠を作動させて自ら落ち、その敏捷性でストーンウルフの攻撃をかわした［ゴブ美］が素早く俺を救出する。

これは、俺達のチームワークの勝利だ。

「ふう……」

俺は［ゴブ美］に引き上げてもらって落とし穴から脱出すると、深く息を吐いた。

「さあ、急いで階段に駆け込むぞ！　ストーンウルフが穴から上がってこないうちに！」

『（コクコク！）』

俺達は落とし穴の中でもがくストーンウルフを尻目に、大急ぎできた道を戻って階段を目指す。

「見えた！」

この通路を真っ直ぐ駆け抜けたら、階段は目の前だ。

さあ……あと少し……っ！？

『ガアッ！』

突然、通路脇から一体のストーンウルフが飛び掛かり、今まさに俺の喉笛にその牙を……。

「オオオオオオオオオオッッッ！」

――斬ッッッ！

その直前で、ストーンウルフが俺の目の前で女性の雄叫びと共に一刀両断にされた。

「望月くんっ！」

俺の名前を呼んだその人が、半割りになったストーンウルフの向こうに見える。

「あ、ああ……！」

ここにいるはずのない女性（ひと）の姿だった。

でも……間違いない……間違えようがない……。

だって、その女性（ひと）は……！

――俺の憧れの女性（ひと）、藤堂サクヤ先輩なのだから。

憧れの女性（ひと）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

今だけは（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「望月くん、大丈夫か!?」

［関聖帝君］でストーンウルフを一刀両断にした藤堂先輩が、心の底から心配した表情で俺の元に駆け寄って来た。

「あ、はは……何とか……」

俺は先輩の姿を見て安堵したのか、身体から力が抜けてその場にへたり込んでしまった。

「望月くん!?」

滑りこむように先輩が俺の前でしゃがむと……俺を、抱きしめてくれた。

「全く……無茶をして……！　本当に、心配したんだぞ……！」

先輩のその声は、微(かす)かに震えていた。

「はは……疲れてしまったので、少し休んでもいい、ですか……？」

「っ!?　お、おい望月くん！　望月くん!?」

ああ……先輩が俺を呼ぶ声が聞こえる。

俺は、帰って……これたんだ……。

そんなことを思いながら、俺は意識を失った。

◇

「んう……」

目を開けると、白い天井が視界に飛び込んできた。

「あれ？　ここは……」

「！　目が覚めたか！」

「うあああああ！？」

突然、ニュ、と先輩の顔が現れ、俺は驚きの声を上げてしまった。

というか、一体……。

「良かった……突然気を失ったから、心配したんだぞ……！」

先輩は心底安堵したような表情を浮かべ、胸を撫で下ろす。

そして。

「アイタッ！？」

「バカモノ！　あれほど第五階層までにしておけと言ったのに、勝手にその上……しかも、第二十一階層まで行くなんて！」

「うあああああ！？　すいません！」

頭を小突かれた上に思い切り怒鳴られてしまい、俺は条件反射で謝った。

「本当に……心配、したんだぞ……！」

先輩は眉根を寄せながら思い切り俺を睨む。
だけど……その真紅の瞳には、うっすらと涙が浮かんでいた。

「すいませんでした……！」

先輩のその姿にどうしようもなく罪悪感にさいなまれた俺は、自分が犯した過ちに気づいた。
俺は……何やってんだよ……！

「もう……こんな危険な真似はするな……！　絶対にだ！」
「はい……っ！」

俺は唇を噛みながら、指で涙をすくう先輩にただ頭を下げ続けた。

◇

「全く……君がそんなに無謀だとは思わなかったぞ……」

しばらくして、とりあえず先輩は許してくれたものの、お小言はまだ続いていた……って。

「そ、そういえば先輩、どうして第十二階層まで来てくれたんですか？　それに、何で俺が第二十一階層まで行ったことを……？」
「ん？　ああ、実は……」

先輩は第十二階層で俺を見つけるまでの状況を詳しく教えてくれた。

予定が早く終わった……というか、早く切り上げ、午後二時よりも一時間以上早く“グラハム塔”領域（エリア）に来たこと。

俺と合流しようと領域（エリア）を進んで行くと、第四階層地点でバッタリとクソ女……木崎セシルと鉢合わせしたこと。
休日で、しかも領域（エリア）内に俺以外の生徒がいることを不審に思った先輩が木崎セシルを問い質すと、焦った様子で俺が第二十一階層に閉じ込められたと伝えたらしい。
しかも、木崎セシルの制止も聞かず、どんどん先に進んだ挙句の結果だとも。

「……それを聞いた私は無我夢中で第二十一階層を目指したんだが、まさか第十二階層で君を見つけられるとは思わなかったぞ」
「そうですか……」

はあ……あのクソ女やってくれる……。

「それで……君はどうして、その……あの木崎セシルという女子生徒と一緒に、そんな上の階層まで行こうと思ったのだ？」

先輩は上目遣いでおずおずと尋ねる。
どうしてそんな可愛らしい様子で聞くのかは分からないけど、とりあえず、本当のことを話しておこう。

「ええと、実は……」

俺は何があったのか、かいつまんで説明する。

昨日先輩と別れた後、木崎セシルから“グラハム塔”領域（エリア）を一緒に攻略して欲しいと持ちかけられたこと。
それも、先輩と俺との会話を聞いていたのか、土曜日の今日行きたいと。

俺は第五階層までという条件で了承し、今日の朝八時から領域攻略を開始したこと。

だけど、第五階層に着いた途端、木崎セシルはさらに上の階層を目指そうと持ちかけられ、俺はそれを拒否するも、さらにお願いされると何故か断り切れずに渋々承諾してしまったこと。

さらに、第十階層に着いた時も同様にねだられ、その時も同じくただ頷いてしまったこと。

多分、あの時の俺は木崎セシルの精霊、［グルヴェイグ］にあったスキルの一つ……【誘惑】で魅了されていたんだろう……。

特に、これは俺が一緒に戦える仲間が欲しいって、そんな思いがどうしてもあって、アイツにそこを付け込まれたから、アッサリかかってしまったんだ。

そして……俺が第二十一階層へ足を踏み入れた途端、木崎セシルによって階段を魔法で破壊され、瓦礫で塞がれてしまったこと。

「……それで、俺は木崎セシルに利用されて、しかも嵌められたことを知り、何とか俺と［ゴブ美］で瓦礫を取り除いた後、領域からの脱出を試みたんです……」

そう言うと、俺は包帯でグルグルに巻かれた両手を見つめる。

はは、あの時は興奮してたから気にならなかったけど、かなり無茶したからなあ……今はジンジンして結構痛い。

「そうか……」

俺の話を全部聞き終えた後、先輩は静かにその一言を呟いた。

その後。

「あの女あああああああああああッッッ！　絶対に！　青龍偃月刀で一刀に……いや、その髪の毛一本すらも根絶やしにしてくれるッッッ！」

髪の毛が逆立つかと思う程に激高し、学園中に轟く声で絶叫した。

その姿は、まさに絶対的強者の、怒り狂う獅子の咆哮だった。

「せ、先輩！　待って下さい！」

「っ！　何故だ！　君は一歩間違えたら死んでいたんだぞ！　そこまでした相手に、慈悲など必要ない！　そうだろうっ！」

「そ、その通りです！　ですがっ！」

俺は今にも飛び出しそうな先輩を止めると、到底納得できない先輩は、俺に詰め寄った。

でも……それでも、俺は先輩を制止する

「俺は……強くなって、あのクソ女を見返すんです……！　そして、今日こんな真似をしたアイツを後悔させてやるんです！　だからっ！」

「だ、だが……っ！」

「お願いしますっ！」

「ぐ、ぐむ……」

そう言って俺が必死で頭を下げると、納得いかないもののとりあえずは矛を収めてくれた。

「ありがとうございます……」

「し、仕方あるまい！　当事者の君がそう言っているのに、部外者

である私がこれ以上言うわけにもいくまい……」

どうしても腑に落ちない先輩は、精一杯の皮肉を込めてそう言い放った。

だけど……俺は、その言葉がとても悲しくて。

「む？　あ……」

気がつけば、俺は先輩に縋りついていた。

「先輩……部外者なんて、そんなこと……言わないで、ください……！」

「も、望月くん！？」

ああ……駄目だ。

クラスの連中に、先生に馬鹿にされ、あのクソ女に裏切られ、その上先輩にまで見限られてしまうのかと思うと……怖くて……怖くて……っ！

「バ、バカモノ！　これはただの言葉のあやだ！　私が君を部外者などと思うわけないだろう！」

「本当、ですか……？」

「ああ、もちろんだとも！」

「よか、った……！」

先輩の言葉に安堵し、俺の瞳からとめどなく涙が溢れ出す。

あのクソ女に裏切られても、強くなって見返せばいい……だから、俺は気にしないって、そう考えるようにしてたのに……！

すると。

「望月くん……っ！」

先輩が、俺を抱きしめてくれた。

強く……ただ、強く。

「せん……ぱい……？」

「悔しいなら、泣けばいい！　悲しいなら、声を出して泣き叫べばいいんだ！　この私が君のその想いを全部受け止める！　だから……！」

「ああ……あああ……！」

先輩……泣き止んだら、また俺は強くなるために頑張ります。

だから。

「あああああああああああああああ……！」

だから……今だけは先輩の胸で、泣かせてください……。

今だけは（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ステータスの秘密（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

どれくらい時間が経っただろう。
もう何時間も経過したようにも感じるし、あっという間のような気もする。

でも……これだけは分かる。
俺はこの温もりから離れたくない、離したくない。

だから。

「先輩……もう、大丈夫です」

俺は、藤堂先輩の背中をポンポン、と叩いて彼女から離れた。
本当の意味で、先輩を絶対に離さないために。

「うむ……ふふ、澄んだ綺麗な……そして、覚悟と意志を湛えた、強い瞳だ」

俺の泣き腫らした目をジッと見ると、先輩はそう言って柔らかい表情を見せた。
それは、この世のどんなものよりも綺麗で、素敵で、吸い込まれそうで……。

「先輩……俺と［ゴブ美］は強くなります。絶対に」
「ふふ……ああ、君達は強くなる。私はそう信じているぞ」

そうだ。初めて出逢った時からずっと、先輩は俺達の可能性を信

じてくれた。だから、俺達は先輩に見せよう。

俺達の、可能性を。

「それで……今日はもうこんなことになってしまったし、君も怪我をしている。“グラハム塔”領域（エリア）の攻略はやめておこう」

先輩は俺の両手をチラリ、と見やった後、そう告げる。

でも。

「先輩……ならせめて、初心者用の領域（エリア）には行かせてくれませんか？」

「初心者用の領域（エリア）……」

そう呟（つぶや）くと、先輩は口元を押さえながら考え込む仕草を見せた。

「……なあ望月くん。前から気になっていたのだが、君は何故あの領域（エリア）に入り浸っているんだ？」

顔を上げ、先輩はその真紅の瞳でジッと俺を見る。

「こう言っては何だが、確かに君の精霊（ガイスト）のステータスは弱いものの、それでも君達はその戦略や対策など、ステータスに見えない部分を駆使して“グラハム塔”領域（エリア）でも見事に攻略している。正直、今の君達には初心者用の領域（エリア）は物足りないはずだ」

驚いた。

確かに俺は、あの『攻略サイト』の情報から［ゴブ美］の戦い方や領域（エリア）での振舞い方を研究して、それを実践している。

［ゴブ美］のステータスに惑わされず、先輩は本当に、俺のことをよく見てくれているんだな……。

……先輩なら、いいよな。

「先輩、これを見てください」

俺はポケットからガイストリーダーを取り出し、今の［ゴブ美］のステータスを見せた。

――――――――――――――――
名前　：ゴブ美
属性　：ゴブリン（♀）
ＬＶ　：４３
力　　：Ｇ＋
魔力　：Ｆ－
耐久　：Ｇ＋
敏捷　：Ａ＋
知力　：Ｅ－
運　　：Ｇ＋
スキル：【集団行動】【繁殖】
――――――――――――――――

「むう……なんだこの『敏捷』のステータスの上がり具合は！　この項目だけなら、私の［関聖帝君］よりも上ではないか……！」

［ゴブ美］のステータスを見た先輩は、思わず唸った。

そう……誰が見てもこのステータスの変化は異常だ。

「その理由を教えますので、先輩もついて来てください」
「む……あ、ああ……」

俺がそう言うと、先輩は戸惑いながらも頷く。
そして、俺達は初心者用の領域（エリア）へと向かい、中へと入った。

「ここは？」
「見ててください」

俺はあの部屋に先輩を案内すると、床の仕掛けを踏んだ。

「っ！？　これはっ！？」

突然現れた扉に、先輩が驚きの声を上げる。

「……この扉は、この領域（エリア）に初めて入った時に偶然見つけたものです」

俺は『攻略サイト』のことは伏せ、あくまで偶然見つけたことにして説明した。

「だ、だが！　初心者用の領域（エリア）にこんな仕掛けがあったなんて今まで聞いたこともないぞ！？」
「はい。おそらくは、ここがあまりにも難易度が低すぎて、誰からも注目されなかったからだと思います。実際、新入生の見学でしか使われていませんから」
「む……た、確かに……」

俺の説明に、先輩が納得して頷いた。
偶然っていうのは嘘でも、今の話自体は嘘じゃないからな。

「では、行きましょう」
「う、うむ……」

先輩は緊張した面持ちを見せるけど、すぐに落ち着きを取り戻す。
こういうところは、さすがだと思う。

俺達は扉をくぐって“ぱらいそ”領域（エリア）へと足を踏み入れると。

「おお……！」

先輩がこの領域（エリア）の幻想的で荘厳な雰囲気を目の当たりにし、感嘆の声を漏らした。
分かります。俺も初めて入った時、同じリアクションでした。

「こちらです……あ、それと、チラホラとこの領域（エリア）の幽鬼（レブナント）を見かけることがあるかと思いますけど、絶対に声を出したり、先制攻撃を加えたりしないでくださいね」
「む？　何故だ？」

俺がそう言うと、先輩が怪訝な表情を浮かべた。

「単純に、この領域（エリア）の幽鬼（レブナント）が強いからです」
「それは……この私より、ということか？」
「はい。先輩も見れば分かると思います」
「むう……」

先輩は半信半疑なのだろう。
納得できないようだけど、それでも僕の言葉に従ってくれた。

そして。

「な、なんだあれは……！？」

「先輩、静かに」

俺は口元に人差し指を立て、先輩に静かにするように促す。

だけど、先輩が驚くのも当然だろう。

あの通路にいる幽鬼（レブナント）の名は“クイーン・オブ・フロスト”。

まるでチェスの女王（クイーン）のような姿をしており、上位の【氷属性魔法】を使うレベル八十の幽鬼（レブナント）だ。当然、レベル六十七の［関聖帝君］じゃ太刀打ちできない。

「先輩、大丈夫です。あの幽鬼（レブナント）は僕達の姿を視界に入れない限り、気づくことはありませんから」

「そ、そうなのか？」

「はい。見ててください」

俺と［ゴブ美］はいつものように幽鬼（レブナント）が向きを変えるのをジッと見守る。

「今だ！」

「あっ！？」

幽鬼（レブナント）が後ろを見せたタイミングで、俺は先輩の手を引っ張って向こう側の通路へと渡った。

「ふう……無事、やり過ごせましたね」

一息吐いて先輩へと振り返ると……先輩は、何故か眉根を寄せて俺を見据（みす）えていた。

「え、ええと、先輩……？」
「君はこれまで、いつもこんな危険な真似をしていたのか？」
あ、これは先輩怒ってるぞ。
「そ、そのー……あの幽鬼（レブナント）は毎回同じ動きをしまして……な、なのでパターンさえ分かっていれば安全に……そ、それと、一応対策も……」
などと、上目遣いでおずおずと行ってみるが……当然先輩には通用しなかった。
「本当に君は！」
「アイタ！」
先輩に小突かれ、俺は思わず頭を押さえた。
「もうこんな危険な真似、一人では絶対にするな！　どうしてもというなら、必ずこの私を連れて行くんだ！　いいな！」
「は、はい……」
俺は思わずシュン、となって頷いた。
ま、まあ、ここの秘密も明かしたんだし、先輩の都合がつくならぜひ一緒に行きたい。
というか、この“ぱらいそ”領域（エリア）の攻略は先輩無しでは考えられないから……いや、違う。
俺は……この先輩と一緒に、最後までいきたいだけなんだ。

そして俺達はさらに進み、例の行き止まりにたどり着いた。

ステータスの秘密（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価、感想をよろしくお願いします！

目標ステータスに到達（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

目標ステータスに到達

俺達が例の行き止まりにたどり着くと、いつものようにその奥には木箱が置かれていた。

「あの木箱には何が……」

先輩は木箱へと近づいてゆき、蓋（ふた）を開けると。

「これは……疾走丸、か？」

「そうです……しかも、この領域（エリア）を出入りすれば、いくつでも手に入るというオマケつきです」

「な、なんだとっ！？」

まあ、先輩が驚くのも当然だ。

普通は一度取ってしまえばそれっきりだからな。

「俺は見学をした日、偶然見つけたんです。この領域（エリア）を……この、不思議な木箱を」

俺はもっともらしく先輩にそう告げるが……すいません、情報元は全部『攻略サイト』です。

「そ、そうか……それで君の［ゴブ美］はそのような『敏捷』を……って、ちょっと待て！？」

どうやら先輩は気づいたみたいだ。

「この疾走丸、ひょっとして特殊なのか！？」
「いえ、他の領域（エリア）で見つかるものと同じ、普通の疾走丸です」
「だ、だが、それだと疾走丸によるステータス上昇効果など微々たるものだ！　なのに君の精霊（ガイスト）の『敏捷』は、まもなく“Ｓ”に迫ろうというステータスだぞ！？」

先輩はわなわなと震えながら俺を指差した。
そんな先輩に、俺は無言で頷く。

「き……君は一体、どれだけこの作業を繰り返したというんだ……」
「あはは……途中から数えるのをやめました……」

そう言って、俺は苦笑しながら頭を掻いた。

「君という男は、本当に……！」
「わっ！？」

突然、先輩に頭をわしわしと乱暴に撫でられた！？

「ふふ……私の目に狂いはなかった！　やはり君はすごい男だ！」
「あ、あはは……ありがとうございます」

手放しで褒めてくれる先輩に、つい照れ笑いした。
本当にこの先輩は俺のことを見てくれて、認めてくれて……。

「さあ望月くん！　では、疾走丸を！」
「はい！　［ゴブ美］！」
『（コクコク！）』

先輩から手渡され、［ゴブ美］はいつものように疾走丸を口に放

り込んだ。

『……』

「ふふ、その苦さには慣れないか」

不味くて舌を出す［ゴブ美］に、先輩がクスリ、と笑った。

はあ……やっぱり先輩は最高だ。

「ん？　望月くん、私の顔をまじまじと見てどうしたんだ？」

「へ？　あ、あああああ、いい、いえ、その……！」

うあああああ!?　とても先輩に見惚れてただなんて言えない！

「？　まあいい、では早くこの領域（エリア）から出よう」

「はい！」

『（ビシッ！）』

先輩の言葉に俺と［ゴブ美］は敬礼のポーズをした。

◇

それからというもの、先輩は初心者用の領域（エリア）にも毎日一緒に来てくれるようになった。

というか先輩、生徒会長なのに生徒会の活動とかいいんだろうか……。

「ん？　どうした？」

「あ、いえ……何でもないです……」

「？」

うん……聞くのはやめとこう。

「それはそうと望月くん、強くなることも重要だが、勉学も大切だぞ？」

「は、はあ……」

先輩の言葉に、俺は曖昧（あいまい）に返事した。

あのクソ女に閉じ込められた一件以来、俺はあの教室に一度も顔を出していない。

あんな連中と顔も合わせたくないっていうのもあるし、それに、担任の伊藤先生も謹慎が解けて復帰したしな。

「ふむ……やはり、父……学園長に掛け合って君のクラス替えを進言してみよう。あのような掃きだめは、君に相応しくない」

「あはは……せっかくですが、それは結構です」

「ふう……君はなかなか頑固だな……」

先輩のありがたい提案を断ると、先輩は俺をジト目で睨んだ。

だけど、俺が強くなってアイツ等を見返して、悔しそうにするツラを拝んでやるのだ。

それに……二学期にはアイツが来るしな。

「ふ……まあいい。それよりも」

先輩は通路の行き止まりにある木箱を指差した。

「そうですね。［ゴブ美］」

『（コクリ）』

いつものように木箱から疾走丸を取り出し、［ゴブ美］がそれを飲み込んだ。

「ふふ、一度ステータスを確認してみたらどうだ？」

「あー、そうですね」

俺はポケットからガイストリーダーを取り出し、［ゴブ美］のステータスを確認すると。

――――――――――――――――

名前　：ゴブ美

属性　：ゴブリン（♀）

ＬＶ　：４５

力　　：Ｇ＋

魔力　：Ｆ

耐久　：Ｇ＋

敏捷　：Ｓ

知力　：Ｅ－

運　　：Ｇ＋

スキル：【集団行動】【繁殖】

――――――――――――――――

「あ……！」

なんと、『敏捷』のステータスがとうとう“Ｓ”に到達した。

「どれどれ……おお！　やったじゃないか！」

先輩が我がことのように喜んでくれる。

そして。

『（ブンブン！）』

［ゴブ美］も嬉しさのあまり、棍棒をブンブンと振り回してはしゃぎまくっていた。

「あはは……とうとうここまで来れました」

「うむ！　ならば次はクラスチェンジだな！」

「はい！」

そうだ、俺達はまだ到達すべき目標を一つクリアしただけだ。

次は、レベルを五十以上に上げて、クラスチェンジを果たさないと。

「よし！　ではこの領域（エリア）を出て、次は“グラハム塔　”領域（エリア）でレベル上げに集中しよう！」

「ですね！」

意気揚々と来た道を戻り、幽鬼（レブナント）が後ろを見せた隙に向こう側へ……っ！？

――クルリ。

「っ！？　な、何だよそれ！？」

俺達が通り過ぎようとした瞬間、幽鬼（レブナント）……“クイーン・オブ・フロスト　”が反転してこちらを向いた。

目標ステータスに到達（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価、感想をよろしくお願いします！

クイーン・オブ・フロスト（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クイーン・オブ・フロスト

「っ！？　な、何だよソレ！？」

俺達が通り過ぎようとした瞬間、幽鬼（レブナント）……“クイーン・オブ・フロスト”が反転してこちらを向いた。

というか、コイツは規則的に動くんじゃなかったのか！？　『まとめサイト』にはハッキリとそう書いてあったぞ！？

「っ！　……すまない、恐らく私のせいだ……」

「先輩！？」

藤堂先輩は俯（うつむ）きながら、絞り出すようにそう言った。

「ど、どういう意味ですか！？」

俺は先輩の言っている意味が分からず、慌てて問い掛けた。

「……私の［関聖帝君］には【威圧】スキルがあることは、知っているな？」

「【威圧】スキル……まさかっ！？」

俺が驚いた反応を見せると、先輩は唇を噛みながら無言で頷いた。

つまり……［関聖帝君］の【威圧】は常時発動のパッシブスキルで、恐らくあの幽鬼（レブナント）はそれを察知して、俺達を認識したのか……。

「で、ですが行きは何も反応しなかったのに……」

「あの時は私が［関聖帝君］を召喚していなかったからだろう……

だが、今はこうやって召喚しているから、な……」

そうか……なら、迷っている暇はないっ！

「先輩！　そういうことなら急いでこの領域（エリア）から脱出しましょう！」

俺はそう叫ぶと、先輩の腕を取って引っ張るが……先輩は、俺の手を振り払った。

「先輩！？」

「すまん、望月くん……ここは私が全力で食い止める、だから君は先にここから脱出してくれ」

先輩と［関聖帝君］は俺達に背中を見せ、仁王立ちしながらクイーン・オブ・フロストを見据（みす）えた。

「はあ！？　何を言ってるんですか！　先輩だって分かっているでしょう！　いくら［関聖帝君］でも、あの幽鬼相手（レブナント）じゃ太刀打ちできないって！」

「分かっている！　分かっているとも！　だが……これも分かる。このまま全力で逃げても、すぐに追いつかれて二人共あの幽鬼（レブナント）の餌食になってしまうということも……」

「先輩……」

「ふふ……もちろん、私だって易々とやられるつもりはない。だから……君は逃げるんだ」

先輩は真紅の瞳で俺を見つめながら、寂し気に微笑んだ。

俺にはそれが、先輩の別れの挨拶のように見えて……。

だから。

「っ！？　望月くん！？」
「先輩……俺が先輩を置いて逃げるとでも思ってるんですか？　見くびらないでくださいよ！」
俺と［ゴブ美］は先輩の隣に並び立ち、驚きの表情を浮かべる先輩に怒気を含めて叫んだ。
「だ、だが！　これは私の責任で……！」
「それこそ余計なお世話ですよ！　責任ってなんですか！　先輩が何したっていうんですか！　先輩は……先輩は、それこそ俺達を見捨てるっていうんですか！」
「っ！？」
俺の言葉に、先輩が息を飲む。
だけど、俺は怒ってるんだ。身勝手に自分を犠牲にして、俺達を逃がそうとして……！
俺が……俺達が、どれほど先輩を必要としているか、どれほど先輩を想っているか知りもしないでっ！
「……俺は先輩が一緒じゃない限り、絶対に逃げませんから。逃げるなら、先輩と一緒ですから」
「望月……くん……」
俺がそう言い放つと、先輩は俺の名を呟いて、それ以上何も言わなくなった。
でも……先輩の表情は、怒っていて、悲しそうで……そして、嬉しそうだった。
『……』

はは、クイーン・オブ・フロストの奴、警戒してるんだか何だか知らないが、ご丁寧に俺達を待っていてくれたみたいだ。

なら……始めようか。

俺達が、ここから生きて帰るための戦いを。

俺は背中のヒューズボックスからアレを取り出すと、先輩を見る。

「先輩……俺と［ゴブ美］がスピードを活かしてアイツに仕掛け、木箱のある行き止まりへと誘導します。先輩は俺達の後を追いかけ、そして……合図をしたら通路の壁を壊して、アイツが逃げられないように、封鎖してください」

「望月くん！？」

そう言うと、先輩が驚きの表情を見せる。

だけど……先輩は真紅の瞳で俺を見つめ、静かに頷いた。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩いた。

「［ゴブ美］！　行くぞ！」

『（コクコク！）』

俺と［ゴブ美］は、無防備にもクイーン・オブ・フロストへと突撃する。

当然アイツは、俺達へと攻撃を仕掛けるために、胸の前で魔法を展開し始めた。

そして。

「っ！　来るぞ！」

クイーン・オブ・フロストは俺達目がけ、広範囲を攻撃する上級氷属性魔法、【アイスストーム】を放つ。

だけど、俺達はそれよりも先にクルリ、と反転し、木箱のある行き止まりへと繋がる通路の陰に逃げ込んだ。

「……ヤバイな」

振り返り、俺達がついさっきまでいた場所が一面氷に覆われているのを見て、思わず戦慄する。

あんなの、かすりでもした時点で一巻の終わりだ。

――パキ、ペキ。

「っ！　［ゴブ美］！　走れ！」

俺はそう叫びながら、氷をかき分けて向かってくるクイーン・オブ・フロストの姿を見て、急いで通路の奥を目指す。

何とか……何とか追いつかれる前に、あそこまでたどり着かないと……！

「っ！　［ゴブ美］！」

『（コクリ）』

［ゴブ美］が俺の手を引き、俺の走る速度はさらに上がる。

だが、クイーン・オブ・フロストも全速力で追っており、その差はどんどん縮まっていた。

「っ！　見えた！」

行き止まりの奥に鎮座する木箱が、俺達の視界に入る。

「［ゴブ美］！　俺のヒューズボックスを持って先にあの行き止まりへ……そして、中身をぶちまけろおおおおお！」

『（コクリ！）』

［ゴブ美］は力強く頷くと、俺から受け取ったヒューズボックスを持って一気に行き止まりへと到達した。

そして、ヒューズボックスの中から液体の入ったペットボトルを数本取り出すと、中身を四方にぶちまけた。

はは……俺が指示したわけじゃないのに、キッチリ通路脇に液体が掛かっていない箇所を作ってくれてあるし。

［ゴブ美］……お前が俺の精霊（ガイスト）で、本当によかったよ。

何とか追いつかれる前に行き止まりに駆け込んだ俺は、クルリ、と翻（ひるがえ）ると、弾丸のように迫って来るクイーン・オブ・フロストを見（み）据（す）えた。

まだだ……まだ……。

俺の頬を汗が伝う。

クイーン・オブ・フロストがあと数歩という距離まで迫った、その時。

「っ！　今だあああああ！」

俺達は液体がかかっていない床を思い切り蹴ると、スライディングの要領で床を一気に滑り、クイーン・オブ・フロストの横をすり抜けた。
咄嗟のことで、当然クイーン・オブ・フロストはすぐに切り返すことができない。
俺達は瞬く間にクイーン・オブ・フロストとの距離を空けると。
「おおおおおおおおおおッッッ！」
先輩の［関聖帝君］が通路の天井、左右の壁、床を青龍偃月刀で叩き切って瓦礫の山を作った。
「望月くん！　やったな！」
クイーン・オブ・フロストの閉じ込めに成功し、先輩が歓喜の声を上げる。
だけど。
「まだです！」
俺は素早くポケットからアレ……オイルライターを取り出し、俺達が滑ってきた床の液体に火をかざした。
――ゴオオオオオオオ！
しばらくすると液体に火が着き、クイーン・オブ・フロストが閉じ込められている行き止まりへと炎となって伸びていく。

「望月くん、これは……？」
「灯油、です」
先輩の手を借りて立ち上がった俺は、そう答えた。
この“ぱらいそ”領域（エリア）で疾走丸の入手を決めた時から、俺はヒューズボックスに灯油の入ったペットボトルを常に持ち歩くようにした。
あのクイーン・オブ・フロストの弱点が火属性であることは、『攻略サイト』で知っていたから。
といっても。
「あはは……どちらかといえば、あの幽鬼（レブナント）をひるませるために用意したものであって、倒すなんてことは考えてませんでしたけど……」
そう言って、俺は苦笑しながら頭を掻（か）いた。
「本当に……君という男は……！」
「わっ！？」
嬉しそうに笑う先輩に、乱暴にガシガシと頭を撫でられてしまった。
でも……俺にはそれがとても心地よかった。

クイーン・オブ・フロスト（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラスチェンジ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「さあ先輩、今度こそここを脱出しましょう！」
「うむ！」

俺と藤堂先輩はクイーン・オブ・フロストを閉じ込めている瓦礫に背を向けると、出口へと向かって駆けだした。

「あ、そうだ先輩……」
「む……？」

俺は走りながら先輩にそっと耳打ちすると。

「分かった！　任せてくれ！」

先輩は頷き、［関聖帝君］を後ろに従わせた。
俺も、［ゴブ美］を先頭にして斥候の役割を担う。

さっきみたいなイレギュラーもあるんだ。警戒するに越したことはないからな。

「ふふ……だが、君も存外無茶をするな。傍（そば）にいる私としては、気が気じゃないぞ」
「何言ってるんですか先輩、俺はいつだって安全第一ですよ……」

先輩にからかうようにそう言われ、俺は思わず肩を落とした。
いや、本当に俺は決して無茶はしない主義なんだぞ？　ただ、無茶をしないと生き残れないような状況に追い詰められてしまうだけ

で。

「だが……やはり、君はすごいな……本音を言うと、私はあの幽鬼（レブナント）と対峙した時、生還を諦めた……」

先輩は少し視線を落とし、そう呟（つぶや）いた。

だけど、先輩が言うように俺はすごくない。

ただ、必死なだけだ。

そして……俺にはそれしか方法がないだけだ。

「……本当にすごいのは、先輩ですよ。そんな絶望ともいえる状況で、先輩が選択したのは俺を助けることでした。やっぱり先輩は、俺の憧れです」

「あう！？　き、君はまたそういうことを……！？」

あはは、先輩が照れてる。

だけど……俺にとっては、先輩こそが目指すべき女性（ひと）、ですよ。

「なあ……望月くん」

三叉路に差し掛かったところで先輩が走るのを止め、口元を緩めながら俺に呼びかけた。

「？　なんですか？」

「その……君さえよければ、私と……っ！？」

その時……炎に焼かれてひび割れ、欠け、すすで汚れてボロボロになったクイーン・オブ・フロストが突然現れ、俺達に襲い掛かる。

だけど。

「……待っていたよ」

――斬ッッッ！

いつの間にかクイーン・オブ・フロストの背後に回り込んでいた［関聖帝君］が、その胴体を袈裟切りにした。

「おおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！」

［関聖帝君］はさらに何度も青龍偃月刀を叩き込む。

そのあまりの激しく凄まじい連撃に、クイーン・オブ・フロストはその身体をズタズタに破壊され……とうとう沈黙した。

「先輩っ！」

「ふふ……君の言った通り、だな……」

俺が声を掛けると、先輩はニコリ、と微笑んだ。

そう……俺は走って出口を目指す中、先輩に耳打ちした。

『あの幽鬼（レブナント）はあの程度の炎でやられたりはしませんが、ダメージは確実に負っています。だから、途中にある三叉路で待ち伏せ、［関聖帝君］を僕達の背後から見て死角になるように配置し、幽鬼（レブナント）を［関聖帝君］の【一刀両断】で確実に仕留めましょう』

と。

そして、俺と先輩が見つめる中、切り刻まれたクイーン・オブ・

フロストが、幽子（ゆうし）とマテリアルへと変わる。

「あ……」

大量の幽子が、［ゴブ美］と［関聖帝君］へと流れ込んでいった。

「ふふ、ひょっとしたら君の精霊（ガイスト）もかなりレベルが上がっているんじゃないか？　私の［関聖帝君］も、久しぶりにレベルアップできそうだ」

そう言って、先輩は自分のガイストリーダーを取り出して画面を眺めると、満足げに頷く。どうやらレベルアップしたみたいだ。

俺も、ポケットからガイストリーダーを取り出す。

――――――――――――――――――――
名前　：ゴブ美
属性　：ゴブリン（♀）
ＬＶ　：５１
力　　：Ｆ－
魔力　：Ｆ＋
耐久　：Ｆ－
敏捷　：Ｓ
知力　：Ｅ
運　　：Ｆ－
スキル：【集団行動】【繁殖】
――――――――――――――――――――

「はは……［ゴブ美］！　とうとうレベル五十を超えたぞ！」

『！　（ブンブン！）』

俺と［ゴブ美］は、嬉しさのあまりその場ではしゃぎ回る。
長かった……だけど、俺達はとうとうここまでこれたんだ！

「ふふ、君達にとって、そのレベル五十というのは、何か思い入れがあるのか？」
「はい！　レベル五十は、［ゴブ美］がクラスチェンジするために必要なレベルなんです！」
「そうか……だったら、早速クラスチェンジしてみてはどうだ？」

柔らかい表情を浮かべながら、先輩は俺達にそう促した。

「はい！　［ゴブ美］がクラスチェンジするところ、ぜひ見ていてください！」
「うむ、しかと見せてもらうよ」

俺は［ゴブ美］へと向き直る。

「［ゴブ美］」
『……（コクリ）』

目を閉じ、ゆっくりと頷いた［ゴブ美］の頭に俺は手を添えると。

「クラスチェンジ……開放」

そう告げると、［ゴブ美］はその身体から放出される幽子の渦に包まれる。
これこそが、クラスチェンジの儀式。［ゴブ美］はこの幽子の渦の中で、その身体が再構成されているんだ。

俺と先輩は、その様子をただ眺め続けていると、幽子の渦が徐々に消え、［ゴブ美］の姿が徐々に現れていく。

さあ……［ゴブ美］、“レッドキャップ”へと生まれ変わって、俺の前にその姿を……っ！？

幽子の渦が全て消え去り、俺達の目の前に現れたのは……“レッドキャップ”、ではなかった。

背の低い黒髪の美少女が、道士が身にまとう冠と道袍（どうほう）と呼ばれる服、金属製の籠手に、何故か不釣り合いなホットパンツと金属製のブーツという出で立ちだった。

「そ……その姿は……！」

それは、俺が［ゴブ美］の強化プランを練る時に真っ先に切り捨てた……いや、諦めた選択肢。

あの『攻略サイト』によると、この『ガイスト×レブナント』の世界とは違う世界において、全国規模のゲームイベントでのみコード配布されたという、限定仕様の精霊（ガイスト）。

「しん、こう……たいほう……」

そう……この世界において最速の精霊（ガイスト）。

さらに、【方術】という特殊なスキルで、あの主人公の精霊（ガイスト）すら凌駕する実力を持った稀有（けう）な存在。

それが……［神行太保（しんこうたいほう）］。

「お、お前は［ゴブ美］……なの、か……？」

『……（コクリ）』

震える人差し指を向けながら尋ねると、［神行太保］……［ゴブ美］はそのオニキスのような瞳からぽろぽろと涙を零しながら、確かに頷いた。

「こ、こんな……奇跡、が……！」

信じられなかった。

夢だと思った。

だけど……俺の知っている［ゴブ美］は、目の前に……確かに、ここにいた。

「あ……ああ……！」

気がつけば、俺は駆け出していた。

同じように［ゴブ美］も、俺に向かって勢いよく駆けてくる。

そして。

「［ゴブ美］いいいいいいいい！」

『マスタアアアアアアアア！』

俺は［ゴブ美］を強く抱きしめ、嬉しさのあまり［ゴブ美］を抱えてその場でクルクルと回った。

――パチ、パチ、パチ。

「ふふ……クラスチェンジ、おめでとう」

どこまでも優しい先輩の祝福の言葉と惜しみない拍手が、俺の心に深くしみわたった……って。

「「しゃべったあああああああああ！？」」

『？』

俺と先輩の絶叫が、この“ぱらいそ”領域（エリア）に響き渡った。

クラスチェンジ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

どこまでも一緒に（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「「しゃべったあああああああああ！？」」
『？』

俺と先輩の絶叫が、この“ぱらいそ”領域（エリア）に響き渡った。
だけど……なんで［ゴブ美］はキョトンとしてるんだよ！？　驚くところだろ！

「せせせ、先輩！　精霊（ガイスト）がしゃべるなんて、そんなことってあるんですか！？」
「いいい、いや！？　私も聞いたことがないぞ！？」
「でで、ですよね！？」

俺と藤堂先輩はチラリ、と［ゴブ美］を見やる。
……うん、意味が分からん。

「な、なあ［ゴブ美］……どうして、しゃべれるんだ……？」
『ウーン……［シン］にもよく分からないのです……』
「［シン］！？　……って、ひょっとして［神行太保（しんこうたいほう）］だから［シン］ってことか？」
『はいなのです！』

［神行太保］……もとい［シン］は、ピシッと右手を高々と上げた。
うん、元気があってよろしい……って、そうじゃなくて！

「も、望月くん……とりあえず、ガイストリーダーで精霊（ガイスト）のステー

タスを確認してみたらどうだ？」
「そ、そうですね……」
先輩の提案に頷き、俺はガイストリーダーを取り出して画面を見る。
――――――――――――――――――――
名前　：シン（神行太保）
属性　：神仙（♀）
ＬＶ　：５１
力　　：Ｅ
魔力　：Ｓ＋
耐久　：Ｄ
敏捷　：ＳＳＳ
知力　：Ｓ
運　　：Ｂ＋
スキル：【方術】【神行法】【全属性耐性】【状態異常無効】【物理弱点】【繁殖】
――――――――――――――――――――
「な、なんだこのステータスは！？　いくらクラスチェンジをしたとはいえ、ここまで上昇するものなのか！？」
「あ、あはは……」
先輩は驚愕し、俺は乾いた笑みを浮かべる。
いや、というかステータスの上限は“ＳＳ”じゃなかったっけ……なのに、『敏捷』が“ＳＳＳ”になってるし……。
あの『攻略サイト』でも、確かに“ＳＳ”だったのになあ……。

「これは、私の［関聖帝君］と互角……いや、それ以上かもしれない……」

「ま、まさか！　そもそも［シン］は物理が弱点ですよ？　完全に相性最悪じゃないですか！」

「っ！？　う、うむ……」

先輩の呟きを否定すると、何故か先輩は悲しそうに俯いてしまった……ど、どうして！？

『マスター……今の言葉はないのです……』

「［シン］！？」

そして［シン］にまでダメ出しされる始末。

今の俺の発言にどこが悪い要素が……って、［シン］！？

『いいですか？　藤姉さまはマスターが不用意に言った、『相性最悪』という言葉に心を痛めているのです。ですので、今すぐフォロー入れるのです！』

ふよふよと浮かびながら［シン］が俺にそう耳打ちした。

な、なるほど……た、確かに先輩は勘違いしてしまったのかもな。

とりあえず、［シン］のアドバイス通りにフォローを入れておこう。

「せ、先輩！　俺が言った『相性最悪』っていうのは、あくまで先輩と戦った場合のことですからね！　そ、それに、俺の［シン］は術者タイプですから、むしろ一緒に戦うなら物理攻撃主体の先輩の［関聖帝君］とは相性バツグンですから！」

俺は先輩に向かって、少し大げさにそう告げた。

ど、どうだ……？

「っ！　う、うむ！　そうだな！　確かに君と私が戦うなんてあり得ないし、一緒ならばお互いを補い合いながら戦うことができるからな！」

俺の言葉に気を良くしたのか、先輩は打って変わってぱあ、と最高の笑顔を見せてくれた。

よ、よかったー……というか［シン］、ナイスだ！

俺は［シン］に向かってコッソリとサムズアップすると、［シン］も笑顔で親指を突き立てた。

「ふふ……そうだ、あの幽鬼（レブナント）が話の途中で襲ってきてしまったため言いそびれていたが……」

先輩が少し恥ずかしそうというか、照れくさそうというか、モジモジしながら上目遣いでおずおずと声を掛けてきた。

いつも凛としている先輩にしては珍しい反応だけど……可愛い。

とにかく可愛い。いや、最高に可愛い。

「ええと……何でしょうか？」

「そ、その……もし君が良ければ、これからもエ、領域（エリア）の攻略に一緒に付き合ってもいいだろうか……」

いつもの勢いはどこへ行ったのか、最後は消え入るような声で俺にそう言った。

ああもう！　この先輩はもう！　何というか、その、可愛すぎるぞコノヤロウ！

「も、もちろんじゃないですか！　むしろ、俺からお願いします！　俺はもっと強くなりたい！　先輩と一緒にどこまでも！」
「あう！？　どこまでも！？」
「はい！」

そうだとも。先輩はこんな俺をずっと信じてくれて、助けてくれて、励ましてくれて……なのに俺は、先輩に何も返せていない。だから、今度は俺が恩返しを……って、違うな。俺がこの先輩と一緒にいたいんだ。

この……素晴らしい“藤堂サクヤ”って女性（ひと）と一緒に。

『うわー……マスターは無自覚にすごいこと言うのです……』

ん？　［シン］が呆れた表情で俺を見てる……。

そして。

「？　先輩？」
「あ、あうあうあうあうあうあうあうあう……」

先輩はその真っ赤な顔を両手で覆（おお）い隠し、しゃがみこんでしまった……。

どこまでも一緒に（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！
明日で第一章完結です！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

久しぶりの教室（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

［ゴブ美］から［シン］へとクラスチェンジを果たした次の日の朝、俺はテーブルに座りながら母さんが作ってくれた朝食を食べる。うん、美味い。

「ふふ、なんだか機嫌良さそうね」

キッチンで洗い物をしている母さんが、カウンター越しに俺を見て微笑んだ。

ああ、そういえば母さんにまだ見せてなかったな。

「［シン］、出ておいで」

そう呼んで［シン］を召還すると。

「ええ!?　ど、どういうこと!?」

『改めましてお母様！　［シン］なのです！　どうぞよろしくお願いしますなのです！』

「しゃべった!?」

驚く母さんに向かって［シン］はそう言うと、ペコリ、とお辞儀をした。

「あはは、実は先輩のおかげで、［ゴブ美］は［シン］にクラスチェンジしたんだ。もう……俺達を馬鹿にできる奴なんていないんだ」

俺は母さんに胸を張ってそう報告した。

いつも心配してくれた、母さんに。

「そう……そうなのね……」

母さんは、そんな俺達を見て、泣きながら微笑んでくれた。

◇

「はあ……今日はどうしようかな……」

学園に向かう中、俺は教室に行こうかどうか迷っている。

もう俺の精霊（ガイスト）は、一年生の中では最強だ。ハッキリ言ってしまえば、成長して最終決戦に挑む主人公達と同等の実力はある。

だから、アイツ等が俺を馬鹿にすることはもうできないっていうのは分かるんだけど……。

「というか俺、そもそもアイツ等が嫌いすぎるんだけど……」

うん、正直言って顔も見たくない。

特にあの木崎（クソ女）に至っては、ある意味殺されかけたわけだからな。

むしろ痛い目に遭わせてやりたい……って、アレ？　矛盾してる？

「まあ……教室に行かないと、見返してやることも仕返しすることもできないからなあ……」

なんてこと言ってるけど、ここまで強くなってしまった今、アイツ等なんてどうでもいい。

あんな奴等、これからやってくる主人公と一緒にわちゃわちゃするなり、イチャコラするなり好きにして、勝手にイベントこなしてりゃいい。

とはいえ。

「その前に……って、あれは……先輩だ！」

俺の前方に学園に向かって歩く藤堂先輩の姿があった。

「せんぱーい！」

俺は先輩に向かって手を振りながら駆け寄った。

「ん？　ふふ……望月くん、おはよう」

「先輩、おはようございます！」

朝の挨拶を交わすと、俺は先輩の隣に並ぶ。

「ところで望月くん、今日はさすがに教室に顔を出すのだろう？」

おおう……早速釘を刺されてしまった。

いや、確かにもうクラスチェンジも果たして圧倒的に強くなったし、もう授業をサボってまで領域（エリア）でレベル上げや疾走丸の回収作業をする必要はない……んだけど。

「そ、そのー……教室に行くのは明日からにしようかなー、なんて……」

俺は苦笑しながら頭を掻（か）く。

だけど。

「む、それはいかんぞ。このまま授業をサボってばかりいたら、本

当に留年してしまいかねない。ちゃんと授業は出るんだ」
「ですよねー……」
うん、やっぱり先輩が許してくれるわけないよなー……。
それに先輩がこうやってたしなめてくれるのって、俺の事心配してのことだし……。
「ふふ、本音を言えば、君があのクラスの連中にどう見返してやるのか、楽しみで仕方ないんだ」
そう言って先輩はクスリ、と笑った。
くそう、その笑顔で言われたら、期待に応えるしかないじゃんよ。
「あははー……わ、分かりました」
「うむ。とにかく、一度あのクラスで連中を見返したら、その後は私が父……学園長に頼んで君のクラス替えをしよう」
「は、はあ……」
「それに……あの女だけは絶対に許せん。しかるべき罰を受けるべきだ」
ああ、やっぱり先輩もあのクソ女だけは許せないよな。俺もだけど。
「ですね。それにせっかく教室に行くんです。自分がしでかしたこと、身をもって知ってもらわないと」
「ああ。なので私も君が教室に行くのに付き合おう」
先輩は俺を見てニヤリ、と口の端を持ち上げた。
「あはは！　ですね！」

ということで。

――ガラ。

俺は教室の扉を開けると……はは、久しぶりに教室にやって来たもんだから、クラスの奴等、全員驚いてやがる。

で、あのクソ女は……おーおー、完全に目を見開いてやがる。

あの件が表に出たら、下手したら退学モノだもんな。

そんな中。

「アレアレー？　ゴブリン、久しぶりじゃね？」

加隈は相変わらず考えなしにそんな台詞（セリフ）をのたまった。何一つ成長の跡が見られない奴だ。

当然俺は加隈を無視して席に着くが、今度はこれも相変わらずだけど悠木が俺の席の横を通ると。

「……何しに来たんだか」

などと呟（つぶや）いていった。コイツも何も変わってない。

「も、望月さん！　心配したんですよ！」

瞳を潤ませながら、クソ女が俺の元に駆け寄ってきた。

そして、触れそうになるほど顔を近づけてくると。

「……あのことを言ったら、分かってますよね？」

そう言って、ニコリ、と微笑みやがった。
というか、あの時はやられたが、クラスチェンジした今、その力はもう通用しねーよ。
ということで。
――ドン。
「キャッ！？」
「寄るなよクソ女」
俺はクソ女を突き押すと、よろめいて尻餅をついた。

久しぶりの教室（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次で第一章ラスト！
次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

最高の未来のために（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

――ドン。

「キャッ！？」

「寄るなよクソ女」

俺がクソ女を突き押すと、よろめいて尻餅をついた。

「な、何を……！」

「何を？　あんな真似をしておいて、オマエこそどういうつもりだ？　というか、目障りなんだよクソが」

吐き捨てるようにそう言うと、俺は興味がないとばかりにヒューズボックスを机にかける。

「テメエ！　ゴブリンのくせに木崎さんに何してやがる！」

ハッ！　加隈の奴、ここぞとばかりに絡んできやがった。

「何だよ。ひょっとしてオマエ、このクソ女好きなの？　趣味悪いな」

「っ！　この！」

とうとうキレた加隈は、自分の精霊（ガイスト）……［トリックスター］を召還した。

「オイ！　今なら土下座で許してやる！　でなきゃ、二度と学園に

来れない身体にしてやるぜ！」

オイオイ……本当にコイツ、主人公の仲間ポジかよ……。

「ハア……オマエ、精霊（ガイスト）を人に対して使ったら厳罰だって分かってるよな？」

「ハッ！　関係ねえ！　大体ゴブリンの言うことなんか、誰が信用するんだよ！」

などと加隈はほざいてるけど。

「なあ、委員長。コイツ、止めなくていいの？」

俺は呆れながら加隈を指差し、委員長……悠木に尋ねる。

「……さあ？　私には何も見えないけど？」

はは、見て見ぬフリって。

「失礼、望月くんはいるか」

「「「「「っ！？」」」」」

先輩、ナイスタイミング。

「む？　おい、君はなんで精霊（ガイスト）を出しているんだ？」

「へ！？　あ、その……「……彼は、私達に精霊（ガイスト）のステータスを見せてくれていたんですよ」……そ、そうそう！　最近俺、頑張ってるっす！」

悠木が助け船を出すと、加隈がそれに乗っかる。でも、さすがに

それは苦しすぎるだろ。

「そうか？　だが、その割には大して強くなさそうだが？」

口の端を持ち上げ、先輩は皮肉を込めて加隈に告げた。あはは、悔しいのか先輩睨んでやがる。

「ハハハ！　だ、だけど先輩が贔屓（ひいき）にしてるソイツより、圧倒的に強いっすけどね！」

ハア……コイツ、意趣返しのために俺をダシにしやがった。

「望月くん、そう言ってるが？」

先輩が嬉しそうに俺を見やる。

ですね。じゃあ、俺の精霊（ガイスト）を……［シン］をコイツ等に見せつけてやりますよ。

「来い。［シン］」

俺がそう呟（つぶや）くと、［シン］は俺達の、アイツ等の眼前に姿を現した。

「「「「「「はあああああああ！？」」」」」」

はは、［シン］の姿を見て驚いてやがる。

「オ、オマ！？　それ！？」

「ん？　あー、俺の精霊（ガイスト）、オマエ等が遊んでる間にクラスチェンジしたんだよ。ところで」

開いた口が塞がらない加隈にそう告げると、俺は先輩に向き直った。

「実はコイツが精霊で喧嘩売ってきたんですけど、俺が返り討ちにした場合はどうなりますか？」

「っ！？」

俺の言葉に、加隈が息を飲んだ。

「ん？　そうだな……さすがに向こうから手を出されれば、正当防衛ではないかな」

「そうですか……だってよ、どうする？」

俺は口の端を吊り上げ、加隈に向かって挑発するように嗤った。

「じょ、上等……っ！？」

『ふわあ……遅いのです。雑魚なのです』

目に留まらぬ速さで加隈の［トリックスター］の背後に回り込んでいた［シン］が、欠伸をしながらペタリ、と一枚の紙片を貼り付けた。

「な、何……『【縛】』……なあっ！？　う、動け……っ！？」

［シン］のその一言で、焦りと困惑の表情を浮かべながら加隈の奴と［トリックスター］はピクリとも動かなくなった。

これこそ……［シン］の持つ【方術】の力。

ありとあらゆる呪符を用い、立ち塞がる者を排除する唯一無二の

能力。

「さーて。で、どうする？　このままオマエをフルボッコにしてやってもいいんだけど？」

「あ……う……」

俺が一歩ずつゆっくりと近づくと、加隈の顔が少しずつ恐怖に染まっていく。

「……クッ！　この……っ！？」

「ふふ……さすがにそれは無粋というものではないのか？」

悠木が自身の精霊（ガイスト）……［ミーミル］を召還するが、その首元に先輩の［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）を突きつけられ、沈黙してしまう。

まあ、［シン］も［ミーミル］の背後に回ってるけど。

「さて……オイ、クソ女」

「っ！？」

「オマエに聞きたいんだけど、俺があのこと言ったら、何が分かるんだ？」

「……」

俺が尻餅をついたままのクソ女を見下しながら問いかけると、クソ女は唇を噛んで押し黙る。

コイツも気づいてるんだろう。今の俺には敵わないことを。

「ふふ、そろそろいいんじゃないか？」

先輩が微笑みながら俺の肩をポン、と叩いた。

「先輩……ですね」
「では、君もこんな教室にこれ以上いたくはあるまい。今日は“天岩戸(あまのいわと)”領域(エリア)に行ってみないか？」
「え？　先輩、それって……」

先輩が誘った領域(エリア)は“天岩戸”。
三年生の必修となっている領域(エリア)で……先輩が、主人公達と最後の戦いに挑む場所。

「ふふ、物足りないか？」

先輩が嬉しそうに問いかける。
だけど……これは俺にとって好都合だ。

だから。

「まさか。先輩と一緒なら、どこだって最高の場所ですよ！」
「あう！？　そそ、そうか！？　そうだな！？」
『ハア……またマスターが無自覚に藤姉さまの好感度を上げているのです。ねえ？　関姉さま』
『……（コクリ）』

顔を真っ赤にしながら挙動不審になる先輩に、呆れた表情を浮かべる［シン］と［関聖帝君］。
というか［シン］よ。なんでお前、そんなに［関聖帝君］と仲良さげなんだよ。

「ううう、うむ！　でで、では行こう！」
「はい！」

俺と先輩は、教室を出……ようとしたところで。

「ああ、そうだ」

後ろへと振り返った先輩が、クソ女を見据(みす)えた。

「今度から領域(エリア)では気をつけるんだ。何が起こるか分からないからな。例えば……突然、階段が塞がれるかもしれんしな」

「っ！？」

ニタア、と嗤(わら)う先輩を見て、クソ女は身体を震わせた。

あはは、先輩がオマエみたいなクソ女をいちいち相手にするわけないのにな。

もちろん、この俺も。

「ふふ……さあ、今度こそ行こうか」

「はい！」

凛とした笑顔を見せる先輩の隣を、俺は歩く。

これからの俺は、この優しくて、強くて、綺麗で、最高な先輩と共に歩いて……この世界の結末を変えるんだ。

先輩の悲しい結末を、ぶっ壊すために。そして。

――先輩と最高の未来を紡ぐために。

最高の未来のために（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて「ガイスト×レブナント」第一章完結です！

明日は先輩視点の幕間を四話投稿し、明後日からいよいよ第二章開幕！

またゲームのヒロインの一人が登場しますが……どうやらクソ女とは様子が違うようで？

ということで、次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一人ぼっちの彼と孤独の私①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

一人ぼっちの彼と孤独の私①

■藤堂サクヤ視点

最初は、ただの興味本位だった。

新入生が入学してきた次の日の放課後、あの初心者用の領域（エリア）の小屋の前で、一人の男子生徒が自分の頬を叩くと、扉を開けて中に入ろうとしていた。

「君、そこで何をしている？」

興味が湧いた私は、その男子生徒に声を掛けた。

普通、この領域（エリア）に入ろうとする生徒なんてこの学園にはいない。

何故なら、己を鍛えるには出現する幽鬼（レブナント）は弱すぎる上に、その規模も学園にある領域（エリア）の中で最小、手に入るアイテムも役に立たないものばかり。

つまり……我々生徒にとっても、何の価値もないのだ。

なので、今はせいぜい新入生に領域（エリア）を知ってもらうための見学にしか使われていない。

そんな場所に、この男子生徒が入ろうとしているのだから、不思議に思うのは自然なことだった。

「初心者用の領域（エリア）に入ろうとする生徒がいるなんて、珍しいな」

「そ、その、今日の授業でせっかく見学できたので、もっと中をよ

く見ようと思いまして……」

私の問い掛けに、緊張しながら答える男子生徒。

着ている制服の真新しさやその言葉から、どうやら新入生のようだ。

さらに尋ねると、やはり彼は新入生だった。

名前は、“望月ヨーヘイ”。

彼の答えに得心した私は、初心者用の領域（エリア）の探索に付き合ってみることにした。

危険はないとは思うが、それでも新入生が一人で領域（エリア）に入ろうというのだ。万が一ということもある。

それに……何故か分からないが、そんな彼がどうしても気になってしまったのだ。

彼は遠慮するが、私は少々強引に彼の手を引いて初心者用の領域（エリア）の扉をくぐった。

中に入ると懐かしさを覚えた私は、つい調子に乗って「関聖帝君」で現れる幽鬼（レブナント）を全て倒してしまった。

せっかく彼が初心者用の領域（エリア）の探索に来たというのに、だ。

一方で、そんな彼はと言えば、「関聖帝君」に見惚れているようだった。

確かに私の精霊（ガイスト）は、上級生である三年生を含めてもこの学園で並ぶ者はいないほどの強さを誇っている。

それは、この学園の者なら誰しもが知っていることだが……ふふ、それでも、こんな眼差しを向けられたら悪い気はしないな。

気を良くした私はガイストリーダーを取り出し、彼に［関聖帝君］のステータスを見せてあげた。

すると彼は、驚きながら感嘆の声を漏らすと共に、［関聖帝君］の弱点である【水属性弱点】について遠慮がちに尋ねてきた。どうやら、それを見てしまったことを気にしているようだ。

ふふ……彼女などはこの私を追い落とそうと必死なのに、彼ときたら逆に私を気遣うとは、な。

そんな彼に好感を持った私は、帰りは彼に幽鬼（レブナント）の相手をお願いした。

行きでやり過ぎてしまった罪滅ぼし的なものもあるが、それよりも彼の精霊（ガイスト）と、どんな戦い方をするのか興味を持ったのだ。

だけど、彼は少し悲しそうな表情を浮かべて戸惑っていた。

何かあるのだろうか……。

そして、私達の前に幽鬼（レブナント）……“ホーンラット”が現れると、彼は精霊（ガイスト）を召喚した。

そんな彼の精霊（ガイスト）の風貌は、“グラハム塔”領域（エリア）に出現する幽鬼（レブナント）……“ゴブリン”にそっくりだった。

彼の精霊（ガイスト）が戦闘を開始すると、彼の指示を受けて素早く、かつ的確にホーンラットを追い詰め、その手に持つ棍棒で何度も殴りつけ、ホーンラットは幽子とマテリアルに変わった。

そんな彼等の戦闘を見て私が最も注目したのは、彼と精霊（ガイスト）の信頼関係だった。

確かにその姿が現す通り、彼の精霊（ガイスト）の能力はゴブリンのそれだろ

う。

だが、自分達の能力を補うかのように、その立ち位置や戦法など、その動き全体が洗練されているように感じた。

そして、それ以上に彼は精霊（ガイスト）を信頼し、精霊（ガイスト）も彼を信頼する……まさに、精霊（ガイスト）使いと精霊（ガイスト）の関係の理想像だった。

「……終わりました」

でも、私の元へ戻って来た彼の表情は、どこか覚悟しているような、諦めているような、そんな表情だった。

胸が痛かった。

彼がそんな表情をしているのは、恐らく私が彼と精霊（ガイスト）に失望したとでも思っているのだろう。私の評価は全くの逆だというのに。

だから、私はただ素直な気持ちを彼に伝えた。

彼と、彼の精霊（ガイスト）に興味がある、その姿に好感が持てると。

すると……彼の瞳からぽろぽろと涙があふれ、ただ、感情のままに声を漏らした。

そんな彼の姿に私は驚き、必死でなだめた。私は彼を傷つけるようなことをしてしまったのだろうか、それとも、彼には慟哭（どうこく）してしまうほどの理由があるのだろうか……。

だが、泣き止んだ後の彼は、どこか憑き物が落ちたかのように表情が明るくなり、帰りの道中は見事な連携で現れる幽鬼（レブナント）を倒していった。

ただ……彼の戦い方が見事すぎた。

なので彼にその理由を尋ねると、返ってきた答えは驚くべきものだった。

まさか、生まれて初めて入るであろう領域（エリア）をたった一人で見学させられていただなんて。たとえそれが、この初心者用の領域（エリア）であったとしてもだ。

腹が立った。許せなかった。

そんな理不尽で危険な真似をさせた教師が、そんな彼を助けようともせず、ただ傍観していただけの、彼の仲間であるはずの新入生達が。

だから私は、彼に今後の領域（エリア）探索への同行について申し出た。

すると彼は一瞬驚いた後、嬉しそうに笑みを零（こぼ）した。そんな彼を思わず抱きしめたくなるほど可愛いと感じてしまったのは、彼には内緒だ。

ただ、彼からは、初心者用の領域（エリア）では一人で訓練するので、“グラハム塔”領域（エリア）からお願いしたいとのことだった。

まあ、今日見させてもらった彼の危なげない戦いぶりから、一人でも危険はほぼ無いだろうと判断した私はそれを了承した。

そして、私は彼と別れると早速お父様……学園長にかけ合った。

もちろん、彼の担任教師に対する処罰について。

話を聞いた学園長は激怒した。当然だ、万が一のことがあったらどうするつもりなのだ。

学園長はすぐに教頭と学年主任を呼び出し、今後の対応について調整した結果、まずは本人達から話を聞き、その上で担任教師の処分を決めることとなった。

次の日の朝、学園長以下で担任教師……“伊藤アスカ”に話を聞くが、あいまいなことばかりで要領を得ない。
ここで私が言っても良かったが、やはり彼本人の口から聞いてもらうのが一番だと思い、あえて黙っていた。

そして、担任教師にはＨＲのため一旦退席した後、今度は望月くんも交えて話を聞くことになったのだが、担任教師が教頭先生の隣に座り、彼がやって来た。
学園長が問い掛けると、彼は私を見て頷いた後。

「……はい」

と、ただ一言だけ答えた。

それを引き継ぐように私が説明すると、担任教師は観念したのか、やっと頭を下げた。
むしろここまではぐらかそうとする姿勢に、同情の余地はない。
それよりも、学園として彼のご両親に謝罪することこそが先だ。彼女の処分については、その後だ。

その日の放課後、私は初心者用の領域（エリア）の扉の前で、彼が出てくるのを待った。
中に入ってすぐに連れ出してもいいのだが、せっかく彼が一生懸命訓練しているのを邪魔できない。

それから待つこと二時間。夕方六時を迎えようとした時、ようやく彼は扉を開けて出てきた。
ふふ……その時の彼のキョトンとした表情はなかなか可愛かったな……。

その後、私は彼と一緒に彼の家へと向かうと、学園長達がまさに謝罪をしている最中だった。

だけど、学園長達を叱りつける望月くんのお母様は、もう彼を学園に行かせないと宣言した。それは、大切な息子の安全を心から願う、母親の姿そのものだった。

……せっかく望月くんと知り合えたのに、このままお別れになってしまうのはつらい、な。

そう考えた私だったが、それでも、お母様のおっしゃることももっともだ。私は彼の背を押し、その行方を見守った。

するとどうだろう……彼は、こう言ったのだ。

「……俺、これからも学園に通いたい。じゃないと俺は、もう強くなれなくなってしまうから。藤堂先輩が、信じてくれたように」

その言葉を聞いた瞬間、私の胸がかあ、と熱くなった。

彼は、自分自身が強くなる理由として、この私を求めてくれたのだ。

こんなに嬉しいことがあるだろうか。

学園の生徒達は、私のことを学園長の縁故で生徒会長になったと蔑(さげす)み、かといって私の精霊(ガイスト)に敵わないからと、ただ遠巻きに眺めながら陰口を叩く始末。

そんな私が、彼から求められている……。

私は胸襟(むなえり)をキュ、と握りしめ、心に誓った。

――必ず、彼が望むように強くしてあげよう、彼を精一杯支えてあげよう、と。

一人ぼっちの彼と孤独の私①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一人ぼっちの彼と孤独の私②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

一人ぼっちの彼と孤独の私②

■藤堂サクヤ視点

それからというもの、毎週土日はいつも彼と“グラハム塔”領域（エリア）での攻略にいそしんでいた。

本当は平日も“グラハム塔”領域（エリア）に行ったほうがいいのだが、彼がいまだに初心者用の領域（エリア）での訓練を優先していることと、私自身も生徒会の業務などがあるため、一緒にいることができない。

少々もどかしい思いをしつつも、それでも、昼休みはいつも彼と昼食を共にしているし、休日だって逢えるのだ。あまり贅沢も言えない。

……ただ、中間テストの彼の成績には少し危機感を覚えてしまった。

これは、この私が彼の先輩として、しっかりと勉学についても導いてやらねばな。

そ、それで……彼が頑張ったのなら、相応のご褒美も、その、用意してやらないと、だな、うん。

そんな彼のテスト結果を見た後、私はお父様からお手伝いを頼まれ、土曜日は楽しみにしている彼との領域（エリア）攻略に付き合えなくなってしまったことを伝えた。

私も断腸の思いではあるが、こればかりは仕方ない。

すると彼は、とても寂しそうな、悲しそうな表情を浮かべた。く

そ……そんな表情、反則だろう。

「あ、あああああ！？　そ、その、よ、用事が早く終わり次第……た、多分昼の二時過ぎには私も来るから！」

結局私は彼に負けてしまい、そんな風に約束してしまった……。
お、お父様には悪いが、できる限り早く切り上げてもらうとしよう。うん、午前中で終わるように。

そして土曜日。私はお父様に頼んでいた通り、用事は午前中で終わった。
あの時はお父様に苦笑されてしまったが、お父様は快く了承してくれた。

ふふ……お母様もそんな方だったから、かもしれないな。
といっても、私はお母様の子どもなのだから仕方ない。

私は喜び勇んで学園に来ると、真っ直ぐ“グラハム塔”領域（エリア）の扉へと急いだ。

ふふ、こんなに早く合流したら、彼は驚くだろうな。だが、その後はいつものように、あの笑顔を私に見せてくれるかな……。
胸を弾ませ、私は一直線に第五階層を目指す。

その時。

「あっ！？」

第五階層へと向かう階段の前で、ちょうど階段から降りてきた女子生徒に出会った。

この女子生徒……確か望月くんと同じクラスの生徒だったな。
だが、どういうことだ？　休日は彼と私しかこの領域（エリア）にはいないはずだし、他の生徒に利用許可を出したとも聞いていない。

「待て」

私は無言でその場を立ち去ろうとするその女子生徒を呼び止め、話を聞くことにした。

「君は何故こんなところにいる？」
「あ、そ、その……実は！　大変なんです！」

するとその女子生徒は、一瞬戸惑うような仕草をしたかと思うと、突然私に詰め寄った。
その行動といい不審に思うが、まずは彼女の話を聞いてみよう。

「む？　大変とは？」
「そ、それが、彼……同じクラスの望月ヨーヘイくんが、第二十一階層で閉じ込められてしまったんです！」
「はあっ！？」

彼女の言葉を聞き、私は驚きのあまり声を上げた。
だ、だが、彼には第五階層までしか行かないよう、釘を刺しておいたはず！　なのに、どうしてそんな、今まで一度も行ったことがない階層に！？
しかも、なんで閉じ込められるような事態に陥っているのだ！？

「ど、どういうことなのだ！？　彼は……彼は無事なのかっ！？」
「キャッ！？」

頭の中が混乱を極め、私は彼女の両肩を思い切りつかみながら何度も揺すった。

「そ、それが！　彼がどうしても上の階層に行きたいと言い出して！　私も止めたんです！　ですが私の制止もきかないでどんどん先に進んで、それで、彼が第二十一階層へと階段を昇ると、突然階段が崩れて離ればなれになってしまって！」

彼女は私に揺すられながらも必死に説明するが、今は理由なんかどうでもいい！

早く……早く助けに行かないと、彼が……望月くんが死んでしまう……！

「嫌だ！　そんなのは嫌だ！」

「アウッ！？」

私は彼女を突き飛ばし、階段を全速力で駆け上がる。

そんな私の前に、幽鬼（レブナント）共が立ちはだかるが。

「邪魔だあああああああああ！」

［関聖帝君］の青龍偃月刀でまとめて薙ぎ払いながら、私はがむしゃらに突き進む。

頼む……頼む……！　望月くん、無事でいてくれ！

お願いだから……この私を、一人にしないで……！

私は必死に願いながら、第二十一階層を目指す。

そして、第十二階層の階段を昇り切った私の目の前に……あろうことか、ストーンウルフが彼の首元に今にも飛びかかろうとしてい

た。

やらせるか！　彼を……望月くんを、貴様のような下衆な牙でやらせてなるものかあああああ！

「オオオオオオオオオオオッッッ！」

私は一気にストーンウルフに詰め寄ると、［関聖帝君］の青龍偃月刀を一閃させた。

――斬ッッッ！

ストーンウルフは真っ二つになって幽子とマテリアルへと姿を変える。

その向こうには……汚れ、傷つき、そして、私を見つめて安堵の表情を浮かべる彼の姿があった。

「望月くん、大丈夫か！」

私が慌てて駆け寄るが、その前に彼の膝が崩れ落ちる。

絶対に、受けとめてみせる……！

私は滑り込むように彼の前でしゃがむと、その身体を慈しむように優しく抱き留めた。

「全く……無茶をして……！　本当に、心配したんだぞ……！」

良かった……彼は、生きていてくれた……！

そう思うと、胸の奥からこみ上げてくるものがあった。

だけど、彼の前で無様な姿を見せることはできない。私は必死で

こらえるが……それも束の間、彼は気を失ってしまった。

「ふ、ふふ……本当に、無茶をして……」

一滴（ひとしずく）の涙が、私の頬を伝う。

私は彼の顔を優しく撫でた後、彼を背負って“グラハム塔”領域（エリア）を後にした。

早速保健室へと運び、彼の怪我の手当てをすると、ゆっくりとベッドに寝かせる。

彼はすう、すう、と気持ちよさそうに寝息をたてていた。

「ふふ……私の気持ちも知らないで……」

彼の髪を撫でながら、その寝顔を見つめる。ふふ……可愛いな……。

すると。

「んう……」

彼が、ゆっくりと目を覚ました。

さあて……彼に説教しないと気が済まないな。

一人ぼっちの彼と孤独の私②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日よ夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一人ぼっちの彼と孤独の私③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

一人ぼっちの彼と孤独の私③

■藤堂サクヤ視点

その後、私はこれでもかというほど説教した。この私をここまで心配させたのだから当然だ。

だが、それ以上に彼から聞かされた内容は衝撃的だった。

まさか……あの女が、望月くんを無理矢理第二十一階層へと連れ出し、さらに階段を封鎖して閉じ込めてしまったとは……！

私はギリギリと歯噛みすると、あの女を八つ裂きにするために保健室を飛び出そうとした。

だが、彼に止められてしまい、私は思わず詰め寄ってしまった。

理由を尋ねると、彼は自分が強くなって見返すことで、今日のあの女の行為を後悔させてやるのだと、そう言った。

到底納得できる話じゃない。だが、他ならぬ彼がそう決めたのだ。

私は従うほかなかった。

私は、つい皮肉を込めて彼に失言をしてしまった。

私は、部外者である、と。

すると彼は、今にも泣きそうな表情を浮かべ、私に縋りついてきた。

部外者なんて言わないで欲しいと、必死に訴えながら。

ああ……私は彼に、なんてひどいことを言ってしまったのだろう。

仮に私が彼から同じ言葉を投げられてしまったら、それこそ私も平静でいられるはずがない。なのに私は……！

私は自分の失言を必死に否定すると、彼はその瞳から大粒の涙を零した。

当然だ。彼はあの“グラハム塔”領域でクラスメイトに裏切られ、その心をズタズタにされてしまったのだから。

「望月くん……っ！」

思わず彼を抱きしめる。

強く……ただ、強く。

せめて彼の悲しみのほんの一部でも、受け止めてあげるために。

しばらくすると彼は泣き止み、私の背中をポンポン、と叩いて顔を上げた。

その涙で滲んだ彼のガーネットのような瞳は強さと意志を湛え、ただ……綺麗だった。

あんなことがあったのだ。私は今日の領域攻略はもう中止しようと伝えると、初心者用の領域だけ行かせて欲しいと頼んできた。

正直、初心者用の領域ですらも行かせたくなかったが、それ以上にそこまでしてあの領域にこだわる彼が気になった。

尋ねると、望月くんは私に彼の精霊のステータスを見せてくれた。

異常だった。

『敏捷』のステータスだけが、この私の［関聖帝君］を凌駕する

ほどの能力を有し、それ以外はこれだけレベルアップしているというのに、ほとんど成長が見られなかったのだから。

そして、彼は理由を教えるので一緒について来て欲しいと言った。もちろん私に否やはない。結局、彼と一緒に初心者用の領域（エリア）へと向かった。

そこで、また私は驚くべきものを目の当たりにした。

なんと、初心者用の領域（エリア）の何もない部屋に、さらに別の領域（エリア）へと繋がる扉が現れたのだから。

しかもその扉の先は、まるで楽園のような世界が広がっており、そこに似つかわしくないほど禍々しく、圧倒的な強さの幽鬼（レブナント）がいたのだ。

彼に腕を引かれ、幽鬼（レブナント）をやり過ごすと、私はまた彼を叱った。だが、彼は私に叱られる義務がある。

本当に……この私に心配ばかりさせて……。

さらに先へと進み、彼に連れてこられた場所は、行き止まりだった。

そこに、木箱がポツン、と置かれていた。

私はその木箱に近づき、蓋を開けると……中には疾走丸が入っていた。

そして……この時初めて、彼の精霊（ガイスト）の異常なステータスの秘密を知った。

だが、彼がしていることはあまりにも無謀で、あまりにも無茶で、あまりにも苦痛を伴うものだった。

危険と隣り合わせながらあの幽鬼（レブナント）をやり過ごし、この何の変哲も

ない疾走丸を手に入れる。
それも、めまいがするほどの膨大な数をこなして。
彼は……彼は、誰にも負けない心の強さを持ち合わせていたのだ。
この私すら、到底敵わないほどに。
ふふ……私も負けていられないな……。
そんな素晴らしい彼を見つめながら、私も決意を新たにするとともに、そんな彼の隣に立てることに幸福を感じていた。

◇

それからというもの、私は彼が初心者用の領域（エリア）に行く時も常に同行するようになった。
まあ、あんな危険な場所で彼一人にさせるわけにはいかないからな。
……本音は、彼と共にありたいから、だが。
そして、彼の精霊（ガイスト）が幾度目かの疾走丸を飲み込み、ステータスを確認すると……とうとう、『敏捷』のステータスが“Ｓ”に到達した。
嬉しかった。彼のあり得ないほどの努力が報われたのだ。
でも、それでも彼にとっては通過点でしかない。
次の目標はクラスチェンジ。彼曰（いわ）く、レベル五十でクラスチェンジ可能ということだから、後は“グラハム塔”領域（エリア）で幽子を集めるだけだ。

望月くんと私は、意気揚々とこの領域（エリア）の出口を目指す。
嬉しさのあまり戻すのを忘れてしまった、［関聖帝君］も一緒に。
あの幽鬼（レブナント）が待ち構える十字路にたどり着き、いつものように幽鬼（レブナント）が背中を向けている隙に通過しようとした瞬間、幽鬼（レブナント）がいつもと違う挙動を見せた。
その時、私は自分の過ちに気づいた。

「ふふ……もちろん私だって易々とやられるつもりはない。だから……君は逃げるんだ」

死を覚悟し、私は彼に笑顔でそう告げた。
せめて……この大切な後輩が逃げ切る、その時間を稼いでみせる。
そう思って幽鬼（レブナント）へと向き直ると……何故か彼は逃げようとせず、私の隣に並び立った。

「……俺は先輩が一緒じゃない限り、絶対に逃げませんから。逃げるなら、先輩と一緒ですから」
「望月……くん……」

彼の決意のこもった言葉に、私は彼の名をポツリ、と呟く。

それは、彼に対する申し訳なさで。
彼が死んでしまうかもしれないという不安で。
彼が私の指示に従ってくれない怒りで。
そして……彼の私への想いに対する嬉しさで。

それ以上、私はもう何も言えなかった。

ただ……彼は……望月くんは、この私が命に懸けても守ってみせ

る！

一人ぼっちの彼と孤独の私③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一人ぼっちの彼と孤独の私④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

一人ぼっちの彼と孤独の私④

■藤堂サクヤ視点

彼は……望月くんは、この私が命に懸けても守ってみせる！

そう決意した矢先、彼は背負っているカバンの中から何かを取り出すと。

「先輩……俺と［ゴブ美］がスピードを活かしてアイツに仕掛け、木箱のある行き止まりへと誘導します。先輩は俺達の後を追いかけ、そして……合図をしたら通路の壁を壊して、アイツが逃げられないように、封鎖してください」

「望月くん！？」

彼からの突然の指示に、私は驚きの声を上げる。

だってそうだろう？　この絶望的な状況の中、彼はまるでこの事態を想定していたかのように、具体的に指示を出したのだから。

そして先程カバンの中から取り出していたものも、そのための秘策のようなものだろう。

一体彼は、何手先まで想定しているというのだろうか……。

なら……私は彼に従うのみ。

彼を見つめ、私は静かに頷く。

そして彼は、精霊（ガイスト）と共に無謀にもあの幽鬼（レブナント）へと突っ込んでいった。

今すぐ彼等を止めたかったが、これも彼の作戦なのだろう。私は

ただ、唇を噛みながらただその様子を見つめていた。

幽鬼（レブナント）が迎え撃つために魔法を発動し始めると、彼等は急に反転し、行き止まりへと繋がる通路へと逃げ込んだ。

おっと、ここでジッとしていたら魔法に巻き込まれてしまう。私は慌てて彼と反対側の通路の陰に逃げ込んだ。

すると……目の前に氷結の嵐が巻き起こり、先程まで私達がいた場所が、一面氷に覆われた。

思わず私は息を飲む。だが、その間にも彼等は行動を起こし、あの行き止まりへと真っ直ぐに駆けていく。

そしてその後を、幽鬼（レブナント）は浮遊しながら追いかけて行った。

私もすぐに気を取り直し、彼等と幽鬼（レブナント）の後を追っていく。

彼等が行き止まりへと到着すると、彼の精霊（ガイスト）がカバンの中からペットボトルを取り出し、その中身の液体を周囲にばらまいた。

彼が精霊（ガイスト）の元に追いつくと、執拗に追いかけてきた幽鬼（レブナント）を見据え、目と鼻の先まで接近したところで、彼はスライディングの要領で床を滑り、幽鬼（レブナント）の背後を取った。

そしてそのまま、この私の元へとそのまま滑り込んでくると。

「おおおおおおおおおおおッッッ！」

私は彼から指示された通り、［関聖帝君］の青龍偃月刀で四方の壁を切り崩し、瞬く間に通路を瓦礫で覆って、幽鬼（レブナント）を閉じ込めた。

私は思わず歓喜の声を上げるが、彼は「まだです！」と叫ぶと、瓦礫の傍に行ってポケットからライターを取り出した。

着火し、液体の傍へと近づけると……その液体を伝って瓦礫の向こうへと炎が伸びて行った。

「望月くん、これは……？」
「灯油、です」

彼に問い掛けると、そう答えた。
そこで、私は初めて気づく。
彼は万が一に備え、この幽鬼（レブナント）の特性を研究した上で対策を練り、この領域（エリア）に挑んでいたのだ。

疾走丸を手に入れる、ただそれだけのために。

彼は……彼という男は、どこまでこの私の胸を打ち震わせるのだろうか。

「本当に……君という男は……！」
「わっ！？」

私は興奮のままに彼の頭をくしゃくしゃに撫でると、一瞬驚きの声を上げ、彼はすぐに嬉しそうに目を細めた。
ああ……彼は、なんて誇らしい後輩なのだろうか。

彼から指示を受けた後、私達は出口を目指すが、彼はまたこんな失態を犯してしまった私に、変わらず尊敬の眼差しを向けてくれた。
私は、もっと彼の傍（そば）にいたい。これからも、ずっと……。
そう彼に伝えようとすると、無粋にもあの幽鬼（レブナント）がボロボロの姿で背後から私達に襲い掛かってきた。

彼の、予想通りに。

なので、私は三叉路の陰に控えさせていた［関聖帝君］によって、幽鬼（レブナント）を【一刀両断】で何度も切りつけた。

幾度目かの斬撃を与えた時、とうとう幽鬼（レブナント）が崩れ落ちると、彼と私に幽子が流れ込み、同時に大量のマテリアルが床に散らばった。

ガイストリーダーを確認すると……［関聖帝君］のレベルが一つだけ上がった。

クラスチェンジをしてしまうと、レベルアップに必要な幽子量が桁違いに跳ね上がり、もはや学園でのレベルアップはほとんど望めていなかった私にとって、これは予想外だった。

ただ、それだけあの幽鬼（レブナント）が強敵だったということだろう。

彼も、どうやらクラスチェンジに必要な、レベル五十に到達したようだ。

私は彼の傍（そば）に寄り、クラスチェンジを勧めると、彼と彼の精霊（ガイスト）は嬉しそうにクラスチェンジの儀式を行った。

彼の精霊（ガイスト）が幽子の渦に包まれる中、彼は期待を込めた瞳でただジッと眺めている。

私も、彼の望みが叶うように密かに祈りながら、渦と、彼を交互に見つめ続けた。

その渦が少しずつ小さくなっていき、いよいよ精霊（ガイスト）が姿を現すと……何と、ゴブリンだった姿から一変し、冠と道士服を着た少女になっていた。

そんな精霊（ガイスト）を見つめる彼の瞳から涙が溢（あふ）れ、精霊（ガイスト）もまた涙を零（こぼ）す。

「［ゴブ美］いいいいいいいい！」

『マスタアアアアアアアア！』

そして……彼と精霊（ガイスト）が嬉しそうに抱き合った。

ふふ……本当に、よかった……。
私は零れそうになる涙を我慢し、祝福の言葉と拍手を送った……って。

「「しゃべったあああああああああ!?」」

◇

「ふふ……本当に、彼は予想外のことばかりだ」

部屋の椅子に腰掛けながら、私は彼のことを思い出しては口元を緩めていた。

これからは正式に彼と共に領域攻略もできるし、それに、“グラハム塔”領域を除けば、一年生の間に上級生の必修領域を、二年生である私と共に踏破しても成績としてカウントされるからな。

だが。

「か、彼も、この私と、どどど、どこまでも、だなんて、なな何を言っているのだか……」

などと憎まれ口を叩いてみるものの、あの言葉を何度も反芻している自分がいる。

「お母様……また、彼を紹介いたしますね」

机に立てかけてある、お母様と私が映った写真を眺め、そう呟く。

そのためにも。

「私は、強くなる。彼の隣にどこまでも居続けるために……お母様を、取り戻すために」

一人ぼっちの彼と孤独の私④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日からは第二章！
主人公が転校して来るまでの一学期の期末テスト～夏休み終了までのエピソードになります！

ということで、第二章は明日の夜更新！
お楽しみに！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

サンドラからの果たし合い（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第二章、開幕です！

サンドラからの果たし合い

『ガイスト×レブナント』

このゲームは、一年生の二学期に“国立アレイスター学園”に転校してきた主人公が、仲間達と共に悩み、葛藤し、乗り越えていきながら成長し、この学園……いや、世界の謎に挑むジュブナイル学園ファンタジーＲＰＧである。

「……ってことは、もう穴が開くほど『攻略サイト』見てるから分かってるんだけど……」

そう呟きながら、俺は思わずうなだれる。

そして俺はそのゲームに登場するクソザコモブっていう位置付けで、主人公が転校早々、これでもかとばかりにザコムーブをかましてアッサリ倒される……まあ、お決まりのヤラレキャラだ。

藤堂先輩や『攻略サイト』の力を借り、おかげで［ゴブ美］から［神行太保］……［シン］にクラスチェンジして、むしろ俺達は最強クラスの能力を手に入れはした。

だからもう、俺はクソザコモブと馬鹿にされることもないし、ゲームみたいに主人公にアッサリやられるなんてこともないはず。

ということで、俺を馬鹿にした連中を見返すって目的は果たしたわけだけど……。

「……ここがゲームの世界なら、先輩は……」

そう、俺の尊敬する先輩が、俺が二年生の時のクリスマスイブ、主人公に倒され、そして……死んでしまう、ということだ……。

「まあ、そんなことさせるつもりはないけどな」

［シン］を手に入れたあの日、俺は心に誓ったんだ。

俺のクソみたいなフラグをへし折った今、先輩の破滅フラグもバッキバキにへし折ってやると。

そのためには。

「ウーン……とにかく、ゲームの物語が始まるのは二学期からだし、それまでに“ぱらいそ”領域（エリア）みたいに、二周目からしか入れないあの領域（エリア）を攻略しておいたほうがいいだろうなあ……」

『攻略サイト』によれば、真のラスボスを倒すために用意された五つの領域（エリア）。この領域（エリア）を攻略すれば、真のラスボス戦が有利になる。

というか、真のラスボスのステータス見たけど、シャレにならん。なにせ、物理攻撃を除く【全属性無効】スキル持ってやがるんだから、手に負えない。

とはいえ、物理特化型でないと勝負にならないのかといえばそうでもなく、例えば［シン］の【方術】や［関聖帝君］の【一刀両断】【千里行】なんかは、物理や各属性とはまた別のカテゴリー、いわゆる『特殊スキル』に当たる。

なので、その『特殊スキル』を多く持つキャラが有利ってわけだ。

そして、皮肉なことにその『特殊スキル』を最も多く手に入れることができるのが、主人公だ。

「まあ……とにかく五つの領域（エリア）のうち最優先で攻略すべきなのは、“アルカトラズ”領域（エリア）だろうなあ……」

うん、先輩のことを思うなら、この領域（エリア）は絶対に攻略しないといけない。

残り四つの領域（エリア）も攻略したいが、それは来年のクリスマス前までに充分に間に合う。

でも充分に間に合う。

まずは……物語の始まる二学期までに攻略を終えておかないと。

でも。

「くあああ……夏休みは、全部先輩との領域（エリア）攻略に充てることになりそうだ……！」

いや、もちろん先輩とずっと一緒にいられるわけだから、俺は最高に嬉しいよ？

だけど……せっかく夏休みなんだから、その……先輩と遊びに行ったりしたいし？

なにせ入学してからこれまで、ひたすら［シン（ゴブ美）］を強くするためだけに時間の全てを費やしてたからなあ……って、ええい！　こうなったら速攻で“アルカトラズ”領域（エリア）を攻略して、先輩と遊び倒してやる！

「……よっし！」

俺は気合いを入れるために両頬をパシン、と叩くと、席を立ち上がろうとして。

「……それで、お前はまだいるのかよ……」

目の前にいる同じクラスの女子でメインヒロインの一人、“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”……通称“サンドラ”が仁王立ちしながら俺をジッと睨みつけていた。

彼女はルーシ帝国からやってきた留学生で、輝くような金髪をツインサイドテールにまとめ、アクアマリンの瞳とルーシ人らしく妖精のように整った顔立ち、肌も先輩に負けないくらい透き通るような白さだ。

ただ……残念なことに、彼女は背もチンチクリンで、それに比例して絶壁なのだ。今後成長する可能性を一切見いだせないほどに。

まあ、当然需要もあるし、俺も嫌いじゃない……すいません、好き寄りの好きです。

「もちろんですワ！　ワタクシと勝負するんですのヨ！」

で、彼女は独特のイントネーションで俺に絡んでくるんだけど……正直、俺が一週間前にこの“一一三”にクラスを変わってからずっとだ。

理由？　知らん。

「ハア……で、お前はなんで毎朝こうやって俺に勝負だの言い出すの？」

「エ……！？　そ、それハ……ひ、秘密ですワ！」

とまあ、こんな感じではぐらかしやがる。

……いや、これと似た展開、主人公が二年生になった始業式の日のイベントであったなあ。

などと考えるが、そもそもまだ物語すら始まってないし、俺は主人公じゃないし、それはないな、うん。

「大体、勝負って何するんだよ。精霊（ガイスト）での喧嘩は禁止されてるだろ」
「モチロン、そんなことは分かってますわヨ！　そうではなくて、“グラハム塔　”領域（エリア）の攻略進行度だったり、テストの結果だったり、総合的にですワ！」

おおう……確かにそれなら、互角の戦いになりそうだ。
何より、領域（エリア）に関しては『攻略サイト』もある分、俺が圧倒的に有利だが、学力に関して、俺は勝つ自信がない。

いや、それよりもこの提案……。

「……ひょっとして」
「？　なんですノ？」
「……いや、いい」

俺の呟きを拾った彼女……サンドラが問い掛けてきたが、俺はかぶりを振ってあいまいに返事した。

これ……やっぱり、サンドラ用のイベントに突入しちまってるじゃんよ……。

サンドラからの果たし合い（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩との楽しい息抜き（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

先輩との楽しい息抜き

「む……望月くん、どうかしたのか？」

“グラハム塔”領域（エリア）の第五十三階層。

藤堂先輩の精霊（ガイスト）、［関聖帝君］が目の前の幽鬼（レブナント）を【一刀両断】にすると、心配そうに俺の顔を覗（のぞ）き込んだ。

「あ、ああいえ、ちょっと……」

ウーン……さすがにサンドラのイベントについて先輩に相談するわけにもいかないし、どうしたものか……。

などと考えていると。

「うむ……今日の領域（エリア）攻略はここまでとしよう。まあ、そもそも［シン］ならこの“グラハム塔”領域程度、私の助言などなくとも、簡単に踏破できるだろうしな」

そう言って、先輩が苦笑した。

「そ、そんなことないですよ！　先輩がこうやって色々と教えてくれて、導いてくれるからこそ、こんなに簡単にここまで来れたんです！」

「あう！？　……まま、全く、君はすぐにそんなことを……（ゴニョゴニョ）」

俺は先輩から「もう同行しない」って言われたくなくて、色々と理由をつけて必死に訴えると、先輩が顔を赤くしながら何かを呟い

た。

『うわー……相変わらずマスターは悪いオトコなのです』

『（コクコク）』

「コラ、そこの［シン］と［関聖帝君］、そんな誹謗中傷は止めるように」

だけど……サンドライベが始まってしまった以上、何かしらの対策を考えないと。

今日は大人しく家に帰って、もう一度『攻略サイト』を読んで検討するかー……。

「と、とにかく、今日のところはここを出ましょう」

「う、うむ、そうだな」

ようやく復帰した先輩と、俺は出口を目指した。

その途中で。

「そ、それでだな！　その……よ、予定が全てなくなってしまい、時間に余裕ができてしまっただろう？　あ、甘いものを食べると、つつつ、疲れが取れるというか……」

下の階層へと降りる階段で、先輩が俯（うつむ）きながら何か言っている。

だが、俺はどこぞの主人公のように鈍感系ではないのだ。

「あはは、そうですね。せっかくですし、スイーツでも食べに行きましょうか」

「！　う、うむ！　そうだな！　そうしよう！　そうなると駅前の“ルフラン”だな！」

俺がそう提案すると、先輩はぱあ、と満面の笑みを浮かべた。超可愛い。

ということで、俺達は駆け足でこの領域（エリア）を出た。

◇

さて……この“ルフラン”、実はこの界隈ではかなり有名なカフェだったりする。

というのも、ここのシェフは世界的なコンクールで金賞を何度も受賞するほどのパティシエで、しかも値段もリーズナブル。俺達のような学生でも気軽に利用できるのだ。

そして、『攻略サイト』によると、主人公のデートイベでここに来ると、チョイスするスイーツ（三択）によってヒロインの好感度が上がる仕様らしい。

「ふふ♪　どれにしようかな♬」

俺はチラリ、と見やると、先輩はメニューを眺めながら口元をゆるっゆるにしていた。

……先輩は、どんなスイーツが好みなんだろう。

もちろん俺も好感度を上げるために積極的に狙いにいきたいんだけど……そもそも、『攻略サイト』に先輩に関するデートイベ情報は載っていない。

準ラスボス設定である先輩とのデートイベは存在しないんだから、当たり前なんだけど

「ん？　君はまだ決まっていないのか？」

「え、ああ、ええと……そうですね……」

不思議そうな顔をした先輩に尋ねられ、俺は慌ててメニューを見る。

ふむ、さて困ったぞ。

「じゃ、じゃあこのイチゴショー……」

メニューを指差し、イチゴショートを選択しようとすると、先輩が何故か悲しそうな表情を浮かべた。わ、分かりやすい……。

「……トはやめて、コッチの……」

俺はメニューにあるスイーツ達の上を指でゆっくりとなぞっていくと、先輩は和栗のモンブランのところで目を見開いた。

「……モンブランにします」

「う、うむ！　そうか！」

はい、モンブランが正解だった模様。

俺は店員さんを呼んで注文すると、店員さんはカウンターの向こうへと入って行った。

「それで……新しいクラスはどうだ？」

「あ、はい。すごく雰囲気は良くなりました」

そう、クラスチェンジで生まれ変わった［シン］によって、俺はクソ女をはじめ、一ー二の連中を見返してやった。今でも、あの時の連中の驚きと悔しそうな表情が目に浮かぶ。

で、先輩が学園長に掛け合ってくれて俺は一ー三にクラス替えすることになった。

一ー三のクラスメイト達も、俺の噂は当然知っているのでかなり敬遠されてはいるんだけど、それでもクラスメイト達の視線は蔑(さげす)むものじゃなくて、むしろ同情に近かった。

この辺りは、あのクソ女がやらかしたことも明らかになったから、ではあるんだけど。

ん？　クソ女？

アイツは晴れてこの学園からいなくなった。というのも、さすがにクソ女はやり過ぎたのだ。

あの教師がやったような初心者用の領域(エリア)での一件でも大概なのに、“グラハム塔”領域(エリア)での置き去りは殺人行為に等しい。

なので、事態を重く見た学園長だったが、クソ女の将来性と更生への期待も込めて、退学ではなく無期限停学処分にした。もちろんそれは、学園の生徒達にも公表して。

するとクソ女は、そのまま停学処分を甘んじて受けるのではなくて、学園を退学して、別の精霊使い(ガイスト)を養成する学園へと転校していったのだ。

いきなりゲームのメインヒロインで、最強の回復魔法使いである未来の聖女の退場に俺は……うん、何とも思っていない。というか、主人公だってあんなクソ女がいても迷惑だろ。

それよりも、一ー二と一ー三で、ここまで生徒の人間性が違うのって、普通にヤバイと思います。

……いや、一ー二の生徒が異常なのかもしれない、な。

「？　望月くん？」

「へ？　あ、ああいえ、何でもないです」

「そうか？　おっと、どうやら来たようだぞ！」

ポットに入った紅茶と一緒にスイーツを運ぶ店員さんを、先輩は真紅の瞳をキラキラさせながら見つめ……いや、凝視する。

店員さんもそんな先輩に苦笑しながら、テーブルにカップとポット、そしてスイーツを丁寧に置いてくれた。

「へえ、先輩の桃のタルト、美味しそうですね」

「ふふ、そうだろう？　も、もちろん、シェアしても構わないんだぞ？」

はい、つまりモンブランをシェアさせろってことですね？　分かります。

俺はニコリ、と微笑むと、無言でモンブランをス、と先輩の前へ差し出した。

「む、むむ、い、いいのか？」

「もちろんです。先輩の感想も聞きたいですし」

「そそ、そうだな！　うむ！」

先輩は最高の笑顔を浮かべながら、フォークをモンブラン……の上にある和栗に思いっ切り突き刺した。

どうやら先輩は、スイーツに対して遠慮がないらしい。

「っ！　お、美味しい……！」

……まあ、こんな先輩の可愛い姿を見れたんだから、和栗の一つや二つ、全然安いものだけど。

それから俺と先輩は、お互いのスイーツをシェアしながらカフェ

での時間を楽しんだ。

先輩との楽しい息抜き（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

精霊の添い寝（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

精霊の添い寝

「さて……それじゃ、サンドラのイベントを確認しようか」

風呂にも入り、後は寝るだけ（勉強？　ナニソレ？）となった俺は、スマホから『攻略サイト』を開いて彼女のイベントを確認する。

まあ、簡単に要約するとこうだ。

貴族の生まれという境遇から常にトップにいることを求められ、プレッシャーに押しつぶされそうになっている彼女は、二年の始業式の日に一年生最強にまで成長した主人公に勝負を挑む。当然、俺に言ったように領域（エリア）攻略や勉強の成績によって。

で、ここで主人公が勉強のステータスを上げて一学期の中間テストと期末テストに勝利し、かつ、領域（エリア）の攻略も先に進んでいたら、晴れてサンドラは闇堕ちする仕様だ。

イベントはここからが本番で、闇堕ちしたサンドラは幽鬼（レブナント）にその心を乗っ取られ、一学期の終業式の日に主人公達の前に立ちはだかる。

ここで彼女に巣食う幽鬼（レブナント）をあるアイテムを使って引き剥（は）がし、キッチリ倒せば、サンドラの心の闇が晴れて救われるのだ。

そして、それ以降はサンドラを仲間にすることが可能になり、かつ、好感度しだいで恋人にすることができるようになる。

「……というか、その前にサンドラをプレッシャーから解放させてやったほうが、変に闇堕ちもしなくていいんじゃないのか？」

そう呟き、俺は思わず首を捻（ひね）る。

大体『攻略サイト』でも、掲示板にそんなツッコミ入れてる奴がいるくらいだしなあ……まどろっこしい。

「まあでも」

うん、これ以上イベントが進行しないように、俺はサンドラの決闘申し込みには応じないようにしよう。そうしよう。

んで、主人公様が転校して来たら、ソッチにバトンタッチするということで。

「それにしても……」

サンドラの奴、俺にケンカを売ってはきてるんだけど、何というか、その……俺に対する嫌悪感がないというか、ただ純粋に俺に勝ちたいだけのような気がするんだよなー。

「ウーン……何かあるような気がするんだけど、そんなことまで『攻略サイト』に載ってるわけないし、そもそもまだゲームスタートすらしてないし」

うん、今は考えるのはやめよう。

とにかく、明日からの方針は決まった。

サンドラは放っておく。以上。

『マスター、何をそんなに一生懸命見てるのです？』

「うおっ！？」

突然、召喚もしていないのに［シン］の奴が背後からニュ、と現れた。

「というか［シン］、俺が呼んでもいないのに、なんで出てこれるの!?」

『？　えへへー、［シン］にもよく分からないのです！』

そう言いながら［シン］はコテン、と首を傾け、おどけてみせた。

『それより、［シン］のことはどうでもいいのです。マスターは何を見てるのです？』

「おお、これはこの世界の真実についてまとめられているサイトなんだ。つまり、これを見ればこの世界の全てが分かるのだ！」

『おおー！　すごいのです！　すごいのです！』

［シン］がものすごいスピードで俺を中心に旋回しながらはしゃぐ。

当然、俺は［シン］の動きを追いきれないでいた。

「フフフ、当然［シン］のことも全て載っているぞ？　ホラ」

［シン］の驚く姿が嬉しくなり、俺は調子に乗って［神行太保］に関するページを見せると。

『ふわあああ……！　これ、［シン］なのです！　［シン］がいるのです！』

うん、瞳をキラキラさせながら食い入るように画面を眺めてる。

なお、画面には［シン］のイラストと共にこのように表示されていた。

『［神行太保］……東都ゲームショウにおいて期間中に特別限定配

布されたイベント用精霊（ガイスト）。物理に関しては攻撃・防御共に弱点ではあるが、精霊（ガイスト）随一のスピードで幽鬼（レブナント）の攻撃を全て躱（かわ）し、【方術】による防御壁の展開や指定範囲における全属性魔法の無効化など、まさに防御特化型の仕様となっている』

「どうだ？　お前はこんなにすごいんだぞ？」

『ハイなのです……！　［シン］は……［シン］は、マスターのおかげでこんなにすごくなれたのです……！』

「バッカ、違うだろ？　俺と［シン］の努力、それと先輩のサポートの結果だろ？」

そう言って、俺は涙ぐむ［シン］の頭を撫でてやると、［シン］も嬉しそうに目を細めた。

『だけど……ふわあああ……コレ、マスターが言うように何でも載っているのです！』

「ああ。だからこのことは誰にも内緒だぞ？　かなり重要なことも載っていたりするからな？」

『ハイなのです！　……でも、藤姉さまや関姉さまにもなのですか？』

「ああ、先輩達にもだ」

そう答えると、［シン］が指をくわえながらジッと俺を見た。

「？　何だ？」

『多分、藤姉さまはマスターとこの秘密を共有すると、大喜びしてマスターへの好感度が爆上げになると思うのですよ？』

ぐぬぬ、それは魅力的な提案だ。

だが。

「悪いけど、それでも先輩に言えないな。それだけヤバイものなんだ」

『ヤ、ヤバイのですか！？』

「ああ、生命の危険があるくらい」

『ヒイイなのです』

俺が冗談半分にからかいながらそう言うと、［シン］は両腕を身体に巻いて震えた。

……まあ、先輩はともかく、他の奴に知られたら本気で命もヤバイかもしれないけど。

「というわけで、絶対に言っちゃダメだぞ？　これは、俺と［シン］だけの秘密だからな」

『ハイなのです！』

［シン］はいつになく真剣な表情でビシッと敬礼ポーズをした。

「よし。さて……そろそろ寝るかー」

俺は部屋の電気を消してベッドの中へともぐると。

「えーと、［シン］？」

『えへへー、［シン］もマスターと一緒に寝るのです！』

いや、お前精霊（ガイスト）だろ？　寝るなんて概念あるのかよ……。

『……ダメ、なのですか……？』

チクショウ！　そんな今にも泣きそうな表情で俺を見るなよ！

「……ハア、今日だけだぞ」
『わあい！　なのです！』

俺が諦めて許可をした途端、［シン］は嬉しそうな笑顔を見せて俺の胸に頬ずりした。
だけど……精霊（ガイスト）ではあるんだが、［シン］の見た目は小学生の女の子だからなあ……。
ウーム、こんなところを間違って母さんに見られたら、思いっきり号泣されそうだな。

『マスター……大好きなのです……』

［シン］の突然の言葉に、俺は思わずドキリ、とした。
もも、もちろん使役するマスターとして、だよな？　な！

俺はおそるおそる［シン］の顔を覗（のぞ）くと……。

『すう……すう……』
「寝てやがるよ……」

どうやらさっきのは寝言だったみたいだ。心臓に悪いな、オイ。

「ハア……全く」

気持ちよさそうに眠る［シン］の頭を優しく撫でていると、俺はいつの間にか眠りについていた。

精霊の添い寝（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

兄妹弟子？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「ヨーヘイ！　勝負ですわヨ！」

はい、次の日の朝教室に入った途端、俺はサンドラに絡まれております。

見ろよ、クラスの連中もメッチャ笑ってるじゃん。というか、もう一一三の朝の風物詩になっている感があるし。

「ハア……サンドラ、もうこの際だからハッキリ言ってやる」

「！　ようやく私の勝負を受ける気になったんですのネ！」

「なんでそうなる！　とにかく、俺はお前との勝負を受ける気はないから！　オーケー？」

「ノー！」

うん、予想はしていたけど、サンドラは全く聞く耳を持たない。

とはいえ、昨日の夜熟考（十分で終了）した結果、俺は勝負を受けないと決めたんだ。ここで俺が折れるわけにはいかない！

「それに、勝負っていってもテスト結果と領域（エリア）の攻略進行度でだろ？　もうすぐ夏休みだっていうのに、さすがに無理だろ。せめて二学期に出直してこい」

うむうむ、二学期なら主人公も転校してくるし、ソッチに押し付けられるしな。

でも……アレ？　主人公が転校してくるのは一一二だからクラスは違うのか。そうなると、この場合はどうなるんだ？

ま、いいか。

「イヤですワ！　それに日がないといってモ、まだ期末テストがありますわヨ！」

「だから！　期末テストの勉強で領域（エリア）に行く暇がねーだろ！」

一向に俺の言うことを聞かないサンドラに、俺は思わず声を上げた。

なお、こんなことを言ったが、もちろん俺はテスト勉強中も領域（エリア）に入る所存。

なのに。

「ふむ……面白い話をしているな」

「先輩！？」

いつの間にか、俺達の後ろに藤堂先輩が来ていた。

「ど、どうしたんですか？」

「うむ。そろそろ期末テストに向けて勉強しなければならない時期なので、君に話をしに来たんだが、ちょうど良い。早速今日からでも勉強するとしよう」

「ええ！？」

そ、そういえば先輩、期末テストは俺の勉強を見るって言ってたもんなあ……ちゃんと覚えていてくれてたんだ……。

俺はそのことに嬉しく思いつつも、一抹の不安がよぎる。

まさか……先輩、ここで俺に勝負を受けるように言ったりしませんよね？

「せっかくの機会だ。望月くん、彼女の申し出を受けてみたらどうだ？」
「先輩！？」
ああああ！　やっぱりそんなことを言い出した！
いや、先輩！？　なんてことを言うんですか！？
「で、ですが先輩！　そんな、わざわざ勝負なんてしなくても！」
「？　何故だ？　むしろこのように身近な者同士で切磋琢磨することは、お互いにとって良いことだと思うが？」
そうですけども！？　正論ですけども！？
「ふふ……心配するな。この私が、君をビシビシ指導してあげるから」
「ヒイイ」
お、おおう……ぜひともお手柔らかにお願いします……。
とまあ、俺が先輩に慄（おのの）いていると。
「そ、そんなのズルいですわヨ！　正々堂々と勝負しなさイ！」
「ええー……」
サンドラが激怒し、ブンブンと腕を振り回す。
だけど、ズルってなんだよ、ズルって。
「ふむ？　私が彼に勉強を教えることは、別にズルではないと思うが？」
「いいエ！　ズルですワ！　勝負するならフェアに行うべきでス！」
「ふむ……」

すると先輩は、手で口元を押さえながら考え込んでしまった。
このまま先輩のスパルタがなくなるのならありがたいけど、そうすると今度は先輩と一緒にいられなくなる……ぐむう。

「よし、ならばこうしよう。今日から期末テストまでの間、君も望月くんと一緒にこの私が指導してあげよう」
「はあああああああ!?」

先輩の口から発せられた予想外の言葉に、俺は思わず声を上げた。

「やりましたワ！　学園最強の藤堂先輩の指導なラ、ワタクシは学年最強になりますわヨ！」

そして嬉しそうにはしゃぐサンドラ。ムカツク。

「うむ。望月くんもそれでいいな？」
「ええー……」
「……いいな？」
「はい……」

眉根を寄せる先輩に念を押され、俺はただ頷いた。

はあ……せっかくの先輩との時間が……。

◇

“グラハム塔　”領域（エリア）の第四十三階層。
俺達は今、ここで訓練を行っている……というか。

「サンドラ！　後ろから“オーク”が二体来ているぞ！」
「ヒ、ヒイイですワ！」

主にサンドラが先輩による丁寧な指導を受けている。まあ、悲鳴を上げているが気にしない。
というか、俺と先輩がいるということを除いても、この階層においてその実力が通用しているサンドラは普通にすごい。

なお、サンドラの精霊（ガイスト）の名前は［イヴァン］。見た目は強面（こわもて）のムキムキな、鎧を着たオッサンである。なお、圧倒的に強そうではあるがイケオジではない。
そんなオッサン精霊（ガイスト）が、手に持つ鋼鉄の棒のようなものでこの階層の幽鬼（レブナント）であるオークをひたすら殴打していた。

「た、倒しましたワ……」

オークを倒し、サンドラが疲れ切った表情を浮かべる。

「うむ。ではあと五体倒して、今日はここまでにしよう」
「ヒイイイイ！？」

とまあ、先輩は見事にスパルタを発揮していた。うん、頑張れ。
でも。

「サンドラ、先輩は間違いなくお前を強くしてくれる。そのノルマだって、お前の実力ならできると思って課してるんだからな。それに……先輩のおかげで強くなれた奴がここにいるんだし」
「わ、分かってますわヨ！」

俺は自分の胸を人差し指でトン、と叩きながらそう言うと、サン

ドラは頬をプクー、と膨らませながら、通路の先にいる二体のオークに突っ込んで行った。

「さて……それじゃ念のため、俺達もサンドラのサポートに行きましょうか……って、先輩？」

「あうあうあうあうあう……！」

何故か、先輩が耳まで真っ赤にしながら両手で顔を覆い隠していた。

兄妹弟子？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩の思惑（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「モ、モウ一歩も動けませんワ……」

俺達は“グラハム塔”領域（エリア）から帰還すると、サンドラが扉の前でへたり込んだ。

「ふふ……だが、これでサンドラも第四十三階層まで攻略できたじゃないか。このままいけば、二学期早々には踏破できそうだ」

「む、無茶ですワ！？」

藤堂先輩の言葉に、サンドラは目を丸くしながら叫んだ。

「無茶ではないぞ？　そもそも、私は君一人で踏破しろとも言っていないしな」

そう言うと、先輩は何故か俺のほうをチラリ、と見た。

ええと……何だろう？

「ふふ、つまり、君とこの望月くんで“グラハム塔”領域（エリア）を攻略するんだ」

「「はあああああああああああ！？」」

先輩のとんでもない発言に、俺とサンドラは絶叫した。

いや、なんで俺が！？　このサンドラと！？

俺は口をパクパクさせながら先輩を見ると……先輩は、ニコリ、と微笑んだ。

あ……ひょっとして……。

「イ、イヤですワ！　それじゃ勝負になりませんわヨ！」
「いや、そんなことはないぞ？　それだったら、第六十階層にいる“グラハム塔”領域（エリア）のボス、“タロース”をどちらが倒したかで決めればいいのでは？」
「ウグウ……ですワ……」

先輩に言いくるめられ、口ごもってしまうサンドラ。

「……俺はそれで構いません」
「っ！？　ほ、本気ですノ！？」
「ああ……それに、最後の最後で決着つけるなんて、それこそどちらが上か、ハッキリするじゃないか。それとも何だ？　ひょっとしてサンドラ、自信ないのか？」
「ナッ！？」

俺はわざと煽（あお）るようにそう言い放つ。
ここまで言われたら、コイツは絶対に乗ってくるはず。だって『攻略サイト』によれば、あの加隈に同じように煽（あお）られて、自分に不利な条件を飲んだらしいからな。

「エ、エエ！　モチロン構いませんワ！　ヨーヘイには絶対後悔させてあげますノ！」
「はは、もちろん俺も負けてやるつもりはねーよ！」

よし、これで狙い通り、俺はサンドラとこの“グラハム塔”領域（エリア）を攻略することになった。
俺は小さくガッツポーズをした後、先輩の傍（そば）に寄ると。

「先輩……ありがとうございます」

そう、先輩に耳打ちした。

「あう！？　な、何のことだ！？」

先輩はビクッとしてとぼけた。

だけど……先輩の狙いは、サンドラをけしかけて俺と勝負させ、なおかつ勝利条件を領域（エリア）ボス討伐に切り替えること。

これは、俺の安全を考え、この“グラハム塔”領域（エリア）をソロで攻略しなくてもいいように、っていう先輩の優しさだ……。

本当に……俺にはもったいないくらいの先輩ですよ。

「う、うむう……そ、その、本当なら……」

先輩はゴニョゴニョ言いながら、少し寂しそうにして俯（うつむ）いてしまった。

「先輩……俺、この“グラハム塔”領域（エリア）、速攻で攻略してみせますよ。だから、その次の“カタコンベ”領域（エリア）と“天岩戸（あまのいわと）”領域（エリア）は、絶対に、その……俺と一緒に攻略しましょうね！」

「！　う、うむ！　もちろんだとも！　一緒に攻略しようではないか！」

先輩は、ぱあ、と咲き誇る花のような笑顔を見せてくれた。

「さて！　サンドラはもう動けるか？」

「エ、エエ、もちろんですワ！」

「うむ、では次は私の家に行くぞ！　これから期末テストの勉強だ

！」

「「……エ？」」

俺とサンドラは、顔面蒼白になった。

◇

「うん……うん、そういうことだから、先輩の家でご飯を食べて帰るよ」

『それはいいけど……あまり迷惑かけちゃ駄目よ？』

「はは、分かってる」

そう言って、俺はスマホの通話終了のボタンをタップした。

あの後、先輩の家に来て先輩の指導の下テスト勉強をしていた俺達は、先輩のご厚意で晩ご飯をご馳走になることになった。

で、俺は母さんに電話してそのことを伝えると、こうやって釘を刺されたわけだ。

「そ、その……お母様からの許可はいただけたか？」

「はい、大丈夫です！」

「う、うむ！　そうか！」

少し心配そうな表情で尋ねる先輩に俺はサムズアップすると、先輩が嬉しそうな表情を浮かべた。

で、俺は机の上に突っ伏しているサンドラを見やると。

「……キュウ」

白目をむいた状態で変な鳴き声をした。

まあコイツは、聞けば“グラハム塔（エリア）”領域第四階層までしか行っ

たことがないのに、今日いきなり第四十三階層まで来たわけだからな。一気に三十九階層も攻略したことになる……うん、ちょっと可哀想になってきた。

「ふふ、サンドラも今日はよく頑張ったぞ。うちの“カナエさん”が作る夕食は格別だから、存分に楽しんでくれ」

先輩が今言った“カナエさん”というのは、先輩の家……いや、お屋敷にいる専属のメイドさんなのだ。

というかハッキリ言ってここは、よく外国のお貴族様が住むような屋敷そのものなのだ。もちろん俺も、ここに来た時には目を丸くしたとも。

まあ……サンドラは元々貴族だから、むしろこれが普通だと言わんばかりの態度だけど。

「皆様、お食事の用意が整いました」

「うむ、カナエさんありがとう。では二人共、食堂に移動しよう」

「はい！」

「……帰りたイ」

オイ、サンドラ。そういうことは言っちゃダメだろ。

先輩の思惑（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

脳筋精霊（ガイスト）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「プハー、美味しかったのですワ！」

夕食を終え、到底貴族のお嬢様とは思えないような台詞（セリフ）で、サンドラが満足げな表情を浮かべながらお腹を撫でていた。

だけど、サンドラのその気持ちもすごくよく分かる。

用意された夕食は、煮込みハンバーグをメインに、サラダとニシンのマリネ、程よく温められたパンという、比較的シンプルなメニューだったけど、そのどれもが一流のお店で出されても……学園の食堂にも負けないほどに美味しかったのだ。

「ふふ、満足してもらえたようで嬉しいよ」

「この後、デザートをお持ちします」

そう言うと、メイドのカナエさんは恭しく一礼して食堂を出た。

「ふふふふふ、いつもはデザートなど出ないのに、今日はカナエさんも張り切ってるな」

などと言いながら、藤堂先輩は口元をゆるっゆるにしていた。本当にスイーツが好きなんだな。

……また今度、先輩と一緒にルフランに行くとしよう。

「ところでサンドラ、今日の攻略でどれくらい精霊（ガイスト）のレベルは上がったんだ？」

「フエ？　そういえば、確認してませんでしたワ……」

俺がおもむろに尋ねると、サンドラはたった今思い出したとばかりの表情を浮かべた。

「ふふ、なら彼にも一緒にステータスを確認してもらうといい。なにせ、これから二人で“グラハム塔”領域（エリア）を攻略するんだからな」

「エー……ですワ……」

先輩にそう言われるが、サンドラは口を尖らせながら俺をジト目で睨んだ。

まあ、ライバル（一応）に自分の手の内を明かすのは嫌だよな……。

「だったら俺の［シン］のステータスも見せてやるから。それならいいだろ？」

「マ、マア、それならフェアですわネ……」

ということで、サンドラは渋々ガイストリーダーを取り出すと、俺とサンドラは一緒に画面を眺める。

――――――――――――――――

名前：イヴァン

属性：皇帝（♂）

ＬＶ：２６

力：Ｓ＋

魔力：Ｅ－

耐久：Ｂ

敏捷：Ｅ

知力：Ｄ－

運：Ｂ－

スキル：【裁きの鉄槌】【統率】【雷属性魔法】
【雷属性無効】【状態異常弱点】
――――――――――――――――――――

うん、分かってはいたけど、完全に脳筋ステータスだな……。
だが、そうは言ってもメインヒロインの一柱、能力そのものは高い。
それに……まあ、これはまたその時に頼むとしよう。

「それで、ヨーヘイの精霊（ガイスト）はどうなんですノ？」
「おう」

俺はサンドラにガイストリーダーの画面を見せてやると。

「っ！？　な、何ですノコレハ！？」
「はは、なかなかすごいだろ？」
「すごいというカ……こんなの、反則ですわヨ……」

サンドラが目をパチクリとさせながら、俺の顔とガイストリーダーの画面を交互に見る。
まあ、ここに至るまでに死ぬほど努力したからな。

「ダケド……これを見ると、ますます一一二の生徒達は頭が悪いというカ……」
「ああ……といっても、クラスチェンジする前は、確かに馬鹿にされてもおかしくないステータスではあったから……」
「イエ、そういうことではなくて、そもそも可能性を何一つ考慮しないでうわべだけで判断したことが、バカだと言うのですワ」
「あ……」

まさか、サンドラから先輩と同じ言葉を聞けるとは思わなかった。
……別に、サンドラを救うのが、主人公じゃなくたっていいよな……？

「……今では、俺も［シン］も一年生の誰にも負けないほど強くなった。だから……サンドラ、お前がもし何かに悩んだりしてるなら、いつだって俺を頼ってくれ。俺は、必ずお前の力になるから」
「っ！？」

俺の言葉に、サンドラが一瞬息を飲み、そして。

「……フフ、そうですわネ。その時は……」

彼女は、寂しそうに微笑んだ。

「お待たせしました」

すると、食堂へと戻ってきたカナエさんが、俺達の目の前にデザート……二種類のアイスクリームを置いてくれた。
さて、話はこれくらいにして、デザート食べるか……って。

『マスター！　これは何なのです？　何なのです？』

呼ばれてもないのに勝手に出てきた［シン］が、俺の目の前にあるアイスクリームを興味津々で眺めながら、何度も俺に聞いてくる。
というか、精霊（ガイスト）なんだから、人間と同じものを飲み食いってしないんじゃないの？

「望月くん、その……急に［シン］を召喚して、どうしたのだ……？」

先輩が訝（いぶか）しげな表情を浮かべ尋ねた。

「あ、あははー……俺もよく分からないんですけど、［シン］の奴、俺が召喚しなくても出てこれるみたいで……」

「「はあ!?」」

俺が苦笑しながら答えると、先輩だけでなくサンドラまで驚きの声を上げた。まあ、驚くよなあ……。

「そ、そんなことは聞いたことがないぞ……」

「ワ、ワタクシもですワ……」

いや、俺だって聞いたことないし。

「ふ、ふふ……相変わらず君と［シン］は規格外、だな……」

「規格外って言葉で片づけテ、よろしいんですノ……？」

まあ、［シン］は色々と常識はずれではある。

『敏捷』のステータスは上限値超えてるし、そもそもイベント限定用の精霊（ガイスト）にクラスチェンジできたし、その上しゃべるし……。

『ねえねえマスター！　何なのです？　何なのです？』

そしてしきりに俺の肩を揺すりながらアイスクリームについて尋ね続ける。

ああもう、メンドクサイ。

「そんなに言うなら食ってみろ！」

『ムグ!?　なのです!?』

俺はスプーンでアイスクリームをすくって［シン］の口の中に放り込んでやる。

すると。

『！　美味しいのです！』

目を丸くさせながら、［シン］の表情がぱあ、と明るくなった。

というか、食べられるの！？

『もっと！　もっと欲しいのです！』

「お、おう……そ、その、大丈夫なのか……？」

おねだりする［シン］に、心配になった俺はおずおずと尋ねると。

『はいなのです！　あの超不味い疾走丸とは雲泥の差なのです！圧倒的戦力差なのです！』

「そ、そうか……」

俺は自分のアイスクリームの入った器をス、と差し出すと、［シン］はその敏捷性を活かして目にも止まらぬ速さで受け取ると、キラキラした瞳で一通り愛で、ようやく口に入れた。

というか、そんなにゆっくり食べてたら溶けるぞ？　と言ってやりたいが、それも社会勉強だ。

『はうはう！　美味しいのです～！』

「そうか、そりゃ良かったな」

俺は苦笑しながら、夢中でアイスクリームを食べる［シン］の頭

を撫でてやった……って。

「先輩？」

「あう！？　あ、う、うむ……な、何でもない……」

何故か先輩が羨(うらや)ましそうにしていたので声をかけると、先輩はビクッとなって俯(うつむ)いてしまった。

ウーン……スイーツ好きな先輩のことだから、そんなに俺のアイスが欲しかったのかな……。

などと考えながら、俺は先輩を眺めながら首を傾(かし)げた。

脳筋精霊（ガイスト）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

兄弟子の目的（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

兄弟子の目的

先輩の指示に従って俺がサンドラとの勝負を受けて以降、俺達三人は毎日のように“グラハム塔”領域（エリア）での攻略（主にサンドラの訓練）を行っていた。

その甲斐あって、今では第五十階層以降でも余裕で戦えるほどサンドラの実力もついてきた。当然、彼女の精霊（ガイスト）である［イヴァン］のレベルも、この領域（エリア）攻略の指標の一つとなる三十を優に超え、三十五に到達していた。

俺？　［シン］のレベルは五十一のままですが何か？

「ふふ……これならば、二人だけでも領域（エリア）ボスのタロースも楽に倒せるだろう」

「はい！　これも、先輩が指導してくれたおかげです！」

第五十七階層での攻略を終え、藤堂先輩が柔らかい笑みを浮かべながらそう言ってくれたので、俺は素直に感謝の気持ちを伝えた。

「あう！？　ま、全く君は、相変わらず遠慮のない……そ、それに、君なら既に単独でもタロースを倒す実力があるではないか。私の助力など、それこそ微々たるもので……」

「何を言ってるんですか！　いつも俺達が攻略に集中できるように、幽鬼（レブナント）を間引きして数を調節していたり、危険な箇所はあらかじめ示した上で、俺達に経験を積ませてくれようとしたり……先輩こそ、そんな謙遜はやめるべきです！」

当然だ。先輩のしてくれていることは、俺達にとって本当にかけ

がえのないものなんだ。
どこに先輩以上に俺達を支えて、見守ってくれる人がいるっていうんだよ。

本当に、先輩はすごい。

「あうあうあうあう！？　わ、分かったから……！」

なのに先輩ときたら、こうやって謙遜ばかりして、恥ずかしがって……いつものように凛とした姿を見せてくれたらいいのに。

『ハイハイ、もうマスターの無自覚攻撃にも見飽きたのです』
『（コクコク！）』
「全くですワ」

［シン］と［関聖帝君］が遠巻きに俺と先輩を見やりながら、呆れた表情を浮かべてやがる……って、なんでサンドラまで加わってるんだよ。

「コホン！　と、とにかく！　これならもう、“グラハム塔”領域（エリア）の踏破に何の問題もない！　今日は期末テストの勉強は休みにするから、二人共家に帰ってゆっくり休み、明日に備えるんだ」
「え？　じゃあ……」

俺とサンドラが先輩を見ると、先輩はニコリ、と微笑んで頷いた。

「い、いよいよですワ！　明日、決着をつけますわヨ！」

サンドラが嬉しそうに小さくガッツポーズをした後、ス、と俺に右手を差し出した。

「フフ……負けませんわヨ？」
「ああ、俺もだ」
俺はサンドラの右手を握り、健闘をたたえ合った。
◇
――ピピピ。
「くあ……」
朝になり、俺はスマホのアラームで目を覚ます。
だけど。
『すう……すう……』
「……うん、相変わらず寝相が悪いな」
［シン］の奴、いつの間にか逆さ向きになり、俺に思いっ切り足……もとい金属のブーツを向けて気持ちよさそうに眠ってやがる。
というか、アレ以降、［シン］は毎晩俺とベッドで一緒に寝ている。
何度か無理やり追い返そうとしたが、俺がベッドに入った瞬間、勝手に現れてもぐり込んできやがるし……せめて寝るなら、ブーツぐらい脱げ。
といっても、精霊（ガイスト）にコスチュームを脱ぐという概念があるのかどうか分からないけど。
「オーイ、朝だぞ起きろー」

『んう……ムニャムニャ……もっとアイスクリームを食べるのです……』

どうやら［シン］は幸せな夢を見ているようだ。

「ハア……ほら、そろそろ起きろー」

せっかく気持ちよさそうにしているのに起こすのは忍びないが、俺だって遅刻できないのだ。

それに、今日は俺とサンドラの二人だけで領域（エリア）ボスに挑む大切な日なんだ。その辺、ちゃんと理解して欲しい。

『はうう……あ、マスターおはようなのです』

「ああ……おはよう……」

『？』

朝から疲れた俺だが、とりあえず［シン］が目を覚ましてくれて良かった。

というか、仮に置き去りにしたとしても、召喚したら離れてもやってきたりするんじゃないか？　今度試してみよう。

ということで、俺は慌てて支度をして家を出ると、少し駆け足で学園へと向かった。

最近気づいたが、先輩は俺の通学する時間帯に合わせているみたいなのだ。それなのにこの俺が遅れて、先輩に迷惑をかけるわけにはいかないからな。

「あ！　先輩！」

見ると、いつも合流する十字路で先輩が立ち止まってキョロキョ

ロとしていた。間違いなく、俺を待ってくれているんだ。
こういうところ、本当に先輩は可愛いなあ……。

「先輩！　おはようございます！」
「！　……コホン、うむ、おはよう」

俺は大急ぎで先輩の元へ行って朝の挨拶をすると、先輩は一瞬ぱあ、と笑顔を見せるけど、すぐに咳払いをして平静を装っていた。
くそう、こんな反応は反則だろ。尊みが過ぎる。

「すいません！　お待たせしました！」

俺はあえてそう言って先輩に謝ると。

「ななな、何を言っているのだ？　わ、私はたまたまここを通りかかっただけだ。け、決して君を待っていたわけではないからな？　うむ！」

いやいや先輩、俺、そんなことまで聞いてないです。でも……待っていてくれて、ありがとうございます。

「そ、それよりもだ。今日の“グラハム塔”領域（エリア）の攻略、準備はできているか？」
「はい、もちろんです！　絶対に、今日中に踏破してみせます！」
「うむ……ふふ、だが君らしいな」

俺が先輩に意気込みを伝えると、何故か先輩が嬉しそうに微笑んだ。

「？　俺らしい、ですか？」

「ああ。そもそも、君はサンドラとどちらが先に領域（エリア）ボスを倒すかという勝負をしているのだぞ？」
「ああ……」
まあ、確かに俺は、サンドラとそんな勝負をしている。
だけど。
「あはは、勝負は受けましたけど、そもそも俺はアイツの兄弟子ですからね。ここはむしろ、温かい目で見守ってやるところじゃないですかね？」
「ハハハハハ！　なるほど、そうきたか！」
俺がそう答えると、先輩が愉快そうに大声で笑った。
「それに」
「ハハハ……ん？　それに？」
「それに……俺はサッサと“グラハム塔”領域（エリア）を踏破して、そして……先輩と一緒にどこまでも行くんです。だから……」
「あう！？　……あ、うむ……ふふ、そうだな。私も、君と共にどこまでも一緒に行きたい。学園の中だけでなく、外の世界にだって……」
俺の想いに応えてくれるかのように、先輩が咲き誇るような笑顔を俺に向けてくれた。
そうだ……強くなった今、俺のこれからの目的はいつだって先輩の隣にいることなんだから。
「はい……行きましょう、先輩！」
「ああ！」

俺と先輩は見つめ合い、頷き合い……そして、固く誓った。

兄弟子の目的（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

隣のクラスの委員長（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「では、また昼休みにな」
「はい！」

学園に着き、俺は藤堂先輩と別れて教室に向かった。
すると……何故か、教室にはメインヒロインの一人で一一二のクラス委員長、“悠木アヤ”が来てるじゃねーか。

しかも。

「ハッ！　サッサとこの教室から出て行くのですワ！」
「……別に、あなたにそんなことを言われる筋合いはないのだけど？」

……なんで、サンドラと悠木の奴が一触即発になってるんだよ。
俺としてはこのまま回れ右して、中庭か校舎裏あたりで一時間目の授業をサボって日向ぼっこでもしていたい気分なんだけど……。

ハア……。

「よう。わざわざこのクラスに来てうちのサンドラと言い争いしてるだなんて、一一二のクラス委員長様はよっぽどヒマなのか？」

俺は皮肉たっぷりに、悠木に向かってそう言い放った。
まあ、妹弟子をこんなクソ委員長の相手させるわけにはいかないしな。

「……彼女が勝手に絡んできただけよ」
「ウルサイ！　早く自分の教室に戻れですワ！」
「まあまあサンドラ、落ち着け。それで、この教室に来た用件はなんだよ。サンドラもこんな状態だし、できればサッサと済ませて教室から出てって欲しいんだけど」
サンドラがなんでコイツに絡んだかは知らないけど、俺としても悠木にはとっとと退場願いたい。
「……そうね。単刀直入に言うと、あなたに提案があるのよ」
「俺に提案？」
コイツ、何言ってるんだ？
散々俺のこと馬鹿にして、嫌がらせしてきた癖に、どの面下げてそんなこと言えるんだ？
「フザケルナ！　ヨーヘイがアナタの話を聞くわけないでショ！」
あー……サンドラが怒っていたのは、どうやら俺のことが原因だったみたいだ。
全く……。
「ッ！？　ヨーヘイ……！？」
「はは、ありがとな」
俺はサンドラの頭をポン、と撫でると、悠木に向き合った。
「一応その提案ってのが何なのかだけ聞いてやる。まあ、当然断るけどな」
「……そう？　だけど、あなたにとっても魅力的だと思うけど？」

「へえ……」

いや、コイツの提案なんて、どうせロクなことじゃない。下手をすれば、あのクソ女の二の舞になるだろ。

「……提案というのは、この私と一緒に、“グラハム塔”領域（エリア）を攻略しないかってことよ」

「「はあ！？」」

コイツ何言ってるんだ？　それこそ、絶対に断るに決まってんだろ！

「……あなた、早くあの領域（エリア）を踏破したいんでしょ？　だけど、あの藤堂先輩と一緒では、必修課題はクリアにならない。いくらクラスチェンジで強くなったからって、さすがに一人でっていうのはキツイんじゃない？」

「……」

「……何より、あなたとこの私が一緒に攻略をすることになれば、全て元通りにすることだってできる。それに、あなたの実力に見合うだけの人が、この一一三にいるとも思えないし。そこの彼女の精霊（ガイスト）は強いのかもしれないけど、どうやら知恵は回らないみたいだから」

「何ですっテ！」

「まあまあ落ち着け」

俺は、今にも飛び掛かろうとしたサンドラをなだめる。

一方で悠木はというと、まるで俺の心を理解しているとでも言わんばかりに、口の端を持ち上げ、余裕の表情を浮かべていた。

それにしても……コイツの言う『元通り』って、何のことだ？

「……もちろん、これまであなたにしてきたことは謝るわ。この通りよ。それに、あの木崎セシルのことがあって、私を信頼できないことは理解してる。だからこそ、私はあなたと共に行動することで、信頼を勝ち取りたいと思っているわ」

「……」

「どう？」

どうって……コイツ、よくもまあそんな恥ずかしいこと言えるよな……。

普通に考えて、信頼してないのに一緒に行動するわけないじゃん。

ということで。

「悪い……とも思わないし、断る」

「……どうして？　私の精霊（ガイスト）は強いわよ？　それに、私ならあなたのブレーンとしても役に立つわ」

「いや、そもそもオマエ、嫌いだし」

「プッ！」

俺の言葉に、サンドラが思わず吹き出した。

「フフフ、ヨーヘイはアナタが嫌いだっテ！　ホラ、もう用件は済んだでしょウ？　サッサと教室にお戻りなさいナ」

サンドラは嬉しそうに手で追い払う仕草をした。

「……あなた、もう少し利口だと思っていたのだけど……後悔するわよ？」

「しねーよ。それに、“グラハム塔”領域（エリア）の踏破は、俺とサンドラですることがとっくに決まってるからな」

「エエ！」

俺とサンドラは、悠木に向かって不敵な笑みを浮かべた。

「……上手くいくといいわね」

その一言を言い残し、ようやく悠木は教室に帰って行った。

「アイツ……自分のこと頭いいって思ってるみたいだけど、本当に大丈夫か？　普通にありえねーだろ」

「ですわネ……」

俺とサンドラは、深く溜息を吐いた後、思わず首を捻った。

◇

「……ってことがあったんですけど……」

昼休みになって食堂に来ると、俺とサンドラは今朝の出来事を先輩に報告した。

「ふむ……厚顔無恥もいいところだな」

「ですよねー……」

「とにかク！　このワタクシをバカ呼ばわりしたのは許せませんワ！」

「はは……」

怒り心頭でパンをかじるサンドラを見て、俺は思わず乾いた笑みを漏らした。

まあ、確かにテストの成績は、ヒロインの中では件の悠木に次い

で良い設定だからなあ。
うん、先輩に勉強見てもらってるけど、全然コイツに勝てる気がしない。

「だが、あの木崎セシルの一件もある。君達も今日の“グラハム塔領域（エリア）”での攻略に当たっては注意したほうがいいだろう。全く……せっかくの二人の舞台に水を差すような真似を……！」

そう言うと、先輩がギリギリと歯噛みした。
で、そんな先輩を初めて見たサンドラは、あまりの怖さに「ヒイイ」と慄（おのの）く。

でも。

「先輩の言う通り、俺達は油断もしていませんし、短絡的に考えてもいません。まず、第六十階層まで無事に向かい、俺達二人でタロースの奴を倒してきますよ！」
「違いますわヨ！？　どちらがタロースを倒すかという勝負ですわヨ！？」
「おっと、そうだった」

サンドラのツッコミ、俺は思わず苦笑する。
だけど……まあ、俺の目的はあくまでも踏破することだけだからな。
そして、そのことを知っている先輩は、頬を赤く染めながら俺を見て微笑んでいた。

「まあ、あんな奴のことは忘れて、早く食べてしまいましょう」
「うむ、そうだな」
「ですわネ」

俺達は急いで昼食を済ませ、時間いっぱいまで談笑した。

隣のクラスの委員長（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

第六十階層（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

第六十階層

――キーンコーン。

「ヨーヘイ！　サア、行くわヨ！」

放課後のチャイムが鳴るやいなや、サンドラが帰り支度をしている俺の元へとやって来てニヤリ、と口の端を上げた。どうやら気合いは十分みたいだな。

これからいよいよ、俺とサンドラは“グラハム塔”領域（エリア）の最上階である第六十階層、そして、領域（エリア）ボスであるタロースとの戦いに挑む。

俺は今日で“グラハム塔”領域（エリア）を踏破し、そして……明日からは、二年生の必修課題である“カタコンベ”領域（エリア）ともう一つ、この“益田（ますだし）市”のはずれにある、五つの領域（エリア）の一つ、“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略を始める。

俺と、藤堂先輩で。

「モウ！　何をボサッとしてますノ！」

おっと、サンドラの奴がイライラしだした。

さて。

「じゃあ、行くか」

「エエ！」

俺とサンドラは教室を出ると、真っ直ぐ“グラハム塔”領域（エリア）の扉へと向かうと。

「先輩！」
「む？　ふふ……待っていたぞ」

既に先輩が扉の前に来ており、俺が声を掛けるとニコリ、と微笑んでくれた。

「ど、どうして？」
「何を言っている。これから君達がこの領域（エリア）を踏破するのだぞ？この私がそれを見届けなくてどうするのだ」
「あはは、ですね」
「それに」

先輩は、俺とサンドラの後ろに回ると、パシン、と背中を叩いた。
はは……先輩、最高に気合いが入りました。

「二人共、信じているぞ」
「「はい！」」

俺とサンドラはコツン、と拳を合わせると“グラハム塔”領域（エリア）の扉をくぐった。

◇

「サンドラ！　右！　来るぞ！」
「分かってますワ！　【ライトニング】！」

第四十七階層まで到達した俺達は、この階層の幽鬼（レブナント）、“ケット・シー”と交戦していた。

というか。

「相変わらずここの幽鬼（レブナント）共はウジャウジャいやがる……」

そう。ケット・シー自体はさして強くもないが、第十三階層のゴブリンと同様にやたらと湧いて出てくるのだ。

で、［シン］は一対一の戦闘は得意だが、一対多の戦闘は実はあまり得意じゃない。

「アアモウ！　面倒ですワ！」

「っ！？　ちょ！？　［シン］！　急いでアイツから離れるぞ！」

『ハイなのです！』

サンドラの精霊（ガイスト）である［イヴァン］が右手に持つ鉄鞭（てつべん）を振り上げるのを見て、俺と［シン］は慌ててサンドラから離れた。

「食らいなさイ！　【裁きの鉄槌】！

［イヴァン］が鉄鞭（てつべん）を思い切り地面に叩きつけると同時に、サンドラを中心として周囲に稲妻がほとばしり、ケット・シーはあっという間に黒焦げになってしまった。

「フン！」

サンドラは幽子とマテリアルに変わるケット・シー達を一瞥（いちべつ）すると、ツインサイドテールを手で後ろへ払いながら鼻を鳴らした。

というか。

「お前！　まだ俺達がいただろうが！　【裁きの鉄槌】を使うなら先に言えよ！」
「何を言ってますノ。ヨーヘイ達なら、大丈夫でショ？」
「あのなあ……」
まるで「何を言ってるの？」と言わんばかりの表情でそう言い放つサンドラに、俺は溜息しか出ない。
『……イヴァンおじさま、アレク姉さまって、あんな脳筋なのですか？』
『……（コクリ）』
うん……自分の精霊（ガイスト）にすら呆れられてる。
というか［シン］よ……サンドラのこと、あえて“アレク”って呼んでるのな。
ま、いいか。
てことで、俺達はさらに上の階層へと突き進み、そして。
「とうとう……」
「エエ……来ましたワ」
第六十階層へと足を踏み入れた。
「この奥に、タロースが……」
などと呟いてみたけど、『攻略サイト』によればタロースは物理に特化した幽鬼（レブナント）で、【物理攻撃無効】を持っており、脳筋精霊（ガイスト）の［

イヴァン」にとっては少々厄介ではある。
とはいえ「イヴァン」も【雷属性魔法】が使えるし、「シン」の【方術】があればどんな局面でも対応可能だ。
まあ、負ける要素はないだろうな。

「フフ、ヨーヘイ、先にタロースを倒すのはワタクシですワ！」

ビシッ！　と俺に人差し指を向け、高らかに宣言するサンドラ。

「おう、そうだな」
「ムム！　ソコはもっと乗ってきなさいヨ！」
「そうか？」

フハハ、そう簡単にお前のペースに乗ってたまるか。
大体、俺は絶対に今日でこの領域（エリア）の攻略を終えるんだ。そして……先輩と一緒にその先に進むんだ。

「おっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩いた。

「んじゃ、サクッと倒しに行くか！」
「モウ！　倒すのはワタクシですわヨ！」
「ハイハイ」

俺達は階層の奥へと進んで行くと……いた。

タロースはまるで俺達を待ち構えているかのように、部屋の中央で仁王立ちしていた。
というか……アレ、五メートルはあるんじゃないか？

「フン！　相手にとって不足はないですワ！」

サンドラは不敵な笑みを浮かべながら、鼻を鳴らした。

まあ、今の俺達からすればアイツは役不足だけどな。

「［シン］、準備はいいか？」

『ハイなのです！』

［シン］がフンス！　と気合いを入れる。

さあ……始め……「【アシッドレイン】」……なあっ！？

突然、上から怪しい緑色をした液体が雨のように降り注ぐ。

というか、【アシッドレイン】！？　んなモン浴びたら、タダじゃ済まないぞ！？

「クソッ！　［シン］！」

『ハイなのです！』

俺は［シン］に指示を出すと、［シン］は素早い動きで俺達の上を囲むように呪符を展開すると。

『【堅（けん）】』

そう唱えた瞬間、【アシッドレイン】は全て見えない何かに弾かれた。

「誰だっ！」

俺は後ろへと振り返って叫ぶ。

「……ふふ」

現れたのは、“悠木アヤ”だった。

第六十階層（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

無策（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「……ふふ」

突然何者かに襲われ、俺が後ろへと振り返って叫ぶと……現れたのは“悠木アヤ”だった。

「オマエ！　これは一体何の真似……「ヨーヘイ！　タロースが！？」」

サンドラの叫びに俺はまた振り返ると、さっきの悠木の【アシッドレイン】が開戦の合図となったのか、タロースが俺達に向かって猛然と襲い掛かってきた。

「チッ！」

「……よそ見していていいの？　【マーキュリー】」

「なあっ！？」

今度は悠木が［シン］に向けて水銀の弾丸を飛ばしてきた。

クソッ！　結果的に挟み撃ちみたいになってんじゃねえかよ！

「［シン］！」

『【堅】』

【アシッドレイン】を防いだ時と同じように、［シン］は俺達と悠木の間に呪符を展開して水銀の弾丸を弾いた。

「サンドラ！　俺はコッチの悠木を相手する！　お前はタロースを

！」

「ッ！　分かったワ！」

正直、サンドラの力ならタロースもソロで倒せるはず。

とりあえず……サンドラに任せよう。

「さて……んじゃ、始めようぜ？　というかオマエ、たった一人でここまで来たのか？」

俺はわざと挑発するように悠木にそう告げる。

「……ええ。幽鬼（レブナント）はあなた達が露払いしてくれたおかげで、ここまでほとんど素通りだったわ。それ以外にも、色々とあるけど」

悠木の精霊（ガイスト）、［ミーミル］は【水属性魔法】を得意としている。

で、今俺の目の前にその［ミーミル］の姿が見えないってことは、【水属性魔法】の【ミラージュミスト】を使って姿を消してるんだろう。

だから、ここまで幽鬼（レブナント）をやり過ごし、俺達を背後から襲うなんて卑怯な真似をしたんだな。

今も、どこからか［ミーミル］が俺達を虎視眈々と狙っているはずだ。

「ふーん……で、オマエさあ、道中は所詮幽鬼（レブナント）だからいいとして、俺達に勝てるって思ってるのか？　だとしたら、相当おめでたいぞ？」

そう、たかだか姿が見えない程度で、この俺達に勝てると思ったら大間違いだ。

なにせ、サンドラには広範囲に攻撃を仕掛けられる［イヴァン］の【裁きの鉄槌】があるし、俺も俺で［シン］の【方術】でいくらでも対処可能だ。

だけど……『攻略サイト』によれば、この悠木はパーティーのブレーンというキャラ設定で、アドベンチャーパートでは作戦を立てたり謎解きをするのはコイツの役割らしい。

そんなコイツが、短絡的に俺達に挑むとも思えない。

なので、少しでも情報を引き出すためにわざとこんな煽（あお）るように尋ねてみたんだけど。

「……勝てると思ってるけど？　あの彼女はここの領域（エリア）ボスにかかりっきりだし、あなたはこの私が倒すから」

「へえー、余裕だな。だけど、オマエだって知ってるだろ？　俺の［シン］は、オマエ等程度じゃ相手にならないほど強くなってることを」

「……確かにあなたは強くなったわ、この私がパーティーを組みたいと思うほどに。だからって、私の精霊（ガイスト）があなたの精霊（ガイスト）に劣るとでも思ってるの？」

「何……！？」

悠木はニタア、とその口を三日月のように吊り上げたかと思うと、俺の背後から何かが飛んできた！？

「っ！　［シン］！」

『任せるのです！　【堅】！』

何度繰り返そうが、結局は［シン］によって防がれるだけなのに、まるで馬鹿の一つ覚えみたいに……っ！？

「……フフ、獲った」

今度は［シン］が呪符による防御ができないほどの超至近距離から、水銀の弾丸が突然現れ、俺へと飛んできた。

……まあ、届かないけど。

「っ!?　かき消された!?」

「はは、下を見てみろよ」

そう……既に［シン］は、俺達を囲むように床に“封”と記された呪符を貼り、魔法封じの結界を展開していたのだ。

もちろんこれは、悠木の精霊（ガイスト）の姿を消している【ミラージュミスト】にも効果を発揮するわけで。

つまり。

「さあ、そろそろ姿を見せろよ。ええと……［ミーミル］だっけ？」

俺は余裕の表情で悠木の精霊（ガイスト）の名前を告げると……ん？　悠木の奴、今、笑わなかったか？

「……フフ、私の精霊（ガイスト）は［ミーミル］なんて名前じゃないわ」

「何だと？」

精霊（ガイスト）を覆い隠す霧が少しずつ晴れ、徐々にその姿を現し始める。

そして、俺の視界に入ってきたのは……ローブを身にまとい、その右手には銀の盃を、左手には皮の表紙がついた分厚い本を持った、

厳格な顔をした中年の男だった。

「［ミーミル］、じゃない……？」

「……アハハ！　ええそうよ！　これこそが私の精霊（ガイスト）、［クヴァシル］よ！」

「何だって！？」

悠木が放った言葉に、俺は驚きの声を上げた。

だって、悠木が告げた［クヴァシル］という名と精霊（ガイスト）の姿……これは、俺が『攻略サイト』で見た、悠木の精霊（ガイスト）がクラスチェンジしたものなのだから。

「……バカなあなたに教えてあげるわ。あなたがクラスチェンジを果たすためにレベル上げにいそしんでいたように、私もこの“グラハム塔”領域（エリア）で精霊（ガイスト）のレベルアップのための訓練と領域（エリア）攻略をしていたのよ」

「……」

「……レベル四十を迎えたその時、［ミーミル］のクラスチェンジが解放されたの。そして、より上位の存在である［クヴァシル］へとクラスチェンジを果たしたってわけ」

悠木は俺を見ながら嬉しそうに語る。

そういえば、『攻略サイト』によると、主人公とメインヒロインはクラスチェンジの解放条件となるレベルが四十だったな……。

だけど、主人公とメインヒロインだからこそ課せられたもう一つの特殊条件……特定のイベントをこなすことが必要なはず。

例えばコイツの場合だと、その頭脳の高さゆえに物事を達観してしまっている自分に嫌気がさしていたところを主人公に指摘され、さらに他の生徒に悪意のいたずらを仕掛けられて貶（おとし）められ、その結

果、コイツは闇堕ちする。
でも、それを主人公に救われ、その結果、信頼関係を結ぶという展開になっている。

とはいえ……当然、主人公が来るのは二学期からなんだから、このイベントを起こすことができない。

なのに、コイツの精霊（ガイスト）はクラスチェンジした。
理由は分からないが、事実は事実だ。

「……あなたのあのゴブリンはクラスチェンジで強くなったとしても、ベースがそもそも最弱なんだからそこまで強くなっているはずがない。一方、私の［クヴァシル］は元の［ミーミル］が強かったこともあって、相当な能力アップを見せたわ。だから、あなたに勝ち目はないのよ。分かった？」

などと悠木は独自の考察を嬉しそうにほざく。

「……だけど、もしここで俺達に万が一のことがあったら、それこそあのクソ女の二の舞で、この学園にいられなくなるんじゃないのか？」
「……フフ、本当に馬鹿。今のあなた達は、領域（エリア）ボスに挑んでいるのよ？　だったら、何かあったとしても領域（エリア）ボスに倒されたってことで説明がつくじゃない。何より、元通りになったらそんなこと、みんな興味が無くなるわよ」

俺の問い掛けに悠木は呆れた表情を浮かべながら視線を送ってきた。
この視線は覚えている。まだ一一二にいた時にコイツから毎日受け続けてきた、俺を蔑んでいる瞳だ。

「……さあ、せめて［クヴァシル］最大のスキルで終わらせてあげる。食らいなさい、【暴食の蜂蜜酒（ミード）……『【縛】』……なあっ！？う、動け……！？」

「ハア……オマエさあ、一一二での教室の一件を忘れたのかよ」

俺は溜息を吐くと、呆れた表情を浮かべながら悠木を見やる。

クラスチェンジを果たして連中を見返すために教室に行ったあの日、俺は加隈の奴を目の前の悠木と同じように呪符で身動きを取れないようにしてやった。

その時も、あまりのスピードに教室にいた連中の誰一人として［シン］が加隈の背後に回っていたことに気づかなかったんだ。たとえ悠木の精霊（ガイスト）がクラスチェンジしたところで、結果は同じだ。

［シン］の『敏捷』が“ＳＳＳ”なのは伊達じゃない。

「そんなことも忘れて卑怯な手段で戦いを挑んできて、しかも仲間も連れてこないなんて……オマエ、本当に頭脳キャラなの？」

「クッ……！」

悔しそうに俺を睨む悠木だけど、俺にはコイツの行動が本当に信じられない。

いくらなんでも、俺達を舐め過ぎだろ……。

「まあいいや。そういやオマエ、さっきこう言ってたよな？『何かあったとしても領域（エリア）ボスに倒されたってことで説明がつく』って」

そう告げた瞬間、悠木の顔色が青く染まる。

全く……自分がやられることを想定してないのかよ……。

「……そこで、震えて待ってるんだな」

俺は戦慄の表情を浮かべる悠木を一瞥した後、踵を返してタロースと戦うサンドラの元へと駆け出した。

無策（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

領域ボス、撃破（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

領域ボス、撃破

「コノ！　食らいなさイ！　【ライトニング】！」

［シン］の呪符で行動不能にした悠木を置き去りにしたまま、俺はサンドラの元へと向かうと、当然ながら彼女は領域（エリア）ボスであるタロースとの戦闘の真っ最中だった。

ふむふむ……状況からみて、六対四でサンドラが押しているか。

「サンドラ！　待たせた！」
「ッ！　ヨーヘイ、あの女ハ？」
「ああ、［シン］の呪符で野ざらしにしてあるよ」
「アラ？　アナタも結構ヒドイことするわネ」

タロースが振り回す鬼の金棒のようなものを［イヴァン］が鉄鞭（てつべん）で受け止めると、サンドラが俺を見やってクスクスと笑った。
というか、一歩間違ったら死んでてもおかしくないんだぞ？　相応の罰は受けるべきだろ。

「それよりも……」

俺は目の前のタロースを見据える。

「エエ……それじゃ、今度こそ勝負ですわヨ？」
「ああ！」

俺とサンドラはお互いの手でタッチすると、二手に分かれてタロ

ースを挟み込むような配置に就いた。

「サンドラ！　俺が［シン］のスピードを活かして呪符で動きを止めてみる！　その隙にお前は【裁きの鉄槌】をぶち込め！」

「ハア！？　……って、いいんですノ？　それだと、このワタクシが勝ってしまいますわヨ？」

「はは。というかお前、たかだか【裁きの鉄槌】一発でコイツ倒せるって思ってんの？　それに、俺は楽して勝ちたいの。だから、お前がタロースを弱らせ切ったところで、サクッと倒すから気にすんな」

俺は口の端を持ち上げ、わざと余裕ぶった表情でそう言い放った。

ま、そうじゃないとサンドラの奴、俺がサポート役に徹することについて変に気を遣いそうだしな。

「プッ！　……フフ、そういうことにしといてあげますわヨ！　［イヴァン］！」

『……（コクリ！）』

吹き出したかと思うと、サンドラの指示を受けた［イヴァン］が鉄鞭（てつべん）を振り回して突っ込んで行った！？

「ちょ！？　おま！？　俺の話聞いてたのかよ！　［シン］！」

『ハイなのです！　アレク姉さまとイヴァンおじさまをフォローするのです！』

［シン］は俺の傍（そば）から弾丸のように飛び出すと、［イヴァン］がまだタロースとの距離を半分も詰められていないにもかかわらず、既に［シン］はタロースの背後にたどり着いていた。

そして。

『ホイ、なのです！　【縛】！』

手に持つ呪符をタロースの背中にペタリ、と貼り付けると、すぐさま俺の元へと戻ってきた。

「よし！　よくやったぞ！」

『えへへー、なのです！』

俺が頭を撫でて褒めてやると、［シン］は嬉しそうに目を細めた。

「食らいなさイ！　【裁きの鉄槌】！」

ようやくタロースの前にたどり着いた［イヴァン］は、鉄鞭（てつべん）で思いきり殴りつけると、その瞬間、周囲に稲妻がほとばしる。

『グオオオオオオオッッッ！？』

その電撃の威力にタロースは悲鳴を上げた。

やはり脳筋精霊（ガイスト）、その攻撃力は［関聖帝君］に次いで高い。というか、主人公を含め、仲間キャラの中ではナンバーワンという設定だからなあ。

「マダマダァッ！」

――ドオン！　ドオン！　ドオン！

床に倒れるタロースに対し、なおも追撃の手を緩めないサンドラ。

タロースはというと、稲妻を浴びすぎて黒焦げだわ鉄鞭（てつべん）で殴られ

過ぎて全身を砕かれて軟体動物みたいにクニャクニャしてるわで、少し可哀想なほどだ。

そして。

「トドメですワ！」

――ドオオオオオンッッッ！

鉄鞭（てつべん）を両手持ちに変え、［イヴァン］が上段から真下のタロースの脳天へと渾身の力で叩き落した。

『グ……オ……』

とうとう力尽きたタロースが、呻（うめ）き声と共に大量の幽子とマテリアルへと変わった。

「フフフ！　やりましたワ！　やりましたワ！」

サンドラが両手を上げてはしゃぐと、同じように［イヴァン］も鉄鞭（てつべん）を振り回して……アレ、はしゃいでるのか？

『んふふー！　マスター、やりましたのです！』

すると［シン］も嬉しそうにピョンピョンと飛び上がり、俺の前に来て両手を上げてきた。つまりこれは、俺とハイタッチしようってことだな。

「はは、おう！」

『わあい！　なのです！』

俺は［シン］とハイタッチを交わすと……ん？　サンドラがコッチに寄ってきた。

「フフ、ワタクシの勝ち、ですわネ？」
「ああ。全く……あんな攻撃反則だろ」

俺は苦笑しながら肩を竦（すく）めると、サンドラもス、と両手を上げる。

「はは、おめでとう！」
「ヨーヘイもなのだワ！」

俺達はハイタッチを交わし、大声で笑い合……っ！？

「サンドラ！」
「キャッ！？」

突然、緑色の液体が俺の視界に入ったのを見て、俺は咄嗟（とっさ）にサンドラを突き飛ばした。

「グアアアッ！？」
『熱いのです！？　痛いのです！？』
「ッ！？　ヨーヘイ！？　［シン］！？」

背中が焼けただれて激痛が走り、俺の精霊（ガイスト）として同じ痛みを共有している［シン］も、思わず床で転げ回る。

「ッ……！　オ、オマエ……！？」

俺は顔を上げ、後ろへと振り返ると。

「アハ……アハハア……ッ！　いいザマねッッ！」

苦痛で顔を歪ませながらも、無理やり口の端を吊り上げて嗤（わら）う悠木がいた。

領域ボス、撃破（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

起死回生（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

起死回生

「アハ……アハハア……ッ！　いいザマねッッ！」

俺は顔を上げて後ろへと振り返ると、苦痛で顔を歪ませながらも、無理やり口の端を吊り上げて嗤う悠木がいた。

というか……なんでコイツ、動けるんだよ。［シン］の呪符で身動きが取れないはずなのに……って！？

見ると、悠木の背中からシュウシュウ、と湯気のようなものが立ち昇っている。

まさかっ！？

「オ、オマエ……自分の背中に【アシッドレイン】を……っ！？」

「ア……ハハ……そうよ！　アンタ達をズタボロに痛めつけるためにねえっ！」

本気かよ……。

「ヨーヘイ！？　大丈夫なノ……ッ！？」

サンドラは立ち上がると俺の元へ慌てて駆け寄ってきた。

そして、俺の背中を見た途端、目を見開いて思わず口元を押さえた。

はは……こりゃ、相当ヒドイみたいだな……。

「オマエエエエエッッッ！」

「待て！　サンドラ！」

悠木に飛び掛かろうとしたサンドラを、俺はその腕をつかんで制止した。

「ッ！　ヨーヘイ離しなさイ！」

「……言いたくないけど、アイツの精霊（ガイスト）……［クヴァシル］はクラスチェンジを果たしている上に、レベルも四十以上、さらに物理攻撃主体のお前の［イヴァン］とは相性最悪ときてる……」

「ナニヨ！　それって、ワタクシが負けるって言いたいんですノ！」

納得のできないサンドラは、俺の襟首をつかんで詰め寄る。

だけど。

「ああ……お前じゃ、勝てない」

「ッ！」

俺はサンドラにハッキリと告げた。

実際、［イヴァン］の最大の必殺技である【裁きの鉄槌】を［クヴァシル］にブチ当てるには、その鉄鞭（てつべん）が届く距離まで近づかないといけない。

一方の［クヴァシル］は【水属性魔法】を駆使する術者タイプだ。

それに、アイツには最大のスキルである【暴食の蜂蜜酒（ミード）】がある。

そんなモン食らっちまったら……サンドラは、あっという間に骨になっちまう……。

「なあ……オマエは、何でこんな真似、したんだ……？　俺は、ここまでオマエに恨まれるほど、何か、したのか……？」

なおも納得がいかず飛び掛かりそうな勢いのサンドラはとりあえ

ず無視し、痛みに耐えながら俺は悠木に問いかける。
その自分の身体を犠牲にしてまでこんな真似をするアイツが、どうしても理解できなかったから。

「アハハ……ハハ……！　決まってるっ！　オマエが憎いからよ！　オマエの存在そのものが、目障りなのッ！　そして……そして、全て元通りにするのよおおおおおッッッ！」
「「っ！？」」

狂気に満ちた瞳で俺を見ながら嗤(わら)い続ける悠木に、俺も、あれほど怒っていたサンドラも、声を失う。
だけど……このままこうしていてもジリ貧だ……。

「……おい」
「ンナッ！？」

俺はサンドラの身体を無理やり胸元に引き寄せ、耳打ちする。

「……今から俺は、お前を思いっきり突き飛ばす」
「ッ！？　ど、どういうこト！？」
「シッ！　……いいから聞け。アソコに、［シン］が倒れているな？」
「エ、エエ……」
「あいつは……［シン］は、防御と俊敏さに関しては最強の精霊(ガイスト)だ。ハッキリ言ってしまえば、［クヴァシル］との相性は抜群だ」
「そ、それがどうしたノ……？」
「ああ……つまり……」

俺は詳細についてサンドラに告げると。

「ッ！　……仕方、ないですわネ……」

彼女は、少し寂しそうな、悔しそうな表情を浮かべた。
だが……今の俺には、これしか思いつかなかった。

チラリ、と俺は［シン］を見やる。
［シン］は、その痛みに必死で耐え、冷や汗を流しながら唇を噛んでいた。

［シン］……悪い、ちょっと無理させちまうぞ……。

「サンドラ！　だからお前じゃ無理だ！　大人しくしてろ！」
「何ですっテ！　そういうヨーヘイこそ、怪我してるんだから大人しくしてるのですワ！」
「アハハハハ……！　アンタ達、こんな状況で仲間割れだなんて、バカ？」

大声で嘲笑（あざわら）いながら、悠木は俺達に向けて指差している。
はは……というか、ここまで執念深いのに、なんでこんなに抜けてやがるんだ？

まあ……好都合、だけどな……っ！

――ドンッ！

「キャッ！？」

俺に突き飛ばされ、サンドラが倒れた。

「フン！　やっぱりお前、最悪だよ！」

「それはコッチの台詞（セリフ）ですワ！　もういイ！　ヨーヘイなんか……勝手にするのですワ！」

「シッシッ！」

俺は手をヒラヒラさせ、追い払うような仕草をする。

そんな俺を一瞥してサンドラはプイ、と顔を背けて立ち上がり、そのままこの階層から立ち去ろうとすると。

「アハアアア……！　私がアンタをこのまま帰すと思っているの？」

ニタア、と三日月のように口の端を吊り上げると、［クヴァシル］が右手に持つ杯をサンドラに向けてかざした。

マズイッ！？　あれは【暴食の蜂蜜酒（ミード）】を発動する体勢だぞ！

「アハハハハハ！　……死になさい。【暴食の……「アナタがネ」……何ですって！？」

サンドラはニヤリ、と口の端を持ち上げたかと思うと。

「［イヴァン］！」

『（ブンブン！）』

サンドラの声と共に、［イヴァン］が鉄鞭（てつべん）を悠木に向かって放り投げた。

「くっ！？　この……っ！」

俺と同様、【アシッドレイン】によってその背中がただれてしまっている悠木は、その鉄鞭（てつべん）をかろうじて躱（かわ）すのが精一杯だった。

で、当然それをサンドラが見逃すはずがない。というか、キッチリ狙ってやってるんだけどな。

「ヨーヘイ！　行きますわヨ！」

『はうはうはうはうはうはうううううう！？』

［イヴァン］に高々と放り投げられ、［シン］は背中の痛みも忘れてわたわたしながら飛んできた。

さっき俺がサンドラを引き寄せた時、耳打ちした言葉。

『ああ……つまり、言い争いをするフリをして［シン］のいる方向にお前を突き飛ばすから、［イヴァン］のパワーで俺のところまで［シン］を投げ飛ばして欲しいんだ。その後は……お前は通路の陰に隠れていてくれ。さすがにお前まで、一緒には守り切れそうにない……』

とはいえ、まさかその前に鉄鞭（てつべん）を悠木に向かって投げつけるとは思わなかったけどな。

そして。

「［シン］！」

『はう！　マスター！』

俺は［シン］を受け止める。

「大丈夫か？」

『マスター……大丈夫なのです！』

［シン］がにぱー、と嬉しそうに笑顔を見せる。
嘘吐け……無理やり笑顔作って、汗出てんぞ……。

『あ……マスター……』

俺は［シン］の頭を優しく撫でてやると。

「［シン］……アイツ、倒すぞ！」
『っ！　ハイなのです！』

俺達は、忌々し気にこちらを睨む悠木を見据えた。

起死回生（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

暴食の蜂蜜酒（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

暴食の蜂蜜酒

「……チッ！　本当にイライラさせてくれるわね……！」

［イヴァン］が投げた鉄鞭（てつべん）をギリギリで躱（かわ）したせいで倒れ込んでいた悠木は、舌打ちをして［クヴァシル］に支えられながらゆっくりと立ち上がると、ギロリ、と俺と［シン］を睨んだ。

「ハッ！　というかこの状況で、まだオマエ、勝てると思ってんのか？」

俺はわざとニヤニヤしながら、煽（あお）るように悠木にそう告げた。

そうだ……俺と［シン］に集中しやがれ。

「……ええ、勝てるわよ。だって……私、には……私には、このスキルがあるッッ！　【暴食の蜂蜜酒（ミード）】！」

悠木の振り絞るような叫びと共に、［クヴァシル］が俺達に向かって右手の杯をかざすと、その中身……黄金色の粘性の高い液体が床へと零（こぼ）れる。

すると、その黄金色の液体はまるで生きているかのように、俺達にへとゆっくり向かって来た。

「アハアアアアッ！　アナタ達はもう終わり！　杯から蜂蜜酒（ミード）が零（こぼ）れてしまった以上、アナタ達は食われて死ぬのよッ！」

その黄金色の液体を求め、どこからともなく蜂がやってきた。

右から、左から、上から、下から、ありとあらゆる方向から、大量に。

「……来たか」

そう、これが悠木の精霊（ガイスト）、［クヴァシル］が持つスキル……【暴食の蜂蜜酒（ミード）】。

『まとめサイト』には、当然そのスキルの詳細も載っているし、俺だってちゃんと目を通している。

対処方法は……ない。

「アハハハハハハハ！　さあどうするの？　こうなったらもう、この私でも止められない！　アナタ達は蜂蜜酒（ミード）に塗（まみ）れ、それを求める無数の蜂によって骨まで食い尽くされるのよ！」

「ああ……確かにオマエの言う通りだ」

「っ！？」

悠木の言葉に、俺は素直に頷く。

ただし……最っ高にニヤけたツラでな！

「［シン］！」

『ハイなのです！』

［シン］が俺達と黄金色の液体との間に、二枚の呪符を展開する。

そして。

『【模】！』

そう唱えると、目の前に俺と［シン］が現れた……いや、俺達の

ニセモノ、つまりデコイを作ったんだ。

［シン］の、呪符で。

当然、最も近くにいる俺達に、黄金色の液体はまとわりつく。

蜂も、黄金色の液体と俺達のニセモノを、ただ食らい尽くす。

全てが終わると……そこには、もう何もなかった。

「さて……どうする？」

「……あ……ああ……あああ……っ！」

俺は冷たくそう問いかけると、もうなす術がないと悟った悠木は、頭を抱えて今度こそその場で崩れ落ちた。

「さすがに、今回のオマエはやり過ぎた。ここを出たら、覚悟しておくんだな。［シン］」

『ハイなのです！　【縛】』

念のため、［シン］は［クヴァシル］に呪符を貼り、その動きを封じる。

「サンドラ、もう出てきても大丈夫だぞ」

通路の陰に向かってそう声をかけると、サンドラがヒョコッと現れた。

「お疲れ様なのですワ」

トコトコと俺の傍によると、サンドラが俺の背中をポン、と叩く。

「イテッ！？」
「アッ！　も、申し訳ありませんワ！」

チクショウ、悠木を倒したところで、俺の背中が治るわけじゃないんだよなー……。
ハア……やっぱりさあ、回復魔法使える奴が仲間に欲しいよなあ……って、何考えてるんだ？　俺……。
大体、回復魔法の一番の使い手はあの木崎（クソ女）だから、そもそもこの学園にすらいねーじゃん。

あとは……これも主人公に続いて転校してくる、あのお姫様くらいかあ……。
でも、木崎（クソ女）や悠木みたいに俺を目の敵にする可能性大だ。むしろ、サンドラがイレギュラーなだけだろう。

……ま、この辺は対策がないわけじゃない。おいおい考えよう。

「さて……んじゃ、帰るか」
「エエ！」
『ハイなのです！』
『（コクリ）』

［イヴァン］が呪符で拘束されたままの悠木を抱えると、俺達は階段を下りて出口を目指した。

◇

「二人共、よく無事で……っ！？」
「あはは……ただいま戻りました……」

扉をくぐると、前で待ち構えていた先輩が一瞬ぱあ、と笑顔を見せるが、俺の状態を見て慌てて駈け寄ってきた。

「こ、これはどうしたんだ!?　領域（エリア）ボスのタロースは物理攻撃しかないはず！　こんな火傷のような怪我をするなど、あり得ない！」

「先輩！　この女がワタクシ達の邪魔をして、そして……ヨーヘイをこんな目に遭わせたのですワ！」

「グウッ!?」

先輩の問い掛けに、サンドラが吐き捨てるようにそう言うと、「イヴァン」は無造作に悠木を地面に放り投げた。

「……望月くん、本当なのか……？」

「はい……」

俺が頷くのを見て先輩は、身動きが取れないまま地面に這（は）いつくばって呻（うめ）き声を上げる悠木の目の前に立った。

「貴様……どういうつもりだ」

「ヒイッ!?」

［関聖帝君］の青龍偃月刀の切っ先を悠木の喉元に突きつけられ、【威圧】スキルもあって痛みも忘れて慄（おのの）く悠木。

そんな悠木を、先輩は射殺すような視線でただ睨みつける。

「答えんかあッッッ！」

「ハハ、ハイッ！　そ、その！　彼……そう！　彼がこの私の誘いを断って、パーティーを組んでくれないから！　そ、それに！　彼は生意気なんです！　もうどうしようもないくらいムカついて！

彼がいなくなれば、元通りになるんです！　それでっ！」

先輩に一喝され、しどろもどろになりながら悠木が答える。
だけどコイツ、言ってることがメチャクチャだぞ！？
そんなの……俺を襲おうとした理由には到底ならない。それどころか、そんな短絡的な理由や感情で、一歩間違えば人殺しをしてしまうような真似をしたのか？

この……『ガイスト×レブナント』では頭脳派で、常に冷静沈着なキャラ設定の“悠木アヤ”が。

「とにかく！　……貴様、このままタダで済むと思うな」
「ヒイイイイイイイッッッ！？」

先輩の最大限の【威圧】スキルを一身に浴び、悠木は泡を吹いて気絶してしまった。

暴食の蜂蜜酒（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

仲間でライバル？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

仲間でライバル？

その後、藤堂先輩はどこかへと電話を掛けてからしばらくすると、どこからともなく黒服の男達が数人やって来て、先輩と二言三言、言葉を交わした後、悠木を連れて去って行った。

「ええと……先輩、あの黒服の人達は？」

「うむ……彼等は精霊特殊対策機関……通称“ＧＳＭＯ”と言って、この国の精霊使い専門に扱う組織の職員だ。こうやって精霊使いが問題を起こした場合などに対処するための、な」

「そうですか……ということは、あの黒服の人達も精霊使いなんですか？」

「ああ、そうだ」

まあ今回の悠木に限らず、いくら法律で定められているとはいえ精霊使いが決して人に対して罪を犯さないとは限らない。

当然、それを取り締まる専門の人達もいるに決まってるか。『攻略サイト』では攻略に関係ないから、そんなことまでは書かれてなかったけど。

「それより」

先輩は俺の正面に立つと……俺を、抱き寄せた。

もちろん、怪我をしている背中には触れないように。

「本当に……生きていてくれて、よかった……っ！」

先輩の声が、手が、肩が、震えていた。

「先輩……あはは、もちろん俺は死んだりしませんよ。だって、俺は先輩とどこまでも一緒に行かなきゃいけないんですから」
「ふふ……そう、だったな……」
俺の言葉に頷くと、先輩は俺から離れた。
「さて……とりあえず望月くんは保健室で手当てをしてから、私と一緒に病院に向かおう。サンドラ、君はどうする？」
「モチロン！　ワタクシも一緒に行きますわヨ！　そ、それに……ヨーヘイの怪我だって、その……ワタクシを庇(かば)っテ……」
どんどん尻すぼみになり、最後は消え入るような声でそう言うと、サンドラは俯(うつむ)いてしまった。
あー、そういえばあの時、サンドラを突き飛ばして、俺だけ【アシッドレイン】浴びたんだったっけ。全然気にしてなかった。
しょうがないなあ……。
「ワッ！？」
「全く……お前にそんな面似合わないぞ？　それに、お前だって悠木を倒すために色々とサポートしてくれたじゃないか。おあいこだ、おあいこ」
そう言うと、俺は少し乱暴にサンドラの頭を撫でてやった。
サンドラの奴は一瞬目を白黒させるが、すぐに視線を落とした。
「で、ですガ……」
「いいんだよ。むしろサンドラを怪我させてしまうほうが、俺にとってはよっぽどトラウマものだっての」

俺は口の端を持ち上げ、サンドラの顔を覗き込む。

「しょ、しょうがないですわネ……そういうことにしておきますわヨ……」

「お、やっと笑ったな」

「ッ！　ウルサイですワ！」

俺の言葉で口元を緩めたサンドラだったが、ちょっとソレを指摘してやると、恥ずかしくなったのか顔を赤くして口を尖らせた。

はは、やっぱりサンドラはこうじゃないとな。

いつもどこか強気で、俺に勝負、勝負、と絡みながら、それでいて意外と気配りができて優しい……それこそが、『攻略サイト』にも載っていない、俺の知っている“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”だ。

「さて、先輩それじゃ……って、先輩？」

「……フン」

何故かよく分からないけど、先輩が口を尖らせて拗ねていた。

アレ？　俺、何か悪いことしたっけ？

『むふふー！　これは面白い展開になってきたのです！』

『『……（ギロリ！）』』

『や、やなのです！　関姉さまもイヴァンおじさまもそんなに睨まないで欲しいのです！』

かたや俺達の傍で、プークスクスとほくそ笑んでいた［シン］は、［関聖帝君］と［イヴァン］にメッチャ睨まれ、小さな身体をさら

に縮ませていた。何やってんだよ……。

◇

「しかし、背中の怪我も大したことがなくて良かったな」
「はい！　……といっても、一週間は風呂に入る時地獄らしいですけどね……」

診察を終え、病院の待合室に座っている先輩に報告すると、先輩は嬉しそうに微笑んでくれた。
で、どうやらサンドラの奴は席を外しているようだ。多分、売店で飲み物でも買いに行ってるんだろう。

ちなみに、俺の背中の怪我は全治三週間と診断された。
まあ、この程度で済んだのは［シン］の持つ【全属性耐性】と【状態異常無効】のおかげだろう。
これが、仮に属性に対して耐性を持たない上に状態異常が弱点であるサンドラが【アシッドレイン】を浴びていたら……ダメだ、考えただけでゾッとする。

「なあ、望月くん」

先輩が少し俯(うつむ)きながら、俺に声を掛けた。

「何です、先輩？」
「そ、その……もし……もし、だ……この私が彼女……悠木アヤの【アシッドレイン】を浴びそうになったとしたら、君は……」

先輩はギリギリ聞こえるくらいの小さな声で、最後まで言い切らないままそう呟いた。

だけど、先輩が【アシッドレイン】を浴びそうになったら、か……。

なら、答えは簡単だ。

「あはは、そんなの決まってますよ。その時の俺は、絶対に先輩を突き飛ばしてました」

「っ！　……そ、そうか……私も逆の立場だったら、そうしていた……」

俺の答えを聞き、先輩は顔を真っ赤にして口元を緩めた。

というか、先輩のピンチに俺が助けないなんて選択肢、あるわけないじゃないですか。

それより。

「先輩。俺……“グラハム塔”領域（エリア）を踏破しました」

「うむ、そうだな。おめでとう」

「これからは……どんな領域（エリア）だって、いつも先輩と一緒ですから」

「っ！　……うん」

先輩と俺の間に、何ともいえない空気が流れる。

でも、俺にはその空気が心地よかった。

「二人共、何の話をしてますノ？」

「うあ！？」

「あう！？」

突然現れたサンドラに、俺と先輩は思わず声を上げた。

「あ、い、いや、これからの領域（エリア）のことを……って」

そ、そうだ！　せっかくだし……今、聞いてみるか。

「なあ、サンドラ」

「？　何ですノ？」

「これから先、俺はもっともっと上の領域（エリア）を踏破するつもりだ。でも、当然俺一人の力じゃ、たどり着けない領域（エリア）だっていくつもある」

「……エエ」

「だから……サンドラも、一緒に来てくれないか？　その、領域（エリア）の攻略に」

「ッ！」

俺がそう告げると、サンドラは顔を真っ赤にして息を飲んだ。

そして。

「……バカ。そんなの、行くに決まってますわヨ……」

「はは、サンキュー！」

俺がス、と右手を差し出すと、サンドラはおずおずとその手をつかんだ。

その時見せたサンドラのはにかんだ表情は、俺が見たサンドラの中で一番素敵で……。

「むううううううううう！」

……何故だか分からないけど、プイ、と顔を背けた先輩がプクー、と頬を膨らませていた。

仲間でライバル？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

勝利報酬（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

勝利報酬

「イテテ……」

藤堂先輩とサンドラの二人と別れ、家に帰ってきた俺は自分の部屋のベッドに寝転がったんだけど、背中が痛くてしょうがない……。

『痛いのですー……』

それは痛みを共有する［シン］も同様で、［シン］はうつ伏せになりながらシクシクと泣いていた。

仕方ない……今回は［シン］にはつらい思いさせちまったからなー……。

「［シン］、ちょっと待ってろ」

『ヒリヒリするのですー……って、マスターどこに行くですか？』

「今日は特別だ」

［シン］に向かってニヤリ、と笑うと、俺は部屋を出てリビングに向かった。

「あら、どうしたの？」

「んー、いや、冷凍庫にアイス入ってないかなーって……お、あったあった」

冷凍庫の片隅に、いつのかは分からないがアイスキャンディーが一本だけ転がっていた。

俺はそれを手に取って部屋へ戻ろうとして。

「あ、そうだ」

「？」

クルリ、と振り返ると、母さんがキョトンとした表情を浮かべる。

「俺、一年生の必修課題、もうクリアしたんだぜ。すごくない？」

「あら、本当！」

「へへ」

嬉しそうに驚く母さんの表情を見て、俺も当然だけど嬉しい。というか、自慢したんだから当然なんだけど。

「ホレ」

『っ！　こ、これはひょっとして……！』

「おう、これもアイスだ。食ってみな」

『モモモ、モチロンなのです！』

オニキスの瞳をキラキラさせながら、［シン］は勢いよく封を開けると、パクリ、とかぶりついた。

『んふふー！　ウマウマなのですー！』

「そりゃよかった。ま、今日はよく頑張ったな」

そう言うと、俺は嬉しそうにアイスキャンディーを頬張る［シン］の頭を撫でてやった。

『えへへー……やっぱり、マスターは世界一なのです……！』

「はは、だろ？」

幸せそうに目を細める［シン］に相槌を打つと、またベッドに横向きに寝転がる。

「それにしても……」

俺は、今日のことについて改めて振り返る。

正直、“グラハム塔”領域（エリア）の踏破が吹き飛んでしまうくらい、悠木の常軌を逸したと言っても過言じゃない一連の行動には驚いた。

これがまだ、加隈のバカがやらかしたことだったら少しは理解できるけど、そうではなくてあの悠木なのだ。普通に考えて、どうにもおかしい。

「それに、アイツがやたら言ってた『元通り』って言葉……」

確かに、木崎（クソ女）があの一件でこの学園からいなくなって、一一二のクラスは落ち目だからなあ。

まさか未来の“アレイスターの聖女”にダーティーな一面があったばかりか、散々馬鹿にしていた俺に何もかも立場が逆転されたことで、学園の他の生徒達からあの連中が揶揄（やゆ）されているのは知っている。

それに関しては、所詮は自業自得なので俺は何とも思わないが、当事者である悠木からすれば耐えられないことだったのかもしれない。

それで、元凶であるこの俺がいなくなれば、前みたいな評価を取り戻すことができる……悠木は、そう考えたんじゃないのか？　……って。

「そんな訳あるかあああああ！」
『はう！？』
おっとイカン、自分で考えて興奮しちまった。
おかげで［シン］の奴が目を白黒させちまってるじゃないか。
「わ、悪い……ちょっと考え事しててな」
『ビ、ビックリしたのです……』
「スマンスマン」
ふう……とりあえず落ち着こう。
それに、悠木に関しては藤堂先輩の言っていた“ＧＳＭＯ（グスモ）”ってところが取り調べをするだろうし、俺がいちいち考えても仕方ない、か。
「よっし！」
俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩く。
「それよりも、“グラハム塔”領域（エリア）も踏破し、次はいよいよ“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略なんだ。夏休みが終わるまで……いや、先輩と遊ぶ時間を確保するためにも、最短で一番効率がいいプランを練らないと！」
俺はスマホを手に取ると、『攻略サイト』を開いて“アルカトラズ”領域（エリア）攻略に向けて対策を練った。
◇
「ふふ……ホラ、ここ間違っているぞ？」

「ううう……本当だ……」

次の日、俺は先輩、サンドラと一緒に先輩の家で期末テストの勉強をしている。

というのも、期末テストまであと三日に迫っていて、先輩から領域（エリア）の探索は期末テスト終了までお預けされてしまったのだ……。

チクショウ、昨日はこれからのことを考えてあんなに意気込んでいたのに。

でも。

俺はチラリ、と見やると……先輩はそのワインレッドの髪をかき分けながら、真剣な表情で俺の解いた答えの採点をしてくれていた。

本当に……先輩は綺麗だな……。

「ヨーヘイ」

「うあ！？　サ、サンドラ、どうした？」

先輩に見惚れている時に突然サンドラに声を掛けられ、俺は思わずしどろもどろになってしまった。

「ホラ、一応この期末テストの結果込みで勝負を決めるって話じゃなイ？」

「ん？　お、おお……」

そうだった。一応、サンドラと勝負している体（てい）になってるんだったな。すっかり忘れてた。

「そ、それで……少し条件を加えようと思いますノ……」

「条件？」

何だよ条件って。ますます俺が不幸になる予感しかしないんだけど。

「エ、エエト……」

すると今度は俺から視線を逸らし、サンドラは頬を赤くしながら、指をこちょこちょとせわしなく動かしている。

「えーと……早く言えよ」

「わ、分かってますわヨ！　そ、その……も、もしワタクシが勝ったラ……」

「勝ったら？」

「ワ、ワタクシのお願いを一つだけ……き、聞いて欲しいんですノ……」

……うん、やっぱりろくでもなかった。

勝利報酬（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

願い事（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

願い事

「わ、私のお願いを一つだけ……き、聞いて欲しいんですノ……」

……うん、やっぱりろくでもなかった。

というか何だよソレ！　絶対まともな願い事じゃねーだろ！

しかも！　しかもだ！　“グラハム塔”領域（エリア）のボス、“タロース”をどちらが先に倒すかで既に俺は負けてるんだぞ！　万が一何かの間違いがあって俺が期末テストでサンドラに勝っても引き分け止まりだ！

つまり、俺にメリットは何一つないってことだろ！

「お前なあ！　そんなの俺が受けるわけ……っ！？」

俺は思わずサンドラに向かって抗議の声を上げようと思ったけど……サンドラはどこか思いつめたような表情を浮かべている。

ハア……何だよ。そこまでして俺にお願いしたいのかよ……。

「……分かったよ」

「ッ！　ほ、本当ニ？」

「おう。ま、そもそも勝負を受けちまったんだから、それなりに勝利報酬は用意しとくモンだからな。ただ、後出しはコレっきりにしてくれよな……」

「ウン……」

おーおー……何だかよく分からんけど、嬉しそうにしやがって。

……いや、分からなくはない、か。
それに俺も、『いつだって俺を頼ってくれ。俺は、必ずお前の力になるから』なんて言ってしまったからなあ。
だけど……そうか。
サンドラは、向き合うことに決めたんだな。

「よっし！」
「「っ！？」」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩いた。
すると、サンドラだけじゃなく採点に集中していた先輩も驚いた表情を見せた。というか、そんなつもりないのに失敗したなあ……。

「あ、あはは、ちょっと気合い入れただけなんで」
「そ、そうか……それならいいんだが……」

俺は頭を掻きながら苦笑すると、不思議そうな表情を浮かべながらも、先輩はまた採点を再開した。

まあ、だからといって負けてやる義理はない。
やるなら、ガチでやらないと、だな。

俺は口元を緩めると、テスト勉強に集中した。

◇

「フフ！　ワタクシの完全勝利なのですワ！」
「……」

期末テストが終わり、お互いのテスト結果を見せ合ったんだけど……はい、予想通り全教科サンドラが勝ちました。
いや、一つ言わせてもらうと、今回のテストは先輩が教えてくれたこともあって、俺も全教科平均以上だったんだぞ？
でも、サンドラの奴は全教科百点に近い得点をたたき出しやがったんだ。そんなの勝てるわけがない。

「ふふ……だが、望月くんも頑張ったじゃないか。中間テストの時と比べると、雲泥の差だぞ？」
「と、当然ですよ！　俺に教えてくれたの、誰だと思ってるんですか！」
「あう！？　そそ、そうだな……」

俺の言葉で、藤堂先輩が顔を真っ赤になってしまった。
というか先輩も、当然のことなんだから毎回そんなに照れなくてもいいのに。

「そ、それで……ヨーヘイ、分かってますわよネ……？」
「お、おう。お前のお願いを一つ聞く、だろ？」
「ムム！？　ま、待て！？　なんだその『お願いを聞く』というのは！？」

ん？　何故かここで先輩が驚いてるぞ？

「アレ？　先輩、覚えてませんか？　ほら、先輩の家で期末テストの勉強をしてた時、サンドラの提案で敗者は勝者のお願いを一つ聞くって話なんですけど」
「ししし、知らない！　私は聞いてないぞ！」

先輩は焦った表情でブンブン、と勢いよく首を左右に振った。

「イ、イエ！　ワタクシのお願いはその……ちょっとヨーヘイでないとできないことデ……そ、それニ」

するとサンドラは、先輩の傍に寄って何かを耳打ちした。

で、先輩はというと両手をバタバタさせながら顔を真っ赤にしたかと思うと、サンドラと向き合って不敵な笑みを浮かべた。

そしてそれは、サンドラも同じだった。

ウーン……一体この二人、何の話をしたんだ？

まあ、サンドラの奴は、ひょっとしたら俺への頼み事について話したのかもしれないけど。

まあいいや。

「それで、サンドラの願い事っていうのは何なんだ？」

俺はサンドラにそう声を掛けると、彼女は真剣な表情を浮かべながら俺へと向き直った。

といっても、多分サンドラが闇堕ちする原因となったアレ関連だとは思うけど。

「ハイ……実は……」

「……」

「そ、その！　会って欲しい人がいるのですワ！」

……ん？

「え、ええとー……どういうこと？」

「そ、その……か、家族に会って欲しいのでス！」

……はい？

「ダダ、ダメだ！　ダメだぞそんなの！　ダメだからな！」

すると、先輩が俺とサンドラの間に割り込んで、全力でサンドラの願い事を拒否した。

といっても、受けるかどうかを決めるのは俺なんですけどね。

「ヨーヘイお願い！　アナタに“プラーミャ”に会って欲しいノ！」

サンドラは俺の胸に飛び込むと、必死の形相で俺の制服を襟（えり）を握りしめた。

だけど……サンドラが告げた家族の名前。

それは、ルーシ帝国が誇る【火属性魔法】を極めた精霊使い（ガイスト）で、サンドラが『ガイスト×レブナント』において闇堕ちする遠因となった人物。

“プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ”……つまり、サンドラの双子の妹だ。

願い事（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

サンドラの覚悟（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「で、その“プラーミャ”っていうのは誰なんだ？」
「ソ、ソノ……ワ、ワタクシの双子の妹……ですワ……」
俺はあえて知らないフリをしてサンドラに尋ねると、想定通りの答えが返ってきた。
それにしても、その“プラーミャ”は確かにサンドラの闇堕ちの原因ではあるけれど、『攻略サイト』では“プラーミャ”ってのはあくまでサンドラとの過去エピなんかが書かれているだけ……つまり、その存在が示されてるだけで、実際にはゲームには登場しないキャラだ。
なので当然、主人公達がその“プラーミャ”と直接会ったりするなんてイベントは存在しない。
とはいえ。
「じゃあ次の質問。どうして俺にそのサンドラの双子の妹と会わないといけないんだ？　正直、俺には話が全く見えないんだけど」
「そそ、そうだぞ！　私にも詳しく話してもらおう！」
俺はサンドラの意図を探るため、そう尋ねた。
ところで藤堂先輩、なんで俺より食いついてるんですか。
「ソ、ソレハ……」
ここで何故か、サンドラは顔を赤くして言い淀む。

ウーン……俺の勘では、嫌な予感しかしない。

「ハ、ハッキリ言ったらどうなんだ？」

「せ、先輩、落ち着いてください！」

コッチはコッチで、少し暴走気味の先輩がサンドラに詰め寄る。

というか、なんで先輩がそこまで気にするんですか……。

「それで……サンドラ？」

「ウ、ウン……こ、こんなお願い失礼なのは承知で言うワ……ソノ……ワ、ワタクシと恋人のフリをして欲しいんですノ！」

「「はあああああああああああ！？」」

サンドラの答えに、俺と先輩は驚きの声を上げた。

いや、というか何で俺が！？　サンドラの恋人のフリをするんだ！？

「わ、悪い……全然話が見えないんだけど……」

「ア、ゴ、ゴメンナサイ……実は、あの“グラハム塔”領域（エリア）を踏破した時から考えていたことがあっテ……」

するとサンドラは、訥々（とつとつ）と話し始めた。

元々サンドラの実家である『レイフテンベルクスカヤ家』は、皇族の血も引くルーシ帝国でも屈指の名門貴族であること。

『レイフテンベルクスカヤ家』にはサンドラと双子の妹である“プラーミャ”の二人しか跡継ぎがおらず、当然、長女であるサンドラには家から過度な期待がかけられていること。

だけど、精霊使い（ガイスト）としても、個人の資質としても、サンドラよりも妹の“プラーミャ”のほうが優れていること。

「……ですからワタクシは、その妹を超えようと、これまで必死で努力してきましたワ。勉学モ、貴族としての作法モ、そして、精霊（ガイスト）使いとしてモ」

うん……ここまでは、『攻略サイト』に書いてあった通りだ。

だからこそ、主人公との勝負に負けてよりプレッシャーに苛（さいな）まれて、闇堕ちしちまったんだからな。

だけど。

「……で、肝心の俺がそのサンドラの妹に会う理由は何なんだ？しかも、お前の恋人のフリをして」

「ソレハ……」

俺の問い掛けに、サンドラはキュ、と唇を噛むと、意を決したかのように顔を上げ、そのアクアマリンの瞳で俺を見据えた。

「……ワタクシは、『レイフテンベルクスカヤ家』の後継者候補から降りようと思っておりますノ……」

「はあ!?」

ど、どういうことだ!?

あの『攻略サイト』によれば、『レイフテンベルクスカヤ家』の後継者候補であることが何よりも誇りで、主人公に救われた後もひたすらその高みを目指していたサンドラが!?

「フフ……ワタクシ、今回の“グラハム塔”領域（エリア）の攻略で分かりましたノ。ワタクシはあんなに勝負にこだわって、ヨーヘイにたくさん絡んで、いざ勝負になって……なのにヨーヘイときたら、勝負ど

ころかワタクシのサポートばかりデ……」

ああー、まあ俺の目的はサンドラとの勝負じゃなくて、あの領域（エリア）の踏破だし。それにあの時は、できる限りサンドライベは進めたくなかったしなあ……。

「ワタクシが勝負に勝っても、ヨーヘイはワタクシを祝福するばかりデ……何より、ワタクシのためにその身体を傷つけテ……」

「オイオイ、怪我のことは気にすんなって言っただろ……」

「わ、分かってますワ。それで……ワタクシは考えましたノ。ワタクシにとって、本当に『レイフテンベルクスカヤ家』を継ぐことがそれほど大事なのかト。イエ……少し違いますわネ。私がしたいことは、本当に『レイフテンベルクスカヤ家』を継ぐことなのかト」

意外だった。

サンドラにとって、『レイフテンベルクスカヤ家』こそが全てだったはず。なのにサンドラは、それを全て放棄しようとしている。

どんな心境の変化があったのかは分からない。でも、サンドラの瞳には、憂いや迷い、諦めといった色は見受けられなかった。

あるのは、ただ覚悟だけ。

「後悔……しないのか……？」

俺の問い掛けに、サンドラは無言で、だけど、力強く頷いた。

ハア……本気（マジ）かよ……。

「分かったよ……」

「ッ！　ほ、本当ですノ？」

「ああ……そこまで真剣に考えて、悩んで、それで答えを出したん

だろ？　だったら、せめて背中押すくらいはしてやるよ」
「ア、アリガトウ！」
「うお！？」

するとサンドラは、その水色に輝く瞳に涙を湛えながら俺に抱きついてきた！？

「ままま、待て！？　あ、あくまで恋人のフリなのだぞ！？　そんな真似する必要はないだろう！」
「フエエエエ！？」

それを見た先輩は慌ててサンドラを羽交い絞めにし、俺から無理やり引き剥がした。
と、というか、サンドラってあんなにいい匂いするのかよ……ヤベ、ちょっとドキドキした。

「そ、それで、その妹といつ会うんだ？　さすがに俺にルーシ帝国まで来いって言われても無理だぞ？」
「ア、そ、そうでしたわネ……」

サンドラも今の抱きつき行為が恥ずかしくなったのか、顔を真っ赤にしながら髪を耳に掛ける仕草をした。

「そ、それで……“プラーミャ”は夏休みを利用して八月にこの“東方国”に遊びに来ますノ……その時ニ……」
「マジかー……」

夏休み……“アルカトラズ”領域を攻略しなきゃいけないのに……。

サンドラの言葉に、俺は思わず手で顔を押さえた。

サンドラの覚悟（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大切な女性（ひと）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

大切な女性（ひと）

――キーンコーン。

放課後になり、俺は帰り支度を始める。

今日はこの後、藤堂先輩と一緒にとある場所に行く予定である。

「ヨーヘイ！　また明日！」

「おう、じゃあな」

サンドラが嬉しそうに手を振りながら、教室を出て行く。

本当はサンドラも一緒に行ったほうがいいんだけど、サンドラはさっきのお願いの件で、早速実家に連絡をするらしく、今回は彼女抜きだ。

というか、サンドラは妹の“プラーミャ”が正式に後継者に選ばれたら、ちゃんと俺達は恋人同士じゃないって実家にはうまく説明するとは言っていたが、本当に大丈夫かよ……。

ま、まあいいや。とりあえず先輩を待たせるわけにもいかないので、待ち合わせ場所の校門前に急ごう。

俺はヒューズボックスを背負うと、教室を出て校門前へと向かった。

そこには。

「……」

はい、見るからに不機嫌な先輩が、腕組みしながら仁王立ちしておりました……。

というか、下校する生徒達が先輩から一定距離を空けつつ、顔を逸らしながら避けて通っている……さながらモーゼみたい。

「先輩、お待たせしました」

「あ……う、うむ……」

ウーン……俺が声を掛けても、先輩は眉根を寄せたままで機嫌が直らない……。

「そ、それじゃ行きましょうか……」

「ああ……」

とにかく俺と先輩は学園を出て、駅前を目指す……んだけど。

「……」

「……」

き、気まずい……。

かつて先輩と一緒にいて、これほど気まずかったことがあっただろうか。いや、ないな。

「あのー……先輩？」

「……何だ？」

「あ、い、いえ……」

でも……先輩が不機嫌なのって、サンドラのあのお願いのせい、だよなあ……。

とはいえ、サンドラが自分と向き合って前へ進もうとしているの

に、それを俺が止めるわけにもいかないし……。

……よし！

「せ、先輩！」

「む……」

俺は歩く先輩の前に立ち塞がって、先輩を見つめる。

先輩も、真紅の瞳で俺をジッと見ていた。

「サ、サンドラの件は、あくまでもアイツが前に進むために必要なものなんです。だから、俺はアイツの背中を押してやりたいと思っています」

「う、うむ……」

先輩は少し俯き、唇をキュ、と噛んだ。

「そして……もし先輩の背中を押さなきゃいけない時、俺は何を差し置いてもその背中を押し続けます。それがたとえ、誰かと天秤をかけることになったとしても」

「っ！」

そう……今回、俺はサンドラのためにそのお願いを聞き入れ、協力することにした。

でも、もし同時に先輩を助けなきゃいけない時、どちらかを選べと問われれば、俺は多分、先輩を優先すると思う。

……いや、違う。俺が、先輩の背中を押したいんだ。

「ふふ……」

すると先輩は、ついさっきまでの不機嫌な様子は霧散し、口元を緩めて微笑んだ。

「本当に……この私もどうしようもなく馬鹿だな。君は、そういう男だということを、誰よりも知っていたはずなのに、な……だから……」

「先輩……？」

「いや、何でもない。それよりも、君の言う場所に早く向かおう」

「あ、は、はい！」

良かった……もう、いつもの先輩だ。

はにかみながら照れくさそうに歩く先輩を見て、俺はそれが嬉しくなりどうしても笑みが零れてしまう。

「む……ふふ……」

先輩もそんな俺の様子に気づき、また微笑む。

俺と先輩は妙なくすぐったさを感じながら、そしてそれを嬉しく思いながら、駅を目指して歩いた。

◇

「君が言っていた場所は、ここか……」

俺と先輩は、“益田市”を走るモノレールに乗って、益田港に隣接されている臨海公園に来ていた。

「はい。先輩、コッチです」

臨海公園の中を進み、一番端にある海に面した柵の前に来ると、柵の左から四本目……ええと、これだな。

その柵の棒をつかみ、力任せに捻(ひね)ってみると、棒は意外にも簡単にクルリ、と回転した。

その時。

「っ！？」

俺達の前に扉が現れ、先輩は息を飲んだ。

そう……この扉こそ、俺が最優先で攻略を考えている、“アルカトラズ”領域(エリア)だ。

「……こう見えて私は、学園にあるものを含め、この益田市に点在する領域(エリア)については全て把握しているつもりだ」

「……」

「だが……私はこの場所に領域(エリア)があることを知らない。なのに、君は何の迷いも見せずにこの領域(エリア)の扉を出現させた」

先輩の視線が、鋭いものに変わる。

「望月くん……君はこれを、一体どこで知った？」

さて……どう答えようか。

先輩が疑うのもごもっともで、なんで一介の学園の一年生がこんな誰も知らないような領域(エリア)を知ってるのかって話だ。

一応、それなりに理由は考えてあるけど、それで先輩が納得……するわけないなー。

まあ……とりあえず言ってみて、あとは強引に納得してもらおう。

そうしよう。

「実は俺、中学二年の時に偶然この扉を発見したんです。そして、その時に精霊（ガイスト）が発現しました」

「っ！？」

俺の答えに、先輩が息を飲む。

ただの嘘っぱちなだけに、罪悪感が半端ないけど……まあ、しょうがないよね。

「それで……その時はこの中に入った瞬間、死の恐怖に襲われました。でも、今の俺達は強くなりました。そしてこの前、改めて扉をくぐって確信しました。俺と先輩なら攻略できるって」

「……そう、か」

俺の説明を聞き、先輩が目を伏せた。

うう……これ以上先輩に嘘を重ねたくないので、この辺で素直に騙されて欲しい。

すると。

「ふふ……」

「先輩……？」

「望月くん……今回はあえて君の話を信じよう。それに、君は絶対に私の不利益になるようなことはしない。そうだな？」

「！　当然じゃないですか！　俺にとって先輩は……！」

「うむ……分かっているよ」

そう言うと、先輩はニコリ、と微笑んだ。

ああ……先輩は、俺の説明が嘘だって分かった上で、それでもな

お俺のこと、信じてくれて……！

先輩……俺にとって先輩は、世界で一番大切な女性（ひと）、です……。

大切な女性（ひと）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

アルカトラズ領域（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

アルカトラズ領域

「おお……！」

早速俺と先輩は扉をくぐると、そこはテレビのドキュメンンタリー番組や映画に出てくるような、まさに刑務所の様相だった。

こここそが、真のラスボス戦に向けて準備されている五つの領域（エリア）の一つ、“アルカトラズ”領域（エリア）だ。

ちなみに、ここの幽鬼（レブナント）の平均レベルは六十。先輩の［関聖帝君］はわずかに上回っているが、一方の俺はレベルが少し足らない。

サンドラに至ってはレベルもまだ四十にすら到達しておらず、クラスチェンジもしていないから、普通に考えればこの領域（エリア）攻略はかなり厳しいだろう。

だけど……サンドラの精霊（ガイスト）、［イヴァン］には【雷属性無効】のスキルがある。

というのは、この“アルカトラズ”領域（エリア）に出現する幽鬼（レブナント）は、雷属性と水属性の二属性に分かれるのだ。

なので、少なくともサンドラが受けるダメージは単純計算で半分となる。これは、攻略において非常に大きなアドバンテージだ。

つまりは、この三人でこの領域（エリア）の攻略に乗り出せば、充分に踏破は可能だ。

「それで……とりあえずどんなところか知るためにも、せめてこの階層だけでも探索してみましょうか？」

「うむ……そうだな」

俺の提案に、少し考えた後に先輩は頷いた。

「でしたら、俺と［シン］が前で斥候の役目をしますので、先輩は俺の後ろへ」

「む……ふふ、そうだな。頼りにしているぞ、望月くん」

はは、先輩に『頼りにしている』って言われたぞ！

これは、俺達がシッカリ先輩を護らないと！

「さあ［シン］！　行くぞ！」

『ハイなのです！』

俺と［シン］は警戒しながら通路を慎重に進む。

先輩も、背後を含め警戒を怠らない。

『！　幽鬼（レブナント）なのです！』

通路の奥に蠢く（うごめく）幽鬼（レブナント）を見つけ、［シン］が叫ぶ。

あの巨大な蟹の形をした幽鬼（レブナント）は……“ザラタン”か！

「先輩！　ここは俺達が仕掛けます！　先輩はその後にとどめを！」

「分かった！」

「［シン］！　動きを止めてから甲羅を破壊するぞ！」

『任せるのです！』

［シン］は素早い動きでザラタンに何もさせないままにその甲羅の上に立つと、ペタリ、と二枚の呪符を張り付けた。

『【縛】！　【裂】！』
『ギチギチギチッ！？』

ザラタンは身動きが取れなくなると同時に、もう一枚の呪符によってその頑丈な甲羅に亀裂が入った。

「先輩！　今です！」
「おおおおおおおおおおおおッッッ！」

俺の指示を受け、［関聖帝君］はザラタンに一気に詰め寄ると、その亀裂目がけて青龍偃月刀を振り下ろした。

『ギチッ！？　……ギ……ギイ…………』

そしてザラタンは沈黙し、幽子とマテリアルへと変わった。

「先輩！　お見事です！」
「ふふ、やったな」

俺と先輩はハイタッチを交わす。

だけど、先輩はともかくとして、俺達の呪符が普通に通用したのは大きかった。
レベルに差があるから、状態異常系の【縛】はひょっとしたら通用しないかも、なんて考えたが、無事通用しているところを見ると、レベル差で効果に影響はなさそうだな。

「ふふ……なかなか見事な連携だったな」
「はい！　先輩と俺は、最高のコンビですよ！」
「あう！？　そそそ、そうだな……」

俺の言葉に、先輩が恥ずかしくなってまた両手で顔を覆ってしまった……。

◇

「ふう……」

目の前の“エレクトイール”にとどめを刺し、俺は深く息を吐いた。

とりあえず、“アルカトラズ”領域（エリア）の第一階層を全て攻略したものの、やっぱりレベルが高いだけあって幽鬼（レブナント）が手強い。

それに、先輩も水属性の幽鬼（レブナント）には相当手こずり、思うような攻略とはならなかった。

これを、最上階である第二十階層までこなしていかないといけないのかー……。

しかも、ここは領域（エリア）ボスがご丁寧にも第十階層と第二十階層にそれぞれ配置されてるからなあ……。

「ふむ……望月くん、今日のところはこれで引き上げよう」

「ですね……」

先輩の提案に頷き、俺達は領域（エリア）の扉へと戻る。

途中、ザラタンが三体同時に現れた時はどうしようかと思ったが、そこは実戦経験豊富な先輩。その的確な指示でザラタンを各個撃破し、終わってみれば無傷の圧勝だった。

うん、ザラタン相手ならもう大丈夫そうだな。

そして。

「あー！　疲れたー！」

扉をくぐって元の世界に戻ると、俺は思い切り伸びをしてそう叫んだ。

いや、やっぱりここは、“グラハム塔”領域（エリア）と比べて圧倒的に難易度が高い……。

「ふふ……もうすっかり暗くなってしまったな」

先輩の言葉を受けて空を見上げると、既に月が明々と輝いていた。

「ですが……今日のこと、俺は一生忘れません」

「む？　どういうことだ？」

「だって今日の領域（エリア）攻略は、その……正真正銘、先輩のパートナーとしてのものですから……」

「あう！？　そ、そうか……今日は、私と望月くんの、パートナーとしての初めての攻略になるんだったな……」

「はい！」

もちろん、これから先もこうやって、俺は先輩と一緒に色んな領域（エリア）に行くんだ。

そのためには、この“アルカトラズ”領域（エリア）で絶対にアレを手に入れないといけない。

それは、先輩の不幸な結末を防ぐ手助けになるはずなんだ。

だから……。

「？　望月くん？」

俺がジッと“アルカトラズ”領域（エリア）の扉を凝視していたものだから、先輩が不思議そうに俺を見ていた。

「あ、ああいえ……何でもありません」

「？」

この領域（エリア）を、『ガイスト×レブナント』の本編が始まる夏休み明けまでに、絶対に踏破してやる。

そう心に誓いながら改めて扉を一瞥（いちべつ）すると、先輩と一緒にこの場を去った。

アルカトラズ領域（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

思い出した（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

思い出した

――ピピピ。

朝になり、スマホのアラームがけたたましくなる。
俺はまどろみながら、手探りでスマホを探すと……お、これだな。
スマホを手に取ってアラームの停止ボタンをタップし、ムクリ、と起き上が……れねえ。

「［シン］……」
『すぴー……』

チクショウ、気持ちよさそうに寝やがって。お前が俺の上に思いっ切り乗っかってるから、俺が起き上がれないんだよ。
仕方なく［シン］を起こさないようにしながら、その身体をゆっくりとベッドの上へと下ろし、俺はベッドから出た。

「くあ……」

大きく欠伸（あくび）をしてカーテンを開けると、夏だけあって既に陽は高くなっていた。
うあー……今日も暑そうだなあ……。

俺は制服に着替え、［シン］を置き去りにしたままリビングへと向かう。

「おはよう」

「あら、おはよう」

母さんと朝の挨拶を交わしてテーブルの席に着くと、既に用意されている朝食に箸をつける。うん、美味い。

「早いもので、今日で一学期も終わりねえ」

「そうだなー」

味噌汁をすすりながら、母さんの呟きに返事した。

入学した当初は、ヒロインや仲間キャラ達に散々馬鹿にされて、嫌がらせを受けたりしたモンだけど、あの『攻略サイト』のおかげで、今じゃこんなに強くなれたし、それに……藤堂先輩と出逢って、助けてもらって、支えてもらって……。

そう考えると、クソザコモブな俺のこれまでの短い人生は結果的に勝ち組だったなあ。

「ごちそうさま」

朝食を終え、俺は手を合わせてから食器をシンクに置くと、洗面台へ向かって歯磨きをする。

その時。

『はうはうはう～！　ね、寝坊したのです～！』

ドタドタと走りながら、泣きそうな声で［シン］が部屋から飛び出してきた。

『あ！　マスターおはようなのです！』

「おう、おはよう」

ビシッと敬礼ポーズをする［シン］に、俺は朝の挨拶をした。

「というか、顔を洗ったら学園に行くぞー」

『ハイなのです！』

ということで。

「行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

俺と［シン］は家を出ると、先輩が待つ十字路へと急ぐ。

「先輩！　おはようございます！」

「あ……う、うむ、おはよう」

先輩はいつものように俺の姿を見つけると、ぱあ、と嬉しそうに微笑んだ後、照れ隠しとばかりに眉根を寄せる。この一連の流れを含め、今朝も先輩は尊い。

「それにしても、今日は終業式だな」

「ですねー。といっても、明日以降も先輩とは毎日逢うので、それについて特に思うことはないですけどねー」

「あう！？　ま、全く君はいつもそうやって……（ゴニョゴニョ）」

あはは、先輩照れてる。まあ、分かっていてそう言ったんだけど。

「それにしても、“アルカトラズ”領域（エリア）もやっと第三階層ですね……」

「む？　その“アルカトラズ”領域（エリア）という名称はなんだ？」
あ、ヤベ。あの領域（エリア）の名前をポロッと言ってしまった。
「あ、あはは……ホ、ホラ！　あそこって何だか刑務所みたいじゃないですか！　ちょうどテレビで、そのアルカトラズをテーマにした映画が放映されていたので！」
「そ、そうか……確かに、刑務所のイメージは強いな」
「で、でしょ？」
ふう、危ない……慎重に話さないと、だな……。
その後も先輩と談笑しながら登校していると、あっという間に学園に着いてしまった。
ウーム……できれば遠回りしたい気分だ。
「ふふ……それでは終業式が終わったらまた」
「はい！」
俺は先輩の姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けていた。
先輩も、何度も振り返っては俺に手を振り返してくれた。
で、教室に入ると。
「ヨーヘイ！　おはようなのですワ！」
「おう、サンドラおはよう」
パタパタと俺の元へとやって来たサンドラとハイタッチする。
例の件で吹っ切れたこともあるのか、サンドラは俺に願い事をした日からずっとテンションが高いのだ。

「それで、今日もあの領域（エリア）に行くんですわよネ？」
「ああ。最低でも二学期が始まる前までには踏破したいからなあ」
「フフ……そうそう、ワタクシの［イヴァン］も、とうとうレベル四十になったんですのヨ！」
「おお！　すごいじゃん！」
「なのですワ！」

よしよし、これで［イヴァン］もクラスチェンジに必要なレベルに到達したな。
あとはもう一つの条件であるイベントクリアだけど、それも八月に入ったらサンドラの双子の妹の“プラーミャ”がやって来て、順調に進む……はず。多分。

――キーンコーン。

「お、朝のチャイムだ」
「じゃあネ、ヨーヘイ！」
「おう」

◇

終業式を終え、夏休みについての連絡事項を先生から受けると、いよいよ夏休みに突入する。

“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略やサンドラのイベントをこなすっていうミッションはあるものの、それでも先輩やサンドラと一緒に過ごす夏休みが楽しみで仕方がない。

「ヨーヘイ！　行きますわよ！」

「望月くん、迎えに来たぞ！」

おっと、二人が呼んでいる。

サッサと帰る支度をしないと……アレ？

「む、どうした？」

俺の席まで来た先輩が、不思議そうな顔で尋ねる。

「ああいえ……何か忘れてるような気がするんですよねー……」

「フフ、ヨーヘイのことだから、未来の夏休みの宿題忘れでもしているんじゃありませんノ？」

「ウルセー……って、いやそうじゃなくてさあ、何というかこう……」

その時。

「ネーネー、このクラスに“望月ヨーヘイ”って子、いる？」

俺のクラスに誰かが俺を尋ねてきた……って。

「あー……先輩、俺、忘れてたこと思い出しましたー……」

「……奇遇だな、私もたった今思い出したところだ」

「？」

何も知らないサンドラはキョトンとしているが、俺と先輩の顔はこれ以上ないほど、すん、としているに違いない。

「チョット！　忘れたフリして逃げようたって、そうはいかないからね！」

だって……教室に現れたのは、二年の“夏目ハルカ”なのだから。

思い出した（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

憐れな道化師（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「チョット！　忘れたフリして逃げようたって、そうはいかないからね！」

教室にやって来た二年の“夏目ハルカ”が、ニヤニヤと下品な笑みを浮かべながらヅカヅカと教室の中へと入ってきた。

「えーと、先輩……あの夏目先輩は、俺の精霊（ガイスト）がクラスチェンジして強くなったこと、知らないんですか……？」

「う、うむ……というか私もその、あ、あれ以来忙しくてな……まともに会話した記憶もないんだ……」

あー、つまり無視してたんですね？　その気持ち、すごくよく分かります。

「さあ！　あなたの精霊（ガイスト）のステータスを見せてよ！」

ウーン……嬉しそうにそんなこと言ってるけど、本当に見せていいのかなあ……。

「先輩……どうします？」

「う、うむう……ま、まあいいんじゃないか？」

先輩は顔をしかめながら曖昧に返事をした。

い、いや、一応賭けをしたのは先輩なんですからね？

「どうしたの？　早くしてよ。それとも……恥ずかしくて見せられ

ないとか？　キャハハハハ！」

そう言って、からかいながら愉快そうに笑う夏目先輩。
俺にはその姿が、憐れな道化師にしか見えなかった……。

「な、何ですノ！　いくら先輩だからって、ヨーヘイに失礼ですわヨ！」
「キャハハハハ！　だって、しょうがないんだもん！」
「お止めなさいって言ってますノ！」

い、いやサンドラよ、お前こそ止めてやってくれ……！
これ以上……これ以上、彼女を傷つけないでやってくれよ……！

とりあえず、これ以上見てられない俺は、そそくさとガイストリーダーを取り出すと、そっと夏目先輩にステータス画面を見せた。

すると。

「っ！？　こ、こんなのデタラメだから！」
「えー……そのー……」

せ、先輩！　これ以上は空気がもたないです！　助けてください！
俺はそんな思いを込めて先輩を見つめるが……。

――プイ。

あああああ！　チクショウ！　あの藤堂先輩が俺を見捨てやがった！？

「ネ、ネエ……ワタクシには何がなんだかサッパリなんですけド…

…」

困惑した表情でおずおずと尋ねるサンドラ。

仕方ないので、事の顛末（てんまつ）についてサンドラに耳打ちしてやると。

「ッ！　そ、そうですノ……」

夏目先輩をチラリ、と見たサンドラのアクアマリンの瞳は、今まで見たことがないほど憐憫（れんびん）を湛えていた……。

『ムフー！　［シン］はあの日の屈辱を忘れていないのです！　キッチリ罰ゲームは受けてもらうのです！』

「ちょ！？　［シン］！？」

どうやら［シン］は、この夏目先輩に対してかなり怒っていたみたいだ。

いつもにぱー、と笑うあどけない表情は鳴りを潜め、［シン］のオニキスの瞳には絶対に許さないという強い意志が込められていた。

「え、えええええ！　いい、いいよ！？　しょ、勝負だから、ぬぬ、脱いだって全然構わないし！？　どど、土下座だってしてあげるよ！？」

そう言うと、夏目先輩はさながらマンガみたいに瞳をグルグルさせながら、制服に手を掛けようとした。

「あう！？　ま、待つんだ！　もう勝負なんてどうでもいいじゃないか！　き、君の謝罪だけ受け取るということでどう……『そんな程度じゃ、この［シン］は納得できないのです！　スッポンポンになるのです！』……って、［シン］！？」

ああああ！　せっかく先輩が話を収めようとしたのに、まぜっかえしやがってえええええ！

「ホ、ホラ！　［シン］もそんな前のことは忘れて、その……な？」
『マスターは甘いのです！　戦いは数なのです！』
「いや、言っている意味が分かんねーよ！？」

ダメだ……このままじゃ［シン］は絶対に折れそうにない……。
こうなったら。

「［シン］ー……今って夏だからさー、ルフランでもアイスクリーム始めたの、知ってた？」
『「っ！？」』

俺の言葉に［シン］がゴクリ、と唾を飲み込む。で、なんで先輩まで一緒になってるんですか……。

「だからさー……もう、こんなくだらないことは放っておいて、これからそのアイスクリーム、食べに行かないか？」

と、とりあえず［シン］の好物で釣ってみたんだけど……ど、どうだ……？

『三つ』
「はい？」
『アイスクリーム三つで、手を打つです』
「！　お、おう！　三つだな！」

よし！　何とか［シン］が折れたぞ！　……って！？

「チョット!?　な、何やってるんですかあああああ!?」
「ななな、何って!　ア、アタシは約束を守るんだから!?」

俺達が［シン］を説得している間に、この夏目先輩はしれっと制服を脱いでおり、既に下着姿になっていた!?

「ももも、望月くん!　見るなあああああ!」
「ヨーヘイ!　見ちゃダメですワ!」
「ふげ!?」

先輩とサンドラに思い切り突き倒されて俺は教室の床を転げ回り、そのまま気を失った。

◇

その後、俺が意識を取り戻すと、教室には既に夏目先輩の姿はなく、先輩とサンドラの心配そうな表情が飛び込んできた。
で、その視界の片隅では、大はしゃぎしながら『アイス!　アイス!』と連呼する［シン］の姿もあった。

そして俺達はルフランに来て今に至る、ってわけなんだけど。

「うー……先輩もサンドラもヒドイなあ……」
「う……す、すまない……」
「申し訳ありませんワ……」

俺がジト目で先輩とサンドラを睨むと、二人は恐縮した様子で俯(うつむ)いた。
といっても、別に俺も本気で怒ってるわけじゃないからいいんだ

けど。

「それで、夏目先輩は結局どうしたんですか？」

「あ、ああ……それなんだが……」

先輩の話によると、夏目先輩はあの後、顔を真っ赤にしながら脱いだ制服を抱え、『覚えていなさいよ！』との捨て台詞（セリフ）を吐いて教室を飛び出して行ったそうな。

で、そんな夏目先輩の下着を、鼻の下を伸ばしながらまじまじと眺めていたクラスの男子達は、女子達から粛清を受け、阿鼻叫喚（あびきょうかん）の渦と化したらしい。

言っておくが、俺は何一つ悪くないからな？

「ま、まあそういうことだから、お詫びにここはこの私が奢（おご）ろう……」

「ワ、ワタクシも……」

ウーン……逆に申し訳ないなあ……。

などと思ったけど、注文した俺のザッハトルテは、先輩とサンドラの餌食となった。

［シン］？　［シン］は約束通りアイスクリーム……というかジェラートを三つ食べてご満悦ですが何か？

憐れな道化師（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

明後日の用事（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

明後日の用事

夏休みに突入してから、今日で一週間。

俺達三人は、“アルカトラズ”領域（エリア）の第八階層を攻略中である。

「サンドラ！　左から“アーヴァンク”が三体来てるぞ！」

「分かりましたワ！」

藤堂先輩の指示を受け、サンドラの精霊（ガイスト）、［イヴァン］が鉄鞭（てつべん）を振り回しながら突っ込んで行った。

「食らいなさいイ！　【裁きの鉄槌】！」

［イヴァン］がこの階層の幽鬼（レブナント）であるアーヴァンクのうちの一体に鉄鞭（てつべん）を叩き込むと、周囲に稲妻がほとばしり、アーヴァンク達は一瞬で黒焦げになる。

「望月くん、行くぞ！」

「はい！」

そこへ、先輩の［関聖帝君］と俺の［シン］が一気になだれ込み、［関聖帝君］は青龍偃月刀（えんげつ）を一閃させるとアーヴァンクの二体の首と胴体が分かれた。

残る一体も、［シン］の呪符で爆散する。

「ふう……」

戦闘が終わり、俺は深く息を吐いた。

「フフ……もうこの辺りの幽鬼（レブナント）も大分慣れてきましたワ」

「ああ……これなら次の階層に進んでも良さそうだな」

サンドラの言葉に先輩が同意して頷く。

さて……ここまで“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略は順調と言っていいだろう。

実際、ここまで一週間で来れたんだ。このままいけば、八月のお盆前には第二十階層に到達できそうだ。

だけど、この“アルカトラズ”領域（エリア）に二体の領域（エリア）ボスがいる。そして、そのことを二人にはまだ教えていない。

さて……どうやって伝えたものか……。

「ヨーヘイ？」

すると不思議そうな表情を浮かべたサンドラが、俺の顔を下から覗（のぞ）き込んでいた。

「お、おお、悪い、ちょっと考えごとしてた」

「ソウ？　ここはまだ領域（エリア）内ですから、油断はいけませんわヨ？」

「はは、そうだな」

俺は一旦考えるのを止め、領域（エリア）の探索に集中する。

まあ……領域（エリア）ボスに関しては、実際に遭遇してから考えることにしよう。

「うむ。では今日の探索は一旦ここまでにして、ルフランでミーティングをしよう」

「賛成ですワ！」

うん、それって先輩とサンドラがスイーツ食べたいだけなんじゃ……ま、いいか。

『ムフー！　アイス！　アイスを食べるのです！』

「ハイハイ」

……最近［シン］も、マスターの俺に対して遠慮が無くなってきたなあ……。

◇

「ふふ……やはり今日はパルフェにして正解だったな」

「そうですわネ！」

“アルカトラズ”領域（エリア）から出た俺達は、そのままルフランに来て特製パルフェを食べている。

なお、先輩はチョコのパルフェ、サンドラがイチゴのパルフェ、俺は抹茶のパルフェだ。

『んふふー！　ンマンマなのです！』

で、［シン］もゴキゲンな表情でトリプルにしたジェラートに舌鼓を打っている。

「そういやサンドラ、［イヴァン］のステータスって今どうなってるんだ？」

「［イヴァン］ですノ？　ちょっとお待ちくださいませ……」

サンドラはカバンからガイストリーダーを取り出して画面を俺達に見せてくれた。

――――――――――――――――――――――――

名前　：イヴァン

属性　：皇帝（♂）

ＬＶ　：４６

力　　：Ｓ＋

魔力　：Ｅ

耐久　：Ｓ

敏捷　：Ｄ＋

知力　：Ｃ－

運　　：Ａ

スキル：【裁きの鉄槌】【統率】【雷属性魔法】【雷属性無効】【状態異常弱点】

――――――――――――――――――――――――

「おお！　いつの間にかレベルが四十六になってるじゃねーか！　しかも『耐久』が“Ｓ”かよ！」

「フフ……ドウ？　すごいでしょウ？」

俺が驚きの声を上げると、サンドラは嬉しそうに微笑んだ。

いや、これなら“アルカトラズ”領域（エリア）で十二分に戦えているのも頷けるわ。

「ところで、ヨーヘイと先輩はどうなんですノ？」

「あー……」

「う、うむ……」

サンドラの問い掛けに、俺と先輩は言い淀む。

というのも、俺も先輩も、精霊（ガイスト）のレベルが一切上がっていないのだ。

クラスチェンジしたらレベルがほとんど上がらないっていうのは分かってはいたけど、ここまで上がらないっていうのは想像できなかったからなあ。

「ま、まあ……私も去年の秋にクラスチェンジしてから、レベルが三は上がったから、成長はしているぞ。だから……」

先輩は俺のほうを見ながら、柔らかい笑みを浮かべてそう告げる。多分、先輩は同じくクラスチェンジをしている俺を気遣って、そう言ってくれたんだろう。

「あはは、上がりにくいんだったら、それ以上に幽鬼（レブナント）を倒すだけですよ。それに……あの時ほど絶望的じゃない」

「ふふ……そうか、そうだったな……」

俺の答えに、先輩は納得するように頷きながら微笑んだ。

そう、先輩は知っている。俺と［シン］がどうやって今に至ったのかを。

「？　なんですノ？」

そんな俺と先輩の様子に、サンドラはキョトンとしていた。

「いや、何でもない。ねえ、先輩？」

「ふふ、そうだな。確かに、何でもない」

「？」

あの“ぱらいそ”領域（エリア）については俺と先輩、二人だけの秘密だからな。

もちろん、先輩のお父さんである学園長にも伝わっていない。

「それより、例のサンドラの妹はいつコッチに来るんだ？」

「ア！　そうでしたワ！　八月一日に来ることになりましたノ！」

「へえー……じゃあ、三日後かー……」

うぐう……サンドラと恋人のフリする、のかあ……。

ま、まあサンドラはメインヒロインの一人だけあって、胸は絶壁だが圧倒的に可愛い。胸は絶壁だが。

そんな彼女に、クソザコモブ設定の俺が彼氏役って……面白いもんだなー……。

「……」

そんな中、先輩はただ無言で俯（うつむ）きながら俺とサンドラの会話を聞いていた。

先輩……。

「そ、そうだった！」

「きゅ、急になんですの！？」

「あ、いや……じ、実は明後日、ちょっと用事を思い出してさあ……その日、“アルカトラズ”領域（エリア）、行けそうにない」

「そうなんですノ……でしたら、仕方ないですわネ」

「はは、悪い……」

俺は苦笑しながら頭を掻（か）くと、サンドラが少し残念そうな表情を浮かべる。

先輩も……唇をキュ、と噛んでいた。

……そして、この日はお開きとなった。

明後日の用事（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

デートのお誘い（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

デートのお誘い

「ふう……」

先輩達と別れ、家に帰ってきた俺は部屋に入るなりベッドに寝転がって息を吐いた。

で、おもむろにスマホを取り出し、ＲＩＮＥアプリを立ち上げる。

「さて……うう、緊張するなあ……」

スマホ画面に表示されている連絡先とにらめっこしながら、約三十分が経過。

く、くそう……躊躇（ちゅうちょ）してどうするんだよ！　覚悟を決めろ！　俺！

『マスター、さっきからスマホの画面をジーッと見てどうしたのです？』

「うわっ！？」

突然、ニュ、と俺の視界に［シン］が現れ、俺は驚きの声を上げた。

「お、驚かすなよ……危うく通話ボタンにタップするところだったじゃねーか……」

『？　どこかに電話するのです？』

「お、おう……」

コテン、と首を傾（かし）げる［シン］に、俺は曖昧な返事をすると、またスマホの画面とにらめっこを再開する。

で、でも……このままじゃ埒が明かない……！

「よ、よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩く。

で、深呼吸を数回繰り返すと……通話ボタンをタップした。

――プルルル……ガチャ。

『もしもし』

「あ……もしもし、先輩ですか？」

『ふふ……私の電話に掛けておいて、そう尋ねるのもおかしなものだぞ？』

「あ、あはは……」

電話越しに藤堂先輩そう言われ、俺は苦笑する。

はあ……先輩の声を聞いているだけで癒されるなあ……。

『それで、わざわざ電話を掛けてきてどうしたのだ？』

「あー、そのー……」

『？』

オイオイ、ちゃんと言えよ俺。

そのために、覚悟決めて電話したんだろうが。

「そ、その！　明後日の七月三十一日、ですけど……」

『ああ、確か望月くんは予定があるんだったか？　ふふ……その日は君に逢えないのは残念だが、予定があるなら仕方ない、な……』

電話の向こうから、先輩の寂しそうな声が聞こえてくる。

「……それ、実は嘘なんです」
『嘘？　そ、それはどういうことなんだ……？』
先輩は少し語気を強めて尋ねてきた。
さあ……ちゃんと伝えよう。
「そ、それで……その……もしよかったら、その日……お、俺と、遊びに行きませんか？」
『あう！？　あ、遊びにだと！？』
「はい……！」
よ、よし！　言った！　言ったぞ！
『そ、それは、サンドラを含めた三人で、ということか……？』
「ち、違います！　そ、その……俺と、先輩の二人で……」
『っ！？』
電話越しに先輩が息を飲み、しばらく沈黙が続く。
ど、どうだ……？　こ、断られたりしたら、多分俺、しばらく恥ずかしさで先輩の顔を見れない自信があるぞ。
『……うん』
「っ！　ほ、本当ですか！」
先輩の消え入りそうな声で了解の返事が返ってきた！
『だ、だけど……その……わ、私なんかで良いのか？　こ、こう言っては何だが、わ、私はあまり、そういったことは得意では、ない……ぞ？』

「何言ってるんですか！　俺は先輩がいいんです！　先輩と一緒に遊びたいんですよ！」
『あうあうあうあうあうあうあうあうっ！？』
先輩が珍しく自分を否定するようなことを言ったので、俺は気づけばスマホに向かって訴えていた。全く……先輩は変なところで自分を卑下（ひげ）するところがあるから困ったもんだ
「それじゃ、俺が先輩と遊びに行く場所考えておきますので……そ、その、よろしくお願いします……！」
『あ……ふふ、こちらこそ』
「では、これで失礼しますね」
『あ、う、うむ……その、ありがとう……』
「何言ってるんですか。お礼をいうのは俺のほうなんですからね！」
「あう……う、うん……」
俺は通話終了のボタンをタップすると。
「よっしゃあああああああ！」
『はうはうはうはう！？』
部屋の天井に向かって高々と拳を突き上げ、大声で叫んだ。
やったぞ！　先輩とデートだ！
「フフフ……軍資金は幽鬼（レブナント）を倒して手に入れたマテリアルが大量にあるからなんの心配もないし、あとはデートプランをバッチリ練って……」
『はう！　マスター、藤姉さまとデートなのですか！』
「おう！」

尋ねる［シン］に、俺はビシッと親指を突き立てた。

『はう！　すごいのです！　デートなのです！』

「おう！　デートだ！　すごいのだ！」

『ところで……デートって何なのです？』

◇

七月三十日、“アルカトラズ”領域（エリア）の第九階層。

今、俺とサンドラはすごいものを目撃している。

「はあああああああああああああッッッ！」

――斬ッッッ！

先輩の［関聖帝君］は、現れる幽鬼（レブナント）を片っ端から斬り伏せていた。

いやコレ、すさまじ過ぎるだろ。

「ふむ……今日はすこぶる調子がいい！　この勢いなら、今日中にこの領域（エリア）を踏破することも可能だな！」

「「イヤイヤイヤイヤ」」

俺とサンドラは無表情で手を左右に振りながらツッコミを入れる。

先輩は嬉しそうにそう言うが、現実的に無理ですから。

「トコロで……先輩、何かいいことでもあったんですノ？」

「ななななな!?　べべ、別に何もないぞ!?　な、なあ、望月くん！」

「うえ!?」

先輩、何ですかその返し方は。これじゃまるで、先輩のいいことってやつに俺が絡んでるって言ってるようなモンじゃないですか……。

「ハハーン……さては！　二人でコッソリデートでもするつもりですのネ！」

「「っ！？」」

サンドラの口から放たれた一言に、俺と先輩は思わず息を飲んだ。

というかサンドラ、鋭すぎるだろ。

で、先輩に至っては、恥ずかしさからなのか耳まで真っ赤になってるし……先輩、絶対に嘘がつけないタイプだなあ……。

「ナーンテ、そんなことあるはずがありませんワ」

「むむ、それはどういう意味だ？」

サンドラがおどけながら肩を竦めてそう言うと、先輩は何故かサンドラに絡んでいった。

何ですか？　先輩は一体どうしたいんですか？

「だって、この朴念仁がそんなこと意識してできるわけありませんもノ」

「……むむ」

サンドラと先輩がこちらを見やりながら、ハア、と深い溜息を吐いた。

というか、失礼だなオイ。

それに……今回は俺からデートに誘ったっていうのに、何で先輩まで一緒に溜息吐いてるんですか……。

そんなある意味残念な先輩を見やると、俺も深い溜息を吐いた。

デートのお誘い（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩とのデート（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

先輩とのデート

いよいよ七月三十一日。
今日は待ちに待った藤堂先輩とのデートである。

ただし、俺は先輩に『遊びに行こう』としか言っていないので、先輩的にデートって意識はない可能性をあるけど……イヤイヤイヤ、いくら先輩でも、そんなことないよな？

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩くと。

「行ってきます」

家を出て、先輩との待ち合わせ場所である駅前へと急ぐ。
……といっても、約束の時間は十一時だから、まだ一時間以上余裕はあるんだけど。

「でも、嬉しいんだから早めに向かってしまうのはしょうがないよな」

などと誰に言い訳しているのか分からないような呟きをしながら、駅前にたどり着くと。

「あ……も、望月くん……」

何と、先輩は既に待ち合わせ場所に到着していた。

しかも、今日の先輩のコーデときたらどうだ。

白のノースリーブのサマーニットに黒のタイトなロングスカート、革のアンクルストラップのサンダル、アクセントとして麦わらのカンカン帽をかぶっていた。

なんというか……先輩はスタイルが抜群だから、その……色々と強調され過ぎて目のやり場に困る。いや、もちろん最高ですけど何か？

「すいません先輩！　お待たせしてしまいました！」

「ふふ……私も今来たところだし、それに……」

そう言って、先輩はチラリ、と駅前の時計を見やったので俺も見ると、時計は朝十時を指していた。

「で、でも、今日誘ったのは俺のほうですから！」

「い、いや、私が勝手に早く来てしまっただけだから、その……」

ううう、モジモジしてる先輩は超可愛いが、このままじゃ気まずいなあ……。

「で、でも！」

「でも……？」

「その……一時間も早く先輩を見れて、少しラッキーです。それに、今日の先輩の服装、すごく似合っていて本当に綺麗です」

「あう！？　ま、また君はそんなことを……だが、ありがとう……」

先輩は顔を真っ赤にし、帽子の鍔を下げて顔を隠してしまった。

でも、口元は最高にゆるっゆるである。

「あはは……じゃ、じゃあ行きましょうか」
「う、うむ。それで、今日はどこに遊びに行くんだ？」
「それは……」
ということで
「うわあああ……」
俺と先輩は、高層の商業ビルの最上階にある水族館に来ていた。
夏だし水族館だったら涼しいかなーと思ったのと、その場所が先輩にすごく映えるんじゃないかと感じたからのチョイスだ。
といっても、スマホでメッチャ調べたけど。
で、先輩は気に入ってくれたようで、今もたくさんの小さな魚が群れで泳いでいる水槽を眺めながら真紅の瞳をキラキラさせている。
「先輩は、魚が好きなんですか？」
「ん？　ああ、もちろん嫌いじゃないが、さすがにこの幻想的な光景は感動するな」
「あはは、喜んでくれて何よりです」
「そ、そんなの当然じゃないか……だって、君が誘ってくれたんだから……」
「っ！？」
先輩が頬を染めてはにかみながら、そっと目を逸らす。
せ、先輩……そんな言葉と仕草、反則ですよ……というか尊い。
ひたすら尊い。
「あ、む、向こうはペンギンがいるみたいだぞ！　早く行こう！」

「は、はい！」

先輩は少し恥ずかしかったのか、話題を逸らすように俺の手を引いてペンギンがいるエリアへと移動した。

◇

「ふふ、楽しかったな！」
「はい！」

水族館を全て見て回り、俺達は水族館と同じビル内にあるカフェで食事をとることにした。

「先輩はどの魚が一番好きでした？」
「ペンギン」

アレ？　俺は今、確かに『魚』って聞いたよな？

「ええと先輩、魚の中でどれが一番好きでしたか？」
「ペンギンだ」

あ、ハイ。先輩はペンギンが好きなんですね。分かりました。

「ふふ……あの中の一匹くらい、家に連れて帰って飼いたいな……」
「そ、そうですかー……」

多分ペンギンのことを思い出しているんだろう。先輩はボーッとしてはクスクスと笑っている。

そして、こんな先輩を超可愛いと思いながら眺めている自分がいるわけで。

はは……幸せだな……。

「お待たせしました」

するとカフェの店員さんが、注文していた今日のランチプレートを運んできてくれた。

そして……先輩が俺のプレートをメッチャ見ている……。

「……先輩はミートボールが好きなんですか？」

「っ！　う、うむ……その……」

俺は何も言わず、ス、と先輩の前にプレートを差し出すと。

「い、いいのか？」

「……（コクリ）」

すると先輩は、ぱあ、と笑顔を浮かべ、早速フォークでミートボールを突き刺した。

そして、その口の中へと運ぶと。

「！　お、美味しい……！」

「あはは、良かったです」

はは、先輩は本当に美味そうに食べるよなあ……。

結局俺は、そんな先輩を見ているのが楽しくて、しきりに先輩に勧めては喜ぶ先輩を眺めていた。

◇

「いやあ、楽しかったなあ……！」

カフェを出た後も、先輩とビル内でウインドウショッピングを楽しんでいた俺達だったが、時間が過ぎるのはあっという間で、時刻はもう夕方五時を迎えていた。

「あはは。先輩、今日はありがとうございました！」
「何を言う。お礼を言うのは私のほうだ。本当にありがとう」

ビルの屋上にある展望台で、夕陽に照らされた先輩がニコリ、と微笑んだ。
その姿は、胸がギュ、と苦しくなるほど綺麗で……。

「ふふ、それに……」
「それに？」
「今日誘ってくれたのは、その……一昨日、私が落ち込んでいたからだろう？」

そう言うと、先輩が少し苦笑した。
だけど、どうやら少しだけ先輩は勘違いしているみたいだ。

「あはは、確かに一昨日の先輩が気になったことは否定しませんけど、俺が今日誘ったのとはあまり関係ないですよ」
「じゃあ……どうして、私を誘ってくれたんだ……？」

先輩は上目遣いでおずおずと尋ねる。
その真紅の瞳は、何かを期待するような、それでいて、どこか不安そうな、そんな色をしていた。

「決まっています。俺が先輩とこうやって一緒に遊びたかったから

です。その……二人っきりで」
「っ！　……ふふ、そうか。ありがとう」
そう答えると、先輩は少しはにかんで、俺の隣にきた。
そして……そっと、俺の肩にもたれかかった。
「そ、その……ほんの少しだけでいいから、このまま……」
「あはは、少しなんて言わずに、いつまででもいいですよ？」
「あう……ふふ、君は優しいが少し意地悪だな……」
そうしてしばらくの間、俺と先輩はビルから見える夕陽を眺めていた。

先輩とのデート（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

妹、襲来（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

妹、襲来

「ふわあ……おはよう」
「ヨーヘイ！　シャキッとなさイ！」

先輩とデートをした次の日の朝、俺は駅前でサンドラと合流した。というのも、これからはるばるルーシ帝国からやって来るサンドラの双子の妹、“プラーミャ”を空港まで迎えに行くためである。もちろん、サンドラの恋人役として。

で、サンドラはと言えば、水色のノースリーブのワンピースに白のサンダル、肩に麻のストールをまとっていた。うむ、よく分かってるじゃないか。よきよき。

「モウ……ワタクシの彼氏なんですから、シッカリするのですワ！」
「待て。彼氏じゃなくて彼氏役、な」
「そ、そうですけド……」

するとサンドラは、唇を尖らせてプイ、と顔を背けた。
全く……。

「ワッ！？」
「心配するな。どこまでできるか分からんが、俺もサンドラの彼氏として頑張るから」
「あ……フフ……」

俺は少し乱暴にサンドラの頭を撫でてやると、彼女ははにかみながら目を細めた。

「二人共、待たせたな」
「「先輩！　おはようございます！」」
「うむ、おはよう」

すると先輩は、少し駆け足で俺達の元へと手を振りながらやって来た。
なお、今日の先輩は昨日の装いとは違い、白のノースリーブのブラウスにデニムジーンズという少しラフな格好だ。うむうむ、これもよき。
でも、サンドラといい先輩といい、今年の夏はノースリーブが流行ってるのかなあ。好きだからいいんだけど。

「先輩、引率係をお願いして申し訳ありませんワ」
「ふふ、なあに。構わないさ」

そう、サンドラは俺に恋人役を頼むだけじゃなく、先輩にも一緒について来てほしいと頼んだのだ。
というのも、証人がいるほうが説得力があるし、それに学園長の一人娘である先輩ならプラーミャも安心するからという理由らしい。

「さあ、空港に向かおう」
「「はい！」」

俺達はモノレールに乗り、臨海地区のはずれにある空港へと向かった。

「それで……サンドラの妹って、どんな奴なんだ？」

俺はおもむろに隣に座るサンドラに尋ねてみる。

というのも、『攻略サイト』にはプラーミャのことについて詳しく載っていないし、正直情報がなさすぎる。
ちゃんと真面目にサンドラの恋人役を果たすなら知っておくに越したことはないし、何より……サンドラが闇堕ちしないようにするためにも、詳しく知っておきたいしな。

「フフ……プラーミャはねえ……」

それからサンドラは、延々とプラーミャについて語ってくれた。
プラーミャは双子の姉妹ということもあって、いつも仲良しで、明るくて、優しくて、気遣いができて、サンドラに似て美人ということらしい。
というか、サンドラの話を聞いて思ったが、闇堕ちする要素なくない？

そしてプラーミャの精霊（ガイスト）の名は［イリヤー］、どうやらステータス的にはサンドラとよく似ているらしく、いわゆる脳筋精霊（ガイスト）ということだ。
とはいえ、それでもサンドラは一度もプラーミャに勝ったことはないらしく、ずっとそのことをコンプレックスに感じているようではある。

……よく似てるってんなら、それこそ相性の問題なだけじゃないのか？

「……まあ、いずれにしてもサンドラとプラーミャの仲が良いってことは分かったよ。だったら、わざわざ俺が恋人のフリしなくても、プラーミャに跡を継ぐようにお願いすれば案外受け入れてくれるんじゃないかとも思うんだけど？」
「分かってませんワ！　プラーミャはそんなことを受け入れる子じ

ゃありませんノ！」
「お、おう……」

サンドラに詰め寄られ、俺は思わず仰け反った。

「フウ……まあ、会ってみたら分かりますワ」
「そ、そうだな……って、どうやら着いたみたいだな」

モノレールの窓から、飛行機の離着陸をする姿が見える。
ここが“東方国”の東の玄関口である“高原国際空港”だ。

『ムフー！　あんな大きなナニカが空を飛んでるのです！　あれは超弩級の精霊（ガイスト）に違いないのです！』

モノレールの窓から外を眺めながら興奮する［シン］。
いや、少し落ち着け。

とりあえず［シン］をなだめ、俺達はモノレールを降りて搭乗者出口へと向かう。

「それで、そのプラーミャは何日くらいコッチに滞在するんだ？」
「一応、八月二十日まで滞在予定ですけド……」
「ゲ……」

あいたー、そんなに長くいるのかー……。
そうすると、その間の“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略は、俺と先輩の二人でするしかないかー……。

「フフ……大丈夫よヨーヘイ。“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略には、プラーミャも一緒に来ますワ」

「へ！？　ど、どういうこと！？」
「実はプラーミャに［イヴァン］のステータスを教えてあげたラ、どうやって強くなったのか根掘り葉掘り聞かれましたノ。それで“アルカトラズ”領域（エリア）のことを教えてあげたら、『ヤー（私）も行く！』と言ってはしゃいでましたワ」
「あ、そ、そう……」

いや、人数多い分には戦力も上がるし悪くはないんだけど……コイツ、俺があくまでも偽の恋人だってこと忘れてるんじゃないのか？

「フフ……ですので、プラーミャにバレないように頑張ってくださいまシ。ヨーヘイ」

そう言うと、サンドラが嬉しそうにニコリ、と微笑んだ。
チクショウ、無駄にハードル上げやがって。

すると。

「サンドラ！」
「プラーミャ！」

出口からサンドラと同じ顔をした女の子が、笑顔で手を振りながらこちらへと駆けてくる。
サンドラも、その女の子に向かって全力で走っていった。

……あの子がサンドラの妹、“プラーミャ”か。

妹、襲来（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ

「サンドラ！」
「プラーミャ！」

出口からサンドラと同じ顔をした女の子が、笑顔で手を振りながらこちらへと駆けてくる。
サンドラも、その女の子に向かって全力で走っていった。

……あの子がサンドラの妹、“プラーミャ”か。
顔の作りはサンドラと全く同じだけど、髪型はポニーテールにまとめていて、瞳の色も琥珀色をしていた。
何より……絶壁のサンドラとは異なり、プラーミャには先輩に匹敵するほど圧倒的な二つの山脈が存在していた。あ、これは確かに妹のほうがつよつよだわ。

「……！　……！　……！」
「……！？　……！　……！」

うん……当然ながら、二人はルーシ語で話しているため、俺には何を言っているのかさっぱり分からない。

「ふふ……二人共本当に仲が良いんだな」
「先輩！？　ひょっとしてルーシ語分かるんですか！？」
「？　ああ、日常会話程度だがな」

す、すごい……先輩って、一体どこまでハイスペックなんだよ……！

これが準ラスボスとクソザコモブの差なのか……！

「ア！　紹介するワ！　コチラが“藤堂サクヤ”先輩で、コッチが“望月ヨーヘイ”ですワ！」

「あ、は、はじめまして……」

「ふふ、はじめまして」

いきなりサンドラに紹介され、俺は思わずしどろもどろになる。

一方、先輩はといえば余裕の表情で、ス、と右手を差し出した。

「アナタが藤堂先輩なのですネ。サンドラから聞いていまス。ドウゾよろしくお願いしまス」

「こちらこそ」

プラーミャと先輩は、お互いにこやかな表情で握手を交わす。

「あ、改めて、“望月ヨーヘイ”です」

そう言って、俺も先輩に倣って右手を差し出すと。

「フフフ……ヨロシクお願いしまス」

プラーミャは俺の右手をつかみ、握りしめ……って！？　痛い！？　痛いんですけど！？

「……アナタ、私のサンドラに手を出したんですってネ？　フフフ……残り二十日、指折り数えるといいワ」

「ヒイイ」

ニタア、と口の端を三日月のように吊り上げて嗤いながら、プラ

ーミャはそんなことを耳打ちしてきたので、俺としては軽く悲鳴を上げるしかできない。

というか……ひょっとしてプラーミャって、シスコンでヤンデレ？

◇

「では、プラーミャも長旅で疲れているだろうから、ここで解散するとしよう」

「ですね」

俺達四人は駅前まで帰ってくると、先輩がそう告げたので、俺も同意した。

だけど。

「何を言ってますノ。ヨーヘイはワタクシのか、彼氏なのですからラ、ちゃんとワタクシ達をエスコートしてくださいまシ」

「へ？」

顔を赤くしながらそう言い放つサンドラに、俺は思わず気の抜けた返事をしてしまった。

え？　俺、まだ解放してもらえないの？

「フフ……サンドラ、せっかくですから私（ヤー）は二人っきりになりたいワ」

「ホ、ホラ、プラーミャもそう言ってるから、今日のところは……」

「ダメですわヨ」……ハイ……」

くそう、サンドラよ、プラーミャが俺を今にも殺しそうな勢いで睨みつけてるのに気づいてないのか？　このままじゃ俺、幽鬼（レブナント）じゃ

なくお前の妹にトドメ刺されそうなんだけど。

「むむ！　な、なら私も一緒に行こう！」

おお……！　ここで先輩も一緒について来てくれると言ってくれたぞ！　さすがに先輩がいれば、プラーミャも俺に何かしたりはしないだろう……だよな？

『マスター、まだ家に帰らないのですか？』

退屈なのか、［シン］がニュ、と現れてそう尋ねてきた。というか［シン］も、周りに人がいても、もはやお構いなしで出てくるなあ。

「ッ！？　コ、コレはどういうことですカ！？」

プラーミャは［シン］を指差しながら、目を見開いていた。まあ、［シン］を初めて見るプラーミャからしたら驚きだろうなあ。

「はは、俺の精霊（ガイスト）は特別みたいでな、言葉を話せるんだよ」

「驚いたワ……」

うむ、なんだかチョットだけ見返せたような気がする。気分いい。

「マ、マア、ヨーヘイはちょっと変わってるところありますノ」

おいサンドラ、その言い方はないだろ。

ということで、俺達はサンドラの家へと向かった……んだけど。

「な、なあサンドラ、お前……留学生だよなあ……？」
「？　当たり前ですわヨ？」

だったらなんで、お前はこんなすごい部屋に住んでるんだよ！？
というか、どう見ても俺の家より広いじゃねーかよ！　しかもリビング！　これだけで俺の部屋の十個分はありそうなんだけど！？

「変なヨーヘイですワ」

そう言うと、サンドラはプラーニャを連れてどこかへ行った。

「ま、まあサンドラもルーシ帝国の名門貴族だからな……そう考えれば、この部屋も納得だろう」
「あはは……ですねー……」

先輩の慰めにも似た言葉に、俺は乾いた笑いしか出てこなかった。

『すごいのです！　すごいのです！　広々なのです！　マスターの部屋とは大違いなのです！』

コラコラ［シン］、よそ様の家で動き回っちゃいけません。
そして、後で覚えてろよ。

「フフ、お待たせしましたワ」

すると、サンドラとプラーミャがティーセットとお菓子の乗ったワゴンを押しながらリビングへと戻ってきた。

「なあ、サンドラってこんなに広い家に、一人で住んでるのか？」

「？　エエ……それが何カ？」
「そっか……いや、いいんだ」
「？」

んだよ……はるばるルーシ帝国から一人っきりでやって来て、知り合いも誰もいないのに実家のプレッシャーとか妹へのコンプレックスに耐えて……なのにいつも気丈に振舞って……。

カッコイイじゃねーか。

「ふふ……相変わらず君は優しいな」
「先輩……？」

見ると、何故か先輩は俺を柔らかい瞳で見つめていた。
まるで、俺が今考えていたことを見透かしているように。

はは……先輩には敵わないなあ……。

「彼女は、これから私達で支えてあげよう。もう君には、その力があるのだから」
「はい……」

先輩の言葉に、俺は静かに頷いていると……今度は、プラーミャが俺に向けて訝し気な視線を送っていた。

「？　どうした？」
「イイエ、別ニ」

そう言うと、プラーミャはプイ、と顔を背けた。

それから俺と先輩が帰るまで、俺はプラーミャと視線を合わすことは一度もなかった。

プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

放棄（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

放棄

「な、なあ……プラーミャをどこか観光にでも連れて行ってやったりしたほうが良かったんじゃないのか……？」

“アルカトラズ”領域（エリア）の第六階層。

俺は前を歩くプラーミャに聞こえないように、隣のサンドラにそう耳打ちする。

「……ワタクシもそう言ったんですけド、プラーミャがどうしてもこの領域（エリア）に行きたイ、っテ……」

「ええー……」

いや、初めて“東方国”にきたんだから、普通は観光したくなるモンだろ。寺とか、神社とか、電気街とか、電気街とか。

「フフフ……食らいなさイ。【フレアランス】」

プラーミャの精霊（ガイスト）、［イリヤー］の持つ槍が赤く輝き、目の前の幽鬼（レブナント）に勢いよく突き刺すと、幽鬼（レブナント）の全身が炎に包まれ、幽子とマテリアルに変わった。

なお、この［イリヤー］の外見は、騎士の鎧をまとい、その右手には短槍を、左手にはバックラーを持った中年男性である。だが、［イヴァン］と違ってイケオジでもある。

というか……初めてこの領域（エリア）に来たっていうのに、平均レベル六十の幽鬼（レブナント）相手にここまで無難に戦えるって、ハッキリ言って強すぎだろ。

「ふふ、見事だな」
「イエ、藤堂様に比べればマダマダでス」
先輩が微笑みながらプラーミャを褒めるが、彼女は表情を崩さないまま謙遜した。
何というか……双子なのにサンドラと全然性格が違うのな。
「さて……この様子なら第八階層に行っても問題ないとは思うが……念のため、プラーミャの精霊（ガイスト）のステータスを見せてくれるか？」
「エ……？　ステータス、ですカ……？」
「ここから先の対策……特に、私達もまだ踏み入れていない第十階層以降のことも考えれば、私達が知っておくに越したことはないと思うが……嫌か？」
「イ、イエ……そういうわけでハ……」
先輩にそう言われ、プラーミャは少し困ったような表情を見せるが、結局、渋々と言った様子でポーチから何かの端末を取り出した。
「それは？」
「コレは“ガイストアナライザー”といって、精霊（ガイスト）のデータを見るためのものでス」
先輩の問い掛けに、プラーミャが淡々と説明する。
というか、俺達が持ってるガイストリーダーと同じようなモンかな。
「コチラが、［イリヤー］のステータスでス」
俺達はそのガイストアナライザーとやらの画面を見ると。

――――――――――――――――――――
名前：イリヤー
属性：英雄（♂）
ＬＶ：３９
力　：Ａ＋
魔力：Ｂ
耐久：Ｓ
敏捷：Ｃ＋
知力：Ｅ
運　：Ｃ＋
スキル：【絨毯爆撃（じゅうたん）】【鼓舞】【スヴャトゴル】
【火属性魔法】【火属性無効】【状態異常弱点】
――――――――――――――――――――

……うん、サンドラの［イヴァン］みたいに物理一辺倒ってわけじゃないけど、それでも脳筋ステータスであることには変わりないな。何といっても、『知力』が“Ｅ”だし。

「ふむ……レベルもそれなりにあるし、ステータスも申し分ない。これならば、さらに先も問題なさそうだな」

「ありがとうございまス」

先輩の言葉に、プラーミャは軽く頭を下げた……が、すぐに顔を上げ、今度は俺をキッ、と睨んだ。

「ソレデ、藤堂様は良いのですガ、その男こそ私達（ヤー）と一緒に帯同できる実力はあるのですカ？　にわかに信じられませんガ」

「ふふ、だそうだが？」

すると先輩はどこか嬉しそうに俺に振った。
［シン］の実力を見せつけろってことですね？　分かります。
「ほら。これが俺の精霊（ガイスト）のステータスだよ」
「コ、コレハ……！？」
ガイストリーダーを取り出してプラーミャにステータス画面を見せると、彼女は目を白黒させた。
まあ、レベルも上だし、ステータス……特に『敏捷』に関しては規格外だからな。その反応も頷ける。
なのに、何でそんな忌々しそうに俺を睨むのでしょうか……。
「ふふ、満足したか？」
「ドウ？　スゴイでしょウ？」
そして、何故か先輩とサンドラがドヤ顔でプラーミャに尋ねた。
「……エエ。とりあえず、精霊（ガイスト）だけは及第点ですネ」
何だよその『精霊（ガイスト）だけ』ってのは。
ハア……ま、いいか。
ということで、俺達は次の第八階層に進んだが、そこでもプラーミャは危なげなく幽鬼（レブナント）を倒していった。
なので、そのまま第九階層にも進んだんだけど……。
「ちょ！？　おま！？　まだ俺達が前にいただろうが！」
「アラ？　ならお得意の『敏捷』を活かして戻ればよろしいのでハ？」

と、こんな感じで隙あらばプラーミャの奴が俺を亡き者にしようと画策してきやがる……。

というか、そんなに俺がサンドラの彼氏（ニセモノ）なのが嫌か。嫌なんだろうな。

「プラーミャ！　いい加減にしてくださいまシ！」

「フフ、別に大したことじゃないでショ？」

見かねたサンドラがプラーミャをたしなめるが、当のプラーミャはどこ吹く風で、肩を竦（すく）めてヘラヘラしている。

「……ソレニ、サンドラがそこまで肩入れするほどの男にも見えないけド？」

コノヤロウ、大きなお世話だ。

「……プラーミャ、また落ち着いた時にでもゆっくり話をしようと思ってましたけド、この際だから今ココでハッキリと言っておきますワ」

「……何かしラ？」

「ワタクシはもう、ルーシには帰りませんワ！　この国で、ヨーヘイと添い遂げますノ！　ですから、『レイフテンベルクスカヤ家』の継承権も放棄するのですワ！」

「「「はあああああああああああ！？」」」

サンドラの爆弾発言に、プラーミャだけでなく、俺と先輩も一緒になって絶叫した。

放棄（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バカは余計だ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

バカは余計だ

「ワタクシはもう、ルーシには帰りませんワ！　この国で、ヨーヘイと添い遂げますノ！　ですから、『レイフテンベルクスカヤ家』の継承権も放棄するのですワ！」

「「「はあああああああああああ!?」」」

サンドラの爆弾発言に、プラーミャだけでなく、俺と先輩も一緒になって絶叫した。

というかサンドラ!?　メチャクチャ話がでかくなってない!?

「ままま、待て!?　そそ、そもそもお前達はまだ未成年なのだぞ!?　そんな話がまかり通るわけがないだろう!」

藤堂先輩がプラーミャを差し置いて、すかさずサンドラに抗議する。

「そ、そんなノ！　その時が来るまで待ちますワ！　ネエ、ヨーヘイ!」

「うあ!?」

こ、ここで俺に振るのか!?　こんなのどう答えりゃいいんだよ!

サンドラの奴は俺を睨みながらしきりにウインクしてプレッシャーかけてきやがるし、先輩は先輩で俺を凝視してるし!?

「ヨ・ー・ヘ・イ・?」

く、くそう……このまま逃げ出したい気分だ……。

先輩……こ、これはあくまでも演技ですからね？　分かってますよね？　くれますよね？　ね！

「そ、そうだ……お、俺はサンドラと、その……添い遂げる、です……！」

チクショウ、プレッシャーで声は震えるわ、手汗がヒドイわで、正直ロクな状態じゃない。

そして、先輩の俺を今にも殺してしまうんじゃないかというほどの【威圧】、シャレにならない。お願いですからスキルは使わないでください。

「本気……なノ……？」

プラーミャが、震える声でサンドラに尋ねる。

それを受け、サンドラは……力強く頷いた。

「ソウ……分かった、パパとママには私（ヤー）から話しておきまス……」

「プラーミャ……ありがとうですワ……」

イヤイヤイヤ、二人共しんみりしてるけど、コレ、茶番だからね！？　俺、そんなつもりないからね！？　ね！

「……先に進もう」

先輩は絞り出すような声でそう言うと、無言のまま歩き出した。

俺達も、その後に続く……んだけど……。

「「「「……」」」」

……完全に終末を迎える世界に絶望するかのような雰囲気だ。
俺はサンドラをチラリ、と見ると……うん、目が合った瞬間、しきりに謝る仕草をしやがった。本当に後で覚えてろ。
一方で、プラーミャは唇を噛んでずっと俯(うつむ)いたままだ。そりゃあヤンデレシスコンの彼女からすれば、到底納得できないだろうなあ……。

そして、第十階層へと続く階段を昇り切ると……これより下の階層とは打って変わり、幽鬼(レブナント)はただの一体も出現しなかった。
というか、領域(エリア)ボスの話、完全に言うタイミングを逃したままここまでたどり着いちまったなあ……。

「おかしい……この階層、何故幽鬼(レブナント)がいない……？」
「ほ、本当ですワ……」

先輩とサンドラが辺りを警戒しながら、そう呟く。
は、早く言わないと……っ！？

すると、突然プラーミャに腕をグイ、と引っ張られてしまい、俺は思わずよろめいた。

「プ、プラーミャ！？」
「……ネエ。アナタ、本当にサンドラと添い遂げる気なノ？」

プラーミャは琥珀色の瞳に涙を湛(たた)えながら、ジッと俺を見て問い掛ける。
というか、正直耐えられそうにない。

「私(ヤー)が言うのも何だけド、サンドラは名門『レイフテンベルクスカヤ家』の中において、その資質は歴代の中でも特に劣っていまス。

パパとママは、サンドラのことを“欠陥品”だト」
「……」
「そんなサンドラが、『レイフテンベルクスカヤ家』の庇護を失ったらどうなると思いますカ？　それでも、アナタは無責任にサンドラと添い遂げるのですカ？」

プラーミャは俺に必死で訴えかける。
まるで……サンドラは出来損ないだから、オマエじゃ面倒見切れないから諦めろ、とでも言うように。

「……プラーミャはサンドラのこと、そう思ってるのか？」
「ハイ」
「そっか……」

ははは、何だよソレ。

「フザケルナ」
「……アナタ？」
「フザケルナ！　アイツの……サンドラのこと、本当に知りもしないで！　勝手なことばかり言いやがって！」
「ッ！？　ヨーヘイ！？」
「望月くん！？」

俺の怒鳴り声に、サンドラと先輩が困惑しながら反応した。
ははは……俺が馬鹿にされた時でも、木崎に嵌められた時でもこんなことなかったのに、今の俺はどうしようもないくらい頭にきてる。

「オマエ、本当に双子の妹かよ。今までサンドラの何を見てきたんだよ」
「……」

「……オマエに言っといてやるよ。『レイフテンベルクスカヤ家』だっけ？　そんなクソみたいな家に、今後絶対にサンドラを関わらせたりしねーからな！」

何だよ……サンドラの頑張りを、想いを、苦しみを、何も知らないくせに……！

『まとめサイト』でサンドラのことを知ってるからじゃない。教室で最初に絡んできたあの日から今まで、俺がこの目でサンドラを見てきたんだ！

サンドラは、すごい奴なんだ！

「ヨーヘイ……」

名前を呼ばれてそちらを見ると……サンドラはアクアマリンの瞳からぽろぽろと涙を零（こぼ）していた。

「……行こうぜ」

俺はサンドラの頭を少し乱暴に撫でてやると、領域（エリア）ボスのいる部屋へと足早に向かった。

すると。

――ポン。

「……先輩」

「ふふ……私も、サンドラがすごいことは理解しているよ。だから、これからは君と私で彼女を支えてやればいい」

「はい……！」

隣に並ぶ先輩に力強く頷き、さらに奥へと進んで行く。

「ヨーヘイ……」
「……おう」
「ワタクシ……ワタクシ、頑張るかラ……！　モットモット、頑張るからア……！」
「はは、何言ってんだよ。もう、充分過ぎるほど頑張ってるじゃないか。というか、あまり頑張られ過ぎると、俺の立つ瀬がないんだけど？」

泣きじゃくるサンドラに、俺はわざとおどけてそう言うと。

「フフ……ヨーヘイのバカ」
「バカは余計だ」
「見てなさいヨ？　アッと驚かせてやるんですからラ」
「おう、そりゃ楽しみだ」

そして……俺達は領域（エリア）ボスの待つ、部屋の扉を開けた。

バカは余計だ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

死の天使（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

死の天使

俺達は扉を開け、部屋の中に入ると……一番奥で、黒檀の立派な机に向かって座っている、軍服の上から白衣を身にまとっているスケルトンがいた。

「っ!?　あれは、領域（エリア）ボスか!?」

藤堂先輩がそのスケルトンを見て叫ぶ。

そう……奴こそが、この“アルカトラズ”領域（エリア）の第十階層で待ち構えるボス、“トーデスエンゲル”だ。

その時。

「っ!?　扉が閉まった!?」

俺達が通った扉が突然閉まり、部屋の外と遮断された。

つまり……俺達を逃がすつもりはないらしい。

そして、幸か不幸かは分からないが、俺達と分断されたプラーミャは、扉の外で待機する恰好となった。

『カタカタカタ……』

トーデスエンゲルはこちらを一瞥（いちべつ）した後、ゆっくりと椅子から立ち上がる。

そして、突然右手を斜めに突き上げて敬礼したかと思うと。

「っ！　来ます！」

「「っ！」」

俺が叫ぶと同時に、先輩とサンドラが二手に分かれて散開するなり、俺に向かって医療用のメスが無数に飛んできた。

「［シン］！」

『ハイなのです！　【堅】！』

［シン］が俺達の目の前に呪符を展開すると、メスは見えない壁のようなものによって全て弾かれた。

「はあああああああああああッッッ！」

その隙に回り込んでいた先輩の［関聖帝君］が、トーデスエンゲルに向かって突進する。

「獲った！」

［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）の刃が、トーデスエンゲルの首元へと迫った、その時。

「っ！？　何だと！？」

何故か青龍偃月刀は、トーデスエンゲルの首をすり抜けて空を切った。

「クソッ！　【ミラージュミスト】か！」

そう、トーデスエンゲルは水属性の幽鬼（レブナント）で、【水属性魔法】も駆使する。

つまり……【水属性弱点】を持つ［関聖帝君］とは、非常に相性が悪い。

「サンドラ！　お前の［イヴァン］が持つ【雷属性魔法】なら、水属性のアイツと相性がいいはずだ！　俺と先輩はサポートに回るから、お前がアイツを仕留めるんだ！」

「わ、分かりましたワ！」

俺はそう指示を出すと、頷くサンドラの傍（そば）へと駆け寄った。

「行きますワ！　［イヴァン］！」

『（コクリ！）』

サンドラの掛け声と共に、［イヴァン］が鉄鞭（てつべん）を振り回しながらトーデスエンゲルに突っ込む。

その時、突然部屋の中に紫色のガスのようなものが充満し始めた。

これは……っ！？

「先輩！　サンドラ！　このガスを絶対に吸い込んじゃ駄目だ！　これは……毒ガスだ！」

「っ！？　な、何だって！？」

俺の言葉に、先輩が驚きの声を上げる。

だが、この毒ガスこそがトーデスエンゲルの最大のスキルである【ツィクロン】。この部屋という密閉された空間を最大限に活かす、最悪のスキルだ。

『攻略サイト』によれば、ガスが部屋の隅々まで行きわたるのは約十分。その間にトーデスエンゲルを倒すことがクリア条件となっ

ていた。

つまり……十分以内にこの領域（エリア）ボスを倒さないと、俺達は最悪死ぬってことだ。

「サンドラ！　お前は俺が守るから、防御は気にするな！　とにかく……ソイツをぶちのめせえええ！」

「任せなさイ！」

俺の檄（げき）に応えるように、サンドラはなりふり構わずトーデスエンゲルに突っ込む。

「［シン］！　お前は［イヴァン］より先にあの領域（エリア）ボスの元に行って、呪符でアイツの【水属性魔法】を無効化するんだ！」

『ハイなのです！』

俺の指示を受けた［シン］は、目にも止まらぬ速さで［イヴァン］の胸に手でタッチしてからトーデスエンゲルに肉薄すると、奴の周辺に数枚の呪符を展開した。

『それー！　なのです！　【封】！』

トーデスエンゲルは［シン］に向かって両手をかざすが……何も起こらないことに、首を傾（かし）げる仕草を見せた。

ハッ！　これで後はメスによる物理攻撃しかないだろう！

「今だ！　サンドラ！」

「エエ！　食らいなさイ！　【裁きの鉄槌】！」

［イヴァン］が鉄鞭（てつべん）を真上に振り上げ、トーデスエンゲルの頭部

目がけて叩き落すと、雷鳴と共に、パキン、と乾いた音が聞こえた。

「アアアアアアアアアアッッッ！」

サンドラの咆哮に呼応するかのように、［イヴァン］は鉄鞭を何度も叩き込む。

その時。

「ッ！？」

『カタカタカタ……！』

トーデスエンゲルは最後の力を振り絞り、その口から一本のメスを射出した。

そしてその切っ先は、［イヴァン］の左胸に突き刺さ……『させないのです！　【堅】！』

……らず、その直前で弾かれて床に落ちた。

「はは！　さすがだぞ！　［シン］！」

「えへへー、なのです！」

俺がガシガシと［シン］の頭を乱暴に撫でてやると、［シン］は自慢げに胸を張りながら人差し指で鼻の下をこすった。

実は、［シン］はトーデスエンゲルに肉薄する直前、万が一に備えて［イヴァン］の胸に呪符を張りつけていたのだ。

「トドメ！　ですワ！」

――バキンッッッ！

［イヴァン］が最後の一撃を叩きつけると、トーデスエンゲルの頭部が粉々に砕かれ……とうとう沈黙した。

「ハハッ！　やったな！」

「うむ！　見事だ！」

俺と先輩はすかさずサンドラの元に駆け寄り、ねぎらいと祝福の言葉をかけた。

「ハイ！　これも二人のおかげ、ですワ！」

「はは、まーな！」

「キャッ！　モウ……フフ」

俺はガシガシとサンドラの頭を撫でると、一瞬驚いたサンドラだったが、すぐに嬉しそうに目を細めた。

「むむ……も、望月くん、この私も牽制をしたり、そ、それなりに頑張った……って」

先輩が口を尖らせながら拗ねる前に、そのワインレッドのウェーブのかかった綺麗な髪を優しく撫でた。

「もちろん……先輩のおかげでもありますよ」

「ふふ……分かってるなら、いい」

先輩も嬉しそうにそっと瞳を閉じる。

――バタン。

すると、閉じられていた扉が開き……プラーミャがそこにたたず

んでいた。

「プラーミャ、この領域（エリア）ボスはサンドラが倒した」

「……」

「オマエもこの領域（エリア）で幽鬼（レブナント）の相手をしたんだ。この意味……分かるよな？」

そうだ。つまりはサンドラに、それだけの力があるってことだ。

オマエが見下していたサンドラは、ここにはいない。

「……認めなイ」

「プラーミャ？」

「認めなイ！　サンドラは……サンドラは、弱くなくては駄目なノ！　この私（ヤー）がいないと何もできないサンドラでないといけないのヨ！」

「「「っ！？」」」

そんな叫び声と共に、突然、プラーミャの身体が幽子の渦に巻き込まれた！？

こ、これって……まさか！？

『ワタシガ……ワタシダケガ（ヤー）、サンドラヲ（ヤー）オオオオオオオッッッ！』

幽子の渦が少しずつ晴れていき、姿を現したのは。

――闇に堕ちたプラーミャと、巨大な鉄槌を持った美しいエルフの女性の姿をした幽鬼（レブナント）だった。

死の天使（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

闇堕ちプラーミャ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

闇堕ちプラーミャ

『ワタシガ……ワタシダケガ、サンドラヲオオオオオオオッッッ！』

プラーミャの絶叫と共に幽子の渦が少しずつ晴れていき、その姿を現す。

それは、闇に堕ちたプラーミャと、巨大な鉄槌を持った美しいエルフの女性の姿をした幽鬼……“ヴェルンド”だった。

「な、なんでプラーミャが……闇堕ち、を……？」

俺は白目を黒く反転させ、その白い素肌に紋様を浮かび上がらせたプラーミャを凝視したまま、ポツリ、と呟く。

そもそも、闇堕ちするのはサンドラで、『ガイスト×レブナント』におけるプラーミャは名前だけの存在のはず！　なのに、なんで闇堕ちなんかしてんだよ！？

しかも、“ヴェルンド”……アレイスター学園の地下に封印されているアイツを守護する九つの柱の一柱、“アルフヘイム”の守護者だろ！？　そんなモンが、なんで二周目にしか出現しないこの“アルカトラズ”領域に！？

「一体何がどうなってんだよ！？」

「も、望月くん！？」

思わず叫んだ俺に向かって、藤堂先輩が驚きながら呼び掛ける。

でも、俺はそんな先輩に返事をする余裕すらなかった。

その時。

『アハハハハ！　邪魔者ハ消エチャイナサイ！』

プラーミャの［イリヤー］が、俺目がけて炎をまとった短槍をぶん投げてきた。

「っ！？　望月くんっ！」

先輩が俺の服をつかみ、思い切り引っ張ると、俺が元居た場所に短槍が突き刺さった。

「望月くん！　しっかりしろっ！」

「あ、せ、先輩……」

そうだった、今は呆けている場合じゃない。

今すべきは、あのプラーミャを闇堕ちから救い、目の前のヴェルンドを倒すことだ！

「すいません、先輩！　もう大丈夫です！」

「う、うむ！　なら……プラーミャを救うぞ！」

「はい！」

だけど、プラーミャを救うべきなのは俺や先輩じゃない。

俺は隣にいるサンドラを見やると。

「プ……プラーミャ……ナンデ……？」

彼女は、変わり果てたプラーミャの姿に、ただショックを受けて

いた。

「サンドラ！」

「ア……ヨ、ヨーヘイ……プラーミャが……プラーミャがア……！」

俺は膝から崩れ落ちそうになるサンドラの元へ駆け寄り、その身体を支えてやると、サンドラは困惑しきった表情で、縋るように俺を見つめた。

「ああ……分かってる……」

とはいえ、どうやってプラーミャを救う？　『攻略サイト』では、基本的にイベント進行のみで勝手に戦闘に突入するだけだし……って。

いや、まてよ？

確か、その時に戦うのは“柱”の幽鬼（レブナント）だけだったよな？

んで、幽鬼（レブナント）を倒した後のイベントパートで主人公が選択肢を選んでキャラを諭し、正解することで闇堕ちから抜け出たはず。

なら……！

「プラーミャ！　なんでこんな真似をするんだ！　オマエに一体何があるっていうんだよ！　というか、俺に何の恨みがあるんだよ！」

俺はわざと訴えかけるようにプラーミャに問いかける。

プラーミャの闇堕ち解除の条件を見出すために。

『アハハハハ！　決マッテル！　オマエガワタシノサンドラヲ奪ウ（ヤー）

カラヨ！　サンドラハコノワタシ（ヤー）ノモノナノ！　サンドラハ、ワタシ（ー）ガイナイト何モデキナイノヨ！』

「プラーミャ！？」

『“出来損ナイ”ノサンドラハ！　コノワタシ（ヤー）ガ守ッテアゲルノ！　ズット！　永遠ニ！』

何だよ……結局のところ、プラーミャの過保護が原因ってことかよ。

オマケに、実の姉のこと見下し過ぎじゃないか？　……って、認めたくないんだろうな。今まで自分より下だったサンドラが、ここまで成長してしまったことを。

よし……だったら。

「サンドラ……いいか、よく聞け。これから俺達は、プラーミャを闇堕ちさせやがったあの幽鬼（レブナント）を倒す。お前は……プラーミャを倒せ」

「ッ！？　プラーミャをですノ！？　プラーミャを……このワタクシの手で傷つけろって言うんですノ！？」

俺はサンドラを抱き寄せてそう耳打ちすると、サンドラは目を見開き、俺の胸倉につかみかかった。

「ナンデ……ナンデそんなヒドイことを言うんですノ！　プラーミャはあの幽鬼（レブナント）に操られてるだけなんですのヨ！　ナラ！」

「それじゃ解決にならねえんだよ！　確かにプラーミャはあの幽鬼（レブナント）に操られてる！　だけど、それはアイツが心の中に闇を抱えているからだ！」

「ッ！？」

俺はサンドラの両肩を持ち、アクアマリンの瞳を見つめて訴える。

そうだ。『攻略サイト』にもある通り、闇堕ちした奴は全員その闇を晴らして初めてイベントクリアなんだ。

この場合……闇堕ちの原因であるサンドラが、あのプラーミャを納得させなきゃいけないんだ。

「……今のプラーミャの話を聞いただろう。アイツは、強くなったお前を認められないんだ、認めたくないんだよ。だったら……お前は、強くなった自分をアイツに直接見せつけてやらなきゃいけないんだよ！　もう、プラーミャの助けがいらないくらい、強くなったってことを！」

「ッ！」

俺の言葉に、サンドラがハッとなる。

「なあに、プラーミャを倒すっていっても、結局のところはただの姉妹ゲンカだろ？　だったら、何も遠慮する必要はないんじゃないのか？」

「……プッ」

俺はおどけながらそう言うと、しばらくの沈黙の後、思わず吹き出した。

「フフ……精霊同士（ガイスト）の本気の戦いを姉妹ゲンカって、バカなんじゃないですノ？」

「うるせー」

クスクスと笑うサンドラに、俺は悪態を吐（つ）く。

「デスガ……エエ、分かりましたワ！　だったら、このワタクシがプラーミャに分からせてさしあげますワ！　もう、以前のワタクシ

じゃないってことヲ！」
「だな！　んで、アッチは俺と先輩に任せろ！」
そう言って俺は先輩を見ると、先輩は口の端を持ち上げて頷いた。
「それじゃ……行ってこい！　んで、あのバカ妹を分からせてこい！」
「エエ！」
俺とサンドラはコツン、と拳を合わせると、サンドラはプラーミャへ、俺はヴェルンドへと向かって走りだした。

闇堕ちプラーミャ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

アルフヘイムの守護者（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

サンドラと離れ、俺はヴェルンドと対峙している藤堂先輩の元に駆け寄り、その隣に立った。

「さて……先輩、お待たせしました」
「ふふ、構わんよ。それにしても……君はつくづく……」
「つくづく……何ですか？」
「さて、何だろうな？」

クスクスと笑う先輩に、俺は思わずキョトンとしてしまう。
俺、何か変なこと言ったっけ？

「まあいい。それよりも……そろそろあの幽鬼（レブナント）を倒そうか」
「はい！　……といっても、アッサリ終わりそうですけどね」

そう返事すると、先輩は少し怪訝な表情を浮かべた。

「む、望月くん。相手は未知の幽鬼（レブナント）なんだ。油断するのはいただけないぞ？」
「はは、確かに……ですが、先輩と一緒に戦うんです。むしろ、どんな相手でも負ける気はしませんが」
「あう！？　そそ、そうか……うん、そうだな……！」

まあ、本当は相手のレベル的に役不足ってだけなんだけど、な。

「では……参る！」
「はいっ！　［シン］！」

『ハイなのです！』

先輩の合図を皮切りに、［シン］と［関聖帝君］がヴェルンドへと突っ込む。

当然［シン］のほうが圧倒的に速いので、［関聖帝君］がヴェルンドとの距離を半分も縮めないうちにヴェルンドの懐に飛び込んだ。

『食らうのです！　【縛】！　【爆】！』

『ッ！？』

［シン］はすかさず二枚の呪符をヴェルンドの胸の辺りに貼り付けると、ヴェルンドはその動きを封じられると共に、もう一枚の呪符が爆発した。

「ふッッッ！」

そして、呪符による［シン］の攻撃によってその動きが硬直したままのヴェルンドを見逃すはずもなく、［関聖帝君］は青龍偃月刀（えんげつ）を呪符によりダメージを負った部位へと叩きこ……っ！？

――ガキン！

「弾かれた！？」

『ククッ……！』

ヴェルンドはニヤリ、と嗤（わら）うと、肩に担ぐ鉄槌を横薙ぎに振り回した。

「むうっ！」

――ガイン！

もちろん先輩もそんな大振りの攻撃を受けるはずもなく、［関聖帝君］は青龍偃月刀の柄で鉄槌を受け止める。

「ふふ……どうやら力比べはこの私のほうが上のようだな……！」

『……！』

［関聖帝君］はジリジリとヴェルンドを押し込んでいき、ついに相手を弾き飛ばした。

だけど。

「ふう……まさか、［シン］の【縛】が効かないなんてな……」

「それだけじゃない。［関聖帝君］の一太刀が、突然現れた盾のようなもので弾かれてしまった……」

俺と先輩は距離を開けてヴェルンドを睨みつけながら分析する。

領域（エリア）ボスに【縛】が効いたから、コイツにも通用すると思ったんだけど……どうやら、さすがにイベントボス相手じゃ無効になってしまうみたいだな。

それに、先輩が青龍偃月刀を叩き込んだ瞬間、突然現れたあのヴェルンドの胸当て。

あれは、ヴェルンドの持つスキル、【クラフト】と【高速作業】によるものだな。それで瞬時に胸当てを作っちまったか。

「ふむ……こうなると、少々時間が掛かってしまうか……？」

「いえ、サッサと終わらせてしまいましょう。この程度の幽鬼（レブナント）、攻略法さえあれば大したことはないですから。［シン］！　【爆】と

【裂】でズタズタにしてやれ！」
『任せるのです！』

俺がヴェルンドを指差しながら叫ぶと、［シン］は限界まで引き絞られた弓から放たれた矢のように飛び出し、ヴェルンドの背後に回り込む。

『ッ！』
『遅いのです！』

ヴェルンドは近づけまいと鉄槌を振り回すが、［シン］からすればそんな大振りの攻撃なんか避けてくださいと言っているようなものだ。

当然、［シン］は隙だらけのヴェルンドの身体に呪符を何枚も貼り付けていく。

『一気に行くのですよ！　【爆】！　【裂】！』
『グ！？　ゲ！？　ゲゲッ！？』

呪符によって何度も爆発音が巻き起こると共に、ヴェルンドの身体が次々と切り刻まれていく。

というか、さすがに密着した状態じゃ【クラフト】で防具を作ることもできねーだろ！

『トドメなので……ッ！？』

さらに呪符を貼り付けようと［シン］が迫ったその時、ヴェルンドは【クラフト】で作った無数の剣をハリネズミのように全身に張り巡らせた。

「チッ！　これじゃ呪符が貼れないか……」
「なら……その剣ごと叩き切るまで！　［関聖帝君］！」
『！』

いつの間にかヴェルンドの死角に位置している［関聖帝君］が、青龍偃月刀を高々と振り上げると。

――斬ッッッ！

【一刀両断】スキルによって剣が叩き切られた。

『関姉さま！　さすがなのです！』

そして［シン］も、［関聖帝君］の斬撃によって露わになったヴェルンドの身体に呪符を幾重にも貼り付ける。

『食らえなのです！　【爆】！』
『ッ！？　ガガガガガガガ！？』

ヴェルンドは呪符によって立て続けに起こる爆発により吹き飛ばされ、そのまま壁に叩きつけられた……って、オイオイ！？　［シン］の奴、一体何枚の呪符を同じ場所に貼り付けたんだ！？　ヴェルンドの奴、まだ爆発が終わらないモンだから、壁にめり込み始めてるぞ！？

「ふふ……相変わらず、望月くんも［シン］も見事！」

そこへ、先輩の［関聖帝君］が突撃する。

「オオオオオオオオオオオッッッ！」

すさまじい青龍偃月刀による連撃をヴェルンドに叩き込むと、ヴェルンドの身体が削がれ、刻まれ、切り落とされていく。

そして。

「終わりだあああああああああ！」

――斬ッッッ！

［関聖帝君］の最後の一振りにより、とうとうヴェルンドは上半身と下半身が分かれ、幽子へと変化した。

「やりましたね！　先輩！」

「うむ……！？」

俺は先輩の元へと駆け寄ったその時、先輩が額を押さえてよろめいた。

「先輩！？」

「い、いや、大丈夫だ……」

少し顔を歪める先輩が心配ないとでもいうように俺を制止すると、何かを振り払うようにかぶりを振った。

「それより……早くサンドラとプラーミャの元へ行ってやれ……」

「は、はい……」

俺はチラリ、と先輩を見やった後、すぐにサンドラ達の元へと向き直る。

でも。

「……これでは、アレと同じではないか……！」

背中越しに聞こえる先輩の呟きで、俺は確信した。

やっぱり……先輩の身体は施された後、だったか……。

先輩……大丈夫、ですよ……。

俺が、絶対に救ってみせますから……！

俺は拳をギュ、と握りしめ、今はサンドラとプラーミャの姉妹ゲンカに集中した。

アルフヘイムの守護者（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

サンドラのクラスチェンジ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

サンドラのクラスチェンジ

「ハアアアッ！」

サンドラの［イヴァン］がプラーミャの精霊（ガイスト）、［イリヤー］目がけて鉄鞭（てつべん）を振り下ろす。

『アハハハハ！』

必死に攻撃を仕掛けるそんなサンドラを見て、プラーミャは嘲笑（あざわら）いながら、［イリヤー］のバックラーで鉄鞭（てつべん）を弾き返した。

『ホラホラ！　ドウシタノ？　避ケナイト死ンジャウワヨ！』

「クッ！」

［イリヤー］は短槍を無数に繰り出し、［イヴァン］は防戦一方になる。

だけど。

「アウッ！？」

『アハハ、ダカラ言ッタジャナイ？』

元々攻撃力はピカイチだが、『俊敏』のステータスが低い［イヴァン］は、［イリヤー］の攻撃の全てを捌き切れず、右肩に攻撃を食らってしまった……いや、よく見ると、既に数か所負傷しているようだ。

『アハハハハ……ハア。ネエ、サンドラ……』
「……何ですノ？」

二人が同時に距離を取ると、プラーミャが溜息を吐きながらサンドラに話し掛ける。

『家ヲ出ルナンテ馬鹿ナ真似ハヤメテ、今マデ通リ“出来損ナイ”ラシク、パパヤママ、ワタシ（ヤー）ノ言ウ通リニシナサイナ。ソウスレバ、アナタダッテ幸セニナレルノヨ？　ソレニ、ワタシ（ヤー）ナラ未来永劫、アナタヲ守ッテアゲル。ソレコソ、雛ヲ育テル母鳥ノヨウニ』
「……」
『ネ？　ソウシナサイ？』

優しく諭すように語りかけるプラーミャ。
だけど、その表情はあからさまにサンドラを見下し、馬鹿にしていた。

「フフ……」
『？　サンドラ？』

突然笑うサンドラに、プラーミャは不思議そうな表情を浮かべながら声を掛ける。

「……今まで、パパやママ、プラーミャはこのワタクシのことをそんな風に思っていたのですネ……なのに、ワタクシはみんなが気遣ってくれているものとばかリ……」
『ドウシタノ？　ショックヲ受ケタ？　デモ、コレガ現実ヨ？』

大声で叫びたかった。
あんなに毎日必死で頑張って、強くなって、成長してきたサンド

ラを馬鹿にするな、って。
でも……そんなもの、この俺がいくら言ったって響かない。
なら。
「サンドラ！」
俺はただ、サンドラの名前を叫んだ。
高々と、拳を突き上げて。
「……プ」
『？』
「フフフ！　本当に、ヨーヘイはバカ！　こんな家族にだって“出来損ない”扱いを受けるワタクシを誰よりも信じてくれて、認めてくれて！」
『サンドラ……』
「モウ……こんなの、やるしかないじゃなイ！　頑張るしかないじゃなイ！　だから……見てなさイ！　ヨーヘイ！」
サンドラは不敵な笑みを浮かべ、キッ、とプラーミャを見据えた。
『アハハ！　マダ戦ウ気ナノ？　モウ分カッテルデショウニ！　コノワタシニハ敵ワナイッテコトガ（ヤー）！』
そう言うと、［イリヤー］が短槍を構え、［イヴァン］に向かって突撃し、直前で真上に飛び上がった。
『アハハハハ！　コレデ終ワリ！　【絨毯（じゅうたん）爆撃】！』
［イリヤー］の短槍が真っ赤に燃え盛り、槍衾（やりぶすま）を展開した。

というか、さすがにあれはマズイ！　あんなもの食らっちまったら、『耐久』が“Ｓ”の［イヴァン］でも耐え切れない！

「サンドラ！　躱せ！」

自分で言ってから気づく。アレをどうやって躱せっていうんだよ！？

だけど。

「フフ……ヨーヘイ、ワタクシは負けなイ！　信じてくれる、アナタのためにモ！　だからラ！」

「っ！？　サンドラ！？」

なんと、サンドラは躱すどころか、鉄鞭を構えて槍衾に突撃した！？

あ、あんなの自殺行為だろ！

その時。

「クラスチェンジ……開放！」

は？　サンドラの奴、今……何て言った？

クラスチェンジ……だってえええええ！？

すると、突然［イヴァン］の身体から幽子が放出され、その渦に包まれた。

『ナ、ナニガ……！？』

プラーミャもいきなりのことで、困惑した表情を浮かべる。

そして、［イリヤー］の槍衾（やりぶすま）が幽子の渦とぶつか……っ!?

――ガキン。

『ッ!?』

渦の中から重厚な金属の盾が現れ、［イリヤー］の槍衾（やりぶすま）を受け止めた。

それと同時に、今度は荘厳な装飾が施された金属のメイスが［イリヤー］へと襲い掛かる。

『ガアッ!?』

［イリヤー］が弾き飛ばされると同時に、そのマスターであるプラーミャも吹き飛んだ。

幽子の渦が全て消え去り、俺達の目の前に［イヴァン］がその姿を現……っ!?

「はあああああああ!?」

それを見た瞬間を俺は思わず叫ぶ。

いや、だって、仕方ないだろ!?　本来なら、［イヴァン］は“雷神”„［トール］へとクラスチェンジするはずなんだぞ!?

なのに現れたのは……歴戦の勇士というような髭を生やしたオッサンが、頑強な肉体にメイスと重厚な盾を持ち、鎧と稲妻をその身にまとっているんだぞ!?　一体どうなってやがるんだ!?

「フフ……この領域（エリア）ボスの部屋に入る直前、クラスチェンジの条件を全て満たしたの。だから言ったでショ?　『アッと驚かせてあげ

ます』ッテ」
「あ……！」

サンドラが悪戯（いたずら）っぽく微笑みながらそう説明する。
そういえば、あの時……！

「どういうわけカ、クラスチェンジ先は二つあったんですけド……結局、コチラを選びましたワ」
「そ、そうか……」

いや、サンドラのクラスチェンジが選択式だなんて、『攻略サイト』に書いてなかったじゃん！
でも……これって、俺と［シン］の時と同じように、『攻略サイト』にはないナニカがあるってことなのか……？

「さあ……プラーミャ、続きをはじめますわヨ！」
『アハハハハ！　タカガクラスチェンジヲシタ程度デ、ワタシニ勝テルト思ッテルノ？』
「エエ！　勝てますワ！　この……［ペルーン］なラ！」

サンドラはそう宣言すると、［イヴァン］改め［ペルーン］は［イリヤー］へと突撃した。

サンドラのクラスチェンジ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

双子の姉妹（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

双子の姉妹

「エエ！　勝てますワ！　この……［ペルーン］なラ！」

サンドラはそう宣言すると、［イヴァン］改め［ペルーン］は［イリヤー］へと突撃した。

『アハハハハハハ！　ダッタラ！　力ノ差ヲ思イ知ラセテアゲル！　【スヴャトゴル】！』

プラーミャがそう叫ぶと、［イリヤー］の身体に変化が起こり、中肉中背だったその姿が、みるみる肥大化していった。

このスキル……一体どんな効果が？

『アハハ！　コノ姿ニナッタラ『力』ト『耐久』ガ飛躍的ニ上ガル！　今ノ［イリヤー］ノステータスハ、藤堂様ノ［関聖帝君］ニダッテ負ケナイハズヨ！』

プラーミャが高らかに嗤いながら自慢げに語るが……。

「いや、それはない」

『ッ！？』

気づけば、俺は冷静にツッコミを入れていた。

俺は、『攻略サイト』で知っている。［関聖帝君］の本当の強さを。

それに……先輩は、ヴェルンドの封印の力を吸収しているはず。

アイツを倒した時、その場にマテリアルがなかったのがその証拠だ。

ひょっとしたら、【千里行】も使えるようになっているかもな……。

「アアアアアアアアア！」
『アアアアアアアアア！』

［ペルーン］と［イリヤー］が激突するが、お互いピクリとも動かなくなった。それだけ力が拮抗しているのだろう。

『バ、バカナ！　【スヴャトゴル】デ強化サレタ［イリヤー］ナノヨ！？』
「フフ……で、どうしますノ？　［イリヤー］の【スヴャトゴル】の効果って、確か三分間だけですわよネ？」
『クッ！　ナマイキ！』

一歩引いた［イリヤー］が、また［ペルーン］の頭上へと飛び上がる。

『サッキハ防ゲタケド、今度ハドウカシラ？　【絨毯爆撃（じゅうたん）】！』

またもや槍衾（やりぶすま）を展開する［イリヤー］。しかも、【スヴャトゴル】によるステータス強化も相まって、その攻撃範囲は倍に広がっていた。

「サンドラッ！」
「フフ。ヨーヘイ、大丈夫ですわヨ。マア、見てなさイ」

サンドラはそう言って、［ペルーン］の盾を槍衾（やりぶすま）に向けると。

「【ガーディアン】」

いくつもの盾が展開し、その激しく降り注ぐ槍衾（やりぶすま）を全て受け止める。

そしてスキルの発動が終わった［イリヤー］に、［ペルーン］は無情のメイスを振り上げた。

「プラーミャ……これが、ワタクシの意志ですワ！　【裁きの鉄槌】！」

『アアアアアアアアアアッッッ！？』

稲妻をまとったメイスをその身体に叩き落され、［イリヤー］、そしてプラーミャが床に叩きつけられた。

――ポン。

「……先輩？」

「ふふ、勝負あったな」

いつの間にか、先輩が隣に来て俺の肩を叩いた。

……どうやら、吸収は終わったみたいだ。

「プラーミャ！」

サンドラは心配そうな表情でプラーミャへと駆け寄る。

『ウ……ウウ……』

「プラーミャ！　しっかりしテ！」

プラーミャの傍（そば）に着くと、サンドラはその身体を抱き起こした。

『ド……ドウシテ……ドウシテ、ワタシノ傍カラ離レルノ……？
ワタシハ、サンドラトイツマデモ、一緒ニイタイダケナノニ……サンドラガ、大好キナダケナノニ……！』

堰を切ったように問いかけるプラーミャの瞳から、ぽろぽろと涙が零れる。

「フフ……ワタクシだって、プラーミャのことが好きヨ」
『ッ！　ナ、ナラッ！』
「デモ……ワタクシはもう、『レイフテンベルクスカヤ家』とは距離を置きたいノ。もう……貴族とは違う、別の道を進みたいノ……」

サンドラは、プラーミャに諭すように語りかける。
自分の想いを、自分の意志を。

『サンドラハ……ワタシヲ捨テルノ……？』
「マサカ……アナタはワタクシの大切なたった一人の妹ヨ？　アナタがワタクシと会いたいなら、いつだって会えル。ワタクシも、アナタに会いたくなったら、いつでも会いに行くワ」
『デ、デモ……！　デモ……サンドラ一人ジャ……』
「フフ……大丈夫。だって、ワタクシにはお節介なバカと、優しい先輩がいるもノ。ネ？　そうでショ？」

そう言うと、サンドラは俺達のほうを向いてニコリ、と微笑んだ……って。

「チョット待て！？　なんで俺がバカなんだよ！？　しかもお節介って何だ！」
「アラ？　そうでショ？」

「違うから！　そうじゃないから！」
「ふふ……まあ、望月くんに関しては的を射ているな」
「先輩！？」

先輩が俺をチラリ、と見ながらクスクスと笑う
チクショウ、まさかここで先輩に裏切られるとは思わなかった。

「だから、ネ？　ワタクシのお願い、聞いて欲しいナ……」
『サンドラ……！』

サンドラとプラーミャは抱き合い、泣き合った。
すると、それに応えるかのように、プラーミャの身体に浮かんでいた紋様が、徐々に薄くなっていく。

そして、紋様がすっかり消え去ると、プラーミャの瞳も元通りの鮮やかな琥珀色に戻った。

「ふふ、良かったな」
「先輩……ですね」

いつまでも泣き続ける二人を、俺と先輩はただ見つめ続けていた。

双子の姉妹（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

第二十階層（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

第二十階層

プラーミャが闇堕ちした日から一週間が経った八月十日。
俺達は“アルカトラズ”領域（エリア）の第十七階層に来ている。

「ちょ！？　おま！？　俺が前に出てる時は、後ろから攻撃仕掛けんなって言ってるだろう！」
「アラ？　ならお得意の『敏捷』を活かして戻ればよろしいのでハ？　……（チッ）」

そして、今日も相変わらず味方であるはずのプラーミャが俺の背中越しに【フレアランス】をぶっ放してやがる。
あえて補足するとすれば、むしろ俺が前に出てきた時を狙って撃ちやがるし、避けたら避けたで舌打ちはするし……本当に、遠慮が無くなってきた。

「フフ、まあまあヨーヘイ、プラーミャもわざとじゃないですワ」
「サンドラー！　スキー！」
「チョ！？　プラーミャ！？」

サンドラがプラーミャのフォローを入れると、感極まったプラーミャがサンドラに抱き着いた。
というか、あれ以来ますますヤンデレシスコンが加速している。
おかげで俺はいい迷惑だ。

「ふふ……みんな、では次の階層に行くぞ」
「「「はい！」」」

微笑む先輩の指示に、俺達三人は元気よく返事をした。
先輩も、ヴェルンドを吸収したことで、［関聖帝君］のステータスが伸びている。といっても、【千里行】スキルの取得は叶わなかったみたいだけど。

……あんなことがあったんだ。次、いつどこで“守護者”が現れるか分からない。
できれば今日中にこの領域（エリア）を攻略したい気分だけど……。

「望月くん、早く行くぞ」
「あ、す、すいません！」

階段に足を掛けた先輩に呼ばれ、俺は慌てて駆け寄る。

「ふふ、二人はもう上の階層に行ってしまったぞ？　私達も早く行かねば」
「は、はい……あの、先輩」
「ん？　なんだ？」

階段を上る途中、先輩を呼び止めると、こちらへ振り返った。

「その……身体に、おかしなところはない……ですか……？」
「身体？　いや、特には……」
「そ、そうですか……」
「ふふ、変な望月くんだな」

クスクスと笑うと、先輩はまた前へと向き直って歩を進める。
だけど……そうか、まだ紋様は出ていない、か……。

俺はほんの少しだけ安堵すると、先輩に遅れないように足早に階

段を上った。

◇

そのまま第十八階層を抜け、俺達は第十九階層へたどり着いた。
というか、ステータスが向上した先輩とサンドラ、危険だけどプラーミャも正式にパーティーに加わったことで、“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略はかなり楽になった。俺には危険だけど。

「ふッ！」
「食らいなさイ！　【裁きの鉄槌】！」
「フフフ……【絨毯（じゅうたん）爆撃】」

……とまあこんな調子で、三人はこの階層で大量に現れる幽鬼（レブナント）、“ヴォジャノーイ”を一気に殲滅する。

『……［シン］の出番が全くないのです』
「あー、そうだなー……」

俺と［シン］は、そんな三人が無双するさまをただ眺め続けていた。

「さあ！　次は第二十階層だ！」
「エエ！　行きますわヨ！」
「サッサとこんな領域（エリア）を攻略シテ、サンドラと……ムフフ」

意気込む二人と、ますます変態に磨きが掛かってきたように思われるプラーミャの後に続き、第二十階層にやって来ると。

「……幽鬼（レブナント）がいないですわネ……」

「ああ……ということは、第十階層と同じく、領域ボスがいる、ということか……？」
「デスガ……普通、領域ボスというのは、一つの領域に一体なのでハ？」

先輩の言葉を、プラーミャが指摘する。

「いや、確かにプラーミャの言うように領域にボスが一体しかいないというのが一般的だが、いくつかの例外はある。ここは、その例外なのだろう」

まあ、先輩の言う通りここは例外……いや、例外中の例外だ。なにせ、二周目でないと行くことができない特別な領域なんだから。

「まあ、まずは先に進んでみましょう。警戒は怠らないで」
「ふふ、そうだな」
「ソウネ」
「……アナタに言われるのは癪だけド」

一人不満げなプラーミャは無視し、俺達は階層の奥へと進む。
すると。

「ヤッパリ、第十階層と同じく部屋への扉がありますわネ……」
「エエ……」
「ふむ……となると、中には領域ボスがいるということだな」

はい、います。
それも、とんでもなくデカい幽鬼が。

「みんな、準備はいいか？」

「「「（コクリ）」」」

扉に手を掛けた先輩が確認すると、俺達は頷く。
さあ……いよいよこの領域（エリア）攻略のクライマックスだ。

――ギイ。

扉を開け、中に入ると……部屋の中は真っ暗だった。

「……これでは何も見えんな」
「任せてくださイ。【ファイアボール】」

プラーミャが初級の火属性魔法である【ファイアボール】を天井に向かって放出すると、部屋の中が明るく……はならない。
何故なら。

「な、なんだこれは!?」
「ウエエ……ウネウネと動いてますワ!?」
「ト、トニカク部屋を出ま……扉が開かなイ!?」

そりゃそうだ。ここは領域（エリア）ボスの部屋、第十階層と同じなんだ。
だったら領域（エリア）ボスを倒すまで、扉が開かないのは当然だ。

そして……蠢（うごめ）くナニカの双眸（そうぼう）が妖しく輝いた。

「そ、そんナ……!?」

サンドラは領域（エリア）ボスのあまりにも巨大な姿に思わず後ずさった。

そう……これが、“アルカトラズ”領域（エリア）の二体目のボス、“リヴ

ァイアサン”だ。

第二十階層（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

リヴァイアサン（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

リヴァイアサン

この“アルカトラズ”領域（エリア）のラスボスである“リヴァイアサン”は、巨大な海蛇の幽鬼（レブナント）である。

しかも、その巨大さゆえに、領域（エリア）ボスの部屋を埋め尽くしており、そのため、部屋の明かりも隠れて暗くなってしまっているのだ。

「さーて……それじゃ、倒すとしますか」

俺はリヴァイアサンの双眸（そうぼう）を睨みながら呟いた。

というか、藤堂先輩とサンドラはパワーアップし、プラーミャもいる今、俺達が負ける要素は何一つない。それどころか、このままだとオーバーキルになるんじゃないだろうか。

ということで。

「［シン］！　アイツは図体がデカいから、多めに呪符を貼ってその動きを止めるんだ！」

『ハイなのです！』

［シン］は一気に飛び出し、リヴァイアサンの身体にペタペタと呪符を貼っていく。というか、面積が広いからどこでも貼り放題だな。

『それー！　なのです！　【縛】！』

呪符の効果によってリヴァイアサンの胴体の動きが止まる……が、やっぱりデカい図体のせいで頭部までは動きを止められなかったか。

「先輩達はアイツの頭部へ優先的に攻撃を仕掛けてください！」
「分かった！」
「任せテ！」
「ダカラ、命令しないデ！」

先輩を先頭にリヴァイアサンの頭部目がけて一斉に武器を振り下ろす。

「はあああああああああああッッッ！」
「【裁きの鉄槌】！」
「【スヴァトゴル】からノ、【絨毯爆撃（じゅうたん）】！」
『ガアアアアアアアアアアッ！？』

三人の必殺の攻撃にリヴァイアサンが悲鳴を上げ、その双眸（そうぼう）が赤く輝き始めた。
ということは……アレがくるな。

「みんな！　一旦ソイツから離れて、俺のところまで戻るんだ！」
「エエ！？　だけど、一気に畳みかけませんト！」
「いいから！　今すぐ戻れえええええ！」

俺の有無を言わせない叫びに、納得はいかないものの三人は俺の元へと戻ってきた。

「［シン］！」
『任せるのです！　【堅】！』

俺達の前面に呪符を展開して見えない壁を形成したタイミングで、リヴァイアサンその巨大な口の中から真っ黒なスライムのようなも

のが現れた。

ひい、ふう、みい……全部で十一体か。『攻略サイト』の情報通りだな。

「あ、あれは!?」

「みんな！　［シン］が【堅】でアイツ等を抑えるから、ここは遠距離攻撃ができるサンドラとプラーミャで攻撃を！」

「分かりましたワ！　【ライトニング】！」

「命令しないデって言ってるでしょウ！　【フレアランス】！」

［ペルーン］と［イリヤー］の魔法が、真っ黒なスライムに一斉に襲い掛かると、スライム達は雷と炎によって次々と黒焦げになり、怪しげな煙となってこの部屋に充満していく。

「あの煙は……まさか、第十階層の時と同じ!?」

「恐らくそうでしょうね……」

そう、真っ黒なスライムは、リヴァイアサンが放ったスキル、【十一人の毒婦】。一体一体が猛毒の塊で、攻撃を受けると猛毒のガスに変化する。

もし直接攻撃を仕掛けていたら、攻撃がヒットした瞬間、猛毒によるダメージを食らっていた。

十一体全てが猛毒ガスへと変化したことを確認すると、

「みんな！　あの猛毒ガスを吸い込まないように！　サンドラとプラーミャは引き続き遠距離から領域（エリア）ボスを攻撃するんだ！」

「うむ！」

「エエ！　【ライトニング】！」

「アアモウ！　【フレアランス】！」

リヴァイアサンの頭部に、雷を圧縮した球体と炎の槍が次々と命中させる。

『ガアアアアアアアアッ！？』

ひるんだリヴァイアサンは、その両目を閉じ、嫌そうに顔を背けた。

毒ガスは……よし！　霧散したな！

「みんな！　今こそ一気にトドメを……って！？」

俺が言い切る前に、先輩達三人は我先にとリヴァイアサンの頭部へと突撃していった。

「食らえええええええええッッッ！」

「息の根を止めますワ！　【裁きの鉄槌】！」

「コレ以上アイツに命令されるのはゴメンなノ！　【絨毯爆撃】！」

『ガ！？　ギ！？　ゲッ！？』

三人の息を吐かせぬ波状攻撃に、まともに悲鳴すら上げることができないリヴァイアサン。

そして。

「これで……最後だあああああああッッッ！」

――斬ッッッ！

［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）が、その巨大な眉間を叩き割り、リヴァイアサンはとうとう沈黙した。

「ふふ！　やったぞ！」
「やりましたワ！」
「サンドラ！　ヤッタ！」

幽子とマテリアルへとその姿を変えるリヴァイアサンの前で、大はしゃぎの三人。
もちろん、この俺も……！

「おっしゃーッ！」

両の拳を高々と突き上げ、思いっ切り叫んだ！

『わあい！　やったのです！　やったのです！』
「はは！　ああ！　やったとも！」

満面の笑みを浮かべる［シン］を抱きしめ、俺達はその場でクルクルと回った。
で、先輩とサンドラは、なんで指をくわえながら物欲しそうな表情を浮かべてるんですかね？
特にプラーミャは、そんなサンドラと俺を交互に見ながら、メッチャ歯噛みしてやがるし。もっと素直に喜べよ。

だけど……これで、先輩に訪れる不幸な結末を、少しでも防げるはず……！

俺は、その嬉しさのあまり、自然と口元を緩めた。

リヴァイアサン（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ありがとう（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ありがとう

「さて、と……さあ、先へ進みましょう！」

三人に声をかけ、俺は先頭を歩く。

ここから先は、もう幽鬼（レブナント）も現れないし、危険は一切ない。

あとは……この“アルカトラズ”領域（エリア）のクリア報酬を手に入れるだけだ。

「ふふ……さあて、あとどれくらいでこの領域（エリア）は踏破できるかな？」

藤堂先輩が俺の右隣に並び、挑戦的な笑みを浮かべながらそんなことを呟く。

だけど……すいません、ここでラストです。もう踏破なのです。

「大丈夫！　ワ、ワタクシ達なら、どこまででも行けますわヨ！ネ……？」

今度はサンドラが先輩と反対側……つまり、俺の左側に並ぶと、俺の様子を窺（うかが）いながら同意を求める。もちろん、サンドラの意見には完全同意だ。

「はは、まーな。というか、どうやら行き止まりみたいだぞ」

俺は通路の先を指差すと、そこには小さな祠（ほこら）があった。

あれこそが……俺が求めていたものの一つだ。

「ふむ……あれは一体何なのだろうな……」
「トニカク、行ってみますわヨ」
俺達は祠の傍へと寄ると、そこには……水色に輝く水晶の玉が鎮座していた。
「コレって、何なんですかねー？　［シン］、ちょっと触ってみて」
『ハイなのです！』
などと知らないフリをして、［シン］にその水晶玉に触れさせると。
『はうはうはうはうはう！？』
「な、何だ！？」
突然、水晶玉が輝き出し、［シン］の身体を幽子の渦が包み込む。
それは、まるでクラスチェンジをした時と同じ展開だった。
「こ、これは……！？」
「だ、大丈夫なんですノ！？」
「「……」」
先輩とサンドラが驚きの声を上げる中、俺とプラーミャは無言でただジッと幽子の渦を凝視していた。
そして、その渦が消えると……うん、いつもの［シン］だ。
「［シン］、渦の中で一体何があったんだ？」
『はう……それが、特に何もなかったのです……』

そう言うと、何故か［シン］はシュン、と落ち込んでしまった。
まあ、クラスチェンジの時と同じようなことが起きたら、さすがに期待するよな。

でも……その期待は裏切っちゃいない。

「とりあえず、ガイストリーダーで確認してみよう」

俺はガイストリーダーを取り出し、［シン］のステータス画面を表示させると。

――――――――――――――――
名前　：シン（神行太保）
属性　：神仙（♀）
ＬＶ　：５１
力　　：Ｅ
魔力　：Ｓ＋
耐久　：Ｄ
敏捷　：ＳＳＳ
知力　：Ｓ
運　　：Ｂ＋
スキル：【方術】【神行法】【全属性耐性】
【水属性反射】【状態異常無効】【物理弱点】
【繁殖】
――――――――――――――――

よし！　予定通り【水属性反射】を手に入れたぞ！

『はうはうはう！　すごいのです！　すごいのです！』

「望月くん、どうだ……っ！？」

喜ぶ［シン］のステータス画面を見た先輩が息を飲む。
それはそうだろう。先輩の［関聖帝君］唯一の弱点である、【水属性弱点】を補うどころか、利点に変えるほどのスキルを手に入れたんだから。

「……どうやらこの水晶、精霊（ガイスト）にスキルをくれるみたいですね」
「う、うむ……！　これは……すごい！」
「あはは、じゃあ次は先輩の番ですね」
「ああ！」

先輩は嬉しそうに［関聖帝君］を召喚すると、同じく水晶玉に触れさせた。
幽子の渦に包まれ、現れた［関聖帝君］のステータスを眺める先輩はものすごく嬉しそうだった。

「ワ、ワタクシモ！」
「私（ヤー）モ！」

サンドラとプラーミャも精霊（ガイスト）を呼び出し、水晶玉に触れさせ……無事、【水属性反射】を手に入れたみたいだ。

さて……。

「先輩、サンドラ、あとプラーミャ。それと……［シン］、おいで」

俺は【水属性反射】のスキルを手に入れて喜び合う三人に向き直った。
［シン］も、俺に寄り添うように立つ。

「俺……本当を言うと、こうやって誰かと一緒に領域攻略をできるだなんて、思ってもみなかった。だって……俺達はクソザコモブだったから」

「「「……」」」

先輩とサンドラ、それにプラーミャまで、俺の話を静かに聞いている。

「俺達はそんな自分から変わりたくて、だから必死で強くなろうって考えて、何度も初心者用の領域に行って、気の遠くなるような作業をこなした」

「ああ……そうだな」

先輩が口元を緩めながら目を閉じると、静かに頷いた。

「そして俺達は強くなって、今度は“グラハム塔”領域を踏破した。これも、ずっとソロで攻略するものだと思ってた。だって、一年生の中で俺の仲間になろうなんて奴、いないと思ってたから」

「バカ……そんなワケ、ないでショ……」

今度はサンドラが、口を尖らせながら否定する。

「はは、まあ聞いてくれ。それで、“グラハム塔”領域の踏破どころか、とうとうこの“アルカトラズ”領域も踏破した。あの、弱かった俺達が、だ」

「……フン、弱いとまでは言いませんけド」

おっと、まさかプラーミャまでそんなこと言ってくれるとは思わなかったな。

おかげで胸が少しくすぐったいじゃないか。

「いつも支えてくれた、見守ってくれた先輩が……いつも絡んできながらも、一緒に付き合ってくれたサンドラが……まあ趣旨や目的は違うだろうけど、本当なら“東方国”の観光をしたいだろうに、わざわざ同行してくれたプラーミャが……三人がいてくれたから、俺はここまで来れました」

だから。

「本当に、ありがとう」

俺と［シン］は、深々と頭を下げた。

あのクソザコモブでしかなかった俺達を、ここまで連れてきてくれた三人に向けて。

「ふふ……まさか、これで終わりだなんて言わないだろう？」

「そ、そうですワ！　まだまだ攻略すべき領域（エリア）は、たくさんあるんですのヨ！」

「マ、マア……タマタマヨ、タマタマ……」

はは……俺は本当に、仲間に恵まれた。

『攻略サイト』では、二周目から主人公の仲間になることができるとはいえ、一切需要もなくて、コテンパンにされた後は『ウルセーヨ、クソが……』しか台詞（セリフ）が用意されてないこの俺が、だ。

そして。

「［シン］……お前もだ。俺の精霊（ガイスト）でいてくれて、本当に幸せだよ」

『マスタア……！』

そう言うと、［シン］のオニキスの瞳からぽろぽろと涙が溢れ出すと。

『マスタアアアアアアアアア！』

「はは、［ゴブ美］……ありがとう」

俺に向かって飛び込んできた［シン］を抱きしめ、俺は久しぶりに［ゴブ美］って名前を呼んだ。

ありがとう（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大切な君（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第二章ラストです！

“アルカトラズ”領域（エリア）の第一階層まで戻ってきた俺達だけど、俺は扉の直前でピタリ、と立ち止まった。

「む、どうした？」

藤堂先輩が、不思議そうな表情を浮かべながら尋ねる。

「あはは……どうやら財布落としたみたいで……」

「そうなノ？　だったら手分けして探しますわヨ？」

俺が苦笑しながら頭を掻（か）くと、サンドラがそう言ってくれた。

「あ、いや、第一階層に降りる時点では財布があったのを覚えてるし、落ちてるとしたらこの第一階層だと思うから、ちょっと来た道を戻ってくるよ」

「だが、一人で大丈夫なのか？　領域（エリア）ボスがいなくなり、幽鬼（レブナント）の数がかなり減ったとはいえ、まだそれなりに危険なことには変わりないんだが……」

先輩とサンドラが心配そうに俺を見つめる。

「あはは、大丈夫ですよ。［シン］の呪符で全部行動不能にしてしまえばいいだけですから」

「そ、そうか……とはいえ、気をつけるんだぞ？」

「はい！　みんなは先にここから出ておいてください！」

俺は三人に手を振ると、一踵を返して来た道を引き返す。
というか、みんなについて来られたら困るからなー。

『はう！　財布がないのは死活問題なのです！　［シン］のアイスの危機なのです！』

［シン］がムフー、と鼻息を荒くしながら一生懸命に床をくまなく探すけど……。

「あー……［シン］、財布はちゃんと持ってるから安心しろ」
『？　どういうことです？』
「ああ、さっきの話……あれは嘘だ」
『そうなのです？』

俺の言葉に、［シン］はキョトン、とした。

「おう、ちょっとどうしても行かなきゃいけない場所があってな……おっと、そこを右だ」

俺達は来た道から逸れ、そのまま通路の奥へと目指す。
すると。

「よし……！　あったぞ！」

通路の行き止まりに、木箱が一つ、ポツンと置かれていた。
これこそ、俺がこの“アルカトラズ”領域（エリア）を攻略した最大の目的だ。

『マスター……ひょっとしてアレ、疾走丸なのです……？』

木箱を指差しながら、［シン］は顔をしかめた。どうやらまた飲まされると勘違いしているみたいだ。

「はは、違うよ」

俺は木箱に近寄ると、蓋を開ける。

そこには。

『指輪なのです』

「そうだ。これは“シルウィアヌスの指輪”といってな、まあ……呪いの指輪だ」

『はう！？　呪いなのです！？』

俺の言葉を聞いた［シン］は驚きの声を上げると、俺に抱きついてきた。しかも、どうやら震えてるみたいだな。

『こ、怖いのです……！』

「はは、確かに呪いの指輪ではあるんだけど、効果としては精霊（ガイスト）が幽鬼（レブナント）を倒した時に手に入る幽子の量が半減するってだけだ」

『そ、そうなのですかー』

そう説明してやると、［シン］はホッと胸を撫で下ろした。

というか、精霊（ガイスト）なのに呪いとか怖いのな。

「まあ、一度この指輪をはめてしまうと、その呪いを解かない限り、絶対にはずれない仕様になってるけど」

『ヒイイ！　なのです！』

「はは、［シン］には絶対にはめないから心配するな」

そう……この指輪をはめるのは、たった一人だけだ。

◇

「ソレデハ、お世話になりましタ」

八月二十日になり、いよいよプラーミャはルーシ帝国に帰ることになった。

もちろん、“アルカトラズ”領域（エリア）を踏破した後は、俺達は全力でプラーミャの観光に付き合ったとも。

今、俺が抱えているお土産の数々が、その証左だ。

「プラーミャ……また、いつでも来てネ……！」

「当然ヨ、サンドラ……！」

感極まったサンドラとプラーミャが抱き合う。

傍（はた）から見れば同じ顔をした美少女が二人、涙を零（こぼ）しながら別れを惜しんでいる美しい光景だろうけど……うん、まあ、できれば俺が抱えるこの大量のお土産を何とかしてからにして欲しい。

「ふふ……またいつでも遊びに来るといい、プラーミャ」

「エエ」

先輩がニコリ、と微笑むと、プラーミャもまた微笑みで返した、いや、だからお土産！

「……望月。アナタもサンドラに変な真似したら、タダじゃ済まないことを覚えておきなさイ」

「分かった。分かったからそろそろこのお土産を何とかしろ」

俺はズイ、とお土産の数々をプラーミャに突き出すと。

「アラ？　そろそろ搭乗ゲートに向かわないト」
「オイ」

コノヤロウ。これ、絶対俺に対する嫌がらせだろ。

「ハア……プラーミャ」
「……分かったわヨ」

溜息を吐くサンドラに促され、プラーミャはようやくお土産を引き取ってくれた。ホント、いい加減にしろ。

「ソレジャ……マタネ」

そう言うと、プラーミャはニコリ、と微笑んで、搭乗ゲートをくぐって行った。

「行った、な……」
「ハイ……」

遠ざかっていくプラーミャの背中を眺めながら、先輩とサンドラがポツリ、と呟く。

「さて、と……んじゃ、俺達も帰りましょう」
「ふふ……そうだな」
「エエ」

俺達は空港を後にし、モノレールに乗って益田駅に到着した。

「じゃあヨーヘイ、先輩、またネ！」

「おう、また明日！」
「ふふ、ではな」

笑顔で手を振るサンドラと別れ、駅前には俺と先輩だけになった。

「さて……私も帰るとしよ……「先輩、待ってください」」

同じく帰ろうとする先輩を、俺は引き留める、
俺にとって、大事なのはこれからだ。

「？　どうした？」
「ええと……ちょっと、あそこまでいいですか？」
「別に、構わんが……」

俺は先輩を連れて、駅前にある公園へと来た。

「先輩……実は、どうしても先輩に渡したいものがあるんです」
「渡したいもの？」
「はい……」

ヒューズボックスの中から、俺は丁寧に包装された箱を取り出す。

「これは……？」

不思議そうに箱を眺める先輩。
そんな先輩の前で、俺は箱を開けると。

「っ！？　これは……指輪……？」
「……はい」

箱の中から指輪を取り出すと、俺は先輩の左手を見やった。

「望月くん……？」

「先輩……この指輪、つけていただけませんか……？」

俺は、先輩に懇願する。

どうしても、先輩にこの指輪をつけてもらいたくて。

「……その指輪のこと、聞いてもいいか？」

先輩は、頬を赤く染めながらも、疑うような視線で俺に尋ねた。

当然だ。いきなり指輪をつけて欲しいだなんて、疑うに決まってる。

なら……俺は、先輩に対して最大限の誠意を見せるしかない。

だから。

「……正直に言います。これは“シルウィアヌスの指輪”……この指輪をはめると、手に入る幽子の量が二分の一になるっていう、呪いの指輪です」

「っ！？」

俺の言葉に、先輩が息を飲んだ。

「どうして……」

「……」

「どうして、私にそんなものをつけさせようと思った、んだ……？」

先輩はその真紅の瞳で俺を睨む。

それはまるで、信じていたものに裏切られ、猜疑心（さいぎしん）にさいなまれ

た者の瞳だった。

「俺は……先輩とこれからも、ずっと一緒にいたいんです」

「……」

「だから……だから、ただ俺を信じてください……！」

俺は必死で先輩に訴える。

さすがに、先輩達が今していることをこの場で言ってしまえば、それこそ全てが終わってしまうだろう。

もちろん、都合のいいことを言っているのは分かってる。でも……それでも、俺にできることは、ただ先輩に信じてもらえるように訴えかけるだけだ。

すると。

「……ふふ、本当に君は……なんでここまで、私なんかのことを……」

先輩は、ふ、と表情を緩めると、自虐的な言葉を呟いた。

でも……なんでって、そんなの……！

「そんなの！　……そんなの決まっています！　先輩が、俺にとって一番大切だから……！」

「っ！　……ふふ、君はいつもそうだな。いつも……私の欲しい言葉をくれる……」

俺は先輩の左手を無言で取り、“シルウィアヌスの指輪”をその薬指にはめる。

「こんな贈り物で、すいません……でも、これは先輩を救ってくれ

るはず、ですから……」

「ああ……もちろん信じるよ。だって……」

先輩は顔を上げると。

「だって、誰よりも大切な君だから」

そう言って、ニコリ、と微笑んだ。

大切な君（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

とうとう第二条、雷帝サンドラ編が終了いたしました！

次回からは数話程度の閑話を投稿し、そしていよいよ第三章、『ガイスト×レブナント』の本編が始まり、真の主人公が登場します！

お楽しみに！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お節介でバカで、優しいアイツ①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
本日は幕間としてサンドラ視点をお送りします！

お節介でバカで、優しいアイツ①

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

ワタクシは、生まれたその日から、貴族であることを求められタ。
ソレモ……いつも隣にいる、同じ顔をした妹と比べられながラ。

ワタクシの家……『レイフテンベルクスカヤ家』は、ルーシ帝国では公爵位を持ち、皇族の血を引いたまさに名門貴族だっタ。

当然、長女であり後継者であるワタクシは、幼い頃から英才教育を施されタ。
勉学モ、貴族としての振る舞いモ、そして……精霊（ガイスト）モ。

この『レイフテンベルクスカヤ家』に生まれた者は、全員が十歳を迎える頃、必ず精霊（ガイスト）が発現すル。
何故かは分からないが、遺伝子的な何かが関係しているのかもしれなイ。

そして、精霊（ガイスト）が発現してすぐに行（おこな）った精霊（ガイスト）による模擬戦で、ワタクシは双子の妹であるプラーミャに完膚なきまでに叩きのめされタ。

その時からダ。
パパやママ、そしてプラーミャの私を見る目が変わったのハ。

ルーシ帝国が誇る小・中・高一貫の名門校に通っていたワタクシが、その小等部や中等部で歴代卒業生トップの成績を上回っても、プラーミャはワタクシをさらに超えていク。

当然、パパとママはワタクシに言っタ。
妹のプラーミャにできて、何故ワタクシに同じことができないのカ、ト。

学校でも、注目の的は常にプラーミャで、ワタクシの位置付けはそんな妹が映えるための比較対象でしかなかっタ。
そしてワタクシも、そんな自分の環境をつらいと感じながらをただ受け入れていタ……いや、違う。受け入れるしかなかったんダ。

そんなある日、東方国からうちの学校に留学生についての募集が掲示されたタ。
両国間の学生同士の交流を深めるというもので、高校三年間をその東方国の学校で学ぶらしイ。

「コレですワ！」

ワタクシには、その募集の貼り紙が救いの手を差し伸べているように見えタ。
プラーミャもいない……ワタクシのことを誰も知らない全く新しい環境なら、ワタクシも評価してもらえるんじゃないカ、ワタクシを見てくれるんじゃないカ、そう思ったからラ。

早速、ワタクシは学生課に向かい、留学についての詳しい願書を受け取ると、穴が開くのではないかというほど、何度も読み返しタ。

そしテ。

「パパ……ママ……ワタクシ、東方国に留学したいのでス……！」

ワタクシは必死に訴えタ。
いかに東方国へ留学することが素晴らしいか、私の成長につながるかということヲ。
モチロン、その結果が『レイフテンベルクスカヤ家』にとって有益であることを示しながラ。

最初は難色を示した両親だったが、結局は根負けし、晴れてワタクシは東方国へと留学することとなっタ。
プラーミャは最後まで反対していたけど、決まってしまった以上、プラーミャにはもうどうすることもできなイ。

ワタクシは今度こそ……パパやママ、プラーミャに認められる立派な貴族になるんダ！

◇

東方国にある“国立アレイスター学園”、ここが、ワタクシの新しい生活のスタートを切る学び舎ダ。

入学初日から、ワタクシは勉強に精霊（ガイスト）の訓練に余念がなかっタ。
本当は、せっかくだから友達も作って遊んだりしたかったけど、プラーミャと差をつけられているワタクシには、そんな暇はなイ。

気づけば、この学園でもワタクシは一人だっタ。

期末テストまで一か月を切るタイミングで、何故かうちのクラスに一人の男子生徒が編入されてきタ。
彼の名は、“望月ヨーヘイ”。

気になって調べてみたら、どうやら彼は前のクラスでトラブルが

あり、クラスを移ったとのことだっタ。
　といっても、彼自身が悪いわけじゃなく、前のクラスの生徒達どころか、担任の先生まで一緒になって彼に対して酷いことをしていたらしイ。

……なんだか、ルーシにいた頃のワタクシに少し似ているかモ。

そう思ったワタクシは、そんな彼に下らないちょっかいをかけていタ。

「……それで、お前はまだいるのかよ……」
「もちろんですワ！　ワタクシと勝負するんですのヨ！」

こうやって絡むと、彼……ヨーヘイはいつも面倒くさそうな表情を見せて取り合わなイ。こうなると、逆にワタクシ一人が空回りしているみたいで、すごく恥ずかしかっタ。
だけど、ワタクシは今さら止めることもできずにひたすら絡み続けル。

するト。

「せっかくの機会だ。望月くん、彼女の申し出を受けてみたらどうだ？」

学園の一年先輩で、生徒会長でもある“藤堂サクヤ”先輩が、ワタクシを後押ししてくれタ。
　この藤堂先輩は、昼休みや放課後のたびに、いつもヨーヘイに会いにこの教室に来ているのだけド……何というか、生徒会長って忙しくないんですノ？

とはいえ、先輩の後押しはワタクシにとって非常にありがたかったので、当然そのまま会話に乗っかっタ。

ただ、ヨーヘイは先輩に鍛えてもらうというので、それはズルだとワタクシはあえてクレームをつけタ。本当は、そんなこと全然思ってなかったけド。

すると先輩は、このワタクシも一緒に指導すると言い出した。

学園最強と名高い藤堂先輩ダ。ワタクシには、そんな先輩のありがたい申し出を断るという選択肢はなかっタ。

……一緒に“グラハム塔”領域（エリア）に入るまでハ。

「サンドラ！　後ろから“オーク”が二体来ているぞ！」

「ヒ、ヒイイですワ！」

とまあこんな感じで、先輩は非常にスパルタだっタ。

そして、そんな厳しい先輩の指導を、ヨーヘイは事もなげにこなしていク。

ふ、二人は普段からこんな感じなんだろうカ……。

デモ、ヨーヘイはこの時、確かに言っタ。

先輩はきっと、このワタクシを強くしてくれル、ト。強くなれた自分がここにいるのは、先輩のおかげなんだト。

そう言われてしまったら、ワタクシは折れるわけにはいかなイ。

歯をくいしばりながら、ワタクシは必死で先輩の指導についていっタ。

その甲斐もあり、もう“グラハム塔”領域（エリア）も先輩抜きで難なく攻略できるようになっていタ。

ダケド、本当は気づいていル。それができるのは、ヨーヘイがしっかりサポートしてくれているからだっテ。

ワタクシが幽鬼（レブナント）と戦っている時は、背後を取られないように常に警戒をしてくれているし、必要なら幽鬼（レブナント）を呪符で拘束したり、間引きしたりしてくれていタ。そのことをワタクシが指摘しても、ヨーヘイは絶対に認めないけド。

本当に、頑固というか優しいというカ……。

そして、いよいよ第六十階層の領域（エリア）ボスであるタロースといざ戦いとなった時。

あの女……“悠木アヤ”が乱入してきタ。

お節介でバカで、優しいアイツ①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は昼頃更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お節介でバカで、優しいアイツ②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お節介でバカで、優しいアイツ②

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

いよいよ第六十階層の領域（エリア）ボスであるタロースといざ戦いとなった時、あの女……“悠木アヤ”が乱入してきタ。

しかも、ワタクシ達を確実に傷つけるつもりデ。

ヨーヘイはワタクシにタロースとの戦闘を指示し、自身は悠木アヤとの戦いを選んダ。

デモ、これじゃワタクシがタロースを倒してしまったらどうするつもりなのだろウ。実際、タロースを相手してみて分かったけど、この程度なら［イヴァン］だけで充分倒せル。

……ヨーヘイは、ワタクシに花を持たせるつもりなのかしラ。

マサカ！　そんなの、このワタクシのプライドが許さなイ！　それ以上に、ここまでずっと気遣ってくれたヨーヘイに何も返せていないのにさらに恩を受けるなんて、それこそ『レイフテンベルクスカヤ家』の家門に傷をつけることになル！

ワタクシはヨーヘイがあの“悠木アヤ”を倒してコッチに合流するまで、わざと拮抗させながらタロースと戦っタ。

するト。

「サンドラ！　待たせた！」

フフ……やっとヨーヘイが来タ。
ワタクシは口元を緩め、タロースを見据えル。

「エエ……それじゃ、今度こそ勝負ですわヨ？」
「ああ！」

コレでやっと対等に勝負ができル、そう思っていたのに、ヨーヘイときたラ……結局、ワタクシのサポートに徹して、全然タロースを倒そうとしなイ。
デモ、ワタクシはそんな気がしていタ。ダッテ……ヨーヘイですもノ。

とにかく、このままワタクシがヨーヘイの気持ちを無視してタロースとの戦いを放棄したら、それこそ彼に申し訳が立たなイ。
ワタクシはヨーヘイの気持ちに応えるためにも、全力でタロースを攻撃し、そして倒しタ。

この“グラハム塔”領域（エリア）を異例の一学期で踏破なんて偉業を達成したのだから、当然ワタクシは喜んダ。
そして、それはヨーヘイモ。

……ワタシに勝ちを奪われたっていうのに、本当にもウ……。

その時。

「サンドラ！」
「キャッ！！？」

突然、ワタクシはヨーヘイに突き倒されて驚くけど、それ以上に驚いたのハ……背中から変な煙が出て、顔色を真っ青にしながら苦

しむヨーヘイと［シン］の姿だっタ。

理由は簡単。あの悠木アヤが、自分の身体を犠牲にして呪符を【アシッドレイン】で溶かし、ヨーヘイとワタクシを攻撃したかラ。

そして、ヨーヘイはこのワタクシを庇(かば)っテ……！

「オマエエエエエエッツ！」

これほど頭にきたことはなかっタ。

これほど不甲斐ないと思ったことはなかっタ。

ワタクシはすぐに悠木アヤに飛び掛かろうとしたけど、ヨーヘイに止められタ。

それは、ワタクシじゃこの悠木アヤに勝てないかラ。

悔しイ。

悔しイ、悔しイ、悔しイ！

プラーミャにいつも負けていた時にはなかった感情が、ワタクシの胸の奥に押し寄せル。

ワタクシがもっと強かったラ……！

思い切り歯噛みしていると、ヨーヘイに腕を引っ張られ、抱き寄せられタ。

ヨーヘイが、近イ……。

ヨーヘイはワタクシの耳元で作戦について語ってくれタ。

ワタクシがヨーヘイと口論して突き飛ばされるフリをし、［シン］の傍(そば)に行って［シン］をヨーヘイの元へと投げ飛ばス。

ワタクシはそんなことでしかヨーヘイの手助けをできない悔しさをにじませつつ、その作戦に乗っタ。
そしてそれは狙い通りに上手くいき、［シン］を無事に彼のところまで放り投げることができタ。

そこからは、彼の圧勝だっタ。
呪符によってヨーヘイと［シン］の人形のようなものを作り、悠木アヤの攻撃をその人形に一身に受けさせることで、彼女のスキルを破ったのだカラ。

悠木アヤを呪符で拘束し、［イヴァン］が担ぎ上げると、ワタクシ達は“グラハム塔”領域（エリア）を出ル。

扉をくぐると、満面の笑みで出迎えようとした先輩の表情が一瞬で変わっタ。
当然ダ。先輩のお気に入りであるヨーヘイが、こんなに傷ついているのだカラ。

ワタクシは先輩に一部始終を簡単に説明すると、悠木アヤを地面へと無造作に放り投げル。
その悠木アヤは、先輩の［関聖帝君］に青龍偃月刀（えんげつ）を喉元に突きつけられ、【威圧】スキルもあって恐怖のあまり気絶してしまッタ。

ダケド……ワタクシはヨーヘイの背中を眺め、ただ、申し訳なさを感じていタ。
だって、ヨーヘイはこのワタクシを庇（かば）ったせいで傷ついてしまったのだカラ……。
なのに彼ときたら、ワタクシの頭を乱暴に撫でたかと思うと、微笑みながらワタクシを気遣ってくれタ。

本当に……バカ……。

ワタクシはその時、胸がかあ、と熱くなる感覚を覚えたけど、それをヨーヘイに悟られまいとわざとそっけない態度をしてしまっタ。
デモ、それすらもヨーヘイにはお見通しだったみたイ。

その後、ワタクシ達はヨーヘイの治療のために病院へ向かっタ。

ワタクシが売店で紅茶を買っている隙に、治療を終えたヨーヘイは先輩と談笑していタ。
声を掛けると、何故か二人は気まずそうにしたけド、ヨーヘイはすぐにワタクシに向き合い、こう言ったのダ。

「だから……サンドラも、一緒に来てくれないか？　その、領域（エリア）の攻略に」

嬉しかっタ。
ヨーヘイに、必要とされていることニ。ヨーヘイに頼りにされたことニ。

今まで、ルーシではプラーミャと比較され続け、結果、期待されずに苦言ばかり言われていたこのワタクシが、ヨーヘイは必要としてくれル。

この時、のワタクシの心は、生涯で一度もないほど幸福感で満ち溢（あふ）れタ。

当然、ワタクシはヨーヘイのお願いを受け入れタ。
デモ、恥ずかしいからってあんな言い方はなかったと反省していル。マア、彼にはお見通しだったけド。

「フフ……ヨーヘイは、このワタクシに一緒にいて欲しいのネ……」

家に帰り、ワタクシはヨーヘイのあの言葉を何度も思い返しては、口元を緩めていタ。

この東方国なら、アレイスター学園なら……ヨーヘイ、なら……このワタクシを必要としてくれル、認めてくれル。

そう考えたら、どうしてワタクシは、あんなにもパパやママの評価に固執していたんだろウ……どうして、プラーミャにこだわったのだろウ。

ワタクシはワタクシ、プラーミャはプラーミャだというのに。

……モウ、『レイフテンベルクスカヤ家』は、このワタクシの全てじゃなイ。

だったら……そんなワタクシのこだわりも、しがらみも、全て捨ててみよウ。

後継者候補を、降りてみよウ。

「そ、そのためには、当然ヨーヘイにも協力していただきませんト！」

そうですとモ！　ヨーヘイがワタクシをこんな気持ちにしたんですもノ！　その責任を取っていただかないト！

それに、元々ワタクシとヨーヘイは勝負をしているのですから、勝利報酬を新たに設けることくらい、大丈夫ですわよネ？　ネ！

ワタクシは気合いを入れるために小さくガッツポーズをし、意気込んダ。

お節介でバカで、優しいアイツ②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お節介でバカで、優しいアイツ③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お節介でバカで、優しいアイツ③

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

期末テストでもヨーヘイに圧勝し、ワタクシは考えていた通り彼にお願い事をしタ。

その内容は、ワタクシの恋人のフリをしてもらうコト。夏休みになったらやってくる、妹のプラーミャに会ってもらうためニ。

そして、ワタクシはプラーミャに告げるのダ。

ヨーヘイと添い遂げるために、『レイフテンベルクスカヤ家』の後継者候補から降り、家を出ることヲ。

モ、モチロンこれは、あくまでもワタクシが家を出るための方便であって、その、け、決してヨーヘイと添い遂げようなんて気持ちは……ウン、ノーコメントですワ。

その代わりではないけど、ヨーヘイにお願いされた通り、彼が偶然見つけたという“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略に先輩と一緒に彼に同行しタ。

その領域（エリア）で出現する幽鬼（レブナント）は、“グラハム塔”領域（エリア）の幽鬼（レブナント）と比べてはるかに強かっタ。

といっても、ワタクシには【雷属性無効】のスキルがあったため、半分程度は雷属性の幽鬼（レブナント）相手なのでその危険度も低かったけド。

そんな攻略を毎日行い、とうとうプラーミャがやって来る八月一日を迎えタ。

ワタクシはヨーヘイと先輩に一緒に来てもらい、空港でプラーミャを出迎えル。

ヨーヘイのことに関しては、あらかじめプラーミャには伝えておいたから恋人として違和感はなかったはズ……ですわよネ？

その後、せっかくなので東方国を観光しようってプラーミャに提案したんですけド……プラーミャから返ってきたのは、まさかの領域（エリア）攻略だっタ。

どうやら、プラーミャがこの国に来る直前に電話で話していた、“アルカトラズ”領域（エリア）に興味があるみたイ。

それと……ヨーヘイにモ。

何度も話題を逸らしてワタクシは断るのだけど、プラーミャは行くと言って聞かなイ。

結局根負けしたワタクシは、仕方なくプラーミャも一緒に“アルカトラズ”領域（エリア）へと連れて行っタ。

プラーミャを見たヨーヘイと先輩は驚いていたけど、とりあえず事情を説明し、プラーミャも同行することになっタ。

久しぶりに見たプラーミャの精霊（ガイスト）、［イリヤー］の強さは、さらに磨きがかかっていタ。それに加えて、［イリヤー］にはステータスを大幅に引き上げるスキル、【スヴャトゴル】がある。

ワタクシも先輩に鍛えてもらったり、“グラハム塔”領域（エリア）やこの領域（エリア）でレベルアップしたおかげで相当強くなってますけド……それでも、プラーミャにハ……。

そんなもやもやした感情を抱えながら、ワタクシ達は第九階層へとたどり着いた。

プラーミャはというと、第七階層で見た［シン］のステータスに対抗意識……なのかは分からないけド、やたらとヨーヘイに絡んで

は迷惑をかけていタ。
ワタクシがそれを注意しても、プラーミャはヘラヘラと笑うばかりで、全く聞く耳を持たなイ。
ウウン……それ以上に、ワタクシは怒っていたのダ。
ヨーヘイのことを馬鹿にしたプラーミャニ。
だから。

「ワタクシはもう、ルーシには帰りませんワ！　この国で、ヨーヘイと添い遂げますノ！　ですから、『レイフテンベルクスカヤ家』の継承権も放棄するのですワ！」

言っタ。とうとう言っタ。
もちろん、これから先のワタクシの進む道は、前途多難であることは分かってル。
デモ……それでモ……。

ワタクシはチラリ、とヨーヘイを見やると、彼は混乱し切った表情でオロオロしていタ。
そんな彼に申し訳ないと思いつつも、ワタクシは目配せしてワタクシの話に合わせるように促しタ。

「そ、そうだ……お、俺はサンドラと、その……添い遂げる、です……！」

振り絞ったような声でヨーヘイがそう告げると、プラーミャと先輩の表情が絶望に変わった。
せ、先輩はともかくとして、プラーミャにはこれで納得してもらうしかなイ。
それからプラーミャは、必死になってワタクシに問い質すけど、

ワタクシの意志は変わらない。

そして、ようやく諦めたプラーミャは、ワタクシの代わりにパパとママに話してくれることになった。

デモ、プラーミャは本当は全然諦めてなかっタ。

第十階層に着いた途端、プラーミャはヨーヘイを捕まえて何かコソコソと話していた。

すると。

「フザケルナ！　アイツの……サンドラのこと、本当に知りもしないで！　勝手なことばかり言いやがって！」

突然、ヨーヘイがプラーミャに向かって怒鳴っタ。

ワタクシはヨーヘイと知り合ってから一度も、あんなに怒っている姿を見たことがなイ。

……ヨーヘイが何で怒っているのか、その理由は分かってル。

ヨーヘイは、プラーミャがワタクシを貶（けな）したから怒ったのダ。

悔しかっタ……そして、嬉しかっタ。

だって……ヨーヘイはワタクシのこと、そうじゃないって信じてくれているって証拠だカラ。

だカラ。

「ワタクシ……ワタクシ、頑張るカラ……！　モットモット、頑張るからア……！」

ワタクシは、涙でくしゃくしゃになった顔で、ヨーヘイに誓った。
絶対に、信じてくれたヨーヘイの期待に応えてみせル、ト。

その時……ワタクシの脳裏に言葉が浮かんだ。

『クラスチェンジ開放条件、クリア。［トール］または［ペルーン］へのクラスチェンジが可能』

これは……［イヴァン］のクラスチェンジ？
どうやら、ワタクシのこの決意こそが、［イヴァン］のクラスチェンジの条件だったみたいダ。
フフ……ヨーヘイ。やっぱりアナタはすごい人。
ワタクシは、そんなアナタの隣に立ちたい。ズット……ズット。

デモ……そんな想いを、ワタクシらしくこう伝えよウ。

「見てなさいヨ？　アッと驚かせてやるんですかラ」

そう言って、ワタクシはヨーヘイに精一杯の笑顔を浮かべタ。

お節介でバカで、優しいアイツ③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お節介でバカで、優しいアイツ④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お節介でバカで、優しいアイツ④

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

第十階層にいる領域（エリア）ボスは、軍服と白衣を着たスケルトンだっタ。
攻撃手段は医療用のメス、【水属性魔法】、そして、部屋に仕掛けられた毒ガスダ。

ヨーヘイと先輩がサポートに回り、ワタクシが領域（エリア）ボスを倒しタ。
クラスチェンジをしてから戦ってもよかったけド、何故だかこの時のワタクシは今じゃなイって思っタので、クラスチェンジはしなかっタ。それに、そうしなくても倒せたのだシ。

領域（エリア）ボスを倒した後、閉じられていた部屋の扉がゆっくりと開くと、ソコには……普段と様子の違うプラーミャがたたずんでいタ。

そんなプラーミャは、このワタクシが領域（エリア）ボスを倒したことが受け入れられないらしイ。
突然、幽子の渦に包まれたプラーミャがその姿を現すと……巨大な鉄槌を担いだエルフの幽鬼（レブナント）を従え、その瞳が黒く輝いていタ。

思わず膝から崩れ落ちそうになるワタクシを支え、ヨーヘイがプラーミャに尋ねル。
すると、プラーミャから返ってきた答えは、少し意外なものだっタ。

……プラーミャは、弱いワタクシを守ることで、自分自身の価値を見出していたなんテ……。

こんなノ……どうすればプラーミャが元通りになるノ？　また、弱いワタクシのままで居続けろって言うんですノ……？

だけド、ヨーヘイの放った言葉は違っタ。

彼はハッキリと言っタ。プラーミャを倒せト……強くなったワタクシを、見せつけてやれ、ト。

しかも、精霊（ガイスト）同士の戦いを、ただの姉妹ゲンカだなんテ……本当に、メチャクチャデ、頼もしくテ、優しくテ……。

だったラ、見せてさしあげますワ！　ワタクシとプラーミャの、最ッ高の姉妹ゲンカヲ！

ワタクシはヨーヘイとコツン、と拳を合わせると、クラスチェンジはまだせずに、［イヴァン］のままでプラーミャに立ち向かう。

まずは、ワタクシがこの学園に来てどれほど成長したのかを見せつけるためニ。

デモ、やはりプラーミャは強く、徐々に押し込まれル。

何とか反撃を試みるけド、『敏捷』のステータスで劣る［イヴァン］では、手数で負けてしまウ。

「アウッ！？」

［イリヤー］の槍の一撃が、［イヴァン］の右肩を掠（かす）っタ。

ワタクシは急いでプラーミャと距離を取ると、彼女もワタクシから離れ溜息を吐ク。

そして、ワタクシに以前のように戻れと諭ス。

ワタクシの意志は、まるで無視しテ。ワタクシが弱いと、決めつけた上デ。

デモ。

「サンドラ！」

彼は……ヨーヘイは、右の拳を高々と突き上げ、このワタクシを鼓舞しタ。

それこそ、ワタクシが負けるだなんて微塵（みじん）も疑っていないかのような瞳デ。

ワタクシは思わず笑いがこみ上げル。

そんなヨーヘイの気持ちが嬉しくテ。ヨーヘイの、想いが嬉しくテ。

だかラ。

「フフ……ヨーヘイ、ワタクシは負けなイ！　信じてくれる、アナタのためにモ！　だかラ！」

【絨毯（じゅうたん）爆撃】を仕掛けようとする［イリヤー］に、ワタクシはあえて［イヴァン］を突っ込ませル。

そしテ。

「クラスチェンジ……開放！」

ワタクシは、とうとう［イヴァン］をクラスチェンジさせタ。

［イヴァン］から、“雷神”［ペルーン］へト。

フフ……ヨーヘイったら、すごく驚いた顔をしていますワ。

そこで見ていテ。アナタが信じてくれた、ワタクシ達の力ヲ！

［ペルーン］は、メイスと盾を構えて［イリヤー］へと突っ込んでいク。
プラーミャも、【スヴャトゴル】を発動させ、【絨毯爆撃（じゅうたん）】による攻撃を仕掛けてきタ。
デモ……それはもう、ワタクシ達には通用しなイ！

「【ガーディアン】」

［ペルーン］の前にいくつもの盾を展開し、［イリヤー］が放つ槍衾（やりぶすま）を全て防ぎ切ル。

「プラーミャ……これが、ワタクシの意志ですワ！　【裁きの鉄槌】！」

【絨毯（じゅうたん）爆撃】を防がれ、空中で無防備になった［イリヤー］に、［ペルーン］はメイスを容赦なく叩き込んダ。

「プラーミャ！」

悲鳴を上げながら吹き飛んだプラーミャの元へ、ワタクシは慌てて駆け寄っタ。
必死で訴えかけるプラーミャ。聞けば、何ということはなイ……プラーミャはワタクシと一緒にいたかっただけなのダ。ただ、その方法を間違えているだけデ。
だから、今度こそワタクシの想いを伝えル。決して、プラーミャが嫌いなんかじゃなくテ、ワタクシは、これまでとは違う道を歩みたいのだト。

ようやく分かってくれたプラーミャの瞳は、漆黒から琥珀色の美しい瞳に変わり、ぽろぽろと涙を零(こぼ)しタ。

ワタクシはそんな彼女と抱きしめ合いながら、ただ、泣き合った。

お節介でバカで、優しいアイツ④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お節介でバカで、優しいアイツ⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お節介でバカで、優しいアイツ⑤

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

『……ネエ、ちゃんと私（ヤー）の話、聞いてル？』

ルーシの空港に到着したプラーミャが、スマホ越しに呆れた声で指摘すル。

「エエ、聞いてますわヨ……フワア……」

『アー！　欠伸（あくび）しタ！』

イヤイヤ、欠伸（あくび）くらい許して欲しイ。ルーシはまだ夜の七時かもしれませんけド、コチラはもう夜中の一時ですのヨ？

『モウ……それよりも、本当に『レイフテンベルクスカヤ家』から離れるノ？』

「エエ……それは伝えた通りですワ……」

プラーミャはまだ未練があるらしく、また同じことを聞いてきタ。デモ、ワタクシの決意は変わらなイ。これからは違う道ヲ……』デモ、そうするとサンドラはいきなり路頭に迷うことになるけド……』……へ？

「チョ、チョット待ってくださいまシ！？　ど、どうしてワタクシが路頭に迷うんですノ！？」

『ダッテそうでショ？　今住んでるところも生活費も、全て『レイフテンベルクスカヤ家』が用立てているのヨ？』

「ア……」

そうだっタ。もし、ここで『レイフテンベルクスカヤ家』を離れることになったら、ワタクシは途端にホームレスニ……！？

『……気づいてなかったみたいネ』

「フエエ……」

ワタクシは思わず落胆の声を漏らしてしまっタ。

『それに、もしそんなことになったら、パパ、自殺しちゃうかモ』

「エエエエエ！？　ど、どうしてですノ！？」

『アラ？　気づいてなかったノ？　“出来損ない”とか言いながらもパパがサンドラを後継者候補から外さないのハ、パパがサンドラ好き過ぎるからヨ？』

「ハイ……？」

ワタクシのことが好き過ぎル？　あのパパガ！？

『ソウヨ。パパはサンドラを後継者にして、ずっと家から出さないんダって、いつも言ってるシ。だから、彼氏や結婚も絶対に認めないって言ってタ』

「ソ、ソウ……アハハ……」

突然プラーミャから放たれた言葉に、ワタクシの口から乾いた笑い声が漏れタ。

『それト！』

「まだあるんですノ！？」

ただでさえショックを受けているところに、これ以上追い打ちをかけるようなことは止めて欲しいんですけド！？

『ヨーヘイだけど……どうするノ？　藤堂様は手強いわヨ？』

「ウ……」

プラーミャの指摘に、ワタクシは声を詰まらせル。

というカ。

「どど、どうしてそう思うんですノ？　ワ、ワタクシとヨーヘイは恋人同士でしてヨ？」

ワタクシはとぼけながらそう返すと。

『ハア……それが嘘だってことは、もうとっくに分かってるわヨ』

「フエエ……」

溜息と共に告げられた言葉に、ワタクシは変な声を上げル。

ま、まさかバレてただなんテ……。

『負けたく、ないでショ……？』

「……ウン（ダー）」

『ダッタラ！　このプラーミャがパパの件も含めて、バッチリ支援してあげル！　フフフ……楽しみに待ってなさイ！』

「ホ、ホント！　プラーミャ、ありがとウ！」

『クフッ！』

プラーミャのサポートの申し出に嬉しくなってお礼を言うと、プラーミャは変な声を上げタ。

『ト、トニカク！　そういうことだから、サンドラは安心して待ってテ！』
「エ、エエ！」

プラーミャの言葉に、ワタクシは勢いよく返事をしましたけド……待ってテって、どういう意味ですノ？

『それじゃ、そろそろ切るワ。またネ』
「エエ……またネ」

通話終了のボタンをタップし、ワタクシはベッドに座ル。
フウ……デモ、パパの本心がそうだったなんて、何というか、ソノ……どう反応していいのか分からなイ……。
ただ、そんな下らない理由で振り回されていたことに関しては、怒りを覚えますワ。

プラーミャも、ヨーヘイのことを含めてバックアップすると言ってくれましたし、そこは安心……って。

「それにしてモ……プラーミャはどうやって手伝ってくれるつもりかしラ……」

ワタクシは首を傾げるけど、まあ、プラーミャだから何とかするんだろウ。

だけド。

「フフ……ワタクシがこんな考えができるようになって、家族の本心を知って、そして救われたのは……全部、ヨーヘイのおかげですわネ……」

そう呟くと、ワタクシはヨーヘイの顔を思い浮かべる。
いつもどこかふざけているような態度を見せるくせニ、いざという時は頼りになっテ、支えてくれテ、そして、信じてくれテ……。

「……二学期になったら、モット頑張りませんト」

そう……ヨーヘイを攻略するには、あの藤堂先輩という壁があル。
ハッキリ言って、どんな領域（エリア）ボスなんかよりも強敵ダ。

「デモ……負けませんワ！　だから、パパ、ママ、そしてプラーミャ……力を貸しテ！」

深夜二時に差し掛かろうという中、ワタクシは机に立てかけてある、十歳の時に撮影した家族の笑顔の写真に向かって宣言しタ。

お節介でバカで、優しいアイツ⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日も幕間をお送りし、明後日からいよいよ第三章！　どうぞお楽しみに！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

私の幸福（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
本日も幕間を四話お届け！

私の幸福

■藤堂サクヤ視点

「ふふ……彼からの初めてのプレゼントが、この指輪だなんて、な……」

私は左手薬指にはまっている、“シルウィアヌスの指輪”をそっと撫でる。

ただ……望月くんはどうして、これを私にプレゼントしようと思ったのだろうか。

彼曰く、この指輪には幽鬼を倒した時に手に入る幽子が半分に制限され、しかも、呪いを解かない限り私の薬指から外すことはできないらしい。

「ひょっとして……彼は私達のやろうとしていることを知って……いや、まさかな……」

私は一瞬、あの計画のことが彼に知られたのかと考えたが、すぐに思い直す。

アレは、私とお父様、カナエさん、そして一部の研究員しか知らない。それをただの学園の生徒でしかない彼が、知り得るはずがないのだ。

「でも……彼は、この私とずっと一緒にいたいからだと言った」

それはつまり、これからこの私に何が起こり得るのか、彼は知っ

ているということだ。

思い返してみれば、彼の行動は異常だった。

あの初心者用の領域（エリア）に現れた、もう一つの領域（エリア）しかり。

私ですらこの身体が竦（すく）んでしまうほどの、幽鬼（レブナント）が闊歩（かっぽ）しているもう一つの領域（エリア）を、気の遠くなるほど繰り返し出入りして手に入れる疾走丸しかり。

さらには、彼が中学の時に偶然見つけたという、“アルカトラズ”領域（エリア）しかり。

これら全て、彼は最初から知っていたのではないか……そう思えて他ならない。

「ふう……止めだ止めだ、こんなことを考えて何になるというのだ」

私は深い溜息を吐いた後、思い切りかぶりを振った。

彼の行動は確かに異常だ、それは認めよう。だが……彼が一度たりとも、この私に対して不利益なことをしたか？　いや、そんなことは決してなかった。

それどころか、あの“アルカトラズ”領域（エリア）では【水属性反射】という、［関聖帝君］の弱点を補って余りあるほどの恩恵を手に入れることができたのだ。

それに……彼はいつも、この私の心に寄り添って、気遣って、支えてくれて……。

あのデートだって、偽とはいえサンドラとの恋人役を演じることになったことに嫉妬して、勝手に落ち込んでいた私のためにしてくれたのだ。

「ふふ……本当に彼は……」

そんな彼を想うだけで、この私の胸がこれ以上ないほどに熱く、そして激しく高鳴る。

ああ……単なる興味本位で声を掛けたあの彼が、私の中でこれほどまでに大きな存在になるなんて、誰が予想できただろうか。

指輪の呪い？　解けない限り、永遠にこの薬指から外れない？

最高じゃないか。

この指輪が私の薬指にある限り、私と彼は永遠につながっていられるのだから……。

「さて……では、そろそろ時間だな」

私はそんな彼との永遠の絆ともいえる指輪にもう一度触れると、自室を出てお父様の待つ研究所へと向かった。

◇

益田市の郊外にある、お父様の研究所。

今、私と［関聖帝君］は色々な管やコードをその身体につけられながら、ベッドに横たわっていた。

そんな中。

「うーむ……これはすごい！　まさか、ここまで数値が上昇しているとは！」

「はい！　これなら予定していたスケジュールを大幅に前倒しできそうです！」

私の精霊（ガイスト）……［関聖帝君］のデータを眺めながら、研究員達が色めき立った。

まあこの数値は、“アルカトラズ”領域（エリア）で倒した幽鬼（レブナント）から手に入れたもの、だからな……。

「サクヤ……お前はどうやってこれほどの“ウルズの泥水（でいすい）”を手に入れることができたのだ……？」

お父様は、必死の形相で私に詰め寄る。

それもそうだろう。この“ウルズの泥水（でいすい）”の量によって、お父様の計画の成否が決まるのだから。

今までは、“ウルズの泥水（でいすい）”を手に入れるために大量のマテリアルから抽出していた。

それでも、得られる“ウルズの泥水（でいすい）”の量は微々たるものだったのだから、お父様からすれば、喉から手が出るほどにその情報を得たいに違いない。

「……実はこの前、学園内にある領域（エリア）の攻略を行っていた際、エルフの、しかも鍛冶師のような恰好をした女性の姿の幽鬼（レブナント）に遭遇しました」

「っ！？」

私の言葉に、お父様は息を飲んだ。

「それで、私は［関聖帝君］でその幽鬼（レブナント）を倒すと、私の身体の中に幽子とは別の何か……恐らく、“ウルズの泥水（でいすい）”が吸収されたのでしょう……」

「おお……！　で、では、その幽鬼（レブナント）は……！」

恍惚（こうこつ）の表情を浮かべたお父様が、天を仰ぐ。
やはり、あの幽鬼（レブナント）はお父様が求めていた、“柱”と呼ばれるものの一つなのだろう。

「ふ、ふふ……ようやくサクヤの中にある種が芽吹いてきたか……！」

そう……あの幽鬼（レブナント）が“アルカトラズ”領域（エリア）に現れたのは、私の中に種があるから。
“柱”達は、私の中の種を求め、これからも奪いにやって来るだろう。
そして私は、そんな“柱”を打倒し、種に“ウルズの泥水（でいすい）”を与え続けるのだ。

……お父様の悲願が成就する、その日まで。

でも。

「……彼がこのことを知ったら、どう思う、かな……」

私達はある意味、人の道を外れるような、神を冒涜（ぼうとく）するような、そんなことをしてしまっているのだ。
彼は私に幻滅するかもしれない、私から遠ざかってしまうかもしれない。

そんなことを考えていた、その時。

「藤堂様……これを……！」
「うん？　どうした……って、これはどういうことだ！？」

研究員の一人から書類を手渡され、お父様が愕然とする。

「何故……何故、いつもと同じように“ウルズの泥水（でいすい）”を供給しているのに、サクヤと［関聖帝君］の数値が上がらないのだ！　これではいつもの半分以下（・・・・）ではないか！」

半分以下……なるほど、そういうことか。

私は左手薬指を眺め、確信した。

やはり……彼はこの計画に気づいていたのだ。

「……ふふ。だったら、答えは出ているじゃないか……」

そうだ……彼ならきっと、『この計画をぶち壊す』と言うだろう。

彼はいつだって、私のことを大切に想ってくれているのだから。

ああ……今の私は幸福に満ちている。

そんな彼に想われているという心地良さを感じながら、お父様と研究員が騒ぎ続ける研究所のベッドの上で私は一寝入りした。

私の幸福（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は昼頃更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

プールへ行こう①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

プールへ行こう①

「くあ……！　今日も暑そうだなあ……」

カーテンを開け、既に高くなっている太陽を眺めながら、俺は欠伸と共に呟いた。

とはいえ、今日はせっかく藤堂先輩やサンドラとプールに行く約束をしてるんだ。雨が降っても困るんだけど。

「おっと、こうしちゃいられない」

俺は慌てて支度をして、リビングへ向かう。

「あら、おはよう。今日は早起きなのね」

リビングに入るなり、母さんがキッチンから朝の挨拶をした。

「おはよう。というか、今日は先輩達と遊びに行く約束してるから」

「ふーん……デート？」

ニヤリ、と笑みを浮かべた母さんは、探るような視線を送ってきた。

「違うよ。というか、先輩達って言ってんじゃん」

「あら、残念」

そう言ってカラカラと笑う母さんを見ながら溜息を吐くと、俺は用意された朝ご飯を食べ始めた。

『お母様！　［シン］はアイスをご所望なのです！』
「あらあら、朝からアイスなんて食べて、お腹……精霊（ガイスト）って、お腹壊すのかしら？」
「知らね。というか［シン］、さすがに朝からアイスは止めろ……って」
『ハヒ？　はふはー、はんへふ？』

コノヤロウ。［シン］の奴、既にアイスを口にくわえてやがる。
というか母さんも、［シン］を甘やかすなよ……。

「ハア……ごちそうさま」

そんな［シン］を見て溜息を吐くと、俺はサッサと朝食を食べ終えて洗面台へと向かい、歯磨きと洗顔をした。

「よっし！」

全ての準備を終えた俺は、気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩いた。

「行ってきます！」
「行ってらっしゃい」

玄関を出て、俺はまっすぐ待ち合わせ場所である駅に向かう。
先輩のことだから絶対に一時間前に来ているはずだから、今回は一時間半前に到着するようにしてあるのだ。

で、駅前に到着してみると。

「ア……ヨーヘイ、おはようございますワ！」
「お、おう、おはよう……」

というか、既にサンドラの奴が来ていた。
くそう、今日こそは俺が一番乗りだと思っていたのに！

そしてサンドラのコーデときたらどうだ。
少し胸元の開いたゆるふわな若草色のブラウスに、白デニムのホットパンツ、黒のサンダルと少し大きめで造花のアクセサリーがついた麦わら帽子をかぶっていた。

その妖精のような綺麗な容姿と相まって、さっきから通行人がコッチを見てやがる。

「今日も暑いですわネー」
「そ、そうだな……」

サンドラがブラウスの胸元をつまんでパタパタとするが、いくら絶壁とはいえチラチラと見える鎖骨が、その……うん、チョットは意識しろ。

「ダケド……待ち合わせの時間まで一時間以上もありますシ、ソ、ソノ……どこかで涼みまス？」

サンドラが頬を少し赤くしながら、上目遣いでおずおずと提案するが、だったら最初から時間通りに来いよと言いたい。

「そうだな……って、言いたいところだけど、多分、もう少ししたら先輩来るぞ？」
「エエッ！？　で、ですがまだこんな時間ですのヨ！？」

いや、だからそんな時間に来ているのは俺達も一緒だろ。

「む……すまない、遅くなった」

「あ！　先輩！　おはようございます！」

「おはようございますですワ」

案の定、先輩はすぐにやって来て、俺達の元に駆け寄ってきた。

そして今日の先輩は、白のTシャツに白デニムのオーバーオールという、なんとも可愛いコーデをしていた。いや、このギャップは大変良いです。

「うむ……では、少し早いがプールに向かおう」

「「はい！」」

俺達はモノレールに乗り、プールのある海沿いのテーマパークへとやって来た。

「おお……！」

モノレールを降りるなり、先輩はそびえ立つ巨大なジェットコースターを眺めて感嘆の声を漏らす。

「先輩はジェットコースターが好きなんですか？」

「あ、いや、その……恥ずかしながら、実はこういったところに来たことがなくてな……つい、魅入ってしまった……」

「へえー……」

そうか、先輩はテーマパークや遊園地に来たことがないのか。だったら、もう少し涼しくなったら今度はここへデートに誘ってみよ

う。そうしよう。

「フフ……またいつか、ヨーヘイとここニ……（ボソッ）」
「ん？　サンドラ、何か言ったか？」
「フエ！？　イ、イイエ！？　何も言ってませんワ！？」
「あ、そ、そう……」

俺が声を掛けると、サンドラは顔を真っ赤にしてわたわたとしながら否定した。変な奴。

「さて……んじゃ、行きますかー」
「うむ、そうだな」
「ウン（ダー）！」

てことで、俺達はチケットを買って入場ゲートをくぐった。

「それじゃ、中で」
「うむ！」
「ヨーヘイ、後でネ！」

俺は二人と別れ、更衣室に向かうと、早速水着に着替えた。
消毒槽を抜け、シャワーを浴びてプールへとやって来ると。

「うあー……メッチャ混んでる……」

プールの中は密集していて、隙間もないんじゃないかって思うほどの状態だった。
特に流れるプールのエリアなんか、そんな状態のまま流されていくから、非常にシュールだ。

「ま、まあ、みんな考えることは一緒か……」

俺はそう呟いて苦笑すると。

「ヨーヘイ！　お待たせですワ！」

お、サンドラ達も着替えが終わったのか……って!?

振り返った瞬間、俺は思わず声を失い、ゴクリ、と唾を飲み込んだ。

先輩は露出が控え目のワンピースタイプの水着ではあるが、そ、その……先輩のスタイルが圧倒的過ぎて、シャレにならない。

かたやサンドラも、胸がないくせにあえてビキニタイプをチョイスしてやがる。とはいえ、そのスレンダーな体型と透き通るような白い肌も相まって、まあ……良き。

「？　どうかしましたノ？」

「うあ!?　い、いや、何でもない……」

「？」

こ、これは、二人を他の男連中の毒牙から絶対に守らないと……！

そう固く誓い、俺は拳を握りしめた。

プールへ行こう①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

プールへ行こう②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

プールへ行こう②

「アハハ！　ヨーヘイ！　気持ちいいですわネ！」
「あうあうあう！？　そ、そんなに早く行かないでくれえええええ！？」

プールの中で嬉しそうにはしゃぐサンドラに対し、藤堂先輩は泣きそうになりながら必死で俺の手を握っていた。

……まさか、先輩が泳げないだなんて。

「ホ、ホラ先輩、プールの縁（へり）につかまってください」
「イ、イヤだ！　君の手を離してしまったら、私は溺れてしまうではないか！」

いや先輩……ここ、足がつきますから。

「フフ、せっかくですから、泳ぎ方をお教えしましょうカ？」
「う、うむ……だ、だが、私はこれまで色々と指導を受けてきたが、一度たりとも泳げるようになったことはないのだが……」
「ソ、ソウですカ……」

サンドラの申し出に、先輩はおずおずとそう告げると、サンドラは乾いた笑みを浮かべた。コイツ、教えるのを諦めやがったな。

「え、ええとー……じゃあ、俺とサンドラの二人でお教えしますので、せめて浮くくらいはできるようになりましょう」
「っ！　浮く、だと……！　それは、顔を水につけなくても大丈夫

なのか！？」
「あー……そこからですかー……」
うん、小学一年生レベルからの指導が必要だな。
俺とサンドラは顔を見合わせて頷き合うと、とりあえずプールから出ることにした。
「じゃあ、アッチの子ども用の浅いプールに移動しましょうか」
「う、うむ！　それなら……！」
俺の提案に、先輩は心から安堵した表情で胸を撫で下ろした。
……［関聖帝君］の【水属性弱点】は、これが原因なのかもしれないなー……。
◇
「そうです！　そのままバタ足を続けてください！」
「う、うむ！　分かったぞ！」
小学生以下が入る子ども用のプールで、俺は先輩の手を引きながらバタ足の練習をしていた。
最初はあんなに水を怖がっていた先輩も、今ではしっかりと顔をつけて息継ぎもできるようになっている。ううん、進歩したなあ……。
「ど、どうだった？」
「エエ、しっかりと身体も浮いていましたし、これなら大人用のプールに移っても大丈夫ですわヨ！」
「そ、そうか！」
サンドラのお墨付きをもらい、先輩が嬉しそうにはしゃいだ。

そして、そんな俺達の光景を不思議そうに眺めるちびっ子と保護者達。そろそろいたたまれなくなってきた。

「じゃ、じゃあ二人とも、そろそろ移動……の前に、お昼にしようか」

「賛成ですワ！」

「うむ！　私もお腹がペコペコだ！」

そうですね、先輩が一番カロリー消費しましたからね……。

ということで、俺達は売店に行って各々食べたいものを買い込む。

『マスター！　［シン］はアイス一択なのです！』

「分かった！　分かったから出てきちゃダメ！」

興奮する［シン］をたしなめ、とりあえず引っ込めると……ウーン、俺は定番のたこ焼きにでもしよう。これなら先輩達ともシェアできるし。

んで、［シン］はアイスって言ってたけど……せっかくだしかき氷にしてやろう。

「すいませーん、たこ焼き一つとかき氷一つください」

「ハイ！　八百円です！」

俺は店員さんにお金を支払って、たこ焼きとかき氷を受け取ると、先輩達と合流……って！？

「ねえねえ、せっかくだし俺達と一緒に遊ぼうヨ！　ネ？」

「……目障りだ」

「ねー、そんなこと言わずにさあ」

「フフ……今なら見逃してあげますから、とっとと失せるのですワ

！」

見ると、先輩とサンドラがチャラい二人組の男達にナンパされていた。

ああー……ちょっと離れただけでこれかあ……。

「先輩！　サンドラ！　お待たせ！」

「ッ！　ヨーヘイ！　遅いですわヨ！」

「ふふ……では行こうか」

俺はわざとらしく大声で二人を呼びながら駆け寄ると、二人は、ぱあ、と笑顔を浮かべた後、男達を完全に無視して俺の傍（そば）へと来た。

「オイ！　いきなり出て来てなんだオメー！」

「調子こいてんじゃネーゾ？」

うわあ、まさにお約束のテンプレで絡んできたぞコイツ等。

「……何だ？　貴様等は私の望月くんに何か用か？」

「「う……」」

先輩がギロリ、と睨むと、男達は一瞬たじろぐ。

ですが先輩、その言葉は少し語弊があるように思います。いや、嬉しいんですけどね。

「ソウヨ！　ワタクシのヨーヘイに、馴れ馴れしく話さないデ！」

そしてサンドラよ、先輩に続いてお前もか。

「ほ、ほら二人共、早く行きましょう！」

「むむ……」
「モウ……」

これ以上揉め事になっても困るので、二人を促してその場を離れようと……って。

「待てよ！」
「女の前だからって調子コイてんじゃねーゾ！　コラ！」

肩をつかまれて無理やり引っ張られ、スゲー至近距離で睨んできやがった。
いや、先輩の【威圧】や幽鬼（レブナント）に比べたら全然怖くないけど、とはいえ面倒だな……っ！？

――バキッ！

「っつう……！」

突然男の一人に殴られ、俺は思わず後ろへとよろめく。

「へッへ、調子に乗るからこんなことに……ッ！？　ヒイッ！？」
「貴様あああああああああああ！」
「タダでは済ませませんわヨッッッ！」

あろうことか、先輩とサンドラは精霊（ガイスト）を召喚し、今にも男達に襲い掛かろうとしていた。

「先輩！　サンドラ！　落ち着いて！？」
「だ、だが！　あのクズ共は君を殴ったのだぞ！」
「そうですワ！　叩き潰してプールに浮かべてやりますワ！」

「だああ！？　オ、オマエ等も俺を殴って気が済んだろ！　サッサとどっか行けよ！」

二人を必死で抑え込みながら男達にそう叫ぶと、連中は一目散に逃げて行った。

ふう……これで流血沙汰にならなくて済んだ……って。

「えーと……先輩？　サンドラ？」

「「……」」

うん、二人はあの連中を逃がしたことが相当お気に召さないらしい。

おかげで、今度は俺が二人にジト目で睨まれる始末だ。

「……あのような連中、逃がしたところで良いことなど一つもないというのに」

「全くですワ！　しかも、ヨーヘイに手を出すなんテ……！」

「いいの！　俺からすれば、二人が精霊（ガイスト）呼び出したせいで、後で問題になるほうが困るの！」

「だ、だが……」

納得がいかない先輩は、眉根を寄せる。

「先輩……俺は、こんな下らないことで先輩が嫌な思いするほうが嫌なんです」

「う、うむ……」

「サンドラもだぞ。こんなことでお前の頑張りが台無しになったらどうするんだよ」

「わ、分かりましたワ……」

うん、渋々ではあるものの、何とか二人が納得してくれた。

「さて……それじゃ、って、あーあ……せっかく買ったたこ焼きとかき氷が……」

当然ではあるが、殴られたせいで、たこ焼きとかき氷を床にぶちまけてしまっていた。

「ふふ……仕方ない、なら今度は一緒に買いに行こう」

「ですわネ」

「え？　いや、一人で買いに行ってくるからいいよ」

俺は申し訳なくて遠慮すると。

「何を言う。また、今みたいなことになったらどうするのだ」

「そうですワ！　ヨーヘイが一緒にいれば、変な男も声を掛けてきませんのヨ！」

「ご、ごもっとも……」

ということで、結局俺達は一緒に買いに行くことになり、その後、みんなで買ったものをシェアしながら楽しく食べた。

あ、［シン］もかき氷を食べてゴキゲンでした。

◇

「すう……すう……」

「ン……フミュ……」

「……」

帰りのモノレールの中、俺は椅子に座りながら二人に寄り掛かられている。
というか、どうやら二人はプールの疲れから眠ってしまったのだ。
「う、動けない……」
下手に動いて二人を起こしても悪いし、ここは駅に着くまでなんとか我慢するかー……。
ということで、俺はピクリとも動かずに耐えているんだけど。
でも。
「……はは」
二人の可愛い寝顔を見て、こんな状況も悪くないって思いながら、俺は微笑んだ……って、今、二人共少し動いたような……？
「……先輩？」
「（ビクッ！？）」
あ、動いた。
「サンドラ？」
「（ビクビクッ！？）」
……揃いも揃って、二人共何やってるんだよ……。
俺は寝たフリをしている二人に苦笑しつつも、これはこれで嬉しいので、駅に着くまであえてこのままでいた。

プールへ行こう②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

プロローグ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

プロローグ

今日は八月三十一日。
いよいよ、明日から二学期が始まる。
俺はそんな夏休み最後の日に、学園にある初心者用の領域（エリア）に一人で来ていた。

『マスター、こんなところに来てどうするのです？』
「ん？　ちょっと確かめたいことがあってな」

［シン］にそう言って例の部屋で“ぱらいそ”領域（エリア）の扉を出現させると、その扉をくぐった。

「はは、なんだか久しぶりに来た気分だな」

［ゴブ美］から［シン］へとクラスチェンジした後、俺達はここに一度も来ていなかった。
というのも、それから先は“グラハム塔”領域（エリア）と“アルカトラズ”領域（エリア）の踏破を最優先にしていたからだ。

俺達は慣れた様子で奥へと進んでいくと……いつもの十字路に、あの“クイーン・オブ・フロスト”がいた。

『ど、どうしてアイツがいるのです！？　アイツは関姉さまが倒したはずなのです！』
「落ち着け……まあ、所詮はあのクイーン・オブ・フロストも、数いる幽鬼（レブナント）と同じなんだろうな」

そう、一応居場所こそ固定化されているが、普通にエンカウントする幽鬼（レブナント）同様、この領域（エリア）では雑魚扱いなんだろう。
だから、領域（エリア）から出てしまえば、リポップしていてもおかしくはない。

でも……俺は、それが知りたかった。

「よし。［シン］、いつものようにやり過ごすぞ」
『ど、どうしてなのです？　もう［シン］は、前の［シン］じゃないのです！　今の［シン］なら、アイツだって……「［シン］」……分かったのです……』

［シン］は戦うと主張するが、俺はそれをたしなめる。
ハッキリ言ってしまえば、向こうがレベル八十なのに対し、［シン］のレベルは五十一。たとえ［シン］にこのレベル差を補うほどの能力があるのだとしても、それがアイツに勝てるという理由にはならない。

「……アイツと戦えるようになりたいんだったら、今よりももっと強くなるしかないんだ」
『……ハイなのです』

俺の言葉に、［シン］は悔しそうに唇を噛んだ。
だけど［シン］、悔しいのは俺だって同じだ。

だから……一緒に強くなろう。
今よりも、もっともっと。

さらに先に進むと、例の行き止まりにたどり着く。

見ると、［関聖帝君］によって崩された壁や天井は、すっかり元通りになっていた。

後は。

「頼むから、上手く現れてくれよー……」

隠し木箱を出現させるための床の仕掛けの上に、俺は拳大の石を置いた。

すると……例のごとく、疾走丸の入った隠し木箱が現れた。

「っ！　よし！」

嬉しくなり、俺は思わずガッツポーズをする。

あの時、クイーン・オブ・フロストをここに閉じ込めたが、このバグ自体は発動したままにしていた。

つまり……あのクイーン・オブ・フロストがリポップされていつもの場所にいるんなら、この仕掛けのバグも、無かったことになってるんじゃないかって踏んだんだけど……その読みが当たった。

「さあ［シン］！　疾走丸を飲み込むんだ！」

『はうう……どうしても、なのですか……？』

「もちろんだとも！」

俺は木箱の中から疾走丸を取り出して［シン］に差し出すと、［シン］は露骨に顔をしかめた。よっぽど口に入れたくないらしい。

『シ、［シン］はもう一番速いのです！　“ＳＳＳ”なのです！　これ以上は速くなれないのです！　……なのに、まだ疾走丸を飲み込むのですか……？』

「そうだ……なあ［シン］、お前の『敏捷』ステータスの“ＳＳＳ”は、本当なら存在しない値なんだ」

『……』

「お前の言うように、疾走丸を飲んだところで、これ以上速くなんてならないかもしれない。意味のないことなのかもしれない。でも」

俺は不満そうに眉根を寄せる［シン］の瞳をジッと見つめる。

「ひょっとしたら、その先だってあるのかもしれない。その、“ＳＳＳ”のように」

『……マスターは頑固なのです』

「はは……悪いな」

［シン］は俺から疾走丸を受け取ると、コクリ、と飲み込んだ。

『はうう……やっぱり不味いのです……』

「まあそう言うな。とにかく、これから毎日、疾走丸を最低十個は飲んでもらうぞ」

『はうはうはううう……』

「……褒美として、ルフランのジェラートでどうだ？」

『はう！　十個でも二十個でも疾走丸を持ってくるのです！』

……アイスで釣られる精霊（ガイスト）って一体……。

◇

「さて……いよいよ、だな……」

ベッドに寝転がり、スマホに表示されている『攻略サイト』を眺めながら、俺はポツリ、と呟いた。

明日……うちの学園に転校生がやって来る。
その転校生こそ、『ガイスト×レブナント』の真の主人公であり、俺の天敵となる人物だ。

「本当なら、ソイツの名前も分かればいいんだけどなあ……」

そう、ゲームの主人公らしく、その名前はプレイヤーが決定する仕様になっていた。
とはいえ、一一二に転校してくることは確定だから、別に気にする必要はないんだけど。

「それより、俺はクラスそのものが変わってしまったけど、やっぱり主人公と戦うことになるのかなあ……」

ウーン……まあ、今の［シン］なら、転校直後でレベルも低い主人公相手に負ける要素は何一つないけど、それでも、油断しないに越したことはない。
なにせ、主人公が使役する精霊（ガイスト）……［ジークフリート］はチートだしなあ……。

「ハア……まあ、これ以上考えてもしょうがない。なるようになるだろ……」

俺はスマホを放り投げ、目を瞑（つむ）った……けど。

「ね、寝れない……」

ダメだ……明日のことが気になって目がさえまくってる。

『ムニャムニャ……』

そんな中、［シン］の奴はこれ見よがしに気持ちよさそうに眠ってやがるし……いっそのこと、コイツも無理やり起こしてやろうか。

「まあ、それでも俺がするべきことには変わりないけどな」

そうだ。主人公がいようがいまいが、クソザコモブなボスキャラとして戦うことになろうが、俺がしなきゃいけないことはソレじゃない。

俺がするべきことは……俺と［シン］が強くなって、藤堂先輩を救うこと。

そのためには、九つの柱の守護者を全員倒しつつ、不幸な結末の元凶である、先輩の中に施された種を取り除かないといけない。

そして……。

「おっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩いた。

「主人公め……来るなら来やがれ！　この俺が返り討ちにして、そして、先輩とハピエンを迎えてやる！　全部ひっくるめて、こんなゲームのシナリオなんか、ひっくり返してやるよ！」

深夜の部屋の中、俺は天井に向かって拳を高々と突き上げた。

◇

「か、母さん、何で起こしてくれなかったんだよ！」

「何言ってるの。いつも自分で起きてたじゃない。それに、起きられなかったのは夏休みボケのせいでしょ？」

チクショウ、そう言われるとぐうの音も出ない。

とにかく、急いで準備しないと先輩を待たせることになっちまう！

慌てて歯磨きと洗顔だけ済ませ、俺は朝食も取らずに家を飛び出した。

「ハア……ハア……！」

よ、よし、このペースなら何とかいつもの時間に間に合いそうだぞ……！

俺は必死で走りながら、先輩の待つ十字路を目指す。

その時。

――ドン。

「おわっ！？」

「ふあ！？」

路地から出てきた誰かとぶつかり、俺は思わずよろめいた。

「す、すいません！　大丈夫でしたか！？」

「あ……う、うん、ボクは大丈夫です……」

慌てて声を掛けると、ぶつかって倒れた人はゆっくりと身体を起こした。

というか、うちの学園の制服だな。その割には、なんだか真新し

いように感じるけど……。

「ホラ、つかまって」

「あ、ありがと……」

向こうも同じ制服だと分かってホッとしたのか、その表情が少し和らいだ。

で、俺はあえて問いたい。コイツ……本当に男、なのか？

というのも、確かに着ている制服は男性用のソレなんだけど、尻尾みたいに長い黒髪を束ね、女の子と見間違うほどの端正な顔立ち、少し低めの身長とぶつかった時に感じた、その華奢（きゃしゃ）な体つき。

どれをとっても、女の子みたいなんだけど……。

「とりあえずぶつかったこと、謝らせて欲しい。俺は一一三の“望月ヨーヘイ”って言うんだ。本当にゴメン」

「う、ううん！　ボクだってちゃんと前を見なかったからぶつかったわけだし、ボクのほうこそゴメン。ボクは“立花アオイ”、今日から国立アレイスター学園に通うことになった、キミと同じ一年生なんだ！」

……は？

今、コイツなんて言った？

今日から学園に通う、一年生だってえええええ！？

「えへへ、よろしくね！」

ソイツ……立花アオイがはにかみながら、ス、と右手を差し出した。

だけど、そうか……コイツが……。

だったら。

「ああ……これからよろしくな！」

俺は立花アオイの右手をガッチリと握ると、不敵な笑みを浮かべた。

――これが、『ガイスト×レブナント』の真の主人公と、その主人公が最初に戦うクソザコモブとの、最初の出会いだった。

プロローグ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて幕間が終わり……というか、いよいよ『ガイスト×レブナント』の本編が幕を開けます！

果たしてヨーヘイはクソザコモブの未来から抜け出せたのか？

桐崎先輩の未来を覆すことができるのか？

これからの『ガイスト×レブナント』を、どうぞお楽しみに！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

転校生（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第三章！『ガイスト×レブナント』の幕開けです！

転校生

「む……望月くん、そちらの彼女は？」

いつもの十字路。先輩が来る時間に何とか間に合った俺を見て、藤堂先輩は一瞬ぱあ、と笑顔を見せる。

だけど、隣にいるコイツ……“立花アオイ”を見てすぐに顔をこわばらせた。

最初は、『ガイスト×レブナント』というゲームの仕様上、準ラスボスとして主人公を警戒したのかと思ったけど、どうやらコイツを女の子と勘違いしたみたいだ。

「あ、あはは－……いえ、コッチは“立花アオイ”といって、学園への転校生ですよ。そ、それで……」

俺はチラリ、と立花に目配せして、自己紹介するように促した。

「……今日転校してきた、“立花アオイ”です。一応、男ですけど」

立花は頬をプクー、と膨らませながら、不機嫌そうに自己紹介をした。女の子と勘違いされたのが、相当気に入らなかったらしい。

「そ、そうか、それは勘違いしてすまなかった。私は“藤堂サクヤ”、学園の二年生で、生徒会長を務めている」

少し申し訳なさそうな表情を浮かべながら、先輩は右手を差し出した。

「あ、はい……よろしくお願いします」

立花も先輩の手を握り返すと、ジッと先輩の顔を見た。

ん……？　これって、まだ間違えられたことを怒っているのか、それとも、先輩の可愛さに見惚れたりしたのか？　後者だったら、理解はするが絶対に許さないけど。

「む……すっかり嫌われてしまったな……」

そう言うと、先輩はしょんぼりした表情を浮かべた。

こういうところ、本当に可愛い。

「あ、あはは！　まだ会ったばかりなんですし、嫌われたも何もないですよ！　な、なあ！」

そう言ってフォローすると、俺は立花に目配せする。

もちろん、なんて答えるか分かってるよな？

「……そうですね。まだ出会ったばかりですから」

おうふ……思いのほか立花に生まれた心の溝は深かったみたいだ。

「と、とにかく！　遅れるわけにもいきませんから、急ぎましょう！」

「あ……う、うむ、そうだな」

「そうだね！」

オイ、立花よ。一応俺も初対面なんだぞ？　なんで俺の時はそんな嬉しそうに返事するんだよ……。

俺は軽く溜息を吐くと、二人と一緒に足早に学園へと向かった。

◇

「ヨーヘイ！　おはようですワ！」
「おう、おはよう」

教室に入るなり、サンドラが笑顔で傍（そば）に来た。

「フフ……ところで、今日は昼までで終わりですけド、その後は領域（リア）には行きますノ？」
「んー、そうだなー……」
「ソ、ソノ、もしよければ、どこか遊びニ……」

――キーンコーン。

「お、ＨＲの時間だ。それで、何だっけ？」
「……あ、後にしますワ……」

ちょうどサンドラが何かを言おうとしたところで朝のチャイムが鳴ってしまい、サンドラは肩を落としながら自分の席へと戻って行った。何というか、ちょっと可哀想。

「よーし、みんな席に着けよー」

扉を開け、担任の“葛西（かさい）”先生が教室に入ってきた。
この葛西先生、顔は下手な幽鬼（レブナント）よりもおっかないが、実は超優しい先生である。
何といっても、俺があの一一二の担任……“伊藤アスカ”の嫌が

らせで初心者用の領域（エリア）に一人で見学することになった時、その入口で気遣ってくれたのが、この葛西先生だからな。

「よし、全員席に着いたな。じゃあ二人共、入って来ていいぞ」

先生は扉へと振り返ると声を掛けた。

ん？　二人……って、何の話だ？

扉が開き、その二人が教室に入った、その瞬間。

「「ハアアアアアアアアアアア！？」」

俺とサンドラは、同時に立ち上がって驚きの声を上げた。

だって。

「あ！　望月くん！」

「フフ……十一日ぶりネ」

その二人ってのは、主人公である立花と、サンドラの妹、“プラーミャ”だったのだから。

いや、チョット待て！？　立花は一一二に転校するはずなんだぞ！？　それがなんで俺と同じクラスに来てるんだよ！？

「ん？　二人は知り合い……って、少なくともレイフテンベルクスカヤは姉妹だから当然か。とにかく、二人共自己紹介をしてくれ」

そう言うと、先生は妙に納得した表情で二人に自己紹介を促（うなが）した。

というか先生、よくサンドラの名字をスラスラと言えるな。

「は、はい……！　ボ、ボクは“立花アオイ”って言います！　その、使役する精霊（ガイスト）は［ジークフリート］です！　ど、どうぞよろしくお願いしましゅ！？」

で、まずは立花から自己紹介を始めるけど……あ、舌噛んだ。まあ、俺も自己紹介で舌噛んだから、何も言えないなあ……。

「プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤでス。使役する《ガイスト》は、［イリヤー］でス」

一方のプラーミャはというと、ニコリともせずに淡々と最低限の自己紹介だけした。まあ、コイツはサンドラ以外興味ないもんなー……って、コッチ見て睨むな。

「じゃあみんな、二人と仲良くするように。ええと、それで二人の席は望月の隣とその隣だ」

「っ！？」

先生の言葉を聞いた瞬間、パッと隣を見ると……確かに誰も座ってない席が二つ、ちゃんとあったよ……ていうか、気づけよ俺。

「えへへー、これからよろしくね！」

早速隣の席に着いた立花アオイは、嬉しそうにはにかんだ。その仕草は、完全に女子のソレだな。

「……（ギロリ！）」

「いや、プラーミャはなんでそんなに俺を睨むんだよ！？」

さすがに耐え切れなくなった俺は、思わずプラーミャに向かって

叫んだ。
いや、マジで勘弁してください。
ハア……ゲーム開始早々、ボス級二人とエンカウントって、ついてない……。
これから俺に降りかかるであろう不幸の数々を考え、俺は思わず頭を抱えた。

転校生（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

わだかまり？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

わだかまり？

――キーンコーン。

朝のＨＲが終わり、一時間目の授業が始まるまでの僅かな時間を縫って、ものすごい形相をしたサンドラがプラーミャの席へとやって来た。

「プラーミャ！　これは一体どういうことですノ！」

「アラ、だから言ったじゃなイ。『バッチリ支援してあげるから待ってテ』ってテ」

「そ、そうですけド！」

プラーミャはしてやったりと言わんばかりに口の端を持ち合げ、一方のサンドラはなおも詰め寄っている。でも、これはプラーミャの確信犯っぽいし、サンドラの奴、完全にしてやられたな……。

「ね、ねえ望月くん、その……その二人って、すごく似てるんだけど……」

「ん？　ああ、サンドラとプラーミャは双子の姉妹なんだよ」

「へえー」

二人を見て目を丸くしながら尋ねる立花にそう説明してやると、立花は納得したように頷いた。

といっても、その胸に関しては、双子であるにもかかわらず絶対に埋めることができない圧倒的な差があるけどな。

「ヨーヘイ！　のんきにしてないで、アナタもプラーミャに何か言

ってくださいまシ！」
「ああっと……ま、よろしくな」
「ヨーヘイ！？」

いや、サンドラは何をそんなにこだわってるのか知らないけど、これから学園を卒業するまで一緒に過ごすんだし、社交辞令的に挨拶するのは当然だろ。
それにプラーミャはもう、サンドラとの間にあったわだかまりもなくなったわけだし、これからはサンドラのことを支えてやって欲しいしな。

とはいえ。

「……フン」

せっかく挨拶してやってるっていうのに、その態度はいかがなものかと思うがな。

「それより、午後から二人を領域（エリア）見学に連れて行ってやらなきゃいけないんだけど……」

そう言って、チラリ、と立花とプラーミャを見やる。
というのも、ＨＲの時に先生に頼まれてしまったのだ。『望月とレイフテンベルクスカヤは、転校生の二人を午後にでも領域（エリア）の見学に連れて行ってやってくれ』って。
まあ、それだけ先生が俺達を信頼してくれてる証拠だから、もちろん引き受けたんだけどな。

「フン！　私（ヤー）はサンドラ一人で充分ヨ！」
「コラ！　プラーミャ！」

鼻を鳴らしてプイ、と顔を背けるプラーミャを、サンドラがたしなめた。

というか、そもそもプラーミャは『サンドラ一人で充分』なんじゃなくて、『サンドラだけにして欲しい』の間違いだろうが。

「え、えへへ……ボ、ボクも望月くんだけのほうが、いいかなあ……？」

そう言って、はにかみながら立花が俺を見る。

その仕草、女子なら嬉しいけど残念ながらお前は男だ。悪いが俺には響かない……と思う。

「ま、まあ、チョット昼休みにでも、先輩にも一緒に同行してもらえないか聞いてみようぜ。俺とサンドラも既に“グラハム塔”領域（エリア）を踏破したとはいえ、やっぱり先輩がいてくれたほうが一番安心だからな」

「まあ、そうですわネ……」

俺の言葉に、サンドラが同意する。

何といっても、俺達二人は先輩の弟子みたいなものだからな。

「……ねえ望月くん、その……先輩、って？」

「ああホラ、朝一緒に登校したあの藤堂先輩だよ。あの人は、この学園でも最強だからな！」

少し不安そうに尋ねる立花に、俺は何故か自慢げに説明した。ま、まあ、先輩は俺の憧れなんだから仕方ない。

「……ボクは、別に藤堂先輩がいなくてもいい」

すると立花の奴、拗ねた表情でこれを拒否する。

「オイオイ……ひょっとして、まだ朝のこと根に持ってんのか？」

「べ、別にそういうわけじゃ……」

「ヨーヘイ、朝の件って？」

「お、おお、実は……」

俺はサンドラの傍に行って、今朝のことについて耳打ちした。

いや、さすがに先輩が立花のことを女の子と間違えましたー、なんてこと、声を大きくして言うような話じゃないし、立花だっていい気分じゃないだろうしな。

「マ、マア、確かニ……」

そしてサンドラも、チラリ、と立花を見て妙に納得した表情を浮かべた。

それくらい、立花は美少女っていっても差し支えないくらい可愛いからなあ。男だけど。

「とにかく、昼休みに先輩に相談しようぜ」

「エエ、そうですわネ」

「「……」」

俺とサンドラは頷き合うが、納得がいかない立花とプラーミャは、頬をプクー、と膨らませていた。

◇

「ふむ……そうだな、私で良ければ同行しよう」

「！　ありがとうございます！　……授業をサボることになりますけど、大丈夫ですか？」

快諾してくれた先輩に対し、頼んだ側の俺がなんて質問してんだって話だけど、もし迷惑が掛かるならやめておいたほうがいいしな……。

「ふふ、もちろんだとも。そもそも、一年生の領域（エリア）見学は、上級生である我々の役目だしな。先生もすぐに許可してくれるはずだ」

「それなら良かったです！」

よし！　これで午後も、先輩と一緒にいられるぞ！　……って。

「？　どうした、立花？」

「う、ううん、別に何でもないよ……」

そう言って、苦笑する立花。

だけど、やっぱりわだかまりがあるみたいで、先輩が一緒に来ることに対していい気分じゃないんだろうな。

「で、では話も終わったことだし、その……」

先輩は、俺のＡセットのランチプレートをチラリ、と見た。

食べたいんですね？　分かります。

俺は無言で、ス、とプレートを差し出す。

「っ！　い、いいのか……？」

「もちろん」

「す、すまない！」

そして今日も、先輩は俺のランチを頬張ってご満悦である。

……何だか、先輩を餌付けしてるみたいだなあ……。

わだかまり？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

領域見学（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

領域見学

昼休みが終わり、俺達は一旦教室に戻ってから初心者用の領域（エリア）に向かう。

正直言って、プラーミャに関しては今さら見学する必要性は皆無なんだけど、立花はまだ領域（エリア）そのものを経験したことがないんだから、当然、初心者用の領域（エリア）からだ。

「ふふ、来たな」

「先輩！　お待たせしました！」

既に初心者用の領域（エリア）の扉の前に来ていた藤堂先輩の元へと駆け寄る。

「では、早速中に入ろう」

俺達は扉をくぐり、領域（エリア）内へと入った。

「ふあああああ……！」

初めて見る領域（エリア）の内部に、立花が感嘆の声を漏らす。

「ええと……立花くん、せっかくなので君の精霊（ガイスト）を見せてもらえるか？」

「はあ……」

先輩は少し遠慮がちに立花にそう言うと、立花は少し不機嫌そうに返事をした。

というか、いつまで根に持ってるんだよ。

「［ジークフリート］、おいで」

すると、立花に召喚された［ジークフリート］がその姿を現した。

［ジークフリート］は精悍な顔つきで、背が高くたくましい姿をしており、その全身に黄金の鱗（うろこ）のような甲冑を身にまとっていた。

これが……真の主人公が使役する精霊（ガイスト）、か……。

この時の俺は、多分嫉妬していたんだと思う。

もちろん、［シン］……いや、［ゴブ美］が俺の精霊（ガイスト）であったことに何の不満もない。いや、むしろ［ゴブ美］で本当によかったと、心からそう思っている。

だけど……主人公とクソザコモブでは、ここまで差があるのかと、その理不尽な設定には、どうしても納得できない自分がいて、俺は悔しさで唇を噛んだ。

――ポン。

「あ……せ、先輩……」

「ふふ……もっと胸を張れ。君達だって、何一つ負けてないじゃないか」

そう言うと、先輩はニコリ、と微笑んだ。

先輩……先輩はどうして、そんなに俺のこと、見てくれるんですか……気づいてくれるんですか……。

本当に、先輩は……最高過ぎですよ。

「はい！」

「うむ、それでいい」

俺は先輩に返事をして、グイ、と胸を張ると、先輩は嬉しそうに頷く。

そして、そんな先輩を見つめる俺の視界の端に、不機嫌そうな表情を浮かべる立花の姿があった。

◇

「うむ、初心者用の《エリア》はこれくらいにして、次は“グラハム塔”領域（エリア）へと向かおう」

「「「「はい！」」」」

先輩の指示の下、俺達は初心者用の領域（エリア）を出て、今度は“グラハム塔”領域（エリア）に入った。

「さて……では、この第一階層は立花くん一人で幽鬼（レブナント）と戦ってみるんだ」

「ええ!?　ボ、ボク一人でですか!?」

先輩の指示に、立花は驚きの声を上げる。

「そうだ。先程の初心者用の領域（エリア）での君の戦いぶりを見たが、それだけの実力ならばこの第一階層は君一人でも充分戦えると判断した。なあに、いざとなれば私達もいるのだから、存分に戦うといい」

確かに、先輩の説明通り立花と［ジークフリート］の初心者用の領域（エリア）での戦いぶりは圧巻だった。

たとえ初心者用の領域（エリア）とはいえ、レベル一であるにもかかわらず、

ほぼ一撃でアッサリと仕留めていたからな。

「……分かりました」

立花は不満げにそう告げると、幽鬼（レブナント）に攻撃を仕掛ける。

すると、やはり先輩の見立て通り、幽鬼（レブナント）は立花の攻撃でアッという間に幽子とマテリアルへと変化した。

でも。

「おい、立花」

「望月く……ん……？」

俺が立花に声を掛けると、立花は一瞬ぱあ、と笑顔を見せるが、すぐに表情をこわばらせた。

当然だ。多分、今の俺の顔はかなり険しいはずだからな。

「立花、先輩はお前のことを思って、お前の実力に見合った指導をしてくれている。それは、たった今幽鬼（レブナント）を倒したお前自身も分かっているだろう？」

「……」

「だったら、いつまでも朝のことを根に持ってないで、いい加減、拗（す）ねるのはやめろよ」

「べ、別にボクは拗（す）ねてなんか……」

俺が指摘すると、立花は気まずそうに視線を逸らした。

「いいか。ここにいる連中の誰もが、お前のことを女子だなんて思っちゃいない。それどころか、お前にはそんな立派な精霊（ガイスト）だっているんだ。だから、そんなこといちいち気にするな」

そう言うと、俺は立花の背中をバシン、と叩いて笑った。

「プ……あはは、本当に君って優しいね」

「優しい？　俺が？」

ハテ？　俺が立花に、何か優しいことでもしたエピソードがあったか？　いや、ないな。

「あは……そういうところ、だよ」

「？」

ウーム、ますます分からん。

「よーし！　じゃあ、ボクもドンドン幽鬼（レブナント）を倒すから、その……ちゃんと見ててよね！」

立花ははにかむと、また幽鬼（レブナント）へ突っ込んで行った。

今度は、嬉しそうにしながら。

「……変な奴」

俺はポツリ、と呟くと。

「ネ、ネエ、ヨーヘイ……ソノ……」

サンドラが俺の傍（そば）に来て、おずおずと尋ねてきた。

「？　どうした？」

「エ、エエト……立花くんって、男の子、ですわよネ……？」

「そうに決まってるだろ！」
「そ、そうですわよネ！　ワ、ワタクシも何言ってるんだカ……」
俺はサンドラの問い掛けを強く否定したけど……スマン、俺も一瞬、立花が女の子じゃないかって思っちまったのは内緒だ……。

領域見学（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ジークフリート（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ジークフリート

「よし、今日はここまでにしよう」

結局、俺達は“グラハム塔”領域（エリア）の第十階層まで来ていた。

さすがにここまで来れば、立花がソロで攻略するってのは無理だけど、それでも主人公らしく、俺達となかなかの連携を見せてくれた。

「ま、まだいけます！」

「立花くん、君の熱意は買うが、さすがに初めて領域（エリア）に来たのだぞ？　まだ無理は禁物だ」

「そ、そうですか……」

すっかりやる気を見せている立花に、先輩は苦笑しながらたしなめる。

立花の奴も、第一階層の時とは打って変わって、今では先輩の指示に素直に従うようになっていた。

「はは、ところで立花、ここまで結構な数の幽鬼（レブナント）を倒したと思うから、［ジークフリート］のレベルもかなり上がってるんじゃないのか？」

「あ、そ、そうだね！」

そう言うと、立花はガイストリーダーを取り出して……うん、どうやら使い方が分からないみたいだな。

「ちょっと貸してみ。ここをこうしてだな……」

「えへへ、望月くんありがとう！」

立花がメッチャ至近距離で微笑むが、色々と間違えそうになるからできれば少し離れて欲しい。

「ホラ、これが［ジークフリート］のステータス画面だ」

「ふあああ……！」

――――――――――――――――

名前　：ジークフリート

属性　：竜殺し（ドラゴンスレイヤー）♂

ＬＶ　：１４

力　　：Ｃ－

魔力　：Ｃ－

耐久　：Ｃ－

敏捷　：Ｃ－

知力　：Ｃ－

運　　：Ｃ－

スキル：【グラム】【竜の恩恵】【竜の息吹】

【竜特効】【チェンジ】

――――――――――――――――

……うん、『攻略サイト』で知ってはいるものの……なんだよこのステータス。完全に超バランスタイプじゃねーか。

しかも、最終的にはこのステータス、全部“ＳＳ”まで成長するんだぞ？　本当にふざけないで欲しい。

それよりなにより、このスキルの数々だ。

なんで属性が“竜殺し（ドラゴンスレイヤー）”なのに、【竜の恩恵】が受けられるんだよ。完全に矛盾してるだろ。

オマケにこれらのスキル、全部とんでもないものばかりだしなあ……。

「ど、どうかな……ボクの［ジークフリート］って、その……強い、かな……？」

立花は不安そうな表情でおずおずと尋ねる。

だけど、これを見て弱いなんて答えが出るわけがないだろ。

「バッカ、こんなステータス反則だろ！　メチャクチャ強いじゃねーか！」

「ホ、ホント！　良かったあ……」

俺の答えを聞き、立花がホッと胸を撫で下ろした。

「ん？　だけど、なんでそこまで強さにこだわるんだ？」

「それは！　……そ、その……強かったら、これからも望月くんが、一緒にいてくれるんじゃないかって、そう思って……」

……グハッ！？

「お、おう……まあ、別に強くなくても、こうやって一緒に領域（エリア）攻略くらい付き合ってやるよ……」

「っ！　あ、ありがとう！　うわあ……嬉しいなあ……！」

立花は、本当に嬉しそうな表情で、小さくガッツポーズした。

いや、ホント勘違いするぞコノヤロウ。

「望月くん、ちょっとコッチへ……」

先輩に手招きされたので傍に寄ると、先輩とサンドラにガシッと両腕を拘束された。

「な、何を……！？」

「立花くんは、本当に男子、なんだろうな……？」

「もしくは、ヨーヘイは男の子が趣味、ではないですわよネ……？」

こ、この二人は……！

「プークスクス！」

チクショウ！　プラーミャめ、腹を抱えて笑いやがって！　覚えてろよ！

◇

「ふう……」

風呂から上がった俺は、自分の部屋に入るなり扉を閉めて溜息を吐いた。

そして。

「あああああ！　なんで俺は主人公と仲良く、キャッキャウフフしてるんだよ！」

膝から崩れ落ち、思わず床を叩いて叫んだ。

いや、おかしいだろコレ！　俺とアイツ……立花は戦う運命にあるんじゃないのかよ！

ていうか、そもそもなんでアイツが一一三に転校してくるんだよ

！　あり得ないだろ！

『はう！　マスター、［シン］はジークおじさまと戦うのですか？』

そう言うと、［シン］が不安そうな表情でそう尋ねてきた。

俺が立花と戦うって？　それは……どうなんだ？

「ウーン、今のところ、よく分からないなあ……」

俺は腕組みしながら首を捻る。

ゲームのシナリオ通りなら、今週末の昼休みに、俺が立花にケンカを売ることになるんだろうけど……うん、俺がアイツとケンカをするイメージが全然湧かないし、ケンカを吹っかける理由もない。

「い、今のところは大丈夫だと思う……ぞ？」

『はう！　良かったのです！　ジークおじさまは優しいのです！』

「そうなのか？」

『ハイなのです！』

まあ、立花もあんな様子だし、［シン］も嬉しそうだから……ま、いっか。

とはいえ、もう一度俺と主人公……立花とのイベントについておさらいしておくかあ……。

俺はスマホを取り出し、『攻略サイト』を開く。

「えーと……『一一二のゴブリン』っと」

何度見ても悲しくなる俺のイベント名のタグをタッチし、ページを開く。

まあ、イベントに関しては簡単にまとめるとこうだ。
主人公が転校してきた週の金曜日、昼休みにヒロインや仲間と食堂で楽しくランチをしてるところに、突然俺が［ゴブ美］を召喚したまま乱入する。
で、食堂で主人公と戦闘になるんだけど……うん、ステータスの差が歴然なので、俺はアッサリ倒され、あえなく停学処分になってイベント終了。
そして、それが評判になってヒロインと仲間キャラの好感度が上がるんだよなあ……俺、完全にかませ犬じゃんかよ……。

「……まあ、金曜日の昼休みは特に注意しとかないとな」

スマホをベッドに放り投げると、俺はゴロン、と横になってそう呟いた。

すると。

『えへへー、［シン］は今日も頑張ったのです！　たくさん疾走丸を飲んだのです！』

そう言って、［シン］は俺の隣に同じように寝転がる。

「……それに関しては、俺は対価を支払ったはずだが？」

そう、［シン］にはちゃんと帰りにルフランでジェラートを食わせてやった。なのにコイツは、さらに何かを要求しようというのか？

『はう！？　そ、そうなのですけど、そのー……』

［シン］は何故か少し遠慮がちに、ス、と自分の頭を俺の身体にすり寄せてきた。
あー……つまり、そういうことかー……。
「はは、そうだったな。［シン］、よく頑張ったぞ」
『えへへー、なのです』
俺は［シン］の頭を優しく撫でてやると、［シン］は嬉しそうに目を細めた。
全く……なんで俺の精霊（ガイスト）はこんなに可愛いんだよ。
そんな［シン］を見つめながら、俺も口元を緩ませていた。

ジークフリート（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

朝の教室（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

朝の教室

今日は九月四日、金曜日。

例の『一一二のゴブリン』という、俺にとって迷惑極まりないイベントが起こる日だ……『攻略サイト』にある通りなら。

「ウーン……俺、本当に立花の奴とバトルすることになるのかなあ……」

先輩の待つ十字路に向かう途中、ポツリ、と呟く。

いや、アイツとプラーミャが転校してきて今日で五日目になるが、俺が言うのもなんだが立花の俺に対する好感度が現在進行形で爆上げ中なんだけど……。

「？　望月くん、どうしたの？」

「どうしたって、今日は色々と……って、た、立花！？」

「えへへ、おはよー！」

考え事している間に、立花の奴が俺の隣を歩いていた。しかも、かなりの至近距離で。

この距離間……普通に恋人同士か異性の幼馴染でもない限りあり得ねーだろ。

「お、おお、おはよう……というか、もう少し離れて歩け」

「えー……どうしてさー？」

「どうしても何も、ただのクラスメイト同士が、こんなにピッタリくっついて歩いたりしねーだろ！」

そう言って、俺は無理やり立花を引き剥がした。
というか、俺には男とくっついて歩く趣味はない。もちろん、藤堂先輩ならハグしたい勢いだけど。

「……分かったよ」

そう言って、シュン、となった立花は、俺から一歩離れてトボトボと歩く。いや、落ち込み過ぎだろ。

ハア……全く……。

「わっ！？」
「というか、そんなことくらいで落ち込むなよ。ホラ、早く行こうぜ」
「！　う、うん！」

俺は立花の背中をバシン、と叩いて声を掛けてやると、打って変わって立花はぱあ、と笑顔を見せた。
こういうところ、絶対に勘違いしそうになるが、俺は絆されないんだからね！

ということで。

「先輩！　おはようございます！」
「おはようございます！」
「うむ、おはよう」

十字路に着くと、今日も先輩はまるでたまたま出逢ったかのように振舞って、にこやかに挨拶をした。

こういうところも、先輩の尊みを爆上げさせている要因の一つだと思います。

「ところで立花くん、精霊（ガイスト）のレベルは今どうなっている？」

「はい、望月くんのおかげで［ジークフリート］のレベルは二十六になりました」

「うむ、望月くんは優しくて面倒見が良いからな」

……二人して、何で俺を持ち上げてるんですかね？

そして、二人の会話にとげがあるように感じるのはどうしてでしょうか？

「このままいけば、結構早く“グラハム塔”領域（エリア）を踏破できそうですよ。もちろん、プラーミャと立花の二人だけで」

「ええ！？　望月くんは一緒に来てくれないの！？」

俺の言葉に、立花が驚きの声を上げた。

「お前も知ってる通り、俺とサンドラは既に“グラハム塔”領域（エリア）は踏破済みなんだよ。そんな俺達が一緒に攻略に同行したりすると、それだけで他の生徒達が不公平になっちまうからな」

「あ、そ、そうか……」

俺の説明を聞いて納得するものの、立花はあからさまにガッカリした。

とはいえ、俺やサンドラ、それに、何と言っても先輩と一緒に指導を受けてる時点で超優遇されてるんだし、それくらいは受け入れろ。

「む……ふふ、話をしていたら、あっという間に学園に着いてしま

ったな」
「あはは、そうですね」
そう言って、俺達は下駄箱で上靴に履き替えた。
「では、また昼休み」
「はい」
俺は何度も振り返る先輩が見えなくなるまで、手を振り続ける。
……昼休みになったら逢えるってのは分かってるんだけど、やっぱり寂しいなあ。
「……くん。望月くん」
「うお！？　きゅ、急に呼ぶなよ！」
「むー……さっきから呼んでたよ」
立花に声を掛けられて思わず驚いてしまい、立花に抗議するが……うん、立花のほうがお怒りのようだ。
「わ、悪い……」
「もう行くよ！」
立花はプイ、と顔を背けると、俺を置いてサッサと教室に向かってしまった。
といっても、俺には立花が拗ねている理由がサッパリ分からん……。
「ア！　ヨーヘイ！」
すると、サンドラもちょうど着いたばかりなのか、上靴に履き替

えてパタパタと走りながら傍にやって来た。

「よう、おはよう……って、アレ？　プラーミャは？」

「アソコにいますわヨ」

そう言ってサンドラが指を差す方向へと目を向けると……何やら、下駄箱の陰から俺をメッチャ睨んでるんですけど？

「……さあて、教室に行くかー」

「エ、エエ……」

俺はとぼけてサンドラにそう声を掛けると、サンドラもプラーミャは置き去りにすることを選択したようだ。

「ま、待ちなさいヨ！」

んで、結局プラーミャは俺とサンドラの間に割り込むように並び、思いっ切り舌を出して悪態を吐いてきやがった。何だかなあ……。

そして、俺達は教室の扉を開けようとした、その時。

「オ、オマエ！　転校生のクセに生意気なんだよ！」

「……」

何故か、『ガイスト×レブナント』における主人公の友人キャラ、“加隈ユーイチ”が、無言で睨む立花に絡んでいた。

……嫌な予感しかしないんですけど。

朝の教室（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

加隈の因縁（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「オ、オマエ！　転校生のクセに生意気なんだよ！」
「……」

俺達が教室の扉を開けようとした、その時、何故か『ガイスト×レブナント』における主人公の友人キャラ、“加隈ユーイチ”が、無言で睨む立花に絡んでいた。

「アレ……ヨーヘイが一一二にいた時に、いちいち絡んできてたっていう加隈とかいう奴ですわよネ……？」
「お、おお……」

サンドラの問い掛けに、俺は気の抜けた返事をした。
というか……なんでアイツがこの教室に？　……って、こうしちゃいられない！

俺は慌てて立花の元へと駆け寄る。

「立花！　一体どうしたんだ？」
「あ、望月くん……彼が急にうちのクラスを訪ねてきて、その……望月くんを出せ、って……」
「俺？」

立花が少し気まずそうに答えると、俺は思わず自分を指差す。
というか、加隈が俺に用事？　一体何の？

「ええと……俺になんか用？」

「ハッ！　しらばっくれるなよ！　オマエが一一二からこのクラスに移ってから……いや、オマエが木崎さんに関わってから、碌なことがねえ！　それもこれも、全部オマエのせいだ！　オマエが何かしたんだろーが！」

加隈は、まるでまくし立てるように俺に詰め寄ってきた。

いや、そもそも木崎が俺を陥れて“グラハム塔”領域に置き去りにしたことが原因だし、その後の悠木の件だって、俺が誘いを断ったからって勝手に絡んできて、しかも領域ボスとの戦闘の時に俺達を襲ってくるなんて馬鹿な真似をしたからなんだけど……。

「オマエのせいで……オマエのせいで、俺がどうなったか言ってやろうか？　あの時、オマエのあのゴブリンだった精霊が卑怯な手で俺の［トリックスター］を動けなくしやがったから、一晩中あのまま俺は置き去りにされたんだ！」

「……あ」

そういや……俺、［シン］に解除してやるように指示してなかったわ。

だけど、そうかー……あの呪符の効果、一応丸一日効果があるんだな。これは新しい発見だ。

「それからの俺は、ゴブリンごときに負けたってことで、クラスの連中から見向きもされなくなった！　当然、悠木にもだ！」

「……」

「で、悠木はオマエを襲っただの訳の分からねえ冤罪で学園追い出されて、残ったのはもう俺だけだ！　それもこれも、全部オマエのせいなんだよおおおおおお！」

加隈は俺の胸倉をつかみ、その顔を鼻が触れ合うほど近づけて睨

みつけた。
いや、というか全部オマエ達の自業自得だろうが。
「ちょっと！　望月くんから離れなよ！」
「ヨーヘイから離れるのですワ！」
すると、見かねた立花とサンドラが間に割って入り、加隈を押し退ける。
「ハ、ハハ……ナンダヨ……自分はとっととクラス替わって、今じゃそんなカワイイ女子達とヨロシクやってるってか？　フザケルナ！　フザケルナよおおおおお！」
血走った目で、加隈は俺を……俺だけを睨みつける。
まるで、何かに取り憑かれたかのように。
「オマエが……オマエが、全部悪いんだあああああああああ！　「トリックスター」！」
そう叫ぶと、加隈は精霊（ガイスト）を召喚した！？
「バ、バカ野郎！　精霊（ガイスト）なんか呼び出して何するつもりだよ！」
「決まってるだろ！　あん時はオマエが卑怯な真似したからたまたまあんなことになっちまっただけだ！　だったら！　俺が今度こそ証明してやる！　俺は強いってことをなあああああ！」
マ……本気（マジ）かよ……！
というかコイツ、木崎（クソ女）と悠木のバカがどうなったか理解してねえのかよ！？

「フザケルナ！　オマエが望月くんとどんな関係なのか知らないけど、望月くんを馬鹿にするな！　望月くんは……望月くんは、強くて優しくて、カッコイイんだ！」
「そうですワ！　ヨーヘイは決して卑怯な真似なんかしないワ！　ヨーヘイは、いつだって前を向いて走ってますノ！　オマエ達なんかと一緒にするナ！」
「ウルセエッッッ！　だったらオマエ等からボコボコにしてやんよ！」

加隈は矛先を変え、俺じゃなくて立花に［トリックスター］を仕向けた。

「食らえ！　【ダブルリフト】！」

すると［トリックスター］は二人に分かれ……サンドラは無視して立花に襲い掛かる。
恐らく、既に“グラハム塔”領域（エリア）を踏破しているサンドラには敵わないと踏んだんだろう。だから、転校してきたばかりの立花なら勝てるって考えやがったのか。

だけど。

「……それで？」
「グハッ！？」

立花が召喚した［ジークフリート］が、［トリックスター］の鳩尾（みぞおち）に容赦なく剣の柄を叩きこんだ。
当然、［トリックスター］と精霊（ガイスト）使いである加隈はその衝撃でもんどりうって倒れる。

「キミ……弱いね。望月くんとは大違いだよ」
「……な、何だと……ッ！？」

加隈を見下ろす立花のその冷たい視線に、加隈は思わず息を飲んだ。

「ハア……もういいよ。キミ、消えてくれるかな？」
「ヒ、ヒイッ！？」

［ジークフリート］がその剣を振り上げ、加隈に叩きこもうと……っ！？

「バカ！　止めろ！　［シン］！」
『ハイなのです！』
「っ！？　望月くん！？」

俺は慌てて［シン］を召喚し、呪符を［ジークフリート］に貼り付けてその動きを止めた。

「落ち着け立花！　そんなモン加隈に叩きつけたら、怪我じゃ済まないだろうが！」
「あ……」

俺の言葉を受けて、立花はようやく冷静さを取り戻す。

「ゴ、ゴメン……」
「ハア……分かればいい。［シン］、［ジークフリート］の呪符を剥がしてやってくれ」
『了解なのです！』

［シン］が呪符を剥(は)がしたことで、立花と［ジークフリート］は自由に動けるようになった。

「加隈……もう行けよ」

「っ！？」

俺がそう告げると、加隈は一目散に教室を出て行った。

「ったく……何だったんだよ……」

俺は加隈が出て行った教室の扉を眺めながら、ポツリ、と呟いた。

加隈の因縁（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

君、だから（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「……ってことがあったんです……」

一時間目終了後の休み時間、俺は一人で二年生がいる教室に来て、藤堂先輩に相談した。

本当なら、昼休みの時にでも話をすればよかったんだろうけど、その昼休みには、俺とゲームの主人公……立花と戦うイベントが発生することになっている。ただし、あくまで『攻略サイト』にある通りなら。

「ふむ……それで、一応はその加隈くんというのは、そのまま引き下がったんだろう？　なら、もうこれ以上の問題は起こらないと思うが」

「そうなんですけど……なんというか、どっかモヤモヤするっているか……」

そう。俺は朝のあの一件があってから、さっきの授業中も何かが引っかかっていた。

というのも、なんで今日になって加隈はわざわざ俺に絡みに教室にやって来たんだ？

もしアイツの言う通り、俺のせいでメチャクチャになったっていうんなら、もっと早く……それこそ、悠木がこの学園からいなくなった時点で絡んできてもおかしくないはず。

なのに……アイツは今日、俺に絡もうとして、逆に立花に返り討ちにされた。

それと、立花についてもそうだ。
確かに加隈は精霊（ガイスト）まで召喚させてケンカを吹っかけてくるなんて、どう考えても異常だった。
でも、それを言うなら立花の奴だって、［ジークフリート］を召喚させて退けて、それどころか、一歩間違えたら加隈を大怪我させるんじゃないかってほどの勢いで倒そうとした。
アイツ等、本当に何やってんだよ……。

「そうか……だが、君が気になるというのなら、注意しておくに越したことはないな。これからは、立花くんの“グラハム塔”領域（エリア）の攻略では、特に注意するようにしよう。それと、そういうことならプラーミャにもその話をしておくといい」
「えーと……どうしてですか？」

先輩の言葉の意図が分からず、俺は聞き返した。

「なに、普段の“グラハム塔”領域（エリア）だけなら、少なくとも望月くん、サンドラ、そして私の誰かが同行するが、本攻略の際、私達は一緒じゃないんだぞ？」
「あ……」
「だが、プラーミャは最後まで常に一緒だ。それにプラーミャなら、実力的にも立花くんや他の者達にも決して遅れをとることはないからな」
「なるほど……」

確かに先輩の言う通りだ。もちろん俺達も注意はするが、それはずっとじゃない。だったら、一番長く一緒にいることになるであろうプラーミャが、立花を一番抑えられる。

「先輩、ありがとうございます！　早速次の休み時間にでもプラーミャに話をしておきますよ！」

うん、やっぱりこういう時、先輩は頼りになる。

本当に先輩に相談して良かった。

「うむ。それと……加隈くんについては、次の昼休みにでも一緒に会いにいってみよう」

「ええ！？　だ、だけど……」

「？　何かあるのか？」

「い、いえ……」

俺は尋ねる先輩から目を逸らし、俯いた。

どうしよう……さすがにイベントの話まで先輩にはできないし、それに万が一先輩がいる前でイベントが起こったら……。

「ふふ……君が何を心配しているのかは知らん。そして、そのことについてこの私が一緒にいることが、君にとって都合が悪いのなら、私も無理に一緒にいようとは思わないよ」

「っ！？」

「……ただ、やはり少し寂しいが、な」

そう言うと、先輩はその真紅の瞳に悲しさと寂しさを湛え、ニコリ、と微笑んだ。

……何やってんだよ、俺。

俺がクソザコモブとしてアイツと……立花と戦うことになったとして、先輩にとって俺の評価が何か変わったりするのかよ？　先輩が、俺を見限ったりするのかよ？

違うだろ！　先輩は……先輩は、あの［ゴブ美］だった時ですら、ただ俺の可能性を信じてくれたんだ！　認めてくれたんだ！

なのに……何で今さら、俺は怖がってるんだよ……！

「……いえ、先輩。昼休み、一緒に加隈の奴に会いに行きましょう」

「望月くん……」

「俺は……先輩に見ていて欲しい。俺という人間を、これからもずっと」

「ああ……私はいつだって、君のことを見ているよ。だって……君、だから」

そう言うと、先輩は左手にそっと触れた。

そこには、“シルウィアヌスの指輪”がはめられている。

俺と、先輩の絆の指輪が。

「ふふ、だが……いつか、君のことを教えてくれるか？」

「はい……必ず」

俺は……『攻略サイト』のことも、クソザコモブな俺のことも、そして、先輩に訪れる不幸な未来も、全て伝えよう。

先輩と迎える、一年後の十二月二十五日に。

――キーンコーン。

「おっと、もう休み時間も終わりだな」

「あはは、そうですね」

俺は、もっと先輩といたいと思いながらも、仕方なく教室へと戻ろうとすると。

「望月くん！」

先輩が、背中越しに俺の名を呼んだので振り返る。

「また、昼休み！」

「っ！　はい！」

俺は笑顔の先輩に、手を大きく振って元気よく返事した。

君、だから（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

プラーミャへの依頼（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

プラーミャへの依頼

「よう、プラーミャ。ちょっといいか？」

次の休み時間、先輩のアドバイス通り早速プラーミャに話をするために声を掛けた。

これから、立花の動向を見守ってもらうために。

「私（ヤー）は嫌なんだけド？」

「まあそう言うな。ちょっと、プラーミャにしか頼めないことがあるんだよ」

「イヤ（ニェット）！」

「どうしたノ？」

すると、サンドラが不思議そうな表情でやって来た。

「お、おおサンドラ……って、そうだ、サンドラにもちょっと話しておきたいことがあるんだけど、今いいか？」

「？　エエ、いいですけド？」

とりあえず、サンドラが頷いてくれた。

フフフ、こうなるとプラーミャも一緒に話を聞くに決まってる。

「ナラ、私（ヤー）も話を聞くワ」

ホラ、な？　というか、分かりやすい奴。

「んじゃ、ちょっと場所移そう……「望月くん、どこにいくの？」」

二人を連れて教室を出ようとしたところで、立花に声を掛けられてしまった。
というか、コイツが一緒にいちゃ話できないんだけど。
「いや、ちょっと二人に頼みたいことがあってな。それで……「だったらボクも手伝うよ！」……ぐ、ぐむう……」
立花は瞳をキラキラさせて、嬉しそうにそう申し出たため、俺は思わず呻き声を上げた。
「……ボクが一緒にいちゃ、イヤ……？」
俺の反応を見て立花は、瞳をウルウルさせながら上目遣いでそう尋ねる。
い、いや、そんな瞳で見られても……ぜ、絶対に連れて行かないからな！
「フフ、立花さんには悪いですけド、少しワタクシ達の家族の件ですのデ……」
おお！　サンドラ、ナイス！
よくぞ俺の思いをくみ取ってくれた！
「あ……そ、そうだったんだね。だったら、ボクは一緒じゃないほうがいい、かな」
「申し訳ありませんワ」
ということで、無事（？）立花とも別れ、俺達は廊下に出た。
……立花は、最後までジーッと俺の背中を眺め続けてたけど。

「ソレデ……私達（ヤー）に一体何の頼みがあるノ？」
「おお。いやホラ、二人も朝の件は見てただろ？　それでさっきの休み時間に先輩に相談して来たんだけど……悪いけど、プラーミャにはしばらく立花の様子を見ておいて欲しいんだ」
「？　どういうこト？」

俺の説明を聞いてもキョトン、とするプラーミャ。まあ、これだけじゃ理由になってないもんな。

「お前達も変に思わなかったか？　立花の奴、いくら加隈……ああ、絡んできた奴な。アイツが精霊（ガイスト）出して襲い掛かってきたからって、さすがにアレはやり過ぎだ」
「マア……確かニ……」
「それで、また同じようなことが起きたら暴走するんじゃないかと思ってな。普段の“グラハム塔”領域（エリア）攻略なら俺達もいるが、一年の必修としてあの領域（エリア）の踏破に挑むとなったら、先輩や俺、サンドラは同行できない」
「アア、そういうことネ」

ようやく理解したプラーミャの言葉に、俺は頷（うなず）いた。

「ということだから、サンドラもこれからはアイツのことを少し気に掛けるようにしてくれ。もちろん、俺と先輩も注意するから」
「分かりましたワ」

うん、とりあえずこれで立花に関してはよし、と。
あとは……加隈と、昼休みのイベント、だな……。

加隈はともかくとして、あのイベントのことを考えると、どうし

ても不安で胸が苦しくなる。
もちろん俺は、［シン］なら立花の［ジークフリート］に負けないと思っているし、立花だって、『攻略サイト』とは違って関係も良好……りょ、良好だから、同じことになる要素もない。
でも……それでも……。
「ヨーヘイ」
すると、いつの間にかサンドラが俺の傍に来て、不安そうに俺の顔を覗き込んでいた。
おっと……顔に出てたか……。
「……はは、何でもない」
「嘘、ですワ」
かぶりを振ってそう答える俺を、サンドラは否定した。
「ヨーヘイ……アナタが何に悩んでいるのか、不安に思っているのかは知らないケド、ワタクシは少しでもアナタの力になりたいんですノ」
サンドラのアクアマリンの瞳が、強い輝きを放ちながら俺をジッと見つめる。
ハア……チクショウ、こんなの嬉しすぎるだろ。
「そうだな……だったら今日の昼休み、俺と先輩は加隈と話をしに行こうと思ってるから、その時……サンドラも一緒にいてくれるか？」
「！　当然ですワ！」

俺は頭をガシガシ掻きながら、照れくさそうにそう言うと、サンドラはぱあ、と笑顔を浮かべ、力強く頷いてくれた。

「じゃあ、私も一緒に……「いや、プラーミャは俺達が加隈に会っている間、立花を抑えていてくれ」」

プラーミャも俺達と一緒に来ようとしたので、俺はそれを断って別の頼み事をした。

立花のことだ、絶対に俺と一緒に行動しようとするだろうし、それに……ひょっとしたら、昼休みに一緒に過ごさなかったら、イベント自体を確実に回避できるんじゃないかって、そうも思っている。

「これは、プラーミャにしか頼めないことなんだ。だから……」

「ハア……分かったわヨ」

「すまん……助かる」

プラーミャは溜息を吐きながらも、渋々了承した。

コイツだって、本当はサンドラと一緒にいたいはずだもんな……。

「ソノ代わり」

「ん？　その代わり？」

何だろう……昼休みのイベント以上に嫌な予感がするんだけど……。

「明後日の日曜日、私の引っ越しを手伝いなさイ！」

「「ハア！？」」

プラーミャのその言葉に、俺と、何故か一緒に住んでるはずのサ

ンドラまで驚きの声を上げた。

「ど、どういうことだよ!?　サンドラと一緒に住んでるんじゃないのか!?」

「そ、そうですワ!?　荷物はアレだけで終わりのはずですわよネ!?」

「ハア……マサカ、私（ヤー）の荷物がアレっぽっちなわけないでショ？」

呆れた表情でプラーミャはそう言うが、そんなの俺が分かるわけないだろ……。

それに、サンドラも思わず絶句してるところを見ると、既にかなりの荷物があの広い部屋に運び込まれているに違いない。頑張れ、サンドラ。

「というわけで、チャンと働くのヨ！」

「「……」」

とうことで、図らずも日曜日の予定が埋まってしまった……。

プラーミャへの依頼（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

「ウルセーヨ、クソが」（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「ウルセーヨ、クソが」

――キーンコーン。

……とうとう昼休みになった。

あの『攻略サイト』の通りなら、俺はこれから立花と一戦を交えることになる。

といっても、それはあくまで俺が立花に仕掛けた場合だ。当然、俺にそんなつもりはない。

とはいえ。

「望月くん！　お昼ご飯食べようよ！」

とまあ、こんな風に立花の奴が昼メシを誘いに来た。それというのも、立花が転校してきてから今日で四日目だが、立花はいまだに俺達以外に友人がいない状況なのだ。

……まあ、俺だって友人は限られてはいるけどな。

「わ、悪い……今日は先輩達と、ちょっと別の用事があるんだ……」

「そ、そうなの！？」

俺が申し訳なさそうにそう告げると、立花はこの世の終わりみたいな表情を浮かべた。

いや、一日くらい俺がいなくても別にいいだろ。

「フフ……私（ヤー）もサンドラがコイツに取られたせいで一人なノ。だから立花くん、私（ヤー）と一緒にお昼ご飯食べまショ？」

プラーミャがクスリ、と笑いながら、立花を誘いに来てくれた。
ナイスだ、プラーミャ。

「う、うん……」

さすがにこうなると、食い下がることもできない立花は、プラーミャに引きずられるようにして教室を出て行った。
プラーミャよ……日曜日の引っ越し、全力でやらせてもらおう。

「望月くんはいるか」

すると、ちょうど先輩も教室にやって来た。ナイスタイミングです。

「先輩、ありがとうございます」
「ふふ……君があんなに悩むほどなのだ。これくらい、当然だよ」
「先輩……」

先輩の微笑みに、不安な俺の心が満たされていく。
ああ……やっぱり、先輩だな……。

「はは、サンドラもありがとな」
「な、何を言ってますノ……そんなの、当然ですわヨ……」

そうだ、サンドラも俺の気持ちをくみ取って、同行を申し出てくれたんだ。
本当に……感謝しかない。

「さて……あまりのんびりしているわけにもいくまい。早速、その

加隈くんがいる教室へと向かおう」
「「はい！」」
先輩の後に続き、俺達は一一二の教室へと向かう。
――ガラ。
「失礼。ここに加隈くんはいるか」
教室の扉を開け、先輩が声を掛けると……うん、一一二の連中は、俺達を見るなり一斉に目を逸らしたり気まずそうな表情を浮かべやがった。
まあ、俺との件もあるしな。この態度は仕方ない。
それよりも、だ。
俺は教室内を見渡すと……いた。
加隈は、教室の窓際で一人ポツン、とたたずんでいた。
しかも、クラスの連中からも相手にされていないのか、だれも加隈に声を掛けたり近寄ったりする奴はいなかった。
……俺がこのクラスにいた時は、加隈はクラスのムードメーカーみたいな奴で、いつもクラスの中心にいたのに、な……。
色々と思うところはあるが、ここでアイツを眺めていても仕方がない。
俺達は教室の中に入り、窓際にいる加隈の傍（そば）へと行く。
「よう……加隈」

俺は、努めて明るく声を掛ける。
だけど。
――プイ。
加隈の奴は、俺と目を合わせようともせず、顔を背けて窓から外を眺めた。
「チョット！　ヨーヘイが話し掛けているじゃなイ！」
「ま、まあまあサンドラ……」
そんな態度が気に入らないサンドラが加隈に突っかかるので、俺はそれをたしなめる。
というか、コイツの態度……。
「なあ、加隈……お前、いつも教室で、こうやって一人でいるのか？」
「……」
話し掛けるが、加隈は顔を背けたまま一言もしゃべらない。
ふう……このままじゃ埒が明かない、なあ……。
「……加隈くん。聞くところによると、君は一一三の教室に単身乗り込み、ここにいる望月くんと話をしようとした。そうだな？」
「……」
先輩が問いかけても、加隈の態度は変わらない。
そのことに、俺はチョットだけイラッときた。というか、先輩が話し掛けてるのにその態度はなんだよ。

「話を続けよう。まだ望月くんが登校していないので、立花くんが応対をしたら、君はその立花くんと口論になり、精霊（ガイスト）を召喚して戦闘になった。そして……立花くんに、君は負けた」

「っ！」

先輩の言葉に、加隈が初めて反応を見せた。

だけどそれは、悔しさや惨（みじ）めさ、それ以外のいろんな感情が入り混じったような、そんな思いが見て取れた。

……それはまるで、あの弱かった俺達のようだった。

「加隈くん……君はどうして、この望月くんに会いに一一三の教室に来たのだ？　そして、どうして立花くんとケンカをしようと考えたのだ？」

先輩は諭すように加隈に尋ねる。

その真紅の瞳も、まるで加隈を気遣っているようにも感じられた。

その時。

「……ウルセーヨ、クソが……」

「っ！？」

加隈のその言葉に、俺は思わず声を失った。

今……加隈が、俺達に言った台詞（セリフ）……それこそ、クソザコモブである俺が、主人公に負けた後、会話するたびに吐き捨てる台詞（セリフ）、そのものなのだから……。

「ウルセーヨ、クソが」（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

なお、明日からは夜の二話更新になります！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

認めない（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

認めない

「……ウルセーヨ、クソが……」
「っ！？」

加隈のその言葉に、俺は思わず声を失った。

今……加隈が、俺に言った台詞（セリフ）……それこそ、クソザコモブである俺が、主人公に負けた後、会話するたびに吐き捨てる台詞（セリフ）、そのものなのだから……。

「？　望月くん、どうした？」
「あ……ああ……」

俺の様子がおかしいことに気づいた藤堂先輩が声を掛ける。
だけど……クソ、これじゃあまるで、俺と加隈の、その役割が入れ替わったみたいじゃないかよ……！

でも、そう考えると色々と合点がいくんだ。
主人公である立花が、本来は一番最初の敵でしかない俺に、ここまで好感を持っていることや、今日の朝の一件でも、立花は明確に加隈に対して嫌悪感を示した。

何より……確かに今日、イベントは起きたんだ。
立花と、クソザコモブの加隈との一戦が。

「……チクショウ」
「望月くん……？」

「チクショウ！　こんなの認めるかよ！　フザケルナ！」
「ヨーヘイ！？　どうしたノ！？」

ああ！　そうとも！　こんなの認めてたまるか！
これじゃ、俺がどんなに頑張っても、ゲームの運命が変わらないって言ってるのと一緒じゃねーか！

だったら……だったら！

「っ！？」

俺は加隈に詰め寄り、その胸倉をつかんだ。

「オイ！　加隈！　オマエは……オマエは、このままでいいのかよ！」
「っ！　……ウルセーヨ、クソが」
「ウルセー！　それはコッチの台詞（セリフ）だ！　俺はこんなの認めない！　オマエは……加隈は、『少しチャラい感じのお調子者だけど、仲間想いでいざという時には頼りになる奴』ってキャラだろうが！」
「っ！」

俺の言葉に、加隈が息を飲む。
だけど、またすぐに視線を逸（そ）らしてしまった。

「……悔しいだろ。クソザコモブだのゴブリンだの言ってたこの俺に、ここまで言われるんだからな。だったら！　……だったら、見返してみろよ！　強くなってみせろよ！」
「……」

そう叫ぶと、俺は無言の加隈の胸倉から手を離し、踵（きびす）を返した。

「望月くん……」
「ヨーヘイ……」
「二人共……行こう」

そう言って、俺達は教室を出ようとしたところで、俺はクルリ、と振り返る。

「……俺達は今、放課後はいつも“グラハム塔”領域（エリア）を、立花……オマエとケンカしたアイツ達と一緒に攻略してる。もし、オマエが今の自分を変えたいなら……来い」

それだけを告げて、今度こそ教室を後にした。
あとは……アイツ次第だ。

すると。

――ポン。

「先輩……？」
「ふふ……君という男は、つくづく……」

そう言うと、先輩は嬉しそうに微笑む。

「マア、そのほうがヨーヘイらしいですわよネ」

と、サンドラも苦笑した。

二人共……でも、本当は違うんだ。
俺がアイツにああ言ったのは、アイツは俺だからなんだ。

ただ、俺は俺を認めたくないだけなんだ……。

だから。

「……こんなクソゲー、絶対に変えてやるよ……！」

俺は拳を握りしめ、二人に聞こえないほどの声で、そう呟いた。

◇

「……ねえ、まだ中に入らないの？」

「……」

放課後の“グラハム塔”領域（エリア）の扉の前、俺は腕組みしながら仁王立ちしていた。

そして、急かすように立花が俺の身体を揺すり続けている。

「ふふ……まあ、もう少し待つんだ」

「そうですわヨ。別に領域（エリア）は逃げませんワ」

事情を知っている先輩とサンドラは、微笑みながら俺と一緒に待ってくれている。本当に、二人には感謝しかない。

「マ、そんなに中に入りたいのなら、私（ヤー）と二人だけで先に行ク？」

「むー……」

クスクスと笑いながらプラーミャにそう言われると、立花はプクー、と頬を膨らませ、トコトコと扉の前でしゃがみ込んでしまった。

というか拗（す）ねるなよ。

当然、その間にも多くの一年生が扉をくぐって領域（エリア）の攻略に向かっていく。それを、立花は苦々しそうに眺めていた。

「……そろそろ、夕方の五時、か」

結局二時間近く扉の前にいたが、アイツは現れなかった。

――ポン。

「まあ……彼も悩んでいるのだろう。さすがに、一日で答えを出すのは難しいのかもな」

「先輩……」

確かに先輩の言う通り、アイツも自分の心を整理する時間は必要、か……。

でも。

「すいません先輩、今日のところは先輩達で先に中に入っていてくれませんか？」

「む、私達も一緒に……といっても、もうこんな時間か」

「はい……さすがに、このまま何もしないのでは、立花やプラーミャに悪いですから」

俺はチラリ、と立花とプラーミャを見ると、立花は既にいじけており、口を尖らせてしゃがみながら地面を指でなぞっていた。

プラーミャは……うん、サンドラとベタベタして嬉しそう。

「分かった……君も後で……って、ふふ、どうやら君の声は届いたみたい、だな」

「あはは……ですね」

俺と先輩は、こちらに向かって歩いてくる一人の男子生徒……加隈ユーイチを見つめ、口の端を持ち上げた。

認めない（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

加隈の指導と思い出話（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

加隈の指導と思い出話

「よう、待ってたぞ」
「……」
顔をしかめながらこの“グラハム塔”領域（エリア）の扉の前にやって来た加隈に、俺は声を掛けた。
「ここに来たってことは、お前も変わりたい、ってことでいいんだよな？」
昼休みの時と同じ言葉を、俺は加隈に投げかける。
加隈の意志を、覚悟を問うために。
すると。
「……（コクリ）」
加隈はゆっくりと、だけど強く頷いた。
その瞳に、意志と覚悟を湛（たた）えて。
「はは……よっし！」
俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩いた。
「おーい、みんな待たせた！　今日はほとんど時間がないけど、今から“グラハム塔”領域（エリア）に入ろう！」
「ふふ……ああ」

「モウ……しょうがないですわネ」
「……待ちくたびれたわヨ」

先輩が微笑み、サンドラが苦笑し、プラーミャが口を尖らせる。
だけど。

「……ボクは絶対に嫌だよ」

立花だけは、加隈が同行することに反対のようだ。その瞳が、絶対に譲らないって俺にハッキリと告げている。
まあ、それは朝の一件もあるから仕方ない、か……。

「分かった。なら、今日の攻略は二手に分かれよう。プラーミャと立花はサンドラが、加隈は俺と先輩で引率する」
「っ！？　そ、そんなの、初めからアイツを連れて行かなかったらいいだけじゃないか！」

俺のこの提案も気に入らないらしい立花は、珍しく俺に食って掛かってきた。

「いいかい、アイツはキミのことを馬鹿にしたんだよ！　それだけじゃない！　アイツは精霊（ガイスト）を召喚して、攻撃してきたんだ！　そんな奴と一緒にいたら、キミが背中から襲われるかもしれないじゃないか！」

立花は、まるで俺を心配しているかのような口ぶりだけど……ウーン、何か違うような気がするんだよなあ……。
何というかこう……ワガママを言っているような、駄々をこねているような、って言ったほうが近いかも。

「いや、お前が心配しているようなことはない。だって、俺達は加隈を鍛えるために領域（エリア）に入るんだ。だから幽鬼（レブナント）と戦うのは主に加隈だし、それに、先輩と俺、どちらか一方は常に加隈を見守っているんだからな」

「でも……だ、だったら！　それこそアイツはサンドラさんやプラーミャさんと一緒に行けばいいじゃないか！」

「立花」

俺は少し語気を強め、立花の名前を呼んだ。

「お前の言っていることは矛盾してるぞ。じゃあ何か？　俺が加隈に襲われるのは嫌だけど、サンドラやプラーミャならいいって言ってるのか？」

「そ、そういうわけじゃ……」

俺の指摘に、立花はバツが悪そうに顔を背けた。

だけど、俺はコイツにハッキリと言っておかないといけない。そうじゃないと、これから先、もっとひどい事態を招きかねないからな。

「それに、俺だって考え無しにこの組み分けにしたわけじゃない。サンドラの組にお前とプラーミャを入れたのは、二人がある程度領域（エリア）の攻略が進んでいるからってことと、プラーミャの実力はサンドラと変わらないからだ。逆に、加隈の今の実力は、俺達の中では数段落ちる。だから、先輩に引率してもらうんだ」

「……」

「これが受け入れられないなら、当初の予定通り全員で攻略することになるが……どうする？」

俺は唇を噛んで黙っている立花に、あえて選択肢を与えた。

コイツ自身に選ばせたほうが、少しは納得感が得られると思ったから。

「……分かったよ。キミの言う通り、二手に分かれることにする」

「そっか……」

立花は、渋々と言った様子で受け入れた。

だけど、やっぱり加隈の奴と一緒にいるのはどうしても嫌なんだな。

「みんな、遅くなってゴメン！　それじゃ、行こう！」

俺の言葉に全員が頷き、俺達は今度こそ“グラハム塔”領域（エリア）の中に入った。

◇

「そこ！　対応が遅れているぞ！」

「ヒ、ヒイイ！」

“グラハム塔”領域（エリア）の第十二階層まで来ると、加隈の奴は早速先輩にしごかれ、加隈は悲鳴を上げながら幽鬼（レブナント）に突貫していた。

まあ、今まで色々とサボっていたツケが来たと思って諦めるんだな。

「先輩、アイツはどうですか？」

「ん？　まあ、確かにレベルは低いが、元々の精霊（ガイスト）の能力は高いようだし、鍛えれば大丈夫だろう」

「そうですか」

まあ、元々は主人公の仲間キャラだしな。チクショウ。

「た、倒しました……」

「うむ。では次は、あそこにいる幽鬼（レブナント）三体を倒してくるんだ」

「は、はい！　うおおおおおお！」

先輩の有無を言わせない指示に、加隈は悲壮な表情でストーンウルフに突っ込んで行った。

「それにしても……ふふ」

「？　先輩、どうしました？」

突然クスクスと笑う先輩を不思議に思い、俺は尋ねた。

「ああいや……ホラ、覚えていないか？　君があの木崎セシルの罠でこの領域（エリア）の第二十一階層に閉じ込められた時のことを」

「あ……」

そういえば、あの時は俺と［ゴブ美］は必死で瓦礫を取り除いて下の階層へと降りて、そして、ストーンウルフに襲われそうになったところを先輩に助けてもらったんだ。

ちょうど、この通路で。

「あの時は本当に心配したぞ？」

「あ、あはは……ですが、先輩の姿を見た時、本当に嬉しかったのを覚えてます。他の誰でもない、先輩が来てくれたことが」

「あう！？　ふ、ふふ、そうか……」

「はい」

俺達は加隈が必死になって幽鬼（レブナント）と戦っている中、あの頃の思い出話に花を咲かせていた。

加隈の指導と思い出話（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

俺の精霊（ガイスト）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

俺の精霊（ガイスト）

「もう……いっそ俺を殺せえええええ……」

“グラハム塔　”領域（エリア）から出ると、魂の抜けた加隈が、ブツブツと呟きながら扉の前で横たわっていた。

大袈裟な……と言いたいところだけど、確かに今日の先輩の指導は厳しかった。いや、加隈はよく耐えたと思う。

「……お疲れ」

「ううう……望月い……！」

俺はポン、と加隈の肩を叩いてやると、加隈の奴、涙を流し始めやがった。

だが残念だな、男の涙に需要はない。

「ふふ、今日は時間も短かったからあの程度しか指導できなかったが、来週からはもっと厳しくいくぞ」

「ヒイイ！？」

先輩の何気なくも痛烈な一言に、加隈は流す涙もピタリ、と止まり、ただ悲鳴を上げた。

それにしても。

「なあ加隈、今日一日で精霊（ガイスト）のレベル、結構上がったんじゃないか？　ちょっと見せてみろよ」

「ヒイイ……って、［トリックスター］のか？」

「ああ」

尋ねる加隈に俺は頷くと、先輩もこちらに近づいてきた。

「ふむ、そうだな……来週からの指導方針にも関わってくるから、加隈くん、ステータスを確認させてくれ」

「は、はいい……」

よほど先輩が怖いのか、加隈は震えながらガイストリーダーを取り出した。というか失礼な。

先輩は天使……いや、女神なんだぞ？

まあいいや。俺と先輩は、ガイストリーダーの画面を見ると。

――――――――――――――――

名前　：トリックスター

属性　：道化師（♂）

ＬＶ　：１６

力　　：Ｄ＋

魔力　：Ｃ＋

耐久　：Ｃ

敏捷　：Ｃ

知力　：Ｃ

運　　：Ｆ

スキル：【ダブルリフト】【バニッシュ】【パーム】【フォース】【フラリッシュ】【ミスディレクション】【火属性耐性】【雷属性弱点】【光属性弱点】

――――――――――――――――

うん、ステータスそのものはパッとしないけど、スキルの多さだ

けはすごいな。
まあ、精霊（ガイスト）の名前が「トリックスター」って言うくらいだし、それも頷けるけど。

「ど、どうっすか……？」

加隈は、おそるおそる先輩の顔色を窺（うかが）う。

「うむ、今日の君の戦いぶりを見ていても気づいたが、少しスキルに頼り過ぎているきらいがあるな。もちろん、手数が多いことに越したことはないが、何か一つ、自分にとって拠りどころとなるものがあると、戦い方にも幅ができて、強くなれるはずだ」

「！　ホ、ホントっすか！」

先輩の言葉が嬉しいのか、加隈は満面の笑みを浮かべる。

「ああ。来週からは、その辺りを重点的に指導しよう。ふふ、なあに、すぐに立花くん達と一緒に、“グラハム塔”領域（エリア）を攻略できる実力まで押し上げてやるとも」

「は、はい！　よろしくお願いします！　師匠！」

「はあ！？　師匠だって！？」

加隈の放った言葉に、俺は不満の声を上げた。
というか、ほんのちょっと先輩に指導してもらったくらいで、師匠と呼ぶのはまだ早いだろ！

「ダ、ダメだからな！　先輩はお前の師匠なんかじゃないから！　先輩は俺のだ！」

「ハ？　何言ってやがるんだよ！　むしろこんなに短い時間で、「トリックスター」のレベルが六も上がったんだぞ！　これを師匠と

呼ばないでなんて呼べっていうんだよ！」
「ウルセー！　とにかく、俺は絶対に認めないからな！」
俺が加隈と取っ組み合いのケンカに発展しそうになった、その時。
『【縛】』
「「ハ？」」
突然、俺と加隈がもつれ合ったまま、動けなくなってしまった！？
というか。
「［シン］！？」
『マスターも落ち着くのです！　ハッキリ言って、嫉妬は醜いのです！』
まさか、［シン］に呪符を貼られるとは思わなかった……って、イヤイヤ！？　俺は［シン］のマスターなんだぞ！？　なんで俺を裏切るような真似をするんだよ！？
『大体、マスターは無自覚過ぎるのですよ。ホラ、あれを見るのです！』
［シン］が指差す方向へと視線を向けると。
「あうあうあうあうあうあうあう……」
……先輩が、両手で真っ赤になった顔を覆いながら、クネクネと悶えていた。何コレ、超可愛いんだけど。
『そういうことなのです！　だから、マスターは心配ご無用なので

す！』

何が心配ご無用なのかは分からないけど、まあ……確かに［シン］の言う通りだ。

俺は、加隈に嫉妬したんだ。ひょっとしたら、先輩が取られちゃうんじゃないかって。

ハア……全く……。

「［シン］……俺が悪かったよ……」

『分かればいいのです！　そして、お詫びとして［シン］にアイスを奢（おご）るのです！』

「プ……あはは、何だよソレ！」

エッヘン、と鼻高々に胸を張る［シン］。

俺はそれを見て、思わず笑ってしまった。

そして［シン］が俺達の身体の呪符を剥がすと、ようやく自由になった。

すると。

『……でも、［シン］は精霊（ガイスト）なのに、マスターにひどいことをしたのです……だから、叱って欲しいのです……』

［シン］は打って変わって、シュン、とした表情を浮かべながら深々と頭を下げる。

……本当にコイツは……！

『わっ！？』

俺は［シン］の頭をガシガシと乱暴に撫でた。

「はは、さすがは俺の精霊（ガイスト）だよ。よく俺を叱ってくれた。これからも、もし俺が間違ってるって思ったら、遠慮なく言ってくれ。それが俺達、だろ？」

そう言って、俺はニカッと笑顔を見せると。

『マスター……［シン］は、マスターが大大、大好きなのです！』

「わっと」

［シン］が飛び込んできて、嬉しそうに俺に抱き着く。

俺もそんな［シン］を抱きしめて、優しくその頭を撫でてやった。

その時。

「フウ……疲れましたワ……」

「エエ……そうネ……」

「……」

何故か、疲れた様子のサンドラとプラーミャ、そして、ムスッとした表情を浮かべた立花が扉から出てきた。

俺の精霊（ガイスト）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

信頼する二人との電話（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

信頼する二人との電話

「フウ……疲れましたワ……」
「エエ……そうネ……」
「……」

何故か、疲れた様子のサンドラとプラーミャ、そして、ムスッとした表情を浮かべた立花が扉から出てきた。
というか、立花はともかく、既にこの“グラハム塔”領域（エリア）を踏破したサンドラや同じ実力があるプラーミャが、ここまで疲労しているだなんて……。

「み、みんなお疲れ様……ところで、何かあったのか？」

俺は心配になり、サンドラ達にそう尋ねた。

「……ヨーヘイには後でお話しますワ……」
「……（チッ！）」

サンドラは俺を一瞥だけして、その場にへたり込む。プラーミャに至っては、忌々し気に俺に舌打ちしやがった。
ほ、本当にどうしたんだよ！？

仕方ないので、俺はススス、と立花の傍（そば）に寄ると。

「な、なあなあ……あの二人、一体どうしたんだ……？」
「……別に、何でもないよ」

俺は立花に耳打ちするが、立花まで珍しく不機嫌そうに顔を背けた。

ええー……俺、何かやらかした？　……って、俺達は別行動してたんだし、そんなわけないか。

「ふむ……みんな、一体どうしたのだろうな」

「先輩……」

先輩は俺の傍に来ると、心配そうな表情を浮かべる。

もちろん俺も、この状況に絶賛混乱中だ。

「……俺が来たせい、だよな……」

すると今度は、加隈がポツリ、とそう呟いた。

「イヤイヤ、お前を呼んだのはこの俺だろ。だったら、誰の責任かっていえば、当然俺だ。だから、お前はいちいちそんなこと気にするなよ」

「望月……お前、こんなにいい奴だったんだな……！　なのに、俺……俺……！」

「わ！？　ちょ！？　こんなところで泣くなバカ！」

感極まった加隈は号泣しだすし……もう、俺にどうしろって言うんだよ……。

◇

『……ということなんですノ』

サンドラの疲れた声が、電話の向こうから聞こえる。

あれからすぐに解散した俺達は、それぞれ暗い雰囲気のまま帰路についた。
俺も家に帰って風呂から上がった後、サンドラに今日のことについて電話で教えてもらったところだ。

要は、プラーミャが俺の悪口を言ったことに、立花が腹を立てたことが発端らしい。
まあ、プラーミャからしたら俺の悪口なんか日常茶飯事だし、いちいちそんなことを立花に言われてもなあ、ってところなのかなあ。
で、そんな二人をたしなめていたサンドラは、余計に疲れてしまったと。

「……なんか、俺のせいで大変だったみたいだな。悪い……」
『な、何を言ってますノ！　ヨーヘイは全然悪くないじゃなイ！』
「いや、だけどさあ……コレって、結局は俺が加隈の奴も一緒に攻略させることにしたことが原因だろ？　だったら……」
『バカなことは言わないデ！　とにかく、ヨーヘイは何も間違ってませんワ！』

俺が謝ると、逆にサンドラにたしなめられてしまった。

「はは……サンキュー、サンドラ」
『フフ……でしたらまた今度、この埋め合わせをしてくださいまシ』
「おう！　任せろ！」

それからしばらく雑談をしていると、サンドラはすっかり機嫌が良くなり、最後は嬉しそうに電話を切った。

「ふう……」

それにしても。

「立花って、意外と頑固だよなあ……」

オマケに、ちょっと俺に対して執着しすぎっていうか、依存してるっていうか……うん、なんか怖い。

しかもアイツ、一応は男だけど……仕草といい態度といい、女子のソレだし……。

「まあ、本人もそれは気にしてるみたいだし、俺もなるべく気をつけてはいるんだけどな」

とはいえ、今日みたいなことにならないように気をつけないと……って。

「［シン］？」

『はう！　労働の後のアイスは最高なのです！　格別なのです！』

「そ、そうか、良かったな……」

［シン］の奴は、疾走丸を飲んだご褒美であるアイスを頬張り、ご満悦である。

本当ならルフランのジェラートだったんだけど、今日はすっかり遅くなっちまったせいで、コンビニのアイスで勘弁してもらった。

とはいえ、アイスを三つもねだられたけど……いや、マテリアルを売った金があるから全然いいんだけどな。

すると。

――ピリリリリ。

「ん？　電話……って、先輩？」

俺は慌ててスマホを取り、通話ボタンをタップする。

「もしもし」

『あ……うむ、そ、その、藤堂だが……』

あはは。先輩、なんだか緊張してるなあ。

「先輩、どうしたんですか？」

『あ、いや、その……ふふ、少し君の声が聞きたくなってな』

「はえ！？」

先輩の予想外の答えに、俺は思わず変な声を出してしまった。

『ふふ、そんな声を出してどうした？』

「あ、い、いえ……」

ううう、先輩の言葉のせいで顔が熱い。

一方で、先輩はといえばどこかイタズラが成功したかのような、そんな嬉しそうな声色だった。

『まあ、望月くんもいつも私に意地悪するから、たまにはお返しだ』

「そんなあ……」

なんて情けない声を出したものの、本当は先輩とこんなやり取りをしていることが嬉しくて仕方ない。なので、こんな可愛いイタズラ、いくらでも受けますとも。

『ふふ……では、そろそろ本題に入ろう。以前から君に頼まれていた、彼女……“悠木アヤ”との面談について、“GSMO（グスモ）”から許可が出た』

「っ！　ほ、本当ですか！」

『ああ……お父様が言うには、明日でも面会可能ということだが……どうする？』

明日……は、土曜日か。

今のところ、二周目特典である五つの領域（エリア）の一つを確認しに行こうって考えてただけだから、悠木の面会に行く余裕はある。

……いや、今日のことがあった以上、悠木の面会は最優先にするべきだ。

「……先輩、でしたら明日、早速悠木に面会したいんですが」

「ふふ、君ならそう言うと思って、既にそのつもりで向こうには伝えてあるよ」

はは、さすが先輩。俺のことなんて、何でもお見通しだな。

「ありがとうございます。じゃあ、明日……もちろん、先輩も一緒に来てくれますよね？」

「当然だとも。君が言い出さなくても、ついて行くつもりだったよ」

「あはは……本当に先輩は……最高、ですよ」

『あうあうあう！？　も、望月くんは……せっかく今日は私の勝ちだと思ったのに……』

悔しそうにしながらも、どこか嬉しそうな先輩の声。

俺はその声を、わざと無駄な雑談で引き伸ばして、時間の許す限

り堪能した。

信頼する二人との電話（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

街はずれの更生施設（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「先輩！」

朝九時半、俺は待ち合わせ場所の駅前に来ると、既に藤堂先輩が待っていた……って、約束の時間は十一時だぞ！？

「あ……うむ、望月くん、おはよう」

「おはようございます！」

俺は元気に挨拶する。そして、次からは約束時間の二時間前に来ようと心に固く誓った瞬間だった。

「ふふ……では行こう。“カナエ”さん」

「はい、お嬢様」

「カナエさん？　……って、うあ！？」

気がつくと、いつの間にか先輩の家のメイドさんである“カナエ”さんが、俺の背後にいた。

え！？　ど、どういうこと！？

「ん？　ああ、彼女……悠木アヤがいるところは、少し離れているのでな。カナエさんに車を出してもらうことにしたんだ」

「そ、そうですか……」

先輩の説明に俺は頷く。

「ふふ、それにカナエさんは車だけでなく、飛行機やヘリコプター、

船舶と、あらゆる乗り物の免許を持っているぞ？」
「ほ、本当ですか！？」

俺は驚きの声を上げながら自慢げに語る先輩と、なお澄ました表情で控えるカナエさんを交互に見ると……あ、何気にカナエさんの口の端が少し上がってる。

「お嬢様、望月様もお越しになられましたので、そろそろ……」
「うむ、そうだな……では、行こうか」
「はい！」

ということで、俺達はカナエさんの運転する車で悠木のいる施設へと向かった。
もちろん、車は黒塗りの高級外車だ。相変わらず革張りのシートには慣れない。

「あ、そうだ。先輩、悠木との面会が終わったら、ちょっと行きたい場所があるんですが付き合っていただいてもいいですか？」
「行きたい場所？　ああ、別に構わないぞ」
「ありがとうございます！」

走る車の中で先輩に同行をお願いすると、先輩は快諾してくれた。
よし、先輩にも一緒に来てもらえることになったぞ。
あと、サンドラとプラーミャは……うん、今度でいいか。

「それで……望月くんは彼女に会って何を話すつもりなんだ？」
「そうですね……とりあえずは、なんであんな真似をしたのか、もっとちゃんと聞いておきたいんです。そうでないと、俺自身納得できそうにないですから」

先輩の問い掛けに、俺はそう答えた。
そう……俺はいまだに腑に落ちていない。
特に、悠木が何度も言った『元通り』って言葉……あれがどういう意味なのか聞かないことには。

「そうだな……私も、あの時のことをまだ許せそうにないからな。彼女から理由を聞ければ、少しは受け入れられるかもしれん」
「先輩……」

先輩のその言葉に、俺は胸がかあ、と熱くなった。
だって、先輩はそれだけ俺のことを大切に想ってくれているってことだから。

「お嬢様、望月様、見えました。あの建物が、目的の場所です」
「あれが……」

カナエさんの言葉に、俺は窓の外を眺めると……山の中腹に、ポツン、とある高い塀に囲まれた殺風景な白い建物。
あれが、悠木が入っている施設、か……。

あの建物は、精霊（ガイスト）使いが自分の精霊（ガイスト）を悪用して罪などを犯した者を収容する施設だ。
ここに収容された人達は、ＧＳＭＯ（グスモ）が用意した更生プログラムを受けて社会復帰を目指す。
とはいえ、比較的罪が軽い、もしくは更生の見込みがある人達が入るところだな。

逆に、更生の見込みもなく、凶悪な犯罪者などはここことは別の施設に収容され、一生日の目を見ることがないらしい。
それだけ、精霊（ガイスト）の力は別格なのだ。

俺達を乗せた車は、入口で職員によるチェックを受けた後、施設のゲートをくぐる。

「では、私はここでお待ちしております」
「うむ、カナエさんありがとう」
「ありがとうございます！」

カナエさんと別れると、俺と先輩は施設の人に案内されて面会室の前へと通された。

「しばらくここでお待ちください」

俺達は面会室前のベンチに座り、呼ばれるのを待つ。
何というか、その……緊張するなあ……。

――ギュ。

「あ……」
「ん……こ、こうすれば、少しは落ち着くぞ……？」

顔を真っ赤にした先輩が、俺の手を握る。
というか、俺の緊張をほぐそうとしてくれているのは分かるんだけど……先輩、むしろもっと緊張します。

でも……。

「あ……ふふ……」

俺は先輩のその手を握り返すと、先輩は頬を緩めた。

先輩……ありがとうございます。

「面会の方、中へどうぞ」

面会室の扉の上に付いているスピーカーから、呼び出しのアナウンスが流れた。

「先輩……行きましょう」

「うむ」

俺と先輩は立ち上がり、ドアノブを回して扉を開ける。

中には。

「悠木……」

「……久しぶりね」

透明な仕切りの向こう側に、この施設の制服を着た悠木アヤが、椅子に腰かけていた。

街はずれの更生施設（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

悠木アヤ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

悠木アヤ

「悠木……」
「……久しぶりね」

面会室の中に入ると、透明な仕切りの向こう側に、この施設の制服を着た悠木アヤが、椅子に腰かけていた。

「なお、面会時間は十分です。時間になりましたらお声がけしますので」

同席している職員の説明を受けると、俺と先輩は用意されているパイプ椅子に腰かけた。

「はは……元気、してたかよ」
「……ええ、おかげさまで」

とりあえずなんて声を掛けていいか分からなかった俺は、適当な言葉を投げかけてみると、悠木はフ、と薄く微笑んだ。
何というか……悠木の奴、雰囲気変わった……？

「……今日は、私に聞きたいことがあるんでしょう？」

俺が話を切り出す前に、悠木からそう言ってきた。どうやら、俺達の目的はある程度察しているみたいだ。

「ああ……俺は、あの時の悠木の行動の全てについて、腑に落ちていない。お前は一一二……いや、一年生の中でも一番頭が切れる奴

のはずだ。なのに、あんな短絡的で意味不明な真似をしたんだからな」

「……あら、ありがとう。意外と評価してくれてるのね」

……本当にコレ、あの悠木か？

俺にお礼を言うだなんて、到底考えられないんだけど。

「……そうね。まず結論から言わせてもらうと……私でも分からない、としか言いようがないの」

「分からない？」

悠木の言葉に、俺は思わず尋ね返した。

だけど……分からないって何だ？

「ええ……というのも、正直言うと学園にいる時、何故だか分からないけど私はあなたが憎くて憎くて仕方がなかったの。特に理由もなく」

「ど、どういうことだよ！？」

「……それこそ私が知りたいくらいよ。でも今は、別にあなたのことを憎いとも思っていないし、私自身なおさら訳が分からなくなっているの……」

いや、話を聞いている俺のほうが、訳が分からないぞ！？

そもそも、学園にいる時はなんでそこまで憎まれてたのかってこともだし、学園から出た途端、俺への憎しみが無くなったって……完全におかしいじゃねーか。

「それと……」

「それと？」

「……木崎さんが学園を退学していなくなって、しかもあなたも一

一三にクラス替えをした後、私の中で選択肢が二つ現れたの」
「選択肢？」
「……ええ。それで、その選択肢っていうのが、『あなたの仲間になる』か、『あなたを抹消する』だったの」
「「はあ！？」」

俺だけじゃなく、今まで静かに聞いていた先輩まで声を上げた。
何だよソレ……それこそ、まるでゲームによくある二択みたいなモンか！？

「……何故だか分からないけど、私はそれを選んで実行しないとマズイと思った。だから、一番無難な『あなたの仲間になる』を選択したんだけど……」
「ああ……」

確かに、悠木は一一三の教室へ俺を勧誘しに来たな……。

「……でも、あなたに断られた途端、ふつふつと私の中にあなたへの殺意……というか、あなたを抹消しなくては、って気持ちが芽生えたの。何の疑いもなく、ね」
「……」
「……多分、これって一つ目の選択肢が失敗したから、二つ目の選択肢を強制的に選ばされたんじゃないかって、今ではそう考えてる」

駄目だ……悠木の言っていることが理解できなくて、頭の中が混乱してる。
これじゃまるで、悠木が自分の意志や感情を、無理やり操られたみたいじゃねーか……。

「……それで、どういう訳かこうも思ったわ。あなたを抹消すれば、

元通りになる、って」
「っ！？」

その言葉に、俺は息を飲んだ。
それこそ、まさに俺が悠木に聞きたかったことだから。

「……ふふ。そんなこと、絶対にあり得ないのに……むしろ、そんなことしたらすべてが終わるのに。それでも」

悠木はここで一拍置き、すう、と息を吸い込むと。

「……あの時の私は、そうとしか考えられなかった」

俺をジッと見つめながら、静かにそう告げた。

「な、なあ、悠木はなんでそうとしか考え……「すいません、時間になりましたので……」」

俺は透明の仕切り越しに悠木に詰め寄ろうとしたところで面会時間を過ぎてしまい、職員に止められた。

「……望月くん、行こう」
「はい……」

先輩に促され、俺は渋々席を立つ。
そして、面会室を出ようとした、その時。

「……ねえ」
「ん？」
「その……また、来てくれる……？」

悠木は、上目遣いでおずおずとそう尋ねた。
その瞳は、まるで縋るようで……。

だから。

「おう！　今度はルフランのスイーツ、持って来てやるよ！　そうだな……ガトーフレーズでどうだ？」
「っ！　……うん……うん……！」

俺はニカッと笑ってそう言うと、悠木はぽろぽろと涙を零しながら、何度も頷いた。
はあ……しかも、わざわざ『攻略サイト』に書いてあった、悠木の好感度アップのケーキをチョイスするなんて、俺もお人好しだなあ……。

俺は頭を掻いて苦笑すると、先輩と一緒に面会室を後にした。

悠木アヤ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

アトランティス領域（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「……えーと、先輩……？」
「……」

帰りの車の中、先輩はずっと無言である。というか、正確には悠木との面会を終えてからだけど。

多分、先輩は気に入らないんだろう。
俺が、まるで悠木を許すかのような、そんな態度を取ったことに。

でも、今日会った悠木は、俺の知っている悠木とまるで違っていた。

学園にいたころのアイツは、常に俺を見下すような視線を向け、事あるごとに俺のことを蔑んでいた。
木崎の奴が学園からいなくなり、俺を勧誘する時も“グラハム塔領域（エリア）”で襲ってきた時も、その視線は一向に変わっていない。
なのに、今日の悠木の瞳に、そんな色は一切見られなかった。

見えたのは、謝罪と、後悔と、困惑の色だけだ。

「……ぷ」
「へ？」
「ハハハハハ！　いや、よくよく考えてみれば、君はそういう男の子、だったな」

突然吹き出したかと思うと、先輩は愉快そうに笑いながら、そう呟いた。

「え、ええと……」
「ふふ、君は初めて逢ったあの時から、ずっと変わらない。真っ直ぐで、諦めなくて、ひたむきで……そして、誰よりも優しくて」
「うあ！？」
先輩にべた褒めされ、俺は思わず変な声を上げた。
というか先輩、恥ずかしいです……。
「ふふ……とはいえ、誰にでも優しくされると、な……」
そう言って、先輩は少し寂しそうに微笑んだ。
だけど……先輩は少し勘違いしてるみたいだ。
「先輩」
「ん……？」
「俺は……俺にとっては、先輩がいつだって一番大切です。先輩の言う俺って奴がそうなら、それは先輩がいてくれるから、ですから……」
「あう……うん……」
俺が先輩にそう告げると、先輩は顔を真っ赤にしながら俯き、静かに頷いた。
でも、これは事実だ。
俺が俺でいられるのは、先輩がいてくれるからこそなんだ。
もし、先輩がいなかったら、今頃俺は世の中の全部を憎んで、『攻略サイト』にあるように、ただ耳を塞ぎ続けていたはずなんだから。

結局駅に着くまでの間、結局俺と先輩は無言のままだった。
でも、最初のギスギスしていた時とは違い、ただ、心地よかった。

◇

「では、私はこれで失礼します」

駅前に到着した俺達は車を降りると、カナエさんが恭しく礼をした。

「カナエさん、ありがとう」
「ありがとうございました！」

そして、カナエさんは車に乗って先輩の家へと帰って行った。

「さて……じゃあ、行きましょうか」
「うむ。ところで、君の行きたいところというのは……？」

先輩はそう尋ねながら、口の端を少し持ち上げた。
というか先輩、ある程度予想がついてますよね？

「あはは……まあ、着いてからということで」

俺は苦笑すると、先輩と一緒に歩いて移動する。
その行き先は。

「む……図書館、か？」
「はい」

そう、今回の目的地は市営の図書館。

当然、俺はここに本を借りに来たわけじゃない。

「先輩、コッチです」

俺は先輩と一緒に中に入ると、たくさん並ぶ本棚の一番奥……哲学関係の本が並んでいる棚へとやって来た。

「えーと……『ティマイオス』、だったっけ？　……お、あったあった」

本棚から一冊の本を取り出すと、長い間読まれていなかったのか、ほこりが舞った。

「ケホケホ……つ、次に、三一七ページを開いて、と……」

本をパラパラとめくり、ある記述のあるページを開くと。

「っ！？」

先輩が思わず息を飲む。

それもそうだろう。だって……目の前に、突然領域（エリア）の入口である扉が現れたんだから。

でも。

「ふ、ふふ……そうだろうとは思ってはいたが、それでもやっぱり驚いてしまうな……そして、これも偶然見つけたのだろう？」

「あ、あはは……」

先輩の含みのある笑みに、俺は苦笑するしかない。

でも……先輩はそれ以上追及してこなかった。それもこれも、先輩が俺のことを信じてくれているから。

「さあ、入りましょう」

「うむ」

俺と先輩は扉をくぐって中に入ると。

「「おお……！」」

俺と先輩は思わず声を失った。

だって、この領域（エリア）……他の領域（エリア）とは違って通路や壁もなく、ただただ階層が広がっているだけなんだから。

そう。ここは二周目特典である五つの領域（エリア）の一つ、“アトランティス”領域（エリア）。海洋に浮かぶ広大な階層がただ存在する、特殊な領域（エリア）だ。

「こ、このような領域（エリア）、見たことがないぞ……！」

「ですね……」

さて……それじゃ、せっかく来たことだし、チョットだけでも攻略しておこうかな。

「先輩、あそこに建物らしきものがありますから、まずはそこから手をつけてみましょうか」

「う、うむ、そうだな」

俺達は少し離れた場所にある、朽ちたギリシャ風の神殿のような建物を目指す。

すると。
「っ！　幽鬼（レブナント）です！　［シン］！」
『ハイなのです！』
俺が叫ぶと、［シン］が現れてこの領域（エリア）の幽鬼（レブナント）、“ブロンズゴーレム”へと突っ込んでいく。
そして。
『【縛】！』
瞬く間に呪符を貼り、幽鬼（レブナント）を足止めすると。
「おおおおおおおおおおおおおおおッッッ！」
先輩の［関聖帝君］がブロンズゴーレムへ向け、青龍偃月刀を振り下ろした。
――斬ッッッ！
見事に【一刀両断】にされ、ブロンズゴーレムは幽子とマテリアルに変化した。
「ふむ……ここの幽鬼（レブナント）は、“アルカトラズ”領域（エリア）と比べると若干弱い、か」
先輩が地面に転がるマテリアルを眺めながらそう呟いた。
実は先輩の言う通りで、“アルカトラズ”領域（エリア）の攻略の目安がレベル六十であるのに対し、この領域（エリア）はレベル五十となっている。

「はい。先輩、これからは立花や加隈を“グラハム塔”領域（エリア）で鍛えつつ、サンドラとプラーミャを加えた四人で、ここの攻略も並行して進めましょう」

「分かった」

俺と先輩は頷き合うと、しばらく“アトランティス”領域（エリア）の攻略に勤しんだ。

アトランティス領域（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

引っ越しの手伝い（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

引っ越しの手伝い

――ピピピ。

「んうー……」

悠木と面会し、先輩と一緒に“アトランティス”領域（エリア）へと入った次の日の日曜日。

俺はまぶたをこすりながら、さっきからけたたましくアラームを鳴らすスマホを必死で探している。

というか、なんでスマホが見つからねーんだよ。

『うー……！　ウルサイのです！　［シン］はまだ寝てるのです！』

不機嫌に叫ぶ［シン］。いや、起きろよ。

などと心の中でツッコミをしていると……うあー、スマホの野郎、よりによってベッドと壁の隙間に落ちてやがる……。

「おい、［シン］。ベッド動かすからチョット降りてくれ」

『むー……仕方ないのです……』

［シン］は渋々といった様子でベッドから出ると、ジト目で俺を睨みやがった。というか俺はお前のマスターだぞ？　もうちょっと、こう……うん、まあいいや。

ということで、俺はベッドを動かしてスマホを取ると、アラーム停止のアイコンをタップした。

『さあて……［シン］はもう一寝入りするのです……』
「コラコラ、起きろ」
『えー……今日は日曜日なのに、なんでこんなに早起きなのです？』
［シン］の奴は不満たらたらで尋ねるけど、コイツ……もう忘れてやがる。
「オイオイ、今日はプラーミャの引っ越しの手伝いをする日だろ」
『あー、ミャーさんの』
って、［シン］はプラーミャのことを“ミャーさん”って呼んでるのか？　というか［シン］のネーミングセンスって一体……。
「ま、まあいいや。俺は先にリビングに行ってるぞ」
『あ！　［シン］も一緒に行くのです！』
結局は［シン］と一緒にリビングに入ると。
「あら、おはよう」
「おはよー」
『お母様！　おはようございますなのです！』
とまあ、俺の時とは打って変わり、［シン］はビシッと直立不動で挨拶をした。俺の時と、この態度の違いは何だよ。
「ハア……まあいいや、いただきます」
俺は用意してくれた朝食を口に含む。うん、今日も美味い。
『んふふー、ウマウマなのです！』

で、［シン］は朝からアイスを食べてゴキゲンである。主食アイスっていうのもどうかと思うけどな。

「ごちそうさま」

食事を終え、洗面台に向かって歯磨きと洗顔をして身支度を整えて……。

「いってきます」
「いってらっしゃい」

俺は家を出て先輩の待つ駅前へと向かった。

すると。

「む」
「あ！」
なんと、ちょうど駅に向かっている最中の先輩とバッタリ逢った。
今日はツイてるぞ！

「先輩、おはようございます！」
「ふふ、おはよう」

今日の先輩のコーデは、引っ越し作業を意識してか、Ｔシャツにデニムのホットパンツ、スニーカー、いつもは下ろしているワインレッドの髪をポニーテールにするなど、動きやすさを重視していた。
こういったラフな格好の先輩も最高に可愛い。

「と、ところで、この時間だと、ササ、サンドラの家に行くには、

その……少々早いな……？」

などと、少し挙動不審になりながら、先輩はそんなことを言った。
もちろん、先輩の言いたいことは理解しておりますとも。

「あはは、そうですね。せっかくですし、このまま駅前に行ってカフェにでも入りましょうか」
「！　う、うむ！」

俺がそう提案すると、先輩はぱあ、と最高の笑顔を見せてくれた。
うわあ……たまらないなあ……。

ということで、ちょうど開店直後だったルフランで一時間ほど先輩と雑談をしながら時間を潰すと、今度こそ俺達はサンドラの家へと向かった。

――ピンポーン。

『ア！　ヨーヘイ！　今開けるから待ってテ！』

インターホン越しにサンドラの笑顔が現れると、マンション入口の自動ドアが開いた。
で、俺と先輩はエレベーターに乗り込んでサンドラの部屋がある最上階へと向かう。

「ヨーヘイ！　先輩！　お待ちしてましたワ！」
「遅イ！」

心底嬉しそうな表情を浮かべるサンドラとは対照的に、俺を見るなり怒鳴りつけるプラーミャ。双子なのにこの対応の違い……。

「さ、早速ヨーヘイにお願いしたいことがありますノ！」
「わ！？　ちょ！？」

俺はサンドラに引きずられるように部屋の中に入ると、連れてこられたのは……大量の荷物や家具、そしてぬいぐるみで埋め尽くされた部屋だった。うん、何だよこの有様は。

「な、なあ……コレ、全部プラーミャの荷物、なのか……？」
「ソウヨ、文句あル？」

俺の問い掛けに、腰に手を当てて何故か偉そうに答えるプラーミャ。いや、お前はもうちょっと手伝いに来た俺へのねぎらいはないのかよ。

「だ、だけどさあ……既に部屋を埋め尽くしてる時点で、どうやっても綺麗に収まる未来が想像できないんだけど……」
「ア、アハハー……」

俺がげんなりしながらそう告げると、サンドラは乾いた笑みを浮かべた。

「エ、エート……一応、荷物の一部はワタクシのものもありますので、な、何とかなると思いますワ……」
「お、おう……そうか……」

ま、まあ、こんなところで悩んでてもしょうがない。

とにかく、俺達はまずは荷ほどきを開始した。

引っ越しの手伝い（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

最高の笑顔（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

最高の笑顔

「ソコ！　その“メリー”はベッドの上でショ！」

荷ほどきをしながらプラーミャの荷物を整理している中、何故かプラーミャはひたすら俺に指示を出す。いや、というか自分の荷物なんだからお前が率先してやれよ！？

しかも、たった今指示出されたぬいぐるみ……どうやら“メリー”という名前らしいけど、コレと同じぬいぐるみが他にも四体あるんだけど？

「スマン……俺にはぬいぐるみの違いが分からん……」

「コラ！　私（ヤー）の家族をぬいぐるみ呼ばわりするナ！」

……理不尽が過ぎる。

「マ、マアマア……そ、それじゃヨーヘイはコッチの荷物をワタクシノ……「おーい、サンドラ、この椅子、勝手に分解してしまったのだが、良いのか？」……って、アアアア！？」

おっと、どうやら先輩が何かをやらかしたみたいだ。おかげでサンドラが血相を変えて先輩の元へと飛び出して行った。

「ヨーヘイ！　何してるノ！」

「……ハイハイ」

それからプラーミャに小突かれながら部屋の片付けをすること二

時間。
何とか部屋の床が少し見えるようになってきた。
でも。
「うあー……コレ、今日中に終わるのかよ……」
まだまだ高く積み上げられた荷物を眺め、俺は思わず声を漏らした。
「ホラ！　次はこの荷物！　これをサンドラの部屋に持って行って！」
「へーい……」
俺はプラーミャの指示により、サンドラの荷物だというダンボールの箱を抱えると、リビング伝いにサンドラの部屋……って、どれだ？
というか、サンドラの家って無駄に広くて部屋数も多いから、どれがどれだか分からないんだよなあ……。
「ア、ヨーヘイ！」
お、ちょうど良いところに。
「サンドラ、これ、お前の荷物らしいんだけど、サンドラの部屋ってどれだ？」
「？　ワタクシの荷物……って、フエエエエエエエエエ！？」
「うあ！？」
サンドラは突然奇声を上げたかと思うと、俺から荷物をひったく

った。

「ななな、中を見てないですわよネ！」
「中？　お、おう、見てないけど……」
「ソソ、ソウ……！」

俺がそう答えると、サンドラはあからさまにホッとしていた。
……一体あの箱の中に、何が入ってるんだろうか。

「ト、トニカク！　この箱はワタクシが片づけますから、ヨーヘイは早くプラーミャのところに戻……ッテ！？」
「あ！　お、おい！？」

すると、サンドラがつまづき、箱を放り投げながら倒れ……っ！

「あ、危ねえ！」
「ア……ヨーヘイ……」

間一髪、俺はサンドラが床にこける前に抱き留めることができた。
ハア、全く……。

「大丈夫か？」
「フエ！？　ア、ウ、ウン……」
「そっか、それなら良かった」

俺はサンドラを立ち上がらせようと……っ！？

――フニュン。

「フエエエエエエエエ！？」

「うあああああああああ！？」

し、しまったあああああ！？　つい、サンドラのお尻を！？

「む、望月くん、サンドラ、どうした？」

「サンドラ！？　何があったノ！？」

俺達の叫び声を聞き、先輩とプラーミャが一斉にコッチにやって来た。

「あ、あああああ！？　いいい、いえ、何もない！　何もないです！」

「……ほう？」

俺は慌ててそう言うが、先輩の視線がやけに鋭い……。

「ヨーヘイ……アナタ、私（ヤー）のサンドラ、に何をしたノ……？」

「うあ！？」

見ると、プラーミャは［イリヤー］を召喚し、今まで見たことがない怒りの形相を浮かべていた！？　イヤ、なんでそこまで！？

だが、その理由はすぐに分かった。

だって……サンドラが自分の身体を抱えながらしゃがみ込み、顔を真っ赤にしてそのアクアマリンの瞳に涙を湛（たた）えているんだから……そりゃあ、ヤンデレシスコンのプラーミャからしたら、ブチ切れるのも当然……って！？

「死ネエエエエエエエエエエエエッッッ！」

「うあ！？　待て！？　違う！？　違うから！？」

俺はプラーミャにズタボロにされ、リビングに転がったまましばらく動けなかった。

「……見損なったぞ、望月くん」

「先輩！？」

色々と蔑まれ、つらい思いをしてきた俺だったけど、この時ほど心が挫けたことはなかった。

◇

「シクシク……」

「ホ、ホラ、もう泣くのはやめなさイ……」

俺はサンドラに慰められながら、引っ越しの手伝いを黙々とこなしていた。

ただ、先輩はいまだに口もきいてくれず、プラーミャもあの始末。もはや今の俺にとって、味方はサンドラただ一人だった。

まあ、今となってはみんなの反応は正しくもあるんだけど。

だって、サンドラは涙目だわ、辺りにはサンドラがこけそうになった際にぶちまけた下着の数々が散乱してるわで、誰がどう見ても疑うよなあ……って、アレ？　ひょっとして、悪いのはサンドラ？

「そ、それよりモ、この荷物を部屋に運ぶのを手伝っテ！」

「お、おう」

サンドラに頼まれ、俺はサンドラと一緒に家具を部屋へと運ぶ。

すると。

「っ！」

俺は、サンドラの部屋の机に立てかけてあった一枚の写真に気づく。

それは……子どもだった頃のサンドラが、家族と一緒に撮った笑顔の写真。

「ア……フフ、アレが、ワタクシの家族、ですワ……」

「そっか……」

サンドラは、少し恥ずかしそうにしながら写真に映る家族を紹介してくれた。

俺はその写真を見て嬉しかった。

だって……あの写真こそ、サンドラを闇落ちから救うアイテム、『思い出の写真』なのだから。

そしてそれは、サンドラの心が救われていることの証明でもあるんだ。

「はは……！」

「？　フフ……急に笑って、おかしな人ですわネ」

「んだよ、サンドラだって笑ってるじゃん！」

「じゃあ、お互い様、ですワ」

サンドラは、その写真に映る子どもの頃のサンドラ達に負けないくらい、最高の笑顔を見せてくれた。

最高の笑顔（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

遊ぶ約束（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

遊ぶ約束

「おはよ！　望月くん！」
「おう、おはよう」

月曜の朝の通学路、何故か俺を待ち構えていた立花は、俺の姿を見るなりぱあ、と笑顔を見せてぱたぱたと駆け寄ってきた。というか、小動物みたい。

「ねえねえ！　望月くんは、休日は何して過ごすの？」
「俺？　俺は、そうだなあ……」

などと考えてみるものの……うん、毎週領域（エリア）に入ってるなあ。
それも、先輩とサンドラのどちらかが必ず一緒で。

「ま、まあ、先輩かサンドラと一緒にいることが多い、かなあ」

普通なら、可愛い女子と休日を過ごしてるんだから、ある意味リア充っぽいけど……実際は領域（エリア）攻略だから、体育会系のノリに近いもんなあ……。

「ふうん……」

すると、立花は気に入らないのか、少し不機嫌そうに返事した。
なんだよ、俺だって可愛い女の子と過ごしたいんだから、それくらい許容しろよ。

「じゃ、じゃあさ……今度の休みは、その……ボ、ボクと一緒に遊

ぼうよ！」

何故か立花は、顔を真っ赤にしながら誘ってきた。いや、なんで照れてるの？

「お、おう、それは別に構わないけど……あ、だったら先輩やサンドラ達も誘って……「そ、それはダメだよ！」……そ、そうなの……？」

ウーン、立花は二人っきりで遊ぶことをご所望らしい。

まあ、男同士でバカやったりしたいってことなのかな？

ま、いいか。

「おう。だったら、たまには一緒にゲーセンでも行くか」

「！　う、うん！」

そう告げると、立花は嬉しそうに返事をした。

何というか、その……どう見ても、小動物改め飼い主に懐くポチみたいだなあ……。

「じゃ、じゃあ今度の日曜日！　絶対だからね！」

「お、おう……」

などと、グイグイ来る立花に俺は少し戸惑いながら、先輩の待つ十字路へと足早に向かうと。

「む、望月くんと立花くん、おはよう」

「先輩！　おはようございます！」

「おはようございます」

俺の姿を見て微笑む先輩に、俺は今日も元気に挨拶をする。
一方で立花は、まるで事務的な挨拶をした。

「それで……今日も“グラハム塔”領域（エリア）に行くのだろう？」
「はい。まずは加隈の奴を立花と同じ位レベルを上げて、プラーミャを加えた三人で攻略できるようにしないと」
「……ボクは、やっぱり彼と一緒に攻略したくない」

そう言うと、立花はプイ、と顔を背けた。

「ハア……なあ立花、なんでお前はそこまで加隈を毛嫌いするんだ？　確かに先週のことはアイツが悪かったけど、もう加隈も心を入れ替えたわけだし、いい加減許してやったらどうだ？」

俺は諭すように立花にそう話すが、立花は口を尖らせて顔を背けたままだ。
すると。

「……じゃあ、キミはあの加隈くんを許せるの？　キミのこと、あんなに馬鹿にして、貶（けな）したんだよ！」
「お、おうふ……」

突然、立花はすごい剣幕で詰め寄って来たので、俺は思わず変な声を出してしまった。
だけど……今の立花の理由だと、加隈が俺のことをディスっていたことに対しての怒りみたい……なのか？

「立花……お前が俺のために怒ってくれたことは嬉しいけど、もう俺はアイツを許した。だから、悪いけどお前もアイツのこと、怒ら

ないでやってくれると嬉しい」
「っ！　……そんな言い方、反則だよ……」
立花は、少しだけ悲しそうな表情を浮かべて俯(うつむ)いた。
でも、納得はしていないものの、俺の言葉を受け入れてはくれたみたいだ。
「はは、悪いな」
「……仕方ないよ、キミがそう言うんだもん」
そう言うと、立花は苦笑した。
とはいえ。
「ウーン……どうも、俺に対する気遣いだけじゃないような気も……」
「？　望月くん？」
「ん？　おお……いや、何でもない」
不思議そうに見つめる立花にそう答え、俺は思考を切り替えて二人と一緒に学園へと向かった。
◇
「早ク！　何してるノ！」
「コッチからも幽鬼(レブナント)が来てるよ！」
「ヒ、ヒイイ！」
“グラハム塔”領域(エリア)の第二十八階層。
今、プラーミャ、立花、加隈が三人のパーティーで攻略を行って

いる。

「フフ……ようやく本格的に訓練ができますわネ」

「ああ。だけど、プラーミャにはちょっと申し訳ないんだけどな」

というのも、プラーミャはあの二人と比べたらその実力はかなり上だ。なのに、あの二人とパーティーを組まされてるわけで、プラーミャ自身にとって何のメリットもないからな。

「まあ、それでも一人で攻略するよりは楽になる。それに、プラーミャはチームで動くことに慣れていないように見受けられる。そういう意味でも、これは彼女にとってデメリットばかりではないさ」

先輩は三人を眺めながら、そう答えた。この辺り、さすがの観察眼だな。

「あ、そうそう。後でプラーミャにも言っておいて欲しいんだけど、立花と加隈の訓練の傍ら、俺達も領域（エリア）の攻略をするからな」

「と、いいますト？」

「実は……」

俺はサンドラに、“アトランティス領域（エリア）について説明した。

もちろん、あくまでも偶然見つけたという体（てい）で。

「フフ、そうなんですのネ。でしたら、ワタクシも喜んで参加しますワ」

「ありがとう……」

俺は快諾してくれたサンドラに、深々と頭を下げた。

「よ、よしてくださいまシ。だってワタクシ達……チーム、でショ？」

「！　お、おう！」

「フエ！？」

照れくさそうにそう告げたサンドラの気持ちが嬉しくて、俺は思わずサンドラの手を握ると。

「コホン」

「「ハッ！？」」

咳払いをする先輩にジト目で睨まれ、俺はすぐにサンドラの手を離した。

遊ぶ約束（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

もう一つのスキル（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

それからというもの、“グラハム塔”領域（エリア）での訓練は、常にプラーミャ、立花、加隈のパーティーで行うことになり、その結果、連携も上がって、今では俺達が何か手助けをしたりすることもなくなった。

「へへ！　コッチは任せろ！」
「ユーイチ！　調子にのるナ！」
「加隈くん、出過ぎだよ！」

……とまあ、加隈が元来のお調子者を発揮して、少し危なっかしいところはあるものの……大丈夫だろう。だよな？

「ふふ、この調子なら、もう私達が同行する必要もなさそうだな」
「エエ、そうですわネ」
「「「っ！？」」」

そんな先輩とサンドラの会話を耳聡く聞いた三人が、一斉にこちらへと振り向いた。

「イ、イヤヨ！　サンドラが一緒じゃなかったら、こんなところ来ないんだからラ！」
「ボ、ボクも望月くんと一緒に……！」
「師匠！　俺を見捨てるんすか！？」

などと言いながら、三者三様に俺達に詰め寄ってきた。ええい、鬱陶（うっとう）しい。

「いいかお前達、この“グラハム塔”領域の踏破に当たっては、俺や先輩、サンドラは一緒に行けないルールなんだぞ？　だったら、必然的に三人になるに決まってるだろ！」
「「「……」」」
俺が少しキツめに言うと、三人はシュン、としてしまった。いや、どうしろと？
「ふふ、まあこの領域を踏破してしまえば、また次の“カタコンベ”領域では一緒に攻略できるのだから、楽しみに取っておくといい」
「「「！　は、はい！」」」
先輩のフォローに、三人はぱあ、と笑顔を浮かべた。
「うむ。ということで、来週……いよいよ、三人での踏破を目指すぞ。いいな」
「「「はい！」」」
そうかー、そうなると来週からは俺達は“アトランティス”領域の攻略に集中できるな。
だけど……はは、まさかこの俺が、いつの間にかこんなに一緒に領域を攻略してくれる仲間ができるなんて、な。
「？　ヨーヘイ、どうしたノ？」
「ん？　ああいや、何というか、その……嬉しいな、と思ってさ」
そう言った後、俺は何だかむずがゆさを覚え、苦笑しながら鼻を掻いた。

「フフ、変なヨーヘイ」
「ウルセー」
はにかむサンドラに、俺はそんな憎まれ口を返すのが精一杯だった。

◇

土曜日になり、俺は先輩、サンドラ、プラーミャと一緒に“アトランティス”領域（エリア）へとやってくると。
「「ココガ……」」
サンドラとプラーミャが、この特殊な領域（エリア）を眺め、思わず声を漏らした。
「な？　ちょっと普通と違う、だろ？」
「エ、エエ……まさか、こんなに階層が広がっている領域（エリア）があるだなんテ……」
「ふふ……私も初めてここに来た時は、度肝を抜かれたぞ」
まあ、この“アトランティス”領域（エリア）は、その階層の広さが街一つ分あるからな。しかも、それが二つ。
「おっと、幽鬼（レブナント）のお出ましだ」
俺達の姿を見つけた幽鬼（レブナント）……“チャリオット”が、地響きを上げながら突進してくる。
「任せなさイ！　［ペルーン］、行きますわヨ！」

『（コクリ！）』
「フフフ……［イリヤー］、殲滅ヨ」
『……（コクリ）』

サンドラの精霊（ガイスト）、［ペルーン］はメイスを振り回しながら突撃し、プラーミャの精霊（ガイスト）、［イリヤー］がその後に続く。

「【ガーディアン】！」

［ペルーン］は前方に無数の盾を展開し、チャリオットの突進を受け止めると。

「フフフ！　【絨毯爆撃（じゅうたん）】！」

チャリオットの頭上へと飛んだ［イリヤー］が、真っ赤に燃える槍衾（やりぶすま）を叩き落した。

当然、チャリオット達はなす術もなく、全て幽子とマテリアルに姿を変える。

「アラ？　思ったよりも大したことないですわネ？」
「エエ、歯ごたえがないワ」

なんて二人は言っているが、それでもチャリオットはレベル四十五の幽鬼（レブナント）だ。まあ、それだけ二人が強いってことと、“アルカトラズ”領域（エリア）が基準になってしまっているから、だな。

「はは、これなら二人も問題なさそうだな」
「当然ですワ！」
「私（ヤー）を見くびらないデ！」

おっと、俺の言葉が二人の癇に障ったみたいだ。気をつけよう。

「ふふ、二人もこれでここのレベルも理解しただろう。さあ、一気にこの領域を攻略してやろうじゃないか！」

「「「おー！」」」

先輩の号令の下、俺達は気勢を上げて攻略に乗り出した。

だけど。

「ひ、広すぎですワ……」

「……疲れタ」

変化のない景色をかれこれ三時間以上歩き続けていることもあって、サンドラとプラーミャが疲れた表情を見せる。

「ホラホラ、まだこの階層の全体の十分の一も攻略してないんだ。頑張れ」

「「じゅ、十分の一……」」

と、発破をかけてみるものの……本音を言うと俺もかなり疲れてはいるんだけど。

そんな中。

「ハアアアアアアアアアッッッ！」

――斬ッッッ！

とまあ、先輩だけはメッチャ元気に幽鬼を狩りまくっている。あ

の人はどこまで完璧超人（ただし、水泳以外）なんだ。

『はう～……そろそろ退屈なのです……』

「なんだ、［シン］。だったら［関聖帝君］と一緒に幽鬼（レブナント）を狩ってくればいいのに」

『はう！　それでも［シン］が何かする前に、関姉さまが全部倒してしまうのです！　見ているだけになってしまうのです！』

「そ、そうか……」

ま、まあ確かに、あの様子じゃなあ……って、そういえば。

「だったらさ、今こそあのスキルを使ってみる時じゃないのか？」

『あのスキル、なのですか？』

俺の提案に、何故かコテン、と首を傾げる［シン］。いや、なんで本人が不思議がってんだよ。

「ホラ、お前には【方術】以外に特殊なスキルがあるだろ」

『！　アレなのですね！』

「そうそう！」

どうやら俺の言いたいことが分かったようで、［シン］は何度も頷い……て！？

「シ、［シン］！？」

『はう……は、恥ずかしいのですけど、シ、［シン］はマスターのためなら、何だって……できるのです……』

そう言って、［シン］は頬を赤らめながら潤んだ瞳で俺にすり寄ってきた……って！？

「……なあ［シン］、一つ尋ねるが、お前……なんのスキル使うつもりだ？」

『は、はう……［シン］にそんなことを言わせるなんて、マスターはイジワルなのです……も、もちろん【繁殖】、なのです……』

俺に抱き着いてモジモジしながら、そんなことを呟く［シン］。

それを聞いた今の俺は、顔面が真っ青になっているに違いない。

「ちょ！？　おま！？　【繁殖】じゃねーよ！　【神行法】だ【神行法】！」

『ああー！　なんだ、ソッチなのですか！』

理解した［シン］は、ポン、と手を叩いた。

そして俺の中で一つの疑問が浮かぶ。

……というか【繁殖】スキルって、ひょっとして人間と精霊（ガイスト）でもアリなのか！？

ま、まあ、深く考えないでおこう。

『はう！　では、行くのです！　【神行法・跳】！』

そう叫ぶと、［シン］は勢いよくこの階層の上空へ、まるで空中を飛び跳ねるように高く昇っていった。

もう一つのスキル（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クロケル公爵（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『はう！　では、行くのです！　【神行法・跳】！』

そう叫ぶと、［シン］は勢いよくこの階層の上空へ、まるで空中を飛び跳ねるように高く昇っていった。

「む！？」

「な、なんですノ！？」

「ッ！？　高イ！」

藤堂先輩をはじめ三人が、高く飛び上がった［シン］を見て驚きの声を上げた。

まあ、それはそうだろう。

［シン］が持つ【方術】と並ぶ特殊スキル、それがあの【神行法】だ。

【神行法】は［シン］の『敏捷』ステータスを大幅にアップすると共に、その目的や用途に応じて様々な恩恵を得られる。

で、今、俺達が見ているものはその中の一つ、【神行法・跳】。

常識外れの跳躍力と、空中での跳躍を可能とするものだ。

「オーイ、何か見つかったかー？」

俺は遥か上空でキョロキョロと辺りを見回している［シン］に向かって声を掛けると。

『階層のど真ん中に大きな穴が開いているのです！　で、その穴の

上で、領域（エリア）ボスが浮いているのです！』
「そうかー！　サンキュー！」

そしてしばらくすると、［シン］はようやく落下してきた。
というか、どれだけ高く飛んでるんだよ。

『ただいま！　なのです！』
「ああ、よくやったぞ！」

戻ってきた［シン］の頭を、俺はガシガシと撫でてやると、［シン］は嬉しそうに目を細めた。

「エエト……つまり、この階層の真ん中に領域（エリア）ボスがいるんですのネ？」
「ああ」

サンドラの問い掛けに、俺は頷いた。
といっても、その情報自体は『攻略サイト』で知っているので、俺としては目新しさはないんだけどな。

それよりも……俺は、［シン］の持つ【神行法】の可能性に胸を弾ませていた。
確かに、スキル能力や効果については知っていたが、実際に見たらこれほどだなんて思いもよらなかった。

【方術】と【神行法】、そしてあり得ない『敏捷』ステータス……
この三つがあれば……！

俺はチラリ、と先輩を見る。
先輩……俺が絶対、最悪の未来からあなたを守ってみせます……！

「む？　望月くん、どうした？」

俺が見つめていることに気づいた先輩が、不思議そうに声を掛ける。

「いえ……何でもありません」

「ふふ、そうか。その割には、何か決意めいた瞳をしていたが、な」

はは……結局バレバレですか。

俺は微笑む先輩に向かって苦笑した。

「それで［シン］、俺達が今いる場所からその中央の穴まで、どれくらいの距離があった？」

『はう！　ここから入口までの距離の二倍なのです！』

「「エエー……」」

［シン］の答えを聞き、サンドラとプラーミャが泣きそうな表情で肩を落とした。

が、頑張ろー……。

◇

「あれか……」

あの後、向かってくる幽鬼（レブナント）を倒しながら階層の中央を目指すこと五時間。

俺達は、とうとう階層の中央にある穴までたどり着いた。

「ふむ……そして、あの天使の姿をしている幽鬼（レブナント）が、ここの領域（エリア）ボス、なのだな」

先輩は不敵な笑みを浮かべながらそう呟く。

そう……先輩の言った天使の姿をした幽鬼（レブナント）こそ、この“アトランティス”領域（エリア）のボス、“クロケル公爵”。

その右手に持つ氷でできた大剣からも分かるように、クロケル公爵は氷属性の幽鬼（レブナント）だ。

そして厄介なことに、あのクロケル公爵は空中戦を得意としていて、先輩の［関聖帝君］とは相性が悪い。

［ペルーン］と［イリヤー］の魔法で遠距離攻撃を仕掛けるのも一つの方法だけど……うん、そもそも二人の精霊（ガイスト）は脳筋仕様なので、そんなに魔法の威力は高くないし、そこまで連発もきかないんだよなあ……。

ということで。

「みんな、ここは俺の［シン］がアイツと戦います。まずはあの天使の羽を何とかしますから、領域（エリア）ボスが地面に落ちた隙に、一斉攻撃で仕留めてください」

「分かった……望月くん、［シン］、気をつけるんだぞ……？」

「はい！」

『ハイなのです！』

先輩に返事をすると、俺は気合いを入れるためにパシン、と両頬を叩いた。

「さあ……行くぞ、［シン］！」

『了解なのです！　【神行法・跳】！』

その声掛けが合図となり、［シン］がクロケル公爵に向かって弾丸のように飛び出した。

『ッ！？』

『遅いのです！』

［シン］に気づいたクロケル公爵が、慌ててその氷の大剣を構えようとするが、その前に［シン］は空中を文字通り蹴り、背後に回った。

『それー！』

そしてクロケル公爵の羽に狙いを定め、呪符を何重にも貼り付けると。

『【爆】！』

『グガガガガガガッッ！？』

けたたましい爆発音と共に、クロケル公爵が穴の外へと吹き飛ばされていく。

ウーン……［シン］の奴、今回もどれだけ呪符を貼ったんだよ。

だけど。

『っ！？　大事な籠手が凍ったのです！？』

クロケル公爵も、腐っても領域（エリア）ボス。

身体までダメージは負わなかったものの、［シン］の金属の籠手を氷の剣で凍らせてしまった。

あれでは……呪符を展開できない。

「三人共スマン！　完全に無効化できなかった！」

俺は吹き飛ばされるクロケル公爵を待ち構える三人に向かって叫んだ。

本当は呪符で拘束したところを袋叩きにすればいいんだけど……完全に、俺のミスだ。

「ふふ、任せろ！」

「エエ！　叩き潰してやりますワ！」

「マア、そこで見てなさイ」

ははは、三人共本当に頼もしいな。

「［シン］、よくやったな」

『はう……最後でミスってしまったのです……』

「そんなことはないぞ？　俺達の土俵に引きずり込んだのは、間違いなく［シン］のおかげだ」

『はう！　だから大好きなのです！』

俺が頭を撫でながら褒めてやると、［シン］は嬉しそうに俺に飛びついた。

「さて……お手並み拝見……って！？」

「食らえええええええええッッッ！」

「アアアアアアアアアアッッッ！」

「【絨毯(じゅうたん)爆撃】」

先輩とサンドラの雄叫びと、冷静にスキルの名を告げるプラーミャが、クロケル公爵の防御をまるで無視してひたすら武器を叩きつ

けている。

『グ……ガ……！？』

斬り込まれ、叩きつけられ、突き貫かれ、クロケル公爵はその身体を地面に磔にされていた。

その時……クロケル公爵の身体が凍り始めていく。

「っ！　みんな！　領域（エリア）ボスは自爆するつもりだ！　離れろおおおおおお！」

「「「っ！？」」」

そう、クロケル公爵の身体が凍るのは、自爆スキルである【アブソリュート・ゼロ】。

その身体を犠牲にする代わりに、周囲のあらゆるものを氷に変える。

「先輩、プラーミャ！　ワタクシの後ろニ！　【ガーディアン】！」

サンドラが無数の盾を隙間なく展開し、クロケル公爵の【アブソリュート・ゼロ】を待ち構える。

そして。

――パキ……パキ……！

クロケルの身体の崩壊と共に、周囲を一瞬で、氷で覆った。

当然、【ガーディアン】で展開した盾も。

「っ！？　みんな！？」

俺と［シン］は、慌てて三人の元へと駆け寄る。

すると。

「フウ……」

「サンドラ！」

【ガーディアン】の盾の一つが崩れ、中からサンドラが現れた。

「むむ、寒いのはあまり好きじゃないな」

「フフ……藤堂様、それではルーシには住めませんよ？」

盾が二つ、三つと崩れ、先輩とプラーミャも無事な姿を見せてくれた。

ここでようやく、俺は胸を撫で下ろした。

クロケル公爵（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

もう一つの領域（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

もう一つの領域

「む……しかし、幽子とマテリアルが現れないぞ……？」

自爆したクロケルの身体があった場所を眺めながら、先輩が訝しげな表情を浮かべながら呟く。

「あはは……多分、倒したんじゃなくて自爆したからじゃないでしょうか？」

「むむ、残念だ……」

俺は苦笑しながらそう答えると、先輩はガッカリした表情を浮かべた。

まあ、先輩が幽子に固執する気持ちも分かる。

だって……俺が先輩の薬指にはめた、“シルウィアヌスの指輪”のせいで、吸収できる幽子量が半分以下に制限されてしまっているんだから。

「あ……き、君が気に病む必要はないんだぞ！？　こんな領域（ボス）の一体程度、この階層の幽鬼（レブナント）を根絶やしにすればおつりがくるのだし！」

先輩の言葉で俺が落ち込んだんじゃないかと勘違いした先輩は、わたわたと弁明した。

まあ、本当は落ち込んではいないんだけど、先輩のその気持ちが嬉しいから何も言わないでおこう。

それに……その問題は、この領域（エリア）を踏破すれば全て解決するから。

「それにしてモ、これで終わりなノ？　だとしたら、やけにあっけ

ないわネ……」

プラーミャはそう呟いて辺りを見回す。

まさか。二周目の領域（エリア）がこの程度で終わるわけないだろ？

――ゴゴゴゴゴ……！

「な、何ですノ！？」

突然地響きが鳴り、サンドラが驚きの声を上げた。

だけど、この地響きこそが次へと至るためのプロセスだ。

しばらくして、地響きが収まると。

「む、これは……」

「階段……ですわネ……」

穴の側面に沿うように、下へと続くらせん階段が現れた。

「この階段の下に、次の階層があるみたいネ……」

プラーミャはそう呟くが、それは正解でもあるし不正解でもある。

「とりあえず、階段を下りてみよう」

俺はそう言うと、らせん階段を下りていく。

みんなも、俺の後に続いた。

「結構深いですわネ……」

「そうだな……」

何の不思議もなく階段と疑わずに下りていく俺達。
だけど……本当は階段を下りてないんだ。

「む、出口か？」

階段の先に光が見え、先輩がそう呟いた。
そして、俺達は階段の終点へとたどり着くと。

「な、なんだこれは！？」

先輩が驚きの声を上げる。
だけど、先輩の気持ちも理解できる。

だって……俺達は階段を下りていたはずなのに、まるで昇ってきたかのように別の階層にたどり着いたんだから。

そう……これが“アトランティス”領域（エリア）の最大の特徴。
“メビウスの輪”のようにねじれた階段を通ることで、階層……いや、別の領域（エリア）に繋がるのだから。

そして、眼前に広がる赤い土と、石でできた建物が立ち並ぶこの領域（エリア）こそ、“レムリア”領域（エリア）だ。

「……あの“アルカトラズ”領域（エリア）もかなり特殊だと思ったが、この領域（エリア）も変わっているな……」
「はい……そうですね……」

すいません先輩、残り三つの領域（エリア）も、同じように変わってます……。

「それで……どうしますノ……？」

サンドラがおずおずと尋ねる。

このまま、この“レムリア”領域（エリア）を攻略するのか、それとも、引き返すのか。

「まあ、今日はここまで、かな」

レベルが低く、幽鬼（レブナント）も弱いとはいえ、“アトランティス”領域（エリア）の攻略にかなりの時間を費やしたんだ。この領域（エリア）だって同じように時間がかかることは目に見えている。

「とりあえず、次は来週にでも来て攻略の続きをしよう。特に、プラーミャ」

「私（ヤー）？」

俺が名前を告げると、プラーミャはキョトン、とした。

「見る限り、ここの幽鬼（レブナント）は火属性みたいだ。となると、【火属性無効】を持つプラーミャの独壇場だ」

「マ、マア確かニ」

俺がこの階層を闊歩する幽鬼（レブナント）を指差しながらそう告げると、プラーミャが頷く。

「だから、さ。頼んだぞ！」

「ッ！　わ、分かってるわヨ！」

はは、プラーミャの奴、頼りにされて照れてやがる。

まあでも、実際にここの攻略にはプラーミャは欠かせない。

後は……できれば立花や加隈も一緒に来られると、ここの攻略が圧倒的に楽になるんだけどなあ……。

なにせ、“アトランティス”領域（エリア）はこの領域（エリア）に繋がる穴を目指せばいいだけだから、ある意味一直線だったけど、ここの領域（エリア）ボスを出現させるには、この領域（エリア）の端から端まで行かないといけない。

だからこそ、手分けして攻略したほうが効率的なんだよなあ。

「ふふ……ならば、彼等には“グラハム塔”領域（エリア）をぜひとも踏破してもらわんとな」

「先輩……」

はは、さすが先輩だ。俺の考えなんてお見通しか。

「エー……その時は、絶対にアオイと同じチームにしないでヨ！」

ここで、察したプラーミャがそんな要求をしてきた。

「なんだ、立花のこと嫌いか？」

「そうじゃなくテ！　……だって彼、アナタと一緒じゃなかったらその時点で不機嫌になるシ」

「はは……」

プラーミャの言葉に、思わず乾いた笑みを浮かべる。

本当に、俺に依存するのはやめてほしいよなあ……。

「……分かった、善処するよ」

そうして今日の探索を終え、俺達は元の世界へと帰った。

もう一つの領域（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

立花と過ごす休日（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

立花と過ごす休日

「くあ……」

日曜日の朝、俺はいつもの時間に目を覚ます。
というか、今日は立花の奴と遊びに行く約束をしてるんだけど……うん、つい先輩やサンドラと会う時の癖で、約束の時間の一時間以上前に待ち合わせ場所に行く前提で起きてしまった……。

『すぴー……すぴー……』

そして、［シン］の奴は今朝も気持ちよさそうに寝てやがる。

「おーい［シン］、朝だぞー」

俺は［シン］の身体を揺すって起こそうとすると。

――かぷ。

「痛たたたたたたたたたたたっ！？」

チクショウ！　［シン］の奴、俺の手を噛みやがった！？

『ムフフー、このアイスは固いのです……』
「バカヤロウ！　いい加減目を覚ませ！　お前がかじってるのはアイスじゃなくて俺の手！」
『はぐはぐ……って、あれ？　マスター？』
「うう……！」

ようやく起きた［シン］は、ボーっとしながら俺を見ている。
と、とりあえず手は解放されたけど……うう、歯型がバッチリついてやがる……。

『マスター……おはようなのです……ふみゅ……』
「ああコラ！　いい加減起きろ！」

俺は二度寝しそうになった［シン］を無理やり起こした。

『マスター……今日は日曜日なのですよ……？　［シン］にだって寝る権利はあるのです……』

マスターに対して権利を主張する精霊（ガイスト）って一体……。

「ま、まあいいや……ホラホラ、今日は立花の奴と遊びに行くんだから、ちゃんと起きろ」
『むー……立花アオイ、許すまじなのです……！』

どうやら眠りを邪魔された［シン］の怒りは相当なものらしい。
普段なら愛称で呼ぶ［シン］が、フルネームで呼び捨てにするんだからな。

まあ、そんな［シン］は、ルフランのジェラートで手を打ったらすぐに機嫌が直ったけど。

◇

「あ！　望月くん！」

家を出て待ち合わせ場所の駅前に来ると、既に立花の奴は来ていた。
だけど、まだ約束の時間より三十分も早いぞ？
「おう……な、なあ、立花はいつから来てたんだ？」
「え、えへへ……実は一時間前から……」
立花ははにかみながら頭を掻くけど……立花よ、お前も先輩やサンドラと一緒か。
そして、立花のファッションセンスは……どうなんだ？
いや、白シャツにデニムジーンズだから、別におかしなところはないんだけど……何というか、その、こういった服装の女子って、いるよな……。
「望月くん？」
「はえ！？　あ、い、いや、何でもない……」
「？」
危ない……思わず立花のことをジッと見てた……。
「そ、それより、早速ゲーセンにでも行く？」
「うん！」
というわけで、俺は気を取り直して立花と一緒に駅前のゲーセンに入る。
「立花―、お前はどのゲームすんの？」
「ボク？　ボクはコレかな」
そう言って指差したのは、いわゆる音ゲーで、画面表示に合わせ

て六つのパネルを叩くゲームだった。

「いくよー！」

可愛くガッツポーズをした後、立花は音楽に合わせてリズミカルに、そしてテンポよくパネルを叩く。

「よ！　ほ！」

そして。

「……パーフェクトかよ」

「えへへー！　やったね！」

そう言って、立花はハイタッチを要求するので、俺も両手を上げると、ぴょん、と飛び上がって立花はタッチした。

「なあ……ひょっとして、立花ってゲーム得意？」

「え？　えへへ、実は……」

俺の質問に、照れくさそうに答える立花。その仕草は、まさに女子のソレだった。

その証拠に見ろ、周りの男連中が、立花に見とれてやがる。

「じゃあ、次は望月くんの番！　カッコイイところ、見せてよね！」

「お、おう……」

妙にテンションの高い立花に促され、俺も音ゲーにチャレンジするけど……。

「あ！　クソ！」
「望月くん頑張れー！」

当然だけど、俺は立花みたいに上手くプレイできず、まあ、人並みの結果に終わった。

「いやあ、難しいな、コレ」
「えへへ、そんなことないよ。望月くん、その……カ、カッコよかったよ？」

オイオイ！？　お前が俺のカッコよさを求めてどうするんだよ！？しかも、顔を赤らめながら上目遣いでそんなこと言うなよ！？

とまあ、そんな感じで俺はある意味ドキドキしながら立花とゲーセンで遊んだ。

◇

「えへへ、楽しかったね！」
「お、おう……」
『んふふー！　ウマウマなのです！』

ゲーセンを出た俺達は、ルフランに来てお茶を飲んでいた。
で、当然［シン］はジェラートを食べてご満悦である。

「いや、立花がそんなにゲーム上手いなんてなあ……」
「えへへ……ま、まあ、前の学校にいた時は、毎日行ってたからねー」

そう言って、立花は苦笑した。

「そういえば、立花って前の学校ではどんなだったんだ？　ホラ、コッチには精霊（ガイスト）が発現して転校してきたんだろ？」

俺は立花の言葉が気になり、ついそんなことを聞いてみた。

『攻略サイト』にも特に主人公の転校前のエピソードとか載ってなかったし、意外と謎だらけなんだよなー。まあ、所詮ゲームだし、シナリオライターが手を抜いたのかもしれないけど。

すると。

「あ……うん……」

立花は、気まずそうに目を逸らした。

ああー……コレ、ひょっとしたら聞いちゃいけなかった系かあ……。

「は、はは、そういやお前も知ってると思うけど、俺って入学したての頃は、クソザコモブなんて呼ばれてたんだぜ！　な、なあ［シン］！」

『ハイなのです！　みんな、［シン］のことをゴブリン呼ばわりなのです！　［シン］には、［ゴブ美］っていう可愛い名前があるのにです！』

俺は話題を逸らすために話を振ったのに、［シン］の奴、あの時の怒りが再燃してしまったみたいで、スプーンをブンブンと振り回していた。

結局、気まずい雰囲気のまま、俺達はしばらくの間ルフランで過ごした。

ううう……失敗したなあ……。

◇

「えへへ、今日は楽しかったね！」

ルフランを出てからも、俺達は本屋に行ったり、またゲーセンに行ったりとダラダラ過ごしていると、既に夕方の六時前になっていた。

「おう、また遊ぼうな」

「うん！　そ、その……」

すると、立花の奴が急にモジモジし始めた。

「ん？　どうした？」

「ええと……ルフランでの話……」

「ああー……その、悪かったな……」

俺が不用意に立花に聞いた件な。まあ、人には言いたくないことや聞かれたくないことだってあるし、あれは完全に俺の失敗だった。

「う、ううん！　そうじゃなくて、その……望月くんがバカにされてたって話……」

「ソッチか！」

予想外の返しに、俺はついツッコんでしまった。

いや、今となっては懐かしい話だし、俺としてはもう何とも思っちゃいない……［シン］の奴は別だけど。

「そ、それで……ボ、ボク達って一緒だよね？　本当の友達、だよね？」

「お、おう！　当然だろ！」

おずおずと尋ねる立花に、俺はとりあえず強く返事した。

だけど、さっきから立花が何を言いたいのかサッパリ分からない。

「えへへ……うん、やっぱり望月くん、大好きだなあ……（ボソッ）」

「ん？　何か言ったか？」

「ううん、何にも！」

そう言って最高にはにかんだ立花は。

「それじゃ！　また明日！」

「お。おう……またな」

手を振りながら、家に帰って行った。

「……ハア」

本当は最後の呟きもバッチリ聞こえてた俺は、ただただ深い溜息を吐いた。

立花と過ごす休日（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

連携、崩壊（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

連携、崩壊

立花と遊んだ日曜日から五日後の金曜日。
今日、プラーミャと立花、加隈が“グラハム塔”領域（エリア）の踏破を目指す。

「ふふ、三人とも準備はいいか？」
「「はい！」」
「ハイ（ダー）！」

まあ、立花も加隈も“グラハム塔”領域（エリア）の踏破の目安となるレベル三十を超えたし、プラーミャに関しては“アルカトラズ領域（エリア）や”アトランティス“領域（エリア）に一緒に攻略に行けるほどの実力もレベルもある……って、そういえば。

「プラーミャ、お前はクラスチェンジしないのか？」
「？　精霊（ガイスト）ノ？」
「そう」

だって、［イリヤー］のレベルはとっくに四十を超えてるし、闇落ちイベントも終わったから、既にクラスチェンジのための条件はクリアしているはずだからな。

「それガ……まだ私（ヤー）はクラスチェンジの条件を満たしていないみたいなノ」
「ええ！？　そうなの！？」

プラーミャから返ってきた意外な答えに、俺は思わず驚きの声を

上げた。
いや、だって、主要キャラのクラスチェンジの条件は、みんな同じはずだろ？
アレか？　プラーミャは主要キャラじゃないから、条件が違うのか？
「マア、レベルも四十以上あるし、そのうち条件クリアするでショ」
どうやらさほど気にしていないプラーミャは、のんきにそう言った。
ま、まあ、ちょっと俺も家に帰ったら、『攻略サイト』で調べてみるか……。
「さあ！　行って来い！」
「プラーミャ！　頑張っテ！」
「立花も加隈も無理するなよー！」
俺、先輩、サンドラは、“グラハム塔”領域（エリア）の扉をくぐる三人の背中に向け、激励を送った。
「さて……彼等が踏破して戻ってくるまで、早くて三時間というところか」
「ですねー……」
先輩の言葉に、俺は気の抜けた返事を返す。
三時間かあ……暇だなー……って。
「？　サンドラ？」
見ると、サンドラがコソコソと領域（エリア）の扉へと近づいてる……。

「む……サンドラ、気になるのは分かるが、あとは三人に任せるんだ」
「そ、そうですけド……」
先輩にたしなめられ、サンドラがすごすごとこちらに戻って来る。
でも、確かにサンドラの気持ちはよく分かる。だって、ここに至るまで色々やらかした問題児だからな。しかも三人共。
アレ？　俺も不安でしょうがなくなってきたぞ？
「せ、先輩、ちょっと俺、様子見てきていいですか？」
「むむ、君までそんなことを言うのか」
先輩にちょっとすごまれ、俺は思わず腰が引ける。
というか先輩、ひょっとして【威圧】スキル使ってます？
「で、ですけど、あの三人のこれまでの行動を思い返してみてくださいよ。最近は連携が取れるようになったとはいえ、その前を知ってますから……」
「むむむむ……！」
そう言うと、先輩も思うところがあるのか、腕組みをして唸り声を上げた。ですよね？
「……仕方ない。コッソリと後をつけるぞ」
「「！　はい！」」
眉根を寄せながら渋々了承した先輩に、俺とサンドラは嬉しそうに返事した。
そして先輩も、結局一緒に行くんですね。

ということで、俺達も“グラハム塔”領域（エリア）の扉をくぐり、中に入る。

「さて……彼等はどこまで行っただろうか」

「そうですねー、あれからまだ三十分くらいしか経ってませんし、精々第十階層辺りにいそうですね」

「そうですわネ」

俺達は幽鬼（レブナント）を倒しながら、領域（エリア）内を進んで行くと。

「あ、いました」

ちょうど第十五階層に来たところで、幽鬼（レブナント）を一方的に蹂躙（じゅうりん）するプラーミャの姿が見えた。

で、立花と加隈はというと……立花は興味なしといった様子で、全然違う方向を向いてるし、加隈は加隈で、プラーミャの圧倒的な姿に若干引いてるみたいだな。

「これ……チームとして成立してないじゃん……」

「ですわネ……」

多分、この時の俺とサンドラはものすごく呆れた表情を浮かべてたと思う。

というか、ここ最近のあの連携はなんだったんだよ!?

「ま、まあ、まだ領域（エリア）の四分の一しか来ていないのだ。この後、三人の連携もいつも通りよくなるはずだ……多分」

先輩、語尾に余計な単語がついてますよ。

とにかく、三人に口を出すわけにもいかないので、俺達はそのまま静かに見守っていた。

◇

「……もうイヤだ」

俺は両手で顔を覆い、思わず涙ぐむ。

いや、だって、あれからプラーミャ達の人間関係は一切改善されないまま、とうとう第五十九階層まで来ちまったんだぞ！？　普通、少しは友情が芽生えたりとか色々あるだろ！　『ガイスト×レブナント』はジュブナイル学園ファンタジーＲＰＧじゃないのかよ！

「も、望月くん、そのー……まあ、気を落とすな」

「うう……先輩……！」

先輩はただ、俺の肩を優しく叩いた。

そのせいで俺の涙腺は決壊寸前だ。

「プラーミャ……まさかここまでコミュ力が欠如しているなんテ……」

サンドラもサンドラで、愕然とした表情を浮かべている。その気持ち、よく分かる。

そんな中。

「何してんだよ！　こんな調子で領域（エリア）ボスが倒せんのかよ！」

ただ一人、加隈が気勢を上げて二人を叱咤（しった）する。

加隈よ……お前、立派になったなあ……なのに！

「そんなノ、私（ヤー）一人で充分に決まってるじゃなイ」

「キミには無理だね」

チクショウ！　お前等空気読めよ！　歩み寄ってやれよ！

「モウヤダ……」

見ろ！　とうとう加隈の奴がいじけちまったじゃねーか！

そんな三人は、俺達に見守られながら、最後の第六十階層へと階段を昇って行った。

連携、崩壊（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

及第点以下（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

及第点以下

「望月くん、サンドラ……もう、ここまで来たんだ。最後まで見届けよう……」

藤堂先輩が、うなだれる俺とサンドラに優しく話しかける。

そうだ、な……もう、これでラストだもんな……。

「……はい」

俺は心を奮い立たせ、無理やり顔を上げた。

「サンドラ……」

「エエ……そうですわネ……」

ポン、とサンドラの肩を叩くと、サンドラも顔を上げ、第六十階層へと続く階段を見据えた。

「さあ、行こう」

「「はい」」

俺達は、階段を昇り、第六十階層へとたどり着く。

すると。

「フフフ……この私（ヤー）が、アナタを殲滅してあげル！」

「この領域（エリア）ボスを倒して、望月くんの元に帰るんだ！」

「チクショウ！　もうどうにでもなれ！」

プラーミャは爛爛（らんらん）とした琥珀色の瞳で領域（エリア）ボスを見つめ、立花はまさに主人公みたいな台詞（セリフ）を吐く。いや、俺の元に帰ってくるなよ。

そして加隈は、もう二人との関係構築を諦め、震える身体を奮い立たせていた。うん、可哀想。

だけど。

「……あの領域（エリア）に一緒に来てもらえたら、なんて思ってたけど、この様子じゃ無理だなあ……」

「うむ……そうだな……」

俺の言葉に、先輩が完全同意してくれた。

ハア……プラーミャはいいとして、あのだだっ広い領域（エリア）を、俺達だけで挑むのかあ……それだと、踏破までの日数はさらにかかりそうだ。

でも、少なくともアイツ等全員を連れて行くよりはマシだ。

特に立花……アイツ、なんであそこまで協調性がないんだよ。

全く、俺の指示には素直に従うのになあ……。

「食らいなさイ！　【絨毯（じゅうたん）爆撃】！」

「これで終わりだ！　【竜の息吹】！」

プラーミャと立花が、領域（エリア）ボスのタロースを挟み込むようにして攻撃を仕掛ける。

だけど。

「っ！？　加隈！？」

マズイ！？　あれじゃ、［トリックスター］が立花の【竜の息吹】の射線に入ってしまってるぞ！？
立花は……アイツ、気づいていない！？
俺はなりふり構わず、三人と領域（エリア）ボスとの戦いに乱入しようとして……っ！？

「先輩！？」
「まあ待て、よく見てみるんだ」

先輩に止められて振り返ると、何故か先輩は口の端を持ち上げていた。
一体どういうことだ！？　今まさに、加隈が危ない目に遭おうとしてるのに……！

俺はもう一度加隈を見ると……あ。

加隈の［トリックスター］は、突然その姿を消し、いつの間にかプラーミャの背後にいた。
あれは……アイツのスキル、【バニッシュ】か！

そして、［イリヤー］の【絨毯（じゅうたん）爆撃】と［ジークフリート］の【竜の息吹】が、同時にタロースへと襲い掛かる。

『ッ！？　グガガガゲゲゲッ！？』

タロースは断末魔の叫び声を上げ、その身体を幽子とマテリアルに変えた。

「……望月くん、行こう」

「はい……」

先輩に促され、俺達は三人に気づかれないように領域（エリア）を後にした。

だけど……今回のあの三人の踏破は、とても及第点と言えるものじゃない。それは先輩も当然分かっていて。

「……っ！」

先輩は眉を寄せながら、ギリ、と歯噛みしていた。

◇

「望月くん！　ボク、“グラハム塔　”領域（エリア）を踏破したよ！」

三人は扉から出てくると、先に領域（エリア）を出て待ち構えていた俺達に駆け寄ってきた。

「ああ……確かに三人は領域（エリア）を踏破した」

「えへへ！　そう……っ！？」

俺の……いや、俺達の様子がおかしいことに気がついた立花は、嬉しそうな様子から一転、不安そうな表情を浮かべた。

「三人共、はっきり言おう。確かに踏破はしたが、これでは及第点はやれん」

「「「っ！？」」」

先輩の辛辣な一言に、三人が一斉に息を飲む。

「ど、どうしてですか！　ボクは、領域（エリア）ボスも倒したんですよ！

なのに！」
「それだ。そもそも、私は三人で踏破するように指示したはずだ。今の立花くんの言葉が、全てを物語っている」
「……っ！」

先輩に指摘され、立花は唇を噛む。

「かろうじて、プラーミャと加隈くんはその点に関して及第点と言えるが、それでもチームとして動いている以上、連帯責任だからな」
「っ！　そんなのおかしい！　この二人だって、好き勝手にやってたんだ！　なのにボクだけ……！」
「いや、先輩の言う通りだぞ」
「望月くんまで！？」

俺が先輩の説明に同意したのが意外だったのか、立花は目を見開いて俺を見た。

「実は、俺達は三人の後をつけて陰で様子を見ていたんだ。確かにプラーミャは独断専行が過ぎるきらいはある」
「ほら！　やっぱりそう……「だけど」」

俺は嬉しそうに相槌を打とうとした立花の言葉を遮る。

「それでも、プラーミャが攻撃を仕掛ける時は二人が射線に入らないようにしていたし、幽鬼（レブナント）が二人に攻撃しそうな時は、先手を打つかわざと自分にヘイトを集めるようにしていた」
「……」
「加隈だってそうだ。道中、常に声を出してチームを鼓舞していたし、なんだかんだで二人のサポート役に徹している部分もあった」
「だけど！　彼は全く役に立って……「それ以上に」」

叫ぶ立花の言葉を、俺はもう一度遮った。
大切なことを伝えるために……俺はあえて辛辣な言葉を告げよう。

「立花、お前は一番やっちゃいけないことをした。あろうことか、お前は領域（エリア）ボスを倒すことに夢中で、【竜の息吹】の射線に加隈の［トリックスター］がいることに気づいていなかった」

「あ……」

「あの時は、加隈が【バニッシュ】でプラーミャの後ろに移動していたから事なきを得たけど、一歩間違っていたら、加隈は大怪我をしていた」

ここまで言えば、立花だって分かるだろう。
いかに、自分が危険な行為をしていたか……先輩が及第点以下だと言った意味が。

「……ねえ、望月くん。ボク達って、一緒だよね……？　本当の友達、だよね……？」

「お、おお」

立花が急に思いつめたような表情でそう尋ねるので、俺は少し面喰らいつつも首肯した。

「あは……よかった」

「立花？　お、おいっ！？」

立花は寂しそうに微笑むと、この場を立ち去っていく。
俺はそんな立花を引き留めようとすると。

――ポン。

「っ！　先輩？」
「……彼にも落ち着いて考える時間も必要だろう」
「だけど……俺、アイツにキツいこと言ったから……」
「いや、君はとても大切なことを言ったんだ。だから、気に病む必要はない」

そう言うと、先輩はニコリ、と微笑んだ。

「あとは……彼自身が気づいてくれるのを待とう」
「……はい」

俺はそう返事すると、遠ざかる立花の背中を眺めた。

及第点以下（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

領域ボスの出現条件（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

領域ボスの出現条件

プラーミャ達が“グラハム塔”領域（エリア）を攻略してから、一週間が経った。

「よう、立花」

「あ……うん……」

朝の教室にやって来た立花に挨拶すると、よそよそしい態度を見せては、俺から離れるように自分の席に着いた。

とまあこんな感じで、俺と立花は今ではほとんど会話がなくなってしまった。それまでは、あんなにべったりとくっついて来ていたのに、だ。

まあ、一抹の寂しさはあるものの、そもそも男にくっつかれても俺的に需要はないので別にいいんだけど。

その代わり。

「オッス！　望月！」

「帰れ」

「なんでだよ！？」

とまあこんな感じで、朝とか休み時間になるたびに、加隈の奴がうちのクラスにやってくるようになった。正直鬱陶（うっとう）しい。

……まあ、俺の代わりにクソザコモブ設定にさせられたからって考えたら、あんまり無下にもできないんだけど。

「それで、こんな朝っぱらコッチに来てどうしたんだ？」

「おお！　それそれ！　いや、一応俺も“グラハム塔”領域（エリア）を踏破しただろ？　だから、そろそろ次に進んだほうがいいんじゃないかと思ってな！」

？　コイツの言ってる意味が良く分からん。

「なんだよ、その次っていうのは」

「だからよ！　今度は“カタコンベ”領域（エリア）を攻略するのがいいんじゃねーかと思ってさ！　お前を誘いに来たんだよ！」

「断る」

「なんでだよ！？」

当たり前だろ。俺は今、“アトランティス”領域（エリア）……いや、“レムリア”領域（エリア）の攻略で忙しいんだ。

オマケに、立花を筆頭に“グラハム塔”領域（エリア）でやらかしたせいで、あてにしてたお前達との共同での攻略が叶わなくなったんだぞ？　あのだだっ広い領域（エリア）の攻略がどれだけ大変だと思ってんだよ。

「とにかく！　“カタコンベ”領域（エリア）の攻略は当分しない！　オーケー？」

「チクショウ……せっかくやる気出したのによー……」

「だったら、“グラハム塔”領域（エリア）でもっとレベル上げろ。せめて、レベルが四十以上になったら考えてやる」

「ホントか！」

条件を出してやると、加隈が嬉しそうな表情を浮かべた。

というか、どんだけ俺達と一緒に“カタコンベ”領域（エリア）に行きたいんだよ。

――キーンコーン。

「ホラ、朝のチャイムが鳴ったぞ。はよ帰れ」
「お、おう！　んじゃ、絶対だからな！」
そう言って、加隈はゴキゲンで自分の教室に帰って行った。
「ふう……」
まあでも、アイツがレベル四十になれば、最低限“レムリア”領域を一緒に攻略できるようになるからな。
「フフ……素直じゃありませんわネ」
「うあ！？　……って、サンドラ、聞いてたのかよ」
いつの間にか、俺の後ろに笑顔のサンドラがいた。
「エエ。といっても、あとは彼次第でしょうけド」
「まあな」
そう言って、俺とサンドラは微笑み合った。
◇
「アー！　モウ！　この領域、なんでこんなに広いのヨ！」
放課後、俺達はいつものように“レムリア”領域に来ているわけだけど、一向に攻略が終わらない状況に、とうとうプラーミャがキレた。
「落ち着け、プラーミャ。それでも少しずつではあるが、前に進ん

ではいるのだ」
「アウウ……」
藤堂先輩にたしなめられ、プラーミャは押し黙った。
「デモ……プラーミャの言う通り、このままではいつまでたっても踏破できませんワ……」
「まあな……」
サンドラの言葉にも一理ある。
この“レムリア”領域（エリア）、“アトランティス”領域（エリア）と同じく広大であるばかりか、無数に建物があるせいで思うように進めない上に、領域（エリア）ボスの出現条件が特殊なのだ。
というのも、ここの領域（エリア）ボス、“ベレヌス”は、領域（エリア）内に点在する塔から四つの鍵を入手すると、鍵が自動的に中央の階段付近にあるみすぼらしい建物に飛んでいって扉を解錠するらしい。
そして、ベレヌスはそれによって初めてその姿を現す。
一応、『攻略サイト』によれば、チームを二手に分けるイベントが発生して、その四つの鍵のうち二つを取りに行くことになるらしいんだけど……うん、俺達はこの四人しかいないからチーム分けなんて無理。
「……とりあえず、あの塔を攻略して今日は終わりにしよう」
「うむ……そうだな」
先輩が頷き、俺の言葉に同意を示す。
「だけド、あの塔……また、あの幽鬼（レブナント）が出てくるのかしラ……」
「そうだろうな」

サンドラの言う幽鬼（レブナント）というのは、四つの鍵をそれぞれ守護する塔の番人のようなものだ。

俺達は、既に一つ目の塔の幽鬼（レブナント）、“ミソロジカル”を倒し、鍵を一つ手に入れている。

ということで、二つ目の塔にたどり着いた俺達は、早速中へと入る。

すると、塔の遥か上の天井から一筋の光が中央の台座を照らしていた。

それこそ、俺達が求める二つ目の鍵だった。

「ふふ、ということは……」

「ええ……来ます！」

上から、金属の歯車をくわえた巨大なカラスが舞い降りてきた。

これこそ、二つ目の鍵を守護する幽鬼（レブナント）、“アレスター”だ。

「［シン］！」

『ハイなのです！』

俺の合図とともに、誰よりも早く［シン］が飛び出すと、アレスターに肉薄する。

それを見たアレスターは、羽ばたいて高く昇っていく。

「［シン］！　奴は急降下して一気に攻撃を仕掛ける気だ！」

『大丈夫なのです！　そんなこと、させないのです！　【神行法・跳】！』

そう言うと、［シン］は地面を大きく蹴り、逃がさないとばかりにアレスターを追い詰めていく。

そして。

『とらえたのです！　【縛】！』

アレスターの翼に呪符を二枚、素早く貼り付けると、アレスターは身動きが取れずそのまま落下してくる。

「みんな！」

「任せろ！　［関聖帝君］！」

『（コクリ！）』

俺の言葉にいち早く反応した先輩の［関聖帝君］は、青龍偃月刀（えんげつ）を下段に構えた。

「食らえええええええええええええッッッ！」

『ッ！？』

［関聖帝君］はその青龍偃月刀を真上へとかち上げ、【一刀両断】によってアレスターの胴体を真っ二つにした。

アレスターは、断末魔の叫びすら上げる暇もないまま、幽子とマテリアルへとその姿を変えた。

「フン！」

先輩は鼻を鳴らしてついさっきまでアレスターだったマテリアルを一瞥する。

「先輩、お見事です」
「ふふ、何を言う。その前に［シン］が幽鬼（レブナント）の動きを止めていたからだ。それより」
「先輩！　バッチリ手に入れましたわヨ！」
いつの間にか台座にいるサンドラが、二つ目の鍵を嬉しそうに掲げた。
「これで二つ目、かあ……」
そう呟くと、俺はまだ半分でしかない事実に、つい肩を落とした。

領域ボスの出現条件（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

呼び出し（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

呼び出し

「あー……疲れたー……」

家に帰って風呂に入った後、俺はベッドの上に寝転がる。

いや、とりあえず二つ目の鍵はゲットできたけど、あと半分もあるんだぞ！？

ここまで来るだけでも相当大変なのに、さらに二つの塔を俺達だけで攻略って……うん、心が折れる。

『んふふー、ウマウマなのです！』

「ハア……［シン］は幸せそうでいいよなあ……」

嬉しそうにアイスを頬張る［シン］を眺めながら、俺は思わず苦笑した。

その時。

――ピリリリリ。

「ん？　電話？」

俺は傍にあったスマホを手に取ると……掛けてきたのは、立花だった。

「もしもし」

『あ……望月、くん……』

スマホの向こうで、立花は遠慮がちに俺の名を呼んだ。

「よう、電話してくるなんて珍しいな、どうした？」

『う、うん……』

俺はできる限り普通を装って尋ねると、立花が口ごもる。

そして、本音を言えば何を話していいのか分からない自分がいるわけで。

藤堂先輩が言ってくれたように、あの時の俺の立花への指摘に後悔はない。とはいえ、だからといって立花に対して気まずい思いがないわけじゃないからな……。

『あ、あのっ！』

「お、おう……」

『明日……の、放課後……“グラハム塔　”領域（エリア）の第六十階層……タロースのいるところに、来て欲しいんだ……キミ、一人で』

「タロースの？　また何で？」

『来てくれれば分かるから……それじゃ、待ってるね……』

「あ！　お、おい！？」

――プツ、ツー……ツー……。

立花は、それだけを言い残して通話を切りやがった。

「立花……」

俺はアイツの名前をポツリ、と呟く。

“グラハム塔　”領域（エリア）の第六十階層、そんなところで待ち合わせって……アレ？

この時、俺は違和感に気づく。

「アイツ、そんなところまでどうやって行くつもりなんだ……？」

俺や先輩、サンドラならともかく、立花の奴にソロでそこまでたどり着く実力があるわけじゃない。

そもそも俺の記憶では、立花の［ジークフリート］のレベルは“グラハム塔”領域（エリア）到達時点で三十二。クラスチェンジもしていないんだから、そんなことは到底無理だ。

それに、あれからまだ一週間そこそこしか経っていないし、劇的にレベルが上がってるとも思えない。

「……まあ、明日行ってみたら分かるか」

うん……まずは明日の放課後、第六十階層に行ってみよう。

ただ。

「悪い。チョットだけ約束、破らせてもらうぞ」

そう呟くと、俺はスマホを手に取った。

◇

――今日一日の授業終了を告げるチャイムが鳴り、クラスメイト達が帰り支度を始める。

で、俺はチラリ、と隣を見やると。

「何？」

「う……い、いや、何でもない……」

プラーミャにギロリ、と睨まれ、俺は慌てて前に向き直った。
いや、俺としてはプラーミャを見るつもりはなかったんだけど。
それよりも。
「立花の奴……結局来なかったな……」
とはいえ、昨日の夜、アイツは電話で確かに言った。
『明日……の、放課後……“グラハム塔”領域（エリア）の第六十階層……タロースのいるところに、来て欲しいんだ……キミ、一人で』
と。
となると立花の奴、実は既に第六十階層にいて、俺が来るのを待ってたりして。
「とと、こうしちゃいられない」
俺は教科書やノートをヒューズボックスに放り込むと。
「んじゃサンドラ、またな」
「エエ。またネ、ヨーヘイ」
サンドラと挨拶を交わすと、俺は一人、“グラハム塔”領域（エリア）へと向かう。
そして。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩く。

「さあて、行くか！　［シン］！」

『ハイなのです！』

俺は［シン］とハイタッチを交わすと、“グラハム塔”領域（エリア）をくぐった。

「いやあ、この領域（エリア）に来るの、何回目だよ」

『本当なのです。いい加減飽きたのです』

「だよなあ」

俺と［シン］は、邪魔をする幽鬼（レブナント）を倒しながら、順調に階層を進んで行く。

はは。つい数か月前は、この領域（エリア）の十二階層で、死ぬような思いしてたんだよなあ……。

それが今では……。

『？　マスター、どうしたのです？』

「ん？　いや……俺達、強くなったと思ってな……」

『ハイなのです！　［シン］はつよつよなのです！』

そう言うと、［シン］はムン、と力こぶを作る仕草を見せた。

「はは、でも……俺達は、もっと強くなろう。誰にも負けないくらい、強く」

『マスターは貪欲なのです！　最強厨なのです！』

「どこでそんな言葉覚えたんだよ……」

［シン］の言葉に、俺は思わずガックリと肩を落とす。

いや、俺の精霊（ガイスト）がどんどん俗物化していってる気がするんだけど。

「ま、まあいいか……」

俺は頭を掻（か）きながら、さらに上の階層を目指す……と？

『えへへ……［シン］、絶対に強くなるです。マスターと一緒に』

「［シン］……ああ、そうだな……」

俺は［シン］の頭を優しく撫でると、［シン］は嬉しそうにはにかんだ。

［シン］、ありがとう……。

そして、俺達が“グラハム塔”領域（エリア）に入ってから二時間。

とうとう第六十階層にたどり着く。

そこには。

「望月くん……待ってたよ……」

「立花……」

タロースの変わり果てた姿……大量のマテリアルを踏みつける、

立花の姿があった。

呼び出し（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お前とは、違う（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お前とは、違う

「望月くん……待ってたよ……」
「立花……」

第六十階層にたどり着くと、タロースの変わり果てた姿……大量のマテリアルを踏みつける、立花の姿があった。

「えへへ……ボク、この第六十階層まで、ソロで来れたんだよ？」
「お、おお……どうやらそうみたいだな……」

嬉しそうにはみかむ立花とは対照的に、俺は思わず顔を引きつらせた。

だけど、それも仕方ない。だって……立花はマテリアルを嬉しそうに何度も踏みつけてるんだから。

というか。

「立花。マテリアルは売れば結構なお金になるんだぞ？　そんなことしたら、もったいないじゃないか」
「あは、大丈夫だよ。だってボク、タロースはもう十体くらいは倒したから、マテリアルは余ってるんだ。今なら、一年中ゲーセンでキミと一緒にゲームをしてもお釣りがくるくらい」
「いや、一年もゲーセンに入り浸るって、どんな暇人だよ」

などと、皮肉を込めてそう言うと。

「えへへ……ボク、かなあ……」

立花は、頬を掻(か)きながら苦笑した。

「オイオイ、冗談はよせよ。学園に来て勉強して、俺達と一緒に領域(エリア)に入ってるのに、どこに年中ゲーセン行く暇があるんだよ」

俺は肩を竦めて立花の言葉を否定する。

……本当は、俺もなんとなく分かってはいる、けど。

「……ボク、ね……この学園に来る前、ずっと引きこもり、してたんだ……」

立花は寂しそうに笑いながら、訥々(とつとつ)と語り始めた。

学園に転校してくる前……つまり、精霊(ガイスト)が発現する前の立花は、引きこもりだったこと。

それは、立花の容姿や態度から、いつも女扱いをされてイジメを受けていたことが原因であること。中には、立花が男だってことを知った上で、罰ゲームとして立花に嘘告するのが流行ったりしたらしい。

「……でも、アイツ等、ボクに精霊(ガイスト)が発現したのを知った途端、態度を急に変えてきたよ。まるで、今までのことがなかったことになって、ボクをやたらチヤホヤするようになって……！」

そう言うと、立花はギリ、と歯噛みした。

でも、立花の気持ちも少し理解できる。

俺も、精霊(ガイスト)が発現した時は、当時のクラスの連中が俺をもてはやしたことを覚えてる、

で、調子に乗ってた俺だけど、学園に来て鼻っ柱を折られて、馬

鹿にされて、蔑まれて……。

「あはは、だからね？　ボクはアイツ等にちゃんと分からせてやったよ？　『ボクを今まで馬鹿にしてきたくせに、ただで済むと思ってるの？』って」

……それって。

「……つまりお前は、精霊（ガイスト）を使って、ソイツ等を痛めつけたってこと、か……？」

「あはは！　当然だよ！　だって、アイツ等のせいでボクに居場所なんてなかった！　学校にも！　家にも！　自分の部屋と、ゲーセンだけがボクに残された居場所だったんだ！」

そう言うと、立花の奴はニタア、と口の端を吊り上げた。

「望月くん……キミだって、ボクと一緒だよね……？」

「……」

「だって、キミも前のクラスで精霊（ガイスト）を“ゴブリン”だって馬鹿にされて、蔑まれて、居場所を失くしたんでしょ？　しかも、あの加隈くんのせいで」

ふうん……よく知ってるじゃん。

というか、立花に余計なこと教えた奴は誰だよ。むしろソイツを問い詰めたい。

だけど、コイツは少し思い違いをしてるな。

少なくとも、俺と立花は一緒じゃない。

「……悪いけど、俺とお前は違うよ」

「違う？　どうして？　だって、キミもボクと同じように、周りから弾かれて、馬鹿にされて、居場所なんてなかったんでしょ？　だったら……「いや、居場所はあったよ」……は？」

俺は嬉しそうな立花の会話を遮るようにそう告げると、立花はキョトン、とした。

「俺には、確かに居場所はあった。俺はな……救われたんだよ」
「救われた……って？」

立花が不安そうな表情を浮かべ、尋ねる。
まるで、自分を捨てないでくれと、訴えかけるように。

でも、俺は……俺達は、お前とは違うんだよ。

だって。

「俺達には、藤堂先輩がいた。藤堂先輩が、俺達に居場所を……俺達がいる意味をくれたんだ」
「あは……どういうこと？　言ってる意味が全然分からないよ」
「じゃあ、ハッキリ言ってやる。確かに、お前が言うように、この学園に入学して、加隈や今はこの学園にいない木崎、悠木に蔑まれ、時には騙されてヒドイ目に遭ったさ。だがな……こんな俺達の可能性を信じてくれた、見守ってくれた女性（ひと）が……藤堂先輩がいるんだ」

そう告げると、立花は不愉快そうに視線を逸らした。
俺の言葉を、まるで受け入れるつもりはないらしい。

だけど、俺はもっと言わせてもらうぞ。

「それだけじゃない。サンドラは、俺のことを最初から対等に扱ってくれた。一一二で、俺が色々と揉め事を起こした直後であるにもかかわらずだ。しかも、俺という存在を、それまでの俺を含めて認めてくれた上で、だ」

「……」

「だから……俺は、お前とは違う」

「っ！？」

俺の言葉を聞いた途端、立花は顔面を蒼白にして硬直した。

それほど、立花にとって今の言葉はショックだったみたいだ。

「あ、あはは……そんなこと言ってるけど、キミだって精霊（ガイスト）がゴブリンから［シン］になって、馬鹿にした連中を見返したんでしょ？だったら、このボクと何が違うっていうのさ……」

乾いた笑みを浮かべながら、立花は認めないとばかりにそんな言葉を投げ掛ける。

その時。

「いや、望月くんと君では、明らかに違う」

「そうですわネ」

「っ！？」

先輩と、サンドラが通路の陰から現れた。

そして立花は息を飲むと、俺をキッ、と睨む。

悪いな……だけど、俺は一人で行動するほど馬鹿じゃない。

昨日の夜、俺は先輩とサンドラに電話して頼んでおいた。

立花に悟られないように、俺の後をついて来て欲しい、と。

二人は、何一つ理由を聞かずに、快く引き受けてくれたよ。
これこそが……俺が今まで築き上げてきた、俺の居場所だ。

「藤堂、先輩……サンドラさん……」
「望月くんは、確かに前のクラスで理不尽な扱いを受けていた。それは認めよう。だがな、望月くんは決して腐ったりしなかった、諦めなかった。彼は……望月くんは、いつだって前を向いていた」
「エエ……それだけじゃないですワ。いつだって、周りを気遣っテ、支えてくれテ、微笑んでくれテ……ヨーヘイは、自分も、自分以外も、全部大切にしてくれる……そんな、素敵な男の子ヨ」

先輩……サンドラ……。

「立花クン……ヨーヘイを、アナタと一緒にしないデ」
「そうだな。それこそ、望月くんに失礼だ」

さらに追い打ちをかけるように、先輩とサンドラは立花に言い放った。

『マスター……［シン］もそう思っているのです。マスターは、いつだって優しい、［シン］の世界一大好きなマスターなのです』
「［シン］……」

はは……俺は、本当に幸せ者だ。
どこの世界に、こんなに俺の事を見てくれる人がいるってんだよ……！

「あ、あはは……」
「……立花？」

「あはははははははははは！　なんだよ！　ボクのこと一緒だって、本当の友達だって認めてくれたくせに！　結局キミも、アイツ等と一緒だったんだ！」

立花は狂ったように腹を抱えて嗤い出す。

『ダッタラ！　……ダッタラ、キミモアイツ等ト同ジ目ニ遭ワセテヤル！　ボクヲ……ボクヲ、裏切ッタ罰ダヨ！』

そう叫ぶと、立花の瞳が……黒く染まった。

お前とは、違う（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

主人公対クソザコモブ①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

主人公対クソザコモブ①

『ダッタラ！　……ダッタラ、キミモアイツ等ト同ジ目ニ遭ワセテヤル！　ボクヲ……ボクヲ、裏切ッタ罰ダヨ！』

そう叫ぶと、立花の瞳が……黒く染まった。

「っ！？　これって……闇堕ちかよ！？」

いや、立花は主人公だろうが！　なんでそんな奴が、闇堕ちなんてしてやがるんだよ！？

「ネ、ネエ、ヨーヘイ……これ、プラーミャの時と同じ……っ！？」

サンドラがおずおずと尋ねてきたタイミングで、立花が幽子の渦に包まれた。

間違いない……立花は、闇堕ちしたんだ。

「望月くん、どうする？」

藤堂先輩が、心配そうに俺を見つめながら尋ねる。

どうするって？　そんなの……決まってる！

「先輩……立花が闇堕ちしたきっかけは俺なんです。だったら……だったら、立花は俺が正気に戻して見せます！」

「……そうか。［関聖帝君］」

俺がそう宣言すると、先輩は［関聖帝君］を召喚した。

「ならば、立花くんと存分に語り合うといい。アイツは……」

少しずつ収まっていく幽子の渦を見据え、先輩は身構える。

そして。

「アイツは、この私が倒す！」

立花と共に姿を現した九つの柱の一柱、“ミズガルズ”の守護者である“ヨルムンガント”へ、青龍偃月刀の切っ先を向けた。

だけど、あのヨルムンガントは“アルカトラズ”領域（エリア）のボス、リヴァイアサンよりもさらに巨大な幽鬼（レブナント）だ。

それだけじゃない。ヨルムンガントは九つの柱の中でも、上位の強さを誇っている。

さすがに、先輩だけじゃ……。

「フフ……先輩、ワタクシもちゃんと数に入れてくださいまシ」

いつの間にか［ペルーン］を召喚したサンドラが、先輩の隣に並び立った。

「む……だが、望月くんのサポートも必要だろう？」

「まさカ。ヨーヘイが、立花クンに負けるはずがありませんワ。だって……ヨーヘイですもノ」

「ふふ……違いない」

先輩とサンドラは微笑み合うと。

「ヨーヘイ！　コッチもすぐに倒してしまいますカラ、ヨーヘイも

サッサと終わらせるんですのヨ！」
「そうとも！　私達は、君の勝利を信じているぞ！」
サンドラと先輩が、俺に向かって拳を突き出した。
まるで、この俺を激励するかのように。
はは……こんなの、燃えなきゃウソだろ！
「先輩！　サンドラ！　任せたぞ！」
「ああ！」
「エエ！」
そして俺は、既に［ジークフリート］を召喚している立花を見据えた。
「よう、待たせたな」
『別ニ、ボクハキミナンテ待ッテナイヨ。裏切者ノキミナンテ』
立花は、その漆黒の瞳に憎しみを宿し、この俺をただ睨みつける。
絶対に許さない、そんな思いを込めて。
はは……というか、逆恨みもいいとこなんだけど。
まあいいや、だったら。
「だったら！　立花のバカに分からせてやるだけだ！　［シン］！」
『ハイなのです！』
俺の隣にいた［シン］が、［ジークフリート］目がけて一気に飛び出すと、あれだけ開いていた距離が一気に詰まった。

『それー！　なのです！』

仁王立ちする［ジークフリート］に、［シン］は何枚もの呪符を貼りつけていく。

『【縛】！』

よし！　これで［ジークフリート］は身動きできないはず……っ！？

『アハハハハ！　望月クン、何ソレ？　ソンナオ札、ボクノ［ジークフリート］ニ通用スルワケナイヨ！』

［ジークフリート］は、何事もないかのようにその手に持つ大剣をひと振りした。

クソッ！　立花の奴、さては召喚した時点で【竜の恩恵】を発動してやがったな！

［ジークフリート］が持つ特殊スキル、【竜の恩恵】は、［ジークフリート］の全ステータスを二段階引き上げるばかりか、【物理耐性】【全属性耐性】【状態異常無効】の効果を得る。

しかも、同じようなスキルであるプラーミャの［イリヤー］が持つ【スヴャトゴル】は、その効果持続時間が三分間であるのに対し、【竜の恩恵】は……十分間。

……どのタイミングで発動したのかは知らないが、それでも、九分は残ってると考えておいたほうが無難だな。

『アハハ！　ソレデ、ドウスルノ？　コノママボクト、ニラメッコデモスルツモリナノ？』

「ああ、そうだな。できれば、十分間はにらめっこしたいんだけど？」

『ッ！　……ヘエ、望月クンニ教エテアゲタ覚エハナインダケドナ。マアイイヤ、ドッチニシテモ、ボクガソンナノ待ツワケナイシ！』

そう言うと、［ジークフリート］は［シン］に向かって飛び出した。

「っ！　［シン］！」

『大丈夫なのです！』

【竜の恩恵】によって、［ジークフリート］の『敏捷』ステータスも二段階アップしているが、それでも。

『ッ！　クソ！　追イツケナイ！？』

『へへーん！　なのです！』

［シン］の『敏捷』ステータスは限界超えの“ＳＳＳ”。［ジークフリート］がクラスチェンジして最大レベルまで引き上げて、さらに【竜の恩恵】を使っても、それでも追いつけないスピードだからな。

『……マアイイヤ。ダッタラ！』

［ジークフリート］が、その口を大きく開く。

あれは……【竜の息吹】かっ！

「［シン］！　来るぞ！」

『分かっているのです！　【堅】！』

俺の言葉を聞く前に、［シン］は呪符を展開する。
だけど。

「違う！　そうじゃない！　躱せえええええええ！」
『っ！？』
『カアッ！』

［ジークフリート］の口から、【竜の息吹】が放たれる。
ただ、［シン］は俺の指示を聞いてすぐにその場を離れたため、かろうじて躱すことができた。

『マスター！　どうしてアレを受け止めたらいけないのです！』

ギリギリのタイミングで躱すことになったせいで、［シン］が抗議する。

「あの【竜の息吹】はな……【全防御貫通】の効果があるんだよ」
『っ！？』

俺の説明を聞き、［シン］は息を飲んだ。
そう……あのまま【竜の息吹】を受け止めていたら、【堅】の防御壁は貫通し、［シン］に直撃していたところだった。

というか。

「クソッ！　このチート野郎め……！」
『アハハハハ！　ドウ？　ボクハ強イデショ？』

ギリ、と悔しそうに歯噛みする俺に向け、立花はニタア、と嗤う。

その時。

「っ！　立花！」

「アオイ……」

どういう訳か、加隈とプラーミャがこの場に現れた。

主人公対クソザコモブ①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

主人公対クソザコモブ②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「っ！　立花！」
「アオイ……」

歯噛みする俺を立花が嗤（わら）っている、その時、どういう訳か加隈とプラーミャがこの場に現れた。

『ヘエ……望月クン、藤堂先輩トサンドラサンダケジャナク、加隈クントプラーミャサンニモ声ヲカケテタンダ……』
「いや！？　俺は声かけてないんだけど！？」
『アハハ、自分ヲ馬鹿ニシタ奴ナノニ、望月クンハドウシヨウモナイネ』
「だから呼んでないって言ってるだろ！　俺の話を聞けよ！？」

チクショウ！　全然会話がかみ合わない！
というかプラーミャも加隈も、なんでここにいるんだよ！？

「……俺達は望月に呼ばれたわけじゃねえ。俺達が勝手に、望月達の後をつけてきただけだっつーの」
「本当に、私（ヤー）を除け者にするなんて、いい度胸ネ」

そう言って、加隈とプラーミャは俺を睨んだ。なんで！？

「それよりよー……立花、オマエ何やってんの？　望月はオマエの一番の友達（ダチ）じゃねーのかよ！」
『アハハハハ！　違ウネ！　ダッテ、望月クンハコノボクヲ裏切ッタンダ！　ソンナ奴、友達デモナンデモナイヨ！』

加隈の呼びかけに、立花は高笑いする。
でも……俺には、立花が泣いているようにしか見えなかった。
信じていたものに裏切られ、居場所もなくして、ただ泣き叫んでいるように。

「……それより、アオイも闇堕ちしたのネ」
『闇堕チ？　マサカ。ボクハ今、清々シイ気分ダヨ！　コノ姿コソ、本当ノボクダッタンダヨ！』
「嘘」

立花は嬉しそうに語るが、プラーミャはたった一言でそれを否定した。

『キ、キミニ何ガ分カルンダヨ！』
「分かル……だって、私（ヤー）もアナタと同じで、闇堕ちしたもノ」
『ッ！？』

プラーミャの告白に、立花は息を飲んだ。
まあ、驚くよな。だって、とてもそんな奴には見えないもんなあ。

「……私（ヤー）にとっては、たった一人の姉……サンドラこそが全てで、私（ヤー）から離れようとするサンドラと、そのサンドラを連れて行こうとするヨーヘイを恨んだワ」
『……』
「デモ、ただ心のままに叫んだ私（ヤー）を、サンドラが受け止めて、サンドラが心の内を語ってくれて、諭してくれたおかげで、私（ヤー）は戻れた。」
『ソ、ソレトコノボクト、何ノ関係ガアルンダヨ！』

プラーミャの言葉に、立花が動揺している。
多分、闇堕ちした奴にしか分からない、動機や想いみたいなものがあるんだろう。それが、見事に立花の心に突き刺さってる、ってことか……。

「アナタが闇堕ちしたのは、ただ単に、そこのヨーヘイに裏切られたって思い込んだからでショ？　だったラ……ヨーヘイが本当にそんな奴なのか、戦って確かめなさイ。それト」

プラーミャは、すう、と息を吸う。
そして。

「私（ヤー）は、アナタ達の戦いを見届けるワ……アナタと、この“グラハム塔”領域（エリア）を一緒に踏破した仲間としテ」
『ア……』

立花の漆黒の瞳に、僅かに光が宿る。

「そ、そうだぜ！　確かに俺は、そこにいる望月に酷いことをした！　おちょくって、馬鹿にして……そして、今度は俺が同じ目に遭ったよ……」
『加隈クン……』
「俺は腐っちまって、全部望月のせいにして、お前に突っかかって……で、俺はコテンパンにされて、耳を塞いじまった」

ああ、そうだ。
加隈は『まとめサイト』に載っている、俺になっちまったんだったな。

「でも……コイツは、こんな俺の胸倉をつかんで叫びやがった。『

このままでいいのか』って、発破をかけて……ハハ、今まで散々馬鹿にしてきた俺に、そんなこと言うんだぜ？」

そう言って、加隈は自嘲気味に笑うと、真剣な表情に戻り、立花を見据えた。

「だから俺は、望月みたいになりたいと思った。立花……お前もそうじゃないのか？」

『……』

「とにかく！　俺はお前達の戦いを見届ける！　同じ男を目指す、仲間として！」

いや加隈!?　おま、何言ってんの!?　というか、俺を目指すとか勘弁しろよ！　本気（マジ）でキモチワルイぞ！

『……プ』

すると、立花が突然吹き出した。

『アハハハハ！　プラーミャサンモ、加隈クンモ、馬鹿ジャナイノ？』

「ハア!?　ユーイチはともかく、私（ヤー）に向かって馬鹿とはナニヨ！」

「いや待て!?　なんで俺は馬鹿確定なんだよ!?　仲間に対して扱い酷くね!?」

立花の言葉を皮切りに、三人が痴話ゲンカを始めた。

何だかなあ……。

『アハハハハ！　……ハア、モウ面倒ダナア……イイヨ、サッサト戦オウヨ』

散々馬鹿笑いしたかと思うと、立花は冷めた表情で急に溜息を吐き、俺を見やった。

「オイオイ、そんな舐めた態度で、俺に勝てると思ってるのか？」

『思ッテルヨ。加隈クンハ、ボクガキミニ憧レテルナンテ言ッテルケド、ソンナコトナイカラ。ダッテ』

「っ！？」

『キミ、モウスグコノ世カラ消エチャウンダモン。【チェンジ】』

立花がそう告げると、［ジークフリート］の身体が、突然幽子の渦に包まれた。

主人公対クソザコモブ②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

主人公対クソザコモブ③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

主人公対クソザコモブ③

『キミ、モウスグコノ世カラ消エチャウンダモン。【チェンジ】』

立花がそう告げると、［ジークフリート］の身体が、突然幽子の渦に包まれた。

「な、何なノ！？」

「立花の精霊（ガイスト）、一体どうなるんだよ！？」

プラーミャと加隈が驚きの声を上げる。

だけど、あれは［ジークフリート］が持つスキルの一つ、【チェンジ】。

［ジークフリート］から別の精霊（ガイスト）へと、文字通り変化（チェンジ）する能力だ。

幽子が晴れ、立花の精霊（ガイスト）が姿を現す。

そこには……精悍で屈強な精霊（ガイスト）の姿とは打って変わり、巨大なランスと盾を持ち、全身に甲冑をまとう美しい女性の姿へと変貌を遂げていた。

あれこそ……主人公が持つもう一つの精霊（ガイスト）、［ブリュンヒルデ］。

十一ものスキルを有し、向かってくるものをその重厚な盾で全て防ぎ、その巨大なランスで全てを討ち果たす、［ジークフリート］と並ぶ規格外の精霊（ガイスト）だ。

というか、『攻略サイト』によれば、主人公の性別が選べる仕様で、それによって初期の精霊（ガイスト）が異なる予定だったらしいんだけど、

どちらも同時に登場させたい開発者が両方使えるようにしようって言い出したらしく、【チェンジ】なんてふざけたスキルを用意して、両方使えるようにしたらしい。

その結果、主人公が完全にチートになってしまい、ゲームバランスが崩れたとのこと。いや、ハッキリ言ってそんなのクソゲーだろ。開発者は正座しろ。

『アハハハハ！　サア！　コノ［ブリュンヒルデ］ト、ドウヤッテ戦ウツモリダイ？』

なんて、立花は嬉しそうに勝ち誇ってやがるけど。

「［シン］、遠慮はいらない。あの精霊（ガイスト）をボッコボコにしてやれ」

『！　ハイなのです！』

俺はニヤリ、と口の端を持ち上げて［シン］に指示すると、［シン］は嬉しそうに飛び出した。

『アハハ！　力ノ差ヲ見セテアゲルヨ！　【スコグル】！』

すると立花は［ブリュンヒルデ］のランスを震わせる。まあ、ハッキリ言ってしまえば高周波振動による破壊兵器だな。

当然、あんなモンに当たったら、［シン］の身体は粉々になる。

当たれば、だけど。

『ッ！？　コノ！』

『そんな攻撃、［シン］には当たらないのです！』

そして［シン］は［ブリュンヒルデ］の背後に素早く回り込むと、呪符を何枚も貼りつけた。

『食らえ！　なのです！　【爆】！　【裂】！』

『アアアアアアアアッッッ！？』

幾重にも貼られた呪符が爆発すると共に、［ブリュンヒルデ］の身体をズタズタに切り裂いていく。

［ジークフリート］だったら、【竜の恩恵】を使っている間は同じ攻撃をしてもほぼノーダメージだっただろうけど、今は［ブリュンヒルデ］。その身体に［シン］の呪符を防ぐ手立てはない。

『クッ……！　【レギンレイヴ】……！』

背中に大怪我を負った立花は、治癒のスキル【レギンレイヴ】によってその身体を回復していく。

だけど。

『回復しても意味ないのです！　【爆】！　【裂】！』

『ッッッ！？』

［シン］は、回復中の［ブリュンヒルデ］に容赦なく呪符による攻撃を続ける。

だから、［ブリュンヒルデ］……立花は延々と苦痛を味わう羽目になっていた。

「はは！　どうするんだよ立花！　このままじゃジリ貧だぞ！」

『ッ！　ウルサイッ！』

俺に煽られて立花は口惜しそうな表情を浮かべて叫ぶ。

だけど、［ブリュンヒルデ］……いや、立花じゃ、［シン］のその素早い動きに対応できないことは分かっていた。

これが先輩だったら、［シン］の動きを予測して、キッチリとスピード差を補ってくるはずだから、絶対にこんな展開にはならないけど、な。

さあて、立花……こうなったら、もう手は一つしかないぞ？

『クソッ！　クソッ！　【チェンジ】！』

立花は地団駄を踏むと、［ブリュンヒルデ］から［ジークフリート］に精霊（ガイスト）を【チェンジ】した。

さあ……これで終わりにしよう。

『アハハハハ！　今ノ［ジークフリート］ハ、【竜の恩恵】デホボ無敵ダヨ！　モウ、ソノオ札ダッテ通用シナイ！』

「はは、そうかよ！　［シン］！」

『ハイなのです！』

それでも［シン］は［ジークフリート］に肉薄し、その身体に呪符を何枚も貼りつけた。

『【爆】！　【裂】！』

『アハハハハハハハハ！　効カナイッテ言ッテルヨネ！　【グラム】！』

［ジークフリート］が右手の剣を振り回し、［シン］に切りかかる。

まあ、当たらないけど。

『クッ！　本当ニ厄介ナスピードダヨ！』

それより……。

俺は、チラリ、と向こうを見やると。

「ハアアアアアアアアアアッッッ！」

「これで終わりですワ！　【裁きの鉄槌】！」

その巨大な身体を切り刻まれ、叩き潰されたヨルムンガントが、先輩とサンドラからトドメの一撃を食らった。

『ジャ……ジャアア……』

ヨルムンガントは最後の呻き声を上げると、その巨体を全て幽子……いや、“ウルズの泥水”へと姿を変え、［関聖帝君］にその全てを吸収された。

「ぐ……っ！？」

「先輩！？」

先輩が膝をつき、サンドラが慌てて駆け寄る。

だけど……“シルウィアヌスの指輪”がある限り、吸収できる“ウルズの泥水”は半分。先輩は大丈夫だろう。

さて……これで、準備は整った。

「立花……もう、終わりにするぞ」

俺は、立花に向けて静かにそう言い放った。

主人公対クソザコモブ③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

決着（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

決着

「立花……もう、終わりにするぞ」

俺は、立花に向けて静かにそう言い放った。

『アハハハハ！　終ワリダッテ？　キミノ精霊（ガイスト）ノ攻撃ハ全ク効イテナイノニ？』

そして立花は、そんな俺を見ながら嘲笑（ちょうしょう）を浮かべた。

「いや、そうでもないぞ？　ホラ、見ろよ」

俺は［シン］から一方的に攻撃を受けている［ジークフリート］を指差すと。

『……』

『まだまだなのです！　【爆】！　【裂】！』

［シン］は俺の指示を忠実に守り、ただひたすら［ジークフリート］に攻撃を仕掛ける。

一方で、［ジークフリート］は、憐憫（れんびん）を湛（たた）えた瞳で［シン］を見つめていた。

まるで、そんなものは無意味だと言わんばかりに。

『アハハ。サスガニコウナッテクルト、キミノ精霊（ガイスト）ガ可哀想ニナッテクルヨ。ソロソロ止メサセテアゲタラ？』

『うるさいのです！』

すると、今も［ジークフリート］の攻撃を躱しながら呪符を貼り続ける［シン］が、立花に向かって叫んだ。

『マスターはいつだって、［シン］のために頑張ってくれるのです！　いつだって、［シン］を大切にしてくれるのです！　そんなマスターが、［シン］にお願いしたんです！　だから……だから！』

［シン］はただマスターの言葉を信じるだけなのです！』

「［シン］……」

はは……本当に、俺は恵まれてる。

そうだな、こんなに俺の［シン］が信じてくれてるんだ。そろそろ、それに見合う結果ってやつを見せてやらないと、な。

「［シン］！　［ジークフリート］の胴を覆っている甲冑に、氷属性の攻撃を仕掛けろ！」

『っ！　ハイなのです！』

［シン］は、呪符を［ジークフリート］の甲冑に素早く呪符を貼り付けると。

『【凍】！』

その言葉と共に、［ジークフリート］の甲冑が一瞬で凍り付く。

そして。

――ピシ……ピシ……。

『ッ！？　ナ、ナンデ！？』

［ジークフリート］の甲冑に亀裂が入り、ぼろぼろと欠片が床に落ちていく。
それを見る立花の漆黒の瞳に、動揺の色が見て取れた。

まあ、理由は簡単。
［ジークフリート］の甲冑は、必ずしもダメージを全て無効化できるわけじゃない。
だから、【裂】でほんの僅かな傷を作りつつ、火属性の【爆】で甲冑を熱していたんだ。

そこへ、氷属性の【凍】で攻撃をしたらどうなるか。
甲冑は急速に冷え、膨張し切っていたものが一気に収縮してしまったんだ。無数につけられた小さな傷も相まって、甲冑は簡単に壊れるって寸法だ。

でも……この作戦が成功したのは、そんな状態に持ち込むまで［ジークフリート］の攻撃を躱(かわ)し続け、呪符で攻撃をし続けてくれた、［シン］がいたからこそだ。

『はう！　すごいのです！　すごいのです！　やっぱり［シン］のマスターは最高なのです！』
「はは！　そういう［シン］は、最高の精霊(ガイスト)だよ！」

俺は飛び込んできた［シン］の頭を、最高の笑顔を見せながらガシガシと乱暴に撫でた。

『ググ……ッ！　マダ甲冑ヲ破壊サレタダケダヨ！　【竜の恩恵】デ極限マデ強固ニナッタ［ジークフリート］ノ皮膚ニハ、同ジ攻撃ハ通用シナイ！』
「まあ、お前の言う通りだな」

顔を歪めた立花の叫びに、俺は肩を竦(すく)めながら首肯した。
だけど……俺が何のためにわざわざこんな真似をしたと思ってるんだ？

『サア、コノママ【竜の恩恵】ノ効果ガ切レルマデ逃ゲルノカイ？』
「いやオマエ、何勝手に勝ち誇ってんの？　今から、俺達にやられるのに」
『何ッ！？』
「［シン］！　背中だ！　［ジークフリート］の背中に一箇所だけ無防備のところがある！　そこに呪符を叩き込め！」
『ハイなのです！』

俺の指示を受けた［シン］は、すぐさま［ジークフリート］に迫る。

『クッ！　［ジークフリート］！　アノ精霊(ガイスト)ヲ近ヅケサセルナ！』

立花はマズイと感じたのか、焦りながら［ジークフリート］に指示を出した。
といっても、どうやって［シン］を止めるつもりだ？

「行け！　［シン］！」
『【神行法・瞬】！』
『ッ！？　消エタ！？』

突然、［シン］の姿が俺達の視界から消え、立花と［ジークフリート］はキョロキョロと辺りを見回す。

――ペタ。

『遅いのです』
『ッ！？』

いつの間にか［ジークフリート］の背後にいる［シン］は、背中の葉の形をした箇所にそっと呪符を貼り付けると。

『【爆】』
『アアアアアアアアアアッッ！？』

［ジークフリート］は呪符による爆破で吹き飛び、同じく立花ももんどりうって倒れた。

「ふう……」

それを見届けた俺は、深く息を吐く。

――ポン。

「ふふ……見事だ」
「さすがネ！　ヨーヘイ！」

いつの間にか俺の傍に来ていた先輩が俺の肩を叩き、サンドラが嬉しそうに俺の顔を覗き込んだ。
先輩も、無事吸収が終わったみたいだ。

……さて。

『ウ、ウウウ……』
「立花、大丈夫か……って、俺がこんな目に遭わせておきながら、

何言ってんだって話だけどな。

俺は立花の身体をそっと抱き起こすと、そんな言葉をかけてから苦笑した。

『……放ットイテヨ。ドウセキミハ、ボクト一緒ジャナインダシ……本当ノ、友達ジャ……ナイン、ダシ……』

そう言うと、立花はぽろぽろと涙を零し始めた。

ハア……そもそもコイツ、何勘違いしてやがるんだよ……。

「あのなあ……確かに俺は、お前と一緒じゃないって言ったけど、一緒じゃないと駄目なのか？」

『……ダッテ』

「だってじゃねーよ。俺もお前も、境遇も環境も違うんだから、一緒になるなんてあり得ないだろ。それに」

『……ソレニ？』

立花は俺をジッと見つめ、次の言葉を待つ。

その瞳は、まるで拒絶しているようで……それでいて、何かを期待しているかのようだった。

「俺達、友達じゃないのかよ。少なくとも、俺はお前のこと、本当の友達だと思ってるぞ？」

『ッ！？』

俺の言葉に、立花が目を見開く。

まるで、予想外の言葉を聞いたかのように。

そして、求めていた言葉を聞いたかのように。

『ダ、ダケド！　……ダケド、ボク……！』
「はは、何だよ。お前だって言ったじゃねーか。俺のこと、本当の友達だって」

そう言って、俺は立花の頭を撫でてやった。

『本当ニ……キミッテズルイ、ヨ……』
「いや、なんで俺がズルイことになってんだよ」
『アハハ……ダッテ、コンナノ……嬉シイニ決マッテルジャナイカア……！』
「うおっ！？　ちょ！？　おま！？」

突然、立花は俺に抱きついて泣きじゃくる。
ハッキリ言って、俺には男に抱きつかれて喜ぶ趣味はないんだけど……ハア、まあいいか。

俺は苦笑しながら、立花の背中を優しく叩いた。

決着（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

今度は全員で（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

今度は全員で

「よう、もう落ち着いたかよ」
「グス……う、うん……」
ようやく泣き止んだ立花は俺の胸から顔を起こし、腫れぼったい瞼を俺に見せる。
その瞳は、すっかり元に戻っていた。どうやら、闇堕ちから無事抜け出したみたいだな。
「ハア……本当に、よかったワ」
傍に来たプラーミャは、立花を見て苦笑する。
「全くだぜ。ま、何にしても、これで元通りだな！」
何故か加隈の奴が、偉そうにそんなことを言いながら笑顔でサムズアップしやがった。というかお前、何もしてないだろうが。
「みんな……ごめん、なさい……」
「本当だよ。おかげで俺は超疲れた」
深々と頭を下げる立花に、俺は目一杯皮肉を込めて言ってやった。
「あはは……本当にゴメン……」
「おう。さーて、どうやってこの尻拭いをしてもらおうかなー」
そう言って、俺はチラリ、と藤堂先輩を見やると。

「ふふ……だったら、今攻略中のあの領域（エリア）の探索を手伝ってもらってはどうだ？」
「お！　先輩、それいいですね！」
うん、ものすごく茶番な感じがするけど、今はこれくらい大袈裟にしたほうが立花も気が楽になるしな。
先輩、ありがとうございます。
「フフ。これでもう、あんなに苦労しなくても済みそうですわネ」
「だな！」
笑顔で合いの手を入れるサンドラに、俺は微笑み返した。
「な、なんだよ望月！　お前、俺達に内緒でそんなことしてたのかよ！　俺が“カタコンベ”領域（エリア）の攻略誘っても、乗ってこなかったくせに！」
「当たり前だろ！　俺は“アトランティス”領域（エリア）と“レムリア”領域（エリア）の攻略に忙しい……っ！？」
ここまで言って気づく。
あー……余計なこと言っちまったなあ……。
「む……望月くん、その“アトランティス”領域（エリア）と“レムリア”領域（エリア）というのは何だ？」
「……ヨーヘイ？」
ううう、先輩とサンドラの視線が冷たい。
「あ、あははー……いやホラ、あの海に浮かんでる領域（エリア）って、伝説

のアトランティス大陸っぽくないですか？　そ、その、メッチャ広いですし、それに、入口を出現させる本の名前も、『ティマイオス』ですし」

「うむ……確かにな……」

「……じゃあ、その“レムリア”領域（エリア）というのハ？」

「そ、それも、“アトランティス”と同じ広さだし、同じような伝説の大陸ってなると、“レムリア”かなー、なんて……」

俺はおずおずと上目遣いで二人の顔を見ると……あ、笑ってる。

「ふふ、まあいつものことだしな」

「エエ。だって、ヨーヘイだシ」

はは、どうやら二人共、俺の話を流してくれたみたいだ。

本当に……感謝しかない。

「さーて。んじゃ、帰ろうぜ」

俺がそう告げると、みんな嬉しそうに頷いた。

もちろん、立花も。

「そ、それで……ボク、さっきの望月くんの攻撃で、うまく歩けそうにないんだ……だ、だから、その……おんぶ、して欲しいなあ……」

「は？」

いや、立花の奴、甘えた声で何言ってんの？

「だったら［ブリュンヒルデ］の【レギンレイヴ】で回復しろよ」

「望月くん冷たい！？」

「なんでだよ！」

そう告げると、立花は口を尖らせながら［ブリュンヒルデ］を召喚し、渋々回復した。いや、最初からそうしとけよ。

「む……望月くん、実は私もさっき、あの大蛇の幽鬼（レブナント）との戦闘で、その……あ、足を痛めて、だな……」

「ワ、ワタクシも、少し立ちくらみガ……」

先輩とサンドラまで……。

『んふふー、マスターがモテモテなのです！』

ハア……うち一人は、男だけどな……。

俺は、嬉しそうにそう話す［シン］を眺めながら、溜息を吐いた。

◇

「おお……！」

「ここが……」

次の土曜日、俺は“アトランティス”領域（エリア）に立花と加隈を連れてきた。

案の定、その広さに圧倒されてるな。

「とりあえず、この“アトランティス”領域（エリア）は攻略済だから、サッサと“レムリア”領域（エリア）に向かうぞ」

「ま、待ってよ望月くん！」

俺達は中央のらせん階段を目指して進むと、立花と加隈も慌てて

追いかけてきた。

「ふふ……ようやく頭数が揃ったな」

「先輩……ですね」

先輩の言葉に、俺は強く頷く。

これで、“レムリア〝領域（エリア）を二手に分かれて攻略できる。

それに、闇堕ちした立花との戦闘で分かったけど、立花ならこの領域（エリア）でも問題ないだろう。

あとは……。

「へっ！　舐めるなよ！　【フラリッシュ】！」

加隈の［トリックスター］があり得ない曲芸じみた動きで、幽鬼（レブナント）を追い詰める。

そこへ。

「フフフ……トドメヨ！　【絨毯爆撃（じゅうたん）】！」

プラーミャの［イリヤー］が槍衾（やりぶすま）を見舞って、幽鬼（レブナント）は幽子とマテリアルに姿を変えた。

うん、加隈もその多彩なスキルを活かして上手く立ち回ってるし、プラーミャ達との連携も問題なさそうだ。

「それで……“レムリア〝領域（エリア）ではチームをどう分けるんですノ？」

「ああ、それは最初から決めてある」

「ヘエ……それってどんな編成？」

「はは、まあ“レムリア〝領域（エリア）に着いたら教えるよ」

俺は口の端を持ち上げながら、興味津々に尋ねるサンドラにそう答えた。

そう、“レムリア”領域（エリア）でのチーム編成は、これ以外にあり得ない。

だって……これこそが、先輩の今の状況を解決する方法なんだから。

今度は全員で（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ダブルチーム（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ダブルチーム

「ここが、二つ目の領域（エリア）……“レムリア”領域（エリア）だ」
「す、すごいね……！」

らせん階段を下りて“レムリア”領域（エリア）にやって来ると、立花が感嘆の声を漏らした。
いや、最初はそうかもしれないけど、散々攻略をしてきたプラーミャを見てみろ、完全に死んだ魚みたいな目をしてるぞ。

「それで、これから俺達は二手に分かれて、それぞれ塔にある鍵を入手する。チーム分けは……「そ、それならボクに提案があるんだけど！」」

俺がチーム編成について話をしようとすると、立花が手を挙げた。

「なんだ？」
「そ、その……ボク、プラーミャさんと加隈くんの三人チームでお願いしたいんだ！」

立花から、まさかの提案だった。
いや、正直言うと、立花は絶対に俺と行きたがると思ってたんだけどな……。

「それはどうしてだ？」
「う、うん……一つは、ボク達はこの三人で“グラハム塔”領域（エリア）を踏破したから、連携が取りやすいっていうのもあるんだけど……」
「他にもあるのか？」

「ボクは……キミに頼るんじゃなくて、ボク自身で頑張りたいんだ。だって、キミの本当の友達で居続けたいから」

そう告げた立花の瞳は、確かな意思が込められていた。

はは……何だよ、カッコイイじゃねーか。

「分かった。じゃあ、ここから北東にある塔は、立花、プラーミャ、加隈……任せたぞ」

「うん！　絶対に、その鍵を入手してくるよ！」

「ハア……サンドラと離れるのはイヤだけど、仕方ないわネ……」

「ハハ！　ま、俺に任せとけ！」

加隈の妙な自信は気になるけど……ま、まあ、大丈夫だろう。

「それじゃ、また後で」

「うん、また後で」

俺は立花とコツン、と拳を合わせると、立花達のチームは北東へ、俺達のチームは南東へと向かった。

「それで、君の考えていたチーム編成はどうだったんだ？」

「あはは……実は、立花の提案したチーム編成の通りなんですよね」

隣に並ぶ先輩の問い掛けに、俺は苦笑しながら答える。

というか、俺にとってはこの編成以外あり得なかった。

立花が言ったように、連携などを加味したっていうのもあるけど、それ以前に……。

「ふふ……君のことだ、何か考えがあるのだろう？　私は、ただ君を信じてついて行くだけだよ」
「ありがとう、ございます……」
俺は先輩のその言葉が嬉し過ぎて、思わずキュ、と胸襟をつかんだ。
「ア！　見えましたワ！」
サンドラが嬉しそうに指を差す、その先に……確かに、俺達が目指している塔がそびえ立っていた。
「さあ……先輩、サンドラ、とっとと中にいる幽鬼（レブナント）を倒して、鍵を入手するぞ！」
「うむ！」
「エエ！」
そうとも……今回は、その倒すスピードが大事なんだ。
だって、俺達のチームが、先に領域（エリア）ボスを倒さないといけないんだから。
立花達が、合流する前に。
――ギイ。
塔の扉を開けて中に入ると……やはり、いた。
木製の歯車をくわえた巨大なフクロウ
コイツが、この塔で鍵を守護する幽鬼（レブナント）、“フェニアン”だ。

「ふむ……ハヤブサ、カラスときて、ここはフクロウか」
「何でもいいですワ！　サッサとやっつけ……「［シン］！」……ッテ！？」

俺は二人が動き出す前に［シン］に号令を出すと、［シン］はものすごい勢いで飛び出した。
悪いなサンドラ、とにかく時間が惜しいんだ。

『それー！　なのです！　【神行法・跳】！』

［シン］は空中を蹴りながら、あっという間にフェニアンの背後を取った。

『食らうのです！　【縛】！　【裂】！』

呪符によって身動きを封じられたフェニアンが、その立派な翼をズタズタに引き裂かれた。
当然、羽ばたく術を失ったフェニアンは、そのまま床へと落下する。

「ふふ、先を越されたが、トドメはこの私が！」
「ワタクシだって負けていませんワ！　【裂きの鉄槌】！」

［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）と、［ペルーン］のメイスがうなりを上げ、フェニアンに迫る。

そして。

――斬ッッッ！
――ドオオオオオオンッッッ！

【一刀両断】によって半割になったフェニアンの胴体は、【裁きの鉄槌】で黒焦げかつ原型をとどめないほどにグチャグチャになると、幽子とマテリアルに変わった。

「望月くん！　鍵を手に入れたぞ！」

先輩は台座にある鍵をつかみ、高々と掲げた。

「先輩！　サンドラ！　急いで中央の階段に戻ろう！」

「む！　望月くん、どういうことだ？」

俺の言葉に、先輩が尋ねた。

「立花達が鍵を入手した時点で、中央の階段付近にある建物から、領域（エリア）ボスが出現します！　だから！」

「フフ……何でヨーヘイがそんなことを知っているのか、あえて聞きはしませんけド……分かりましたワ！　行きますわヨ！」

サンドラ……お前も、最高だよ！

俺は嬉しさのあまり緩んでしまう口元を必死で堪（こら）えながら、俺達は塔を飛び出して中央の階段を目指し、全速力で駆ける。

「ハア……ハア……！」

「ア……ッ！？」

「サンドラッ！」

つまづいて転びそうになるサンドラを、俺は慌てて受け止めた。

「ア……ヨーヘイ、ありがとウ……」
「はは、気にすんな」
「フフ、モウ……」

俺はサンドラに向けてニカッと笑うと、つられてサンドラも微笑み返す。

その時……ヒューズボックスに入れてあった鍵が中で暴れ出した。

「っ！　立花達も鍵を手に入れたか！」
「望月くん！　これは一体!?」

先輩が慌てた様子で尋ねる。

「はい！　鍵が集まろうとしています！　領域（エリア）ボスを解放するために！」

俺はヒューズボックスの蓋を開けると、鍵は勢いよく飛び出して、中央へと飛んで行った。

「さあ、あと少しで中央です！　急ぎましょう！」
「うむ！」
「エエ！」

さらに全力で走り、とうとう俺達は領域（エリア）の中央へと戻ってきた。

「っ！　あの建物です！」

中央の階段の傍にある、みすぼらしい建物の屋根から、ナニカが飛び出した。

「望月くん……」
「ええ……」
俺は先輩に向かって頷く。
そう……あれこそが、“レムリア”領域（エリア）のボス、“ベレヌス”だ。

ダブルチーム（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ベレヌス（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ベレヌス

“レムリア”領域（エリア）のボス、“ベレヌス”は、美しい青年の姿をしていた。

輝くブロンドの髪に水色の瞳を湛（たた）え、ギリシャ彫刻のように彫りの深い端正な顔立ち。

その手には黄金の弓と矢を持ち、着ている服から覗（のぞ）くその身体は引き締まった肉体をしていた。

ハッキリ言おう、俺はこんな奴は大嫌いだ。

「先輩！　サンドラ！　あの領域（エリア）ボスは、絶対に原型をとどめないくらいにギタギタにしてやろう！」

「う、うむ……」

「い、いいですけド……急にどうしたんですノ……？」

先輩もサンドラも、せっかく俺が意気込んでるっていうのに、なんでそんな心配そうに俺を見てるんだ？

『プークスクス！　マスターがまさかの領域（エリア）ボスに嫉妬してるのです』

「ちょ！？　［シン］！？」

そそ、そんなハッキリ言うなよ！　傷つくだろ！

「む……だ、だが、私は望月くんのほうが、その……かか、可愛いと、思う……ぞ……？」

「あんな濃ゆい顔の何がいいんですノ！　そ、それなら、ヨーヘイ

のほうが愛くるしいというカ……カッコイイというカ……」

［シン］の言葉を聞いた先輩とサンドラは、顔を真っ赤にしながらそんな恥ずかしい言葉を口にした。

うう……お世辞とはいえ、二人にそんなこと言われたらメッチャ嬉しい……！

「よっし！」

そんな二人の励ましに気合いが入った俺は、パシン、と両頬を叩いた。

「やるぞ、［シン］！　そして、今日のアイスは抜きな！」

『はうはうはう！？　ヒドイのです！　ヒドイのです！　横暴なのです！』

はは、俺を馬鹿にした罰だ。反省しやがれ。

すると。

「っ！？　［シン］！」

『ハイなのです！　【堅】！』

［シン］は素早く呪符を展開し、ベレヌスから放たれた黄金の矢を弾い……て！？

あろうことかベレヌスの奴、黄金の矢を乱れ撃ちしてきやがった！？

「先輩！　サンドラ！　あの矢は絶対に食らっちゃ駄目だ！　あの矢じりには、毒がある！」

……正確には毒じゃなくて、致死性の高い疫病だけど。

「っ！　分かった！」

「任せテ！　【ガーディアン】！」

サンドラは［ペルーン］に無数の盾を展開させて、ベレヌスの放った矢を弾く。

先輩も、サンドラの盾に隠れつつ、取りこぼした矢を［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）で打ち落とした。

さあて……『攻略サイト』には、遠距離攻撃で撃ち合いをしながら少しずつ削るのが攻略法だって書いてあったけど、遠距離攻撃ができるのはサンドラしかいないし、何よりそんなチマチマしたことをする時間も惜しい。

だったら！

「［シン］！　一気にアイツに近づいて攻撃を仕掛けろ！　先輩とサンドラは、その隙に少しでも領域（エリア）ボスとの距離を詰めるんだ！」

先輩とサンドラが、無言で力強く頷いた。

そして［シン］は、降り注ぐ黄金の矢を素早く躱（かわ）しながら接近する。

そして。

『取ったのです！　【爆】！』

『グウッ！？』

背後に回り込んだ［シン］は、ベレヌスの背中に呪符を貼り付け、【爆】で吹き飛ばした。

「おおおおおおおおおおおッッッ！」
「アアアアアアアアアアアアッッッ！」

同じく距離を詰めていた［関聖帝君］と［ペルーン］が、ベレヌスに向かってそれぞれ武器を叩き込む。

だけど。

「っ！？　何だと！？」
「身体が回復していきますワ！？」

そう……ベレヌスは【疫病の矢】で敵を絶望へと追い込み、【治癒の矢】で自身を癒す。
その使い分けこそが、このベレヌスの特徴でもある。

とはいえ。

「大丈夫！　なら！」
『任せるのです！』

［シン］は一気に詰め寄ると、ベレヌスの両腕が見えなくなるほどに呪符で覆った。

『食らえ！　なのです！　【爆】！』
『ガガガガガガガガガッッ！？』

連続して起こる呪符の爆発により、ベレヌスはその腕を上げるこ

とができない。
これなら、【治癒の矢】で回復することもできないだろ！

「先輩！　サンドラ！　今だ！」
「うむ！　食らえええええええええッッッ！」
「【裁きの鉄槌】ッッッ！」
『ガ……ウ……！？』

ベレヌスを、先輩は青龍偃月刀で切り刻み、サンドラは打ち砕く。
何度目かの攻撃を食らった後、とうとうベレヌスは沈黙し、その姿を幽子とマテリアルに変えた。

「望月くん！　やったぞ！」
「ヨーヘイ！　やりましたワ！」

二人は最高の笑顔でその手を掲げる。
だから。

「はは！　やった！」
「ああ！　ふふ！」
「キャ！　フフ！」

俺はそんな二人の手にハイタッチをした。

『マスター！　［シン］も！　［シン］もなのです！』
「はは！　当然！」

もちろん［シン］にもハイタッチを交わすとも。
この、俺の最高に自慢の精霊（ガイスト）と。

「よし、じゃあ立花達が合流する前に、やることやっちまうかー」

そう言って、先輩とサンドラを手招きし、ベレヌスが飛び出してきたみすぼらしい建物の中へと入る。

すると、そこには“アルカトラズ”領域（エリア）で見たものと同じ小さな祠（ほこら）があった。しかも、二つ。

「望月くん……あれは、ひょっとして……」

「ええ……“アルカトラズ”領域（エリア）のものと同じ、ですね。［シン］」

『了解なのです！』

もう二度目だから、［シン］は喜び勇んで鎮座（ちんざ）する赤色の水晶玉に触れると、「シン」の身体を幽子の渦が包み込む。

しばらくして渦が消え、姿をあらわした［シン］をガイストリーダーで確認すると。

「よし！　【火属性反射】を手に入れたぞ！」

「なに！　本当か！」

「次はワタクシ達の番ですワ！」

早速先輩とサンドラも、［関聖帝君］と［ペルーン］を水晶玉に触れさせた。

「ふふ……【水属性反射】に続いて、今度は【火属性反射】か」

「これで［ペルーン］がまた強くなりましたワ！」

「あはは、二人共忘れてない？　祠（ほこら）は一つだけじゃないんだぞ？」

「「あ！」」

俺の言葉を聞いた先輩とサンドラが、綻んだ顔をさらに綻ばせる。

そう、ここが二つの領域（エリア）でできていることを忘れてはいけない。

この祠は、あくまでも“レムリア”領域のクリア報酬であって、“アトランティス”領域のクリア報酬はもう一つのほうの祠にある。

【氷属性反射】という報酬が。

「ということで、もう一つスキルをもらいに行きましょう」

「うむ！」

「エエ！」

二人はうれしそうに返事して、我先にともう一つの祠へと向かう。

その間に……俺は、祠の裏側に回り込むと、ひっそりと置かれてある、小さな木箱の蓋を開けた。

ベレヌス（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

二つの指輪（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

二つの指輪

藤堂先輩とサンドラがもう一つの祠へと向かっている間に、俺は、祠の裏側に回り込むと、ひっそりと置かれてある、小さな木箱の蓋を開けた。

そこには。

「よし……！」

まさに、俺が求めていたアイテム、“エリネドの指輪”が入っていた。

『マスター、それは何なのです？』

木箱の中を覗き込みながら、不思議そうに［シン］が尋ねる。

「はは、これは“エリネドの指輪”といってな。この指輪をはめた人間は、得られる幽子の量が二倍になるんだ」

『はう！　それはすごいのです！」

「だろ？　しかも、実はこれだけじゃない」

そう言って、俺は二人のいる祠へと目を向けた。

そう……祠が二つあるということは、同様にアイテムが二つあるってことだ。

俺はもう一つの祠の裏に行き、同様に置かれている木箱の蓋を開けると……“エリネドの指輪”とは意匠の異なる指輪が入っていた。

『はう！　これも、もらえる幽子の量が二倍になるのですか？』
「いや、コッチにあるのは“リネットの指輪”。この指輪をはめると、精霊（ガイスト）の全てのステータスが一つずつ上昇する」
『はうはうはう！　これもすごいのです！　マスターがこれをつければ、［シン］の最強伝説の始まりなのです！』

［シン］ははしゃぎながら飛び跳ねるけど……うわあ、言い出しづらいなあ……。

「あー、その……［シン］」
『はうはう！　……って、どうしたのです？』

俺の気まずい様子に気づいた［シン］は、不思議そうな顔を浮かべ、コテン、と首を傾げた。

「この二つの指輪は、俺がはめるつもりはないんだ」
『はう！？　だ、だけど、そしたらどうするのです！？　持ってるだけじゃ、宝の持ち腐れなのです！』
「ああ……そうだな……」

［シン］にそう答え、俺は二人のいる祠（ほこら）を見やった。

『はう！　［シン］はもう理解したのです！　やっぱりマスターはワルイ男なのです！』
「いや、なんでだよ！」

なんで二人に指輪を渡すことがワルイ男認定になるのか分からないけど……ま、まあ、とにかく、立花達がここにやってくる前に……。

俺は祠(ほこら)の正面に出ると、先輩とサンドラがガイストリーダーを見ながらはしゃいでいた。

「あ！　望月くん！　見てくれ、この［関聖帝君］のステータスを！」

「ヨーヘイ！　なんと、コッチの水晶玉は、【氷属性反射】ですのヨ！」

「あはは、そっか」

俺は嬉しそうに話す二人を見ながら、口元を緩める。

「藤堂先輩、サンドラ」

「「？」」

声を掛けると、二人は少しキョトンとしながら、俺を見つめた。

「実はこの領域(エリア)には、踏破した報酬として、あるアイテムが手に入るんだ」

「？　アイテムっテ？」

「……」

不思議そうに尋ねるサンドラとは対照的に、何かを察した先輩はジッと押し黙った。

「先輩、サンドラ、手を出してくれるかな」

「うむ……」

「エ、エエ……」

俺は、先輩の手の上には“エリネドの指輪”を、サンドラの手に

は“リネットの指輪”を置いた。

「これハ……指輪……？」

「先輩に渡した指輪は“エリネドの指輪”といって、手に入る幽子の量が二倍になります」

「っ！？　そ、それは……！」

驚いた表情を浮かべ、その真紅の瞳で見つめる先輩に、俺は静かに頷いた。

そう……これがあれば、“シルウィアヌスの指輪”によるマイナスの効果を打ち消してくれる。

「ですので先輩……いざという時は外しておいてくださいね？」

「ふ……ふふ……本当に、君は……！」

先輩はギュ、と“エリネドの指輪”を握りしめ、肩を震わせながら俯いた。

「サンドラに渡した指輪は“リネットの指輪”。それをつければ、精霊の全ステータスが一つずつ上昇する」

「ッ！？　そ、そんなすごい指輪なノ！？」

「ああ」

俺は驚くサンドラに向かってゆっくり頷くと、サンドラは指輪を持つその手を胸元に寄せ、最高の笑顔を浮かべながら慈しむように抱きしめた。

「はは……といっても、手に入るのがその二つしかないから、まあその……早い者勝ちということで……」

そう言って、俺は苦笑しながら頭を掻いた。
これこそが、立花達を出し抜いて先に領域ボスを倒したかった理由だから。

「エ……？　チョット待ッテ！？　二つしかないということは、ヨーヘイの分は！？」
「ん？　ああいや、俺は別に……」
「な、何言ってますノ！　だったラ、こんな貴重なもの、受け取れませんワ！」

そう言って、サンドラは俺に指輪を差し出すけど……そうじゃないんだ。

「なあサンドラ……先輩も聞いてください。確かにその指輪を俺がはめたら、［シン］は強くなれるかもしれない。だけど……そんなの、俺にとっては些細なことなんだ」
「「……」」
「それよりも、その指輪よりも……って、違うな。この世のどんな貴重なものよりも、誰よりも俺のことを信頼してくれる、二人のほうが大切なんだ」
「「っ！」」

そう、俺と［シン］だけが強くなったって、このクソッタレなゲームの世界を変えることはできない。
先輩の、不幸な結末だって……。

だから、俺はみんなで強くなりたいんだ。
みんながみんな、最高のエンディングを迎えるために。

「俺にとっての強さは、俺だけの強さじゃなくて、先輩やサンドラ

達みんなでの強さなんだ。まあ、俺だって普通の人間だから、どうしても贔屓はしちゃうけど……」

「望月くん……」

「ヨーヘイ……」

「だから、二人にはその指輪を持っていて欲しい。そして、これからも俺と一緒にいて欲しいんだ」

二人にお願いするように、そう告げると。

「ふふ……一緒にいたいのは君だけじゃない。私だって、キミと……一緒にいたい……」

「バカ……ワタクシだって、ヨーヘイの傍にいたいに決まってるじゃない……」

「二人共……ありがとう……」

そう言って、俺は深々と頭を下げた。

「あ、だけど」

「「？」」

「あの三人にはナイショだから。特に、立花には」

顔を上げ、俺はおどけながらそう言うと。

「……プ」

「ププ」

「「アハハハハハハハハハハ！」」

先輩とサンドラが、大声で笑い出した。

「ハハハハハ！　当然だとも！　こんなこと、誰にも言えるものか

！」

「フフフフ！　エエ！　これは、三人の秘密ですわヨ！」

「はは！　絶対だからな！」

俺達三人は顔を見合わせながら、もう一度笑った。

二つの指輪（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

絡めた指（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

絡めた指

「いやー、疲れたなあ……」

“アトランティス”領域（エリア）、そして“レムリア”領域（エリア）を踏破して帰路についた俺は。風呂に入った後、部屋のベッドでぐったりしていた。

だけど、“アルカトラズ”領域（エリア）で経験済みのプラーミャはともかく、立花と加隈の奴は、水晶玉に触れて目を白黒してやがったな。

『はうはうはう！　お風呂上りのアイスは美味しいのです！』

などと宣（のたま）いながら、［シン］は嬉しそうにアイスを頬張ってるけど……いやお前、風呂入ってないじゃん。

「さて……次はどうするかなあ……」

スマホの画面を眺めながら、俺は思案する。

とりあえず、最重要事案だった“アルカトラズ”領域（エリア）での“シルウィアヌスの指輪”の入手と【水属性反射】の取得も終わったし、“アトランティス”領域（エリア）と“レムリア”領域（エリア）での二つの指輪の入手と【火属性反射】、【氷属性反射】も取得した。

少なくとも、これで九つの柱全てを倒したとしても、先輩の中の種が芽吹くことはないはず。

「あー……立花と加隈は、まだ【水属性反射】は取得してないんだったなー……」

じゃあ、プラーミャを引率係にして、鍛錬がてら三人には“アルカトラズ”領域（エリア）をメインに頑張ってもらうか。

で、俺、先輩、サンドラは、早めに“カタコンベ”領域（エリア）の攻略に乗り出すとしよう。

といっても、“カタコンベ”領域（エリア）の踏破に必要なレベルは四十だし、俺達なら楽勝だけど。

うん、みんなの育成計画は大体こんなところかな。

「で、次は俺だけど……」

左手でスマホを操作し、『攻略サイト』にある育成方法のページを眺める。

“ＳＳＳ”になった［シン］にこれ以上の効果があるのかは分からないけど、疾走丸による『敏捷』ステータスアップは毎日こなしてるし、［シン］に用意されてる限定イベントは、二年になってからだしなあ。

……やっぱり、地道にレベル上げするしかないかあ。

『はう……マスターがしょんぼりしてるのです……』

見ると、［シン］がアイスを食べる手を止め、悲しそうな表情で俺を見つめていた。

おっと……変に心配させてしまったな……。

「はは。いや、別に落ち込んだりしてるわけじゃないよ。ただ……

明日から半年間、苦行が続くだけで……」

俺は［シン］の頭を撫でながらサッと目を逸らした。

『はうはう！？　嫌な予感しかしないのです！？　マスター、一体何があるのですか！？』

「あ、あははー……」

思いっ切り俺の身体を揺さぶる［シン］に、俺は薄ら笑いを浮かべ続けていた。

◇

「望月くん、おはよ！」

「おう、おはよう」

朝の通学路、いつものように待ち構えていた立花が、嬉しそうに挨拶をしながら駆け寄ってきた。うん、こんな立花の態度にも、そろそろ慣れてきたな。

「えへへー……ねえねえ、今日は……「オーッス！」」

すると後ろから、俺と立花の間に割り込むように加隈が入って来やがった。

「わ！？　ちょっと加隈くん！？」

「ハハ、よう！」

何か言おうとした立花を無視するかのように、立花に笑顔を振りまく加隈。いや、どうしたんだよ。

「イヤイヤ、俺と立花って、“レムリア”領域（エリア）を一緒に攻略した仲じゃん？　もう、切っても切れない仲間っつーの？」

いや、プラーミャもいるし。何なら俺達も一緒に攻略してるし。

「もー！　加隈くんやめてよ！」

「う……ス、スマン……」

あまりにも馴れ馴れしく絡んでくるため、とうとう立花に怒られた加隈は一転、シュン、となってしまった。本当に、残念な奴だ。

とはいえ、本音を言えば加隈がここまで立花に懐くとは思ってもみなかった。

確かに、加隈は元々主人公の友人キャラで、主人公が転校してきた時に真っ先に絡んで一人目の仲間になる設定だから、そうなってもおかしくはない。

だけど今の加隈は、主人公の友人キャラじゃなくて、俺の本来のキャラ……クソザコモブを引き継いでるはずなんだよなあ。

「ホラホラ！　望月くん、置いてっちゃうよー！」

などと考えごとをしている間に、立花は俺よりも先に行って笑顔で手を振っていた。

ウーム、立花のヒロイン力が右肩上がりなのは一体どういうことだ？

「な、なあ、望月……」

加隈が先を行く立花を見据えながら、真剣な表情で声を掛けてき

た。

「なんだよ？」

「立花ってさ……その、なんかいいよな……」

「っ！？」

頬を赤らめ、静かにそう告げる加隈を見て、俺は思わず息を飲んだ。

コイツ、何言ってんの！？

「な、なあ加隈よ……分かってるとは思うが、立花は男、だぞ……？」

「そそそ、そんなの俺だって分かってるよ！　も、もちろん仲間としてだ！」

俺は若干引きながら、あえてそう問い質すと、加隈は動揺しながら否定した。

いや、じゃあなんでそんなにチラチラと立花を見てんだよ……。

「あ！　先輩！」

「ふふ、おはよう望月くん」

俺は立花に熱い視線を送っている加隈を無視し、いつもの十字路で待ってくれている先輩の元へと駆け寄ると、先輩はワインレッドの髪を耳にかき上げながら微笑んでくれた。

その右手の薬指に、“エリネドの指輪”をはめながら。

「望月くん、ところで……あの二人はその……どうしたんだ……？」

そう言って先輩はおずおずと指を差す、その先では。

「もー！　コッチ来ないでよー！」

「いや立花違う！　ただ俺は、お前と一緒に学園に行きたいだけで……！」

加隈に追いかけられ、立花が困った顔をしながら逃げていた。

アイツ……そのうち捕まるんじゃないか？

「あ、あははー……な、何でしょうねー……」

「う、うむ……仲が良いのはいいのだが……」

アレは仲が良い……のか？

ま、まあいいや……それよりも。

「先輩」

「ん、どうしたんだ？」

俺は先輩の真紅の瞳をジッと見つめると、先輩は少し頬を赤らめた。

「はは……いえ、何でもないです……」

「ふふ、おかしな望月くんだな……」

その時。

――チョン。

「「っ！？」」

偶然にもお互いの指が触れ、俺も先輩も、思わず息を飲む。
だけど……俺は、もっとつながっていたくて。

「あ……」

俺は、先輩の左手の指に、自分の指を絡めた。
すると先輩も、同じように絡め、そして……潤んだ瞳で俺を見つめていた。

「こ、このまま……行きましょう、か……」
「……うん」

先輩は消え入りそうな声で、答えてくれた。
俺は……この指も、先輩の笑顔も、絶対に手放しません。

だから先輩……絶対に、最高のエンディングを迎えましょうね。

絡めた指（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて、第三章終了です！

明日からはゲームの主人公、立花アオイ視点の幕間などをお送りしてから、第四章へと突入します！

第四章では、ヨーヘイは先輩の傍にいるべく、何やら行動を起こすようです！

もちろん、新キャラも登場予定！　どうぞお楽しみに！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ボクの憧れの主人公①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
ここからは、幕間としてアオイ視点でお送りします！

ボクの憧れの主人公①

■立花アオイ視点

ボクには、居場所がなかった。

小さな頃から身体が弱くて、小学校では出席したり休んだりを繰り返していて、体育の授業なんかはいつも見学ばかりだった。

そんなだから、友達も全然いなくて、学校では、ボクはいつも一人ぼっち。

修学旅行も、一人っきりになるのが嫌で、ボクだけ参加しなかったっけ。

そんなボクのたった一つの趣味はゲーム。

どんなジャンルだって好きだけど、一番好きなのは、ＲＰＧかなあ。

だって、自分を鍛えて強くなって、絶対に裏切らない仲間がいて、思う存分冒険ができるんだもん。今のボクとは大違い。

多分、ボクは主人公に憧れて、自分ができないことをゲームの中でしていたんだと思う。

そんな大好きなゲームだったら、ボクは何時間だって遊べたし、実際に、ご飯やお風呂を忘れて遊んだりした。

家には、ボクに注意する人はいないし。

お父さんもお母さんも仕事が忙しくって、いつも家にいなくて、“ヒナエさん”っていうお手伝いさんが一人いるだけ。

このヒナエさんも、ボクに何一つ注意もしないで、ただニコニコしてるだけ。
だから、ボクは家の中では王様で、勇者で、主人公みたいに自由なんだ。

中学に入ると、病弱だった身体も良くなって、普通に学校に通うことができるようになっていた。

だけど……ボクの悪夢はここから始まった。

ボクの身体が細くてなよなよしてるからって、同じクラスになった男子達からからかわれるようになった。
女子も女子で、そんなボクを遠巻きに眺めながら、クスクスと笑っていた。

ああ、そういえば下駄箱の中にラブレターが入ってた時もあったっけ。
書かれていた場所に行ったらクラスの男子がいて、どういうわけかボクに告白してきた。
後で分かったんだけど、何かの罰ゲームで、ボクに嘘の告白をするってことになったらしい。

その時は、クラスの男子も女子も、ニヤニヤしながら眺めていた。
自分達は上手く隠れてるつもりなのかもしれないけど、そんなに大人数で覗(のぞ)いていたら、すぐにバレるのにね。

その後、クラスのみんなが、その時のことをネタにボクをイジメるようになった。
だから……ボクは、学校に通うのをやめた。

そうなると、毎日することがなくなって暇になるんだけど、ボクは逆にゲームをする時間が増えて、楽しくて仕方なかった。
ゲームの中では、ボクを馬鹿にしたりイジメたりする奴はいない。

家でゲームするだけじゃ飽き足らなくて、ボクはゲーセンにも足しげく通った。
おかげで、大好きなＲＰＧだけじゃなくて、音ゲーやクレーンゲームなど、ありとあらゆるゲームが得意になった。
まあ……ゲーセンでも、ボクを女の子と間違えてナンパしてきた奴もいたけど。

それでも、ゲームをしていたボクは幸せだった。

進学先の高校でも、周りはやっぱりボクを女の子扱いして、からかって……だから、やっぱり学校には行かずにゲーセンに入り浸っていた。

そんな、五月のゴールデンウィーク明けの平日昼間。
その日もいつものようにゲーセンでゲーム……この時はＴＣＡＧ（トレーディングカードアーケードゲーム）をしていると、どういうわけか、ヒナエさんがやって来た。

「アオイさん、今日はもう帰りましょう」
「え？　嫌だよ。ボクは今、このゲームをしてるんだから」

そう言って、ヒナエさんを無視してそのままゲームを続けた。
大体、今は大切な限定イベント配信の真っ最中なんだから、邪魔しないでよね……って。

「よし！　撃破！」

ミッションをクリアし、ボクは思わず、胸の前で小さくガッツポーズをした。
やった！　これで限定カードの“ジークフリート”と“ブリュンヒルデ”が手に入る！
そう思って、カード排出口に手をかざして、出てきたカードを取ると。

――ドクン。

「っ！？」

突然、ボクの身体をナニカが駆け巡った。
そして……ボクが確かに取ったはずのカードが、消えていた。

「え……？　ど、どういうこと！？」

訳が分からず、ボクは思わず叫んだ。
せっかく頑張ってイベントクリアしたのに、カードが手に入らなかったら意味ないじゃん！

仕方なく、ボクは店員さんにそのことを告げに行こうとした。

すると。

「なあなあ、俺達と一緒に遊ばない？」

ボクの前を遮るように、二人組の男が現れた。
……なんだ、またナンパか。

「遊ぶも何も、ボクは男だよ」

「ハハハハハ！　嘘を吐くにも、もうちょっとマシなのにしたら？　せっかく可愛いんだし」
「っ！　ウルサイ！」

ボクは悔しくて唇を噛むけど……ボクは弱い。
だから、男達を無視して行こうとする……んだけど。

「ハハ！　まあまあ一緒に行こうぜ！」
「は、離せ！」
「そんなつれないこと言わないで、ね？」

男達はボクの両脇を抱え、逃げられないようにしてゲーセンの外に連れて行こうとした。

「イ、イヤ……！」
「「マアマア」」

誰か……助けて……！

その時。

「……アン？　なん……っ！？」

――ドカッ！

ボクの左脇を抱えていた男が、突然吹き飛んだ！？
え……？　一体なにが……って！？

見ると……そこには、甲冑を着た、精悍な顔つきをした長身の男が立っていた。

その姿は、まるで……ＴＣＡＧの限定イベントで入手するはずだった、“ジークフリート”と同じだった。

「オオオ、オマエ……ひょっとして、精霊使いなのかよっ！？」

「へ……？　ボクが……精霊使い……？」

「ヒ、ヒイ……フゲッ！？」

そして、右脇を抱えていた男も、精霊によって吹き飛ばされると、男達は顔を真っ青にして逃げ去っていった。

「ね、ねえ……キミは、ボクの精霊……なの……？」

ボクは甲冑を着た長身の男に尋ねる。

だけど、この時のボクは、何故か怖いって思わなかった。

『（……コクリ）』

「頷いた……！　あ、あはは……！」

やっぱり！　この男は精霊で、ボクは精霊使いなんだ！

ボクは嬉しくなり、思わず笑った。

「じゃ、じゃあ！　キミは……キミの名前は、［ジークフリート］だよ！」

『（コクリ）』

これが、ボクと［ジークフリート］の出逢いだった。

ボクの憧れの主人公①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ボクの憧れの主人公②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ボクの憧れの主人公②

■立花アオイ視点

あの後、ボクは家に帰って精霊（ガイスト）のことについて徹底的に調べた。

ネットで情報を漁り、［ジークフリート］を召喚してその能力やスキルを調べたり……。

あいにく、ボクには時間が有り余ってるから。

そして。

「あは……あはは……！　そうか……ボクって実は、すごかったんだ……！　ボクは……ボクは、主人公にだってなれるんだ！」

嬉しかった。

だって、ボクは弱くて、女の子みたいで、ずっと引きこもって生きてくんだと思ってたのに、本当はこんなすごい力を持ってるだなんて……こんな、マンガやラノベみたいな主人公そのものなんだから！

「あはは……！　ボクを馬鹿にしたアイツ等は、今のボクを見たらどんな顔をするのかな……？」

気がつくと、ボクの口の端が吊り上がっていた。

でも、それもしょうがないよね。

本当に、物語の主人公みたいに……ボクは生まれ変わったんだから。

次の日、ボクは久しぶりに学校に行った。
だけど、入学してからまだほんの数回しか来たことがないから、全然落ち着かないや。

そして、教室に入ると、クラスの連中は一斉にボクを見た。
初めはボクが誰だか分からなかったのか、連中は訝しげな表情を浮かべたけど、すぐにボクだと分かると、ニヤニヤと下品な笑みに変わった。

「何だよアオイちゃん！　久しぶりじゃん！」

早速、クラスの男子の一人がボクに絡んできた。
あはは、馬鹿だなあ。

「なになに？　今まで家で女を磨いていた……の……！？」

召喚してボクの後ろに立たせた［ジークフリート］を見て、その男子は目を見開いて仰け反った。

「ええと……キミ、何て言ったの？」
「はえ！？　あ、え、ええと……」

ボクがニタア、と嗤うと、その男子が後ずさる。
あはは、まあ許さないけど。

「［ジークフリート］」
『（コクリ）』

ボクの言葉を受け、［ジークフリート］はその男子の胸倉をつかんだ。

「ヒ、ヒイイ！？」

「ねえ、ハッキリ答えてよ。今、ボクに何て言ったの？」

「わわ、悪かった！　た、ただの冗談……っ！？」

その男子が言い切る前に、［ジークフリート］はその男子を教室の端まで放り投げて叩きつけた。

当然、その男子は背中を強く打ち付けて、床で呻き声を上げながら悶えていた。

「な、なあアオ……い、いや、立花くん……ひょっと、して……精霊使い、なのか……？」

「そうだけど？　それが何か関係あるのかな？」

「あ、い、いえ……」

おずおずと尋ねる別の男子に、ボクはわざとらしくコテン、と首を傾げてみせると、露骨に目を逸らしてボクから遠ざかった。

あはは、さっきの男子みたいに痛い目に遭いたくないもんね。

「ねえ」

「「「「っ！？」」」」

ボクがクラスの連中に向かって声を掛けると、教室に入ってきた時とは打って変わって、全員がビクッてなった。

「ボクの精霊、［ジークフリート］っていうんだけど、すごいでしょ？」

そう尋ねると。

「お、おお！　ホ、ホントにすげえな！」
「たた、立花くん、スゴーイ！」
「う、羨ましいなあ！」

などと、まるでご機嫌取りのようにボクに賛辞を送ってくる。
今までは、散々馬鹿にしてきたくせに。

「ところでさあ……ボク、イジメられて引きこもっちゃったんだー……それって、誰が悪いのかな？」
「「「「「っ！？」」」」」

あはは、急にみんな、お互いの顔を見合わせ始めたよ。

「コ、コイツが立花くんのこと馬鹿にしてたの知ってる！」
「ハア！？　オマエこそ、立花は女だって！」
「わわ、私は立花くんに、そんなヒドイこと言ったりしてないからね！」

クラスの全員が、なすりつけ合ったり弁明したり、挙句の果てにはケンカする奴まで出てきた。あはは、本当に馬鹿だよね。

……ハア。

「……心配しなくてもいいよ。どうせ、こんな最低な学校に来ることなんて、永遠にないから。だから、キミ達みたいなクズと会うのも、これで最後だよ」
「「「「「……」」」」」

ボクはそれだけ言い残すと、反吐が出るほど居心地の悪い教室を出た。

それからすぐ、ボクの家に精霊特殊対策機関（ガイスト）……通称“ＧＳＭＯ（グスモ）”と名乗る人達がやって来た。

ひょっとして、学校での一件が耳に入って、ボクを逮捕しに来たのかと思ったけど、どうやらそうじゃなく、ボクに“国立アレイスター学園”への転校を勧めてきた。

その学園の名前なら、ずっと引きこもっていたこのボクでも知っている。この“東方国”で知れ渡っている、精霊使い（ガイスト）のための超有名なエリート校だ。

「あ、で、でも、一応その……両親に確認を取ってからでないと……」

ボクは逮捕されないと分かったことに安堵しつつ、そんなエリート校へのスカウトに胸を弾ませていたけど、それでも、お父さんとお母さんが許可しないと、さすがに転校なんて無理だ。

……といっても、お父さんもお母さんも、もう何日も顔を合わせたことすらないのに、どうやって許可をもらうのか知りたいけど。

すると。

「その件については、既にご両親から許可をいただいています。あとは、君次第です」

「そ、そうですか……」

あは……お父さんもお母さんも、ボクには全然会ってくれないの

に、こんな知らない人達とは会うんだ……。

なら。

「わ、分かりました……ボク、アレイスター学園に行きます」

「ありがとうございます。では、転校の手続きや住まいは、全て“ＧＳＭＯ”でご用意します。なお、転校していただく時期ですが、夏休み明け、二学期からとなります」

「は、はい」

二学期から、かあ……。

本当はこんな碌な思い出もないところ、今すぐにでも出て行きたいけど……仕方ない、かあ……。

そう考えてかぶりを振ると。

「ボクは……今度こそ変わるんだ。こんな女の子のような姿をした引きこもりなんかじゃなく、ゲームみたいな主人公になって、そして……一緒に戦ってくれるような、本当の友達を見つけるんだ……！」

そう呟いて、ボクは拳を握りしめた。

ボクの憧れの主人公②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ボクの憧れの主人公③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ボクの憧れの主人公③

■立花アオイ視点

「グアッ！？」

夏休み。

ゲーセンに向かう途中。中学の時にボクをイジメてた奴にバッタリ遭って、しかもボクに絡んできたから、クラスの連中みたいに「ジークフリート」で吹き飛ばしてやった。

あはは、本当にバカだなあ。

「おおお、俺達が悪かった！　だ、だからもう……っ！？」

「あはは！　ボクを今まで馬鹿にしてきたくせに、ただで済むと思ってるの？　しかも、わざわざこうやって絡んできてさあ？」

「ヒ、ヒイイ！？」

すると、連中の一人は倒れている奴を見捨てて逃げて行った。

うわあ、本当にクズだね。

「ねえ」

「うう……ヒッ！？」

倒れながら呻き声を上げている奴の髪をつかんでグイ、と持ち上げると、ソイツは恐怖で顔を引きつらせた。

「これ以上痛い目に遭いたくなかったら、あの時ボクをイジメてた連中、全員ここに呼び出してよ」

「わわわ、分かった！　すぐ呼ぶから！　だ、だから、もうこれ以上は……っ！？」

［ジークフリート］は無造作にソイツを放り捨てると、ソイツはボクとの約束を無視してさっきの奴みたいに走って逃げて行った。

「ハア……もうゲームする気分じゃないなあ……」

ボクは大きな溜息を吐くと、自分の家に帰った。

すると。

「「おかえり！」」

どういうわけか、家にお父さんとお母さんがいた。

「ふ、二人共、どうして……」

「何を言っている！　夏休みが明けたら、お前はあのアレイスター学園に通うんだ！　だから、母さんと一緒にお祝いをしようと思ってな！」

「ええ！　本当に鼻が高いわ！　あなたのおかげで、取引先の評判も良くなったし！」

あはは……どうやら二人は、一応このボクを祝ってくれるらしい。

でも、今までほとんど顔も合わせなかったくせに、アレイスター学園に転校するってだけで、こうやって会いに来るんだ。

「……いらない」

「「え……？」」

「お祝いなんていらない！　なんだよ！　いつも仕事、仕事って言

って、ボクとまともに顔も合わせたことないくせに、こんな時だけ！　どうせ、ボクなんてアレイスター学園っていう肩書がなかったら、価値がないって思ってるんだ！」

ボクはそう叫ぶと、リビングを飛び出して自分の部屋に引きこもった。

「アオイ！　開けなさい！」
「アオイ！」

二人がドアの前で叫んでるけど、知るもんか。
それどころか……。

「［ジークフリート］……あのウルサイ奴を追っ払ってよ」
『（……コクリ）』

ボクの指示を受けた［ジークフリート］は、部屋を出ると。

「な、なんだ……？　ガ、精霊（ガイスト）……！？　ガッ！？」
「チョ……チョット落ち着いてアオイ！？　ね、ねえ、この精霊（ガイスト）を……キャッ！？」

ドアの向こうから軽い悲鳴と、ドタバタと走り去る音が聞こえた後、それからすぐに静かになった。

「あはは……」

もう……ボクはこの部屋から出たくない。

◇

アレイスター学園に通う一週間前になり、ボクは“ＧＳＭＯ（グスモ）”が用意してくれたマンションに引っ越すことになった。

引っ越し業者がボクの荷物を運び出し、トラックは新居に向けて走って行った。

それを、ボクはヒナエさんと見送った。

「……じゃあ、ボクも行くよ」

「アオイさん、いってらっしゃい」

ヒナエさんが、ボクを笑顔で送り出してくれた。

あはは……お父さんもお母さんも、あれ以来二度とボクの前に姿を現われなくなったのにね。

さあ、これから新しい土地で、ボクの主人公としての生活がスタートするんだ！

えへへ……今度こそ、友達ができるかなあ……。

そんな風に期待に胸を膨らませながら、ボクはとうとう転校初日を迎えた。

真新しい制服に袖を通して、ボクは少し余裕を持って学園へと向かうと。

――ドン。

「おわっ！？」

「ふあ！？」

角から出てきた誰かとぶつかり、ボクは思わず倒れてしまった。

「す、すいません！　大丈夫でしたか！？」

その人は、ボクと同じ制服を着ていて、心配そうな表情で僕を見つめ、ス、と手を差し出した。

「ホラ、つかまって」

「あ、ありがと……」

そんな彼の手につかまり、ボクは立ち上がると。

「とりあえずぶつかったこと、謝らせて欲しい。俺は一―三の“望月ヨーヘイ”って言うんだ。本当にゴメン」

彼……望月くんは、深々と頭を下げた。

あは……ボクと同級生なんだ。しかも礼儀正しいし、その、アイツ等と違って優しいし……うん、これからすごく仲良くなれそうな気がする。

だから。

「えへへ、よろしくね！」

ボクは笑顔で右手を差し出す。

すると彼も、笑顔で僕の手を握り返してくれた。

これがボクと……本当の友達になる、望月ヨーヘイくんとの出逢いだった。

ボクの憧れの主人公③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ボクの憧れの主人公④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ボクの憧れの主人公④

■立花アオイ視点

その後、ボクは望月くんと……“藤堂サクヤ”先輩と一緒に、学園へと向かった。

藤堂先輩は学園で生徒会長をしているらしく、望月くんとすごく仲が良さそうだった。

ボクは、女の子に間違われたことよりも、その事実のほうが嫌だった。

……なんだか、悔しい。

ボクがもっと早くに望月くんと知り合っていたら、絶対にボクのほうがもっともっと仲良くなれたのに……。

少し雰囲気が悪いまま、ボクは二人と別れて職員室へと向かった。

すると……そこには、金髪で背の低い、琥珀色の綺麗な瞳をした女の子がいた。

外国の女の子なのかな……まるで、妖精みたいだ。

「アナタハ？」

「あ、ボ、ボク、今日からこの学園に転校してきた、“立花アオイ”！」

「ソウ……私（ヤー）は“プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ”、よろしク」

そう自己紹介すると、彼女……プラーミャさんは興味なさそうに

プイ、と顔を背けてしまった。
ウーン……気難しい人なのかな……。

その後、ボクとプラーミャさんは、担任になる葛西先生の後をついて行った。
どうやら、プラーミャさんもボクと同じ転校生で、しかも同じクラスになるみたい。

でも、それ以上にボクには嬉しいことがあった。
だって、ボクは望月くんと同じクラスになったんだ！
あはは、もうこれって運命なんじゃないかな！

やっぱり望月くんは、ボクの本当の友達になるために用意された人なんだ！

えへへ、席も彼の隣だし、ヒロインっぽいプラーミャさんもいるし、やっぱりボクは主人公だったんだなあ……。

ボクは望月くんの横顔を眺めながら、これからの学園生活に胸を弾ませていた。

◇

それから、ボクは望月くん達と一緒に、初心者用の領域（エリア）見学を済ませた後、一年生の必修課題である“グラハム塔”領域（エリア）で訓練をした。

望月くんは、藤堂先輩のほかにもプラーミャさんや、その双子の姉であるサンドラさんとも仲が良さそうだった。
聞いたところによると、プラーミャさんは夏休みにサンドラさん

のところに遊びに来ていて、その時に仲良くなったみたい。羨ましい。

だけどボクだって、これから望月くんともっともっと仲良くなるんだ！

だ、だから、もっと望月くんの傍にいないとね！　うん！

なのに望月くんは、ボクが近付くと、少し困った顔をするんだ。ボ、ボクのこと嫌いってわけじゃないけど……それでも、ちょっとショックだなあ……。

そんな風に過ごしていたボクだけど、転校四日目の金曜日……イヤな奴が教室にやって来た。

「オイ！　ゴブリンの野郎を出せ！」

初め、コイツが何を言っているのか分からなかったけど、他のクラスメイトがコッソリ教えてくれた。

コイツの名前は“加隈ユーイチ”。

一学期の時、望月くんを馬鹿にしていた奴らしい。

……こんな奴が！

気がついたら、ボクはコイツの……加隈ユーイチの前に立っていた。

「……なんだ、オマエ？」

「望月くんにオマエみたいな奴、会わせるわけないだろ。帰りなよ」

「あん！　ウルセエ！　大体オマエ、あのゴブリンの何なんだよ！」

何なんだよって、そんなの決まってる。

「ボクは……転校してきて初めてできた、望月くんの友達だよ。キミみたいなクズが、望月くんに会う資格なんてないから」

「オ、オマエ！　転校生のクセに生意気なんだよ！」

そう叫ぶと、教室に来た望月くんが慌てて駆け寄ってきた。

ひょっとしてボクのこと、心配してくれたのかな……だったら、嬉しいな……。

その後もこの加隈ユーイチと口論になり、とうとうこのクズは精霊（ストゥ）を召喚した。

だから、ボクは［ジークフリート］を召喚して、アッサリと倒した。

もう二度とこんな真似ができないようにトドメを刺そうとしたんだけど、望月くんに止められちゃった。

しかも、それだけじゃ飽き足らずに、望月くんは“グラハム塔”領域（エリア）の攻略に、加隈ユーイチもメンバーに加えたんだ。

当然ボクは反対した。

でも、望月くんは加隈ユーイチをメンバーに加えるといってきかない。

結局その時は、チームを二つに分けることで渋々頷いたけど……ボクはどうしても納得できない。

そんな気持ちが態度に出てたみたいで、ボクはプラーミャさんと事あるごとに衝突した。

でも、それもこれも加隈ユーイチと、望月くんが悪いんだからね？

ま、まあ、日曜日に一緒に遊ぶ約束もしたし、望月くんにあんなに真剣にお願いされちゃったから、結局は加隈……くんを加えることを許しちゃったんだけどね。

そして、いよいよ日曜日。

ボクは待ち合わせ時間より一時間以上も早く家を出た。

でも、望月くんも三十分前には来てくれた。

えへへ……こういうところ、気遣いができて本当に優しいなあ……。

その日は目一杯楽しんだ。

ゲーセンに行ったり、カフェでお茶したり……あ、あはは、これじゃまるで、デートみたい……。

そんな夢みたいな一日を過ごした日曜日から五日後。

ボクは……望月くんからダメ出しをされてしまった。

“グラハム塔”領域（エリア）を踏破して、望月くんに真っ先に報告したけど、実は望月くん達はボク達の様子をコッソリと見ていて……そして、ボクは及第点以下だって宣告されちゃった……。

分かったよ……望月くん……。

だったら、ボクはもっともっと強くなって、キミに認めてもらう！

藤堂先輩や、サンドラさんや、プラーミャさんや、加隈くんも必要ないくらいボクが強くなれば、キミはボクだけを隣に置いてくれるよね？

ボクだけを……見てくれるよね……？

ボクの憧れの主人公④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ボクの憧れの主人公⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ボクの憧れの主人公⑤

■立花アオイ視点

それからのボクは、たった一人で“グラハム塔”領域（エリア）に何度も足を運び、そして……ソロで踏破した。

これだけの実績があれば……ううん、藤堂先輩だってこれくらい、簡単にこなす。それはサンドラさんやプラーミャさんも。

なら、ボクはこの領域（エリア）を十回踏破しよう。

そうすれば、望月くんだってボクを認めてくれるよね？　ボクを、見てくれるよね？

そして、とうとう十回目の踏破を果たしたボクは、確実に強くなっていた。

［ジークフリート］のレベルだって、もう四十七になったし、領域（エリア）に入ってからタロースを倒すまでに、たったの二時間弱しか掛かっていない。

「えへへ……望月くん、こんなボクを見て褒めてくれるかなあ……」

ボクの今の姿を見て、望月くんが驚いたり嬉しそうにしたり姿を想像して、ボクの口元が緩みっぱなしだ。

さあ……準備は整った。

いよいよ明日、望月くんをここに呼び出そう。

そして、強くなったボクを見てもらうんだ！

その日の夜、ボクは望月くんに電話をした。

「明日……の、放課後……“グラハム塔”領域（エリア）の第六十階層……タロースのいるところに、来て欲しいんだ……キミ、一人で」

すごく緊張してたどたどしかったけど、ちゃんと望月くんに言えた。

望月くんは戸惑っていたみたいだけど、それでもちゃんと返事してくれた。

ボクは待ち遠しくて、ベッドの中に入って寝ようとするんだけど、興奮して全然眠れなかった。

次の日、ボクは学園をサボって“グラハム塔”領域（エリア）に来ていた。

望月くんを、待つために。

ただ、やっぱり朝から来ちゃったのは失敗だったなあ……。

結局五時間も待って、退屈だったボクはタロースが変化したマテリアルを踏みつけて粉々にしながら、時間を潰していた。

すると……望月くんは、約束通りたった一人でここにやって来た。

だから、ボクはこの領域（エリア）をソロで何度も踏破したことを自慢した。

それだけじゃない。ボクは……ボクの過去も話した。

「望月くん……キミだって、ボクと一緒だよね……？」

そう……望月くんも、ボクと一緒で、ゴブリンだなんて馬鹿にされて、蔑まれて、居場所を失くして……。

あはは、だからボクは、望月くんにこんなにも惹かれたんだろうなあ……。

なのに。

「だから……俺は、お前とは違う」

彼は……望月くんは、ハッキリと否定した。

しかも、一人で来て欲しいって約束したのに、藤堂先輩やサンドラさんを連れてきて……！

許せない！

許せない！　許せない！　許せない！

結局は、望月くんもアイツ等と同じだったんだ！

望月くんも……本当の友達なんかじゃなかったんだ！

その時。

――ボクの視界は、黒く染まった。

◇

「あはは……今から考えたら、ボクってバカだよね……」

部屋のベッドの上にポスン、と腰掛け、ボクはあの時のことを思い出して苦笑した。

あの後、ボクは望月くんにコテンパンにされて、思いあがっていたことを知って、そして……望月くんはボクのこと、本当の友達だ

って言ってくれて……。

プラーミャさんや加隈くんも、こんなボクのこと、仲間だって言ってくれて。

実際に、“レムリア”領域（エリア）を一緒に攻略して、二人がどれだけボク……いや、チームに心を配ってくれていたのか、よく分かった。

「本当にボク、何も見えてなかったんだなあ……」

望月くんはボクのそういうダメなところもちゃんと見てくれて、ボクに嫌われるのを覚悟の上で、指摘してくれていたんだ。

「あは……ホント、望月くんは最高に主人公だよ」

なのに望月くんは、「自分は主人公じゃない、主人公は立花だ」って言ってきかないんだよね……。

まあいいや。

「望月くんが主人公なのは、このボクだけが知ってる。それでいいよね……」

うん……そして、ボクもいつか望月くんみたいな、本当の主人公を目指すんだ。

ボクの、仲間と一緒に。

「あー……でも……」

ウーン……加隈くんだけは、本当に遠慮したい、かなあ……。

“レムリア”領域（エリア）で金の歯車をくわえたイヌワシの幽鬼（レブナント）と戦った時、ボクが彼を助けてから妙にくっついてくるんだよね……。

しかも、時々ほっぺたを赤くして、チラチラとボクの顔を眺めてくるし……。

眺めてくるって言えば、プラーミャさんも一緒か。

彼女も加隈くんと一緒で、“レムリア”領域（エリア）の攻略の時からだよね。

まあ、目を合わすとプイ、ってすぐに顔を背けられちゃうけど。

「えへへ、まあいっか」

ボクはポケットから一枚のメダルを取り出すと、ピン、と親指で弾いた。

このメダルは、望月くんとゲーセンで一緒に遊んだ時のゲーム用のメダル。

ボクの、一生の宝物。

「望月くん……これからも、ボクはキミを追いかけ続けるよ！　いつか、キミみたいになれるように！」

ボクの憧れの主人公⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日も幕間として先輩視点とサンドラ視点を一話ずつと、あと一話を投稿予定です！

次回は今日の午後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

君を、信じているよ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今日も幕間をお届け！

君を、信じているよ

■藤堂サクヤ視点

「さて……そろそろ時間だな」

部屋の時計を眺め、お父様の研究所へ行く支度を始める。

といっても、研究所ですることなど、ベッドの上に裸で寝そべりながら色々な管をつけられ、ただ、“ウルズの泥水”を供給されるのを眺めているだけだが、な。

「おっと、この“エリネドの指輪”も外しておかないと」

何といっても、今日は彼が言ういざという時だからな。

だけど。

「ふふ……彼は一体、この私にどれほどのものをくれるつもりなのだ……」

机の引き出しに大切に置いた“エリネドの指輪”を眺めながら、私は顔を綻ばせる。

“シルウィアヌスの指輪”と合わせ、彼は返しきれないほどのものをくれた。

だから私は、彼に一生かけて返していこうと思う。

「それにしても……」

問題はサンドラだ。

やはり彼女も彼にとって大切な女性（ひと）だから、私と同じように“リネットの指輪”を手渡された。
しかもサンドラときたら、その指輪を嬉しそうに受け取ると、堂々と左手の薬指に……！

「ま、まあ、私は二つ貰っているし、しかもその指輪は、絶対に外れないようになっているがな」

などと、訳の分からないことを呟いてしまっているが……うん、やめよう。
サンドラも、私にとって大切な後輩であり、仲間なのだから。

それに、サンドラが彼に恋人役になって欲しいと頼んだ際に、私に耳打ちした言葉。

『フフ……これはあくまでも恋人のフリですからヲ……ですが、もちろん勝負はフェアですわヨ？』

と、宣戦布告をされたのだから。

「なら……私も、指輪もフェアでないと、な……」

とはいえ、私も譲る気はない。
だから、正々堂々と戦おうじゃないか。

私は口の端を持ち上げると、部屋を出て研究所へ向かった。

◇

「ふむ……やはり、“ウルズの泥水”は半分しか供給されないか……」

お父様が顔をしかめながら、研究員から手渡された資料に目を通して呟く。

ふふ……彼がくれたこの“シルウィアヌスの指輪”がある限り、“ウルズの泥水”が私の中に半分以上供給されることはない。

それよりも……不快、だな。

というのも、様々な管に繋がれたこの私の裸体を見て、鼻を伸ばす研究員がちらほらといるのだ。

以前はそんなこと気にも留めていなかったが、望月くんと知り合ってから、そのような視線が嫌でたまらない。

……彼だったら、私の裸を見てどう思うかな。

綺麗だって言ってくれるかな……いや、彼のことだ。すぐに恥ずかしがって、顔を赤くしながら目を逸らすに違いない。

ふふ……やっぱり望月くんは可愛いな。

「サクヤ。この前ほどではないにしろ、また［関聖帝君］のステータスが上昇しているが……」

「……はい。つい先日、“グラハム塔”領域（エリア）で、柱の守護者と思われる大蛇の幽鬼（レブナント）と交戦し、倒しました」

彼のことを考えていたら、急にお父様が尋ねてきたため、私は慌てて答えた。

とはいえ、努めて冷静を装ってはいるが。

「そうか……だが、サクヤは既に踏破しているし、能力的にも、“グラハム塔”領域（エリア）に行く価値はないと思うが？」
「はい。その時は、後輩の指導を行っておりました」
「ふむ……ひょっとして、彼……望月くんか？」

彼の名を告げると、お父様がニヤッと口の端を持ち上げた。
だけど……その瞳は笑ってないように見える……。

「い、いえ、彼もその場にいましたが、私はこの前転校してきた立花アオイくんとプラーミャ＝レイフテンベルクスカヤさん、そして、一―二の加隈ユーイチくんの指導を……」
「ふむ……これは一度、望月くんと一度会って話をしないとな。サクヤの父として」
「お父様！？」

ななな！？　お父様が望月くんと会う！？　しかも、学園長としてではなくプライベートで！？

「む、何だ？　私が彼と会うとなにかマズイことでもあるのか？」
「いいい、いえ！？　決してそのようなことは！？」
「ふむ……まあいい。とりあえず、楽しみは取っておこう……」
……サクヤはやらん（ボソッ）」
「お父様！？」

こ、これは何としてでも、望月くんをお父様に認めさせねば……！

「まあ、その話は置いておいて……サクヤ、次回から“ウルズの泥水”の供給量を倍に増やす。いいな」
「っ！？」

真剣な表情に戻ったお父様はそう告げると、私は思わず息を飲んだ。

そんな……それでは、望月くんの苦労が……！

「……不満か？」

「い、いえ……そういうわけでは……」

お父様にジロリ、と睨まれ、私は口をつぐむ。

「サクヤ、お前は母さんに逢いたくないのか」

「そ、そんなことは……！」

「なら、サクヤも協力してくれ。お前の中にある、その種こそが、唯一の手段なのだから」

「……はい」

お父様は微笑みながらそう告げると、私の傍から離れていった。

「っ！　……勝手なことを！」

お父様の言葉を思い返し、私はギリ、と歯噛みする。

もちろん私だって、あの優しかったお母様に逢いたい。

でも……もう、お母様はいないのだ。

それでもなお、お父様はお母様の面影を追い続けている。

それが……神の摂理から離れることになろうとも。

そして私は、身体の中にある種を育てる。

ただの、苗床として。

「ふ、ふふ……結局のところ、お父様にとってこの私は、ただの道

具でしかないのだろうな……」

……いや、確かに私は、お母様がいなくなったあの日、苗床となることを受け入れた。

そのために血のにじむような思いで、［関銀屏（かんぎんぺい）］……いや、［関聖帝君］をここまで強くしたのだから。

九つの柱を、打ち倒すために。

でも。

「お母様……申し訳ありません……私は、お母様よりも大切な人に出逢ってしまいました……」

私は唇を噛みながら、左手薬指の“シルウィアヌスの指輪”に触れる。

そんな大切な彼の想いに、優しさに、私はどうやって応えるべきなのか。

決まっている。彼が望むように、この種を芽吹かせないことだ。

それこそが、彼の望んでいることなのだから。

「ふふ……正確には、種を芽吹かせないことで、この私を救うこと、だろうな……」

お父様は、種を芽吹かせたとしても、私の身体に影響はないと言っている。だが、それを素直に信じろと？

そんな曖昧な言葉などより、彼の……望月くんの想いのほうが比べることもおこがましいほど、信じることができる。

だから。

「望月くん……これからもずっと、誰よりも君を信じているよ」

たとえ、この私が救われなくても。

――君が、私を救ってくれたから。

君を、信じているよ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ワタクシは、負けなイ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ワタクシは、負けなイ

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

「ンフフー」

ワタクシは今、自分の部屋で左手の薬指にはめている、“リネットの指輪”を眺めていル。

これは、“レムリア”領域（エリア）でヨーヘイがプレゼントしてくれた、大事な大事な宝物。

「ですけド……本当にヨーヘイはバカですわネ。こんな、下手をしたら国宝級ともいえる程の貴重なアイテムを、いとも簡単にワタクシにプレゼントするだなんテ……」

そんな憎まれ口を叩いてはみたものの、本音は嬉しくて仕方がなイ。

この指輪をプレゼントしてくれたこともそうだけど、それ以上に、あの時ヨーヘイがワタクシと藤堂先輩に告げた言葉。

『それよりも、その指輪よりも……って、違うな。この世のどんな貴重なものよりも、誰よりも俺のことを信頼してくれる、二人のほうが大切なんだ』

あの言葉を思い出すたび、ワタクシの頬はかあ、と熱くなル。

それほどまでに、このワタクシのことを信頼してくれテ、必要としてくれテ……。

「ア、そ、そうですワ！　この指輪を貰ったお礼をしませんト！」

ワタクシは今思い立ったかのように叫んダ。

本当は、そんなのはただの口実で、ただヨーヘイと一緒にいたいだけなんですけド。

――コンコン。

「ハ、ハイッ！？」

「サンドラ、ちょっといイ？」

突然ノックされ、ワタクシは上ずった声でプラーミャを部屋に招き入れると、プラーミャは少し疲れた表情を浮かべていタ。

ど、どうしたんだろウ……。

「プ、プラーミャ？」

「聞いてよサンドラ！　今日もアオイとユーイチと一緒に“アルカトラズ”領域（エリア）に行ったんだけど、結局ユーイチが調子に乗ったせいで、第四階層までしか行けなかったのヨ！」

「アアー……」

今、プラーミャは立花クンと加隈クンの二人を連れて、“アルカトラズ”領域（エリア）を攻略していル。

ヨーヘイから、二人を鍛えつつ第二十階層の祠（ほこら）で【水属性反射】を二人に習得させるように頼まれたのダ。

だけド。

「あ、あまりうまく行ってないようですわネ……」

「そうヨ！　こんな面倒なこト、引き受けるんじゃなかったワ！」

などと、プラーミャは頬を膨らませながら怒っているけド……フフ、そんなこと言いながら、ヨーヘイに頭を下げられた時、少し嬉しそうにしていたの、知ってるんですのヨ？

「それにしても……アオイはともかく、なんでユーイチまで鍛える気になったのかしラ？」

そう言うと、プラーミャは腕組みして首を傾げタ。

「フフ、決まってますワ。だって、ヨーヘイですもノ」

「何そレ……」

ワタクシの言葉に、プラーミャは呆れた表情を浮かべル。

一―三に来るまで、ヨーヘイがあの加隈クンから酷い仕打ちを受けていたのは知っていタ。それでも、ヨーヘイはそんな彼に発破をかけて、今ではヨーヘイを信頼し、慕うようになっていタ。

本当に、ヨーヘイはバカ。

どんなヤツにだって、勝手に救って、勝手に優しくして、勝手に好かれて……。

「それデ……プラーミャはもう、あの二人の引率はやめるノ？」

「べ、別にそうは言ってないじゃなイ……」

フフ、プラーミャは素直じゃないんだからラ……本当は、立花クンも加隈クンも、嫌いじゃないんでショ？

プラーミャは興味ない人については、名前すら覚えないですものネ。

「デモ……」
「デモ？」
「何というか、そノ……アオイって、何だか不思議な感じがするのヨ……ええと、惹きつけられるっていうのかしラ……」
「へエ……」

プラーミャがこんなこと言うなんて珍しいですわネ。
でも、惹きつけられる、かア……。
確かに、プラーミャの言う通りアオイには何かワタクシ達と違うものを感じル。
ワタクシには既にヨーヘイがいますからそこまでは感じませんけど、ヨーヘイよりも先にアオイと関わりが強くなると、アオイのほうに惹かれる人が多いかもしれませんわネ。

「まあ、ワタクシとしてはこのままプラーミャにコミュニケーション能力を高めていただけると助かりますけド」
「ハア！？　ヤ、私（ヤー）は普通に人付き合いできるわヨ！　ただ、私（ヤー）はサンドラ一筋なだけなんだからラ！」

……ワタクシとしては、それをどうにかして欲しいんですけド。

「そんなことよリ！　最近、サンドラったらいつもその指輪を見てはニヨニヨしてるじゃなイ！」
「フエ！？」

プラーミャに指摘され、ワタクシは思わず変な声を出しタ。
こ、これは困りましたワ……。

「前に駅前の骨董屋で買ったって聞いたけド……さてハ！」
「なな、なんですノ！？」

ワタクシはサッと指輪を胸に抱えて守るように身構えタ。

「ヨーヘイに、プレゼントしてもらったんでショ！」

「フエエエエエエエエエエエエエエ！？」

ナ、ナンデ！？　どうしてプラーミャは分かったノ！？

「フフフ……この私（ヤー）にはお見通しなのヨ！　デモ、これで藤堂様に一歩リードって感ジ？」

そう言ってプラーミャは口の端を持ち上げタ。

「え、ええト……指輪は、先輩も貰っていテ……」

「ハア！？」

ワタクシの答えを聞き、プラーミャは顔をしかめタ。

「アイツ……！　またこんなハッキリとしない真似ヲ！」

「フエ！？　ヨ、ヨーヘイは、その……ヨーヘイだから……」

そう、ヨーヘイは無自覚に、そして無意識に、すぐ優しくしちゃうかラ……。

デモ……ヨーヘイはあの時、確かに言ってくれた。

『どうしても贔屓（ひいき）はしちゃうけど』

って。

それって……少なくとも、ワタクシと先輩はヨーヘイにとって特

別ってことデ……。

「フフ……」

「ハア……全く、サンドラはしょうがないわネ……」

思わず口を緩めるワタクシを見ながら、プラーミャが苦笑すル。

今は、これだけでいイ。

だけド。

「フフ……ワタクシ、負けませんワ」

“リネットの指輪”をそっと撫でながら、ワタクシはそう呟いた。

ワタクシは、負けなイ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

二度目の面会（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

二度目の面会

「よう」
「……ふふ、相変わらずね」

土曜日、俺は藤堂先輩と一緒に、また悠木に面会しに施設にやって来た。
聞きたいことはこの前聞いたし、別に用事があるわけじゃないけど……まあ、この前約束したからな。ルフランのガトーフレーズ持ってまた来るって。

で、施設の人に許可を取ってあるから、今、悠木の目の前にはガトーフレーズとペットボトルの紅茶が置かれていた。

「はは、紅茶だけはペットボトルだけど我慢してくれ」
「……そんな、充分過ぎるほどよ」

そう言って、悠木は涙を一滴零(しずくこぼ)した。

「そ、そんなことより早く食べようぜ！　時間も限られてるんだし！」
「……ふふ、そうね」

悠木は指で涙をすくうと、フォークでガトーフレーズを一口サイズに切り、口に入れた。

「……美味しい！」
「まあ、ルフランのスイーツだからな。当然だ」

そして……先輩、同じものが先輩の目の前にもありますよね？
なのに、どうして俺のガトーフレーズを見つめてるんですか？
俺はそんな先輩に苦笑すると、ス、と無言で皿を差し出した。

「むむ……そ、その……いいのか……？」

ガトーフレーズと俺の顔を交互に見る先輩に、俺は無言で頷くと。

「う、うむ！　……ふふ、やはり美味しいな」

ハイ、先輩はガトーフレーズの上に鎮座しているイチゴに無慈悲にも思い切りフォークを突き刺してそのまま頬張ると……うん、口元がゆるっゆるだ。

「……相変わらず、望月くんは藤堂先輩と仲が良いのね」
「おう、まーな」
「あう!?　ま、まあ、私と望月くんは仲が良いな、うん」

悠木にそんなことを言われ、先輩が焦っている。こういうところ、本当に可愛い。
普段は凛としていてすごくカッコイイんだけど、こういうギャップがたまらない。
……できれば、こんな姿を見れるのは俺だけの特権だといいんだけどな。

「あう……そ、その、あまりジロジロと見ないで欲しい……」
「あ、す、すいません……」

先輩は顔を真っ赤にして俯(うつむ)きながら、そんなことを呟いた。

俺も頭を掻きながら謝ってはみたものの……うん、全部先輩が尊いからいけないんだな。

「……そうだ、望月くんに大事な報告があったの忘れていたわ」

「報告？」

少し呆れた表情の悠木に声を掛けられて俺は正気に戻るが……報告って、なんだ？

「……おかげさまで、九月末にここを退所することになったの」

「本当か！　良かったな！」

オイオイ何だよ、最高の報告じゃないか！

それだったら、ガトーフレーズ食べる前に言ってくれても良かったんじゃないのか？

「……さすがに、またアレイスター学園に戻る、ってことは無理だけど、今度は“メイザース学園”に通うことが決まったわ」

「おお……！」

悠木の告げた“メイザース学園”というのは、『東のアレイスター、西のメイザース』と呼ばれるほど、“東方国”を二分する有名な精霊使い養成校だ。

「アレ？　でも、メイザース学園って言ったら……」

「……ええ。彼女……木崎セシルがいる学園ね」

「あー……やっぱり……」

俺を“グラハム塔”領域の第二十一階層に閉じ込めたことで、無期限停学処分を食らった後に、勝手に退学して転校したところが、

まさにメイザース学園だもんなあ……。
あのクソ女も、悠木みたいに改心したのかね。

「……ふふ、安心して。私が向こうに行っても、もう彼女とは関わり合いになることはないわ」
「そ、そう？」

どうやら俺の思考を先回りして、悠木はクスクスと笑いながらそう答えた。
いや、あのクソ女に影響されて、また悠木がおかしなことになられても困るからな。

「でも、さすがというか何というか……よくメイザースに編入できたな」
「……実は、ここの退所もそうだけど、全てアレイスター学園の学園長が手配してくれたらしいの」

そう言うと、悠木はチラリ、と先輩を見た。
もちろん、この俺も。

「ふふ……どうやら学園長が、私の知らないところでそう判断したのだろう」

先輩は肩を竦めてそう答えるけど……はは、嘘が下手だなあ。

「なら、学園長にこう伝えてください。『やっぱり、あなたは俺にとって最高の女性（ひと）です』って」
「あうあうあう！？　ううう、うむ、必ず伝えよう！　そうとも！」

先輩は顔を赤くしてわたわたと両手を振りながら、口元を緩めた。

「すいません、時間です」

おっと、もう面会時間も終わりか。

「それじゃ悠木、また来る……って、そうかー、もう向こうに行っちまうんだよなあ」

うん、今月一杯で施設も出るし、逆に今以上に会う機会がなくなるな。

……せっかく、悠木とも仲良くなれたんだが、な。

「あ、あの！」

「ん？　どうした？」

「……その、もしよかったら……連絡先、交換しない？　そうすれば、向こうに行っても……」

「おう！　そうだな！　じゃあ……」

そう言って、俺は素早く紙切れにメッセージアプリのＩＤをメモすると。

「すいません、これを悠木に渡してもいいですか？」

「はい、大丈夫です」

俺は施設の職員に、メモを悠木に渡してもらった。

「あ……」

「退所したら、絶対に連絡くれよ！」

「うん……！　ありがとう……！」

そう言うと、悠木はそのメモをキュ、と胸に抱いた。

「じゃあな！」

「ええ！　また！」

俺は笑顔の悠木に手を振りながら、面会室を出……ると。

「むううううううううううう！」

……先輩が、頬をプクー、と膨らませながら拗ねていた。

「え、ええとー……」

「フン！　君はいつもそうだ！　いつもいつも無自覚に！　その…
…少々だらしないのではないか？」

「ええー……」

お、俺の一体何がだらしないっていうんだろうか……。

『ハアー……藤姉さま、マスターはこういう男なのです。ここはもう、受け入れるしかないのです』

「むむ……」

［シン］の訳の分からない説明なのか慰めなのか、なんともいえない言葉を先輩に告げると、先輩は呻いた。

……ここは、先輩のご機嫌を取っておいたほうがいい気がする。

「せ、先輩！　悠木との面会も思ったより早く終わりましたし、そ、その……せっかくですから、この後ルフランに行きませんか？　も、もちろん俺の奢りで！」

そう言った後、俺は上目遣いで先輩の表情をチラリ、と覗き見る。
スイーツで機嫌を取るなんて、我ながらこすいとは思うけど……
ど、どうだ？

「ううう、うむ！　そ、そうだな！　時間も余っているし、そ、その……私も、この後は用事もないからな！」
「！　は、はい！」

よし！　先輩の機嫌がよくなったぞ！
俺は思わず小さくガッツポーズをしていると。

「だが、私は最低三つ食べるからな」
「はい……」

ジロリ、と睨まれ、俺は顔を伏せた。

その後、俺は先輩にルフランでスイーツをご馳走した。しかも、五つ……。

二度目の面会（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

いよいよ明日からは第四章に突入！

第四章では、学園ファンタジーのお約束、部活動と学園祭イベントです！

もちろん、新キャラも登場予定！　お楽しみに！

次回は今日の午後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一緒に行けない！？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第四章、開幕です！

一緒に行けない！？

「くあ……！」

朝になり、俺は大きく伸びをするとベッドから……って。

「［シン］ー……いい加減、俺の上に乗っかったまま寝るなよなー……」

『すぴー……すぴー……』

俺は呆れながら［シン］をジト目で睨むが、当の［シン］はお構いなしに気持ちよさそうに寝ている。チクショウ。

「ホラ！　起きろ！　もう朝だぞ！」

『ムニャムニャ……今日は日曜日なのです……［シン］はまだ寝るです……』

「何言ってやがる、今日は水曜日だろうが……」

まあ、精霊（ガイスト）に曜日の感覚があるほうがおかしいんだけど。

というかいつも思うが、なんで精霊（ガイスト）のくせにこんなに寝るのが大好きなんだよ。

「おっと、いけない。もうこんな時間だ」

俺は［シン］を無理やり押し退け、制服に着替えてリビングに向かう。

「おはよう」

「あら、おはよう」

キッチンで朝の支度をしている母さんに声を掛け、既に用意されている朝食の前に座る。

うむうむ、今日はトーストと目玉焼き、コーンスープか。

「いただきます」

手を合わせた後、目玉焼きをトーストに乗せてかぶりつく。うん、美味い。

まあ、子どもの頃にアニメでこんな食べ方をしているのを観てから、ずっと真似してるんだよなあ。

『はうはうはう！　マスター、何で先に行っちゃうのですか！』

などと叫びながら、慌ててリビングに入ってきた［シン］。

「当たり前だろ。早く家を出ないと、先輩を待たせるだろうが」

『はう！　相変わらず、マスターは先輩スキーなのです！』

当然だろう。

俺の中で最優先は、常に藤堂先輩なのだ。

というわけで、俺は急いで朝食を口の中に放り込むと。

「ごちそうさま」

「はい、お粗末さま。あ、そうそう」

「？　何？」

「今度、藤堂先輩を家に連れていらっしゃいな。その時は母さん、腕をふるうわよ」

そう言って、母さんは腕まくりをする仕草をした。
でも……うん、家に招待するのもアリかもなあ。

「分かった、今度先輩に話をしてみるよ」
「ええ」

俺は席を立って洗面所に向かい、歯磨きと洗顔を済ませると。

「よっし！」

気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩いた。これも、俺のルーティーンだ。

「行ってきます！」
「行ってらっしゃい」

母さんに見送られ、俺と［シン］は家を出た。
うん、この時間なら先輩との待ち合わせ時間（注：待ち合わせてはいない）にも余裕だな。

「あ！　望月くん！」

先輩の待つ十字路にたどり着く前に、路地で待ち構えていた立花が、俺を見るなりぱあ、と顔を綻ばせ、パタパタと駆け寄ってきた。

「望月くん、おはよ！」
「おう、おはよう」

早速立花は俺の隣を一緒に歩く。というか、近い、近すぎる。
で、いつも通りなら……。

「オッス！　立花！　望月！」
「わ！？」

とまあお約束として、加隈の奴が俺と立花の間に後ろから割り込んできやがった。

「もう！　いつもいつも邪魔して！」
「ええー……そ、そうは言ってもよー……」

んで、立花に怒られ、加隈はシュン、とする。いや、そんな顔しても需要ないから。

「それよりさ！　もうすぐ学園祭じゃね？　お前達のクラスの出し物ナニヨ？」

加隈は急に笑顔になって話題を変え、俺達にそんなことを尋ねてきた。立ち直り早いな。

「えーと……まだ決まってなくて、今日の朝のＨＲで投票するよ」
「そうかー、ちなみにうちのクラスは“メイド喫茶”になったぞ！」
「ベタだな、おい……」

今時メイド喫茶なんて、流行らんと思うけどな。
それにしても……学園祭、かあ……。
先輩と一緒に回ったら、最高だろうなあ。

よし、先輩を誘おう。

立花にバレないようにコッソリとガッツポーズしながらそう意気

込みと、俺達三人は先輩の待つ十字路へと向かう。

「む、みんな、おはよう」

「「「おはようございます！」」」

はは、先輩は案の定、まるでバッタリ出会ったみたいな態度で挨拶をした。

というか、今日も朝から先輩の尊みがすごい。

「立花！　俺達は先行こうぜ！」

「ちょ！？　加隈くん！？」

加隈に腕を引っ張られ、二人が俺と先輩から離れて行った。

「ちょっと！　何するのさ！」

「バ、バカ、気を遣えよ！」

などと少し離れた先で二人が口論してるけど……俺はそんな加隈に、静かにサムズアップした。加隈、ナイス。

「あ、あう……ま、全く加隈くんは何を言っているのか……」

「あはは、そうですね。それより、来月の学園祭のことなんですけど……」

顔を赤くして恥ずかしそうに俯く先輩に、俺は学園祭の話題を振った。

もちろん、先輩をお誘いするために。

すると。

「あ、ああ、うむ……実はそのことで、私からも君に話があったのだ……」
「はえ！？　そ、そうなんですか？」
おおっと、まさか先輩も俺を誘おうと思ってくれてただなんて、ちょっと……いや、メチャクチャ嬉しいぞ！
いやもう、待ち遠しくて仕方ないんだけど……って、アレ？　なんだか先輩の様子がおかしい……。
「……これからしばらくの間……少なくとも、学園祭終了までは、放課後は君と一緒に領域（エリア）に行ったりすることができない……」
「えええええええええええッッッ！？」
唇をキュ、と噛んだ先輩から放たれた無情の言葉に、俺は朝の通学路で絶叫した。

一緒に行けない！？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

部活動コミュ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「……これからしばらくの間……少なくとも、学園祭終了までは、放課後は君と一緒に領域（エリア）に行ったりすることができない……」

「えええええええええええええッッッ！？」

唇をキュ、と噛んだ先輩から放たれた無情の言葉に、俺は朝の通学路で絶叫した。

「どど、どういうことなんですか！？」

俺は思わず藤堂先輩に詰め寄る。

領域（エリア）に一緒に行けないのもそうだが、それ以上に先輩と放課後に一緒にいられないってことが何よりもつらい。

「学園祭の運営については、自主性をはぐくむという理念の下、全て生徒達に委ねるというのがアレイスター学園の方針でな……そうなると、運営責任者は生徒会、ということになる……」

「あ……」

「当然、生徒会長であるこの私が、これから学園祭を成功に収めるためにも、そちらにかかりっきりになってしまうのだ……」

先輩は本当につらそうに、訥々（とつとつ）と理由を語った。

そうだった……先輩は生徒会長で、本来だったら俺達と一緒に領域（エリア）攻略なんてしている暇もないほど忙しいはずなんだ……。

それこそ、先輩の好意でいつも来てくれて、見守ってくれて……。

「だから、その……本当に、すまない……」

絞り出すような声で、先輩は深々と頭を下げながら謝った。

「や、やめてください！　むしろ、俺のほうこそすいませんでした！　先輩の好意に甘えて、いつも頼ってばかりで……！」

「そ、そんなことはない！　私だって、君が私にどれほどのものを与えてくれていると思っているのだ！　感謝なんて言葉だけでは表せないくらいなのだぞ！」

「で、ですが！」

俺と先輩は、何故か通学路で押し問答をしてしまう。

そして。

「……プ」

「ププ」

「「アハハハハハハハハハハハ！」」

そんな様子がついおかしくなってしまい、俺は思わず笑ってしまった。

それは先輩も同じみたいで、さっきまでに悲壮な顔とは打って変わり、今は愉快そうに腹を抱えている。

「ハハハハハ！　本当に、君は……」

「あはは！　それはコッチの台詞（セリフ）ですよ、先輩！　ですが……分かりました先輩、学園祭の準備、頑張ってください！」

「ああ！　だ、だがその……昼休みや休日は、問題なく時間が取れるから……」

そう言うと、先輩は上目遣いで俺を見ながら、両手の指をコチョコチョとしていた。

「もちろんですよ！　俺だって……先輩と一緒に、いたいですから……」
「あう……うん」
そして俺達は、普段通りの様子に戻って、学園へと急いだ。
◇
「では、また昼休み」
「はい！」
俺は教室へと向かう先輩へ、その姿が消えるまで手を振り続けた。
先輩も、何度もこちらへと振り返っては、手を振ってくれた。
さて……となると、いよいよ俺も、部活動コミュを選択する時がきたようだ。
『攻略サイト』によると、この『ガイスト×レブナント』というゲームは、主人公が何らかの部活動に入るイベントが用意されているというか、主人公の部活動への加入は強制らしい。
当然、部活に入れば、精霊（ガイスト）のステータスとは別の、主人公にのみ用意されている『学力』、『体力』、『魅力』の三つのパラメーターが、運動部なら『体力』、文化部なら『学力』といったように、部活の特性に応じて上がる仕組みなのだ。
となると、俺が入る部活動は当然、“生徒会”一択だ。
生徒会に入っちまえば、それこそ先輩とずっと一緒にいられるし、何より、今までお世話になっている先輩を手伝うことで恩返しができる。まさに一石二鳥だ。

「ただ、なあ……」

そう、生徒会に入る上で、一つだけ懸念がある。
それは……生徒会には、ヒロイン候補がいるのだ。

もちろん、全ての部活動に一人ずつヒロイン又は仲間候補がいるんだけど、生徒会だけは特別だ。
なにせ、生徒会のヒロインは、先輩とは犬猿の仲なのだから。

「……確か、『攻略サイト』によれば、三学期の生徒会長選挙で先輩とヒロインが争って、主人公がヒロインの手伝いをしたりして好感度を上げつつ、いつも先輩に勝てないヒロインがコンプレックスを抱いて嫉妬して、それで闇堕ち……って流れだったな」

いや、トラブルの予感しかしない。
コレ……絶対に面倒なことになるじゃん。

「でも……行くしかない……！」
「ドコに行くんですノ？」
「ドコ……って、うあ！？」

拳を握って意気込んでいると、いつの間にか隣にいるサンドラが、不思議そうに俺の顔を眺めていた。

「あ、ああいや……その、ちょっと考えごとしててな……」
「フフ、変なヨーヘイ。それより、早く行かないと遅刻ですわヨ？」

おっといけね。
いずれにしても、もう答えは出てるんだから、ヒロインについて

考えるのは後にしよう。

クスクスと笑うサンドラの後を追いかけ、俺達は教室へ向かった。

部活動コミュ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

学園祭の出し物（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

学園祭の出し物

「それでは、学園祭の一―三の出し物を決めますので、やりたいものがあれば挙手してくださーい」

朝のＨＲは、予定通り学園祭の出し物について決める会になった。

「ねえねえ望月くん、キミはどんな出し物がいいと思う？」

「俺？　そうだなあ……」

隣の席の立花に興味津々に尋ねられ、俺は腕組みをしながら首を捻った。

……そういえば、『攻略サイト』にも学園祭イベについて書かれたページがあったな。

俺はスマホを取り出し、コッソリと『攻略サイト』のページを眺める。

ふむふむ、ゲームでは『お化け屋敷』、『メイド喫茶』、『展示ブース』の三つか。

『お化け屋敷』ではヒロインと一緒にお化け役をすることで、ちょっと嬉しいイベントがある、と。

『メイド喫茶』は言わずもがな、だなあ。

最後の『展示ブース』は、ラクチンで他のクラスの出し物を見て回る時間がある代わりに、同じクラスのヒロインとの好感度が上げづらいのかあ……。

となると、クラスに攻略対象のヒロインがいる場合は『お化け屋敷』か『メイド喫茶』、他のクラスのヒロイン狙いなら『展示ブー

ス』、と。

でも……ゲームと同じ通りに事を進めるのは気に食わん。

なにより、このゲームは先輩を不幸にするシナリオを用意してるんだ。絶対に、思い通りになんてさせてたまるか。

ということで。

「よし、なら“脱出ゲーム”なんてどうだ？　教室内でヒントを頼りに、答えを見つけたら脱出できるやつ」

「あは！　いいねそれ！」

お、立花にも賛成してもらったし、早速提案しよう。

「はい！」

「はい、望月くん」

「俺は“脱出ゲーム”がいいと思います！」

俺は脱出ゲームについて簡単に説明すると、クラスの他の連中もウンウンと頷いている奴がちらほら。

うむ、好感触。

「他にありませんか？」

「ハイ！」

「はい、サンドラさん」

「ワタクシは“執事喫茶”がいいと思いますワ！　全員執事になって、淑女の皆様をおもてなししますノ！」

なにい！？　ここでまさかの、サンドラからの横やり！？

しかも執事喫茶ってなんだよ！　メイド喫茶と大して変わんねー

じゃん！　……って、ハッ！？

気がつくと、プラーミャが俺を射殺すような視線で睨みつけていた。

その琥珀色の瞳が物語っているのは……うん、『サンドラの提案に乗れ』ってことだな？

そしてサンドラも、まるで期待するかのように、そのアクアマリンの瞳で俺を見つめていた。

……この姉妹、ある意味卑怯だと思います。

「じゃあ多数決しますので、みなさん出し物の名前を紙に書いて、前の投票箱に入れてくださーい」

いや、もう今さら投票なんてしても無意味じゃない？

だって、男子共は可愛いからってサンドラとプラーミャの言いなりなところあるし、女子にしたって立花の執事姿を見たそうだし。

ホラ、現に女子の何人かは立花をチラチラと見てやがる。

そんなことを考えながらも、俺は『執事喫茶』と書かれた紙を投票箱に入れた。

チクショウ、俺に自由はないのか。

「それでは開票しまーす。執事喫茶……執事喫茶……執事喫茶……執事喫茶……脱出ゲーム……執事喫茶……」

そして。

「開票の結果、執事喫茶が三十九票、脱出ゲームが一票で、執事喫茶に決まりましたー」

クラス委員長が語尾を間延びさせながら告げた。
そして立花よ。悪いとは思うけど、頼むから俺をジト目で睨むのはやめてくれ。
俺だって、脱出ゲームにたった一票しか入ってないから、まるで俺が自分で入れたみたいに思われてそうで超恥ずかしいんだから。

こうしてHRも終わり、俺を非難する立花の視線にさらされながら、一時間目の授業を受けた。

◇

「ふふ、では望月くん達は、執事喫茶をするのだな」
「はい……」

昼休み、食堂で先輩と一緒に食事をしながら、俺はガックリ、とうなだれた。

「モウ！　いい加減、覚悟を決めなさイ！」
「いや、だけどさあ……コレ、完全に立花の一人勝ちにしかならないじゃん」

そう、そしてその他大勢の男子達は、全員立花の引き立て役と化すのだ。

「そ、そんなことないよ！　ボ、ボクだって、そんなに需要はないから！」
「何言ってんだよ……クラスの女子達が、立花のほうを見てたの気づいてないのか？」
「ふあ！？」

あ、立花の奴、気づいてなかったっぽい。

「へエ……ヨーヘイ、面白い話じゃなイ」

え、ええと……プラーミャさん、なんで少しキレ気味なんですかね？

「だ、だが！　わわ、私は望月くんの執事姿は見たいぞ！」

「モモ、モチロン！　ワタクシもですワ！　……だ、だって、そのためニ……（ゴニョゴニョ）

サンドラの言葉の最後のほうは聞き取れなかったが、どうやら先輩とサンドラは俺の執事姿を見たいそうだ。

そ、それはそれで恥ずかしいな……。

「そういえば、先輩のクラスではどんな出し物をするんですか？」

「ん？　私達のクラスは、無難にプラネタリウムをする予定だ」

ああー、確かに無難だ。

でも、プラネタリウムかあ……先輩がいる時は、絶対に行こう。

「と、ところで、その……」

先輩はチラチラと俺の皿の上にある、鮭のムニエルを眺めている。

食べたいんですね、分かります。

俺はス、と皿を先輩の目の前に差し出す。

「むむ！　い、いいのか……？」

無言でコクリ、と頷くと、先輩は嬉しそうにフォークとナイフで一口サイズに切り分け、口へと運んだ。

「！　ふふ、美味しい……！」

幸せそうに口元を緩める先輩を、俺は微笑みながら眺めていた。

学園祭の出し物（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

生徒会副会長、氷室カズラ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

生徒会副会長、氷室カズラ

――キーンコーン。

放課後になり、みんなが帰り支度を始める。

もちろん、この俺も。

すると。

「ねえねえ、今日はどの……「ホラ、アオイ！　行くわヨ！」……って、プラーミャ引っ張らないで！？」

嬉しそうに俺に声を掛けてきた立花の襟首をつかみ、プラーミャが引きずって教室から出て行った。

な、何というか……最近プラーミャの奴、やたらとアオイを連れ回してる気が……。

「フフ、プラーミャも仕方ないですわネ」

「お、サンドラ」

「それでヨーヘイ、今日は領域（エリア）攻略はどうするんですノ？」

「あっと、それなんだけど……」

俺はサンドラに、先輩が生徒会で学園祭が終わるまでの間、領域（エリア）攻略に来れないことを伝えた。

「そうなんですノ……でしたら、これからどうするノ？」

「ああ、だから俺……生徒会に入ろうと思うんだ」

「生徒会ニ？」

俺はサンドラに向けて頷いた。

「フウン……でも、生徒会って簡単に入れるんですノ？」

「一応、生徒会長のポスト以外は、生徒会長さえ指名してくれれば入れるぞ。で、生徒会長は誰だ？」

「あ……フフ、そういうこト」

そう答えると、サンドラは含み笑いをした。

「でしたラ、ワタクシも一緒に生徒会に入りますワ」

「サンドラも？」

いや、俺としてはサンドラが一緒に生徒会に入ってくれれば嬉しいけど……。

「だけど……生徒会って結構忙しそうだぞ？　それに、今までみたいに気軽に領域（エリア）攻略にも行けなくなるかもしれないし」

「構いませんワ。それに、先輩もヨーヘイもいないんじゃ、ワタクシも領域（エリア）に行きませんもノ」

サンドラが肩を竦（すく）め、苦笑した。

はは、確かに……だって。

「そうだな……俺達、チームだもんな」

「フフ、そういうこト」

俺とサンドラは微笑み合うと、一緒に生徒会室へと向かった。

「ここが、生徒会室だな」

ドアに掲げられている『生徒会室』のプレートを確認し、俺はドアをノックした。

すると。

「？　失礼ですが、どのようなご用件ですか？」

「うお！？」

まさか後ろから声を掛けられるとは思わず、俺は驚いて振り向くと、それは一人の女子生徒だった。

そして、俺はこの女性（ひと）を知っている。

藍色の少し長めのボブカットの髪、同じく藍色の綺麗な瞳に整った目鼻筋、薄い桜色の唇、なにより、あの藤堂先輩すらも凌駕する巨大な胸……。

そう、『ガイスト×レブナント』のメインヒロインの一人で、生徒会副会長でもあり先輩のライバル……“氷室（ひむろ）カズラ”、その人だ。

「ア、ソ、ソノ……ワタクシ達、生徒会に入りたくテ……」

「生徒会に……ですか？」

サンドラが答えると、氷室先輩は無表情で俺とサンドラの顔を見た。

ううう……なんか、やりにくいなあ……。

「む……なんだ？　って、望月くん！？　それにサンドラも！？」

「「あ！　先輩！」」

生徒会室のドアが開き、中から先輩が出てきた。
た、助かった……これ以上氷室先輩にジロジロと見られたら、息苦しくて仕方なかったところだ……。

「会長のお知り合いですか？」
「あ、う、うむ！　二人は私の大切な後輩だ！」
「あ、は、初めまして！　俺、“望月ヨーヘイ”っていいます！」
「ワ、ワタクシは、“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”、サンドラとお呼びくださいまシ」

俺とサンドラは自己紹介した後、丁寧にお辞儀した。

「そ、それで二人は、どうして生徒会室の前にいるんだ？」
「あ、そ、そうです！　実は、俺とサンドラを生徒会に入れて欲しくて、やって来ました！」
「な、なんだと！？」

俺の申し出に、先輩が驚きの表情を見せた。

「だ、だが、急にどうして？　しかも、生徒会の仕事は君達が考えているよりも大変なのだぞ？」
「そ、それは承知しています！　だけど……俺達は生徒会に入りたいんです！」
「し、しかし……」

先輩は顔をしかめながら言葉を濁らせる。
多分、優しい先輩のことだから、俺達に苦労させたくないんだろう。

「そういうことでしたら、生徒会としては大歓迎です。会長、ここ

は彼等を絶対に受け入れるべきです」
「むむむ……」
「それに、彼等が入ってくれれば、今の状況は間違いなく好転します」
「むむむむむ……」

アレ？　なんだかおかしな状況になってるぞ？
俺はてっきり副会長の氷室先輩が反対して、先輩が喜んで入れてくれるものだと思ってたのに。

「会長」
「う、うう……」

氷室先輩が無表情のままズイ、と詰め寄り、先輩がプレッシャーに耐えかねて後ずさりした。
というか、あのいつも凛としている先輩がこんなに追い込まれているのを、初めて見た。

「……わ、分かった。生徒会への入会を認めよう」
「！　あ、ありがとうございます！」
「フフ、ありがとうございまス」

ふう……ようやく先輩が許可してくれたぞ。
でも、いくら俺達を気遣ってのこととはいえ、なんでここまでかたくなに嫌がったんだろう？

「では、生徒会の業務などについて説明しますので、中へお入りください」
「は、はい！」
「ハイ！」

氷室先輩に通され、生徒会室の中に入ると……うん、誰もいない。

「ええとー……他の生徒会の方は、どこか行かれてるんですか？」

「いえ、生徒会は会長と私、そしてあなた達二人の、四人です」

「「……へ？」」

氷室先輩の言葉に、俺とサンドラは思わず気の抜けた返事をした。

生徒会副会長、氷室カズラ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

たった二人の生徒会（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「いえ、生徒会は会長と私、そしてあなた達二人の、四人です」
「「……へ？」」

氷室先輩の言葉に、俺とサンドラは思わず気の抜けた返事をした。

い、いやいや、さすがにそんな馬鹿な話があるわけがない。
だってここは“国立アレイスター学園”なんだぞ？　東方国で一、二を争う有名校だぞ？
なのに生徒会のメンバーが会長と副会長の二人しかいないって、その……ねえ……。

「あ、あははー……や、やだなあ、俺とサンドラをからかおうったって、そうはいかないですよ？　な、なあサンドラ？」
「そ、そうですワ！　だって、どうやってもたった二人で生徒会なんて運営できませんもノ！　……ですわよネ？」

俺とサンドラは引きつった笑みを見せながら、藤堂先輩と氷室先輩に問い掛ける。
だけど。

「……残念だが、事実だ」

先輩は眉根を寄せながら、かぶりを振った。

「「エエエエエエエ！？」」

俺とサンドラは驚きの声を上げる。いやいや、あり得ないだろこんなの!?

「イヤイヤイヤ、どうしてこんなことになってるんですか!?　そもそも、今までどうやって生徒会を回してたんですか!?」

「ふう……一学期は特にイベントもないため、会長と私の二人でも充分対応……いえ、私一人で対応していました。私一人で」

「「「……」」」

氷室先輩は表情を変えないまでも、藤堂先輩をジッと見据えていた。多分、かなり怒っているのだろう。

で、当の藤堂先輩はというと、気まずそうに窓の外を眺めている。

でも……これって……。

「す、すいません氷室先輩！　俺が藤堂先輩を連れ回したからです！」

「も、望月くん!?」

俺は氷室先輩に向かって深々と頭を下げた。

いや、生徒会が危機的状況に陥ったのは、俺が藤堂先輩を色んな領域（エリア）に連れて行ったからだ。

俺が……先輩と一緒にいたいばっかりに……。

「も、望月くん、それは違うぞ！　あれは私が勝手に君に同行していただけだ！　君は何一つ悪くない！」

「で、ですけど！」

俺は藤堂先輩と押し問答を続けるが、ハッキリ言って申し訳なさすぎて、俺の心が耐えられそうにない。

すると。

「いえ、別に会長が君達の領域（エリア）攻略に同行していたことを責めているわけではありません。それよりも、会長がちゃんと後進を育てていないことが問題なのです」

「え、ええと……それはどういうことですか……？」

氷室先輩の言葉の意味が理解できなかった俺は、思わず氷室先輩を見て尋ねる。

「はい。確かに一学期は会長……いえ、私がいれば、生徒会の業務は滞りなく行えたので問題なかったのですが、今回の件で痛感しました。私達のどちらか……いえ、私がいなくなると、生徒会が立ちいかなくなる、と」

「あ……」

た、確かに……。

今は二人が生徒会にいるからいいけど、二人が三年生になったら、当然生徒会を引退することになる。

そうなった時、一体誰が生徒会を切り盛りしていくのかって話だ。

いや、というか氷室先輩がいなくなった時点で、生徒会は終わる……！

「ですので、今回あなた達が生徒会の扉を叩いてくれたことは、生徒会……いえ、学園全体にとって、非常にありがたいことなのです」

「は、はあ……」

うわあ……俺としては藤堂先輩の仕事を少しでも手伝って、そして、先輩と一緒にいられたらいいやくらいの感覚で生徒会に入ったけど……うん、メチャクチャ責任が重かった。

それに、本来の『ガイスト×レブナント』の世界では、藤堂先輩は俺達と一緒に行動することもなく、ただ生徒会長として生徒会活動に勤しんでいたはずだもんなあ……。

となると、やっぱりこうなった原因は俺にあるわけで……。

「ですから、望月さんは気に病む必要はありません。それよりも、同じ生徒会の一員として、これから一緒に生徒会を盛り上げていただけると嬉しいですね」

氷室先輩は表情を崩さずにそう告げる。

でも、その藍色の瞳は温かかった。

「はい！　俺……頑張りますから！」

「ええ、お願いします」

よし……！　俺にどこまでできるか分からないけど、絶対にこの生徒会で役に立ってみせるぞ！

「と、ところデ、そんな状況でしたらワタクシ達以外にも、生徒会に勧誘したほうがよろしいんではなくテ？」

若干引きながら俺達を見ていたサンドラが、氷室先輩にそう尋ねる。

た、確かに、サンドラの言う通りだ。こんな状況になるのが分かってるなら、最初から勧誘したりとか、最悪先代の生徒会メンバーの協力を仰ぐとか……。

でも、何故か藤堂先輩も氷室先輩も、サッと目を逸らしてしまった。

い、一体何が……。

「えーと……？」

「う、うむ……じ、実は、本来なら二学期までは三年生も生徒会に残っているのだが、そ、その……」

藤堂先輩は言いづらそうに、俯きながら指をコチョコチョさせている。

「会長は、新年度が始まる前に先代の生徒会メンバーを全員追放した関係で、先代の協力は望めません」

「ちょ！？　氷室くん！？」

シレッと氷室先輩に暴露され、藤堂先輩が思わず声を上げた。

あー……確かに藤堂先輩は二年生なのに生徒会長って、おかしいもんなー……。

だけど。

「……多分ですけど、生徒会のメンバーとしてふさわしくない何かがあったんでしょう？　だから、俺は先輩のその行動を支持します」

そう、藤堂先輩が何の理由もなしにそんな横暴をするはずがない。

俺が知ってる先輩は、誰よりも優しくて、ちゃんと支えてくれる素敵な女性なんだから。

「望月くん……ありがとう……」

すると先輩は頬を赤く染め、少し俯きながら口元を緩めた。

「会長、いい後輩を見つけましたね」
「氷室くん……ああ、私にはもったいないくらいだ……」
何言ってるんですか。俺からすれば、先輩こそ最高なんですけど。
そう思いながら、俺は頬を緩めながら藤堂先輩を見つめた。

たった二人の生徒会（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

生徒会のお仕事（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

生徒会のお仕事

「マ、マア、藤堂先輩の事情は分かりましたけド……でしたら、元生徒会メンバー以外を勧誘してもよろしかったのでハ……？」

サンドラはおずおずとそう尋ねると……あ、今度は氷室先輩が顔を背けた。

「ええと……氷室先輩？」

「いえ……別に大したことでは……」

「望月くん、サンドラ……氷室くんは、実は人付き合いが苦手でな……何故かほかの生徒達は、氷室くんが声を掛けると逃げて行ってしまうのだ……」

「ああー……」

そういえば、『攻略サイト』にもそう書いてあったなあ……。

その冷たい視線と誰に対しても無言のプレッシャーをかけ続けるその姿は、“アレイスターの氷結姫”と陰で呼ばれていると。

だけど、本当は主人公が普通に接する（会話する）だけで好感度が爆上がりする、『ガイスト×レブナント』きってのチョロインだと。

「……そもそも、会長が他の生徒を勧誘すればよいのでは？」

「むむ……私も氷室くんほどではないにしろ、他の生徒からは避けられているからな……」

そう言うと、二人の先輩は肩を落とした。

いや、まあ……藤堂先輩はそもそも準ラスボスで、学園の生徒全

員から嫌われているって設定だもんなあ……コミュ障の氷室先輩を含め、上手く人間関係を構築できる姿が思い浮かばない。

「ネ、ネエ、ヨーヘイ……」
「ん？　どうした？」
「ワタクシ達、本当に生徒会に入ってよかったのかしラ……」
「まあ……藤堂先輩は言うまでもなくだけど、氷室先輩だって決して悪い人じゃなさそうだし……い、いいんじゃないか？」

とはいえ、これから大変そうではあるけど……。
俺は耳打ちするサンドラと顔を見合わせながら、これからのことを考え、一抹の不安を覚えた。

◇

「望月くん、二―一と三―三が出し物についてエントリーがない。至急確認をしてくれ」
「望月さん、学園祭における各部活への貸し出し用具の割り当ての関係で、サッカー部と男子バレー部が揉めているようですので、調整をお願いします」
「は、はいい！」

早速生徒会の仕事に取りかかっている俺は、二人から次々と仕事を振られ、目を回している。
というか二人共、各クラスや部活との折衝関係ばかり俺に押しつけてないか！？

「サ、サンドラ……ちょっとコレ……「……キュウ」……あ、やっぱいいです」

駄目だ、サンドラは変な声を出しながら机に突っ伏してる。
いや、サンドラはよく頑張ったと思うぞ？　あの二人の超人的な事務処理捌きにここまでついて行ったんだから。

「じゃ、じゃあ俺、ちょっと交渉しに行ってきます！」
「うむ、頼む」
「よろしくお願いします」

先輩二人に見送られ、俺は生徒会室を出た。
さて……それじゃ、まずは二―一と三―三から行くかー。

ということで。

「すいませーん。生徒会ですけど、出し物の申請がまだ……って」
「ゲ！？」

二―一に行くと、学園祭の出し物に向けた作業の真っ最中で、そこにはあの夏目先輩もいた。
そして俺の顔を見るなり、露骨に顔をしかめる。いや、態度悪いな。

「なな、何の用よ！」
「いや、出し物の申請まだなんで、もらいに来たんですよ」

というか、そんなに警戒しなくてもいいのに。
あの賭けだって、むしろ夏目先輩の自爆なんだけどなあ……。

「チョ、チョット待ってなさい！」

すると夏目先輩は、学園祭に向けて作業をしている一人の女子生

徒のところに行って何やら話をし始めた。でも、なんだかもめてるみたいだなあ……。

「ホ、ホラ！　早く出しなよ！」
「チョ、チョット!?　……もう、うちのクラスはまだ出し物が決まってないから、申請できないんだけど?」

夏目先輩が連れてきたその女子生徒は、夏目先輩以上に態度が悪かった。
というかなんで俺、この人に敵意剥き出しで睨まれてんの!?

「で、ですが、出し物申請を提出していただかないと、せっかくここまで準備されているのに、このままじゃ二―一だけ学園祭に参加できなくなってしまいますよ?」
「ええ!?　それは困る！」

何故か夏目先輩が割り込んで俺に詰め寄る。だけど、文句を言うならこの人に言って欲しい。

「えー！　学園祭に参加できないの!?」
「何でだよ！　俺達、もうこんなに準備を進めてんだぞ！」

おっと、二―一の生徒達がわらわらと集まってきたぞ?
まあでも、これはちょっと好都合かも。

「いえ、出し物の申請をしていただければ、もちろん参加いただけますよ?　ただ、こちらの先輩が、出し物が決まっていないからと言って、なかなか申請を出していただけないです」
「はあ!?　どういうことだよ！」
「うちのクラスの出し物、とっくに決まってるじゃない！」

俺の説明を聞き、二―一の人達がこの女子生徒を糾弾し始めた。
その中には、もちろん夏目先輩も。

「あーもう！　出せばいいんでしょ、出せば！」

そう言うと、その女子生徒はスタスタと席に向かい、何やら書類を取り出した。
そして何かを書き込み、またこちらへと戻ってきた。

「ホラ！　これで文句ないでしょ！」

俺はずい、と手渡された申請書類を、内容に漏れ等がないか一通り確認する。

「はい、確かに受理しました。内容などについて分からないことがあれば、またお尋ねしますね」
「二度と来るな！」

吐き捨てるようにそう言うと、女子生徒は作業に戻った。
ええー……というか、なんでここまで言われないといけないんだよ……。

「え、ええと……君、生徒会だよね？」
「はい、そうですけど……」

別の男子生徒に尋ねられ、俺は返事をした。

「……実は彼女、一年生の時は生徒会に所属してたんだよ。それが、今の生徒会長と、その……揉めちゃって……」

「ああー……」

それなら、生徒会の俺が露骨に嫌われるのも頷けるかも。
多分、俺が先輩の手先かなんかだと思ったんだろうなー。その通りだけど。

「すいません。教えていただき、ありがとうございます」
「いやいや、コッチこそゴメンね」

そう言って、その男子生徒も持ち場へと戻る。
だけど。

「うあー……ひょっとして次に行く三―三も、元生徒会のメンバーが邪魔するんじゃないだろうな……」

そんな嫌な予感をひしひしと感じ、俺は思わずうなだれた。

生徒会のお仕事（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先代の生徒会長（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「フン！　この僕はそんなもの、出すつもりはないからな！」

三―三に来るなり、開口一番そんなことを宣言されてしまった。

で、俺にその台詞（セリフ）を吐き、腕組みしながら仁王立ちしているのは、先代の生徒会長である“牧村（まきむら）クニオ”という人である。

「ですが、このままですと三―三だけ学園祭に参加できなくなってしまいますが」

俺はさっきの二―一と同じ作戦を取り、クラス内にいる他の生徒達に聞こえるように、わざと大きめの声でそう告げた。

「ハッ！　あの女の手下らしく、やり口が汚いな！」

「……どういうことですか？」

さすがに先輩のことを馬鹿にされてカチンときた俺は、少し低い声で問い質す。

「決まっている！　どうせその『参加できない』というのも、そもそもこの僕を気に入らないアイツが、参加させないようにするための策略だろう！」

「はあ！？」

いや、何言ってんのコイツ。

申請書類が出てないから、コッチは出してくれって頼んでるだけだろうが。

はあ……もういいや。

「つまり、出し物の申請はしないってことでいいんですね？」
「くどい！　どうしてもというなら、あの女が直接僕のところに来させるんだな！」
「分かりました。では、牧村先輩の一存で、三―三は学園祭で出し物をしないということですね！」

俺は教室中に響き渡るほどの声でそう叫ぶと、踵（きびす）を返して三―三の教室を後にしよう……って。

「何ですか？」
「待て！　まだ話は終わってないだろう！」

何故かこの牧村クニオは、グイ、と俺の肩をつかんで引き留めた。

「いや、俺のほうはこれ以上話をすることはないんですけど」
「君、本当はあの女の下について、不満があるんじゃないのか？」
「はあ！？」

コイツ、何て言いやがった？
この俺が、先輩に不満がある、だって？

「フザケルのもいい加減にしてくださいよ？」
「フ……なにも隠す必要はないじゃないか。君だって、単にあの女の見た目と地位だけで付き従ってるんだろう？　だったら僕と協力して、あの女を生徒会長の座から引きずり降ろしてやらないか？」

……コイツ、本気（マジ）で頭に虫でも湧いてるんじゃないか？

「ハイハイ、これ以上クソくだらない話に付き合ってられませんよ。とにかく」

俺はこの男を見据える。

「……これ以上、先輩を馬鹿にしてみろ。ただで済まさないからな」

「っ！？」

その一言だけ告げると、唖然とする牧村クニオを捨て置いて教室を後にした。

◇

「チクショウ！　なんだよあのクソ野郎！」

頭にきた俺は、校舎裏で思い切り壁を蹴った。痛い。

『まあまあマスター、落ち着くのです』

「これが落ち着いてられるか！　何があったか知らないけどあの野郎、先輩のこと馬鹿にしたんだぞ！」

［シン］がたしなめるが、怒りの収まらない俺はもう一度壁に八つ当たりする。メッチャ痛い。

クソッ！　どうせ生徒会を追い出されたのだって自業自得のくせに、それを逆恨みして先輩のこと悪しざまに言いやがって！

「というか、あの先輩に生徒会追い出されるなんて、一体何をやらかしやがったんだ？」

先輩は、悪事に関しては厳しいけど、それ以外は面倒見が良くて最高に優しい人だ。
そんな先輩に生徒会を追い出される羽目になったんだ。余程のことに違いない。

「……ちょっと調べてみるかあ」

そう呟くと、俺はスマホを取り出して『攻略サイト』のページを開く。

「ええと……生徒会コミュは、と……お、あったあった」

ふむ……一応ゲームでの生徒会コミュにおいては、揉め事らしいイベントはなかったのかなあ。特に何も書いてない。
でも、生徒会コミュの登場人物は、確かに桐崎先輩と氷室先輩の二人だけだ。つまり、旧メンバーが追放されてること自体は間違いないんだろう。

「あーもう！　このゲーム、裏設定とかあんまり考えてないのかよ！　そういうの、ゲームシナリオ考える時に必要なんじゃないのかよ！」

などと、俺は『ガイスト×レブナント』の制作者に対する不満をぶちまけた。
というか主人公も主人公で、その辺り疑問に思わないの？　ちゃんとツッコめよ。

「ハア……こうなったら、先輩二人から直接教えてもらうしかないかあ……」

そう呟くが、あの二人が素直に教えてくれるとも限らない。
特に藤堂先輩は、俺に余計な心配を掛けまいとして、絶対言わないに決まってる。

とはいえ、先輩がこんな理不尽な目に遭ってることだけは、到底我慢ならない。

なので。

「氷室先輩……ちょっといいですか……？」
「？　どうしたんですか？」

俺は急いで生徒会室に戻るなり、扉の隙間から氷室先輩を手招きすると、首を傾げながらも氷室先輩は傍に寄って来てくれた。

「実は……」

俺は二―一と三―三での出来事を氷室先輩に説明する。
もちろん頭にきていた俺は、それはもう当事者が聞いたらキレること間違いなしというほど盛大にディスりながら。

「……それで、あの牧村クニオって奴は、なんで藤堂先輩に追い出されたんですか？　というか、生徒会の旧メンバーが全員出て行った理由を教えて欲しいんですけど……」
「……望月さん、場所を移しましょう」

そう言うと、氷室先輩はスタスタとどこかへと向かい始めたので、俺はその後をついて行った。

先代の生徒会長（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

生徒会と信頼（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

生徒会と信頼

氷室先輩に連れられてやって来たのは、放課後の誰もいない食堂だった。

「座ってください」

「し、失礼します……」

氷室先輩に促されて席に着くと、氷室先輩は俺の正面に座った。

「それで、旧生徒会のメンバーがいなくなった理由……でよろしいですね？」

氷室先輩の問い掛けに、俺は無言で頷いた。

「結論から言います。彼等……旧生徒会のメンバーは、不正を働いていたからです」

「不正、ですか……？」

「はい」

ウーン……不正、ねえ。

でも、それだとあの牧村クニオのあの態度が理解できない。

というのも、仮に不正を働いていたんだったら、後ろめたくてあんな強気な態度はとれないと思うんだけどなあ。

「それで、どんな不正だったんですか？」

「はい……」

氷室先輩は、簡潔かつ丁寧に説明してくれた。
何でも前生徒会の牧村クニオは、生徒会長在任時、各部活に対して便宜を図っていたらしい。
特に、その予算配分はかなり不公平なもので、特定の部活……吹奏楽部と陸上部に、特に手厚かったとのこと。
それだけじゃなく、あの牧村クニオは、何故か生徒会のメンバーには女子生徒しか加えず、藤堂先輩と氷室先輩も、一年の三学期の時、直々にスカウトされたらしい。

「へえ……そうだったんですね……」

俺は氷室先輩のその説明に、思わず頷いた。
いやだって、牧村クニオの奴、明らかにこの二人の先輩の容姿で選んでるだろ。大体、生徒会のメンバーが全員女子って時点で、私物化もいいところだ。

「というか、そんな奴がよく生徒会長なんかになれましたね……」
「あの男は裏工作が得意だったんです。その最たるものが、吹奏楽部と陸上部への便宜。その二つの部活は部員も多い上に、今の三年生最強の二人がいますから」

へえ……三年生最強、ねえ。
ひょっとして。

「それって、“鈴原カエデ”って人と、“和気チアキ”って人じゃないですか？」
「……どうしてそれを？」

氷室先輩が窺うような視線を向けてきた。

「ああいえ……ホ、ホラ、ちょうど今、氷室先輩からもらった仕事の一つに、部活動同士の区割りの調整があったじゃないですか」
「そういえばそうですね」
ホッ……どうやら納得してくれたみたいだ。
だけど、今告げた二人の三年女子はメインヒロインではないものの、主人公の恋人になることができるサブヒロインなのだ。
しかも、最終決戦前の藤堂先輩との戦闘の際、露払いとして主人公達を助けてくれたりする。
だけど……そうかあ、この二人が主人公に味方したのは、そういった逆恨みからきてる可能性高そうだな。というか、なんだよその裏設定。
「それで会長と私で、前会長の不正を暴くために証拠を集め、三月の終業式の直前に糾弾したんです。それでも抵抗を見せようとしたので、会長はやむなく学園長にかけ合い、学園として正式に処分することになったんです」
ああー、だから俺が初めて“グラハム塔”領域（エリア）を見学した時、夏目先輩は藤堂先輩に対して、『学園長の娘だからって、その特権を活かして就いた』だなんて言い掛かりをつけたんだな。
「そして、他の生徒会メンバーもその時にまとめて辞めてもらいました。彼女達も、前会長に加担して色々と甘い汁を吸っていたようですので」
「うわあ……甘い汁って一体……」
「……聞きたいですか？」
「い、いえ！　遠慮します！」

だって、聞いたところで絶対に碌な話じゃないだろうし、もう今は生徒会じゃないわけだしなあ。

「……まあ、さすがに犯罪行為とまではならないものばかりなので、結局は生徒会を辞めさせるといった、甘い処分になってしまいました。それだけが唯一の心残りですね」

「そ、そうですか……」

うん、とりあえず分かったことは、牧村クニオと旧生徒会メンバー、それに、“鈴原カエデ”と“和気チアキ”には近づかないほうが無難だな。

サンドラや立花達にも関わり合いにならないように伝えておこう。

「ですが……」

氷室先輩はポツリ、と呟き、ジッと俺を見つめる。

「？　なんですか？」

「いえ……やけに簡単に私の話を信じるんですね」

「ああー……」

まあ、実際に牧村クニオや旧生徒会メンバーに会っているってのもあるけど、それ以上に、藤堂先輩が何かひどいことをするはずがないからなあ。

ただ……うん、氷室先輩は多分こう言いたいんだろう。

藤堂先輩の味方である俺が、どうして氷室先輩を信用したのか、と。

確かに『攻略サイト』では、藤堂先輩と氷室先輩は犬猿の仲とい

う設定だ。
だけど、二人の様子を見ていて分かった。
少なくとも、藤堂先輩は氷室先輩のことを嫌ってはいない。
そして氷室先輩も、藤堂先輩の人柄を否定したりしているわけじゃない、と。
ただ……藤堂先輩という存在が、氷室先輩にとって大きすぎただけなんだ。
それに。
「生徒会に入って藤堂先輩と氷室先輩のやり取りを見て、分かったんですよ。生徒会に関しては、藤堂先輩は氷室先輩のことを信頼しているということが」
「っ！」
表情は変わらないけど、氷室先輩が息を飲んだのが分かった。
「……どうしてそう思ったんですか？」
「あはは、何となく……というか、藤堂先輩は信頼している人に対してじゃないと、あんな表情を浮かべませんから」
「……そうですか」
氷室先輩は短く呟いた後、視線をテーブルに落とした。
「さ、さあて！　それじゃ、揉めてる部活の仲裁に行ってこようかな！」
少し気まずくなった俺は、わざとらしく声のトーンを大きくして

そう言うと、席を立った。

「氷室先輩、教えてくださってありがとうございました！」

「いえ……」

俺は深々とお辞儀をした後、食堂を立ち去った。

生徒会と信頼（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

レベルアップに向けて（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

レベルアップに向けて

「あーチクショウ！　疲れたー！」

俺は家に帰るなり、ベッドの上に突っ伏した。

いや、今日一日だけで生徒会の仕事、メッチャあったんだけど！

というかこれだけの量の仕事をあんなに手早く、しかも正確にこなしてる藤堂先輩と氷室先輩、すげえ……。

ま、まあ、そんな二人に必死に食らいついて仕事をしていたサンドラも、何気にハイスペックだよなあ。

『はうー……［シン］はご不満なのです……アイスが……ご褒美のアイスがなかったのです……』

そう呟くと、［シン］は嫌がらせのように俺の背中の上に寝そべってきやがった。

というのも、今日も初心者用の領域（エリア）に行ってノルマをこなしたのに、俺が疲れてることもあって、ルフランやコンビニに寄らず、真っ直ぐ家に帰ってきたのだ。

当然、［シン］はアイスを食べていない。

「悪い、［シン］……少しは仕事にも慣れたと思うから、明日こそはちゃんとアイスを……『二個……いえ、利子もついて三個なのです！』……わ、分かったよ、三個な……」

とりあえずそれで手を打つと、［シン］は俺の背中から降りた。

というか、やっぱり嫌がらせだったのかよ。

「あー……せっかく今日は、アレができると思ったんだけどなあ……」

俺がポツリ、とそう呟くと、［シン］が少し目を丸くした。

『……［シン］は、嫌な予感しかしないのです……』

「ハハ……いい勘してるじゃないか……」

『やっぱりなのです！　マスターはこの前言っていたのです！　半年間苦行が続くって！』

チッ……覚えてやがったか……。

俺は内心舌打ちすると、ジト目で睨む［シン］からサッと目を背けた。

だけど、クラスチェンジしている俺や先輩、サンドラがレベルを上げるためには、普通の幽鬼（レブナント）を倒してたら、レベルをたった一上げるだけで何か月もかかっちまう。

その間にも、クラスチェンジしていない立花達は、どんどんレベルアップしているはずだ。

「……アレなら、たとえクラスチェンジした後だとしても、同じようにレベルアップが可能になる。上手くすれば、来年の春には俺達もレベル九十を超えることだって可能になるんだ」

『はうはうはう！　それはすごいのです！　今まで領域（エリア）ボスやへんてこりんな敵を倒してもピクリとも動かなかったレベルが、とうとう上がるのです！』

俺の言葉を聞き、［シン］は目一杯はしゃぐ。

……『半年間の苦行』という言葉も忘れて。

「そ、そういうわけで、明日の生徒会が終わったら、先輩とサンドラも連れてその領域（エリア）に行くから」
『了解なのです！』
すると［シン］は、ビシッと敬礼ポーズをした。
……先輩とサンドラには、なんて言おうかなあ

◇

「ふむ……生徒会が終わった後に、か」
朝の通学路、加隈に追いかけ回されている立花を眺めながら藤堂先輩に、例の領域（エリア）の攻略？　について提案すると、先輩は口元を押さえながら考え込む。
「どう、でしょうか……？」
俺はおずおずと先輩の顔を覗（のぞ）き込みながら尋ねると。
「ふふ……もちろん、一緒に行くに決まっているじゃないか」
「！　ありがとうございます！」
ニコリ、と微笑む先輩に、俺は大声でお礼を言った。
「だったら、今日の生徒会の仕事はサッサと終わらせてしまわないとですね！」
「うむ！　そうだな！　……それで、君が言うその領域（エリア）には、全員参加するのか？」

「いえ、俺と先輩、サンドラの三人だけです」
「ふむ……」

そう告げると、先輩はまた考え込んでしまった。
ウーン……先輩は大勢で行きたいんだろうか。

「この前の“アトランティス”領域（エリア）のことを考えれば、その時のようにチームを二つに分けたほうが効率的だと思うのだが……」
「ああー」

先輩が何を気にしているのか、その言葉でようやく理解した。
でも、今回については、それは関係ないんだよなー。まあ、いずれは全員で攻略することがあるかもだけど。

「ええとですね……実は、今回は領域（エリア）の攻略が目的ではないんです」
「？　どういうことだ？」
「はい。今回、俺達三人だけにしたのは、もちろん俺が一番信頼している二人だからっていうこともありますけど、そのほかにも共通点があるんです」

そう……今のところこの三人だけがクラスチェンジを果たしていて、そのレベルアップに苦労しているのが現状だ。
それが、例の領域（エリア）に行けば、少なくとも他の領域（エリア）でレベルアップの作業をするよりはるかに効率的になる。

というか……一緒に行ったことがある先輩なら、事情もすぐに理解してくれるだろう。

「……なので、その領域（エリア）は俺達だけで行って、立花やプラーミャ達には引き続き“アルカトラズ”領域（エリア）を……って、先輩？」

「あう……ほ、本当に君という奴は……」

見ると、先輩は顔を真っ赤にしながら俯いてしまっていた。

どうしたんだろう……。

「その……先輩、大丈夫ですか？」

「だだ、大丈夫だとも！　も、もちろん君がそう想ってくれていることも理解している！」

「？　そ、そうですか……」

ずっと恥ずかしそうにする先輩を眺めて首を傾げているうちに、俺達は学園に着いてしまった。

レベルアップに向けて（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ジークフリートのその先（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「領域（エリア）攻略？　もちろん行きますワ！」

教室に入るなり、俺はサンドラを廊下に連れ出して誘ってみると、サンドラは二つ返事で了承してくれた。

「それデ……こうやってわざわざ廊下に連れ出してその話をしたってことハ、領域（エリア）へ行く人数を絞るってことでいいんですのネ？」

「はは、話が早くて助かるよ」

「フフ……となると、ヨーヘイとワタクシ、あとは先輩ってところかしラ？」

「正解！」

クスリ、と笑うサンドラに向け、俺はサムズアップした。

「一応、理由を聞いてモ？」

「ああ。理由は単純、俺が一番信頼してる二人だってことと、俺達が既にクラスチェンジしてるっていう、この二点だ……って、サンドラ？」

「フエ！？　も、もう……ヨーヘイのバカ……」

「ええー……」

先輩もそうだったけど、サンドラの奴もなんで照れてるんだよ……。

まあいいや。

「そういうわけだから、今日の生徒会の仕事、サッサと終わらせる

ぞ。それと……覚悟しとけ。多分、今回の領域攻略（エリア）？　は、今までで一番つらいぞ……」
「ッ！　そ、そうなんですのネ……」
俺の言葉を聞いたサンドラが、ゴクリ、と唾を飲み込んだ。
「ねえねえ、何の話をしてるの？」
「うお！？」
「フエ！？」
いきなり後ろから声を掛けられ、思わず変な声を出した俺達が振り返る。
「えへへー」
「な、なんだ立花かよ……というかお前、妙に嬉しそうだな……」
「あ、分かる？　やっぱり望月くんだねー！」
そう言うと、立花はご機嫌な様子ですり寄ってきた。というか近い、離れろ。
「見て見て！　ホラ！」
立花がポケットからガイストリーダーを取り出し、俺に見せる。
すると。
――――――――――――――――
名前　：ジークフリート
属性　：竜殺し（ドラゴンスレイヤー）（♂）
ＬＶ　：５０
力　　：Ａ

魔力　：A
耐久　：A
敏捷　：A
知力　：A
運　　：A
スキル：【グラム】【竜の恩恵】【竜の息吹】
【竜特効】【チェンジ】【火属性反射】
――――――――――――――――――――

「おお！　いつの間にかレベル五十になってんじゃん！」
「えへへ、すごいでしょ！」
「おう！　でも、そうなると、もうクラスチェンジできるんじゃないのか？」

俺は立花にそう尋ねると、立花は少し困った表情を浮かべた。
アレ？　『攻略サイト』によれば、主人公の場合は特定の条件もなくクラスチェンジができるはずなんだけどなあ……。

「じ、実はその……そのことで相談があるんだ……」
「相談？」

ハテ？　俺に相談って一体何だ？

「その、ね……？　クラスチェンジ、いくつか選択肢があって……」
「そうかあ……」

確かに、主人公にはクラスチェンジ先にいくつかの選択肢がある。

一つは［オーディン］。強力なスキルである【竜の恩恵】や【竜の息吹】、【竜特攻】、【チェンジ】を失う代わりに、さらにチー

トな【グングニル】、【スレイプニル】、【エインヘリアル】というスキルを手に入れることができる。

次に［ベオウルフ］。こちらは［ジークフリート］のスキルをそのまま全て受け継ぎ、さらに強力なスキル、【フルンティング】が追加される。まあ、［ジークフリート］の上位互換だな。

一応、『攻略サイト』ではこの二つをオススメのクラスチェンジ先として挙げていたなあ。

「それで……立花はどれにしようって考えてるんだ？　というか、どんな選択肢があるんだよ」

俺は『攻略サイト』で知ってはいるものの、話のつじつまを合わせるために、あえて尋ねた。

「ええと……［オーディン］でしょ？　それに［ベオウルフ］に……」

ふむふむ、やっぱり。

「あと、［伏犠（ふっき）］だねー」

「はあ！？」

最後に告げた精霊（ガイスト）の名を聞き、俺は驚きの声を上げた。

い、いや、［伏犠］って言ったら、『ガイスト×レブナント』の初回予約特典でもらえる、［ジークフリート］の着せ替えアバターじゃん！？

だから、ステータスは［ジークフリート］と全く同じはず……なんだけど……。

「ねえねえ、望月くんはどれがいいと思う？」
「お、おう……」

いや、こんなの俺が選べるわけねーよ！
正直、『攻略サイト』の通りなら［オーディン］か［ベオウルフ］のどちらかだろう。だって、［伏犠］は［ジークフリート］のステータスと全く同じなんだから。
だけど……［シン］っていう例外もある。

［伏犠］を選ぶのは賭けだけど、そんな例外も含めて検討するとなると……。

「ムムム……」
「あ、あはは……ボ、ボクももう少し、自分で考えてみる、ね……」
唸る俺を見ながら苦笑した立花は、そう言って教室へと戻って行った。
いや、だったらなんで相談したんだよ？

「……本当は、立花クンは答えが出てるんじゃないかしラ」
「え？　そうなの？」
「エエ……だって、このワタクシがそうでしたもノ」

サンドラの意外な言葉に、思わず目を見開く。
立花はともかく、サンドラはどうして［トール］じゃなくて［ペルーン］を選択したのか、実は前々から気になっていたんだ。

「フフ……私の中で二つの選択肢が現れたあの時、何故かこう思ったノ。ヨーヘイとこれからもずっと一緒にいたいなラ、［ペルーン

」を選ぶべきだっテ」
「っ！？」
それってつまり、俺の仲間になるか、主人公……立花の仲間になるか、ってことなのか？　……って、イヤイヤ、そんな馬鹿な話はないだろ。
俺はサンドラの言葉を否定するかのように、首を左右に振った。
「ま、まあ、後は立花自身が考えるだろ……」
俺はごまかすようにそう言うと、サンドラと一緒に教室に戻った。
だけど……サンドラのその言葉は、俺の脳裏からずっと離れなかった。

ジークフリートのその先（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

連絡先の交換（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

連絡先の交換

放課後になり、俺達は生徒会活動に勤しむ。
というか、早く片づけてしまって、二人と領域（エリア）に行かないと、だからな。

「望月さん、こちらの書類を教頭先生に届けてください」
「はい！」

氷室先輩から手渡され、俺は大急ぎで職員室へと向かう。
すると。

「おわっ！？」
「キャッ！？」

廊下の角から飛び出してきた女子生徒にぶつかりそうになり、俺は慌てて避けた。

「す、すいません！　大丈夫……っ！」
「い、いえ、こちらこそ……っ！」

謝ろうと頭を下げたところで、ぶつかった相手が昨日二―一に行った時に俺にキレやがった、元生徒会メンバーの人だと気づく。
それは向こうも同じのようで、俺の顔を見た途端、露骨に顔をしかめた。

「フン……今の生徒会は野蛮でマナーがまるでなっていないわね」
「はは、そりゃどーも」

俺は相手にするのも面倒なので、ヘラヘラと笑いながらその場をやり過ごそうとした……んだけど、どうやらそう上手くいかないみたいだな……。

「ええと……今から職員室に行かないといけないんで、どいてもらっていいですか？」

「何を言ってるの？　ぶつかりそうになったんだから、ちゃんと謝りなさいよ」

そう言って、ニヤニヤと感じの悪い笑みを浮かべる元メンバー。いや、性格悪いな。

「……どうもすいませんでした」

「フン！　それで謝ってるって言えるの？　謝るなら、ちゃんと土下座でもなんでもしなさいよ！」

あーもう！　コッチは忙しいってのに、どこまで絡んでくるんだよ！

ハア……面倒だから、とっとと土下座して……「今の言葉、聞き捨てなりませんね」……って！？

「ひ、氷室先輩！？」

振り返ると、氷室先輩が仁王立ちしながら、元メンバーを睨みつけていた。

「じゃ、邪魔しないでくれる！　私はこの男子と話をしてるの！」

「ですが、彼は大事な生徒会の一員です。仮にも元生徒会の一員だったあなたの、彼に対するその態度は到底許せるものではありませ

ん」
「……っ！」

氷室先輩の威圧に、元メンバーはジリ、ジリ、と後ずさりする。

そして。

「っ！　お、覚えてなさいよ！　いずれあなた達なんて、まとめていなくなるんだから！」

そんな捨て台詞を吐いて、元メンバーはこの場から去って行った。

「大丈夫でしたか？」
「え、ええ……それより、氷室先輩こそどうしてここに？」
「実は、先程お渡しした書類に、一か所修正すべきところがありましたので、差替えの書類を持って来たのです」
「あ、そ、そうですか……」

というか、それだったら連絡くれればすぐに戻ったのに……って、そういえば俺、氷室先輩とＩＤの交換してないや。
俺はポケットからスマホを取り出すと。

「氷室先輩、連絡先を交換しておきましょう。そのほうが、生徒会の仕事をする上で効率的ですし」

そう言って、スマホ画面にＱＲコードを表示させた。

「……そうですね。たしかに望月さんのおっしゃる通りです」

氷室先輩もスマホを取り出す……んだけど、一向にＱＲコードを

読み取ろうとしないぞ？

「え、ええと……？」

「すいません、これ、どうすればいいんですか？」

どうやら氷室先輩は、メッセージアプリの使い方が分からないらしい。

というか、使ったことないのか……。

「氷室先輩、スマホにメッセージアプリは入れてありますか？」

「いえ……」

そうかー、じゃあ普通に電話番号とアドレスを教えておくか。

俺はメッセージアプリを閉じると、連絡帳から自分のスマホの電話番号とアドレスを表示させた。

「じゃあ、こちらで……」

「分かりました」

すると氷室先輩は、素早い手さばきで電話番号とアドレスを打ち込んでいく。

というか、メッチャスマホ使いこなしてない！？　なのにメッセージアプリ使ってないってどういうこと！？

「今、望月さんあてにメールをお送りしました」

「はえ！？　あ、は、はい！」

氷室先輩の言葉に、唖然としながら見ていた俺は我に返ると、慌てて自分のスマホを見た。

すると、確かに知らないアドレスからメールが届いていた。

「あ、じゃ、じゃあ登録しておきます……」

そう言って、俺は早速アドレスとメール本文にある電話番号を登録する。だけど……。

「氷室先輩って、ネコが好きなんですか？」

「っ！？」

俺のその不用意な言葉に、氷室先輩がビクッとなった。

「ど、どうしてそう思ったのですか……？」

氷室先輩がズイ、と俺に詰め寄る。ち、近い……！？

「そ、その……アドレスが『ｋａｚｕｒａ．ｎｅｋｏｓａｎ＿ｍｙａ＿ｍｙａ』だったので……」

「っ！？」

そう、氷室先輩のアドレスには、明らかにネコを連想させるようなワードが入っているのだ。

そして今の反応……間違いない、氷室先輩はネコ好きだ。

「……望月さん」

「は、はい……つ！？」

その射殺すような視線に、俺は思わず息を飲む。

「このことは、誰にも言ってはいけません。いいですね？」

「は、はい！」

「よろしい」

そう言うと、氷室先輩はス、と俺から離れ、スタスタと歩き出した。

「何をしているんですか？　早く職員室に行きますよ」

「あ、は、はい……」

俺は戸惑いながら氷室先輩の後を追いかける。

だけど……俺は氷室先輩が振り返った一瞬、見てしまった。

氷室先輩の口元が、一瞬だけ緩んだのを。

「……ははっ」

何故だか俺も、そんな氷室先輩を見て頬を緩めた。

連絡先の交換（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大切な場所（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「ふう……少し長くなってしまったな……」

藤堂先輩がコキ、コキ、と首を鳴らしながら、そう呟いた。

確かに今の時刻は夕方十七時に差し掛かろうとしている。いや、それでも昨日に比べたら一時間以上も早いんですけどね。

「では、今日は終わりにしましょう。お疲れ様でした」

「あ、お、お疲れ様でした……」

氷室先輩がペコリ、とお辞儀をして、そそくさと生徒会室を出て行った。

「ええト……氷室先輩って、いつもあんな感じなんですノ……？」

扉を指差しながら、サンドラが藤堂先輩におずおずと尋ねた。

「ああ……彼女はこの生徒会で初めて会った時から、いつもあんな感じだ。とはいえ、生徒会の仕事は素早くかつ正確にこなすし、何も問題はない」

「そ、そうですカ……」

ウーン……多分、サンドラが聞きたかったのはそういうことじゃない。

だから。

「ええと、先輩。先輩は氷室先輩とは仲が良いんですか……？」

俺は二人の仲がどうなのか知っている上で、あえてそんな聞き方をした。
『攻略サイト』なんかの情報じゃなく、俺の知る先輩が、本当はどう思っているのかを知りたかったから。
「ん？　私か？　……私と彼女は、決して仲は良くないな……」
そう言うと、先輩は少し寂しそうな表情を浮かべる。
やはり、先輩と氷室先輩の仲は悪かった。
でも……先輩は、少なくとも氷室先輩に対して悪い感情を抱いているわけじゃないってことは分かった。
恐らく、氷室先輩だってそうなんだろう。
……いつか、二人の仲を修復したい、な。
「ま、まあ私と氷室くんのことはさておき、それよりも望月くんの言う領域（エリア）へと向かおう」
「あ、そ、そうですね」
話を切り上げ、俺達は生徒会室を出て戸締りをすると、例の領域（エリア）のある場所へと向かう。
といっても。
「む、ここは初心者用の領域（エリア）だが？」
「ですわネ……」
二人は初心者用の領域（エリア）の扉を訝し気に眺める。

「あはは、先輩は既に知ってますけど、もちろん初心者用の領域(エリア)じゃないですよ」
「あ、そうか」
そう、俺の言う領域(エリア)というのは、“ぱらいそ”領域(エリア)。
クラスチェンジした俺達がレベルアップするのに最も効率的な場所だ。
「え、ええト……？」
事情が飲み込めないサンドラは、オロオロと俺と先輩の顔を交互に見た。
「はは、来たら分かるよ。というか、絶対に驚くだろうな」
「も、もったいぶらないでくださいまシ……」
「悪い悪い。でも、俺としては、サンドラに自分の目で確かめて欲しいんだ」
「モウ……」
サンドラは口を尖らせるが、その瞳は怒っている様子はない。
要は、俺とサンドラはただじゃれ合ってるだけだ。
「むむ！　は、早く行くぞ！」
「あ！　先輩待って下さい！」
少しムッとした先輩は、俺達を置いて領域(エリア)への扉をくぐってしまったので、俺達は苦笑しながら慌てて追いかけた。
そして。

「スゴイ……！」

“ぱらいそ“領域（エリア）への扉をくぐると、サンドラは感嘆の声を漏らした。

「ネ、ネエ、どうしてヨーヘイはこの場所を教えてくれなかったノ！」

「どうしてかって、それは……」

サンドラに詰め寄られながら俺は先輩の顔をチラリ、と見やると、先輩は頷いた。

「……ここが、どんな領域（エリア）よりも危険な場所だからだ」

「……エ？」

俺の言葉を聞き、サンドラが一瞬固まった。

だけど、ここは真のラスボスがいる最終決戦のさらに先……本来なら、俺達のレベル程度じゃ来てはいけないようなところだ。

「……だから、この領域（エリア）の存在を知っているのは、俺と先輩……そして、サンドラだけだ」

「っ！」

そう……もちろん危険な場所だからっていうのもあるけど、本音を言えば他のみんなには教えたくない。

たとえ一緒に戦ってくれる仲間……立花やプラーミャ、加隈であったとしても。

「［シン］」

『ハイなのです』

召喚すると、［シン］は俺に寄り添うように並んで立つ。

「ここは常に危険がつきまとうってオマケ付きではあるけど、それでも、俺と［シン］にとっては運命を変えた大切な場所だ」

つまり俺が言いたいのは、俺にとってサンドラは、先輩と同じくらい信頼できる、かけがえのない存在だってことなんだ。

この場所を、教えてもいいと思えるほどに。

「そウ……」

サンドラは短くそう呟き、熱量を帯びたアクアマリンの瞳で俺を見つめた。

「フフ……分かりましたワ。そんな大切な場所にワタクシを連れてきてくれて、ありがとウ……」

「はは、礼を言うには早いんじゃないか？　むしろ、これからが本番なんだから」

そう言うと、俺は先輩とサンドラを手招きし、何度も通った通路を進む。

そして。

「むうっ！？　あの幽鬼（レブナント）は倒したのではなかったのか！？」

先輩は目を見開き、思わず唸（うな）った。

その視線の先にいるのは、“クイーン＝オブ＝フロスト”。［ゴ

ブ美」が［シン］へとクラスチェンジを果たした時に倒した、あの凶悪な幽鬼（レブナント）だ。

「はい。どうやらあの幽鬼（レブナント）、いわゆる特殊タイプではなく、この階層ではただの幽鬼（レブナント）扱いのようです」

「な、なんだと！？」

先輩が声を荒げるほど驚くのも理解できる。

だって、『ガイスト×レブナント』のゲーム本編に出てくるラスボスや、準ラスボスの先輩ですら、主人公達がそれらを倒すために必要なレベルは八十にも満たない。

なのにあの“クイーン＝オブ＝フロスト”はレベル八十……ラスボス級の強さなのに、結局はこの“ぱらいそ”領域（エリア）では雑魚でしかないんだから。

「そ、それで……やはり今回もやり過ごすのか？」

悔しさをにじませつつも、それが現実なのだと受け入れ、先輩が尋ねる。

だけど。

「いえ、今回はアイツを倒します。この三人で」

「「はあああああああああ！？」」

俺の言葉に、先輩とサンドラが絶叫した。

大切な場所（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷と炎のチェスの駒（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「いえ、今回はアイツを倒します。この三人で」
「「はあああああああああああ！？」」

俺の言葉に、先輩とサンドラが絶叫した。

クイーン＝オブ＝フロストの強さを知っている先輩は言わずもがなだけど、この“ぱらいそ”領域（エリア）が危険だって言われた後で、先輩ですら避けようとする幽鬼（レブナント）と戦うなんて言われたら、まあそうなるか。

だけど、サンドラはともかく、先輩は忘れてしまっているようだ。
このクイーン＝オブ＝フロストが、氷属性だってことを。

「先輩、忘れたんですか？　俺達は“レムリア”領域（エリア）で【氷属性反射】を入手したことを」
「っ！　そ、そうか！」
「エ？　エ？　どういうことですノ？」
「ふふ！　サンドラ、あの幽鬼（レブナント）は、氷属性の攻撃を得意としているのだ！」
「ア……そういうことですのネ……」

そう……仮に俺達がクイーン＝オブ＝フロストと戦っても、物理攻撃にさえ注意すれば、ノーダメージで完勝できるってことだ。
これこそが、俺が考えたレベルを効率的にアップさせるための策の一つだ。

「はは……ということで、今度は圧倒してやりましょう！」
「うむ！」
「エエ！」
『ハイなのです！』

先輩とサンドラがそれぞれ精霊（ガイスト）を召喚すると、［関聖帝君］の【威圧】スキルに反応したクイーン＝オブ＝フロストが、早速俺達に向けて【アイススフィア】を仕掛けてきた。

だけど。

『ッ！？』
『はう！　そんな攻撃、この［シン］には通用しないのです！』

まさか【アイススフィア】を反射されるとは思わなかったクイーン＝オブ＝フロストは、彫刻の像であるがゆえにその表情は一切変わらないが、それでも、一瞬後ずさるかのような反応を見せた。

というか……確かにこの“ぱらいそ”領域（エリア）を踏破して真のラスボスと戦おうと思ったら、五つの領域（エリア）を全て攻略する必要があるな。

『それー！　なのです！』

［シン］はクイーン＝オブ＝フロストを遥かに凌駕する速さでその後ろへと回り込むと。

『【縛】』

呪符を貼り付け、その動きを封じてしまった。
こうなると、あとは一方的だな。

「おおおおおおおおおおおおおおッッッ！」
「アアアアアアアアアアアアアッッッ！」

［関聖帝君］の青龍偃月刀と［ペルーン］のメイスがクイーン＝オブ＝フロストを襲う。
そして、何度目かの斬撃や打撃を受けた後、クイーン＝オブ＝フロストは幽子とマテリアルに変化した。

「ははっ！　楽勝！」
「うむ！」
「あっけなかったですワ！」

俺達は、三人でハイタッチを交わす。
『はうはうはう！［シン］もなのです！』
「おう！　やったな！」

俺は手のひらを向けると、［シン］はパアン、と気持ちいい音が鳴るほど思い切りタッチした。

そして。

「なるほど……ようやく理解したぞ。つまり望月くんは、この領域（エリア）を何度も出入りして幽鬼（レブナント）を復活させ、レベル上げをしようということなのだな？」

そう言うと、先輩は納得したとばかりに嬉しそうにウンウン、と頷いた。
それはサンドラも同じようで、ガイストリーダーを眺めながら頬

を緩めている。

「ひょっとしてサンドラ、レベルアップしたのか？」

「エエ！　クラスチェンジした時以来ですワ！」

うん……良かったな、サンドラ。

俺は顔を綻ばせながら喜ぶサンドラを眺めた。

『マスター！　［シン］は？　［シン］はレベルアップしてないのですか？』

［シン］がガイストリーダーを見せろと言わんばかりに、俺の身体にしがみつく。

はは、そうだな。ひょっとしたら俺達も……。

そう思ってガイストリーダーを見るが……。

『残念なのです……レベルが上がらなかったのです……』

［シン］は、あからさまにガッカリした表情を見せた。

だけど［シン］の奴、どうやら分かってないみたいだぞ？

「イヤイヤ、まだこれで終わりじゃないから」

『「「へ？」」』

俺の言葉に、［シン］だけじゃなく先輩とサンドラも気の抜けた声を漏らした。

「まさか先輩とサンドラも、これで終わりだと思ったんですか？」

「い、いや、確かまた出入りして戦うのだったな……」

「そ、そうでしたわネ……」

あー……やっぱり少し思い違いしてるみたいだ。

「いえ、今度はこの通路の反対側の十字路にいる幽鬼（レブナント）を倒しに行きますよ」

『「「へ？」」』

「はは、まあついて来てください」

俺は先輩とサンドラに声を掛けて、いつものように真っ直ぐに向かわず、左に曲がって進んだ。

「も、望月くん……一体どこに向かっているんだ……？」

「ご心配なく。もう着きましたから」

「へ？　どういうことですノ？」

不安な顔をする先輩と、不思議そうな表情を浮かべて尋ねるサンドラ。

俺はそんな二人に、通路の先を指差すと。

「「っ！？」」

そこには、クイーン＝オブ＝フロストの倍はあろうかという大きさの、彫刻の男性像のような幽鬼（レブナント）がいた。

しかも、一定時間経過したら、時計回りに九十度動くところも変わらない。

「あれは……？」

「はい。アレも、倒した幽鬼（レブナント）と同じ性質ですね。ただし、こちらは火属性ですが」

「「っ！」」

俺の説明を聞き、二人は瞳を輝かせた。

それはそうだろう。だって、カモが目の前にいるんだから。

『はうはうはう！　とっちめてやるのです！　［シン］の養分にしてやるのです！』

「あ、オ、オイ！」

俺の制止も聞かず、［シン］は通路の先にいる幽鬼（レブナント）、“キング＝オブ＝フレイム”へと突撃していった。

当然、［シン］の存在に気づいたキング＝オブ＝フレイムは、その口を大きく開き、【火属性魔法】の上級魔法である【ヘルファイア】を吹き出した。

『はう！　そんなもの、効かないのです！』

『ッ！？』

【ヘルファイア】をはね返され、キング＝オブ＝フレイムはたじろぐ。

その隙を狙って、［シン］は肉薄すると。

『食らえー！　なのです！　【凍】！』

『ッッッ！？』

キング＝オブ＝フレイムに何枚もの呪符を貼り付け、氷属性攻撃によるダメージを与え続ける。

「［シン］！　後は任せろ！　おおおおおおおおおッッッ！」

「【裁きの鉄槌】！　ですワッッッ！」

もう虫の息の状態のキング＝オブ＝フレイムに対し、［関聖帝君］と［ペルーン］が無慈悲な一撃を与え、そして……幽子とマテリアルへとその姿を変えた。

『はう！　圧勝なのです！』

嬉しそうに胸を張る［シン］。

俺はそれを見て、思わず口元を緩めた。

氷と炎のチェスの駒（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

誰よりも、強く（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

誰よりも、強く

「ということで、これからは時間の許す限り、毎日ここでレベルアップに励みたいと思います」

“ぱらいそ”領域（エリア）でキング＝オブ＝フレイムとクイーン＝オブ＝フロストをそれぞれ十回以上倒し、満足げにガイストリーダーを眺めている藤堂先輩とサンドラに向かってそう伝えた。

「エエ！　もちろんですワ！」

「うむ……」

サンドラが嬉しそうに頷く中、先輩だけは俺をジト目で睨む。

「……私に内緒で、疾走丸を取りに行っていたことについては許せんがな」

「あ、あはは－……」

そのことに関しては、ただ謝るしかない。

とはいえ、さすがに忙しい先輩を毎回毎回つき合わせるわけにはいかなかったし……。

「フフ……ですガ、これからはこの幽鬼（レブナント）を倒すついでに疾走丸も入手することになるのですし、心配する必要はもうないのでハ？」

「そ、それはそうかもしれんが……」

サンドラが助け舟を出してくれたことで、先輩はこれ以上このことについて言うことはなくなった。

そんなサンドラに俺はサムズアップすると、サンドラはニコリ、と微笑んだ。

「さて……では、もう遅くなったことだし、今日のところは帰ろう」

「「はい！」」

俺達は〝ぱらいそ〟領域（エリア）、そして初心者用の領域（エリア）を抜けて外に出た。

「ふう……ところで、あの二体の幽鬼（レブナント）相手に、ここまで見事に戦えるようになったのだ。あの領域（エリア）をもう少し攻略してみても……「駄目です」」

先輩の提案を、俺は明確に否定する。

「いいですか？　俺達はたまたま【火属性反射】と【氷属性反射】を手に入れたから、結果として容易に倒せてますけど、それがなかったらアッサリ倒されているのは俺達です」

「う、うむ……」

「それだけじゃありません。先輩、俺達が戦っている場所は、あの領域（エリア）の入口付近でしかないんです。つまり」

「……我々が脅威だと思っているあの幽鬼（レブナント）も、あの領域（エリア）では所詮は一幽鬼（レブナント）に過ぎないということか」

俺の話を引き継いでそう話し、悔しそうに唇を噛む先輩に、俺は無言で頷いた。

だけど……これが事実だ。

俺達が〝ぱらいそ〟領域（エリア）を本気で踏破しようと思ったら、五つの領域（エリア）を踏破することはもちろん、レベルも一人につき九十以上は絶

対に必要だ。

それだけじゃない。物理攻撃主体の二人と術者タイプの俺という構成は、一見バランスがいいように思うが、実際のところ、遠距離攻撃はサンドラの【雷属性魔法】のみ。

［シン］のスピードと【神行法】を活かして距離の壁は感じないが、それでも、遠距離攻撃が必要な局面が必ず出てくる。

何より……俺達には、ダメージを受けた時に、回復する術がない。

すると。

「ふ……ふふ……！」

何故か、先輩が俯きながら笑い出した。

「先輩……？」

「ハハハハハ！　いや、私も［関聖帝君］もまだまだだな！　もっと……もっと強くならねば！」

そう言って、先輩は愉快そうに大声で笑った。

本当に、嬉しそうに。

「ハハハ！　それに、さらに強くなる手段を君が示してくれた！　本当に……君と一緒にいると、いつも心が高ぶるよ！」

「はは……！」

そんな先輩を見て、俺は思わず笑みが零れる。

そうだとも！　それでこそ、俺が憧れる藤堂サクヤ先輩だ！

「フフフ！　エエ！　ワタクシも、絶対に強くなってみせますワ！　誰よりも……先輩やヨーヘイよりも！」

サンドラも不敵な笑みを浮かべながら、俺と先輩を見つめる。

はは！　俺達だって！

「俺だって負けねーよ！　俺だって、先輩もサンドラも超えてやる！　たとえ主人公だって！」

『はう！　［シン］は絶対に強くなってやるのです！　マスターと一緒に！』

「ああ！」

俺と［シン］は、ガシッと腕を合わせる。

そんな俺達を、いつの間にか先輩とサンドラが優しく見つめていた。

◇

「……ということで、今日は先輩の家でご飯を食べて帰るから」

『分かったけど……迷惑を掛けちゃダメよ？　それと、絶対に今度、お礼も兼ねて家に連れてきなさいね』

「うん」

そう返事して電話を切ると。

「お、お母様は何と……？」

先輩が不安そうに俺を見つめていた。期末テストの時もそうだけど、先輩は一体何を気にしているんだろう……。

「あ、母さんからは先輩に迷惑を掛けないようにって釘を刺されました。そ、それと……」
「そ、それと……？」
先輩が上目遣いになり、俺の言葉を待つ。いや、恥ずかしいんだけど。
「そ、その……これまでのお礼もしたいので、ぜひ一度家に来て欲しい、と……」
「っ！」
俺は照れながらそう告げると、先輩が目を見開いた。
「えーと……先輩？」
「あ、あう……望月くんのお母様からの招待……ど、どうしよう……」
先輩は顔を真っ赤にしながら、困った表情を浮かべながらオロオロする。
あ……やっぱり先輩には迷惑、だったかな……。
「あ、そ、その……もし迷惑でしたら、母さんには俺から……「行く！　もちろん行くとも！」……は、はい」
変に気を遣わないようにと、そう言おうとしたら、先輩に詰め寄られ、全力で「行く」と言ってくれた。というか先輩、すごく近いです。
「あ、あはは、母さん絶対喜びます」
「う、うむ！　そそ、そうか！」

「はい！　じゃあ……「ワ、ワタクシも行きますわヨ！」」

すると、いつの間にか応接室にいるはずのサンドラがいて、そう宣言した。

「ヨーヘイ！　ワワ、ワタクシも行きますワ！　ヨーヘイのお家ニ！」

「お、おう」

今度はサンドラに詰め寄られ、有無を言わさないとばかりに宣言されてしまった。というかサンドラ、近いぞ。

でも……母さんには先輩だけじゃなく、サンドラにも会って欲しいな。

俺が世界一信頼する、この二人に。

「はは……！　じゃあ俺、帰ったら母さんに伝えるよ！　先輩とサンドラが来てくれるって！」

「ううう、うむ！　よ、よろしく、その……お願い、します……」

「ワワ　ワタクシ、お母様に気に入ってもらえるかしラ……」

意気込む俺とは反対に、先輩とサンドラは、その白い肌を耳まで赤くしながら、何やらモジモジしていた。

二人共、さっきの勢いはどこ行ったんだよ……。

誰よりも、強く（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

三年生最強の二人（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

三年生最強の二人

「望月さん、露店の場所の割り当て、まだ調整が終わってませんがどうなっていますか？」
「望月くん、すまないがこの書類を整理しておいてくれ」
「ヨーヘイ！　学園祭用のアーチの発注はどうなってますノ！」
先輩とサンドラと一緒に“ぱらいそ”領域（エリア）でのレベル上げ作業を開始した次の日の放課後……俺は三人から、いいようにこき使われていた。
いや、確かに学園側との折衝なんかは藤堂先輩じゃないとダメだし、氷室先輩も学園祭の会計作業があるし、サンドラもその二人の補佐で手一杯だし……。
うん、俺にできることは、むしろ雑用しかない。
ということで。
「すいませーん。生徒会ですが、露店の割り当てのことで相談があるんですけどー」
俺は一つでも仕事をこなすため、まずは吹奏楽部に来た。
というか吹奏楽部って、学園祭で演奏とかするんだよな？　なのに、なんで露店とか出す余裕あんの？　練習しろよ。
すると。
「鈴原センパーイ！　生徒会が来ましたー！」

練習もしないでおしゃべりをしていた女子生徒の一人が、音楽室の奥でトランペットを吹いている女子生徒に声を掛ける。

フーン……あれが“鈴原カエデ”、だな。

『攻略サイト』では吹奏楽部の部長で、美人ではあるけれど、どこか挑戦的な態度とキツイ言動でメインヒロイン・サブヒロインの人気投票では常に下位ってなってたな。

「生徒会が何の用？」

コッチに来るなり、早速睨まれてしまった。

まあ、先輩の手下である俺に対して、いい顔するわけがないか。

なにせ、そのせいで吹奏楽部は恩恵に預かれなくなったんだから。

「はい。露店の出店場所の割り当てについてなんですけど、実は希望いただいた場所が好立地のために、他の部活と競合してまして……それで、各部活に抽選のくじを引いてもらってるんです」

「はあ！？　なんでうちがそんなことしないといけないのよ！　去年はそんなことなかったじゃない！」

くじ引きを提案すると、鈴原カエデは露骨に顔をしかめ、俺に食って掛かった。

「いや、そう言われても……」

「ナニヨ！　そんなの、生徒会がなんとかしなさい！」

ハア……というか、まるで話を聞きやがらない……。

「……分かりました。では、生徒会が吹奏楽部の代理としてくじを

引いた上で、その結果に基づいて割り当てますね。ああ、もちろん、後でやり直しだったり苦情は受け付けませんので」
「は？　アンタ、一年生でしょ？　ちょっと生意気なんじゃない？」
「すいません、仰ってる意味が分からないです。とにかく、ご自身でくじを引いていただくか生徒会が代理で引くかのどちらかですので」
「この……！」

鈴原カエデは拳を握りしめながらプルプルしてる。
いや、当然だろ。

「……いい度胸じゃない」
「すいません、仰ってる意味がよく分かりません。それで、どうされますか？」
「分かったわよ！」

そう言って、俺が差し出した封筒の中から、鈴原カエデはくじを一枚引いた。

「……Ｂ―七よ」
「ああー……そうなると、こちらの体育館側の場所になりますね」

鈴原カエデの引いた場所は、希望の場所ではないものの、それなりに悪くない場所だった。
ここなら、やり方次第で繁盛するんじゃないだろうか。

「……フン」

だけど、それでも気に入らない鈴原カエデは、キッと俺を一睨みすると、鼻を鳴らして練習に戻って行った。感じ悪い。

「ハア……次、行くかあ……」

そう呟くと、俺は肩を落として次の部活へと向かった。

◇

「エー……ウチ、イヤだし」

次にやって来たのは陸上部。

そして今、目の前で拒否を示した金髪ギャルが、陸上部キャプテンの“和気チアキ”だ。

というかコイツも態度悪いな。人と話してるんだから、小指で耳の穴ほじるのやめろよ。

「そう言われても……今回はくじ引きで手を打ってもらえませんか？」

「ハア？　そーだなー……ならさ、アンタがルフランのジェラート奢ってくれたら、考えてあげてもいーけど？」

ん？　ルフランのジェラートかー……って、なんで真剣に奢る方向で考えてんだよ。

だけど、ルフランのジェラートねだるって、まるで［シン］みたいだな。

「ネ？　ネ？　奢ってよー！　今月ウチ、ピンチなんよー」

などと愛想笑いを浮かべながら上目遣いで拝む和気チアキ。

ウーン……ジェラートの一つでくじ引いてくれるんならいいかなー……。

「……分かりました。それで手を打ちますよ」
「ホント！　アンタ、生徒会の一年生なのに話分かるじゃん！」
そう言って、ぱあ、と満面の笑みを浮かべた和気チアキは、俺の背中をバシバシと叩いた。というか、馴れ馴れしいな。
「それじゃ、早速くじを引いてください」
「ハイハイ」
和気チアキは封筒に手を突っ込み、ガサガサとかき回すと。
「ホイこれ」
「えーと……Ａ―四だから、希望していた場所ですね」
「ヤッタ！　どーよ、ウチのくじ運は！」
そう言って、和気チアキは満面の笑顔でピースサインをした。
いや、どうって言われても……。
「ハア……それで、ルフランのジェラートはいつ奢ればいいんです？」
「ンー……ウン、今は部活が忙しーし、そん時になったらまた声掛けるし！　エート、アンタ名前は？」
「あ、ああ……俺は“望月ヨーヘイ”っていいます」
「そっかー！　じゃあモッチー、またね！」
和気チアキは笑顔で手を振りながら、また練習に戻って行った。
まあ、鈴原カエデよりは接しやすかったし、生徒会だからって露骨に嫌な顔されなかったから、まあいいか……。

俺は頭をガシガシと掻くと、残りの部活を回ってから生徒会室へと戻った。

三年生最強の二人（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

リコール（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

リコール

俺とサンドラが生徒会に入ってから一週間。
今日も忙しく生徒会活動に勤しんでいる。

「ふう……なんとかこれで、学園祭について目途が立って来ましたね……」

生徒会室で深く息を吐きながら、俺は誰に向けるともなくそう話した。

「ふふ……ああ、それもこれも、君達のおかげだ」
「そうですね。会長と私の二人だけでしたら、間違いなくこの生徒会は破綻していましたね」

藤堂先輩がニコリ、と微笑み、氷室先輩は無表情でそう言い放つ。
というか氷室先輩、サラッと怖いこと言わないでくださいよ……。

「ところで、君達のクラスの出し物の準備は、その……手伝ってこなくてもいいのか……？」

藤堂先輩が心配そうな表情を浮かべながら、おずおずと尋ねる。

「はい。クラスのみんなに事情を話したら、快く送り出してくれました」
「ソウソウ、特にアオイなんか、『望月くんのためにも頑張る！』って言って、張り切ってましたわネ」

そう言うと、サンドラがクスリ、と笑った。
まあ……そう言ってくれるのは嬉しいんだけど、アオイの奴、そのことを盾に、まるでおねだりするかのように遊びに行く約束をしてきやがった。
というか、そんなことしなくても一緒に遊びにくらい行くのにな。

「ふふ、相変わらず君と立花くんは仲良しだな」
「あはは、そうですね。まあ、アイツも俺にとって大事な友達ですから」
「そうか」

そして、俺達はまた作業に戻る。

その時……突然、生徒会室の扉が開いた。

「失礼する！」
「オマエは……！」

なんと、やってきたのは牧村クニオ……先代の生徒会長だった。
しかも、ぞろぞろと女子達を引き連れており、その中には二―一の女子生徒もいた。
ということは……コイツ等全員、旧生徒会メンバーか？

「……この生徒会に何の用だ。部外者は出て行ってもらおうか」
「クフフ……藤堂くん、僕達は今日、生徒達の代表としてやって来たんだよ」
「どういうことだ？」

キッと睨みつけ、威圧する先輩だが、下品な笑みを浮かべる牧村クニオの言葉に、先輩は訝しげな表情を浮かべながら尋ねた。

「クフ、我々はアレイスター学園有志代表として、ここに現生徒会へのリコールを宣言する！」
「「「「はあ！？」」」」

リコール！？　リコールっていったら、今の生徒会を全員クビにしたいってことかよ！？
だけど……あの時に言っていた『生徒会長の座から引きずり下ろす』っていうのは、このことかよ……。

「……生徒会のリコールとなると、学園の生徒、三十人以上の署名が必要になりますが？」

氷室先輩は表情を崩さず、凍えるほど冷たい声で問い質す。
というか、氷室先輩……これって相当怒ってるんじゃ……？

「クハハ！　当然だよ！　“佐久間 〝くん！」
「はい」

牧村クニオに声を掛けられると、二―一の女子生徒がス、と前に出てきて、数枚の紙を氷室先輩に差し出した。
どうやらリコールに署名した生徒達の名簿のようだ。

「……確かに、既定の数の署名は集まっているようですね。といっても、ここにいる皆さんの署名が三分の二以上を占めてますが」
「クッ……う、うるさいわね！　ちゃんと既定に達してるんだからいいでしょ！」

はは、ちょっとスカッとした。氷室先輩ナイス。

「と、とにかく！　このリコールに伴い、生徒による信任投票を要求する！　投票日は一週間後の火曜日だ！」
「「「「はあ！？」」」」

牧村クニオの言葉に、俺達は思わず声を上げる。
一週間後の火曜日っていったら、学園祭の前日じゃねーかよ！？

「チョ、チョット待てよ！　そのすぐあとに学園祭が控えてるんだぞ！？　そんな時に投票とかやってる場合じゃねーだろ！」
「クフフ、そんなの僕達には関係ないね。そもそも、生徒達から信頼されてない生徒会が悪いんじゃないのか？」
「っ！　テメエッ！」

俺は思わず突っかかりそうになるが、藤堂先輩に無言で止められた。

「分かった……いいだろう。来週火曜日、信任投票を行い、是非を問おう」
「クフフ、カッコイイじゃないか。火曜日が待ち遠しいよ。みんな、行くぞ」

そう言って、牧村クニオと旧生徒会メンバー達は、俺達を一瞥した後、生徒会室を出て行った。

「つーか、あの連中はなんなんだよ！　アイツ等こそ、この学園のこと何も考えてねーじゃねーか！」
「本当ですワ！　こんな真似をして、タダじゃ済ませませんわヨ！」

怒りの収まらない俺とサンドラは、扉に向かって大声で叫んだ。

「落ち着け、望月くん」
「っ！　だけど！」
「ふふ……面白いじゃないか。この私に喧嘩を売ったこと、後悔させてやる」

先輩はそう言うと、不敵な笑みを浮かべた。

「会長、現実的な話をしてもいいですか？」
「……なんだ？」
「今のスケジュールでも、ようやく学園祭開催に向けて目途がたったというレベルです。ここにリコールのための信任投票の準備もしなければならないとなると、さすがに時間が足りません」

氷室先輩は無表情でそう告げる。
アイツ等も、その辺を見越してこのタイミングでリコールなんてしやがったんだろう。
本当に汚い連中だ。

「そうだな……それに関しては、本当にすまないが、君達に頑張ってもらうしかない……」
「そうですか……」

いや、もうこうなったら、なりふり構ってられない、な……。

「フフ……まあ、みんなに協力を仰ぐしかないですわネ」
「サンドラ、お前もそう思うか？」
「エエ、一―三のみんなには申し訳ありませんけド」
「だな」

俺とサンドラは口の端を持ち上げ、頷き合った。

リコール（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

あなたが、見てくれる（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

あなたが、見てくれる

「……というわけなんだけど」

俺とサンドラは一―三の教室に来ると、学園祭の作業をしていたアオイとプラーミャに声を掛け、事情を説明した。

二人に、生徒会を手伝ってもらうために。

「あはは！　もちろん手伝うに決まってるよ！」

「エエ、そうネ」

「二人共、ありがとう……」

俺は二人に向かって深々と頭を下げた。

二人なら手伝ってくれることは分かっていたけど、それでも、二つ返事で快諾してくれたことが嬉しかったんだ。

「や、やめてよ！　だってボク達友達じゃないか！」

「フフ……私（ヤー）のサンドラにこんな迷惑を掛けるだなんて、命知らずな連中ネ」

いやプラーミャ、いくらアイツ等がクソだからって、変な真似だけはするなよ。

そしてアオイよ、やたらと友達ってフレーズを強調するのな。

「でも、それだったらボク達以外の人にも手伝ってもらったほうがよくない？」

「ああ、だから加隈の奴にも頼みに行こうと思ってるんだけど」

「チョット待ってね。おーい、みんなー！」

するとアオイは、クラスのみんなに大声で声を掛けた。

「立花くん、どうしたの？」

「なんだよ立花」

クラスの連中が、全員アオイに注目する。

「ボク達の出し物って、あとは衣装を各自で準備するだけでしょ？
実は今、望月くんとサンドラさんがいる生徒会がピンチなんだ。
このままじゃ、生徒会がなくなっちゃうだけじゃなくて、学園祭もできなくなるかもしれない」

「「「「「ええー！？」」」」」

アオイの言葉に、クラスの連中が驚きの声を上げた。

「そ、そんなの困る！」

「そーだぜ！　せっかくここまで準備してきたのに！」

「あはは、だよね。だから……ボク達一―三で、生徒会を手伝ってあげようと思うんだけど……どうかな？」

アオイははにかみながらクラスのみんなに問い掛けた。

すると。

「……まあ、しょうがないよね」

「だな。このまま学園祭ができなくなるっていうのも癪だしな」

「うん！　やってやろうじゃない！」

アオイの言葉で、クラスのみんながいい表情で頷き合う。

はは、何だよ……アオイの奴、本当に主人公みたいじゃないか…

…。

「ようし！　みんな！　ボク達の力で、学園祭を絶対に成功させようう！」

「「「「「オー！」」」」」

クラスのみんなが一致団結して、気勢を上げた。

その中には、当然プラーミャやサンドラの姿も。

そして俺は、その中心にいるアオイを、胸襟をキュ、とつかみながら、ただ眺めていた。

◇

「藤堂先輩！　氷室先輩！　一―三のみんなが助っ人に来てくれましたワ！」

俺達はクラス全員で生徒会室にやって来た。もちろん、生徒会の仕事を手伝ってもらうために。

「おお……！　これはすごい！」

「ええ……これなら」

藤堂先輩と氷室先輩が、クラスのみんなを見て満足そうに頷くと。

「うむ！　では、学園祭の運営を担当する者と信任投票の準備に取り掛かる者で二班に分けよう！　主に学園祭については氷室くんが、信任投票の準備はこの私が担当するので、みんな指示に従ってくれ。それと」

そう伝えた後、藤堂先輩がみんなを見据え、胸を張る。

「みんな……本当に、ありがとう」

そして、深々と、そして堂々とお辞儀をした。

「あはは、お礼を言うのは全部終わってからですよ！」

「そうそう！　立花くんの言う通り！」

「ふふ……そうだな……」

そんな立花と先輩のやり取りを見て、クラスのみんながドッと笑う。

うん、みんなの雰囲気も最高……これなら、絶対に全部上手くいくはずだ。

「さて……それじゃ俺は、各部活との最終調整をしてきますね」

俺はそう告げ、生徒会室を出ようとすると。

「ええと……先輩？」

「望月くん、ちょっと話をしようか」

藤堂先輩が俺の肩をポン、と叩き、一緒に生徒会室を出る。

そして、そのまま食堂へと向かった。

「それで……望月くん、なにか悩みでもあるのか……？」

「え……？　ど、どうしてですか？」

席に着くなり、先輩にそんなことを尋ねられ、俺は一瞬しどろもどろになる。

「いや……君達が一―三のクラスのみんなを連れて来た時、君だけ少し浮かない表情をしていたから……」
「あ……そ、そんなこと……ないですよ……」
真剣な表情で俺を見つめる先輩の、その真紅の瞳に耐え切れずに、俺は目を伏せてしまった。

「嘘だな」
「……」
「ひょっとして……立花くんのことか？」
「っ！？」

そう言われ、俺は思わず息を飲んだ。

「ふふ……やはりか」
「ど……どうして……？」
「君が、クラスの先頭に立つ立花くんを見て、苦しそうにしていたから、だな……」
「そう、ですか……」

あ、はは……先輩には、何でもお見通し、なんだな……。
でも……できれば先輩には、気づかれたくなかったけど……。

「……はは、俺……自分がこんなに小さい人間だなんて、思わなかったんです……」
「……」
「俺、生徒会を何とかしたくて、サンドラと一緒に立花やプラーミャに、助っ人に来てくれって頼んだんです。そしたら立花の奴、クラスのみんなに声を掛けて、クラス全員で生徒会を助けようって言

ってくれて……」
「うん……」
「そしたらクラスのみんなも、二つ返事で手伝うって言ってくれて……その時の立花が、俺にはまるで主人公に見えて……」
ここまで一気に話して、俺は息を詰まらせる。
だって……あの時の、そして今の俺の感情は、嫉妬ってヤツだから……。
「あはは……俺、何言ってるんですかね……」
俺はもう話を切り上げたくて、苦笑しながらおどけてみせた。
これ以上、先輩に幻滅されたくないから。
すると。
「え……？　せ、先輩……？」
先輩は俺の隣にやって来て、ギュ、と俺の身体を抱きしめてくれた。
「ふふ……誰かが羨ましくて、嫉妬する。それのどこがいけないんだ？」
「え……いや、でも……」
「私だって、誰かに嫉妬することはあるし、羨ましいと思うこともある。だから、そう思うことは何も悪いことじゃない」
「……」
先輩が耳元で、優しくささやく。
俺に言い聞かせるように、俺を諭すように。

「それに、な？　君だって、立花くんに負けないくらい……いや、立花くんよりも遥かに、私は素敵な男の子だと想っているよ」
「あ……」
先輩は、その真紅の瞳で俺を見つめ、ニコリ、と微笑んだ。
だけど……それだけのことが、俺のこのすさんでいた……苦しかった心が満たされていくのが分かる。
「あ、あはは……先輩はやっぱり最高すぎ、ですよ……！」
「ふふ……当然だ。私も、君だけには幻滅されたくないからな」
そうだ……俺には先輩がいる。
先輩だけは、絶対に俺のこと、見ていてくれる。
そう思えることが、幸せでたまらなかった。

あなたが、見てくれる（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

意外な遭遇（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「あはは……先輩、俺……もう大丈夫です」
「ふふ、そうか」

すると先輩は、少し名残惜しそうに俺から離れた。
でも、そんな先輩の表情は、吸い込まれそうなほどに綺麗で……。

「ん？　どうした？」
「あ、ああいえ……その、俺……先輩と出逢えて、本当に幸せです」
「あう！？　う、うむ、そそ、そうか……」

今度は、俺の言葉で先輩がその綺麗な顔を真っ赤に染めてしまった。
はは、こんなところも、先輩の魅力の一つだよな。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩いた。

「先輩、ありがとうございます」
「うむ、いい表情だ」

先輩が、俺の顔を見て力強く頷いた。

「じゃあ、今から各部活との調整に行ってきます！」
「ああ！　望月くん、頑張れ！」
「はい！」

先輩の最高の激励を受け、俺は胸を弾ませながら生徒会の仕事に勤しんだ。

◇

「ふいー……今戻りましたー……」

各部活との調整を終え、生徒会室に戻って来ると、みんなが忙しそうに仕事をしていた。

うむ、よきよき。

「ア！　ヨーヘイ！」

「おお、サンドラ」

俺を見るなりサンドラが駆け寄ってきた……けど、なんだか様子が……。

「どうした？」

「ソ、ソノ……ヨーヘイこそ大丈夫ですノ……？」

「へ？　俺？」

サンドラの心配そうな表情に、俺は思わずキョトン、としてしまった。

「ダッテ……生徒会室を出て行く時、その……様子ガ……」

「あー……」

何だよ……先輩だけじゃなくて、サンドラにもバッチリ気づかれてんじゃん……。

本当に、先輩も、サンドラも……！

「ワッ！」

「はは！　もう大丈夫！　心配かけて悪かったな！」

「ア……フフ……」

俺はサンドラの頭を少し乱暴に撫でると、俺の表情を確認してから、嬉しそうに目を細めた。

全く……俺って奴は、何勝手に嫉妬して落ち込んでたんだよ。

俺のこと、こんなに見てくれる女性（ひと）が、二人もいてるってのに……。

そうだな……俺はもう、クソザコモブな俺じゃない。

『ガイスト×レブナント』っていうゲームの主人公になれないけど、それでも俺は……“望月ヨーヘイ”は、確かにここにいるんだ。

「あ！　望月くん！」

「おう！」

立花が嬉しそうにパタパタとこちらへやって来たので、俺も手を挙げた。

「えへへー、氷室先輩が上手に指示してくれるおかげで、コッチも順調だよ！」

「お！　そりゃよかった！　氷室先輩、すごいだろ！」

「うん！　まさに『仕事がデキル女性』って感じだよね！」

「うむうむ……って、ハッ！？」

俺は殺気を感じ、恐る恐る振り返ると……。

「むううううううううううう！」

はい、藤堂先輩が頬をプクーと膨らませて、拗ねておりました……。

◇

土曜日になり、俺は家を出て学園へと向かう。

今日は、“ぱらいそ”領域（エリア）で先輩とサンドラの三人でレベル上げをする予定なのだ。

『はう！　今日は狩って狩って狩りまくるのです！』

「ははは、そうだな！」

うん、［シン］も張り切ってる様子。

さてさて、早く行かないと二人が待って……って！？

「うお！？」

「わっ！？」

十字路の角から、少年が勢いよく飛び出してきて、俺とぶつかるなり倒れてしまった。

というか俺、立花の時といい、よく誰かとぶつかるなあ……。

「すまん、大丈夫か？」

「イテテー……」

痛そうにお尻を押さえている少年に、手を差し伸ばす。

「兄ちゃん、気をつけろよな！」
「お、おお、悪い……」

何故か少年にすごまれてしまった……。
で、少年は俺の手を取ると、そのまま立ち上がる……んだけど。

「イタッ！」
「どうした？」
「足が……」

ひょっとして、ぶつかった時に足でもくじいたか？

「ちょっと見せてみろ」
「う、うん……イタッ！」

少し足首を動かしてみると、少年は顔をしかめて痛そうにした。
ああ……やっぱり。完全に足くじいてるじゃん。

「なあ、少年の家はこの近くなのか？」
「え？　俺の家？　う、うん……」
「そうか」

そう言うと、俺は少年の前でしゃがんだ。

「ホレ。家まで運ぶから背中に乗れ」
「え？　い、いいよ！」
「バーカ、下手に歩いたりしたら、余計に酷くなるかもしれないだろ。それに、ぶつかったのは俺なんだし、ここは大人しく乗っとけ」

少年は躊躇（ちゅうちょ）するも、俺に促されておずおずと背中に乗った。

「よし。じゃあ少年の家の場所、教えてくれるか？」
「うん！　アッチだよ！」

俺は少年を背負いながら、指示通りに進む。
すると、ものの五分で少年の家に着いた。

「ここが俺の家だよ」
「そうかー、じゃあ……」

俺はインターホンを押そうと手を伸ばそうとすると。

「あれ？　タカシと……望月さん、ですか？」
「へ？　氷室先輩？」

買い物袋を持った氷室先輩と、少年の家の前でバッタリと出会ってしまった……って。

「な、なあ少年。ひょっとして……」
「あ！　姉ちゃん！」

はい、ここは氷室先輩の家で、この少年は氷室先輩の弟さんでした。

意外な遭遇（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

なお、明日からは朝と夜の一日二話更新とさせていただきます！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷室家（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷室家

「あれ？　タカシと……望月さん、ですか？」
「へ？　氷室先輩？」
買い物袋を持った氷室先輩と、男の子の家の前でバッタリと出会ってしまった……って。
「な、なあ少年。ひょっとして……」
「あ！　姉ちゃん！」
はい、ここは氷室先輩の家で、この少年は氷室先輩の弟さんでした。いやあ、世間って狭いなあ。
などとしみじみ感じていると。
「それで……どうして望月さんがタカシと一緒にいるんですか？」
「あ！　そうだった！」
俺は少年を一旦降ろし、事情を説明した。
「そうですか……タカシがすいませんでした」
「いやいや！　ぶつかって怪我をさせたのは俺のほうですし、こちらこそすいませんでした！」
俺は頭を下げる氷室先輩に向かって、深々と頭を下げた。
「いえ、頭を上げてください。多分、タカシが迷惑を掛けたんでしょうから……」

「い、いえ！　俺が急いでいて注意が散漫になってたからで！」

などと、氷室先輩と俺は謝罪の応酬を繰り広げている。なんだコレ。

「まあまあ、姉ちゃんも兄ちゃんも、俺のことでそんなに謝らないでよ」

『そうなのです！　ケンカ両成敗なのです！』

「「いや、なんでお前が言ってるんだよ（言ってるんですか）」」

おっと、氷室先輩とツッコミがハモってしまった。

というか［シン］、何勝手に出て来てるんだよ。

「……望月さん、どうして精霊を召喚してるんですか？」

ほらあ、また説明しないといけなくなるじゃん。メンドクサイ。

「スゲー！　兄ちゃんって姉ちゃんと同じ精霊使いなのかよ！」

「おう。というか、俺は少年のお姉さん……氷室先輩の後輩で、“望月ヨーヘイ〟っていうんだ。よろしくな！」

『［シン］なのです！　よろしくお願いしますなのです！』

キラキラと瞳を輝かせ、羨望の眼差しで俺を見つめる少年の頭を撫でてやる。

というか、久しぶりにそんな視線を受けた気がする。ちょっと……いや、かなり嬉しい。

そして［シン］よ、勝手にしゃべるな。

「……」

ホラ見ろ、氷室先輩が固まっちまったじゃねーか。
氷室先輩はただでさえ表情が読み取りづらいんだから、困るんだぞ？

「あ、あははー……俺の精霊（ガイスト）、ちょっと特殊でして……」
「そ、そうでしたか……それより、タカシがご迷惑をお掛けしたお詫びと、ここまで運んでいただいたお礼をしたいので、どうぞ中へお入りください」
「はえ!?　い、いやいや、お気になさらず！」

俺は手をバタバタさせながら、何とか断ろうとする。というか、さすがに申し訳なさすぎるし、先輩とサンドラも待たせてるし……。

「そういうわけにはいきません」

……だけど、氷室先輩は俺を一向に逃がす気はないらしい。
ま、まあ、先輩達には遅れるとだけ連絡しとくかあ……。

「わ、分かりました……」
「はい。ではどうぞ」

ということで、俺は氷室先輩に案内され、家の中へと通された。

「「お姉ちゃんお帰りなさい！」」

少年よりもさらに小さな、同じ顔をした女の子が二人、お出迎えをしてくれた。
へえ……氷室先輩って、四人姉弟妹（きょうだい）なのか。

「「え、ええと……お兄さんは誰ですか？」」

「はは、俺は“望月ヨーヘイ”。いつも氷室先輩にはお世話になってるんだ。よろしくね」
『はうはうはう！　［シン］は［シン］なのです！　よろしくお願いしますなのです！』

いや［シン］、その自己紹介じゃよく分かんねーよ。
だけど、氷室先輩の妹さんにはウケが良かったみたいで、嬉しそうに［シン］にまとわりついていた。

「では、こちらで少しお待ちください」

俺を畳の部屋に通すと、氷室先輩はどこかに行った。多分、お茶でも用意してくれているんだろう。

「おっと、今のうちに先輩とサンドラに連絡しておくか」

スマホを取り出し、先輩とサンドラにメッセージを送る。
まあ、【火属性反射】と【氷属性反射】があるから、あの二人なら俺がいなくても楽勝だろう。というか、差をつけられそう。

その時。

「ミャー」

お、ネコだ。
へえ、丸々と太って福々しいネコだなあ。でも可愛い。

「よーしよし、コッチにおいで」
「ミャー」

俺は手招きをすると、ネコはトコトコとやってきて、俺の膝の上でコテン、と寝転んだ。いや、ナニコレ、超可愛いんだけど。

『はうはうはう！　これはライバルの出現なのです！　［シン］の定位置の危機なのです！』

などと言いながら、［シン］がネコを睨みつける。

いや、なんでネコと争ってんだよ。

「お待たせしました」

すると氷室先輩が、お盆にお茶とお菓子を乗せて戻ってきた。

「あ、ああいえ、お構いなく……」

「ですが……少々嫉妬してしまいますね」

「へ？」

氷室先輩の言葉に、俺は首を傾げてしまう。

「いえ、うちの“ミャー太”が望月さんに懐いているので。私の膝には乗ってくれませんのに」

「あ、あはは……」

氷室先輩は表情を変えないまでも、プイ、と顔を背けてしまった。

そんな氷室先輩に対し、俺は苦笑するしかなかった。

氷室家（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷室先輩の事情（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷室先輩の事情

「コホン……それで、タカシの件につきましては、すいま……ああいえ、また謝ってしまうと、先程の繰り返しになってしまいますね。ここまで連れてきてくださり、ありがとうございました」

気を取り直して、氷室先輩からお礼を告げられた。

こちらとしては、怪我をさせたのは俺なので心苦しいけど、ここは素直に受け取っておこう。そうじゃないと、またエンドレスに頭を下げ続けることになってしまいそうだし。

「ああ、どうぞお召し上がりください」

「は、はい、いただきます……」

俺は氷室先輩が見守る中、湯飲みを手に持つ。

というか、そんなにジッと見られると、その……うう、ちっとも落ち着かない……。

『はうはう！　［シン］はアイスをご所望なのです！』

「コラ、［シン］！　はしたないぞ！」

「……これは失礼しました。今、用意してきます」

「いいい、いえ！　全然お気になさらず……って、あああ……」

［シン］が余計なことを言ったばっかりに、氷室先輩が気を遣ってアイスを取りに行ってしまった……。

「［シン］―？」

『は、はう！？　ひょ、ひょっとしてマスター、すごく怒ってるの

です……？』

ここにきてやっと自分のしでかしたことを理解した［シン］は、俺の表情を窺いながら恐る恐る尋ねてきた。

「当たり前だろう！　当分、アイス抜きだからな！」

『はうはうはうはう！？　ごめんなさいなのです！　許して欲しいのです！』

少しキツめに叱ると、［シン］は持ち前の『敏捷』ステータスを活かし、瞬く間に綺麗な土下座を敢行した。

そして、ウルウルとオニキスの瞳を潤ませ、必死で訴えかけてくる。く、くう……！　お、俺はこの程度じゃ絆されないぞ……！

「お待たせしました……って、二人は何をしているのですか？」

「ああ！？　ひ、氷室先輩！？　こ、これはその……」

「いくら精霊とはいえ、こんな子どもに土下座させるとは、いただけませんね」

ええー……お、俺が悪いのかなあ……。

俺はチラリ、と［シン］を見やると、これでもかとその瞳で訴えてきやがる……ハア、チクショウ……。

「あー……分かったよ。とにかく、ちゃんと氷室先輩にお礼を言えよ」

『はう！　あ、ありがとうございますなのです！』

「いえ」

そして［シン］は氷室先輩からアイスを受け取ると、瞳をキラキラさせながらアイスを頬張った。チクショウ、幸せそうにしやがっ

て。

「あ、そういえば少年……タカシくんの怪我は大丈夫でしたか？」
「はい、少々足を捻ただけだと思いますので、とりあえず湿布を貼って様子をみます」
「そ、そうですか……」

氷室先輩の言葉に、俺は少しだけ心が軽くなった。

「それにしても、氷室先輩ってご弟妹が多いんですね」
「はい、うちは四人姉弟妹ですから」
「へー。俺、兄弟とかいないから、ちょっと羨ましいですね」

そう言うと、俺はずず、とお茶をすすった。

「ですが、うちは両親が共働きで、家事とあの子達の面倒もみないといけませんので、なかなか大変ですよ？」
「そうなんですねー」

あー、なるほど……いつも生徒会が終わったらすぐに帰っているのは、弟さんと妹さんの面倒を見てるからなのかー……納得。

「それにしても、あなたの精霊は会話をしたり、アイスを食べたり……かなり特殊ですね」
「あ、あはは……ですよね……」

氷室先輩の言葉に、俺は愛想笑いを浮かべる。
いや、それに関しては俺自身も不思議でしょうがないからなあ……。

「よろしければ、ステータスを見せていただいても……？」
「あ、いいですよ」
俺はポケットからガイストリーダーを取り出し、氷室先輩に見せた。
「っ！　……すごいですね。これほどまでのステータス、二年生……いえ、三年生でも見たことがありません」
「あはは、ありがとうございます」
氷室先輩はステータスを見た瞬間、思わず目を見開き、手放しで褒めてくれた。
もちろん、俺としても嬉しいに決まってる。［シン］なんて、アイスをくわえながら『えっへん』と胸を張っていた。
「……会長が目を掛けるだけありますね」
「いえ、それは違います」
ポツリ、と呟いた氷室先輩の言葉を、俺は明確に否定した。
だって……藤堂先輩は、［シン］になる前から、俺と、［ゴブ美］を見守り、そして、認めてくれたから。
「なるほど……私もまだまだ、ですね……」
「と、言いますと？」
少し自嘲気味にそう言った氷室先輩に、俺はあえて問い掛けた。
何度も言うが、あの『攻略サイト』では、藤堂先輩と氷室先輩は犬猿の仲だ。
だけど、俺が生徒会に入って、氷室先輩と知り合ってからこれまで、俺には氷室先輩が藤堂先輩のことを嫌っているとは到底思えな

い。そして、それは藤堂先輩も。
それどころかむしろ、俺にはお互いがお互いを認め合い、信頼し合っているようにしか見えないんだ。

「……会長……いえ、藤堂さんと比べたら、私なんか……」

でも……氷室先輩は、どうしても自分を卑下してしまう。
藤堂先輩と比べたら、自分には価値がないとでも言わんばかりに。
だから。

「氷室先輩……俺、そんなことないと思いますよ？」

気づけば、俺は氷室先輩の言葉を否定していた。

氷室先輩の事情（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

追いつけない（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「氷室先輩……俺、そんなことないと思いますよ？」

気づけば、俺は氷室先輩の言葉を否定していた。

「望月、さん……？」

「氷室先輩はどう思っているか知りませんけど、少なくとも一学期の生徒会を切り盛りしてきたのは、藤堂先輩でも他の誰でもない……氷室先輩です」

「……」

氷室先輩は、俺の言葉を聞きながら、キュ、と唇を噛んだ。

だけど、もう少し言わせてもらいます。

「俺は、氷室先輩と藤堂先輩の関係がどうなのか、何があるのか、それは分かりません。ですが、これだけは言えます。俺にとっては、氷室先輩だって藤堂先輩と同じように、尊敬できる先輩、ですよ？」

「っ！？」

氷室先輩が息を飲んだのが分かる。

だけど、これは事実だ。

あの二―一の元生徒会メンバーに絡まれた時もそうだし、普段の生徒会での仕事だって、いつも俺やサンドラを気に掛け、必要な時はそっとサポートしてくれていたことを知っている。

氷室先輩は……そんな優しい先輩なんだ。

「ふ、ふふ……」
「氷室先輩……？」

突然笑い出した先輩に、俺は思わず声を掛けると。

「……あなたは何も知らないから、そんなことが言えるんですよ。私がアレイスター学園に入学してから、どれだけ藤堂さんの背中を追い続けてきたか。追っても、追っても、引き離されるんですよ？」
「……」
「それだけじゃない。藤堂さんは一年生の秋にクラスチェンジを果たし、圧倒的な強さで、とうとうその背中すら見えなくなった……私は、こんなに努力をしてきたというのに……！」

氷室先輩はドン、と畳を叩くと、悔しそうに俯いた。
……やっぱり、『攻略サイト』にあった通り、先輩に対してコンプレックスを抱えていた、か……。

「……これを見てください」
「え……ガイスト、リーダー……？」

俺は氷室先輩からガイストリーダーを差し出され、その画面を見る。

「っ！？」

――――――――――――――――
名前　：スノーホワイト
属性　：妖精（♀）
ＬＶ　：７９
力　　：Ｆ

魔力　：Ｂ＋
耐久　：Ｆ－
敏捷　：Ａ＋
知力　：Ａ＋
運　　：Ｅ－
スキル：【氷属性魔法】【ワンショット】【セブンス】
【グラス・コフィン】【氷属性耐性】【火属性弱点】
――――――――――――――――――――

そのステータスに、俺は声を失う。

いや、ステータスそのものはバラつきがあるし、決して強いとは言えない。でも、それ以上に驚いたのが、そのレベルだ。

確か『攻略サイト』では氷室先輩の精霊（ガイスト）、［スノーホワイト］のレベルは、初見で四十四だったはず。

だけど……レベルだけなら、学園トップだろう。

「……学園に入学してからこれまで、家事や生徒会の合間を縫って、ずっと努力し続けてきました。でも、クラスチェンジだってできないし、強さだって、藤堂さんの精霊（ガイスト）には遠く及ばない……！」

「……」

「ふふ……恵まれているあなたには、分からないでしょうね。人には、どれだけ努力しても、報われない者もいるのですよ……」

氷室先輩の言葉を、俺はただ、無言で聞き続ける。

ここで俺が、その言葉を否定するのは簡単だろう。だけど……それじゃ、氷室先輩には届かない。

「……くだらない話を、してしまいましたね」

「いえ……」
「望月さんは、何も気にしなくてもいいんですよ？　ただ……ありがとうございます。少しだけ、気持ちが軽くなりました」
氷室先輩はそう言うと、表情を変えずに視線を落とした。
だけど俺には、そんな氷室先輩が、まるで出口のない迷路の中でもがいているように感じた。
こんなの……放っておけるかよ……！
「……氷室先輩、話を戻します」
「いえ、話は……「聞いてください」」
話を無理やりにでも打ち切ろうとする氷室先輩の言葉を遮り、俺は話を続ける。
「俺……どうしても、腑に落ちないんです。氷室先輩はどうして、そこまで藤堂先輩を追いかけようとするんですか？　一体、氷室先輩と藤堂先輩の間に、何があるっていうんですか……？」
「……申し訳ありませんが、今日はお引き取りください」
「氷室先輩！」
「お願い……っ！」
絞り出すような声で、氷室先輩が懇願した。
……仕方ない、か。
「……お邪魔しました」
「いえ……では、また月曜日」
「兄ちゃん、また来なよ！」
「「また来てねー！」」

嬉しそうに玄関で手を振りながら見送る少年と妹さん。
そんな中、氷室先輩は無表情のまま、その藍色の瞳でただジッと俺を見つめていた。

ハア……これは何とかするしかない、か……。

俺は頭を掻きつつ、振り返ってもう一度氷室先輩を見つめた。

追いつけない（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一方通行（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

一方通行

氷室先輩の家を出た後、俺は急いで学園へとやって来ると……。

「……」

「……」

はい、先輩とサンドラが腕組みしながら憮然とした表情で待ち構えておりました。

アレー、おかしいなあ……俺、二人には先に“ぱらいそ”領域（エリア）に入っていてもらうように、メッセージを送ったんだけどなあ……。

「……それで、遅れた理由は何なのだ？」

「……まさカ、誰か他の女の子と会ってたりしてたんじゃないでしょうネ……？」

「っ！？」

先輩の詰問とサンドラの言葉に、俺は一瞬心臓が止まりそうになった。

いや、特にサンドラ、なんで分かるんだよ！？

「望月くん？」

「ヨーヘイ？」

「あ、あはは－……実は……」

俺は険しい表情のままの二人に経緯（いきさつ）を話した。

学園に向かう途中、少年とぶつかってしまい、怪我をさせてしま

ったこと。
で、少年を背負って家まで運ぶと、なんとそこ氷室先輩の家で、少年は氷室先輩の弟さんであったこと。
その後、お礼ということでお茶と［シン］のアイスをご馳走になったこと。

「な、なので、ちょっと遅れてしまいまし……てっ！？」

ヒイイ！　なんで二人共、余計に怒ってるんだよ！？　俺、ちゃんと説明したじゃん！？

「ハア……全く、油断も隙もない……」
「フウ……本当に、ヨーヘイのバカ……」

二人に盛大に溜息を吐かれた後、残念なものでも見るかのようにジト目で睨まれた。
ううう……俺が何したっていうんだよお……。

『はう！　マスターが所かまわずフラグを立てるのは、もうどうしようもないのです……って、関姉さまとペルおじさま、なんで怒ってるのです！？　しかも藤姉さまとアレク姉さままで！？』

気がつくと、何故か［シン］が二人と［関聖帝君］、［ペルーン］に囲まれ、プレッシャーを受けていた。いや、それこそなんで！？

「……まあいい。望月くんがこういう男の子だということは、理解している」
「……ですわネ。デモ、そういう優しいところガ……（ゴニョゴニョ）」
「？　サンドラ？」

「フエ！？　なな、何でもありませんワ！」
「？」
……まあいいか。
その後、俺達は夕方までひたすらキング＝オブ＝フレイムとクイーン＝オブ＝フロストを狩り続けた。
……その時の先輩とサンドラのすさまじさは、［シン］がトラウマになりそうなほど苛烈なものだったとだけ、言っておこう。

◇

「ふふ♪　やはり和栗のモンブランは最高だな！」
「アラ？　こちらのプラーガも美味しいですわヨ？」
などと、先輩とサンドラは満面の笑顔でスイーツを楽しんでいる。
まあ、要は俺が氷室先輩と会って集合に遅れたことに対する罰として、二人にルフランでスイーツを奢らされてるってわけだ。
『んふふー！　ウマウマなのです！』
そしてちゃっかりとジェラートを食べてご満悦の［シン］。
とはいえ、“ぱらいそ”領域（エリア）では先輩達からのプレッシャーにさらされ、つらい思いをしていた姿を見てしまったので、ついつい俺も甘やかしてしまった……。
「あ、そうだ。先輩、少し聞きたいことがあるんですけど」
「ん？　なんだ？」

すっかりご機嫌になった先輩は、笑顔で返事をする。チョロイ。
でも……こんなこと聞いたら、先輩はまた怒るだろうなあ……聞くけど。

「先輩と氷室先輩……その、どうして仲が悪いんですか？」
「むむ……！　ま、またストレートな聞き方をするな……」

俺の質問に、先輩が露骨に顔をしかめた。
いや、やっぱり何かあるんだな。

「……私自身は、氷室くんのことを嫌ったりしたことはない。むしろ、彼女は優秀だし、人柄も悪くない。どちらかといえば好感すら持っているよ」
「あー……やっぱり……」
「む？　やっぱりとはどういうことだ？」

先輩の答えを受けて俺が納得していると、先輩が怪訝な表情で聞き返した。

「はは、俺だって先輩の態度とか表情を見てたら分かりますよ。というか、そもそも先輩は、誰かを嫌ったりするのが苦手な人ですからね」
「あう！？」

あはは、先輩が驚いてる。
でも、入学してから今まで、ずっと先輩のことを見続けてきた俺には分かる。
本当の先輩は優しくて、人懐っこくて、学園の生徒達が抱いているような印象とはかけ離れた、素敵な女性（ひと）なんだって。

「だけど……じゃあ氷室先輩が、一方的に先輩のことをライバル視してるってことかあ……」
「？　だけどヨーヘイ、急にどうしたんですノ？」
サンドラが不思議そうに尋ねる。
「ああ、今日氷室先輩と話をした時に、どこか思いつめているようにも感じたし、できるなら何とかしてあげたいかなー……って、サンドラも先輩もどうしたの？」
「「ハア……」」
いや、なんで俺、溜息吐かれてるの！？
「……まあ、望月くんだから仕方ない、か」
「……エエ、ヨーヘイですもノ」
そう言って、二人は俺を見ながら苦笑した。

一方通行（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

密会（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

密会

「うむ！　これで明日の信任投票の準備は整ったな！」

月曜日の放課後、生徒会室で最後のチェックを行った藤堂先輩が、嬉しそうにそう宣言した。

「よし！　あとはアイツ等に投票の場で目にもの見せてやるだけだ！　何と言っても、師匠ほどのお方を生徒会長から外すなんて選択肢、普通にあり得ねーからな！」

藤堂先輩の言葉を引き継ぐかのように加隈が気勢を上げる。というか、加隈の奴に言われるのは癪だけど、その言葉には完全同意だ。癪だけど。

「学園祭の準備も、明日の最終チェックを終えれば、いよいよ終わりです」

「えへへ！　みんなで頑張ったもんね！」

「エエ……この私がここまで協力したんだもノ。成功以外あり得ないワ」

氷室先輩の言葉に、立花とプラーミャが微笑み合う。

というかこの二人、やけに仲良くなったな。加隈を含めた三人で“グラハム塔”領域を攻略してた時は、やたらと仲が悪かったのに。

「フフ、プラーミャ達もやっと、チームらしくなりましたわネ」

すると、いつの間にかサンドラが俺の隣に来てニコリ、と微笑んだ。

「サンドラ……ま、そうだな。だけど」

「エエ、ワタクシ達のチームのほうが上ですけド」

そう言って、俺はサンドラとコツン、と拳を合わせた。

はは……どうやら俺は、無事に仕事を終えたことでテンションが上がりまくってるみたいだな。

「むむ！　わ、私を除け者にする気か！」

「ま、まさか！　先輩も入れてチームでしょうが！」

そんな俺とサンドラのやり取りを見た先輩が、こちらへ慌ててやって来て抗議をするけど……俺にとって、先輩抜きだなんて絶対にあり得ないんだけど！

ということで、俺は先輩とも拳を合わせると、先輩は満足げに頷いた。はは、本当に先輩は可愛いなあ。

「……一応、私も同じ生徒会メンバーなんですが」

おおっと、まさか氷室先輩からもそんな声が出るとは思わなかった。

でも……氷室先輩だってもちろん、大切な仲間、ですよ。

だから。

「はい、氷室先輩」

俺は氷室先輩に向かって拳を突き出すと。

「はい」

氷室先輩は表情を変えずに、コツン、と拳を合わせてくれた。

「さて、後片づけは明日の投票後にすることにして、今日のところは解散としよう。それと……みんな、本当にありがとう」

そう言うと、藤堂先輩は深々とお辞儀をした。

おっと、先輩一人にそんな真似させてどうするんだよ。

俺は慌てて藤堂先輩に倣うようにお辞儀をすると……はは、サンドラと氷室先輩も考えることは一緒か。

すると。

「あはは！　ボク達はこれからも、この生徒会を応援するよ！」

「エエ！　あんなクズみたいな元生徒会メンバーなんか、蹴散らしてしまうのヨ！」

「おお！　頼んます！　師匠！」

――パチパチパチパチパチ！

立花やプラーミャ、加隈達から激励の言葉とともに、万来の拍手が生徒会室を包んだ。

◇

「さて……それで、今日はどうするのだ？」

みんなが生徒会室を後にし、残っているのは俺と先輩、そしてサンドラの三人だけになった。

立花達はこれから“アルカトラズ”領域（エリア）で第十階層のボス、トーデスエンゲルを倒すって張り切ってたなあ。

「あはは……先輩、サンドラ、その……付き合ってもらっても……？」

「ふふ、当然だ」

「エエ！　プラーミャ達に負けてられませんもノ！」

はは……本当に、この二人は……。

「はい！　じゃあ、今日も“ぱらいそ”領域（エリア）に行きましょう！」

「うむ（ダー）！」

「ウン！」

そして俺達は、戸締りをして初心者用の領域（エリア）の扉へと向かう。

すると。

「あれ？　氷室先輩？」

解散になって真っ先に帰ったはずの氷室先輩が、校舎の陰で誰かと話をしていた……って、あれは！？

「……先代の生徒会長、牧村クニオ、だな」

「どうして氷室先輩があの男ト……？」

「……分からない。だけど」

気づけば、俺は氷室先輩に見つからないように、回り込みながら

二人の傍へと歩を進めていた。
そして先輩とサンドラも、俺の後に続く。

……ここまで近づけば。

俺は死角から、二人の会話に聞き耳を立てると。

「……クフフ。だから、明日は君が開票を行うようにするんだ。そうすれば、票の操作なんて簡単だろう？」
「……そうですね」
「「「っ！？」」」

二人の会話に、俺達三人は息を飲んだ。
まさか牧村クニオの奴、氷室先輩を使って明日の投票で不正しようってのか……！

「クッ！」

サンドラが飛び出そうとするのを、俺と先輩が止める。
まずは、会話を全部聞き終えてからだ。

「クフ、君が利口でよかったよ。ああ、もちろん次の生徒会長には君を指名するから、安心したまえ」
「ありがとう、ございます……」
「クハハ！　だけど君、ここまでしてあの藤堂サクヤから生徒会長の座を奪いたいのかい？　僕を追い出した時は、そこまで彼女を嫌っているとは思わなかったけど？」
「……余計なお世話ですよ。ですが……これで、見てもらえます」
「クフ、これは失敬」

クスクスと下卑た笑みを浮かべる牧村クニオと、無表情でどこか遠くを見つめる氷室先輩。

そして、俺の隣で唇を噛みながら俯く先輩がいた。

だけど……はあ、結局は『攻略サイト』の通り、かよ……。

「さて……これ以上見ていても仕方ない。初心者用の領域に行きましょう」

「エ、エエ……」

「……」

戸惑うサンドラと、無言の先輩にそう声を掛け、俺達はその場を後にする。

そして。

「……ま、ここは闇堕ち、しかないかあ……」

後ろを振り返り、俺は先輩とサンドラに聞こえないほどの大きさで、そう呟いた。

密会（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

投票用紙（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

投票用紙

「くあ……！」

今日はいよいよ信任投票の日。

興奮しているのか、俺はスマホのアラームが鳴る前に目を覚ました。

『すぴー、すぴー……』

……まあ［シン］は、そんなことはお構いなしに気持ちよさそうに寝てるけど。

というか、そろそろ［シン］の分のベッドでも買うかなあ……いい加減、狭い。

俺は思いっ切り俺の腹に乗せている［シン］の脚をどけて起き上がると、制服に着替えてリビングに降りた。

「あら、今日は早いのね？」

「おはよう、母さん。なんか今日は目が覚めちゃって」

そう言うと、眠気まなこをこすりながら、朝ご飯を準備してくれている母さんをボーッと眺める。

おっと、あのことを話しておかないと。

「そうだ母さん。今度、先輩と同級生のサンドラを連れてくるから」

「！」

その言葉を聞いた瞬間、母さんがバッとこちらに振り向いた。

「そうなの！　いつ！」

「うおっ！？　落ち着け母さん！？」

すごい勢いで尋ねる母さんに驚き、俺は思わず仰け反る。

「と、とりあえずは、学園祭の後片づけが終わってからになるから……多分、早くても来週の土日のどちらかになるかなあ」

「そうなのね！　決まったらちゃんと言うのよ！　それと……その“サンドラ”って誰？」

あ、そうだった。母さんはサンドラのこと知らないんだったな。

「ああ、サンドラは俺と同じクラスの子で、ルーシから留学に来てるんだ。もちろん、領域（エリア）攻略も一緒にしている、大切な仲間だよ」

「ふーん……女の子？」

すると母さんは、ニヨニヨしながら俺を見てやがる……。

「そ、そうだよ」

「へえー……これは面白くなってきたわね……」

だから母さん、その笑い方はやめろよ。

『はうはうはう！　おはようございますなのです！』

お、［シン］もやっと起きてきたか。

『お母様！　今朝はマンゴー味を所望するのです！』

「ふふ、はいはい」

母さんは苦笑しながら冷凍庫を開けると、マンゴーアイスを取り出して［シン］に手渡した。うーむ、母さんは相変わらず［シン］に甘いなあ……。

『それにしても、マスターはどうして起こしてくれなかったのですか！』

「いや、今日は起きたのがいつもより早かったからな」

というかお前、起こすとキレるくせに……。

マンゴーアイスをかじりながらプンスカ怒る［シン］をジト目で眺めながら、朝ご飯を食べた。

◇

「ふふ……望月くん、おはよう」

「おはようございます！」

朝の通学路、いつもの十字路で俺を待つ先輩に挨拶をして隣に並ぶと、一緒に学園へと歩き出す。

なお、立花は今日も加隈に追いかけ回されているため、もうこの場にはいない。というか、もはや加隈と一緒に通学してると言っても過言じゃない。よかったな、加隈……立花の好感度は下がる一方だけど。

「それで……今日の信任投票、どうするんですか？」

「ああ……それか……」

そう言って、先輩が言い淀む。
まあ先輩からしたら、昨日の氷室先輩と牧村クニオの会話が今でも信じられないんだろう。だって、先輩にとって氷室先輩は、今までたった二人で一緒に生徒会を支えてきた、仲間だもんなあ……。

でも、氷室先輩にとって藤堂先輩は、目標でありライバルだった。その認識の違いこそが、今の状況を生んでいる。そして……これこそが、『攻略サイト』にあった、氷室先輩の闇堕ちの原因なんだろう。

いや、『攻略サイト』もこの辺、もうちょっと詳しく書いといて欲しいんだけど。
何というか、あのサイトって、領域（エリア）や精霊（ガイスト）、幽鬼（レブナント）のデータとメインストーリーの分岐なんかはすごく詳しく書いてあるのに、こういった裏設定的な部分って、結構端折（はしょ）られてるんだよなあ……。

まあ、『攻略サイト』はあくまでもゲーム攻略に特化してるから、仕方ないのかもしれないけど。

「……でしたら、今回の件は俺に任せてもらえませんか？」
「君に、か……？」
「はい」

そう提案する俺を不安げに見つめる先輩に対し、俺は力強く頷く。
先輩には信任投票に集中して欲しいし、何より今の先輩じゃ、正常に判断できない可能性もある。こんな時だからこそ、俺が先輩を支えないと。

それに……俺にも考えがあるしな。

「ということで、ちょっと俺、先に学園に行きますね！」
「あ！　お、おい！？」

さて……何とか間に合わせないと、な。

ポケットにあるモノを握りしめ、俺は先輩を置き去りにして学園へと走っていった。

◇

「ヨーヘイ！　おはようなのですワ！」
「おう、おはよう」

生徒会室で俺が作業をしていると、サンドラがやって来て元気に挨拶を交わす。

すると。

「おはようございます」
「あ、おはようございます、氷室先輩」
「お、おはようございますなのですワ……」

氷室先輩も生徒会室にやって来て、挨拶を交わした。
昨日のことがあるからか、サンドラは少し気まずそうにしているけど。

「それで……準備はできていますか？」
「はい。投票箱も職員室の前に設置しましたし、あとは俺とサンドラで、各クラスにこの投票用紙を配付するだけです」
「そうですか……もしよろしければ、各クラスへの配付、私もお手

伝いしますが？」
「いえ、そもそも全学年で十二クラスしかないですし、俺達だけで充分ですよ」

氷室先輩の申し出を、俺は明確に断る。
というか、昨日の件がある以上、氷室先輩にこの投票用紙を渡すわけにはいかない。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩くと。

「サンドラ、行こうぜ！」
「エ、エエ……」

俺はサンドラの背中を押して、一緒に生徒会室を出る。

そして、扉を閉じようとした時……氷室先輩は、机の上にある、投票用紙の束を眺めていた。

投票用紙（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

投票中の一幕（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

投票中の一幕

――キーンコーン。

昼休みになり、俺は食堂……へは行かずに、職員室へと向かう。
正直、信任投票の状況が知りたくて仕方ないのだ。
それに、職員室にちょっと用事もあるし。

「ア！　ヨーヘイ！」

するとサンドラが、教室を出ようとした俺を追いかけてきた。

「フフ、投票箱に行くんですわよネ？」
「おう。サンドラも一緒に行くか？」
「エエ、もちろんですワ」

ということで、俺達は職員室前へと向かうと。

「おーおー、意外と盛況だなあ」

職員室の前には生徒達で人だかりができており、みんなが投票箱に投票用紙を入れていた。

「む……やはり君達も来たのか」
「あ、先輩！」

振り返ると、藤堂先輩がニコリ、と微笑んだ。

「ふふ……あとは、どうなるか見守ろう」
「ですね……って、ちょっと俺、職員室に行ってきますね」
「む？　何かあるのか？」

不思議そうに先輩が尋ねるので、俺は先輩に耳打ちした。

「ふふ……なるほど、な」
「はい。ということですので」
「うむ」

俺は職員室に行って用事を済ませると、また先輩の隣に立つ。
そうして俺達は、投票の行方を見守っていると。

「クフフ……なんだ、今日で生徒会が終わるのが不安になって、様子でも見に来たのか？」

まるで狙ったかのように、牧村クニオが取り巻き達と一緒に現れた。いや、なかなかの悪役ムーブだな。

「エエ……アナタ達が変に不正をしたりしないか、監視しに来たのですワ！」
「「はあ！？」」

サンドラの言葉を聞き、取り巻き達が一斉に睨む。
もちろん、その中にはあの二―一の……ええと、何て名前だったっけ？　まあいいや、とにかくソイツもいた。

「マアマア、彼等にとって今日が生徒会最後の業務になるんだ。ここは許してあげようじゃないか。そして気づくはずだよ……この僕

を生徒会長と仰ぎ、仕えるべきだった、ってね」

などと澄ました表情で、そんなことをのたまう牧村クニオ。

というかコイツ、何か勘違いしてるんじゃなかろうか。

「いや、確かに今日の結果で俺達は生徒会じゃなくなるかもしれないけど、だからってアンタが生徒会長に選ばれる保証はどこにもないんだぞ？」

「クハハ！　面白いことを言うじゃないか！　この僕が、あの藤堂サクヤよりも生徒達から信頼されてないとでも言うのかね！」

なんて、牧村クニオは高笑いしてるが……いや、だからそう言ってるんだけど？

その時。

「ププ！　超おめでたいし！」

「誰だ！　…って！？」

馬鹿にするように笑われ、険しい表情で牧村クニオと取り巻き達が振り返る。

そこには。

「ヤッホー！」

「あ……和気先輩」

現れたのは、三年生最強の一人で陸上部キャプテン、和気チアキだった。

「だ、誰かと思えば和気くんか……わざわざ僕のために、ありがと

う」

そう言って、牧村クニオが口の端を持ち上げながら深々と頭を下げた。

ああ……陸上部って、先代生徒会の最大のパトロンの一つだもんなあ……。

「クフ……やはり和気くんも、今の生徒会には不満に思っていたか」

顔を上げ、嬉しそうに話しかける牧村クニオ。

和気先輩も、それに応えるように口の端を吊り上げた。

「アハハ！　そうだねえ……だけどウチ、まだモッチーにルフランのジェラート奢ってもらってないんだよねー！　だから、今モッチーに生徒会辞められると、困るし」

そう言うと、和気先輩は『信任』に〇をした投票用紙をヒラヒラと見せつけた後、投票箱に入れた。

「ということで、ヨロシクネ？　モッチー！」

「は、はい！」

和気先輩は俺の肩をバシバシと叩いた後、笑顔で去って行った。

そして先輩、サンドラ……お願いだからそんなに睨まないでください。

「ク、クソッ！　卑怯な真似を……！」

牧村クニオは歯ぎしりしながら俺を睨むが、別にオマエみたいに和気先輩を買収したわけじゃないからな？

まあこうなったら、ジェラートにスイーツをつけて奢らないといけないかもだけど。

「フン！　騒がしいわね！」

すると今度は、吹奏楽部の部長、鈴原カエデが不機嫌そうに鼻を鳴らして現れた。

「す、鈴原くん！　待っていたよ！」

嬉しそうに駆け寄る牧原クニオ。

だけど、鈴原カエデはそれを鬱陶(うっとう)しそうに手で追い払う仕草を見せた。

そして。

「相変わらず、生意気な顔をしてるわね」

「はは、そうですか？」

いや、というか気に入らないのは分かるけど、だからといって俺に絡んでこないで欲しい。

だけど……こんなことになるんだったら、この前あんな態度取ったのは失敗だったかなー……って。

「……フフ、でも、その一歩も引かないって姿勢、私は嫌いじゃないけど」

突然、鈴原先輩はクスリ、と笑顔を浮かべ、俺に『信任』に〇をした投票用紙を見せた後、投票箱に入れた。

「まあ、これからは何か困ったことがあったら吹奏楽部に来なさい。生意気な後輩クン」

俺の胸を人差し指でトン、と叩いた後、鈴原先輩は去って行った。で、先輩もサンドラも、俺を射殺すような視線で見つめないでください。

だけど……あの二人が生徒会の味方をしてくれるなんて思わなかった。

その後も。

「望月くん！　ボク達も来たよ！」
「フフ……サンドラ、負けないデ！」
「師匠！　ガツンとやっちゃってください！」

立花やプラーミャ、加隈に一―三のみんなが駆けつけ、『信任』に〇をした投票用紙を入れる。

「あ、夏目先輩」
「アアア、アンタ達なんて、せ、生徒会をクビになればいいのよ！見てなさいよ！」

などと悪態を吐きながら投票用紙を入れ……ようとして。

――ヒラリ。

「っ！？」

上手く入らずに、投票用紙が俺達の目の前を舞う。

……『信任』に〇してあるけど。

「フ、フン！」

慌てて回収した夏目先輩は、今度こそ投票箱に投票用紙を入れ、顔を真っ赤にして去って行った。

はは……何だよ。一学期の賭けの時は、先輩を生徒会長から引きずり降ろそうとしてたくせに。

目の前でただ悔しそうにする牧村クニオと取り巻き達。

だけど、それ以上に。

「ふふ……我々生徒会も、彼等の期待に応えるよう、頑張らないとな」

「……ですね」

「エエ……」

俺達三人は、支持してくれた学園のみんなに感謝すると共に、生徒会メンバーとして決意を新たにした。

投票中の一幕（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

開票（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

開票

「さて……ただ今から、アレイスター学園生徒会へのリコール請求に伴う信任投票の開票を行う。

放課後の生徒会室で、藤堂先輩が宣言した。

今、この生徒会室には、立会人である教頭先生のほか、先生二人と、リコールを請求した牧村クニオとその取り巻き達、そして、俺達生徒会の四人がいる。

「では、望月くんは投票箱をここへ」
「はい」

俺は投票箱を持ち、氷室先輩の前へと置いた。

「氷室くん」
「はい」

氷室先輩は投票箱の鍵を開け、中から投票用紙を全て取り出した。

「では、読み上げます。『信任』、『不信任』、『不信任』、『信任』……」

淡々と読み上げる氷室先輩の言葉に合わせ、サンドラが黒板に線を引いてカウントしていく。だけど、サンドラはルーシ出身なのに、『正』の字でカウントするのな。ちょっと面白い。

「『不信任』、『信任』、『不信任』……」

俺達全員が、氷室先輩の開票を、固唾を飲んで見守る。

そんな中。

「……クフ」

牧村クニオだけは、一人ほくそ笑んでいた。

そして。

「……『信任』一一六票、『不信任』一四二票、『無効』十一票……結果は、『不信任』ですワ……」

そう告げると、サンドラが唇を噛んで俯いた。

それは、俺や藤堂先輩、氷室先輩も。

「クハハハハ！　素晴らしい結果が出たじゃないか！　これで分かっただろう！　君達は、この学園から信頼を得ていないのだよ！」

「アハハハハ！　いい気味だわ！」

高笑いする牧村クニオに合わせ、取り巻き達も腹を抱えて嬉しそうに笑う。

ハア……というか、氷室先輩とグルで不正しているのを知っていると、コイツ等が滑稽で仕方がない。

その証拠に見ろ。先輩もサンドラも、唇を噛みながら笑いを堪えるのに必死じゃないか。

「さあ！　君達はこの生徒会室から速やかに出て行くんだ！　もはや君達は、ただの部外者に過ぎない……「えーと、ちょっといいで

すか？」」

嬉しそうに追い出そうとする牧村クニオの言葉を遮るように、俺は手を挙げて発言の許可を求める。

「望月くんどうぞ」

教頭先生から許可をもらい、俺は藤堂先輩の隣に並ぶ。

「というかそもそも、開票結果に疑義があります」

「ハア！？　言い掛かりはよしなさいよ！」

俺の言葉に、取り巻き達が一斉にいちゃもんをつけ始める。

いや、不正してるのにコイツ等強気だな……って、ひょっとして不正のことは、牧村クニオと氷室先輩だけしか知らないのか？

「ふむ……何故、そう思うのかな？」

「はい。それは投票数が明らかにおかしいからです」

「クハハ！　何を言っているんだね君は！　うちの学園の生徒数は二七〇人だぞ！　一人を除き、全員投票した結果だろう！」

はい、まるで鬼の首を取ったかのように嬉しそうに語る牧村クニオ。

だけどそれ、完全にフラグだからな。

「どうしてそう思うのかね？」

「はい。実は俺、今日の昼休み、職員室で聞いてきたんです。今日、生徒の中で休んでる人が何人いるのか」

「っ！？」

はは、分かりやすいくらい焦ってやがる。
そうだよ、俺は職員室で確認したんだ。オマエが氷室先輩と一緒に、票数をいじることは分かっていたからな。

「そうしたら、風邪や家庭の事情で欠席している人が、今日は五人でした。つまり」
「……そうすると、投票数が若干多くなるな」

教頭先生は黒板を眺めながら呟いた。

「ク、クフ……そうは言っても、差なんて微々たるものじゃないか！　それに、各教室に余分に配られたものを、誰かが……「いや、それもありえない。なあ、サンドラ？」」

牧村の言葉を遮り、そう言ってサンドラに声を掛ける。

「エエ。だってワタクシ達、クラスの人数分しか配ってませんもノ。そんなはずはありませんワ」

サンドラは自信満々に牧村クニオに言い放つ。
俺達はそれをしたかったから、各教室への投票用紙の配付を氷室先輩にさせなかったんだ。

「なるほど……確かにこれは、不正を疑っても仕方がないですね」
「ま、待て！　じゃあ何か？　この僕が、不正をしたとでも言うのか！」

牧村クニオが身を乗り出し、訴えかける。
というか、何言ってんだコイツ。昨日、不正するってハッキリ言ってたじゃん。

もうこうなると、教頭先生達は牧村クニオ達を疑いの目で見た。
仮にコイツ等の仕業じゃなかったとしても、誰かが票を操作したことは明らかだからな。

「さて……じゃあ今回の投票は無効とし、再投票を……「そ、そんなの認められない！」」

先輩が再投票を宣言しようとすると、牧村クニオが必死で拒否する。

「もう結果は出てるんだぞ！　たった十票程度のこと、『不信任』の票数から差し引いてもおつりがくるじゃないか！」

まあ……それが、たった十票程度ならな。

「いやいや、そもそも一票でも不正があった時点で、この信任投票は無効だろ。それどころか、場合によってはアンタ自身にも不正の疑惑が掛かってるんだぞ？　ちゃんと理解してるのか？」
「フ、フン！　僕はそんな卑怯な真似はしない！　大体、そこまで不正を疑うんなら、徹底的に調べて、証拠でも何でも、出せるものなら出してみるがいい！」

いや、本当にそんなことを言っていいのか？
俺は呆れつつも、先輩をチラリ、と見やると……先輩は静かに頷いた。

ハア……仕方ない、か……。

「分かりましたよ……証拠、出しますよ」

俺が顔をしかめながら面倒くさそうに告げると、牧村クニオは目を見開いた。

開票（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

不正行為（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

不正行為

「分かりましたよ……証拠、出しますよ」

俺が顔をしかめながら面倒くさそうに告げると、牧村クニオは目を見開いた。

一方、氷室先輩はというと、表情を変える様子は全くない。

「しょ、証拠なんてどこにあるんだ！　適当なことを言って、もし違っていたら、ただでは済まさないからな！」

いやいや、そんなどもりながら話してる時点で、不正をやってましたって言ってるようなモンだろ。

見ろよ、教頭先生達もかなり呆れてるぞ。

「じゃあ、その証拠ってヤツをその目に見せてやるよ。氷室先輩、開票した投票用紙、全部渡してくれますか？」

「……ええ」

俺は束ねた投票用紙一式を氷室先輩から受け取る。

「実は俺、今日の朝に生徒会室に来て、この投票用紙に細工をしておきました」

「「「「「っ！？」」」」」

ここにいる全員が、俺の言葉を聞いて息を飲んだ。

……氷室先輩、ただ一人を除いて。

「さ、細工だと!?　そんなもの、どこにあるというんだ!」
「あるよ。悪いサンドラ、生徒会室の窓を暗幕で閉めてくれ」
「エ、エエ……」

訳が分からないといった様子で、サンドラは暗幕を閉めると、当然ながら生徒会室が暗くなった。
で、俺はその細工に使ったものをポケットから取り出し、スイッチを入れる。

すると。

「「「「「っ!?」」」」」
「まあ、要はUVライトに反応するインクのペンで、各教室に配った投票用紙に色付けをしておいたんだよ。なのに、一部の投票用紙はそれが浮かびあがっていない……もう分かるよな?」

そう。今日の朝、生徒会室に来るなり、俺は投票用紙にこの色付けをしておき、それを一教室当たり三十枚の組として、十二組を用意したんだ。
そして、氷室先輩が生徒会室にやって来た時には、俺はわざとこの色付けをしていないほうの投票用紙を、これ見よがしに目の前に置いた。

氷室先輩は、色付けをしていない投票用紙を使い、『不信任』の票を水増ししたんだ。
だけど、そうすると学園の生徒数よりも投票用紙が多くなってしまう。

だから。

「……氷室先輩。すいませんが、その投票箱の中身を見せてもらっていいですか？」
「……」
氷室先輩は何も答えず、静かに目を瞑った。
「失礼します……」
投票箱に近づき、その蓋を開けると……中には記入された、本来の投票用紙が入っていた。
「……これが、今回の投票が不正だったっていう証拠だ」
「フ、フザケルナ！　ここ、これは僕を貶めるための、オマエ達の罠だ！　だ、大体、その氷室くんは君達とグルなんだろ！」
「……は？」
牧村クニオの言葉に、自分でも驚くほどの低い声が出た。
だけど、それも仕方がない。だって……コイツは、あろうことか味方であるはずの氷室先輩に罪をかぶせようとしてるんだから。
「フザケルナ、だと？」
「そ、そうだ……っ！？」
「ウルセエ！　昨日の放課後、オマエと氷室先輩が投票用紙を改ざんするって話をしてたの、バッチリ聞いてたんだよ！　氷室先輩を巻き込んでおいて、オマエだけ言い逃れできると思ってんのか！」
俺は牧村クニオにずんずんと近づき、その胸倉をつかもうとしたところで。
「望月くん、止めるんだ」

藤堂先輩に、制止された。

「……氷室くん。本当のことを、言ってくれないか……？」

先輩は真紅の瞳を潤ませながら、訴えるような視線で氷室先輩に問い掛ける。

「……今、望月さんが仰った通りです。私はその牧村クニオさんと共謀し、投票用紙の一部をすり替えました」

「っ！　……そうか」

藤堂先輩は、悔しそうに唇を噛んだ。

それは、何かの間違いで会って欲しいとの願いが、絶たれたことへの思いから。

「ふむ……さすがにこれは見逃せませんね。牧村くん、氷室さん、今回の件については、また追って連絡します」

そう言うと、教頭先生達は生徒会室から立ち去った。

「それで……オマエはどう落とし前をつけるつもりなんだ？」

俺は牧村クニオを睨みつけ、そう尋ねる。

取り巻きの連中も、さすがにマズイと思ってるんだろう。無意識のうちに、牧村クニオから遠ざかっていた。

「フ、フン！　こんなもの、全てその氷室くんが勝手にやったことだ！　僕は知らない！　知らないからな！」

そんな捨て台詞を吐くと、牧村クニオはサッサと生徒会室から逃げるようにして出て行った。

残された取り巻き達も、後を追うようにして生徒会室を出て行く。

……まあ、二―一の女子生徒だけは、俺を睨んで行きやがったけど。

そして。

「今まで、お世話になりました」

氷室先輩は、ただ一言だけ告げてお辞儀をすると、静かに生徒会室を出て行った。

「……先輩、俺達も行きましょう」

「……行く？　どこへ？」

顔を青くしながら肩を落とす先輩にそう告げると、先輩は鋭い視線で俺を見た。

「決まってますよ。氷室先輩と、ちゃんと話をしに、です」

不正行為（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

届かないライバル（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

届かないライバル

俺達三人も生徒会室を出て、氷室先輩を追いかける。
すると氷室先輩は既に靴を履き替え、校門近くまで来ていた。
「氷室先輩！」
俺達は慌てて駆け寄り、氷室先輩を呼び止める。
「……何ですか？　もう、あなた達は私に用はないはずですが？」
表情も変えず、抑揚のない声でそう告げる氷室先輩。
もうこれ以上、俺達とは話すことはないと言わんばかりに。
だけど……俺にとって、本番はこれからだ。
「俺、気になって仕方ないんですよ。氷室先輩は、どうしてこんな真似をしたんですか？　生徒会が嫌いなんですか？」
俺は、あえて少しふざけた態度で氷室先輩に問いかける。
まるで、追い詰めるかのような口調で。
「別に……生徒会やあなた達が嫌いなわけでは、ありません」
「へえー。んじゃ、昨日アイツが言ったみたいに、生徒会長になりたかったから、ですか？」
「……」

氷室先輩は、何も答えない。

「まあ……氷室先輩が生徒会長になったところで、絶対に藤堂先輩みたいにはなれませんけどね」

「っ！」

はは、やっぱり反応したな。

「……望月くん、やめないか」

藤堂先輩が、低い声で俺をたしなめる。

だけど、俺は止めませんよ。氷室先輩にも……そして、あなたにも、真っ直ぐ前を向いてもらうために。

「大体、こんな卑怯な手を使って藤堂先輩を生徒会長から引きずり降ろしたところで、誰が氷室先輩についてくるって言うんですか？強さだって、藤堂先輩よりも劣るっていうのに」

「望月くん！　やめろ！」

先輩が俺の両肩をつかみ、睨みつける。

その真紅の瞳に、困惑と怒りを湛えながら。

すると。

「ふ……ふふ……」

いつも無表情の氷室先輩が、自分の顔を掌で押さえながら笑い出した。

「望月さん、あなたに言われなくても分かってますよ。こんなこと

をしても、会長を……藤堂さんを超えられないことくらい」
「……」
「ですが、こうでもしないと、藤堂さんはコッチを向いてくれないんですよ……いえ、ここまでしても、結局見てはくれませんでしたけどね？」
そう言うと、氷室先輩はニタア、と口の端を吊り上げた。
「ひ、氷室くん……？」
氷室先輩の豹変ぶりに、混乱する藤堂先輩。
だけど、ここから先はあなたの出番……いえ、あなたしかいないんだ。
『アハハハハ！　ダッタラ……モウ見テモラワナクテ構ワナイ！私ハ……私ハ、アナタヲ排除スル！』
そう叫ぶと、氷室先輩は幽子の渦に包まれた。
「っ！？　こ、これは……っ！？」
「闇堕ち、したんですよ……」
俺は、目を見開く先輩に、静かにそう告げた。
そう……今回、俺はわざと氷室先輩を闇落ちさせた。
藤堂先輩の瞳を、氷室先輩に向けさせるために。
そして、幽子の渦は徐々に小さくなり……中から氷室先輩が現れる。
あの綺麗な藍色の瞳を、漆黒に変えて。

「ッ！　ヨーヘイ、アレ！」

サンドラが指を差す方向には、当然、“柱”もいた。
現れたのは、“ニヴルヘイムの守護者”である、“モズグズ”。
筋骨隆々の女性の姿をしており、タロースよりも一回り大きい。
そして、その右手には巨大な槍を携えていた。

「も、望月くん……どうすればいい……？」

自信にあふれたいつもの先輩の面影はなく、ただ、闇堕ちした氷室先輩をオロオロと見つめながら俺に尋ねる。

「……先輩、氷室先輩がどうして闇堕ちをしたと思いますか？」
「う、うむ……それは、理由は分からないが、氷室くんがこの私を憎んで……」
「違いますよ」

不安げに答える先輩の言葉を、俺は真っ向から否定した。

「で、では……一体何だというのだ……」
「簡単ですよ。先輩が、氷室先輩を見ていない……と、思っているからです」
「私が、氷室くんを見ていない、だと……？」

俺は先輩に向かって、コクリ、と頷く。
そう……氷室先輩は、ずっと藤堂先輩のことを見てきた。
ある時は憧れとして、またある時は、超えるべきライバルとして。

だけど、悲しいかな藤堂先輩にとっては、氷室先輩はライバルではなかった。

藤堂先輩は、氷室先輩のことを一緒に生徒会を支える同志とでも思っていたはず。だから、ライバルと言われてもピンとこないだろうし、ましてや憧れなんて言われても、藤堂先輩は一蹴するだろう。

それが……氷室先輩の大事な部分に触れた。

そして、俺には氷室先輩の気持ちが分かる。

だって……俺は、最初はただの弱者だったから。

蔑むような視線だけを向けられ、誰も俺達に興味がない。

そもそも、その存在すら認めてもらえないように感じるんだ。

それが、自分にとって特別な存在だったら、なおさらだろう。

「こんなこと言ってはなんですけド……ワタクシには氷室先輩の気持ちが、少しだけ分かりますノ……だっテ、ワタクシもそうだったかラ……」

そうだな……サンドラも俺や氷室先輩と一緒で、どんなに頑張っても家族に認めてもらえなくて、それでこの東方国までやって来たんだもんな……。

「先輩……氷室先輩の心は、先輩にしか救えないんです。だから……だから、全力で氷室先輩と戦って、受け止めてあげてください。氷室先輩は、ただ、先輩に自分を見て欲しいだけだから」

「っ！」

そう告げると、先輩は一瞬息を飲む。

だけど、その真紅の瞳には先程のような困惑や迷いといったものはなく、今はただ、氷室カズラという女性（ひと）だけが映っていた。

「ふふ……ひょっとして君は、たったそれだけのことのためだけに、この状況を作り出したのか……？」

「……はい」

「ふふ、そうか……君は、つくづく……！」

先輩の顔に、笑みが零れる。

「先輩、あの幽鬼（レブナント）は俺とサンドラが仕留めます。ですから先輩は、氷室先輩と存分に語り合ってください！」

「ああ！」

先輩と拳をコツン、と合わせると、俺はサンドラと共にモズグズと対峙した。

届かないライバル（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷室先輩の独白（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷室先輩の独白

“ニブルヘイム”の守護者、“モズグズ”。

コイツは、『ガイスト×レブナント』において最序盤に登場する“柱”で、あの木崎セシルが闇堕ちするはずだった。

だからこのモズグズ自体は、柱の中でも一番弱く、倒すための推奨レベルは三十。ハッキリ言って、俺達の敵じゃない。

だけど。

「フフ……食らいなさイ！　【裁きの……「待て、サンドラ！」……ッテ、ヨーヘイ、何で止めるんですノ！？」

サンドラの［ペルーン］が今まさにモズグズに襲い掛かろうとしたところを、俺は慌てて制止する。

すると、反撃とばかりにモズグズはその巨大な槍を［ペルーン］に向かって突き出すが、【ガーディアン】によってアッサリと防がれた。

「ハア……思ったより大したことないですからいいですけド……ヨーヘイ、どうしたんですノ？」

俺の傍に来たサンドラが、少し呆れた表情を浮かべながら問い掛ける。

「悪いサンドラ……コイツを倒すタイミングは俺が指示するから、それまでは【ガーディアン】と［シン］の【方術】で防御に徹して

くれ」
『はう!?　倒してはいけないのですか!?』
サンドラじゃなく［シン］が驚きの声を上げた。
というか［シン］って、何気に好戦的だよなあ。
「ああ。今回の幽鬼（レブナント）との戦いは、むしろタイミングこそが重要なんだ」
そう……モズグズを倒すこと自体はいつでも倒せるが、それでも、今倒しちゃいけない理由がある。
それは、俺達がモズグズを倒してしまうと、藤堂先輩が氷室先輩と戦っている最中に“ウルズの泥水”が先輩の身体へと流入し、しばらくの間、戦闘不能に陥ってしまう。
そんな無防備な状態の時に氷室先輩の攻撃を受けてしまったらどうなるか、考えるまでもない。
「……とにかく、サンドラと［シン］は、俺が合図するまで待ってくれ。本当は、［シン］の呪符でアイツを拘束できると楽なんだけどな」
そう言って、俺は肩を竦めて苦笑する。
「フフ……またヨーヘイのことだから、余計なお節介でも考えてるのかもしれませんわネ」
『はうはうはう！　やっぱりマスターはワルイ男なのです！』
おいコラ［シン］、なんでそうなるんだよ。
「ですが、分かりましたワ。だったら、何発でも何時間でも、アイ

ツの攻撃なんて全て防ぎきってみせますわヨ！」
『はう！　［シン］に任せるのです！』
「ああ……頼んだ！」

さて……とりあえずコッチは上手くやるとして、先輩達のほうはどうだ……？
先輩達へと視線を向けると、二人はお互い睨み合ったまま、終始無言で動く気配もない。

そして。

「……氷室くん、君が私のことを嫌っていたことは知っていたよ。そして、この私を追い落とそうとしていたことも」
『アハハ、ソウデスカ』
「だが、先代の生徒会長を追放した後、私と君は、たった二人で今の生徒会を守ってきた……だから、それでも私は君のことを、盟友だと思っていた……」

そう言うと、先輩は視線を落とした。

『フフ……私ハズット、アナタノコトヲ見続ケテキマシタヨヨ？　コノアレイスター学園ニ入学シ、同ジクラスデ隣ノ席ニナッタ、アノ時カラ』
「……」
『ソシテ、初メテアナタヲ見タ時、スグニ分カリマシタ。『アア……神カラ全テヲ与エラレタ者トイウノハ、コウイウ人ノコトヲ言ウノダ』、ト』

氷室先輩の独白を、先輩はただ無言で聞き続ける。

『領域（エリア）攻略ニシテモソウ。アナタハ誰トモ群レズ、イツモタッタ一人デ領域（エリア）ニ通イ続ケタ。座学ノ成績ダッテ、常ニトップ。勉強デハ、私モ自信ガアッタンデスケド、ネ』

「そうか……」

『サラニ、一年ノ秋ニハ、アナタハクラスチェンジヲ果タシ、ソノ強サハサラニ圧倒的ニナッタ。ソシテ、学園最強ノ名ヲ欲シイママニシタ』

……そうか、氷室先輩は知らないんだな。

先輩は、決して恵まれていたわけじゃないってことを。

『私ハ、強ク、気高イアナタニ憧レタ。アナタノヨウニナリタイト思ッタ。ソウスレバ、人付キ合イモ苦手デモ、誰カラモ認メテモラエナクテモ、私ハ誇リ高ク前ヲ向ケルト思ッタカラ……』

はは、何だよ……結局のところ、氷室先輩は自分を卑下して、でも、そんな自分から変わりたくて、自分には持ってないものを全部持ってる藤堂先輩に憧れて……だけど、藤堂先輩は氷室先輩のことを見ていなくて……。

『デモ、アナタノ瞳ニハ……当タリ前ダケド、私ナンテ映ッテナカッタ。ダカラ、私ハアナタノ背中ヲ追ッテ生徒会ニ入ッタ。アナタノ傍ニイレバ、アナタノ瞳ニ私トイウ存在ヲ認メテモラエルト思ッタカラ。対等ニナレルト思ッタカラ』

「……」

『確カニ生徒会ニ入ッテ、私トイウ存在ハアナタニ認知サレタ。アクマデモ、アナタノ下ノ存在トシテ』

そう言うと、氷室先輩はギリ、と歯噛みした。

『ソンナアナタニ、二年生ニナッテ誰ヨリモ目ヲ掛ケル存在ガ現レタ……ソレガ、望月サン』

お、俺!?

まさかここで俺が出てくるだなんて、思いもよらないんだけど……。

『私ノコトナンカ一切見ヨウトモシナイノニ、アナタハ生徒会ノ仕事ヲ全部ナゲウッテ、望月サンニカカリッキリダッタ。ソンナ彼ガ生徒会ニ入ッテ来テ、私モ接スルヨウニナッテ、ソシテ……彼ノ精霊(ガイスト)ノ能力ヲ知ッテ……!』

あ……氷室先輩の家に行った、あの時の……。

『ソノ時、私ハヨウヤク分カッタ。アナタニ見テモラウニハ、初メカラ全テヲ備エテナイト駄目ナンダト。最初カラ持チ合ワセテイナイ私ハ、駄目ナンダト……ダカラ!』

氷室先輩がその漆黒の瞳で、先輩をキッと睨みつける。

『ダカラ私ハ諦メタ! モウ、アナタニ見テモラオウナンテ思ワナイ! ダッタラ! モウ私ニトッテ目障リデシカナイノヨ! アナタモ! アナタノオ気ニ入リノ望月サンモ!』

あははー……まさか、実はこの俺もコンプレックスの対象になってるだなんて思わなかったな……。

何というか、その……複雑な気分だ。

さて……となると、藤堂先輩はどう……「ふざけるな」……って、先輩!?

「ふざけるな！　言うに事欠いて、私はともかく、望月くんを侮辱するのかあああああッッッ！」

先輩は、かつてないほどの激情で、氷室先輩に向かって咆哮した。

氷室先輩の独白（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩の咆哮（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

先輩の咆哮

「ふざけるな！　言うに事欠いて、私はともかく、望月くんを侮辱するのかあああああッッッ！」

先輩は、かつてないほどの激情で、氷室先輩に向かって咆哮した。
こんな姿は、あの木崎セシルが俺を貶(おとし)めた時以来だぞ！？

「望月くんが全てを持ち合わせているだと？　自分とは違うだと？　ああそうだな！　少なくとも、望月くんは貴様などより、この私ですら敵わない、最高のものを持っているとも！」
『フ、フフ……ホラゴ覧ナサイ。結局ハ才能……「それが侮辱だというのだ！」』

薄ら笑いを浮かべた氷室先輩に、桐崎先輩はなお食って掛かる。
全て、俺のために……。

「……この学園に入学したばかりの望月くんは、同じクラスの者だけでなく、その担任教師にまで蔑まれるほど、彼の精霊(ガイスト)……［ゴブ美］は圧倒的に弱かった。私どころか、貴様とも比べ物にならないほどにな」
『ッ！？』

藤堂先輩の言葉に、氷室先輩が息を飲む。
そして、二人揃ってこちらを……俺を見た。

「だがな……彼は決して諦めなかった、腐らなかった。ただひたすら前を見て、歯を食いしばって、気の遠くなるような努力を重ねて、

彼は今を手に入れたのだ！」

『……』

「それだけじゃない。彼はたとえ強くなろうとも決して驕(おご)らず、いつだって誰かの心を救ってばかり……それこそ、嫉妬してしまうほどにな」

そう言うと、先輩はフ、と表情を緩めた。

「ハッキリ言おう……彼は、貴様とは違う。彼には才能などという下らないものよりも、もっと素晴らしくて尊いものを持ち合わせているのだ」

『……ソレガドウシタトイウンデスカ？　ソンナコト、私ニハ関係アリマセンヨ』

「そんな台詞(セリフ)を吐いている時点で、話にならん……ならば！」

先輩の［関聖帝君］が、青龍偃月刀(えんげつ)の切っ先を氷室先輩に向ける。

そして。

「貴様のその性根、この私が叩き直してやる！」

『アハハハハ！　上等デスヨ！　［スノーホワイト］』

高笑いと共に、氷室先輩が自身の精霊(ガイスト)、［スノーホワイト］を召喚した。

その姿は、耳の長い手のひらサイズの妖精で、純白のドレスを身にまとい、背中にある四枚の羽を羽ばたかせて氷室先輩の顔の隣で浮遊した。

『フフ……コノ［スノーホワイト］、見クビラナイホウガイイデスヨ！』

「っ！」

［スノーホワイト］が、その敏捷性を活かして［関聖帝君］へと突撃する。

だけど、［スノーホワイト］は術者タイプ、しかも、その『力』と『耐久』のステータスは、ヒロインや仲間キャラの中では［ゴブ美］を除いて最低だ。

……ここから、どうやって戦うつもりだ？

「フッ！」

［関聖帝君］が、青龍偃月刀で［スノーホワイト］を振り払おうとするが、それをすり抜けて背後を取ると。

『アハハ！　食ラエ！　【アイスニードル】！』

［関聖帝君］の首元へ向け、中級の氷属性魔法である【アイスニードル】を放った。

だけど……それは悪手だ。

――キイン。

『ッ！？　ハネ返ッタ！？』

そう、［関聖帝君］には、“アトランティス”領域（エリア）“レムリア”領域（エリア）で入手した、【氷属性反射】のスキルがある。

それだけで、氷属性主体の［スノーホワイト］は圧倒的に不利だ。

『フフ……本当ニムカツキマスネ……ナラ、コレデドウデスカ？』

すると今度は、［スノーホワイト］が［関聖帝君］を囲むように次々と現れた。
その数、七体。

『アハハハハ！　サア！　【セブンス】ニヨッテ増殖シタ［スノーホワイト］ヲ、防グコトガデキマスカ！』

七体の［スノーホワイト］が縦横無尽に動き回りながら、同時に襲い掛かる。

「フン！」

先輩は鼻を鳴らすと、［関聖帝君］が青龍偃月刀を振り上げた。

――ブオン！

『ッ！？』

青龍偃月刀の風圧によって、［スノーホワイト］が吹き飛ばされる。
おそらく、【一刀両断】のスキルを使って威力を増し、刀の身幅で風を巻き起こしたんだろう。
ただでさえサイズが小さい［スノーホワイト］にとっては、とても耐えられるものじゃない。

「これでは話にならんな」

『クッ！　ナラ！』

そして［スノーホワイト］は、懲りずに一斉に［関聖帝君］に向

かっていく。

「ふむ、まるで馬鹿の一つ覚えのような攻撃だな」

先輩は余裕の表情で、先程と同じように青龍偃月刀を振り上げた。

『ッ！　カカッタ！　【ワンショット】！』

よく見ると、先輩に向かっていった［スノーホワイト］の数は六体。

残り一体は、氷室先輩の肩に乗り、黄金で装飾されたライフルを構えていた。

そして、その黄金のライフルから［関聖帝君］の眉間目がけ、一発の銃弾が向かっていく。

『獲ッタ！』

この時の氷室先輩は、あの常に無表情だった顔を満面の笑みに変えていた。

それもそうだろう。氷室先輩は、あの憧れで、ライバルで、だけど振り向いてもらえなかった藤堂先輩に、一矢報いるのだ。嬉しいに決まっている。

だけど……氷室先輩は知らない。

今、相手をしているのは、『ガイスト×レブナント』においてラスボスに次ぐ、最強の精霊使い（ガイスト）だということを。

――ギイン！

『ッ！？』

［関聖帝君］は、その身幅で眉間を覆い隠し、弾丸を弾いた。

『ド、ドウシテ……！？』

「ふむ……六体を囮にして本命が陰から狙う……見事な戦術のようにも見えるが、そもそも冷静沈着が常の貴様が、無謀にも自身の精霊（ガイスト）を特攻させれば、私からすれば違和感しかない」

『ア……』

「それで全体を俯瞰（ふかん）して見ると、案の定、残りの一体が虎視眈々と狙っているのが分かったからな。ならば、あとは銃口の向きさえ確認できれば、おのずとどこに照準を当てているかが分かるというものだ」

先輩は淡々と説明するが……聞いている俺からすれば、圧巻でしかない。

ここまで正確に戦況を分析し、臨機応変に対処できるだけの力量を持った人間が、一体どれほどいるというのだろうか。

そして、そのことを一番痛感しているのは、目の前で対峙している氷室先輩だろう。

『ア……アア……！』

「さあ……そろそろ終わりにしよう。安心したまえ、貴様が望んだように、私の全身全霊をもって貴様と向き合おう。だから、受け止めてみせろ！」

そう宣言すると、［関聖帝君］が高々と青龍偃月刀を構えた。

先輩の咆哮（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

盟友（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「さあ……そろそろ終わりにしよう。安心したまえ、貴様が望んだように、私の全身全霊をもって貴様と向き合おう。だから、受け止めてみせろ！」

藤堂先輩はそう宣言すると、［関聖帝君］が高々と青龍偃月刀を構えた。

……それじゃあ俺は、モズグズ退治をしようじゃないか。

もちろん、先輩とタイミングを合わせて。

「［シン］！　サンドラ！　待たせた！　俺の合図で、その幽鬼（レブナント）を叩き潰すんだ！」

「エエ！　分かりましたワ！」

『ハイなのです！』

サンドラは、【ガーディアン】でモズグズの槍を全て受け止めながら、俺に笑顔を向ける。

［シン］も、要所でサンドラのフォローに入りつつ、その右手の親指を突き立てた。

さあ……後は先輩とタイミングを合わせるだけだ。

俺は二人へと再度視線を向けると、先輩も後は青龍偃月刀（えんげつ）を振り下ろすのみ。

一方で、氷室先輩はといえば、［関聖帝君］から放たれる圧倒的な【威圧】によって身動きもできず、漆黒の目を見開きながらその

身体を小刻みに震わせていた。

そして。

「おおおおおおおおおおおおおおッッッ！」

［関聖帝君］が、氷室先輩の肩に乗る［スノーホワイト］へと青龍偃月刀を振り下ろす。

「サンドラ！　［シン］！　今だあああああああ！」
「待ってましたワ！　食らいなさイ！　【裁きの鉄槌】！」
『トドメなのです！　【裂】！』

［シン］の呪符によって全身をズタズタにされたモズグズの頭上へ、［ペルーン］が稲妻を帯びたメイスを叩き落とした。

当然ながらモズグズはそれに耐えることができず、その身体を幽子……“ウルズの泥水”へと変える。

「っ！　先輩！」

俺はすぐに二人の先輩へと翻ると、青龍偃月刀の刃先が［スノーホワイト］の眉間のほんの数センチ……いや、おそらく一センチにも満たない距離で寸止めされていた。

氷室先輩もその恐怖からか、膝から崩れ落ち、呆然としていた。

「ふふ……私の勝ち、だな」

そう言って微笑む先輩に、“ウルズの泥水”がまとわりつき、身体の中にある種へと吸収されていく。

「う……」
「先輩！」

俺は先輩に向かって全力で駆けると、間一髪、崩れ落ちる前に先輩を支えることができた。

「……ふふ。望月くん、ありがとう……」
「あはは……先輩を支えるのは、俺だけの役目ですよ」

俺と先輩はほんの少しだけ見つめ合った後、改めて氷室先輩を見る。

「氷室先輩……藤堂先輩は、どうでしたか？」
『……』

俺の問い掛けにも、氷室先輩は全く反応しない。
それほど、あの寸止めが衝撃的だったんだろう。

「……氷室くん。少しだけ、話をしよう」
『……』
「君は、私が君を見ていないと言ったが……私は、常に君のことを意識していたよ」
『ッ！？』

先輩のその一言に、呆けていた氷室先輩が反応を示した。

「ふふ……先程は望月くんを引き合いに出したが、この私だって「関聖帝君」にクラスチェンジする前は、平凡な強さだったよ」
『ッ！　嘘デス！　アナタハイツダッテ孤高ダッタデハナイデスカ

！　コレ以上……コレ以上、私ヲ侮辱スルノデスカア……！』

先輩が告げた言葉を信じられない……いや、信じない氷室先輩は、漆黒の瞳から涙を零す。

「孤高だなんて、そんな大層なものじゃない。ただ……私には、一緒にいてくれる者が周りにいなかった……だけだ……」

そう言うと、先輩は寂しそうに微笑みながら視線を落とした。

「だから、領域（エリア）攻略もたった一人でこなさなければならないし、私自身、強くなりたいと思っていたから、後はただひたすらに“グラハム塔”領域（エリア）で鍛え続けた。一人では倒せない幽鬼（レブナント）もたくさんいるが、そんな時は背後から不意打ちをしては、幽鬼（レブナント）に背を向けて逃げ出したりもした」

先輩の独白に、気づけば氷室先輩が聞き入っていた。

氷室先輩の瞳に、今の先輩はどう映っているんだろうか。幻滅してるだろうか、それとも、共感しているのだろうか。

「そして去年の秋、ようやくその努力が実り、私はクラスチェンジを果たした。するとどうだ？　今度は皆が私に恐怖し、ますます遠ざかっていくじゃないか。だが」

一拍置き、先輩は氷室先輩をジッと見つめる。

「……だが、君だけは私を見てくれた」

『ア……』

「ふふ……といっても、君はいつも対抗意識をむき出しにしていたが、な」

そう言って、先輩が苦笑した。

『ア……アア……！』

「氷室くん……君の、私と対等であろうとするその想いが、私にはすごく嬉しかった。それだけじゃない、私と君は、たった二人だけになってしまった生徒会を共に支えた、盟友ではないか……だから……」

先輩はへたり込んだままの氷室先輩と視線を合わせると、そっと抱き寄せた。

「だから、これからも私の盟友であって欲しい」

『アアアアアアア……ッ！』

あの氷室先輩が、感情を露わにしながら先輩の胸で号泣する。

今までずっと追い求め続けていた人に、振り向いてもらえたことへの嬉しさで。

盟友と……対等であると、認めてもらえていたことへの喜びで。

そんな氷室先輩の瞳は、もう、あの澄んだ藍色の瞳に戻っていた。

「フフ……ヨーヘイ、お疲れ様」

「サンドラ」

すると、サンドラが俺の隣に来て、少し含みのある笑い方をする。

「……何だよ」

「イーエ？　どうせこれも、ヨーヘイの狙い通りなんでショ？」

「さあ、どうだろ？」

俺はわざとおどけながらそう答えると。

「マア、そういうことにしておいてあげますワ」

「うるせー」

肩を竦めるサンドラに俺はそんな悪態を吐きつつも、口元を緩めながら抱き合う二人を眺めていた。

盟友（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

執事姿に食いつく二人（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

執事姿に食いつく二人

信任投票と、二人の先輩が存分に語り合った次の日。
とうとう待ちに待った学園祭だ。

「えへへ、楽しみだね！」

隣を歩く立花が、そう言ってはにかむ。

「ああ、そうだな。執事喫茶さえなければ」
「そ、そんなことないよ！　ボク、望月くんの執事姿、楽しみにしてるんだからね！」

立花はズイ、と詰め寄り、その中性的な顔を近づける。
もう慣れたから平常心を保てるが、初対面でこんな真似されたら、俺は間違いを犯すかもしれん。

「だけどさあ……立花はいいよ？　メッチャ需要あるし。俺や他の奴からしたら、結局は誰からも指名されないまま、教室の隅でオブジェになる未来しかないんだけど」
「加隈くんじゃあるまいし、キミに限っては絶対にそんなことないから！」

立花よ、俺に気を遣ってくれるのは嬉しいが、あえてここで加隈を引き合いに出してヒドイことを言うのな。

「お！　ナニナニ？　この俺の噂なんかしちゃってるワケ？」

などと後ろからやって来た加隈が俺と立花の間に割り込み、ガシッと肩を組んで来やがった。
だけど、お前が立花と肩を組む時、その手をワキワキとさせてたのをちゃんと見てるからな？

「モウ！　加隈くんには関係ないよ！」
「ええー……そんな冷たいこと言うなよ……」

そして途端に不機嫌になった立花がプイ、と顔を背けると、加隈は泣きそうな表情をしながら肩を落とした。
まあ、そろそろ鬱陶(うっとう)しいから、俺も加隈の腕をはずそう。

「チェ……二人共冷てーなー……」

いや加隈よ、お前が拗ねたところで需要はないからな。

そんな感じで歩きながら、俺達はいつもの十字路に差し掛かると。

「ふふ……望月くん、みんな、おはよう」
「「「おはようございます！」」」

いつものように俺を待っていてくれた藤堂先輩は、俺達を見るとニコリ、と微笑んだ。
うむうむ、この笑顔を見ないと俺の一日が始まらない。

「と、ところで立花……今日の学園祭、その……お、俺と一緒に、回らない、か……？」

先輩とも合流して学園へと向かう途中、加隈は頬を赤らめた加隈の奴が上目遣いでおずおずと切り出した。

……コイツにはもう、何も言うまい。

「い、嫌だよ！　それにボクは、望月くんと一緒に回るんだから！　ね！」

鼻息荒く、そのエメラルドのような瞳をキラキラさせながら、立花はグイグイと詰め寄って来る。

だけど。

「あー……悪い、立花。執事喫茶のシフトの空き時間は、俺とサンドラは生徒会の仕事があるんだよ……」

「えええええええええ！？」

立花は驚きの声を上げ、あからさまにガッカリした様子を見せる。

でも、生徒会は四人しかいないし、シフト組んで隙間の時間を作れるほど余裕はないんだよ。

それに……生徒会としての仕事なら、合法的に先輩と二人っきりで回れるのだ。なので、絶対に生徒会を最優先にする所存。

「うう……望月くんと一緒の学園祭、すごく楽しみにしてたのに……」

「だ、だったら俺と……「それはイヤ！」……うう、泣きそう」

そんな立花と加隈の落ち込んだ背中を眺めながら、俺達は学園へと向かった。

◇

「うあー……やっぱり似合わねー……」

俺は執事が着るような衣装に身を包み、思わず変な声を上げる。
というか俺、完全に衣装に負けちまってるじゃねーか……。

「そ、そんなことないよ！　それより、その姿を写真に撮らせて！」

何故か興奮した様子の立花が、スマホを構えて撮影し出した。俺、まだ許可を出してないのに。

すると、別の場所で同じく衣装を着替えていた女子達が教室に戻ってきた……んだけど、サンドラとプラーミャ、超似合ってる！

「サンドラ！　なんだよスゲー似合ってるじゃん！」

「フエ……ヨ、ヨーヘイ……」

俺はサンドラの元に駆け寄って、絶賛するんだけど……サンドラの奴、なんでそんなに顔を真っ赤にしてるんだ？
執事姿を褒められて、照れてるのかなあ……。

「ネ、ネエ、ヨーヘイ……ソノ……」

サンドラは、おずおずと俺を指差した。
多分、執事姿がイマイチなんだろう。うん、俺もそう思ってるよ。

「はは……似合わないだろ？」

そう言って苦笑しながら頭を掻くと、サンドラはかつてないほど勢いよく首を左右に振った。

「ソ、ソノ……期待以上ですワ……」

「はは、お世辞でも嬉しいよ」
「お、お世辞なんかじゃないですワ！　ぜ、ぜひその姿を撮影させてくださいまシ！」
「うお！？」

今度はサンドラに詰め寄られ、俺は思わずたじろぐ。
というかサンドラ、近い！　鼻息が荒い！　そして、可愛すぎるぞチクショウ！

その後、俺をスマホで何枚も撮影し、サンドラは少し下品な笑い方をしてはスマホの画面を眺め続けていた。

そして朝の十時になり、二日間に及ぶ学園祭がいよいよ幕を開けた。

執事姿に食いつく二人（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩と巡回（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

先輩と巡回

「くはー！　忙し過ぎるだろチクショウ！」

俺は厨房の中で食器を洗いながら、思わず愚痴をこぼす。

というのも、俺達のクラスの出し物である執事喫茶が盛況を極め、休憩する暇もないほどなのだ。

まあ、裏方でしかない俺なんかよりも、立花、サンドラ、プラーミャの三人は圧倒的に大変なんだけど。

だって。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「い、いらっしゃいませなのですワ！」

「……フン」

と立花は女性陣もさることながら、一部の男からも指名されてるし、妖精のようなサンドラは言わずもがな、プラーミャに関してはイジメられたい男共からの指名が殺到しているのだ。

あとは、女子が時折指名を受ける程度で、立花を除く男子全員に至っては、完全に教室のインテリアと化していた。

なので、ホールはその三人と女子に全てを任せ、俺達男子は裏方に徹するという、見事なコンビネーションを発揮していた。ちくせう。

「望月くん！　洗い場はもういいから、入口で人の整理をして！　捌き切れないよ！」

「ういーっす」

切羽詰まった立花の叫びに、俺は何とも気の抜けた返事をして教室の入口に向かう。

まあクソザコモブな俺は、甘んじて裏方に徹しますよっと。

「ハイハイお客様ー！　通行人の邪魔になりますので、こちらの教室の壁に沿って二列に並んでくださいねー！」

俺は群れを成しているお客さんの列を整理し、中の様子を窺いながら順番に入れていく。

そして。

「加隈……お前……」

「お、俺は当然、立花を指名するからな！」

そう言って、ずい、と指名チケット十枚を俺に手渡すが……コイツ、そこまで……。

「分かった……俺はもう何も言わん。楽しんで来い！」

「おう！」

俺は背中をバシン、と叩き、加隈を教室の中へと送り出す。

後は……知らん！

「盛況ですね」

「あ！　氷室先輩！」

声に振り返ると、氷室先輩が立っていた。

「氷室先輩は、巡回ですか？」
「ええ」
氷室先輩は表情を崩さず、短く答える。
昨日、藤堂先輩と氷室先輩が語り合った後、生徒会を去ろうとした氷室先輩を、俺達三人は慰留した。
最初は俺達を裏切ったからと頑なに断ったが、先輩が『氷室くん……君は、盟友であるこの私を見捨てるというのか』との言葉がトドメとなり、そのまま副会長として残ってくれることになったのだ。
「……こんな私が、まだ生徒会のメンバーとして活動していることに後ろめたさを感じますが、これも過ちを犯した私自身への罰として受け止めます」
「イヤ、重いですから！」
ウーン……そもそも、闇堕ちさせたのは間接的には俺のせいだし、実際に悪だくみをしたのは牧村クニオだからなあ。
「望月さん……あなたにも、たくさん迷惑を掛けてしまいましたね」
そう呟いて、氷室先輩は視線を落とす。
相変わらず無表情だけど、それでも、実際はかなり負い目を感じちゃってるんだよなあ……あ、そうだ。
「そうですねー……でしたらお詫びとして、明日一緒に学園祭を巡回する時に、露店で何か奢ってください。できれば、［シン］が大好きなアイスやかき氷とかだと嬉しいです」

俺は空気が重くならないように、あえておどけながらそう言うと。

「ふふ……本当に、あなたは……」

氷室先輩は口元を押さえ……なんと、クスリ、と微笑んだ。

うおお……普段表情を変えない氷室先輩だからこそ、その破壊力はシャレにならんぞ！？

「分かりました。明日の学園祭二日目、楽しみにしていてくださいね？　……私も、楽しみにしています（ボソッ）」

「？　はい！」

最後のほうは聞き取れなかったけど、それでも氷室先輩の気分は大分晴れたみたいだ。よかった……って。

「早く！　いい加減中に入れてよ！」

「オイ！　いつになったら順番が来るんだよ！」

「うあああああ！？」

しまった！？　氷室先輩との会話に集中しすぎて、お客さんを捌くのを忘れてた！

俺はお客さんに平謝りしながら、仕事を再開した。

◇

「ううう……もう無理……」

やっと交代の時間となり、俺はバックヤードで突っ伏した。というか、お客さんの整理がここまで過酷だとは思わなかった……。

だって、お客さんの数が多すぎて、入りきれないお客さんからのクレームを一身に受け続ける羽目になるし、なのに次から次へとお客さんが湧いてくるし……これなら厨房で皿洗いするほうがましだった……って、こうしちゃいられない。

俺はそそくさと制服に着替え直すと、教室を出て生徒会室へと向かう。

ここからは生徒会の仕事、藤堂先輩と学園内を巡回するのだ。

「す、すいません！　遅くなりました！」

俺は生徒会室の扉を開けると、先輩は椅子に腰かけながら書類に目を通していた。

「ふふ、大丈夫だ。では行こうか」

「はい！」

実は俺、この巡回を心待ちにしていたりもする。

だって、図らずも先輩と二人っきりで学園祭を回れるんだからな。

そうして、俺と先輩は生徒会室を出ると、各部活の露店が立ち並ぶ校庭に来た。

「先輩、何か食べたいものはありますか？」

「ふふ……コラ、私達は生徒会として巡回に来てるんだぞ？」

俺が露店を指差しながら尋ねると、先輩は苦笑しながらたしなめる。

「あはは、もちろん生徒会としてでもありますけど、それ以上に俺は先輩と二人で学園祭を楽しむ時間だと思ってますけど？」
「あう……ふふ、仕方ない、な……」
先輩は頬を赤らめながら、渋々と言った様子で頷いた。
といっても、その口元は緩んでいるけど。
そして俺達は露店を回りながら、食べ物とドリンクを買って、ベンチに座った。
「ふふ！　さあ、どれから食べようか！」
「あ、あはは－……」
今、このベンチの上にはたこ焼きや焼きそば、ポテトチップスなどが所せましと並べられている。というか先輩、少し買い過ぎじゃ……。
「はふはふ……うん、美味しいな！」
うん、先輩が熱々のたこ焼きを頬張る姿って、何というか、その……ごちそうさまです！
「ん？　望月くんは食べないのか？」
「はえ！？　あ、ああいえ、いただきます！」
見とれていたところに声を掛けられ、俺は慌てて先輩と同じくたこ焼きを食べ……って！？
「熱っ！？」
「ふふ……ホラ、慌てて食べるからだぞ？」

先輩にドリンクを手渡され、俺は勢いよくそれを飲む……って、コレ、俺が買ったコーラじゃないぞ!?

「せ、先輩!?」

「ん？　どうした……って!?」

どうやら先輩も気づいたみたいだ。

俺に手渡したのが、先輩が買った紅茶だということに。

そして、これって……。

「あう……そ、その……すまない……」

「い、いえ……あの……う、嬉しかった、です……」

って、俺は何を言ってるんだよ!?

俺はチラリ、と先輩の様子を窺うと……。

「あうあうあうあうあうあう……」

先輩は耳まで真っ赤にしながら、恥ずかしそうに俯いていた。

そして、結局俺と先輩はお互いに顔を合わせることもできないまま、楽しみにしていた巡回を終えた。

でも、これだけは言わせて欲しい。

先輩、ごちそうさまでした!

先輩と巡回（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

サンドラと巡回（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

サンドラと巡回

「……サンドラ、お疲れ」
「……キュウ」

ようやく学園祭の初日が終わり、サンドラは変な声を上げながら突っ伏していた。
いや、今回の執事喫茶は完全に予想外だった。

というか、誰がこんな繁盛するだなんて思うんだよ。
結局、サンドラ、プラーミャ、そして立花は、指名が終了時間まで途切れることがなかったせいで、ほとんど休憩すら取れなかったんだよなあ……。

なので生徒会の仕事も、今日は俺がサンドラに代わってこなしていた。

「……なあ、提案なんだけど、立花、サンドラ、プラーミャの三人については、指名できる時間を限定しないか？　例えば、一時間ごとのローテーションを組むとか」
「「「賛成！　賛成！」」」
「うお！？」

俺の提案に、三人が懇願するかのような瞳をしながら手を挙げた。
だよなあ……さすがにつらいよなあ……。

他のみんなも、さすがに三人が可哀想だと思ったんだろう。
全員、無言で頷いた。

「やった！　これで明日は、望月くんと一緒に回れる！」

いや立花……オマエ、意外と元気じゃねーか。

「ヨーヘイ……明日の生徒会の巡回、絶対に一緒に回りますわよ……！」

「お、おう……」

サンドラのすさまじい気迫に、俺はただ頷いた。

◇

ということで、学園祭二日目。

昨日の提案の通り、三人を指名できる時間を限定したことで、お客さんも分散されてかなりスムーズになった。うん、これくらいがちょうどいいよな。

「ヨーヘイ！　生徒会に行きますわヨ！」

「はは、おう」

張り切るサンドラを見ながら俺は口元を緩めると、一緒に生徒会室に向かう。

午前中は俺とサンドラで巡回、午後は氷室先輩との巡回だ。

……藤堂先輩とは、二日目は残念ながら一緒に巡回するタイミングがなかった。

おかげで先輩、氷室先輩にシフトを替われと、やたら詰め寄ってたなあ……氷室先輩はずっと首を横に振ってたけど。

「ア！　ヨーヘイ！　占いがありますわヨ！」

サンドラが指差した先にあるのは、二―一の教室だった。

というかここ、あの夏目先輩と旧生徒会メンバーの……うん、名前忘れた。

「ネ、ネエ……チョットだけ、覗いてみませン……？」

サンドラがアクアマリンの瞳を潤ませながら、恥ずかしそうに提案する。

「おう、いいぞ。というかサンドラって、占いとか好きなの？」

「フエ！？　え、ええと……そうですわネ」

サンドラはモジモジしながら目を逸らす。

ま、まあいいか。

ということで、俺達は二―一の教室に入ると。

「フフフ……ようこそ『占いの館』……へ！？」

「「あ」」

どうやら占いをするのは夏目先輩のようだ。

そして俺の顔を見ると毎回嫌そうな顔をするの、いい加減やめて欲しい。

「あー、今日は占い当たる気がしないねー……そろそろ店じまいかなー……」

などと白々しい台詞（セリフ）を吐きながら、何とかして俺達を追い出そうとしているのが透けて見える。

「じゃあサンドラ、占ってもらおうぜ」

「チョット！？　私の話聞いてる！？」

もちろん聞いてるとも。だけど、面白いからこのまま続行だ。

「夏目先輩、俺達を追い出したかったら、占いを済ませたほうが早いですよ？」

「うぐう……わ、分かったわよ！」

夏目先輩はブツブツと言いながら、俺達を席に座らせた。

「……それで、今日は何を占いたいの？」

「フエ！？　あ、そ、その……」

サンドラは俺をチラリ、と見た後、何故か夏目先輩に顔を寄せ、耳打ちした。

いや、俺に聞かれたくないようなこと占いたいなら、一人のほうが良かったんじゃ……。

「……ふうん、まあいいわ。それじゃ二人共、この紙に名前と生年月日、血液型を書いてくれる？」

俺とサンドラは夏目先輩に言われるまま、紙に自分達の情報を書き込む。

だけど……アレ？　俺、まだ占いたいこと話してないんだけど……。

「じゃあ占うわよ。［クロトー］」

すると夏目先輩は、自身の精霊（ガイスト）を召喚した。

ああー、そういえば夏目先輩の［クロトー］には、運命を予測する【ディスターフ】のスキルがあったな。スキルがレア過ぎるから、その成功率はかなり低いらしいけど。

「……見えたわ」

「ど、どうなんですノ……？」

「そうだね……あなたには、かなりの強敵がいるみたいね。それも、三人も」

「さ、三人！？」

そう叫ぶと、サンドラがキッと俺を睨んだ。なんで！？

「ど、どうすればいいんですノ！　その三人に勝つためには、どうすれバ！」

「チョ！？　落ち着きなって！　……とにかく、あなたは色んなことを精一杯に頑張るしかないみたいね。そんな姿を見せることで、事態が好転するって出てるし」

「精一杯、頑張ル……」

サンドラは、夏目先輩の占いによるアドバイスの言葉を反芻（はんすう）する。

そのアクアマリンの瞳に、決意を湛（たた）えて。

多分、占いの内容からも実家絡み、だろうな……。

「ワッ！？」

「はは、心配するなよ。お前の頑張りは、傍（そば）で見てる俺が一番よく分かってる。だから、まあ……無理はするなよ」

「ヨーヘイ……ウン（ダー）……」
「ハア……もう占いも終わったんだし、二人共サッサと出て行ってくれない？」
見ると、呆れた表情の夏目先輩が、まるで犬を追い払うかのようにシッシッ、と手を振る。
「んじゃ、巡回の続きするかー」
「エエ！」
俺は満面の笑みを浮かべたサンドラと一緒に席を立つ。
「……ていうか、バッチリ見てくれてるじゃん（ボソッ）」
最後、夏目先輩が何かを呟いた気がするけど……ま、いいか。
俺は首を傾げながら、サンドラと二―一の教室を出た。

サンドラと巡回（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷室先輩と巡回（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷室先輩と巡回

「では、よろしくお願いします」

午後になり、俺は生徒会室で氷室先輩と合流した。
もちろん、生徒会として一緒に学園を巡回するために。

『むふふー！　アイス又はかき氷を食べるのです！』

そして［シン］も、氷室先輩に奢ってもらえるとあって、やたらとテンションが高い。

「とにかく［シン］、あまり精霊（ガイスト）だってバレないように気をつけろよ？」

『ハイなのです！　そしてアイスとかき氷を堪能するです！』

オイ待て、なんでアイスとかき氷の二つになってるんだよ。

「じゃあ私と一緒に、アイスとかき氷を買いに行きましょう」

『はう！　カズ姉さまは優しいのです！』

そう言うと、［シン］は甘えるように氷室先輩に抱きついた。
というか、［シン］が俺以外にこうやってくっつくのって、ひょっとして氷室先輩が初めてなんじゃないのか？

「では、行きましょう」

「は、はい！」

俺と氷室先輩は生徒会室を出ると、まず学園内を巡回した後、校庭の露店エリアに向かった。

『はうはうはう！　いっぱいあるのです……！』

「どれでも好きなものを選んでください」

すると［シン］はすごい勢いでかき氷の露店の前に行き、ジーッとシロップを眺めている。

そして。

『決めたのです！　［シン］はこの濃い青色にするのです！』

そう言うと、［シン］はブルーハワイのシロップを指差しながら、キラキラとオニキスの瞳を輝かせて俺と氷室先輩を見つめる。

「分かりました。では、ブルーハワイ一つと……」

そこで、氷室先輩はチラリ、と俺を見た。

「？　ええと……？」

「望月さんはどれにしますか？」

おおっと、まさか俺の分も奢ろうって思ってるんじゃないだろうな。

「ひ、氷室先輩、俺の分はいいですよ」

「そうはいきません。ここは、少し先輩らしいことをさせてください」

むむ……そう言われてしまうと、断るのは逆に失礼か。

「あ、ありがとうございます。じゃあ、俺はメロンで」
「はい。ではメロン一つにレモンを一つください」
「ありがとうございまーす！」

注文を受け、店員をしている女子生徒がかき氷を三つ用意してくれた。

うむうむ、美味そう。

「さて……せっかくですから、座って食べませんか？　ちょうど良い場所もありますので」
「は、はい」

俺と［シン］は氷室先輩の後に続き、校舎の中に入ると。

「おお……！」

連れてこられたのは、学園の屋上だった。

「さあ、どうぞこちらへ」

屋上に一つだけ用意されているベンチに腰掛けると、学園の周辺が一望できた。

「いやあ、ここは景色がいいですね！」
「ええ……私のとっておきの場所です。何より、屋上には鍵がないと入れませんから」

その鍵を、どうして氷室先輩が持っているのか……なんて野暮なことは聞かない。というか、俺はその鍵を氷室先輩が持っているこ

とを知っていた。

氷室先輩の持つ『屋上の鍵』……これこそ、氷室先輩を闇堕ちから救うための、まさにキーアイテムなのだから。

そして、そんな氷室先輩にこの屋上に連れてきてもらえた俺は、氷室先輩からの信頼を勝ち取ったという証拠でもある。

あの『攻略サイト』によれば、一年終了時の春休みに、この屋上で起こるイベントという名のハプニングによって、氷室先輩と恋人になるためのフラグが立つ……んだけど、うん、別に俺はフラグ立てるつもりはないから。惜しいけど。非常に惜しいけど。

え？　どんなハプニングかって？　まあ、男子なら誰もが喜ぶ系のヤツだ。

『マスター！　マスター！　早く食べないと、かき氷が溶けてしまうのです！』

待ちきれない様子の［シン］がせっつく。

やれやれ……しょうがないなあ。

「それじゃ、氷室先輩いただきます！」

『はう！　いただきますなのです！』

「ええ、召し上がってください」

そう言うと、［シン］はもの凄い勢いでかき氷を口に放り込む。

オイオイ、そんなにがっつくと、後で頭が痛くなる……って、精霊（ガイスト）はどうなんだろうか。

「……望月さん、ありがとうございます」

「へ？」

突然、氷室先輩にお礼を言われた俺は、思わずキョトンとしてしまう。

ええと……むしろ、かき氷を奢ってもらった俺がお礼を言うところなんだけど。

「一昨日の夜、会長……いえ、藤堂さんから伺いました。あなたは、私と藤堂さんが想いをぶつけ合うことができるようにしてくれたのだと」

あー……先輩、余計なことを……。

「ま、まあ、余計なお節介……「そんなことは、ありません」」

俺は苦笑しながら話を切り上げようと思い、そんなことを言おうとしたら、氷室先輩に否定されてしまった。

「……藤堂さんとは、色んな事を話しました。お互いの想いや、過去、そしてこれからのことを」

「……」

「その中で、あなたのこともたくさん伺いました。あなたが、今に至るまでにどれだけの努力を重ねてきたのかを。あなたが、どれだけ周りの人達のために、心を砕いてきたのかを」

そう言うと、氷室先輩はジッと俺の瞳を見つめる。

「そして……このわた……「クハ！　こんなところにいたのか！」……あなたは……！」

すると、何故かこの場所に、あの牧村クニオと二―一の女子生徒が現れた。

氷室先輩と巡回（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先代生徒会長の乱心（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「そして……このわた……「クハ！　こんなところにいたのか！」……あなたは……！」

すると、何故かこの場所に、あの牧村クニオと二―一の女子生徒が現れた。

というか、一昨日の不正のことがあったのに、まだこうやって絡んでくるって、どれだけ粘着質なんだよ……。

「クフフ……それにしても氷室くん、あれだけの不正を働いたのに、今もこうやってのうのうと生徒会にいるだなんて、少し虫が良すぎやしないか？　まあ、僕としてはそのほうが好都合だけど」

「そうよ！　サッサと消えなさいよ！」

コイツ等、言うに事欠いて……！

「フザケルナ！　氷室先輩は、藤堂先輩や俺、サンドラでお願いして生徒会に残ってもらたんだ！　それよりも、オマエ等こそよく俺達の前に姿を現わせたな！　このクソ野郎！」

「はあ！？　なんでアンタにそんなこと言われなきゃいけないのよ！」

俺の言葉に、女子生徒がキレる。というか、キレてるのは俺のほうなんだよ！

「大体、オマエ等が巻き込んだせいで、氷室先輩が……って、氷室先輩！？」

「……望月さん、もう……いいですから……」

氷室先輩が、俺の制服をつまみながら制止する。

その表情は変わらないけど、俺には氷室先輩がどうしようもなくつらそうに、悲しそうにしているようにしか見えなかった。

……コイツ等のせいで。

「クフフ、まあいいさ。今日は氷室くんではなくて、君に用があったんだよ」

「はあ？　俺にはオマエ等なんかに用はねーよ！　サッサと消えろ！」

「クハ！　つれないねえ」

俺が吐き捨てるようにそう言うと、牧村クニオは肩を竦めて苦笑した。

というかコイツ、俺に用ってどういうことだよ。まあ、絶対に碌なことじゃないと思うけど。

「フン！　いいからよく聞きなさいよ！　牧村様はねえ、アンタみたいなクズにチャンスをあげようっていうのよ！」

尊大にそう言い放つ女子生徒だけど、そもそもコイツ、牧村クニオのこと様付けしてるのかよ。キモチワルイ。

「ハイハイ、俺はそんなチャンスは逃す主義なので、本気（マジ）で消えてくれない？」

俺はもう怒りを通り越して呆れかえってしまい、面倒くさくなって手をヒラヒラさせて追い払う仕草をした。

「まあ聞きたまえ。要は、君に生徒会を辞めてもらいたいんだよ。そうしてくれれば、今後、僕は君や氷室くんの前に姿を現わさないと誓うよ」

ん？　コイツ、何を言ってるんだ？

そもそも、なんで俺が生徒会を辞めないといけないのかも分からないし、そうすることで、なんでコイツが姿を見せないなんて提案するんだ？

というか、コイツは生徒会に返り咲きたいんじゃなかったのか？

……ちょっと、カマかけてみるか。

「オイオイ、オマエは生徒会に戻りたいんじゃなかったのかよ？俺達の前から姿を消したら、それこそ生徒会復帰なんてできねーじゃん」

俺は煽るように牧村クニオに問い掛ける。

何故なら、コイツが出した条件には、氷室先輩が生徒会を辞めるというものは含まれていない。

つまり、氷室先輩が生徒会に留まる限り、コイツは生徒会に復帰できないってことだから。

「クハ！　いいんだよ、別に僕は生徒会に戻りたいわけじゃない！僕は、オマエを生徒会から追い出したいんだ！　全てを元通りにして、藤堂くんと氷室くんを、会長選挙で一騎打ちさせたいのだよ！」

「っ！？」

コイツ、今なんて言った！？

元通りて、生徒会長の選挙で一騎打ちさせる!?　それって、本来のイベント通りには事を運ばせようってことか!?

これじゃまるで……悠木と同じじゃないか……！

「なあ……俺が断る、って言ったら、どうするつもりなんだ？」

「クフフ……決まってるじゃないか。その時は、君を排除するだけだよ！　［ラタトゥスク］！」

牧村クニオは精霊（ガイスト）を召喚すると、現れたのは、リスをモチーフにした獣人だった。

というか、せっかくリスなんだから可愛い女の子とかだったらよかったのに、残念なことにいやらしい目つきをした中年のオッサンだった。

「……あの精霊（ガイスト）、どうしても嫌悪感を抱いてしまうのですが、何故でしょうか」

氷室先輩は表情を変えずにポツリ、と呟く。俺も同意見です。

「アハハ！　じゃあ氷室さん、あなたはこの私が相手をしてあげるわよ！　［フロスティ］！」

今度は女子生徒が精霊（ガイスト）を召喚する。

その姿は、金髪ロングの髪型に白のドレスに身を包み、尊大な態度で人を見下すかのような女性……うん、ラノベなんかでよく出てくる、悪役令嬢みたい。

「クハ！　僕の精霊（ガイスト）は鈴原くんや和気くんに次いで強いんだ！　君のようなクソザコモブの精霊（ガイスト）とは違うのだよ！」

「っ！」

コイツは今、俺のことをクソザコモブだとハッキリと言った。

……これで確定だ。コイツは……牧村クニオは、悠木と同じように何らかの強制を受けている。

俺を排除しようとする、ナニカによって。

だったら、俺のするべきことは決まってる。

目の前にいる牧村クニオ……そして、そのナニカってヤツの思惑ごと、この俺が返り討ちにしてやる！

俺は拳を強く握りしめ、牧村クニオに向けて不敵な笑みを浮かべた。

先代生徒会長の乱心（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷室先輩の怒り（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷室先輩の怒り

「さあ！　クソザコモブの君に相応しい精霊（ガイスト）を召喚してみせたまえよ！」

両腕を大きく広げ、尊大に、高らかにのたまう牧村クニオ。

というか、俺の［シン］はとっくにいるんだけど。

『遅いのです！』

「っ！？」

既に牧村クニオの精霊（ガイスト）、［ラタトゥスク］の背後に回り込んでいた［シン］は、奴の背中に呪符を貼り付け……なにっ！？

「クフ、知ってたよ」

牧村クニオはニタア、と口の端を吊り上げ、［シン］の伸ばした腕をするり、と躱（かわ）した。

「クハ！　食らえ！」

［ラタトゥスク］が両手の鋭い爪で［シン］に襲い掛かるが、持ち前のスピードを活かしてバックステップで下がり、一気に距離を取った。

「ふうん、なかなか厄介な速さだな」

余裕の表情で［シン］を見やる牧村クニオ。だけど、今の［ラタ

トゥスク］の動きを見て、俺は違和感を覚える。

何故なら、俺の［シン］は精霊（ガイスト）最速で、［ラタトゥスク］を見る限りその敏捷性は一般的な精霊（ガイスト）としては速い部類に入るかもしれないが、おそらく、氷室先輩の［スノーホワイト］よりも遅い。

なのに、［ラタトゥスク］は背後を取られて体勢が不十分だったにもかかわらず、［シン］の手をアッサリと避けた。

……せめて［ラタトゥスク］の情報があればいいんだけど、コイツは『ガイスト×レブナント』には存在しないモブ以下であるため、『攻略サイト』には何も載っていない。

とはいえ、だからって俺がコイツに負ける気はさらさらないけどな。

「クフ、どうした？　そんなにらめっこしたところで、この僕を倒すことなんてできないよ？」

「バーカ、それはオマエも同じだろうが。そもそも、［シン］のほうがスピードは圧倒的に速いんだ。さっきの攻撃を見る限りじゃ、オマエの精霊（ガイスト）は近接タイプ。攻撃手段もないのに、どうやって倒すつもりなんだ？」

俺はわざと煽るように牧村クニオに語り掛ける。

せめて少しでも［ラタトゥスク］の情報を聞き出さないと。

だけど。

「クハハハハ！　君が僕から情報を引き出そうとしているのは丸分かりだよ！」

「へえ、そうなの？　というか、別にオマエの情報なんてなくても、俺達に負ける要素なんか何一つないんだけど？」

などと余裕の表情を浮かべながら強がってはみたものの……正直、相手の情報なしじゃ戦略も立てづらい。

ここは距離を取りつつ、慎重に仕掛けたほうが良さそうだな。

「クフ、別に僕はこのまま膠着状態でも構わないけど、その間に氷室くんはどうなるかな？」

「なに？」

牧村クニオの言葉に、俺は氷室先輩へと振り向くと……っ！？

「アハハハハ！　アンタ、本当に弱いわね！　あの藤堂サクヤとは大違いじゃない！」

「……っ！」

女子生徒の攻撃を受けた氷室先輩は膝をつき、女子生徒が嘲笑した。

「まあ？　私はこう見えても藤堂サクヤと夏目ハルカの次に強いから、並以下のアンタじゃ初めから勝負にならないんだけど？」

「……そうですか」

氷室先輩は表情を変えずにその言葉を聞き、ただ女子生徒を見据える。

だけど……氷室先輩は、攻撃を受けた肩をギュ、と強く握りしめていた。

当然だ。氷室先輩だって悔しいに決まってる。

だからこそ、誰にも負けないくらい努力を重ね、藤堂先輩に肩を並べようと頑張っていたんだから。

「クハ！　佐久間くんも言うねえ！　まあ、氷室くんの実力じゃしょうがない！」

　すると、俺と同じように二人の様子を眺めながら、牧村クニオがケタケタと笑った。

「……オイ、オマエは氷室先輩を認めてたんじゃないのか？」

「ん？　もちろん認めてるさ。藤堂くんのことをちらつかせ、生徒会長を譲るって言っただけで簡単に僕になびく、都合のいい女として、ね」

「テメエ！」

　その言葉に逆上し、俺は我を忘れて［シン］を突撃させる。

「クハハハハ！　単純だねえ！」

『っ！？　危ないのです！』

　［シン］は間一髪、［ラタトゥスク］が突き出す両手の爪を躱した。

　というか、なんであの速さについて来れるんだよ！？　しかもあれじゃ、まるで［シン］がそこに来ることが初めから分かってたってくらい、タイミングもバッチリだったぞ！？

「クフ！　君のようなクソザコモブの単純バカは扱いやすくていいね！　というか、氷室くんが弱くて都合がいいのは事実だろう？」

　クソッ！　何だってアイツの言葉はここまでイライラさせやがるんだ！

　冷静になろうとしても、どうしても牧村クニオに突っかかっちま

う！

その時。

「あーあ、あの藤堂サクヤのお気に入りも、大したことなかったわね。牧村様に、あんなに簡単にあしらわれてるし。ていうか、そういう意味じゃアンタと同じか。なにせ、クソザコモブだもんねー！　アハハハハ！」

「っ！　今の言葉、取り消しなさい！」

女子生徒に吐き捨てるように言われ、あの氷室先輩が激高した！？　いや、あんな姿、先輩と戦った時だってなかったぞ！？

「私のことは事実ですから、どれだけ馬鹿にしていただいても構いません！　ですが……ですが！　望月さんへの暴言だけは、絶対に許せない！」

「え……？」

氷室先輩の言葉に、俺は思わず呆けた声を漏らす。

というか、氷室先輩はなんで俺なんかのことで怒るんだ……？

「彼は……望月さんは、こんな馬鹿な私のことが放っておけなくて、わざわざ藤堂さんと語り合う舞台を用意してくれた！　そのおかげで、私は藤堂さんの隣に並ぶことができたんです！」

氷室先輩が女子生徒に向かって大声で叫ぶ。

だけど……正直、俺は大したことをしていない。それに、そんなことをしたのだって、藤堂先輩と氷室先輩の想いがすれ違ったままなのが嫌だっていう、単なる俺のわがままなんだから。

「それだけじゃない！　彼が生徒会に来てから、いつも誰かを気遣って、支えてくれた！　私の大切な弟が怪我をした時も、心配してわざわざ連れてくるような優しい人なんです！　そんな彼を、これ以上侮辱するな！」

「アハハハハ！　じゃあこの私を止めてみせなさいよ！　といっても、そんな実力もないアンタじゃ無理だけど！」

キッと睨みつける氷室先輩を見ながら、女子生徒は嘲笑い続ける。

すると。

「……ええ、もちろんそのつもりですよ。あなたを地面にに這いつくばらせて、これまでの発言を死ぬほど後悔させてあげます」

「っ！？」

腹の底から震えるほどの冷たい言葉を放った氷室先輩が、肩に乗る［スノーホワイト］の頭にそっと指先を乗せる。

そして。

「クラスチェンジ、開放」

そう、言い放った。

氷室先輩の怒り（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

雪の女神（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「クラスチェンジ、開放」

氷室先輩が、静かにそう告げた。

というか、クラスチェンジだって！？

「氷室先輩！？」

「ふふ……実は、一昨日の夜に桐崎さんと電話で語り合った際、［スノーホワイト］のクラスチェンジのための条件が全て揃ったみたいです」

そう言って、氷室先輩はニコリ、と微笑んだ。

だけど、言われてみれば『攻略サイト』にある氷室先輩のクラスチェンジの条件は、確かに揃っている。

レベル四十以上、闇堕ちから救われ、かつ、『屋上の鍵』をその手に持っているんだから。

「フン！　元々弱いんだから、クラスチェンジしたって一緒よ！」

鼻を鳴らし、余裕の表情で幽子の渦を眺める女子生徒。

だけどコイツは知らない。

氷室先輩の精霊（ガイスト）が、『ガイスト×レブナント』における最強の【氷属性魔法】と弓の使い手、［ウル］であることを。

そして、渦は徐々に小さくなり、氷室先輩の精霊（ガイスト）はその姿を見せると……それは、『攻略サイト』にあったイラストのような［ウル

」なんかじゃなかった。

［スノーホワイト］と同様その姿は妖精のように小さく、青色がかった白の髪、褐色の肌、青のタイトなドレスに身を包み、青のマントを羽織っていた。

……前言撤回。［ウル］じゃなかった。

いや、まあそんな気はしてたよ？　だって、サンドラの時もそうだったし。

「へえ、相変わらず小さい精霊（ガイスト）なのね。ちょっとは期待したんだけど、やっぱり拍子抜けだわ」

呆れた表情でそう言い放つ女子生徒。

だけど。

「っ！？　佐久間くん、気をつけるんだ！」

慌てて牧村クニオが叫ぶと同時に、氷室先輩の精霊（ガイスト）は一気に女子生徒の精霊（ガイスト）、［フロスティ］に肉薄する。

「食らいなさい。【レイオマノ】」

「キャアアア！？」

すると氷室先輩の精霊（ガイスト）は［フロスティ］の身体を縦横無尽に駆け巡り、その手に持つ、鋭利な牙を刃にした武器で全身を抉（えぐ）り続けた。

「クッ！？　この！　【コールドゲイル】！」

たまらず女子生徒は中級氷属性魔法の【コールドゲイル】を唱え、

［フロスティ］の身体に敵を凍らせる冷気をまとわせる。

「ふふ、私の［ポリアフ］には【氷属性無効】のスキルがあるから効きませんよ」

そう言うと、なおも構わず［フロスティ］の身体に攻撃を仕掛ける。

そして氷室先輩の精霊（ガイスト）の名前、［ポリアフ］っていうんだな……当然、『攻略サイト』にもその情報はない……って、いつの間にか［ポリアフ］の数が増えてる！？

「［スノーホワイト］の【セブンス】よりもその数は減りましたが、その代わり、それぞれに特殊効果が付与されているんですよ。例えば」

すると、［ポリアフ］のうちの一体が、氷の鎖のようなもので［フロスティ］を拘束し始めた。

「な！？　う、動け！？」

「これが【カホウポカネ】のスキルです。どうですか？　動けませんか？」

そう言うと、氷室先輩が女子生徒に向かってニタア、と嗤（わら）った！？

ひょ、ひょっとして……氷室先輩って意外と闇が深いのかも……。

「クソッ！　クソッ！　雑魚のくせに！　弱いくせに！」

「ふふ、そんな弱い雑魚に、あなたはこれからいたぶられ続けるんですよ？　ご安心ください、あなたが意識を失わない絶妙な加減で、私が【レイオマノ】で虐めて差し上げますから」

「ヒッ！？」

氷室先輩のほの暗い笑みに、女子生徒が短く悲鳴を上げた。
……とにかく、氷室先輩だけは怒らせたら絶対に駄目だ。

「そういうことですので望月さん、あなたは存分にその男を打ちのめしてください。ええ、それはもう二度とこの学園にいたくないと思うほどの恐怖を植え付けて」
「は、はいッ！」

氷室先輩の言葉を受け、俺は直立不動で返事をした。

「それと、その男の精霊（ガイスト）の保有スキルは【ピーピング・トム】と【インフレイム】、どうやら相手の思考を盗み見る能力とヘイトを集める能力のようですね」
「っ！？」
「おや？　私の思考も読み取っているはずですから、今さら驚く必要はないのでは？」

息を飲んだ牧村クニオに、氷室先輩がわざと煽るようにそう言い放つ。
なるほど……だからコイツは、俺の思考を読んで［シン］のあのスピードに対処できたし、俺はコイツへのヘイトが溜まったってことか……って。

「そ、そういえば氷室先輩、どうして［ラタトゥスク］のスキルが分かったんですか？」
「もちろん、［ポリアフ］に相手の精霊（ガイスト）を解析するスキルがあるからです」

気づけば、いつもの無表情に戻った氷室先輩が淡々と説明してく

れた。
でも、相手を解析するスキルはすごいな……。
確か『ガイスト×レブナント』のキャラの中では、サポートスキル特化型の、来年入学予定のお姫様しかいなかったはずだからな。
俺は氷室先輩を窺うと、その藍色の瞳はどこか自信に満ちていた。
もう、藤堂先輩にコンプレックスを抱いていた時の氷室先輩はそこにはいない。
「ははっ」
そんな氷室先輩の姿が嬉しくて、思わず笑みが零れる。
氷室先輩を無理やり闇堕ちさせるような真似をしたけど、その選択は間違いじゃなかったと、今なら心から言える。
「よっし！」
俺は気合いを入れるため、両頬を叩くと。
「さあて……んじゃ、サッサとケリつけるか」
そう言うと、少し焦りの表情を浮かべる牧村クニオを見据えた。

雪の女神（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

あと二話で、この第四章もラストです！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

世界最速の精霊（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

世界最速の精霊

「さあて……んじゃ、サッサとケリつけるか」

そう言うと、俺は少し焦りの表情を浮かべる牧村クニオを見据えた。

「ク、クフ！　［ラタトゥスク］のスキルの正体が分かったからって、そう簡単に僕を倒せ……「倒せると思ってるよ」……なっ！？」

フン、タネさえ分かれば、どうってことはない。

何故なら、［シン］こそが『ガイスト×レブナント』最速なんだから。

「［シン］！　小細工はなしだ！　あの不細工なリス野郎を、真っ向から叩き潰してやれ！」

『ハイなのです！　［シン］はやってやるのです！』

俺の声に呼応し、［シン］はクラウチングスタートの体勢をとった。

「クハハハハ！　まさか、そのまま真っ直ぐに突っ込んでくるつもりかい！」

「いや、俺の思考が読めるんだろ？　だったらいちいち声に出すなよ」

俺はやれやれといった様子で肩を竦めると、それが癇に障ったのか、牧村クニオが露骨に顔をしかめる。

「クフ、まあいい。だったら僕はそれに合わせて、あの精霊（ガイスト）をズタズタにしてやるだけだよ！」

［ラタトゥスク］は両手を［シン］に向けて突き出し、待ち構えた。

『ヨーイ……』

［シン］の白くて細い脚に、グッと力が宿る。

そして。

『ドン！　なのです！』

そんな叫び声を共に、［シン］は文字通りロケットスタートを切った。

それこそ、自身の叫び声すら後方に置き去りにするほどに。

「クハハ！　食らえ！」

最初から軌道が分かっているかのように、［ラタトゥスク］は［シン］のその額に向けて両手の爪を合わせる。

だが。

「っ！？　躱（かわ）……っ！？」

［ラタトゥスク］の爪がその鼻先に触れようとした瞬間、［シン］は超高速で身体を捻り、スルリ、と躱（かわ）すと、相手の背中に呪符を

大量に貼り付けた。

『終わりなのです！　【爆】！』

「ギャアアアアアアアア！？」

［ラタトゥスク］が呪符によって吹き飛ばされると同時に、ダメージを共有する牧村クニオは、まさに断末魔のような叫び声を上げながらもんどり打った。

「［シン］、暴れられないように拘束しておこう」

『了解なのです！　【縛】』

［ラタトゥスク］にペタリ、と呪符を貼り付けると、牧村クニオは苦しみながらも身悶えすらすることができない。

今まで散々やらかした罰だ、しばらく苦しんどけ。

「望月さん」

氷室先輩が俺の名を呼んだので振り返る。

「お見事でした」

「あはは、氷室先輩こそ。それより、いきなりクラスチェンジをしたから驚きましたよ」

「そうですね……ですが、元々ここでクラスチェンジをするつもりでしたので」

「へ？」

氷室先輩の言葉に、俺は思わず気の抜けた声を漏らした。

いや……てことは、最初から氷室先輩はクラスチェンジができたのか？

「そもそも望月さんをこの屋上に連れてきたのは、あなたに私の精霊（ガイスト）のクラスチェンジをする姿を見て欲しかったからですので」
「そ、そうだったんですか……」
じゃあ牧村クニオに邪魔される直前に氷室先輩が何かを言おうとしたのは、このクラスチェンジのことだったんだな。
「……あなたが導いてくれたおかげで、私はクラスチェンジをすることができました」
そう言うと、氷室先輩がその藍色の瞳で俺を見つめる。
「違いますよ……全部、氷室先輩が頑張ってきたからですよ。俺は何もしていません」
「いいえ。あなたがいたから、私は藤堂さんと向き合えたんです。あなたがいたから、私は自分を認めてあげることができたんです」
氷室先輩が、俺にそっと近づいた。
「何と言おうと、それだけは譲れません」
「あ、あはは……」
ずい、と詰め寄る氷室先輩に、俺は苦笑するしかない。
だけど、この世界のどこに、たった一人でレベル七十九まで上げ続けて、それでもなお、あの藤堂先輩の背中を追いかけようとする人がいるんだよ。
そんなの、氷室先輩以外あり得ないだろ。

「これを、見てください」

そう言うと、氷室先輩が俺にガイストリーダーを見せてくれた。

――――――――――――――――――――

名前　：ポリアフ

属性　：女神（♀）

ＬＶ　：７９

力　　：Ｆ

魔力　：ＳＳ

耐久　：Ｆ

敏捷　：Ｓ

知力　：Ｓ＋

運　　：Ｃ

スキル：【氷属性魔法】【スナイプ】【レイオマノ】

【リリノエ】【ワイアウ】【カホウポネカ】

【オブザーバトリー】【氷属性無効】【火属性弱点】

――――――――――――――――――――

「す、すごい……！」

俺は思わず感嘆の声を漏らす。

ステータスには極端な偏りがあるものの『魔力』が“ＳＳ”だし、『知力』も“Ｓ＋”、スキルの数も優秀だ。

このステータスが実現できたのは、氷室先輩がこれまで諦めずにレベルを上げ続けたから。

だから、その才能が一気に開花したんだ。

「もしあなたがいなかったら、私はずっと弱いままだった」
「いや、ですから……っ！？」

俺が氷室先輩の言葉を否定しようとすると、氷室先輩がその人差し指で俺の口を塞いでしまった。

「藤堂さんが言った通り、あなたは誰よりも心が強く、そして、誰よりも優しい方です。私は、そんなあなたの隣に立ちたい。藤堂さんよりも、あなたの隣に」
「え、えっと、それは……」

氷室先輩の言葉に俺は思わずしどろもどろになってしまうと、氷室先輩は急にクルリ、と後ろを向いてしまった。

「……今日のところは、それをあなたにどうしても伝えたかったんです」
「は、はあ……」

俺はどうしていいか分からず、頭を掻きながら気の抜けた返事をしてしまう。

すると。

「私って、諦めが悪いんです……だから、覚悟してください」

また俺へと振り返り、氷室先輩は雪の結晶のようにその笑顔を輝かせた。

世界最速の精霊（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回で、いよいよ第四章ラスト！　どうぞお楽しみに！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

繋いだ手（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第四章、ラストです！

繋いだ手

学園祭が終わり、大成功の打ち上げをしようってことで、生徒会と一―三のクラス全員で駅前のファミレスに来ているんだけど……。

「むううううううう！　望月くんヒドイよ！」

ハイ、立花の奴は俺の前の席に座ってご機嫌斜めです。

というのも、結局俺は立花と一緒に学園祭を回れなかったのだ。

だけど、俺にも言い訳をさせてもらいたい。

そもそも、俺は執事喫茶のシフトの空きはほぼ生徒会としての仕事で埋まってたし、あの牧村クニオの馬鹿が絡んできたせいで、“GSMO（グスモ）”に事情聴取受ける羽目になるし……。

いや、それ以上に。

「……」

「……」

ハイ、先輩とサンドラが、何故か腕組みをしながらジト目でメッチャ睨んでくるんですけど。

「望月さん、こちらのフライドポテトをどうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

そしてそして、何故か氷室先輩はファミレスに来るなり素早い動きで席を陣取り、俺を隣に座らせた。もちろん、俺に拒否権はない。

『んふー！　ウマウマなのです！』

氷室先輩から俺を挟んで反対隣に座っている［シン］は、ご機嫌でアイスを頬張っている。チクショウ、お前は幸せでいいな。

まあ、なんでこうなっているかというと……。

◇

「さて……コイツ等も拘束しましたし、後は先輩に伝えて“ＧＳＭＯ（モ）”に来てもらったほうがいいかもですね」

「ええ、この二人はやり過ぎましたから」

「な、何故だ！　僕は全てを元通りにするためにしたことだぞ！？　その僕がなんでこんな仕打ちを受けないといけないんだ！」

などと牧村クニオが喚（わめ）き散らすが。

「ウルセエ！　オマエ等がしたことは、立派な犯罪だ！　氷室先輩に精霊（ガイスト）のスキルで怪我を治療してもらえただけありがたく思え！」

俺は吐き捨てるようにそう言うと、氷室先輩の腕を引いて屋上に一つだけあるベンチへと向かった。

「ハア……かき氷も溶けちまったよなあ……」

ベンチの上に置いてある三つのかき氷のカップを眺め、俺は溜息を吐いた。

『あうあうあう！　あの二人、許すまじなのです！　［シン］のか

き氷を返せなのです！』

かき氷に並々ならぬ思いのある［シン］は、俺達以上に激怒している。

……まあ、さすがに可哀想だから、後でまた買ってやるか。

液体と化したメロン味のかき氷のカップを取り、俺は口の中に流し込んだ。

「それはそれで、美味しそうですね」

そんな俺の姿を見て、氷室先輩が唐突にそう言った。

「あははー、普通にかき氷として食べたほうが絶対に美味いですよ？」

「そうですか？」

「ええ、試しに飲んでみま……『はう！　［シン］もマスターの真似して飲むのです！』……って、おわっ！？」

飛び込んできた［シン］に突き押され、中腰で体勢が悪かった俺は思わずよろめいてしまい……。

――ふにゅん。

「「っ！？」」

俺は、氷室先輩のその巨大な胸の谷間に、顔をうずめてしまった！？

「うあああ！？　すすす、すいません！？」

氷室先輩から慌てて離れると、俺はその場で土下座した。
もちろん、謝罪とそれを圧倒的に上回る感謝を込めて。

いや、だって氷室先輩は藤堂先輩よりも凄いんだぞ！　破壊力バツグンなんだぞ！

「……いえ、不可抗力ですので」

俺はソーッと氷室先輩の表情を窺ってみると……ヒイイ!?　あのほの暗い笑みを浮かべていらっしゃる!?

「ですが……これは望月さんから、ぜひお返ししていただかないといけませんね？」
「はい……」

◇

ということで、今の俺は氷室先輩に逆らえないのだ。
いやだって、氷室先輩ときたら、隣に座るのを遠慮するような反応を見せた瞬間、『あの件、二人にお伝えしますよ？』って言いながら、ニタアと口の端を吊り上げるんだぞ!?　こんなの、受け入れるしかないだろ！

そして、俺は気づく。
あのハプニングによって氷室先輩との恋愛フラグが立ち、氷室先輩ルートに入ってしまったことを。

……こうなったら氷室先輩には悪いけど、今後の氷室先輩関連イベのフラグは全てへし折らせてもらうことにしよう。

「そ、それで、あの牧村クニオと女子生徒はどうなりそうですか？」

俺はもうこの空気に耐え切れなくなり、せめて雰囲気を変えようと先輩に話題を振った。

「ん？　ああ……当然ながら彼等は退学、そしてあの施設で更生プログラムを受けることになるだろうな」

「そうですか……」

アイツの発言からも、悠木と同じ状態にあったとは思うが……うん、何とも思わない。大人しくして、悔い改めればいいのだ。

「ホント、最低だよ！　ボクがその場にいたら、絶対にただじゃ済まさないのに！」

立花よ、お前の気持ちは嬉しいが、氷室先輩がトラウマ植え付けるほどの苦しみを与えたから。見てた俺もトラウマ植え付けられたから。

「マア、話はそれくらいにして、純粋に打ち上げを楽しむわヨ」

プラーミャよく言った！　ただのヤンデレシスコンだと思ってたけど、今はお前だけが頼りだ！　……って、アレ？

俺は窓越しに見える一人の男の影が目に留まる。

「なあ……アイツ、どうする……？」

「……気づかないフリをするんですのヨ」

サンドラの一言で、俺達は羨ましそうな表情でストーカーのようにファミレスの中を覗く加隈を無視することにし、打ち上げを楽し……もうと思ったけど。

「む……氷室くん、少し望月くんとくっつき過ぎではないか……？」
「そうですか？　そんなことはないですよね、望月さん？」
「へ？　え、えーと……」
「モウ！　ヨーヘイ、コッチに来なさイ！」
「あー！　ボクだって望月くんと一緒に座りたいのに！　サンドラさんズルイ！」
『んふふー！　アイスを追加！　追加なのです！』

とまあ、俺達のいる席は無法地帯と化したため、いくつもアイスを食べてご機嫌の［シン］を除き、全く楽しめませんでした。

◇

「全く君は……」
「あ、あはは……」

打ち上げも終わり、俺は呆れた表情を浮かべる先輩と一緒に帰路についている。

そういえば、別れ際にサンドラが『二人目は氷室先輩なんですのネ……』などとブツブツ言ってたな。あれ、一体何だったんだろう。

「と、ところで、本当に氷室くんと何もなかったのだろうな？」
「な、何もないです！　何もないですから！」

先輩の執拗な質問に、俺は手をわたわたさせながら否定する。

だけど、すいません……本当は、目一杯ふかふかを堪能しました

……。

「……本音を言えば、やはり君と氷室くんの仲睦まじい姿を見ると、その……嫉妬、してしまうな……」

そう言うと、先輩は少し口を尖らせて俯いてしまった。

先輩……。

「す、すまない……今の言葉は忘れ……っ！？」

先輩が何かを言おうとする前に、俺は勇気を出して先輩の左手をギュ、と握る。

「……俺の一番は、いつだって先輩、ですから……」

そう告げると、俺は恥ずかしくなってしまい、つい顔を背けてしまった。

だけど、この想いだけは変わらない。

先輩に救われたあの日から……これから先も、ずっと……。

「……うん」

先輩は頬を真っ赤に染めながらコクリ、と頷き、俺の右手を強く握り返してくれた。

繋いだ手（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて第四章の氷室先輩編の終了です！
明日と明後日は幕間をお送りし、その次は第五章！
なんと、あの勝手にフェードアウトした、アイツが登場予定！　どうぞお楽しみに！

そして、明日は氷室先輩視点の幕間を朝・昼・夜に分けて一挙五話投稿します！
次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

欲しがる私に、くれたあなた①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
本日は氷室先輩視点の幕間をお送りします！

欲しがる私に、くれたあなた①

■氷室カズラ視点

私は、いつだって何も持っていなかった。

共働きの両親に代わり、四人姉弟妹（きょうだい）の長女として、家の中のことは全てこなしてきた。

弟や妹は可愛いし、私達のために一生懸命に働いてくれているお父さんとお母さんには感謝しかない。

家事なんて、私にとって何一つ嫌だと思ったこともない。

学校が終わると、私は買い物を済ませてから弟と妹を保育園に迎えに行って、晩ご飯の準備をして、三人のお世話をする。

そんな毎日の生活が、まるで私が世界に必要とされているようで、誇らしかった。

だから……それが原因で友達ができなくても、つらくなんてない。

中学一年生の夏、弟と妹をプールに連れて行った時、私に転機が訪れた。

その時、偶然にもクラスメイト数人と遭遇したんだけど。

「ええと……確か、同じクラスだよね？」

そのうちの一人が、苦笑しながら尋ねてきた。

他のクラスメイト達も、その後ろでひそひそと会話をしている。

私は無言で頷くと、そんなクラスメイト達から弟と妹を連れて離れた。

……別に、私のことなんか知ってもらう必要なんてない。私は、弟妹（きょうだい）の世話や家事で忙しいんだから。

そう、言い聞かせて。

ひとしきりプールで遊ばせた後、弟と妹を連れて夕飯の食材を買いにスーパーへと向かう。

その途中、一人の女の子を見かけた。

その女の子は、私と同じ中学生くらいで、ウェーブのかかった赤い髪、真紅の瞳に赤い唇、それらが透き通るような白い肌に映えて、整った顔立ちと相まって、まるで人形のように綺麗だった。

何よりも、私が目を引いたのは、その女の子の凛としたたたずまいだった。

オーラがあるとでもいうのだろうか。通行人は、まるで女の子を避けるように歩き、みんながみんな、そんな彼女に釘付けになっていた。もちろん、この私も。

……クラスメイトにすら名前を憶えてもらえない、そんな存在感のない私とは大違いだった。

「……三人共、早く行きましょう」

これ以上、彼女を見るのがつらくなり、私は急いでその場を離れた。

だって、私は家事や弟妹（きょうだい）の世話があるから、誰からも相手にされなくたって仕方ないって、今まで必死に言い聞かせてきたのに、そ

れを全部否定されてしまったから。

私の存在意義を、全部否定されてしまったから。

買い物を済ませて家に帰ってからも、彼女のことが頭から離れない。

まるでまとわりつくように、こびりつくように残り続け、私の心を抉り続ける。

結局は、オマエのはただの言い訳で、本当に輝いていればみんなが見てくれるのだ、と。

全ての家事が終わり、布団の中で頭を抱えながらうずくまっていた、その時……私の前に、一人の妖精が現れた。

それは、黒色の髪とあの女の子に負けないほど白い肌にドレスを身にまとい、ニコリ、と微笑みながら優雅にカーテシーをした。

一瞬呆けてしまったけど、布団から飛び起き、その妖精をまじまじと眺める。

そして、この時にやっと気づいた。

この妖精は、私の精霊（ガイスト）なのだと。

私はそれが嬉しくて、思わず精霊（ガイスト）に抱きつこうとしてしまったけど、直前で思い留まった。

だって、こんなに小さな妖精を抱きしめてしまったら、壊れてしまうんじゃないかと思って。

とにかく、私はこのことを知ってもらいたくて、部屋を出ると慌ててリビングに向かう。

「お父さん、お母さん！　私……精霊使いになりました！」

すると、お父さんもお母さんも、ものすごく喜んでくれた。
私の精霊を見て、月並みだけど「すごい！」とか「可愛い！」とか言ってくれて、私は得も言われない満足感に包まれた。

私は、あの女の子と同じ……ううん、それ以上に特別だったんだ！

それから、私は正式に精霊使いとして学校にも報告した。
その時に学校がガイストリーダーという機械で精霊のステータス判定をすると、精霊の名前が［スノーホワイト］なのだと知った。

「ふふ……よろしくね、［スノーホワイト］」

そう言って微笑むと、［スノーホワイト］もカーテシーをしながら微笑み返してくれた。
この時の私は、自然に笑顔になれていたと思う。

教室に入ると、クラスメイト達がたくさん群がってきて、褒めてくれたり、羨ましがられたり、今まで見たことのない反応だった。

とはいえ、私もどう話していいのか分からず、結局は思うように会話もままならないままでいると、クラスメイト達はすぐに私から離れた。
要は、もう興味がなくなったんだろう。

でもいい。精霊が発現したからって手のひらを変えて近づいてくるような人達なんて、仲良くなるつもりもないし、むしろ好都合。
それに、私には家事と弟妹の世話もあるんだし、それに……あの

女の子にはない、私だけの精霊（ガイスト）がいるんだから。

それだけで、私の心は満たされた。

欲しがる私に、くれたあなた①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の昼頃更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

欲しがる私に、くれたあなた②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

欲しがる私に、くれたあなた②

■氷室カズラ視点

それからも変わらない中学三年間を経て、私はいよいよ、あの“国立アレイスター学園”に入学する。

というのも、私の精霊（ガイスト）について学校経由で“ＧＳＭＯ（グスモ）”というところから連絡が入り、アレイスター学園に通わないか、との打診を受けたのだ。

その時の私は嬉し過ぎて、二つ返事で受けた。

学費だって免除されるし、何より実家からも近い。これなら弟妹（きょうだい）の面倒も見ることができる。弟も妹も大きくなって、以前のように手がかからなくなったといっても、それでも私がちゃんと見てあげないと。

……ううん、本当はそんなの、ただの後付けの理由。

本音は、あの名門のアレイスター学園にこの私が通えるほど、その存在を認められたことが……特別扱いをされたことが嬉しいのだ。

そして、いよいよ入学式。

私は新品の制服に袖を通し、鏡でチェックする。

うん、おかしなところはない。

「じゃあ、行ってきます！」

「「「「「行ってらっしゃい！」」」」」

家族全員に見送られ、私は足早に学園を目指す。
これから、私の学園生活が始まるんだ！

そんな期待に胸を膨らませながら学園の門をくぐり抜け、お世話になる教室に入った瞬間……私の身体が硬直した。

だって……教室には、三年前のあの日に見た、あの女の子がいたから。

別人だと思いたかった。こんなところにいるはずがないって思いたかった。
だけど……見間違えるはずもなかった。

赤くウェーブのかかった髪に真紅の瞳、赤い唇、それを際立たせるかのような、透き通るような白い肌……。

ああ……あの女の子は、精霊（ガイスト）だって持ち合わせていたんだ。
私は結局、彼女に何一つ敵わないんだ……。

それから、席も隣同士になった私は、いつも彼女……“藤堂サクヤ”さんを見ていた。
もちろん、羨望と嫉妬の眼差しで。

聞いたところによると、彼女は学園長の一人娘らしい。
そして、授業にはあまり出ず、いつもどこかに行っていた。
それをクラスメイト達は、「学園長の娘だから特別扱いなんだろう」とか、「いつもニコリ、ともしないで感じ悪い」とか、口々に噂していた。

かく言う私はといえば、やはりクラスメイト達に馴染めず、彼女ほどではないにしろ、どこか敬遠されていた。

そんなこともあって、私はいつも一人、近所の公園で弟や妹と一緒に遊んだ時に偶然見つけた領域（エリア）の第一階層で、レベル上げに勤しんでいた。

ここの領域（エリア）は強い幽鬼（レブナント）ばかりだけど、一種類だけ、［スノーホワイト］でも確実に倒せる幽鬼（レブナント）がおり、しかも、幽鬼（レブナント）自身のレベルも高いので得られる幽子の量も多い。

これなら、授業にもあまり出ていない彼女の精霊（ガイスト）よりも強くなれるかもしれないと思ったから。

彼女を……超えられると思ったから。

もちろん、［スノーホワイト］のレベル上げだけじゃない。勉強だって私のほうが高い順位に行けるんじゃないか、そう思って頑張った。

だって、彼女は授業にあまり出ていないから。

だけど……現実は残酷だった。

一年生の中間テストで、彼女は学年トップの成績だった。

私は頑張った甲斐もあり、学年三位の成績を収めたけど、なんの慰めにもならない。

だって、私は授業をまともに出ていない彼女に負けたんだから。

だから、私はますます精霊（ガイスト）のレベル上げに取り組んだ。

彼女と一緒に領域（エリア）に入ったりしないから、彼女の精霊（ガイスト）がどれほど強いのかは分からないけど、それでも、誰にも負けないくらいレベルを上げれば、彼女よりも強くなれると信じていたから。

なのに。

「あれえ？　アンタ、精霊（ガイスト）のレベルがそんなに高いのに、ステータス低くない？」

たまたま“グラハム塔”領域（エリア）攻略で一緒になった、同じクラスの佐久間さんに［スノーホワイト］のステータスを見られ、そう指摘された。

「ホラ、私の精霊（ガイスト）のステータスを見なよ」

そう言って見せられたガイストリーダーの画面を見ると、私の［スノーホワイト］とは明らかに違った。

レベルは［スノーホワイト］の半分以下なのに、全てのステータスが彼女の精霊（ガイスト）、［フロスティ］のほうが上だった。

「アハハ！　まあ、ガッカリしないでよ！」

笑いながら私の肩を叩く佐久間さんの瞳は、明らかに私を馬鹿にしていた。

その後も、陰で私の悪口を言っていたし。

でも……私に［スノーホワイト］のレベル上げをやめるという選択肢はなかった。

だったら、誰にも負けないくらい……それこそ、倍じゃきかないほどのレベルを上げて、強くなればいいんだから。そう、言い聞かせて。

毎日、家事や弟妹（きょうだい）の世話をしながら、近所の公園の私だけの領域（エリア）

で、［スノーホワイト］のレベルを上げる日々。

学園に入学してから半年以上が過ぎ……［スノーホワイト］のレベルは五十五になっていた。

欲しがる私に、くれたあなた②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

欲しがる私に、くれたあなた③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

欲しがる私に、くれたあなた③

■氷室カズラ視点

学園に入学してから半年以上が過ぎ、［スノーホワイト］のレベルは五十五になっていた。

だけど、彼女はそんな私の希望をいともたやすく打ち壊してしまった。

彼女の精霊（ガイスト）はクラスチェンジを果たし、もはやこの学園の誰よりも強くなってしまったのだ。

そんな彼女の、クラスチェンジ後の精霊（ガイスト）を見た時は愕然とした。

精霊（ガイスト）が放つ、圧倒的強者のプレッシャーで。

精霊（ガイスト）の、その凛とした美しさで。

「……結局、私では彼女に勝てない、んですね……」

いや、勝てないどころじゃない。

彼女からすれば、私という存在なんて、路傍の石以下だろう。

こんな、私なんか……。

それでも、私は努力をやめることができなかった。

やめてしまったら、私という存在が消えてしまいそうだったから。

三学期になり、彼女と、何故か私まで生徒会長……牧村クニオに生徒会に勧誘された。

正直、私には家事と弟妹（きょうだい）の世話、それにレベル上げがあるから断ろうと考えていた。

だけど、生徒会に入れば、彼女……藤堂サクヤがいる。

同じ生徒会なら、こんな私でも、彼女の中で路傍の石より上に認識してもらえるかもしれない。

結局、そんな淡い期待を抱いてしまい、彼女と一緒に生徒会に入ってしまった。

するとどうだろう。生徒会長の牧村クニオは、生徒会を私物化し、自身の気に入った女子生徒だけを生徒会のメンバーとして加えていたのだ。

その中には、私の精霊（ガイスト）を馬鹿にした、佐久間さんの姿も。

反吐がでた。

私も他の生徒会メンバーと同様、牧村クニオに気に入られたということなのだから。

すると。

「氷室くん……私達の手で、この生徒会を変えないか？」

「っ！？」

彼女にそう切り出され、私は思わず息を飲んだ。

だって、まさか彼女が私の名前を知っていただなんて……って、今はそういう話ではない。

「……どうして、この私に声を掛けたんですか？」

「決まっている。君が、この生徒会に……生徒会長に、明確に嫌悪

感を示しているからだ」

確かに彼女の言う通り、私はこの生徒会に嫌悪感を抱いている。だけど……それが何故、彼女に分かったんだろう。あの連中にも、気づかれていないというのに。

「……そんなの、どうして分かるんですか？」

「簡単だ。君のその瞳が、彼等を明確に拒絶していたからな」

意外だった。

彼女が……あの藤堂サクヤが、こんなに私のことを見ていただなんて。

気がつけば、私は首を縦に振っていた。

それから私達は、牧村クニオと他のメンバーによる不正の証拠を集め、糾弾した。

「貴様等はこの学園の生徒会に相応しくない！　即刻立ち去れ！」

全ての証拠を突き付けられ、牧村クニオとその他のメンバーは悔しそうに唇を噛みながら、生徒会室を出て行った。

「ふう……私達二人だけになってしまったが、これからもよろしく頼む」

そう言って、彼女は右手を差し出し、ニコリ、と微笑んだ。

嬉しかった。

彼女の中で、私は認められたのだと……路傍の石などよりも上な

のだと、そう思ったから。

「はい……よろしくお願いします、会長」

気づけば、私は自然と彼女の右手を取り、握手をしていた。

◇

その後、私の生活はさらに忙しくなり、日々の家事や弟妹（きょうだい）の世話、精霊（ガイスト）のレベル上げに加えて、生徒会の業務まで加わってしまったのだから。

特に、生徒会に関しては牧村クニオや佐久間さん達旧生徒会メンバーが、追放された腹いせに私達の悪い噂を流したことで、学園史上、生徒から最も嫌われる生徒会となってしまった。

でも、そんな扱いや忙しい毎日も嫌いじゃなかった。

だって……学園の誰から疎まれても、認められなくても、少なくとも彼女はこの私を認めてくれたのだから。

そして春を迎え、二年生に進級すると……彼女は生徒会室にあまり来なくなってしまった。

少し調べてみると、彼女は新入生の男の子にご執心のようだった。

嫉妬に似た感情を抱えながらも、私は与えられた役割を淡々とこなし続ける。

すると今度は、ルーシ帝国からの留学生がそこに加わり、彼女は二人の指導に明け暮れているではないか。

生徒会の仕事を放りだして……私の存在を、まるで無視して。

とはいえ、一学期に生徒会が行う仕事なんてほとんどないし、彼女だって全く来ないというわけでもなく、週に一、二度は顔を出してはいる。

でも……彼女の真紅の瞳に、この私は映っていない。

陰鬱（いんうつ）とした気持ちを抱えながら、私は夏休みを過ごし、二学期が始まってしばらくした時のこと。

私はいつものように誰もいない生徒会室に向かうと、扉の前に二人の生徒がたたずんでいた。どうやら生徒会に用があるみたいだ。

「……来客だなんて、珍しいこともあるんですね」

学園中から嫌われている生徒会だ。当然、訪れる生徒もいない。なのに、二人は今まさに扉をノックしようとしていた。

私は二人の背後に近づく。

「失礼ですが、どのようなご用件ですか？」

ノックし終わったタイミングで声を掛けると、二人は驚いた表情を見せながら振り向いた。

女子生徒のほうは容姿が東方人ではなく、明らかに外国人だった。ということは、彼女がルーシ帝国からの留学生、ということだろうか。

では、その隣の男の子が、彼女の……。

生徒会室から出てきた彼女との会話からも、やはりこの彼が件（くだん）の人物でまちがいないようだ。

それが彼……“望月ヨーヘイ”さんだった。

欲しがる私に、くれたあなた③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

欲しがる私に、くれたあなた④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

欲しがる私に、くれたあなた④

■氷室カズラ視点

それが彼……“望月ヨーヘイ”さんだった。

どうやら二人は生徒会に入りたいとのことだし、私は二つ返事で生徒会に入ってもらうよう、藤堂さんに進言した。

学園祭を控え、猫の手を借りたいほど忙しいということもさることながら、あの藤堂サクヤがそこまで興味を持った、望月さんを知りたいと思ったのがその理由だ。

それからというもの、生徒会の業務はスムーズに進行した。

サンドラさんはとても優秀で、生徒会の事務作業をこの短い期間でそつなくこなせるようになった。

望月さんもそうだ。彼は私や藤堂さんが苦手とする関係各所との調整や交渉を上手くまとめ、そのおかげで滞っていた部分が一気に進んだ。

それだけじゃない。気づけば、彼はいつも周りに心を配り、時には手伝い、時には励まし、本当に藤堂さんやサンドラさん、そして私を支えてくれた。

これだけでも、望月さんが素晴らしい人だということが分かる。

この時には、一学期の時に感じていた嫉妬は霧散し、私自身も、彼を気にいっていた。

そんな折、生徒会室にあの牧村クニオが突然やって来た。

しかも、生徒会の旧メンバーを中心とした二十名の署名とともに。
どうやら、牧村クニオの目的は現生徒会のリコールだった。

学園祭を一週間後に控える中、この突然のリコール要求は嫌がらせに他ならない。
私は怒りをにじませて皮肉を言うものの、こんなことが事態の解決になるはずもない。

すると、望月さんとサンドラさんが生徒会室を出て行き、しばらくしてからたくさんの生徒を引き連れてきた。
どうやら、彼等のクラスメイト達のようで、しかも、生徒会の仕事に協力してくれるとのことだ。

……本当に、彼は私には……いえ、藤堂さんすら持ち合わせていない、人望といったものがあるんだろう。
やはり、私なんかとは違う……んでしょうね……。

私は誰にも気づかれないように、キュ、と胸襟を握りしめた。
苦しそうにしていた、望月さんに気づこうともせずに。

それからは、望月さんのクラスメイト達の協力もあって急ピッチで進んだ。
このままのペースなら、無事、信任投票の準備も学園祭も、両方間に合いそうだ。

そのことに安堵しつつ迎えた土曜日。
まさか、家の前で望月さんと出会うことになるとは思わなかった。
しかも、うちの弟を背負いながら。

聞いたところ、弟のタカシが望月さんと出合い頭にぶつかってし

まい、足をくじいてしまったようだ。多分、タカシがよそ見をしていたんだろう。

私はお礼とお詫びを兼ねて、望月さんを家の中へと招き入れる。お茶とお菓子を持って彼の待つ部屋に入ると……なんと、ミャー太が望月さんに懐いているではないですか。

その時、私は激しい嫉妬を覚えましたとも、ええ。

まあ、そんな嫉妬も彼の精霊（ガイスト）……［シン］さんを見てしまったら、それどころではなかったけど。

だって、召喚もしていないのに精霊（ガイスト）が現れ、しかも会話ができるだなんて……。

ひょっとしたらそういったスキルがあるのかと思い、望月さんにステータスを見せてもらうと、私は声を失った。

ガイストリーダーの画面には、見たこともないようなステータスが表示されていた。特に『敏捷』に至っては、“ＳＳＳ”となっており、まさに規格外であることを証明していた。

……結局、彼女は才能だけを見ているのですね。

今まで必死で努力を重ねても、遥か先にある背中を追いかけても、彼女が見ているのは、彼女に匹敵する才能の持ち主だけ。

私は、やっぱり彼女にとって路傍の石以下でしかなかったのだ。

そう思った瞬間、私の中で何かが崩れ落ちた。

もう……どうなってもいい、と。

◇

「クフ……やあ、待ってたよ」
「……」
月曜日の放課後、私は校舎裏で牧村クニオに会いに来ていた。
というのも、この男から連絡を受けたのだ。「明日の信任投票のことで、協力して欲しいことがある」、と。
「……それで、協力とはどういうことですか？」
「クフ、簡単だよ。明日の信任投票で、不信任になるようにちょっと細工をして欲しいだけさ。もちろん、相応のお礼はさせてもらうとも」
やはり、クズはクズ、ですね。
「……理由を尋ねても？」
「クハ！　簡単だよ！　僕は、あの藤堂サクヤに痛い目に遭わせたいのと、あの男……望月ヨーヘイを生徒会から追い出したいからだよ！」
口の端を吊り上げ、牧村クニオが下品に語る。
だけど、藤堂さんはともかく、どうして望月さんが？
彼と牧村クニオの間に、何かあるんだろうか……って、そんなこと、私にはどうでもいいこと、ですね……。
「クフ、それで君は、どんな見返りが欲しい？」
「見返り、ですか……」
……本当は、見返りなんてどうでもいいですが、せっかくですので彼女の場所を奪うことにしましょう。

「でしたら、生徒会長の椅子を」
「クハ！　言うねえ！　いいとも！　僕の後任は君にするよ！」
「ありがとうございます。それで、私は何をすればいいんですか？」
そう尋ねると、牧村クニオは一層口の端を吊り上げた。
「クフ、明日の信任投票の開票、まだ誰が行うのか決まってないのだろう？」
「ええ、それが？」
「……クフフ。だから、明日は君が開票を行うようにするんだ。そうすれば、票の操作なんて簡単だろう？」
……ああ、そういうことか。
この私に、票を改ざんして不信任になるように操作をしろ、と。
「……そうですね」
私は半ば投げやりに返事した。
「クフ、君が利口でよかったよ。ああ、もちろん次の生徒会長には君を指名するから、安心したまえ」
「ありがとう、ございます……」
「クハハ！　だけど君、ここまでしてあの藤堂サクヤから生徒会長の座を奪いたいのかい？　僕を追い出した時は、そこまで彼女を嫌っているとは思わなかったけど？」
「……余計なお世話ですよ。ですが……これで、見てもらえます」
「クフ、これは失敬」
吐き捨てるようにそう言ってから気づく。

ああ……私はまだ、彼女に見て欲しいのだ、と。

彼女が私を見ることなんて、無いというのに。

欲しがる私に、くれたあなた④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

欲しがる私に、くれたあなた⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

欲しがる私に、くれたあなた⑤

■氷室カズラ視点

そして迎えた信任投票。

……結果は、不正の発覚により無効。

当然、私と牧村クニオ、そして旧生徒会メンバーは、学園祭が終われば学園から処分を受けることになる。

私は生徒会室から立ち去り、学園を出ようとすると。

「氷室先輩！」

振り返ると、望月さんとサンドラさん、そして……藤堂さんがいた。

「俺、気になって仕方ないんですよ。氷室先輩は、どうしてこんな真似をしたんですか？　生徒会が嫌いなんですか？」

彼は、真面目な普段とは打って変わり、何故かふざけた態度を取っていた。

あんな姿、この私に一度も見せたことがないのに。

「別に……生徒会やあなた達が嫌いなわけでは、ありません」

生徒会のメンバーでなくなれば、彼にとって私なんてその程度の価値しかないんだろう。

そんな彼の態度が気に入らなかった私は、吐き捨てるようにそう言い放った。

「へえー。んじゃ、昨日アイツが言ったみたいに、生徒会長になりたかったから、ですか？」

「……」

彼の問い掛けに、私は一切答えない。答えるつもりはない。

私の気持ちなんて、何一つ理解していないくせに……。

「まあ……氷室先輩が生徒会長になったところで、絶対に藤堂先輩みたいにはなれませんけどね」

「っ！」

「大体、こんな卑怯な手を使って藤堂先輩を生徒会長から引きずり降ろしたところで、誰が氷室先輩についてくるっていうんですか？強さだって、藤堂先輩よりも劣るっていうのに」

望月さんのその言葉を聞いた瞬間……私の視界が黒く染まった。

◇

『……氷室くん！　氷室くん！』

「え……あ、はい」

スマホの向こう側で呼びかける藤堂さんの声で、私はようやく我に返った。

ですが……ふふ、あの時の望月さんは、わざと私を煽って、そして、藤堂さんとお互い本音で話し合える機会を作ろうとしてくれてたんですね。

今は、望月さんの想いがハッキリと分かります。

『む……氷室くん、今、望月くんのことを考えていただろう……』
「いけませんか？」
『むむむむ！？　い、いけなくはないが……』

不機嫌そうに尋ねる藤堂さんにそう返すと、彼女は唸りながら口ごもってしまった。
あの藤堂さんも、望月さんのことになるとこうも変わってしまうんですね。

……私は、彼女の背中を真っ直ぐに追い掛けているようで、本当は何も見えてなかったんですね……。

『それで……も、望月くんと、その、な、何もなかったのだよな？　そうだな？　な！』

さて……なんて答えましょうか。
こんなに焦る藤堂さんをからかいたくなる一方で、私は望月さんに対して誠実でありたいとも思っている。

だって、望月さんはずっと、私達を気遣って、私達のことを想って行動してくれていたんですから……。

だから。

「……実は、少しハプニングがあって、望月さんが私の胸に顔をうずめてしまいました」
『なななななな！？』

藤堂さんの絶叫が響き、私は思わずスマホを耳から離す。

『それはどういうことだ!?　なんでそんなことになるんだ!?』
「あれは本当に不可抗力だったので、仕方ありません。私にも、もちろん彼にも非はありませんよ」
『むううううううううう！』

……まあ、［シン］さんには非がありましたが。

「では、単刀直入にお聞きしますが、藤堂さんは望月さんと付き合っているんですか？」
『あう!?　ななな、何を言ってるんだ!?　わ、私が、その、もも、望月くんと付き合ってるなどと……!?』

あ……これはまだ付き合ってませんね。

「ふふ……安心しました」
『ああ、安心だと!?　それはどういう意味なのだ!?』
「もちろん、言葉通りの意味です」
『あうあうあう!?』

今は、望月さんの想いは藤堂さんにあるかもしれない。
でも……まだ私にも、チャンスはあるみたいです。

私だって、素敵な男の子と恋をしたい。
それこそ、望月さんのような優しくて、ひたむきで、素敵な男の子と。

「藤堂さん」
『あう!?　な、なんだ!?』
「私……絶対に譲る気はありませんから」

『あうあうあうあうあうあうあうあう！？』

藤堂さんに宣戦布告をすると、私は通話終了のボタンをタップした。

「ふう……」

深く息を吐き、天井を見上げる。

望月さん……。

藤堂さんを盲目的に見ることしかできなかった私に、前に進む機会をくれた人。

弱く、何もなかった私を、可能性のその先へ連れて行ってくれた人。

「［ポリアフ］」

私は［ポリアフ］を召喚すると、彼女は私の肩に座り、頬ずりした。

「ねえ……私、大好きな人がいるの」

『……』

「だから……一緒に強くなって、その人を支えるのを、手伝ってくれる？」

『！　（コクコク！）』

「ふふ……ありがとう」

望月さん……今度は私が、あなたを支えてみせます。

そして。

「必ず、あなたを振り向かせてみせますから」

笑顔の彼を思い浮かべ、そう、堅く誓った。

欲しがる私に、くれたあなた⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて氷室先輩視点の幕間は終わりです！

明日もまた、幕間をお送りします！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

声が、聴きたい（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

声が、聴きたい

「ふむ……サクヤ、また柱の一体を倒したのか？」

お父様の研究所での定期検査中、データを見たお父様が尋ねる。

「はい。今度は学園内の校門前で柱……“モズグズ”が出現しましたのでこれと交戦、撃破に成功しました」

「っ！？　待て、学園の校門前に出現しただと！？」

私の報告を聞き、お父様が目を白黒させる。

それはそうだろう。柱は領域（エリア）内で現れるものだとばかり考えていたお父様にとっては寝耳に水であるし、かくいう私も、あの時は心の中で驚いたものだ。

といっても、あの時の私はそれ以上に氷室くんが闇堕ちしたことにショックを受けていたが、な。

「しかしそうなると……学園内のセキュリティの強化と、柱の出現条件の洗い直しをせねば……！」

そう言うと、お父様はベッドで管に繋がれたままの私を置き去りにし、そのままどこかへと立ち去ってしまった。

恐らく、学園内に“ＧＳＭＯ（グスモ）”を配置するよう、政府に要請するのだろう。

元々、“ＧＳＭＯ（グスモ）”もお父様が創設された機関。それに、秘密裏に行っているこの研究も、政府としては無用なトラブルで公（おおやけ）にはしたくないはず。

そうでなければこんな非人道的な研究、到底許されるはずもないし、研究に必要な資金や人材、設備など、ここまで用意できるはずがないというものだ。

……まあ、そんなことはこの私には関係ないが、な。

そんなことを考えながら、私は思わず苦笑していると。

「サクヤさん、体調が思わしくないようなところなどはありますか？」

ニコリ、と微笑みながら問い掛けてきた彼は、“高坂（こうさか）マサノブ”。

この研究所の副所長を務めており、お父様の部下……いや、弟子と言ったほうが正しいか。

「問題ありません。ですので、高坂さんも仕事に戻られては？」

「ウーン……つれないですね」

そう言うと、高坂さんは苦笑した。

正直……私はこの高坂さんが苦手だ。

子どもの頃は、お父様とお母様が忙しい代わりに、研究所に来た時はよく相手してくれていたのを覚えているが、それでも、この何を考えているのか分からないようなヘラヘラした態度が気に入らん。

全く……望月くんを見習って欲しいものだ。

彼なら、普段は軽率な態度を見せることも少なくはないが、少なくはない……少なく……。

むううううううう！　そうだ！　彼は一体何なのだ！
全く！　今回も考え無しに氷室くんに必要以上に優しくして！
そのせいで氷室くんは、完全に望月くんのことを……！
それだけではない！　いつの間にか、三年の鈴原先輩や和気先輩まで彼のことを気に入ってしまって……！
た、ただでさえサンドラという最大のライバルがいるのに、これでは……！

「えーと……サクヤさん？」
「むううう……って、あ……」
「あはは、そんな表情のサクヤさんは初めてみたよ」
「……」
……別に、私は高坂さんに見せた覚えはない。
そもそも、全部望月くんが悪いのだ。

望月くんが、全部……。

「まあ、私はサクヤさんからよく思われていないみたいだし、そろそろ退散するよ」

そう言うと、高坂さんは手をヒラヒラさせながら、その場を……
「ああ、そうそう」……まだ何かあるのか……？

「所長からの指示で、“ウルズの泥水”の供給量がさらに倍になったよ」
「っ！？」

そんな……！

「まあ、順調に柱から吸収できているとはいえ、さすがにこの供給量だと足らないからね。一応、私から進言しておいたんだよ」

この男……余計なことを……っ！

せっかくの、望月くんの想いを踏みにじるような、そんな真似を！

「あはは……そんなに睨まないでよ。君だって、あの人に逢いたいでしょ？　“ツクヨ”さんに」

「……」

「まあそういうことで、サクヤさんには悪いけどこれからも協力して欲しい。私ももちろん、所長や君を全力で支えるから、ね？」

キュ、と唇を噛みながら睨む私の頭を撫でると、高坂さんは今度こそこの場を去って行った。

「くそ……悔しい、なあ……！」

気づけば、私の瞳から零れた涙が頬を伝っていた。

今の状況を、どうすることもできない自分自身の不甲斐なさに。

そして、こんな私を救おうと捧げてくれた、望月くんへの申し訳なさに。

私は左手の“シルウィアヌスの指輪”に、そっと触れる。

学園祭の打ち上げの帰り、彼は私の左手を握ってくれた。

彼の一番は、私だって言ってくれた。

でも、私はそんな彼に何も返せないのだ。何も報いることができないのだ。

「望月くんの声、聴きたいな……」

そう呟くと、私はこのやるせない想いを抑えつけるかのように、胸の上で、ギュ、と拳を握った。

◇

『あはは、それでですね……』

研究所から帰ってくると、私は真っ先に望月くんに電話を掛けた。すると彼はたった二コールで出てくれて、その後は嬉しそうに他愛のない話をする。

ああ……彼の声を聴くだけで、こんなにも満たされる。

『それで学園祭も終わりましたし、今度は氷室先輩を“アルカトラズ”領域（エリア）と“アトランティス”領域（エリア）に連れて行きたいんですけど……』

望月くんの提案に、私は思わず口を尖らせてしまう。

せっかく楽しくおしゃべりをしていたのに、何故ここで氷室くんの話をするのだ……。

『えーと、先輩？』

「あう……い、いや、何でもない……しかしそれだと、望月くんは氷室くんを、その……チームに加える、つもり……なのか……？」

うう……今の尋ね方は、少し感じが悪かっただろうか……。

彼は、こんな私に愛想を尽かしたりしないだろうか……。

『……ええ。氷室先輩のクラスチェンジした精霊（ガイスト）……［ポリアフ］には、幽鬼（レブナント）や敵対する精霊（ガイスト）を解析するスキルがあります。それと、後で聞きましたが、回復スキルも』

「そうか……確かにそれは、近接タイプばかりのうちのチームには、必要不可欠だな……」

そう言われてしまうと、私としても納得せざるを得ない。

それに、これはただの私のワガママ、だからな……。

『それに』

「……それに？」

『氷室先輩が加われば、それだけ先輩を守れますから』

「っ！」

ああ……本当に、君は……。

いつだって君は、私を何よりも大切に想ってくれるんだな……。

「ふふ……一応、私は学園最強なのだが、な」

『はは……ですけど、その称号はいつか、この俺が貰いますから。そして、俺があなたを守るんです』

「うん……」

君の声が、聴けてよかった。

君の想いを、聞けてよかった。

――このスマホの向こうにいる君が、いつも私を幸せにしてくれる。

声が、聴きたい（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

突然のお呼ばれ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

突然のお呼ばれ

「ええとー……」
「はい、何ですか？」

俺は隣を歩く氷室先輩におずおずと尋ねるけど、氷室先輩は相も変わらず澄ました表情で尋ね返す。
それにしても、なんで俺、氷室先輩と一緒に帰ってるんですかね？

「しかし、会長……いえ、藤堂さんも災難でしたね。学園長に呼ばれてしまい、一緒に帰れなくなってしまったんですから……ふふ」

いや、怖いですよ氷室先輩！？
というか、普段無表情の人が嗤ったりすると、ここまで怖いものなのか！？

「あ、そうだ」
「っ！？」

氷室先輩がポン、と手を叩いた瞬間、俺は思わずビクッとなる。
な、何かよからぬことでも考えてるんじゃ……。

「せっかくですので家に寄っていきませんか？　実はタカシやニコとミコも、あなたに会いたがっているんです……不本意ながら、ミャー太も」
「は、はあ……」

まあ、確かにあれ以来、少年とは会っていなかったな。
それに少年の怪我も、気にならないといえば嘘になる。

「もし来ていただければ、アイスをご馳走しますよ？」
『はう！　行く！　行くのです！　当然行くのです！　絶対行くのです！』
「うお！？」

突然出てきた［シン］が、俺の肩越しにこれ以上ないほど右手を伸ばす。
というか氷室先輩……まさか［シン］を懐柔しにかかるとは……て、手ごわい。

「ふふ、［シン］さんもああ言ってますし……」
「は、はあ……じゃあ、お言葉に甘えて……」

ウーン……なんだか、氷室先輩に上手く絡め取られているような気がする……。

そして俺達は雑談しているうちに、あっという間に氷室先輩の家に着くと。

「ただいま」
「お帰りなさーい……って、あー！　兄ちゃんだ！」
「ホントだー！　お兄ちゃんだ！」
「［シン］ちゃんもだー！」

玄関に入るなり、出迎えてくれた弟妹（きょうだい）達が、俺と［シン］を指差しながら笑顔を見せた。

「おう！　ところで少年、あれから足の怪我は大丈夫か！」
「へへーん！　もうすっかり大丈夫だよ！」
「そっか！　それはよかったな！」

そう言うと、俺は少年の頭を撫でてやった。
すると少年もまんざらではないようで、嬉しそうにしつつも照れくさそうにしながら、指で鼻をこすった。

『はうー……ナデナデは［シン］の特権なのです……』
「オイオイ、そんなことくらいで拗ねるなよ……」

少年の頭を撫でたことで落ち込んでしまった［シン］に、俺は苦笑しながら撫でてやると。

『えへへー……だからマスターは大好きなのです』

うん、もうすっかり機嫌が良くなり、すぐに目を細めている。

「あー！　ニコもー！」
「ミコもー！」
「はは、はいはい」

結局、双子の妹二人にもねだられ、俺は代わるがわる頭を撫でることになった……って。

「えーと……氷室先輩？」
「……いえ、何でもありません」

頭をずい、と差し出してきた氷室先輩におそるおそる尋ねると、我に返ったのか、氷室先輩はそそくさと家の奥へと入っていった。

うーむ、氷室先輩も撫でて欲しかったのかな……。

「ミャー」

「お、ミャー太。お前も撫でて欲しいのか？」

そう言うと、俺はミャー太の頭を撫でてからの、顎をお腹を撫でてやった。はは、気持ちよさそうにしやがって。

すると。

『マスター！　［シン］がいるのに、ヒドイのです！　ヒドイのです！』

「……私のミャー太が……ミャー太が……」

えーと……二人共、そんな瞳で見るの、やめてくれるかなあ……。

◇

「「「「ご馳走様でした！」」」」

『はうはうはうはう！　やっぱりアイス最強伝説なのです！』

結局、俺は先輩の家で夕食をご馳走になってしまった……。

［シン］は［シン］で、アイスを三本も食べでご満悦である。

「へへー！　姉ちゃんのご飯、美味いだろ！」

「おう！」

少年の言葉に、俺は満面の笑みとサムズアップで返す。

いや、本当に先輩のご飯は美味しかった。

豆腐の味噌汁はちゃんとダシが効いてて、味噌の加減もちょうどいいし、何と言っても豚の生姜焼きなんて、男なら誰しも好きに決まってる。もちろん、味付けも最高だぞ？
付け合わせのポテサラだって、ごはん三杯はいけるし……うん、控えめに言って最高だ！

「望月さんのお口に合って、よかったです」
「何言ってるんですか！　というか、本当に氷室先輩ってすごいですよね！　学校の成績は良いし、生徒会の仕事も完璧にこなすし、オマケに料理まで非の打ちどころがないだなんて！」
「……そうですか」

手放しで褒める俺に一言だけ告げると、何故か氷室先輩はプイ、と顔を背けてしまった。
俺……なにか先輩を不快にさせるようなこと言ったのかな……。

「あははー！　姉ちゃんが照れるなんて珍しー！」

そう言いながら、少年は氷室先輩を指差しながら笑う。
見ると、ニコちゃんとミコちゃんも笑っていた。

「タカシ、それ以上言うと、明日からピーマン増量にしますよ？」
「ヒイイ！？　姉ちゃんヒドイ！」

ははは……なんかこの雰囲気、いいな……。

「ねえねえ、お兄ちゃん。うちのお姉ちゃんって、優良物件だと思わない？」

えーと、ニコちゃん？

「そうそう、お姉ちゃんとくっついちゃえば、こんな美味しいご飯が朝昼晩と食べられるし、お姉ちゃん……すっごい美人だよ？」
「うぐぅ！？」
ミコちゃん……悔しいけど、その言葉には完全同意だ。
「コ、コラ……あまり望月さんをからかってはいけません」
そうやって氷室先輩は二人をたしなめるけど……うん、普段無表情の氷室先輩の口元がゆるっゆるだ。
そして、俺は気づく。
俺……なんで氷室先輩の恋愛イベを順調にこなしてるんだよ。
その時。
――ピンポーン。
「あれー、お客さんだ！」
「こんな時間に、珍しいですね……」
スッ、と席を立つと、氷室先輩が玄関に向かった。
「ここ、ここに望月くんがいるのだろう！　わ、私には分かっているのだからな！」
……なんと、来訪者は先輩だった。
そして。

「ホ、ホラ！　やっぱりいるじゃないか！」
「ええ、そうですね……（チッ）」
家に上がってきた先輩が眉根を寄せながら俺を指差し、氷室先輩はシレっと舌打ちをした。
『んふふー、これは面白いことになってきた……って、や、やだなあ関姉さまもリア姉さまも！　も、もちろん冗談なのです！』
面白がっていた［シン］も、［関聖帝君］と［ポリアフ］に睨まれ、アイスをかじりながら小さくなっていた。
「ハア……ま、いっか」
俺はみんなを眺めながら、思わず苦笑した。

突然のお呼ばれ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お弁当決戦！　前編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お弁当決戦！　前編

氷室先輩の家にお呼ばれした次の日の朝。

いつものように、俺は先輩の待つ十字路を目指す。

……というか、先輩が氷室先輩の家に来た時のあのやり取りが脳裏にこびりついて離れない。

◇

「むむ！　ひょっとして望月くん！　君は氷室くんの手作り晩ご飯を食べた、とでもいうのか！」

「え、ええ、まあ……っ！？」

先輩がずい、と詰め寄り、俺は思わず仰け反ってしまう。

というか先輩……すごくいい匂いがする……それに、そんな表情の先輩がすごく可愛くてて……って！？

「藤堂さん……少し、望月さんに馴れ馴れし過ぎはしませんか？」

「氷室くん……それはどういう意味だ？」

割って入った氷室先輩が、先輩を睨みつけると、先輩も負けじと睨み返す。

というか、なんでこの二人が一触即発になってるんだよ！？

「言葉通りの意味ですよ。それに、望月さんは私がご招待し、私のご飯を食べていただいたんです。それがなにか問題でも？」
「むう……フ、フン！　食べ物で釣ろうなどと、生徒会副会長とあろうものが姑息な策を弄するものだな！」
いやいや、普通にご馳走になっただけなんですけど？
何なら、先輩の家でも何度もご馳走になってますよね？
「ふふ……でしたら、藤堂さんも望月さんに夕食を振舞われては？
もちろん、ご自身の手料理で」
「むううううううううう！」
ああ……氷室先輩、なんでそんなに藤堂先輩に絡むんですかあ……。
というか、闇堕ちする前でもここまで敵視したことなかったでしょ？
「……いいだろう」
「へ……？」
「こうなったら、勝負しようじゃないか！　この私が本気を出せば、望月くんの胃袋など、簡単につかんでみせるとも！」
「ふふ……いいですよ？　この際ですから、目障りな人は全員叩き潰して差し上げます」
いやいやいや！？　氷室先輩も、なんでそんな口の端を吊り上げてるんですか！？
『ムフー！　これは面白いことになってきたのです！　なら、この［シン］に提案があるのです！』

というか［シン］！？　頼むから余計な真似すんな！

『今回はカズ姉さまの美味しすぎる料理が発端なのです！　なら……』

「「「……なら？」」」

『なら！　料理で勝負するのです！　明日のお昼ご飯、各自でお弁当を持ち寄って、マスターを一番満足させた人が勝ちなのです！』

「「「っ！？」」」

はあああ！？　というか、なんで昼メシ勝負になってんだよ！？　しかも、俺を満足させたら勝ち！？　つまりは俺にジャッジしろと！？

「あ、あははー……当然ですけど、二人共こんなの受けませんよねー……？」

俺はチラリ、と二人の表情を窺うと。

「ふ、ふふ……面白い！　こうなったら、この私の真の実力を見せてやる！」

「ふふ……ええ、完膚なきまでに叩きのめして差し上げますよ？」

ヒイイ！？　この二人、ガチだ！

真紅の瞳と藍色の瞳が睨み合う中、俺はただただ震えていた……。

◇

「ハア……絶対に、今日の昼休みは波乱になるぞー……」

などと憂鬱な気分で十字路に差し掛かると。

「あ……ふふ、おはよう」

「先輩！　おはようございます！」

いつもと変わらない様子の先輩が、俺を待っていてくれた。

ふう……どうやら昨日みたいなピリピリした雰囲気はなさそうだ。

「時に望月くん……今日はもちろん、お腹を空かせてきただろうな？」

「へ……？」

イヤイヤ、お腹を空かせたもなにも、まだ早朝なんですけど？

朝メシ、食べたばっかりなんですけど！？

「ふふ……今日は楽しみにしたまえ。この私が、カナエさん直伝のお弁当を提供するとも！」

グッ！　と拳を握りしめ、先輩が不敵な笑みを浮かべる。

えーと……不安しかないんですけど……。

◇

――キーンコーン。

いよいよ昼休みになり、俺は決戦の舞台となる中庭へと向かう……んだけど。

「フフ……ヨーヘイ、楽しみにしてるんですのヨ！」

「あはは！　勝つのはボクだよ！」

えーと……なんでサンドラと立花まで張り切ってるんですかね？
そして、その手に持つ袋はなんですかね？

「ふふ、待っていたよ」
「ええ……この私に、全員打ちのめされるとも知らずに」
「なんだと！」

中庭に着くと……ハア、やっぱり藤堂先輩と氷室先輩は一触即発だし……長い昼休みになりそうだ……。

『ムフー！　とんでもないバトルロイヤルなのです！　まさに血で血を洗う戦いが始まるのです！』

いや、悪いが［シン］よ。そんな戦いは永遠に始まらないから。

「……いつまでも睨み合っていては進みませんので、今から誰のお弁当が望月さんの胃袋をつかむか、勝負といきましょうか」
「うむ！　では順番はどうする？」
「き、決まってますワ！　まずはワタクシから……「ちょっと待ってよ！　こんなの、一番最初が有利に決まってるじゃないか！」」

サンドラが真っ先に手を挙げると、立花がそれに待ったをかける。
まあ、確かに立花の言う通り、最初は俺もお腹が空いてるから美味しく食べられる自信があるけど、最後になるとお腹が膨れて、味とか気にする余裕すらないかもしれないし。

ということで。

「「「「ジャンケン！　ポン！」」」」

四人はジャンケンを始めたけど、あいこばかりでなかなか決着がつかない……と思ってたら、先輩が輪の中から出てきた。それも、あからさまにガッカリした様子で。

結局、順番は立花、氷室先輩、サンドラ、先輩の順になった。

嬉々としてはしゃぐ立花に、それを悔しそうに見つめるサンドラ。

氷室先輩は余裕の表情で、先輩は……うん、ご愁傷様です。

そして……アレイスター学園の中庭でお弁当決戦が、今、火蓋を切った。

お弁当決戦！　前編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お弁当決戦！　後編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お弁当決戦！　後編

「さあ！　ボクのお弁当を食べてよ！」

そう言って、先陣を切った立花が袋の中から可愛らしいバスケットを取り出し、蓋を開けると。

「おお……！」

意外にも、立花は玉子やハムのサンドイッチに唐揚げ、サラダと、非常にまともなラインナップだった。というか、女子力高い。

「えへへ、どうぞ召し上がれ！」

「お、おう、いただきま……」

俺は玉子サンドを手に取ると、一気にかぶりつこうとして、視界に一人の男が入ってきた。

加隈……お前、なんでそんな涙を流しながらコッチを睨んでるんだよ……。

というか、そんなに立花の弁当が気になるんなら、プラーミャみたいに合流すればいいのに。知らんけど。

気を取り直し、今度こそ玉子サンドにかぶりつくと。

「美味っ！　なんだよコレ！　コショウが効いててメッチャ美味い！」

「ホント！　良かったあ……！」

俺の様子を見て、立花がホッと胸を撫で下ろしながら笑顔を浮かべる。
もし立花を男子と知らなかったら、間違いなく惚れるだろうな。
俺は違うけど。

「おう！　このハムサンドもイケルし、唐揚げもジューシーでなかなか……！」
「うん！　いっぱい食べてね！」

気づけば、俺はまだ三人の弁当を食べないといけないのに、全部たいらげてしまった。
本当は、一人ずつ少し味見をして、最後に一気に食べるつもりをしてたんだけどなあ……。
立花の弁当の魔力、恐るべし。

「ふふーん、これはボクの勝ちかなあ？」

立花はまるで勝者になったかのように口の端を持ち上げ、三人を見やった。
だけど、さすがにそれは気が早いってものだろう。

だって。

「次は私の番ですね」

そう、二番手は氷室先輩。
昨日、氷室先輩の家で夕食をご馳走になったから俺は知っている。
氷室先輩の、その圧倒的な料理スキルを。

「望月さん、どうぞ」

そう言って差し出されたお弁当は……今度は打って変わって和食なお弁当だった。
だし巻き玉子にほうれん草のお浸し、鶏のつみれあんかけに焼き鮭だ。

「では、いただきます！」

俺は手を合わせ、箸でだし巻き玉子をつまむと、それを口に含ん……うお！？　なんだコレ！？

「ヤバイ……超美味しい」
「ありがとうございます」

いや、このだし巻き玉子、本気（マジ）でヤバイ。
口に含んだ瞬間、柔らかいだし巻き玉子が口いっぱいに広がって、その味で埋め尽くしてきた。こんなの、反則だろ！

「つ、次は鶏のつみれあんかけを……っ！」

ヤバイ、これもヤバイ。
サクッとした歯ごたえは最初だけで、中はふわふわと柔らかく、それが少し甘酸っぱい餡掛けとマッチして、俺の箸が止まらない！

「くそう……！　このほうれん草のお浸しも最高かよ……！」

箸休めのお浸しも、その優しい味が鶏つみれの味を洗い流し、俺の舌をリセットする。

「焼き鮭……美味しい……」

うん……ここまでくると、俺の語彙力どうなの？　って言いたくなるけど、もう俺にはこんな言葉くらいしか残されていないのだ。

「ハア……ご馳走さまでした……」

「はい、お粗末さまでした」

あー……もう誰の弁当が一番とか、どうでもいいんじゃないかな？　というか氷室先輩の優勝以外、あり得ないだろ。

「まま、待つんですのヨ！　まだワタクシが残ってますワ！」

「そそ、そうだぞ！　最後はこの私なのだぞ！」

……そうだった。まだ二つも弁当を食べないといけないんだった……。

「デ、デハ！　これがワタクシのお弁当ですわヨ！」

そう言って袋から取り出したサンドラのお弁当……というか、アルミホイルに包まれた棒？

「ええと、コレ……？」

「そうですワ！　ルーシの男子ならみんな大好きな、“シャシリク”ですわヨ！」

「そ、そう……」

腰に手を当て、胸を張って自慢げに語るサンドラ。

俺もおそるおそるアルミホイルをめくると……うん、串に刺さったお肉だった。いわゆるシシカバブってヤツだよね？

「これはラム肉を串に刺し、いろんなスパイスでこんがり美味しく焼いたものなんですのヨ！」
「お、おう……いただきます……」
俺は自信満々に語るサンドラに勧められるまま、そのシャシリクにかぶりつく。
いや、俺も肉好きだし、実際香ばしくて美味いよ？　美味いんだけどさあ……。
「なあ、サンドラ……これは果たして、弁当って呼べる代物なのか？」
「ナニ！　サンドラのお弁当が気に入らないっていうノ！」
「いや、そういうわけじゃ……」
俺の素朴な疑問に、傍にいたプラーミャが激怒した。
いや、じゃあお前、この肉串を弁当って認識できるのかよ。
その後も、俺は首を捻りながらも、シャシリクを全部平らげた。
というか、弁当二つに肉串は俺のお腹のキャパを軽々オーバーしてるんだけど。
「さあ！　最後はこの私だな！」
ずい、と身を乗り出し、先輩はお弁当を広げる。
そして、その蓋を開けると……っ！？
「ふふ……どうだ？」
「ええとー、ど、どうだ、というのは……？」
俺は嬉しそうに自慢する先輩におずおずと尋ねる。

いや、だってコレ……白ごはんの上に、真っ黒くて丸い物体が思いっ切り鎮座してるんだけど。
オマケに、その真っ黒い物体に不思議な色のソースがかかっていて、せっかくの白ごはんにまで浸食して台無しになってたりもする。

「ん？　決まっている、これこそ私特製のハンバーグ弁当だ！」
「「「「「ハ、ハンバーグ！？」」」」」

先輩を除く俺達五人は、一斉に声を上げた。
いや、ハンバーグ！？　これが！？

「さあ遠慮はいらん！　望月くん、食べてくれ！」
「い、いただきます……」

俺はおそるおそる、先輩がハンバーグだとのたまう真っ黒な物体に箸を入れ……って、硬い！？
どうやらこの物体、焦げすぎて表面が炭化し、俺の箸を拒むほどに硬くなってしまっているみたいだ。
それでもなお、俺は無理やり箸で一口サイズに切り分けると、それを口に含んだ……っ！？

「ど、どうだ……？」

先輩が心配そうな表情で尋ねる。
その真紅の瞳は、期待と不安が入り混じったような色をしていた。

「お、美味しい……です……」
「！　そ、そうか！」

先輩は、ぱあ、と満面の笑顔を浮かべる。それこそ、思わず見惚

れて箸が止まってしまうほどに。
……まあ、止まったのは違う理由だけど。

と、ところで。

「せ、先輩、つかぬ事をお伺いしますけど、このソース、どうやって作りました……？」

俺は先輩におそるおそる尋ねる。
というのも、このソース、なんだかメッチャ甘くて苦いのだ。決して美味いわけじゃない。

「ん？　それはカラメルというものだ。ほら、カラメルは美味いだろう？」
「「「「「カラメル！？」」」」」

俺達五人は、また驚きの声を上げる。
カラメルって言ったら、プリンのあの黒いところのヤツだよな！？　なんでそんなもの、ハンバーグにかけるんだよ！？　しかも、カラメルが白ごはんにもかかってるんだぞ！？

「ふふ……こんなに気に入ってくれて嬉しいよ……」
「ソ、ソウデスネ……」

結局、俺は心を無にして先輩のハンバーグなナニカを平らげ、その場に突っ伏した。偉いぞ、俺。

「そ、それデ！　結局、一番は誰なんですノ！」
「そ、そうだよ！　ボクのお弁当が一番だよね！」
「まあ、順当に考えれば、私のお弁当だとは思いますが」

「むううううううう！　わ、私のハンバーグ弁当だって！」

あー……と、とりあえず順位発表だけしておくかー……そして、保健室に行こう。

「い、一番美味しかったお弁当……ですが……」

「「「「……」」」」

四人が固唾を飲んで俺の言葉を待つ。

そして。

「……氷室先輩の、お弁当です」

「……まあ、順当ですね」

驚いた表情の三人を尻目に、結果を聞いた氷室先輩は表情を一切変えずにそう呟いた。

でも氷室先輩……無意識に小さくガッツポーズしてますよ？

「な、なんでヨ！　男の子はみんなお肉好きでショ！」

納得のいかないプラーミャが抗議の声を上げる。

というか、肉さえ与えれば男子がすべからく満足すると思うなよ？

「……理由を、聞かせてもらえないだろうか」

あからさまに落ち込んだ様子の先輩が尋ねた。

「まあ……氷室先輩のお弁当が一番美味しいのは、当然なんですけどね。だって氷室先輩は、弟さんや妹さんが美味しく、しかも栄養

満点の料理を、忙しいご両親に代わって毎日作ってるんですから」
「む、むう……」
そう……そもそも料理に対する年期も、愛情も、他の三人と比べて全然違うんだ。
だから、氷室先輩が勝って当然、なんだけど。
「ただ、先輩もサンドラも立花も、俺のために弁当を作ってくれて本当に嬉しかったです。ありがとうございました」
「そ、そう言われてしまうと、もう何も言えませんわネ……」
サンドラがブツブツと呟きながら、緩みそうになる口元を必死になって押さえている。
「むう……なんだか釈然としないなあ……」
いや立花、せっかくオチつけたんだから、妥協しろよ。
「……おかしい。カナエさんの言う通りに作ったのに……」
……カナエさん、先輩にどんなレシピを教えたんですかね？　ちゃんと先輩につきっきりで面倒見てあげたんですかね？
そんな微妙な空気の中、美味しくも苦しかった戦いが幕を閉じると同時に、俺はベンチに再度突っ伏した。
すると。
「ふふ……あなたは本当に、優しいんですね……おかげで、私のこれまでの毎日が報われました」

「へ……？」

俺の耳元でそう告げると、氷室先輩は頬を少し赤く染めながら微笑んだ。

お弁当決戦！　後編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

招かれざる客（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

昼休みの修羅場？　を乗り越えた俺は、放課後になり、サンドラと一緒に生徒会室に向かっている。

というか、サンドラは俺の説明に納得してくれたけど、先輩と立花は結局最後まで納得がいかないといった態度だった。

……もう二度と、こんな勝負はやらないぞ。

「それにしてモ……ヨーヘイはあんなに食べてお腹、大丈夫なんですノ……？」

「いや……正直言って、お腹が張ってヤバイ」

「ですわよネ……」

などと心配した様子を見せるけど、サンドラだってこうなった原因の一人なんだからな？

「それにしても、学園祭も終わったというのに、一体何の用なのかしラ？」

「ウーン……まあ、生徒会の仕事なんて、年中あるモンなんじゃないの？　知らんけど」

そう、俺達は昼休み終了間際、放課後は生徒会室に集合するように指示を受けたのだ。

具体的な話は聞いていないけど、やっぱり生徒会の仕事じゃなかろうか。普通に領域（エリア）に行くだけだったら、いつものように合流すればいいだけだもんな。

「そんなことより、とにかく急ごうぜ。先輩も氷室先輩も待ってるだろうし」
「まあ、そうですわネ」
ということで、俺達は足早に生徒会室に向かい、扉を開ける。
「二人共、来たか」
「お疲れ様です」
何やら話をしていた二人がこちらへと振り返る。
まあ……昼休みの遺恨が残ってないようでなによりだ。
「それで、俺達を呼んだのは……？」
「うむ。実は学園祭が終われば、今度は体育祭が待っているのだが……氷室くん」
「はい。元々、体育祭に関しては生徒会の業務ではないのですが、今年に限っては少々事情が変わりました」
先輩から話を引き継ぎ、氷室先輩が説明を始める。
「といいますと？」
「今年の体育祭は、“メイザース学園”との交流戦になります」
「っ！」
その言葉に、俺はピンときた。
というのも、氷室先輩が言った“メイザース学園”との交流戦……これは、『攻略サイト』にあったメインシナリオの一つで、ここで主人公は仲間やヒロイン候補と出会う。
そして……物語終盤まで関わってくるライバルキャラとも。

「そういうわけでな。お父……学園長からの指示で、体育祭でのメイザース学園との調整を生徒会で行うように、とのことだ」
「そうですか……」
「それデ、調整と言われてもワタクシ達は何をすればいいんですノ？」
俺が頷いていると、サンドラが先輩に質問した。
「ああ。体育祭は一か月後に開催されることになるが、生徒会としてすることは主に三つ。一つはメイザース学園の生徒会と、当日に向けたプログラムや受け入れについてなどの調整だ」
ふむ……まあ、交流戦ってことだし、お互いにとってフェアになるようにすり合わせをするのは当然、か。
それに、『攻略サイト』によれば、メイザース学園はうちのアレイスター学園を目の敵にしていて、必勝を期してやって来るって設定だからな。メンドクサイ。
「二つ目は、メイザース学園の受け入れ態勢の準備。こちらは生徒会がメインというわけではなく、向こうとの調整内容を踏まえて、先生達に段取りをしてもらう。まあ、先生側との橋渡しだな」
ふむふむ、これも当然といえば当然だ。それに、基本的には先生達の仕事っぽいし、ほうれんそうだけしっかりしていれば大丈夫だろう。
「そして、最後の三つ目。むしろこちらが本題というやつでな……」
そう言うと、先輩が言い淀む。

だけど、俺はその内容を『攻略サイト』で知っている。
というか、むしろこのためだけに、今回の交流戦が組まれたようなものだしな。

「……体育祭の大トリとして、お互いの学園代表による精霊（ガイスト）での団体戦を行う」
「ッ！」

それを聞いたサンドラは思わず息を飲む。
氷室先輩はあらかじめ先輩から聞いていたのか、表情に変化はない。といって、氷室先輩はいつも表情が変わらないけど。

「それデ……その学園代表というのは、どうやっテ……？」
「それは、メイザース学園との調整の場で団体戦の方法を決めてから、お互いの学園で代表を決定する方法を決めることになる、な」
「……」

先輩の説明を聞き、サンドラが唇をキュ、と噛んだ。
元々、『レイフテンベルクスカヤ家』……プラーミャや両親に認めてもらうために頑張ってきたサンドラだ。今はもうそんな考えじゃないとしても、それでも、思うところがあるんだろう。

そう、思ったんだけど。

「フフ……」
「？　サンドラ？」
「いい機会ですワ……！　この代表戦で、ワタクシはヨーヘイに宣戦布告しますわヨ！」
「へ……？」

突然サンドラにビシッと指を突きつけられ、俺は思わず呆けた声を漏らす……って!?

「いや、俺!?　なんで!?」

「決まっていますワ！　ワタクシはヨーヘイに見て欲しいんですノ！　感じて欲しいんですノ！　アナタのおかげで強くなった、このワタクシの姿ヲ！」

「っ！」

胸に手を当て、不敵な笑みを浮かべるサンドラ。

その姿に、俺の胸もかあ、と熱くなる。

はは……！　だったら、俺も受けるしかないよな！

「ああ……だったら見てやるよ！　感じてやるよ！　俺と［シン］の、全身全霊で！」

「エエ！」

その時。

「コホン」

俺とサンドラが最高潮に盛り上がっているところに水を差すように、氷室先輩が咳払いをした。

ええー……もう少し、空気を読んで欲しいんだけど……。

「お二人共、盛り上がっているところ悪いんですが、まだ選抜方法が決まっていませんので」

「「あ……」」

そうだった……まずはメイザース学園と代表戦の内容について決めてからだった……。

えーと、『攻略サイト』では確か、代表は主人公を除くキャラで、能力値の高い奴から順に選ばれる仕様だったな。

で、藤堂先輩は最強キャラなのに、何故か代表には選ばれないという。

まあ……準ラスボスがこんな序盤で登場するわけないんだけど。

「ふふ……二人の気合いや想いは分かった。なら、できる限り二人の期待に添えるように、メイザース学園と調整しよう」

「！　ありがとうございます！」

「ありがとうございますワ！」

微笑む先輩に、俺は頭を下げてお礼を言った。

もちろん、サンドラも一緒に。

「うむ。それで、その調整の日だが、明後日の昼休みに顔合わせも兼ねて昼食会ということにしてある。もちろん、二人にも同席してもらうぞ？」

「はは！　当然ですよ！」

「エエ！　むしろ、これから戦う相手ですもノ！　この目で確かめておかないト！」

「ふふ……話は以上だ。では、解散としよう」

「「「はい」」」

……といっても、この後も四人で領域（エリア）攻略に行くんだけど。

◇

二日後の昼休み。

メイザース学園の生徒会の面々を出迎えるため、俺達生徒会は校門の前で待つ。

「それにしても、遅いですね……」

「いや、さすがにもう来ると思うのだが……」

そう尋ねると、先輩は時計を見て首を傾げる。

いや、予定では昼休み早々にやって来ることになってるんだけど、既に三十分以上経っている。このままだと、昼休みが終わりそうなんだけど。

「マアマア……どちらにしてもワタクシ達は、メイザース学園との調整で午後の授業は出られないのだカラ」

「ま、まあ、そうなんだけど……」

すると。

「……どうやら来たようです」

氷室先輩の言葉を受け、俺達は校門の先から伸びる通学路を見やると……確かに、この辺りじゃ見かけない制服を着た人達が四人、向こうからやって来る……っ！？

「アイツはあああああああああッッッ！」

その四人を見て、先輩が大声で吠えた。

もちろん俺も、ソイツの姿を見た瞬間、腹の底から怒りがこみ上げていた。

何故なら。

「うふふ……ごきげんよう」

現れたのは、俺を“グラハム塔”領域（エリア）の第二十一階層で置き去りにしたクソ女。

――“木崎セシル”なのだから。

招かれざる客（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！
これにて第四章の幕間は終わりです！
というか、完全に第五章のプロローグですねｗ

次回からいよいよ第五章！
第五章ではアレイスター学園に並ぶ西の雄、メイザース学園との交流戦！
精霊（ガイスト）同士の熱いバトルをお送りする予定ですので、どうぞお楽しみに！

そんな第五章の一話目は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

メイザース学園生徒会（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第五章の開幕です！

メイザース学園生徒会

「うふふ……ごきげんよう」

メイザース学園生徒会を待つ俺達の前に現れたのは、俺を“グラハム塔”領域（エリア）の第二十一階層で置き去りにしたクソ女、“木崎セシル”だった。

そして、そんなクソ女に今にも飛び掛かりそうな藤堂先輩の機先を制し、ス、と自然な流れで先輩の前に一人の女性が身を乗り出した。

「大変お待たせしてしまい、申し訳ありません。私はメイザース学園で生徒会長を務めております、“近衛（このえ）スミ”と申します」

そう名乗ると、女性は優雅にお辞儀をした。

だけど……これが、メイザース学園の生徒会長、か……。

艶やかな茶色……いや、山吹色のような髪を三つ編みシニヨンにまとめ、ヘーゼルカラーの大きな瞳、通った鼻筋に少し薄めだけど柔らかそうな桜色の唇、スラリとしたスレンダーなスタイル。

うん……間違いなく美人では……っ！？

突然足を踏まれ、思わず声を上げそうになるが……その犯人が少し膨れた表情の先輩であることに気づき、俺は全力で痛みに耐えた。

ですが先輩……別に俺、見とれてたわけじゃないですからね？

本当ですからね？

「……アレイスター学園生徒会、副会長の氷室カズラです。それで、

後ろのみなさんもメイザース学園の生徒会、ということでよろしいですか？」

先輩の様子を見かねた氷室先輩が、代表して尋ねる。

「はい。私の右手から順に、副会長の“鷲尾（わしお）イオリ”、会計の“土御門（つちみかど）シキ”、そして書記の“木崎セシル”です」

生徒会長に紹介された三人は、それぞれ会釈する。

ええと、クソ女は置いといて、この眼鏡をかけた黒髪の真面目そうな男子生徒が副会長で、黒髪に桜色のメッシュが入ったオカッパの女子生徒が会計ね。そしてこの会計の人、扇子なんか持って生徒会長より偉そうである。まあ、仕様だから仕方ないんだけど。

「……フン。メイザース学園は、そんなクズを生徒会に加えねばならないほど人材難なのか？」

「「っ！？」」

怒りを一切隠さないまま放った先輩の一言に、氷室先輩とサンドラが目を見開く。

先輩、俺も同意見ですよ。

「ホホ、これは手厳しい。のう、木崎？」

扇子で口元を隠しながら、会計さんはいたずらっぽくクソ女に尋ねる。

だけど、先輩は誰がとは言っていないのに普通にクソ女に尋ねるあたり、うちの学園での一連の出来事を知っているってことか。

「うふふ……まあ、アレイスター学園に在籍していた時から、藤堂

生徒会長には嫌われてましたから」
「ああ！　私は貴様をこの場で今すぐ叩き斬りたいほど嫌いだ！」
先輩の放つ殺気に、辺りの空気が震えた。
なのに、無関係であるメイザース学園の三人はともかく、クソ女まで意に介さない態度はどういうことだ？
アレイスター学園にいた頃は、先輩の威圧で身動きすら取れなかったのに……。
「ふふ、アレイスター学園の頃はともかく、木崎さんもメイザース学園のために精一杯頑張っていただいております。どうか、ここは私に免じて矛を収めてはくださいませんか？」
「……ならば、今度から私の視界にその女を入れないようにすることだな」
ここで問答をしても仕方ないと判断した先輩は、とりあえずは向こうの生徒会長の顔を立てることにしたみたいだ。
まあ、このままじゃ話も進まないしな。
「では、みなさんを食堂へご案内いたします」
氷室先輩が一礼してメイザース学園の四人を先導し、その後ろに俺達三人が続いた。
「……ネエ、ひょっとしてあの女ガ……」
「……ああ。俺を嵌めた女だよ」
耳打ちして尋ねるサンドラに、俺は頷く。
するとサンドラは、露骨に怒りの表情を見せながらクソ女の背中を睨みつけた。

……ハア、俺は馬鹿だな。

「フエ！？」

「はは……サンドラ、ありがとう。俺は大丈夫だから、今はメイザース学園との調整に集中しよう」

「モウ……分かりましたワ……」

サンドラの頭を撫でると、サンドラは苦笑しながら表情を和らげた。

まあ、あんなクソ女のことでサンドラの表情を曇らせたりしたくないし、な。

そして、それは先輩も。

「あう！？」

「先輩も、まずは仕事を済ませてしまいましょう」

「……ふふ、そうだな」

良かった……先輩も機嫌を直してくれたみたいだ。

「どうぞ、お入りください」

食堂に着くと、氷室先輩が席に案内し、窓側の席にメイザース学園の四人を座らせ、その対面に俺達が着席する。

「ホホ、よろしくの」

「はは、よろしくお願いします」

俺の正面に座る会計の土御門さんと和やかに挨拶を交わす。

そしてこの土御門さんこそ、イレギュラーなクソ女を除けば、『ガイスト×レブナント』のヒロイン候補の一人である。

のじゃ口調と扇子が特徴的なキャラなうえ、使役する精霊（ガイスト）もかなり特殊だったりする。

さて……その性格なんかは『攻略サイト』通りだったらいいんだけど、な。

なにせ、クソ女の例もあるし、悠木から聞いたあの話もあるから、『攻略サイト』を鵜呑みにできない。

そうしてお互いがお互いの様子を窺（うかが）う中、アレイスター学園とメイザース学園による一回目の打ち合わせが始まった。

メイザース学園生徒会（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

第一回打ち合わせ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

第一回打ち合わせ

「ふふ、アレイスター学園のランチは美味しいですね。これは、メイザース学園でも食堂の改革が必要かもしれませんね」

メイザース学園の生徒会長、近衛スミが舌鼓を打ちながら、隣に座る副会長の鷲尾イオリに話を振る。

「そうですか？　僕はメイザース学園も負けてはいないと思いますが？」

「ほう……ならば、是非ともメイザース学園のランチも食べてみたいものだな」

「ええ、でしたら次回の打ち合わせはメイザース学園で行いましょう」

うん、先輩も落ち着いて応対できているようで何よりだ。まあ、なんだかんだ言って生徒会長だから当然なんだけど。

「ホホ、先程からわらわ達の様子ばかり気にして、食べないのかえ？」

「へ？　あ、ああ……もちろん食べますよ」

おっと、土御門さんに指摘されてしまった。

だけどあのクソ女がいるせいで、この打ち合わせがいつメチャクチャになってもおかしくないからな。目を光らせておかないと。

現にホラ。

「……」
「……」

向かい合わせに座るサンドラとクソ女は、お互い目も合わせようとしないし、むしろピリピリした空気が漂っていて気が気じゃない。
まあ……クソ女が何かアクションを起こしたら、俺が真っ先に矢面に立つ心構えはできてるけど。

「ところで……どうもわらわと会話をするのに、お主の口調は少々堅いの。同い年なのじゃから、気を遣わずともよいぞ？」
「は、はあ……」

いや、同い年なのは『攻略サイト』で知ってるんだけど、何というかその……土御門さんの“のじゃ”言葉を聞くと、どうしてもへりくだってしまう。
まあ、実際に土御門さんの実家は東方国の華族だし、やんごとないわけだけど。

「ホホ、じゃが木崎に聞いていた話とはずいぶんと雰囲気の違う御仁じゃ」

……まあ、クソ女のことだからあることないこと言ったんだろう。容易に想像できる。

「……聞きたいかえ？」
「いえ、遠慮しておきます」
「なんじゃ、つれないのう」

そう言うと、土御門さんは扇子で口元を隠しながら悪戯っぽく微笑んだ。

だけど、この砕けた感じといい悪戯好きな雰囲気といい、『攻略サイト』通りの性格みたいで良かった。

「では……そろそろ本題に入りましょうか」

食事を終え、口元を優雅にナプキンで拭いたメイザースの生徒会長が、話を切り出した。

「うむ、そうだな。まず、メイザース学園側として何か提案はあるかな？」

「ええ。うちの生徒の受け入れなどについては、お互いの副会長同士で詳細を詰めればよいと思いますので割愛をさせていただきますが……やはり本題は、精霊（ガイスト）同士による団体戦です」

メイザースの生徒会長の言葉に、一同が頷く。

そもそも交流戦自体が、ラストの団体戦を行うことを前提として組まれたものだからな。

「聞いたところによると、アレイスター学園もメイザース学園と同じく、一学年三クラスの計九クラスあるとのことですが……」

「うむ、その通りだ」

「でしたら、各クラスで一名を代表とし、計九人の選抜としてはいかがでしょうか？」

「ふむ……」

その提案を受け、先輩が顎に手を当てながら思案する。

だけど……早速『攻略サイト』とは選抜方法が変わってるんですけど。主人公と先輩を除いた、精霊（ガイスト）のステータス順じゃないの？

「……まあ、そのほうが各クラスの代表ということで、選ばれた者

も応援する者も熱が入るというものか……分かった、いいだろう」
「ふふ、ありがとうございます。各クラスの代表者の選抜方法については、投票で決めるのか、ステータスの優劣か、それはお任せします」
「ああ」

頷く先輩の真紅の瞳に、何か確信めいたものが窺えた。
あ、コレ、絶対に面倒なことを企んでる気がする。

「では、次はこちらからの提案だ」
「ええ、どうぞ」
「うむ。団体戦ということだが、やはり各クラスの代表として戦うのだから、各学年のクラス同士の一対一で行うというのはどうか？　この場合だと、九試合を行うことになるのかな？」
「それで構いません」

うん、一応話はまとまったし、対戦方法も『攻略サイト』通りだ。

「では、試合の詳細なルールについては、次回の打ち合わせで決めることにしましょう。それ以外の雑多な件については、最初に話した通り副会長同士で調整するということで」
「ああ」

などと、上手く収まったような雰囲気を醸し出す先輩とメイザースの生徒会長。
だけど二人共、仕事の大部分を押し付けられたお互いの副会長が、ジト目で睨んでますよ？

それにしても、代表は各クラス一名、か……。
俺はチラリ、とサンドラを見やると……あ、目が合った。そして

サンドラのアクアマリンの瞳は、どこか挑戦的な色を湛えていた。

まるで……選ばれるのは自分だと言わんばかりに。

はは、そうじゃないとな。もちろん俺だって、譲る気はねーよ。

「ホ、そうすると団体戦ではお主と戦えるのかの？」

「イイエ！　残念だけど、アナタの対戦相手はヨーヘイじゃなくてワタクシですワ！」

「ホホ！　これは面白いことになってきたのじゃ！」

不敵な笑みを浮かべながら挑発するサンドラを見ながら、土御門さんは愉快そうにカラカラと笑う。

そんな中……クソ女だけは、表情を崩さずに終始無言のままだった。

こうして、アレイスター学園とメイザース学園による一回目の打ち合わせを終えた。

第一回打ち合わせ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会に向けて（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会に向けて

「では、次は二週間後にお会いしましょう」
「ホホ、待っているのじゃ」

校門前でメイザース学園生徒会を見送ると、俺達は校舎へと戻る。

「ところで……各クラスの代表者の選抜方法はどうしますか？」

氷室先輩が隣を歩く藤堂先輩に尋ねると。

「ふふ……決まっている。今度の団体戦は精霊（ガイスト）による一対一の勝負なのだ。なら、ステータスといった目先のデータに囚われない、本当の意味でクラスの最も強い者が代表に選ばれるべきではないか？」
「というと？」
「各クラスで精霊（ガイスト）による対戦を行い、勝利した者を代表とするのだ」

あー……何となくそんな気はしてました。
でも、先輩の言う通り精霊（ガイスト）の強さを測る上で、ステータスの数値だけじゃ分からないのも確かだ。
スキルの量や特性、戦術、地形……それらを総合的に活かして最大限の力を発揮できるメンタル、そんな奴こそが強いんだから。

そんなことを考えている時、制服の袖を引っ張られた。
見ると……真剣な表情をしたサンドラだった。

「ヨーヘイ……ワタクシは、全力でアナタを倒しにいきますワ。だからその時は、ヨーヘイモ……」

そうだ、な……クラスで代表者一名となったら、同じクラスのサンドラとは、当然戦う場面が出てくる。もちろん、立花やプラーミャとも。

だけど、俺だって負けるつもりはないし、負けるわけにはいかない。

こんなところでつまずいていたら、先輩を救うなんて到底できないから、な。

だから。

「……ああ、その時は俺も全力で戦う」

「フフ……約束、ですわヨ？」

俺とサンドラは頷き合うと、互いの拳をコツン、と合わせた。

◇

――キーンコーン。

放課後になり、俺とサンドラは交流戦の準備のために一緒に生徒会室へと向かおうとすると。

「あ！　望月くん！」

「？　どうした？」

笑顔の立花に呼び止められ、俺は足を止めて振り返った。

「えへへー、ボク達も“アルカトラズ”領域（エリア）、踏破したよ！」

「おお！　やったじゃねーか！」

その報告を聞いて俺は嬉しくなり、立花の肩をバシバシと叩く。
はは、これでコッチ側の戦力もかなり強化されることになったな！

「それで、望月くんは今から生徒会？」
「おう、ちょっと急な仕事が入ってな」
「ふうん……」

そう答えると、立花が意味深な表情を浮かべた。ん？　一体何だ？

「……生徒会が大変なのも分かるけど、このままだとボク達と差がついちゃうかも」
「へえー……何だよ、自信満々じゃねーか」
「あはは、まあね。さて、邪魔しちゃ悪いからボクはこれで。望月くん、頑張ってね！」
「おう！」

立花は笑顔で手を振ると、腕組みしながら待つプラーミャに合流し、教室を出て行った。

「……立花クン、自信タップリでしたわネ」
「ああ……」

“アルカトラズ”領域（エリア）で【水属性反射】を手に入れたことに加え、おそらく立花の奴はクラスチェンジしたんだろう。
［オーディン］なのか［ベオウルフ］なのか、それとも［伏犠（ふっき）］なのかは分からないけど、な……。

「フフ、ワタクシ達も負けてられませんわネ」
「当然。それに、俺達だって成長していないわけじゃない。だろ？」

俺の言葉に、サンドラが嬉しそうに頷く。
実際、俺達は“ぱらいそ”領域（エリア）で順調にレベル上げをこなしている。
その甲斐もあって、俺の［シン］はレベル六十に到達し、サンドラの［ペルーン］もレベル五十八、先輩に至っては、とうとうレベル七十となった。

それに、［シン］は疾走丸を今も毎日飲み続けている。
『敏捷』ステータスが“ＳＳＳ”の［シン］に効果があるのかどうかは分からないけど、それでも俺は、この努力がいつか実を結ぶと信じている。

「サンドラ……今日も生徒会が終わったら、あの領域（エリア）に行くぞ」
「当然ですワ！」

そして俺達は、決意を新たに生徒会室に足早に向かった。

◇

「うむ……ルールなどについては、これでいいだろう。氷室くん、どう思う？」
「そうですね。これなら大丈夫じゃないでしょうか」

先輩と氷室先輩の了承を得、俺とサンドラは胸を撫で下ろす。
というのも、今回のクラス代表の選考会のルールについて、俺とサンドラに一任されたのだ。
なので、俺達はできる限り安全で、かつ、公平に評価できるようにシンプルなルールにした。

一つ目は、クラスの先生による審判を置き、生徒が大怪我をしないように、優劣がハッキリした時点で審判の判定によって試合を終了させること。

二つ目は、予選方式を設けて五人一組によるバトルロイヤル方式とし、あらかじめ用意する舞台から出た時点で負けとなること。

三つ目は、バトルロイヤルを勝ち抜いた生徒は、一対一のトーナメント方式で対戦し、バトルロイヤルと同じく相手を場外に出すか、審判の判定による決定により勝敗を決めること。

格闘技の試合のように、十カウントによるノックダウン制やヒットポイント制にしてもよかったんだけど、それだと生徒が怪我を負う可能性が高くなるからな。

もちろん、選考会では回復スキルを持つ精霊使い（ガイスト）を多数配置して、万全を期すようにはしている。

何より、最近は領域外（エリア）に幽鬼（レブナント）が現れたってことで、“ＧＳＭＯ（グスモ）”の精霊使い（ガイスト）が学園内に多く配置されているというのも大きい。

「……ということで、選考会に当たっては、学年ごとに同日に行ったほうがいいと思います。なにより、回復系の精霊使い（ガイスト）は多くないですから」

「うむ、そうだな。では、選考会は準備の兼ね合いから二週間後に行うこととして、必要な準備などについては、お父……学園長と教頭先生に私から話をしておこう」

「よろしくお願いします」

よし、これで後は選考会当日を迎えるだけだな。

学園祭と違い、内容さえ決めてしまったら、先生達に全部丸投げできるのが大きい。

「さて……では、今日しなければならない生徒会の業務は、これで終わりだな」

「はい。では、私はこれで失礼します」

「ああ、お疲れ様」

「「お疲れ様でした」」

氷室先輩は素早く帰り支度をすると、生徒会室を出て行った。

「ふう……だが、氷室くんの家庭の事情を考えると、なかなかあの領域（エリア）に行くのは難しいな……」

「ええ……ですので、休日に一気に攻略するしかないですね。幸い、氷室先輩の［ポリアフ］は、俺達の中でレベルが一番高いですから」

「エエト……ひょっとして、氷室先輩をワタクシ達のチームに加えるんですノ？」

俺と先輩の会話を聞いていたサンドラがおずおずと尋ねる。

そういや、サンドラには言ってなかったっけ。

「ああ。氷室先輩の精霊（ガイスト）はレベルも高いし、何より回復スキルと解析スキルを持っている。チームに加えない手はないだろう」

「ソウ……ですのネ……」

「えーと、サンドラは反対なのか？」

「べ、別にそういうわけでハ……」

ウーン……サンドラの奴、歯切れが悪いなあ……。

「サンドラ、まあ望月くんだから仕方ない……それに、これは私達

のためを想ってのことでもあるから、な」
「ア……そういうこト……」
先輩の言葉を受けてサンドラは俺を見ると、フ、とその表情を緩ませた。
……まあ、二人の安全を考えてってことは否定しないけど。
少し気恥ずかしくなった俺は、ごまかすように頭をガシガシと掻(か)きながら、いつものように三人で“ぱらいそ”領域(エリア)へと向かった。

クラス代表選考会に向けて（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

努力の天才（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

努力の天才

「さあて……それじゃ、“交流戦イベ”についておさらいしておくか」

家に帰ってきた俺は、ベッドに寝転がりながらスマホを取り出すと、『攻略サイト』のページを開く。

「ええと、メインシナリオの“交流戦”は、と……お、これだな」

『はう！　マスターは例のサイトを見ているのですか？』

ソーダ味のアイスを口にくわえながら、［シン］がニュ、とスマホを覗き込んだ。

「おう。ホラ、来月にメイザース学園との交流戦をすることになっただろ？　だから、イベントの内容や向こうの精霊（ガイスト）のステータスなんかを確認しておこうと思ってな」

『はうはうはう！　やっぱりマスターが持つ、その『攻略サイト』はすごいのです！』

「はは、まあな」

いや、実際のところ、卑怯じゃないかとさえ思えてくるけどな。

だって、向こうは俺達の情報を何一つ知らないのに、俺は向こうの情報を全部知ってるわけだし。

とはいえ。

「……無事に来年のクリスマスを超えるためには、なりふり構って

られないさ」
『？　マスター？』
「ん？　ああいや、何でもない」
『？』

不思議そうに首をコテン、と傾ける［シン］。
だけど、これは俺が俺だけに課した誓い、だからな。

『それで、［シン］の対戦相手は誰なのです？』
「ウーン……それに関しては何とも言えないけど、少なくとも、この三人にあのクソ女を加えた四人の中の誰か、だな」

そう、交流戦イベでは、対戦相手は主人公の固有ステータスと精霊（ガイスト）のレベルに応じて選ばれる。

ただ、俺は主人公じゃないから固有ステータスなんてモンはそもそもないので、［シン］のレベルだけで判定されることになるな。

そうなると……。

「あー……だよなあ……」

スマホ画面を眺めながら、俺はガックリ、と肩を落とす。
交流戦イベ当日の時点において、主人公のレベルが五十を超えている場合の対戦相手……それはあの、“土御門シキ”。正直言って、一番戦いたくなかった相手だ。

『はうはうはう！　［シン］としては、アイツと戦いたいのです！
マスターを裏切ったアイツを、［シン］は絶対に許しはしないのです！』

［シン］の言うアイツというのは、クソ女のことだろう。
確かに、交流戦イベはクソ女というイレギュラーが発生したことで、『攻略サイト』通りに決まらない可能性もある。
……結局、対戦相手については当日までのお楽しみ、だな。
『はう！？』
「はは、あのクソ女と戦うかどうかはともかく、まずはクラス代表に選ばれないとな」
そう言いながら俺は［シン］の頭を撫でてやると、［シン］は嬉しそうに目を細めた。
だけど、ウチのクラスは主人公の立花を筆頭に、サンドラ、プラーミャがいる。
しかも俺を含めた四人は、“アルカトラズ”領域（エリア）と“アトランティス”領域（エリア）、“レムリア”領域（エリア）で手に入れた火、水、氷の各属性反射のスキルもある。
ハッキリ言って、クラス代表になるのだって決して簡単じゃない。
『はうはうはう！　絶対に［シン］は、代表に選ばれてみせるのです！　絶対に……大好きなマスターを代表にするのです！』
「［シン］……ありがとな。だけど、お前も絶対に無理はするなよ。クラス代表も大事だけど、俺にとって［シン］は、そんなのとは比べものにならないほど大事なんだから」
『はう……嬉しいのです……』
そう言うと、［シン］は俺の胸に飛び込み、頬ずりをした。

◇

「フフ！　とうとう［ペルーン］のレベルが六十になりましたわ！」

放課後の“ぱらいそ”領域（エリア）で今日九度目のクイーン＝オブ＝フロストを倒した後、サンドラがガイストリーダーを眺めながら嬉しそうに微笑む。

「おお！　とうとう［シン］とのレベル差も一つだけになったな！」

「エエ！」

「ふふ……これもサンドラの努力の成果だ」

いや、本当に先輩の言う通りだ。

一―三にクラス替えをして知り合ってからこれまで、サンドラがずっと努力をし続けてきたのを、俺は一番間近で見てきたから知っている。

本当に、サンドラはすごい奴だ。

「ア……フフ、そんな瞳で見ないでくださいまシ。思わず照れてしまいますワ」

おっと……イカンイカン、ついサンドラに魅入ってしまった。

だけど。

「まあ……サンドラを尊敬の眼差しで見ちまうのは仕方がないよな」

「フフ……モウ……」

「コホン！」

あ、これは先輩がヤキモチを焼いた合図だ。

「さあ！　次のキング＝オブ＝フレイムを倒しに行くぞ！」
「あ！　ま、待って下さいよ！」
頬をプクー、と膨らませながら、先輩はキング＝オブ＝フレイムのいる場所へと大股で進んで行くので、俺達は慌てて追いかけた。
そして。
「おおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！」
――斬ッッッ！
先輩の［関聖帝君］は、キング＝オブ＝フレイムを見事一刀両断にした。
それこそ、俺達の出番がないほどに。
「ふう……スッキリした」
制服の袖でぐい、と額を拭うと、先輩は満足げに頷いた。
いや、キング＝オブ＝フレイムは完全にとばっちりだな。結局は倒すことには変わりないんだけど。
「じゃあ疾走丸を入手してから、最後にもう一度領域(エリア)に入りましょう」
「うむ！」
「エエ！」
俺達は、疾走丸の入った木箱のある通路へと向かう。

『はうー……これだけは全然慣れないのです……』
「はは、まあそう言うな」
俺は［シン］を慰めながら、木箱の中の疾走丸を手渡した。
――ゴクン。
『うえー……不味いのです……』
舌を出しながらガックリ、と肩を落とす［シン］を見て、俺は思わず苦笑する。
「……フフ、やっぱり一番努力しているのは、ヨーヘイと［シン］ですわネ」
「ああ……彼等こそ、努力の天才、だな」
「？　サンドラ？　先輩？」
「フフ！　何でもないですわヨ！」
二人が何か俺のことを話しているような気がして振り向くけど、満面の笑みのサンドラと先輩にはぐらかされてしまった。
あ……そういえば……。
「ところで二人共、今度の日曜日って空いてる？」
「む？　元々、日曜日は君達と領域（エリア）攻略のつもりだったが？」
「エエ、ワタクシもそうですワ」
そう尋ねると、二人が不思議そうな表情を浮かべながら答える。
じゃあ、学園祭も終わったしちょうどいいよな。

「え、ええと……以前約束していた、俺の家に招待するって話、なんだけど……」
「「っ！」」

俺の言葉に二人が息を飲み、打って変わって緊張した面持ちになった。

「あう……も、もちろん私は日曜日は問題ない、とも……」
「フエ……ワ、ワタクシもですわ……」
「そ、そっか。だ、だったら母さんに、そう伝えておくよ」
「「う、うん……」」

その後、俺達三人は妙な緊張感の中、十回目のクイーン＝オブ＝フロスト討伐に取り掛かった。

努力の天才（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

アトランティス領域、再び（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

アトランティス領域、再び

「くあ……」

土曜日の朝、相も変わらず俺の上に乗って寝ている［シン］を退けると、ベッドから降りてカーテンを開ける。

「あー……今日は雨、かあ……」

まあ、別に雨が嫌いってほどじゃないけど。
それに今日攻略予定の“アトランティス領域（エリア）”の扉は、図書館の中にあるから濡れないし。

俺は服に着替えると、よく眠っている［シン］を置き去りにしてリビングに向かう。
だって、下手に起こすと噛まれるし。

「おはよう」
「あら、おはよう」

いつもより早い時間に起きた俺を、母さんが不思議そうに見る。
おっと、そ、そういえば大事なことを言うのを忘れてた。

「そのー……前に話してた、先輩とサンドラを家に連れてくるって話、なんだけど……」
「あらあら、日にちが決まったの？」
「うん……明日、連れて来ようと思う」

ううう、なんだか恥ずかしいな……。

「まあ！　だったら明日は腕によりをかけてご馳走するから、その二人にちゃんと伝えておいてね！」

「う、うん……」

イカン……ただ二人を母さんに会わせるだけだったのに、メッチャ緊張してきた。

『はうはうはう！　またマスターに置いてけぼりにされたのです！』

ドタドタと騒がしく降りてきた［シン］が、勢いよくリビングの扉を開けた。

『はう！　お母様、おはようございますなのです！』

「あらあら、おはよう［シン］ちゃん」

流れるように冷蔵庫を開けてアイスを取り出すと、母さんは深々とお辞儀して挨拶する［シン］に手渡した。

『えへへー、今朝はチョコアイスなのです！』

朝からアイスを受け取り、口元がゆるっゆるの［シン］。

というかコイツ、冬になってもアイス食べ続けるつもりじゃないだろうな。

『ところでお母様、マスターとなんの話をしていたのですか？』

「うふふ。明日、ヨーヘイがお世話になっている先輩とサンドラさんをご招待するって話よ」

『はう！　そういえばこの前、そんなことを話していたのです！』

それから俺が朝食を食べ終わるまでの間、母さんと［シン］は先輩達の話に花を咲かせていた。
くそう、恥ずかしい。

◇

「先輩、おはようございます！」
「ふふ、おはよう」

集合場所の益田駅に着くと、先輩が既に到着していたので挨拶を交わす。
うん、今日も安定の一時間前集合だな。

「えーと、サンドラはまだですか？」
「ああ、彼女は十分程遅れると連絡があったよ」

集合時間の一時間前なのに、十分遅れるって表現はどうかと思う。
だったら集合時間を一時間早くすればいいじゃないかって話だけど、そうするとさらに一時間早く来るだけだしなあ……。

すると。

「二人共、おはようございます」
「あ、おはようございます！」
「うむ、おはよう」

氷室先輩も集合場所にやって来た。一時間前なのに。

「だけど氷室先輩、集合時間より一時間も早いですけど、家のほう

は大丈夫なんですか？」
「はい。休日は、基本的に両親がおりますから」
「そ、そうですか……」

氷室先輩はそう言うけど、弟さんを怪我させてしまったあの時は、氷室先輩が家事をしてましたよね？
まあ……何も言わないでおこう。

「お、遅れてしまいましたワ！」

サンドラ……心配しなくても、まだ集合時間の五十分前だから。

「あ、あはは……思ったより早く集まっちゃったので、もう行きましょうか……」
「ああ、そうだな」
「はい」
「エエ！」

ということで、予定より早いけど図書館に向かい、“アトランティス”領域（エリア）へと繋がる扉のある本棚に来ると。

「ええと……お、あったあった」

俺は『ティマイオス』の本を開く。

「っ！？」

初めて見る氷室先輩は、一瞬目を見開いた。
まあ、そんな反応になるよなあ。

「さあ、行きましょう」
「え、ええ……」
若干戸惑う氷室先輩に声を掛け、俺達は“アトランティス”領域（エリア）へと足を踏み入れた。
「それで望月くん、今日はどこまで攻略するのだ？」
「それはもちろん、“レムリア”領域（エリア）のボスを倒すまでですよ」
「「ハア！？」」
俺の言葉に、先輩とサンドラが驚きの声を上げる。
まあ……この領域（エリア）の広さや鍵の入手を考えれば、驚くのも当然だよな。
「はは、実はこの領域（エリア）、一度鍵を入手してしまえば、“レムリア”領域（エリア）に着いた途端にボス戦が可能なんです」
「そ、そうか……」
まあ、こういった領域（エリア）ボスの出現条件が設定されている領域（エリア）は、全部同じ仕様なんだけど。
「ということで、こんな領域（エリア）はサッサと踏破してしまいましょう」
「うむ！」
「エエ！」
俺の言葉に、先輩とサンドラは意気込む。
だけど。
「……」

何故か氷室先輩は、無言のまま“アトランティス”領域（エリア）をしげしげと眺めている。

「ええと……氷室先輩？」

「あ……いえ、何でもありません。では、よろしくお願いします」

「はい……」

氷室先輩の様子が気にはなるものの、俺達は“アトランティス”領域（エリア）のＲＴＡ（リアルタイムアタック）をスタートした。

アトランティス領域、再び（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

限界突破の、その先へ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

限界突破の、その先へ

“アトランティス”領域（エリア）をものすごい勢いで突き進んでいく俺達は、四時間程度でここの領域（エリア）ボス、“クロケル公爵”の元へとたどり着いた。

以前に来た時と比べると、まあ一時間以上は短縮できたかな。

「あれが、ここの領域（エリア）ボス……」

中央の穴の上で浮遊するクロケル公爵を眺めながら、氷室先輩がポツリ、と呟いた。

「あはは、今の俺達四人だったら、あの程度の領域（エリア）ボスなんて瞬殺ですよ。ねえ、先輩？」

「ああ。もちろん、これは侮っているわけでもない。それだけ、私達は強くなったのだからな」

そう言うと、藤堂先輩は不敵な笑みを浮かべる。

確かに先輩は、柱の三体から半分とはいえ“ウルズの泥水”を吸収しているばかりか、“ぱらいそ”領域（エリア）でのレベル上げの成果もあり、手ごたえを感じているはずだ。

「ですけド、そうなりますと領域（エリア）ボスとの連戦、ということになりますわネ……」

「まあ、な。だけどサンドラ、ここの領域（エリア）ボスは、あの幽鬼（レブナント）よりも弱いんだぞ？」

「ア……」

俺の言葉で、サンドラも気づいたみたいだ。

そう……所詮、ここの領域（エリア）ボスですら、“ぱらいそ”領域（エリア）で俺達がカモにしているクイーン＝オブ＝フロストやキング＝オブ＝フレイムよりも弱い。

もちろん、幽鬼（レブナント）の特性や状況、相性など、必ずしも一致しているわけじゃないけど、それでも、俺達が倒される道理はない。

ということで。

「［シン］！　あの領域（エリア）ボスを、地面に叩き落としてやれ！」

『任せるのです！』

俺の指示を受け、［シン］は中央の穴に向かって一気にダッシュする。

そして、穴の縁にたどり着くと。

『【神行法・跳】！』

グッとしゃがみ込んだかと思うと、［シン］はロケットのように上空へと射出され、クロケル公爵の遥か上空へと飛び上がった。

『それー！　なのです！』

クルリ、と身体を宙返りさせて文字通り空中を蹴り、クロケル公爵の頭上に肉薄する。

『ッ！』

するとクロケル公爵は、右手に持つ氷の剣を［シン］へと突きつけた。

だが、［シン］は牧村クニオとの戦いの時に見せたような動きで、その剣をスルリ、と躱し、クロケル公爵の背後を取った。

『食らえなのです！　【爆】！』

『ガガガガガガガガッッ！？』

そして前回同様、重ね合わせた呪符によって地面へと吹き飛ばすと、そこには先輩とサンドラ、そして氷室先輩が待ち構えていた。

「ハアアアアアアアアアッッッ！」

「トドメですワ！　【裁きの鉄槌】！」

「【レイオマノ】」

クロケル公爵が地面にたどり着く前に、氷室先輩の［ポリアフ］が牙を刃にした武器でズタズタに切り裂き、それに追随するように［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）が【一刀両断】にする。

そこへサンドラの［ペルーン］がメイスを叩き落した瞬間、周囲に稲妻が走ると、クロケル公爵が黒焦げになり、幽子とマテリアルに変化した。

……今回は【アブソリュート・ゼロ】を発動する暇すら与えられなかったみたいだな。

『はう！　やったのです！』

空中を飛び跳ねながら［シン］が戻って来ると、俺の胸に勢いよく飛び込んできた。

「ああ、よくやったぞ」

『えへへー、なのです』

そんな［シン］の頭を優しく撫でてやると、［シン］は嬉しそうに目を細める。

全く……アイスを食べる時より嬉しそうな表情しやがって……。

「それにしても……改めて見ると、［シン］の能力はすさまじいですね……」

「はい！　俺の自慢の相棒ですから！」

氷室先輩に［シン］を褒められ、俺は嬉しくなる。

だって、俺にとってこんな最高の精霊（ガイスト）、世界中のどこを探したっていないもんな……。

「さあ！　このまま“レムリア”領域（エリア）に行って、次の領域（エリア）ボスもサッサと倒しちゃいましょう！」

「ええ」

俺達は意気揚々と“レムリア”領域（エリア）へと続くらせん階段を下りて行く。

「望月くん、少しいいか……？」

すると先輩が俺に声を掛け、隣に並んだ。

「ええと、どうしました？」

「うむ……先程の領域（エリア）ボスとの戦いを見ていて気づいたのだが……［シン］の動きが、また一段階速くなってはいないか……？」

「ほ、本当ですか！？」

先輩の言葉を受け、俺は慌ててガイストリーダーを取り出す。

――――――――――――――――――――

名前　：シン（神行太保）

属性　：神仙（♀）

ＬＶ　：６１

力　　：Ｅ

魔力　：Ｓ＋

耐久　：Ｄ＋

敏捷　：ＳＳＳ＋

知力　：Ｓ

運　　：Ｂ＋

スキル：【方術】【神行法】【全属性耐性】

【水属性反射】【火属性反射】【氷属性反射】

【状態異常無効】【物理弱点】【繁殖】

――――――――――――――――――――

「あ……」

『敏捷』ステータスの“ＳＳＳ＋”の表示。

そこには、クラスチェンジを果たしてからも休まずに続けてきた努力の証が、確かに刻まれていた。

「ふふ、やはりそうか……」

そして、一緒にガイストリーダーを見つめる先輩は、嬉しそうに頬を緩める。

まるで、俺達を祝福するかのように。

はは……こんなの、嬉しすぎるだろ……！

俺はガイストリーダーを握りしめると。

『はう！？　ど、どうしたのです！？』

「はは！　やった！　やったぞ！」

［シン］を抱きしめ、階段でクルクルと踊るように回った。

限界突破の、その先へ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ステータスの真実（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ステータスの真実

『はう！　突然ビックリしたのです！』
「はは、悪い悪い」

ようやく落ち着いた俺は［シン］を降ろすと、［シン］にたしなめられてしまった。
まあ、最高に嬉しかったんだから仕方ないよな。

「デモ……精霊（ガイスト）のステータスって、一体どこまであるんですノ……？」

俺のガイストリーダーをしげしげと眺めながら、サンドラが呟く。
だけど、確かにサンドラの言う通りだ。
実際、『攻略サイト』でもステータスの最高値は“ＳＳ”で間違いないはずだし、それはこの世界の常識でもある。

「ふむ……だが、このステータスの上限が、実はたった一つの事実のみで決まっているということは知っているか？」
「「「え……？」」」

先輩がふいに発した言葉に、俺達は一斉に先輩へと視線を向けた。

「そ、それってどういう意味ですか……？」
「うむ……これは私のお母様から教えてもらった話なんだが、精霊（ガイスト）のステータスは、ある英雄達の能力値を基準としているのだ」
「「「英雄達!?」」」

オイオイ！？　先輩の言う英雄達って、ひょっとして……！？

「……それは、“始まりの六人”のことだ」

「“始まりの六人”……」

先輩の言葉を、氷室先輩が反芻する。

“始まりの六人”というのは、この世界の人間なら誰もが知っている、百年以上前に世界で最初に精霊が発現した六人。

それぞれが伝説に相応しい能力を持ち、数々のエピソードは子ども達の夢物語となっている。

「そうだ。そして“始まりの六人”の能力値を最上の“ＳＳ”とし、全ての精霊使いの能力値の中間値を“Ｄ”としている……」

そうか……俺の［シン］は、『敏捷』ステータスがその“始まりの六人”のステータス値を超えているから、“ＳＳＳ＋”になった、ということか……。

確かに、『攻略サイト』にある真のラスボスのステータスはオール“ＳＳ”、これは、『ガイスト×レブナント』の世界において、文字通り最強であることを意味するもの。

だからこそ、主人公の最終ステータスも、オール“ＳＳ”となっているんだから。

「……ははっ」

「望月さん……？」

思わず笑ってしまった俺を、氷室先輩が不思議そうに見つめる。

だけど……俺は今、最っ高に嬉しくて仕方ないんだ。

だって、それが示しているのは、強くなるのに限界がないってことだから。

そしてそれは、俺達がどこまでも速く……そして、どこまでも強くなれることができるんだから。

「ア……フフ、ヨーヘイったら、本当に分かりやすいですわネ……」

「な、何だよ……」

クスクスと笑うサンドラに気づき、俺はつい悪態を吐いてしまった。

「ふふ、そうだな……だが、私もまだまだ強くなる。君が、その可能性を示してくれたのだから」

すると今度は、先輩が口の端を持ち上げてそう宣言した。

ですが、もちろん俺も、それは理解していますよ。

そんな優しくて、強くて、素敵なあなたを、俺は超えてみせますから。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩いた。

「さあ！　この階段を下り切ったら“レムリア”領域（エリア）のボス戦です！　サクッと倒しちゃいましょう！」

「ああ！」

「フフ……エエ！」

「そうですね」

俄然やる気になった俺の言葉に、先輩とサンドラが力強く頷き、氷室先輩は表情を変えずに返事した。

といっても、氷室先輩はグッ、と拳を握っているし、気合十分なのが窺える。

そして、少し足早に俺達は階段を下りて“レムリア”領域に到着すると、その足でここの領域ボス、“ベレヌス”がいる建物へと向かった。

「いましたね……あの忌々しい領域ボスが……！」

俺はベレヌスの姿を見て、ギリ、と歯噛みする。

相変わらず、ムカツク面してやがるなあ……！」

『プークスクス！　マスターがまたアイツに嫉妬してるのです！』

チクショウ！　そういうこと言うの、いい加減やめろよ！

「そうですか？　あの領域ボスなどより、望月さんのほうが明らかに良いと思いますが？」

ひ、氷室センパアアアアイ！

「むむ！　もも、もちろん私だってそう思っているとも！」

「エエ！　当然ですワ！」

いや二人共、別に氷室先輩に張り合わなくても……でも嬉しい。

「では、あの目障りな領域ボスは、この私が排除いたします。［ポリアフ］」

すると、氷室先輩はまだベレヌスからかなりの距離があるにもかかわらず［ポリアフ］を召喚すると。

「くたばりなさい。【スナイプ】」

［ポリアフ］は、氷室先輩の肩の上でロングバレルのスナイパーライフルを構え……って、スナイパーライフル！？

「ファイア」

そんな氷室先輩の合図と共に、銃口から一発の弾丸が射出された。

そして。

『ッッッ！？』

弾丸は見事にベレヌスの額に命中し、もんどり打って倒れる。

「次弾装填……ファイア」

さらにもう一発発射すると、今度は倒れているベレヌスの左胸に着弾した。

「「「あ……」」」

俺達三人の呆けた声と同時に、ベレヌスが幽子とマテリアルに変化した。

「ふふ、他愛もない……これなら、あの領域（エリア）のボスのほうが手強か

ったですね」
「え……？」
氷室先輩が放った何気ない一言に、俺は思わず目を向ける。
「ひ、氷室先輩、その……今言った、あの領域（エリア）というのは……？」
「っ！？」
そう尋ねた瞬間、氷室先輩が息を飲んだ。

ステータスの真実（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

覚悟と決意のはき違え（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

覚悟と決意のはき違え

「ひ、氷室先輩、その……今言った、あの領域というのは……？」
「っ！？」

そう尋ねた瞬間、氷室先輩が息を飲んだ。

「氷室先輩……？」
「……いえ、特に隠すつもりもなかったのですが、実はこの領域と似たような領域を知っているんです……」
「「「え……？」」」

氷室先輩の告白に、俺達三人は声を漏らした。
この“レムリア”領域と似た領域を知っている……？」

「はい……」

氷室先輩は、その似ているという領域について説明してくれた。

学園に入学した直後、近所の公園で妹さんを遊ばせていた時に、扉を偶然発見したこと。
その領域は、“アトランティス”領域や“レムリア”領域のように、学園にあるような普通の領域とは異なっており、かなり特殊であること。

そして。

「……ひょっとして、この領域でも、領域ボスを倒した後に、祠の

ようなものがありませんか？」

「……」

間違いない。

氷室先輩が知っているというその領域（エリア）は、二周目特典として現れる五つの領域（エリア）のどれかだ。

「それで……その領域（エリア）はどんなところでしたか？」

「はい、ただ一本の細い道が延々と続く、不思議な領域（エリア）です。そして、その道の下は、どこまでも続く奈落のようになっていました」

そうか……となると、氷室先輩が偶然見つけたっていう領域（エリア）は、〝葦原中国（あしはらのなかつくに）〟領域（エリア）だな……って！？

「そ、それで氷室先輩は、ひょっとしてその領域（エリア）を踏破したんですか！？」

俺は慌てて尋ねると、氷室先輩は無言で頷いた。

い、いやいや！？　あの領域（エリア）の推奨レベルは六十五なんだぞ！？

「い、一体どうやって……！？」

「いえ……もちろん、私もつい最近までは一番最初に出現する幽鬼（レブナント）を【ワンショット】で狙撃して倒すことで、コツコツとレベル上げをしてました。ですが」

氷室先輩はそこで一拍置くと、顔を上げてジッと俺を見た。

「［ポリアフ］にクラスチェンジをしたことで劇的に強くなった私は、先程みなさんも見た【スナイプ】で、先日一気に踏破しました」

そうか……確かにあの【スナイプ】なら、幽鬼（レブナント）に近づく隙さえ与えずに倒すことができる。

それに“葦原中国”領域（エリア）は、光属性と闇属性がメインの領域（エリア）。視界を奪うなどの状態異常系のスキルや高威力のスキルを持つ幽鬼（レブナント）が多い中、遠距離攻撃で安全に倒すことは、一番理にかなっている。

とはいえ。

「氷室先輩も、かなり無茶をしますね……」

「ふふ……弱かった私は、人一倍積み重ねることしかできませんから……それに、あなたが与えてくれたこの力を確かめたかったんです。以前の私と比べて、どこまで進むことができるのか……あなたの隣に立って、支える資格があるのかを」

氷室先輩は胸にそっと手を当て、瞳を閉じて柔らかい表情を浮かべた。

ううう……氷室先輩の気持ちはメッチャ嬉しいけど、その、好感度が大変なことに……。

「むううううううう！　な、ならこの私も、君が踏破したというその領域（エリア）、ソロで踏破してみせるとも！」

「ワ、ワタクシだって……ワタクシだって！」

いやいや二人共、何言ってるの!?

「せ、先輩、待って下さいよ！　サンドラも落ち着け！　もちろん氷室先輩が踏破したっていう領域（エリア）には行くけど、当然、この四人で

行くから！　ソロでなんて絶対に駄目だから！」
「な！？　ど、どうしてだ！　氷室君がソロで踏破した以上、私もそうしなければ立つ瀬がないじゃないか！」
「そ、そうですわヨ！　そうじゃないと、ワタクシがアナタの隣に並ぶ資格ガ……！」

俺は二人をなだめるが、一向に話を聞かず、ずい、と詰め寄ってくる。

しかも、俺の隣に並ぶ資格ってなんだよ……！

「二人共聞いてくれ！　俺の隣に並ぶのに、資格とかそんなモンないから！　そもそも俺は、二人にはこれからも、俺の隣にいて欲しいだけなんだから！」
「「っ！」」

ああもう……恥ずかしい……。
だけど、これが俺の本心だ。
俺は……ずっと俺を信じてくれる、見ていてくれる二人に、傍にいて欲しいんだ。

だから。

「……俺はそんなくだらない意地みたいなモンで、二人が危険をさらすようなこと、ゴメンだからな……」

そう言うと、俺はプイ、と顔を背けた。
二人のその無駄な覚悟と決意に、少しだけ怒っていたから。

「あう……す、すまない……」
「ゴメンナサイ……」

すると、二人は珍しくシュン、と俯いてしまった。
ハア……しょうがない、なあ。

「あう!?」
「フエ!?」
「あーもう！　ホラ、サッサと祠に行って、氷室先輩に【火属性反射】と【氷属性反射】のスキルを取得してもらいますよ！」

俺は俯く二人の頭を少し乱暴に撫で、ぶっきらぼうにそう言った。
二人には、落ち込んでほしくないから。

「あう……ふふ……分かったよ」
「モウ……ヨーヘイのバカ……」

二人は頬を少し赤くしながらはにかむ。
はは……やっぱり二人は、そんな表情のほうが好きだな。

「……私も、まだまだ足りませんね……（ポツリ）」
「？　氷室先輩？」
「……いえ、何でもありません」

少し暗い表情を浮かべた氷室先輩が気になったが、とりあえず、祠で氷室先輩に【火属性反射】と【氷属性反射】を取得してもらい、“アトランティス”領域及び“レムリア”領域の二回目の踏破を終えた。

覚悟と決意のはき違え（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

二人が家にやって来る（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

二人が家にやって来る

“アトランティス”領域（エリア）と“レムリア”領域（エリア）の二回目の踏破を終えた次の日の日曜日。

とりあえず“アルカトラズ領域（エリア）や氷室先輩が見つけたという”葦原中国“領域（エリア）の攻略は来週からにするとして、今日は先輩とサンドラの三人でいつものように”ぱらいそ“領域（エリア）でレベル上げをしている。

――斬ッッッ！

――ドオオオオオオンッッッ！

お、ちょうど二人が十体目のクイーン＝オブ＝フロストを倒したな。

というか、今日の二人の姿と殺伐としたアクションのギャップが半端ない。

というのも。

「あうあう……ふ、服は汚れたりしていないだろうか……」

「あ、汗はかいたりしてませんわよネ……？」

うん……二人共、この後は俺の家に来ることもあって、その……すごく可愛い服を着ているのだ。

先輩は白の長袖ブラウスに黒のロングフレアスカート、それにブーツといったコーデで、圧倒的なスタイルとも相まって、その……

最高に可愛い。

サンドラも、フリルのついた白のブラウスにモスグリーンのノースリーブの膝丈ワンピース、黒のストッキングにローファーという、まさに絵本の世界から出てきた妖精なんじゃないかっていうほど、その……良き。

正直言うと、俺の家はごく一般的な庶民の家なので、逆に二人が場違いすぎるんじゃないかって余計な心配をしてしまう。

「さあ！　後はもう一体の幽鬼（レブナント）を倒せば、その……も、望月くんの家に……あうあうあうあうあう！」

「フ、フエエエエ……先輩、余計なことを言わないでくださいまシ……」

二人はそんなことを言いながら両頬を手で押さえ、クネクネしている……。

「あー……［シン］……」

『ハイなのです……だけど、本当に二人共ちょっと残念なのです……』

［シン］は溜息を吐きながらキング＝オブ＝フレイムに突っ込むと、呪符で瞬殺した。

◇

「な、なあ望月くん、そ、その……手土産はルフランのスイーツで問題ないだろうか……？」

「エエ！？　先輩もルフランにしたんですノ！？」

「なななな!?　ひょっとしてサンドラもか!?」

学園を出て俺の家に向かう途中、先輩とサンドラは手土産の話でわちゃわちゃしている。

というか二人共、手土産とかいらないって言ったのに……。

『はう！　手土産はアイスが一番喜ばれるのです！　むしろ、アイス一択なのです！』

いや、それ喜ぶのお前だけじゃん。

そんなやり取りをしているうちに、とうとう俺の家に到着した。

「えーと、じゃあ……「ままま、待つんだ望月くん！　ちょ、ちょっとだけ深呼吸をさせてくれ！」」

家の中に入ろうと玄関の扉に手をかけたところで、先輩が待ったをかける。

「「スー、ハー、スー、ハー」」

先輩とサンドラが二人仲良く深呼吸をすると。

「もういいですか？」
「ううう、うむ！」
「モモモ、モチロンですワ！」

俺は一抹の不安を覚えながらも、玄関の扉を開けて二人を手招きすると。

「あらあら、いらっしゃい！」

なんと母さんは、既に玄関でスタンバっており、二人を笑顔で出迎えてくれた。

「あうあうあう！？　おお、お邪魔します！？」

「ソソソ、ソノ！　はは、初めましてなのですワ！」

とりあえず、二人は緊張で変な動きはしているものの、無事に顔合わせを済ませることができた。というか、先輩に関しては母さんと会うのは初めてじゃないのに……。

「ほらほら、ヨーヘイは二人を部屋にでも案内しなさい！　私は飲み物を用意してあげるから！」

「う、うん……」

母さんに促され、俺は二人を部屋へ……って。

「そそ、そうだ、お母様！　こ、これ、つまらないものですが……！」

「おお、お召し上がりくださいませ……！」

二人が同時に全く同じルフランの紙袋をずい、と差し出す。

「まあまあ、二人共ありがとう。じゃあ、飲み物と一緒に出そうかしら」

紙袋を受け取ると、母さんが俺にウインクした。

まあ、緊張している二人を気遣って、早く部屋に連れてけってことだろう。

「ホラホラ二人共、俺の部屋に行くよ」
「あう！　まま、待ってくれ！」
「ヨーヘイのお部屋……ヨーヘイの……」
まあ、挙動不審なサンドラは置いといて、とにかく俺は二人を部屋へと案内すると。
「「うわあああ……！」」
「はは、まあ特に何もない部屋だけど……」
俺の部屋をまじまじと眺める二人に苦笑しながらそう告げるが……はい、ウソです。二人が来るからって、メッチャ片づけました。
「ええと、空いてるところに適当に座ってくれればいいから……」
「う、うむ！　な、なら私はここに……！」
そう言うと、先輩は机の椅子に座る。
「ふふ……望月くんはここで勉強をしたりしているのだな……」
「あ、あはは～……」
すいません先輩……勉強に関しては、先輩の家でしている時間のほうが長いです……。
「ワワ、ワタクシはここにしますワ！」
サンドラはというと、俺のベッドにぽすん、と腰を掛けた。
「フフ……ヨーヘイはいつもここで寝ていますのネ……」

あー……スマン、サンドラ。お前が今撫でている場所では、いつも［シン］が寝ているぞ。

そんな二人を眺めていると。

「ヨーヘイ！　ちょっと下まで飲み物を取りに来てちょうだい！」
「了解！　……じゃ、じゃあ俺は、母さんから飲み物を受け取って来るよ」
「う、うむ」
「エエ……」

ということで、俺は部屋を出て母さんからお茶とケーキが乗ったお盆を受け取る。

「うふふ、二人共感じのいい子達ね」
「はは、それに関しては間違いないよ！」

母さんにそう返事すると、俺は部屋に戻……っ！？

『「「あ……」」』

先輩とサンドラ、そして［シン］が、クローゼットを開けてナニカを物色していた。

『はう！？　こここ、ここにマスターの大事なものがあるだなんて、［シン］は一言も言ってないのです！？　ホホ、ホントなのです！？』
「「［シン］！？」」

オニキスの瞳を泳がせて挙動不審極まりない［シン］が、聞かれもしていないのに勝手に自爆しやがった……。

というか、なんでお前が俺の大切なアレの場所を知ってるんだよ!?　上手く隠したと思ってたのに！

「ワワ、ワタクシはやめようって言ったんですのヨ!?」

「あう!?　ううん、裏切るなんてヒドイぞ!?」

……まあ、二人も共犯だってことは分かってますよ。

今度からは［シン］には絶対にバレないようにしよう。

俺は、強く心に誓った。

二人が家にやって来る（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

二人が家にやって来た！（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

二人が家にやって来た！

「ふふ……美味しいな」
「エエ！」
『んふふー、［シン］だけアイスにしてくれるなんて、お母様は分かっているのです！』

［シン］のリークによって先輩達が俺の部屋を物色するという、恐るべき事態から落ち着きを取り戻した俺達は、とりあえず母さんが用意してくれたお茶と先輩達が持って来てくれたルフランのケーキを食べていた。

なお、先輩達のお土産にはアイスなんて入ってないものの、母さんが［シン］のためにあらかじめ用意してくれたお高めのカップアイスを食べてご満悦である。

「と、ところで望月くんは、その……美味しいのか……？」

先輩は俺のタルトタタンをジーッと凝視しながら、おずおずと尋ねる。

食べたいんですね？　分かります。

俺は無言でス、とタルトタタンを差し出す。

「むむ！　そ、その……いいのか……？」

コクリ、と頷くと、先輩はぱあ、と笑顔を浮かべ、フォークで一口……いや、二口分を切り取って口に含んだ。

「ふふ……何とも言えんな……！」

どうやらお気に召したみたいだ。

「ヨーヘイ、ワタクシのプチーチエ・モロコーも美味しいですわヨ」

そう言うと、サンドラが俺の前にケーキを差し出してくれた。

「え？　いいの？」

「エエ、ヨーヘイには、その……ぜひ、ルーシの味を知って欲しいですもノ……」

「そっか、それじゃ遠慮なく……」

俺は一口サイズにケーキを切るとそれを口に運んだ。

お、クッキーのサクサク感にチョコのほろ苦さとバニラスフレの甘さと食感が合わさって……うん、俺これ好き。

「サンドラ、これすごい美味いな！」

「フフ……よかっタ……」

俺の感想を聞いたサンドラは、嬉しそうに微笑む。

「ですけド、ルフランってルーシのスイーツまで置いてあるって、ある意味すごいですわよネ……」

「まあなー……」

こう言っちゃなんだけど、俺達のいるこの世界はゲームの世界ってことらしいし、メインヒロインの一人であるサンドラの好感度アイテムを用意しておくっていうのは、当然……なのか？

ウーン……そもそも、この世界は俺達にとっては現実以外の何ものでもないわけであって、いくら『攻略サイト』で色々と理解してるとはいえ、受け入れられるかって言えば、それは別なんだよなあ……。

「？　望月くん、どうかしたか？」

「へ？　ああいえ、何でもありません」

「そ、そうか、それならいいんだが……」

……まあ、この辺はおいおい考えよう。

◇

「さあ！　たくさん食べてね！」

夕食の時間になり、俺達は母さんに呼ばれてリビングにやって来ると、テーブルの上には所狭しと並べられた料理の数々があった。

いや、母さんも張り切ったなあ……。

「あう！　いい、いただきます！」

「い、いただきますワ！」

二人は手を合わせると箸を取り、遠慮がちに取り皿に料理を乗せる。

「アレ？　そういえば父さんは？」

「いたら二人が可哀想だと思って、夜遅くまで帰ってこないように追い出したわ」

父さん……憐れだな……。

まあ、うちの家は母さんのほうが強いから、父さんも甘んじて受け入れるしかない、か。

「！　お、美味しいです！」

「ホントですわ！」

うん、どうやら二人共、母さんの料理を気に入ってくれたみたいだ。

「うふふ！　だけど、こうやって二人が美味しそうに食べてくれるところを見ると、まるで娘が二人いるみたいね！」

「あうあうあうあう！？」

「フエエエエエエ！？」

母さんの不用意な一言で、先輩とサンドラが顔を真っ赤にさせた。

そして、そんな母さんの表情はというと……あ、ニヤニヤしてやがる。コレ、絶対に二人をイジって楽しんでるだろ。

「それで……私としてはヨーヘイが普段は学園でどんな感じなのか、ぜひ二人に教えて欲しいんだけど？」

「か、母さん！？」

いや、ここで話題のネタを俺にシフトするの、やめてくれない！？

「あう……そ、そうですね……望月くんは、いつもひたむきで、努力家で、真っ直ぐに前を見続けて……そして」

先輩は視線を落として自分の左手を見つめると、“シルウィアヌスの指輪”にそっと触れた。

「そして、誰よりも優しい男の子です」

顔を上げ、その真紅の瞳を母さんへと真っ直ぐ向けながら、そう告げた。

最後に苦笑しながら、「まあ、少々勉学がおろそかになってしまうところが玉にきず、ですが」と付け加えたけど。

「フフ……お母様にこんなことをお話しするのは申し訳ないんですけド、ヨーヘイは本当にバカなんですノ。いつもお節介ばかりしテ、いつも見守ってくれテ、支えてくれテ……」

サンドラは視線を落とし、左手薬指の“リネットの指輪”を見つめる。

「そしテ……そっと背中を押してくれる、そんな素敵な男の子なんですワ」

そう言うと、サンドラは微笑みながら、アクアマリンの瞳で母さんを見つめた。最後に「何でも無自覚なところには、困りものですけド」なんて言葉を付け加えて。

「あらあら……こんな素敵な女の子二人から息子の話を聞かせてもらうなんて、母親冥利に尽きるわね」

「何言ってんだよ……母さんが言わせたんだろ」

そのせいで、今の俺は顔が熱くてしょうがないんだけど。

というか、今すぐベッドの中にもぐって引きこもりたい……。

◇

「うふふ、またいつでも来てね！　それはもう、自分の家だと思ってくれても構わないのよ？」

玄関で靴を履いた二人に、母さんがそう声を掛けた。

「あうあうあう！？　そ、その……また、ぜひお伺いします！」

「フエエエエ……ああ、ありがとうございますですワ！」

「それじゃ母さん、二人を送ってくるから」

母さんに向かって何度も頭を下げている二人を促し、俺は玄関を出た。

すると。

「「はあああああああ……」」

二人は大きく息を吐いた。

「もも、望月くん……その、わ、私は大丈夫だっただろうか……？」

「お。お母様に嫌われたりしてませんわよネ……？」

心配そうに尋ねる二人。

そんな二人の様子に、俺は思わず吹き出してしまう。

「プッ……あははは！　まさか！　母さんがあんなにご機嫌なの、初めて見たくらいですよ！　というか、相当二人のこと気に入ったみたいだったし！」

「！　ほ、本当か！」

「よ、良かったですワ……」

俺の言葉を聞いた先輩はぱあ、と笑顔を見せ、サンドラはホッと胸を撫で下ろした。

「だ、だけど、その……二人共、今日はありがとう……母さんに二人を紹介できて、嬉しかったよ……」

「な、何を言う！　お礼を言うのは私のほうだ！」

「そ、そうですわヨ！」

俺達はそんな押し問答をしていると。

「プ」

「「ププ」」

「アハハハハハハハハハ！」

ついおかしくなってしまい、お腹を抱えて笑ってしまった。

「あはは！とにかく、二人共また俺の家に遊びに来てよ！」

「ハハハハハ！　もちろんだとも！」

「フフフ！　当然ですワ！」

こうして、楽しく雑談をしながら俺は二人を送り届けると、真っ直ぐ家に帰った。

……その後、俺の大切なアレが二つ無くなっていたことについては、まあ……今度、二人に問い詰めるとしよう。

二人が家にやって来た！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

葦原中国（あしのはらなかつくに）領域（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

葦原中国（あしのはらなかつくに）領域

桐崎先輩とサンドラが家に来た日から一週間後の日曜日。

俺達は氷室先輩の案内の元、“葦原中国（あしのはらなかつくに）領域（エリア）”に来ていた。

「本当に、一本道だな……」

先輩がポツリ、と呟く。

領域（エリア）ボスまでへと続くその道は細く、明かりの灯った灯篭（とうろう）が等間隔で立ち並んでいる。

そしてその道の外側は、どこまでも続くかのような暗闇が広がっていた。

「この下には、一体何があるんですノ……？」

「……考えるだけ無駄だろ。そもそも、下に落ちたら一巻の終わりだからな」

下を覗き込むサンドラに、俺はそう告げてあまり道の端に行かないように促す。

だけど、もし俺達の中に高所恐怖症の奴がいたら、絶対にこの領域（エリア）は踏破できないだろうなあ……。

「それで……ここの領域（エリア）ボスまではどれくらいの距離があるんだ？　階層の数は？」

「はい。階層はここのみで、領域（エリア）までは最短で半日もあればたどり着けます」

「む、思ったより短いのだな」

氷室先輩の説明に、先輩は意外、といった表情を浮かべた。
だけど氷室先輩の言う通り、この領域（エリア）は二周目特典の五つの領域（エリア）の中で最も短い。
まあ、それには理由があるんだけど、今はこの領域（エリア）の踏破だけが目的なので、そこは置いておこう。

「さて……それでは私が先導しますので、ついて来てください」

氷室先輩を先頭に、俺、先輩、サンドラの順で進んでいく。
すると。

「……来ます」

突然立ち止まった氷室先輩は、［ポリアフ］を召喚して前方を見据える。

「ふふ……全部で四体、ですか。舐められたものですね。【スナイプ】」

氷室先輩がニタア、と口の端を吊り上げ、肩に乗る［ポリアフ］はスナイパーライフルを構えた。

「ファイア」

――タン、タン、タン、タン。

四発の銃声が領域（エリア）内に響いたかと思うと、氷室先輩はまた歩き始めた。

「え、ええと……倒したんですか？」
「ええ。三体は奈落の底に落ち、一体は通路に転がってますよ」
氷室先輩はそう言うけど、俺達にはその幽鬼（レブナント）の姿は一切見えない。
半信半疑のまま進んでいくと。
「「「あ……」」」
氷室先輩の言った通り、この領域（エリア）に出現する幽鬼（レブナント）、“イビルアイ”が通路に転がっており、たった今、幽子とマテリアルに姿を変えた。
「す、すごい……」
「ひ、氷室先輩はワタクシ達が見えないような離れた距離と暗闇の中で、どうやって幽鬼（レブナント）を正確に把握できたんですノ……？」
「それは［ポリアフ］のスキル、【オブザーバトリー】のおかげですね」
そう言って氷室先輩は［ポリアフ］の顔を指差すと、［ポリアフ］の右眼には時計技師が使うルーペのようなものがかかっていた。
「このレンズを通じて、半径十キロメートルの視野と精霊（ガイスト）、幽鬼（レブナント）の解析が可能です」
「そ、そんなことガ……」
氷室先輩の説明に、サンドラが思わず絶句する。
俺も氷室先輩からあらかじめ教えてもらっていたとはいえ、そのすごさを目の当たりにして驚くばかりだ。
「それに加えて、【スナイプ】の有効射程は三キロメートルですか

ら、幽鬼（レブナント）に気づかれる前に射殺することで、私はこの領域（エリア）を踏破することができました」

「そ、そうですか……」

確かに暗闇というハンデがないのなら、障害物が何もない“葦原中国”領域（エリア）は氷室先輩の独壇場だ。

これなら、氷室先輩が高難易度のこの領域（エリア）をソロで踏破できたのも頷けるな……。

そして俺達は、氷室先輩を先頭にさらに道を進んでいく。

途中の幽鬼（レブナント）も、その姿を現わす前に氷室先輩が全て倒してしまうので、俺達は何もやることがなかった。というか、氷室先輩の背中が頼もし過ぎるんだけど。

『はうー……退屈なのです……』

「コラ、［シン］。そういうことを言っちゃいけません」

つまらなそうに道に転がる小石を蹴りながら歩く［シン］をたしなめる。

「だが、［シン］の言うように、これでは身体がなまってしまうな」

「本当ですわネ」

そう言うと、先輩とサンドラが苦笑した。

いや、氷室先輩のおかげで安全に進めてるんだからいいじゃん。

「ふふ、では領域（エリア）ボスは、【スナイプ】による遠距離攻撃をやめて近接戦闘を行いますか？」

クスクスと嗤（わら）いながら、氷室先輩はそう提案する。

イヤ、その表情は本当に怖いですから。

「うむ！　ぜひそうしよう！」

「エエ！　やっと［ペルーン］の出番ですワ！」

すると二人は笑顔になり、肩を回してアップを始めた。

よっぽどフラストレーション溜まってたんだなあ……。

だけど……ハッキリ言ってしまうと、多分俺達……というか、先輩とサンドラは苦戦するだろうなあ。

この“葦原中国”領域（エリア）のボス、“天津甕星（あまつみかぼし）”に。

葦原中国（あしのはらなかつくに）領域（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天津甕星（あまつみかぼし）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

天津甕星（あまつみかぼし）

俺達はさらに道を進み、とうとう領域（エリア）ボスである“天津甕星（あまつみかぼし）”のいる祭壇へとたどり着いた。

「……あれが、ここの領域（エリア）ボス、か」

「はい」

藤堂先輩の呟きに、氷室先輩が頷く。

腰まである黒髪で容姿端麗な天津甕星（あまつみかぼし）は、巫女装束を身にまとい、その両手に流星錘（すい）をたずさえて、祭壇の上で目を瞑（つむ）りながらたたずんでいた。

……まあ、氷室先輩からすれば、的にしてくださいと言っているようなモンだな……って!?

「ふふ……ならば、参る！」

そう叫ぶと、藤堂先輩は獰猛な笑みを浮かべながら、天津甕星（あまつみかぼし）へと突撃していった。

いや、もう少し様子を見てからにしましょうよ!?

すると天津甕星（あまつみかぼし）はゆっくりと目を開き、流星錘を振り回して「関聖帝君」へと投げつけた。

「フッ！」

「関聖帝君」は青龍偃月刀で弾こうとしたところを、鎖で上手く

からめとられてしまう。

「ふふ……この［関聖帝君］と力比べとは、いい度胸だ！」

『ッ！？』

そう言うと、［関聖帝君］は青龍偃月刀を力任せに振り回し、天津甕星が体勢を崩した。

「隙ありですワ！」

いつの間にか天津甕星に肉薄していたサンドラの［ペルーン］が、巨大なメイスを高々と振り上げていた。

「食らいなさい！　【裁きの鉄槌】！」

メイスを中心に、稲妻がほとばしる。

そして、今まさに天津甕星の頭上へと振り下ろされようとした、その時。

「ッ！？　ナッ！？」

天津甕星が、一瞬で藤堂先輩に入れ替わり、［ペルーン］は慌ててメイスを止めた。

そう……これこそが天津甕星のスキル、【転身】。

敵と自分を瞬時に入れ替え、形勢を逆転してしまう面倒なスキルで、その有効範囲は流星錘が届く範囲の十メートル。

特に足場が狭く、一歩間違ったら奈落へと落ちてしまうこの“葦原中国”領域においては、まさにうってつけのスキルだ。

当然、天津甕星（あまつみかぼし）の能力を解析済みの氷室先輩は、その有効範囲の外に位置取りをしている。

「先輩！　サンドラ！　ソイツは俺達に任せてください！」

「エエ！　お願イ！」

「むう！？　だ、だが……！」

俺がそう告げると、サンドラはすぐに引いてくれたが、先輩は悔しそうに唇を噛んだままだ。

だけど、たとえ『ガイスト×レブナント』最強の先輩だって相性ってものがあるし、苦戦することだってある。

だから。

「先輩！　俺達はチームなんです！　だから、俺に頼ってください！　もちろん、俺じゃどうにもならない時は、全力で先輩に頼りますから！」

「っ！　……分かった！」

俺の言葉の意味を理解してくれたのか、先輩はようやく天津甕星（あまつみかぼし）から距離を取った。

「さて……覚悟しろよ？　言っとくが……俺の［シン］はそう簡単じゃないぞ！」

『行くのです！』

その言葉を合図に、［シン］は一気に天津甕星（あまつみかぼし）に詰め寄ると。

『ッ！』

天津甕星（あまつみかぼし）が当然のように【転身】によって［シン］と体を入れ替え、勢い余った［シン］は祭壇を飛び越えてそのまま奈落の暗闇の中に溶けて行った。

『……』

そんな［シン］を眺め、天津甕星（あまつみかぼし）は嘲笑（ちょうしょう）を浮かべる。

だけど……甘いんだよ！

『はうはうはうはうはうー！　【神行法・跳】！』

叫び声と共に［シン］が奈落の中から飛び上がり、そのまま空中を駆ける。

まあ、【転身】なんてスキル、［シン］には何の意味もないんだよ！

『ッ！』

すると今度は、流星錘を投げつけて牽制しつつ、本命である魔法を発動した。

あれは……即死効果のある闇属性上級魔法の【デスブレイク】か。

はは、馬鹿な奴。

「領域（エリア）ボスに俺の言葉が理解できるかどうかは分からないけど、とりあえず教えてやる。［シン］には【状態異常無効】のスキルがあるから、オマエの【デスブレイク】は無意味だよ」

『ッ！？』

そう告げると、天津甕星（あまつみかぼし）は明らかに動揺する仕草を見せた。

へえ、領域（エリア）ボスは言葉の意味が分かるのか……これは新しい発見だ。といっても、馬鹿なことには変わりないけどな。

だって。

『背中がお留守なのです！』

俺の言葉に気を取られている隙に、［シン］は天津甕星（あまつみかぼし）の背後を取り、ペタリ、と呪符を貼り付けていた。

『【裂】』

『アアアアアアアアアアッッッ！？』

天津甕星（あまつみかぼし）の全身がズタズタに引き裂かれ、絶叫がこだまする。

「さあ［シン］！　トドメだ！」

『ハイなのです！　【雷】！』

祭壇の上でのたうち回る天津甕星（あまつみかぼし）に呪符を貼り付けると、その全身を紫電が駆け巡り、不規則な痙攣（けいれん）と共に黒色の煙がくすぶった。

そして、暗闇をつんざくような叫び声が止み、天津甕星（あまつみかぼし）は幽子とマテリアルとなった。

『はう！　マスター！』

［シン］は一気に俺の所に飛んでくると、勢いよく飛びついた。

「はは！　さすがは俺の［シン］だ！」

『はうはう！　当然なのです！　だから、たくさんたくさん褒めて

欲しいのです！』

そんなおねだりをする［シン］を抱きしめ、俺はこれでもかというほど、その頭を撫でてやる。

『えへへー、最高のごほうびなのです……』

［シン］は嬉しそうに目を細めながら、俺の胸に何度も頬ずりをした。

◇

「うむ！　【闇属性反射】を手に入れたぞ！」

祭壇の裏側にある祠（ほこら）に祀られていた水晶玉に触れた先輩が、嬉しそうに宣言した。

「つ、次はワタクシですワ！」

「はは、別に慌てなくても水晶玉は逃げないから」

「で、ですけド……モウ」

俺は苦笑しながらそう言うと、サンドラが恥ずかしそうにして口を尖らせた。

「そういえば、氷室先輩はもう【闇属性反射】を取得済みなんですよね？」

「いえ……実は、水晶に触れたらスキルを手に入れられるということを、先日の“アトランティス”領域（エリア）で初めて知りましたので、その……」

そう言うと、氷室先輩は少しバツが悪そうに視線を逸らした。
あー……まあ、知らなかったらそんな怪しい水晶玉、触ったりしないかー……。

「ですがヨーヘイ、これでこの領域（エリア）も踏破ですわネ！」
「ああ……これでメイザース学園との交流戦に向けて、できる限りの準備はできたな」
「エ……？　どういうことですノ？」

俺の言葉を耳聡く聞いたサンドラが、一瞬不安そうな表情を浮かべる。
おっと、余計なこと言っちまったな。

「はは……いや、ひょっとしたら向こうの代表に【闇属性魔法】スキル持ちの精霊使い（ガイスト）がいるかもしれないだろ？　まあ、準備しておくに越したことはないって意味だよ」
「ア、そ、そうですわネ……」

サンドラは納得したように頷くけど……スマン、今の言葉は半分だけ嘘だ。
本当は、交流戦の代表の一人が、いずれ最強の【闇属性魔法】の精霊使い（ガイスト）だってことを知っている。

それこそが……メイザース学園生徒会会計の一年生、“土御門シキ”。

俺は来る彼女との戦いを思い浮かべ、ギュ、と拳を握った。

天津甕星（あまつみかぼし）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　開幕（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　開幕

先輩とサンドラが俺の家に来た次の日の月曜日。

「ふふ……望月くん、今日の体調は万全か？」

「はい！　もちろんです！」

学園に向かう通学路の途中、隣で微笑む先輩に向け、グッ、と親指を突き立てて笑顔で答える。

今日から三日間、メイザース学園との団体戦に挑むクラス代表を決める選考会が行われ、しかも初日の今日は一年生のクラス代表を決めるんだから、気合いも入るってモンだ。

とはいえ。

「ま、まあ、ちょっとウチのクラスは強敵が多すぎですけどね……」

俺は、前のほうで加隈に追いかけ回されている立花を見ながら苦笑した。

いや、俺がクラス代表になるためには、サンドラやプラーミャ、それに主人公の立花を倒さないといけないんだからな。というか、ウチのクラスだけ明らかにバランスおかしいだろ。

「だが、まずは彼等を倒さねばクラス代表にもなれん……言わなくても分かっていると思うが、君が最強を目指すのなら、彼等もまた避けては通れない壁なのだからな」

「はい」

そうだな……サンドラ達は大切な仲間なのと同時に、お互いに最強を目指すライバルなんだ。
そして、それは隣にいる先輩も。

「ん？　私の顔を見てどうした？」
「はは……それはもちろん、気合いを入れるためですよ」

そうだとも。俺が最強を目指す理由……それは、この先輩を最悪のシナリオから救い出して、一緒にハピエンを迎えるためなんだから。

「それにしても、学園も気が利きますよねー！　授業を免除して、各学年の選考会を観戦できるようにしてくれたんですから」

俺は何の気なしにそう話すと。

「あう！？　そそ、そうだな……」

焦りの表情を見せた先輩が、フイ、と俺から視線を逸らした。
あー……多分コレ、先輩が学園長にかけ合って、観戦できるようにしたんだな……。

だったら。

「……先輩、見ていてください。俺、絶対に勝ち上がってみせますから……！」
「ふふ、もちろんだとも。期待してるぞ」

そう言うと、先輩が俺の背中をバシン、と叩いた。

◇

「えへへ、望月くんとは決勝で戦いたいなあ」

朝のＨＲを終えてグラウンドに向かう途中、隣の立花がはにかみながらそんなことを言った。

「アラ……残念ですけと、決勝でヨーヘイを倒すのはこのワタクシですわヨ！」

俺を挟んで立花の反対側にヒョコッと現れたサンドラがそう宣言する。

ははは、サンドラも気合十分だな。

「キャッ！？」

「フフ……今日はこの私（ヤー）が全員地面に這いつくばらせてあげル。そして、サンドラにはこの私（ヤー）の大切さを再認識させるんだからラ！」

後ろから突然サンドラに抱きつくと、プラーミャはニヤリ、と口の端を持ち上げた。

「おーおー、俺は一―三でなくてよかったぜ。つか、そうじゃなかったら立花と一緒に代表に選ばれねーしな」

などと肩を竦（すく）めながら、ヤレヤレといった表情でやってきた加隈。

というかお前、自分のクラスに戻れよ。

「もー！　なんで加隈くんがここにいるのさ！　自分のクラスに戻りなよ！」

「そうヨ！　なんでアンタがここにいるのヨ！　シッシッ！」
「ヒドイ！？」
うわあ……同じチームの二人から集中砲火浴びてやがる。
コイツのチーム内での立ち位置って一体……。
「わ、分かったよお……」
背中に哀愁を漂わせ、加隈はすごすごと自分のクラスへと戻って行った。うん、まあ……頑張れ。
で、俺達はグラウンドに着き、先生の指示に従って整列する。
俺は周りをキョロキョロと見回すと……オーオー、どいつもこいつも気合入った表情してるなあ。
「……それでは、ここに選考会の開会を宣言します。生徒のみなさん、頑張ってください」
学園長の挨拶と開会の宣言が終わり、各クラスは会場となる舞台へと向かう。
すると。
「あ……！」
三年生の列の中にいる先輩と目が合った瞬間、先輩は微笑みながら手を振ってくれた。
はは……先輩、見ててくださいね。
「さあ！　それじゃ、予選となるバトルロイヤルのくじ引きをするぞ！　出席番号順に並んで、くじを引くように！」

妙に張り切っている葛西先生の指示に従って並ぶと、列は順に進んで行き、いよいよ俺の番になる。

「えーと……俺は四番ですね」

「お、そうか！　望月……頑張れよ！」

そう言うと、葛西先生はバシン、と背中を叩いて激励してくれた。

うう……本当にウチの担任、いい先生だなあ……。

「望月くんは何番だった？」

すると、先にくじを引き終えた立花が尋ねてきた。

「おう、俺は四番だったよ」

「ホント！　ボクは一番だったから、別になれたね！」

俺が答えると、立花はぱあ、と笑顔を見せ、嬉しそうに俺の手を握りやがった……。

というか立花の奴、なんでこんなに手が柔らかくてすべすべしてやがるんだよ。

「ヨーヘイ！　どうだったんですノ！」

今度はサンドラとプラーミャがやって来て、同じように尋ねる。

「俺は四番だったけど、サンドラとプラーミャは……って」

そう答えた瞬間、プラーミャが口の端を持ち上げた。

「フフ……私（ヤー）も四番ヨ。ヨーヘイ、覚悟しなさイ！」

はは……まさか最初のバトルロイヤルで、いきなりプラーミャとかよ。

俺は思わず苦笑した後、プラーミャの前に立った。

「そうだな。お前こそ、俺に負けて泣いたりするなよ？」

「アラ、言うじゃなイ。マア、その言葉はそのまま返すけド」

俺とプラーミャは、お互いクスクスと笑い合った。

クラス代表選考会　開幕（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　予選①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　予選①

「それまで！　一―一の六組目の勝者、“賀茂（かも）カズマ”！」

一年の学年主任が手を高々と掲げ、勝ち名乗りを上げる。

ちなみにこの賀茂って奴、『ガイスト×レブナント』にはその名前すら出てこない、モブ以下だったりする。

まあ、俺みたいにクソザコモブとして主人公にやられるためだけの存在か、それとも、その他大勢以下だけどやられるようなこともない存在か、どちらがいいのかは難しいところだ。

そんな風にしげしげと眺めていると。

「あ！　次は加隈くんみたいだよ！」

立花が指差すその先には、今まさに舞台に上がろうとする加隈の姿があった。

そういえば、この一―二も悠木とクソ女もいなくなって、しかも一学期の悪行が学園中に知れ渡り、相当肩身の狭い思いをしてるんだよなあ……知らんけど。

「では、始め！」

学園長の合図で、全員が一斉に精霊（ガイスト）を召喚する……って、加隈のあの精霊（ガイスト）は！？

どこか人を食ったようなニヒルな表情の女性で、タロットカード

の『愚者』のような出で立ち。
あれこそまさに、『まとめサイト』にあった加隈の精霊（ガイスト）がクラスチェンジした姿……［ロキ］そのものだった。

「な、なあ立花……ひょっとして加隈の奴……」
「うん。加隈くんは“アルカトラズ”領域（エリア）でクラスチェンジを果たしたんだ」
「そ、そうか……」

でも、加隈は『攻略サイト』の情報通り、本来のクラスチェンジ後の精霊（ガイスト）である［ロキ］を選択したってことか。

立花の、仲間として。

「……ということは、ひょっとして立花とプラーミャも……？」
「えへへ……うん、ボク達もクラスチェンジをしたよ」

立花はモジモジしながらはにかむ。
はは……面白くなってきたじゃねーか……！

「ますますお前達と戦うのが楽しみになってきた……だけど」

俺は一拍置き、すう、と息を吸うと。

「コッチも、お前達の知ってる俺達じゃない」

そう告げて、俺は不敵な笑みを浮かべた。

「あはは、ボクも楽しみにしてるよ」
「おう！」

そうして俺と立花がお互いの拳をコツン、と合わせていると。

「それまで！　一―二の一組目の勝者、加隈ユーイチ！」

学年主任の勝ち名乗りが耳に飛び込んできた。

あ、ヤベ。加隈の試合、全然見てなかった……って、あーあ……。

加隈の奴もそれに気づいたのか、ガックリとうなだれながら舞台を降りていった。

◇

『次に、一―三の一組目の試合を始めますので、出場者は舞台の上に上がってください』

グラウンド内でアナウンスが流れ、出場するクラスメイト達が舞台へと向かう。

「じゃあ、行ってくるね」

「おう、頑張れよ」

「うん！」

俺は激励の意味を込めて立花の背中をポン、と叩くと、立花は力強く頷いた。

さてさて……それじゃ、立花の精霊（ガイスト）の分析でもさせてもらおうかな。

などと考えながら腕組みをしていると。

「フフ……余裕ネ」
「お、プラーミャにサンドラ」
後ろから現れたのは、プラーミャとサンドラだった。
「ソッチこそ、対戦相手の俺に声なんかかけてきて余裕じゃねーか」
「もちろんヨ。だって、私（ヤー）はアンタに勝つんだかラ」
そう言うと、プラーミャが口の端を持ち上げる。
クラスチェンジを果たし、かなり自信があるんだろう。表情や態度からも、そんな様子が窺（うかが）えた。
「それで、サンドラは俺とプラーミャのどっちを応援するんだ？」
俺はサンドラにそう尋ねたけど……うわあ、ちょっと俺、嫌な質問しちまったなあ……。
「あ、わ、悪い……今の質問は無し……「フフ、ワタクシはどちらが勝っても構いませんわ」」
質問を取り消そうとしたところで、サンドラは俺の言葉を遮って言い放つ。
「だっテ……勝って代表に選ばれるのは、ワタクシですもノ」
「「っ！？」」
胸にそっと手を当てて微笑むサンドラに、俺とプラーミャは息を飲んだ。
はは……上等！

「フ、フフ……！　ヨーヘイの次は、“アルカトラズ”領域（エリア）での借りを返させてもらうワ！　サンドラ！」
「今回も返り討ちですわヨ！」
二人はバチバチと睨み合う……って。
「その前に、立花の試合が始まるみたいだからソッチに集中しようぜ」
「「ア……」」
俺の言葉で我に返った二人は、仲良く並んで舞台の上に注目すると、審判の先生がちょうど舞台に上がってきた。
だけど。
「それでは、ただいまから一―三の一組目の試合を始めます」
よりによって、一―二の担任の“伊藤アスカ”が審判かよ!?
学年主任の先生はどうしたんだ!?
俺は辺りを見回すと、学年主任の先生は本部テントでパイプ椅子に座りながら学園長や教頭達と談笑していた。
この予選、嫌な予感しかしないんだけど……。
「では……始め！」
そんな一抹の不安を覚えている間に、立花の試合が始まった。

クラス代表選考会　予選①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　予選②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　予選②

「では……始め！」

一抹の不安を覚える中、一―二の担任である伊藤アスカの合図で立花の試合が始まった。

「さあ、おいで……ボクの精霊（ガイスト）」

主である立花の召喚に応じ、一体の精霊（ガイスト）がまるで立花を守るかのように姿を現したが、もちろん、あの［ジークフリート］じゃない。

それは。

「［伏犠（ふっき）］……」

俺はその精霊（ガイスト）の名をポツリ、と呟く。

『ガイスト×レブナント』の初回予約特典として封入されているコードを入力することで手に入る、主人公のために用意されたアバター。

その姿は、精悍な顔立ちをした青年が中華風の赤い甲冑に身を包み、その両手には不釣り合いなクレイモアを携えていた。

とはいえ、［伏犠］はあくまでアバターでしかなく、その能力は［ジークフリート］と全く同じ。

これだと、せっかくクラスチェンジしたのに何の恩恵もないんじゃ……。

「えーと……みんな、かかってこないの？」

そんな俺の不安とは裏腹に、立花は頬を掻きながら苦笑すると、対戦相手のクラスメイト達に声を掛けた。

その余裕の態度は、その四人のクラスメイトの逆鱗に触れたようだ。

「立花くん、いい度胸じゃない！　私達四人が同時に相手したら、いくら立花くんでも無理でしょ！」

「そうだぜ！　調子に乗り過ぎなんだよ！」

そう叫ぶと、四人の精霊が一斉に襲い掛かる。

だけど。

「「「「っ！？」」」」

「あはは、ゴメンね？」

立花がはにかみ、［伏犠］はそのクレイモアを無造作に振り回すと、四人の精霊は軽々と舞台の端まで吹き飛ばされた。

「っ！　……その剣、相当厄介ね」

「えへへ、でしょ？」

悔しそうな表情を浮かべながら睨む女子生徒に対し、立花は嬉しそうに微笑んだ。

俺には、ただ剣を振り回しただけにしか見えなかったけどなあ……。

「クソッ……！　俺の精霊の身体に触れてないのに弾き飛ばされた

ぞ……！」
「っ！？」

苛立たし気に放った男子生徒の言葉に、俺は息を飲んだ。
触れてないないのに弾き飛ばされたって、どういうことだ！？

「みんな、離れて攻撃するぞ！」

四人は立花から距離を置き、一斉に魔法による攻撃を仕掛けた。

「あはは、【玄武】」

［伏犠］は両手を前にかざすと、四人の精霊（ガイスト）が放った魔法がその手前で全て霧散した……って！？
そこには、［伏犠］の前方を完全に覆うかのように亀の甲羅のような盾が浮遊していた。

「チクショウ！　なんだよその盾は！」
「これ？　これは［伏犠］のスキルの一つで【玄武】と言ってね、どんな攻撃でも防ぎ切ってくれるんだ」

へえ……つまり、サンドラの精霊（ガイスト）、［ペルーン］の【ガーディアン】みたいなモンか。
でも、【ガーディアン】と違って前方だけしか展開できないみたいだし、汎用性（はんよう）はそこまで高くなさそうだな。

というか……なんでただのアバタースキンが変わっただけなのに、［ジークフリート］とスキルまで変わっちまってるんだよ！？

「あはは、【青龍】」

立花がそう告げると、［伏犠］のクレイモアの刃に青色の龍がまとわりつくようにとぐろを巻いていた。
あ、さっきアイツ等を弾き飛ばしたのは、ひょっとしてあの青い龍の仕業か？
そして［伏犠］がまた無造作に二、三回クレイモアを振ると。
「グアッ！？」
「キャッ！？」
クラスメイトの二人が、突然吹き飛ばされて場外へと落ちた。
「クソオオオオオオッッ！」
残る二人のうち、男子生徒のほうがたまりかねて［伏犠］へと突っ込む。
「食らえっ！　【アイスバウン……「あはは、ゴメンね」……なあっ！？」
だが、立花の［伏犠］は相手の精霊（ガイスト）をクレイモアの腹で横薙ぎに叩きつけると、先の二人と同じように場外へと弾き飛ばされた。
「うん……あと一人、だね」
そう言うと、舞台の上に残る最後の一人……クラスメイトの“菊池（きくち）ショウコ”を見据えた。
「クッ……！　ま、負けない！　私だって……私だって、代表にな

りたいもん！　立花くんにも、サンドラさんやプラーミャさんにも、負けたくない！」

菊池さんは立花を睨みつけ、会場に響き渡るほどの声で叫ぶと、彼女の精霊（ガイスト）は翼を広げて飛翔し、キッ、と立花を見据えた。

あー……だけど、その中に俺の名前は含まれてなかったなあ……まあ、俺も元々、クソザコモブ……「そして！」……お、まだ何かあるのか？

「そして……私だって、これまで精一杯頑張ってきたんだ！　毎日！　毎日！　あの、望月くんみたいに！」

「っ！」

ここで、まさか俺の名前が出てくるなんて思わなかった。

というか……俺って知らないうちに、誰かの目に留まってたりしてたんだな……。

「……ヨーヘイ」

「あ……サンドラ……」

見ると、サンドラが俺を見つめていた。

それも、すごく……誰よりもすごく、嬉しそうに微笑みながら。

「分かっタ？　ヨーヘイって、アナタが思っているよりも、もっともっとすごいんですのヨ？　だっテ……ヨーヘイですもノ！」

はは……クソザコモブの俺なんて、先輩とサンドラ以外、誰も気に掛けてないと思ってたんだけどなあ……。

「だかラ、ヨーヘイ……これからも、ワタクシ達は目一杯アナタを

追いかけるんだかラ！」
「あ……うん……」
俺は俯きながら、サンドラにそう返事するのが精一杯だった。だって、今の俺の顔、誰にも見せられないほど熱いし、絶対に変な顔してると思うから。
そして。
「それまで！　勝者、“立花アオイ”くん！」
結局、菊池さんは場外に飛ばされ、立花が第一組の予選通過者となった。
それでも、最後に見せた菊地さんの意地は、俺の……クラスのみんなの胸を打った。
「ホラ……せっかくですシ、手を貸してきてあげなさいナ」
そう言うと、サンドラがポン、と俺の背中を押した。
「はは、ちょっと行ってくるよ」
俺は場外で倒れる菊池さんの傍へ駆け寄り、ス、と手を差し伸べた。
「菊池さん」
「あ、あはは……負けちゃったー……やっぱり立花くんは強かったよー……」
「そっか。でも、菊池さんもナイスファイト」

菊池さんが俺の手を取って立ち上がると、ポンポン、と服についた汚れを払う。

「しょうがないから、望月くんが仇を取ってよ。私達の代表として」

「！　ああ……！」

そうだな……立花やサンドラ、プラーミャは『ガイスト×レブナント』の主人公やメインヒロインで、俺や菊池さんは、基本的にただのモブ、だもんな。

じゃあ……そのモブの矜持ってヤツ、この俺が見せてやる！

期待の眼差しで見つめる菊池さん達に応えるように、俺はギュ、と拳を握りしめた。

クラス代表選考会　予選②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　予選③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　予選③

「えへへ！　ボクの試合、見てくれた？」

菊池さんと別れてサンドラ達の元へと戻ると、試合を終えたばかりの立花が笑顔で駆け寄ってきた。

「おう！　それにしてもお前の精霊（ガイスト）、［ジークフリート］の時から大分変わったな！」

「うん！　そうなんだ！　でも、【チェンジ】と【竜の息吹】、【竜の恩恵】は今まで通り使えるよ！　それに……新しいスキル、【四神】はホントにすごいんだ！」

「【四神】……ひょっとして、さっきの盾とクレイモアにまとわりついていた、龍のことか？」

俺はおもむろにそう尋ねると、立花はゆっくりと頷いた。

「……で、【四神】って言うくらいなんだから、あと二つ能力があるんだろ？」

「えへへ、まあね。できればそれは、望月くんと戦うまでは温存しておきたいなあ」

そう言うと、立花はチラリ、と俺の顔を覗き込んだ。

というか、相変わらず立花の上目遣いの破壊力はすごいな。加隈がやられちまったのも頷けなくもない。

「はは、ひょっとしたらトーナメント一回戦で当たるかもしれないけどな」

「あはは、それはないよ」
「？　どうしてだ？」

やけに立花が自信満々に答えるので、俺は思わず聞き返した。
あんなのクジで決めるんだから、運要素しかないだろ。

「だって……ボクと望月くんは友達同士だけど、ライバルでもあるんだから。そういう運命なんだよ」

立花はその翡翠の瞳に想いを込め、ジッと俺を見つめた。
だけど……運命、か……。

「悪いけど、俺はそんな運命なんてクソみたいなモンは信じてないんだ。だから、立花は俺の親友でライバルだってことは間違いないけど、それでも、俺は運命なんて認めない」

そうだとも。この俺が運命ってヤツを認めちまったら、それは、先輩の不幸な未来を受け入れるってことなんだ。
だから、もしその運命ってモンがあるなら、俺は全部ブチ壊してやる！

「あは……望月くんらしいね。だから、ボクは……」
「？　立花？」
「あ……ううん、何でもないよ！」

立花は少しかぶりを振ると、頬を少し赤らめながらはにかんだ。
いや、そういう表情を易々と俺に向けるな。俺だからいいけど、加隈にそんなモン見せたら、絶対にお前、つきまとわれるぞ……って、それはもう手遅れか。

その時。

「むむ！？　も、望月くんの試合はまだ終わっていないだろうな！？」

焦った表情の先輩が、俺達のところに駆け込んできた。

「え、ええ、俺の試合は四試合目なので……」

「そ、そうか……良かった……」

俺がおずおずと答えると、先輩はホッと胸を撫で下ろした。

というか、なんでそんなに慌ててたんだろう。

「いえ……会長は、明日の二年の選考会の関係で、学年主任から呼び出しを受けてしまったんです」

「うおっ！？」

突然、後ろから音もなく氷室先輩が現れ、俺は思わず仰け反ってしまった。

「……今の望月さんの反応は、少々傷ついてしまいますね」

「うあああ！？」

ひ、氷室先輩、普段は無表情なのに、こんな時に限ってそんな寂しそうな表情をするのは反則ですよ！？

「ふふ、氷室くん。それは君の登場の仕方が悪かったのだから、望月くんを責めても仕方ないだろう。それに、彼が意図的にそんなことをするような男の子でないことは、君も良く知っているじゃないか」

せ、先輩いいいい！

「むう……望月さんの罪悪感につけ込んでデートにでも誘おうと思ったのに、逆に藤堂さんの株を上げてしまうとは……不覚です（ボソッ）」

「氷室先輩！？」

「氷室くん！？」

い、今、とんでもないことをサラッと言ったぞこの人！？

「と、ところで先輩、その学年主任の呼び出しっていうのは、もう片づいたんですか？」

このままだと、どんどん氷室先輩のペースになってしまいそうだったので、俺は話題を逸らすように先輩に尋ねた。

「う、うむ……」

すると先輩は、少しだけ寂しそうな表情を浮かべ、俯いてしまった。

「あ、せ、先輩、何かあったんですか……？」

そんな先輩が気になって仕方なくなり、俺は先輩の顔を覗き込みながら尋ねた。

「あ、ふふ……そんな顔をしないでくれ。まあ、いつものことだから」

「いつものこと？　先輩の表情をそんなに曇らせるようなことが、

いつものことだっていうんですか？」

気がつくと、俺は先輩に少し詰め寄っていた。

だって……先輩にこんな表情をさせてしまうようなことを、いつ……ものことだなんて言葉で片づけるなんて、俺には絶対に無理だ。

というか、先輩にこんな表情をさせてしまった、そのいつものこ……とてヤツを、俺は絶対に許さない。

「明日の二年の選考会、二―二だけ不戦勝で藤堂さんのクラス代表が決まってしまったんですよ」

「「「「はあ！？」」」」

氷室先輩の言葉に、俺達は一斉に驚きの声を上げた。

「ど、どういうことですか！？」

「まあ……きっかけは藤堂さんが選考会に参加することについて、クラス全員から担任に対してクレームが入ったからだそうなんです。『藤堂さんが参加してしまったら、選考なんてやる意味があるのか』と」

「あ……」

その説明の意味に気づいたサンドラが、思わず声を漏らした。

ハア……そういうことかよ……。

要は、先輩が強すぎるからって、そもそも戦うこと自体を放棄したってのかよ。しかも、まるで先輩が悪いみたいにクレームまで入れやがって……！

「も、望月くん……血が……」

「え……？　あ……」

どうやら俺は、頭に血が昇り過ぎて無意識に唇を噛んでいたみたいで、唇が切れて血が出ていた。

「ふふ……本当に君は……」

そう言うと、先輩はハンカチを取り出して、俺の血を拭ってくれた。

「ありがとう……私なら大丈夫だ。以前の私なら、そのことに腹を立てて交流戦不参加としていただろうが、今の私には、望月くんが……みんなが、いるから」

あ……そうか……。

『ガイスト×レブナント』で、最強であるはずの先輩が交流戦に参加しなかったのって、そんな周りの先輩に対する扱いが原因だったのか……。

だったら。

「はは、しっかし先輩のクラスメイトも見る目ないですねー。うちのクラスの連中を見習って欲しいよな？」

「フフ……そうですわネ。うちのクラスメイトのみなさんは、むしろ超えようと努力する方々ばかりですもノ」

俺がサンドラに声を掛けると、意図を汲み取ってくれたサンドラも嬉しそうにそう返した。

はは、やっぱりサンドラは分かってるな。

「あはは……迎え撃つ側としては、複雑な気分だけどね……」

「フン！　もちろん私（ヤー）は返り討ちにするけド！」

苦笑しながら頭を掻（か）く立花とは対照的に、プラーミャは鼻を鳴らした。

「まあ、この私も藤堂さんに負けるつもりはありませんが」

さすがは先輩の背中をずっと追いかけてきた氷室先輩。そもそもそんな連中とは、格も器も違うな。

「望月くん……みんな……ありがとう……」

そう呟くと、先輩は真紅の瞳に溜まった涙を人差し指ですくい、咲き誇るような笑顔を見せた。

クラス代表選考会　予選③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　予選④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　予選④

「そこまで！　勝者、“中島（なかじま）ハルト”くん！」

審判を務める伊藤先生が、三組目のバトルロイヤルの勝者の勝ち名乗りを上げる。

さあ……次はいよいよ俺の番だ。

「よっし！」

俺は両頬をパシン、と叩いて気合いを入れた。

『はう！　絶対に勝つのです！』

そう叫ぶと、［シン］が舞台の上をジッと見つめる。

はは、［シン］も気合入ってるな。

「フフ……ヨーヘイ、この私（ヤー）が叩き潰してあげるワ！」

「はは、俺も［シン］も、これっぽっちも負けるつもりはねーよ！」

不敵に笑うプラーミャに、俺も口の端を持ち上げた。

「ふふ……二人共、頑張れ！」

「どちらも応援してますわヨ！」

先輩達の声援を受け、俺とプラーミャは一緒に舞台に上がる。

そこには、残り二人の対戦相手である“大東（だいとう）”と“横川（よこかわ）”が既にス

タンバっていた。

「うわあ……ちょっと第四組って、キツくない？」

「言うな、横川……俺達は俺達で、やるしかないだろ……」

大東と横川の二人が、俺達を見ながら色々言ってるけど……俺は絶対に油断しないからな？

「フフ、いい心掛けネ」

いや、プラーミャ……ちゃんと警戒しとかないと、足元すくわれちまうぞ？

まあ、それよりも……。

俺はチラリ、と審判である伊藤先生を見やると。

「……」

あの、あえて俺を無視するような態度、なんか引っ掛かるんだよなあ……。

まあ、さすがに変な真似はしたりしないとは思うんだけど。

「では、ただいまから第四組の試合を始めます……」

そう告げると、伊藤先生は静かに右手を高々と掲げた。

そして。

「始め！」

その号令と共に、俺達は一斉に精霊（ガイスト）を召喚する……って!?

「邪魔ヨ！　［スヴァローグ］！」

「「っ!?」」

プラーミャの［イリヤー］からクラスチェンジした、［スヴァローグ］という名の精霊（ガイスト）が、横川と大東の精霊（ガイスト）に一気に肉薄する。

というかあの［スヴァローグ］、中年のオッサンからメッチャ美少女に生まれ変わってるんだけど!?

しかも露出高めの甲冑……いわゆるビキニアーマーを着て、超巨大なハルバードって、変わり過ぎにも程があるだろ!?

「ハアアアアアアアアアアッッッ！」

「キャアアアアアアアアッッ!?」

「グアッッ!?」

袈裟切りに振り払ったハルバードの一撃に、防御は間に合ったものの、大東と横川の精霊（ガイスト）が吹き飛ばされる。

というかプラーミャの精霊（ガイスト）、見た目に反してメチャクチャ脳筋じゃねーか……。

うん、これは確かに、［イリヤー］と一緒だあ……。

そして。

「大東くん、横川さん、場外！」

場外に出てしまった二人は、早々に退場となってしまった。

「フフ……あとはヨーヘイだけネ」

「あははー……」

ニヤリ、と口の端を上げるプラーミャに、俺は思わず苦笑した。
だけど。

「まあ、当たればな」
「ッ！？」

俺が台詞（セリフ）を言い終わる前に、［シン］がその圧倒的な速さで［スヴァローグ］へと迫る。

『はうはうはう！　遅いのです！』

［スヴァローグ］の背後についた［シン］は、素早く呪符を貼ろうと手を……っ！？

「甘いワ！」

すると［スヴァローグ］は、そのヒールのついた金属製のブーツで思いっ切り舞台を踏み込むと、［スヴァローグ］を中心にして囲むように火柱が次々と上がった。

『っ！？　熱いのです！？』
「アチチチチッ！？」

［シン］は右手を慌てて引っ込めるも、ほんの少しだけ火柱に触れてしまい、俺と［シン］は仲良く右手をバタバタさせる。

「フフ……ドウ？　［スヴァローグ］の【ヴァルカン】ハ？」
「どうって……そりゃあ厄介としか言いようがないな……」

正直、あんなのを周囲に展開されたら、直接呪符を貼り付けることで攻撃する［シン］にとっては、その手段を奪われちまったってことだからな……。

それに、プラーミャのあの口振りからすると、【ヴァルカン】というのは火属性魔法じゃなくてスキルそのものっぽいから、呪符による結界で無効化することもできない。

さて……どうするかな……。

「フフフ！　どうしたのヨーヘイ！　ひょっとして、もう打つ手がないノ？」

嬉しそうに笑うプラーミャ。

そんな彼女から視線を逸らして、俺はチラリ、と空を眺めた。

あー……まあ、多分これでいけるんじゃないかな……。

ということで。

「［シン］！」

『！　ハイなのです！』

俺は［シン］を呼び寄せてそっと耳打ちすると、［シン］は笑顔で頷いた。

「さあ……俺達の強さ、プラーミャの奴に見せつけてやろうぜ！」

『任せるのです！　［シン］は、誰にも負けてなんかやらないのです！』

そう言うと、［シン］は思い切りしゃがみ込み、キッ、と上空を見据えた。

そして。

『【神行法・跳】！』

遥か頭上の大空へ向け、［シン］が発射した。

クラス代表選考会　予選④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　予選⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『【神行法・跳】！』

遥か頭上の大空へ向け、［シン］が発射した。

「フフ、ひょっとして上からだったら［スヴァローグ］に近づけル……そう思ってるノ？」

「ああ、そうだけど？」

俺の答えに、サンドラが腹を抱えてクスクスと笑った。

「フフフフ！【ヴァルカン】の火柱の高さは最長百メートル！いくら［シン］でも、それを超えるなんて不可能ヨ！」

その言葉を受け、［スヴァローグ］は火柱をさらに上へと伸ばした。

学園の校舎のさらに上まで……それこそ、思わず見上げてしまうほどに。

「……ははっ」

「……何がおかしいノ？」

俺が笑ったことが気に入らないのか、プラーミャは眉根を寄せて不愉快そうに尋ねる。

だけど、笑っちまったのは仕方ないよな。

だって。

「お前こそ、俺の［シン］を舐めすぎだろ。百メートル？　それがどうした」
「なんですっテ！？」
俺は人差し指をピン、と立て、ひたすら上昇し続ける［シン］を差した。
それにつられ、プラーミャも見上げると。
「ッ！？」
［シン］は空中を軽やかに蹴り、更なる上へと昇り続けていく。まるで、同じように伸ばし続ける【ヴァルカン】を嘲笑（あざわら）うかのように。
［シン］はとうとう【ヴァルカン】のその先へと到達すると、その中心の空洞へと一気に飛び込んだ。
『はうはうはう！　いっけー！　なのです！』
右の拳を突き出し、変身ヒーローのように突き進んでいく［シン］の姿は、その速さゆえに、まるで夜空を駆ける“彗星”のようだった。
そして。
『！　捉（とら）えたのです！』
目と鼻の先まで［シン］が迫った、その時。

「フフ、バーカ♪」
「っ！？」

ニタア、と嗤うプラーミャと［スヴァローグ］。

っ！？　まさか！？

「アハハハハ！　私も［シン］のそのスキルを一度見ているのヨ！警戒しているに決まってるじゃない！」
「あ……」

プラーミャのその言葉に、俺は呆けた声を漏らす。
そうだ……“アトランティス”領域で、領域ボスのクロケル公爵の位置確認のために、プラーミャの前で確実に見せていた、な。

「アハハハハ！　食らいなさイ！　【ブラヴァー】！」

そう叫ぶと、［スヴァローグ］は左手の先を向かってくる［シン］に合わせ、ハルバードを上空へと投てきした。
ハルバードは紅蓮の渦をまといながら、まさに無防備な［シン］の額へと迫る。

だけど。

「［シン］！　今だあああああ！」
『はう！　【神行法・瞬】！』

俺の合図で、［シン］の身体が一瞬にして掻き消える。

「ッ！？　ど、どういうこト！？」

「忘れたのか？　これは、立花の［ジークフリート］との戦いの時に見せたスキルだぞ？」

そう……闇堕ちした立花と戦った時に見せた、【神行法】の中の一つ、【神行法・瞬】。

スピードという概念を超え、一瞬にして有効範囲内へと移動することができる、まさに世界最速の［シン］のためのスキル。

『取ったのです！』

『ッ！？』

ハルバードを投げ、素手のみとなった［スヴァローグ］だが、それでもなお闘争本能は衰えずに背後に肉薄した［シン］へと裏拳を放つ。

まあ、［シン］にそんな攻撃、当たらないけどな。

『【凍】』

『アアアアアアアアアッッ！？』

呪符の貼られた箇所から、徐々に凍りついていく［スヴァローグ］の身体。

【方術】はスキル攻撃であるため、［スヴァローグ］の持つ【氷属性反射】も何の役にも立たない。

「ッ！　こうなったラ！」

「っ！？　ほ、本気かよ！？」

このままだと負けになると悟ったプラーミャは、まだ凍っていない右半身を振り絞ると、自分の身体もろとも素手で槍衾（やりぶすま）を展開した。

「アアアアアアアッッッ！　【絨毯爆撃（じゅうたん）】！」
「［シン］！」

俺は思わず［シン］に向かって叫ぶ。

『大丈夫なのですマスター！　［シン］は……［シン］は、史上最速なのです！』
「なあっ！？」
「エエッ！？」

俺とプラーミャは、同時に驚きの声を上げる。
だって……まさか、［スヴァローグ］の槍衾（やりぶすま）を、全弾躱（かわ）すなんてあり得ないだろ！？
オマケにその動きがあまりにも速すぎて、［シン］の身体が残像でいくつにも見えるし！？

『はう！』

［スヴァローグ］の攻撃の全てを、何事もなかったかのようにすり抜けると、［シン］はクルリ、と反転して呪符を貼り付けた。

『【爆】』
『キャアアアアアアアッッッ！？』

全身が氷で覆われた［スヴァローグ］は、呪符の爆発によって吹き飛ばされ、その身体が舞台に叩きつけられる。
すると、凍っていることが仇となってその勢いのまま舞台の上を滑り、場外へと飛び出てしまった。

「っ！　それまで！」

ふう……勝った、な……。

『マスタアアアアアアアア！』

「っ！　ははっ！　［シン］！」

俺は満面の笑みで飛び込んでくる［シン］を受け止め、抱きしめてやる。

そして。

「勝者、“プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ”！」

……は？

クラス代表選考会　予選⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　予選⑥（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　予選⑥

「勝者、“プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ”！」

……は？

高らかに宣言する伊藤アスカの言葉を聞き、俺は耳を疑った。

コイツ、今、なんて言った……？

俺じゃなくて、プラーミャの勝ちだって言ったのか！？

その瞬間。

「ふざけるなあああああああああ！」

真っ先に吠えたのは、この戦いをジッと見守ってくれていた藤堂先輩だった。

「何故！　何故、望月くんが敗北したことになっているのだ！」

「ッ……！　そうネ……この私（ヤー）を侮辱するような真似をした理由を、ハッキリと聞きたいものネ……！」

先輩に呼応するかのように、プラーミャは射殺すような視線で伊藤アスカを睨みつけながら問い質（ただ）す。

「うふふ、簡単よ。答えは、彼……望月ヨーヘイが、プラーミャさんよりも先に敗北条件を満たしていたからよ！」

「はあ？」

そんなことをのたまいながら、ビシッ、と俺に人差し指を突き刺す伊藤アスカ。

この時の俺は、これ以上ないほどに首を傾げていたに違いない。

「……面白い。貴様の言うその敗北条件とやらを聞こうじゃないか！」

先輩は恐ろしいほど低い声で告げる。

怒りのゲージが振り切れてしまっているのか、青筋を立てた先輩は教師であろうと、もはや“貴様”呼ばわりになっていた。

「うふふ……藤堂さん、そんなすごんでも無駄よ？　まあ、言ってしまえば『場外に出たことによる敗北』、それだけよ」

「「「「「はあああああああ！？」」」」」

そんな訳の分からない理由を述べた伊藤アスカに対し、俺や先輩、プラーミャはおろか、俺達の試合を観戦していた全員が思わず声を上げた。

いや、いくらなんでもその理由はおかしいだろ！？

「ふざけないでくださいまシ！　一体、ヨーヘイがいつ場外に出たっていうんですノ！」

「そうだよ！　完全におかしいよ！」

「……ハッキリ言って、先程からの言動は聞き捨てなりませんね」

とうとう堪りかねたサンドラと立花、それに氷室先輩まで舞台の上に乗り込んでくると、伊藤アスカに詰め寄った。

「うふふ……アナタ達、この選考会のルール、ちゃんと読んでる？」

「当たり前だろう！　そもそも、このルールを策定したのは我々生

徒会なのだぞ！」

小馬鹿にするように尋ねる伊藤アスカに対し、先輩が吠える。

でも、先輩の言う通り、俺達が今回のルールに関して……それこそ、審判を務める先生達よりも熟知している。

なのに伊藤アスカは、なんでそこまで断言できるんだ？

「じゃあ聞くけど、場外負けの適用条件は何だったかしら？」

「それは、『舞台の範囲から出てしまったら負け』という、あなたでも理解できるはずであるほどの、非常にシンプルかつ明瞭な条件ですが？」

今度は氷室先輩が小馬鹿にするように伊藤アスカに言い放った。

「うふふ……ホラ、もう答えは出てるでしょ？　望月ヨーヘイは、間違いなく舞台の範囲から出ていたのよ」

いや、ますます分からないんだけど。

俺も［シン］も、一度も舞台から出てなんていないし。

「じゃあ聞くわね？　空中の取扱いはどうだったかしら？」

「空中？　そんなもの、ルールはない」

「ええ、そうね。じゃあもう一つ聞くけど、ルールに記載されていないものの取扱いは？」

「それは……その試合を担当した審判の判断に委ねられることに……っ！？」

先輩がそう告げた瞬間、伊藤アスカはニタア、と口の端を三日月のように吊り上げた。

「ええそうよ！　空中については場外判定の条件が不明瞭だった！　だから私はルールに則って、彼の精霊（ガイスト）が舞台の一辺の長さを超える上空まで飛んだ時点で、望月ヨーヘイを負けとみなしたのよ！」

ケタケタと嗤（わら）いながらのたまう伊藤アスカ。

この時の俺は、勝ち負けの判定以前に、あまりにも醜悪な面（ツラ）のコイツに、心の底から気持ち悪さを覚えていた。

というかオマエ、一応メインヒロインの一人だろ！？

「ねえ！　私の判定におかしなところってある？　言ってみなさいよ！」

まるで煽るように先輩にそのヒドイ面（ツラ）をグイ、と近づける伊藤アスカ。

あ……ちょっとヤバイ。

「よかろう……ならば……「あー！　先輩、ストップストップ！」……な！？　も、望月くん！？」

［関聖帝君］を召喚し、今まさに伊藤アスカを切りつけようとした先輩を、俺は割って入って無理やり止めた。

「先輩、さすがにそれはやり過ぎですよ」

「っ！　だ、だが！　こんな輩、さすがに捨て置けん！」

「ハア……ですけど、そのせいで先輩がこんなクズ教師なんかの犠牲になるのもごめんですよ」

一向に納得しない先輩を必死でなだめながら溜息を吐くと、俺はクズ教師を見やった。

「ハイハイ。アンタの言う通り、俺の負けでいいよ」
「……ふうん、殊勝ね。やっとクソザコモブらしく、身の程をわきまえたってことかしら？」
いや、その発言は教師として普通にアウトだろ。というかコイツ、まだ懲りてないのかよ……。
まあいいや。俺もこんなクソみたいな状況に付き合ってるのも馬鹿らしいし、サッサとケリつけるかー……。
「ところで、そもそも審判に裁量を与えてるのって、生徒の安全を考えてのことだっていうのは、もちろん理解してるよな？」
このクズ教師に、もう敬語を使うのも馬鹿らしくなった俺は、タメ語でそう尋ねた。
「うふふ……ショックで言葉遣いまで悪くなってるわね。まあいいわ。当然、私も理解してるけど？」
「そっかー……じゃあ聞くけどさ、なんでもっと早くに『俺の負け』だって、［シン］が範囲を超えた時点で言わなかったの？」
「え……？」
さらに問い掛けると、クズ教師は呆けた声を漏らす。
「いや、さっきも言ったように、俺達生徒会は『生徒が大怪我をしないように、優劣がハッキリした時点で審判の判定によって試合を終了させること』って決めたんだぞ？　だったら、［シン］が［スヴァローグ］の【ヴァルカン】の中に飛び込もうとする前に、試合を終了させるべきだろ」
「……」

俺の言ってる意味を理解したのか、クズ教師は無言で俺を睨みつける。

「それだけじゃない。立花も出てた第一組の試合で、菊池の精霊（ガイスト）が舞台の範囲の外である上空にいる時にも、アンタは何も言わなかった。それってなんで？」

「……」

「……別に答えなくても構わないけど……アンタ、もうこの学園に居場所はないぞ」

俺はその一言だけクズ教師に告げると、クズ教師はキョロキョロと周りも見回し、その表情を青くする。

何故なら……今の顛末の全てを見ていた、生徒、教師、その他全ての者が、侮蔑と嫌悪の視線を向けているんだから。

「ち、違うの……！　私は、私は……！」

腰を抜かしたクズ教師は、怯えながら後ずさりする。その先にも、侮蔑の視線を向ける者がいるのに。

「あ、あああああ……！　わ、私は言われた通りにしただけなのに……！」

……ふうん。

俺はクズ教師を一瞥した後。

「ホラホラみんな、次の試合もあるんだから、舞台から降りようぜ」

ニカッ、と笑顔を見せながら、先輩達に舞台から降りるように促

した。

「ヨーヘイ……アナタ、それでいいの？」

「ん？　おお。別に、俺は負けたなんて思ってねーし。それにプラーミャなら、クラス代表に選ばれるだけの実力もあるだろ？」

俺はできる限り生意気な口調でプラーミャに言い放った。

少しでも、プラーミャが負い目を感じないように。

「ハア……私（ヤー）にそんな台詞（セリフ）を吐いてどうするのヨ……そういうことを言うのは、サンドラだけにしなさイ」

「ナナナナナ、ナニを言ってるんですノ！？」

するとプラーミャは、少し顔を赤くしたかと思うと、溜息交じりにそんなことを言った。おかげで飛び火したサンドラが、顔を真っ赤にしてわたわたしてるじゃねーか。

「ふふ……だが、確かに君の言う通り、この試合の結果は、あのクズ以外、全員分かっているよ」

そう言うと、先輩が俺の頭を優しく撫でてくれた。

はは……俺にとっては、あなたのその笑顔と手こそが、クラス代表なんかよりも何倍も価値がありますよ。

こうして、俺のクラス代表選考会……そして、メイザース学園との交流戦イベが終了した。

クラス代表選考会　予選⑥（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　予選終了、そして（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　予選終了、そして

「食らいなさイ！　【裁きの鉄槌】！」

――ドオオオオオンッッ！

［ペルーン］がメイスを叩きつけると、舞台全体に稲妻が走り、その上にいる四人が電撃を浴びてスタン状態になる。

こうなったら、あとは［ペルーン］がクラスメイトをご丁寧に一人ずつ舞台から退場させて終わりだ。

「それまで！　勝者、“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”！」

それを見て、審判の葛西先生が高らかに勝ち名乗りを上げた。

ちなみに、あのクズ教師……伊藤アスカは第四組の試合終了後、早速学園長に呼び出されて今もテントでお説教？　を食らっている。

なので急きょ、葛西先生が審判を務めることになったんだけど……いやもう、その的確かつ公平な審判っぷりで生徒、教師達から喝さいを浴びていた。というか、審判なのに選手である生徒より注目浴びるってどうよ？

「はは、サンドラお疲れ！」

舞台から降りてきたサンドラに労い（ねぎら）の言葉をかけ、手を挙げると。

「……（プイ）」

「あら……」

サンドラは何故かムッとした表情を浮かべ、ハイタッチをせずに顔を背けてしまった。

お、俺、何か悪いことでもしたっけ……？

「あー……サンドラ、望月くんは何も悪くないのだから、その、拗ねるのはどうかと思うぞ……？」

苦笑しながら先輩がたしなめるが、それでもサンドラはご機嫌斜めなようで、口をへの字に曲げたままだ。

でも、今の先輩の言葉で分かった。サンドラは多分、あの試合の判定についてアッサリと引き下がったモンだから、納得できないんだな……。

「ッ！？」

「はは……まあ、俺だってあの結果を納得してるわけじゃないけど、それでも、審判がプラーミャの勝ちを告げた以上、結果は変わらないよ。それに、そんな態度してたらプラーミャだっていたたまれないだろ」

俺はサンドラの頭を少し乱暴に撫で、できる限り優しい声でそう言った。

「……ヨーヘイ、ズルいですわヨ」

口を尖らせながら、サンドラがポツリ、と呟いた。

納得はしないものの、飲み込んではくれるみたいだ。

「悪いな……選考会が終わったら、ルフランでスイーツ奢ってやる

から」
「二つ……ですワ」
「はは、了解。それより、決勝トーナメントは頑張れよ！」
「ッ！　エエ！」

さて……サンドラはこれで良し、と。
あとは、決勝トーナメントでみんなを全力で応援……って、あー……お前もかー……。

『グス……［シン］は……［シン］は、勝ってたのです……！　負けじゃないのです……！』

見ると、［シン］は一人ポツン、と体育座りをしながら半ベソをかいていた。
まあ、あの試合で一番頑張ってたのは［シン］だし、あんな理不尽な結果じゃ悔しいのも当然か。

俺は軽く息を吐き、そんな［シン］の元へと駆け寄った。

「［シン］」
『あ……マスター……』

声を掛けると、［シン］はそのオニキスの瞳に涙を湛えながら俺を見上げた。

「さっきの試合……間違いなく、［シン］の勝ちだったよ。ただ、俺がちゃんとルールを確認しなかったからこうなっちまった……悪い」
『っ！　違うのです！　マスターは何にも悪くないのです！　マスターは……マスターは、［シン］のために全力だったのです！』

俺が深々と頭を下げると、［シン］は慌てて俺の身体を起こそうとした。

「いや……アイツのジャッジの可能性も含めて、俺はもっとちゃんと考えるべきだった。だからこれは、あくまでも俺のミスだ」

『そんな……！　悪いのはアイツなのです！　マスターが［シン］に頭を下げる必要なんて、これっぽっちもないのですううううっ！　うわあああああああああん！』

とうとう感極まった［シン］は、俺の首に飛びつき、大声で泣いてしまった。

ハア……本当に俺、［シン］のマスター失格、だな……。

「……今回はこんな結果になっちまったけど、来年こそは絶対に勝とうな……？」

『ハイなのです！　［シン］はもっともっと強くなって、今度こそルール無用で勝ってみせるのです！』

俺は泣きじゃくる［シン］の頭を優しく撫でながら、その小さな身体を抱きしめ……『一―三の望月ヨーヘイは、至急、舞台の上まで来るように！』……って、アレ？　俺、今呼び出された？

『はう……マスター、呼ばれたのです』

まだ涙で濡れたままの［シン］が、俺の顔を覗き込む。

「だ、だよなあ……」

『早く、マスターは行ってくるのです……［シン］は、もう大丈夫なのです！』

そう言うと［シン］は、にぱー、といつもの笑顔を見せた。
……ったく、無理やりそんな顔しやがって。
『はう!?』
「何の用か知らねーけど、ちょっと行ってくる」
俺は［シン］の頭をガシガシと乱暴に撫でた後、舞台へと上がると。
「望月、遅いぞ!」
「へ？　い、いや先生、遅いって言われても……」
俺は頭を掻きながら思わず顔をしかめる。
というか……アレ？　立花にサンドラに……これって、全員バトルロイヤルの勝者だよな？
「ホラ、お前が四番目のくじを引く番だからサッサと引け。後がつかえてるんだ」
「……へ？」
そう言うと、葛西先生がニヤッと笑った。
え？　え？　どういうこと？
「……プラーミャがネ？　『私（ヤー）は笑いものになるために東方国に来たんじゃなイ』って言って、決勝トーナメントへの出場を辞退するって申し出たノ」
「はあ!?」
サンドラのその言葉に、俺は驚きの声を上げて回りをキョロキョ

ロと見回すと……舞台の傍（そば）で先輩達と一緒にいるプラーミャの姿があった。
しかも、不敵な笑みを浮かべながら。
……ハア、なんだよそれ。
「コホン……それと、伊藤先生の判定結果については、学園本部でも疑義が出てな。改めて審議の結果、レイフテンベルクスカヤの申し出は正当だということで、受理されたんだ。だから、結局はそういった結果になる可能性のほうが高かった」
「……ですけど」
先生の説明を聞いても納得がいかない俺は、顔を背けて言い淀む。
すると。
「望月……レイフテンベルクスカヤに対して負い目を感じているのなら、お前がこの決勝トーナメントに勝つことで証明してやれ。お前に勝ちを譲ったことは、決して間違いじゃなかったと」
先生は俺の肩をつかみ、真剣な表情でそう告げた。
チクショウ、うちの担任とあのクズ教師とのギャップがすごすぎて、本気（マジ）で泣きそうなんだけど。
「……はい」
「よし！　じゃあ望月、くじを引け」
「はい！」
俺は先生からズイ、と差し出された箱に手を入れ、くじを引いた。
「……三番です」

「望月は三番だな」

その後、サンドラを含めた二人がくじを引き、決勝トーナメントの抽選は終わった。

「プラーミャ……」

「……本当だったら私（ヤー）がクラス代表になる予定だったんだから、代わりにヨーヘイが決勝まで行ってサンドラに負けるのヨ！」

「オイ、なんでだよ」

「アアアアアアア！？　そ、そういうのはサンドラだけにしなさいよネ！」

俺はツッコミ代わりにプラーミャの頭を乱暴に撫でると、顔を真っ赤にしたプラーミャに怒られてしまった。

クラス代表選考会　予選終了、そして（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝トーナメント①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝トーナメント①

「［シン］！　行くぞ！」
『はうはうはう！？　い、一体何の話なのです！？』

急いで［シン］の元に駆け寄ってそう告げると、［シン］は困惑した表情を浮かべる。
はは、さっきの舞台のやり取りを見てなかったんだな。

「まあ、来れば分かるって！」
『はうはうはうはうはう！？　マスターが強引なのです！？　お持ち帰りされちゃうのです！？』

俺はあわあわする［シン］を担ぐと、そのまま舞台に向かって走った。
だけど［シン］め……一体どこでそんな言葉覚えやがった。

すると。

「望月くん！　［シン］！　頑張れ！」
「ヨーヘイ！　［シン］！　ファイトですワ！」
「二人共、頑張ってください」

先輩、サンドラ、氷室先輩が俺達にエールを贈ってくれた。
はは！　もちろん頑張りますよ！

『はう……こ、これって……？』
「ああ……俺達は、プラーミャの代わりに決勝トーナメントに進む

ことになった」

『ミャーさんの代わりなのです！？』

まあ、驚くのも無理はないよな。俺だって、メッチャ驚いたし。

ということで、俺は手短に事情を説明すると。

『はう……そうだったのですか……』

すると［シン］は、少しだけ落ち込んだ表情を見せた。

だけど、［シン］の気持ちも分かる。結局のところ、スッキリはしないよな。

「だから……俺達は絶対に勝って、クラス代表に選ばれよう。そうすれば、予選でのあの戦いも含め、誰にも後ろ指差されないし、何よりも、プラーミャは本当に強かったんだって、俺達に勝ちを譲ったことは間違いじゃないんだって、その証明になるんだから」

そう言って、俺はニコリ、と微笑んだ。

『はう！　マスターの言う通りなのです！　勝って勝って勝ちまくって、ミャーさんが一番手強かったって、そう言うのです！』

「おう！　その通りだ！」

よし……［シン］も、もう大丈夫。後は、対戦相手に集中するだけだ。

俺は、［シン］と拳をコツン、と合わせ、目の前を見据える。

そこには、トーナメント一回戦の相手、“都築（つづき）タイキ”がいた。

俺達は一睨みした後、チラリ、と葛西先生を見て合図を促す。

そして。

「決勝トーナメント、一―三の第一試合、始め！」

先生の合図で、試合開始となった。

「さあて……んじゃ、サクッと倒すぞ、［シン］！」

『ハイなのです！』

「オマエ等、あんまり俺を舐めるなよ！　［ザントマン］！」

そう叫ぶと、怪しげな仮面を被り、革のコートに革のライダースーツという不思議な恰好（かっこう）をし、さらには麻の袋を背負った精霊（ガイスト）が召喚された。

「食らえ！　【トラウム】！」

都築の精霊（ガイスト）、［ザントマン］は舞台全体を覆うように、袋の中から粉をまき散らした。

「ハハハ！　この粉には睡眠作用がある！　吸い込んだ瞬間、オマエ等は終わりだ！」

俺達を指差しながら、都築は嬉しそうにのたまってるけど……そのスキル、さっきの予選で一度見てるからな？

オマケに。

『はうはうはう！』

『ッ！？』

［シン］はそんな粉をものともせず、あっという間に［ザントマン］の背中に回り込んだ。

「どういうことだ！？　もう眠りこけていてもおかしくないだろ！？」

「バーカ、［シン］には【状態異常無効】のスキルがあるんだよ」

そう。だから予選を見ていた時も、コイツと当たったら楽だろうなー、なんて考えてたんだよな。

とはいえ、予選で都築と対戦した奴等は全員眠っちまったけど。

「まあ、こればっかりは相性の問題だから悪く思うな。［シン］」

『任せるのです！』

元気に手を挙げて返事をした［シン］は、［ザントマン］の背中にペタリ、と呪符を貼り付けると。

『【縛】』

「なあ！？　う、動けねー！？」

［ザントマン］は行動不能になり、都築がわめき散らす。

俺がチラリ、と見やって目で合図すると、先生はコクリ、と頷いた。

「勝負あり！　勝者、“望月ヨーヘイ”！」

先生の勝ち名乗りを受け、［シン］は［ザントマン］から呪符を剥(は)がした。

「ははは、悪いな」

「チクショウ……結局、瞬殺かよ……」

俺は都築の傍に寄ってス、と右手を差しだすと、都築はガックリと肩を落とした後、苦笑しながら俺の手を握った。

「こうなったら、最後まで勝っちまえ！」

「おう！」

激励の言葉を貰い、俺と［シン］は意気揚々と舞台から降りると。

「フフ……私（ヤー）がせっかく勝ちを譲ったんだから、これくらい当然よネ」

「はは、まーな」

プラーミャに出迎えられ、俺はハイタッチを交わした。

「うむ、見事！」

「先輩！」

腕組みをしながらニコリ、と微笑む先輩の元へ、俺は駆け寄る。

「さあ、次はサンドラの番だ」

「はい」

先輩の隣に並び、俺と入れ替わりで舞台に上がったサンドラを眺める。

うん……サンドラの奴、気合の入ったいい表情をしているな。

「では、決勝トーナメント、一―三の第二試合、始め！」

「［ペルーン］！」

「クッ！　［ランダ］！」

先生の合図と同時に、サンドラと対戦相手の“桐山（きりやま）カナ”は精霊（ガイスト）を召喚した。

「行きなさい！　【レヤック】！　【チュルルック】！」

すると桐山は、精霊（ガイスト）の［ランダ］だけじゃなく、長い牙を生やした猿のような二体の魔獣をさらに召喚した。

予選の時は闇属性魔法を駆使して勝ち上がってきたけど、どうやら魔獣を使役して戦うコッチが、本来のスタイルみたいだな。

「フフ……お猿（アビジャーナ）さんが二匹いたところで、［ペルーン］を止めることはできませんワ！」

そう叫ぶと、［ペルーン］がメイスを振り回して突っ込んでいく。

というかその戦い方、相変わらず無防備が過ぎる！？

「おいサンドラ！　もうちょっと慎重に……って！？」

俺がアドバイスしようとした矢先に、［ペルーン］のメイスが魔獣のうちの一体に襲い掛かった。

だけど、もう一体の魔獣がその隙を突いて、鋭利な爪を［ペルーン］の喉元を狙う。

「甘いですワ！」

［ペルーン］は左手の盾で魔獣の爪を弾き返すと、返す刀で魔獣の横っ面（つら）に思い切り叩きつけ、それと同時にメイスがもう一体の魔獣の頭部をグシャリ、と潰した。

「【チュルルック】!?」
「もう一匹!」

そして、もんどり打って倒れるもう一体の魔獣にも、メイスによる無慈悲な一撃を食らわせた。

「あとハ……本体だけ、ですワ」

のそり、のそり、と、［ペルーン］は［ランダ］に向かってゆっくりと歩を進める。

「こ、来ないで!?　【スクリーム】!」

引きつった表情を浮かべる桐山は、苦し紛れに相手を恐慌状態にする邪属性魔法の【スクリーム】を放つ。
というか、【状態異常弱点】を持つ［ペルーン］じゃ、分が悪すぎるんじゃないのか!?

「フフ、【ガーディアン】」

すると［ペルーン］は目の前に盾を展開し、【スクリーム】を寄せ付けない……って、あの盾、通常の物理攻撃や魔法攻撃に加えて、状態異常攻撃さえも弾くのか!?

「サア、終わりですワ」

［ペルーン］がゆっくりとメイスを振り上げ、稲妻をほとばしらせた、その瞬間。

「こ、降参よ！」

サンドラの……そして、［ペルーン］のプレッシャーに耐えかねた桐山が、たまらず降参を告げた。

「勝負あり！　勝者、“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”！」

勝ち名乗りを受けると、サンドラは踵（きびす）を返して颯爽と舞台を降りる。

「はは……何だよ、カッコイイじゃねーか……！」

サンドラの凛としたその姿に、俺は思わず見惚れていた。

クラス代表選考会　決勝トーナメント①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝トーナメント②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝トーナメント②

「サンドラ！　やったな！」

俺はサンドラの元へ駆け寄って労いの声を掛けると。

「ヨーヘイ……あと一つ、ですわヨ？」

「っ！」

サンドラはそのアクアマリンの瞳に獰猛な獣を宿らせ、俺をジッと見つめた。

はは……俺と戦う準備は万端、ってことか。

「あはは……だけどサンドラさん、次はボクと戦うってこと、忘れてない？」

「立花クン……」

そうだ……準決勝ではサンドラと立花が戦うんだったな……。

「エエ……もちろん、忘れてなんかいませんワ。ですけド、それでも勝つのはワタクシですわヨ！」

「あはは！　ボクだって負けるつもりはないよ！　だって！」

「「ヨーヘイ（望月くん）を倒すのは、このワタクシですワ（ボクだ）！」」

二人が同時に宣言すると、キッ、と俺を見据えた。

「ふふ……二人共良い気迫だな」

「ええ、上を見続ける人は強いですから」

藤堂先輩と氷室先輩が、そんな二人を見て満足げに頷く。

まあ……俺としても悪い気はしないものの、何というか、その……うん、こういうの慣れない。

いやだって、そもそも俺は『ガイスト×レブナント』ではクソザコモブの底辺だったわけで、しかも、これまでの俺は挑戦する側だったから、挑戦される側に回るなんて思いもよらなかったからなあ……。

すると。

「望月くん……ちょっとついて来てくれ」

俺は手招きされ、そのまま先輩の後についてグラウンドの端まで移動した。

「え、ええと……？」

「望月くん……君はいつから、王者となったのだ？」

「へ……？」

先輩の言った意味が分からず、俺はキョトン、としてしまった。

「……まあ冗談はさておき、君はあの二人からの挑戦を受けて戸惑っているんじゃないか？」

「あ……」

どうやら先輩にはお見通しみたいで、ずばり指摘されてしまった。

「ふふ……なあ、望月くん」
「は、はい……っ！？」
先輩は俺の顔を両手で挟むと、グイ、とその顔を近づけた。
あ……いい匂いがする……。
「私は君と出逢ってから、理不尽に抗いながら、真っ直ぐに強さを追い求めるその姿を間近でずっと見続けてきた」
「……」
「なら、君はいつも通り、ただ追い求めればいいんじゃないのか？私は……そんな君の背中を見るのが、その……だ、大好き……だぞ……？」
「っ！」
先輩にそう告げられ、俺の胸がかあ、と熱くなる。
も、もちろん、先輩のいう大好きってヤツは、あくまでも頑張る姿を応援するっていう意味だろうけど、それでも、憧れである先輩にそんな風に言われたら……！
もう頑張るしかないだろ！
それに応えるしかないだろ！
「あ……」
「先輩……あ、ありがとうございます……俺、あの二人のどちらが決勝に来ても、必ず勝ってみせますから！　だから……挑戦者としての俺の背中、見守って……もらえ、ますか……？」
俺の顔を押さえる先輩の手に、俺は自分の手を重ねてそう告げた。
「あう……ああ、もちろんだとも。私はいつだって、いつまでだっ

て、君の背中を見続けているよ」

そう言うと、先輩は蕩けそうな表情を浮かべ、そっと頷いた。

◇

「そこまで！　勝者、“賀茂カズマ”！」

決勝トーナメント一回戦も終わり、一―一の準決勝が終了した。

「えーと……次は一―二の準決勝第一試合は、と……お、加隈の奴、勝ち残ってるじゃん」

そういえば、加隈の一回戦の試合を見てなかったけど、準決勝に駒を進めてるってことは、無事に勝ったんだなあ……。

「ヨ、ヨーヘイ……それはチョット可哀想ですわヨ……」

「え？　そ、そうかなあ……」

いや、そんなこと言われても、一回戦の時は俺にとっての選考会は終わったモンだと思ってたし、［シン］を慰めたりするので忙しかったし……。

「それよりも、試合が始まりますよ」

氷室先輩が舞台を指差して、見るように促す。

ま、まあ、準決勝からはちゃんと見てやるかあ……。

「では、決勝トーナメント準決勝、一―二の第一試合、始め！」

「行くぜ！　［ロキ］！」

開始の合図と同時に加隈は［ロキ］を召喚すると。まるでサンドラのように何も考えないまま突っ込んで行きやがった……。

ま、まあ、予選や一回戦の時と違って俺達（主に立花）が見てるから張り切ってるのは分かるけど、そもそも［ロキ］の持ち味はそのスキルを活かしたトリッキーな戦い方が持ち味なのに、あれじゃ台無しだなあ……って。

「……」

「え、えーと……サンドラ、さん……？」

気がつくと、サンドラが俺をジト目で睨んでいた。

ひょ、ひょっとして、俺の考えていることを読み取ったのか！？

「……ヨーヘイの考えてそうなことくらい、分かりますわヨ」

「う……ス、スマン……」

「ホラ！　やっぱりそうだったんですのネ！　どうせワタクシの［ペルーン］が、脳筋だって言いたいんでショ！」

「しまったあああああ！？」

チ、チクショウ！？　俺を引っかけやがったな！？

「フフ……決勝戦では覚えておきなさイ……絶対に、ギッタギタにしてやりますワ！」

「うあああああ！？」

サンドラの殺意に満ちた視線に、俺は思わずたじろ……「勝負あり！」……へ？

審判を務める一―一の担任の先生の声を聞き、俺とサンドラは慌

てて舞台へと目を向けると……あ、試合が終わってた。

「へへ……！　俺の試合、どうだったよ！」

「あー……う、うん、良かったんじゃないか……？」

「そ、そうですわネ……」

嬉しそうに鼻をこすりながら話す加隈の顔をまともに見ることができなくて、俺とサンドラは視線を逸らしながら曖昧（あいまい）に答えた

「た、立花も俺の試合、その……見っててくれたよ、な……？」

緊張した面持ちで、おずおずと尋ねる加隈。

だけど。

「あ、あははー……望月くんとサンドラさんのやり取りが気になって、そのー……ゴメンね？」

「チクショオオオオオオオオオ！」

立花のその言葉がトドメとなり、加隈は泣きながらどこかに走っていった。

わ、悪い……。

クラス代表選考会　決勝トーナメント②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝トーナメント③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝トーナメント③

「よっし！」

一―二の準決勝の試合も終わり、いよいよ出番となった俺は、気合いを入れるために両頬をパシン、と叩いた。

「それじゃ、行ってくる」

「フフ……エエ、先に首を洗って待っているんですのヨ？」

「そんな激励の仕方アリかよ！？」

いや、サンドラの言葉も、俺の勝ちを信じてのことだっていうのは分かるんだけど、それでも、なあ……。

「むううううう！　決勝で望月くんを倒すのはボクだもん！」

「アラアラ？　立花サン、いらしたんですノ？」

「サンドラさんヒドイ！？」

ハア……とりあえずこの二人は放っておこう。

俺は向き直ると、対戦相手の中島が待つ舞台へと上がる。

「よろしくな」

「……」

薄ら笑いを浮かべる中島に、無視されてしまった……。

「それでは、決勝トーナメント準決勝、一―三の第一試合、始め！」

「［シン］、行くぞ！」

『ハイなのです！』

隣に並び立つ［シン］に声を掛けると、［シン］は力強く頷いた。

「……［プーシュヤンスター］」

ボソッ、と呟きながら、中島は自身の精霊（ガイスト）である［プーシュヤンスター］を召喚する。

予選で見た時にも思ったけど、中島の精霊（ガイスト）って、なんかその……うん、怖い。

いや、だってあの［プーシュヤンスター］、その……顔は美人なんだけど、どこか影があるっていうか……目の下にクマができてるし……。

オマケに手足が異様に細長いし、まるでズワイガニみたい……あ、今年はカニ食えるかなあ……。

「……考えごとだなんて、余裕だね（ボソッ）」

「っ！？」

いつの間にか、手をついてまるでクモみたいに接近していた［プーシュヤンスター］は、［シン］に向け、ささやきかけるようにその唇を動かす。

「……【悪夢への誘い（いざな）】（ボソッ）」

ええと……どうやら中島の奴はスキルを発動したみたいなんだけど、声が小さすぎて聞き取れなかった。

ま、まあ、［シン］に何の変化もないところを見ると、どうやら状態異常系のスキルみたいだし、別にいいか……。

「あー……［シン］、サクッとケリをつけ……って！？」
『すぴー……すぴー……』

［シン］の奴、立ったまま寝てやがる！？

「そんな馬鹿な！　［シン］には【状態異常無効】のスキルがあるんだぞ！？」
「……［プーシュヤンスター］の【悪夢への誘い（いざな）】は、状態異常攻撃じゃない。これは、相手の心の奥底に潜む怠惰（たいだ）を増幅させる能力（ボソッ）」

いや、ボソボソしゃべるくせに、やたらと饒舌だな！？
というか、怠惰（たいだ）の増幅！？

「そ、それってどういうことだ！？」

そう叫ぶと、中島はス、と無言で［シン］を指差した。
見ると……［シン］の奴、まるで朝の寝起きの時みたいに舞台に寝そべってもぞもぞしてやがる！？

「おい［シン］！　しっかりしろ！」
『はうー……うるさいのです。［シン］は今、ダラダラしたいのです……』
「［シン］！？」
「……こうなったら、もう手も足も出せない（ボソッ）」

そう呟くと、［プーシュヤンスター］はここぞとばかりに［シン］の傍に寄ると、その長い腕を振り上げた。

「……終わり（ボソッ）」

そして、［シン］の身体目がけて勢いよく振り降ろ……『あーモウ！　鬱陶(うっとう)しいのです！　邪魔するな！　なのです！』……って！？

なんと［シン］は、［プーシュヤンスター］の腕を素早い動きで躱(かわ)すと、その顔面にペタリ、と呪符を貼り付けた。

『【縛】』

『……！？』

そのまま［プーシュヤンスター］は動けなくなり、同様に中島も動かなくなった。

『はうはう、これでのんびりできるのです……』

そう言うと、［シン］は舞台の床にぺとー、とその柔らかい頬っぺたをくっつけた。

いや、だらけまくってんなあ……。

だけど。

「……コレ、どうしよう」

「……予想外　（ボソッ）」

俺と中島はお互い顔を見合わせた後、それぞれの精霊(ガイスト)を見やる。

うん、困ったぞ。困ったけど……仕方ない。

俺は寝そべる［シン］の傍に行き、その耳元にそっと顔を寄せると。

「あの精霊(ガイスト)を場外に出したら、ルフランのジェラートを食わせてや

るぞ」

……どうだ？

――ピク。

お、今ちょっとだけ、肩が動いたぞ。

「じゃあ、三つ。これならどうだ？」

『……五つ、なのです』

［シン］はパーを俺の目の前に突き出し、ポツリ、とそう呟いた。

チクショウ、足元を見やがって。スキルが解けたら覚えてろよ。

「……分かった、五つで手を打とう」

『はうはうはうはう！　任せるのです！』

［シン］は急に元気になって［プーシュヤンスター］の足首を持つと、ずるずると引きずっていき、そして。

『えい、なのです』

ゴロン、と転がして舞台から落とした。

「それまで！　勝者、“望月ヨーヘイ”！」

勝つには勝ったけど……なんだかなあ……。

「……なあ、とりあえず［プーシュヤンスター］に貼り付けた呪符を剥がすから、［シン］にかけたスキル、解除してもらっていいか

？」

「……」

身動きの取れない中島は、無言のまま目で合図すると。

『っ　！ムフー！　元気百倍なのです！　必殺技ゲージが満タンなのです！』

今まで床に寝そべっていた［シン］は急にはつらつとして、すごい勢いで飛び上がった。

「あー、［シン］。［プーシュヤンスター］の呪符、すぐに剥がせ」

『はう！　了解なのです！』

［シン］はビシッ、と敬礼ポーズをすると、すぐさま呪符を剥がす。

それによって中島も動けるようになり、手をグーパーさせながら感覚を確かめていた。

「はは……最後はしまらない結果になっちまったけど、楽しかったよ。ていうか、【状態異常無効】のスキル効果を無視して精神攻撃するなんて、お前の精霊（ガイスト）、マジですごいな」

そう言いながら、俺はス、と右手を差し出した。

「……ありがとう。僕の［プーシュヤンスター］を褒めてくれるなんて思わなかった（ボソッ）」

「ん？　いや、普通にすごいだろ。だって、同じ【状態異常無効】を持つ、あの藤堂先輩の［関聖帝君］にだって通用するってことなんだぞ？」

「……キヒッ（ボソッ）」

ニタア、と口の端を吊り上げた中島は、おずおずと俺の手を取り、今度こそ握手を交わしたけど……ええと、今のは笑ったってことでいいんだよな？

ま、まあいいか……。

クラス代表選考会　決勝トーナメント③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝トーナメント④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝トーナメント④

中島との試合を終え、俺と［シン］は舞台を降りようとすると。

「サンドラ……立花……」

二人が、俺と入れ替わるように舞台へと上がる。

そして。

「ヨーヘイ……決勝で、待っているんですのヨ」

「望月くん、また後でね」

すれ違いざま、二人は決意に満ちた表情でそう告げると、並んで舞台の中心へと歩を進めた。

はは……二人共、ちょっと相手をはき違えてるだろ。

「望月くん、お疲れ」

「お疲れ様でした」

「先輩、氷室先輩、ありがとうございます」

笑顔で労いの言葉をかけてくれた二人にお礼を言うと、俺はその隣に並んで舞台上を見据える。

「フフ……立花サン、残念ですけどワタクシの糧になってくださいまシ」

「あはは、そうだね。サンドラさんには、ボクが望月くんの前に立つための踏み台になってもらうよ」

お互いがそう言うと、サンドラと立花は不敵な笑みを浮かべた。

「ふむ……望月くんの試合を見て気持ちが高揚しているのはいいが……少し、目の前の試合に集中できていないきらいがあるな」

「そうですね。あれでは、どちらも足元をすくわれかねません」

二人の様子を見た先輩達は、冷静に分析する。

だけど、まさに先輩達が言った通りで、少しかかり過ぎ、だよなあ。

「……お二人はこの試合、どっちが勝つと思います？」

「む……そうだな。サンドラ……と、言いたいところだが、六対四で立花くんに分があるだろう」

「私も立花さんが勝つと思います。ただ、私は立花さんの圧勝になる可能性が高いと踏んでますが」

「ひ、氷室先輩、それはどうしてですか……？」

その答えに、俺は思わず聞き返す。

いや、確かに俺も、立花に分があると分析しているけど、それでも、氷室先輩はどうしてそこまで言い切れるんだ……？

「まあ……早い話が、［ポリアフ］の【オブザーバトリー】で二人の精霊（ガイスト）を解析したんですが」

「ああ……」

そうだった。氷室先輩の精霊（ガイスト）には、精霊（ガイスト）や幽鬼（レブナント）を解析するスキルがあるんだったな。

「……その上で、彼……立花さんの精霊（ガイスト）を視ましたが、レベルは七

十一、全ステータスがオール“Ｓ”、さらに【竜の恩恵】による二段階のステータス上昇……基本的な能力だけでしたら、藤堂さんの［関聖帝君］すらも凌ぐスペックです」

「「っ！？」」

ア、アイツ、もうそこまで強くなってんのかよ！？

「それに加えて、クラスチェンジによって新たに獲得したスキル、【四神】は脅威です。また、【チェンジ】によって隠されている精霊（ガイスト）の能力も踏まえると……やはり、立花さんの勝ちは揺らぎません」

「そ、そうですか……でも」

冷静に告げる氷室先輩。

でも……俺は、サンドラにはそんな精霊（ガイスト）の能力だけじゃないナニカがある。そう、信じたい。

だから。

「それでも、俺はサンドラを信じています。ステータスやデータを超えて、アイツならやってくれる、と」

「望月さん……」

今、氷室先輩にそう告げたことでハッキリと分かった。

俺は……サンドラに勝って欲しいんだ。

アイツが、誰よりも頑張っていることを知っているから。

アイツが、絶対にくじけない心を持っていることを知っているから。

「ふふ……私も信じているよ。私だって君と同じくらい、サンドラの成長を見守ってきたんだから、な」

「先輩……はい！」

俺は先輩に向かって強く頷くと、改めてサンドラを見る。

そして。

「サンドラ！」

俺は大声で彼女の名前を叫び、右拳を高々と突き上げた。

“アルカトラズ”領域（エリア）でサンドラが闇堕ちしたプラーミャと戦った、あの時と同じように。

「フフ……本当に、ヨーヘイはバカなんですから……」

「えー……ボクへの応援はないの……？」

そんな俺を見て、頬を赤らめながら口元を緩めるサンドラとは対照的に、肩を落としてうなだれる立花。

だけど……悪いな、立花。どちらを応援するかって言われたら、俺は迷わずサンドラを選ばせてもらうぞ。

「フフ……ヨーヘイもサンドラに甘いわネ？」

クスリ、と笑いながら、プラーミャが俺の傍に来てそう告げる。

「はは、当然だろ？　サンドラは、俺の大切な仲間なんだから」

「ハア……サンドラも苦労するわネ……」

俺がサムズアップしながら笑顔で答えると、何故かプラーミャは溜息を吐いた。なんで！？

その時。

――パシン。

「サア！　ワタクシはいつでも大丈夫ですわヨ！」

さらに気合いの入ったサンドラが両頬を叩き、立花を指差しながら宣言する。

「フウ……まあ、サンドラさんを倒したら、望月くんもボクだけを見てくれるよね？」

立花は深く息を吐いたかと思うと、クスリ、と口の端を持ち上げた。

うわあ……闇堕ちから解放されてまともになったと思ってたけど、根っこのヤンデレ気質は直ってねえ……。

そして。

「では……始め！」

俺達が見守る中、サンドラと立花の戦いが幕を開けた。

クラス代表選考会　決勝トーナメント④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝トーナメント⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝トーナメント⑤

「行きますわヨ！　［ペルーン］！」
「あは……［伏犠（ふっき）］！」

サンドラと立花は、自身の精霊（ガイスト）を召喚すると。

「サア！覚悟してくださいまシ！」

案の定、［ペルーン］が先手必勝とばかりにメイスを構えて突撃した。
いや、並みの奴ならそのプレッシャーで効果的かもしれないけど、相手はあの立花……『ガイスト×レブナント』の真の主人公なんだ。
当然、プレッシャーなんて微塵も感じていない。

「あはは！　相変わらずサンドラさんはそれ一辺倒だよね！　［伏犠］！」

すると［伏犠］は、口を大きく開けて［ペルーン］を見据える。
マズイ！？　あれは……！

「【竜の息吹】」
『カアッ！』

立花の呟きと共に［伏犠］が【竜の息吹】を放ち、［ペルーン］へと迫る。
あの攻撃には【全防御貫通】の効果があることはサンドラも知っているはずだから、さすがに避け……「【ガーディアン】！」……

って、はあああ！？

なんとサンドラは、避けるどころか前方に盾を展開し、【竜の息吹】を真っ向から受け止めるつもりでいやがる！？

「バカヤロウ！　躱（かわ）せええええ！」

思わず叫んだ俺だが、サンドラはまるで意に介さず、口の端を持ち上げた。

そして。

――ギイイイイイインンン……ッ！

「う、受け止めた……？」

オイオイ、本気（マジ）かよ……。

なんで【全防御貫通】の効果を無視して、あの盾は【竜の息吹】を受け止めることができるんだ……？

「……まさに矛盾、ですね」

「氷室、先輩……？」

ポツリ、と呟いた氷室先輩へと、俺は視線を向ける。

「サンドラさんの精霊（ガイスト）……［ペルーン］のあの盾には、【絶対防御】のスキル効果がついています」

「はあ！？」

氷室先輩の説明に、俺は驚きの声を上げた。

【絶対防御】！？　そんなスキル効果が存在するのか！？

「……私も解析した瞬間、自分の目を疑いました。そして、［ペルーン］のあの盾は、最強とも言える【全防御貫通】という矛を見事に防ぎ切ってみせました」

「ですね……」

「望月さん……先程の予想は撤回します。この戦い、どちらが勝つか、もはや予測不可です」

そう言うと、氷室先輩はジッと二人の戦いを見据える。

というかサンドラの奴、こんな隠し玉を持ってたなんて、先に教えとけよ！

俺は心の中でそんな悪態を吐くと、口元を緩めながら二人の戦いに集中した。

「ふうん……サンドラさんの盾が、まさかボクの【竜の息吹】を防ぐほどのものだったなんて、思わなかったよ」

「フフ、ですわよネ。だっテ、ヨーヘイにも言ってないんですもノ」

サンドラは口の端を持ち上げると、ジリ、ジリ、と［伏犠］との距離を詰めていく。

「このメイスの射程に入ったら、あとは一撃で仕留めて差し上げますワ」

「あはは。だけどサンドラさん、キミにその盾があるように、ボクにもアレがあるのを忘れてない？」

立花はニヤリ、と笑いながら、すう、と息を吸い込んだ。

「【竜の恩恵】」

立花はそう告げるが、［伏犠］には変化は見られない。

だけど……あのスキルこそが、この主人公を最強たらしめているんだ。

「フ、フフ……全ステータスが二段階上昇シテ、【物理耐性】、【全属性耐性】、【状態異常無効】、でしたかしラ？」

「そうだよ！　それに、［伏犠］になったことで［ジークフリート］にはあった背中の隙間もなくなった！　これでもう、キミの攻撃じゃ有効なダメージを与えるのはほとんど無理だよ！」

そうか！　背中の隙間は、［ジークフリート］特有の弱点だったけど、［伏犠］になったことでそれも解消されちまったのか！

どうする、サンドラ……！

「フフ……」

すると、サンドラは何故か微笑んだかと思うと、右手でそっと左手に触れた。

そこには、“レムリア”領域（エリア）で入手した、あの“リネットの指輪”がある。

「立花クン……アナタが【竜の恩恵】で上昇するステータスは二段階まで、ですわよネ？」

「うん、キミの言う通りだよ」

「そうするト、今のステータスはオール“ＳＳ”ってところかしラ？」

「今さら隠すつもりもないから言うけど、［伏犠］の元々のステー

タスはオール“Ｓ”だから、二段階上昇で“ＳＳ”になっているよ」

その言葉を聞いた瞬間、サンドラの笑みはさらに色濃くなった。

「フフフ！　でしたら、ワタクシも包み隠さずお教えいたしますワ！　ワタクシの［ペルーン］もレベル六十を超えたことで、『耐久』が“ＳＳ”に到達しましたノ！」

「へえー、おめでとう。でも、それが何の関係があるの？」

「フフ、決まってますワ！　アナタの【竜の恩恵】の効果は十分間！　そして［ペルーン］の『耐久』ステータスは元々の“ＳＳ”に加えて、ワタクシの“リネットの指輪”の効果でさらに一段階引き上げられ、限界突破の“ＳＳ＋”ですのヨ！　つまり！」

［ペルーン］が、メイスの先端を［伏犠］の眉間へと突きつける。

「この【絶対防御】の【ガーディアン】と合わせて、十分間アナタの攻撃を耐え切ったその時、アナタはこのメイスの餌食となるのですワ！」

サンドラは確信に満ちた表情で、立花の奴に向けて宣言した。

「……あはは」

「フフ……絶望的なこの状況を理解して、とうとう笑うしかなくなったんですノ？」

どうやらサンドラは、立花のその笑いを諦めによるものだと思ったらしい。

だけど、俺は……俺だけは知っている。

この『ガイスト×レブナント』において、真の主人公のその力を。

「後悔、しないでね？」

そう言うと、立花はその中性的で端正な顔に似つかわしくないほどの、獰猛（どうもう）な笑みを浮かべた。

クラス代表選考会　決勝トーナメント⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝トーナメント⑥（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「後悔、しないでね？」

そう言うと、立花はその中性的で端正な顔に似つかわしくないほどの、獰猛（どうもう）な笑みを浮かべた。

「ッ！？」

立花のまとう空気が変わったことに気づいたんだろう。

サンドラはほんの少し前までの笑みは鳴りを潜め、今はただ、立花の一挙手一投足を見逃すまいと、神経を張り巡らしていた。

「行くよ……【青龍】」

立花が予選のバトルロイヤルで見せた【四神】のうちの一つ、【青龍】を唱えると、クレイモアに一匹の龍がまとわりつく。

そして、［ペルーン］に向かってダッシュした。

「ッ！　【ガーディアン】！」

サンドラは全方位に【ガーディアン】を展開し、立花を待ち構える。

――ガイイイイイイインン……！

［伏犠］がクレイモアを盾に打ちつけると、会場中に鈍い金属音

が響いた。

「フッ！」

その後も、［伏犠］は何度も攻撃するが、盾はピクリとも動かない。

「フフ……やみくもに攻撃をしても、この【ガーディアン】を破ることなんてできませんわヨ？」

「あはは、もちろん分かってるよ。そして、その盾にも隙があるってことも」

「……何ですっテ？」

そう言うと、［伏犠］はまたもクレイモアで打ち続けた。

すると。

「……あの盾、少し動いてないか？」

「うむ、よく気づいたな。そうだ、立花くんは盾に何度も打ちつけることで、盾と盾の間にある隙間をこじ開けているみたいだな。あの、【青龍】によって」

「っ！？」

先輩の説明を受け、俺は改めて【ガーディアン】を見ると……いつの間にか【青龍】が盾と盾の間に食い込んでる！？

「あはは、今だよ！」

そう叫んだ瞬間、【青龍】の身体から突風が吹き出し、少しずつ盾の隙間を広げていく。

『グ……ググ……！』

だけど、［ペルーン］も負けじと渾身の力で盾の隙間を閉じようとする。

「［ペルーン］！　頑張ってくださいまシ！　このまま十分間耐え抜けば、その時こそワタクシ達の勝ちですワ！」

『……（コクリ！）』

そんなサンドラの声に呼応するかのように［ペルーン］は頷くと、その太く逞(たくま)しい腕(かいな)にさらに力を込めた。

そして。

――ガキイイイイイインンンッッッ！

なんと、［ペルーン］はその怪力で【青龍】を押し潰してしまった。

「フフ、頼みの綱の【青龍】はもういませんワ！　こうなった以上、アナタに【ガーディアン】を攻略することは不可能ですわヨ！」

確かに、サンドラの言う通りだ。

また一から隙間をこじ開けるにしても、結局は同じことの繰り返しになる可能性が高いし、何より、そんなことをしている間に【竜の恩恵】の効果持続時間である十分を経過してしまう。

さて……立花、お前はどうする……？

「ウーン……これじゃあ、隙間をこじ開けて【ガーディアン】を攻略するのは無理っぽいなあ……」
「アラ？　もう降参ですノ？」
立花の言葉に拍子抜けしたのか、サンドラは不思議そうな表情を浮かべて尋ねる。
「まさか！　確かに［ペルーン］の【ガーディアン】を攻略するのは無理だってことは認めるけど、だからってサンドラさんを倒せないってことじゃないから」
「……ヘエ、面白いことを言いますのネ……？」
今の台詞（セリフ）にカチン、ときたサンドラが、立花をキッ、と睨みつけた。
だけど、俺から見ても難攻不落の【ガーディアン】を攻略するのは至難の業だ。
じゃあ一体、立花はどうやって倒すつもりなんだ……？
「あはは……そもそも、【ガーディアン】はその鉄壁の守りで外からの攻撃は寄せつけなさそうだけど、例えば、中からの攻撃はどうやって防ぐのかなあ？」
「なんですっテ！？　……キャアアアアアアアアッッッ！？」
「っ！？　サンドラ！？」
クスクスと嗤いながら立花がそう告げると、突然、ドーム状に展開していた【ガーディアン】が、放射状にはじけ飛んだ。
い、一体何が起こったんだよ！？　そ、それにサンドラは無事なのか！？
俺は慌ててサンドラを見ると……彼女の制服がズタズタに引き裂

かれてその妖精のように白い素肌が露わになり、そこからうっすらと血がにじみ出ていた。

「っ！　サンドラアアアアアアア！」

俺はサンドラが心配でたまらなくなり、思わず大声で叫ぶ。

だけど、何でサンドラがあんなに傷ついてるんだよ!?　ちゃんと【ガーディアン】で守ってたんじゃないのかよ!?

「サ……「望月くん、落ち着け！　審判の先生もいるし、救護班だって控えている！　サンドラに万が一はないから！」……せ、先輩！　ですが！」

俺は今にも舞台の上に駆け出そうとしたところを、先輩に制止される。

だけど、このままじゃサンドラの奴が……！

「それに……見ろ！　サンドラの瞳は、まだ光を失ってはいない！」

「っ！」

サンドラは歯を食いしばりながら身体を起こすと、アクアマリンの瞳に力強い光を湛え、立花を捉え続けていた。

「マダ……マダですワ……！」

「……サンドラさんもすごいね。ひょっとして『耐久力』だったら、【竜の恩恵】でステータスが上昇した［伏犠］……いや、桐崎先輩の［関聖帝君］だって凌ぐんじゃないかなあ」

立花は感心しながらそう言うと、全く警戒を怠らずにサンドラを見据える。

そこに、驕(おご)りは一切感じられなかった。

「と……当然ですワ……！　ワタクシの盾は、世界一大切な人を守る盾、ですもノ……！」

「うん……その気持ち、ボクも分かるよ……」

二人はお互いの視線を合わせながら、ゆっくりと頷く。

「ワタクシは……ワタクシは、アナタに勝って決勝に行くノ……！　そしテ、ヨーヘイに強くなったこのワタクシを見てもらうノッ！　知ってもらうノッ！　アナタのおかげで、強くなれたっテ！」

「っ！」

サンドラ……。

「それは、ボクだって同じだよ……ボクだって、望月くんに見てもらうんだ！　一番大切な親友で、ライバルの望月くんにっ！」

立花……。

「……だから、ボクの持つ最大のスキルで、キミを倒すね？」

そう言うと、［伏犠］のクレイモアが激しく燃え盛り、その切っ先には一羽の鳥が……いや、あれは鳳凰……？

「……き、奇遇ですわネ……ワタクシも、次で決めるつもりでしたのヨ……？」

その言葉を受け、［ペルーン］がメイスを高々と振りかぶった。

「【裁きの鉄槌】ッッッ！」
「【朱雀】！」
お互いの最強のスキルが舞台の中央で激突し、轟音と光が舞台全体を包み込む。
そして。
「それまで！　勝者、“立花アオイ”！」

クラス代表選考会　決勝トーナメント⑥（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝戦①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝戦①

「それまで！　勝者、“立花アオイ”！」

審判の葛西先生が勝ち名乗りを挙げた瞬間、俺はたまらず舞台へと駆け出した。

「サンドラ！　しっかりしろ！」

「ウウ……ヨ、ヨーヘイ……ッ！？」

倒れるサンドラを抱え上げて声を掛けると、サンドラはうっすらと目を開けて俺の姿を見た瞬間、そのアクアマリンの瞳を見開いた。

「望月くん、サンドラは！？」

「サンドラさんは無事ですか！？」

俺に遅れて藤堂先輩と氷室先輩が駆けつける。

「っ！　氷室先輩！　サンドラの手当てを！」

「はい！　【リリノエ】！」

ナースのコスプレをした［ポリアフ］が召喚され、サンドラの負傷した箇所に手を触れた瞬間、あっという間にサンドラのあの白く珠のような肌が戻った。

「サンドラ……」

「フフ……負けて、しまいましたワ……」

そう言うと、サンドラが寂しそうに微笑む。

「だけど……やっぱりサンドラはすごかったよ。俺は、お前の戦う姿から、一瞬たりとも目が離せなかった。惹き込まれた」

「そっカ……」

サンドラは立ち上がり、軽く伸びを……って!?

「サ、サンドラ!」

立花の攻撃を受けて制服の破れてしまった箇所から、サンドラの白い肌が覗いていたので、俺は慌てて自分の制服を脱ぐと。

「ア……」

そっと、サンドラの身体に制服をかけてやった。

「サンドラさん」

立花がサンドラの前に来ると、ス、と右手を差し出す。

「うん……すごく強かったよ。しかも、あの【ガーディアン】には本当に驚いた」

「フフ、ワタクシも立花クンの強さには驚きですワ。決勝、頑張ってくださいましネ」

サンドラがニコリ、と微笑み、立花の手を取り、握手を交わした。

「さーテ……ワタクシも疲れましたので、チョット休んできますワ」

「お、おう……」

サンドラの奴はそう言って、手をヒラヒラさせながら舞台を降りて校舎のほうへ歩いて行くと、プラーミャがその後を追いかけた

「……望月さん、サンドラさんを追いかけなくていいんですか？」

氷室先輩が、おずおずと俺に尋ねる。

だけど。

「はは……今は、それは止めときます」

俺は氷室先輩にそう返事して苦笑する。

だって……今のサンドラは、絶対俺にその顔を見られたくないと思うから。

だから。

「俺の知ってるサンドラなら大丈夫ですよ……それに、戻ってきたら全力であの金髪を撫でまわしてやります」

「ふふ……そうだな」

俺達は、サンドラの背中が見えなくなるまで、舞台の上からずっと見守っていた。

◇

「それでは、ただ今からクラス代表選考会一年生の部、決勝戦第一試合を行う！」

舞台の中央に立つ学年主任の先生が、高らかに宣言する。

さあ……あと一つ勝てば、俺はクラス代表に選ばれ、そして……

二週間後に行われるメイザース学園との団体戦に挑むことになる。

「ふふ、この後の決勝の勝者が、交流戦を一緒に戦う仲間となるのか」

「あー、そうですね」

「む……望月くん、なんだその気の抜けた返事は……」

俺の返事がお気に召さなかったのか、先輩は口を尖らせながらたしなめた。

「はは……その前に、俺は立花を倒さないといけませんから」

「むむ、それはその通りだが……」

俺の答えに納得できない先輩が、プイ、と顔を逸らしてしまった。

まあ、先輩がどんな答えを聞きたがっているのか、本当は分かっている。

だから。

「……俺だって先輩と一緒に交流戦を戦いたいですから、立花との決勝戦、もちろん全力で勝ちに行きます」

「あう……な、ならいい……」

ホラ、先輩は顔を真っ赤にしながら口元を緩めている。

といっても、今の言葉だって俺の本心だし、先輩のいるところにはどこだって一緒にいたい。

でも……だからこそ、今度の交流戦イベは気を抜けない。

だって、これは先輩のこれから先に影響する大事なイベントなんだから。

「ハア……本当は、サンドラやプラーミャ、立花と一緒に団体戦を戦えたらいいんだけどなあ……」

今まさに一―一のクラス代表を決める決勝戦が目の前で始まろうとしているのに、俺はうわの空でそんなことを呟いた。

そして。

「では、始め！」

開始の合図と共に、決勝戦に残った両者が互いに精霊（ガイスト）を召喚した。

一方は、朱色の甲冑に朱槍という、まるで戦国武将のような出で立ちをした精霊（ガイスト）で、いかにも強そうな印象を与える。

もう一方は……長い黒髪を垂髪（すいはつ）にして目の縁に紅（べに）を引いた美女が巫女装束を身にまとい、金で装飾された薙刀（なぎなた）を持っており、どこか妖艶な雰囲気のある精霊（ガイスト）だった。

「うおおお！俺の精霊（ガイスト）、［鬼小島（おにこじま）］の一撃を食らええええッッッ！」

そう叫ぶと、戦国武将スタイルの精霊（ガイスト）が巫女姿の精霊（ガイスト）に槍の切っ先を向けて突進する。

すると。

「【真利込（まりこみ）】」

そんな透き通るような声と共に、巫女姿の精霊（ガイスト）が流れるような動

きで槍を弾き、そのまま槍の柄へ薙刀を滑らせて相手の精霊（ガイスト）の胴に叩き込んだ。

『グオオオッッ！？』

戦国武将の精霊（ガイスト）はうめき声を上げながら後ろによろめくけど、その甲冑のおかげでダメージはさほどでもないみたい……っ！？

「【一文字】」

そんな相手の隙を見逃さなかった巫女姿の精霊（ガイスト）が、八相の構えから戦国武将の精霊（ガイスト）の懐に飛び込み、まさに脳天から真下に切り落とした。

「あの技というかスキルというか……［関聖帝君］の【一刀両断】に似てる……」

「うむ、確かにな。だが、向こうは今のような連続攻撃を主眼に置いているためか、一撃の威力はそれほど高くない」

先輩が、その顎に手を添えながら冷静に分析する。

「ですけど、これで決まりみたいですね」

「ああ……団体戦の代表、二人目が決定したな」

「はい」

そして。

「勝負あり！　勝者、“賀茂カズマ”！」

審判の勝ち名乗りを受け、代表となった“賀茂カズマ”は声援に

応えるように手を挙げた。

クラス代表選考会　決勝戦①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝戦②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝戦②

「“賀茂カズマ”、か……」

俺は、目の前で勝ち名乗りを受けて声援に応える一―一のクラス代表を眺めながら、ポツリ、と呟く。

というのも、この“賀茂カズマ”って奴について、俺は何の情報も持ち合わせていないのだ。

まあ、そもそも『ガイスト×レブナント』の仲間キャラに、こんな奴はいないからなあ。

とりあえず今日の夜にでも、『攻略サイト』に少しでも情報が載ってないか確認するとしよう。

「さあ！　次はいよいよ俺の番だぜ！」

そう叫ぶと、加隈がガッツポーズをしながら立ち上がった。

「立花！　俺は先にクラス代表に選ばれる！　だから……待ってるぞ！」

ビシッ！　と立花に指を突き付け、歯を見せながら不敵に笑う加隈。

それに対し、立花はというと……。

「あ、あー……うん……」

ものすごく気まずそうな表情を浮かべ、サッと目を逸らす立花。

その姿は、家族でファミレスにご飯を食べに行った時に、たまたまクラスの知り合いと遭遇してメッチャ気まずい気分になった時のようだった。

うん、立花は今、いたたまれないんだろうなあ……。

「それじゃ……行ってくる！」

「「「「「……」」」」」

加隈はクルリ、と踵（きびす）を返し、颯爽と舞台上がる。

それはまるで、物語の主人公のようなムーブではあるんだけど、その……加隈がすると似合わない。

まあ、『ガイスト×レブナント』でもお調子キャラの三枚目設定だもんなあ……。

「……キモチワルイ」

ああ、加隈よ……お前に対する立花の好感度は、下がる一方だぞ……。

「ヨッシャアアアア！　今の俺は、どんな奴が相手でも負ける気がしねーぜ！」

オイオイ加隈、その根拠のない自信はどこから出てくるんだよ。

「ハア……偉そうに言ってるけど、結局のところアンタはあれだけ馬鹿にしてきた“ゴブリン”が強くなった途端、尻尾振ってるだけじゃん」

「はあ！？」

対戦相手である女子生徒……ええと、なんて名前だったっけ？
い、一応最初の二か月は同じクラスだったから、見覚えはあるんだけど……うん、知らね。
でも、その煽り方はできればやめて欲しかったなあ……。

だって。

「……あの女子生徒、よほど死にたいらしいな」
「ふふ……［ポリアフ］の【スナイプ】でひと思いに仕留めますか？」
「あはは……彼女、面白いこと言うね」

先輩、氷室先輩、立花の三人がそれはもうすさまじい殺気を放っているせいで、まるでマンガみたいに俺の視界がグニャリ、と歪んで見える……ような気がする。

それにしても俺の評価って、一―二では今でも“ゴブリン”のままなんだなあ……。

「なあオマエ……アイツのこと馬鹿にすんの、ヤメロよ」
「はあ？　尻尾振って飼い犬みたいになった途端、アイツの擁護？　ダサ」

ああもう、加隈もそんなバカはもう構うな。そうじゃないと、俺がこの三人を抑える自信がないぞ。

「ハハ……つーかオマエの言う通り、俺はダセーよ。散々アイツのこと馬鹿にしてきたくせにアッサリとやられて、その後もふてくされて、勝手にアイツや立花に絡みに行って……」
「なんだ。理解してるなら、せめてこの決勝、辞退したら？　アン

タが代表だなんて、恥ずかしいだけなんだから」

唇を噛みながら俯く加隈に、女子生徒がなおも失礼な言葉を投げかける。

ハア……担任を含めて、本当に一―二の連中はクソだな。

「加隈！　いいからそんなクソ野郎、サッサと叩きのめしちまえ！」

気づけば、俺は舞台に向かって大声で叫んでいた。

大体、俺のことがそんなに気に入らないんだったら、加隈なんかに絡んでないで直接俺に行って来いよな。

「ハハ……アイツ、本当にしょうがねーよな……！　分かったよ！　ヨーヘイ！」

今度は加隈の奴が、苦笑しながら俺の名前を叫びやがった。

というか、なんで俺のことを下の名前で呼んでるんだよ。

「コホン……では、両者構え！」

このままだと収拾がつかないと思ったのか、審判を務める学年主任の先生が咳払いをした後、少し時間が早いけど試合を始めることにしたみたいだ。

そして。

「始め！」

「来い！　［ロキ］！」

「フン！　［カマソッソ］、来なさい！」

開始の合図と共に、加隈と女子生徒が互いに精霊（ガイスト）を召喚する。

女子生徒の精霊（ガイスト）は、半分だけ仮面を被ったショートカットの女性で、コウモリのようなマントを羽織り、両腕に鉤爪（かぎつめ）の武器を装着していた。

そして、その仮面から覗く表情は、どこか心が壊れているかのような不気味な印象を受けた。

「ハッ！」

女子生徒のそんな掛け声と共に、精霊（ガイスト）……［カマソッソ］はマントを広げて飛翔する。

へえー……飛行タイプの精霊（ガイスト）なんて、珍しいな。

「アハハ！　それじゃ、この私がアンタをギリギリまでいたぶってアゲル！　感謝しなさい！」

そう言うと、［カマソッソ］が空中から［ロキ］に向かって急降下をした。

「【ニードルスピアー】！」

両手の鉤爪を突き出し、きりもみしながら［ロキ］の頭部を狙う。

だけど。

「っ！？　消えた！？」

突然［ロキ］が視界から消え、女子生徒が戸惑う。

「ハハ！　ワリイな、［ロキ］はコッチだよ！」

いつの間にか［カマソッソ］の背後にいる［ロキ］が、その手に持つ杖を向けると。

「【マドハンド】！」

地面から腕が生え、［カマソッソ］の足首をつかんだ。

「な、なんなのよコレ！？　は、離せ！」

「バーカ、離すわけねーだろ。つーか、このまま引きずり込まれろ」

加隈は皮肉を込めてそう言い放つと、ずる、ずる、と［カマソッソ］の身体が地面にめり込んでいく。

「わ、分かった！　謝る！　さっきの言葉は取り消すから！」

「は？　ワリイ、聞こえねー」

懇願する女子生徒を無視し、加隈が小指で耳をほじる仕草をした。

その時。

「それまで！　勝者、“加隈ユーイチ”！」

もう女子生徒は戦闘不能だと判断した学年主任の先生が、ここで加隈の勝ちを告げた。

まあ、あの女子生徒は恐怖で泣きじゃくってるし、このまま続けてもアレだから、いい判断だと思う。

「どうだ！　これが、俺の［ロキ］の強さだ！」

舞台の上で嬉しそうにガッツポーズをする加隈。

そんなアイツを眺めながら、俺は思わず苦笑した。

クラス代表選考会　決勝戦②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝戦③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝戦③

「さーて……いよいよ俺達の出番、か」

そう呟くと、俺はチラリ、と隣にいる立花を見やる。

「うん……いよいよ、だよ」

立花も、その翡翠（ひすい）の瞳で俺を見つめた。

はは、俺と戦う準備は万全だってことかよ。

「んじゃ、舞台の上に行こう……「ヨーヘイ！」」

立ち上がって舞台に向かおうとしたところで、後ろから声を掛けられて振り返ると……そこには、サンドラとプラーミャがいた。

「ヨーヘイ！　絶対に勝つんですのヨ！　勝って……アナタがクラス代表になるんですノ！」

サンドラは満面の笑顔で、激励の意味を込めてその右の拳を突き出した。

なんだよ……そんなにまぶたを真っ赤に腫らしてるくせに……俺なんかを気遣いやがって……！

「ああ！　俺は勝つ！　絶対にだ！」

俺はサンドラの想いを受けとめ、お返しとばかりに拳を突き上げて返した。

「あはは！　ボクだって負けないよ！　ボクはキミに勝って、そして、キミの隣に並び立つんだ！」

そんな俺とサンドラの熱に触発されたかのように、立花も俺に向かって宣言する。

チクショウ……立花のくせに、熱いじゃねーか！

「フフ……アオイ、ヨーヘイなんてぶっ飛ばしちゃいなさイ。私（ヤー）の仇をとるのヨ！」

「そうだぜ！　ヨーヘイなんか、ぶちのめしちまえ！」

プラーミャと試合を終えて戻ってきたばかりの加隈が、立花の両脇に立って肩をポン、と叩いた。

「はは、完全にチームで分かれたな」

「あはは、だね。でも……ボク達は、この三人で色んな領域（エリア）を一緒に攻略してきたんだから、当然だよね？」

「まあな」

そう返事すると、俺は先輩、サンドラ、氷室先輩を見やった。

三人も俺の視線に気づき、微笑みながらゆっくりと頷く。

「さあ……行くぞ！」

「うん！」

俺と立花は、一緒に舞台に上がり、その中央で対峙した。

「ハハ、二人共いい表情だな。俺も精一杯審判を務めるから、力の限り頑張れ！」

「「はい！」」

審判の葛西先生の激励を受け、俺達は身構える。

そして。

「では……始め！」

先生の開始の合図と共に、俺達は精霊（ガイスト）を召喚した。

「［シン］……これでラストだ。行くぞ！」

『ハイなのです！』

俺と［シン］は目の前の立花と、召喚された［伏犠（ふっき）］を見据える。

その一挙手一等足を、見逃さないように。

「あはは、来ないの？」

「そうだな……行ってもいいけど、なんか罠っぽいんだよなあ」

「そう？　じゃあ、ボクから行くね！」

そう言うや否や、［伏犠］がクレイモアを肩に担いで突進してきた。というか速い！？

「［シン］！　［伏犠］は【竜の恩恵】を発動してる！　気をつけろ！」

『了解なのです！　だったら［シン］はそれよりも、もっともっと速く動くだけなのです！』

［シン］もまた俺の隣から弾丸のように飛び出し、一気に［伏犠］に肉薄する。

『ッ！』

［伏犠］が右脚を軸にして、独楽のように回転しながらクレイモアで斬りつけてきた。

だけど……そんな大振り、当たるかよ！

『はう！　甘いのです！』

そんなクレイモアの攻撃をスルリ、と躱し、［シン］は素早く［伏犠］の身体に大量の呪符を貼り付けた。

『【爆】！』

『ッ！？』

一気に呪符が爆発し、［伏犠］が思わずよろめくが、その身体は傷一つついていなかった。

チクショウ、相変わらず堅い身体だな！

「あはは！　前みたいに温度差を利用して鎧を破壊したところで、［伏犠］にはもうあの弱点はないよ！　それとも、このまま【竜の恩恵】の効果が切れるまで、持久戦に持ち込むかい？」

「はは、そうだな……」

得意げに話す立花に対し、俺はただ苦笑する。

でもアイツの言う通り、［シン］の持つ呪符による攻撃じゃ、あの［伏犠］にダメージを与えられない。

やっぱり、【竜の恩恵】の効果が切れるまで粘るってのが、現実的か……？

『はう！　［シン］はマスターを信じて、攻撃を繰り返すだけなのです！　前の時みたいに、マスターなら絶対になんとかしてくれるはずなのです！』

はは……［シン］にあんなに期待されてちゃ、俺もそれに応えるしかないだろ！

俺だって、［シン］に尊敬されるマスターでいたいもんな！

だったら！

「［シン］！　［伏犠］の身体にありったけの【凍】の呪符を貼って、その上から【爆】の呪符で覆い隠せ！」

『！　それー！　なのです！』

俺の指示を受けた［シン］は、甲冑も皮膚も、全て呪符を貼り付けて隠してしまう。

「クッ！　【玄武】！」

前回のこともあって警戒しているのか、立花はこれ以上呪符を貼らせまいと、【玄武】を目の前に展開して［シン］の猛攻を防ぐ。

だけど、その【玄武】には欠陥があるぞ！

『はうはうはう！　こんなものじゃ［シン］は止められないのです！』

［シン］は回り込むようにして【玄武】の内側へと入ると、そのまま呪符を……って！？

「があああああッッッ！？」

『あうっ!?　痛いのです!?　痛いのです!?』

突然、全身をズタズタに切り裂かれる衝撃が走り、俺と［シン］はもんどり打って倒れ込む。

こ、これは……サンドラの時と同じ……!?

「あはは……不用意に飛び込むからだよ」

口の端を持ち上げながら、立花は俺と［シン］を見下ろす。

その傍らに、白色の虎を従わせながら。

「そ、その虎は……!」

「あはは、これかい？　これは【白虎】、［伏犠］のスキル、【四神】のうちの一体だよ」

そうか……この【白虎】を【玄武】の内側に待機させて、入ってきた瞬間にあの鋭い牙と爪で切り裂いたってわけか……。

そしてサンドラの時も同じように、【ガーディアン】に隙間ができた際に潜り込ませ、盾の内側から［ペルーン］に攻撃を……。

「さあ……どうする？」

「痛う……ど、どうって、俺がここで降参するとでも思ってるのかよ……！」

『そ、そうなのです！　［シン］は……［シン］は、まだ全然戦えるのです！　それに、もう同じ手は通用しないのです！』

余裕な表情を浮かべる立花に、俺と［シン］は立ち上がって啖呵を切った。

その時。

「ヨーヘイ！」

観客席から、俺の名を呼ぶ声が聞こえた。

はは……分かってるよ、サンドラ。お前の分まで、この試合……俺が絶対に、勝ってみせるから！

「［シン］！　ちょっと手痛い目に遭ったけど、やることは変わらない！　引き続き、呪符を貼り付けるんだ！」

『ハイなのです！』

「そうはさせないよ！　【玄武】！　【白虎】！　【青龍】！」

立花は［シン］を近づけないようにするため、【四神】のうち【朱雀】を除く三体を総動員し、迎え撃つ。

『はう！』

［シン］は三体の【四神】をまるでいないものとして相対しようともせず、ただひたすらに呪符を貼り付けていった。

さて……これだけ貼れば充分か。

「よし！　［シン］、今だ！」

『はう！　【凍】！』

すると【爆】の呪符の下から【凍】が発動し、一気に［伏犠］の身体を凍らせる。

「あはは……これくらい凍ったところで、［伏犠］には通用……』

【爆】！』……あああああああああッッッ！？」

［シン］が【爆】を一斉に作動させた瞬間、［伏犠］の身体全体が大爆発を起こした。

それこそ、通常の【爆】の威力とは比べ物にならないほどに。

「あうっ！？」

立場が逆転し、今度は立花が舞台の上に倒れた。

「こ、この威力……どうして……！？」

「ああ……立花は見覚えないか？　油の引いた高温のフライパンに水をかけると、一気に水蒸気になって油が飛び跳ねるヤツ」

「そ、それが……どうしたの……？」

「まあ……いわゆる水蒸気爆発だよ」

そう……俺は、呪符を使ってまずは【凍】により［伏犠］の全身を凍らせ、その直後に【爆】によって一気に高温をぶつけることによって、まさに水蒸気爆発が起こる状況を生みだしたんだ。

こうすれば、通常の【爆】では与えれないダメージも、さらに威力を増すことで可能になる。

「あ、あはは……！　やっぱりキミはすごいよ……！」

「はは……俺じゃなくて、［シン］がな……」

俺は苦笑しながらそう答えると、立花は何故かかぶりを振った。

「そんなこと、ないよ。ボクもそうだし、他のみんなだって同じだけど、普通は精霊（ガイスト）のステータスやスキルに頼って戦うものだよ……」

「あー……」

そう言われれば、そうかもな。

だけど俺と［シン］は、クラスチェンジをする前はこうやって無い知恵を振り絞らないと、生き残ることさえ難しい状況だったから、こういった戦い方が当たり前みたいになってるところがあるし。

「あはは……そんなキミ達だからこそ、ボクはなんとしても勝ちたいんだ……！」

立花はガキン、と歯を食いしばって立ち上がると。

「【チェンジ】」

静かに、そう告げた。

クラス代表選考会　決勝戦③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝戦④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝戦④

「【チェンジ】」

立花が静かにそう告げた瞬間、［伏犠（ふっき）］が幽子の渦に包まれる。

これは……［ジークフリード］の時と同じように、別の精霊（ガイスト）に切り替わるのか……？

そして、徐々に幽子の渦が晴れ、予想通り［伏犠］とは別の精霊（ガイスト）が現れた……って、これは！？

「か、［関聖帝君］……！？」

い、いや、手に持つ武器は青龍偃月刀（えんげつ）じゃなくてレイピアだし、髪の色も燃えるような赤色だから、違うってのは分かるんだけど……その端正な顔立ちやスタイル、それに身にまとう衣装も、まるで［関聖帝君］のそれだ。

「あはは、やっぱり驚くよね……ボクもこの［女媧（じょか）］の姿を見た時、本当に驚いたもん」

「［女媧（じょか）］！？」

やっぱり［関聖帝君］とは違うものの、それでも、あの［女媧］という精霊（ガイスト）からは、どこか同じ雰囲気を感じる……。

俺はチラリ、と観客席にいる先輩を見やると、やはり先輩も驚きを隠せない様子で、手で口元を押さえながらその真紅の瞳を見開いていた。

「立花……お前のその精霊（ガイスト）が只者じゃないってことは分かる。だけど、本当にそれでいいのか？」
「……どういう意味？」
「忘れたのか？　……だったら、思い出させてやる！　［シン］！」
『ハイなのです！』

俺の言葉を合図に、［シン］は［女媧］へと突撃する。
そして、無防備状態の［女媧］に呪符を貼り付けると。

『【裂】』

はは！　［ブリュンヒルデ］に【チェンジ】したあの時も、【竜の恩恵】がなくなって［シン］の呪符でダメージを食らいまくる羽目になったってのに……っ！？

「あはは！　［女媧］は、【四神】以外のスキルは［伏犠］と全て共有しているんだ！　あの時と同じようにはいかないよ！」

俺の驚く様子に、立花が高笑いした。

「ハッ！　それがどうした！　だったら、［伏犠］と同じ戦法でダメージを与えるだけだ！」

弱みを見せまいと、俺は精一杯強がってそう叫ぶ。
［シン］もそんな俺の思いを汲（く）み取ったのか、コクリ、と頷くと、素早い動きで［女媧］を中心として旋回しながら呪符を貼り付けていった。

『はう！　いくのです！　【凍……「そうはさせない！　【渾敦（こんとん）】

！」……は、はうはうはう！？』

すると、長い毛を生やした一匹の犬のような魔獣が、自分の尻尾を口で咥えて［女媧］の身体を囲いこみ、グルグルと回り始めた。

「い、一体何を……って、なあ！？」

犬の魔獣の毛が［女媧］の身体を撫でると同時に、貼り付けた大量の呪符が全て剥がされてしまっただと！？

「あはは！　この【四凶】の一つ、【渾敦】は、［女媧］の身体にまとわりつくスキルや魔法による効果を、全部解除してくれるんだよ！」

「はあ！？」

な、なんだよそのスキル！？　ある意味反則だろ！？

これじゃあ、単発……いや、せいぜい二、三枚での呪符攻撃しかできないじゃねーか！

「チクショウ……！　このチート主人公め……！」

俺は立花を睨みながら、ギリ、と思わず歯噛みする。

さっきみたいな水蒸気爆発を狙うこともできないし、かといってそれ以外の方法で【竜の恩恵】による防御効果を上回ってダメージを与える方法が……っ！？

「ゆっくり考えている暇を与えるつもりはないよ！　【檮杌】！」

立花が間髪入れずに次のスキルを放つと、今度は人の顔に下あごから上に伸びる鋭い牙を生やした虎のような魔獣が、その長い尾を

振り回し、舞台の上を縦横無尽に暴れ出した。

「この【檮杌（とうごつ）】は、敵味方関係なくボクと［女媧］以外の者を全員倒すまで、永遠に攻撃を仕掛け続けるんだ！　何とかしないと［女媧］と戦う前にやられちゃうよ？」

「チッ！　メンドクセエ！」

チクショウ！　はた迷惑なスキル使いやがって！

「先生！　とりあえず避難を……って、もう舞台の外にいてるし」

俺がそう注意を促す前に、葛西先生は既に避難していた。というか、冷静に状況を見てるなあ。

まあ、先生だって俺達を指導する立場なんだから、やっぱりかなり強い精霊使（ガイスト）いだってことか。

「［シン］！　先生もいないし遠慮することはない！　舞台の床全体に、呪符でトラップを仕掛けちまえ！」

『了解なのです！　はうはうはう！』

［シン］も【檮杌（とうごつ）】に負けじと縦横無尽に駆けまわりながら、床に呪符を貼り付けていく。

『へへーん！　［シン］を追いかけようたって、そうはいかないのです！』

［シン］は舌をべー、と出しながら、的確に追いかけ回す【檮杌（とうごつ）】との間に呪符を展開する。

そして。

『ギャウッ!?』
『はうはう！　まだまだなのです！』
【檮杌】が呪符をうっかり踏んでひるんだ隙に、［シン］は【檮杌】の身体にこれでもかというほど呪符を貼り付けると。
『【爆】！　【裂】！』
『ギャギャガガガガガガッッ!?』
すさまじい爆熱と斬撃が襲い掛かり、とうとう【檮杌】はその姿を幽子に変えてしまった。
「……さすがは望月くんと［シン］、だね……オール“Ａ”のステータスを誇る【檮杌】を、こうもアッサリと撃退するだなんて……」
「はは……そもそも、立花がコントロールできない時点で、俺達の障害にすらならねーよ」
「あはは……痛いところを突くなあ……」
立花は苦笑しながら頭を掻く・
「うん……【檮杌】の欠点をこんな簡単に見破っちゃうんだもん、やっぱり望月くんはすごいよ」
「はは、褒めてもなんも出ないぞ?」
「もちろん分かってるよ。でも……勝つのはボクだ！　【饕餮】！」
立花がそう叫ぶと同時に、新たな魔獣が召喚された。

クラス代表選考会　決勝戦④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝戦⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「もちろん分かってるよ。でも……勝つのはボクだ！　【饕餮（とうてつ）】！」

立花がそう叫ぶと同時に、新たな魔獣が召喚された。

その姿は、人の顔をした羊の魔獣で、曲がった角と肉食獣のような牙があった。

「……これも、さっきの【檮杌（とうごつ）】ってヤツと同じようなモンか……？」

「ウーン、ちょっと違うかな。といっても、確かに攻撃力も高いけどね」

「へえ……とりあえず【四凶】って言うくらいだから、もう一匹いるってことだろ？」

俺は情報を聞き出すため、あえてカマをかける。

そして残りの一匹が、サンドラを倒した時と同じ、アイツの最大火力の攻撃だったら、その時は……！

「あはは、じゃあボクも、あえて望月くんの思惑に乗せられてあげるね。キミの言う通り、【四凶】の魔獣はあと一体いるよ。だけど……できれば使いたくはない、かなあ……」

「？　それはどういう意味だ？」

「うん……だって、それを使っちゃったら、望月くんは絶対に大怪我しちゃうもん……」

そう言うと、立花は少し悲しそうな表情を見せた。

それだけ、その残りの一匹がヤバイってことか……。

「はは、なんだよ。それは、あの【朱雀】とかいうヤツや【竜の息吹】よりも、ってことか？」

「！　それはそうだよ！　サンドラさんは最高の防御力があったから、【朱雀】を受けてもあれくらいで済んだけど、［シン］が【窮奇】の一撃を受けちゃったら……！」

立花がここまで躊躇するほどの威力、なのか……だけど、その口ぶりだと、【朱雀】と同等程度って考えておいて間違いないみたいだな。

「……だから、あらかじめ回復スキルを持つ【饕餮】を召喚しておいたんだ」

「オイオイ！？　それじゃ結局のところ、その【窮奇】ってヤツを使う気満々じゃねーか！？」

立花の説明に、俺は思わずツッコむ。とはいえ、俺達にとってはそのほうが好都合だ。

だって……立花に勝つには、今の俺達じゃこの方法しか思いつかないから。

「あはは……ゴメンね。でも、ボクの全部を、望月くんに見て欲しいんだ！　受け止めて欲しいんだ！　ボクは……キミのおかげで、ここまで強くなれたんだって！」

立花はその翡翠の瞳で俺を見つめながら、思いの丈をぶつけてくる。

なら……俺も受け止めるしかないよな！

「分かった……俺も、お前の想いに全力で応えてやる！　だから……かかってこい！」
「あはは！　それでこそ望月くん！　ボクの……一番大切な人だよ！」
いや、最後の台詞（セリフ）!?　誤解されるような言い方するなよ!?
「行くよ……【窮奇（きゅうき）】！」
とうとう立花は、【四凶】の最後の一体、【窮奇（きゅうき）】を召喚すると、その姿はまさに銀色の翼の生えた巨大な虎だった。
「望月くん……今のうちに謝っておくね。できればこの【窮奇（きゅうき）】を放つ前に降参して欲しいけど、キミは絶対にそんな人じゃないから……」
はは……なんだよ……そんな、今にも泣きそうな表情でそんなこと言われたら、さすがの俺もビビッちまうだろ……。
「……［シン］」
『ハイ……なのです……』
【窮奇（きゅうき）】を眺め、額から一滴の汗を零す［シン］を手招きし、俺はそっと耳打ちする。
『っ！　……分かったのです。とうとうここで、使うのですね』
「すまん、［シン］……もう、これしかない」
『はう……［シン］は、マスターを信じてるのです』
［シン］はそのオニキスの瞳に決意を込め、キッ、と【窮奇（きゅうき）】を

見据えた。

さあ……あとは、タイミングと覚悟だけだ。

「あはは……望月くん、もう相談は終わったかな？」

「ああ……だけど、そんな律儀に俺を待っててもよかったのか？　お前だって、［シン］のスピードは知っているだろう？　それに、そのスキルも」

「もちろん理解してる。でも」

立花はすう、と息を吸うと、翡翠の瞳で俺を見つめた。

「でも……それでも、キミ達は【窮奇（きゅうき）】から逃れることはできない」

「そっか……」

さて……今の立花の口振りからすると、あの【窮奇（きゅうき）】の攻撃方法について少し予想できた。

あれほど自信ありげに言ったってことは、逃げ場がないような広範囲な攻撃か、もしくは追尾型の攻撃かのどちらかだ。

攻撃スピードが［シン］に匹敵するのかとも考えたが、［シン］はプラーミャの精霊（ガイスト）、［スヴァローグ］の【絨毯爆撃（じゅうたん）】さえも躱（かわ）してしまうスピードなんだ。当然、立花もそのことを知っているからな。

「さあ……行くよ！」

「っ！」

そして、［女媧］の元から【窮奇（きゅうき）】が放たれた。

クラス代表選考会　決勝戦⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　決勝戦⑥（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　決勝戦⑥

「さあ……行くよ！」
「っ！」

そして、［女媧］の元から【窮奇（きゅうき）】が放たれた。

その速さは、当然ながら［シン］ほどではないものの、かなりのスピードで飛翔しながら［シン］に迫る。
だけど、その様子を見る限り、広範囲攻撃じゃなさそうだな……。

「［シン］！」
『ハイなのです！　【神行法・跳】！』

［シン］はその場で屈（かが）むと、一気に上空へと飛び上がる。
プラーミャ戦での教訓を活かし、あらかじめ審判である先生達にルールを確認しておいたから、いくら高く飛んだところで失格にはならない。

『はうはうはうはうはうー！』

勢いが落ちると、その都度［シン］は空中を蹴って加速し、追尾する【窮奇（きゅうき）】を遥か下方へと置き去りにした。

その時、【窮奇（きゅうき）】がその巨大な口を開き、牙を剥き出しにする。

「オイオイ……ひょっとして、【竜の息吹】みたいなヤツをぶっ放すつもりなのか……？」

「ウーン、ちょっと違うかな。だって……【窮奇（きゅうき）】の存在こそが、［女媧］の攻撃そのものなんだから」
「っ！？」

立花の説明を聞いて息を飲んだ瞬間、【窮奇（きゅうき）】は［シン］を見据えてきりもみしながら襲い掛かった。

「［シン］！　躱（かわ）せ！」

俺はそう叫ぶが、［シン］は何故かモジモジするばかりで、一向に今いるところから動こうとしない。

「何してるんだよ！」
『はうはう！？　マ、マスター……身動きができないのです！？』
「はあ！？　なんだって！？」
「あはは……」

クスクスと嗤う声が聞こえ、そちらへ振り向くと、立花は口の端を吊り上げていた。

「無理だよ、望月くん。【窮奇（きゅうき）】があの状態に入ったら、脱出は不可能だもん」
「……どういうことだ？」
「あはは、見てごらんよ」

そう言って立花は［シン］を指差した。

「ホラ……［シン］の髪や服が、【窮奇（きゅうき）】が巻き起こす風で乱れているのが分かるかなあ？」
「っ！？」

確かに立花の言う通り、［シン］の髪や道袍が乱れているのは分かるけど、それが［シン］が身動きできないことと何の関係が……って！？

「まさか！？」

「そう……【窮奇】は風を自在に操ることができるんだ。それで［シン］の動きは封じさせてもらったよ」

チクショウ！　単なる追尾型のスキルじゃないのかよ！？

「……もちろん、風属性魔法の類とは違って純粋なスキルだから、スキルで無効化や反射をしたりすることはできないよ」

「……チッ、そうかよ……！」

俺は思わず舌打ちするが、そうこうしている間にも、【窮奇】は［シン］へと迫りくる。

『はうううううう……！』

とうとう［シン］の元へとたどり着いた【窮奇】が、その牙と前足の爪を［シン］へと襲……わせねえよっ！

「［シン］！　今だあああああ！」

『はう！　【神行法・瞬】！』

すると［シン］は【窮奇】の眼前から掻き消え、一瞬のうちに【窮奇】の背後を取った。

広範囲攻撃や追尾型の攻撃であることは想定していたから、いざという時は【神行法・瞬】で躱すよう、［シン］とあらかじめ打ち

合わせ済みだ。

それに……【窮奇（きゅうき）】から逃れた今、［女媧］は無防備なはず……っ！？

「あはは！　そうやって躱（かわ）すことも想定済みだよ！　ボクも一度味わってるからね！」

いつの間にか［女媧］は、その口を大きく開けて【竜の息吹】の体勢に入っていた。

「食らえええええ！　【竜の息吹】ッッッ！」

［女媧］の口から、渾身の一撃が［シン］に向かって放たれる。

真下からは［女媧］の【竜の息吹】、頭上には【窮奇（きゅうき）】……まさに、八方塞がりってヤツだな。

だけど。

「この時を待っていたッッッ！」

「ええ！？」

「［シイイイイイイイイン］！」

俺は口の端を持ち上げ、［シン］の名を叫んだ。

『はうはうはう！　【神行法・転】！』

「『ッ！？』」

その瞬間、立花と［女媧］は［シン］の姿を見失い、そして。

『ッッッ！？』

【窮奇（きゅうき）】の目の前に［女媧］が突然現れた。

「なっ！？　ま、間に合……！？」

［女媧］の【竜の息吹】と【窮奇（きゅうき）】の牙と爪が、超至近距離で交錯する。

「『アアアアアアアアアアッッ！？』」

［女媧］は自身の最大の攻撃である【窮奇（きゅうき）】の牙と爪をその全身に受け、【窮奇（きゅうき）】もまた、【竜の息吹】を食らって消滅した。

『はう！　マスター！』

「［シン］！」

一気に駆け寄ってきた［シン］を、俺は両手を広げて待ち構えると、［シン］は勢いよくジャンプして、最高の笑顔を浮かべながら俺の胸に飛び込んできた。

「はは！　やったぞ！」

『はう！　やっぱりマスターはすごいのです！　カッコいいのです！』

［シン］の頭をガシガシと乱暴に撫でると、［シン］は口元を緩めながら嬉しそうに目を細める。

そして。

「それまで！　勝者、“望月ヨーヘイ”！」

葛西先生が、俺達の勝ちを宣言した。

クラス代表選考会　決勝戦⑥（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クラス代表選考会　一年生代表決定！（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クラス代表選考会　一年生代表決定！

「う……うう……」
「っ！　立花！」

先生の勝ち名乗りの直後、俺はダメージを受けて倒れ込む立花へと、［シン］を抱えながら慌てて駆け寄る。

「あう……い、今の、って……？」
「あれは……三つある［シン］の【神行法】の最後の一つ、【神行法・転】。対象となる相手と自分の位置を一瞬で入れ替えるスキルだ」
「あ、あはは……そっか……」
「おい！　立花！」

俺は立花を抱きかかえ、声を掛ける。

「あは……大丈夫、だよ……何と言っても、【竜の恩恵】はまだ発動中だったからね……それに……【饕餮】」

いつの間にか傍に控えていた羊の魔物、【饕餮】が、立花の身体にすり寄った。
すると、【饕餮】の身体を覆う羊毛が抜け落ち、それに合わせて立花の怪我が癒されていく。

「これが……【饕餮】の能力、か……」
「ふう……うん。【饕餮】の羊毛は治癒効果があるだけじゃなくて、その柔らかさで相手の攻撃を弾く効果もあるんだ。当然、その鋭い

牙で攻撃だってできるよ」

【饕餮】による治療が終わり、すっかり元気になった立花が立ち上がった。

「あはは……また、負けちゃったね……」

「ああ……本当の意味で、紙一重でな。しかも、【神行法・転】もお前にバレちまったし、次は通用しないだろうからなあ……」

そう言うと、俺は苦笑しながら肩を竦める。

だけど実際そうだし、【神行法】も三つで打ち止めだからなあ……。

立花に確実に勝てるようになるには、やっぱり二年生の春の「神行太保」限定イベントをこなすまでは無理かあ……。

といっても、立花は立花で、主人公限定の最終決戦用のスキルを二年で取得するだろうし、いたちごっこ感が半端ない。

などと思いを巡らせていると。

「望月くん！」

「ヨーヘイ！」

「望月さん！」

先輩、サンドラ、氷室先輩が、観客席から笑顔で俺の名前を叫んでいた。

「あはは！　ホラホラ、みんなの声援に応えないと！」

「わっと!?」

立花にバシン、と背中を叩かれ、俺は思わずよろめいてしまう。
でも……そうだな、ずっと俺を応援してくれた三人には、本当に感謝しかない。
サンドラと戦えなかったのは残念だけど、この交流戦イベはまた来年にも開催される。
その時こそ、サンドラと……！
俺は、三人に応えるように両の拳を高々と突き上げると。
「みんなあああああ！　やったぞおおおおお！」
『はうはうはう！　やったのです！　やったのです！』
最高の相棒、［シン］と一緒に、この喜びと感謝を込めて、大声で叫んだ
◇
「それでは、ただ今から表彰式を行います」
各クラスを勝ち抜いて代表の座を手に入れた三人が、舞台の上で学園長の前に並ぶ。
「くううう……ヨーヘイが代表に選ばれたのは素直に嬉しいけどよー……立花とは一緒になれなかったんだよなー……」
「ハア……お前、まだそんなこと言ってるのかよ……」
拳を握りしめながらある意味悔しそうにする加隈に対し、俺は溜息しか出ない。

すると。

「ふふ……二人共面白い奴だな」

加隈の隣にいる一―一の代表、“賀茂カズマ”が、俺達を見てクスクスと笑う。

「いや、俺を加隈と一緒にするなよ！　三枚目キャラはコイツ！　コイツだからな！」

「ヒデエ！？お　前、裏切るのかよ！？」

「うるせー！」

などと加隈とわちゃわちゃしていると、賀茂はますます笑い出した。

「ハハハハハ！　本当に面白いな！　二週間後の交流戦が今から楽しみになってきた！」

「「そ、そう……？」」

俺と加隈はお互い手を止め、腹を抱えて笑う賀茂を見てキョトン、としてしまう。

「ま、まあだけど、賀茂の精霊（ガイスト）、ええと……」

「ハハハ……ん？　オレの［瀬織津姫（せおりつひめ）］のことか？」

「そうそれ！　あの薙刀（なぎなた）の攻防一体のスタイル、なかなかすごかったよ」

「ハハハ！　そうだろう！　オレもかなり修練を重ねてきたからな！」

そう言うと、嬉しそうに笑う賀茂。
立花が中性的なイケメンであるのに対し、この賀茂は眼鏡をかけていることもあって、理性的なイケメンって感じだな。
というか、この容姿とあの精霊（ガイスト）の強さだと、『ガイスト×レブナント』の主要キャラでもおかしくないと思うんだけど。

「コホン」
「「「あ……」」」

見ると、咳払いをしながら学園長が苦笑している。

「ハハハ……優勝者同士で仲が良いのはいいが、まずは表彰式を済ませてからにしてくれるかな？」
「「「は、はい……」」」

こうして、俺達三人は学園長からお祝いの言葉と小さなトロフィーを受け取り、無事に表彰式を終えた。
……まあ、トロフィーを渡された時に『トロフィーはいくらでもくれてやるが、サクヤはやらん』と、真顔で言われた時には本気で困ったけど。

これは……いずれ学園長と決着をつけないといけない時がきそうだな。

などと余計なことを考えながら、俺は舞台から降りた。

微笑みながら惜しみない拍手を送ってくれる、先輩を見つめながら。

クラス代表選考会　一年生代表決定！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

祝勝会兼反省会（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

祝勝会兼反省会

『はうはう！　美味しいのです！　美味しいのです！　勝利の美酒に酔いしれるのです！』

クラス選考会の初日である一年生の部を無事に終え、祝勝会と反省会を兼ねて、みんなでルフランにやって来た。

で、［シン］はいつものようにジェラートを食べてゴキゲンである。

「ふふ……それにしても、今日の決勝戦の二人は見事だった。もちろん、望月くんとプラーミャの試合やサンドラと立花くんの試合、それに、加隈くんの決勝戦もな」

「し、師匠……！」

先輩に褒められ、加隈が涙ぐむ。というか加隈の試合について触れたのって、先輩だけだなあ……。

ま、まあ……俺達も加隈の試合をまともに見たのって、決勝戦だけだし……うん、コメントできないのも仕方ない。

「でも実際、三人のクラスチェンジした精霊（ガイスト）にはビビったよ。しかも、メッチャ強くなってるし」

「えへへ……ボク達も頑張ったからね……」

そう言って、立花は嬉しそうにはにかむ。

そんな立花の様子に、加隈はますます挙動不審になっていた。

「そして、明日は氷室先輩の番ですね」

「はい。もちろん私も、勝ちにいきます。そして……望月さんと一緒に、代表として戦います」

氷室先輩は藍色の瞳で俺を見つめながら、力強く頷いた。

でも、氷室先輩の［ポリアフ］はレベル七十九。クラスチェンジも既に果たし、オマケに【火属性反射】、【氷属性反射】、【闇属性反射】のスキル持ちだ。どうあがいたって、他の二年生が氷室先輩に勝てる要素はない気がする……。

「ふふ……本音を言えば、私も氷室くんと戦ってみたかったがな」

「そうですね……それは私も同意見です」

うわあ……二人共、メッチャお互いを意識してる。

だけど、残念なことに二人は同じクラスじゃないから、選考会で戦うなんてことはあり得ないんですけどね。

「あ、あはは……まあ、明日は俺達全員で、氷室先輩を全力で応援しますから！」

「そ、そうですワ！」

俺とサンドラは氷室先輩に向かって頷く。

「ありがとうございます……みなさんのご期待に応えてみせますから」

そう言うと、氷室先輩は無表情ながらも、拳をグッ、と握った。

はは……気合い充分だな。

「と、ところで望月くん、その……」

先輩がどこか言いづらそうに、チラチラとこちら……というか、俺の目の間にある皿を見やる。
どうやら俺の柿のタルトに釘付けの模様。食べたいんですね？分かります。
俺はス、と無言で皿を差し出すと。
「むむ！　い、いいのか……？」
「……（コクリ）」
頷いた瞬間、先輩は［シン］並みに素早い動きで俺の皿を奪うと、見事にフォークで柿を刺した。
「ふふ！　美味しいな！」
最高の笑顔で柿のタルトを頬張る先輩。
こんな表情を見たら、何個でも先輩に食べさせたくなるよな。
◇
「ふう……」
ルフランで解散して家に帰った俺は、部屋のベッドに寝転がりながら『攻略サイト』を眺めながら息を吐く。
というのも、俺はあの“賀茂カズマ”のことが気になって、どこかに情報が載ってないかって見てるんだけど……うん、ない。
「いやだけど、あれだけ実力があるのに、サブキャラどころかモブですらないなんて、俺には到底考えられないんだけど……」

『はう！　また『攻略サイト』を見てるのですか？』
「ん？　おお……ちょっとな」

俺の隣に寝そべりながら尋ねる［シン］に、俺はあいまいに返事した。

「ウーン……でも、なんか引っ掛かるんだよなあ……」

そう呟くと、俺はもう一度『攻略サイト』にあるキャラクター一覧を眺める。

「ええと……アレイスター学園の一年生だと、主人公の仲間になるのは……」

まずは同じクラスである、一―二の連中。加隈、悠木、木崎（クソ女）、そして、二周目以降の俺だ。
一―三はサンドラだけで、一――は……ん？

一応、一―一にも仲間になるキャラが二人いるんだけど、そういえば、そのどちらも今日の選考会で見てないなあ……。

「ウーン……加隈の試合みたいに、俺が見落としてる可能性も考えられるけど、それでも、決勝戦にはどっちかが勝ち上がってくると思うんだよなー」

そう……基本的に主人公の仲間になるキャラは、俺という例外を除いて、その仕様上他の生徒よりも強い設定になってるはずなんだ。
だって、そうじゃないと今回の交流戦イベを含め、ステータス順にメンバーが選ばれることについて、矛盾が生じてしまうことになるから。

「……まあ、そうはいっても、モブですらない賀茂がクラス代表になった時点で、矛盾だらけなんだけどな」

俺はそう呟くと、スマホをベッドの上に放り投げた。

確かに、俺が『攻略サイト』のおかげでクソザコモブを脱却した時点で矛盾が出てるし、それ以外にも『攻略サイト』とは違う展開となっていることも多々ある。

だから、賀茂があんなに強くて、一―一に仲間キャラが現れてないこともあり得るだろう。

だけど……このモヤッとする感覚は一体なんなんだ……？

「……賀茂カズマ、か」

俺は天井を眺めながら、もう一度、その名を呟いた。

祝勝会兼反省会（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

代表揃い踏み？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

代表揃い踏み？

「それまで！　勝者、“氷室カズラ”」

クラス代表選考会の二日目の最終試合。

審判の先生が、氷室先輩の勝ち名乗りを上げる。

「よっし！　さすが氷室先輩だ！」

いや、もちろん氷室先輩の勝ちを疑ったことはないけど、それでも、勝負っていうのは最後まで分からないからな。

といってもここまでの全試合、氷室先輩は全て秒殺だけどな。

「これで、私も望月さんや藤堂さんと同じ、クラス代表ですね」

「ははは、そうですね！　今から二週間後が楽しみです！」

「はい」

氷室先輩が無表情で頷くけど、その口元が一瞬緩んだ。

うん……やっぱり氷室先輩って、ギャップが半端ないなあ。

「むううううう！　わ、私だって、試合さえできれば氷室くんのように全試合秒殺で……！」

「一体何の勝負なんですノ……」

氷室先輩に妙に対抗意識を燃やし、先輩がそんなことをいうのを見て、サンドラが額を押さえながらかぶりを振る。

ま、まあ先輩も、クラス全員から敬遠されて自動的にクラス代表になったモンだから、フラストレーションが溜まってもしょうが

ないかあ……。

「だけど……これで二年生のクラス代表も出揃いましたね」

「ええ……二―一は夏目さん、二―二が藤堂さん、そして、二―三の私」

氷室先輩がそう告げると、俺達は全員頷いた。

だけど、結局は準ラスボスの先輩と、ヒロイン候補の氷室先輩に夏目先輩という、至極順当な結果に終わったなあ。

俺達一年のほうは、加隈を除いてクソザコモブとモブ以下だっていうのに。

すると。

『それでは、ただ今から表彰式を行いますので、二年の各クラス代表者は舞台の上にお集まりください』

「お、二人共呼ばれましたよ」

グラウンド内にアナウンスが流れ、俺は二人を見る。

「ふふ、私は少し場違いな気がするが……氷室くん、行こうか」

「はい」

そう言うと、二人は舞台に上がった。

「フフ……ワタクシも、アナタと一緒に戦いたかったですワ……」

サンドラが寂しそうに微笑みながら、ポツリと呟く。

「ああ……俺だってそうだよ。サンドラが隣にいることが、俺にと

ってどれだけ心強いか……まあ、そうは言っても同じクラスだから絶対にあり得ないんだけどなあ……」

「そうですわネ……ですけド、もし二年生になって同じクラスじゃなかったら、その時は一緒に戦えますわヨ？」

ウーン……確かにサンドラの言う通り、別のクラスになればサンドラと一緒にクラス代表にはなれるんだけど……。

「……俺は、それは嫌かなあ」

「？　どうしてですノ？」

俺の言葉に、サンドラはきょとんとした表情で尋ねる。

「俺としては、サンドラとは同じクラスになりたいぞ？　サンドラと一緒に戦えるのは魅力だけど、そもそも交流戦なんてほんの二日で終わるわけだし、団体戦だけだったら、たった一日だ。それなら同じクラスになって、サンドラと一緒の時間を共有したいなあ……」

「ッ！」

それに、同じクラスのほうがイベント目白押しだし、特に修学旅行イベだと同じクラスじゃなきゃ一緒の班にすらなれないもんな。

「まあ、そういうことで……って、サンドラ？」

「フ、フエエエエエエエ……」

サンドラは真っ赤な顔を両手で押さえながら、俯（うつむ）いてしまった……。

『はうー……マスターは相変わらず無自覚にサラッとそういうことを言っちゃうのです……［シン］は、マスターがいつか刺されるん

じゃないかと心配なのです……』

「［シン］！？」

いつの間にか俺の隣にいる［シン］が、残念なものでも見るかのような視線を送ってきやがった！？

結局、サンドラはアワアワしているわ、［シン］にジト目で見られるわで、表彰式をゆっくり見れる状況じゃなかった……。

◇

そして、クラス代表選考会の最終日。

三年の部では、当然ながら三年生最強の“鈴原カエデ”先輩と“和気チアキ”先輩が順当にクラス代表になった。

で、今は最後の一人を決める決勝戦を観戦しているんだけど……。

「「「「「……」」」」」

ノーガードで殴り合う、舞台の上の二人。

そのあまりの凄絶さに、観客全員が声を失っていた。もちろん、あの先輩でさえだ。

というのも。

「チョット！　よくもアタシの彼氏に手を出したわね！」

「ソッチこそ！　“シロー”はこの“ヒカリ”のことが好きって言ってくれんだもん！　だもん！」

まるで悪霊のように長い髪を振り乱してヒステリックに怒り狂う

女子生徒と、ピンクに髪を染めてツインテールにした、電波系の女子生徒が、精霊同士の戦いのはずなのに、文字通り素手で殴り合ってるんだから。

「せ、先輩……この場合、勝ったほうが代表になるんですか……？」

俺は唖然とする先輩に、おずおずと尋ねてみる。

「あ、い、いや……ど、どうなんだろう……氷室くん？」

すると、答えに窮した先輩は、隣の氷室先輩に助け船を……あ、顔を逸らした。

「も、もうやめるんだ！　この俺のために、二人が争うなんてやめてくれ！」

舞台の傍らで必死に訴える男子生徒が一人。あれが、問題の二股野郎だ。

しかも、中途半端にイケメンなのが気にくわない

「……あの男、叩き潰してきてもよろしくテ？」

「サ、サンドラ！？」

いつの間にか額に青筋を浮かべるサンドラが立ち上がってあの男のところに行こうとしたので、俺は慌てて止める。

「ですけド！　あんな女の気持ちをないがしろにするような男、絶対に許せませんワ！」

「分かる！　お前の気持ちはメッチャ分かる！　だけど、余計にややこしくなるからお願いヤメテ！」

「ふむ……だが、確かにサンドラの言う通り、斬り伏せても誰も文句は言うまい」
「先輩！？」
ヤバイ！？　よくよく見たら、先輩も完全にブチ切れてるじゃねーか！？
「ふふ……私なら、ここから一撃で仕留められますよ？」
「ヒイイ！？」
氷室先輩がニタア、と口を三日月のように吊り上げているのを見て、俺の背筋が凍る。
ああああ……もう、どうすれば……！
「アハハハハ！　あの二人、クソみたいな男に引っ掛かって、バカじゃだし！」
「そうね……まあ、普通はこんな目に遭ってるのに、ホイホイとなびいたりしないわよね……」
和気先輩が腹を抱えて大声で笑い、鈴原先輩は頬に手を当てながら呆れた表情で二人を見やる。
「「チョット！　シローの悪口を言わないでよ！」」
いやこの二人、こんな時だけ仲がいいな！？
「アハハ！　だけどアイツ、わざわざ陸上部に来てウチの一年口説いてたし！　完全にアンタ等、相手にされてないじゃん！」
「え？　あなたのところにも来たの？　実はうちの吹奏楽部にも…

…」

おおっと!?　ここで新たな事実が!?　こうなったらもう収拾つかねーぞ!?

「……シロー、それってどういうこと?　アタシ、彼女だよね?」

「ヒドーイ!　シローはヒカリがいるのに、そんなことしてたの!?」

「い、いや違うんだ二人共!　こ、これにはわけが……「ええ、してたわよ?　というか、この学園じゃ有名なクズなのに、どうしてアンタ達は気づいてないワケ?」」

シローとかいう二股クズ野郎の言葉を遮り、鈴原先輩は諭すように二人に告げた。

「……ホントは薄々気づいてたけど、それでも……それでも!　いつかその癖が治るって信じてたのにいいいい!

「うわあああああああん!　ヒドイ!　ヒドイイイイイイイイイ!」

とうとうキレた二人は精霊(ガイスト)を召喚すると。

「「死ねえええええええええええ!」」

「ひいいいいいいいいいいいいい!?」

哀(あわ)れ二股以上クズ野郎は、二人の女子の精霊(ガイスト)による最大火力の攻撃を受け、グラウンドの土と化した。（注：死んでない）

「グス……もうイヤ……」

「ヒック……それはコッチの台詞ですう……」

「「うわあああああああああああん！」」

そして二人は舞台の中央で抱き合い、大声で泣き出してしまった……。

◇

「「「「ハア……」」」」

クラス代表選考会の全日程が終了し、俺、先輩、サンドラ、氷室先輩はグラウンドの後片づけをしながら大きく溜息を吐いた。

あの試合の顛末（てんまつ）にとしては、最後は彼女だったほうの女子のメンタルがボロボロ過ぎて、電波系のほうの女子が代表ってことになったんだけど……ホント、何だかなあ……。

「ま、まあ……とにかく、これでクラス代表が全員出揃ったな」

「先輩……そ、そうなんですけどね……」

あー……あの最後のグダグダ感さえなければなあ……って？

その時、グラウンドの端にたたずむ一人の教師が俺の視界に入る。もちろん、その教師っていうのは“伊藤アスカ”。

伊藤アスカは、しばらくこの俺を睨んだ後、ス、とその場を離れていった。

まるで、俺を誘うかのように。

「……ちょっと俺、持ち場を離れます」

「ふふ……私もちょうど用事を思い出したところだ」

「はは、じゃあ一緒に行きますか」
「ああ」
俺と先輩はお互い顔を見合わせてからクスリ、と笑うと、伊藤アスカの後を追った。

代表揃い踏み？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お一人様とお二人様（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お一人様とお二人様

「ふーん……」

伊藤アスカが向かった場所……そこは、校舎のはずれにある、用具室の前だった。

「こんなところに来て、一体何してるんですか？　センセイ？」

こちらに背中を向けながらたたずむ伊藤アスカに、俺はできる限り厭味ったらしくそう告げると。

「うふふ……何って、分かってるくせに」

「いえ？　俺にはサッパリ。先輩はどうです？」

俺はわざとらしく隣にいる先輩に問いかけた。

「ふふ……そうだな、私にもこの教師が何を考えているのか、ここに何の目的があるのか、全く分からないな」

「ですよねー」

俺と先輩は顔を見合わせながらとぼけると、伊藤アスカがクスクスと笑い出す。

「うふふ、要はあなた……望月ヨーヘイに、この学園にいられては困るのよ。どうしてだか分かる？」

「いえ？　というか、なんでセンセイが自分みたいなクソザコモブにそこまでご執心なのか、真剣に教えて欲しいんですけど」

まあ、一学期に俺をソロで初心者用の領域（エリア）の見学をさせたことで、謹慎処分を食らったことへの恨みだってのは分かるんだけど……どうも、それだけじゃないとも考えている。

何より、クラス代表選考会でのプラーミャとの試合における、伊藤アスカの『私は言われた通りにしただけなのに』って言葉……。

それが、悠木や牧村クニオと同じように、ナニカによる指示なのか、それとも、別の存在によるものなのか、俺はコイツからそれを確かめないといけない。

「うふふ！　あなたの存在を気に入らない方がいるの！　あなたが、目障りなのよ！」

そう叫ぶと、伊藤アスカがニタア、と醜悪な面（ツラ）を見せた。

それこそ、ヘタなB級ホラー映画なんて目じゃないほどに。

だけど、これで確定だ。

伊藤アスカは、悠木や牧村クニオとは異なり、明確に裏で手を引いている奴がいる。

「そっかー……それで、気に入らないってんなら、この俺をどうやって学園から追い出すんだ？　というか、その前にアンタがここから追い出されそうなんだけど？」

「ハハハハハ！　まさに君の言う通りだな！」

俺はヤレヤレ、といった表情で肩を竦め、先輩は腕組みをしながら高笑いをした。

だけど本当は、先輩はさっきから自身の二の腕をギリ、と強く握りしめて、伊藤アスカの物言いに耐えていることが分かる。

それもこれも、俺の思いをくみ取ってくれているからだ。
はは……コイツとの件が片づいたら、そのお礼に先輩とルフランに行くかな……って、それじゃ俺へのご褒美になっちゃうな。

「……その表情、一番ムカツクわね」

伊藤アスカが忌々し気に俺を睨む。
おっと、ちょっと幸せなことを考えていたせいで、知らないうちに俺は口元を緩めていたみたいだ。でも、人が幸せそうな表情浮かべるのが一番気に入らないって、マジで性格歪んでるな。

「いやあ、自分がお一人様でプライベートが充実してないからって、俺に嫉妬したりするの、やめてもらっていいですか？」
「あう！？　も、望月くん！？」
「っ！？」

俺はさらに煽るため、先輩の左手をギュ、と握った。
それに驚いた先輩が、顔を真っ赤にしながらわたわたした。そして俺も、メッチャ照れる、恥ずかしい。

だけど、その効果は抜群だったようで。

「っっっ！　フザケんじゃないわよ！　高々十六、七のガキが、イチャついたところで乳臭いだけなのよ！」

伊藤アスカの顔はこれでもかというほど醜く崩れ、口から唾をまき散らしながら絶叫する。
そもそもオマエが彼氏を作ったこともなくずっと独り身で、足繁く合コンばっかりしてることは知ってるんだよ。『攻略サイト』の

情報量を舐めるな。
　というか、そんなだから、教師のくせに主人公に手を出したりするんだろうが。

「ハハ……なんか俺達、チョット可哀想なことしちゃいましたかね……」
「あう……う、うん……」

　俺がわざと同情するかのような表情を浮かべると、先輩は恥ずかしそうに俯きながら頷く。
　そして先輩、その仕草が一番あの伊藤アスカにクリティカルヒットしたみたいです。むしろ、オーバーキルです。
　その証拠に、伊藤アスカは髪の毛を掻きむしりながら地面を何度も踏みつけてますし。

「まあいいや。とにかく、俺は絶対にこの学園から出て行ったりしねーよ。そんなことしたら、こんな素敵な先輩と一緒にいられなくなるからな」
「「っ！」」

　どうやら今の言葉がトドメだったみたいで、伊藤アスカは血走った目で俺を凝視した。
　そして。

「あうあうあうあうあうあうあう……！」

　……うん、それは先輩も同じだった。もちろん、効果は真逆だけど。

「うふ……ふふふ……ふふふふふふうううううあああああ

ああッッッ！　オマエコロス！　絶対にコロス！　この学園どころか、人生終わらせてヤルヨオオオオオオオオ！！！」

教師としての、そして、『ガイスト×レブナント』のメインヒロインとしての面影が一切なくなった伊藤アスカは絶叫し、そして。

「［フィヨルギュン］！！！」

自身の精霊（ガイスト）の名を呼んだ。

お一人様とお二人様（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

先輩の逆鱗（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「［フィヨルギュン］！！！」

伊藤アスカが自身の精霊（ガイスト）を召喚すると、茨（いばら）の冠を戴いた美しくも神秘的な女性が、その白く透き通るような身体に茨とほとばしる電撃をまとい、足元には様々な色の薔薇（ばら）が咲き誇っていた。

だけど。

「うええ……」

そんな精霊（ガイスト）とは対照的な伊藤アスカの姿に、俺は思わず変な声を漏らしてしまった。

いや、伊藤アスカの精霊（ガイスト）の容姿については『攻略サイト』で知ってたけど、そのマスターである伊藤アスカ本人は顔面が崩れまくって、『攻略サイト』とは別人みたいになっちまって、その……ギャップが……。

「わ、私は、絶対にあんな女性にはならないぞ……！」

すると先輩が、俺の隣で何か決意めいた表情を浮かべていた。

というか、俺が先輩をあんな女みたいにさせるわけがないじゃないですか。

「ほ、本当に失礼なガキ共ね！　特にアンタ！　ちょっと学園長の娘で可愛いからって、調子に乗ってんじゃねーよ！」

完全に教師の言葉とは思えないような汚い口調で、伊藤アスカは急に矛先を俺から先輩に切り替えて指差しながら罵る。
その姿に、俺は怒るどころか憐れに思えてきた。

「まあ、先輩が可愛いのは当然だろ？　というか、今の自分と先輩を比べるなよ」
「っ！　コロス！　絶対にコロス！　確実にコロス！」

すると、伊藤アスカの精霊（ガイスト）、［フィヨルギュン］がその身体にまとう茨の蔦（つた）を俺と先輩の両方に飛ばしてきた。

「そんなの当たるかよ！　［シン］！」
『はう！』
「あう！？　……っと、そんなもの、避けるまでもない！　［関聖帝君］！」

［シン］はアッサリと茨を躱（かわ）し、あうあうしてた先輩も復帰して［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）で叩き切った。

「……コッチは二人、しかもそのうち一人は学園最強の藤堂先輩だぞ？　アンタ一人で俺達に勝てると思ってるのか？」

俺は理性的に、そして威圧を込めてそう告げる。
だけど。

「ハッ！　それがどうしたのよ！　私の［フィヨルギュン］だって、既にクラスチェンジ済みだし、そのレベルだって七十六なのよ！　オマエ達みたいな生徒ごときが、それこそ教師である私に勝てるはずがないのよ！」
「っ！？」

伊藤アスカのその言葉に、俺は思わず息を飲んだ。
元々伊藤アスカは元々二年生になってから主人公の仲間になるヒロインだから、その時点でクラスチェンジ済みってのは『攻略サイト』通りだけど、なんでレベルがそんなに高いんだよ!?
そもそも、『攻略サイト』じゃレベル六十が精々だっただろ!?

「アハハハハ！　私の［フィヨルギュン］にビビったワケ？　ホラホラ、土下座して命乞いするなら今のウチよ？」

急に自分が優位に立ったと勘違いした伊藤アスカは、顔を突き出して醜い面（ツラ）で煽（あお）ってきた。

「別に？　なんで俺達がアンタに謝らないといけねーんだよ？　というか、俺からすればその程度のレベルで、なんでそんなに強気に出られるのか不思議でしょうがないんだけど？」
「なんでって？　決まってる！　私は教師でオマエ達は生徒！　そもそもの実力が違うのよ！」

ハア……駄目だ、会話が全然かみ合わない……。

「先輩、どうします……？」
「む……さすがにこれは、な……」

俺は先輩に相談してみるものの、先輩も伊藤アスカを見やって眉根を寄せ、言葉を失くしてしまった。

「大体、オマエはクソザコモブのくせに、たまたま運でクラス代表に選ばれて調子に乗ってんじゃねーよ！　で？　その隣の生徒会長様に褒めてもらって『ボク嬉しいです～』ってか？　キモチワルイ」

舌を出して下品な表情を見せる伊藤アスカに、俺は呆れてものも言えない。

その時。

「ふふ……望月くん、君も知っている通り、私はこのクラス代表選考会ではクラス全員が棄権したことによって、一度も戦っていないのだ」

「へ……？」

口の端を持ち上げ、急に先輩がそんなことを言い出した。

え、ええと……？

「だが、そこにいる教師の伊藤アスカは、この私と望月くんの二人を相手取ると言っている。ならここは、正々堂々と一対一で戦うべきではないか？」

「ええ！？」

つ、つまりそれって、先輩が伊藤アスカと一対一で戦うってこと！？

「い、いや先輩！？　ここは確実に俺と先輩で一緒に戦いましょうよ！？」

「む……なんだ？　君はこの私が、あのような教師ごときに負けるとでも言いたいのか？」

俺は慌てて諫めるが、先輩は逆に気を悪くしたのか、ギロリ、と睨みながらそう告げた。

「……へえ、上等じゃない。身の程知らずのガキに、世の中の厳しさってヤツを教えてやるよ！」

「ふ……身の程知らずはどちらかな？」

そう言うと、先輩は一歩前に出て忌々し気に凝視する伊藤アスカと対峙する。

「あ……」

そんな先輩を見て気づく。

先輩が、その白い肌の色が変わってしまうほど強く拳を握りしめていることに。

ひょっとして、先輩……。

そんな先輩の様子に、その背中に、俺はこれ以上何も言えなくなってしまった。

だって、先輩はあの伊藤アスカの言葉に怒っているんだから。

アイツが、俺のことを馬鹿にしたから。

そして。

「さあ……始めようか」

先輩はそう告げると、［関聖帝君］が青龍偃月刀の切っ先を［フィヨルギュン］へと向けた。

先輩の逆鱗（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

醜悪（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

醜悪

「さあ……始めようか」

先輩はそう告げると、［関聖帝君］が青龍偃月刀の切っ先を［フィヨルギュン］へと向ける。

その姿は、まさに絶対強者のたたずまいだった。

「ハッ！　その面も若くて張りと艶のある白い肌も、この茨でズタズタにしてやる！」

そう叫ぶと、［フィヨルギュン］は何本もの茨の蔦を先輩へと差し向ける。

しかしコイツ……そんなに先輩の綺麗な顔や肌が羨ましいんだなあ……。

「フン」

先輩は鼻を鳴らし、［関聖帝君］は無造作に青龍偃月刀を振るうと。

「っ！？」

たったそれだけの動作で、あれほどあった茨の蔦はアッサリと切り刻まれた。

「どうした？　まさか、そんな程度の攻撃で終わりというわけではあるまい？」

「っ！　舐めるのもいい加減にしろっ！　【スネークバインド】！」

すると、先程まで直線的だった茨の蔦が、まるで地を這う蛇のように、［関聖帝君］の足を絡め取ろうと襲い掛かる。

だけど。

「……無駄だ」

［関聖帝君］が青龍偃月刀で地面ごと抉り取り、茨の蔦は無造作に地面に転がった。

はは……あの【スネークバインド】って大仰な名前のスキルだけど、結局は先輩の［関聖帝君］の前では子どもの手遊び扱いだなあ……。

「フン……それで、次は？」

「っ！？」

ギロリ、と先輩に睨まれ、伊藤アスカは表情を一変させて後ずさる。

でも、『攻略サイト』でアイツの精霊のステータスやスキルは全部把握している俺には分かっている。

アイツ……仕掛ける気だな。

「……［シン］」

『……ハイなのです』

俺はそっと耳打ちすると、［シン］はコクリ、と頷き、音を消し

ながら俺から離れた。

「ふむ……来ないなら、こちらか行かせてもらうッッッ！」

「ちいっ！」

青龍偃月刀を肩に担ぎ上げた［関聖帝君］は、［フィヨルギュン］に向かって一直線に駆け出す。

恐らく、【一刀両断】で叩き切るつもりなんだろう。

「ハアアアアアアアアアッッッ！」

一気に詰め寄った［関聖帝君］が青龍偃月刀を頭上から振り下ろそうとした、その時。

「っ！　アハハハハ！　かかったわねッッッ！」

「っ！？」

地面の中から、無数の茨の蔦が飛び出てきて［関聖帝君］を拘束した。

それだけじゃない。さっき［関聖帝君］が切り刻んだいばらの蔦も、いつの間にかまるで先輩と［関聖帝君］を取り囲むように蠢（うごめ）いている。

「さあ！　もう謝っても許してあげない！　オマエのそのワインレッドの髪も、真紅の瞳も、そして白い肌も、全部丸焦げにしてやるううううううう！　【エアドンナー】！」

伊藤アスカが絶叫し、［フィヨルギュン］の最大スキルを発動した……んだけど。

「っ！？　な、なんで！？」

何も起こらないこの状況が理解できない伊藤アスカは、焦った表情を浮かべる。

「このおっ！　【エアドンナー】！　【エアドンナー】！　【エアドンナー】アアアアッッッ！」

はは……何度発動しても無駄だっての。

だって。

『【封】』

それより先に、［シン］が先輩と伊藤アスカを囲むように呪符を展開しているんだから。

そもそも、［フィヨルギュン］の【エアドンナー】は、その茨の蔦を伝導体として、上級雷属性魔法、【ボルテクス・ライナー】を流し込み、茨の蔦が配置されてある範囲全体を攻撃するといったものだ。

つまり、サンドラの精霊（ガイスト）、［ペルーン］の必殺スキルである【裁きの鉄槌】とは違い、あくまで雷属性魔法とスキルの複合技でしかない。

なら、［シン］の呪符で【ボルテクス・ライナー】だけを無効化することは簡単だからな。

「ふふ……望月くんも余計な真似を……」

先輩は口元を緩めながら、皮肉たっぷりな視線を送ってくる。

でも……先輩が絶対に勝つって分かっていても、それでも、ほんの少しでも傷つく可能性があるんだったら、俺はどんな批判を受けたって手助けをしますよ。

まあ、先輩にはそんな俺の考えなんて、全部お見通しなんだけどな。

――ザシュ。

「さて」

「ヒイイッッッ！？」

［関聖帝君］が自身を拘束する茨の蔦を全て切り刻むと、先輩はずい、とその足を一歩前へと踏み出す。

それに合わせて、伊藤アスカは一歩退いた。

「では、決着といこうか」

凛と、だけど、無慈悲に告げるその言葉とともに、［関聖帝君］は最後の一撃を振るうために青龍偃月刀を振り上げる。

そして。

「ハアアアアアアアアアッッッ！」

青龍偃月刀は、［フィヨルギュン］」を……伊藤アスカを、【一刀両断】に……はせずに、ほんの一センチに満たない距離で、寸止めをした。

『はうううう！？　あ、危なかったのです……関姉さま、メッチャ

コワイのですううううう……！』

［フィヨルギュン］の背中に回って【縛】の呪符を貼る［シン］が思わず慄く。

で、当の［関聖帝君］はというと、そんな［シン］を見ながら悪戯っぽく笑った。

それは、俺を見つめている先輩も。

「ふふ、私の戦いを邪魔した罰だ」

「か、勘弁してください……」

いや、先輩が絶対そんな真似しないことは分かってるんだけど、ね。

俺は深く息を吐いた後、チラリ、と見やると。

「あばばばば……」

伊藤アスカは、恐怖のあまり涙と鼻水とよだれと、さらには失禁までして気を失った。

醜悪（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

着火（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

着火

「おい」

気を失った伊藤アスカの身体を揺すりながら、何度も呼び掛ける。

「ん……えう……っ！？」

「お、気がついた」

すると伊藤アスカは目を覚ますけど、先輩の顔を見た瞬間、絶望に似た表情を浮かべた。

まあ、あの恐怖はシャレにならないからなあ。

「さて……んじゃ、アンタに色々と尋ねたいことがあるんだけど……」

「ヒ、ヒイ！？」

あー……コイツ、先輩にビビリ過ぎて、全然会話にならない。

「えーと……先輩は少し俺の背中に隠れててもらってもいいですか？」

「む……少し気に入らないが、仕方ないな」

そう言うと、先輩は伊藤アスカの視界に入らないように、俺の背中の陰に隠れ……っ！？

――ぴと。

「えええええ!?　先輩!?」
「あ、あう……か、隠れるなら、そ、その、これくらいくっついておかないと、その、だな……そ、それに、私もこの女が何を語るのか、ちゃ、ちゃんと聞いておかないと、うん……」
い、いや!?　だからって先輩!?
俺の背中にそうやって胸を押し付けるのは反則なのでは!?
『はう!　アレク姉さまのいないうちに、藤姉さまがここに来て勝負に出たのです!』
［シン］!?　そうやって煽るようなこと言うのやめてくれない!?
あああああ!　と、とにかく、俺の理性が保つ間に、サッサと話を聞いて終わらせるぞ!
「そそ、それで、アンタはなんでこうまでして俺に絡んでくるんだ？　俺はもうアンタのクラスから出ていったし、完全に無視すればいいだろ?」
俺は何とか平常心を保ちながら尋ねる。
「そ、それは……そう!　逆恨み!　逆恨みよ!　オマエのせいで私は謹慎処分を食らったのよ!」
などと焦るようにのたまうけど……そんな言葉、到底信じられない。
というか、なんで自分で逆恨みなんて台詞（セリフ）を吐くんだよ。そういうの、逆恨みされてる俺が言う台詞（セリフ）だろ。

「いや、なんつーかその……アンタ、まるで俺を交流戦に出させないようにするために動いてるように思うんだよなー」
「っ！？」
カマをかけてそう言ってみると……うわ、露骨に動揺した表情を浮かべてやがる。分かりやすい。
「ふうん……で、なんで俺がクラス代表に選ばれて交流戦に出るとマズイんだ？　何か理由でもあるのか？」
「り、理由？　そ、そんなもの別にないわよ！」
とまあ、あからさまにとぼけるけど、理由があるんだな。
「じゃあ、次の質問。アンタのその理由ってヤツは、頭の中に勝手に選択肢が出てきたのか？」
「はあ？　オマエ、何言ってんの？　アタマおかしいんじゃないの？」
俺の質問に、伊藤アスカは俺を馬鹿にするかのように答えた。で、先輩。伊藤アスカの物言いが気に入らないのは分かりますけど、痛いんで俺の背中に爪を立てるのはやめてください。
だけど……やっぱり悠木や牧村クニオとは違うパターンだな……。
「てことは、アンタに俺を交流戦に出場させないように指示した奴がいるってことだな？」
「っ！？　ささささ、さあ？」
あ、ビンゴだ。

ふむ……俺の存在を気に入らないなんていう奴、一体どこのどいつなんだ？

確かに俺は入学してからこれまで、ただ強くなるために全力で取り組んだ結果とはいえ、学園内でも悪目立ちしていることは理解している。

当然、それについて気に入らない奴も出てくるだろう。

だけど……いくらクソで醜いとはいえ、学園の教師を操って理不尽な判定をさせたり襲わせたりできるモンなのか？

その結果、導き出せる答えは学園の生徒による仕業じゃなくて、少なくともコイツより上の身分にいる奴の仕業ってことか……。

「さて……最後にアンタに提案、というか選択権をやる。今ここでアンタにこんな真似をするように指示した奴を教えるか、それとも、俺の後ろにいる先輩に今以上に恐怖を植え付けられた上で、“ＧＳＭＯ”に連行されて施設送りになるか、ドッチがいい？」

俺はそう告げると、伊藤アスカの一挙手一投足を見逃すまいと、注意深く見守る。

すると。

――ガタガタガタ……！

「お、おい！？　アンタ！？」

「むむむ、無理！　それなら、藤堂サクヤに恐怖でもなんでも植え付けられたほうが……施設送りにされたほうがマシよッッッ！」

伊藤アスカは両腕で自身の抱え、震える身体を必死に抑え込む。

だけど、ここまで怯えるなんて異常だぞ！？

コイツの裏にいる奴ってのは一体……。

「……分かった。先輩」

「ああ……」

先輩はスマホを取り出し、どこかへと電話を掛けた。

多分、学園長だろう。

「しばらくしたら、学園長と一緒に“ＧＳＭＯ”が到着する。それまで、私と君はここで待機するようにとのことだ」

「そうですか……」

俺は先輩にそう返事をすると、ジッと地面を見た。

ここまで伊藤アスカに恐怖を植え付けて操ってまで俺を排除しようとする人物……考えられるのは、『ガイスト×レブナント』における本編の黒幕だけど……。

いや、それはない、な。

だってあの黒幕は、あくまでもただ純粋に本編ラスボスを誕生させようとしてるだけで、一介の生徒でしかない俺の排除に動くなんて絶対にあり得ない。

あの『まとめサイト』にないような事態に、思考がぐるぐると頭の中を巡り、俺は不安と焦燥に駆られる。

すると。

――ギュ。

――ギュ。

「あ……せ、先輩……？　それに［シン］まで……」
「望月くん……大丈夫、大丈夫だ……この私が、絶対に君を守るから……！」
『はう……！　マスターに悪いことをする悪い奴は、［シン］が絶対にやっつけてやるのです！』

心配した先輩と［シン］が、俺の身体を強く抱きしめた。
その真紅とオニキスの瞳に、優しさと決意を湛えて。

はは……二人共、本当に……！
おかげで、余計に火が着いちまったじゃないか！

「先輩……俺は大丈夫ですよ。もちろん、先輩のことは頼りにしてますけど、俺だって、入学した時の俺じゃない。だから」

俺は顔を上げ、先輩の瞳をジッと見つめる。
その想いに応えるように。

「だから、俺を貶めようと考えてるような奴は、返り討ちにしてやりますよ。俺と、最高の相棒で」

そう言うと、［シン］の頭を優しく撫でた。

ああ、そうだ。
たとえ『攻略サイト』にもないようなことが起こっているんだとしても、俺は絶対に負けない。

だから……来るなら来い。

その時は。

――今以上に強くなった俺と［シン］で、叩き潰してやる！

着火（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて第五章が終了となり、幕間を数話はさんで、次はメイザース学園との交流戦の第六章へと進みます！

特に交流戦では、向こうの生徒会の面々だけでなく、あのクソ女、木崎セシルとの確執も見逃せません。

そして、伊藤アスカを裏で操っていた人物の存在も、第六章ではぼんやりと明らかに！

ということで、恒例の幕間の一話目は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

叶わぬ願い、救われる私（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

叶わぬ願い、救われる私

■藤堂サクヤ視点

「ふふ……だけど、彼が勝ってよかった……」

クラス代表選考会も終わり、私はお父様の研究所に向かうための準備を始める。

でも、考えていることはいつも望月くんのことばかり。

今日はもちろん、クラス代表選考会での彼の活躍を何度も思い返していた。

「うむ、やはり［シン］の成長もさることながら、望月くんの機転と戦術には目を見張るものがあるな」

思えば、彼は出逢った時からそうだった。

いつも自分達にできることを理解し、目的を達成するために綿密に計画を立て、実行する。

突発的に起こるイレギュラーに対しても臨機応変に対処し、どんな危機もその機転と勇気で乗り越えてきた。

それもこれも、これまで積み重ねてきた努力が根底にあるからこそ、彼の今の自信につながっているのだ

「……ま、まあ、それだけではない……のだが、な……」

そう呟いて、私は思わず顔が熱くなる。
だが、それも仕方ないというものだ。

だって……今の彼がこんなに努力して、強くなっている理由の一つが、この私にあるのだから。
彼はいつも私を一番だと言ってくれて、そして、学園最強の称号を手に入れて、私を守ると言ってくれたのだから……。

「ふふ……このままでは、私が彼に追い抜かれてしまう日も近いかもしれないな……」

でも、私はそれも悪くない……いや、そんな私を守る彼の背中に寄り添いたいと願ってしまう。
それに、あの教師……伊藤アスカとの戦闘が終わった後、彼の背中に隠れた時……ふふ、彼の背中はあんなにも広くて頼りになって、安心して……。

「だ、だが、さすがに胸を押し付けてしまったのはやり過ぎだっただろうか……？」

あうあうあう……今思い返してみると、私もやり過ぎたものだ。
だ、だが、サンドラや氷室くんといった強力なライバルがいる以上、す、少しでも彼にアピールしないと……！
ただでさえ彼は、無自覚に女性に優しくしてしまうのだから。

「［関聖帝君］」

私はおもむろに［関聖帝君］を召喚すると。

「なあ……彼は、あんな恥ずかしい真似をしてしまった私を、軽蔑

したりはしないだろうか……？」

などと、［シン］と違って会話することもできない彼女に尋ねた。

すると。

『……（じー）』

「む、むむ……」

むう……［関聖帝君］が私をジト目で見てくる……。

オマケに、ヤレヤレと肩を竦めてかぶりを振るなど、その態度はどうなのだ！？

お、思えば［関聖帝君］も、彼等と付き合うようになって感情豊かになったような気がするな。

「ま、まあいい……これからも私は、彼に振り向いてもらえるように全力で努力するのみだ」

『……！』

私は決意を込めて拳をギュ、と握りしめると、［関聖帝君］も両手で小さくガッツポーズをして激励をしてくれた。

「うむ！　では行くか！」

そして私は、お父様の待つ研究所へと向かうため、部屋を出……。

「おっと、これを外しておかないとな」

そう呟くと、私は右手薬指から“エリネドの指輪”を外し、机の

引き出しに大切にしまった。

◇

「……」

研究室でいつものようにたくさんの管に繋がれながら検査台に横たわる中、お父様は研究員の一人が持って来た書類を眺め、渋い表情を浮かべていた。

恐らく、私の中に供給されている“ウルズの泥水”の蓄積量が芳(かんば)しくないのだろう。

まあ、氷室くんが闇堕ちした際に柱が現れて以降、次の柱はまだ出現していないからな。仕方がない。

「……今よりも“ウルズの泥水”の供給量を増やすことは可能か？」

「い、いえ……今、この研究所にあるマテリアル全てを注ぎ込んだとしても、おそらく種を満たすだけの量には全然追いつきません……」

お父様が厳しい視線を向けながら問い掛けるが、研究員はそう告げた後、視線を落とした。

「なら！　あとどれほどのマテリアルが必要になるというのだ！」

「こ、これ以上のマテリアルの確保は困難です！　それに、マテリアルからの“ウルズの泥水”の抽出量から換算してみましたが、世界中のマテリアルをかき集めてやっと満たせるかどうかというところです！」

「むう……っ！」

研究員の必死の訴えに、お父様が唸る。
だけど……このまま供給を受け続けても私の中の種は満たされず、芽吹くことはない、ということか……。

私は左手の“シルウィアヌスの指輪”にそっと触れる。
ひょっとしたら彼は、こうなることも全て予測していたんじゃないだろうか。

ふふ……つくづく、つくづく望月くんは……。

「でしたら、やはり柱から“ウルズの泥水”を直接奪うしかないでしょう」

そう言って現れたのは、お父様の弟子である高坂さんだった。

「高坂くん……君もそう思うか」
「ええ。それに、一番最初に柱が現れた時と、二回目、三回目の時の“ウルズの泥水”の供給量を比べてみると、一回目のほうが明らかに多かったんです。つまり」
「……柱にも、“ウルズの泥水”の保有量に差がある、ということか」

お父様の呟きに、高坂さんが頷く。
とはいえ、事実を知っている私からすれば、二人のその予想は的外れなのだがな。ここまでくると、滑稽で仕方がない。

「ふう……分かった。まずは、我々はできる限りのことをしよう。そして、サクヤ」
「はい」
「お前は、一刻も早く全ての柱を打ち倒し、“ウルズの泥水”を種

に与えるのだ。そうすれば……」
「お母様が、蘇る……ですか」
「ああ」

お父様が確信に満ちた瞳で私を見据え、返事をした。
でも……申し訳ありませんが、お父様のその願いは永遠に叶うことはなさそうです。

だって、望月くんが絶対にそれを阻止してくれるから。

――この、私だけのために。

叶わぬ願い、救われる私（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

今回は幕間恒例の先輩視点をお送りしました！
というわけで、次回はサンドラ視点のほのぼの回！　今日の夜更新です！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ルフランでのひと時（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ルフランでのひと時

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

「フエエエエ……」

クラス代表選考会の全日程が終了した日の夜、ワタクシはクローゼットをひっくり返して明日着ていく服を選んでいル。

というのも、ヨーヘイがあの頭の悪い教師の不正ジャッジのせいで予選落ちした時。

『悪いな……選考会が終わったら、ルフランでスイーツ奢ってやるから』

ハッキリと、このワタクシにそう言ったのですワ！

それでヨーヘイったら、わざわざメッセージアプリで明日行こうって、誘ってくれたんですノ！

となれば、これはもうデート！　デートなんですのヨ！

デモ。

「ヨーヘイは、どの服でしたら喜んでくれるんでしょウ……」

せっかくですからラ、ワタクシはヨーヘイに可愛いって、素敵だねって言って欲しイ。

すると。

「ハア……サンドラ、一体いつまで服選びをしてるのヨ……」
「ダ、ダッテ……」
呆れるプラーミャに、ワタクシは思わず俯いてしまっタ。
「モウ！　こうなったらチョット待ってなさイ！」
「ア！」

そう言うと、プラーミャは部屋から出て行ってしまった。
ですけド、プラーミャはどこに行ってしまったんですノ？　それでしたら、ワタクシの服選びのアドバイスをくれてモ……。

そんなことを考えていると、プラーミャは真剣な表情……イエ、どこか黒い笑みすら浮かべながら戻ってきタ。

「ホラ！　明日はこれで行くのヨ！」
「コ、コレ！？」

ワタクシはプラーミャが持って来た服に、文字通り思わず目を白黒させてしまウ。

「ワ、ワタクシにこの服を着ろっていうんですノ！？」
「そうヨ。多分、ヨーヘイはチョット変態だと思うから、この服を見たら絶対に食いつくに決まってル！」

鼻息荒く、ずい、と服を押し付けてくるプラーミャ。
と、ところデ。

「……プラーミャは、どうしてこんな服を持っているんですノ？

普段、このような服を着たこと、ありませんでしたわよネ？」
「へ？　マア……これはチョット、アオイに……（ゴニョゴニョ）」
今、立花サンの名前が聞こえたような気がしましたけド……き、気のせいですわよネ？
「ト、トニカク！　コレをサンドラが着れば、間違いないかラ！」
「フ、フエエエエ……」
デ、デモ、さすがにこの服は恥ずかしイ……カモ……。
「……藤堂様に、負けてもいいノ？（ボソッ）」
「ッ！」
プラーミャの呟きに、ワタクシはハッとなル。
そ、そうですワ……普通にヨーヘイと接してるだけジャ、ヨーヘイは永遠にワタクシを選んでくれることはありませんワ……！
「……分かりましたワ。ワタクシ、明日はこの服を着て行きまス」
「フフ……いい顔。それでこそ、私（ヤー）の愛するサンドラネ」
不敵に笑うプラーミャと、ワタクシはガッチリと握手しタ。
◇
「フフ……やっぱりヨーヘイはもう来ていますわネ……」
待ち合わせの益田駅の前。
一時間以上早く、ヨーヘイはやって来ておもむろにスマホを眺めていタ。

こういうところ、ヨーヘイってマメですわよネ。
絶対に待ち合わせ時間に遅れないように、いつもこんなに早く来てますシ。

……マア、ワタクシも同じ時間に来てる時点で、何も言えませんけド。

サ、サア！　プラーミャがチョイスしたこの服で、絶対に『可愛い』って言わせてみせますわヨ！

ワタクシはフンス！　と意気込むと、ヨーヘイの元へと向かウ。

「お、お待たせですワ！」
「おー、来たな……っ！？」

スマホから視線をワタクシへと移した瞬間、ヨーヘイが目を見開いタ。
で、ですけどこの反応、ひょっとして似合ってなかったりするんですノ……？

デ、デモ！　昨日試着した時は、プラーミャは大絶賛してくれたんですのヨ！？
ですからきっト、ヨーヘイだっテ……！

そう自分に必死で言い聞かせるけド、ワタクシの心に不安ばかりが渦巻ク。
モシ、ヨーヘイが気に入らなかったら、どうしよウ……。

ワタクシは胸が苦しくなり、キュ、と胸襟を握ル。

するト。

「あ、あー……さすがにその服は予想してなかった……で、でも、サンドラには超似合ってるぞ！」

「！　ホ、本当ですノ！」

ヨーヘイのそのたった一言で、苦しかったワタクシの胸が、今度は別の苦しみに襲われル。

ですけド、これは嬉しさと幸せが入り混じった、そんな苦しミ。

「お、おう……というかサンドラも、ゴスロリなんて着たりするんだなあ……」

そう言うと、ヨーヘイがしげしげとワタクシの服を見回しタ。

ウウ……チョット恥ずかしくなってきタ……。

「それに見てみろよ。駅前の通行人が、全員サンドラに釘付けになってるぞ」

「ア……」

ホ、本当ですワ……さ、さすがにこれは恥ずかし過ぎますワ……。

「ヨ、ヨーヘイ！　早くルフランに行きますわヨ！」

「うわっと！？　お、おう……！」

ワタクシは早くこの場から立ち去りたくテ、ヨーヘイの手を引きながら駅前から立ち去っタ。

◇

「フフ……美味しいですワ……！」

ルフランに来たワタクシとヨーヘイは、早速スイーツに舌鼓を打ツ。

モチロン、約束通りスイーツは目の前に二つ用意されていタ。

「はは……だけど、ここでもサンドラは注目の的だなあ」

そう言いながら、ヨーヘイは店内を見回す。

マ、マア、チョットここまで見られてしまうのはどうかと思いますけド、ヨーヘイだって気に入ってくれてますし、あ、甘んじて受け入れますワ。

「それにしても、サンドラのそのアップルパイ、普通のヤツとチョット変わってて美味そうだなあ」

「フフ、これはルーシでは“シャルロートカ”と言うんですのヨ」

「へえー、俺にも一口くれよ」

「エエ」

ワタクシは皿をヨーヘイの前に差し出すと、フォークで一口サイズに切って口に含んだ。

「おお……！　コレ、俺好きかも！」

「本当ですノ！　でしたら今度、ワタクシが作って差し上げますワ！」

「ええ!?　サンドラって、コレ作れんの!?」

ワタクシがそう提案した瞬間、ヨーヘイは驚きの声を上げル。

というカ、ひょっとしてワタクシができないと思ってましたノ？

少し腑に落ちないワタクシは、ジト目でヨーヘイを睨むト。

「い、いやだって、弁当で肉串出てきた時は、その……なあ……？」

「フエ……」

い、痛いところを突かれましたワ……。

で、ですけどアレはプラーミャが、そのほうが喜ぶからっテ、男の子はお肉が大好きだからって言ったかラ……。

「ぜ、絶対に作ってヨーヘイに食べてもらいますワ！　エエ！　そうですとモ！」

「お、おう……」

フフ、これであの時の汚名を返上するのですワ！

ワタクシはテーブルの下で拳を握りながら小さく意気込んだ。

それからワタクシは、ヨーヘイと一緒に過ごして一日を思いっ切り楽しんダ。

……ア、ソウソウ。

ヨーヘイがシャルロートカのフォークをつけた部分を、いつもの倍以上も咀嚼（そしゃく）したことはナイショですのヨ？

ルフランでのひと時（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

今回の幕間はサンドラ視点の回でした！
次回はちょっとシリアスな幕間になります！
更新は明日の朝！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

成り上がってやる！（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今回は謎視点でお送りしております！
ちょっと人物特定を避けるため、あえて一人称を『　』で、精霊の名前を［　］で表しておりますが、ご了承くださいませ。

成り上がってやる！

■???視点

「さて、と……」

『　』は部屋に変えるなり、ベッドに寝転がってスマホの画面を眺める。

「ウーン……だけど、今日はチョット失敗しちまったなあ……なあ、お前もそう思うだろ？」

そんなことを呟きながら、隣にいる『　』の精霊（ガイスト）に問い掛けると、精霊（ガイスト）は首をコクコクと縦に振った。

「ハア……だけどさあ、いくら何でもアイツ、ヤバくない？　というか、ヒロインなのにあの面（ツラ）はないだろ」

『「　」もそう思うのです！』

「ハハ、だよなあ。『　』」

精霊（ガイスト）の同意も得て満足した『　』は、またスマホ画面に視線を戻す。

そこには、あの醜い顔の伊藤アスカではなく、あくまでも『ガイスト×レブナント』におけるメインヒロインとしての、綺麗なイラストのアイツが表示されていた。

『マスターは、またその『攻略サイト』を見ているのです？』

「ん？　おお、そうだなー」

『　』は［　］に対して生返事をすると、画面をフリックして登場人物の情報を読み漁る。

「ええと……次のメイザース学園との交流戦イベでは、確かアイツが出るんだよなあ……」

そう呟いて画面をタップし、表示されたのは。

「“土御門シキ”……」

『ガイスト×レブナント』における最強の【闇属性魔法】の使い手であり、交流戦イベ終了後にアレイスター学園に転校してくるメインヒロインの一人。

「うん……やっぱりコイツを引き入れるのがベストだよなあ……」

何より、【闇属性魔法】は【邪属性魔法】と並んでデバフ系の魔法も充実しているし、【邪属性魔法】にはない強力な攻撃魔法も持ち合わせている。

それに。

「土御門シキの精霊（ガイスト）、［道摩法師（どうまほうし）］には【式神】がある」

そう。［道摩法師］の【式神】は、紙片を用いて様々な役割を持った人形（ひとがた）を使役する土御門シキだけが持つ唯一のスキルだ。

それは、攻撃、防御、支援、その三つを全て【式神】が行うことで、レベルが最大になればたった一人で一個中隊規模の戦力を有することも可能だ。

「となると……土御門シキをこちらに引き入れたとして、クラスチェンジはさせないほうが無難か？」

顎をさすりながら、『　』は思案する。

クラスチェンジさせれば、［道摩法師］はより強力な精霊（ガイスト）である［ヘル］になるが、そうなると【式神】のスキルは使えなくなってしまう。

というか、主人公や他のヒロイン、仲間キャラなら主要スキルが引き継げる仕様なのに、よりによって土御門シキは引き継げないんだよ……。

「ハア……なんて嘆いてもしょうがないかー……」

天井を仰ぎ、『　』は溜息を吐いた。

そうだ……『　』が目的を果たすためには、贅沢ばかりは言ってられないな。

「まあ、そんなこと言ってても、駒はいくらでもある。その都度、状況に応じて替えていけば、それで事足りるか」

そうだとも。

『　』は主人公特化のフラグなんざ全部ぶっ潰して、無事にハピエンを迎えてやるって誓ったんだ。

『　』の、最高の未来のために。

「おっと。そういえばコレは、もういらないなあ」

『　』はムクリ、とベッドから起き上がると、スマホをベッドの上に放り投げ、カバンの中から“恋愛上手になれる百の法則”と

いうタイトルの、『古ぼけた本』を取り出す。

「……こんなクソみたいな本、なんだってそこまで大事なのかねえ。そもそも、『ガイスト×レブナント』の世界とは違うってのに」

『古ぼけた本』を軽く振ると、『　』はゴミ箱の中へと放り込んだ。

「ハハ……アイツ、『古ぼけた本』が益田市のはずれでゴミとして埋め立てられたって知ったら、どんな顔するかな？」

まあ、アイツのことだからとんでもなく醜悪な面（ツラ）で鼻水たらして号泣するんだろうな。キモチワルイ。

というか、まさかあの面（ツラ）がメイクで固めた作り物だなんて、普通分からねーよ。

「そういう意味じゃ、この『　』が脅威を取り除いてやったようなモンなんだから、主人公クンは感謝して欲しいよな」

といっても、実際の主人公は女みたいになっちまってるし、ある意味違うけど。

「さあて……んじゃ、土御門シキを交流会イベの後に引き入れることは確定として、あと二人くらい増強したいから、そうだな……」

ベッドに放り投げていたスマホを手に取り、『攻略サイト』のページをスライドさせる。

「……うん。せっかくだし、今度は『形見のライター』と『屋上の鍵』にしようかな？」

そう呟いた瞬間、『　』の中から笑いがこみ上げてきた。

「ハハハハハ！　アイツ、コレを知ったらどんな顔するかな！」

いやあ！　コレってメッチャ驚くどころか、ひょっとしたら絶望して心が折れちまうんじゃねーか？

なにせ、これまでの苦労が全部台無しになるってことなんだからな！

「ハハハ！　［　］！」

『ハイなのです！』

『　』は［　］を手招きすると、ギュ、と抱き寄せた。

「［　］、『　』は絶対の今の状況を変えてやる。こんなこのクソゲーなんかメチャクチャにして、この『　』が最強に成り上がって全てを手に入れてやる！」

『ハイ！　マスターなら絶対にできるのです！　［　］は……［　］は、マスターと一緒にずっとずっとどこまでも行くのです！』

「ああ！」

『　』は［　］を強く抱きしめ、そう宣言した。

成り上がってやる！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回で幕間はラスト！　今日の夜更新です！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

事前情報（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

事前情報

「うあー、疲れたー」

家に帰るなり、俺はベッドの上に寝転がってだるそうに呟く。

サンドラと一緒にルフランのスイーツを楽しく食べた、そこまではよかった。

だけどその後、サンドラの買い物に付き合わされて大量の荷物を持たされ、挙句の果てにその荷物をサンドラの住むマンションまで運んだ俺は、プラーミャの奴に絡まれたのだ。

『はうはう……ま、まあ、ミャーさんの気持ちも分からなくはないのです……』

「な!?　［シン］はプラーミャの肩を持つのか!?」

俺はガバッ、と身体を起こし、［シン］に猛抗議する。

いや、アレは絶対にプラーミャの奴が悪かっただろ!

というかアイツ、荷物で前も見えない中、サンドラの後を一生懸命について行った俺の足を引っかけやがったんだぞ!?　悪いのは全部アイツだろ!

『……ですけど、こけてアレク姉さまのお尻に顔をうずめたのは、［シン］もさすがにどうかと思うのです』

「んな!?　ア、アレは不可抗力だ!　無実だ!」

『はうー……』

チクショウ!　［シン］の奴、思いっ切りジト目で見てやがる!

『じゃあマスターに聞くのです。アレク姉さまのお尻、どうだったのです？』
「む！　そりゃあ張りがあって、それでいてフニュン、と柔らかくて……って！？」
ああああ！？　［シン］に誘導尋問された！？
『これは、絶対に藤姉さまに報告しないといけないのです』
「お願いソレはヤメテ」
俺は今日一番の素早い動きで、［シン］の前で土下座した。
あ、いや、サンドラの時も同じくらい速かく動いて土下座したから、一番かどうかは微妙だな……って、そんなことはどうでもいいんだよ！
『はうはう～、これはアイス五個くらいじゃ足らないのです♪』
「チクショウ……足元見やがって……」
まあ、先輩の信頼を失うことを考えたら、アイス程度で買収できるんだから安いモンか。
とはいえ［シン］、いつか覚えてろよ？
その時。
――ジリリリリ。
「ん？　電話？」
俺はポケットからスマホを取り出し、画面を確認すると……。

「おお、アイツだ」

電話を掛けてきたのは、なんと“悠木アヤ”だった。

「もしもし！」

『あ……望月、くん？』

「おう！　俺だ！」

通話ボタンをタップして電話に出ると、悠木がおそるおそる尋ねてきたので、俺は全力で返事してやった。

「というか悠木、いつもはメッセージを送ってくるのに、今日は電話って珍しいな」

そう……悠木があの施設を出てから、俺と悠木は結構マメにメッセージアプリで連絡を取り合っている。

といっても、その内容は結構他愛のないものばかりで、新しい学校に慣れたかとか、向こうのメシは美味いかとか、俺が一方的に質問することのほうが多かったかも。

やっぱり、新しいところは悠木だって不安だろうし、向こうの連中も転校してきた経緯とか知ってるだろうから、俺としても心配だったしなあ。

『……ちょっと、これは直接話をしたほうがいいかと思って』

「うん？」

悠木の奴、妙に何かを匂わせるような言い方をするな……。

「なあ、悠木……もし困ってるようなことがあるんなら、俺は全力で手助けするぞ？　なんだったら、藤堂先輩にも協力してもらって……『あ、あああああ！？　べべ、別に困ってることはないから！』……そ、そうか？」

俺が心配してそう提案しようとしたところで、悠木はかぶせるように否定した。だけど、悠木がこんなに焦ったみたいな話し方をしたのって、初めてかも。ちょっと新鮮。

『はうはう、相変わらずマスターは懲りないのです』

「……なんだよ」

ちょっと［シン］の言葉は聞き捨てならないけど、とりあえずはジト目で睨む程度にして、悠木との会話に集中しよう。

「だけど、それだったらどんな話なんだ？」

『……うん。ホラ、二週間後にメイザース学園との交流戦……』

「おお！　そういえばまだ伝えてなかったな！　実は俺、その中の団体戦で、学園代表に選ばれたんだよ！」

『！　……ふふ、だと思った。でも、おめでとう』

俺がそう報告すると、悠木はスマホの向こうでクスクスと笑いながらお祝いの言葉をくれた。

ウーン……もっと驚いた反応を見せてくれると、期待したんだけどなあ。

『……じゃあ、次は私の番』

「ん？　私の番？」

はて？　悠木もなにか報告があるってことなのか？

『……私も、メイザース学園の一年生の代表の一人に選ばれたの』
「おお！　マジかよ！」

悠木の意外な報告に、俺は思わず声が大きくなってしまった。
いや、確かに悠木の実力なら、メイザース学園の代表になっていてもおかしくないんだけどな！　クラスチェンジだってしてるし！

『……うん。あなたなら、喜んでくれるって思った』
「当たり前だろ！　じゃあ今度の交流戦、ひょっとしたら俺と悠木が戦ったりするかもな！」
『……ふふ、ええ。私もあれからさらに強くなったんだから、覚悟してよね？』
「おおー……それは気を引き締めないとなあ……」

だけど……うん、今度の交流戦がメッチャ楽しみになってきた！

『……それと』
「ん？　それ以外にもなにかあるのか？」
『……木崎さんも、一年生の代表に選ばれたわ』

さっきまでとは打って変わり、悠木は緊張した声でそう告げた。

「あー……まあ、アイツも選ばれるんじゃないかとは思ったけどな。だけど、お前が言いたいのはそれだけじゃないんだろ？」
『……本当はこんなこと言うのは密告してるみたいで気が引けるんだけど……彼女の精霊（ガイスト）、クラスチェンジを果たしてかなり強くなっているわ。多分……私よりも強い』
「……そっか」

悠木の言葉を聞き、俺は短く、そして静かにそう答えた。

『……うん。それに彼女、かなりあなたのこと恨んでるみたいね……今日、うちの学園であった代表に選ばれた生徒のスピーチで、ハッキリと『借りを返す』って言ってたもの……』

「はは、そうかよ……」

まあ、俺からすればそれはコッチの台詞（セリフ）なんだけど、な。

『……だから、交流戦の当日は、絶対に気をつけてね。また、あの時みたいになにか企んでるかもしれないし……』

「ああ、わざわざありがとう」

『……ん』

俺は通話を終えると、スマホから『攻略サイト』のページを開き、キャラ紹介にある“木崎セシル”のリンクをタップする。

「ええと……クソ女の精霊（ガイスト）は、と……ああ、これだ」

そこには、あの［グルヴェイグ］の情報と共に、クラスチェンジ後の精霊（ガイスト）、［フレイヤ］のことが詳しく記されていた。

「はは……まあ、さすがに最強の回復魔法使い（ヒーラー）だけあって、『魔力』は“ＳＳ”かよ」

確かに、一応あのクソ女は、『ガイスト×レブナント』のメインヒロインの中のメインヒロイン。『攻略サイト』のトップページにあるゲームのパッケージイラストでも、主人公に次いで二番目に扱いがいいからなあ。

『はう……マスター、眉間にしわが寄っているのです』

そう言って、［シン］は心配そうに俺の顔を覗き込んだ。

「ん？　はは、大丈夫だ。この『攻略サイト』だってあるし、なによりも」

『はう！？』

俺は［シン］の頭をガシガシと乱暴に撫でると。

「俺には、世界一の相棒がいるからな」

『えへへー……マスター、大好きなのです！』

「わっと」

飛び込んできた［シン］を慌てて受け止めると、［シン］は嬉しそうにはにかみながら、俺の胸に頬ずりをした。

事前情報（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

ということで、今回で幕間も終わり、明日からは第六章に突入します！

第六章ではメイザース学園との交流戦はもちろんのこと、第五章冒頭で存在だけ言及された主人公のライバルキャラが登場してまいります！　お楽しみに！

次回、第六章は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一週間前の朝（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第六章の開幕です！

一週間前の朝

「くあ……！」

俺の一日は、朝起きて大きく伸びをし、いつものように俺の上で気持ちよさそうに寝ている［シン］を降ろすところから始まる。

というか、もうこんな朝も慣れたなあ……。

「おーい［シン］、朝だぞー」

『ムニャムニャ……今日はルフランのジェラート十個で手を打つのです……』

寝言を言いながら、［シン］は両手を『パー』にしてバンザイをした。だけどコイツ……最近、要求がさらにキツくなってきている気がする。

……よし。

俺は［シン］を起こさないように静かにベッドから離れると、素早く制服に着替えてリビングに向かう。

「おはよう」

「あら、おはよう」

母さんに朝の挨拶をすると、テーブルの上に用意されている朝食の前に座った。

ほうほう、今日はごはんに味噌汁、サンマの塩焼きかあ……ウーン、秋だなあ……。

「いただきます」

手を合わせた後、サンマの塩焼きを箸の先でほじると、口の中に放り込む。むむ、美味いぞ！

で、そのままの勢いでごはんをかきこみ、味噌汁をすする。こうなるともう、俺は永久機関のように止まることを忘れるのだ。

「はは……でも、先輩ほどじゃないか」

ふと、先輩のことが頭をよぎり、俺は思わずクスリ、と笑う。

「あらあー？　ひょっとして、あのサクヤちゃんのことでも考えてる？」

「ブッ！？　ゲホゲホッ！」

母さんの一言に、俺は思わず味噌汁を噴き出しそうになった。

というか母さん、なんで俺の思考を読むんだよ！？

と、とにかく、サッサと食って支度しよう……。

俺は恥ずかしさもあって、急いで食べると。

「ごちそうさまでした」

「はい、お粗末さまでした」

俺は席を立って逃げるように洗面所に向かい、歯磨きと洗顔を済ませると。

「よっし！」

気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩いた。
うん……ただでさえメイザース学園との交流戦まで一週間を切ったんだ。気合いを入れてかないと。

「行ってきます！」
「行ってらっしゃい……って、あれ？　［シン］ちゃんは？」
「アイツは最近調子に乗ってる罰だ」

そう告げると、そそくさと家を出た。
フフフ……慌てふためく［シン］が見ものだな。

俺は先輩の待つ十字路へと少し足早に向かうと。

『はうはうはうはうはうはうはうはうはう～！』

はは、やっと来やがった。

『はう！　マスター！』
「おう」

俺は後ろを振り返り、できる限り爽やかな笑顔で返事をした。それはもう、ラブコメラノベに出てくる、主人公のライバルのイケメンくらいに。

『ヒドイのです！　ヒドイのです！　［シン］を置いて行くなんてヒドイのですううううう！』
「何言ってんだよ。俺はちゃんと起こしたぞ？　起きなかった［シン］が悪い」

両腕をブンブンと振り回しながら怒る［シン］に、俺はピシャリ、とそう言い放つと。

『はう……マスターは、［シン］のことが嫌いになったのですか……？』

すると、今度は様子が打って変わり、人差し指を咥え、今にも泣きそうな表情をしながら上目遣いで俺を見つめる［シン］。

う……コノヤロウ、そんな態度でも、俺は絆されたりしないんだからな！

「好きも嫌いもないだろ。だったら［シン］も、ちゃんと起きろよな」

『はうー……やっぱりマスター、今日は冷たいのです……冷たいのですう……！』

「ぐ……！」

く、くそう！　［シン］の奴、とうとうすすり泣きまで始めやがった！？

「あーあー分かった！　先に家を出た俺が悪かったよ！　だからもう泣くな！」

『……もう怒ってないです？』

「ああ、怒ってねーよ」

俺は頭をガシガシと掻きながら、そう告げる。

すると。

『えへへー！　マスターが許してくれたのです！　やっぱりマスタ

ーは［シン］が大好きなのです！』

ついさっきまでの様子はどこへやら。［シン］は、にぱー、と満面の笑みを浮かべると、俺の周りをくるくると回りながら踊り出した。

ハア……ちょっと懲らしめるつもりだったのに……俺も甘いなあ……。

俺はそう呟くと、嬉しそうにはしゃぐ［シン］を眺めて苦笑した。

◇

「望月くん、おはよう」

いつもの十字路、先輩は笑顔で俺を出迎えてくれた。

「おはようございます！　先輩！」

「うむ」

そして俺達は並んで学園へと足を進める。

「あ、そうそう。先輩、今日の放課後は、立花達も連れて“葦原中国（あしはらのなかつくに）”領域（エリア）に行きましょう」

「む、それは構わないが、どうしてだ？」

「ホラ、来週にはいよいよメイザース学園との交流戦が始まりますから、【闇属性反射】を取得してもらわないと。一応、加隈も代表ですからね」

それに、今度の交流戦で誰があの“土御門シキ”と当たるか分か

らない以上、加隈にも【闇属性反射】を取らせておかないと、な。

「ふむ……望月くん、こう言ってはなんだが、彼も一年生の中では既に実力は抜きんでている。仮に【闇属性反射】がなくとも、そうそう負けるようなことはないのではないか？」

先輩が顎に手を当てながら、そう尋ねるけど……。

「……いえ、【全属性耐性】を持つ［シン］なら充分対抗できますけど、闇属性に対抗する手段を持たない［ロキ］じゃ、厳しいでしょうね」

そう……もし交流戦で加隈が土御門さんと戦った場合、レベル差やクラスチェンジしたことによる優位性があったとしても、それでも、土御門さんは強い。

何と言っても、土御門さんの精霊（ガイスト）、［道摩法師（どうまほうし）］には【式神】があるからな……って。

「ええと……先輩？」

「ん？　……ああいや、何でもない……」

俺の顔を覗（のぞ）き込んでいた先輩が、ふい、と視線を逸らした。

だけど、先輩はどこか俺を探るような……それでいて躊躇（ちゅうちょ）するような、そんな様子だった。

ううん……気になる。

「先輩……何かあるんですよね……？」

「あう……そ、その……望月くんはどうして、向こうの生徒会会計

のことをそんなに詳しく知っているのだ……？」

「あ……」

先輩に上目遣いでおずおずと尋ねられ、俺は自分の失態に気づく。

ヤベ、なんて言い訳しよう……。

「あ、あはは……実は、メイザース学園にいる悠木に教えてもらいまして……」

俺はそう説明し、頭を掻きながら苦笑した。

と、とりあえず悠木には口裏を合わせるように、今度メッセージを送っとかないと。

だけど。

「むううううううううう！」

何故か先輩は、頬をパンパンに膨らませながら拗ねてしまった……。

一週間前の朝（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ライバルの存在（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ライバルの存在

「ふうん……“葦原中国（あしのはらなかつくに）”領域（エリア）かあ……」

昼休みの食堂でランチを食べながら、俺は立花達に朝の通学時に先輩に話したことを提案すると、立花は考え込む仕草を見せた。

「ん？　立花はあんまり乗り気じゃないのか？」

「そんなことないよ？　だけど、今回は珍しく大人数で領域（エリア）に行くんだなあ、って。ホラ、“アルカトラズ”領域（エリア）の時は、望月くんはボク達三人で行くようにって言ったから」

「あー、アレはプラーミャが踏破済みで問題なく先導できたし、立花達のレベルを上げるには俺達が一緒じゃないほうがいいしな」

というのも、大人数で幽鬼（レブナント）を倒すと、手に入る幽子が分割されてしまうから、立花達が得られる幽子の量も減ってしまうからなあ。

一方で、俺や先輩、サンドラは、既にクラスチェンジを果たしているから、“アルカトラズ”領域（エリア）にいる幽鬼（レブナント）程度じゃ幽子の量が全然足らない。

「……つまり、一緒に行動することはお互いにとってメリットが少ないし、チームとしても連携を上げるためにも、そのほうが良かったから」

「あ、そっか。えへへ……望月くんって、そんなところまで考えてるなんてすごいなあ」

「はは、まあな」

納得した立花に褒められ、俺は照れ笑いした。

「だけド、今回は七人で行くってことは……？」
「そりゃあ、今回の目的はあくまで【闇属性反射】を取得してもらうことが目的だからな。特に加隈」
「お、俺！？」
立花をボーっと眺めているところにいきなり話を振られて驚く加隈に、俺はゆっくりと頷く。
「ああ……向こうの一年生代表の一人である土御門さんは、【闇属性魔法】を最も得意としてるんだよ」
そう告げた瞬間、目の前の先輩がピクッ、と動いた。それも、眉根を寄せながら。
ううう……先輩、そろそろ機嫌を直してくださいよお……。
「へえー……だけどヨーヘイ、なんでんなこと知ってんの？　つーか、向こうの代表が誰か、なんで分かるんだよ」
「それは、メイザース学園にいる悠木に教えてもらった」
「悠木に！？」
俺の言葉に加隈が驚きの声を上げる。
まあ……コイツもあんなことになるまでは悠木とチーム組んでたし、何より、木崎を加えた三人で散々俺をディスってた仲間だったもんな。
「そ、それで、悠木は元気にしてたか？」
「おう。それになんと、悠木も向こうの代表に選ばれたってよ」
「そ、そうか！」

そう聞いた瞬間、加隈は嬉しそうに顔をほころばせた。
はは、『攻略サイト』通り、仲間想いなところは今も健在だな。

「あとは……あの木崎も代表、だそうだ」
「ッ！　……本当に、ワタクシが代表として出たかったですワ……！」

するとサンドラは、ギリ、と悔しそうに歯噛みした。

「まあまあサンドラ、それは俺か加隈、もしくはあの“賀茂”が代わりに倒してみせるから、その分俺達を応援してくれよ」
「ソ、ソレはもちろん応援しますけド……モウ」

不服そうに口を尖らせるけど、サンドラは渋々納得してくれたみたいだ。

「だけド、私達（ヤー）だけ事前に向こうの情報をつかんでいるっていうのは、少しズルっぽいわネ」

澄ました表情で、プラーミャはシレっとそんなことを口にする。
いや、確かに言う通りなんだけど……。

でも。

「……ズルでもなんでもいいさ。向こうより少しでも有利な分、俺達が勝つ確率は上がるんだ。それに」

俺は一拍置き、チラリ、と先輩を見やった後、また向き直る。

「それに、それだけ俺達が安全に戦えるってことだからな。勝つの

も大事だけど、あまりみんなに怪我とかして欲しくないし」

そう、みんなに告げた。

だけど、俺がそう考えるのにも理由がある。

この交流戦イベで、メイザース学園側から主人公のライバル……いや、主人公の天敵って言ったほうがいいか。

なにせ、『ガイスト×レブナント』において主人公の行動をとことん邪魔し、立ち塞がり、最終決戦の場でも、あの先輩と戦う前に最後の戦いを挑んでくる、本編ラスボスの駒。

――メイザース学園二年、“中条（ちゅうじょう）シド”。

もし本編シナリオ通りなら、交流会イベで自身の手下ともいうべき連中が、その試合の最中に仕掛けてくることは間違いないんだからな。

それに……これもシナリオ通りなら、交流戦の全試合が終了した直後に、九つの柱の一柱が現れる。しかも、柱に関しては既に現れる順序も状況も、本編とは完全に異なってしまってるから、ハッキリ言って全く気が抜けない。

だから、できる限り準備をして対処できるようにしておかないと。

先輩には、この俺が絶対に指一本触れさせない……！

「あ、ヨ、ヨーヘイ……ちょっと顔が怖いですわヨ……？」

「へ……？」

サンドラに指摘され、俺は思わず自分の顔を撫でる。見ると、み

んなも心配そうな表情で俺を見つめていた。ヤベ、やっちまったなあ……。

「あ、あははー……俺も少し気合入り過ぎてたみたいだなー……」

俺はとぼけながらそう告げて苦笑した。

あー……こういうところ、ホント気をつけないとなあ……って。

「せ、先輩……？」

「あう……い、いや、何でもない……です……」

さっきまでのご機嫌斜めだった様子から一変し、先輩は顔を真っ赤にしながら俯(うつむ)いてしまった。

ううう……こ、これ、俺が今言った意味に気づいてるってことじゃん……。

「と、とにかく！　準備しておくことに越したことはないから、今日の放課後、みんなで“葦原中国(あしのはらなかつくに)”領域(エリア)に行くってことで！　さ、さあ、サッサとメシ食っちまおう！」

メッチャ気まずくなった俺は、ごまかすかのようにそう言うと、昼食を慌てて口の中にかき込んだ。

ライバルの存在（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

チーム立花（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

チーム立花

――キーンコーン。

放課後になり、クラスのみんなが帰り支度を始める。

「望月くん！　それじゃ、行こう！」

で、隣の席の立花は当然ながらメッチャ張り切っている。

どうやら、久しぶりに俺と一緒に領域（エリア）攻略をすることがそんなに嬉しいらしい。

「フフ……ですけド、立花サンの出番は多分ありませんわヨ？」

「え？　それってどういうこと？」

クスクスと笑いながら告げるサンドラに、立花は思わず聞き返した。

「ああー、サンドラの言う通り、俺達はただまっすぐゴールまで歩くだけだから、結構楽だぞ？」

「望月くん！？」

驚く立花に、俺はクスリ、と笑う。

まあ心配するなよ。確かに領域（エリア）ボスの“天津甕星（あまつみかぼし）”を倒すところまでは何もしないが、そこから先は、出番だらけだからな？

「はは、まあ行ってみてのお楽しみだ。それより、先輩達を待たせるわけにもいかないから、早く校門に急ごうぜ」

俺は立花の肩をポン、と叩き、一足早く教室を出ると。

「あ！　ま、待ってよー！」

立花達も慌てて俺の後を追い掛けてきた。

そして。

「ふふ、来たな」

校門の前に立っている藤堂先輩と氷室先輩が、俺達の姿を見つけて微笑む。

「先輩！」

俺はそんな先輩を見た瞬間、気づけば真っ直ぐ駆け出していた。

「あ……コラコラ、そんなに慌てる必要はないだろう？」

「あ、あはは……」

先輩に指摘され、俺は思わず苦笑してしまったけど、先輩の口元はメッチャ緩んでいた。

はは……本当に先輩は、とてつもなく可愛い。

「これで全員揃いましたね？」

「「「「「はい！」」」」」

「では、行きましょう」

氷室先輩の確認に俺達は元気に返事すると、氷室先輩を先頭に“

葦原中国（あしのはらなかつくに）〝領域（エリア）〟への入口がある公園へと向かった。

◇

「こ、ここが……！」

扉をくぐって中に入るなり、その雰囲気に驚きの表情を見せる立花達。

まあ、真っ暗闇に灯篭の明かりが一本道の両脇に続いているこの景色は、〝アルカトラズ〟領域（エリア）、や〝アトランティス〟領域（エリア）と比べても異質だもんなあ。

といっても、他の領域（エリア）も普通じゃないんだけど。

「では、行きますよ。［ポリアフ］」

氷室先輩は［ポリアフ］を召喚すると、照準を合わせた。

「【スナイプ】」

――タン、タン、タン。

その言葉と共に、氷室先輩の肩に乗る［ポリアフ］のスナイパーライフルから弾丸が射出される。

「さあ、先へ進みましょう」

「え……？　こ、これってどういう……」

「はは、まあ行ってみたら分かるって」

戸惑う立花の背中をバシン、と叩き、氷室先輩の後に続く。

「あ……！」

細い一本道の通路には、氷室先輩によって倒された幽鬼（レブナント）が三体、額、胸、腹をそれぞれ打ち抜かれて転がっていた。

「な？」

「あ、あはは……こんなの、反則だよ……」

俺は口の端を持ち上げながらポン、と肩を叩くと、立花は乾いた笑みを浮かべた。

分かる！　俺もお前の気持ち、メッチャ分かる！

ということで、俺達は氷室先輩の頼もしい背中を見つめながら、幽鬼（レブナント）の屍の横を通り過ぎて“天津甕星（あまつみかぼし）”のいる祭壇へと辿（たど）り着く。

すると。

「フフ……さすがに身体がなまってるから、ここは私（ヤー）が行くわヨ！」

「えー！　ボクだってずっと退屈だったんだから！」

「オイオイ！　お前等チョット待てよ！　……って、あああ、結局こうなっちまうのかよおおおお！」

プラーミャと立花が飛び出し、その後を悲鳴を上げながら加隈が追いかけていく。

というか加隈の奴、いつもあんな感じでお守りをやらされてるのか。大変だなあ……。

「ふふ……ここは、三人のお手並み拝見といこうか」

「あはは、そうですね……」

俺は苦笑しながら先輩の言葉に相槌を打ち、祭壇へと目を向ける。

「フフフ！　食らいなさイ！　【クローフィ・ブーリャ】！」

真っ先に祭壇に足を踏み入れると、プラーミャの精霊（ガイスト）、［スヴァローグ］はその身体に不釣り合いな、巨大なハルバードに炎をまとわせ、まるで嵐のような連撃を繰り出して天津甕星（あまつみかぼし）へと襲い掛かった。

『ッ！』

当然、天津甕星（あまつみかぼし）もそれを回避しつつ、流星錘（りゅうせいすい）を振り回して［スヴァローグ］の眉間を狙った。

だけど。

――ジュッ。

流星錘はハルバードの炎に巻き込まれ、その高温によって一瞬で溶けてしまった。

『終わりネ！』

勝ったと見たプラーミャは、勢いよく天津甕星（あまつみかぼし）の脳天へとハルバードを振り下ろした瞬間……天津甕星（あまつみかぼし）は、【転身】によって一瞬で加隈と入れ替わった。

「ナッ！？」

「おわあっ！？」

お互いの悲鳴が交錯し、ハルバードの刃が加隈の精霊（ガイスト）、［ロキ］の額、数センチのところでかろうじて止まった。

「モ、モウ！　勝手に現れないでヨ！」

「そ、そりゃコッチの台詞（セリフ）だっつーの！　俺を殺す気か！」

などと、プラーミャと加隈が言い争いを始める。

「ア、アイツ等……事前に天津甕星（あまつみかぼし）の情報は入れておいただろうに……」

俺はそう呟くと、思わずこめかみを押さえた。

「マ、マアマア……それよりも、立花サンはちゃんと理解してるみたいですシ……」

サンドラが慰めの言葉をかけながら、そっと指差す。

「あはははは！　ボクにはそんなの通用しない！　【白虎】！　【青龍】！」

立花の精霊、［伏犠（ふっき）］から放たれた二体の魔獣が、天津甕星（あまつみかぼし）を挟（はさ）み撃ちにした。

天津甕星（あまつみかぼし）は今度も【転身】によって魔獣の同士討ちを誘おうとする。

だけど。

「終わりだよ！　【朱雀】！」

狙いすましたかのように、［伏犠］は天津甕星（あまつみかぼし）の十メートル離れたところから【朱雀】を放っていた。

『アアアアアアアアッッッ！？』

対象がおらず、【転身】することができなかった天津甕星（あまつみかぼし）は、【朱雀】による攻撃をもろに食らった。

そして。

「トドメだあああああ！　【竜の息吹】ッッッ！」

大きく口を開けた［伏犠］から放たれた【竜の息吹】を受け、天津甕星（まつみかぼし）はとうとう幽子とマテリアルに姿を変えた。

チーム立花（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

布都御霊（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

布都御霊

「えへへ、無事に【闇属性反射】を手に入れたよ！」

天津甕星（あまつみかぼし）を倒し、祭壇の裏側にある祠（ほこら）で無事に【闇属性反射】を手に入れた立花が、はにかみながら駆け寄ってきた。

「だけど、ボクは今回の交流戦に出ないから、慌てて【闇属性反射】を手に入れなくてもよかったような……」

「はは、そんなわけねーだろ。確かに交流戦には出ないかもしれないけど、領域（エリア）攻略や来年の交流戦なんかで【闇属性魔法】の使い手と戦ったりする機会が必ず出てくるんだぞ？　取れるうちに取っとけ」

そう、二年の必修課題であり、実力的に多分アッサリと踏破できるであろう“カタコンベ”領域（エリア）に現れる幽鬼（レブナント）には闇属性が多いし、なにより、最強の【闇属性魔法】使いの土御門さんだって、本編シナリオ通りなら交流戦後に転校してくるはずだし。

「うん……まあ、望月くんの言う通りなんだけどね」

そう言うと、立花は苦笑した。

「私（ヤー）も取ったワ！」

「もちろん俺も取ったぜ！」

お、プラーミャと加隈も無事に取ったみたいだな。

「ふふ……さて、望月くん、今日のところはこれで解散かな？」
「あー……実は、ちょっと試したいことがあったんですよねー。［シン］」
『ハイなのです！』
微笑みながら尋ねる先輩にそう答えた俺は、［シン］に声を掛けて指示をする。
すると。
『はう！』
「「「「「っ！？」」」」」
［シン］は祭壇にあった燭台を手に取ると、暗闇が広がる奈落の底へ向かってダイブした。
「も、望月くんっ！？　死ぬ気なのか！？」
「はは……まあ、見ててください」
顔を真っ青にしながら慌てる先輩を落ち着かせるために、俺は努めて微笑みながら答え、［シン］が向かった暗闇へと指差す。
『はう！　【神行法・跳】！』
暗闇に点のように浮かぶ燭台の灯りから、［シン］の声がこだました。
そして。
「［シン］、お疲れ。どうだった？」

『はう！　マスターの言っていた通り、洞窟みたいなところがあったのです！』
「そっか、サンキュー」
『えへへー、なのです』

報告を受け、俺は労いの意味を込めてその黒髪を撫でてやると、［シン］は嬉しそうに目を細めた。

「も、望月くん……一体どういうことだ？」
「ええと……ちょっといいですか……？」
「ん……っ！？」

おずおずと尋ねる先輩に断りを入れてから、先輩の耳元にそっと顔を寄せる。

「ほら……“アルカトラズ”領域（エリア）でも“レムリア”領域（エリア）でも、領域（エリア）踏破の報酬として指輪があったじゃないですか。つまり……」
「あ……そ、そういうことか……」

俺は小声でそう告げると、先輩は納得して頷いた。
というか、二周目特典の五つの領域（エリア）には、必ずクリア報酬である指輪が存在する。

で、ここ“葦原中国（あしのはらなかつくに）”領域（エリア）では、報酬として“布都御霊（ふつのみたま）”と呼ばれる、剣（つるぎ）のレリーフが入った指輪が手に入る。
この指輪には、【状態異常無効】、【全属性無効】の効果があるという、ある意味チートアイテムっぽいんだけど……正直、微妙ではある。

だって、属性に関して言うなら、五つの領域（エリア）を全て踏破したら、

さらに強力な【全属性反射】が手に入ることになるし、［シン］や［関聖帝君］は【状態異常無効】を最初から持ってるし……。

とはいえ。

「……その指輪がないと、“天岩戸（あまのいわと）”領域（エリア）で、最後の【光属性反射】が手に入らない、からな……」

「望月くん……」

俺が何気なく呟いた言葉を拾った先輩が、真剣な表情で見つめていた。

あっと……無意識に余計なこと言っちまったなあ……。

「あ、あはは……みんなには内緒、ですよ？」

「ふふ……君は、本当に謎だらけだな。だが……それでも私は、君のことならなんだって信じられる」

「先輩……」

苦笑して人差し指を当てた俺に、ふいに先輩はそんな言葉で応えてくれた。

というか先輩……そんなこと言うの、反則ですよ……。

「……俺だって、先輩のことならどんなことだって信じていますし、その……一番大切な人、ですし……」

「あう……うん、知ってる……」

先輩は顔を真っ赤にして俯（うつむ）くと、左手の“シルウィアヌスの指輪”にそっと触れた。

「ふふ……この指輪が、ついこの間も私のことを救ってくれたよ」

「あはは……そうですか……」

今の先輩の台詞（セリフ）は、多分、研究所での一件のことだろう。まあ、あんなクソみたいな研究じゃ、そもそも“ウルズの泥水”を必要量確保するなんて絶対無理なんだけどな。

「さて……じゃあ、その指輪を［シン］に取って来てもらうかなー」

『はう！　任せるのです！』

そう言うと、［シン］が再度暗闇の中へ飛び込み、そして。

『取ってきたのです！』

［シン］は小さめの木箱を抱え、戻ってきた。

さてさて、そうすると今度はこの指輪を誰に渡すかってことなんだけど……。

事情を知っているサンドラが左手の“リネットの指輪”に触れながら、俺に目配せしてきた。

多分、“リネットの指輪”があるから今回は譲るっていう意味だろう。

それは先輩も同じで、その真紅の瞳に慈愛を湛え、微笑みながら頷いてくれた。

「じゃあ、この指輪はプラーミャに持ってもらおうかな」

「エ……？　私（ヤー）ガ……？」

俺の言葉が意外だったのか、プラーミャはその琥珀色の瞳を泳が

せる。

「おう。一応、この指輪の効果は【状態異常無効】と【全属性無効】なんだけど、その場合、【状態異常弱点】を持っているプラーミャが持つべきだろう？」

「ダ、ダッタラ、サンドラも同じよ！　だカラ、この指輪はサンドラにあげなさいヨ！」

「フフ……ワタクシには【ガーディアン】がありますカラ、状態異常の攻撃も防げるんですのヨ？　ですのデ、その指輪はプラーミャが持つべきですワ」

俺の意を汲んでくれたサンドラが、フォローを入れてくれた。

「うん、ボクも望月くんやサンドラさんの意見に賛成かな。それに、何と言ってもプラーミャさんはうちのチームの攻撃の要だからね」

「ア、アオイまデ……」

するとプラーミャは、少し頬を赤らめた。

お、コレってひょっとして……。

「し、仕方ないから、私がつけてあげるわヨ！」

不機嫌そうにそう言い放つと、プラーミャは指輪を手に取って左手薬指にはめた。

だけど、プラーミャの口元は嬉しそうに緩んでいた。

布都御霊（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

扉頁（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

最眉

「えへへ……それにしても、今日は【闇属性反射】も手に入れたし、プラーミャさんは“布都御霊（ふつのみたま）”もだし、ものすごく収穫が多かったね！」

「はは、まあな」

“葦原中国（あしのはらなかつくに）領域（エリア）”から出てくると、嬉しそうにそう話す立花に相槌を打つ。

「アレ？　そういえば今日の攻略って、今度の交流戦に向けてのモンだよな？」

「？　当たり前だろ？」

加隈が不思議そうに尋ねたので、俺は即座に答えた。

「だったらよー、アイツ……“賀茂（かも）”の奴も誘ってやってもよかったんじゃねーのか？　ホラ、一応アイツだって、一緒に戦う仲間っつーの？」

「あー……」

いや、加隈の言いたいことは分かった。

だけど。

「悪いけど、賀茂を俺達のメンバーに加えるつもりはないぞ」

「？　なんでだ？」

「……俺だって、人は選ぶ」

そう告げると、俺はプイ、と顔を背けた。
まあ……そもそも今のメンバーで構成しているのは、あくまでも先輩に不幸な未来を迎えさせないための布陣だ。別に、闇雲に仲間に引き入れているわけじゃない。

「あはは。ボクだって望月くんの言う通り、誰でもっていうのはイヤだなー」
「そうネ」

立花とプラーミャも、俺の考えに同意してくれた。

「フフ……お聞きしますけど、加隈サンはあの賀茂サンを仲間にしたいんですノ？」
「へ……？　あ、い、いや、別にそんなことは……」

クスクスと笑うサンドラに逆に尋ねられ、加隈がしどろもどろになる。

「ですが、そうすると私達は望月さんに大切な仲間として選ばれた、ということの裏返しでもありますし、本音を言えば悪い気はしない……いえ、かなり嬉しいですね」

ひ、氷室先輩！？　ストレートに言われると恥ずかしいんですけど！？

「あ、そ、そっか！　そういうことかよ！　全く……ヨーヘイにそんなこと言われちゃ、しょーがねーよな！」
「イヤイヤ！　別にそんなこと言ってねーだろ！」

嬉しそうにニヤニヤしながら肩を組んできた加隈に、俺は全力で

ツッコミを入れる。
チクショウ！　顔が熱い！
「ふふ……まあそういうことだし、これからもこのメンバーで領域（エリア）攻略に取り組んでいくとしよう。では、今日のところは解散だな」
「「「「「はい！」」」」」
そう言って俺達はその場でお開きとなった。
とはいえ。
「……デ、今日もあそこに行くんですわよネ？」
「はは、おう」
サンドラが含み笑いをしながら尋ねるので、俺は頷く。
レベル上げと疾走丸の入手は、毎日のノルマだからな。当然、今日もいつも通りこなすとも。
「ふふ……では行こうか」
「「はい！」」
そして俺達は、学園へと再度戻る。
すると。
「……そ、その……その中でも、さらにこうやって君に特別扱いしてもらうのは、心から嬉しい……」
「っ！？」
頬を染めた先輩に耳元でそっと告げられ、俺は顔が熱くなる。

というか先輩……そんなことを言うのは反則、ですよ……。

◇

「ふいー……」

風呂から上がった俺が、冷凍室からアイスを取り出して部屋へと戻ると。

『はうはう!?　マ、マスターだけズルイのです!』

目聡く見つけた［シン］が、早速絡んで来た。

といっても、こんな反応を見せることは想定済みではあるけど。

「ホラ」

そう言って、俺は背中の後ろに隠し持ってたもう一本のアイスを［シン］に差し出した。

『はう!　やっぱりマスターは優しいのです!』

「はは、だろ?」

ということで、俺と［シン］はベッドに並んで座りながらアイスを頬張る。

『えへへー、冷たくて美味しいのです』

「そりゃ良かった」

そう返した俺は、おもむろにスマホを取り出していつものように『攻略サイト』のページを開いた。

見つけて以降、毎日のように眺めているこのサイトだけど、今は特に何度も読み返している。

……俺が見逃したせいで、先輩のバッドエンドに進んでしまったらシャレにならないからな。

『はう！　マスターがまた『攻略サイト』を見てるのです！』

「ん？　ああ……今度の交流戦後のイベに備えてな。今のうちに色々と想定しとかないといけないんだよ」

そう言うと、まずは“中条シド（ちゅうじょう）”の情報を確認する。

主人公のライバルであるコイツは、とにかく主人公……つまり立花をつけ狙っているのだ。

で、コイツには手下となる奴が三人いるんだけど……。

なんと、その手下っていうのが、メイザース学園生徒会長である“近衛（このえ）スミ”と、同じく生徒会副会長の“鷲尾（わしお）イオリ”、さらには会計の土御門さんだったりする。

つまり。

「……向こうの生徒会にはロクな奴がいない……」

そう……『ガイスト×レブナント』本編においても、そもそもこの交流戦を行うことになった原因は、メイザース学園の学園長が、アレイスター学園の学園長、桐崎ライドウが秘密裏に行っている研究に関する情報を入手して、出し抜きたいがため。

その尖兵（せんぺい）としての存在こそが、中条シドと生徒会の面々なのだ。

でも。

「土御門さんは交流戦直後に闇堕ちし、主人公に救われることで中条シドを裏切ってコッチの味方になるんだ」

だからこそ、今度の交流戦では土御門さんに特に注意を払わないといけない。

できれば闇堕ちさせることなく、こちらの陣営に引き入れたいし、な……。

『はう……マスターが難しい顔をしているのです……』

「はは、悪いな……でも、これは今後のためにも大事なことなんだ」

そう言うと、俺は［シン］の頭を撫でる。

『……マスターには、この［シン］がいるのです。それに、藤姉さまやアレク姉さまも……だから』

「ああ、分かってるよ」

当然、俺もたった一人でどうこうしようなんて考えないさ。

だから。

「［シン］、頼りにしてるぞ」

『はう！　任せてくださいなのです！』

［シン］は、ドン、と胸を強く叩いた。

最眉（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

温もりと安らぎ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

温もりと安らぎ

「うおお！　ヤバイ！」

日曜日の朝、俺は大急ぎで駅へと向かっている。

というのも、今日はせっかく先輩がデートに誘ってくれたっていうのに、待ち合わせ時間の一時間前に遅れそうなのだ。

まあ、普通に歩いて行っても待ち合わせ時間四十五分前くらいには到着するんだけど、先輩ときたらキッチリ約束の一時間前には待ち合わせ場所に来るはずだし。

『はうはうはうはう！　最近のマスターは根を詰め過ぎなのです！　だから遅刻しちゃうのです！』

「うぐ！？」

［シン］の鋭い指摘に、俺は思わずうめいてしまった。

そ、そりゃあ俺も、今度の交流戦で中条シドとメイザース学園生徒会が何かしでかさないようにって、色々と対策を練っていたのは事実だけど

で、でも、［シン］だって毎朝寝坊するじゃんかよ！

『とにかく！　藤姉さまを心配させないためにも、急ぐのです！』

「お、おう！　そうだな！」

俺は全力で走り、十字路の角を右に曲がろうとして……っ！？

「おっと」
「うわっとおっ！？」

通行人にぶつかりそうになり、慌てて避けた俺は、勢い余って見事に道端にダイブしてしまった。

「イテテ……」
「大丈夫か？　……って、望月か？」

名前を呼ばれ、俺は顔を上げると。

「あ、あれ？　賀茂？」

なんと、通行人の正体は明日の交流戦の代表の一人である、“賀茂カズマ”と、その精霊（ガイスト）である［瀬織津姫（せおりつひめ）］だった。

「そんなに慌ててどうしたんだ？」
「あ、そ、そうだ！」

俺は急いで身体を起こして立ち上がると。

「ス、スマン！　人を待たせてるんだ！　じゃあな！」
「あ、ああ……」

呆けた表情の賀茂を置き去りにし、俺はまた駆けだした……って。

「ア、アレ？　なんでアイツ、精霊（ガイスト）なんか召喚しっぱなしにしてるんだ？」
『はう！　そういえばそうなのです！』

などと［シン］は相槌を打っているが、そもそもお前だって、俺が召喚もしてないのにほぼ出ずっぱりじゃねーか。

「ウーン……ま、いいか」

俺はそんな賀茂が気になったものの、今はそれどころじゃない。首を傾げつつ、俺は駅前へと急ぐ。

そして。

「せ、先輩！　お待たせしました！」

俺は息を切らしながら、先輩に挨拶をした。

と、とりあえず五分遅れまでリカバリーできたぞ……！

「ふふ……待たせるも何も、まだ待ち合わせ時間の五十五分前だぞ？　そんなに慌て……望月くん、それはどうしたんだ？」

「へ……？」

先輩に指摘され、俺は思わずキョトン、としてしまう。

すると。

「あ……」

「全く……こんな、顔にすり傷なんて作って……」

先輩はカバンからハンカチを取り出し、俺の頬を優しく拭(ぬぐ)ってくれた。

『はう！　マスターは大慌てで走ってきたせいで、来る途中に転ん

だのです！』

「［シン］！？」

［シン］に暴露され、俺は思わず赤面してしまう。

いや、俺が遅刻しそうになってたの丸分かりじゃん！？

「ふふ……本当に、しょうがないな」

「す、すいません……」

苦笑しながらハンカチで擦り傷の汚れを拭きとってくれている先輩に、俺は恐縮しっぱなしだった。

それにしても……うん、今日の先輩のコーデも、最高かよ。

白の長袖ブラウスに、黒のストラップワンピース。足元はバックルのついた茶色のエンジニアブーツという、まさに俺好みといっても過言じゃない。というか先輩ならどんな服を着ても似合うんだけど。

「うむ、これで綺麗になった」

そう言うと、先輩はニコリ、と微笑んだ。

くそう、やっぱり先輩は可愛すぎる！

「ふふ、では行こうか」

先輩はくるり、と踵（きびす）を返して手招きする。

俺は先輩の隣に並ぶと。

「先輩……そ、その……今日の服も、すごく似合ってますよ……」

「あう……あ、ありがとう……」

先輩は頬を赤らめながら少し俯いた。

「そ、それで、今日はどこに行くんですか？」

「ん？　ふふ……それは着いてからのお楽しみだ」

そう言うと、先輩が俺のほうを見ながら悪戯っぽくはにかんだ。

◇

「おおお……」

先輩に案内され、着いた場所は美術館だった。

「望月くん、では中に入ろう」

「あ、は、はい！」

先輩に呼ばれ、俺は慌ててその後について行く。

……自慢じゃないけど、実は俺、美術の成績が壊滅的だったりする。

ううう……的外れな感想とか言って、先輩に幻滅されてしまったらどうしよう……。

「ほら、望月くん。あれが有名な『テューダー共和国の大麦畑』という作品だ」

「へ、へえー……」

先輩に勧められて見てみると、かなり大きなキャンパス一面に、青空と黄金色の麦畑が広がる絵だった。

何だろう……絵心は全くなくて、どこがすごいとかっていうのは分からないんだけど……それでも、この胸がすくというか、心地よいというか、何とも不思議な気分だった。

「ふふ……これを、君に見せたかったんだ」

「へ？　この絵を、ですか……？」

「ああ」

ウーン……やっぱり、ド素人の俺でも何かしら感じるほどの絵だから、かなり有名なんだろうなあ……。

だけど。

「はは……いつかこの絵にあるような場所に、行ってみたいですね……」

「そうだな……」

それからも、先輩に色々と絵について教えてもらいながら見て回っていると、あっという間に美術館の出口についてしまった。

「いやあ！　俺、あんまり絵のことって知らなかったんですけど、先輩が説明してくれるからすごく楽しかったです！」

「ふふ、それはよかった。そうだ、歩いて少し疲れただろうから、併設されている公園のベンチでのんびりしよう」

「はい！」

俺と先輩は、美術館の隣にある公園へ向かい、いちょうの木の下にあるベンチに腰掛けた。

すると。

「も、望月くん……そ、その、少し横になるといいぞ……？」
「へ……？」

先輩の言っている意味が分からず、俺は思わず呆けた声を漏らしてしまった。

「こ、こういうことだ！」
「うああ！？」

先輩にぐい、と引き倒され、なんと、まさに膝枕の体勢になってしまった。
ええええええ！？　こ、これ、なんのご褒美ですか！？

「せ、先輩！？」
「そ、その……君がいつもすごく頑張っていることは知っている。そ、それも、この、私のために……」
「あ、え、ええと……」
「だけど……ここ最近の君は、交流戦のこともあるせいか、心が少し張りつめすぎているんじゃないか……？」

そう言うと、先輩は心配そうな表情で俺の顔を覗き込む。
ひょっとして先輩、俺の様子に気付いて、それで今日はデートに誘ってくれたのか……しかも、俺が少しでも休めるようにって、美術館と公園をチョイスして……。

はは……なんで先輩は、そんなに俺のことを見てくれるんですか……。
なんで先輩は、そんなに最高なんですか……！

「だから……今日はゆっくり休むんだ」
「……はい」
俺は先輩の優しさが嬉しくて、思わず零れそうになる涙を必死でこらえる。
その時……先輩が俺の頭を優しく撫でてくれた。
ああ……幸せ、だなあ……。
俺は先輩の膝から伝わる温もりと、先輩のその手から伝わる優しさで、いつの間にかそのまま眠りについた。

温もりと安らぎ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

サンドラとのコンビ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

サンドラとのコンビ

「おはよ！　望月くん！」

先輩との美術館デートの、次の日。

今日はいよいよ、メイザース学園との交流戦だ。

で、立花は路地で笑顔で俺を待ち構えていた。

「おう。だけど今日はどうしたんだ？　最近は加隈から逃げるために時間ずらしてたのに」

そうなのだ。とうとう立花は加隈からの追随を逃れるために、俺と一緒に登校することすら諦めて少し早めに登校していたのだ。

「あー、うん……それが、とうとう時間とか色々と特定されちゃって……」

そう言うと、立花は乾いた笑みを浮かべた。当然、その翡翠の瞳の色もくすんでいる……。

というかここまで来たら、いよいよ加隈の奴、ストーカーで捕まったりするんじゃないか？

「立花……警察に被害届出す時は、俺も一緒について行ってやるからな」

「あはは……その時はお願いするよ……」

「「ハア……」」

そして俺達は、盛大に溜息を吐いた。

「と、ところで望月くん、準備のほうは？」

「おう！　もちろんバッチリだ！」

立花が話を逸らすかのようにそう尋ねると、俺もそれに乗ってサムズアップしながら満面の笑みで答えた。

「あはは、頼もしいね！」

「はは。といっても、肝心の団体戦は明日だけどな」

そうなのだ。メイザース学園との交流戦は今日と明日の二日間で開催され、今日は全生徒がいわゆる体育祭の競技で競うのだ。

「えへへ……だけど一日目の今日は、望月くんと一緒に戦えるから嬉しいんだ」

「お、おう……」

はにかみながら上目遣いで話す立花に、俺は貞操の危機を感じてしまう。

ただ……それは俺が立花に手を出されてしまうのか、それとも、この俺が手を出してしまうのか……。

イ、イヤイヤイヤイヤ！　お、俺には先輩という素晴らしい女性（ひと）が……！

俺は間違いそうになった思考を元に戻そうとしてかぶりを振った、その時。

「た、立花！」

「「っ！？」」

俺達の目の前に突然現れたのは、加隈だった。

「な、なんだよー！　登校時間を元に戻したんなら、早く言ってくれよー！」

「な、なんでそんなこと、加隈くんに言わないといけないのさ！」

「え、そ、それはその……と、友達、だし……」

ゴニョゴニョと恥ずかしそうにそう告げる加隈。正直言って、キモチワルイ。

「と、とにかく！　今日のボクは望月くんと一緒に登校するの！　だから邪魔しないでよ！」

「そ、そんなあ……って、そ、そうだ！　じゃあ三人で登校すればいいじゃん！」

加隈は妙案が浮かんだとばかりにポン、と手を叩く。いや、俺としては立花も加隈も邪魔でしかないんだけど。

だって。

「あ……ふふ、おはよう望月くん」

「先輩！　おはようございます！」

俺は立花と加隈を無視し、先輩の元へと駆け寄った。

「そ、その……もう疲れは癒えたかな？」

「はい！　むしろ、いつもよりも絶好調です！」

「それは良かった……」

そう言うと、先輩はにこり、と微笑む。

だけど、そりゃあそうだろ。昨日は結局、夕方になるまで先輩の膝枕で眠りこけちまったんだから。

先輩だって俺の頭を膝に置いたままで、しかも身動きもできなくてつらかったはずなのに、それでも俺が目を覚ました時も、その真紅の瞳で優しく見つめてくれていて……。

「ん？　望月くん？」

「あ、ああいえ……何でもないです」

「？」

はは……駄目だ。

どうしても、先輩に見とれてしまう。

「そ、それより早く学園に行きましょう！」

「あ、う、うむ……だ、だが、あの二人はいいのか？」

先輩は後ろを振り返り、今もわちゃわちゃしている立花と加隈を見やった。

「もちろん、置いて行きましょう」

「ま、まあいい……のか？」

いいんです。

だって俺は、先輩と二人で登校したいんだから。

◇

「フフ！　ヨーヘイ、頑張って勝ちますわヨ！」

体操着に着替え、グラウンドで張り切るサンドラ。

いや、俺的には初日は体力温存のために、傍観者でいたいんだけどなあ……。

「ところデ、ヨーヘイは何の種目に出るんですノ？」

「俺？　えーと……確か、『二人三脚』だったかなあ……」

うん……俺って足が遅いから、あんまり影響がない種目に回されたんだよなあ……チクショウ。

すると。

「アラ？　ワタクシも『二人三脚』なんですけド……」

「お、本当か？」

「エ、エエ……」

へえー、サンドラも『二人三脚』かあ……って。

「た、確か、今回の交流戦は人数も多いからって、一人一種目しか出ないんじゃなかったっけ？」

「そ、そうでしたわネ……」

そして、ここで俺達は気づく。

この『二人三脚』、必然的に俺とサンドラのバディだということに。

「ヨ、ヨーヘイ！　ワタクシとアナタのコンビを、メイザース学園ニ……いえ、全校生徒に見せつけてやるんですのヨ！」

「お、おう……」

ますます気合の入ったサンドラに、俺は少したじろぐ。

「そ、そうですワ！　ワ、ワタクシとヨーヘイの息の合った『二人三脚』を見せて、そしテ……！」

そう言うと、サンドラはフンス、と小さくガッツポーズをした。

サンドラとのコンビ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

交流戦、開幕（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

交流戦、開幕

「位置について、ヨーイ……」

――パアンッ！

メイザース学園と交流戦は無事に始まり、今は徒競走の真っ最中である。

といっても、クラスで一番速い連中は、今日最後に行われる対抗リレーに出るから、必然的に徒競走では二番手、三番手の奴が走ることになるんだけど。

「みんな！　頑張れ！」

そして、俺の隣で黄色い声援を送っている立花は、どういうことかその対抗リレーの選手に選ばれていたりする。というか、立花って足が速かったのな。

「むむ……これは、シレッと主人公パラメータを強化してやがったな……？」

「？　望月くん？」

俺の呟きが聞こえたのか、立花が不思議そうに俺を見る。

「あ、ああいや、何でもない。それよりも、次は加隈の奴が出るみたいだぞ？」

「あ、ホントだ」

俺はスタートラインでたった一人だけ調子に乗ってクラウチングスタートの体勢を取る加隈を指差すと、立花はチラリ、と見やった後、興味なさそうに俺のほうへと向き直った。
いや、もうちょっと加隈を応援してやろうよ。

「そ、それよりもさ……」

すると、急に立花がモジモジしだした。しかも、頬を赤らめながら。

「え、ええと……？」

嫌な予感しかしないけど、とりあえず俺は続きを促してみる。

「そ、その……ね？　ホラ、この前、“葦原中国（あしのはらなかつくに）”領域（エリア）で、プラーミャさんに指輪、渡したでしょ？」
「ん？　おお、アレな。それがどうかしたか？」
「う、うん……で、できれば、次はボクが欲しいなあ……なんて……」

上目遣いで恥ずかしそうにそんなおねだりをする立花。それを一身に受けているこの俺のメンタルは崩壊寸前だ。いや、色んな意味で。

「ま、まあ……また別の領域（エリア）を見つけた時は……」
「！　ホント！　約束だよ！」
「お、おう……」

立花は、ぱあ、と満面の笑みを浮かべ、俺の手を取って翡翠（ひすい）の瞳を潤ませる。

ハア……コイツが女の子だったら、俺は間違いなく嬉しいんだろうけど……うん、残念ながら俺には響かないんだよ、立花。

「はは！　やったぜーッッッ！」

両腕を突き上げ、歓喜の雄叫びを上げる加隈。

でも、加隈が一番見ていて欲しいであろう立花は、一切グラウンドに目を向けずに、ただただ俺を見つめ続けていた。

……勘弁して欲しい。

◇

『まもなく、『二人三脚』の競技を始めますので、出場選手は入場門の前に集合してください』

グラウンド内に、氷室先輩の声でアナウンスが流れる。

なお、本部でのアナウンスは氷室先輩が行うことになっているのだ。

もちろん俺達だって、時間になれば救護班だったり誘導係だったり、色々と役割は与えられているけど。

おっと、今はそんなことよりも。

「望月くん、頑張って！」

「はは、おう！」

立花の声援を受けながら、俺は集合場所である入場門のアーチへと向かった。

「フフ！　ヨーヘイ、待ってましたワ！」

救護班として本部席にいたサンドラは既に入場門に来ており、俺の姿を見つけるなり駆け寄ってきた。

「おう！　サンドラ、絶対勝とうぜ！」

「もちろんですワ！　そしテ……ここにいる全員に、ヨーヘイのパートナーはこのワタクシだと、ハッキリと思い知らせてやるのですワ！」

ガッツポーズをしながら宣言するサンドラを見ながら、俺は苦笑する。

い、いや、そう言ってくれるのは嬉しくはあるんだけど、その……は、恥ずかしい……。

「では、選手の皆さんはお互いの足を紐でしっかりと結んでください」

え？　入場する前から結んじまうの？

「こ、これ……入場するだけで至難の業なんじゃないのか？」

「そ、そうですわネ……」

とりあえずサンドラと足を紐で結んだものの、この状態でスタートラインに向かうのかあ……走る前に疲れそう。

俺は首を傾げながらも、誘導係の指示通りに列に並ぶ。

そして。

『選手、入場』

氷室先輩のアナウンスと共に、俺達はスタートラインのあるところへと歩いて……うん、なかなか進まないなあ……。

「ヨ、ヨーヘイ……これもリハーサルみたいなものですわヨ」

「お、おう、今のうちに息を合わせとこうぜ」

俺とサンドラは、これを練習の機会ととらえて、声を合わせて進んでいく。

「「イチ、ニ、イチ、ニ……」」

そして、ようやくスタート地点にたどり着くと。

「はは、どうやら俺達が一着みたいだな」

「フフ……エエ」

他のみんなは、いまだに手こずっていて、既にスタート地点に着いている俺達とはかなり離れていた。

「まあ、これだけでも俺達がいいコンビだって分かるんじゃないか？」

「ですわネ！」

おどけながらそう言うと、嬉しそうに微笑むサンドラが力強く頷いた……って!?

俺は背筋に悪寒が走り、おそるおそる振り返ってみると……あ、先輩がメッチャ睨んでる……。

オマケに氷室先輩も、その視線が凍えそうになるくらい冷たいんですけど。

「フフ……」

そしてそれを、まるで煽(あお)るかのように微笑みを湛(たた)えながら見つめるサンドラ。

そんな三人に怯えながら、俺はただスタートを待つ。

は、早く『二人三脚』を終わらせたい……。

交流戦、開幕（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

悪戯な微笑み（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

悪戯な微笑み

ようやく他の選手達もスタート地点にたどり着き、いよいよ『二人三脚』が始まる。
俺達一年生は一番最初に走ることになるので、早速スタートラインでスタンバっているんだけど……。

「フフ……！」

相変わらずサンドラは、観客席にいる先輩と本部席にいる氷室先輩に向けて不敵な笑みを浮かべていた。
しかも、あの九つの柱や領域（エリア）ボスと対峙している時よりも、圧倒的なプレッシャーを放ちながら。

こ、怖え……！？

「各選手、位置について」
「ホ、ホラ！　始まるぞ！」
「フフ……ちゃんと分かってますわヨ」

俺はおそるおそる声を掛けると、サンドラはやっとトラックへと視線を戻す。
お、おっと、俺も集中しよう。

「よーい……」

――パアンッ！

「行きますわヨ！　ヨーヘイ！」
「おう！」

ピストルによる合図が鳴り、俺達は一斉にスタートした。

「「イチ、ニ、イチ、ニ！」」

順調な滑り出しを見せた俺達は、他の選手達を全員置き去りにしていく。

「はは！　というかコレ、圧勝じゃないか？」
「エエ！　当然ですワ！　だって、ワタクシとヨーヘイのコンビなんですのヨ！　ただの即席ペアなんかとは、訳が違いますノ！」
「はは！　言えてる！」

まあ、俺達もこの学園で知り合ってからこれまで、先輩の次に一緒に過ごした時間が長いんだからな。しかも、領域（エリア）ではお互いに背中を預け合う仲間なんだ。負ける要素なんて、何一つねーよ！

「「イチ、ニ、イチ、ニ！」」

後続をさらに引き離し、俺達はトラックのカーブを回る。

「サンドラ！　大変だろうけど頑張れ！」
「エエ！　分かってますわヨ！」

外側を走るサンドラは、俺との身長差もあってさらに大きく歩幅を取らないといけないからな。俺が小幅にしても、それでもサンドラへの負担はかなりある。

「「イチ、ニ、イチ、ニ！」」

それでも、サンドラは一生懸命に歩幅を広げ、さらに後ろを突き離そうとペースを上げた。

「お、おいサンドラ、後ろとは大分離れてるんだ。もう少しペースを落としても……」

「何をおっしゃいますノ！　勝つなら全力で勝つんですのヨ！　それこそ、あの二人……ッ！？」

「うお！？」

その時、急ぐあまりつまづいてしまったサンドラが倒れ、当然俺も同じように倒れ……っ！？

「あ、危ねえつ！？」

危うくサンドラの上にのしかかりそうになった俺は、咄嗟に身体を捻り、不自然な体勢で地面に倒れ込んだ。

「痛てて……お、おいサンドラ、大丈夫か？」

「エ、エエ……！　そ、それよりヨーヘイ、早く起き上がって……ッ！？」

「っ！　サンドラ！？」

身体を起こそうとしたサンドラが、顔を歪めた。

「ア……す、少し足をくじいたみたイ……」

「オ、オイオイ、大丈夫か！？」

「ヘ、平気ですワ！　それよりも、早く……痛ッ！？」

どうやら、相当足が痛むみたいだな……。
ここは、無理しないで棄権するか……？

「な、何をしてるんですノ！　ヨーヘイ！」
「い、いや、だけど……」
「ワタクシの足なら大丈夫ですワ！　だ、だカラ、追いつかれる前に先にゴールを目指しますわヨ！」
「お、おう……」

鬼気迫るサンドラに、俺は思わず頷いてしまった。
と、とにかく、様子をみるか……。

俺達は再び歩きはじめるけど……やっぱり怪我の影響からか、サンドラのペースはかなり落ちた。
そして、トラックのカーブを回り終えた頃には、後続に追いつかれ、そして。

「ッ！　も、もっとペースを上ゲ……ッ！」
「サンドラ！」

足の痛みからか、額に脂汗を流し始めたサンドラ。
でも、必死で歯を食いしばってそれに耐え、なおも衰えない闘志をむき出しにして前を見据える。

「ワタクシは……ワタクシは勝ちたいノ！　ヨーヘイと一緒ニ！」

ハア……サンドラのバカヤロウ……。

「……チョットだけズルするぞ。あと、変なところ触っちまったらゴメンな」

「へ……？　ヨーヘイ、何を言っテ……って、フエエエエエ！？」

俺はサンドラの腰に手を回して抱えるような体勢を取り、彼女が痛めた足への負担を最小限にする。

「しっかり、つかまってろよ！」

「フエエエエエエエ！？」

俺は一歩一歩を大きく取り、サンドラを抱き寄せる。というか、サンドラの足は地面につくかつかないかってところで、身体を俺のほうに傾けることで、足への負担を減らす。

この方法なら、サンドラも完全に歩いてないわけじゃなくて、ちゃんと足を地面につけてはいるから、反則にもあたらない。

「っ！　よし、追いついた！」

ただでさえ俺とサンドラのチームワークはバッチリなんだ。そもそも負ける要素がないんだよ！

「ア……ヨーヘイ……」

「今は黙ってろ！　舌噛むぞ！」

「ウ、ウン……」

俺は必死で足を動かし続け、とうとう他の選手をブチ抜いた。

そして。

俺達は、一番にゴールテープを切った。

「では、一着はこちらに並んで……って、えええええ！？」

誘導係の声を無視し、俺はそのまま走り続ける。

「チョ、チョット！？　ヨーヘイ！？」

サンドラの声を無視し、俺は本部席隣の救護班のテントに駆け込んだ。

「すいません！　サンドラが足をくじいてしまって！　診てもらえますか！」

「ええ！？　あ、ハイ」

サンドラをパイプ椅子に座らせてから結んでいた紐をほどき、キョトンとする保健の先生に説明する。

で、早速怪我をした足を診てもらうと。

「うん……ただの捻挫ではあるけど、結構腫れてるから痛かったんじゃない？」

保健の先生は、少し心配した表情でサンドラを見つめながら尋ねる。

「フフ……勝ちましたし、痛みも吹き飛びましたワ」

「もう、無茶をして……君も、彼女が痛そうにしてたら、棄権するように説得するべきよ？　そうじゃないと、ヘタに悪化しかねないんだから……」

保健の先生の矛先が、俺へと向かってきた。

まあ……先生の言うように棄権しようかってのも、頭をよぎりは

したんだけど。

だけど。

「はは……そんなことしたら、それこそサンドラに恨まれそうです。だったら、サンドラがこれ以上痛い思いをしないように、何とかするしかなかったんですよ」

俺は、苦笑しながら保健の先生に答える。

「フフ、やっぱりヨーヘイ、ですわネ」

「？　何がだよ？」

「決まっていますワ。ワタクシのことを一番理解してくれて、そして、精一杯支えてくれる男の子が、ですわヨ？」

そう言うと、サンドラは頬を真っ赤に染めながら、悪戯っぽく笑った。

悪戯な微笑み（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

悠木を囲んでランチ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

悠木を囲んでランチ

交流戦も午前の部が終了し、各自昼食に入る。
で、メイザース学園はうちの学園で用意した食堂で昼ご飯を食べることになるんだけど。

「……ふふ、こんにちは」
「おお！　悠木！」

そんな貴重な時間をぬって、悠木がわざわざ声を掛けてきてくれたのだ。

「はは！　元気そうだな！　……って、この前も電話で話したところなんだけど」
「……ふふ、本当ね」

クスクスと笑う悠木に、俺も思わずほっこりとしてしまう。
本音を言えば、施設を出てメイザース学園に転校して、悠木が苦労してないはずがないんだ。
でも、それでも俺に会いに来てくれて、少しでも俺を安心させようとしてくれてる悠木の気遣いが嬉しかった。

「あ、そうだ！　何なら俺達と一緒に昼メシ……ってえ！？」

昼メシに誘おうとした瞬間、突然背中に痛みが走ったので振り返ると……あ、サンドラがメッチャ怒ってる。
まあ、“グラハム塔”領域（エリア）での一件もあるしサンドラが悠木のことを良く思ってないのは当然かあ……。

その時。

「望月くん、一緒にお昼を……む、悠木くん」

「……（ペコリ）」

昼メシを誘いに来てくれた先輩が悠木に気づくと、悠木は気まずそうな表情で、無言でお辞儀をした。

「ふふ……望月くんから話は聞いていたものの、元気そうで何よりだ」

「！　……あ、ありがとうございます！」

ニコリ、と微笑みながら先輩がそう告げると、悠木はその一言で緊張がほぐれたのか、笑顔になった。

はは……先輩のこういう優しいところ、ずるいくらい最高だよなあ……。

「うむ。そうだ、せっかくだから君も一緒にランチをしないか？　といっても、メイザース学園の他の生徒達と同様、食堂になってしまうが」

「……は、はい！　ぜひ！」

先輩にも誘われたことで、サンドラは気に入らないものの何も言えなくなってしまったみたいだ。

「サンドラ……お前の気持ちも分かるけど、アレは悠木が意図してやったことじゃないんだ……だから、許してやってくれとは言わないけど、せめて飲み込んでくれないか……？」

そう……あの件は、ナニカによる意思が働いただけであって、決して悠木が自分の意志でやったわけじゃない。

でも、サンドラからしたらそんなことは関係ないわけで、だったら、なんとか飲み込んでもらうしかないんだ。

……まあ、それも言ってしまえば俺の我儘（わがまま）でしかないし、それをサンドラに押しつける俺は、ちょっと卑怯、だな……。

「……モウ。ヨーヘイがそんな顔をするのは、反則ですわヨ？」

そう言うと、サンドラは苦笑した。

「はは……悪い。今度また、ルフランでスイーツ奢る」

「フフ……ヨーヘイったら、ワタクシに貸しを作ってばかりですわネ」

「「コホン」」

「「あ……」」

先輩と悠木に、揃って咳払いされてしまった……。

◇

「はは！　悠木、久しぶりじゃねーか！」

「……加隈、相変わらずうるさい」

「ヒデエ！？　会った瞬間その台詞（セリフ）かよ！？」

食堂で合流した加隈が悠木に冷たくあしらわれ、ガックリとうなだれる。

でも、そんなやり取りも懐かしいみたいで、加隈を眺めながら口元を緩めている悠木がいた。

「とりあえず加隈の奴は放っておいて、メイザース学園での悠木のこと、色々と教えてくれよ！」
「……もう、いつもメッセージで近況報告してるでしょ？」
「いや、まあそうだけどさ。やっぱり、悠木の口から直接聞きたいじゃん？」

肩を竦めながらクスクスと笑う悠木に、俺はさらにねだる。
すると悠木は観念したのか、色々とメイザース学園で過ごす日々を語ってくれた。

メイザース学園のこと、新しく友達ができたこと、日々領域（エリア）攻略に励んでいること。

「……だけど、早い段階でクラスチェンジをしちゃったから、思うようにレベルが上がらなくて大変だったわ……」
「あー……だよなー……」

悠木の奴は、レベル四十を超えてすぐにクラスチェンジをしたから、それこそレベル上げは大変だよなあ……。
といっても、［クヴァシル］は基本スペックが高い精霊（ガイスト）だから、それでも他の一般的な精霊（ガイスト）と比べても頭一つ抜けてるんだけど。

この辺り、メインヒロインの優遇っぷりが半端ない。

「「「……」」」

で、先輩とサンドラ、オマケに氷室先輩まで、なんでそんなに俺をジト目で睨むんですかね？

「それでよー……木崎さんとは、向こうでも仲良かったりするのか

……？」

加隈の奴が、心配そうな表情でおずおずと尋ねる。

だた、この場合は悠木を、というよりも、元仲間であるクソ女を心配してるって感じだなあ。

「……ううん、あれからほとんど会話してないわ。今回クラス代表に選ばれた時に、二言、三言交わしたくらいよ……」

「そっかー……一応、俺達だってチーム組んだのに、寂しいなあ……」

珍しく、加隈の奴がしんみりとする。まあ、コイツだって一緒に領域（エリア）攻略した仲間同士だったんだ。感傷にふけることもある……のか？

「そういや、木崎の名前で思い出したけど、アイツはどうしたんだ？　一度も姿を見かけてないんだけど？」

「……彼女をはじめ、生徒会の面々は明日から参加らしいわ」

「へ？　明日から？」

悠木の意外な答えに、俺は思わず聞き返した。

イヤイヤ、だって交流戦はお互いの学園の親睦を深めるって目的だろ？　表向きは。

だったら、せめて仮面を被ってでも、生徒会として社交辞令的なことくらいしろよ。

「……でも、学園代表が決まってから、生徒会は授業にも出なくなって、ひたすら領域（エリア）にこもってトレーニングに励んでいたわ……それくらい、明日の団体戦にかけてる……」

「そっか……」

でも、生徒会がそこまでして明日の団体戦にこだわるのは、学園長である先輩のお父さんや“ＧＳＭＯ（グスモ）”の監視をかいくぐって、なんとしても九つの柱と種に関する情報を入手したいがため。

たとえそれが、土御門さんを犠牲にして闇堕ちさせることになったとしても。

「……ははっ」

「？　……望月くん？」

先輩に声を掛けられ、俺が無意識のうちに薄ら笑いを浮かべていることに気づく。

だけど、それも仕方ないってモンだ。

だって。

――この俺が、連中の企みを全部ブチ壊すんだから。

悠木を囲んでランチ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ワルイ男、望月ヨーヘイ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

ワルイ男、望月ヨーヘイ

「おお……！」

いよいよ交流戦一日目の最後の種目である対抗リレーとなり、各クラスで一番足の速い代表が姿を現わすと、俺は思わず声を漏らした。

だって、その中には、うちのクラス代表である立花とプラーミャのほか、なんと先輩と氷室先輩も代表に選ばれていたのだ。

というか、そうならそうと教えてくれてもよかったのに。

あ、今、先輩と氷室先輩がコッチ向いて手を振ってくれた。

すると今度は、メイザース学園側の代表選手が現れた。

その中には、悠木の姿も。というか、『ガイスト×レブナント』のメインキャラ、全員足速くない？

ま、まあ、ゲーム的には、メインキャラの出番がないことには盛り上がらないんだけど。

そして。

「位置について……よーい」

――パアンッ！

スタートを告げるピストル音が鳴り響き、まずは女子の部の第一

走者が一気にスタートする。
なお、対抗リレーは男女に分かれて各学年三人、合計九人の選手でリレーを行い、一年生から順に二年、三年へとバトンを繋げていくことになっている。

「行け――！　プラーミャーッ！」

第三走者のプラーミャが、悠木と並走しながら駆ける。
ヤベ、二人共超速い。というかコレ、俺なんかより圧倒的に速いだろ……。

そしてバトンが繋がり、次はいよいよ先輩の出番。ここは何としても、その姿を収めないと！

ということで、俺はポケットからスマホを取り出し、先輩にカメラを合わせた。

「っ！　行くぞ！」

先輩はバトンを受け取ると……は、速っ！？
みるみるメイザース学園の走者を引き離し、かなりの距離が開いた。

先輩って、水泳は苦手なのに陸（おか）に上がると完璧美少女なんだよなー……水泳は苦手なのに。

「氷室くん！　頼む！」
「はい」

氷室先輩が桐崎先輩からバトンを受け取り、さらにメイザース学

園との差を広げる。氷室先輩もメッチャ速い！

そのままアレイスター学園はリードを保ち、終わってみれば圧勝だった。

「ヤ、ヤバイな……」

「エ、エエ……」

俺とサンドラは、お互い目を丸くしながら頷き合った。

◇

「……ふふ、お疲れ様」

交流戦一日目の全行程が終了し、みんながグラウンドから引き上げていく中。悠木がわざわざ挨拶に来てくれた。

「おう！　お疲れ！　そういや悠木は、今日はドッチに泊まるんだ？」

メイザース学園は駅前のホテルで宿泊することは決まってるんだけど、元々はうちの学園の生徒だった悠木。実家は学園の近くにあるわけだからなあ。

「……もちろん、久しぶりに実家に帰ろうと思ってるの」

「はは、だよな」

そう言うと、俺と悠木は顔を見合わせながら笑った。

「……それと」

「ん？」
「……明日の団体戦が終わっても、その次の日は学園から休息日ってことでお休みになっていて、その……」
急に頬を赤らめながらモジモジしだした悠木。というか、こんな仕草をするなんて珍しい……でも、明後日もコッチにいるのかあ……。
「だったらさ、せっかくだしルフランに行ってみないか？　ホラ、悠木ってガトーフレーズ好きだろ？」
「っ！　……う、うん！」
俺の提案に、悠木は、ぱあ、と笑顔を見せた。
はは、こんな表情を見せられると、やっぱり悠木ってメインヒロインなんだなあ……。
「……ふふ！　じゃあ、私はこれで」
「おう！　また明日な！」
「……ええ！」
悠木は何度もこちらへと振り返っては手を振り、いよいよその姿が見えなくなる、その時。
「……望月くん！」
「おう！」
「……明日、覚悟しなさいよね！」
「はは！　そっちこそ！」
そして、今度こそ悠木の姿は見えなくなった。

「……ほう？　明後日、ルフランにな……」
「……フウン、それって二人きりで行くのかしラ」
「……もちろん、みんなで行くんですよね？」
「っ！？」

背後に殺気を感じ、慌てて振り返ると……そこには険しい表情の先輩、サンドラ、氷室先輩がいた。

「ふふ……明後日、みんな一緒にルフランで祝勝会をするのもいいな」
「エエ……モチロン、ヨーヘイもそう思うでショ？」
「そうですね……ここは望月さんの奢り、というのがいいのでは？」
「あ、あははー……」

三人のプレッシャーを受け、俺は乾いた笑みを浮かべるのが精一杯だった……。

◇

『はう！　マスターが所かまわず女の子に優しくするからいけないのです！』
「ええー……」

家に帰るなり、俺は部屋で正座をしながら［シン］に説教をくらっている。
いや、俺としては、単に旧交を温める的な感じで悠木を誘っただけなのに……。

『はうはう！　一体マスターにとって、誰が一番なのですか！』
「そんなの、先輩に決まってるだろ」

［シン］の問い掛けに、俺は即答する。
当然だ。俺にとって一番大切な女性は、救われたあの日からずっと……いや、これから先の未来永劫、先輩だけなんだから。

『はうう……な、なら、［シン］はどうなのです……？』
「［シン］？　そんなの、世界一大切な相棒だろ」

不安な表情でおずおずと尋ねる［シン］に、これまた即答して返す。
全く、そんな当たり前のこと聞いてどうすんだよ……って。

「［シン］？」
『はうはう……や、やっぱりマスターはワルイ男なのです……ズルイのです……』

そう言うと、［シン］は真っ赤な顔を両手で隠してしまった。

『な、なら！　アレク姉さまやカズ姉さまはどうなのです！』
「サンドラ？　サンドラはもちろん、先輩にだって負けないくらい、大切な仲間だよ。もちろん、それは氷室先輩も同じだ」
『はうううう……こ、これは、ますますこじれる未来しか見えないのです……』
「なんだよソレ……」

ガックリと肩を落とす［シン］を見やりながら、俺は肩を竦めた。

「まあ、とりあえずこの話は置いといて……［シン］」
『ハイなのです』
「明日の団体戦では、一波乱……いや、二つも三つも問題が起きる

……ことになる」

俺の雰囲気が変わったことを察した［シン］は、さっきまでとは打って変わり、真剣な表情で俺の言葉に耳を傾ける。

「［シン］、お前にはたくさん大変な思いをしてもらうことになるかもしれない……それでも、俺はこの『攻略サイト』を駆使して、それらを全部阻止したい。だから」

ここで一拍置き、俺はすう、と息を吸う。

そして。

「だから［シン］、俺と一緒に戦ってくれ。理不尽な未来を覆すために」

『当然なのです！　［シン］は……［シン］は、いつだってマスターと共にあるのです！　想いも！　未来も！』

［シン］はオニキスの瞳に覚悟と決意を湛え、凛々しい表情を浮かべて強く頷いた。

ワルイ男、望月ヨーヘイ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

阻止のための布石（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

阻止のための布石

「よっし！」

いよいよメイザース学園との団体戦を迎えた朝、俺は窓から外を眺めながら、気合いを入れるためにパシン、と両頬を叩いていると。

『はう！　なのです！』

珍しく早起きの［シン］が、俺の隣に並んで同じように両頬を叩いた。

はは、［シン］も気合い充分ってことか。

『それで……昨日、マスターから教えてもらったことは理解したのですが、肝心の［シン］達はどうすればいいのです？』

「ああ、それはだな……」

俺はコテン、と首を傾けた［シン］に耳打ちをする。

『！　はう！　了解なのです！』

「おう！　頼りにしてるぞ、［シン］！」

『任せるのです！』

［シン］は胸を張ってドン、と叩いた。

はは、見た目は小学生みたいなのに、本当に頼もしい。

「さて……んじゃ、支度して行くかー」

『ハイなのです！』

俺と［シン］は、朝食と準備を済ませると。

「行ってきます」

『はう！　行ってきますなのです！』

「あらあら、二人共今日は何だかキリッとしてるわね」

玄関まで見送りに来てくれた母さんが、俺達を見てそんなことを言った。

まあ……確かに母さんの言う通り、今日はいつも以上に気合いが入っている。

だって……今日を乗り切れば、少なくとも陰謀の一つは叩き潰せるからな。

「うふふ、息子の成長が見れた気がして、嬉しいわね」

「な！？　か、母さん、茶化すなよ……」

恥ずかしさのあまり、にこやかに微笑みながらそんなことを言う母さんに思わず抗議する。

『はう！　マスターが照れてるのです！』

「ウ、ウルセー！　と、とにかく！　行ってきます！」

「いってらっしゃい」

母さんに見送られ、俺達は先輩の待つ十字路に……って。

「えへへ！　おはよ、望月くん！」

「おう！　おはよう！」

その前に、待ち構えていた立花に取っつかまり、並んで歩く。

「それで……昨日のメッセージのことだけど……」

「ああ……立花にはちょっと面倒を押しつけることになって、悪いな」

「ううん、それは全然大丈夫だけど……望月くん、また無茶なことでもしそうな気がするから……」

おおう……立花め、結構鋭いな……。

「はは……でも、俺だって自分が可愛いから、ちゃんとわきまえてるよ」

「あはは、だったらいいんだけどね」

スマン、立花……ちょっとだけ無茶するかもしれない。

「オッス！　立花！　ヨーヘイ！」

「げ」

そして、こちらも待ち構えていたかのように現れた加隈。だけど立花、さすがにその返しはないんじゃないか？

「はは！　今日は俺のスゲーところ、バッチリ見せてやるぜ！」

「あー……うん、そうだねー……」

その翡翠（ひすい）の瞳に光もなく、無表情でそう答える立花。ま、まあ……チョットは見てやれよ……。

そして、加隈に散々ウザ絡みされながら、いつもの十字路に差し掛かると。

「ふふ……望月くん、みんな、おはよう」
「先輩！　おはようございます！」
「あ！　望月くん待ってよー！」

俺は立花と加隈を置き去りにして、先輩の元に全力で駆け寄った。

「コラコラ、そんなに慌てて走ったら、つまづいて転んでしまうぞ？」
「はは、大丈夫ですよ！」
「ふふ、仕方ないな」

そう言って苦笑する先輩。
だけど、その口元はやっぱり緩んでいて……とにかく、こんな先輩を拝めた俺の一日が、最高のものになることが確定した。

「今日の団体戦、望月くんの活躍を期待しているぞ」
「はは、当然ですよ！　何といっても、先輩が応援してくれるんですから！」
「あう！？　まま、まあ……それは当然だが……」

そう言うと、先輩が頬を赤らめてちょっと視線を落とした。こういう照れたところも、可愛くて仕方がない。

「と、とりあえず私も勝つから、その……は、離れていても、応援、してくれると……」

はは……！　先輩は、本当に何を言ってるんだか！

「そんなの当たり前じゃないですか！　俺はいつだって、どこでだ

って先輩を応援してますよ！」
「あう……う、うん……知っているが、それでも……ふふ、やっぱり言葉にしてもらうと嬉しいな……」
ああもう！　そんな表情反則だろ！　なんで先輩は、こんなに可愛すぎるんだよ！
そして、俺と先輩は立花達をそっちのけで、ある意味二人だけの世界に浸りながら、学園へと向かった。

◇

「ヨーヘイ！　おはようございますワ！」
「おう！　おはよう！」
教室に入るなり、サンドラが笑顔で駆け寄ってきた。
「フフ……今日は任せてくださいまシ！」
「ああ……本当に、頼りにしてる」
微笑むサンドラに、俺は頭を下げた。
立花もそうだけど、サンドラは俺のメッセージに対して、無条件に引き受けてくれたんだ。
本当に、俺は仲間に恵まれた。
「全ク……サンドラと私に感謝しなさいヨ？」
「はは、もちろんだとも。今日の団体戦が終わったら、みんなに俺からルフランのスイーツを奢らせてもらうから」
「ヘエ……だったラ、私は三つにしようかしラ」
「おう！　任せろ！」

こんなに手伝ってもらうのに、スイーツ三つくらいなら安いもんだ。

「……ネエ、ヨーヘイ。念のための確認ですけド、昨日約束したのとはモチロン別、ですわよネ……？」

サンドラが、不安そうに上目遣いでおずおずと尋ねる。

「当然！　ソッチはちゃんと、サンドラだけだって！」

「ア……フフ、だったらいいですワ……」

そう言って、サンドラが嬉しそうにはにかんだ。

その時。

――キーンコーン。

朝の始業のチャイムが校舎内に鳴り響く。

「さあ……行こうか」

「エエ！」

俺達は教室を出て、団体戦の舞台となるグラウンドへと向かった。

阻止のための布石（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

団体戦、開始（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

団体戦、開始

「……では、両学園の代表のみなさんの健闘を称え、開会の挨拶とします」

グラウンドの中央に設置された、今日の団体戦の舞台の中央で、うちの学園長とメイザース学園の学園長、“麻岡（あさおか）マキ”が開会の挨拶をした。

でも、うちの学園長……先輩のお父さんはイケオジだけど、メイザース学園の学園長は、ある意味詐欺だと思う。

だって、『攻略サイト』のプロフィールでは、あの学園長、三十六歳ってなってるのに、どう考えても大学生のお姉さんくらいにしか見えない。

まあ、ゲームのビジュアルを考慮した仕様ってことなのかもしれないけど、俺にとっての現実（リアル）であるこの世界では、違和感しかないんだけど。

「むむ！　望月くん、何を見とれているのだ！」

「せ、先輩！？　そ、そんなことないですから！」

先輩にジト目で睨まれ、俺は猛抗議する。

全く、人聞きが悪いですよ……。

『では、ただ今から交流戦二日目、両学園の代表による団体戦を行います。なお、団体戦は一対一の試合を合計九試合行い、最も勝利数の多い学園の勝ちとなります。また……』

今日の団体戦のルールについて、審判を務める教頭先生から説明された。

なお、俺達代表は、既に舞台袖の待機場所で腰かけており、それ以外の生徒達は、舞台を囲むように用意された観客席で、団体戦の開始を今か今かと待ちわびている。

「それにしても……賀茂、無理言って悪かったな」

「ああ、それは別に構わないが……」

俺は隣に座る賀茂に一言謝ると、賀茂はほんの少し怪訝な表情を浮かべた。

まあ、本来なら一―一から順番に出場することになっていたんだが、さっき賀茂に頼み込んで順番を替わってもらったのだ。

「はは……ホラ、やっぱり俺の［シン］はスピードが売りだろ？だったら、切り込み隊長的なポジは、俺達にうってつけだと思ってな」

「ウーン……そういうものか？」

「そういうモンだよ」

首を傾げる賀茂を押し切るかのように俺はそう言うと。

「よっし！」

気合いを入れるために両頬をパシン、と叩き、俺は席を立ちあがった。

「ヨーヘイ！　ガツン、とかましてやれ！」

「望月さん、期待してます」

「アハハ！　モッチー、オーエンしてるし！」
「フン……無様に負けたりしたら駄目よ？」

同じ代表のみんなが、次々と激励の言葉をかけてくれる。
はは……これがあのクソザコモブの今の姿だなんて、入学したての頃の俺が見たら、なんて言うかなあ……。

そして。

「……（コクリ）」

先輩は、その真紅の瞳で俺をジッと見つめながら、力強く頷いた。
それこそ、俺の勝利を微塵も疑っていないと言わんばかりに。

先輩……見ていてください。

俺がゆっくりと舞台に上がると、アレイスター学園側の観客席から、一斉に声援が上がった。
その中には、サンドラや立花、プラーミャの姿も。

「さあて……［シン］、始めるとするか」
『ハイなのです！　［シン］の力、ここにいるみんなに見せつけてやるのです！』
「はは！　だな！」

そして、俺はメイザース学園側へと視線を向ける。

「ホホ、これはこれは、願ってもない対戦相手じゃのう？」

扇で口元を隠しながら、優雅に舞台に上がってきたのは、“土御

門シキ〟。
悠木やクソ女がいなければ、間違いなくメイザース学園最強の一角の精霊使いだろう。

「しかし、あれほど対戦を熱望しておったのに、木崎もついておらぬのう？」

そう言って嬉しそうに土御門さんはカラカラと笑うと、クソ女が顔をしかめた。

「はは……俺としては、アイツとは格付けが済んでると思ってるんで、今さら対戦したいとは思ってないんだけど？」
「ホホホ！　これは辛辣じゃ！　……さて、ではお主は、このわらわをどれだけ楽しませてくれるのかえ？」
「さあ？　楽しむ間もないうちに、試合終了してたりして？」

俺は煽るように、肩を竦めておどけてみせる。

「ホ、これは楽しみなことじゃ。じゃが、わらわの［導摩法師］を侮るでないぞ？」
「はは、当然。だけど、それはコッチも同じだけど？」
「ホホホ、言いよるのう！」
「コホン」

楽し気に会話を続ける俺と土御門さんを見かね、教頭先生が咳払いをする。
おっと、それじゃ俺も、まずはこの試合に集中するとしようか。

「では、団体戦第一試合、アレイスター学園一年、〝望月ヨーヘイ〟とメイザース学園一年、〝土御門シキ〟の試合を始めます」

教頭先生がゆっくりと右手を上げ、俺と土御門さんに……会場全体に、緊張が走る。

そして。

「では、始め！」

「［シン］！」

『ハイなのです！』

「ホホ、［導摩法師］」

土御門さんが自身の精霊（ガイスト）を召喚すると、その姿は白と紫を基調とした男性用の公家装束を着た、黒髪の絶世の美女が姿を現わした。

あれこそが、最強の【闇属性魔法】の使い手であり、特殊スキル【式神】を持つ、［導摩法師］だ。

いや、『攻略サイト』でそのビジュアルを見てはいるけど、それでも、綺麗な精霊（ガイスト）だなあ……。

『……はう。この［シン］がありながら、その目はなんなのです！』

「へ？　あ、も、もちろん［シン］は可愛いぞ？」

ジト目で指摘され、俺は取り繕うように言葉を返した。

「では……行くとするかえ」

土御門さんがそう言うと、［導摩法師］がス、と右手を差し出す。

「【アサルトクロウ】」

これが、俺と土御門さんの戦いの合図となった。

団体戦、開始（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

不完全燃焼（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

不完全燃焼

「【アサルトクロウ】」

土御門さんのその言葉が戦いの合図となり、［導摩法師（どうまほうし）］の右手から、漆黒の鴉（からす）が一直線に［シン］に向かって放たれた。

「はう！　【堅】！」

だけど、［シン］も呪符によって防御壁を展開し、闇属性の鴉（からす）を弾き返した。

「ほう……それが、噂の【方術】というものかえ？　何とも不思議なスキルよのう」

「ははは、そりゃどーも」

扇で口元を隠しながら、土御門さんはまじまじと［シン］と呪符を見つめる。

それにしても……土御門さん、よく［シン］のスキル名まで当てたな。

というか、呪符に関しては悠木もクソ女も知ってるから、代表として一緒に戦う仲間同士、情報を共有していても不思議ではないけど、それでも、【方術】という単語をどこから知ったんだ……？

「ホホ、戦いの最中に考えごととは余裕じゃの！　【ダークハウンド】！」

すると今度は、舞台の床面に暗黒の穴が出現し、二匹の黒い犬の魔獣が召喚された。
ははは……【式神】といい、召喚・使役系のスキルに本当に特化してやがるな。

「［シン］！　あの犬っころには、今すぐ退場してもらえ！」
『当然なのです！』

俺の指示を受け、いつもの半分くらいのスピードで犬の魔獣に肉薄し、素早く呪符を貼り付けると。

『【爆】』
『『ギャウッ！？』』

犬らしい悲鳴を上げながら、二匹の魔獣が爆炎と共に消滅した。

「なあ……こんな小手先の攻撃をされても、俺達には通用しないぞ？」

俺は言外に、あのスキルを使うように促す。
ハッキリ言って、俺はこんな初戦で時間を使う気はサラサラないんだよ。

「ホホ……じゃが、さすがは［神行太保（しんこうたいほう）］、最速の精霊（ガイスト）の称号に偽りなしじゃの」
「へえ……よく知ってるなあ」
「まあの。それもこれも、お主の嫌いな木崎から聞いたんじゃからのう」
「木崎から？」

俺は視線をメイザース学園の代表が座る席へと視線を向けると、木崎は澄ました表情で薄く目を瞑っていた。

というかあのクソ女、どうやって俺の情報を入手した……いや、ひょっとして、俺以外の情報も……？

「じゃが、その『敏捷』が“ＳＳ”といえども、捉えられぬほどの速さではない！　【サウザントニードル】！」

［導摩法師］の目の前に無数の黒い針が展開し、その切っ先が全て［シン］に向けられる。

「ホホ！　その自慢の『敏捷』で、見事躱してみせよ！」

「クッ！　［シン］！」

『ハイなのです！』

俺は目配せすると、［シン］はスピードを上げて無数の針から一気に距離をとった。

だけど、闇属性の針は執拗に［シン］を追いかける。それこそ、この舞台の上のどこへ移動しても逃さないと言わんばかりに。

そして、とうとう針の一本が［シン］の眉間を捉えた、その時。

『っ！？』

針ははね返され、そのまま［導摩法師］へと向かっていった。

その後も、無数の針が［シン］の身体に触れようとした瞬間に方向を転換させ、土御門さんへと襲い掛かる。

それも、［シン］と［導摩法師］との間が十歩にも満たない、そんな至近距離で。

「ククッ！？　［導摩法師］、魔法を解除するのじゃ！」

慌てて土御門さんが指示を出すが、この距離では当然間に合わず。

「キャアアアアアアッッッ！？」

［導摩法師］の身体を無数の針が一斉に穿ち、土御門さんの身体も傷だらけになった。

「悪いけど、土御門さんの攻撃を利用させてもらったよ」

「り……利用、じゃと……？」

痛みでうめきながら睨む土御門さんに、俺はゆっくりと頷く。

そう……俺は［導摩法師］の放つ【闇属性魔法】を利用して、あえて［シン］に逃げるフリをさせ、［導摩法師］の傍へと近づくようにしたんだ。

そして、“葦原中国”領域で手に入れた【闇属性反射】により、その攻撃の全てを［導摩法師］へと向けさせたのだ。

何より、［導摩法師］はヒロイン・仲間キャラの中で最も『敏捷』ステータスが低いから、これだけの至近距離なら躱せないってことも考えてのことだ。

「……ホホ、まさかこのような手を使うとはのう。しかも、【闇属性反射】まで取得しておるとも思わなんだわ……」

「それで……土御門さん、どうする？」

俺は膝をつく土御門さんに問い掛ける。

［導摩法師］の能力を考えれば、ここでギブアップするとは思え

ないけど、それでも、土御門さんが負ったダメージも大きい。
……できれば、俺としてはここで終わりにして欲しいけどな。

「ホホ……それは驕りというものではないかえ……？」
「はは、そうかもな」

痛みで顔を歪めつつも、クスリ、と笑った土御門さんに苦笑しながら返事した。

「……分かった。わらわの負けじゃ」
「！　それまで！　勝者、“望月ヨーヘイ”！」

土御門さんのギブアップ宣言に、教頭先生が俺の勝ち名乗りを上げる。
まあ……賢明な判断、かな。

俺はアレイスター学園の代表席と観客席に向かって軽く手を振ると、舞台から降りた。

「ふふ……不完全燃焼といったところだが、それでも、おめでとう」
「先輩、ありがとうございます」

ニコリ、と微笑みながら祝福の言葉を告げる先輩に頭を下げる。
でも、先輩の言う通り、この戦いはお互いにとって不完全燃焼だった。

「まあ……本番はこれからだし、な」

メイザース学園の代表席でクソ女の手当てを受ける土御門さんを眺めながら、俺はポツリ、と呟いた。

不完全燃焼（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

待ち構える（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

待ち構える

「おっしゃあああ！　次は俺の番だぜ！」

次に続けと言わんばかりに、加隈が雄叫びを上げながら席を立つ。

「はは、まあ頑張れよ」

「へ？　な、何だよヨーヘイ、お前どこに……？」

「ん？　おお、どうにも具合が悪くてな。ちょっと保健室で休んでくるわ」

「そ、そうかよ……」

俺が苦笑しながらそう告げると、加隈がガッカリした表情を浮かべた。

まあ……お前は俺の代わりに、あのクソ女に目にもの見せてやってくれ。

俺は、メイザース学園の代表席からゆっくりと舞台へと向かうクソ女……木崎セシルを一瞥した後、その場を離れた。

そして。

「フフ……ヨーヘイ、お疲れ様」

「あはは……だけど、ちょっと物足りない内容だったけどね」

「フン。マ、お互い探り合いだったシ、手の内を見せられないというのも分かるけド」

観客席の出口で俺を出迎えるサンドラ、立花、プラーミャ。

「はは、まあな。それより……ちょっと気になることがある」
「気になるこト？」
俺の言葉に、三人が怪訝な表情を浮かべる。
「ああ……土御門さんは、［シン］の能力について知っていた」
「「「っ！？」」」
そう告げると、三人が一斉に息を飲む。
「そ、それって、誰かが向こうに情報をリークしたってこと！？」
「ウーン……まだ何とも言えないけどな。ただ、土御門さんは『木崎から聞いた』とハッキリ言っていた」
「アノ女ガ……！」
木崎という名前を聞いた瞬間、サンドラが敵意を剥き出しにした。
まあ……サンドラは俺とあのクソ女との一連の出来事について知ってるからなあ……でも。
「ッ！？　ヨーヘイ！？」
「はは……怒ってくれてありがとな。でも、アイツは加隈の奴があの舞台の上でキッチリ倒してくれるはずだから」
「……それハ、少し頼りないですわネ」
サンドラの髪を優しく撫でながらそう言うと、サンドラは顔を赤らめながら口を尖らせる。
本当は、サンドラがあのクソ女をブチのめしたいんだろうなあ……。

とはいえ、不本意ではあるけど、俺もクソ女に接触して問い質(ただ)したい。
どうして、知らないはずの［シン］の能力について、中途半端に知っていたのかを

「それデ、私達(ヤー)はこれからどこに向かうノ？」
「おっと、そうだったな。行先は学園校舎の二階……つまり、学園長室だ」

そう言うと、俺は校舎の二階の窓に視線を向けた。

「……そこに、望月くんが言っていた連中が来るんだね？」
「ああ……だからみんな、力を貸してくれ。そして」

俺は三人を見つめ、すう、と息を吸うと。

「……そして、連中の企みを、全部叩き潰してやろう」

◇

「フフ……だけど、ヨーヘイはどうして今日の団体戦の最中に連中が学園長室に忍び込むって知ってるのかしラ？」

学園長室の扉の前で俺達四人が待ち構えている中、クスクスと笑いながら、プラーミャが尋ねる。

「はは……俺も先輩から頼まれたんだよ。先輩のお父さん……学園長が、メイザース学園の学園長に機密資料を狙われてるから、それを阻止して欲しいって」

俺は苦笑しながら説明するけど……はい、ウソです。
本当は、『攻略サイト』のメイザース学園関連のメインシナリオ攻略で、そう書いてあったのだ。
二年生の修学旅行イベでメイザース学園との最後の決着をつける際の、メイザース学園の学園長すら操り人形にした向こうの真の首謀、“中条シド”が主人公達に真相を語ってるシーンについて、詳細に載っていた。

中条シド曰く、『アレイスター学園の学園長が行っている『ユグドラシル計画』を根こそぎ強奪して、自分こそが最強の精霊使いとして、この世界に君臨するのだ！』と。

これを読んだ時、俺は思ったね。この中条シドって男は、十八にもなっていまだに拗らせてるんだなあ、って。

いや、確かに中条シドの生い立ちには同情を禁じ得ないよ？
だって、幼い頃から東方国の研究機関でモルモットのように扱われて、人工的に精霊使いにさせられ、オマケに、今もメイザース学園の学園長に操られてるんだから。

で、そもそも『ユグドラシル計画』ってヤツも、今回の学園長室への侵入で中条シドが初めてその真相を知って、そんな思春期な十四歳も真っ青な野望を持っちゃうんだから、本当に手に負えないよなあ……可哀想。

「……はは、本当は今回の交流戦イベは、単に主人公とライバルの顔合わせのためだけの、導入イベントでしかないんだけどなあ」

そう呟き、俺は乾いた笑みを浮かべる。
とはいえ、今回の侵入で真相を知った中条シドは、それこそ面白

半分で実験でもするかのように土御門さんを闇堕ちさせるんだからな。タチが悪い。

「あはは……望月くんって、たまによく分からない独り言を言うよね……」

あー……立花の奴がコッチ見ながら苦笑してる。

俺も独り言を呟く癖、なんとかしないとなあ……。

「フフ……ですけド、今までヨーヘイがすることに間違いはありませんでしたワ。それに、ヨーヘイが積極的になる時って、必ず誰かのためですもノ」

そう言うと、サンドラはアクアマリンの瞳に優しさを湛え、微笑んだ。

全く……俺の仲間っていうのは、なんでこんなに俺のことを理解してくれるんだよ。

その時。

「……サンドラ、みんな……おしゃべりはここまでヨ」

不敵な笑みを浮かべたプラーミャが、廊下の先を見据える。

「アレ？　なんでこんなところにアレイスター学園の生徒がいるんだ？」

「ホホ……しかも、また会うことになるとはのう？」

現れたのは……中条シドと、ついさっき対戦した土御門シキだった。

待ち構える（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

中条シドと土御門シキ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

中条シドと土御門シキ

「アレ？　なんでこんなところにアレイスター学園の生徒がいるんだ？」
「ホホ……しかも、また会うことになるとはのう？」

廊下の向こうから現れたのは、中条シドと、ついさっき対戦した土御門シキだった。
はは……しっかしあの『攻略サイト』、どこまで網羅してあるんだよ。バッチリ書いてあった通りじゃねーか。

「というか土御門さん、メイザース学園の君がこの校舎に何の用？見学だったら俺に言ってくれれば案内したのに」

努めて冷静に、だけどほんのちょっとの皮肉を込めて、俺はそう言った。

「そうじゃのう……確かに、お主の案内は魅力的じゃな」
「だったら、今からでもどう？」

俺は一歩前に出ると、ス、と右手を差し出す。
さあて……この二人はどんな反応を示すかな？

「ホ、せっかくの申し出ありがたいのじゃが……わらわも忙しい身でのう？」
「えー……ちょっとは俺に付き合ってくれてもよくない？」

俺は肩を竦（すく）めてかぶりを振った。

「クク、あんまりしつこいと、女の子に嫌われること知らないの？」
「あはは、望月くんそうらしいよ？　だったら、ボクとしてはもっとしつこくして欲しいなあ」

そう言うと、立花は上目遣いで俺の顔を覗き込む。いや、お前は一体何を期待してるんだよ。

「フフ……いずれにしても、あまり校舎の中をウロウロしていただくわけにはいきませんわネ」
「そうネ。今なら見逃してあげるから、部外者は出て行きなさイ」

サンドラとプラーミャが、威圧を込めてそう言い放った。

「クク、そういうわけにはいかない。我（われ）は、オマエ達の後ろの部屋に用があるのだから」

薄ら笑いを浮かべながら、俺達の後ろ……学園長室を指差した。
だけど、その前に一言だけ言わせて欲しい。

「な、なあ……アンタ、自分のことを“我”って呼んでるのか……？」

俺はおそるおそる、中条シドに尋ねる。
いや、だって、一人称“我”って、普通にツッコミたくなるだろ？

「クク……そうだ！　我は特別なのだ！　ならば、それに相応しい呼び名を使うのが、筋というものだろう！」
「「「「うわー……」」」」

その台詞（セリフ）に、俺達四人はドン引きした。
というか、あそこまで網羅してある『攻略サイト』にも、コイツの一人称についての情報はなかったからなあ……。

「だ、だけどさあ……自分のこと“我”だなんて、完全に厨二……」
「バ、バカ！　そんなことを言ったら可哀想ですわヨ！」」

俺がつい言葉を漏らしそうになって、サンドラがたしなめる。
ま、まあ、本当のこと指摘されるって、意外と傷つくもんな……
確かに俺の配慮が足らなかった。

「ク、ククク……この我が、アレイスター学園の生徒にここまで馬鹿にされるとは思いもよらなかったぞ……」

悪役よろしく、中条シドは口の端を持ち上げて嗤（わら）うが、眉毛がピクピク動いたりしてるところを見ると、結構頭にきてるんだろうなあ……心なしか、顔も赤いし。

「まあいい……邪魔をするというのなら、押し通るまで！　土御門！」
「ホホ、先程の試合の借り、返させてもらうえ？　［導摩法師］！」

土御門さんは［導摩法師］を召喚し、辺りに紙切れをばら撒（ま）いた。

「ホホ！　【牛頭（ごず）】！　【馬頭（めず）】！」

すると、紙切れは牛の頭と馬の頭をした屈強な鬼二体に変化する。

「はは……こんなスキルがあるんなら、さっきの試合でも最初から使えば良かったのに」

「ホ、わざわざ手の内を見せるのは、無能のすることえ？」
「へえ……それって、最初から俺のことを敵認定してたってこと？」

クスリ、と笑う土御門さんに、あえてそう問いかけた。
つまりは、俺達がメイザース学園の邪魔をすることを、あらかじめ想定して動いてたってことだからな。

「まあの。あの木崎が、『アレイスター学園の連中……特にクソザコモブは、絶対に私達の邪魔をする』としきりに言っておったからの」
「へえ……」

いやまあ、確かに邪魔するつもりではあったけど。
それにしてもクソ女め、なんだってそこまで俺の行動を先読みしてやがるんだ……？

これって、俺達の行動が筒抜けだってことなのか？

「ホホ、それだけではあるまいぞ？　ホレ」

土御門さんはパチン、と扇を閉じ、反対側の廊下の先を差した。
すると、黒服を着た男が二人、ゆっくりとこちらへやって来る。

「あれって……“ＧＳＭＯ”の職員？」
「そうじゃのう。じゃが、メイザース学園側の、であるがの」
「っ！？」

その言葉に、俺は思わず息を飲んだ。
しまった！？　なんで俺は、メイザース学園の生徒会だけで乗り込んでくるって思ったんだよ！？

普通に考えれば、こんなただの学生なんかに任せるより、あの学園長……“麻岡マキ”も、自分の優秀な手駒を使うに決まってるじゃねーか！

「悪い……俺の判断ミスだ。てっきりコイツ等だけだと勘違いしてた……」

「あはは、別にいいんじゃない？」

俺は唇を噛みながら謝るが、立花はそう言って口の端を持ち上げた。

「フフ……立花サンの言う通りですわネ」

「そうネ」

そしてサンドラとプラーミャも、立花の言葉に同意する。

「だって、どうせボク達が全員やっつけちゃうからね」

そう告げると、立花がニタア、と嗤った。

それは、立花が闇堕ちして俺と戦った時に見せたような、あの容赦ない笑み。

「そういうことだから、ボク達に任せてよ！」

「エエ……あの黒服の連中はワタクシとプラーミャが相手いたしますワ」

「向こうも二人だし、ちょうどいいんじゃなイ？」

サンドラとプラーミャは黒服へと向き直ると、［ペルーン］と［スヴァローグ］を召喚した。

はは！　俺の仲間は、なんでこんなに頼もしいんだよ！

「ああ……！　それじゃあ黒服は二人に任せる！」
「「エエ（ダー）！」」
「そして立花……お前は、あの男のほうを相手してくれないか？」
「あはは！　了解！」

そして立花も、［伏犠（ふっき）］を召喚した。
その瞬間、中条シドと土御門さんが、揃って目を見開く。

「……どういうことだ？　あの女みたいな男の精霊（ガイスト）は、［ジークフリート］……または［オーディン］という話じゃなかったのか？」
「……木崎が、わらわ達を謀（たばか）ったということかえ？」

いや、『どういうことだ』っていうのはコッチの台詞（セリフ）なんだけど。
というか、どうしてあのクソ女が、立花のクラスチェンジ候補の一つである［オーディン］の名前を知ってるんだよ。

……まあいい、今はこの二人と黒服に集中しよう。分からないことはその後だ。

俺は雑念を振り払うためにかぶりを振ると、俺の相手である土御門さんを見据えた。

中条シドと土御門シキ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

上には上が（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

上には上が

「じゃあ、土御門さんの相手は俺ってことで……はは、本日二回目の対戦だな」

俺は口の端を持ち上げ、軽口を叩く。

「ホホ、そうじゃの。それに、出し惜しみなぞせずに、お互い最高戦力同士をぶつけることこそが得策じゃて」

「最高戦力同士？　それは、俺と土御門さんのことを言ってるの？」

「ホホホホホ！　まさか！」

俺はわざとらしくそう尋ねると、土御門さんは腹を抱えて笑った。

それこそ、扇で口元を隠すことも忘れてしまうほどに。

「ホホホ！　もちろん、あの二人のことじゃよ！」

そして、土御門さんは今まさに刃を交えようとしている二人……立花と中条シドを指差す。

「えー……俺じゃないのかよ……」

「ホ！　驕り（おご）もここまでくると立派なものじゃて！　先程の団体戦でお主の精霊（ガイスト）の力は測らせてもらったが、たとえ手抜きであったことを過大評価したとしても、それでも中条殿にははるかに及ばぬわ！」

俺はヤレヤレとかぶりを振るが、勘違いも甚（はなは）だしいと言わんばかりに土御門さんが吠えた。

だけど……俺と［シン］のこと、そこまで過小評価してくれているのはありがたい。

「ふうん……ま、いいや。向こうはうちの主人公に任せてるから、問題ないしな。それで……土御門さんは俺に勝てると思ってるの？」

「異なことを。先の試合をわらわの実力の全てではないことなぞ、お主も分かっておるじゃろうて」

「はは、まあな」

余裕の表情でそう告げる土御門さんに、俺は苦笑する。

確かに、【式神】を使った土御門さんは強敵なのは間違いない。

だけど。

「［シン］」

『ハイなのです！』

俺と［シン］だって、強いんだぜ？

それこそ……主人公を二回も倒すほどに！

「行けえええええ！」

俺のこの叫びが土御門さんとの戦いの合図となり、［シン］は解き放たれた矢のように［道摩法師］の【式神】である【牛頭（ごず）】と【馬頭（めず）】へと突撃していった。

もちろん、団体戦で見せたスピードそのままで。

「ホ、やはり最速の精霊（ガイスト）といっても、圧倒的というほどではないの！」

土御門さんの言葉に合わせ、【牛頭】と【馬頭】がその手に持つ刺股を突いて［シン］を捕えようとする。

だけど。

『はう！　【縛】！』

［シン］が素早く呪符を貼り付け、【牛頭】と【馬頭】を拘束した。

『はうはうはう！　まだまだ行くのです！』

そして、ス、と右腕を差し出している［道摩法師］へと肉薄していく［シン］。

さて……次はどんな【式神】を出すつもりだ？　まあ、［シン］が迫っていることを考えれば、あの四体の鬼を召喚するだろうな。

「ホホ！　【金熊童子】！　【熊童子】！　【虎熊童子】！　【星熊童子】！」

ホラ、な？

あの赤、青、白、肌色の四体の鬼こそが、［道摩法師］の守りの要。その連携と類まれなる防御力で相手を迎え撃つ【式神】ではある……んだけど。

『はう！　邪魔なのです！　【縛】！』

そもそも精霊最速の［シン］なんだぞ？　ただ迎撃するだけの分

際で、［シン］を止められるものか！
もし本気で止めたけりゃ、サンドラの［ペルーン］くらい鉄壁じゃないとな！

『獲ったのです！』

とうとう［道摩法師］の懐に飛び込んだ［シン］が、一気に呪符を展開……っ！？

「ホホ、甘いのう」

見ると、［道摩法師］の身体に手のひらサイズの小鬼がいくつもまとわりついていた……って、これ全部【式神】かよ！？

「［シン］！　急いで離れ……っ！」
「遅い」

小鬼は一斉に［シン］の身体にとりつき、そして……その小さな牙で［シン］の身体をかじり始めた。

『アアアアアアッッッ！？　痛いのです！　痛いのです！』
「ぐあああああああッッッ！？」

［シン］が、そして、その［シン］と痛みを共有する俺が、小鬼共の噛みつきに揃って悲鳴を上げた。

「くうっ！？　［シン］！　お前のスピードで小鬼を振り払え！」
『は、はうはう！』

俺の指示と同時に、［シン］はたまらず道袍（どうほう）をはためかせながら、

縦横無尽に校舎内を駆け巡る。
　すると小鬼はそのスピードにつかまり続けることができず、次々と振り落とされていった。

『ハア……ハア……ッ！　よくもやってくれたのです！』

［シン］は怒りの表情を浮かべ、小鬼をまとめて呪符の結界に閉じ込めると。

『【雷】！』
『『『『『ッッッッッ！？』』』』』

呪符から稲妻がほとばしり、結界内の小鬼を焼き尽くす。
そして小鬼は、黒焦げになった紙片となった。

「チクショウ……厄介なスキルだな……っ！」

俺は痛みで笑う膝を叩いて踏ん張りつつ、土御門さんをキッ、と睨みつける。

「ホホ、これはまだほんの小手調べ。わらわの可愛い鬼達は、お主達を黄泉へと引きずりたくて、うずうずしておるぞ？　それに」
「……それに？」
「それに、わらわ程度に手こずっておっては、中条殿の足元には到底及ばぬえ？」

そう言って、土御門さんは扇で口元を隠しながらクスクスと笑った。

……そういや、立花やサンドラ、プラーミャはどうなってる？

俺はチラリ、と三人の様子を窺うと。

「ククッ！？」

「あはは！　ホラホラ、どうしたのさ！」

立花の精霊、［伏犠］のクレイモアに押し込まれ、中条シドは顔を歪める。

まあ、中条シドの精霊である［マクスウェル］は、俺と同じスピード型だから、こういった力比べは分が悪いんだろうけど……それでも、今のところ立花が有利に進めてるみたいだな。

一方のサンドラとプラーミャはどうだ？

「フフ……そのような攻撃、ワタクシには通用しませんわヨ？　【ガーディアン】」

「エエ、近づいたらこの【ヴァルカン】で焼き尽くしてあげル」

はは……あの二人も、“ＧＳＭＯ”のエリート相手に互角以上に戦ってる。

というか、主人公とヒロインってとんでもない強さだよなあ……。

もちろん、目の前の土御門さんを含めて。

だけど。

「はは……その割には土御門さんの言う“中条シド”っていうのも大したことないなあ？　まあ、立花がシャレにならないくらい強いってのもあるけど。それに……今日はいい機会だ」

俺は人差し指をピン、と立てると。

「上には上がいるってこと、見せてやるよ！」

そう言って、俺は不敵な笑みを浮かべた。

上には上が（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

双子の連携（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

双子の連携

「上には上がいるってこと、見せてやるよ！」

人差し指を立て、俺は不敵な笑みを浮かべた。

「ホホ……その上というのは、ひょっとしてお主のことではあるまいな？　そうであるならば、ガッカリじゃからのう」

クスクスと笑いながら、土御門さんは俺を上目遣いで見つめる。

「はは……ひょっとしなくても俺じゃないよ。最強っていうのは、そう簡単になれるものじゃないからな」

「ホ、なんとも殊勝じゃの。それはやはり、クソザコモブであるからかえ？」

土御門さんのその口ぶりから分かる。彼女は俺を煽って激昂させ、その隙をついて倒すつもりなのだと。

まあ、土御門さんや中条シドからしたら、こんなところで俺達に足止めされて、学園長室で『ユグドラシル計画』の情報を入手する作戦を失敗するわけにはいかないもんなあ。

とはいえ、コッチだってメイザース学園側も他の生徒会メンバーや息のかかった“ＧＳＭＯ”の職員の増援を考えたら、中途半端に戦いを引き延ばすっていうのもキツイ。

だったら。

「っ！　もう俺は、クソザコモブなんかじゃねえ！　取り消せ！」

俺は土御門さんの誘いに乗り、声を荒げて犬歯を剥き出しにする。

コッチもこのシチュエーション、利用させてもらうぞ！

「ホホホホホ！　だったらどうだというのじゃ！　さあ、吠えておらんでかかってこい！　わらわとお主の格の違い、とくと教えてやろうぞ！」

「上等！　［シン］！」

俺は［シン］の名前を叫ぶと、目配せして頷いた。

『っ！　了解なのです！』

それだけで俺の意図を察した［シン］が、さっきまでの雰囲気とは違って真剣な表情で［道摩法師］を見据える。

その瞬間。

『はう！』

「っ！？　なんじゃと！？」

［シン］の咆哮と共にその姿が掻き消え、土御門さんは［シン］を見失った。

『遅いのです！　【裂】！』

「あああああああああッッッ！？」

いつの間にか［道摩法師］の背後に回っていた［シン］は、ペタリ、と呪符を貼り付けて【裂】を発動させると、［道摩法師］の背

中がズタズタに切り裂かれ、土御門さんもまたダメージを負う。

「クウ……い、今のは……っ！？」

「［シン］はただ、［道摩法師］の後ろに回り込んだだけだよ。ただし、本来のスピードでな」

「っ！？」

俺の言葉に、土御門さんは息を飲んだ。

「はは……あの試合が俺達の実力じゃないことは、土御門さんだって分かってただろ？」

「……まあの」

そう。あの団体戦での試合では、［シン］は『敏捷』ステータスが“Ｓ＋”程度のスピードに抑えて戦っていた。

土御門さんを、欺くために。

「じゃが……【牛頭】と【馬頭】に呪符を貼り付けた時は、確かに今までに見たことがないほどの速さであったではないか……」

「ああ……それでも、［シン］の本来のスピードじゃない」

「……ホ、そしてあのスピードこそが、最速の精霊の……『敏捷』“ＳＳ”のスピードじゃったということかえ……」

そう言うと、土御門さんがうなだれる。

だけど、最後に見せた［シン］のスピードは、“ＳＳ”なんかじゃない。

あれこそが、俺と［シン］が膨大な繰り返しの中で手に入れた、最速すらも超えた“ＳＳＳ＋”の世界なんだ。

「……悪いけど、土御門さんを拘束させてもらうよ」
『はう。【縛】』

俺の言葉を引き継ぐように、［シン］は［道摩法師］の傷ついた背中に呪符を貼り付けた。

本当は今すぐにでも、土御門さんの闇堕ちの原因である『華族としての土御門家の没落』ってヤツを解決してやればいいんだけど……それは、三人の戦いが終わってからだな。

「さて……まずはサンドラとプラーミャは……」

俺は二人と“GSMO”職員との戦いへと視線を向けると。

「プラーミャ！」
「任せテ！　【ブラヴァー】！」

サンドラの合図で、プラーミャの精霊、［スヴァローグ］が巨大なハルバードに炎をまとわせ、“GSMO”職員の精霊へ向かって投てきした。

「クッ！　小癪な！」
「私の後ろに！　【アイギス】！」

女性の“GSMO”職員が声を掛け、男性職員は精霊が展開した戦いの女神のレリーフの入った巨大な盾の後ろへ隠れた。

その連携は見事なもので、“GSMO”がこの東方国のエリートだってことが垣間見えた。

だけど。

「甘いわネ」

そう呟くと、サンドラの精霊（ガイスト）、［ペルーン］の金属のメイスの上に立つ［スヴァローグ］の姿が……って、一体何をやらかすつもりなんだ！？

「ハアアアアアアアアアッッッ！」

すると［ペルーン］は、そのメイスをまるで野球のバッティングのように振り回し、上に乗る［スヴァローグ］を“ＧＳＭＯ（グスモ）”職員へ向けて一直線に飛ばした！？

「フフ……バーカ」

プラーミャがまるで見下すような笑みを浮かべると。

「終わりヨ。【絨毯爆撃（じゅうたん）】」

「グアアアアアアアアアッッッ！？」

「キャアアアアアアアアアッッッ！？」

［スヴァローグ］は自身が投てきしたハルバードをキャッチし、“ＧＳＭＯ（グスモ）”職員が展開した盾を飛び越えて槍衾（やりぶすま）を叩きつけた。

盾を前面にしか展開していなかったので、当然、頭上は無防備。

そこへ逃げ場がないほどのハルバードによる槍衾が来ては、さしもの“ＧＳＭＯ（グスモ）”職員もひとたまりもなかった。

「フン」

ハルバードを横薙ぎに払って構えると、プラーミャは鼻を鳴らす。

はは……ハッキリ言って、プラーミャの態度は不遜極まりないは

ずなんだけど、アイツがすると様になるんだよなあ……。

「ヨーヘイ！　コッチは片づけましたワ！」
「ああ！　さすがはサンドラとプラーミャだ！」

嬉しそうに手を振るサンドラと、プイ、と顔を背けるプラーミャに向け、俺は満面の笑みでサムズアップした。

さあ……あとは、立花が中条シドを倒すだけだ。

そう思って視線を向けると。

「ううう……！」

立花は膝をつき、苦しそうな表情を浮かべていた。

双子の連携（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

中条シドのクラスチェンジ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

中条シドのクラスチェンジ

「うう……！」

サンドラ達の戦闘も無事終わり、俺は立花へと視線を向けると、何故か立花は膝をつき、苦しそうな表情を浮かべていた。

「立花！？」

「クク……主人公という奴も案外大したことがないと思ったが、それはうちの連中も同じか……」

中条シドは、身動きが取れない土御門さんと倒れる“GSMO（グスモ）”職員を眺めながら、苦笑する。

「あう……だ、大丈夫だよ望月くん……ちょっと、油断しちゃっただけ、だから……」

立花は脂汗を流しながら立ち上がり、俺に笑顔を見せた。

だけど……どう考えたって大丈夫じゃないだろ……。

「そ、それにしても、オマエの精霊（ガイスト）のスキル……厄介だね……」

「クク、まあな」

立花の言葉に、中条シドは口の端を持ち上げることで返した。

だけど、一体どんなスキルで立花は追い込まれたんだ……？

中条シドの精霊（ガイスト）、［マクスウェル］は、ペストマスクの仮面にマリオネットのような図体をしたスピード型の精霊（ガイスト）で、まるで加隈の

ようなトリッキーなスキルを駆使して戦うスタイルだ。

でも、クラスチェンジ前のこの精霊（ガイスト）なら、レベルも七十以上、さらにはクラスチェンジまで果たした立花が苦戦する要素はない。

それに、そもそも立花が膝をつくようなスキルなんて、［マクスウェル］は持ち合わせていないはず……。

一体何が……？

「ヨーヘイ」

声を掛けられて振り向くと、サンドラとプラーミャがいつの間にか俺の後ろにいた。

おっと、向こうの連中も拘束しておかないと。

「［シン］、頼む」

『ハイなのです』

［シン］はビシッ、と敬礼ポーズをした後、“ＧＳＭＯ（グスモ）”職員に呪符を貼り付けて拘束した。

「それデ……ヨーヘイ、私達（ヤー）もアオイのフォローに入ル？」

プラーミャが心配そうな表情でアオイを眺めながら尋ねる。

「いや……立花のやる気も充分だし、今はまだ様子を見よう」

俺はそう告げると、視線を立花と中条シドへと戻した。

それに……立花の奴をここまで追い込んでいる理由も知りたいし

な。

「クク……てっきり四人でかかって来るのかと思ったんだけどな」

「まさか。そんな真似したら、立花にブン殴られちまうよ」

薄笑いを浮かべながらチラリ、とこちらを見た中条シドに、俺は軽口で返す。

「あ、あはは……ボク、望月くんを殴ったりなんかしないよ……？」

「はは、確かに」

立花の抗議に、俺は苦笑した。

だけど、俺はお前の実力ってヤツを一番信じてるからな。

この『ガイスト×レブナント』っていう世界の、不動の主人公を。

だから。

「立花！　そのコソコソと人ん家に土足で上がりこんでくる仮面野郎を、叩きのめしてやれ！」

「うん！」

立花は翡翠（ひすい）の瞳に闘志を湛（たた）え、キッ、と中条シドと［マクスウェル］を見据えた。

そして。

「【チェンジ】！」

［伏犠（ふっき）］が幽子の渦に包まれ、その姿を変化させる。

その幽子の中から現れたのは、当然、クラス代表選考会で俺達を散々苦しめた、あの［女媧］だ。

「あはは！　【渾敦（こんとん）】！　【檮杌（とうごつ）】！」

立花は、【四凶】の魔獣を二体召喚した……って。

「あれ？　だけど【渾敦（こんとん）】は、スキル効果も含めて解除するための魔獣じゃ……」

そんな疑問を呟いていると、【渾敦（こんとん）】は［女媧］の周りをぐるぐると走り出す。

「……うん。これで、満足に戦えるよ」

立花は両手を握ったり開いたりして確認した後、口の端を持ち上げた。

やっぱりあの［マクスウェル］に、さっき何かを仕掛けられたんだな……？

「へえ……まさかスキルを解除するスキルなんて持っているとは思わなかった。これはますます、あの木崎を問い質（ただ）さないとな」

「あはは、さっきからオマエ達の口からあの女の名前が出てくるたびに、ボクは不愉快なんだよ！　【檮杌（とうごつ）】！　行け！」

［女媧］の傍（そば）から放たれた【檮杌（とうごつ）】は、まさに狂いながら［マクスウェル］へと襲い掛かる。

「クク、【カステン】」

中条シドがそう告げると、突然、【檮杌（とうごつ）】を閉じ込めるように半透明の立方体が現れた。

『ギュ……チ、チ……！？』

その立方体は徐々に縮小していき、そして。

――グチュ。

【檮杌（とうごつ）】は立方体の中で無残にも潰れ、幽子に変わった。

あの立方体が半透明なだけに、見ているコッチからしたら気分のいいモンじゃない。

「あはは……なかなか趣味が悪いスキルだね……」

「クク、そうか？　だけど、相手の戦意も喪失できるし、我としてはかなり気に入ってるんだがな」

「へえ、悪趣味な精霊使（ガイスト）いもいたもんだね！」

そう言うや否や、［女媧］はレイピアの切っ先を向けながら［マクスウェル］に突進する。

そのスタイルは、まるでフェンシングでもするかのような構えだった。

「っ！　なかなか速いな！　【ツヴァイ・メッサー】」

［マクスウェル］は両手指を伸ばして手刀を構え、迎撃態勢を取った。

『シッ！』

［女媧］の一息と共に、レイピアの先端が残像によって無数に広がる。
コレ……ひょっとしたら［スヴァローグ］の【絨毯爆撃（じゅうたん）】並みの手数なんじゃないのか！？
「クク！」
そんな［女媧］の剣捌きを、［マクスウェル］はかろうじて手刀で弾く。
だけど。
――ザシュ。
均衡はすぐに崩れ、剣先が［マクスウェル］の左肩を抉（えぐ）った。
「痛（っ）う……っ！」
「あはは、心配しなくていいよ。オマエが怪我をしても、ボクが治してあげるから。だから、存分に痛い目に遭ってね」
痛めた肩を押さえながら顔を歪める中条シドに、立花はニタア、と口の端を三日月のように吊り上げる。
はは……立花め、相変わらず自分の敵と認定したら容赦ないな……。
「クク……木崎が余計な情報を寄こしたせいで、逆に惑わされる羽目になるとはな……」
「だからさあ、その名前は不快だからヤメロって言ったよね！」
露骨に顔をしかめ、立花が追撃にかかった。

『シッ！』
「クウッ！」

このままではマズイと思ったのか、［マクスウェル］はたまらず距離を取る。

「甘いよ」
「クソッ！　なんだこのデタラメなスピードは！」

その距離をほんの一踏みで一気に潰した［女媧］は、さらに［マクスウェル］に肉薄すると、パカア、と口を大きく開けた。

「食らえ！　【竜の咆哮】！」
「っっっ！？」

［女媧］が防御無視の特大の一撃を、超至近距離から放つ。
当然、［マクスウェル］はそれを躱すことができず。

「『グアアアアアアアアアッッッ！？』」

中条シドと［マクスウェル］は、悲鳴を上げてもんどり打った。

「あはははは！　これで終わりだよ！　【窮奇（きゅうき）】！」

さらに攻撃の手を止めない［女媧］は、最強スキルである【窮奇（きゅうき）】を放つ……って、さすがにこれはオーバーキルだろ！？

そして、翼の生えた銀色の虎の口が、まさに［マクスウェル］の頭部にかじりつこうとした、その時。

「ク……クク……もはや出し惜しみをしている場合ではない、か……」

【窮奇（きゅうき）】を前にした中条シドは薄ら笑いを浮かべ、そして。

「クラスチェンジ、開放」

そう、静かに告げた。

中条シドのクラスチェンジ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

デウス・エクス・マキナ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

デウス・エクス・マキナ

「クラスチェンジ、開放」

【窮奇（きゅうき）】を前にした中条シドが薄ら笑いを浮かべ、静かにそう告げた。

「はあ！？　クラスチェンジだと！？」

徐々に幽子の渦に包まれていく［マクスウェル］を眺めながら、俺は思わず叫ぶ。

いや、まてまて！？　そもそも中条シドのあの精霊（ガイスト）は、クリスマス前の直接対決で初めて登場するんだぞ！？

なんでこのタイミングで、クラスチェンジができるんだよ！？

「あはは、クラスチェンジしようが、別に構わないよ。どちらにしても、勝つのはこのボクだ！」

そんな状況の中、立花だけが不敵な笑みを浮かべながら吠えた。

だけど……もし、中条シドが本当にあの精霊（ガイスト）へとクラスチェンジをするのなら話は別だ！

「サンドラ！　プラーミャ！　俺達も加勢するぞ！」

「「ッ！　エエ！」」

様子がいつもと違うことに気づいたのか、二人は俺の言葉に呼応して精霊（ガイスト）に臨戦態勢を取らせた。

そして、幽子の渦が徐々に薄くなり、その中から現れたのは。

「［デウス・エクス・マキナ］……」

俺はその姿を一目見た瞬間、ポツリ、と呟く。

あれこそが、『ガイスト×レブナント』において最終決戦へと挑む主人公の前に立ち塞がる、本編ラスボスと先輩に次いで三番目の力を誇る精霊（ガイスト）。

足首まであるかと思うほどの長さの銀色の髪。その姿はエルフをモチーフとしているためか、特徴的な長さの耳に端正な顔立ち。白く透き通るような肌には、無数の銅製の歯車をその身体にまとい、背中には日輪のように浮かぶ歯車がカチ、カチ、と刻んでいた。

そして、［デウス・エクス・マキナ］を倒すための推奨レベルは、七十五。

そんな［デウス・エクス・マキナ］がス、とその左手を伸ばして人差し指をけだるそうに動かした瞬間。

「っ！？」

巨大な牙と爪を突き立てようとした【窮奇（きゅうき）】が、突然掻（か）き消えた。

あの、［女媧］の最強スキルが。

「クク……！　余計な情報を与えてくれたのは失態だが、それでも、この我をクラスチェンジへと導いたことに関しては、木崎に感謝せねばなるまい」

「……だから、あの女の名前を言うなって何度も言ってるだろ！」

クソ女の名前に反応し、立花が吠える。
だけど、これは突然【窮奇（きゅうき）】を消されてしまったことへの焦り、そして、目の前の精霊（ガイスト）からくる得体のしれないプレッシャーに対しての虚勢にしか過ぎない。

それほど、［デウス・エクス・マキナ］の存在は圧倒的だった。

「ふむ……土御門、いつまでそのままでいるつもりだ？　サッサとこちらに来て、この者共を屠（ほふ）るぞ」
「ホ……これはまた、無茶なことを……」
「クク、無茶ではないだろう？　いいから早く来い」

［シン］の呪符で身動きがとれないはずの土御門さんが乾いた笑みを浮かべるが、全く意に介さない中条シドは、なおも動くように指示を出す。

だけど、俺はこれが中条シドの無茶な指示だとは思わない。

何故なら。

「っ！？　ど、どうしてわらわは動けるのじゃ……！？」
「クク、何をぐずぐずしている」
「ホ、ホホ……」

土御門さんは自分が動けることに驚きを隠せないでいるが、中条シドは当然とばかりに顎をクイ、としゃくった。

「クク……だが、当の本人ですら呆けているというのに、約一名、表情を変えん奴がいるな」

そう言うと、中条シドは口の端を持ち上げてこちらを見やる。
まあ……俺は［デウス・エクス・マキナ］の能力の全てを知っているからな……。

土御門さんが身動きできるようになったのは、彼女の頭上を天井すれすれに浮かぶ歯車によるもの。

あれこそが、［デウス・エクス・マキナ］のスキルの一つ、【カイロス】。
その頭上の歯車を巻き戻すことで、対象の時を戻すことができる。
それも、都合よく、な。

「はは……これでも結構驚いてるんだけどな」

そう言うと、俺は苦笑しながら肩を竦めた。
とはいえ、スキルに関してじゃなく、［デウス・エクス・マキナ］へとクラスチェンジをしたっていう事実に関してだけど。

それにしても、ここまで色々と裏目に出るとは思わなかったな……。

「ははっ」

この状況に対してなのか、それとも、これから起こるであろう予想外なイベントに対してなのか分からないけど、何故か俺は、思わず笑ってしまった。

「……何がおかしい」

だけど、そんな俺の態度が気に入らないのか、中条シドはムッとした表情を浮かべる。

そうだな……とりあえずは、これから起こり得ることについて、把握と考察だけは最低限しておこう。

「いや？　なかなかこのシチュエーションは意外だっただけだよ。といっても、俺達とすればオマエ達を全員この場で拘束できれば完勝、このまま足止めをして、うちの学園にいるコッチ側の“GSM（グス・モ）”の増援が来れば、それでも俺達の勝ちだ」

「……」

「モチロン、オマエ達がこのまま引き下がっても、学園長室を防いだってことで俺達の勝ち。だから、オマエが余裕の表情を浮かべながら長々と俺達と会話しているこの状況も、コッチからすれば願ったりってわけだよ」

本音を言えば、この場で全てにケリをつけて今後発生するメイザース学園関連イベを叩き潰したいところだけど、中条シドが［デウス・エクス・マキナ］にクラスチェンジしちまった以上、次善策も頭に入れておかないと。

あとは、この俺の煽り（あお）に対して中条シドが乗ってくれれば、ある程度は情報を引き出せるんだけどな……。

「……クク」

「？　オマエも、こんな詰んだ状況でよく笑えるな」

俺は含み笑いをする中条シドに、そう告げる。

「いや、貴様も存外おめでたい奴だと思ってな」

「……どういう意味だ？」

中条シドの言葉に、俺は若干の苛立ちを覚え、少し顔をしかめた。

「クク、どうしてこの学園長室へと来たのが我と土御門だけだと思う」

「何？」

そう言うと、中条シドが廊下の奥へと視線を向ける。

すると。

「うふふ……間に合いましたね」

メイザース学園生徒会長、“近衛スミ”が現れた。

デウス・エクス・マキナ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

メイザース学園生徒会長、参戦（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

メイザース学園生徒会長、参戦

「ふふ……間に合いましたね」

廊下の先から、メイザース学園生徒会長、“近衛スミ”が現れた。

だけど……生徒会長はまさに団体戦の真っ最中のはず。なのに、どうしてここに？

「疑問に思うのも仕方ありませんよ。とはいえ、私もあなた達をすぐに片づけて試合に戻らないといけませんが」

「へえ……」

そうか、近衛スミは三年生だったな……。

つまり、必然的に試合は団体戦の後半。おそらく、最後の第九試合を自分の出番にして、用件を済ませて戻るまでは、他のメンバーで時間の引き延ばしでもしようって魂胆だろう。

はは……なかなか用意周到だな。

「ですが、私はあくまでも万が一に備えてのもの。その万が一が起こるとは思っても見ませんでしたが」

そう言うと、近衛スミはクスクスと笑いながら中条シドを見やる。

中条シドはというと、少しバツの悪そうな表情を浮かべ、顔を逸らした。

「だけどさあ、アンタが来るよりも、もう試合が終わってるはずの木崎セシルをコッチに寄こしたほうが良かったんじゃないの？　そ

うすれば、時間を気にすることだってないだろうし」
「ふふ、木崎さんの試合は、まだ終わってませんよ？」
「は……？」

どういうことだ？　俺の試合が終わって、次の試合が加隈とクソ女だ。つまり、その第二試合が始まってから、かれこれ三十分は経っているぞ？

「簡単ですよ。彼女とあなた達の仲間には、それほどの実力差があるということです。時間を引き延ばす……いえ、このまま日が暮れるまで試合を終了させないことも容易なほどに」
「っ！？」

へえ……あのクソ女、今の加隈を手玉に取れるほど強くなったとでも言うのかよ……。

「ふふ……彼女には、この私が会場に戻るまで引き伸ばし続けるように伝えてあります。といっても、私も来た以上、用件はすぐに済みますが」
「はは、言うじゃねーか」

俺はできる限り余裕の表情を浮かべながら答える。
だけど……四対三、オマケに中条シドはクラスチェンジを果たした今、近衛スミも同様に、ゲーム本編通りの強さじゃないと見たほうがよさそうだな。

「……立花、この生徒会長殿をお前に任せてもいいか？」
「そ、それは構わないけど、キミはどうするの？　あの土御門っていう女の子ともう一回……「いや、俺はあの中条シドの相手をする」

立花の言葉を遮り、俺はハッキリとそう告げた。

「……それって、ボクじゃアイツを倒せないってこと？」

その立花の問い掛けに、俺は一瞬ひるむ。

はは……立花の奴、かなり怒ってるなあ……。

「いや、そういうことじゃない。ただ、確実な選択をしただけだ」

そう言うと、俺はチラリ、とサンドラを見やった。

「サンドラ……悪いけど、俺と一緒に中条シドと戦ってくれ」

「ッ！？」

俺の言葉に、サンドラが息を飲む。

そして、その顔を上気させると。

「モ、モチロンですワ！　ワタクシに任せてくださいまシ！」

そう答え、力強く頷いた。

「ああ……そしてプラーミャ、お前は土御門さんを。大丈夫、お前は土御門さんよりも強い」

「ッ！　当然ヨ！」

プラーミャもいつもの不遜な表情を浮かべると、左手を腰に当て、右手で振り払うような仕草をする。

「うふふ……舐められてるわよ？　土御門さん」

「ホ……さすがにこれは気に入らんの……」

近衛スミに煽られ、土御門さんは扇で口元を隠すが、その上から覗く視線は怒りに満ちていた。

「土御門さん。分かっているとは思いますが、ここで負けた場合は……」

「……分かっておる……っ！」

扇の向こうから、ギリ、と歯噛みする音が聞こえそうなほど、土御門さんの表情が険しくなった。

というか……気に入らないなあ。

「メイザース学園の生徒会長様は、人の弱みにつけ込んで追い込むのが趣味なのかよ。性格悪いな、オイ」

「っ！　……ふふ、何を言っているのかしら？」

「言ったまんまの意味だよ。それよりも」

俺は土御門さんへと向き直ると、アメジストの瞳を見つめた。

「土御門さん……この戦いが終わったら、君に話したいことがある。もちろん、これは君にとっても、土御門家にとっても悪い話じゃないはずだ」

「っ！？」

俺の言葉に、土御門さんは明らかに動揺した。

それもそうだろう。今、俺が告げたことは、まさに土御門さんが抱えている問題を知っていて、しかも解決する術を持ち合わせてるってことを意味するんだから。

「……どういう意味じゃ？」
「それは、この戦いが終わってからだよ。少なくとも、プラーミャ相手に真剣に戦わないと、大怪我じゃ済まないってことだけは言っておく」

まあ、こう言っておかないと、プラーミャに『ヨーヘイのせいでつまらない戦いだったじゃなイ！』とか言われながら足蹴（あしげ）にされそうだもんなあ……。
実際、今の言葉でプラーミャは満足げに頷いてるし。

「で、立花……お前もあの生徒会長に油断するなよ？　実力的に、あの中条シドと遜色（そんしょく）はないからな」
「……分かってるよ」

立花は不満そうに口を尖らせ、プイ、と顔を背けてしまった。
ウーン……これが終わったら、ちゃんとフォローしとかないとな……。

「さて……それじゃあ第二ラウンドといこうか」

そう告げると、俺はサンドラと共に中条シドと対峙した。

メイザース学園生徒会長、参戦（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

絶対防御（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

絶対防御

「さて……それじゃあ第二ラウンドといこうか」

そう告げると、俺はサンドラと共に中条シドと対峙した。

「クク……ひょっとして、二人掛かりなら我の［デウス・エクス・マキナ］に勝てるとでも思っているのか？」

そんな俺達を、中条シドは嘲笑（あざわら）う。

「ああ。俺とサンドラなら、オマエを倒せると思ってるよ。なあ、サンドラ？」

「フフ……エエ。ワタクシとヨーヘイで、倒せない敵などおりませんワ！」

実際、俺があの［デウス・エクス・マキナ］を倒すためには、サンドラの力が必要不可欠だ。

【絶対防御】を持つ、［ペルーン］の最高の盾が。

「クク、まあいい。我の前に立ったこと、二人仲良く後悔するがいい！」

その言葉を合図に、［デウス・エクス・マキナ］が金属の歯車を次々と投げてきた。

「っ！　［シン］！　サンドラ！　来るぞ！」

『ハイなのです！』

「エエ！　【ガーディアン】！」

俺と［シン］は［ペルーン］が展開する盾の陰に隠れると、盾は歯車を全て弾き落と……せない！？

「クク……！」

なんと歯車は、高速に回転しながら盾にまとわりつくかのように、縦横無尽に盾の表面を駆け巡った。

「チイッ！　【ガーディアン】、全方位展開！」

サンドラは、盾の端まで到達して裏側へと侵入しようとした歯車を阻止するため、無数の盾をドーム状に展開した。

「っ！　……へえ、我の【ツァーンラート】を寄せつけないとは、なかなかの盾だな……」

「フフ、当然ですワ。それニ」

そう言うと、サンドラが俺のほうへと振り返り、ニコリ、と微笑む。

「ワタクシの後ろには、世界で一番守りたい人がいるんですもノ」

い、いやサンドラ、その言葉はメッチャ嬉しくはあるんだけど、その……恥ずかしい……。

ああもう！　顔が熱くて仕方ないんだけど！

『はう……これはアレク姉さま、もう手遅れかもなのです……』

いや、［シン］！？　手遅れってどういうこと！？

「クク……なるほどな。だが、［デウス・エクス・マキナ］の前に、そのような防御など無意味だ。【カイロス】」

中条シドがそう告げると、［デウス・エクス・マキナ］のいる方向から歯車が回転しながら空気を切り裂く音が迫る。おそらく、さっきの土御門さんの時と同じように、俺達の頭上で静止して、時を巻き戻すつもりなんだろう。

だけど。

「ん……？　どういうことだ？」

一向に状況が変化しない様子に、中条シドが疑問の声を上げた。

だけど、これこそ俺がサンドラをパートナーに選んだ理由。

［ペルーン］の【ガーディアン】が持つ【絶対防御】のスキルは、物理や属性による攻撃だけじゃなく、状態異常やスキル効果すら弾き返す、まさに鉄壁の守りなんだ。

だから、［デウス・エクス・マキナ］の持つデタラメなスキルさえも防げると踏んだんだけど……期待以上、だな。

「ははっ！　やっぱりサンドラはすごいな！」

「フフ……当然ですワ」

俺が手放しに賞賛の言葉を告げると、サンドラが微笑みを返してくれた。

「ほう……まさか、【カイロス】すら受け付けない盾が存在するとは……それに、その精霊（ガイスト）も、木崎から聞いていた話とは違う」

……またここで、あのクソ女の名前が出てくるのか。というかクソ女の奴、一体どうやって情報を仕入れてるんだ？

普通に考えて、うちの学園の誰かをスパイにして情報収集しているというなら、サンドラや立花の精霊（ガイスト）について把握しているはず。

それに、どうにも俺達の行動を読んでいる節（ふし）があるのに、中途半端にずれてるんだよなあ……。

「なあ、オマエに聞きたいんだけどさあ……」

「……なんだ？」

お、ダメ元で尋ねてみたら、意外にも話を聞いてくれるみたいだぞ。

じゃあこの際だし、聞いてみるか。

「クソ女……木崎は、なんで俺達のことをそんなに詳しく知ってるんだ？」

「ククク、何を聞いてくるかと思えば……そんなもの、元アレイスター学園の生徒なのだから、その程度の情報は知っていてもおかしくないだろう？」

そう言って、まるで馬鹿にするかのように笑う中条シド。

だけど、そうか……コイツも詳しくは分かってないんだな。

「はは……まあ、助かったよ」

「ククク、それは何よりだ」

俺が礼を言うと、中条シドは嬉しそうに返事した。
アレ？　コイツって拗らせてはいるけど、意外と悪い奴じゃないかも？

とはいえ、コイツ等の目的が『ユグドラシル計画』である以上、全力で排除させてもらうけどな。

「ところで、そのように盾に籠りきりだと、いくら攻撃を防いだところで我を倒すことはできないぞ？　まあ、我としてはオマエ達がそうやって籠っている間に、学園長室に入って必要なものを手に入れるだけだがな」

嬉しそうにクスクスと笑う中条シドだけど、俺達を煽って誘い出そうとしている魂胆が見え見えなんだよなあ。
それに……攻撃手段だってないわけじゃないんだぞ？

「［シン］」
『了解なのです！』

俺が声を掛けると、［シン］は力強く頷いた。

「ヨーヘイ……【ガーディアン】の隙間、少し開けまス？」
「いや、このままで問題ない」

サンドラの問い掛けに、俺は口の端を持ち上げながらそう答えた。
だって、仲間が内側から通り抜ける場合は、【絶対防御】の対象外だからな。

『はう！　【神行法・瞬】！』

そう告げた瞬間、［シン］が目の前から消える。

そして。

『はうはうはう！　取ったのです！　【爆】！』

「グウッ！？」

盾の向こう側から、呪符による爆発音と、中条シドの驚きの声が響いた。

絶対防御（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

小さな背中（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

小さな背中

『はうはうはう！　取ったのです！　【爆】！』
「グウッ！？」

盾の向こう側から、呪符による爆発音と、中条シドの驚きの声が響いた。

「ヨーヘイ、これっテ……」
「ああ。見ての通り、［シン］ならこの【ガーディアン】の中と外を行き来できるし、一瞬で［デウス・エクス・マキナ］の背後を取ることだってできる」

そう……［シン］の【神行法】なら、アイツの時間逆行スキルである【カイロス】を発動させることなく、先手を打つことができる。しかも。

『はう！　戻ったのです！』
「ああ、よくやった！」

攻撃を加えた直後に、そのまま【ガーディアン】の中へと離脱すれば、ダメージを食らうこともない。

もちろん、立花の［伏犠（ふっき）］がクラス代表選考会で見せたように、無理やり【ガーディアン】をこじ開けて盾の裏側に侵入されちまったら、それはそれでなす術（すべ）がなくなるけどな。

「とはいえ……こんな攻撃も焼け石に水ではあるんだけどな」

「エ……？」
「ちょっと盾に隙間を開けて見てみろよ」
そう言うと、サンドラは訝し気な表情で盾に隙間を開けて覗（のぞ）くと。
「……何とも厄介な精霊（ガイスト）だな」
中条シドは忌々し気にコッチを睨みつけているが、呪符によってダメージを受けたはずの［デウス・エクス・マキナ］が、みるみるうちに元通りになっていった。
もちろん、【カイロス】の時間逆行の力によって。
「……このままじゃ、ジリ貧じゃありませんノ……？」
「だよなあ……」
いや、それは俺も分かってはいるんだよ。
一応、『まとめサイト』の中条シドの攻略については、高火力の精霊（ガイスト）で一気に畳みかけるっていうのが正解らしいんだけど、立花には生徒会長を、プラーミャには土御門さんを相手してもらってるせいで、完全に火力不足だ。
だからこうやって、【ガーディアン】で［デウス・エクス・マキナ］の攻撃をしのぎつつ、［シン］がチマチマと攻撃を仕掛け続けることによって時間稼ぎをしているんだ。
で、その間に立花とプラーミャに生徒会長と土御門さんを倒してもらって、コッチに合流してもらってから一気にカタをつけるってのが、俺が考えた作戦なんだけど……。

ハア……ここに先輩がいてくれたらなあ……って、なんで俺は、ないものねだりなんかしてるんだよ。

確かに先輩がいれば、［関聖帝君］の【一刀両断】で下手をしたら一撃でケリがつくかもしれない。

だけど、俺は先輩と氷室先輩に昨日の夜、頼んだんだ。

俺達が学園長室への侵入を食い止めるから、先輩達は、残っているメイザース学園の他の連中が何かしでかさないように監視して欲しい、と。

だから。

「……サンドラ、今の俺達は厳しい状況にあるってことは間違いない。だけど、絶対に俺達だけで食い止めるんだ。これ以上、うちの学園で好き勝手やらせられるかよ」

「フフ……それでこそヨーヘイですワ。ワタクシも、アイツの攻撃なんて、全部防ぎ切ってみせますとモ」

俺とサンドラはお互い顔を見合わせると、クスリ、と微笑んだ。

はは……全く、サンドラは先輩にも並ぶ、最高の仲間だよ。

「よっし！」

俺は今以上に気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩く。

「さあて……それじゃ、いっちょやるかあ！」

『はう！　この［シン］に任せるのです！　アレク姉さまとペルおじさまが全部防ぐなら、［シン］はあんな奴の攻撃、全部躱(かわ)してみ

せるのです！』
「はは！　おう！」

［シン］が俺とハイタッチを交わし、【ガーディアン】の隙間からキッ、と［デウス・エクス・マキナ］を睨みつけた。

そして。

『はう！　【神行法・瞬】！』

［シン］は再び、［デウス・エクス・マキナ］へと挑む。

あんな小さな身体を、奮い立たせて。
あんな小さな背中に、俺達の意志を乗せて。

「クク！　ただ籠（こも）るのではなく、姿を見せて［デウス・エクス・マキナ］に挑む、その心意気やよし！　我と［デウス・エクス・マキナ］も、全力をもって相手しよう！」

中条シドは口の端を吊り上げて高らかに笑うと、［デウス・エクス・マキナ］はその両手を大きく広げて迎え撃つ体勢を取った。

『はう！　また後ろを取ったの……ですっ！？』
「甘い！　【カイロス】！」

［シン］が『敏捷』“ＳＳＳ＋”を活かして［デウス・エクス・マキナ］に肉薄するが、いつの間にか［シン］の頭上に金属の歯車が浮遊しており、一瞬にしてその直前に巻き戻される。
そしてそこには、［デウス・エクス・マキナ］によってあらかじめ配置された、【ツァーンラート】が高速回転しながら待ち構えて

いた。

『はうはうはう！　【神行法・転】！』

だけど、［シン］も負けじとその身体を［デウス・エクス・マキナ］と入れ替え、自滅を誘う。

「ククッ！　【カイロス】！」

まさに自身の身体を金属の歯車が抉ろうとした瞬間、［デウス・エクス・マキナ］が【ツァーンラート】を巻き戻した。

「クッ……木崎め……適当なことをぬかしたこと、恨むぞ……！」

終始余裕の表情を浮かべていた中条シドだったが、思うように【ガーディアン】を攻略できない苛立ちと、［シン］のスピードとスキルを活かした息を吐かせぬ猛攻に、顔をしかめる。

『はうはうはう！　まだまだ行くのです！』

「クッ！　このおおおおおお！」

とうとう感情をあらわにした中条シドが、［シン］に向かって吠えた。

「サンドラ……中条シドが［シン］に気を取られているうちに、俺達はアイツに気づかれないように少しずつ近づくぞ」

「エエ……分かりましたけド、近づいてどうするんですノ？」

サンドラはアクアマリンの瞳で俺を見つめながら、おずおずと尋ねる。

「決まってる。［ペルーン］の【裁きの鉄槌】の一撃で、あの［デウス・エクス・マキナ］を沈黙させるんだよ」

小さな背中（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

チートスキル、発動（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

チートスキル、発動

「決まってる。［ペルーン］の【裁きの鉄槌】の一撃で、あの［デウス・エクス・マキナ］を沈黙させるんだよ」

おずおずと尋ねるサンドラに、俺はハッキリと告げた。

このイベントを終わらせるのは、サンドラだと。

「ワ、ワタクシがですノ！？」

「そうだ」

自分を指差しながら驚きの声を上げたサンドラに、俺は頷く。

「考えてもみろ。［シン］の呪符は、何枚も貼り付けて同時に発動させることでその威力を増すことが可能だけど、それだと貼っている最中にアイツの【カイロス】で無効化されてしまう」

「ソ、ソレハ……」

「だったら、たった一撃で全てをチャラにできるほどの攻撃力を持つ、サンドラの［ペルーン］に賭けるしかないんだ」

そうだとも。［ペルーン］なら、“リネットの指輪”によるステータス上昇効果も相まって、『力』ステータスは先輩の［関聖帝君］と同じ“ＳＳ”。

もちろん、攻撃力が『力』ステータスだけで決まるってわけじゃないけど、それでも、【裁きの鉄槌】の破壊力は『ガイスト×レブナント』に登場する全精霊（ガイスト）の中でもトップクラスだ。

だから。

「サンドラ……俺と［シン］で、何とかしてあの［デウス・エクス・マキナ］の注意を引きつける。だから……頼む！」

俺はサンドラの両肩をつかみ、必死で頭を下げた。

すると。

「モウ……こんなの、引き受けるしかないじゃなイ……ヨーヘイのバカ」

そう言うと、サンドラはしょうがないと言わんばかりに苦笑する。

でも、そのアクアマリンの瞳には、優しさと覚悟と、そして決意がみなぎっていた。

「ですけド、［ペルーン］が鉄槌を下す前に、ヨーヘイと［シン］が倒されたら承知しませんわヨ？」

「！　ああ！」

俺は拳を握り、力強く頷く。

さあ……あとはこの綱渡りな作業を、俺と［シン］が黙々とこなすだけだ。

「［シン］！」

俺は盾の隙間から［シン］に声を掛けると、［シン］もまた、俺を見て頷いた。

「クク！　よそ見とは余裕だな！」

いつの間にか、［デウス・エクス・マキナ］は【カイロス】と【ツァーンラート】による金属の歯車を周囲に大量に浮遊させていた。
それこそ、どこに逃げても［シン］を捉えられるようにするために。

『はう！　こんなの、スヴァ姉さまの【絨毯爆撃】に比べたら、大したことないのです！』
「ククッ！？」

その言葉の通り、［シン］は【カイロス】のスキル効果範囲である歯車の真下を綺麗に避け、【ツァーンラート】をかいくぐりながら［デウス・エクス・マキナ］に素早く呪符を貼る。

『はうはうはう！　【雷】！　【凍】！』
『ググガガガガガッッッ！？』

ここでようやく、【カイロス】を発動させる前に何枚かの呪符を貼り付けることに成功した［シン］が、一気に発動させた。
はは！　さすがに連続してダメージ食らうのは痛いだろう！

「クソッ！　【カイロス】！」

中条シドは、すぐさま［デウス・エクス・マキナ］のダメージを巻き戻すけど、だからといって［シン］の攻撃による痛みの記憶までチャラになるわけじゃないんだ。

だって……これはゲームなんかじゃなくて、俺達の現実なんだからな！

そうなると、中条シドが取る行動だって限定されてくるはず。

「ククッ！　［デウス・エクス・マキナ］！　あの精霊（ガイスト）を近づけさせるなあ！」

ほらな？

さっきまでは［シン］を捉えることに集中して分散させていた歯車を、今では自身を守る壁のように、［シン］と［デウス・エクス・マキナ］の間にびっしりと展開させやがった。

誰だって、痛いのは嫌だもんな。

あとは……アレにさえ注意すれば……。

『はう！　まだまだ行くのです！』

そして［シン］は、さながら弾幕のように浮遊する歯車を、まるで最初からなかったかのようにスルリ、とすり抜け、［デウス・エクス・マキナ］に詰め寄った。

『それー！　なのです！』

［シン］がひたすら呪符を貼り付けるが、［デウス・エクス・マキナ］はその傍（そば）から【カイロス】によって巻き戻す。

それはまるで、無限ループの中で延々と繰り返し作業しているかのようだった。

はは……まあ俺と［シン］にとっては、繰り返すことはそれほど苦じゃない。

だってこんなの、いつものことだからな。

「サンドラ……必要な距離は、あとどれくらいだ？」
「あと二歩……一歩……ッ！　入りましたワ！」

よし！　これであとは、アイツを待ち受けるだけだ！

「クソ……！　このままでは埒が明かん！」

すると、堪りかねた中条シドの言葉に呼応するかのように、［デウス・エクス・マキナ］は両手をかざした。

「っ！　［シイイイイイイイイイイイン］！」
『了解なのです！』

俺の叫び声に反応した［シン］が、一気に［デウス・エクス・マキナ］から距離を空けた。

その時。

「無駄だ！　【クロノス】！」

［デウス・エクス・マキナ］の、最もチートなスキルが発動した。

チートスキル、発動（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

貴様という男に（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

貴様という男に

俺の叫び声に反応した［シン］が、一気に［デウス・エクス・マキナ］から距離を空けた。

その時。

「無駄だ！　【クロノス】！」

［デウス・エクス・マキナ］の、最もチートなスキルが発動した。

あれこそが、［デウス・エクス・マキナ］の［デウス・エクス・マキナ］たる所以（ゆえん）。

あの背中にある巨大な歯車が時計回りに刻む時、ほんの一瞬の未来が都合よく改ざんされる。

実際の『ガイスト×レブナント』の世界では、プレイヤーが攻撃コマンドを入力しても、このスキルが発動されることによって、全てキャンセルされ、逆に［デウス・エクス・マキナ］の攻撃を受けるっていう何ともチートなスキルだ。

だから。

『はう！？』

「クク！　終わりだ！」

どういうわけか、ほんの数センチの距離に二桁は超える【ツァーンラート】が、今まさに［シン］を狙っていた。

っ！？　こんなの間に合わ……っ！？

――ギャギギギギギギギッッッ！

『アアアアアアアアアアッッッ！？』

「ぐあああああああああああああッッッ！？」

そして［シン］の身体は歯車の高速回転によってズタズタにされ、［シン］と俺の絶叫が廊下にこだまする。

だけど。

「クククククク！　トドメだ！」

――俺達の勝ち、だ。

「アアアアアアアアッッッ！　【裁きの鉄槌】！」

「っ！？　【クロ……ッ！？」

――ドオオオオオオオオオンッッッ！

サンドラの……［ペルーン］の渾身の一撃が［デウス・エクス・マキナ］の脳天に叩きつけられ、すさまじい衝撃音と稲妻がほとばしった。

「グオオオオオオオオオオオオッッッ！？」

はは……やった、ぞ……［シン］……サンドラ……！

◇

……。

――イ。

……ん？

――ヘイ。

何か、聞こえる……。

――ヨ……ーヘイ。

俺の……名前……って。

俺を呼ぶ声に反応し、ゆっくりと目を開ける。

すると。

「……ーヘイ！？　ヨーヘイ！？」

俺のすぐ目の前に、ぽろぽろと涙を零（こぼ）しながら必死で呼びかけるサンドラの顔があった。

「ッ！　ヨーヘイ！」

「うおっ！？」

そして、その顔をさらにくしゃくしゃにしたサンドラが、俺に抱きついてきた！？

ココ、コレってどういう状況！？　というか、何のご褒美！？

……って。

「イタタタタタタタッ！？」

「モウ！　モウ！　ヨーヘイのバカ！」

「分かった！　分かった！　俺はバカだから、とりあえず落ち着け！？」

サンドラが抱きついたことによって全身に痛みが走り、俺は何とかしてサンドラを離そうとするんだけど、離れねえ！？

『痛いのです！　痛いのです！　アレク姉さま痛いのですううううう！』

「ア！？　ゴ、ゴメンナサイッ！」

痛みを共有している［シン］からも悲鳴が上がり、ここでようやく気づいたサンドラがパッと離れた。

「イテテテテ……だ、だけど、やったなサンドラ……ぶちのめす瞬間、この目にバッチリ焼き付けたぞ……」

そう言うと、俺は痛い身体を我慢しながら、右手を高々と上げてサムズアップする。

「モウ……あんな無茶するなんて、聞いてませんわヨ……！　ヨーヘイの、バカア……！」

「はは、悪い……」

泣きじゃくるサンドラに、俺はただ、謝るしかない。

「それで、アイツは……中条シドはどうなった……？」

「グス……い、今もくたばったママ……「グ、グウウ……ッ！」」

サンドラが涙声で状況を説明しようとした瞬間、中条シドがうめき声を上げた。

俺は首を動かして、そのうめき声がする方向へ顔を向けると。

「な……何故、我は、あそこまで精霊（ガイスト）の接近を……ゆ、許した……のだ……！」

はは、なんで負けたか分からないせいか、中条シドの奴、悔しそうに歯噛みしてやがる。

「簡単だ……オマエが【クロノス】を発動した時、逃げる［シン］に接近したからだよ……それも、わざわざサンドラの［ペルーン］が待ち構えている場所にな」

そう……［デウス・エクス・マキナ］が【クロノス】を発動する際、必ず対象となる精霊（ガイスト）に接近する。それは『まとめサイト』で確認済みだ。

だから俺は、その行動パターンを逆手にとって、［シン］をわざと［ペルーン］の傍（そば）へと逃げるようにしたんだ。

これなら『敏捷』ステータスの低い［ペルーン］でも、［デウス・エクス・マキナ］に接近できる。

「……まあ、そのせいで俺は、世界一大切な相棒につらい思いをさせた……はは、こんなんじゃ、［シン］のマスター失格だな……」

そう言うと、俺は自嘲気味に笑った。

だけど、俺がもっと優秀だったら、こんな［シン］を犠牲にする

ような作戦なんか取らなくても、中条シドを倒せたはずだし、こんな目に遭わせることもなかったんだ。

『そ、そんなことはないのです！　マスターはいつだって［シン］のことを、一番大切に想ってくれているのです！　そんなマスターだからこそ、［シン］は……［シン］は、マスターのためにどんなことだってできるのです！』

「バカヤロウ……」

［シン］の言葉に、俺は思わず悪態を吐く。

本当は［シン］のその言葉が嬉しくて仕方ないけど、俺は、［シン］に自分を犠牲にしてまで、俺のために尽くして欲しくないんだ。

あー……なのに俺は、やってることが完全に矛盾してるし、マジでバカヤロウだ……。

「ク、ク……結局は、我は全てにおいて貴様に負けたということか……」

「いや……正直、オマエの精霊（ガイスト）は最強クラスだよ……」

「そうではない……我は、確かに貴様に負けたのだ。精霊（ガイスト）がではなく、貴様という男に……」

はは……まさかコイツが、そんなことをのたまうとは思わなかったな。

『ガイスト×レブナント』では、常に利己的で、尊大で、たとえ仲間であっても平気で切り捨て、犠牲にする、この男が。

「ククク……ハハハハハハハハ！　負けた！　我は負けたぞ！　だが……我は、今までで最も清々しい気分だ！」

両手と両脚を大の字に広げ、中条シドが嬉しそうに笑う。

そして。

「【カイロス】」

［デウス・エクス・マキナ］が【カイロス】を発動すると、自身と［シン］の頭上に金属の歯車が浮かび上がり、巻き戻された。

『はう！　怪我がなくなったのです！　元気元気なのです！』

怪我どころか、ズタズタに引き裂かれたコスチュームも全て元通りになり、［シン］が笑顔で走り回る。

「オマエ……」

俺は思わず上体を起こして中条シドを見ると。

「クク……改めて認めよう。この戦い、貴様の勝ちだ」

貴様という男に（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

2004

近衛スミのクラスチェンジ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

2005

近衛スミのクラスチェンジ

「クク……改めて認めよう。この戦い、貴様の勝ちだ」

中条シドのその言葉に、俺の胸が、かあ、と熱くなる。

何だよ……まるで憑き物が落ちたみたいな爽やかな面（ツラ）しやがって……。

「……いや、俺はサンドラと二対一で戦ったんだ。一対一なら、俺達は負けていた」

「謙遜はよせ。それは美徳にも思えるが、敗者からすれば苦痛でしかない」

う……意外にもまともなこと言いやがる……。

「だから胸を張れ。そして、この我が貴様に負けたという事実を、名誉に変えて見せろ」

ハア……コイツ、『攻略サイト』の情報とじゃ、完全にキャラが違うじゃねーか。

まあ、今から考えれば先輩だって、『攻略サイト』では氷のように冷徹で、相対する全てに対して牙を剥く……そんな設定だったな。

でも、俺の知ってる先輩は、誰よりも優しくて、面倒見が良くて、信じてくれて……。

……所詮、『攻略サイト』は攻略に関することがメインで、そのキャラやイベント自体のストーリーの掘り下げとかをするわけじゃ

ないから、ソッチの面では信用しないほうがいいかもな。

「ヨ、ヨーヘイ……それで、身体はもう大丈夫なんですノ……？」

サンドラが心配そうな表情でおずおずと尋ねる。

おっと、そうだったな。

「ああ。コイツ……いや、中条シドのおかげで、俺と［シン］の身体はもう元通りだよ」

少しでも安心させるように、俺は微笑みながらそう告げると。

「おわっ！？」

「モウ……二度と、こんな無茶はしないでくださいまシ……！」

また涙を零すサンドラが、俺に抱きついてきた。

「……悪い」

その呟いて謝ると、抱きしめる力を強くしたサンドラの背中を優しく撫でた。

『コホン』

「「ハッ！」」

［シン］の咳払いで我に返った俺達は、勢いよく離れる。

「ソソ、ソウイエバ、ア、アノ男ハドウスルンデスノ？」

顔を真っ赤にしながらアワアワするサンドラが、いつも以上にカ

タコトの東方語で捲し立てるように問いかけた。

だけど。

「あー……」

「？　どうしたんですノ？　いつもみたいに［シン］の呪符で拘束しませんノ？」

俺が呆けた声を漏らすと、その様子を見て落ち着きを取り戻したサンドラが、不思議そうに尋ねる。

「いや、中条シドには拘束するための呪符が効かないんだよ……」

「ど、どういうことですノ！？」

まあ、一言で言ってしまえば、『中条シドはイベントボスだから』ってのが理由だ。

それはプラーミャが闇堕ちした時の“柱”との戦いで、イベントボスには効かないってことは確認済みだし。おそらく、スタンなどの状態異常系の一部だけじゃなくて即死系もだろうな。

ただ……ウーン、それをどうやって説明したモンか……。

すると。

「クク……我は敗者の身。そのような真似をしなくても、今さらジタバタしないさ」

「そ、そうか……」

この潔さ、一体どうなってるんだよ。

ま、まあ、中条シドもああ言ってることだし、ここは素直に信じ

ておこう。うん。

「そ、それより、立花とプラーミャはどうなってるんだ？」

「……どちらも、戦況は拮抗してますわネ……」

サンドラが渋い表情でそう告げる。

さて……なら俺達は、あの二人に加勢……なんてことしたら、それこそ二人がキレそうだなあ……。

じゃあ、せめて激励だけしておいて、いざとなったら助太刀することにするか。

「立花！　プラーミャ！」

「「っ！」」

俺とサンドラが二人に向かってサムズアップすると、二人は口の端を持ち上げた。

「あはは！　さすがは望月くん！」

「サンドラ、見事ヨ！」

それによって勢いが増した二人が、相手に対して猛攻を仕掛ける。

「ふふ……所詮は、出来損ないのまがいもの、ということですね」

そう言うと、近衛スミは侮蔑の表情を浮かべながら、中条シドを一瞥（いちべつ）した。

しかし、戦闘前の土御門さんへの言葉や今の言動からも分かる通り、コッチの生徒会長は中条シドと違って性格悪そうだな。

一応この近衛スミも、メインヒロイン候補なのになあ……。
といっても、俺と同じ二周目以降のキャラだけど。

「あはは！　そんなこと言ってるけど、アイツなんかよりオマエのほうがよっぽど弱いじゃないか！」
「ふふ……この互角の状況で、よくそんな台詞が言えますね？」
「あは！　バカじゃないの？」

立花がニタア、と不気味に嗤う。
だけど、実際に中条シドとも戦っている立花がそう言うんだから、その通りなんだろう。

だけど。

「立花、油断するな！　中条シドと同じように、戦いの最中にクラスチェンジする可能性もあるぞ！」

いや、むしろそうだとしか考えられない。
というのも、近衛スミの精霊、［天児屋］が［伏犠］と実力が拮抗していることからも、かなりのレベルの高さだってことが分かる。

つまり、少なくともクラスチェンジの条件の一つであるレベルはクリアしていることは間違いない。

もう一つの条件であるイベントクリアとキーアイテムについては……これは、正直なところをいうと分からない。
というのも、事実としてサンドラは闇堕ちをしなくてもクラスチェンジを果たしている。

だから、この近衛スミだって何らかの方法でクラスチェンジ条件

を満たしている可能性があるってことだからな。

「うん！　分かった！」

そして立花は、俺の忠告に嬉しそうに頷く。

こうなれば、立花も警戒して不意を突かれることはないだろう。

さあ……近衛スミはどう出る？

「ふふ……木崎さんの情報は不正確なところがそれなりにありましたが、これだけは確実に当たっていましたね」

「へえー、それって何なのさ」

クスクスと笑う近衛スミに、立花が興味深そうに尋ねた。

「ええ。といっても、『“望月ヨーヘイ”は悪い意味で予想を裏切るから、気をつけろ』ってことだけですが」

オイオイ、あれほど俺のことをクソザコモブ扱いしていたくせに、やたらと高評価じゃねーか。

「ということで、これ以上無理をしても事態が好転しそうにありませんので、私はこれで失礼しますね」

「「「「「はあ！？」」」」」

そう言って踵（きびす）を返す近衛スミに、俺達は一斉に驚きの声を上げる。

オイオイ！？　ここまでやらかしておいて逃げる気か！？

「［シン］！」

『ハイなのです！』

そうはさせまいと、［シン］のスピードを活かして近衛スミの進行方向へと先回りし、その逃亡を阻止する。

「……本当に、目障りですね。これも木崎さんが言った通りです」

「はは、そりゃどーも」

僅かに眉を吊り上げる近衛スミに向けて、俺は嘲笑（ちょうしょう）を浮かべた。

そもそも、俺は今日でこのメイザース学園関連イベをキッチリ終わらせる覚悟なんだ。絶対に、カタをつける！

「いいでしょう……望み通り、痛い目に遭わせて差し上げますよ。それこそ、この私の前に立ったことを永遠に後悔するほどに」

近衛スミから表情が無くなり、ス、と目を閉じる。

そして。

「クラスチェンジ……開放」

近衛スミのクラスチェンジ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

2013

真打（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

2014

真打

「クラスチェンジ……開放」

近衛スミが静かにそう告げると、［天児屋（あまのこやね）］が幽子の渦に包まれた。

だけど、やっぱりクラスチェンジの条件を満たしていたか……。

「ヨーヘイ……どうするんですノ？」

「決まってる。コイツも倒して、全部終わらせるだけだよ」

俺は［天児屋（あまのこやね）］から視線を外さないまま、サンドラの問いかけに答える。

「ちょっと待ってよ！　彼女を倒すのはボクだよ！」

立花は、俺の言葉に聞き捨てならないとばかりに反応し、抗議した。

「はは、分かってるよ。俺達はあくまでも、この近衛スミを逃がさないようにするだけだ。だから、立花」

俺は顔を上げ、立花の翡翠（ひすい）の瞳をジッと見つめると。

「絶対に勝てよ」

「！　うん！」

俺の言葉に、ぱあ、と満面の笑みを浮かべる立花。

というか、その笑顔は完全に女子のソレだな……。

「そしてサンドラは、プラーミャと土御門さんの戦いの様子を見ておいてくれ」

「分かりましたワ！」

その間にも、［天児屋（あまのこやね）］を包む幽子の渦が徐々に薄れていき、生まれ変わった精霊（ガイスト）が姿を現わ……って。

……まあ、ここまでくると、そんなこともあり得るかとは思ったけどな。

「ふふ……これがクラスチェンジを果たした私の精霊（ガイスト）……［エルジェーベト］ですよ」

そう言うと、近衛スミは口の端を三日月のように吊り上げ、不気味に嗤（わら）った。

はは……『まとめサイト』では、近衛スミのクラスチェンジ後の精霊（ガイスト）は［春日権現（かすがごんげん）］だったはずなんだけどな……。

というか、その出で立ちも変わり過ぎだろ。

［春日権現］が十二単（じゅうにひとえ）をまとった黒髪の東方美人であるのに対し、この［エルジェーベト］という精霊（ガイスト）は、赤い髪に西洋貴族の女性が着るドレスに身を包み、優雅に羽扇で仰いでいた。

「ふふ……何故だか分かりませんがクラスチェンジ先の選択肢が二つ現れ、こちらを選ばせていただきました。だって……［エルジェーベト］のほうが、私に相応しいと思いませんか？」

「いや、思わないけど！？」

クスクスと笑う近衛スミに、俺は思わずツッコミを入れてしまった。

だって、どう見ても清楚系美人の近衛スミと、派手な西洋スタイルの精霊（ガイスト）だなんて、ミスマッチもいいとこだろ！

「あのさー……」

「「っ！？」」

恐ろしく低い声で、立花が横やりを入れてきた。

あ、コレ……メッチャ怒ってるっぽい。

「分かってるかなあ？　オマエの相手は、このボクなんだよ？　なのに、なんでボクの望月くんと嬉しそうにしゃべってるのかなあ……？」

うわあ……怒りのあまり、立花の額に青筋が浮き上がってる……。

だけど立花、俺はお前のものじゃないぞ？

「ふふ、そうですね。確かに、まずは主人公から片づけましょうか」

そう言うと、［エルジェーベト］がス、と右手を差し出した。

「【リストレイント】」

「っ！？」

突然、目の前に特殊な形状の手錠が現れ、立花の精霊（ガイスト）である［女媧］の手足を拘束した！？

「……へえ。これで身動きできないようにするってこと？」

「さあ？　どうなんでしょうね」

嬉しそうに口の端を持ち上げる近衛スミは、そんな立花を無視するかのようにプラーミャとの戦闘を続けている土御門さんの元へと近づいた。

「ふふ……最初に言った通り、あなたが負けた場合は、『近衛家』の総力を挙げて『土御門家』を排除します。役立たずを飼っておくほど、『近衛家』は暇ではありませんから」

「っ！　そんなことは分かっておるわ！」

近衛スミの言葉に、土御門さんが珍しく声を荒げる。

「ハア……人の弱みにつけ込んでいたぶるって、本当にメイザース学園の生徒会長は終わってんな」

「何を言うんですか。飼い犬を躾（しつ）けるのは、むしろ愛情というのですよ？」

「愛情？　オマエのそれは、単に人を追い込んで楽しんでるだけだろうが！」

俺は近衛スミに対して吠えるものの、全く意に介さないコイツは、やれやれと言わんばかりに肩を竦（すく）めてかぶりを振った。

「あはは、しょうがないよ望月くん。コイツは、藤堂先輩とは違うんだから」

「……へえ」

お、立花が先輩を引き合いに出したら、チョット反応しやがったぞ？

「まあなー。うちの先輩は優しくて強くて綺麗で、どこぞの生徒会

長なんざ足元にも及ばないよなー。実際、先輩と直接戦ったりしたら、アッサリ倒されるんじゃないの？」

「あはは！　言えてる！」

俺はわざと煽るようにそう言うと、立花も乗ってきてそれに続く。

「……所詮は学園長の娘というだけの、大して地位も由緒も正しくない、平民風情ですよ？　まあ、そんな彼女をそこまで慕うあなた達も平民ですが」

「え？　ひょっとしてソレ、俺達を煽ってるつもりなの？　というか、地位とか由緒とか言う前に、アンタ自身は大したことないな」

「っ！」

はは、キレやがった。

やっぱり俺って、主人公の個別パラメータみたいに、『煽り』パラメータとかあったりして。

「プ……ププ……ヨーヘイ、あまり私を笑わせないでヨ……！」

「ホ……ホホ……ッ！」

気がつくと、戦闘中であるはずのプラーミャと土御門さんがお互い手を止め、必死で笑いを堪えていた。いや、そこまで面白くないだろ。

「ハア……木崎さんがあなたを憎む理由、分かりますね」

「そう？　それよりも、そうやって俺なんかに構っていていいの？」

俺はニヤリ、と笑いながらそう言うと。

「あはは！　ホント馬鹿だね！　【渾敦】！　【檮杌】！」

立花は【渾敦（こんとん）】のスキル効果によって拘束していた手錠を外し、もう一体の魔獣が［エルジェーベト］に襲い掛かった。

だけど。

「「っ！？」」

「ふふ……本当に愚かですね。そんな幼稚な手が、この私に通用すると思っているんですから」

すると【檮杌（とうごつ）】が突然現れた無数の鋼鉄の鎖で、一瞬のうちに全身を巻かれる。

そして。

――グシャ。

骨と肉が潰れる嫌な音が響いた。

うわあ……このシーン、今日二回目なんだけど。

「ふふ……そもそも私の［エルジェーベト］のレベルは八十五なんですよ？　あなた達程度の精霊（ガイスト）では、最初から話にならないんです」

そう言うと、近衛スミがクスクスと笑う。

だけど、レベル八十五もあるのかよ……確かに、ちょっと厄介かもな……。

「このまま大人しくして、そうですね……私の靴を這（は）いつくばって舐めたら、撫でる程度で許して差し上げますが、いかがですか？」

「はは、冗談」

「そうだよ！　レベルが高くても、ボクの［女媧］だって負けてない！」
「ふふ……本当に、威勢だけはいいですね」
なおも嘲笑（ちょうしょう）を浮かべる近衛スミ。
その時。
「ふむ……今の戦いを見る限り、そのレベルに見合った強さを備えているとは思えんがな」
「っ！？」
その声に、俺は慌てて振り向く。
というか……なんでここにいるんですか……なんで、そんなに都合よく現れるんですか……！
「ふふ……みんな、よく頑張ったな」
現れたのは、団体戦の真っ最中であるはずの、俺が憧れるたった一人の女性（ひと）。
――藤堂サクヤ先輩だった。

真打（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

2022

いつだって、主人公が（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

2023

いつだって、主人公が

「ふふ……みんな、よく頑張ったな」

団体戦の真っ最中であるはずの、藤堂先輩が俺達の前に現れた。

「せ、先輩、どうしてここに？　というか、団体戦はどうなったですか！？」

「ん？　ああ……うむ、抜けてきた！」

腕を組み、先輩が凛とした表情でそう告げる……って！？

「イヤイヤ！？　そんな、抜けちゃって大丈夫なんですか！？」

「もちろんだ。それに、今は氷室くんが戦っているからな」

「氷室先輩が！？」

チョ、チョット待って！？　近衛スミの話だと、あのクソ女が加隈との試合を延々と引き延ばしてるんじゃないのか！？

「……おかしいですね。うちの木崎さんとそちらの一年男子との試合だったのでは？」

「ん？　加隈くんとあの女の試合だったら、貴様があの場から離れた後、すぐに終わったぞ？　あの女の棄権でな」

「何ですって！？」

先輩の言葉に、近衛スミも驚きの声を上げる。

ど、どういうことだよ！？　もう訳が分からなくなってきてるぞ！？

2024

「驚いたところで、それが事実だ。そして、今は氷室くんがメイザース学園の副生徒会長の、ええと……」
「……鷲尾さん、ですか？」
「そうそう、その男と戦っているぞ。ただし、氷室くんの［ポリアフ］によって、ずっと膠着状態になっているがな」

そうか……あのクソ女に関してはよく分からないが、とりあえずは氷室先輩が向こうの副生徒会長と……って。

「ひょっとして氷室先輩、その副生徒会長に手こずっているんですか？」
「いや？　むしろ氷室くんが強すぎて、向こうの男が一方的にいたぶられていたな」
「うわあ……」

いや、確かに氷室先輩の精霊（ガイスト）は、俺達の中でも最高レベルの七十九。負けるなんてことはあり得ないとは思っていたけど……それにしても、相手をいたぶるって……。

「まあ……彼女もかなり怒っていたからな。あの女と、加隈くんの試合に」
「ああー……」

なるほど……つまりは意趣返し、ってことですか……

「それで氷室くんからも目配せをされて、私は席を外してこちらへとやって来たというわけだ。彼女の分も託されて、な」
「そうだったんですか……」

かたや平気で仲間を切り捨てようとする生徒会長がいるってのに、先輩も氷室先輩も、後輩に甘いというか、何というか……。

「ははっ」

そんな二人の想いに、俺は思わずクスリ、と笑った。

「そういうことで、立花くん。君は存分にこの女を倒すがいい。なあに、この女が下手な真似をするなら、その時は青龍偃月刀（えんげつ）で一刀の下に斬り伏せてくれる」

そう告げると、先輩は近衛スミを、殺気を込めた真紅の瞳でギロリ、と睨みつけた。

はは、先輩の強さはさすがに理解してるのか、あの近衛スミもひるんでやがる。

「……つまり私は、目の前の彼を倒したところで倒される運命にある、ということですか」

「どうした？　大人しくする、とでも言うのか？」

近衛スミの呟きに、先輩が問いかけると。

「ふふ、まさか……それよりも、私と取引をしませんか？」

「取引？」

「ええ……私が彼に勝った場合は、このまま私を見逃してもらえませんか？」

「はあ！？」

コイツ、言うに事欠いて、何抜かしてんだよ！？

「もちろん、私が負けた場合は大人しくあなた達に従いますし、私の知っていることは全てお話ししますよ？　それに、仮に私が勝ったとしても、そこにいる役立たずのガラクタと没落華族は好きにして構いませんので」

「っ！　この……「よし、いいだろう」……って、先輩！？」

近衛スミに食って掛かろうとした矢先に、先輩が向こうの提案を受け入れてしまい、俺は思わず先輩を見る。

「ふふ……心配するな、望月くん。そもそも君は、彼がこの女に負けるとでも思っているのか？」

「い、いや、それに関しては立花の勝ちを疑ってませんけど……それでも！　アイツの仲間を仲間とも思ってない態度が……！」

ニコリ、と微笑む先輩に、それでも納得いかない俺は、つい先輩に詰め寄ってしまった。

「それに関しても心配はいらない。そうだろう？」

そう言って、先輩は立花を見やると。

「あはは、もちろんだよ。だから望月くん……このボクに任せてよ！　ボクが必ず、コイツに分からせてやるから！」

そう叫ぶと、立花は獰猛（どうもう）な笑みを浮かべた。

はは、そうだよな……こういう悪党ってヤツを倒すのは、いつだって主人公の役目だったな。

だったら。

「ああ……立花、お前に全部任せた！　だから……そのクズをぶちのめせ！」

俺は立花に向けて、精一杯の激励を込めて、その右手を高々と突き上げると。

「うん！」

立花は、ただ力強く頷いた。

いつだって、主人公が（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

豹変（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

豹変

「ハア……この私も、舐められたものですね……」

近衛スミはこめかみを押さえ、溜息を吐きながらかぶりを振った。

「あはは。オマエこそ、このボクを舐めすぎじゃないの？」

「当然でしょう？　ただの平民風情が、東方国の華族の頂点に立つ五摂家（せっけ）の筆頭、『近衛家』の嫡子であるこの私……近衛スミに敵うはずがないでしょう？」

まるで残念な者でも見るかのように、近衛スミは憐憫（れんびん）の眼差しを向ける。

「はは、その五摂家の筆頭様も、先輩にビビってるけどな」

「……黙りなさい」

図星を突かれたのがそんな嫌だったのか、近衛スミは唇を噛みながらキッ、と俺を睨んだ。

だったら、最初から余計なことを言わなきゃいいのに。

「……まあいいでしょう。この男なのか女なのか分からないような者は速やかに倒し、早くこの不快な場所から立ち去るとしましょうか」

そう言うと、［エルジェーベト］がス、と右手をかざした。

「【チェイン】」

「っ！？」

その言葉と共に、足元から無数の鎖が現れて［女媧］を拘束しにかかる。

これは、さっき【檮杌（とうごつ）】を潰した、あのスキル。

だけど。

「あはは！　【渾敦（こんとん）】！」

現れた一匹の犬の魔獣が自身の長い尻尾を噛み、［女媧］と鎖を囲むようにグルグルと回り出す。

すると鎖は、瞬く間に消滅してしまった。

「あはは、この【渾敦（こんとん）】はさっき見てるよね？　なのに、こんな無駄な攻撃をするだなんて、本当にバカだなあ」

「っ！　……ふふ、あまり調子に乗らないことですね。【ファラリス】！」

近衛スミがそう叫ぶと、今度は真鍮（しんちゅう）の巨大な牛が現れた。

「あはは！　これ知ってるよ！　確か、ニンゲンを中に閉じ込めて火あぶりにする拷問器具だよね？」

あー……なんか見覚えがあると思ったら……。

だけどよくよく考えてみると、この［エルジェーベト］って精霊（ガイスト）、拘束系のスキルが多いと思ったけど、そういうことか。

まあ、ある意味、性格がクソな近衛スミにはピッタリな精霊（ガイスト）だな。

あの時の『私に相応しい』って言葉も、今なら頷ける。

「あはは、本当に趣味が悪いなあ。オマエの言う華族って、みんなこんな感じなの？」
「ふふ……全てを持つ私にとって、もはや楽しみと言えば、下々の者が苦しむ姿くらいしかありませんから」
いや、サラッと言ったけど怖いなオイ！？
しかも、なんでそんなに楽し気なんだよ！？
「あはははは！　正真正銘のクズだ！」
「ふふ……行きなさい！　【ファラリス】！」
主の命を受け、【ファラリス】は［女媧］に向かって突進した。
『シッ！』
［女媧］が迎撃の体勢を取り、レイピアによる無数の連撃を繰り出す。
すると……突然【ファラリス】は［女媧］の頭上へと飛び上がり、その腹をまるで口のようにパカリ、と開けた。
そして、［女媧］を頭から飲み込んでしまった。
「ふふふふふ！　さあ！　愉快な鳴き声を聞かせてくださいね！【ヘルファイア】！」
醜く嗤う近衛スミが、【ファラリス】の胴体目がけて【火属性魔法】の上級魔法、【ヘルファイア】を放った。
当然、【ファラリス】は全身を燃え盛る炎に包まれ、文献やネット情報にあるようにその中は地獄の熱さだろう。

だけど。

「あはははははははは！　ホント、おめでたいよね！」

「っ！　なんですって！」

腹を抱えて笑う立花の姿に、近衛スミは顔を歪める。

「あはははは！　だって、ボクの［女媧］は【火属性反射】のスキルを持ってるんだよ？　【火属性魔法】での熱攻撃なんて、受け付けるはずないじゃないか！　ホラ！」

笑い過ぎて涙目になっている立花は、業火に包まれている【ファラリス】を指差した。

「っ！？」

すると、【ファラリス】の胴体に徐々に亀裂が入り始める。

おそらく【火属性反射】によって【ヘルファイア】が反射し、【ファラリス】は内部からダメージを受け続けているんだろう。

そして。

――ギイイイインンンン……ッ！

鈍い音と共に【ファラリス】は砕け、中から無傷の［女媧］が現れた。

「あはは！　これじゃあ、ただの自爆だね！」

「っ……！」

嬉しそうに笑う立花を、忌々し気に見つめる近衛スミ。

「ねえ？　オマエの精霊（ガイスト）のスキルって、こんな下らないものしかないの？　だったら拍子抜けだなあ」

まるで見下すような視線を浴びせながら肩を竦める立花。というか、煽（あお）りスキルは俺専用なんだぞ？　俺の影が薄くなるから、お前は使うのをヤメロ。

「ふ……ふふ……」

しかも、メッチャ近衛スミに刺さってるし。

見ろよ、肩まで震わせて……。

「いいですよ……？　でしたら［エルジェーベト］の最大スキルで、その可愛い顔をズタズタにしてやるよおおお！　この、クソカスがあああああああッッッ！」

うおおっ！？　近衛スミ、メッチャキレた！

というか、あの清楚で優雅なイメージはドコ行ったんだよ！？

「あはははは！　ホント、醜いなあ！　これが華族なの？　ウケル！」

「キイイイイイイイイイッッッ！」

さらに追い打ちをかけて煽（あお）る立花に、近衛スミはその綺麗な髪を掻（か）きむしり始めた。

「テメエはッ！　ゼッテェにコロスッッ！　【アイアン・メイデン】

ッッッ！」

近衛スミが絶叫に合わせ、［エルジェーベト］の頭上に、鎖で拘束されたあの有名な、棺桶のような金属のオブジェが浮かび上がった。

豹変（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

鉄の処女（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

鉄の処女

「テメエはッ！　ゼッテェにコロスッッ！　【アイアン・メイデン】ッッッ！」

近衛スミの絶叫に合わせ、［エルジェーベト］の頭上に、鎖で拘束されたあの有名な、棺桶のような金属のオブジェが浮かび上がった。

「ホラホラッ！　泣いて謝るなら今のうちだぞッ！　といっても、ゼッテェにグチャグチャにするけどなッッッ！」

異様に長い舌を出し、狂ったようにヘドバンしながら醜悪な面で嗤う近衛スミ。メインヒロインの定義とは一体……。

「あー、もうそういうのはいいからさあ……サッサとかかってきなよ」

まるで、遊んでいたオモチャに飽きたかのように冷めた表情を浮かべる立花は、クイ、と顎で促した。

「ああッ！　やってやるよッ！　行けッッ！　【アイアン・メイデン】ッッッ！」

［エルジェーベト］がス、と右手を上げると、【アイアン・メイデン】が［女媧］へと突撃した。

「あはは！　【チェンジ】！」

立花は［女媧］から［伏犧（ふっき）］へと変えると。

「【玄武】」

［伏犧］の前に、堅固な緑色の盾が現れた

――ガイイイイイイイイインンン……ッッ！

【アイアン・メイデン】と【玄武】が激突し、激しい音が鳴り響く。

「あはは！　この【玄武】は前方からの攻撃に関しては、サンドラさんの【ガーディアン】にだって負けないんだ！　そんな程度じゃ、この盾を打ち破れるものか！」

「ハッ！　それがどうしたッ！　おめでたいねッッ！」

「っ！？」

【玄武】と押し合いをしている【アイアン・メイデン】に巻きつく鎖が、まるで触手のように伸びて【伏犧】へと迫る。

うおお……あの鎖の動き、近衛シキの性格を現わしてるみたいで、超キモチワルイ。

「で？　盾が何だって？　前からの一方向しか防げないような代物、意味ねえんだよッッッ！」

近衛シキは、勝ち誇るように叫ぶ。

だけど。

「あはは。【白虎】、【青龍】」

冷笑しながら立花は二体の魔獣を召喚すると、【青龍】が迫る鎖を巻き上げ、【白虎】がその爪で断ち切った。

「なあんだ……本当に拍子抜け……っ！？」

「ギャハハハハハハハッッッ！　かかったッッッ！」

なんと、断ち切られた鎖が意思を持っているかのように［伏犠］にまとわりつき、その身体を拘束した。

「さあッ！　【アイアン・メイデン】！　その精霊（ガイスト）を取り込んじまいなッッッ！」

【アイアン・メイデン】は、その胴体をパカリ、と開き、空洞となっている内側には金属の棘（とげ）がビッシリと詰まっていた。

「ふふ……もうこうなってはオシマイですね？」

心に余裕ができたからなのか、急に豹変する前の優雅な表情を浮かべる近衛スミ。いや、今さら遅いだろ！

「ハア……それじゃ無防備が過ぎるよ。【竜の息吹】」

［伏犠］が口を大きく開け、棘（とげ）だらけの内部へ向けて【竜の息吹】を放った。

『ッッッ！？』

【アイアン・メイデン】の胴体に風穴が開き、その姿が幽子へと変わる。

「あはは、もうオシマイ？」
「ヒイッ！？」

ニタア、と嗤う立花に、近衛スミが後ずさった。

「っ！　オイ！　土御門！　この私を……近衛スミ様を助けろッ！」

近衛スミはプラーミャと戦っている土御門さんへ向けて叫ぶ。

だけど。

「っ！　む、無理じゃ！　わらわも手が離せぬ！」
「アアアアア！　使えねえッ！　グズッ！　マヌケッ！」

必死で戦っている仲間の土御門さんに対し、近藤スミは罵詈雑言を浴びせかけた。

「……もういいよ。これ以上はボクも笑えない」

そう言うと、［伏犠］がクレイモアを振りかぶると。

「終わりだよ。【朱雀】」

［伏犠］は、［女媧］の【窮奇】と並ぶ最大火力の魔獣、【朱雀】を放った。

「あ……あああ……！」

近衛スミが呆然と見つめる中、【朱雀】は［エルジェーベト］へ

と迫る。

そして。

「『ギャアアアアアアアアアアッッッ！？』」

近衛スミと［エルジェーベト］は【朱雀】の炎に包まれ、悲鳴を上げながらもんどり打って倒れた。

「望月くん！」

ぱあ、と笑顔を浮かべた立花が、俺へと振り向く。

そしてその翡翠（ひすい）の瞳は、まるで『褒めて！　褒めて！』とねだっているように見えた。

「お、おう……やったな」

そんな立花に俺もどう答えていいか分からず、とりあえず笑顔を引きつらせながらサムズアップした。

「えへへー、望月くんに褒められたよ」

いや、モジモジしながら喜ぶなよ！？

と、とにかく、近衛スミを拘束しないと。

「［シン］、頼む」

『了解なのです！』

ビシッ！　と敬礼ポーズをした［シン］は、倒れる［エルジェーベト］の傍（そば）へと寄ると、呪符を貼って拘束した。

「あああああああ！　こんなことになったのも、役立たず共のせいだ！　クソッ！　バカ！　マヌケ！」

［伏犠］の攻撃を受けてボロボロのはずなのに、近衛スミの口からは止むことなく怨嗟（えんさ）の声を漏らし続ける。

「オイ」

「クソがッ！　死ね！　死んでしまえッ……「オイッ！」」

呼びかけてもなおも悪態を吐き続ける近衛シキに、遮るように大声で叫んだ。

「とにかく、オマエはこんな真似をしでかしたんだ……ちゃんと罪を償え」

俺は近衛スミを見つめ、諭すように話しかける。

だけど。

「ギャハハハハハハハアアアッ！　馬鹿じゃねえの！　『近衛家』の力で、すぐに無罪放免になるに決まってんだろッッッ！　その時はテメエ等、全員覚えてろよ！　絶対にこの借りは返すッッ！」

「「「うわあ……」」」

そんな近衛スミの姿に、俺、先輩、立花は思わず声を漏らした。

「土御門ッ！　テメエもだ！　ここまで使えねえ奴なんざ、華族どころか平民以下なんだよッッ！　あーあ！　これで『土御門家』は潰れちまうなあ！　つーか、この私が……『近衛家』が、二度と日

の目を見られないようにして……「バ、バカヤロウッ！？」」

そう叫びながらニヤリ、と嗤う近衛スミを、俺は慌てて止める。

「……どうして、じゃ……わらわは……わらわは、自分を殺してまでこんなにも尽くしてきたのに、どうして『土御門家』ばかり苦汁をなめ続けねばならんのじゃ……っ！」

「マ、マズイッ！？」

「「ヨーヘイ！？」」

ラーミャの［スヴァローグ］のハルバードが［導摩法師］に迫ろうとする中、そんなこともお構いなしに二人の間に割って入ろうとする。

だけど……間に合わなかったみたいだ。

『ワラワハ……ワラワハアアアアアアアアアアッッッ！』

そんな絶叫と共に、土御門さんの身体が幽子の渦に包まれた。

鉄の処女（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

闇堕ち、土御門シキ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

闇堕ち、土御門シキ

『ワラワハ……ワラワハアアアアアアアアアアッッッ！』

絶叫と共に、土御門さんの身体が幽子の渦に包まれた。

「も、望月くん！」

「ヨーヘイ！」

先輩とサンドラが、俺の元に駆け寄る。

「これは、ひょっとして……」

「はい……闇堕ち、ですよ……」

そう……『ガイスト×レブナント』本編の交流戦イベにおいても、中条シドから放たれた心ない言葉によって『土御門家』の再興が途絶えたことを悟った土御門さんは、団体戦の舞台の上で闇堕ちをする。

それにしても……。

「近衛スミの奴……まるで狙ったかのように、土御門さんを揺さぶるような言葉を……」

「ヨーヘイ……？」

そんな呟きを聞いたサンドラが、心配そうに俺の顔を覗き込む。

「あ、ああ、悪い……とにかく、闇堕ちした土御門さんを救うぞ！」

「エ、エエ！」

俺達は改めて幽子の渦を見据えると、その渦が徐々に薄れていく。

そして……アメジストの瞳を漆黒に変えた土御門さんが、その姿を現わした。

『……モウヨイ……『土御門家』ノ再興ガ潰エタ今、全テ無ニ帰シテシマエ……我ガ『土御門家』ト共ニ……』

虚ろな表情でブツブツと呟く土御門さん。

その傍（かたわ）らには、当然ながら九つの柱の一柱もいた。

顔に立派な黒い髭（ひげ）をたくわえた、いかつい顔。

身長は［シン］と同じくらいだが、その体躯は筋骨隆々で、腕も丸太のように太い。

そして、その手には象徴的な手斧を携（たずさ）えていた。

あれこそが、“スヴァルトアルフヘイムの守護者”である“アンドヴァリ”だ。

『ホホホホホ！　ソノ由緒アル名前スラ残スコトモデキヌ華族ナゾ……ソンナワラワナゾ、何ノ価値ガアロウカ！　［導摩法師］！』

そんな自暴自棄な言葉を吐きながら、土御門さんは次々と【式神】を出現させる。

その数、百体以上。

「クソッ！　このまま土御門さんの【式神】を校舎の外に出すとマ

ズイ！　絶対にここで食い止めるぞ！」
「う、うむ！」
「分かりましたワ！」

俺の言葉に、先輩とサンドラ、立花が頷く。

「ク、ク……ならば、この我の力も使うがいい」
「っ！　オマエ！？」

なんと、まさかの中条シドまでもが、俺達に加勢すると言い出したぞ！？

「だ、だけど……いいのか？」
「ク、ク、構わん。それに……さすがにあの姿は、不憫だ……」

そう言って、中条シドは闇堕ちした土御門さんを見つめた。

「そうか……悪い」
「何を言う。元々、土御門は我の仲間だぞ。なら、我にはこれを収める義務がある。ただ、それだけだ」

全く……ギャップがすごすぎて、調子狂うなあ……。

「分かった！　じゃあ中条は、【式神】を全て破壊してくれ！　俺は土御門さんを……「何を言ってるノ。彼女は、私（ヤー）の相手ヨ」」

俺の言葉を遮ってそう告げると、プラーミャが俺を一瞥した。

「私（ヤー）は、彼女と戦ってるノ。ヨーヘイは邪魔しないデ」
「っ！　だ、だけど状況が……「同じヨ。それニ……彼女を見てい

ると、イラつくのよネ」」

プラーミャはなおも俺の言葉を遮り、今度は土御門さんを睨んだ。

「プ、プラーミャ……？」

「ねえヨーヘイ。華族って、要は貴族ってことよネ？」

「あ、ああ……そうだけど……」

プラーミャの質問の意味が分からず、俺は呆けた表情で頷く。

「フフ……だったら、なおさらこの私（ヤー）が教えてあげないト」

「へ……？　い、一体何を……？」

「決まっているワ。貴族の矜持ってヤツをヨ」

そう言うと、プラーミャの精霊（ガイスト）、［スヴァローグ］が巨大なハルバードを廊下に叩きつけた。

「ヨーヘイ！　コッチは私（ヤー）に任せテ、アナタはサッサとあの幽鬼（レブナント）を倒すのヨ！」

「っ！　あ、ああ！」

プラーミャに発破をかけられ、俺はアンドヴァリと対峙する。

さあ、まずはコイツを……って！？

「せ、先輩！？」

「ふふ……みんな、よくやってくれた。そして、プラーミャも見事な気迫だ。このような後輩達の姿を見せられては、生徒会長であり上級生でもある私として全力で応えるべきだろう」

俺とアンドヴァリの間に立つ先輩が、俺に背中を見せながらそう

告げる。

「［関聖帝君］」

『……（コクリ）』

先輩に召喚された［関聖帝君］が先輩の隣に並び立つと、青龍偃月刀の切っ先をアンドヴァリへと向けた。

「聞け！　“柱”よ！　貴様はこの藤堂サクヤと［関聖帝君］が一刀の下に斬り伏せ、その全てを私達の糧としてくれる！」

闇堕ち、土御門シキ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

不穏な言葉（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

不穏な言葉

「聞け！　“柱”よ！　貴様はこの藤堂サクヤと［関聖帝君］が一刀の下に斬り伏せ、その全てを私達の糧（かて）としてくれる！」

先輩の隣に並び立つ［関聖帝君］が、青龍偃月刀（えんげつ）の切っ先をアンドヴァリへと向け、先輩が咆哮（ほうこう）した。

「はは……すげえ……！」

そんな先輩の背中を眺めているだけで、俺の心が震える。

やっぱり、俺の憧れの女性（ひと）はこうじゃなきゃな！

「先輩！　そんな幽鬼（レブナント）、圧勝してください！」

俺は先輩に向かって拳を突き上げ、精一杯の激励をすると。

「もちろんだ！　だから望月くん……私を、見守ってくれ！」

先輩は力強く頷き、再度アンドヴァリを見据えた。

「では……行くぞ！」

［関聖帝君］が青龍偃月刀を肩に担ぐと、アンドヴァリに向かって突進する。

途中、［導摩法師］の【式神】が数体、その進路を遮ろうとするが。

「邪魔だあああああああああッッッ！」

先輩と［関聖帝君］は羽虫でも振り払うかのように青龍偃月刀を横薙ぎにすると、まさに紙切れのように【式神】は両断され、元の人形（ひとがた）の紙となった。

「むうん！」

そして、アンドヴァリの前へとたどり着いた［関聖帝君］は、青龍偃月刀をその脳天へと振り下ろす。

――ガキンッッッ！

アンドヴァリは手斧でそれを受け止め、激しい金属音が響いた。

「ふふ……どうやら力自慢の幽鬼（レブナント）のようだが、果たして、この［関聖帝君］の相手が務まるのか見ものだな」

先輩が口の端を持ち上げてそう告げると、［関聖帝君］の青龍偃月刀を持つ手に力が入る。

――グ……ググ……。

『……ッ！？』

「どうした？　その程度か？」

余裕の表情の先輩と［関聖帝君］に対し、アンドヴァリはその表情が険しくなる。

とはいえ、［シン］と同じサイズの小さな身体で、［関聖帝君］の青龍偃月刀と拮抗してるだけでも、充分にすごいんだけどな。

［関聖帝君］は青龍偃月刀をさらに押し込み、とうとうアンドヴァリが片膝をついた。

すると。

「む！？」

突然、アンドヴァリの姿が掻き消え、青龍偃月刀が勢い余って廊下へと突き刺さる。

ア、アンドヴァリは一体どこに……って！

「先輩！　上です！」

俺は大声で叫んで天井を指差すと、そこには、あの小さな身体とは打って変わり、巨大な銀色の魚が天井にその身体をめり込ませながら浮遊していた。

あれは、アンドヴァリが持つスキルの一つ、【アスピドケロン】だな……。

「ほう……どうやら、自ら三枚に下ろされたいみたいだな」

いや、先輩は料理が下手……ゲフンゲフン。

どうやら俺の視線に気づいたらしく、先輩はジト目で俺を睨んだ。

「……まあいい。的が大きくなった分、やりやすいというものだ！」

『ッ！』

魚となったアンドヴァリが、鋭利な牙を剝き出しにして［関聖帝君］に襲い掛かる。

――ギインッッ！

だけど、青龍偃月刀によってアッサリとその牙を折られ、アンドヴァリはすぐに口を塞いでしまった。

というか、そもそもアンドヴァリじゃ先輩の相手としては力不足か。

「はあああああああああああああッッッ！」

――斬ッッッ！

［関聖帝君］の青龍偃月刀の軌道が半円を描くと、それから一瞬遅れ、アンドヴァリの胴体が中心から半分にずれる。

「ふふ……他愛のない」

その言葉と共に、アンドヴァリが半割りとなった。

「っ！　先輩！　まだです！」

「む！？」

開きになったアンドヴァリの姿がまた掻き消えたかと思うと、元の姿となって先輩の前に現れる。

とはいえ、やはり先程の一撃でダメージを負っていたようで、その額から血を流していた。

『……ッ！』

おそらく、自分に勝ち目がないことも悟っているんだろう。アン

ドヴァリは、忌々し気に先輩を見つめていた。

でも……アンドヴァリには、ある意味最悪のスキルである【アンドヴァラナウト】がある。

当然、アンドヴァリは最後の足掻(あが)きとして使ってくるだろう。

まあ、そうはさせないけどな。

「先輩！　ソイツの左手にある指輪に注意してください！　それは、対象の敵に対して腐敗の呪いをかけるスキルを持っています！」

『ッ！？』

はは、俺にネタ晴らしされて、目を見開いてやがる。

というか、俺の大事な先輩をそんな目に遭わせるわけねーだろ。

「ふふ……全く、余計なことを……」

そう言って、先輩はやれやれといった表情でかぶりを振った。

『はう！　でもでも、藤姉さまの口がゆるっゆるなのです！　分かりやすいのです！』

「あうあうあう！？　シシ、［シン］！？」

［シン］に指摘され、真っ赤な顔でアワアワする先輩。

ああもう！　本当に先輩は、可愛いなあ！

「あう！　こ、これ以上は時間の無駄だ！　これで……終わりだあああああああああ！」

――グシャアッッッ！

とうとういたたまれなくなった先輩は、まるで誤魔化すかのように青龍偃月刀でアンドヴァリの脳天を抉る。うん、アンドヴァリにとっては、完全にとばっちりだ。

そしてアンドヴァリが“ウルズの泥水”へと変化し、「関聖帝君」……ひいては、その中に宿る種へと吸収されていった。

「っ！？　……うう」

……いくら“シルウィアヌスの指輪”で吸収量が半分に抑えられるといっても、それでも先輩の身体に負担がかかることは間違いないんだ。

だから。

「う……も、望月くん……」

「はは……先輩を守るのは、俺だけの特権、ですよ」

『はう！　この［シン］に任せるのです！』

俺と［シン］は膝をつく先輩の前に立ち、居並ぶ【式神】をけん制する。

「あう……ふふ、ではお願いするとしよう……」

そう言うと、先輩は嬉しそうに目を細めた。

その時。

「……可憐だ」

【式神】を薙ぎ払いながらボーッとした表情でコッチを見ている中条シドから、不穏な言葉が聞こえた。

……よし、全部終わったら、キッチリ話をしようじゃないか。

不穏な言葉（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

プラーミャの姿（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

プラーミャの姿

『はうはう！　まとめてやっつけてやるのです！　【雷】！』

先輩を眺めながら頬をほんのり赤くしている中条シドはさておき、俺と［シン］は先輩を守りつつ、次々と現れる【式神】を撃破する。

「食らいなさイ！　【裁きの鉄槌】！」

「あはは！　やっちゃえ！　【白虎】！」

サンドラと立花も、俺達と反対側で【式神】を次々とねじ伏せていた。

とにかく、何としてでも【式神】をここから外に出さないようにしないと……。

そんな中。

「ギャ！？　痛っ！？　こ、このおおお！　この私を誰だと……っ！？　あああああ！？　もう踏むなあああああ！？」

［シン］の呪符で一切身動きが取れない近衛スミは、【式神】に好き放題踏まれ続けていた。

あー……まあアイツは、少しは痛い目に遭ったほうがいいんじゃないかな？　それに、土御門さんとしても図らずも意趣返しができたし。闇堕ちから元に戻ったら、土御門さんに教えてあげよう。

「それにしても……」

俺はチラリ、と土御門さんを見やると。

『ホホホホホ！　壊レロ！　壊レテシマエ！　全部……全部ナクナッテシマエバ良イノジャ！』

完全に自暴自棄になった土御門さんが、次々と【式神】を出現させている。それだけ、彼女の闇が深かったってことだろう。

そんな中。

「フン！　いつまでもウジウジト……到底、貴族らしくないわネ」

プラーミャは鼻を鳴らしながら、［スヴァローグ］のハルバードに炎をまとわせて次々と薙ぎ払う。

元々は人形（ひとがた）の紙切れでしかない【式神】は、面白いように燃え盛っては消滅していった。

『ホホ……目障リジャノウ……』

「アラ？　いたノ？」

扇で口元を隠しながら睨みつける土御門さんを、プラーミャは得意の小馬鹿にした表情で尊大に眺める。

はは……プラーミャは相変わらずブレないなあ……。

『ホ。ナラバ、ワラワノ【式神】ノ中デモ、特ニ選リスグリデモ出ソウカノウ？』

そう言うと、［導摩法師］がその両手をプラーミャに向けてかざした。

『イデヨ。【酒呑童子（しゅてんどうじ）】、【温羅（うら）】』

宙に浮く二枚の人形（ひとがた）の紙が幽子の渦に包まれ、その中から屈強な鬼が現れる。

しかも、これまでの【式神】と比べてもその違いが明らかに分かるほど、圧倒的な威圧感を誇りながら。

あれこそが、［導摩法師］が使役する【式神】の中で最も強い鬼。

言い換えれば、あの二体の鬼さえ倒せば、土御門さんは万策が尽きることになる。

「プラーミャ！　その二体の鬼に気をつけろ！　ソイツ等は……強い」

俺はたまらずプラーミャにアドバイスを飛ばす。

だけど。

「フフ……ヨーヘイは相変わらず心配性ネ。そういうのは、サンドラだけにしなさいナ」

そう言ってクスクスと笑うプラーミャ。

「いや、お前だって俺の大切な仲間なんだから、心配して当然だろ！」

「ハア……本当にモウ、仕方ないわネ……そんなだから、私（ヤー）まで勘違いしそうニ……（ゴニョゴニョ）」

呆れた表情で、ヤレヤレと溜息を吐きながら呟くプラーミャ。だけど最後のほうは全然聞き取れなかった。

「とにかク！　ヨーヘイはソコで黙って見てなさイ！」
「お、おう……」

結局プラーミャの剣幕に押され、俺は大人しく二人の戦いを見守ることにした。

『ホホ……オ主、口元ガ緩ンデオルワエ？』
「ッ！　余計なお世話ヨ！　それよリ……覚悟しなさイ！」

そう叫ぶと、［スヴァローグ］はハルバードを肩に担いで【酒呑童子】と【温羅】へと突進する。

『ホホホホホ！　【酒呑童子】！』

【酒呑童子】は腰にぶら下げている瓶（かめ）を手に取ると、一気にあおる。
そして、口から霧のようにして［スヴァローグ］に一気に吹きかけた。

「ウグッ！？　こ、これハ……！？」
『ホホ……ドウジャ？　【酒呑童子】ノ酒ノ味ハ』
「酒……ッ！？」

【酒呑童子】の酒を浴びてしまった［スヴァローグ］は、その効果によって酩酊（めいてい）状態になってしまった。

『ホホホホホ！　存外、酒ニ弱イ奴ヨノウ！　ソレデハ、到底華族ニハナレヌエ？』
「クッ……い、言うらなイ……！」

あ……プラーミャの呂律（ろれつ）が怪しい……。

いや、［スヴァローグ］のステータスを見たことがないからハッキリとは言えないけど、どうやら［イリヤー］の時の【状態異常弱点】は、そのまま引き継がれてるっぽいな……。

『ホホ……ルーシノコトハ分カラヌガ、ソノ様子デハ貴族トヤラモ大シタコトナサソウジャノ』

「アに言ってるノ……所詮、落チブレ貴族のくせにイ……」

プラーミャは舌足らずになりながら土御門さんを煽（あお）る。だけど、やはりその部分が彼女の逆鱗のようで、土御門さんはその表情をさらに険しくさせた。

『……ソノヨウナ状態デ言ッテモ、説得力ガナイワエ？』

「フフ……別に、私（ヤー）ロこの状態と、貴族ワ関係ないれショ？　そんなことよりイ……」

琥珀色の瞳をとろん、とさせながら、プラーミャは土御門さんを指差す。

「アナタ……ずっと華族ガー、とか、『土御門家』ガー、とか言ってるけロ、アナタ自身から貴族としての気概が感じられないロヨ……！」

『ナンジャト！』

さすがに今の言葉は聞き捨てならなかったのか、土御門さんはもの凄い剣幕でプラーミャに向かって吠えた。

「らっテ、そうれショ？　アナタ……薄っぺらいのヨ。さっきから言ってることハ、『土御門家』の再興がダメになって、拗（す）ねてばか

リ。アナタ自身から、貴族としてロ姿が見えないのヨ」
『ッ！　オ主ニ……ルーシ帝国ノ名門貴族ノオ主ニ、コノワラワノ屈辱ガ分カッテタマルカアアアアアアッッッ！』
そう叫ぶ土御門さんの漆黒の瞳から、大粒の涙が溢(あふ)れ出す。
華族としての、その誇りを傷つけられて。
これまでの、自分の全てを否定されて。
「分からラいわネ。それニ……私(ヤー)は口で説明するのは苦手なのヨ」
プラーミャは酔ってフラフラの身体を奮い立たせ、力強く廊下を踏みしめると。
「だかラ、私(ヤー)は示すノ！　私(ヤー)のこの姿デ！」
ハルバードの切っ先を［導摩法師］へと向け、プラーミャは叫んだ。

プラーミャの姿（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

貴族の矜持（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「だかラ、私（ヤー）は示すノ！　私（ヤー）のこの姿デ！」

酔ってフラフラの身体を奮い立たせ、力強く廊下を踏みしめると、ハルバードの切っ先を［導摩法師］へと向けてプラーミャが叫んだ。

『ホホ……！　ソノ無様ナ姿デヨク言ウノウ……！』

「ウルサイワネ！」

カラカラと嗤（わら）う土御門さんに、プラーミャはバツの悪そうな表情で悪態を吐いた。

だけど実際のところ、あんな酩酊（めいてい）状態で戦い続けるのは危ないだろ。

ハア……全く。

「立花！　今すぐ［女媧］の【渾敦（こんとん）】で、プラーミャの状態異常を取り除いてくれ！」

「望月くん？　……分かったよ！」

俺の指示を聞いて一瞬不思議そうな表情を浮かべたが、プラーミャの様子に気づいた立花は、即座に【渾敦（こんとん）】を呼び出してプラーミャの酩酊（めいてい）状態を回復した。

「フフ……ヨーヘイもアオイも、余計なことヲ……」

そんな悪態吐いてるけど、お前、口元が緩んでるぞ？

「サア……行くわヨ！」
『ッ！　【酒呑童子】！　【温羅】！』
さっきと同じように、［スヴァローグ］が一気に突撃する……って、それじゃさっきと同じじゃねーか！　また同じ目に遭うだろ！
『ホホホホホ！　オ主ノ言ウ貴族トヤラハ、馬鹿ミタイニ繰リ返スコトナノカエ？』
「フフ、それはどうかしラ？　【ヴァルカン】！」
［スヴァローグ］の周囲を囲むように火柱がそびえ立ち、一気に温度が上昇する。
『ッ！　【酒呑童子】！　先程ト同ジ目ニ遭ワセテヤルノジャ！』
土御門さんの指示を受けた【酒呑童子】は、口に含んだ酒を霧状に吹き付ける。
だけど。
――ジュッ。
霧状の酒は、【ヴァルカン】の熱で蒸発してしまった。
「フフ……何かしタ？」
『ッ！？』
ニタアア、と口の端を吊り上げたプラーミャは、［スヴァローグ］のハルバードで【酒呑童子】の胴体を真っ二つにした。

『ククッ！　【温羅】！』

今度はもう一体の鬼、【温羅】がその口を大きく開くと。

『アアアアア「ウルサイ」……ッ！？』

耳をつんざくような絶叫を始めたかと思った瞬間、首を真横に刈られ、ごろん、と廊下に転がった。

「フン」

ハルバードを廊下に叩きつけ、腰に手を当てながらプラーミャが鼻を鳴らす。

はは……プラーミャの奴、やっぱり強え……！

『クソッ！　ナラバ！』

すると、［導摩法師］が大量の人形（ひとがた）の紙を放り投げ、まるで紙吹雪のように舞った。

そして、それらを全て【式神】へと変えると、俺達と戦っている【式神】を含め、一斉にプラーミャへと結集させる。

『ホホホホホホホ！　コレダケノ数ノ【式神】ヲ相手ニシテ、ソレデモナオソンナ態度デイラレルカノ！』

「クソッ！　プラーミャ、今行く……「来るナ！」」

助太刀しようと一歩前に足を踏み込んだ瞬間、プラーミャに拒否されてしまう。

「なんでだよ！　さすがにこの数、お前一人じゃ……「ソレが余計だって言ってるのヨ！」」

なおも食い下がる俺に、プラーミャは言葉を遮ってなおも拒絶した。

「コレは私（ヤー）の戦いヨ！　ヨーヘイでモ……たとえサンドラであってモ、私（ヤー）の戦いを汚さないデ！」

「プラーミャ……」

圧倒的な【式神】を前にしながら、プラーミャはその琥珀色の瞳に強烈な意思を込めて、ただ不敵に笑う。

そんなプラーミャの姿に、その背中に、俺は気高さと誇りを感じた。

はは……これがお前の言ってた、貴族の矜持ってヤツかよ……！

でも、これくらいなら許してくれるよな？

「プラーミャ！　そんな紙切れ共、全部燃やし尽くしちまえ！」

俺は大声で叫んでプラーミャを激励する。

「フフ……確かにサンドラの言う通り、ヨーヘイって大バカよネ」

「ウルセー！」

クスクスと笑いながらそんなことを言ったプラーミャに、俺も笑顔で抗議した。

そして。

「サア……蹴散らしてしまいなさイ！　［スヴァローグ］！」
『（コクリ！）』

プラーミャの言葉に強く頷くと、［スヴァローグ］はハルバードを豪快に振り回し、一薙ぎで一気に五体の【式神】を屠る。

「アアアアアアアアアアアッッッ！」

そのままプラーミャが雄叫びを上げながら、次々と【式神】を斬り裂き、燃やし、蹂躙して行く。

――ドカッ！

「クッ！？　コノオオオオオオオオオオ！」

それでも多勢に無勢。【式神】の攻撃は徐々に［スヴァローグ］へと届き始め、プラーミャが傷ついていく。
そんなアイツから、俺は片時も目を離さなかった……いや、離せなかった。

あの、プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤっていう、強烈に燃え輝く高貴な光から。

そんなプラーミャと【式神】との一進一退の攻防がしばらく続き、そして。

「ハアッ……ハアッ……！」

残り数体を残し、【式神】は全て焼かれ、燃え尽きてしまった。

『ホ……ホホ……オ主、バケモノカ……！？』

そのあまりの凄まじさに、闇堕ちした土御門さんも驚愕の表情を浮かべて思わず唸(うな)る。

「ハアッ……バケモノ？　失礼ネ……私(ヤー)は“プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ”。ただの貴族ヨ」

貴族の矜持（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

つかんだ勝利（前書き）

ご覧いただき、ありがとございます！

つかんだ勝利

「ハアッ……バケモノ？　失礼ネ……私（ヤー）は“プラーミャ＝レイフテンベルクスカヤ”。ただの貴族ヨ」

肩で息をし、身体中を傷だらけにしながらその両脚で踏みしめるプラーミャは、力強くそう言い放った。

『ホホ……ノウ？　オ主ノ言ウ貴族トハ、ドノヨウナモノナノジャ……？』

土御門さんは震える声でプラーミャに尋ねる。
まるで、縋（すが）るように……まるで、追い求めるように。

「……フン、決まってるワ。貴族は、生きざまヨ」
『生キザマ……』

プラーミャの言葉を、土御門さんが反芻（はんすう）した。

「そうヨ。貴族はネ……その生きざまで、自身を……その名を輝かせるの。家名なんて、その自身を輝かせてきた証でしかないのヨ」
『ッ！？』

その言葉に、土御門さんが息を飲む。

「ハッキリと言ってあげル。アナタのしていることは、ただ落ちぶれた何の意味もない家名に縋（すが）って、不幸な自分に自己陶酔してるだケ。だからラ、アナタは貴族として薄っぺらいのヨ」

清々しいくらいにハッキリと言い切ったプラーミャ。
だけど、そのプラーミャの言葉が、その姿が、この俺の魂を震わせた。

「フフ……ヨーヘイ、ワタクシの妹って、カッコイイでショ？」
「サンドラ……」

いつの間にか隣に来ていたサンドラが、微笑みながら俺の顔を覗き込む。

「ふふ……あの姿、まさに貴族、だな……」

どうやら無事に“ウルズの泥水”の吸収を終えた先輩も隣に来て、そう呟いた。

「はは……本当に、俺達の仲間はカッコイイな……！」

何だよ……こんなの、『攻略サイト』に書いてあった、土御門さんを闇堕ちから救う方法なんかよりも、よっぽどスゲエじゃねーかよ！

『ホ……ホホ……ワラワノ今マデハ、一体……』

土御門さんは漆黒の瞳から一滴（ひとしずく）の涙を零（こぼ）し、力なく膝から崩れ落ちる。

「フン、知らないわヨ。タダ……このままじゃアナタもモヤモヤしたままだろうからラ、キッチリと終わらせてあげるわヨ」
『……エ？』

そう言ってニヤリ、と口の端を持ち上げるプラーミャを、土御門さんは呆けた表情で見上げた。

「フフ……一から出直すのネ。別に、今から始めても遅いなんてことはないんだかラ……だかラ」

［スヴァローグ］はハルバードを構え、たたずむ［導摩法師］の頭上へと飛び上がると。

「これまでの下らないしがらみモ！　アナタの間違った想いモ！　この私（ヤー）が全部断ち切ってあげル！　【絨毯（じゅうたん）爆撃】！」

［スヴァローグ］の手に持つハルバードが残像となって無数に展開し、一斉に［導摩法師］へと放たれた。

「『アアアアアアアアアアッッッ！？』」

土御門さんと［導摩法師］は、悲鳴を上げながら吹き飛ぶ。

い、いや、土御門さんもう戦意喪失してたじゃん！？

「プ、プラーミャ、その……やり過ぎ……「ナニ、ヨーヘイ」……い、いえ、何でもないです……」

おずおずと声を掛けるが、プラーミャにギロリ、と睨まれてそのまま引き下がる俺。

「フン！　大体、こうでもしないと彼女も納得できないじゃないノ！」

そう言って、プラーミャは倒れる土御門さんを一瞥（いちべつ）した。
ま、まあ、プラーミャの言う通りかもしれないな……。

「ホラ、意識はあるんでショ？」
『ウ……ウウ……』

うめき声を上げながら、土御門さんはゆっくりと顔を動かす。

『ホ……ナ、何トモ容赦ナイ、ノウ……』
「何言ってるノ。ちゃんと手加減してあげたわヨ」

プラーミャが軽く息を吐き、フ、と表情を緩めた。

『ジャガ……オ主ノ言ウ通リジャ……ワラワハ、『土御門家』ノ再興トイウ一族ノ悲願ヲ果タソウト焦ルアマリ、何モ見エテナカッタノジャナ……』
「アラ？　気づいて良かったじゃなイ。そうじゃなかったらアナタ、あんな女に成り下がっていたわヨ？」

そう言うと、プラーミャは【式神】に踏まれ続けて気を失った近衛スミを指差す。

『ア、アレハサスガニ、ワラワモ嫌ジャノウ……』
「でショ？」
『ホ、ホホ……ホホホホホホホホホ！』

肩を竦（すく）めておどけるプラーミャを見ながら、土御門さんはぽろぽろと涙を零（こぼ）し、大声で笑った。
憑き物が落ちたかのような、清々しい表情で。

そして……その漆黒の瞳も、いつしか綺麗なアメジストの瞳に戻っていた。

「ハア……これで、交流会イベをはじめとしたメイザース学園関連のイベを、全部叩き潰せた、かあ……」

「も、望月くん！？」

「ヨーヘイ！？」

俺はそう呟くと、急に力が抜けてへたり込んでしまった。

「全く……君はいつもいつも、頑張りすぎるのだ……」

「本当ですワ……チョットは自分のことも、大切にしてくださいまシ……」

「あははー……」

先輩とサンドラにたしなめられ、俺は思わず苦笑する。

でも……これで俺は、ただ『ユグドラシル計画』だけに集中……いや、まだ問題が色々あったな。

クソ女……木崎セシルが、どうして俺達の情報を知っているのか。

他にも、伊藤アスカを操って俺にけしかけた奴の存在。

ハア……なんでゲーム本編よりもややこしいことになってるんだよ……。

俺はそんなことを考え、つい頭を抱えそうになる。

だけど。

「望月くん……」
「ヨーヘイ……」

心配そうに見つめる二人を見て、俺はその手を引っ込めた。

そうだな……今日のところは、これでよしとしよう。

そして、今はみんなに感謝しながら、喜びを分かち合おう。

――この、俺達全員でつかんだ勝利を。

つかんだ勝利（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

揚羽蝶紋付き扇（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『はうはう！　食らうのです！　【裂】！』
『ギャウンッ！？』

レベル三十である幽鬼（レブナント）、“ブロンズウルフ”が［シン］の呪符で倒されると、その姿を幽子とマテリアルへと変える。

『はう！　ここの幽鬼（レブナント）は弱いのです！　楽勝なのです！』

そう言って［シン］は胸を張ってエッヘン、と自慢した。
まあ、確かに［シン］の言う通り、この“南山（みなみやま）領域（エリア）”の攻略難易度は“グラハム塔領域（エリア）”と同じ。俺達じゃ楽勝なのも当たり前だ。

『ですけど、こんなところに来てどうするのです？　しかも、藤姉さまやアレク姉さまも一緒じゃないのです』

［シン］はコテン、と首を傾けながら尋ねる。

「はは……実はこの領域（エリア）って、私有地なんだよ。つまり……まあ、俺達は泥棒と一緒、かなあ……」

そう告げると、俺は頭を掻（か）きながら苦笑した。

『はうはうはう！？　ひょ、ひょっとしてマスターと［シン］は犯罪者なのですか！？』
「シッ！　声が大きい！」
『ムグッ！』

驚いて大声で叫ぶ［シン］に静かにするよう指示すると、察した［シン］は両手で慌てて口を押えた。

だけど……実際そうなんだよなあ……俺達がやってることは犯罪行為で、だからこそ先輩とサンドラを巻き込めないわけで……って。

ま、まあ、先輩に関しては大丈夫ではあるんだけど。

『ど、どうしてこんなことをしたのですか……？』

［シン］がオニキスの瞳を潤ませ、上目遣いで俺を見つめる。

「そ、それは……ここには、どうしても必要なアイテムがあるんだよ……」

そう……この“南山”領域（エリア）には、今の俺にとって重要なアイテムがある。

それが、『揚羽蝶（あげはちょう）紋入り扇』というキーアイテムだ。

『はう……そのアイテムを手に入れて、どうするのです？』

「決まってる。土御門さんに渡すんだよ」

実は、『揚羽蝶（あげはちょう）紋入り扇』こそが、土御門さんがクラスチェンジを果たすための条件なのだ。

今日戦った時の印象を見る限り、必要レベルも申し分なさそうだし、それさえあればクラスチェンジがいつでも可能になるはず。

「……といっても、今じゃ『攻略サイト』に書いてある内容と違っていたりすることも結構あるし、確実に必要かって言われれば微妙なんだけど」

『そ、そうなのですか？　だったら、まずはクラスチェンジができ

るのか、聞いてからでもよかったのです？』

「だけど、そのアイテムはクラスチェンジのためのキーアイテムという以外にも、もう一つ大事な役割があるんだ」

というか、俺にとってむしろソッチこそが本命。

ずっと『土御門家』を再興することだけをよりどころとしていた土御門さんは、その再興に当たって最も必要となるもの……“家紋”を求め続けているのだ。

だって、華族にとって“家紋”こそが、華族であることの証たりえるのだから。

「はは……今日のプラーミャの言葉とは、完全に真逆ではあるんだけどな。だけど……この東方国において、その家紋がないことには家族としての再興は成し得ないんだ」

あの『攻略サイト』によれば、『土御門家』の家紋である『揚羽蝶紋』を手に入れたことが足掛かりとなり、三年生の春には再興を見事に果たしたことが、『ガイスト×レブナント』のエピローグで語られるらしい。

だから。

「土御門さんがうちの学園に転校してくる前までに、そのアイテムを何としてでも入手する必要があるんだ……って」

そこまで説明すると、何故か［シン］が俺をジト目で見つめていた。

「え、ええと……？」

『はうう……マスターは、またそうやって無自覚に……』

その呟きに、［シン］が何を危惧しているのか気づく。

あー……確かにこれを主人公が直接渡すことで土御門さんの恋愛フラグが立ち、土御門ルートへと発展するんだよなあ……。

「はは……一応、氷室先輩の時みたいな失敗はするつもりはないよ」

『……本当なのです？』

「おう！」

［シン］はなおも疑いの視線を向けてくるが、俺はドン、と胸を叩いてそれを示す。

ふっふっふ……もちろん俺もちゃんと考えているとも！

「ま、そういうことだから［シン］は心配するな。大体、俺はハーレム主人公なんかにこれっぽちも興味ないんだよ。そういうのは、ラノベの世界だけで充分だ」

『はう……悪い予感しかしないのです……』

チクショウ！　信用されてねえ！

「き、気を取り直して……ホラ、もうゴールだぞ」

俺は目の前にある御殿を指差して［シン］に告げた。

あの御殿の中には、領域（エリア）ボスである“義貞”がいる。

といっても、ここの領域（エリア）ボスのレベルは三十五だから、まあ問題はないだろうけど。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩く。

「さあ！　領域（エリア）ボスを倒してアイテムを入手したら、ここからとっとと出るぞ！」

『ハイなのです！』

そして、俺と［シン］は御殿に足を踏み入れると。

『……』

部屋の中央に、胡坐をかいて武将風の姿をした幽鬼（レブナント）がいた。

「［シン］！　先手必勝だ！」

『了解なのです！』

俺達の姿を補足した領域（エリア）ボスがゆっくりと腰を上げるが、それよりも先に［シン］が呪符を何枚も貼り付けていく。

『食らうのです！　【裂】！　【雷】！』

『ッッッ！？』

大量の呪符が一斉に発動し、稲妻と共に領域（エリア）ボスの身体がズタズタに切り裂かれた。

「はは……ちょっとやり過ぎな気もするけど……まあいい！　［シン］！　このまま一気に片づけちまえ！」

『それー！　なのです！』

ようやく腰に佩（は）く太刀に手を掛けた領域（エリア）ボスだけど、それを鞘（さや）か

ら抜き切ることはなかった。

何故なら。

『はうはうはう！　【凍】！』

それよりも先に、［シン］は呪符で領域（エリア）ボスの全身を凍らせていたから。

そして。

『はう！　寒さから解放してあげる［シン］は優しいのです！　感謝するのです！　【爆】！』

『ガガガガガガガガッッッ！？』

トドメとばかりに大量の呪符が爆発し、結局領域（エリア）ボスは一度もターンを与えられないまま、その姿を幽子とマテリアルに変えた。

『はう！　マスター！』

「はは！　よくやった！」

俺の胸に勢いよく飛び込んできた［シン］を受け止めると、その黒髪をガシガシと撫でた。

『えへへー』

嬉しそうにはにかむ［シン］を抱きかかえたまま、俺は奥へと進んで台座に恭しく鎮座されている木箱の蓋を開ける。

「よし！　アイテムゲット！」

中に入っていた『揚羽蝶紋入り扇』を手に取り、俺はグッ、と拳を握った。

『はう！　あとはマスターが変なフラグを立てないことを祈るだけなのです！』

「だから立てないっつーの！」

俺は［シン］にツッコミを入れつつ、口の端を持ち上げる。

でも。

「その前に、明日の打ち上げが怖い……」

そう呟くと、俺は思わず頭を抱えた。

揚羽蝶紋付き扇（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

不安と推測（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

不安と推測

「……もう。本当は私が戦うところを見て欲しかったのに」
「あははー……」

メイザース学園との交流戦及び団体戦が行われた次の日の振替休日。

ルフランでガトーフレーズにフォークを突き刺したまま口を尖らせる悠木に、俺は苦笑いしていた。

「ふふ……まあ、そう言ってあげないでくれ。彼も、なかなか大変な思いをしていたのだから」
「……そ、それは分かってますけど……」

先輩の助け舟のおかげで、何とか矛を収める悠木だけど……うん、絶対に納得してないだろ。

「ふふ……ですが、確かに私の雄姿を見ていただけなかったのは、少々残念ですね」

そう言うと、氷室先輩はクスクスと笑いながら紅茶を口に含む。
いや、氷室先輩、一応最後のトドメを刺す場面にはちゃんといたじゃないですか……。

というか、先輩の連絡で駆けつけた“ＧＳＭＯ（グスモ）”に中条シドと近衛スミ、そして土御門さんを引き渡してから会場に戻ると、なんと氷室先輩はまだ試合を継続中だったのだ。

ただ、対戦相手のメイザース学園生徒会副会長である鷲尾イオリは既にボロボロの状態で、何度もギブアップしようと試みるも氷室先輩はそれを許さず、［ポリアフ］の【スナイプ】でその口を閉じさせていたし……。

で、ならばとわざと倒れてＫＯ負けを狙うけど、同じく【スナイプ】で無理やり身体を起こされてしまっていたし……。

俺達が到着してようやく解放された時の副会長は号泣しつつも、これ以上ないほど安堵した表情を浮かべていたなあ……

「お、俺、絶対に氷室先輩とは戦いたくねー……」

奇遇だな加隈、俺もだよ。

「それデ……あの“ＧＳＭＯ”に連れて行かれた三人は、これからどうなるんですノ？」

「うむ。それだが……」

先輩は少し視線を落としながら、訥々（とつとつ）と話し始めた。

まず、中条シドについては、悠木が入所していた例の施設ではなく、また別の施設に送られることになったそうだ。

というのも、中条シドの精霊（ガイスト）の能力がデタラメ過ぎて、あの施設では中条シドを管理することができないらしい。

でも。

『クク……我は敗者の身。そのような真似をしなくても、今さらジタバタしないさ』

俺とサンドラに敗れた時に言った、中条シドのあの言葉。
“ＧＳＭＯ（グスモ）”に拘束された時も一切暴れたりすることなく、ただ静かに指示に従っていたアイツが、脱走や暴動を企てるとか、そんなことをしでかすとは到底思えないけど、な……。

次に、近衛スミについては、こちらも中条シドと同じ施設送りとなった。
中条シドみたいに実力的に……というよりも、むしろ『近衛家』から隔離するためのものらしい。
要は、『近衛家』に圧力をかけられてしまい、アッサリと施設から出所してしまうことを危惧して、ということだ。

これについては、先輩のお父さんである学園長からの強い指示でそうなったらしい。
先輩曰く、学園長はこの機会を利用して、東方国での『五摂家（せっけ）』の弱体化を狙ってるんじゃないかとのことだった。いや、そんな話を俺達にしてもいいんですかね？

そして……土御門さん。
彼女は、前の二人とは異なり、悠木のいた施設で事情聴取を受けているとのことだ。
だけど、今回の首謀者はメイザース学園長である“麻岡マキ”であること、さらには、近衛スミの指示で動かされていたこと、何より本人が協力的で、『近衛家』に関する裏の情報についての提供もあったことから、すぐにでも施設を出ることになるとのことだ。

まあ、いわゆる司法取引ってヤツだな。
この辺は『ガイスト×レブナント』のメインシナリオでも同じ結果になっていたし、既定路線ではあるけれども。

「……というわけで、今回の騒動に関する顛末（てんまつ）としては以上だ」

一気に説明をし終えると、先輩が軽く息を吐いた。

「ですけド、それだと向こうの学園長は何の処分もなしなんですノ？」

「それに、残された生徒会のメンバーについても気になりますね……」

サンドラと氷室先輩が、口々に疑問点を呟く。

確かに、その三人にも何らかのペナルティがあってもよさそうなモンだけど……。

「ああ。もちろんメイザース学園の学園長に関しては、現在は謹慎中で、追って国から処分が言い渡されることになるらしい。少なくとも、あの学園から去ることは間違いないだろう」

まあ、当然だろうな。

なにせ、この国の最重要機密である『ユグドラシル計画』を、自分の野望のために強引に奪って、利用しようと考えたわけだから。

「そして、生徒会メンバーの二人……というか、生徒会そのものに関してだが、現生徒会は解体し、改めて選挙によって民主的に新生徒会が発足される」

「え？　生徒会って、普通は選挙じゃないの？」

不思議に思った立花が、先輩に尋ねる。

「……私も転校して知ったけど、メイザース学園の生徒会長は先代による指名制……そして、副会長以下は会長による指名なのよ」

「へえー……」

先輩に代わって悠木が説明すると、納得した立花はウンウン、と頷いた。

「じゃああの二人ハ、単に生徒会を辞めたってだけで何の処分も受けないのネ」

腑に落ちないプラーミャは、そう言って眉根を寄せた。

「そのことだが……残った生徒会メンバーのうち、木崎セシルについては消息がつかめていない」

「「「「「え……？」」」」」

その言葉に、俺達は一斉に先輩を見る。

「ソ、ソレッて、どういうことなんですノ！？」

「……昨日の交流戦終了後、メイザース学園へと帰路につく生徒達の中に、木崎セシルの姿がなかったらしい」

「……で、でも、それだったら私みたいに実家に帰っていたりするんじゃ……」

先輩が説明すると、今度は悠木がおずおずと尋ねる。

「いや、これはお父……学園長から教えていただいたんだが、木崎セシルは実家にも帰っておらず、“ＧＳＭＯ（グスモ）”にも消息はつかめていないとのことだ……」

「「「「「……」」」」」

あのクソ女……一体どこに雲隠れしたんだ……？

いや、そもそもアイツに関しては、不審な点が多すぎる。
アイツには絶対に知るはずがない情報を知ってたりするかと思えば、どこかちぐはぐだったり……。

「……とにかく、木崎セシルについては“GSMO（グスモ）”で引き続き消息を追うから、君達は心配する必要はない。さあ、せっかくの交流戦の打ち上げなんだ、楽しくスイーツを食べようじゃないか」

先輩はニコリ、と微笑んで、みんなを促した。
みんなも木崎のことは片隅に追いやり、それからは交流戦でのことについて花を咲かせる。

だけど。

「……はは、まさかな」
「？　ヨーヘイ？」

俺が乾いた笑いを浮かべると、サンドラが不思議そうに俺の顔を覗き込む。

「いや……何でもない」

俺はゆっくりとかぶりを振り、急に沸き上がった不安と推測を追い払った。

不安と推測（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

活動報告にも書かせていただきましたが、このたび、「ガイスト×レブナント」の書籍化が決定いたしました！

これも、いつも応援、お読みいただいている皆様のおかげです！

あらためて、お礼申し上げます！

さて、次で第六章のラストになります！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

やんごとない転校生（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
これにて第六章ラストです！

「……望月くん、みんな、ありがとうございました！」

ルフランでの打ち上げも終わり、俺達は悠木を駅へと送りに来ていた。

「あー……もう帰っちまうのかよお……寂しくなるなあ……」

いつも明るいか残念なだけが取り柄の加隈にしては珍しく、しんみりとした表情を浮かべる。

まあ、寂しいってことに関しては俺も同意するけど。

「……望月くん、また……連絡する、ね……？」

「おう！　俺もしつこいくらいにメッセージ送りつけてやるから！」

少し泣きそうになっている悠木を励ます意味でも、俺は努めて大袈裟なジェスチャーでそう言い放った。

それに。

「悠木も冬休みになったらコッチに帰って来るんだろ？　だったらさ、その時もまた一緒に遊ぼうぜ！」

「……っ！　う、うん！」

そう言うと、悠木はぱあ、と笑顔を見せた。

はは……悠木には、やっぱりソッチのほうが断然似合ってるよ。

「「「「……」」」」

すると、先輩、サンドラ、氷室先輩、立花がジト目で俺を睨んでいた。なんでだよ。

「ハア……ヨーヘイもいい加減にしないト、そのうち血の雨が降るわヨ？」

「オイ！？」

プラーミャにあきれ顔で物騒なことを言われていまい、思わずツッコミを入れる。

いや、本気（マジ）で意味が分からん！

「……ふふ！　今日は本当に楽しかった！」

そう言うと、悠木は駅の改札へを向かっていく。

そして、こちらへクルリ、と振り返ると。

「……望月くん！　また！　冬休み！」

「はは！　おう！」

満面の笑顔で元気に手を振る悠木に、俺も思いっ切り手を振り返した。

「さーて……それじゃ俺達も、これで解散……っ！？」

そう言おうとした瞬間、俺は思わず息を飲む。

「……ほほう？　冬休み、悠木くんと会うのか」

「ヘエエエエ……冬休みは久しぶりにルーシに帰ろうかと思いまし

たけド、取りやめにしますワ」
「ふふ……これは冬休みが楽しみです」
お、おおう……三人の殺気がすごい……。
『プークスクス！　マスターの命は風前の灯火なのです！　修羅場確定なので……は、はう、どど、どうしてみんなが勢ぞろいしてるの……です……？』
俺を馬鹿にするように笑っていた［シン］だったが、いつの間にか召喚されていた［関聖帝君］、［ペルーン］、［ポリアフ］にメッチャ睨まれ、［シン］の顔が真っ青になる。
フフン、いい気味だ。
そんな［シン］を尻目に、俺は改めて三人を見やると。
「あ、あう……せ、せっかくの機会だし、正月はうちの家に……」
「サンドラどうするノ？　それだと、パパは東方国までやって来るわヨ？」
「フエエ……ヨーヘイとパパを会わせたほうがいいカシラ……」
「ふふ……私のおせち料理で、望月さんを骨抜きにしてみせますよ……！」
……なんだかなあ。
◇
「望月くん！　おはよ！」
メイザース学園との交流戦から一週間後の朝の通学路。

俺を待ち構えていた立花が、嬉しそうにパタパタと駆け寄ってきた。

「おう、おはよう」

「えへへー、今日は久しぶりに望月くんと二人っきりで登校でき……「オーイ！　立花ー！」」

はにかむ立花だったが、後ろから聞こえてきた加隈の声でその表情が一瞬にして曇る。

「よう！　立花！　ヨーヘイ！」

「お、おお……」

「……」

相変わらず能天気な加隈とは打って変わり、立花は露骨に頬を膨らませて不満を露わにしていた。

「……というか加隈くん、今日は早めに学園に行くんじゃないの……？」

「へ？　い、いや、それはそのー……」

ほう？　さては加隈の奴、立花を嵌めるためにわざと嘘の情報をつかませたな？

その挙動不審な態度からも、それは明らかだ。というかそんな真似をしたら、ますます立花に嫌われるだろうに……。

そんな立花と加隈を眺めながら、俺は肩を竦めていると。

「よう」

「おう」

曲がり角から賀茂が現れ、軽く手を挙げながら声を掛けてきたので、俺も同じように返す。

「それにしても……この二人は今日もなのか？」

「まあなー……」

呆れた表情で立花と加隈を指差しながら尋ねる賀茂に、俺は気の抜けた返事をした。

まあ、賀茂は二人をあまり知らないからアレだけど、こんなの日常茶飯事だからなあ。そのうち賀茂も慣れるだろう。

というか、賀茂とはあの交流戦以降、こうやって気軽に声をかけ合う仲になっていた。

まあ、話をしている限りじゃ、悪い奴でもなさそうだしな。

「そういえば、今日うちのクラスに転校生が来るらしいぞ？」

「へえー、一一一になあ……」

「ああ。オレとしては、できれば可愛い女子がいいな」

どちらかといえばクレバーなイメージの賀茂だったが、鼻息荒くそんなことを言ってくるあたり、意外と俗物的なのかもしれない。

「いや、お前達のクラスはサンドラさんとプラーミャさんという双子姉妹がいるからいいが、一一一は壊滅的なんだぞ？」

「ハイハイ」

必死で訴える賀茂を、俺は手をヒラヒラさせながら適当にあしらう。

すると。

「ふふ、おはよう」

「先輩！　おはようございます！」

俺は一緒に歩く賀茂を置き去りにし、先輩の元へと駆け寄った。

「うむ。じゃあ、行こうか」

「はい！」

「オイオイ……オレを置いて行くなよ……」

「はは、悪い」

などと謝ってみたものの、俺はこれっぽっちも悪いとは思ってないけど。いや、むしろ邪魔だから消えて欲しい。

俺と先輩は、邪魔な賀茂と、騒がしい立花と加隈を引き連れて学校へと向かう。

そして。

はは……賀茂、良かったじゃないか。

お前の願望が聞き届けられたみたいだぞ？

だって。

「ホホ、今日からよろしくのう」

学園の校門前で、扇で口元を隠し、アメジストの瞳を細めながら立つその転校生は、間違いなく可愛い女の子なんだから。

やんごとない転校生（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これで第六章が終了となり、幕間を数話はさんで、次は第七章へと進みます！

第七章では、嵐の前の静けさ……ということで、ほのぼの回やラブコメ回が多くなります！

特に、季節は冬へと変わり、クリスマス、お正月、バレンタインとイベントが盛りだくさんですので、どうぞヨーヘイや［シン］、先輩達ヒロインとのわちゃわちゃした交流をお楽しみくださいませ！

ということで、恒例の幕間の一話目として土御門さん視点！　明日の朝更新です！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

あなたがくれた揚羽蝶①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今日から幕間！　土御門さん視点をお送りします！

あなたがくれた揚羽蝶①

■土御門シキ視点

『土御門家』の再興。

それこそが、この由緒ある家に生を受けた、わらわの全てじゃった。

幼い頃から『土御門家』の嫡子（ちゃくし）としての英才教育を受け、華族に相応しい教養と礼儀作法を身につけるための努力をした。

……といっても、わらわを指導したのは、父様（ととさま）と母様（ははさま）ではあるがの。

本来の華族であるならば、外戚（がいせき）から一人、教育係をつけるのが一般的ではあるのじゃが、『土御門家』は既に没落して久しいがゆえ、外戚は全て華族としての身分を捨てて一般社会に溶け込んでしまっておる。

それに、本家であるうちも、裕福な家庭では一切ないしの。

わらわとしては家が決して裕福でなくとも、指導という形ではあるものの、父様や母様がいつもわらわに構ってくれたし、何より二人共、たくさんの愛情を注いでくれた。

とはいえ、このような落ちぶれた家というのは、華族の世界においては底辺。華族の子どもが通う学校では、わらわはいつもいじめられたり、召使いのような扱いを受けておった。

じゃが、それが華族というものであり、底辺であるわらわはただ受け入れるほかはない。

もちろんわらわも、これを良しとしているわけではなく、いつか『土御門家』を再興させねばならん。

じゃから。

「あら……あなた、あの『土御門家』ですよね……？」

「はい……よろしければ、近衛様にお仕えしたく……」

わらわは二歳年上で『五摂家』の筆頭である『近衛家』の嫡子、近衛スミの教室へ行くなり、彼女の目の前で土下座して頼み込んだ。

わらわは『土御門家』を再興するに当たり、この女を利用することにしたのじゃ。

この女に気に入られれば、華族の頂点に立つ『近衛家』の支援を得て『土御門家』が再興できる……そんな浅はかなことを、幼かったわらわは考えたのじゃ。

そんなわらわに、近衛スミの周りにいよった取り巻き共は、侮蔑の視線を向ける。

じゃが、わらわにとってはそんな視線なぞ、どうということはない。

わらわにあるのは、『土御門家』を再興して、父様と母様を喜ばせることだけなのじゃから。

「ふふ……気に入りました。では、これからあなたは私の下僕、と

いうことで」

優雅に微笑みながらわらわを見下ろし、近衛スミは静かにそう告げる。

その姿は、まさに華族の頂点に相応しいものだったじゃろう。

……その、どこまでも尊大で、自分以外の人間を虫ケラであると言わんばかりの、その腐った瞳さえなければ、の。

それからというもの、わらわは事あるごとに近衛スミに呼び出されては、いいように使われてきた。

小間使いみたいなもののほか、時には近衛スミが気に入らない奴への嫌がらせ、逆に面白半分でわらわが他の華族にいじめられるように仕向けられることもあった。

そんなわらわを見て、近衛スミは嬉しそうに笑う。

わらわも、そんな近衛スミに愛想笑いを繰り返した。

そして、中学に進学した直後のこと。

わらわに、精霊（ガイスト）が発現した。

父様と母様がそれを知った時、これ以上ないほど喜んでくれた。

『これこそ、我が『土御門家』が華族であるまぎれもない証だ』、と。

というのも、元々『土御門家』は大国主（おおくにぬし）に祈祷（きとう）や占い、あるいは大国主に敵対する者を呪いで排除することを役目としており、それを執り行うため、一族の中から精霊使い（ガイスト）をその嫡流（ちゃくりゅう）としてきた。

それが、五代前から『土御門家』には精霊使い(ガイスト)が現れず、本来のお役目を全うできなくなったことで、この家は没落をしてしまったのじゃ……。

そこにきて、わらわの精霊(ガイスト)の発現。

父様も母様も、過大に期待するのも仕方ないというものじゃ。

じゃが。

「……『土御門家』のくせに、生意気ですね」

「あうっ!?」

そんなわらわが気に入らず、近衛スミは取り巻きに命じてわらわを袋叩きにした。

何故なら。

「この！　私が！　まだ精霊(ガイスト)が発現していないというのに！　なんで下僕のオマエが私より先なんだよッッ！」

「ギャッ!?」

うずくまるわらわを、近衛スミは執拗に蹴った。

ホ……ホホ……まあ、完全に嫉妬、じゃな……。

それでも。

「ホホ……」

「っ！　何笑ってるの！　キモチワルイのよ！」

「ギャウッ!?」

わらわは、今まで通り笑うしかない。

たとえ殴られようとも、蹴られようとも、あらゆる辱めを受けたとしても、『土御門家』の再興のためにはこの女に縋(すが)るしかないのじゃ……！

結局、近衛スミが中学卒業直前に精霊(ガイスト)が発現するまで、わらわは毎日のように暴行を受け続けた。

しかも、中学の教師や家族にバレぬよう、ご丁寧に顔を一切傷つけずに。

「ふふ……まあ、あなたも精霊(ガイスト)使いなのですから、当然、メイザース学園に進学するのですよ？」

卒業式の日、まるであのイジメていた日々がなかったかのように、近衛スミは優雅に微笑みながらわらわにそう告げる。

「ホホ……承知……」

わらわはいつものように微笑みながら、卒業生として中学の門をくぐる近衛スミに、深々と頭を下げて見送った。

あなたがくれた揚羽蝶①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

あなたがくれた揚羽蝶②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

あなたがくれた揚羽蝶②

■土御門シキ視点

近衛スミが中学から去ってからというもの、わらわは毎日、精霊（ガイスト）のレベル上げに明け暮れる。

中学を卒業してあの女がいるメイザース学園に入学するまでの二年という猶予期間。わらわはこの間に、『土御門家』として相応しい力を身につけねばならぬ。

今まではあの女の相手をせねばならぬゆえ、自分の時間というものはなかったのじゃが、たまに呼び出されては顎で使われるものの、かなり自由な時間が増えたからの。

「それもこれも、『土御門家』を再興して、わらわが名実共に華族となれば……！」

わらわはギリ、と歯噛みすると。

「［導摩法師］」

わらわだけの精霊（ガイスト）、［導摩法師］を召喚した。

「ホホ……お主だけは、いつでもわらわの味方でいてくれる……お主だけが、わらわの希望なのじゃ……」

［導摩法師］にしがみ付きながら、わらわは心情を吐露する。

もちろん、父様も母様もわらわの味方じゃが、それはあくまでも華族としてのわらわ。
ただのわらわじゃったら、父様と母様も……。
すると。
「……ホホ、［導摩法師］は優しいのう……」
『……』
優しくわらわの頭を撫でてくれる［導摩法師］に甘えるように、わらわはその顔を思い切りうずめた。
わらわの涙を、見られないようにするために。

◇

中学卒業を迎える頃には、［導摩法師］のレベルが三十に到達した。
これは、メイザース学園の新入生としては破格じゃ。
「ホホ……いよいよ明日、卒業じゃの……」
布団の中で、わらわはポツリ、と呟く。
メイザース学園は、この東方国においてアレイスター学園と二分するほどの精霊使い（ガイスト）の名門校。
華族であったとしても、おいそれと通えるところではない。
わらわは、あらかじめ『近衛家』より入学の手配をされておったため、すんなりと入ることができた。
……まあ、わらわは近衛スミのオモチャとして期待されておるからの。

「また、あの日々が始まるのじゃ……じゃが、これでまた『土御門家』の再興に一歩近づく……」

そう……このメイザース学園で頭角を現し、『近衛家』以外の華族からも注目を集めれば、より『土御門家』の再興が近づくというもの。

しかも、上手くすれば近衛スミから離れることも……。

「……ホホ、そう簡単に行くわけもないのに、愚かじゃのう……」

おそらく、近衛スミはわらわを手放すことはないじゃろう。

これほど使い勝手がよく、簡単に切り捨てられる存在なぞ、わらわをおいて他にないからの……。

「でも……！」

それが『土御門家』の再興への近道ならば、わらわは甘んじて受けよう。

たとえそれが、わらわ自身を殺すことになったとしても。

そう誓いながら、わらわは胸に手をおいてキュ、と握った。

◇

いよいよメイザース学園に入学したわらわは、当然ながら一年生ではわらわの相手になる者はおらなんだ。

すると、これも予定調和ではあるが、メイザース学園生徒会から声がかかる。

もちろん、近衛スミの手足となって働くために。

「……フン、土御門風情が」

そのわらわをスカウトに来たはずの副会長、“鷲尾イオリ”はわらわを一瞥すると鼻を鳴らした。

まあ、『鷲尾家』も『五摂家』とまではいかないものの、名門華族であることには変わりないからの。その態度も頷ける。

……後になって知ったが、この副会長はどうやら近衛スミのことに惚れておったようじゃ。それで、お気に入りであるわらわに嫉妬したらしい。何とも、迷惑な話じゃ。

とはいえ、この副会長は見る目がないというか、何というか……。他にもよい女子（おなご）はおるのに、あえて近衛スミを選ぶのじゃからのう……難儀なことじゃ。

「ふふ……せっかく生徒会に入れてあげたのですから、身を粉にして働くのですよ？」

「ホホ……分かっておる」

クスクスと笑う近衛スミに、わらわは扇で口元を隠しながら微笑み返す。

これも、慣れたものよ……最初は、わらわの表情を読まれるのが嫌で始めたことじゃが、今ではもう癖みたいになってしまっておる。

まあ、わらわもこやつに染まってしまったのか、それとも……これこそが華族というものなのか……。

そして、正式に生徒会会計に任命されたわらわは、生徒会の仕事

……ではなく、近衛スミの影として学園内で暗躍した。

もちろん、これは近衛スミにとって都合のいいようにするために、時には非合法な……要は近衛スミの気に入らない者や敵対する者の排除、じゃな……そんなことを続けておった。

ホホ……まあ、元々『土御門家』はそのようなお役目を与えられておったのじゃ。むしろ望むところじゃの。

……願わくば、近衛スミではなく、わらわが心服できるような者がよいのじゃが……。

ホホ……さすがにそれは、ないものねだりというものじゃの。

そんな裏方としての毎日を送り、あと一か月で夏休みになろうかという頃。

あの女……“木崎セシル”が転校してきた。

聞けば、木崎セシルは東の雄、アレイスター学園で問題を起こし、居場所を失くして逃げるようにうちの学園へとやってきたようじゃが……メイザース学園も、そのような問題児をよく受け入れる気になったと思ったものじゃ。

じゃが。

「ふふ……彼女はうちの生徒会の一員として働いてもらうことになります」

「っ！？　じゃ、じゃが、会長も知っておろう！？　あやつの前の学園での噂を……！」

「もちろんですよ。ですが、これは『近衛家』として彼女を受け入

れてあげたのです。なら、あなたも分かりますよね？」

ホ……こう言われてしまっては、わらわはもう何も言うことはできぬ。

じゃがそのような問題児を、どうして『近衛家』は受け入れようと考えたのじゃ？　どう考えても、後々面倒なことにしかならぬというのに。

……まあ、そのようなことをわらわが考えても仕方がない、か……。

そして。

「うふふ……“木崎セシル”です。これからどうぞよろしくお願いします」

木崎セシルは、生徒会室で柔らかい笑みを浮かべながらそう挨拶した。

ホホ……なんとも、まるで“聖女”のようなたたずまいとでもいうのかのう。その表情に、慈愛が満ちておる。

じゃが……わらわには分かる。

こやつから、近衛スミと同じ、醜悪な臭いが漂っておるのが。

「ふふ、みなさんも木崎さんをよろしくお願いします。そうですねえ……土御門さんが彼女の面倒を見てあげてくださいね？」

「ホ……承知したえ」

できれば近寄りたくもないが、近衛スミの指示じゃ。受け入れる

しかあるまいて。

「よろしくの」

「うふふ、こちらこそよろしくお願いします」

お互い言葉を交わし、握手をすると……ホ、わらわを見下しておることが、こやつの手からひしひしと感じるわ。

何故(なにゆえ)そこまで尊大な態度が取れるのかは分からぬが、まあ、わらわとしては当たり障りなく付き合うとしようかの。

わらわに、火の粉が飛んでこぬように。

あなたがくれた揚羽蝶②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

あなたがくれた揚羽蝶③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

あなたがくれた揚羽蝶③

■土御門シキ視点

夏休みが明け、またメイザース学園に転校生がやってくる。
それも、二人もじゃ。

一人は木崎セシルと同じく、アレイスター学園から来た女子（おなご）。
もう一人は、学園長がどこからともなく連れてきた男子（おのこ）。

アレイスター学園出身の女子は、木崎と同じく問題を起こして転校してきたものの、第一印象としては木崎とは全然違うの。
少なくとも、その瞳に邪（よこしま）なものは感じられんし、むしろ罪悪感といったものが見え隠れしておる。

とはいえ、この女子に関しては近衛スミとは縁もないようじゃし、関わり合いになることもなさそうじゃが、の。

そして、男のほうじゃが……ふむ、何とも不気味じゃのう。
いや、見る限りは少々おかしな言動をすることはあるものの、容姿端麗、成績優秀と、何か問題があるわけではないのじゃが……。

……まあ、深く考えても詮無いことよの。

何故なら。

「ふふ……学園長からの指示で、メイザース学園とアレイスター学園で交流戦を行うことになりました」

「ホ、これはまた珍しいのう」

近衛スミの言葉に、わらわは思わず声を漏らした。

じゃが、今まで一度も交流をしたことがないアレイスター学園と、急にそのような話が降ってわいたのじゃからのう。

「そして」

「？　まだあるのかえ？」

「我々生徒会はその交流戦で、学園長から推薦された“中条シド”と共に、アレイスター学園で別任務にあたることになります。どうぞ、お入りください」

近衛スミがドアに向かって声を掛けると。

「クク……貴様等、我の足を引っ張るなよ？」

……入って来るなり、何とも偉そうな奴じゃの。

「会長、お尋ねしてもよろしいでしょうか」

「鷲尾さん、どうぞ」

「それで、このどこの馬の骨か分からない男を加えて、学園長は何の目的があるのでしょうか？」

ふむ、確かに副会長の質問はもっともじゃ。

それに、どうやら交流戦というのはただの口実で、生徒会への任務というのが学園長の本命のようじゃし。

「ふふ……鷲尾さん、あなた風情が知る必要はないんですよ」

「っ！？」

突然、近衛スミから威圧を込めた言葉を向けられ、副会長は思わずひるむ。

ホホ……使い捨ての駒に過ぎないわらわ達は、黙って従え、ということか……。

「ホ、とはいえ、何をすべきかくらいは仰っていただかねばの」

「もちろん、それを今からお話ししようと思っていたところですよ……余計な邪魔をされなければ」

そう言うと、近衛スミは打って変わって顔を歪め、ギロリ、と副会長を睨んだ。相変わらず、醜い面(ツラ)じゃ。

それからわらわ達は近衛スミから説明を受けたのじゃが……。

「そ、それは、いくら学園長……いや、『近衛家』であったとしても、まずいのではないかの……？」

わらわは思わず声を震わせながらおそるおそる告げる。

じゃが。

「ふふ、それこそ心配いりません。木崎さん」

「はい」

近衛スミが声を掛けると、木崎セシルは一歩前に出た。

「アレイスター学園の見取り図に関しては、この私が全て把握していますし、何より、あの学園には私の協力者がいます。失敗することはありません」

「ホ、何とも自信満々じゃの……そこまで申して、万が一失敗した場合は、どう責任を取るつもりなのじゃ？」

わらわは苛立ちを隠さずに低い声で尋ねる。
当然じゃ。わらわ達が捕まれば、これまで『土御門家』の再興のために積み重ねてきた苦労が全て水泡に帰すのじゃから。

「うふふ……そんなことはあり得ませんが、その時はそうですね……この私が協力者の力をお借りして、あなたの望む『土御門家』の再興を約束しますよ」
「っ!?　ふざけたことを申すなッッ！」

木崎セシルの言葉に、わらわは思わず声を荒げた。
何故こやつは、わらわの……『土御門家』の悲願を知っておるのじゃ！？

「ふふ……そういうことですので、これなら土御門さんにとってもデメリットはないでしょう？　……というか、これ以上何も抜かすな」
「っ！？　……ホ、ホホ……」

近衛スミの不興を買ったことを悟ったわらわは、愛想笑いを浮かべて何とかやり過ごす。
ここで……ここで終わるわけにはいかんからの……。

「ふう……とにかくそういうことですので、お二人はこれから、中条さんと木崎さんの指示に従ってください。いいですね？」
「「……」」

パン、パン、と手を叩いて近衛スミはそう告げると、わらわと副会長は無言で頷いた。

あなたがくれた揚羽蝶③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

あなたがくれた揚羽蝶④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

あなたがくれた揚羽蝶④

■土御門シキ視点

そして迎えた、アレイスター学園との交流戦当日。
わらわ達メイザース学園生徒会は、二日目の団体戦から参加する。
というのも、今日の計画のためにリハーサルを兼ねて最終調整を行う必要があったからの。

「うふふ……土御門さんも、かなり強くなられましたね？」
「まあの……」

団体戦の開始を待つ中、隣に座る木崎セシルがクスクス、と笑いながらそう告げると、わらわは視線を逸らした。
じゃが……確かにこやつの言う通り、わらわは強くなった。
それも全て、こやつのアドバイスによって、じゃ。

それだけではない。
今日戦うアレイスター学園の面々についても、全員ではないものの、ほとんどの者の精霊（ガイスト）のデータを把握しておった。

不審に思って尋ねたことがあるが、その時の木崎は『元アレイスター学園の生徒だから』の一点張りで、結局は教えてはもらえなんだ。

本当に、こやつは一体……。

「ですが、あなただけクラスチェンジのための条件を満たせなかったのは残念でしたね」
「……」
……相変わらず、こやつはわらわを見下しよる。
まあ、それはこやつに限った話ではなく、わらわに一切興味がない中条シドを除き、全員がわらわを馬鹿にしておるがの。
「……では、両学園の代表のみなさんの健闘を称え、開会の挨拶とします」
ホホ、やっと学園長の挨拶が終わったの。
「ふふ……土御門さん、分かっていますね？」
「うむ」
メイザース学園一番手のわらわのすべきことは、適当なところで負けて、校舎の入口付近で待機している中条シドと合流し、アレイスター学園に気づかれずに学園長室を目指すこと。
皆が団体戦に注目している中、それは容易いが……。
『……アレイスター学園は、何かを仕掛けてくる可能性がありますので注意してください。特に、クソザコモブの“望月ヨーヘイ”には』
常々言っておった木崎セシルの言葉。
いつもクソザコモブと罵るくせに、妙にその男子を意識しよる。
一度、その望月ヨーヘイについて尋ねたことがあったが、木崎セシルが言うには、その男子だけは予想外過ぎて、全く行動が読めん

とのことじゃった。

あの交流戦に向けた打ち合わせでのわらわの第一印象は、望月ヨーヘイは取りたてて変わったところも、ましてや強者がまとう気配といったものが一切感じられなんだ。

実際、あの場においても終始周りを気遣ってばかりで、どちらかといえばオロオロしておったな……。

「ホホ……」

「……その笑い、止めてくれますか」

どうやら、わらわは思い出し笑いをしておったようで、木崎セシルが珍しく顔をしかめよった。

普段は何も言わんのに、珍しいこともあるものじゃ。

すると。

「ホホ、これはこれは、願ってもない対戦相手じゃのう？」

アレイスター学園の一番手は、まさにその望月ヨーヘイじゃった。

これは、この男子を見極めるにはもってこいじゃの。

わらわは適当に負けるように指示は受けておったが、あえて試すような戦い方をしてみた。

するとどうじゃ、木崎セシルの言う通り精霊（ガイスト）のスピードは目を見張るものの、それ以外については特に特筆するようなものは感じられなんだ。

じゃが、その戦い方は決して精霊（ガイスト）の能力に頼るのではなく、工夫を凝らしているのが分かった。

まさか【闇属性反射】のスキルを活かして、わざと至近距離で受けることでわらわを自滅させる策を取るとはの。

「それで……土御門さん、どうする？」

そう問いかける望月ヨーヘイには、どこか余裕を感じられた。おそらく、まだまだ手の内を隠し持っておるのじゃろう。

じゃが。

何より、その時の望月ヨーヘイの瞳とその声に、わらわは思わず息を止めてしもうた……。

あのような優し気な視線、相手を気遣う声……それは、今までわらわが受けたことがないものじゃった。

「……分かった。わらわの負けじゃ」

ホホ……これほどの気遣いを見せておるのに、わらわが意地を張る理由もないし、それに、この後のこともあるからの……。

わらわは舞台から降りると、近衛スミを一瞥（いちべつ）してから校舎前へと急いだ。

「ククク……待ちわびたぞ」

「ホ、それはすまんのう」

無事、中条シドとも合流し、わらわ達は学園長室へと向かう。

『……アレイスター学園は、何かを仕掛けてくる可能性がありますので注意してください。特に、クソザコモブの“望月ヨーヘイ”に

は』

ふと、木崎セシルのあの言葉が、わらわの頭をよぎる。

「……できれば、あの男子とは会いたくないのう」

そう、わらわは無意識に呟いておった。

会ってしまえば、わらわは望月ヨーヘイと戦わねばならぬから。

じゃが。

「ホホ……しかも、また会うことになるとはのう？」

……やはり、世の中上手くいかぬものじゃの。

わらわはこのような運命めいた状況に苦笑しつつも、中条シドと共に、不敵に笑う望月ヨーヘイ達に戦いを挑んだ。

あなたがくれた揚羽蝶④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

あなたがくれた揚羽蝶⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

あなたがくれた揚羽蝶⑤

■土御門シキ視点

「ホホ……」
「何なノ？　気持ち悪いわネ……」

アレイスター学園に転校してきてから最初の休日、わらわはプラーミャとこの辺りでは有名なカフェに来たのじゃが……少し思い出し笑いしたくらいで、そのように言わんでも……。

「ホ、ところで、今日はすまんのう」
「何ヨ。言っとくけど、奢りじゃないかラ」
「なんじゃ、つれないのう……」

プラーミャはフン、と鼻を鳴らして顔を背ける。
しかし、今日わらわを誘ってくれたのは、改めて歓迎してくれるからではないのか？

「モウ、歓迎会はアナタが転校してきた日にしたじゃなイ」
「そ、それはそうじゃが……じゃったら、今日わらわを呼び出したのは……？」

わらわは意図が分からず、プラーミャに尋ねた。

「フ、フン！　サンドラがヨーヘイとどこかに出掛けて暇だったからたまたまヨ！」
「な、なるほどの……」

プラーミャは鼻を鳴らして顔を背けてしまったが、少し頬が赤いところを見ると、単なる照れ隠しのようじゃ。

ホホ……わらわにツンデレなぞせず、意中の男子（おのこ）にすればよかろうに。

「それよリ……その扇、そんな紋章なんかあったかしラ？」

「ホホ……これは、の……」

あの時のことを思い出し、わらわは顔が熱くなるのを感じる。

歓迎会の次の日の放課後、あの男子に呼び出され、この扇……『揚羽蝶紋付き扇』を貰ったのじゃ……。

この“揚羽蝶”の紋こそ、『土御門家』が華族であることの証。

五代前の当主が生活のため、やむを得ず手放した紋付きの品々じゃったが、とうとう……とうとう、わらわの下に……！

「フン、知ってるわヨ。アオイに貰ったんでショ？　……だけド、勘違いしないでネ」

「ホホ……分かっておるわ……」

少し不機嫌に告げるプラーミャにそう答えると、わらわは扇を閉じ、キュ、と胸に抱いた。

「ハア……全く、アイツときたラ……」

そう言って、プラーミャがこめかみを押さえて溜息を吐く。

じゃが、もちろん勘違いなぞしておらぬえ。

だって、わらわは全てを見てしまったのじゃから。

◇

「こ、これは……！」

「あはは……コレ、土御門さんにとって大切なものなんだよね？」

あの日の放課後、立花に呼び出されて校舎裏へと来ると、苦笑しながら『揚羽蝶紋付き扇』を渡された。

「こ、これをどうして……！」

「あーうん……それはチョット言えないかなあ……」

そう言うと、立花は気まずそうに視線を逸らす。

それだけで、この男子がよからぬ手段で手に入れたことが想像できた。そしてそれは、このわらわのために……。

「ま、まあ、その代わりと言っちゃなんだけど、これからはボク達と一緒に領域（エリア）攻略とか手伝ってくれると嬉しい、かな……」

「ホ……ホホ……！　も、もちろん……じゃとも……っ！」

扇を握りしめ、わらわの瞳からぽろぽろと涙が零（こぼ）れ落ちる。

当たり前じゃ……！　この証を、わらわが……いや、『土御門家』がどれほど求めておったか……！

「あはは……そういうことだから、これからよろしくね！」

「うむ……うむ……！」

わらわがただ頷くと、立花はクルリ、と踵（きびす）を返した。

「それじゃ！」

「あ……ま、待って……！」

手を振りながら颯爽とこの場を去っていく立花に向け、わらわは必死で手を伸ばすが、あやつの姿はすぐに見えなくなってしまった。

「ホホ……わらわは、この恩をどうやって返せばよいのじゃ……！」

どうやって……？　そんなの、決まっておる！
これからは、あやつ達のために尽くすのじゃ！

わらわはそう誓うと、拳を握る……って。
ホホ、こんなところにいつまでもいてる場合ではない。寮に帰って、父様と母様に早速報告をせねばの！

そう思い、足早に校門へと向かう。

「モウ……こんな面倒なことしないで、キミが直接渡せばよかったじゃないかあ……」
「はは、悪い……」

話し声が聞こえたので覗いて見ると。

「あれは、立花と……望月？」

そこにいたのは、口を尖らせる立花と、頭を掻(か)きながら苦笑する望月だった。

「でも、土御門さんはすごく喜んでたよ！　……まあ、どうやって手に入れたのかって聞かれた時は焦っちゃったけど」
「あー……だけど、喜んだみたいで良かったよ」

「とにかく！　約束通り今度のお休みはボクと一緒に遊んでよね！」
「はは、おう！」
嬉しそうに笑う二人を見て、わらわは事実を知った。
本当は……あの、望月が……。
◇
「ホホ……まあ、わらわは勘違いなどせぬし、お主の邪魔なぞせぬ」
「ハ、ハア！？　ヤッパリ、なにか勘違いしてるでショ！」
わらわが含み笑いをすると、プラーミャは顔を真っ赤にして抗議した。
そして。
「本当にモウ……ヨーヘイのバカ……」
プラーミャが口を尖らせ、ポツリ、と呟きおった。
ホ……まさか、結局わらわは邪魔をすることになる、のかの……？
「それト！　こうなった以上、アナタはこの私（ヤー）に協力して、ヨーヘイとサンドラをくっつけるのヨ！」
「な、なんじゃと！？」
こ、これは予想外なのじゃ……！
「ナニ？　ひょっとしテ、ついさっきの言葉は嘘なノ？」
「い、いや、そういうことでは……」

ま、まいったのう……まさか、わらわがライバルの恋路の手助けをすることになるとは……。

「じゃ、じゃが……お主はそれでよいのかえ……？」

わらわは堪らずプラーミャに尋ねる。

だって、プラーミャは……。

「フン！　……私は、大好きなサンドラが幸せなら、それでいいのヨ……」

「……お主も、難儀な奴よのう……」

全く……そのような瞳をされてしまっては、断れぬわ……。

「ホ……仕方ない、のう……」

そう言って、わらわは苦笑する。

なにせ、プラーミャには借りがあるからの……。

元々、気持ちに折り合いをつけるのはわらわの得意技じゃ。

この先どうなるかは分からぬが……とりあえずはこの不器用な貴族に、付き合うとするかの。

あなたがくれた揚羽蝶⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて土御門さん視点の幕間は終わりです！

次回もまた、幕間をお送りします！　今度は恒例の先輩視点で今日の夜更新です！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大切な提案（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

大切な提案

■藤堂サクヤ視点

「お父様」

「ん？　どうした？」

お父様の研究室で検査が行われる中、険しい表情で書類を眺めているお父様に声を掛けた。

「そ、その……実は、ご提案があるのですが……」

見つめるお父様の視線から僅かに目を逸らした後、私は改めてお父様へと視線を向ける。

さ、さあ、言うのだサクヤ！　これを言わねば、最悪の事態も起こりかねないのだぞ……！

私はすう、と息を吸って意を決すると。

「こ、今度の二年の修学旅行は、取りやめるべき、かと……！」

「む、それはどうしてだ？」

お父様の表情が訝し気なものに変わり、その視線が説明の続きを催促していた。

「は、はい！　今回のメイザース学園との交流戦に起こった“柱”の一件を踏まえると、生徒達の安全性の面や万が一私が修学旅行で不在となった時、“ウルズの泥水”を吸収する機会が失われてしま

いますので！」

私はまくし立てるように一気に理由を述べるが……うむ、嘘だ。

本音は、私が修学旅行に行っている間に、望月くんが他の女の子達との仲が進展してしまうことを危惧しているのだ。

まず、サンドラはここぞとばかり抜け駆けをしてくるだろうし、転校してきた土御門くんだって怪しい……。

それ以外にも、彼は無自覚に女性に優しくしてしまうから、そんな彼に絆される者が新たに現れるかも……！

「ふむ……確かにサクヤの言う通りかもしれないな……」

「！　お父様！」

お父様の言葉に、私は思わず上体を起こした。

よし！　お父様が修学旅行中止へと気持ちが傾き始めているぞ！

「うむ……だが、今の学年の時だけ修学旅行を中止にしてしまうのでは、さすがに楽しみにしている生徒達に申し訳が立たんが……」

「そ、それについても考えがあります！」

そう……これこそが、この話の最大のポイント。

私の修学旅行の成功の可否は、ここで決まる！

「修学旅行を今年中止する代わりに、来年は今の一年生と合同で修学旅行を実施すればいいのです！」

これこそが、私が考えた最高のプラン！

これならば、他の生徒達も納得できるだろうし、何より、望月くんと一緒に修学旅行に行ける！

ふふ……望月くんとの修学旅行……お土産屋で何を買うか一緒に悩んだり、素晴らしい景色や名所などに触れたり、よ、夜は望月くんの部屋に行って「サクヤ」……夜更かしをするというのもいいな……。

そ、そしてそして、コッソリ旅館を抜け出して、二人で夜空を眺め……「おい、サクヤ」……あ、お、お父様が呼んでる。

「は、はい！　何でしょう！」

「……一つ尋ねるが、修学旅行を今の一年生と合同で実施する理由……まさかとは思うが、彼と修学旅行に行きたいからではないだろうな？」

「っ！？」

お父様から冷ややかな視線を向けられながら放たれた言葉に、私は思わず息を飲む。

む、むむ……こ、これを悟られるわけにはいかない！

「ま、まさか！　私は一人の生徒会長として、申し上げているのです！　そこにやましい感情など、あるはずが……！」

「わ、分かった分かった！」

身体中に繋がれている管などのことも忘れ、私は立ち上がってお父様に詰め寄ると、お父様は落ち着けとばかりに私の肩を叩いた。

「ふう……今回のメイザース学園との一件での、サクヤ達の功績も考え、修学旅行は来年に延期の方向で考えるとしよう」

「！　お父様！」

深く息を吐いてかぶりを振るお父様のその言葉に、私は思わず顔をほころばせる。

ふふ！　やった！　やったぞ！　これで来年は、望月くんと修学旅行だ！

「だが」

「ふふ……え？　だが？」

「来年の合同修学旅行には、学園長であるこの私も引率として参加する」

「えええええええええ！？」

な、何故お父様が一緒に修学旅行に！？

「お、お父様はその、お仕事が忙しい……「ならば、修学旅行は延期をせずに予定通り……」……あああああ！？　お、お父様も一緒に行けて嬉しいです！」

く、くそう……！　こ、これでは私の計画が……！

「所長、さすがにこの研究所を留守にするというのは……」

すると、高坂さんが苦笑いしながらお父様を諫めた。

よし！　高坂さんよく言ったぞ！

「だ、だが、ほんの一週間程度、この私がいなくとも……「駄目ですよ」……むむむむむ……」

お父様は唸った後、シュン、と肩を落としてしまった。

「ですので、この私が所長の代わりに修学旅行に行って、サクヤさ

んを監視しますよ」
「はあ!?」

高坂さんの突然の申し出に、私は声を荒げた。
な、何故高坂さんと一緒でないといけないのだ！　それこそ、お父様と一緒のほうが何倍もましだ！

「いや、それこそ絶対に認めん！　高坂くんはこの研究所で仕事をしろ！」
「はあ……」

高坂さんが溜息を吐き、私のほうをチラリ、と見た。
全く……不快だな……。

「……まあ、修学旅行の引率に関してはおいおい考えるとしよう。それで？」
「あ、ああ、すいません……」

不機嫌な表情を浮かべるお父様に促され、高坂さんが手に持つ書類を渡した。

「ふむ……今回の“柱”も、一体目の“柱”の半分程度か……」
「ええ。さすがに四体中三体がこの様子では、今後も期待できないかと……」
「むう……」

高坂さんの言葉に、お父様が唸（うな）る。

「……そこで提案なのですが」
「……なんだね？」

「はい。“柱”に関する文献を調べたところによると、どうやら幽子の吸収量を倍に向上させるという、大変貴重なアイテムが存在するようです。それを手に入れれば、ひょっとしたら……」
「得られる“ウルズの泥水”を吸収できる量が、倍になる、か……」
ここまで高坂さんお話しを聞き、私は思わず彼を凝視する。
何故なら、彼が告げたそのアイテムこそが、望月くんからもらった“エリネドの指輪”なのだから。
「分かった。“GSMO（グスモ）”に指示を出すと共に、政府にも要請してそのアイテムの存在を調査しよう」
「はい」
……さすがに“エリネドの指輪”のような超貴重なレアアイテムなど、二つも存在しないとは思うが……。
私は、この得も言われない不安を抑え込むように、胸に手を当て、ギュ、と拳を握った。

大切な提案（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

隔離施設（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「先輩！　お待たせしました！」

休日、俺は駅前で待ち合わせをしていた先輩に声を掛ける。というか先輩、相変わらず来るのが早いよ。

「ふふ、大丈夫。私も今来たところだ」

「あはは……そ、そうですか……」

先輩の言葉に、俺は苦笑した。

それよりも、今日の先輩のコーデはどうよ。

薄手の白のタイトなセーターにデニムジーンズが先輩の見事なスタイル（特に胸）をこれ見よがしに強調し、スニーカーで足元をカジュアルに決め、これまた薄手の赤のストールを羽織っていた。

いや、いつもだったら手放しで喜ぶんだけど、今日に限っていえば不安でしかない。

とはいえ、先輩だからどんなコーデでも圧倒的に似合うんだけど。

「？　どうした？」

「あ、い、いえ、今日の服装も、か、可愛いな、と……」

「っ！？　なななななな！？」

言ってから気づく。

お、俺、少し素直に言い過ぎなんじゃ……？

い、いや、今日に限っては全力でアピールしておかないと、万が一ってことがあったら困るからな！　し、仕方ないんだよ！

「あうあうあう……きょ、今日の望月くんも、その……す、素敵だぞ……？」

「うあああああ！？」

逆に先輩に返されてしまった！

く、くそう……先輩はただでさえ破壊力抜群なんだから、ちょっとは自重してもらわないと……！

「そそ、そんなことよりも、早く行かないと今日中に帰ってこれないぞ！？」

「そそ、そうですね！　行きましょう！」

俺達はギクシャクしながら、駅の改札をくぐった。

◇

「しっかし、遠いですねー……」

益田駅でモノレールに乗り、東都駅から特急に乗り換えて約二時間。

俺達は、目的の場所である〝御名方（みなかた）〟駅へとやってきた。

「ふふ……だが、ここからさらにバスで乗り継いでいくのだからな」

「うへえ……」

先輩の言葉に、俺は思わずうめき声を上げる。

いや、目的の場所まではバスでさらに一時間行った場所なのだ。
さすがにキツイ。

「まあまあ。ここは自然も豊かだし、景色もいいぞ？」

苦笑しながらなだめる先輩の言う通り、確かにここは空気も旨いし、レジャーとしては最高の場所ではあるけれども……。

「あ、バスが来たようだ」
「本当だ」

俺と先輩は移動し、バスに乗り込むと、バスはすぐに発車した。
そして曲がりくねった山道を走る。

「うおお……！」

バスから見える景色は、まさに絶景だった。
山間の渓流は海の色とはまた違った青を湛え、山々も紅葉で色づいていた。

「益田市ではめったに見られない景色、だな……」
「はい……」

まあ……この景色を先輩と見れただけでも、来た甲斐はあったな……。

そして一時間後、バスは目的地付近のバス停で停車する。

「さあ、ここから歩いて三十分のところにソレはある」
「はい」

先輩と一緒に林道を歩くこと三十分。
俺達は目的の場所へとたどり着いた。

そこは、看板も何もなく、ただのコンクリートの塀で覆われた建物だった。

インターホンを押して中の人に先輩が説明をすると、隣の通用口の鍵がカチリ、と開いた。

「さあ、行こう」

先輩の後に続き、塀を抜けて建物の中に入ると。

「失礼。ボディチェックを行いますので」

入口のところでこの建物の職員二人に、俺達はチェックを受ける。

「では、こちらです」

そして職員に案内され、一つの扉の前へと着いた。

「面会時間は三分です」
「三分!?」

こ、これは手短に話をしないとな。

それと。

「じゃ、じゃあ先輩はここで待っててもらってもいいですか?」

「な、何を言う！　当然、この私も一緒に入……「お願いします！」」

そう告げると、先輩は当然のように抗議するが、俺はそれを遮って深々と頭を下げて懇願する。

何故なら、できれば俺とこの中にいる奴の会話を先輩には聞かれたくないから。

「そ、それでは一緒に来た意味が……！」

「……」

先輩と俺との間に緊張感が走り、沈黙が続く。

「……ハア。君も頑固、だな」

しばらくして、先輩が俺の肩をポンポン、と叩いたので顔を上げると、先輩はただ苦笑していた。

「ふふ、分かったよ。今回は私が折れよう」

「あ、ありが……「ただし」……え、た、ただし……？」

「いつか、私に全部教えてくれないか……？」

そう言ってニコリ、と微笑んだ先輩は、ただ奇麗で、温かくて……。

本当は、知りたくて仕方がないはずなのに、それでも、この俺を信じてくれて……！

「はい……必ず……！」

俺は先輩の真紅の瞳を見つめ、力強く頷いた。

そして、俺は扉を開けて一人中に入ると。

「ククク……まだ二週間程度しか経っていないのに、もう面会とはな」

強化ガラスで仕切られた壁の向こう側にいたのは、拘束衣を着た“中条シド”だった。

「よう……元気そうだな」

「ククク、言うじゃないか」

俺のちょっとした皮肉に、中条はくつくつと笑った。

「それで、我に一体何の用だ？」

「ああ……時間もないから単刀直入に言う。中条、俺を助けてほしい」

俺がそう告げると、中条は眉根を寄せた。

「……助けてほしいとは、意味が分からんな」

「そのまんまだよ。俺達の今後のために、お前のその規格外の力が必要なんだ」

そう……俺は、先輩の破滅フラグを折るために、この中条シドに白羽の矢を立てた。

何と言っても『ガイスト×レブナント』の三番目のボスキャラで、精霊使い（ガイスト）としては先輩と主人公に次ぐ強さの持ち主だ。これを活かさない手はない。

「ククク……我は貴様の敵だった男だぞ？　なのに、この我に頼ると

いうのか？」
「そうだ」
俺は中条シドにハッキリと告げる。
だけど、そんなこと言いながらも俺はコイツが力を貸してくれるんじゃないか、そう考えている。
だって、俺は中条シドと戦って分かったことがある。
コイツは、どうしようもないほど悪い奴なんかじゃない。
確かにメイザース学園の元学園長、“麻岡マキ”の手下として学園長室に侵入したりしようとした。
それに、本来の『ガイスト×レブナント』では、ギリギリまで主人公に立ち塞がる、正真正銘の悪役（ヒール）としての役割だ。
それだって、コイツの出自を考えれば仕方のないことだし、ゲーム本編で歪んだのも学園長室で『ユグドラシル計画』を知ってしまったからだ。
そこで……中条シド自身が『ユグドラシル計画』の犠牲者の一人なのだと知ったから。
「理由を聞かせろ」
中条シドは、低い声で尋ねる。
だけど、理由なんてたった一つだけだ。
だから。
「世界で一番大切な女性（ひと）を、守りたいから」

俺は、ただ静かに、そして力強く答えた。

「ク、ククク……」
「中条？」
「クハハハハハハハハ！　いい！　やはり貴様はいいぞ！　それでこそ我がライバルだ！」
「えええええ！？」

ラ、ライバルう！？
い、いや、それは俺じゃなくて立花だろうが！

「よかろう！　もしもここを出る時が来たなら、我は貴様の元へ駆けつけよう！」
「っ！　わ、悪い……」

中条シドの快い返事に、俺はただ頭を下げた。

その時。

「時間です」

監視をしていた職員が無情にも終了の合図を告げると、中条シドは両脇から職員に抱えられる。

「ククク……我が向かうまで、簡単にやられてはくれるなよ？」
「ああ、もちろんだ」

最後にそれだけやり取りを交わし、中条シドは面会室を出て行った。

俺も踵（きびす）を返し、部屋を出ると。

「も、望月くん……」

心配そうな表情を浮かべた先輩が、おずおずと声を掛ける。

「はい……用事は済みました。帰りましょう」

「そ、そうか……」

俺と先輩は、それから無言のまま施設を出た。

「先輩」

「……なんだ？」

「来年……いや、再来年もその先もずっと、こんな用事なんかじゃなくて、今度は旅行でここに来ましょうね……その、二人で……」

そう言って、俺は先輩の左手を握る。

「あ……うん」

先輩は頬を赤らめ、静かに頷いた。

隔離施設（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

軌道修正（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今回は謎視点でお送りしております！
ちょっと人物特定を避けるため、あえて一人称を『　』で、精霊の名前を［　］で表しておりますが、ご了承くださいませ。

軌道修正

■???視点

「さて、と……」

『　』は部屋に帰るなり、ベッドに寝転がってスマホの画面を眺める。

「ウーン……だけど、今日はチョット失敗したなあ……なあ、お前もそう思うだろ？」

そんなことを呟きながら、隣にいる『　』の精霊（ガイスト）、［　］に問い掛けると、［　］は首をコクコクと縦に振った。

「だけどさあ、ここまで上手くいかないと、『　』としても困るんだよなあ……」

そう、『　』の計画は順調に進んでいたはずだったのに、気づいたら全部裏目に出てるんだよなあ……。

それよりも。

「頼むからメインストーリーのイベントくらい、順調にこなせよなあ……」

そう呟くと、『　』は思わず頭を抱える。

「大丈夫なのです！　マスターならきっと、全て上手くいくのです！」

『はは……［　］は優しいなあ……』

そう言うと、『　』は［　］の頭を優しく撫でた。

『えへへー、なのです』

すると。

――ピリリリリリ。

「ん？　電話？」

『　』はスマホを手に取り、画面を見ると……あー、アイツかあ……。

「もしもし」

『あ……今よろしいでしょうか……』

電話の向こうで、アイツがおずおずと尋ねる。

「いや、というか用件があるから掛けてきたんだろ？　それで、どうした？」

『あ、は、はい……その、今回の件ですけど……』

「あー……いや、正直お前に関してはよくやったよ。他の二人は駄目だったけどな」

『っ！　あ、ありがとうございます！』

ははは、ちょっと褒めてやると、すぐにこうやって嬉しそうな声を

出すなあ。
まあ、そういうところはメインヒロイン。普通に可愛い。

『あ、それで本題なんですが、今回の一連のことについて、『　』さんのおっしゃっていたこととといくつかずれがありまして……』
「ずれ？」

妙に引っ掛かる言い方をするので、『　』は思わず聞き返した。

「はい……実は……」

彼女が言うには、メイザース学園生徒会が学園長室へと侵入しようとした際、クソザコモブの“望月ヨーヘイ”や、主人公である“立花アオイ”、それにメインヒロインの一人である“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”と、その妹の“プラーミャ”が待ち構えていたとのこと。

それだけではなく、立花アオイとアレクサンドラに関しては、本来のものとは違う精霊（ガイスト）だったらしい。

『……あの望月ヨーヘイもそうですが、『　』さんからお聞きしていた『ガイスト×レブナント』の世界とは、なんだか違うような気がするのですが……』
「はは、そんなはずはない。ここは間違いなく『ガイスト×レブナント』の世界だよ」
『っ！？　も、もちろん『　』さんを疑っているわけではないんです！』

はは、『　』がチョット低い声を出しただけで、彼女のこの慌てよう……本当に、イジメ甲斐があるよ。

だけど……『ガイスト×レブナント』のキャラが、ゲームと違う動きをして、さらに、精霊（ガイスト）までも違う、かあ……。

『そ、それと、近衛スミのクラスチェンジ後の精霊（ガイスト）までもが異なっていました』

「……へえ」

それは興味深いなあ……。

つまり、向こうが何かをした結果というわけではなく、何かしらの要因が絡んで、そういったことが起きているってことだからな……。

「これはすごい情報だ。よくやった」

『っ！　あ、ありがとうございます！』

さあて……だけどこれは、ちょっとプランを練り直さないといけないなあ……。

なにせ、この『ガイスト×レブナント』の本編が終わった後の、この『　』がハピエンを迎えるためのプランを、な。

『そ、それで、私はこれからどうすれば……？』

「ああ……とりあえず、今しばらくは宿泊先のホテルにいてくれ。近々、別の住処（すみか）と身分を用意しておく。なあに、来年の春には呼び戻すし、それに、遠距離のほうが恋愛は燃えるだろ？」

『は、はい！　……そ、それで、次はいつ逢えますか……？』

「そうだな……次は、お前の冬休みだな」

定期報告をさせる上でも、そのくらいのタイミングのほうが、都合がいいだろう。

何と言っても、この『　』の駒が二人もいなくなってしまった

んだ。しばらくは、コイツに管理させないと。

せっかくの実験場であるメイザース学園を捨てるのは惜しいからな。

『冬休み……楽しみにしてますね……』

「ああ……おっと、大事なことを忘れていた」

『？　大事なこと、ですか……？』

「ああ……愛してるぞ、セシル」

『！　わ、私も、です……』

『　』は通話停止ボタンをタップすると、スマホをベッドに放り投げる……って。

「……なんだよ」

『……別に、なんでもないのです』

あー……［　］の奴、完全にヤキモチ焼いてるなあ……。

「全く……あの女は、ただの駒なんだぞ？　お前のほうが圧倒的に大事に決まってるだろ」

『そ、それはそうなのですけど……』

それでも機嫌が直らない［　］を、『　』は後ろから抱きしめた。

『はう……』

「はは……ホラ、機嫌を直せ」

『相変わらず、マスターはワルイ男なのです……』

そう呟くと、「　」はもぞもぞとこちらへと向き直り、『　』の胸に頬ずりした。

だけど。

「ハア……とにかく、ちゃんとゲーム本編通りに軌道修正させないと、だな……」

そう呟くと、『　』は深い溜息を吐いた。

軌道修正（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

メチャクチャにしてやる！（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今回は謎視点二回目です！
ちょっと人物特定を避けるため、あえて一人称を『　』で、精霊の名前を［　］で表しておりますが、ご了承くださいませ。

メチャクチャにしてやる！

■???視点

『マスター、［　］達は一体どこに向かっているのです？』

土曜日の深夜、『　』の隣を歩く［　］が不思議そうに尋ねる。

「はは、決まってる。新たな仲間を手に入れるためのアイテムを取りに来てるんだよ」

そう……アイツを仲間に加えるためには、アレが必要不可欠。

これさえあれば、アイツは間違いなく『　』の仲間になるはずだ。

そして。

「……ここに、その目的のアレがある」

『っ！？　で、ですけどマスター、ここに『私有地につき立入禁止』と書いてあるのです！』

「あー……まあ、今日『　』達は不法侵入をするんだ……」

『　』は頭を掻きながら、［　］にそう告げる。

いや、『　』だってそんなことはしたくないが、ここにあるんだからしょうがないんだよ……。

といっても、『攻略サイト』によれば、アイツの好感度が一定以上ある状態でメイザース学園のシナリオを進めていくと、自動的に

ここに侵入するイベントが発生するらしい。

「……なにせ、ここにはあの『藤堂家』に関する重要なものもあるからな」

そう……この私有地は、学園長である藤堂マサシゲにとって大切な場所なのだ。

で、そのイベントを終えるとこの私有地に自由に出入りすることができるようになり、同じく敷地内にある“南山”領域（エリア）が開放されることになる。

『な、なら、そのイベントが発生してからここに来ればよいのです！　わざわざマスターが犯罪者になる必要はないのです！』

「バカヤロウ。そんなのを待ってたら、アイツが『　』の仲間になることができなくなるだろ」

そもそも、『　』はアイツがやって来るまで待ったんだ。このまま『ガイスト×レブナント』のストーリーが進行してしまうと、“南山”領域（エリア）が開放された途端に主人公にアイツを奪われてしまう。

「とにかく、『　』は主人公よりも先回りしてここにあるアイテムを取りに来てるんだ。これくらいのリスクを冒さないと、仲間に引き入れることは無理なんだよ」

『で、ですが……』

それでも納得がいかない［　］は、上目遣いでなおも諫言（かんげん）しようとする。

『っ！？　マ、マスター！？』

「なあ、［　］……ただのモブ以下の『　』が仲間を手に入れ

ようとするなら、こうするしかないんだ……」

俺は［　　］を抱き寄せると、耳元でそうささやいた。

『んっ……マ、マスター……』

「だから……［　　］も協力して欲しい。『　』と［　　］の、最高の未来を迎えるために……」

そう言うと、［　　］のその長い耳を甘噛みした。

『ん……は……マスターは、ズルいのです……』

「はは……」

『　』は真っ赤になった［　　］からそっと離れる。

はは……［　　］ときたら、本当に扱いやすい。

「さーて……それじゃ、サッサとお宝を手に入れて、さっきの続きしようぜ」

『っ！　も、もう！　マスターはワルイ男なのです！』

［　　］は恥ずかしそうにポカポカと俺の肩を叩く。

そんな［　　］を適当にあしらいながら、『　』達は敷地内に入り、“南山”領域（エリア）を目指した。

◇

『食らえ！　なのです！』

［　　］がこの“南山”領域（エリア）に多く出現する幽鬼（レブナント）、“ブロンズウルフ”を倒すと、幽鬼（レブナント）は幽子とマテリアルにその姿を変える。

『ですがここの幽鬼（レブナント）、全然強くないのです！　楽勝なのです！』
「はは、まあな」

まあ、それも当然だ。
この“南山”領域（エリア）の踏破に必要なレベルは三十。つまり、“グラハム塔”領域（エリア）と変わらないんだから。

そうして『　』達は順調に進んで行き、とうとう一番奥である御殿へとたどり着いた。

『マスター、あそこにそのアイテムがあるのですか？』
「ああ……『揚羽蝶紋入り扇』がな」

そう……これこそが、『　』が一番仲間に引き入れたいヒロインである“土御門シキ”のキーアイテムだ。

『……以前、仲間に入れたいとは聞いていたのですが、マスターはどうして、そんなにその“土御門シキ”にご執心（しゅうしん）なのです……？』

［　］が口を尖らせながら尋ねる。
あー……［　］の奴、ヤキモチ焼きやがって……。

「決まってるだろ……このクソゲーを終わらせて、ハピエンを迎えるためだよ。『　』と、［　］が」
『っ！　そ、そうだったのです……』

はは、俺の答えを聞いて［　］の奴、モジモジしてやがる。
まあ、本音は土御門シキの精霊（ガイスト）、［導摩法師］のスキルの優秀さと、何より、土御門シキの容姿が『　』の好みなんだよ。

……いや、『ガイスト×レブナント』に出てくるヒロインは、この『　』が片っ端から食い散らかすつもりだけどな。

「はは」

そう考えていると、思わず笑いが零れる。

すると何を勘違いしたのか、［　］が『　』にそっと寄り添った。

『……［　］は、世界一幸せな精霊なのです……』

「ああ、『　』もだよ……」

［　］の頭をそっと撫でると、『　』達はいよいよ御殿の中に入る。

当然、そこには領域ボスである“義貞”がいるわけだけど……。

『これで！　トドメなのです！』

所詮はレベル三十五の領域ボス。［　］にアッサリと倒され、幽子と大量のマテリアルに変わる。

そして。

「さあ……『揚羽蝶紋入り扇』は、この中に……っ！？」

奥に鎮座されている木箱を開けた瞬間、俺は思わず息を飲んだ。

『……何も入っていないのです』

「バ、バカな！？　確かにここにあるはずなんだぞ！？」

ど、どういうことだよ！？

あの『攻略サイト』の情報がガセだっていうのか！？

……いや、これまで『攻略サイト』の情報は絶対だった。

つまりこれは。

「誰かが、『　』より先に持って行った……？」

そう呟いてから、『　』の中に黒い感情が芽生える。

また！　また、この『　』よりも先に持って行きやがった！

「望月、ヨーヘイ……！」

そして『　』は確信する。

アイツは『　』と同じく、この『ガイスト×レブナント』の全てを知っているのだと。

「……『　』と同じように『攻略サイト』を持っているのか、それとも、ラノベの主人公みたいに異世界転生してきた奴なのかは分からないが、間違いないだろう」

まあいい。

だったら、それはそれでやりようがある。

そもそも、望月ヨーヘイはこの『　』が『攻略サイト』を持っていることを知らないが、『　』はアイツがこの世界の情報を知り得ていることを知っている。これは大きなアドバンテージだ。

その上で……アイツから何もかも奪ってやる！
望月ヨーヘイの周りにいるヒロインも、何故か懐いている準ラスボスの生徒会長も！

「はは！　見てろよ望月ヨーヘイ！　オマエは、この『オレ』が全部メチャクチャにしてやるよッッッ！」

メチャクチャにしてやる！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

ということで、今回で幕間も終わり、明日からは第七章に突入します！　お楽しみに！

次回、第七章は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

来年、一緒に（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ第七章の開幕です！

来年、一緒に

「くあ……！」

俺はスマホのアラームを止め、大きくあくびをする……って。

「あー……いつまでたっても寝相が悪いなあ……」

『すぴー……すぴー……』

気持ちよさそうに俺の上に乗っかって寝ている［シン］を見て、俺は苦笑する。

全く……こんなちっこい身体のどこに、あんな根性とスピードの源があるのかね……。

そんなことを考えながら［シン］の頭を撫でると、俺は［シン］を起こさないようにしながらベッドから出た。

「さて……これから二年生になるまでの五か月、どうすっかなあー……」

カーテンを開けて窓から外を眺めながら、俺はポツリ、と呟く。

というのも、本来だったら二年生に進級するまではメイザース学園の暗躍を阻止するイベントが目白押しで、それを初手で叩き潰したモンだからあまりイベントがないのだ。

「まあ、この余った時間で今以上に強くなって、二年生になってからも万全の体制で臨（のぞ）まないとだけどな」

確かにメイザース学園の脅威は去ったけど、だからといって先輩の結末が変わるってわけじゃないんだ。

本当は、『ユグドラシル計画』そのものをサッサとぶち壊したいんだけど、さすがに国相手に単身で戦いを挑んでも勝てるわけないしなあ……。

「だからこそ、計画自体が意味のないものなんだと知らしめることで、計画そのものを諦めるように仕向けてるんだけど」

そう……先輩に“シルウィアヌスの指輪”をはめてもらうことで、必要な“ウルズの泥水”の吸収を半減させ、永遠に種を芽吹かせないようにする。

そうすれば、そもそも“ウルズの泥水”で種を満たすことができないんじゃないか、又は、“ウルズの泥水”を与えても種は芽吹かないんじゃないかと、疑心暗鬼に陥るはずなんだ。

「後は、先輩の身体の中から種を除去する方法なんだけど……ウーン……」

さすがに種を取り除く方法までは『攻略サイト』には載っていない。

まあ、『ガイスト×レブナント』本編においては、最終決戦の場で種が“ウルズの泥水”で満たされたタイミングで、先輩の父親である藤堂マサシゲに胎(はら)を破られて無理やり取り出されるんだけど。

「……しっかし、本気(マジ)でムカツクなあ」

その結末を思い浮かべるだけで、俺の中でこれ以上ないほどの怒りがこみ上げてくる。

亡くした最愛の奥さんを取り戻すために、大切な自分の娘を犠牲にして、挙句の果てに奥さんどころか最悪のラスボスを生み出すんだから。

「全部片づけて来年のクリスマスを超えられたら、絶対にぶん殴らないと気が済まねえ……！」

俺は右の拳で左の手のひらをパシン、と叩いた。

『むにゃ……はう、おはようなのです……』

すると、ようやく目を覚ました［シン］は、目をこすりながら挨拶をした。

「おう、おはよう」

『ところでマスター、窓の外を眺めて何をしてるんです？』

「ああ……ちょっと気合いを入れてたんだよ」

そう言って、俺はニコリ、と微笑む。

『はう！　じゃあ［シン］も気合いを入れるのです！』

ベッドから勢いよく出た［シン］は、俺の隣に来ると。

――パシン。

『はう！　気合い注入なのです！』

［シン］が自分の両頬を思い切り叩き、エッヘン、と胸を張った。

「プ、ププ……！　［シン］、お前……鏡を見てみろよ……！」
『へ？　鏡、なのです？』
［シン］はコテン、と首を傾げると、トコトコと鏡の前に向かう。
そして。
『はうはうはうはう！　気合いを入れ過ぎたのです！』
「ははははははは！」
なんと、［シン］は自分の頬を強く叩き過ぎたせいで、綺麗に小さなもみじが頬っぺたに出来上がっていた。
『はう！　そんなに笑うなんて、ヒドイのです！　ヒドイのです！』
「ははは！　わ、悪い悪い！」
頬をパンパンに膨らませて怒る［シン］にポカポカと叩かれ、俺は笑いながら謝った。
すると。
「ヨーヘイ！　［シン］ちゃん！　早くしないと、遅刻するわよー！」
「あ、ヤベ」
『はうはう！』
母さんの声が家中に響き渡り、俺と［シン］は慌ててリビングへと向かった。
◇

「望月くん、おはよう」

いつもの通学路のいつもの十字路。

先輩は今日もソワソワしながら待ってくれていて、俺の姿を見るなりぱあ、と笑顔を見せてくれた。

はあ……この先輩の笑顔だけで、今日一日戦える……。

「ふふ……そういえば望月くん、実は二年生の修学旅行が中止となってしまったのだ」

「えーっ!?」

先輩の何気ない一言に、俺は思わず大声で叫んだ。

いや、修学旅行が中止って何で!?

「まあ、領域（エリア）の外に“柱”……幽鬼（レブナント）が立て続けに二回も現れたら、学園としても大事を取って中止にする判断もやむを得ないだろうな」

そう言いながらも、どこか嬉しそうな先輩。

ちなみに、『ガイスト×レブナント』でハーレムを形成するためには、この修学旅行こそが重要だったりする。

というのも、二年のヒロインが修学旅行に行っている間を利用して、一・三年やその他のヒロインとひたすら好感度を上げるからだ。

まあ、時間を有効に使うという意味ではそうなんだろうけど……

お、俺はそんなことしないからな！

「で、でも、せっかくの修学旅行なのに、先輩は行けないんですね……」

学園生活で一度しかない修学旅行が“柱”のせいで……おのれ、“柱”！

「ふふ……だから、二年生は来年、今の一年生と合同で修学旅行に行くことになったんだ」

「ええっ！？」

先輩の言葉に、俺はさっき以上に驚く。もちろん、嬉しさのあまりに。

「じゃ、じゃあ……！」

「ああ……望月くん、来年の秋は、その……一緒に修学旅行に行こう」

はは……！　なんだよそれ……最高かよ！

「はい！　一緒に行きましょう！　はあー……来年が待ち遠しいなあ……！」

「あう……ふふ、私も楽しみだよ」

それから俺と先輩は、修学旅行の行先を予想したり、修学旅行先の自由行動で一緒に散策する約束をしたりしながら、楽しく登校した。

来年、一緒に（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

次の目標（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

次の目標

「ヨーヘイ！　おはようなのですワ！」

先輩と別れて教室へやって来ると、サンドラが笑顔で挨拶をしてくれた。

「おう、おはよう！」

「フフ……ところでヨーヘイ、メイザース学園との交流戦も終わりましたし、そろそろ次の領域（エリア）攻略を考えませんこト？」

「あー……」

サンドラの言う通り、メイザース学園の野望を叩き潰したことだし、当面は“柱”が現れた場合の対処と『ユグドラシル計画』の阻止だけに集中すればいいからなあ。

そうなると……後回しにしていたアレに手をつけるか。

「よし！　じゃあサンドラの提案に乗って、二学期が終わるまで領域（エリア）攻略を中心にするか！」

「エエ！」

「え？　領域（エリア）攻略？」

「私（ヤー）も混ぜなさいヨ」

すると、俺とサンドラの会話を耳聡く聞いていた立花とプラーミャが会話に加わってきた。

「ああ。“アルカトラズ”、“アトランティス”、“葦原中国（あしのはらなかつくに）”と、

領域（エリア）の踏破も終わったことだし、次の領域（エリア）攻略に乗り出そうと思ってな」

「！　だったら今度こそ、ボクと一緒にチーム組んで行こうよ！」

「待ちなさイ、アオイ。ヨーヘイはサンドラとこの私（ヤー）と組むんだからダメヨ」

お、おおう……まさか二人から、こんなに誘われるとは思わなかったぞ。

「ま、まあ落ち着け。とりあえずどんなチームで行くかも含めて、今日の昼休みにでもみんなで相談しようぜ」

「そ、そうネ」

「むー、分かったよ」

「仕方ないわネ」

立花とプラーミャは口を尖らせて不服そうではあるけれど、とりあえずは了承してくれた。

サンドラは安堵した様子ではあるものの、どこか不安そうにしている。

はは……分かりやすい奴。

「ワッ！？」

「まあ、そんなに心配する必要はないんじゃねーの？　ホラ、俺だって自分の背中を預けるのは、一番信頼できる奴にしたいしな」

サンドラの頭をガシガシと乱暴に撫でながらそう言うと。

「フフ……モウ、仕方ないですわネ」

サンドラは苦笑しつつも、嬉しそうに目を細めた。
良かった、とりあえず不安は解消されたみたいだ。

――キーンコーン。

「お、チャイムだ」
「じゃあ昼休み、ですわネ！」
「はは、おう！」

俺とサンドラはハイタッチをすると、それぞれ自分の席へと戻って行った。

◇

「ふむ……領域攻略を、な……」

昼休み、いつものように食堂に集まると、早速領域攻略について提案した。

「それはいいですが、今度はどの領域を攻略するんですか？」

氷室先輩が表情を一切崩さずに尋ねる。

「はい。今までは学園の外でばかり領域攻略をしていましたので、今度はいい加減、中の領域の攻略をしようと思いまして」
「中……ということは」
「はい。二年生の必修課題である、“カタコンベ”領域の攻略です」

そう告げると、この学園のことをまだ詳しく知らない土御門さん以外、みんなが納得して頷いた。

「へへ！　ようやくあそこを攻略できるのかよ！」

そう言うと、加隈がパシン、と拳で手を叩いた。まあ、コイツは以前から“カタコンベ”領域（エリア）の攻略に行こうってやたらと誘ってたもんなあ。

「ホホ……別に構わんが、わらわはまだ一年生の必修課題の“グラハム塔”領域（エリア）を踏破しておらぬえ？　ということは、わらわは留守番ということかの？」

「いや、もちろん土御門さんにも一緒に来てもらうよ。ただし、明日から」

「ホ、明日から、とな？」

俺の言葉に土御門さんがキョトン、とした。

「ああ。だから土御門さんには、今日中に“グラハム塔”領域（エリア）を踏破してもらおうと思ってる」

「なな、なんじゃと！？」

はは、さすがに驚くよな。

だけど、俺は土御門さんなら可能だと考えている。いや、むしろ土御門さんなら速攻で踏破だろ。

「そもそも土御門さんの精霊（ガイスト）、［導摩法師］には【式神】があるんだ。それさえあれば、“グラハム塔”領域（エリア）なんて散歩のようなものだし」

「じゃ、じゃが、領域（エリア）には罠や仕掛けがあるじゃろう！？　それは【式神】だけでは防げぬぞ！？」

「もちろん。だから土御門さんにはこれを」

そう言うと、あらかじめ持ってきておいた一冊のノートを渡す。

「これは……？」

「ああ、そのノートには、“グラハム塔”領域（エリア）の各階層のマップと罠やアイテムの位置、それと、出現する幽鬼（レブナント）の情報が書いてある」

「っ！？」

おずおずと尋ねる土御門さんにそう告げると、彼女は目を見開いた。

といっても、『攻略サイト』を丸写ししただけだから、実際には大したモンじゃないんだけどな。

「こ、これをわらわに……？」

「はは、まあ俺達は踏破しちまったし、今必要なのは土御門さんだからな」

すると。

「まこと……まっこと、お主は……！」

何故か感極まった土御門さんが、そのノートをキュ、と抱きしめた。いや、ちょっと感動しすぎじゃない！？

「ハア……全く、ヨーヘイときたラ……」

そう言って溜息を吐くプラーミャ。いや、俺は何も悪くないだろ！？

「……これは」

「エエ……少し、ヨーヘイに聞きませんト」
「ですね……」
え、ええと、先輩もサンドラも氷室先輩も、なんでそんなジト目で見るんですかね？

次の目標（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

くじの明暗（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

くじの明暗

「では、“カタコンベ”領域（エリア）には私達のチームと、立花くんのチームの二手に別れて攻略するということでいいかな？」

先輩は今日のランチである白身魚のポワレを口に含みながら、そう告げると。

「「異議あり！」」

「むむ！？」」

立花とプラーミャが、同時に物申した。

「ど、どうしてだ？　これまでの編成を考えれば、それが妥当だろう？」

「そ、それはそうですけど！　今度こそボクだって望月くんとチームを組みたい！」

「私（ヤー）も、サンドラやヨーヘイと組みたいワ！」

あー……朝の教室でもそんなこと言ってたもんなー……。

「ふふ、いいじゃないですか。今回のメイザース学園との一件を考えても、メンバーを入れ替えても連携を取れるようにしておくことは大事ですよ？」

「ホホ……たしかにその通りじゃの。特にわらわは、誰とも組んではおらぬゆえ……」

無表情で立花達に同意した氷室先輩と、ウンウンと頷く土御門さ

ん。
だけど土御門さん、なんで扇の向こうからチラチラと俺を見てるんですかね？
「ワ、ワタクシはチームの入れ替えには反対ですワ！」
テーブルをバン、と叩きながら立ち上がったサンドラは、猛烈に抗議した。
まあ、そうなるよな。
「ウーン……俺は、その……た、立花と一緒だったら別にどっちでも……」
そう言いながら立花を見やる加隈に、顔をしかめる立花。だよな。
「むむむむ……な、なら望月くんはどうなんだ？」
先輩がキッ、と俺に鋭い視線を向けながら尋ねる。
その真紅の瞳は、『分かっているよな？』と言外に告げているかのようだった。
だけど。
「「「「「「「……」」」」」」」
あ、みんなも俺をジッと見てる。
これ……下手に答えると後で悲惨な目に遭うヤツだ。
俺は答えに窮していると、氷室先輩が、ス、と手を挙げた。

「でしたらチーム編成に関しては、この際くじで決めるというのはどうですか？」
「「「「「「「「「「くじ！？」」」」」」」」」」
俺達は一斉に声を上げる。
「ひ、氷室くん！　くじとはどういうことなんだ！？　い、いや、そもそもチームを入れ替えるとまだ決まったわけでは……！」
「会長……いえ、藤堂さん。さすがに賛成が多い状況で、あなたの我を通すことはできません。ですので、せめて公平にということで、くじを提案したまでです。これなら、再び希望通りのチームになれますよ？」
「むむむむ……！」
氷室先輩にビシッと告げられ、思わず黙ってしまった先輩。
だけどコレ、完全に言い含められてるじゃん……。
「ワ、ワタクシは騙されませんわヨ！　くじってことは、一緒のチームになれない可能性が高いじゃないですノ！」
そう言うと、サンドラはビシッ！　と氷室先輩に人差し指を突き立てた。
おお……さすがにサンドラは引っかからなかったか。
「何を言ってるんですか。確率は二分の一もあるんですよ？　そうそう外れたりすることはないですから」
「ア、そ、それなラ……」
無表情で淡々と告げる氷室先輩の言葉にまんまと引っかかるサンドラ。

いや、俺もお前も同じチームって考えると、確率はもっと下がるからな！？

「ふふ、ではこれで異論はないですね？　では、くじは私が用意しますので少々お待ちください」

そう言って席を立って食堂のカウンターに行ったかと思うと、氷室先輩はすぐ戻ってきた。

「ええと……それは、割り箸？」

「はい、八本いただいてきました。これに……」

割り箸を袋から取り出し、四本だけその先端を赤のマジックで塗った。

「これで、印のあるチームとないチームで分けるわけです」

「は、はあ……」

そんな氷室先輩の説明に、俺は気の抜けた返事をする……って！？

「そ、そのくじですけど、俺が持ちますからね！」

俺は慌てて氷室先輩から割り箸をひったくる。

というのも、俺が返事をした瞬間、氷室先輩の口元がほんの少しだけ持ち上がったのだ。

つまり……氷室先輩は絶対にやらかす気だ。

「まあ、いいでしょう……（チッ）」

いや、今舌打ちしたでしょ！

「コホン……ということで、これは俺が先を隠しながら持つので、みんなは順番に……って、おわっ！？」

そう告げると、みんなが我先にと一斉に割り箸を引いていった。

「ええと……残る一本は、と……お、『印なし』だな」

俺は割り箸の先をこれ見よがしに、みんなに見せると。

「ど、どういうことなんだ！」

「こんなノ……おかしいですワ……！」

先輩とサンドラが再び勢いよく席を立ち、ワナワナと震える。

あ、ひょっとして……。

「ふふ……まあ、当然ですね」

かたや、氷室先輩は余裕の表情。このくじで、大分明暗を分けたな。

「ああー……外れたあ……」

「ほ、本当か立花！」

落ち込んで肩を落とす立花とは対照的に、満面の笑みを浮かべる加隈。

だけど加隈、そんな態度を見せたら、ますます立花に嫌われるんじゃ……。

そして。

「フン……私（ヤー）じゃなくてサンドラのほうのくじを引きなさいよネ……」

「ホ、どうやらそういうことかの」

プラーミャと土御門さんは、揃って『印なし』の割り箸をテーブルに置いた。

ということで、『印あり』のチームは先輩、サンドラ、立花、加隈になり、『印なし』は氷室先輩、プラーミャ、土御門さん、そして俺となった。

「そ、そんな……」

「こんなのっテ……こんなのっテ……！」

先輩とサンドラの二人が悔しそうに俯（うつむ）く。

「くじで決まったものは仕方ありませんから、二人共、甘んじて受け入れてください」

そんな二人に追い打ちをかけるように、氷室先輩が冷たく言い放った。

「ホホ、それよりも、早く食べてしまわぬと昼休みが終わってしまうえ？」

「そ、そうだね……」

どこか嬉しそうな土御門さんの言葉を受け、俺達はそそくさとランチを食べる。

だけど。

「あー……ちょっとこの結果は、予想外だったなあ……」

俺はそう呟くと、目の前のパンを無理やり口の中に押し込んだ。

くじの明暗（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お見通しの二人（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お見通しの二人

「ホホ、では行ってくるえ」

扇で口元を隠しながら微笑む土御門さんは、クルリ、と翻って“グラハム塔”領域（エリア）の扉をくぐった。

「ネ、ネエ……本当に一人で、大丈夫なんですノ……？」

サンドラは心配そうな表情で、俺の制服をつまみながら尋ねる。

「フフ、大丈夫ヨ。それは彼女と戦った私（ヤー）が保証するワ」

そう言ってプラーミャがクスクスと笑った。

確かにプラーミャの言う通り、土御門さんなら楽勝だろう。

「そうだぞ？　サンドラだって土御門さんの精霊（ガイスト）のステータスを見ただろ？」

「そ、それはそうですけド……」

正直、俺も［道摩法師］のステータスを見た時は驚いた。

だって。

――――――――――――――――

名前　：道摩法師

属性　：陰陽師（♀）

ＬＶ　：８１

力　　：Ｆ－
魔力　：Ｓ＋
耐久　：Ｂ
敏捷　：Ｂ
知力　：Ｓ＋
運　　：Ｓ＋
スキル：【闇属性魔法】【式神】【占術】
【状態異常耐性】【光属性弱点】
――――――――――――――――

……まさか、レベルが俺達の中で一番高いだなんてなあ。

ただ。

『ホホ……わらわの……いや、元メイザース生徒会メンパーのレベルが高いのは、木崎の指導によるものじゃ。あやつが、レベルを上げるための領域（エリア）を紹介してくれたのじゃ』

……というか、あのクソ女はどこでそんな情報を……？

しかもアイツは、メイザース学園に転校するまでは益田市とその近郊くらいしか知らないはずなのに、な……。

「ヨーヘイ……？」

気づくと、サンドラが俺の顔を覗き込んでいた。

「お、おうスマン。まあ、そういうことだから俺達はのんびり待ってようぜ」

「エ、エエ……」

ということで、俺達は雑談をしたりしながら待つこと二時間。

「ホ、なんとも拍子抜けよの」

土御門さんは余裕の表情を浮かべながら扉から出てきた。いや、それにしても。

「つ、土御門さん、さすがに早すぎじゃない！？」

「ホホ……それもこれも、望月のくれたノートのおかげじゃ……」

そう言うと、土御門さんは俺があげたノートをカバンから大事そうに取り出した。

「……これはもう、わらわには必要のないものじゃが……その、こ、このままわらわが持っていても……」

「はは、もちろん！　それは、俺が土御門さんにあげたんだから」

「ありがとう……」

土御門さんは顔を赤らめながら微笑む。

いや、こういう表情を見ると、さすがはメインヒロインの一人なんだと自覚するなあ。

「コホン」

咳払いのするほうへと視線を向けると……あ、先輩が眉根を寄せて不機嫌そうにしてる……。

「と、とにかく、土御門くんおめでとう。これで、明日からはこのメンバーで“カタコンベ”領域（エリア）に行けるな」

「ホ……ありがとうなのじゃ」

何だろう……先輩と土御門さん、少し雰囲気が……。
き、気にしないようにしよう。

「それで望月くん、“カタコンベ”領域（エリア）は明日からってことでいいんだよね？」
「あ、ああ。さすがに土御門さんも疲れてるだろうし、今日はもうこんな時間だしな」
「うん。じゃあ今日のところは解散、だね」

ということで、俺達はここで解散することになった……んだけど。

「あ、そうそう。立花、プラーミャ、加隈……それと、土御門さん」
「「「「？」」」」

帰ろうとした四人を呼び止めると、みんな振り向いて不思議そうな表情を浮かべる。

「ええと、どうしたの？」
「ああ……明日からの“カタコンベ”領域（エリア）の攻略は今日と同じ時間くらいに切り上げて、その後はその四人で“アルカトラズ”領域（エリア）や他の領域（エリア）に行ってほしいんだ。ほら、土御門さんはまだだろ？」

そう。俺達と違い、土御門さんは【火属性反射】、【水属性反射】、【氷属性反射】、そして【闇属性反射】を取得していない。
それに、土御門さんを加えたこのチームで連携を高めるのにも持ってこいだしな。

「ええと……それはいいけど、だったら望月くんも一緒に……」
「はは、悪い。俺達は生徒会の仕事があるから、ちょっと余裕がな

いんだよ。ですよね、先輩？」

俺は口裏を合わせてもらうために先輩を見やると。

「う、うむ！　生徒会もなかなか忙しいのだ！」

「あー……じゃあ、しょうがないねー……」

立花は肩を落とすも、とりあえずは納得してくれたようだ。

「それに、土御門さんはそもそものレベルが高いし、立花達は既に踏破してることを考えると、そうだな……できれば期末テスト前までには終えてくれると助かる」

「分かったよ」

立花達は強く頷いた後、今度こそ家路についた。

「ふふ……では、私も帰りますね」

「あ、氷室先輩もこんな時間まですいませんでした。タカシやニコちゃん、ミコちゃん、それにミャー太にもよろしくお伝えください」

「ええ。ですが、それは望月さんからあの子達に直接言ってあげてくださいね？」

おおっと、つまり今度、氷室先輩の家に来いってことか。

ま、まあ、少年達やミャー太にも会いたいから、顔を出すことにしよう。

そして、氷室先輩も手を振りながら帰って行った。

「さて……」

俺はクルリ、と振り返って残る先輩とサンドラを見やると。

「フフ……ところデ、土御門サンに各属性反射をマスターさせるのは分かったんですけド、どうしてあの三人ニ？」

そう言って、サンドラがクスクスと微笑む。

あー……分かってるくせに……。

「もちろん、“カタコンベ”領域（エリア）の攻略が終わったら、あの四人でチームを組んでもらうからだよ」

「ふふ、なるほど」

俺の説明を聞き、先輩もサンドラも、嬉しそうに頷いた。

「……今回の“カタコンベ”領域（エリア）は残念な結果になったけど、俺が一緒に行きたいのは先輩とサンドラだから」

「っ！　……もちろん、それは分かっているよ」

「エエ……だってヨーヘイ、ワタクシ達と違うチームじゃないって分かった途端、唇を噛んでましたものね」

「え！？」

うわあ……俺、無意識に顔に出てたのかあ……。

「ふふ……私達には、そんな望月くんの仕草が見れただけで充分だよ」

「フフ、そうですわネ」

「そ、そんなことより二人共！　早く“ぱらいそ”領域（エリア）に行くぞ！」

微笑みながら見つめる二人に恥ずかしくなった俺は、ごまかすように初心者用の領域（エリア）の扉を勢いよく開けた。

お見通しの二人（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

最強のスキル（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『はううう……やっぱり不味いのです……』

今日五個目の疾走丸を飲み込み、［シン］が舌を出して顔をしかめる。

「いやあ……しっかしその疾風丸って、本当に不味いのか？」

「はう！　マスターは食べたことがないからそんなこと言えるのです！　一度その口にねじ込んでやりたいのです！」

俺が皮肉交じりに言うと、［シン］は顔を真っ赤にしてプンスカ怒り出した。はは、からかい甲斐のある奴。

「ふむ……だが、確かに疾風丸もそうだが、他の丸薬を含め、そこまで不味いものなのかな？」

そう言って、先輩は隣にいる［関聖帝君］をチラリ、と見やると……あ、［関聖帝君］が青ざめてる。これは相当不味いみたいだな。

「フフ、ならせめてヨーヘイは、この後［シン］にジェラートを食べさせてあげませんとネ」

『はう！　そうなのです！　ちゃんと［シン］を労ってほしいのです！』

嬉しそうにクスクスと笑うサンドラの言葉にここぞとばかりに同調し、［シン］は俺の腰に抱きついて上目遣いでおねだりをしてきた。

「はは、んじゃ、今日のノルマが終わったら、みんなでルフランに行くか」
「う、うむ！　行こう！　ぜひ行こう！」
「モチロンですワ！」

ということで、俺達はいつもよりも速いペースでノルマであるクイーン・オブ・フロストとキング・オブ・フレイムの撃破と疾走丸の入手を行う。

「あ……」

十回目のキング・オブ・フレイムを終えたところで、先輩が声を漏らした。

「？　先輩、どうかしました？」
「う、うむ！　これを見てくれ！」

先輩は手に持つガイストリーダーを俺とサンドラへと向ける。

――――――――――――――――――――
名前　：関聖帝君
属性　：軍神（♀）
ＬＶ　：７５
力　　：ＳＳ
魔力　：Ｂ＋
耐久　：ＳＳ
敏捷　：Ａ＋
知力　：Ｓ
運　　：Ｂ

スキル：【一刀両断】【乱戦】【大喝】【統率】
【物理攻撃耐性】【状態異常無効】【火属性反射】
【水属性反射】【氷属性反射】【闇属性反射】
【千里行】
――――――――――――――――

「あ……！」

そこには、レベルやステータスと一緒に、新たに加わったスキルがあった。

〝【千里行】〟

［関聖帝君］の……いや、『ガイスト×レブナント』における、最強スキル。

「ふふ……！　とうとうレベルが七十五になったと思ったら、まさか新たなスキルが手に入るなんて思いもしなかったよ！」

先輩の声が歓喜に震える。
だけど……【千里行】のすごさを知っている俺は、先輩以上に打ち震えていた。

ははは……！　こんなの、ますます最強じゃねーか！

「先輩！　やりましたね！」
「おめでとうございますワ！」
「うむ……うむ……！　二人共、ありがとう……！」

俺とサンドラが祝福の言葉を告げると、先輩ときたら、少し涙ぐ

んでるんじゃないか？
見ると、［関聖帝君］も同じように瞳に溜まった涙を指ですくっていた。

「よっし！　今日はお祝いしようぜ！　ケーキでもなんでも、全部俺が奢る！　もちろんいくつでもだ！」
「ヤッター！」
『はうはうはうはう！　わあい！　なのです！』

俺の言葉に、サンドラと［シン］が、ぱあ、と表情を明るくする。

そして。

「あう……そ、それほどのことでは……」
「何言ってるんですか！　ここにきての新スキルですよ！　というか先輩のそのスキルは、この世界で絶対最強ですから！　俺が保証します！」

照れる先輩に俺は詰め寄り、全力で推す。

そうとも！　俺は嬉しいんだ！
あの【千里行】を手に入れたことも、そして、このスキルが“ウルズの泥水”に頼ったまがい物なんかじゃなく、先輩の本当の力だったことも！

「あう……ふふ、本当に君は……」

俯き（うつむ）ながらそう呟くと、先輩は口元を緩めながら自分の左手をそっと撫でた。

「さあ！　それじゃ行こうぜ！」
「エエ！」
『はう！』
「ふふ……ああ！　行こう！」

俺達は、意気揚々と“ぱらいそ”領域（エリア）、そして、初心者用の領域（エリア）を出てルフランへと向かった。

◇

『んふふー！　ウマウマなのです！』

［シン］が嬉しそうににぱー、と笑顔を浮かべながら、五段重ねのジェラートを頬張る。

「むむ……！　こちらのフォンダンショコラにするか、それともレアチーズケーキにするか……！」
「あはは！　だったら両方食べればいいじゃないですか！」
「う、うむ！　そうだな！」

悩む先輩の背中を押すと、むふー、鼻息荒く頷く先輩。こういうたまに見せる子どもっぽいところも魅力的でたまらない。

「フフ……ではワタクシは、レニングラーツキーにしますワ」
「オイオイ、一個と言わずもっと食べろよ」
「何をおっしゃいますノ。晩ご飯も食べないといけませんのに、そんなに食べれませんわヨ」

俺がもっともっとと勧めるが、サンドラに苦笑しながらやんわりと断られた。

ま、まあ、無理強いはよくないか……。

「んじゃ、俺はミルクレープにしようかな。すいませーん！」

店員さんを呼び、それぞれ注文を済ませる。

「そういえば今さらだけど、［関聖帝君］にも味が分かるみたいだし、ひょっとしてここのスイーツ食べられたりするのかな……？」

「どうだろうか？」

「そうですわネ……」

俺達三人は首を傾げた後、チラリ、と［シン］を見やる。

『んふふー！　アイスをおかわりなのです！　次も五段重ねなのです！』

あっという間にジェラートを食べ終えた［シン］は、マスターである俺そっちのけで店員を呼び、追加注文をしている。コイツ、本当に精霊（ガイスト）かよ……。

ま、まあ、店員さんも慣れたもので、今じゃ一切気にすることなく応対してるし、いいか……。

「た、試しに［関聖帝君］と［ペルーン］を呼び出して試してみませんこト……？」

「あー……そうだな」

ということで、先輩とサンドラがそれぞれ精霊（ガイスト）を召喚し、椅子を二脚追加して座らせる。

「だ、だが、さすがに［関聖帝君］と［ペルーン］では、店内が狭く感じてしまうな……」

先輩は気まずそうに呟いた。

だけど、確かに［ペルーン］は言わずもがなだし、［関聖帝君］は青龍偃月刀（えんげつ）が邪魔だ。とはいえ、さすがに傘立てにても置いてくるわけにもいかないからなあ。

「お待たせしました」

ということで、店員さんに持ってきてもらったケーキを［関聖帝君］と［ペルーン］の前に持ってくると……お、［関聖帝君］も［ペルーン］も、瞳をキラキラさせてるぞ？

「さ、さあ、食べてみてくれ」

先輩が勧めると、［関聖帝君］はおずおずとフォークを手に取り、一口サイズに切って口へと運んだ。

すると。

『……！　……！』

はは……［関聖帝君］、いつもの凛とした表情とは打って変わって、頬っぺたを押さえながら最高にゆるっゆるの顔になってるよ。

というか、［ペルーン］に至っては一口でケーキを食っちまうなんて、豪快すぎるだろ……。

「は、はは……今度から、精霊（ガイスト）も一緒に食べたほうがよさそうだな……」

『『！　（コクコク！）』』

俺は苦笑しながらそう呟いた瞬間、［関聖帝君］と［ペルーン］が激しく首を縦に振った。

『はう……二人も追加になると、［シン］の取り分が減ってしまうので……え、えへへー、冗談なのです……』

［シン］のぼやきを耳聡く聞いていた［関聖帝君］と［ペルーン］が鬼の形相で睨みつけると、［シン］は顔を真っ青にしながら縮こまってしまった……。

「も、望月くん！　わ、私のケーキを［関聖帝君］が食べてしまったから、そ、その……」

ああ、俺のミルクレープが食べたいんですね？　分かります。

俺は、ス、と無言でミルクレープを差し出すと。

「むむ！　い、いいのか……？」

おずおずと尋ねる先輩に、俺は無言で頷く。

「う、うむ！　ではいただこう！」

そんな感じで、俺達はルフランで楽しく過ごした。

最強のスキル（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お守り（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お守り

［関聖帝君］が最強スキル、【千里行】を取得した次の日の放課後。

俺達八人は“カタコンベ”領域（エリア）に集結していた。

「さて……では、昨日決めたチーム分けで、この“カタコンベ”領域（エリア）を攻略する。みんな、無理をしないようにな」

「「「「「「「「「「はい！」」」」」」」」」」

先輩の言葉を合図に、俺達は各チームへと分かれる。

すると。

「ヨーヘイ……」

「ん？　サンドラ？」

サンドラが俺の制服の袖を引っ張り、俺の顔を上目遣いで覗き込んでいた。

「どうした？」

「あ、あノ……ホ、ホラ、この“カタコンベ”領域（エリア）は、ワタクシはヨーヘイと一緒にいられないから、そ、そノ……」

サンドラの奴、顔を真っ赤にしてモジモジしだしたぞ？

「ああ……なあに、“カタコンベ”領域（エリア）なんかサッサと踏破して、また今まで通りに戻ろうぜ」

多分、サンドラはチームが分かれることが不安なんだろう。
だから、できる限り安心させる意味合いを込めて励ましたんだけど……。

「モ、モチロンそれもあるんですけド……こ、ここではワタクシ、ヨーヘイを守ってあげることができないですかラ……」
「はは、心配すんな。俺の［シン］に、幽鬼（レブナント）ごときの攻撃が当たるわけないだろ？」
「わ、分かってますワ！　それでも、万が一ってこともあるんですのヨ？」
「お、おう……」

ズイ、と詰め寄られ、俺は思わずしどろもどろになる。

「ン……」

サンドラがそっぽを向きながら、俺の胸にドン、と拳を打ちつけた。といっても、思いっ切り殴ったりしたわけじゃなく、激励に近かった。

そして、ゆっくりと握った拳を開くと……手のひらの上には、布でできた不格好な人形が現れた。
目を凝らしてみれば、縫った糸がところどころほつれていたりしている……。

「これ……？」
「……ルーシでは、邪悪なものから身を守るためにこの人形を持つんですノ」

その言葉で、意味を理解する。
これは、サンドラが俺のために作ってくれたお守りだってことに。
はは……全く……！
「ありがとな……これは、制服の内ポケットに大切にしまっておくよ」
「……絶対に、ムチャしてはいけませんのヨ……？」
俺がサンドラの頭を優しく撫でると、サンドラは俺の手に自分の手を添えた。

◇

「食らいなさイ！　【ブラヴァー】！」
“カタコンベ”領域（エリア）の地下第四階層。
通路の陰から幽鬼（レブナント）の“マミー”が姿を現した瞬間、プラーミャの精霊（ガイスト）、［スヴァローグ］がハルバードに紅蓮の炎をまとわせて投てきすると、マミーは全身を焼かれながら幽子とマテリアルへと姿を変えた。
「フン、他愛ないわネ」
「ホホ……じゃが、この狭い通路であのような大技、さすがにやり過ぎじゃて」
「ナニヨ！」
土御門さんにからかうように指摘され、マミーを倒してご満悦だったプラーミャが口を尖らせた。

というかこの二人、やけに仲が良いな。

「ふう……ですが、このように入り組んだ狭い通路ですと、［ポリアフ］による遠距離攻撃も難しいですね……」

「いやいや、それでも【オブザーバトリー】による幽鬼（レブナント）の解析や後方支援など、本当に助かってますから」

いや、実際［ポリアフ］のスキルのおかげで順調そのものだ。

というのも“カタコンベ”領域（エリア）は地下三十階層まであるんだけど、その階層の全てが入り組んだ迷路のようになっていて、［ポリアフ］の案内がなかったら同じ通路を何度もウロウロする羽目になってもおかしくない。

何より厄介なのが、この階層はランダムに三パターンの通路が生成されてしまうのだ。しかも、一度階層から出て再度侵入したらまた変わるっていうオマケ付きで。

もちろん、『攻略サイト』にはランダムに生成された全てのマップが載っているけど、自慢じゃないがそれを全て覚えられるほど俺の頭は良くないからな。

かといって、みんなの目の前でスマホを見ながら進むこともできないしな……。

「とにかく、俺達がこんな短時間で地下第四階層に来れたのは、氷室先輩のおかげなんです。このままお願いしますね！」

「ふふ……任せてください」

表情は変えないまま、氷室先輩はその先輩すらも凌駕する胸をポヨン、と叩いた。

は、破壊力抜群だ……！

「ホ……なんともうらやましいのう……」

そう言うと、土御門さんが氷室先輩の胸と自分の胸を交互に見比べる。

い、いや、土御門さんは確かに大きいってわけじゃないけど、それでも普通に胸のサイズはあるし、形だって良さそう……って！？

「イテエ！？」

「全ク……視線がバレバレなのヨ」

眉根を寄せるプラーミャに、思い切り足を踏んずけられてしまった。

……気づかれないように、眼鏡でも掛けるようにするかなあ……。

「ホラ、サッサと先に進むわヨ」

完全に不機嫌になったプラーミャが、俺達を先導するように先頭をスタスタと歩く。

俺達はそんな彼女に遅れないよう、すぐに追いかけるんだけど……。

「……ナニヨ」

「いや、何も言ってないだろ！？」

隣に並んだ瞬間、プラーミャにギロリ、と睨まれた。

いや、というかプラーミャの身体が小っちゃいからすぐに追いついてしまったんだけど、それがことのほか気に入らないらしい。

「フン！　私（ヤー）だって、そのうち大きくなるわヨ！」
「そ、そうか……？」

プイ、と顔を背けてそんなことを言うプラーミャだけど……多分、その可能性は低そう。それに、先輩に負けないくらい胸は育ってるんだから、別にいいじゃんよ。

「ダカラ！　視線でバレバレだって言ったでショ！」
「アイタアッ！？」

そして、俺は怒鳴るプラーミャにまた足を踏まれた……。

お守り（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷室先輩のお誘い（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷室先輩のお誘い

「ふう……今日はここまでにしよう」

“カタコンベ　”領域（エリア）の地下第十階層まで来たところで、俺は三人にそう声を掛けた。

「アラ？　私（ヤー）はまだ行けるわヨ？」

「ホホ、そうじゃの」

おっと、二人はまだ攻略を続けたそうだな。

だけど。

「いや、もうこの領域（エリア）に入って二時間だし、潮時だろう」

というのも、氷室先輩はこれから家に帰って家事と弟妹の面倒を見ないといけないからな。

「ハア……仕方ないわネ」

「ホ、では戻るとするかの」

プラーミャが溜息を吐いてかぶりを振り、土御門さんは肩をすくめた。

そして、俺達は領域（エリア）の扉へと戻るんだけど。

「望月さん」

隣を歩く氷室先輩が声を掛けてきた。

「？　どうしました？」

「ありがとうございます……そして、すいません……」

表情こそ変わらないものの、氷室先輩の藍色の瞳には謝罪の色が窺える。

ハア……そんなの、気にしなくていいのに……。

「氷室先輩……忙しい氷室先輩をこうやって付き合わせて、むしろ謝るべきは俺ですよ。そして、それでも俺はこれからも、氷室先輩に一緒に付き合ってほしいです」

「っ！？」

俺の言葉に、氷室先輩は顔色を変えずに息を飲んだ。

「……それは、私の［ポリアフ］が優秀だから、ですよね……？」

氷室先輩が窺うような視線を送ってきた。

あー……確かに、氷室先輩の精霊が優秀で、先輩を不幸なシナリオから救うために必要だからっていうのは嘘じゃない。

だけど。

「……俺は、少なくとも信頼できる人しか仲間にしません」

これは、まぎれもない事実。

俺が本当に精霊が優秀で強い、そんなくだらない理由だけで選ぶんだったら、最初から対ラスボスに特化した編成にしている。

何より氷室先輩のクラスチェンジ前の精霊は［スノーホワイト］。

ハッキリ言って、仲間になるヒロインの中では弱い部類だ。

でも、それでも氷室先輩を仲間にしたのは、そのくじけない心の強さと、家族を想う優しさに惹かれたから。

そんな氷室先輩に尊敬の念を抱いたからなんだ。

「ふふ……少し意地悪な質問をしてしまいました。あなたが、そんな上辺だけを見る人じゃないって分かっているのに」

そう言うと、氷室先輩の口元がわずかに緩む。

「よし！」

「「「っ！？」」」

珍しく大きな声を出した氷室先輩に、俺だけじゃなく前を歩くプラーミャと土御門さんも思わず振り向いて氷室先輩を見た。

「さあ、明日からも頑張りましょう」

そう言うと、氷室先輩は表情を変えず、ムン！　と小さくガッツポーズをした。

◇

「ふふ、望月くん、みんな、お疲れ様」

扉を抜けて領域（エリア）の外に出ると、既に帰還していた先輩にねぎらいの言葉をもらった。

「はは、ただいま戻りました」

そんな、ほんの些細なことが嬉しくて、俺の顔もつい綻(ほころ)んでしまう。

「ヨーヘイ、無事でなによりですワ！」

そしてサンドラも俺の元にやって来て、安堵の表情を見せた。

「当然だろ？　だって、サンドラお手製の最強のお守りがあるんだぜ」

そう言って、俺は制服の胸の部分をポンポン、と優しく叩いた。

「フフ……モウ、ヨーヘイのバカ」

恥ずかしそうに顔を逸らしたサンドラ。

全く……こんな大切なもの貰っちまったら、並大抵のお返しじゃ済まないぞ。

「ねえねえ望月くん！　どこまで攻略できた？」

「そうだぜ！　サッサと聞かせろ！」

今度は立花と加隈の奴が興味津々で尋ねてきた。

「俺達のチームは地下第十階層だな。お前達は？」

「ふふーん、ボク達は地下第十二階層だよ！」

「おお！　スゲエ！」

いや、まさか俺達よりも二つも先行してるとは思わなかった。

だって先輩達のチームは、氷室先輩みたいに解析スキルを持った

精霊（ガイスト）はいないんだから。

だけど。

俺は先輩、サンドラ、立花、加隈を見やる。

……よくよく考えれば、『ガイスト×レブナント』最強の精霊（ガイスト）使いと本編主人公が同じチームで、しかもパッケージの表紙に載るメインヒロインと相棒キャラも従えてるんだもんなあ。ある意味チートだ。

「クッソ！　明日は俺達も負けねーからな！」

「あはは！　次もボク達が勝つもんね！」

俺と立花は、お互い顔を近づけて不敵に笑い合った。

はは、これじゃまるで、クソザコモブの俺が主人公のライバルにでもなった気分だ。

「さあさあ！　今日はこれで解散して、また明日だ！」

先輩がパンパン、と手を叩き、みんなに帰るように促す。

まあ、みんなに早く帰ってもらわないと、“ぱらいそ”領域（エリア）に行けないもんな。

「では、私はこれで失礼します」

真っ先に氷室先輩がペコリ、とお辞儀をし、足早に帰……

……アレ？　戻ってきたぞ？

そして、俺の傍（そば）に近づくと。

「望月さん……今週の土曜、空いていますか？」
「へ？　今週の土曜、ですか……？」

まあ、いつものノルマをこなす以外は、今のところ予定は入ってない。
けど、一体何があるんだろう？

「ええと……一応空いてますけど……」
「ふふ、でしたら、タカシ達に会ってあげてはくれませんか？　この前、『兄ちゃんに勝ったばかりの俺のデッキを見せるんだ！』って、意気込んでましたから」

あーなるほどー……少年がなあ……。
んで、コレって少年やニコちゃんミコちゃん、それにミャー太と遊んでる時に氷室先輩のご両親が帰ってきて外堀埋められていく、氷室先輩の恋愛イベの一つだなあー……。

こ、断るべきだと思うんだけど……。

「……」

く、くそう……普段は無表情で感情を表さないくせに、こんな時に限って藍色の瞳をキラキラさせてる……。

「あ、あはは……そ、そうですねー……」

俺が頭を掻きながら返答に迷っていた、その時。

「ふむ……土曜日か。私も氷室くんの弟妹にまた会いたいな」

「フフ……氷室先輩、ネコを飼ってらっしゃるんですわよネ？　ワタクシも見たいですワ？」

いつの間にか俺の両サイドに先輩とサンドラがおり、氷室先輩に向けてニヤリ、と笑った。

「……（チッ）」

氷室先輩はピクリ、と眉を一瞬だけ持ち上げ、聞こえないほどの舌打ちをした。

あ、はは……先輩とサンドラのおかげで、とりあえず恋愛イベは回避できた、のかなあ……？

というわけで、今週末の土曜日は俺達三人で氷室先輩の家に行くことが決まった。

だけど。

「はは……まさか、な……」

俺は、この『ガイスト×レブナント』において最も恐ろしいイベントが一瞬だけ頭をよぎったが、それを振り払うように大きくかぶりを振った。

氷室先輩のお誘い（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

いざ！　氷室邸へ！（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

いざ！　氷室邸へ！

「ハア……ハア……す、すまない、待たせてしまった」
「フエエエエ！　遅れてしまいましたワ！」

ということで、氷室先輩にご自宅に誘われ、駅前で一緒に行く先輩とサンドラを待っていると、今日に限って珍しく遅れた（といっても、待ち合わせの時間より三十分早いけど）二人が、同時に息を切らしてやって来た。

「い、いや、まだ全然早いから大丈夫、ですけど……」

俺は二人を見た瞬間、思わずしどろもどろになる。

いやだって二人の今日のコーデ、メッチャ気合いが入ってるんだけど！？

先輩に関しては胸元が開いて強調されたインナーにモスグリーンのカーディガンを羽織り、黒色ロングのフレアスカート、足元は珍しくルージュのパンプスを履いていた。

そ、それに、ひょっとして薄っすらとメイクしてる……？

サンドラも同様に、以前デートで着てきた時と趣向を変えて、ゴスのないただのロリータファッションで攻めてきてやがる……。

なのに、タイツだけいつもの白とは反対の黒にしてアクセントをつけ、まるで異世界から迷い込んだ妖精といっても過言じゃない……。

……ひょっとして、俺と二人で遊びに行ったりした時よりもオシャレしてるんじゃなかろうか。

「うむ！　では行こうか！」

「エエ！」

そして、先輩とサンドラがフンス！　と意気込むと、氷室先輩の家へと向かって歩き出す。

その姿はまるで、これから最終決戦に挑む勇者の行進のようだった。いや、遊びに行くだけですよね？

俺はえもいわれぬ不安感に襲われつつも、とにかく二人の後を追った。

◇

「ここか……！」

氷室先輩の家を見上げながら、先輩がポツリ、と呟く。

ですけど、先輩も一度来たことありますよね？　台詞（セリフ）と会ってないんですけど。

「フフ……腕が鳴りますワ」

そう言うと、サンドラが不敵に笑う。

いや、腕を鳴らす機会は皆無だろ。

「と、とにかく、インターホンを押しますね……」

俺はそんな二人の様子にいたたまれなくなり、状況を打破するた

めにそそくさとインターホンを押した。

すると。

「あ！　兄ちゃん！」

「お、少年！」

玄関から少年……タカシが飛び出してきて、俺達はハイタッチを交わす。

『はうはう！　［シン］も来たのです！』

「「わー！　［シン］ちゃん、いらっしゃい！」」

［シン］は［シン］で、少年から一歩遅れてやって来たニコちゃんミコちゃんと、手を繋ぎながらはしゃいでいた。

そして。

「ふふ、お待ちしていました。望月さん」

氷室先輩が無表情で玄関から出てくると、なぜか俺にだけ挨拶を交わした。

そんな氷室先輩を見て、俺は色んな意味で言葉を失う。

いや、だって、氷室先輩は自分のお家ですよね？

なのに氷室先輩のそのコーデときたら、青のストライプのブラウスに黒のテーパードパンツ、アクセントのサスペンダーがその豊満な胸とそれに似つかわしくないスレンダーなスタイルを強調していた。

それに……先輩に続いて氷室先輩まで、唇に薄っすらとルージュをひいてるし……。
どこかにお出かけするつもりですか？

「ふふ……ああ、今日は招待してくれてありがとう」
「エエ……コチラ、お土産ですワ」

氷室先輩に無視された格好となった先輩とサンドラが、ズイ、と俺と氷室先輩の間に立つと、口の端を吊り上げて嗤う。

「ふふ……お付きの人もようこそ」

氷室先輩も負けじと、あのメイザース学園との交流戦で向こうの生徒会副会長を蹂躙した時のような、ニタア、と暗い笑みを浮かべた。
ヒイイイ！？　なんでこんなに険悪なんだよ！？　どうすんだよコレ！？

「な、なあなあ兄ちゃん……兄ちゃんが連れてきた友達って、うちの姉ちゃんと仲悪いの……？」
「い、いやー？　そそ、そんなことはないけど？」

不安そうな表情で尋ねてくる少年に、俺は顔を引きつらせながら答えた。
そ、そろそろ少年達も怖がってるから、その辺で仲良くしてもいいんじゃないですかね？　ね！

『プークスクス！　予想通りの結果なのです！　これはこの後も楽しみなので……え、えへへー、べ、別に楽しんでなんかいないので

す……』

この様子にほくそ笑んでいた［シン］だったけど、いつの間にか勝手に召喚されていた［関聖帝君］、［ペルーン］、［ポリアフ］に囲まれ、［シン］はその小さな身体をさらに縮ませた。

だけど。

「おお！　やっぱりお姉ちゃん達も精霊（ガイスト）使いなんだ！」

「「すごーい！」」

先輩とサンドラが無意識に召喚した精霊（ガイスト）を見て、ついさっきまでの不安や怯えといった表情から一変し、少年達は瞳をキラキラさせる。

「あ、あう、そ、そうか？」

「フフ……強そうでショ？」

照れる先輩と微笑みを浮かべるサンドラ。

少年、ニコちゃんミコちゃん、ナイスだ！

「ふふ……いつまでも玄関の前にいても仕方ありませんので、三人共、中へどうぞ」

氷室先輩も暗い笑みをやめていつもの無表情に戻ると、俺達を家の中へと案内する。

と、とりあえず場が丸く収まって良かった。

そう思っていた俺だけど……あ、先輩もサンドラも氷室先輩も、こめかみをピクピクとさせてる……。

結局は、少年達の手前、無理やり抑えたってだけかあ……。

『はう……マスター、今日は血の雨が降るかもなのです……』

「言うな……」

俺の隣に来てポツリ、とささやいた［シン］に、俺は両手で顔を覆いながらその一言だけを呟いた。

ハア……胃が痛くて仕方ない……。

いざ！　氷室邸へ！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

メタルギア・ドレイク（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「お、お邪魔します……」

氷室先輩に案内され、俺達は家の中へと入る。
だけど、別に初めて来たわけでもないのに、何故か俺は緊張のあまり声が上ずってしまった。

その時。

「ミャー」

わざわざ玄関まで出迎えに来てくれたミャー太が、上がった途端、俺の足元にすり寄ってきた。

「はは、来たぞミャー太」

俺はしゃがみ込んでミャー太を抱えると、ミャー太は嬉しそうにごろごろ、と喉を鳴らした……って。

「ええとー……みんな？」

見ると、ミャー太に構ってほしい氷室先輩だけじゃなく、［シン］や先輩、サンドラまでがジッと俺とミャー太を見つめていた。

「そ、そんな……私なんかミャー太に抱かせてもらったことなんて、数えるほどしかないのに……」

そう言って表情は変わらないものの、見るからに落胆して肩を落とす氷室先輩。

『はうはうはうはう！　［シン］がいるのに……［シン］がいるのにい……！』

［シン］はといえば、オニキスの瞳に涙を浮かべながら、ミャー太を嫉妬で睨んでるし。というかネコと張り合うなよ。

「むむむむ！　こ、こんなところに強力なライバルが……！」

いや、先輩も［シン］と同レベルですか……。

「フエエエエ……な、何とかウチで飼えないかしラ……」

サンドラ……ミャー太は氷室先輩の家の子だぞ？　無理に決まってるだろ。

「はは……困ったな、ミャー太……」

「？」

そう告げて俺は乾いた笑みを浮かべるけど、理解してないミャー太はコテン、と首を傾げた。まあ、当然の反応だよな。

「キャアアアアア！　首を、首を傾げましてヨ！」

一人興奮しきりのサンドラがカバンからスマホを取り出し、ミャー太を何枚も写真に収める。

サンドラの奴、ここまでネコ好きだったんだなー……。

俺はそっとサンドラの傍に寄ると。

「……今度、猫カフェにでも行ってみるか……？（ボソッ）」

「！」

俺が耳元でそう告げた瞬間、サンドラは顔を紅潮させて勢いよく何度も首を縦に振った。

はは、喜んでくれたみたいでなにより。

「コ、コホン……では、こちらへ……」

気を取り直した氷室先輩が、俺達を畳の部屋へと案内してくれた。

ここは、俺が怪我をさせた少年を運んできた時に、氷室先輩が通してくれた部屋だ。

「今、飲み物をご用意しますね」

そう言い残すと、氷室先輩が部屋を出て行った。

「なあなあ兄ちゃん！　これ、俺の考えたデッキなんだぜ！」

俺の隣に座った少年が、早速テーブルの上にカードを並べる。

これは、今ちびっ子どころか大人達も巻き込むほどブームになっているトレーティングカードゲーム、『ナイツ・シュヴァルツヴァルト』だな。

コレ、俺も［ゴブ美］が発現するまでは、超ハマったんだよなあ……。

「どれどれ……」

ということで、先輩プレーヤーとして上から目線で評価を……って、な、何だと！？

なんと、俺が中学一年生のころ、欲しくて欲しくて仕方がなくて、お年玉を全額叩いても手に入れることができなかったＳＳＲカード、『メタルギア・ドレイク』があるじゃねーか！？

「な、なあ少年……コレ……」

「お！　兄ちゃんも気がついたかー！　そうなんだよ！　この前、姉ちゃんの買い物に付き合った時に買ってもらったカードパックに入ってたんだよ！」

へへー、と鼻の下をこすりながら自慢げに語る少年。

く、くそう……俺なんてカードパック（五枚入り）を百個も買ったのに手に入らなかったんだぞ！？

なのに、なんで一発で引き当てられるんだよ！？

「他にもコレとかコレもあるんだけど、全部姉ちゃんが選んでくれたら入ってたんだぜ！」

「マ、マジか……」

す、すごい……氷室先輩に、そんな特殊能力があったなんて……！

「お待たせしました」

俺がカードを眺めながらワナワナと震えているところに、先輩が人数分のお茶を持って戻ってきた。

「ひ、氷室先輩！」

「っ！？　ど、どうしました……？」

俺は勢いよく立ち上がって氷室先輩の名を呼ぶと、氷室先輩が驚いて一瞬身体を引いた。

「こ、今度俺と一緒に、『ナイツ＝シュヴァルツヴァルト』のカードを買いに付き合ってください！」

そう言って、俺はこれでもかというほど頭を下げる。

いや、俺は夢にまで見た『メタルギア・ドレイク』がどうしても欲しいんだよ！

そのためならこんな頭、畳にこすりつけたっていいとも！

すると氷室先輩はチラリ、とテーブルにあるカードを見やると。

「ふふ……もちろんです。でしたら、また改めてご連絡しますね」

「！　あ、ありがとうございます！」

よし！　今度こそ俺は、夢をつかんでみせる！

そう思いながら両の拳を握りしめていると。

「「むううううううううううう！」」

「あ……」

見ると、先輩とサンドラが頬をパンパンに膨らませ、激怒していた。

「まま、全く！　そんなカードの一枚や二枚、この私が金にものを言わせていくらでも手に入れてみせるのに！」

「ワ、ワタクシこソ！　『レイフテンベルクスカヤ家』の権力と財

力を活かして、全て揃えて差し上げますわヨ！」

いや、二人共、強権発動って……。

「サンドラ……お前、実家と縁切るんじゃなかったのかよ……」

「ッ！　そ、そのカードを手に入れてからにしますワ！」

「それでいいのかよ!?　というか、俺はそんな他力本願で手に入れたいんじゃないの！　ちゃんと自分で金を出して手に入れたいんだよ！」

ま、まあ、肝心の運に関しては、完全に人任せだけど。

「く、くそう……私にも氷室くん並みの引きの強さがあったなら……！」

「ワ、ワタクシだって負けてないはずですワ……！」

悔しさで打ちひしがれる先輩とサンドラ。

そんな二人を、氷室先輩はどこか勝ち誇ったかのように見下ろしていた。

メタルギア・ドレイク（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

晩ご飯はオムライス（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

晩ご飯はオムライス

それから俺と少年はデッキの話で盛り上がり、サンドラは相手をしてくれないにもかかわらずひたすらミャー太を追いかけ回し、何故か先輩は氷室先輩に色々なゲームで勝負を挑んでいた。

そして。

『はうはう！　すごいのです！　すごいのです！』

「「えへへー！」」

［シン］はといえば、ニコちゃんミコちゃんとあやとりをしているらしく、二人の作るハシゴを見て瞳をキラキラさせていた。

というか、平和だなあ……。

「あ……そろそろ夕飯の支度をしないと」

氷室先輩がチラリ、と時計を見ると、そう呟く。

「ふふ……望月さん、何か食べたいものはありますか？」

「へ……？」

氷室先輩の問い掛けに、俺は思わず気の抜けた返事をしてしまった。

ア、アレ？　俺、晩ご飯もご馳走になるんだっけ？

「そうだ！　兄ちゃんもお姉ちゃん達もいるんだし、今日はご馳走にしようよ！」

「「わあい！　ご馳走だー！」」

すると少年とニコちゃんミコちゃんが嬉しそうにはしゃぐ。
そして少年の言葉でシレッと先輩とサンドラも含まれてるし。

「そうですね……ただ、それだと私一人では厳しいですから」

そう言って、氷室先輩がチラリ、と先輩とサンドラを見やっ……
あ、先輩からは視線を外した。

「エエ、ワタクシは構いませんワ！」

氷室先輩の意図に気づいたサンドラは、ドン、と薄い胸を叩いた。

「むううううううう！　ひ、氷室くん、どうして私の時だけ視線を逸らすのだ！？」
「……いえ、別に」

それでもなお、先輩と視線を合わせようとしない氷室先輩。
お、俺は何も言えない……。

「じゃ、じゃあ俺もお手伝いしますね」
「あ……ふふ、ぜひお願いします」

ということで、少年とニコちゃんミコちゃん、それとミャー太に留守番をお願いして、俺達は近所のスーパーに買い出しに出かけた。

『はうはうはう！　［シン］は当然アイスを食べるのです！』
「あーはいはい」

てて、と走りながらはしゃぐ［シン］に、俺は気の無い返事を返す。

「ですが望月さん、リクエストはないんですか？　私にできるものでしたら、何でも作りますが」

「あははー、そうですねー……」

いや、氷室先輩の作る料理は何でも美味いから、リクエストって言われると……。

俺はチラリ、と先輩とサンドラへと視線を向ける。

確か、サンドラは実は料理ができるって前に聞いたから問題ないけど、先輩に関しては、下手に難しい料理を選択した場合、絶対にとんでもない事態を引き起こすことは確実。

なら、たとえ先輩でも作ることが可能な料理にするべき、だよな……。

「氷室先輩、俺はオムライスが食べたいです」

知恵を絞った結果、俺はあえてオムライスをチョイスした。

最初はカレーがいいかとも思ったんだけど、そういった煮込み系の場合、先輩が変にアレンジをきかせてきたりするんじゃないかと不安になったのだ。

でも、オムライスなら基本的にケチャップでごはんと具材を炒めて、その上に薄焼き卵を被せるかプレーンオムレツを乗せるだけなので、簡単に作れて、しかも子どもにウケがいい。

何より……これなら、一人分として作ることになるから、先輩が

全体に関与するリスクは少なくなる。我ながら完璧な選択をしたもんだ。

「ふふ……分かりました。望月さんが絶対に美味しいって言ってくれるようなオムライスを作りますね」

「はい！　楽しみにしてます！」

ははは、でも氷室先輩、どんなオムライスを作ってくれ……「な、なら！　この私もオムライスを作ろう！」……って、えええええええ!?

「せ、先輩、氷室先輩がオムライスを作るのに、もう一つオムライスを作る気ですか!?」

「う、うむ！　少々大きめに作って、みんなでシェアすればいいじゃないか！」

「それはそうですけど!?」

くそう、俺の作戦がアッサリと瓦解しやがった！

「で、でしたラ！　ワタクシもオムライスを作りますワ！」

「サンドラまで!?」

い、いや、サンドラは料理ができるって言ってはいたけど……。

俺はススス、とサンドラに近づき、そっと耳打ちをする。

「な、なあ……ルーシって、オムライスの料理なんてあるの……?」

「そ、それハ……だ、大丈夫！　蕎麦の実（グリエーチカ）の料理はたくさんありますし、ごはんもよく似たものですワ！」

ははは……ないんじゃん……。

「では三人でオムライスを作って、それをみんなで食べ比べることにしましょう」

既に勝利を確信しているからか、氷室先輩の声には余裕が窺える。

一方で、先輩とサンドラはどこか気持ちが空回りしているようにも感じた。

あー……これは、俺が後ろでコントロールしたほうがいいかも。

「じゃ、じゃあ俺は、三人をサポートするってことで……」

俺は少しでもオムライスを普通のオムライスに導くため、二人を陰で操ることにした。こうすれば、少なくとも食べられなくはないオムライスができあがるはずだ。

「ええ、ぜひお願いします」

「ふふ……望月くんは安心して私の料理さばきを見ていてくれ」

いや、不安しかないです。

というか、どこからその自信が湧いてくるんですか……。

「ヨ、ヨーヘイ、ちゃんと教えてくださいましネ……？」

急に不安になったのか、サンドラが縋るような瞳で見つめてきた。

「お、おう……！」

俺は誤魔化すように強気の返事をしたあと、スマホでコッソリと

オムライスのレシピを確認した。

晩ご飯はオムライス（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

意外性の先輩（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

意外性の先輩

「ふむ……これも入れたほうがいいんじゃないか？」

スーパーに入るなり、先輩が手に取って俺達に見せたものはアボカドだった。

「えーと、先輩……？」

俺は、先輩の顔とアボカドを交互に眺めながら、おずおずと尋ねる。

おっかしいなあ……俺の記憶じゃ、オムライスにアボカドが入ってたことはないんだけどなあ……。

すると。

「藤堂さん、このカゴに入れていただいて構いませんけど……オムライスの具にはなりませんからね？」

「な、何故だ！？」

いや、俺も先輩がどうしてアボカドをオムライスの具に加えようとしたのか、どうしても知りたいところではあるけど。

一方、サンドラはというと。

「フフ……せっかくですのデ、ワタクシはビーフストロガノフをソースにした特製オムライスにしますワ！」

そう言って、ヒョイヒョイと玉ねぎやキノコ、それに牛肉を入れていく。
あ、それは意外と美味そう。

「ふふ……どうやらサンドラさんが私のライバルになりそうですね」

そして氷室先輩も、どうやらサンドラを認めたようだ。
確かに、サンドラはまだ東方国の食文化に慣れてないだけだから、一度覚えたら何でも作れそう。

「くう……！　サンドラは私の仲間だと思ったのに……！」

先輩が悔しそうに唇を噛みながらサンドラを凝視する。
そういえば、先輩って精霊（ガイスト）は最強だし、容姿端麗品行方正成績優秀のハイスペックではあるけれど、水泳と料理ができないとか、意外と残念なんだよなあ……。

……まあ、そういうところが可愛いんだけど。

「むむ！　も、望月くんもそんな目で見るのか！」
「ええー……」

俺はむしろ、微笑ましく思ってただけなんだけどなあ……って。

「……［シン］」
『ははははう！？』

俺に声を掛けられ、［シン］はビクッとなる。
というか、コッソリとアイスをカゴに入れたらバレないとでも思ってるのかよ。

「それは戻してこい」
『はうううう……』
ガックリと肩を落としてアイス売り場へと戻る［シン］
時折悲しそうにこちらを振り返るけど、そんなモンで折れたりしないからな？
その後も順調（？）に品物をカゴに入れ、いざレジに並んだ。
「しかし、すいません……」
俺はカゴに入っている大量の食材を見て、思わず謝る。
「ふふ、うちは大所帯ですからこれくらいは普通ですので、気にしなくても大丈夫ですよ」
「で、ですけど……」
すると氷室先輩が、ぴと、と俺の口を人差し指で押さえた。
「これ以上は言わないでください。それに、招待したのは私なんですから」
うう……というか、ちょっとその仕草は反則じゃないですかね？
氷室先輩だってヒロインの一人で、色々と破壊力バツグンなんですから……。
「わ、分かりました……でしたら、この埋め合わせは今度絶対にさせてくださいね？」
「はい！」

氷室先輩は、頬を赤くして嬉しそうに微笑んだ。

◇

「先輩、玉ねぎはみじん切りですよ」
「わ、分かっている！」

スーパーで買い物を終えて氷室先輩の家に帰るなり、俺達はキッチンで料理の取り掛かった。
で、俺は野菜を洗ったりしつつ、先輩を監視しているところだ。
だけど先輩ときたら、ちょっと目を離した隙に俺の想像の斜め上を行くようなことをしでかそうとするので、一瞬たりとも気が抜けない……。

「……藤堂さん、私達だけじゃなくてタカシ達も食べるってこと、忘れないでくださいね？」
「むううううう！　そ、そんなこと分かっている！」

俺だけじゃなく氷室先輩にまで釘を刺されてしまい、とうとう先輩が拗ねてしまった。

で、一方のサンドラはというと。

「～～～～～～～♪」

鼻歌を歌いながら、軽快に料理を作っていた。
だけど、オムライスに鍋？　……って、そういえば、ビーフストロガノフをオムライスのソースにするって言ってたもんなあ。

どれどれ。

「へぇー……何だか美味そう」

俺はサンドラの肩口から鍋の中を覗き込む。

「フフ、ワタクシ特製のビーフストロガノフは美味しいですわヨ？」

そう言って、サンドラが小皿にほんの少しよそってくれたので、俺はそれを口に含むと。

「！　美味い！」

「でショ？　コレ、プラーミャも大好きなんですノ」

いや、サンドラの奴、マジで料理上手いじゃん。

というか、以前の弁当対決の時もプラーミャが余計なアドバイスしなかったら、氷室先輩と結構いい勝負してたんじゃないか？

「……やりますね」

「フフ……負けませんわヨ」

おおう……氷室先輩とサンドラが視線をぶつけ合って、火花を散らしてる……。

「むううううううう！　わ、私だって……！」

先輩も負けじと二人に視線を送るけど……うん、全く相手にされてない。

「ホ、ホラホラ先輩、俺も手伝いますから……」
「も、望月くんまでそんな残念なものでも見るみたいに……」
俺は苦笑しながら先輩を誘導して料理に集中させるけど、どうやら態度に出ていたらしく先輩は怒りを通り越して落ち込んでしまった……。
ハア……仕方ないなあ……。
「……別に料理だって頑張って覚えればいいんですし、無理に張り合う必要はないですからね？　それに、先輩にはもっと素敵なところ、たくさんあるじゃないですか」
「あう……で、でも……やっぱり君に、『美味しい』って言ってほしいから……」
ああもう！　そんな言い方反則だろ！　なんだよこの可愛い先輩は！
「あはは、俺は先輩が作ってくれたってだけで、最高に嬉しいんです。でしたら今度一緒に、二人で料理をして覚えましょうよ。ね？」
「う、うん……約束、だぞ……？」
頬を赤く染めながら上目遣いで見る先輩に、俺は優しく頷いた。

意外性の先輩（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

決戦！　オムライス対決！　前編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

決戦！　オムライス対決！　前編

「さあ、できましたよ」
「「「わーい！」」」
『わあい！　なのです！』

無事（？）にオムライスを作り終えた俺達は、子ども達と［シン］が座るテーブルに皿を並べると、四人は嬉しそうに両手を上げた。だけど［シン］、お前はオムライスなんか食べないだろうに……。

「フフ……会心の出来ですわ！」

ムフー！　と鼻息荒く、グッ、と拳を握るサンドラ。
だけど、ビーフストロガノフがかかったオムライスは、確かに美味そうだよなあ。

「みんな、ちゃんと野菜も食べるんですよ？」

そう言うと、氷室先輩はコトリ、とサラダが盛られた皿をテーブルに乗せた。
ちゃんと栄養バランスを考えているところ、見事だ。

それにサラダをよく見ると、先輩がオムライスにぶち込もうとしたアボカドも、キッチリ使われていた。さすがに無駄もない。

「わ、私も作ったぞ！　その、美味しい……はず……」

張り合うように先輩も身を乗り出してアピールするけど、自信が

ないのかどんどん尻すぼみになっていく。
で、でも、工程の途中途中で俺もチェックしたし、チキンライスの味見もちゃんとしてあるから、少なくとも不味いってことはあり得ない。
……まあ、薄焼き卵は失敗して色々と破れてしまって、見栄えは良くないかもだけど。
「さあ、いただきましょう」
席に着き、氷室先輩が合図をする……んだけど。
「む、ちょっと待て。氷室くんのご両親は待たなくてもいいのか？」
疑問に思った先輩が、氷室先輩に尋ねる。
「はい。今日も仕事が片づかないらしく、遅くなるとメッセージがありました」
「そ、そうか……」
氷室先輩は淡々と告げるけど、先輩は少しだけ気まずい表情を浮かべた。
多分……先輩は自分の境遇と重ねたんだろう。
あの『攻略サイト』によれば、先輩の両親は研究一筋だったためあまり家に帰らず、いつも一人で食事をしていたとある。
さらにそこにきて、不慮の事故による先輩のお母さんの死があり、父親である藤堂マサシゲが狂気にも似た妄執に囚われることになった。

そして、ますます『家族』から遠ざかることになってしまった先輩の愛情への渇望こそが、あの『ユグドラシル計画』において種の苗床となることを受け入れた一因、だからな……。

……ゲームとしてはこういった裏設定があるほうが面白いのかもしれないけど、現実を生きてる俺や先輩からしたら、ただのクソでしかないけどな。

すると。

「？　［シン］？」

隣に座る［シン］が、いつの間にか服の袖をつまんで俺の顔を見上げていた。

見ると、［シン］だけじゃなくて先輩や氷室先輩、サンドラ、それに少年達まで心配そうに俺を見つめている。

『はう……マスターは優し過ぎるから困りものなのです……』

「え……？」

［シン］は、眉間を人差し指で押さえながら、そんなことを言った。

あー……どうやら顔に出てたみたいだな……。

オマケにその口ぶりだと、俺が何を考えてたかもお見通しってことかよ。

本当に、この相棒は……。

『はう！？』

「はは、悪い。ちょっと考えごとしてただけだから」

そう言って、俺はニカッと笑いながら［シン］の頭をガシガシと撫でると。

『はうはう！　仕方ないから、これで騙されてあげるのです！』

［シン］は、雰囲気を変えるために、にぱー、と笑った。

「さあ！　今度こそ食べましょう！」

氷室先輩はそう言うと、パン、と手を叩いた。

俺達もそれにつられ、手を合わせる。

「「「「「「「「「「いただきます！」」」」」」」」」」

そんな合図と共に、俺達……特に子ども達は、食べたいオムライスに狙いを定めてスプーンを伸ばした。

「俺はやっぱり姉ちゃんの！」

「ニーはこの何かかかってるの！」

「ミーも！」

ほほう、どうやらサンドラのオムライスが人気みたいだな。

「ううう……」

そして、選んでもらえなかった先輩は悔しそうにその様子を眺める。

「さ、さあて、それじゃ俺も食べよう……か、な……」

「「「……」」」

いや三人共、そんなに凝視しないでほしいんだけど。

「！　ふふ……」

俺は氷室先輩のオムライスを皿に盛ると、普段は表情を変えない氷室先輩が珍しく勝ち誇ったような表情を見せる。

もちろん、先輩とサンドラは悔しそうに歯ぎしりをしているわけだけど……。

「じゃあ次は……」

今度はサンドラのオムライスをよそい、皿の空いているスペースに乗せた。

「ア……フフ……」

嬉しそうにはにかむサンドラ。

残された先輩は、泣きそうに……ではなく、期待に満ちた瞳をしていた。

まあ、こうなれば自分のもって思うよな。その通りだけど。

ということで。

「ふふ……」

最後に先輩のオムライスをよそい、これでノルマは達成、と。

ただ、俺にはちょっと……いや、相当量が多いかも……。

決戦！　オムライス対決！　前編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

決戦！　オムライス対決！　後編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

決戦！　オムライス対決！　後編

最後に先輩のオムライスをよそい、これでノルマは達成、と。
ただ、俺にはちょっと……いや、相当量が多いかも……。

『んふふー、マスターは欲張りさんなのです』
「お、だったら［シン］もシェアするか？」
『はう！？　［シン］はアイス以外受け付けないのです！　そもそも修羅場はゴメンなのです！』

コノヤロウ！　俺がそれに触れないようにしてたのに！
そう……ここで一歩でも間違えたら、『ガイスト×レブナント』における日常パート最恐のイベントの一つ、『修羅場イベント』が勃発してしまう。

これは、複数のヒロインと一定以上の好感度を稼いだ場合、その中の一人との恋愛イベントに他の好感度が高いヒロインが乱入することにより、ヒロイン同士によるいがみ合いの後、その怒りの矛先が全て主人公に向けられて、ヒロイン全員の好感度が大きく下がってしまうのだ……。

まあ、『攻略サイト』のコメント欄には、そんな薄氷を踏むかのようなリスクを冒してでもハーレムを求めるプレイヤー達の魂の叫びがあったけど……お、俺はハーレムなんて求めてないからな！？
ホントだぞ！？

それよりも好感度が下がったことによって、先輩を救うために築き上げてきたこれまでが、全て崩れ落ちることが怖い……。

そして、なにより先輩の好感度を失うことも……。

だから……！

「はぐはぐはぐ！」

俺はわき目もふらず、一心不乱に三人のオムライスを口の中に掻き込む。

こ、この大量のオムライス、完食してみせる！

「ふふ……そんなにがっつくなんて、私のオムライスはそんなに美味しいかな？」

「先輩、何をおっしゃいますノ。ヨーヘイは、ワタクシのオムライスに感動してるんですのヨ？」

「まさか。望月さんは私のオムライスに夢中なんです」

「「「は？」」」

えええええ！？　俺、修羅場イベを回避するために必死で食べてるのに、なんで風向きがソッチに行くの！？

『プークスクス、やっぱりマスターは修羅場不可避なのです。血の雨が降るのです』

チクショウ！　［シン］もほくそ笑んでないでマスターの俺を助けろよ！

「望月くん」

「ヨーヘイ」

「望月さん」

「ムグ！？　は、はいい……？」

三人が一斉に俺を見たので思わず喉を詰まらせ、おそるおそる尋ねてみると。

「「「誰のオムライスが一番美味しかったんだ！（ですノ！）（ですか！）」」」

三人は眉根を寄せながら、ズイ、と身体をテーブルに乗り出して詰め寄った。

というか三人共、領域（エリア）ボスや“柱”なんて目じゃないほど、凶悪なんですけど。

さ、さあ……この場面、どうやって切り抜けよう……。

俺は視線を泳がせながら、まあまあ、と両手を前に出して三人をなだめようとしている、その時。

「おお！　金髪のお姉ちゃんのオムライスもイケルぞ！」
「赤い髪のお姉ちゃんのオムライスも美味しいよ！」
「ねー！」

まるで示し合わせたかのように、少年、ニコちゃん、ミコちゃんが美味しそうにオムライスを頬張っていた。

「ほ、本当……か……？」
「「うん！　お姉ちゃんにも負けないよ！」」

ニコちゃんとミコちゃんの言葉に、先輩の表情は一変し、ぱあぁ、と満面の笑みを浮かべた。

「いやー、お姉ちゃん達も料理上手だなー！」
「フフフフ！　そうなんですのヨ！」
サンドラもサンドラで、口元に手を添えて高らかに笑う。
「はは！　三人の言う通り、このオムライス三つ共、本当に美味いですよ！」
俺はこの好機を逃すまいと、少年達に便乗してオムライスを褒めそやした。
「ふふ……望月くん、おかわりはたくさんあるぞ？」
「そうですワ！」
「遠慮なさらないでください」
ヒイイ！？　俺にもっと食べろと！？
その後、嬉しそうに俺の皿にオムライスを盛る三人に断り切れず、ただひたすら口に放り込んでは水で無理やり流し込んだ。
く、苦しい……。
◇
「「「「「「「ごちそうさまでした！」」」」」」」
「ご、ごちそうさまでした……」
オムライスを綺麗に平らげ、みんな満足そうな表情を浮かべている。

もちろん、俺以外。

それよりも。

「しょ、少年……ニコちゃん、ミコちゃん……」

「に、兄ちゃん大丈夫……？」

「「大丈夫？」」

「お、おう……そんなことより、さっきは助かった……」

そう言って、心配そうな表情で俺を見る三人にサムズアップをした。

だって、この三人が気を利かせてオムライスを美味いって言ってくれたから、修羅場イベを回避できたんだからな……。

「……兄ちゃんも、大変なんだな……」

「「ねー……」」

「サ、サンキュー……」

ここで力尽きた俺は、テーブルにそのまま突っ伏した。

もう、一歩も動けない……。

すると。

「おお、今日はお客さんが多いな」

「ええ、そうね」

氷室先輩のご両親が、仕事を終えて帰ってきたみたいだ。

ちゃ、ちゃんと挨拶をしないとな……。

俺は苦しいお腹を押さえながら、無理やり身体を起こした。

「やあ、いらっしゃい」
「「「お邪魔してます」」」
『はう！　お邪魔しますなのです！』
にこやかに声を掛けた氷室先輩のお父さんに、俺達は揃って挨拶をした。
「あらあ、カズラのお友達がこんなに」
そう言って、氷室先輩のお母さんが嬉しそうに微笑む。
だけど、氷室先輩ってお母さん似なんだなあ……特に胸が。
「はい、私の大切な後輩と」
氷室先輩がチラリ、と俺とサンドラを見やり、そして。
「……大切なお友達、なんです」
氷室先輩は、先輩の手を取ってジッと見つめた。
「はい。氷室くんは私の最も大切な親友です」
それに応えるかのように、先輩も氷室先輩を見てニコリ、と微笑む。
……二人の想いがすれ違って、お互いを見てほしくて、それでぶつかって、今の関係を手に入れたんだ。
本当に、二人の想いが通じ合えて良かった……。

「ですが、私にとって最大のライバルでもありますが」

すると氷室先輩は表情を崩さずにそう告げた。

「ああ……そうだな……」

先輩もその言葉が嬉しいんだろう。

そっと目を瞑ると、口元を少し緩めながら静かに頷く。

「カズラ……いいお友達に巡り合えて、良かったわね」

柔らかい表情のお母さんがそう告げると。

「はい！」

氷室先輩は、今日一番の、咲き誇るような笑顔を見せてくれた。

決戦！　オムライス対決！　後編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

打ち上げの約束（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

打ち上げの約束

『はう！　食らうのです！』
『グオオオオオ……！？』

“カタコンベ”領域（エリア）の攻略を始めてから一週間経ち、俺達のチームは地下第二十七階層までたどり着いた。

「このままのペースでいけば、明日には踏破できそうだなあ」

［シン］がこの階層の幽鬼（レブナント）、“オークマミー”を倒したところをボーッと眺めながら、ポツリ、と呟く。

だけど、この“カタコンベ”領域（エリア）って、特に何もないんだよなあ……。

いや、『ガイスト×レブナント』のメインシナリオでは、“カタコンベ”領域（エリア）は二年の必修課題ってこと以外、あくまでも次の“天岩戸（あまのいわと）”領域（エリア）までのつなぎでしかない。

だから、この領域（エリア）で手に入るアイテムなんかも、強くも弱くもない中途半端なモンしか手に入らないし、出てくる幽鬼（レブナント）もレベル四十前後の奴がほとんどな上に必ずマミー系統ときてる。正直、ミイラはもう飽きた。

実際『攻略サイト』のコメント欄にもあったけど、『“カタコンベ”領域（エリア）の踏破はただの作業でしかない』、『せめてサブイベくらい用意しろよ！』って書き込みがすごい多かった。

まあ、俺としては楽でいいけど。

すると。

「チョット！　気を抜き過ぎなんじゃないノ！」

オークマミーを［スヴァローグ］がハルバードで一刀両断にし、プラーミャが不機嫌そうに詰め寄ってきた。

「ホホ……じゃが、地下第一階層からここまで、ミイラの幽鬼（レブナント）ばかりでは、気が滅入るのも頷けるの」

扇で口元を隠しながら、土御門さんは優雅に微笑む。

というか土御門さん、ナイスフォロー。

「さあ、この階層にはもう用はありません。先に進みましょう」

「「「はい！」」」

氷室先輩に続き、俺達も地下第二十八階層への階段を下りる。

「……この階層を攻略したところで、今日は終わりですね」

スマホ画面を眺めながら、氷室先輩がそう告げた。

あ、もうそんな時間か。

「ホホ……明日でこのチームでの攻略は終わり、かの……」

すると、土御門さんが少し寂しそうな表情でそう呟いた。

「そうネ……ヨーヘイ、この次はどうするノ？」

「んー……特に何も考えてないんだよなー……」

一応、二周目特典の五つの領域（エリア）は既に三つ攻略済みで、残り二つについてはそこまで優先順位も高いわけじゃない。

かといって、アレイスター学園内の領域（エリア）となると、三年の必修課題である“天岩戸”領域（エリア）と、サブイベント用の領域（エリア）がちらほらある程度だ。

そんなサブイベント用の領域（エリア）も、実は俺を含めたうちの八人には用意されていないから、意味ないんだよ……。

だって考えてもみろよ。俺は二周目から仲間に選べるクソザコモブだし、先輩は準ラスボス、サンドラも本来は二年生に進級してから登場するヒロインだから、今の時点ではない。

立花は主人公だからメインもサブもないし、加隈は主要の仲間キャラなので立花と同じ。氷室先輩はパッケージには描かれていないことからも、扱いが悪い。

プラーミャは名前しか登場しないキャラだし、土御門さんは“南山”領域（エリア）を攻略したばかりだからなあ……。

ハア……二年生になったら、［シン］のも含め、次のサブイベントがあるんだけど。

やっぱり、無難に二周目特典の領域（エリア）攻略にするかあ。

「とりあえず、どこか目ぼしい領域（エリア）がないか、ちょっと調べてみるよ」

「フフ……期待してるわヨ？」

おっと、意外な言葉が返ってきた。

「いや、その『期待してる』って何だよ？」

「だっテ、ヨーヘイが連れて行ってくれる領域（エリア）、幽鬼（レブナント）もこんなところより一段も二段も強いシ、それに何より、色んな属性の反射スキルが手に入るかラ」

「ああー……」

まあ、こんな領域（エリア）なんかよりは、よっぽど有用ではある。

でもそれは、俺が『攻略サイト』を知っているからそう言えるだけなんだけどな。

そう……俺が他のみんなより優れているのは、この『攻略サイト』だけなんだ。

だから、勘違いだけはしないようにしないと。

「ま、そうはいってもこのチームでは初めての領域（エリア）踏破になるんだ。せっかくだから、明日はこの四人で打ち上げでもしようかと思うんだけど……氷室先輩、どうですか？」

俺は［ポリアフ］の【スナイプ】で幽鬼（レブナント）を狩っている氷室先輩に尋ねる。

「明日……であれば、踏破した後に時間を作れると思います」

「よし！　じゃあ決まりですね！」

俺は口の端を持ち上げ、パシン、と拳で手のひらを叩いた。

「ホホ……なら、明日は気合いを入れねばのう？」

「フフ、だけど領域（エリア）ボスは、この私（ヤー）がもらうわヨ！」

こうして、地下第二十八階層の攻略を終えた俺達は、“カタコンベ”領域（エリア）を後にした。

打ち上げの約束（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

次の領域からは（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

次の領域からは

「行ってきます」

いよいよ“カタコンベ”領域（エリア）の踏破に挑む日の朝、俺はいつものように母さんに声を掛けると、家を出た。

『はう！　今日は踏破のご褒美にアイスを五つ所望するのです！』

「ハイハイ」

ムフー、と意気込む［シン］に、俺は気のない返事をする。

『はうう……最近マスターが冷たいのです……』

「いや、何でだよ」

むしろ、［シン］のワガママをここまで許容するこの俺の心の広さを褒め称えるべきだろ。

「というか、俺のダメ出しが欲しいならお望み通り……『はうはう！　大丈夫なのです！　むしろ望むところなのです！』」

すると［シン］は俺の言葉を遮り、ワタワタと手を振って問題ないとアピールした。

なんだよ、せっかく構ってやろうと思ったのに。

「おっと、こうしちゃいられん」

俺は歩くペースを上げ、先輩の待つ十字路へと急ぐ。

その時。

「うおっ！？」

「おっと」

路地の脇から突然現れた通行人にぶつかりそうになる……って。

「なんだ、賀茂かよ」

「オイオイ、『なんだ』とはひどいな」

「はは、悪い」

俺がそんな言葉をかけたモンだから、賀茂の奴が少し顔をしかめたので、俺は苦笑しながら謝った。

で、どちらからともなく、俺達は一緒に学園へと向かう。

「そういえば、賀茂は“グラハム塔”領域（エリア）はどこまで攻略したんだ？」

「ん？　いや、オレはもう踏破して、今は“カタコンベ”領域（エリア）の攻略に取り掛かってるぞ？」

「ええ！？」

軽い気持ちで話題を振っただけなのに、賀茂からは意外な答えが返ってきた。

いや、確かに賀茂の実力からすれば、“グラハム塔”領域（エリア）を踏破するのは容易いだろうけど、それでも、同じチームのメンバーの実力もそうだとは限らない。

「ひょ、ひょっとして、ソロで踏破したのか……？」

「いや、一緒にチームを組んでる奴とだよ」

「そ、そうか……」

じゃあ賀茂の仲間も、それなりに実力者なんだろうな……。

「そういうお前こそ、どこまで攻略したんだよ」

「ああ……俺もお前と同じで、今は“カタコンベ”領域（エリア）を攻略中だよ」

「へえー……」

俺の答えを聞き、賀茂はしげしげと俺の顔を眺める。

「？　何だよ？」

「いや、意外だと思ってな」

「意外？」

賀茂の言葉の意味が分からず、俺は思わず首を傾げた。

「だって、オレはてっきり“カタコンベ”領域（エリア）も踏破して、“天岩戸（あまのいわと）”領域（エリア）とか学園の外の領域（エリア）の攻略をしてるのかと思ったよ」

「はは……いや、そんなことねーよ」

そう言って、俺は苦笑する。

まあ、“カタコンベ”領域（エリア）を後回しにしてただけで、賀茂の言う通り二周目特典の五つの領域（エリア）をメインに攻略してたのも事実だし。

「ふうん……その割に、お前もそうだけど他の連中もクラスチェンジまでしてかなりレベルが高いよな」

「あー……俺なんかは、クラスチェンジ前の精霊（ガイスト）がメッチャ弱かったから、その分レベルが上がりやすかったんだよ」

さらに尋ねる賀茂に、俺は嘘を吐いた。

「なるほど……確かにな」

その答えに納得したのか、賀茂はウンウン、と頷く。

そして。

「それじゃ、邪魔しちゃ悪いからオレは先に行くぞ」

「あ、オイ」

そそくさと俺から離れ、賀茂は足早に去って行った。

「おはよう、望月くん」

「あ！　先輩、おはようございます！」

あー……もう、いつもの十字路だったのか。

「それで彼……ええと……「賀茂ですか？」……そうそう、賀茂くんはいいのか？」

「ああ、俺と先輩に気を利かせて、先に行っちゃいました」

「あうあう！？　そそ、そうだな！　確かに私と望月くんとの会話に、彼も加わりづらいだろうしな！　うん！」

先輩は顔を真っ赤にしながら、わたわたとよく分からない理由を言っている。

いつもの凛とした先輩とは違った、こういうギャップが本当に可愛い。

「はは、そういえば先輩は“カタコンベ　”領域（エリア）の攻略の進捗（しんちょく）はどう

ですか？」
「あう！？　う、うむ、今は地下第二十二階層を攻略中だから、早ければ明日にでも踏破できそうだ。君達はどうだ？」
「あはは、俺達は地下第二十八階層の攻略が終わりましたから、今日で踏破予定です」
「むむむ……途中までは私達のチームが先行していたのに、いつの間にか水をあけられてしまったな……」

そう言ってから、先輩は唇をキュ、と結んだ。
だけど、俺達に氷室先輩がいる以上、こうなるのは仕方がない。

やっぱり［ポリアフ］の【オブザーバトリー】は超優秀だなあ……。

「あはは……それじゃ、俺達は一足先に待ってますね」
「ふふ……今回は負けたが、次は私達が勝つさ」

そう言って笑むけど、先輩が大きな思い違いをしているぞ！？

「イ、イヤイヤ、もう勝ち負けなんてありませんから！」
「む、どうしてだ？」

先輩が訝し気な表情に変わり、俺に尋ねる。

「だって……もう、俺は先輩と別のチームになったりしませんから」
「！　そ、そうだった！」

先輩はそのことに気づき、思わず目を見開いた。

「だから、次の領域（エリア）攻略からはまた一緒ですからね？」

「うん……」

先輩は嬉しそうに頷くと、先輩がそっと俺の手を握った。

次の領域からは（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

迎え撃つ、小さな精霊（ガイスト）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

迎え撃つ、小さな精霊（ガイスト）

「さあ……いよいよだな……」

放課後になり、俺は今、仲間のみんなと一緒に“カタコンベ”領域（エリア）の扉の前にいる。

俺達のチームは既に地下第二十八階層まで攻略しており、残りは地下第二十九階層と領域（エリア）ボスのいる地下第三十階層を残すのみ。

今日でこの領域（エリア）を踏破するつもりだ。

「ホホ……腕がなるのう……」

「マア、こんな領域（エリア）なんて、私（ヤー）にかかれば瞬殺だけド」

扇で口元を隠しながらクスクス、と笑う土御門さんに、澄ました表情でそう言い放つプラーミャ。そんな二人の様子は、同じチームの俺からすれば、頼もしいの一言に尽きる。

「何なら、遠距離から領域（エリア）ボスを狙撃してもいいですね」

氷室先輩が無表情のまま告げる。

ウーン……ひょっとしたら今回は、俺と［シン］の出番はないかもな。

『はう！　［シン］も頑張るのです！　カズ姉さまやミャーさん、シキ姉さまには負けないのです！』

おっと、俺の相棒はやる気満々だ。

「よっし」

なら俺も気合いを入れないとってことで、両頬をパシン、と叩いた。

「ふふ……望月くん、頑張れ！」

「怪我だけは気をつけるんですのヨ！」

先輩とサンドラが、激励の言葉と共に、俺の背中を叩いてくれた。

「はは！　もちろん！」

俺は二人に向けてガッツポーズをすると。

「ヨーヘイ！　行くわヨ！」

「ああ！　……先輩、サンドラ、また後で！」

「うむ！」

「エエ！」

見送る二人と別れ、俺は顔をしかめながら手招きするプラーミャ達の元に駆け寄り、そして……俺達のチームは領域（エリア）の扉をくぐった。

◇

「コレで最後ヨ！」

――グシャ。

領域（エリア）ボスのいる地下第三十階層へと繋がる階段の前で、プラーミ

ヤの精霊（ガイスト）、［スヴァローグ］が幽鬼（レブナント）をハルバードで叩き潰した。

『はうう……結局、［シン］の出番はなかったのです……』

そう言って、［シン］はガックリとうなだれる。

まあ、あんなに張り切ったのに、氷室先輩の［ポリアフ］が幽鬼（レブナント）の位置なんかを捕捉して、そこに土御門さんの［導摩法師］が【式神】を送り込んで排除して、残りカスみたいな幽鬼（レブナント）は全部プラーミャが倒して……。

いや、［シン］のスピードを活かして真っ先に倒させるってのもあるんだけど、それをやると土御門さんに幽鬼（レブナント）を持っていかれたプラーミャがブチ切れるからなあ……。

「では、行きましょう」

「「「はい！」」」

氷室先輩の声掛けと共に、俺達はいよいよ地下第三十階層へと下りる。

すると。

「ホ……これまでは迷路のようじゃったのに、ここにきて一本道とはの」

そう……〝カタコンベ〟領域（エリア）の領域（エリア）ボスのいる階層は、これまでのマミー系の幽鬼（レブナント）は現れず、ただ一本道の通路の先で領域（エリア）ボスが待つのみ。

ただ。

「……みなさん、気をつけてください」

表情は変わらないものの、氷室先輩はいつもより一オクターブ低い声でそう告げた。

……氷室先輩も、［ポリアフ］の【オブザーバトリー】で気づいたか。

ここの領域（エリア）ボスである“ペイルライダー”は、即死系を得意とする【闇属性魔法】とデバフ系を得意とする【邪属性魔法】の使い手。さらに、ペイルライダーには厄介なスキル、【ブラック・デス】がある。

そして、骸骨の馬に跨（またが）り、この狭く一直線な通路を突撃してくるっていうんだから、そうそう逃げ場もないときてる。

「氷室先輩……ここは俺と［シン］で領域（エリア）ボスを食い止めます。ですから、氷室先輩は遠距離から攻撃してください」

「え……？」

氷室先輩にしては珍しく呆けた表情を浮かべたが、俺はそれに触れることもなく土御門さんの傍に寄った。

「土御門さん。俺が領域（エリア）ボスの足を止めるから、君はその隙に【式神】を領域（エリア）ボスにまとわりつかせてくれ」

「ホ、そ、それは構わんが……」

後は……。

「プラーミャ！　この領域（エリア）ボスは、［スヴァローグ］の一撃が勝負

の決め手だ！　だから……任せたぞ！」
「ッ！　……フフ、ヨーヘイも分かってるじゃなイ」

俺の檄に、プラーミャは不敵な笑みで応える。
さすがにプラーミャは、この中じゃ一番付き合いが長いから、二人と違って俺の言葉をすんなり受け入れてくれたな。

「シン」
『ハイなのです！』

声を掛けると、［シン］が真剣な表情で返事をした。

「分かってるとは思うが……サンドラがいない以上、防御を展開できるのは［シン］だけだ。そしてそれは、俺達が領域（エリア）ボスの突撃を食い止められるかどうかにかかってる」
『……（コクリ）』
「だから、お前のその小さな身体に全部任せることになっちまって悪いけど、俺と一緒に……『はう！　大丈夫なのです！』」

俺が言い切る前に、［シン］はそう言って胸をドン、と叩いた。

『それよりも、マスターこそ［シン］から離れて……「悪いけどそれは断る」』

［シン］の言葉を遮って、俺は拒否を示すと。

「俺は［シン］のマスターだ。大して役に立たないかもしれないけど、それでも、お前が領域（エリア）ボスに押し負けないように、支えることくらいはできるはずだからな」

そう言って、［シン］の頭をポンポン、と撫でた。

『はう……どこの世界に、精霊（ガイスト）の手助けをしようとするお節介なマスターがいるのです……』

「はは、ここにいるだろ」

『本当にマスターはワガママでお節介で優しくて、そして、ワルイ男なのです』

オイオイ……最後の台詞（セリフ）はどうかと思うぞ？

顔を赤くしてはにかむ［シン］を見やりながら、俺は苦笑する。

そして。

「やるぞ！　［シン］！」

『はう！』

俺と［シン］は、馬の蹄（ひづめ）の音が響き渡る通路の奥を見据え、口の端を持ち上げた。

迎え撃つ、小さな精霊（ガイスト）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

カタコンベ領域、踏破（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

カタコンベ領域、踏破

「やるぞ！　［シン］！」
『はう！』

俺と［シン］は、馬の蹄（ひづめ）の音が響き渡る通路の奥を見据え、口の端を持ち上げた。

少しずつ、蹄の音が近づいてくる……。

『はう！』

すると［シン］は、通路の先へ向けて一気に飛び出した。
俺も遅れまいとしてダッシュするけど、当然追いつけるはずもなく、［シン］の背中はあっという間に遠ざかる。

そして。

『はうはう！　【堅】！　【封】！』

［シン］は呪符を展開して防御壁を張ると共に、ペイルライダーの【闇属性魔法】と【邪属性魔法】を無効化させるための呪符を床にバラまいた。

「［シン］！」

追いついた俺は、すぐに［シン］を支えるために後ろから抱き留めると。

『はう！　来たのです！』

とうとう俺達の視界に、ペイルライダーが現れた。

青白い長身の骸骨が西洋の甲冑を身にまとい、その右手には巨大なランスを、左手には大盾を持ち、同じく巨大な骸骨の馬に跨(またが)って通路を駆ける。

だが。

――ガキンッッッ！

『ッ！？』

ペイルライダーは見えない壁に遮られ、骸骨の馬が前脚を持ち上げた。

「氷室先輩！　土御門さん！」

「ええ！」

「ホホ！」

後ろを振り向いて俺が合図すると、［ポリアフ］が【スナイプ】で援護射撃をしている間に、［導摩法師］の【式神】がわらわらとやって来る。

『……！』

ペイルライダーは大盾を構えて［ポリアフ］から放たれる弾丸をいなしつつ、防御壁を馬の前脚で踏みつけるように蹴った。

『ぐぎぎ……！』

［シン］が歯を食いしばりながら弾き飛ばされないように耐える。
元々［シン］はスピード型の精霊（ガイスト）で、『力』のステータスはかなり低い。それでも、その小さな身体で重量級の領域（エリア）ボスの突撃を必死に受け止めていた。

「［シン］……！」

俺も少しでも［シン］が楽になるようにとその身体を支えるが、俺と［シン］は防御壁ごとずるずると押し込まれる。

その時。

「ホ！　待たせたの！」

ようやく【式神】が合流し、ペイルライダーに次々とまとわりついていく。

『はうはう！　領域（エリア）ボスの圧力が弱まったのです！』
「よし！　そのまま身動きを封じ……っ！？」

［シン］に指示をしようとした瞬間、ペイルライダーはパカリ、とその口を大きく開いた。

「［シン］！」
『もごっ？』

慌てて［シン］の口を塞ぎ、俺も制服の袖で口元を押さえると、

その直後、ペイルライダーの口から禍々しい黒い煙が吹き出した。
あれこそがペイルライダーの特殊スキル、【ブラック・デス】。
あの煙を吸い込んだら最後、【聖属性魔法】による浄化を受けない限り、煙に含まれる細菌によってその身体をむしばまれ続けるという、最悪のスキルだ。

というか、“アルカトラズ”領域（エリア）の第十階層のボスだったトーデスエンゲルもそうだけど、スケルトン系の領域（エリア）ボスはこういった毒系のスキル持ちが多いよなあ……って、そんな悠長なこと考えている暇はない。

俺は防御壁を展開し続ける［シン］の口を押えたまま抱え、氷室先輩達の元へと一気に走る。
息を止めているからメッチャ苦しいけど、とにかく我慢するしかない。

すると。

「ヨーヘイ！　伏せなさイッ！」
「『っ！？』」

通路の向こうで仁王立ちするプラーミャと、ハルバードを右手に持って槍投げの構えを見せる［スヴァローグ］を見て、俺と［シン］は倒れ込むように地面に伏せた。

「食らえエエエエエエエ！　【ブラヴァー】ッッッ！」

プラーミャの咆哮と共に、［スヴァローグ］の手からハルバードが紅蓮の炎をまとって発射される。
唸りを上げながら、ハルバードは俺達の頭上を通過するんだけど

……。

「（熱っ！？　熱っ！？）」

ハルバードがまとう炎の熱で、俺の背中がメッチャ熱い！
だけど【ブラック・デス】が漂っているせいで、声を出すこともできないし！

その数秒後。

――ドガアッッッ！

『（カタカタカタカタカタ！？）』

ハルバードを食らったペイルライダーと骸骨の馬は、その身体を甲冑ごと砕かれ、激しく口を動かす。
だけど、ほんの数秒後には口の動きも止まり、炎に包まれた幽子と大量のマテリアルへと変化した。

……よし、【ブラック・デス】の煙も消えたな。

「すー……はあー……」

ここでようやく俺は押さえていた手を離し、大きく深呼吸をした。

「［シン］、大丈夫か？」
『プハッ！　はう！　［シン］は無事なのです！』

息を吸い込んだ［シン］が、元気よく立ち上がって敬礼ポーズをした。

うむうむ、それは何より。

「フフ……マア、こんなものよネ」

いつの間にか俺の元に駆け寄ってきたプラーミャが、微笑みながら手を差し伸べる。

「はは、さすがはプラーミャ。すごい一撃だったな！」

俺はプラーミャの手を取って立ち上がると、ニカッと笑ってサムズアップした。

「ホホ……じゃが……」

「ええ！」

氷室先輩と土御門さんも、俺達の元に笑顔で駆け寄る。

そして。

「ああ！　これで“カタコンベ”領域（エリア）、完全クリアだ！」

『はう！　やったのです！　やったのです！』

俺達は拳を突き上げて喜び、讃え合った。

カタコンベ領域、踏破（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

打ち上げ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

打ち上げ

「フン。しかし、マテリアル以外に何の報酬もないなんて、ケチくさいわネ」

地面に転がる大量のマテリアルを眺めながら、プラーミャが鼻を鳴らす。

全く……必修課題をクリアしたんだからそれで満足しろよ。

「ホホ、そもそも望月や氷室殿が見つけたという領域（エリア）が破格すぎるのじゃ。それは、この前踏破した“葦原中国（あしのはらなかつくに）”領域（エリア）や攻略中の“アルカトラズ”領域（エリア）をみれば分かるえ？」

お、土御門さん、もう“葦原中国（あしのはらなかつくに）”領域（エリア）を踏破したのか。あそこは一歩道だし、二周目特典の他の領域（エリア）と比べれば攻略は容易かもしれないけど、氷室先輩がいないのにこの攻略の早さはすごいな。

「はは、じゃあ土御門さんはこれで【闇属性反射】も手に入れて、ますます闇属性最強に近づくなあ」

「ホ、わらわは闇属性最強程度で満足するつもりはないのじゃがの？」

そう言うと、土御門さんは不敵に笑った。

「おっと、それは失礼なことを言っちまったなあ……」

「ホホ、構わぬ」

俺は自分の失言に頭を掻くが、土御門さんは扇で口元を隠して微

笑んだ。

「では、そろそろここから出ましょうか。この後は、打ち上げもあることですし」

「フフ！　そうだったわネ！　もちろんヨーヘイの奢りでショ？」

プラーミャは俺の顔を覗き込み、ニヨニヨと笑う。

「は、はは……ま、いいか……」

『はう！　なら遠慮はいらないのです！　［シン］はルフランのアイスを食べ尽くすのです！』

乾いた笑みを浮かべる俺を尻目に、［シン］の奴はムフー！　と鼻息を荒く意気込んでやがる。少しはマスターの懐具合も考慮しろよ……。

「何そんな顔してるのヨ。ヨーヘイはマテリアルでたくさん稼いでるんだから、ルフランを貸し切りにするのだって余裕でショ？」

「い、いや、まあ……」

そうなんだけど！　そうなんだけど！

でも俺は、将来のためにちゃんと貯金をしておきたいんだよ！

『はう！　まあ、マスターは『いつかみんなで、旅行に行きたい』って言ってたのです！　だから、あまり無駄遣いはしてくれないのです！』

「ッ！？」

あ、バカ［シン］！　余計なことを！

「ヨーヘイ、それっテ……」
「あ、あははー……いや、まだ先になるかもだけど、全部片づいたら、お祝いにみんなで旅行に行きたいなー、なんて……」
気まずくなった俺は、苦笑しながら顔を逸らす。
まあ、来年のクリスマスを無事超えたら、助けてくれたみんなに感謝を込めて、って考えてたんだけど……。
「フフ……ホント、ヨーヘイってバカよネ？　すぐそうやって誰かのためにバッカリ……」
「な、なんだよ……」
「イイエ！　なんでもないわヨ！」
口を尖らせながらプラーミャを見やると、彼女は少し頬を赤くしながら、イーッ、ってからかうような表情を見せた。
◇
「ふふ……今日は気分がいいですね」
氷室先輩はそう言うと、ニタア、と口の端を吊り上げた。
ルフランにやって来た俺達は、注文を済ませて席でスイーツを待っているんだけど、実は、今日の打ち上げに先輩達はいない。
というのも、これはあくまでも俺達のチームが“カタコンベ”領域（エリア）を踏破したことへのお祝いってことなので、氷室先輩や土御門さんだけじゃなく、プラーミャまでこの四人だけで打ち上げをしようって言い出したのだ。
いや、俺としてはみんなでって思ったんだけど、三人は頑として

折れなかった。
　こうなると、俺一人だけ我を通すわけにもいかず、こんな結果になったんだけど……。

「うぐぅ……家に帰ったら電話なりメッセージでフォローしとかないと……」

　いや、この話を聞いた先輩達四人、メッチャ怒ってたもんなあ……特に、先輩とサンドラ。

『むううううう！　望月くん、見損なったぞ！』
『モウ！　モウ！　ヨーヘイのバカ！』

　……二人共、泣きそうな表情になってたよなあ……。
　しかも、今回に限ってはプラーミャの奴、まるでサンドラに冷たかったし……。

「フフ、それでヨーヘイはどれにするノ？」
「お、おう……そうだな……」

　ご機嫌な様子のプラーミャに尋ねられ、ひとまずはメニューを眺めることにした。

「あー……んじゃ、俺は定番のガトーショコラで」
「分（ダー）かったワ。スイマセーン！」

　プラーミャは笑顔で手を挙げながら店員を呼ぶ。

「ホホ、なんだかんだで、一番楽しみにしておったのはプラーミャだったようじゃの」

「あー……」

土御門さんは澄ました表情でそう告げると、ほうじ茶ラテを口に含んだ。

だけど、俺もその言葉には完全同意だ。

やっぱ、いつもはサンドラのお世話？　をしてるから、たまには羽を伸ばしたいってのもあるのかな？　いや、ないな。

「……プラーミャさんも、損な役回りばかりですから、ね……」

「へ……？」

ポツリ、と呟いた氷室先輩を見て、俺は首を傾げる。

プラーミャが損な役回り、ねえ……。

……まあ、今日くらいはプラーミャのワガママを聞いてもいいかあ……って、いつもプラーミャのワガママに振り回されてるんだけど。

プラーミャを眺めながら、俺はそんなことを考えていると。

「ん？　望月じゃないか」

声を掛けられたので振り返れば、そこにいたのは賀茂だった。

打ち上げ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

賀茂のチーム（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

賀茂のチーム

「ん？　望月じゃないか」

ルフランで“カタコンベ”領域（エリア）踏破の打ち上げの最中、声を掛けられたので振り返れば、そこにいたのは賀茂だった。

「アレ？　賀茂がルフランにいるなんて珍しいな」

俺は思わずキョトン、としながら話しかける。

いや、俺は［シン］のおねだりや先輩、サンドラと一緒に来る機会が多いんだけど、一度も賀茂を見たことなんかなかったし。

「はは……まあ、たまにはオレも仲間と一緒に来たりすることもあるさ」

そう言って賀茂がクイ、と顎で指し示した先を見てみると……あ、見覚えのあるうちの学園の生徒が三人と……アレは大学生？　でいいんだよな……。

「へえー、じゃあ賀茂はあのメンバーで領域（エリア）の攻略なんかしてるのか？」

「ああ。といっても、“大谷（おおたに）”さん……あの一人だけ制服じゃない女性（ひと）な。それ以外の三人とのチームが基本で、領域（エリア）に応じてメンバーを入れ替えることはあるけど」

「ふうん……」

俺は気の抜けた返事をしながら改めて賀茂の仲間を見やる。

うん、賀茂のくせにメンバーは全員女子かよ。ハーレム気取りか……って、よく考えたら今の俺も俺以外女子しかいないわ。

「それで……おっと、オレはそろそろみんなのところに戻るよ。んじゃ、またな」

「お、おお……」

賀茂は軽く手を挙げると、そのまま仲間の待つテーブルへと戻って行った。

「……フン。まるでハーレムに囲まれる裸の王様気取りネ」

俺の隣に座るプラーミャが、眉根を寄せながら鼻を鳴らす。

というか、サンドラや仲間以外は空気扱いをするプラーミャが、珍しく嫌悪感を見せたな。

「……ひょっとして、プラーミャってハーレム系の主人公は嫌いなタイプ？」

「当たり前でショ。それニ……」

「それに？」

「アイツ、私（ヤー）達を値踏みするみたいに見てたわヨ」

「え……？」

プラーミャの言葉に、俺は慌てて賀茂がいるテーブルに目を向ける。

アイツ……。

「ホホ……ひょっとしたら、わらわ達に見惚れておったのかの」

「どうでしょうか」

カラカラと笑う土御門さんとは対照的に、氷室先輩は短くとそう呟いた。

「ま、まあ、賀茂の奴をいちいち気にしてないで、俺達は俺達で打ち上げを楽しもうぜ。な、何なら今日は俺の奢りどころか、好きなだけスイーツを頼んでくれて構わないから」

「フフ……ヨーヘイったら何を言ってるノ？　初めからそのつもりヨ」

せっかく俺が気を遣ってそう言ったのに、プラーミャときたら当たり前だとばかりにクスクスと笑いやがる……。

『はうはうはう！　やったのです！　やったのです！　今日はアイス祭りなのです！』

はは……［シン］は幸せそうでいいなあ……。

俺はそんな［シン］を眺めながら乾いた笑みを浮かべた。

だけど。

「仲間、ねえ……」

もう一度賀茂のほうをチラリ、と見やると、俺は独りごちた。

◇

「ふう……」

プラーミャ達との打ち上げも終わって家に帰ってきた俺は、晩メ

シもそこそこにして部屋のベッドに寝転がる。
というか、あんなにスイーツ食べた後だと、さすがに晩メシはあまり食べられなかったなあ……。

「それにしても……」

俺はルフランで見た、賀茂とその仲間を思い浮かべる。
賀茂が連れていた四人の仲間……あれは、間違いなく『ガイスト×レブナント』のヒロインだ。

それも、四人全員。

「ええと……」

俺はスマホを取り出し、『攻略サイト』のキャラ紹介のページを開いた。

まず一人目が、“大谷カスミ”。
彼女は賀茂と同じ一―一にいる物静かな性格が特徴のヒロインで、あのエセ聖女な木崎セシルほどじゃないけど、【光属性魔法】を得意とする精霊、［アラ・ゲゲツィク］を使役する。

二人目は、“佐々木キョウカ”。
こちらも一―一にいるヒロインの一人で、三年の和気先輩よりもさらにギャルだ。使役する精霊は［ウォルトゥムナ］で、こちらも土御門さんの［導摩法師］ほどじゃないけど【闇属性魔法】の使い手だ。

三人目は、“吉川サヤ”。
二―二にいる俺達の一つ上の先輩で、図書委員をしていていつも

図書室に引きこもってる影の薄いヒロインだな。彼女の使役する精霊（ガイスト）である［ウォルシンガム］も、まるでマスターの性格を反映してるかのように隠密行動スキルを所持しているスピードタイプだ。

最後に、“大谷（おおたに）アイ”。

その名字からも分かる通り、大谷カスミの姉で大学二年生だ。もちろんアレイスター学園のOGでヒロインの一人なんだけど、ゲームの世界で主人公と出会うのは教育実習にやってくる来年の九月のはず。

一応、彼女の精霊（ガイスト）、［エーギル］は既にクラスチェンジ済みでもあるしステータスも高いんだけど、いかんせんゲーム終盤で仲間になるキャラなので、『攻略サイト』ではそこまでオススメされていない。

「……とまあ、これが賀茂の仲間なんだけど、見事にヒロイン縛りだよなあ」

でも、これならメイザース学園との交流戦で、賀茂が選ばれて他のヒロイン二人の姿が見えなかった理由も分かる。

要は、最初から賀茂の奴を代表にするために、あの二人が辞退したってことだ。

「そうなると、賀茂はあの二人と恋愛イベもこなしてるってことか？」

ウーン……色々と頭がこんがらがってきたぞ？

いや、確かに俺だって『ガイスト×レブナント』の世界を無視するかのように、先輩に影響を与えるイベントは色々とブチ壊したりしてるけれど、それ以外に関してはそれほど干渉していない。

つまり、もし『ガイスト×レブナント』のシナリオ通りに事が運

ぶのなら、ヒロインは主人公以外のキャラと恋愛イベなどに発展することはあり得ない……はず。

「ひょ、ひょっとして俺が色々と変えちまったから、他のキャラにも影響がでてるってこと、なのか……？」

それなら、賀茂がヒロインを仲間にしていたり恋愛したりしていてもおかしくない……って。

「ああ……俺の思考もヤバイなあ……」

というか、俺も俺で『攻略サイト』ばっかり頼りにしてるモンだから、考え方がゲームのプレイヤーみたいになっちまってる……。

……ここは、俺の現実なのに。

「いずれにしても、賀茂についてはちょっと気に留めるようにしておこう」

普段会話する分には悪い奴とも思えないし、同じクラスならヒロインとだってチーム組んだりすることもあるだろうし。

そう考えた俺は、もうこの話題を振り払おうとかぶりを振る。

だけど、結局はこのことが頭から離れることはなかった。

賀茂のチーム（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

不機嫌な先輩（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「行ってきます」
『はう！　行ってきますなのです！』
「はい、二人共行ってらっしゃい」

“カタコンベ”領域（エリア）を踏破した次の日の朝、俺と［シン］は母さんに見送られて家を出た。

だけど。

「うう……顔を合わせづらい……」

そう……昨日の夜、俺は先輩とサンドラに、打ち上げについての言い訳をつらつらと書いたメッセージを送ったんだけど、二人からは返事がなかったのだ。
つまりコレ、二人共メッチャ怒ってるってこと、だよなあ……。

『んふふー！　昨日はアイスをたくさん食べられてご満悦だったのです！』

［シン］は昨日の余韻に浸っているのか、頬っぺたを押さえ、思い出し笑いをしながらそんなことをのたまっている。

「ハア……チクショウ、お前はいいよなー……」

そう呟いて、俺は［シン］を見やると。

『はうはう！　確かに藤姉さまもアレク姉さまも怒ってると思いますけど、二人共チョロインなのですぐに機嫌が直るのです！　心配いらないのです！』

いや、二人がこの場にいないからって、言いたい放題だな、オイ。しかもチョロインってなんだよ。単純なところがあることは認めるけど。

『むふふー……いざとなったら、この［シン］に任せるのです！』

そう言って［シン］は胸をドン、と叩くけど……不安しかない。

そんなやり取りをしているうちに、とうとう先輩が待つ十字路へと差し掛かると……うわあ、先輩が腕組みしながら仁王立ちしてる。しかも俺の姿を見つけた瞬間、幽鬼（レブナント）と対峙する時みたいに表情が険しくなったぞ！？

「あ、あはは－……お、おはようございます……」

「……（ギロリ！）」

ヒイイ！？　メッチャ睨まれた！？

コ、コレ、どうすりゃいいんだよ！？

すると先輩は、無言でクルリ、と踵（きびす）を返すと、スタスタと学園に向かって歩き出した……って、お、置いてかれる！

俺は慌てて先輩の隣に並ぶけど……うう、一瞬たりともコッチを見ようとしない。

その時。

「あはは！　望月くんおはよ！」
「オッス！　ヨーヘイ！」

後ろから走ってきた立花と加隈が、俺の背中をバシン、と叩いた。
おおおおお！　二人共、ナイスタイミング！

こ、これで気まずい雰囲気が少しでも解消されれば……！
そう思ってチラリ、と先輩の様子を窺うけど……ハイ、一向に変化はありませんでした。
そして立花と加隈も、そんな先輩の様子に気づいたようで。

「あ、あはは～……そういえばボク、教室ですることがあったんだ～……」
「お、俺も用事を思い出した！」
「チョッ！？」

俺が手を伸ばして引き留めようとする間もなく、二人はそそくさと走り去ってしまった……。
チクショウ！　あの二人、覚えてろよ！

『はう！　ここはやっぱり、この［シン］の出番なのです！』

そう言うと、［シン］が突然、俺を挟んで先輩の反対側に来た……って！？

『えい！　なのです！』
「おわっ！？」
「っ！？」

［シン］に思い切り体当たりされ、そのまま玉突きのように俺は

先輩にぶつかって倒れてしまった。
いや［シン］、何してくれちゃってるの!?　こんなことしたら、先輩がますます……って、うあああああ!?

なんと、俺は倒れた拍子に先輩の上に乗りかかる形になり、そ、その……俺の両手が先輩の大きな胸に……って!?

「すすすす、すいません!?」

俺は鷲づかみしていた両手慌てて離すと、勢いよく飛び退いた。

「……フン」

すると先輩は、真っ赤な顔を逸らしで鼻を鳴らす。
だけど、何故かすぐに立ち上がろうともしない。

「せ、先輩、どうぞ……」

俺は先に立ち上がり、手を差し伸べると。

――パシン。

手を叩かれ、先輩がキッ、と俺を睨んだ。

そして。

「……プ」
「……へ?」
「ハハハハハ!　も、もういいかな……!」

なんと、先輩は突然吹き出したかと思うと、腹を抱えて大声で笑い出した。

「え、ええと……？」

俺は状況が飲み込めず、ポカン、としてしまう。

い、いや、どういうこと！？

「ふふふ……い、いやな？　君達が私達を差し置いて打ち上げに言った後、サンドラと話をしたのだ」

「は、はあ……」

「それで、望月くんのことだから夜にでも謝罪のメッセージを送ってくれるだろうけど、懲らしめるためにわざと返事をしないでおこうとか、朝も無視しようという話になってだな」……ふふふ……！」

そう言うと、先輩はまた笑い出す。

あー……つまり俺は、先輩とサンドラに嵌められたってことかあ……。

「ふ、ふふ……ま、まあこれに懲りたら、これからは君も私達をないがしろにするようなこと……っ！？」

先輩が最後まで言い切る前に、俺は人目もはばからずに先輩を抱きしめた。

「あうあうあうあう！？　なな、なにを！？」

「すいません、先輩……」

恥ずかしそうにわたわたとする先輩に、俺は心の底から謝罪した。

先輩は俺をからかったんだって態度を見せてるけど、本音ではつ

らかったはずなんだ。

あの父親から苗床としての役割を強いられ、学園ではみんなに避けられ、ずっと一人きりだった先輩にとって、たとえそんなことはないと分かっていても、傍にいる奴が離れちまうんじゃないかって、不安になるなんて当然なのに……！

なのにこうやって、わざとこんな真似をして、自分の気持ちに蓋をして……。

本当に、俺は馬鹿だ。

「先輩……もう、こんなことはしないって誓います。絶対に、先輩の傍から離れようとしないって……絶対に、先輩から離れないって」

「あう……う、うん……お願い、だぞ……？」

そう呟くと、胸の中にいる先輩も抱きしめ返してくれた。

『はうー……マスターも藤姉さまも、そろそろ周りを気にするべきなのです』

「「ハッ！？」」

呆れた表情の［シン］の言葉に、俺と先輩は我に返ると……あ、他の生徒達にメッチャ見られてる！？

「うあああああああああ！？」

「あうあうあうあうあう！？」

俺と先輩は奇声を上げながら、お互い飛び退くように離れた。

で、でも、もうちょっと先輩とくっついていたいなあ……。

「もも、望月くん、早く学園に向かうぞ！」
「でで、ですね！」
俺と先輩は、慌ててその場を立ち去る。
だけど。
「こ、これくらいはいいです、よね……？」
「あ……ふふ……」
俺と先輩はどちらからともなく、お互いの手をキュ、と握り、そのまま学園に向かった。

不機嫌な先輩（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

期末テストの存在（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

期末テストの存在

「ヨーヘイ！　おはようなのですワ！」

先輩と下駄箱で別れて教室に入るなり、サンドラは元気に挨拶してきた……って！？

「え？　え？　なんで！？」

先輩の話では、サンドラも無視を決め込むって言ってたのに！？

「フフ……その顔は、先輩にしてやられたんですわネ？」

「そ、そうだけど……サ、サンドラはどうして……？」

「……最初は先輩と同じように、ヨーヘイを懲らしめてやろうって考えてたんですけド……」

サンドラはチラリ、と席に座るプラーミャを見やると。

「プラーミャがネ？　『ヨーヘイは私達（ヤー）を気遣ってるだけで何も悪くないんだからラ、そんなことしたら駄目ヨ』だっテ」

そう言ってサンドラがペロリ、と舌を出した。

だけど、あのプラーミャが俺のフォローをするだなんてなあ……。

そう思いながらプラーミャをしげしげと眺めていると、視線に気づいたプラーミャがギロリ、と睨んできた。

俺がサンドラから話を聞いたって知ったらキレそうだから、勘繰られる前に眺めるのをやめよう……。

「と、ところで、サンドラ達は“カタコンベ”領域（エリア）は今日にでも踏破できそうなのか？」

俺は話題を逸らすため、そんなことを聞いてみる。

「エエ。地下第二十九階層も攻略しましたし、あとは領域（エリア）ボスだけですワ」

「そっかー」

いや、本当にタッチの差だな。

こんなことなら、昨日打ち上げするんじゃなくて一緒にすればよかったかも……。

「あ、あははー……望月くん、無事だった……？」

すると、立花の奴が苦笑しながら会話に加わってきた。

だけど立花よ。俺はさっきの仕打ちを忘れてないからな？

「とりあえず立花、覚えてろよ」

「ヒイイ」

――キーンコーン。

「あ！　朝のＨＲが始まっちゃう！」

立花はわざとらしくそう言うと、そそくさと自分の席に座った。

逃げ足早いな。

「じゃあ、ワタクシも席に戻りますわネ」

「おう」

ヒラヒラと手を振るサンドラも自分の席に戻り、俺も席に着いた。

◇

「ホ、しかし昨日の打ち上げは楽しかったの」

昼休みになり、俺達は食堂で席に着くなり、土御門さんがポロッとそんなことを言い出した！？

いや、初手からなんで燃料投下してんの！？

「ふふ……ええ、またしたいですね」

「ソウネ」

そして、それに乗っかる形で氷室先輩とプラーミャが追随する。

いやもう何なの？

「へ、へエ……！」

あ、もう許してくれてるはずなのに、サンドラの奴、怒りが再燃してるっぽい。

「むううう！　いいもん！　次は絶対に望月くんと同じチームになるし！」

そして頬をパンパンに膨らませながら拗ねる立花。だけど、次、なあ……。

「ホラ！　先輩も何か言ってくださいまシ！」

「あう！？　ううん、うむ、そうだな……」

サンドラに話を振られ、先輩がしどろもどろになる。
というか先輩、顔も赤いし一体どうしたんだろう……。

「ヨーヘイ、それで次はどうするノ？」
「ウーン……」

昨日と同様、プラーミャにまた尋ねられたけど、やっぱり二周目特典の五つの領域（エリア）に行くのが妥当だよなあ……。
そう考えていると。

「いや……領域（エリア）攻略は、明日から最低一週間は止めておこう」
「「「「「「え……？」」」」」」

先輩の言葉に、俺達は気の抜けた声を出してしまった。

「え、ええと、どうして……」
「決まっている。一週間後は期末テストだぞ？」
「「「「「「「「「「あ……」」」」」」」」」」

先輩にそう告げられ、俺達は気づく。
期末テストのこと、すっかり忘れてた……。

「ふふ……なあに、心配するな。勉強についてはこの私がバッチリ教えてあげるとも！　ということで、明日からはみんな私の家に集合だ！」

そう言って張り切る先輩。

「ホホ……わらわはメイザース学園では、座学トップであったぞ？」

そう言うと、土御門さんは俺を見てクスクスと笑う。

アレ？　ひょっとして俺、煽（あお）られてる？

「フフ……マア、授業をちゃんと受けていれば、楽勝よネ？」

「ええ、そうですね」

プラーミャと氷室先輩も、余裕の表情で相槌を打った。

「ボクも勉強得意だから、教えてあげるね！」

立花はフンス！　と小さく気合いを入れるけど、俺が頭悪いの確定みたいに言うの、やめろよな。

「お、俺も勉強に関しては一切問題ねーからな！」

まるでツッコミを待つ若手芸人みたいなリアクションをしてる加隈。

だけど、コイツが言ったように、実は『ガイスト×レブナント』ではコッソリ勉強ができるタイプなのを俺は知っている。

つまり……コイツは俺の敵だ！

「ホホ……ということなので、わらわとしては勉強もするが、今攻略中の“アルカトラズ”領域（エリア）と、その後の“アトランティス”領域（エリア）は引き続き攻略させてほしいのう」

「ふむ……確かに、学力が備わっている土御門くんにとっては、属性反射スキルを取得するほうが重要か……」

土御門さんの言葉に、先輩は顎をさすりながら考え込む。

「モチロン、シキの領域攻略には私も行くわヨ」

「そうだねー、ボク達もチームだし」

「だな！」

プラーミャ、立花、そして加隈も、土御門さんとの攻略を選択したみたいだ。

「うむ、分かった。では、四人は引き続き領域攻略を優先してくれ。ただし、勉強も怠るんじゃないぞ？」

「「「「はい！」」」」

先輩が微笑みながら釘を刺すと、四人は気合いの入ったいい返事をした。

「私も、少し家事を優先させていただけると助かります」

あ、そっか……氷室先輩は家のこともあるもんなあ……。

「もちろんだ。タカシ君達にもよろしくな」

「ええ」

ということで。

「ふふ……望月くん、一緒に頑張ろう！」

「は、はいい……」

結局、テスト勉強については、明日から俺と先輩、サンドラの三人だけで行うことになった。

期末テストの存在（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

小森先輩（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

小森先輩

「では、行ってくる」

放課後、先輩は凛とした表情でそう告げると、“カタコンベ”領域（エリア）の扉をくぐった。

「さあて……となると、最低でも夕方五時までは戻ってこないかー……」

「ソウネ」

四人を見送ってから俺は伸びをすると、プラーミャが同意しつつ、ちょっと退屈そうな表情を浮かべる。

まあ、ここでただ待ってるだけってのもつまらないよな。

「でしたら、プラーミャさんと土御門さんも、生徒会の仕事を手伝っていただけませんか？　ちょうど、年末の決算に向けて作業をしているところなんです」

氷室先輩はいいことを思いついたとばかりに、ポン、と両手を合わせた。

あー……生徒会って、大変だなあ……俺もだけど。

「ホ、もちろん喜んで手伝うのじゃ」

「私（ヤー）もいいわヨ」

「ふふ、ありがとうございます」

土御門さんとプラーミャが二つ返事で引き受けると、氷室先輩が

頭を下げる。
まあ、元々土御門さんはメイザース学園生徒会で会計をしていたんだから慣れたモンだろうし、プラーミャだって基本スペックはサンドラよりも高いんだもんな。
アレ？　ひょっとして、この中で俺が一番役立たず？
「望月さん、行きますよ」
「あ、は、はい」
氷室先輩に声を掛けられて我に返ると、そそくさと生徒会室へと向かった。
◇
「ヨーヘイ！　このレシート、日付順に整理しておいテ！」
「望月！　サッカー部から活動費の報告がないのじゃ！」
氷室先輩の指示の下、早速会計の作業に取り掛かってるんだけど、俺はプラーミャと土御門さんにこき使われていた。
といっても二人共仕事が早くて、俺はこうやって雑用をこなしているほうが役に立てている気がする。
ということで、俺はプラーミャから受け取ったレシートを日付順に並べて渡すと。
「サッカー部に行ってきます！」
そう宣言して生徒会室を出た。

「ええと……お、いたいた。すいませーん、生徒会ですけどー」

グラウンドで練習しているサッカー部を尻目に、俺はベンチにいるマネージャーに声を掛ける。

「……なに？」

すると、少し目が虚ろな感じの二年のマネージャー、“小森（こもり）チユキ”先輩が気だるそうに応対してくれた。

「あ、はい。今年の活動費の報告の提出がまだでしたので……」

「ああ……」

小森先輩はベンチから離れると、部室へと向かう。

「……ついてきて」

「は、はあ……」

俺は曖昧に返事をして、小森先輩の後をついて行く。

しかし……コレ、本当に小森先輩なのか？

というか、小森先輩といったら『ガイスト×レブナント』のヒロインの一人で、その小さな身体に似合わずパワフルで元気ハツラツな性格のはずなのに……。

「ん……」

部室に着くなり、小森先輩はガサゴソと引き出しを漁った後、活動報告書を……って。

「そのー……何も書かれてないんですけど……」
「っ！　それくらい、生徒会のほうで書いてよ！」

おずおずと声を掛けると、急に小森先輩に怒鳴られてしまった。
いや、逆ギレ……かとも思ったけど、それにしては様子がおかし過ぎる。

「小森先輩……どうかしたんですか……？」
「！　ア、アンタ、なんで私のこと知ってんのよっ！」

ますますヒートアップした小森先輩は、グイ、と詰め寄ってきた。
あー……確かに初対面のはずなのに、名前を出したのは迂闊だったなあ……。

「そ、その、生徒会長や副会長に伺っていまして……」
「ウソよ！　アンタもアイツと一緒で、私のことを……っ！？」

何かを言おうとしたところで、小森先輩は急に口をつぐんだ。
……小森先輩、変なことに巻き込まれてたりするんじゃないのか……？

「小森先輩……もしよかったら、生徒会室にきてお話しませんか？　うちの会長なら、絶対に小森先輩の力になれると思いま……「ウルサイウルサイウルサイ！　いいからもう出てってよ！」……わ！？　ちょ！？」

俺が言い切る前に、小森先輩は俺の身体を無理やり押して部室から追い出すと、扉を閉めて鍵をかけられてしまった。

「先輩！　小森先輩！」

扉を叩いて呼びかけるけど、小森先輩から返事はない。

「ハア……なんなんだよ……」

俺は溜息を吐いて頭を掻くと、その場を離れて生徒会室へと戻った。

◇

「……ってことがあったんですよ……」

生徒会室に戻ると、俺は氷室先輩にさっきの出来事を伝えた。

「……確かに様子が変ですね。私の知る限り、小森さんは活発で真面目な方で、そんなことをするような人じゃないと思うんですが……」

「やっぱり……」

氷室先輩の言葉で確信する。

小森先輩は、何か悩みを抱えてるんだと。

それに。

「……小森先輩、おかしなことを言ったんですよ」

「おかしなこと？」

「はい……実は、『アイツと一緒で、私のことを』なんて台詞を……」

そう……確かに小森先輩は言った。

この言葉の意味から察するに、変な奴に付きまとわれたりしてるんじゃないだろうか。

だったら。

「分かりました……会長が“カタコンベ”領域（エリア）から出てきたらもう一度この話をして、何らかの対策を講じましょう。さすがに見過ごせるような話ではないですし……」

「ですね……」

俺と氷室先輩は、お互い頷き合った。

小森先輩（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

謝罪と受け入れ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

謝罪と受け入れ

「望月くん！　戻ったぞ！」
「ヨーヘイ！　やりましたワ！」

先輩達が“カタコンベ”領域（エリア）に入ってから二時間後、四人は笑顔で扉から出てきた。

「はは！　みんな、領域（エリア）の踏破、おめでとう！」
「フフ、といって私（ヤー）達の一日遅れだけド」

こらこらプラーミャ、そういうこと言うなよ。

「フンだ！　その代わり、ペイルライダーはボクの【朱雀】で一撃だったんだから！」
「相変わらずアオイは子どもネ。マア、私（ヤー）は【ブラヴァー】で一撃だったけド」

いや、立花にそんなこと言っておきながら張り合うなよ。お子様だなあ。

「ふふ……いずれにせよ、これで私達も“カタコンベ”領域（エリア）を踏破した。次からは元のチームに戻れる」
「えー！　ボク、今度こそ望月くんと一緒のチームになりたいのに！」

しみじみと語る先輩に、立花は早速抗議した。
ま、まあ、立花の言い分も理解できる。

「ホホ、まだ次の攻略先の領域（エリア）も決まっておらんのじゃ。そう焦ることもないわえ？」
「う、ううう……！」
扇で口元を隠しながら、土御門さんがクスクスと笑う。
で、立花はというと、何も言え返せなくて悔しそうに唇を噛んでいた。
はは……チ、チーム編成に関しては、もう俺は何も言わないようにしよう……。
「そんなことより、早く打ち上げに行きますわヨ！」
サンドラが両手を上げて、ピョンピョンと飛び跳ねてはしゃぐ。
だけど……オイオイ、なんだよその含み笑いは。ひょっとして、昨日の意趣返しか？
「ふふふ……望月くんも私達と一緒に打ち上げしたいだろうなあ？」
いや、先輩、そんなニヤニヤしながらコッチ見ないでくださいよ。
「そうですわネー。ヨーヘイも打ち上げ行きたいですわよネー？」
いや、サンドラ、そんなニヨニヨしながらコッチ見るな。
「まあ？　望月くんがどうしても一緒に行きたいって、泣いて頼むんならボクもやぶさかじゃないけど？」
いや、立花、お前の笑顔だけ闇が深いぞ？

さて……先輩達の行動パターンで考えられるのは二つ。
俺が必死で頼む姿を眺めた後、結局は連れて行かないことで溜飲を下げるのか、それとも、なんだかんだ言って俺達も一緒に来てほしいのか……。
俺はチラリ、と氷室先輩達を見やる。
「すいませんが、家事があるので私は行けません」
おっと、確かにな……しかも、明確に理由がある氷室先輩なら、決して先輩達に屈したわけじゃないしな。上手い。
「私（ヤー）は別にどうでもいいワ。ダッテ、打ち上げなら昨日したシ」
プラーミャもプラーミャで、まるで興味がないとばかりに手をヒラヒラさせてそっぽを向く。
これは、プラーミャだからこそできる芸当だけど……うん、なのにさっきから、チラチラとサンドラばっかり見てやがる。本当は、誘ってほしいんだろうなー……。
「ホホ……誘ってほしいのはやまやまじゃが、わらわ達はお主達を誘わなんだからのう。まあ、仕方あるまいて」
扇で口元を隠しながら、納得の表情を浮かべる土御門さん。ハッキリ言って、俺達の中で一番大人だ。
で、こんな三者三様の反応に、先輩達は非常に悔しそうにしている。
いや、一体どうしたいんだよ……。

「ま、まあ？　私も心が狭くないからな？」
「ソ、ソウですわヨ？」

そう言うと、先輩とサンドラが俺をメッチャ見てる！？
こ、これは、俺が謝罪と恭順する姿勢を示すことで、この場を収める……つまり、損な役割を受け入れろ、そういうことですね？
分かります。

「あ、あははー……お、俺は四人がいいんなら、打ち上げにぜひ参加させてほしいなー……」

乾いた笑みを浮かべながらそう告げると。

「！　そ、そうだな！　まあ、もう少し誠意を見せてくれれば、考えなくもないぞ！」
「そうですワ！　やっぱりここは、ちゃんと謝っていただきませんト！」
「そ、そうだよ！　ボク達だって鬼じゃないしね！」

……この三人、調子に乗りやがって。

ハア……仕方ないなあ……。

「……昨日は俺達だけで打ち上げをしてすいませんでした。この通り謝りますので、俺達も打ち上げに参加させてください」
「！　う、うむ！　もちろんだとも！」
「フフ！　一緒に行きましょウ！」
「えへへー！　やったー！」

俺の謝罪の言葉を聞いた三人は、それこそ嬉しそうに俺にまとわりついてきた。

メ、メンドクサイ……。

「フン、ヨーヘイも大変ネ」

そう思うなら、お前が謝ればよかったんだろうが。そのくせ、嬉しそうにしながらちゃっかりとサンドラにくっつきやがって。

「ホ、これはすまぬのう」

うん、土御門さんはやっぱり大人だなあ。人間ができてる。

「ぐぬぬ……」

さっきまでとは打って変わり、氷室先輩は無表情のまま悔しそうに声を漏らした。

ああ……もう帰らないといけないもんなあ……。

俺は氷室先輩の傍に近づく。

「ひ、氷室先輩、帰りにでもルフランのスイーツ、お届けしますね……」

「！　ええ！」

そう耳打ちすると、氷室先輩は、ぱあ、と嬉しそうに微笑んだ。

そして。

「……望月さん。先程の件、会長にお伝えください」

「……もちろんです」

氷室先輩の言葉に、俺は静かに頷いた。

謝罪と受け入れ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

それと今日、ラブコメ短編を一つ投稿しました！

「初恋の幼馴染に「彼女がいる」って嘘をついたら、「二番でもいいから！」と号泣された。今さら「嘘でした」だなんて言えない。」

もしよろしければ、ぜひお読みくださいませ！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

打ち上げ（二回目）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

打ち上げ（二回目）

「ふふ……やはり寒くなる季節はアップルパイに限るな」

学園を出てルフランに来た俺達は、早速打ち上げを開始した。

で、俺の右隣に座る先輩は、出来立ての温かいアップルパイを食べてご満悦である。本当に可愛い。

「フフ……それでヨーヘイ、当然ワタクシ達の分も、ヨーヘイの奢（おご）りなんですわよネ？」

俺の左隣に座るサンドラが、俺の顔を覗き込みながら含み笑いをする。

しかも今の口振りだと、昨日のことをプラーミャから聞いたな？

「は、はは……まあいっか……」

俺はとりあえず愛想笑いを浮かべるけど、本音を言えばその程度で先輩とサンドラの機嫌が直るなら安いもんだ。

「そういや、土御門さんは“アルカトラズ”領域（エリア）をどこまで攻略したんだ？」

話題を変えるため、俺はそれとなく土御門さんに話を振る。

「ホホ、一昨日に領域（エリア）ボスのスケルトンを倒したところじゃ。このままじゃと、あと四日……いや、あと三日もあれば踏破できるかの」

「おお、いいペースだな」

「ホ、まあ既に踏破済みのプラーミャ達がいるから楽なものじゃて」

まあ、確かに土御門さんの言う通りではあるものの、それでも、【式神】による圧倒的な物量で攻略したら、ほとんどの領域（エリア）は楽勝なんだけど。いや、［導摩法師］の【式神】スキル、マジでチートだな。

だからこそ、［ヘル］にクラスチェンジしてそのスキルが無くなることがこの上なく惜しい。

「ホ……望月、わらわの顔に何かついているのかえ……？」

「あ、い、いや……」

おっと、どうやら無意識に土御門さんを見ていたみたいだ。気をつけよう。

「だけど、この様子だったら“アトランティス”領域（エリア）と“レムリア”領域（エリア）含めて、予定通り期末テストまでに全踏破はいけそうだな」

「フン、当然ヨ」

そう言って、プラーミャが鼻を鳴らす。

「なら、期末テストが終わった後のことについて、考えねばな」

先輩の言葉を受け、俺は腕組みしながら頭を捻（ひね）るけど……なんなら、前倒しして二年に進級する前に全部片づけちまうか……。

「よっし！」

俺は両頬をパシン、と叩いて気合いを入れる。

「ど、どうしたんですノ？」
「あ、ああいや、俺達が攻略する領域（エリア）でどこかいいところがないか、気合い入れて探そうと思ってな」
驚くサンドラに、俺はそう言って言葉を濁した。
毎度のことだけど、二周目特典の領域（エリア）についての言い訳を考えるのがメンドクサイ。
「あはは！　そうすると、次は【風属性反射】かなあ？」
「フフ、私（ヤー）は【雷属性反射】が欲しいわネ」
オイオイ、まるで属性反射スキルを手に入れる前提になっちまってるじゃねーか。その通りだけど。
「ふふ、期待してるぞ、望月くん。それで、その……」
先輩が俺の肩をポン、叩いて微笑んだ後、チラチラと俺の皿に乗っているコーヒーケーキを見る。
食べたいんですね？　分かります。
俺はス、と先輩の前に皿を差し出すと。
「むむ……い、いいのか……？」
おずおずと尋ねる先輩に、俺は無言で頷く。
「う、うむ！　では……」
先輩は早速フォークでコーヒーケーキを一口……いや、半分も持っていきますか……。

それを自分の皿に移し、改めて一口サイズに切り分けて口に含んだ。

「！　ふふ、美味しい……！」

はは、相変わらず先輩は美味そうに食べるなあ……眼福眼福。

◇

「それで……わざわざ店の外に出てきたと言うことは、あまり聞かれたくない内容なのだな……？」

まだ打ち上げが続く中、俺は先輩を店の外に連れ出した。

サッカー部のマネージャー、小森チユキの件について話をするために。

「はい……実は、先輩達が“カタコンベ”領域（エリア）の攻略をしている間、俺達は生徒会の仕事をしていたんですけど、サッカー部に活動報告書の督促をしに行ったら、マネージャーの様子がおかしかったんです」

「ほう……それで？」

「特におかしいと感じたのが、まるで誰かに脅迫されているかのように怯えた表情でして……氷室先輩とも話をしたんですが、ひょっとしたらストーカーか何かに付きまとわれてるんじゃないかと……」

「ふむ……」

俺の説明を聞き、先輩は顎を押さえながらしばらく考え込むと。

「……何かよからぬことに巻き込まれているのであれば、早めに対処せねばならん。分かった、早速明日にでも小森くんに会って詳し

く話を聞いてみよう。それと」
「？　それと？」
「念のため、お父……学園長を通じて、“ＧＳＭＯ（グスモ）”にも依頼してみようと思う。考えすぎかもしれないが、万が一犯罪に巻き込まれていることも考慮して、な」

ははは、さすがは先輩。こういう時は本当に頼りになるな。
まあ、カナヅチなところとか料理が苦手なところとか、そんなギャップもたまらなく魅力的ではあるんだけど。

「ありがとうございます、先輩」
「いや、私も生徒会長なんだ。学園の生徒の身を案じるのは当然のことだよ」
「ははは……それでも、ですよ」

それでも、先輩は本当に優しい女性（ひと）ですよ。

「さて、そろそろ中に戻ろうか」
「はい！」

ニコリ、と微笑んで店の扉に手を掛ける先輩と一緒に、俺も中に入った。

打ち上げ（二回目）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

次の階層へ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

次の階層へ

「望月くん、サンドラ、迎えに来たぞ！」

ルフランで打ち上げをした次の日の放課後、先輩が満面の笑みを浮かべながら教室までやって来た。

もちろん、これから先輩の家で期末テストの勉強をするために。

「ふふ……前回は平均点を少し上回る成績だったが、今回はさらに上位に押し上げてみせる！」

い、いや、お願いですからもう少し緩く行きましょうよ……。

「アーア、ヨーヘイも大変ネ？」

そう言うと、プラーミャが俺を見てニヤニヤと笑う。

チクショウ、ちょっと頭がいいからって調子に乗りやがって。

「フフ……ホラホラ、ワタクシも一緒に教えて差し上げますカラ」

「お、おう……」

あー、サンドラもプラーミャと同じで成績いいんだよなー……羨ましい。

「さあ！　ではサッサと用事を済ませて行こう！」

「エエ！」

「はい……」

張り切る二人の後をすごすごとついて行き、まずは“ぱらいそ”領域（エリア）へと向かう。
もちろん、今日のノルマをこなすために。
で。
「ハアアアアアアアアアアッッッ！」
――斬ッッッ！
先輩がキング・オブ・フレイムを一刀両断にすると、幽子とマテリアルに変わる。
だけど……うん、そろそろレベルが上がらなくなってきたな……。
「なあ、サンドラは今レベルいくつ？」
「ワタクシ？　ええト……チョットお待ちになっテ……」
サンドラはガイストリーダーを取り出して確認すると。
――――――――――――――――――――
名前：ペルーン
属性：雷神（♂）
ＬＶ：６６
力　：Ｓ＋（ＳＳ）
魔力：Ｅ（Ｅ＋）
耐久：ＳＳ（ＳＳ＋）
敏捷：Ｅ＋（Ｄ－）
知力：Ｄ－（Ｄ）
運　：Ａ（Ａ＋）
スキル：【裁きの鉄槌】【統率】【ガーディアン】

【雷属性魔法】【火属性反射】【水属性反射】
【氷属性反射】【闇属性反射】【雷属性無効】
【物理耐性】【状態異常弱点】
――――――――――――――――

「ふむふむ、やっぱりそれくらいのレベルだよなあ……」
「ヨーヘイはどうなんですの？」
「俺？　俺もサンドラと同じくらいでレベル六十八だよ」

といっても、ここ最近はレベルが伸びにくくなってるけどな。

「先輩は……この前のレベル七十五から、頭打ちですよね？」
「うむ……まあ、一年近くかかって三しかレベルが上がらなかったことを考えれば、それでも破格ではあるのだがな」

そう言うと、先輩が苦笑した。
だけど……このままのペースじゃ、ちょっと心もとない。

確かに『ガイスト×レブナント』というゲームだったら、このままのペースでもラスボス程度なら普通に倒せるだろうけど、俺がやろうとしているのはゲームシナリオをぶち壊すこと。

そのためには、せめて来年の夏休みに入るまでには、レベルをカンストさせておきたい。

「望月くん……」
「ヨーヘイ……」

おっと、考え込んでたモンだから、先輩とサンドラが心配そうに見ている。

だけど……そうだな、次に進んでみるか……。

「先輩、サンドラ」

俺は顔を上げ、先輩とサンドラを見据えた。

二人共、俺の様子から真剣な表情で俺を見つめている。

「この“ぱらいそ”領域（エリア）ですけど……次の階層に進んでみましょう」

「「っ？」」

そう告げると、二人は息を飲んだ。

「そ、それは私としても望むところだが……」

「そ、そうですワ……いつも慎重な、ヨーヘイらしくないですわヨ……？」

二人が困惑の色を見せる気持ちはよく分かる。

この領域（エリア）に二人を連れてきた時も、俺は万が一のことを考えてあくまでも安全第一で進めてきた。

だけど……俺は、少々のリスクを冒してでも、ここでさらに強くなっておかないといけない気がするんだ。

「……二人が言いたいことも分かる。今までの俺のポリシーに反することも理解している。だけど……俺は、もっと早く強くなりたい」

俺は拳をギュ、と強く握り、二人に訴える。

すると。

「ふふ……分かった。なら、次の階層に行こうじゃないか」
「エエ、腕が鳴りますワ」

二人はそう言って微笑んだ。

「先輩……サンドラ……」
「望月くん、なんて顔をしているんだ。そもそも、私達は君を誰よりも信頼してこうやってチームを組んでいるんだ。だから、君について行くのは当然だろう？」
「そうですワ。誰よりも信じてくれるヨーヘイだからこそ、ワタクシ達は誰よりもアナタと共にありたいんですノ」

はは……なんだよ二人共、俺を泣かせる気かよ……！

『はう！　マスターが泣いてるのです！　瞳が涙でいっぱいなのです！』
「っ！？　コ、コラ［シン］！　俺は別に泣いてねーよ！」

［シン］にからかわれ、俺は恥ずかしさのあまり［シン］を追いかけ回す。といっても、俺なんかが［シン］に追いつけるはずもなく……って！？

すると［シン］が、クルリ、と翻（ひるがえ）って俺の胸に飛び込んできた。

「ちょ！？　おま！？」
『はう……藤姉さまもアレク姉さまも、そして［シン］も、みんなマスターが大大、大好きだから、どこまでだってついて行くのです……ううん、ついて行きたいのです』

俺の胸の中からオニキスの瞳を潤ませ、［シン］が覗き込む。

そっか……［シン］、先輩、サンドラ……。

「うん……じゃあ、行こう！」

『はう！』

「うむ！」

「エエ！」

みんな……ありがとう……。

次の階層へ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ぱらいそ領域　第二階層（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「食らうのですワ！　【裁きの鉄槌】！」

――ドオオオオオオオオオオンッッッ！

“ぱらいそ”領域（エリア）の第一階層の奥まで来た俺達の前に立ちはだかった、大量の“ポーン・オブ・フィジカル”をサンドラが次々と叩き潰していく。

この幽鬼（レブナント）、何の属性も持たずただ物理に特化しているんだけど、クイーン・オブ・フロストと同様にレベル八十もある上、集団で襲いかかってくるからコッチのほうがタチが悪い。

とはいえ、物理勝負なら［関聖帝君］と［ペルーン］からすれば望むところではあるので、アッサリと倒してはいるんだけど。

「ハアッ……ハアッ……！」

「サンドラ！　代わろう！」

やっぱり自分達よりも高レベルの幽鬼（レブナント）相手じゃ、生半可じゃいかない。

そして。

「ハアッ……ハアッ……ハアー……」

何とかポーン・オブ・フィジカルを倒し切った俺達は、その疲れから思わず下を向く。

コレ……体力的にも精神的にも、結構くるなあ……。

だけど。

「こ、この輪の中に入れば、次の階層に行けるはず……」

俺は額を流れる汗をぐい、と腕で拭い、第一階層最奥の行き止まりにある、床に描かれた輪を見据えた。

「し、しかし、この領域（エリア）は階段で階層を移動するのではないのだな……」

「そ、そんなノ、聞いたことがありませんワ……」

サンドラの言う通り、普通は領域（エリア）における各階層の移動は階段を利用する。

だけど、この“ぱらいそ”領域（エリア）だけは、転送システムを利用して階層移動を行う仕組みになっていた。

まあ……何と言っても、本当に最後の領域（エリア）だからな。

「ふう……みんな、行こう」

そう告げると、みんなゆっくりと頷いた。

そして。

『『『「「っ！？」」』』』

第二階層へと一瞬で移動し、先輩とサンドラだけでなく、［シン］、［関聖帝君］、［ペルーン］までもが驚きの表情を見せた。

「こ、ここが……」

今、俺達の目の前には、第一階層とは打って変わり、まるで地獄の底のような禍々しい景色が広がっていた。

この雰囲気は、“葦原中国（あしのはらなかつくに）エリア”領域に近いかも、な……。

「はは……全然“ぱらいそ”じゃないのな……」

俺はそんな光景を目の当たりにし、乾いた笑みを浮かべる。

「ふ、ふふ……面白い……！」

「エ、エエ……！　やってやりますとモッ！」

先輩とサンドラは冷汗を流しつつも、不敵な笑みを浮かべた。

本当に、二人共頼もしいな……！

「行きましょう！」

「ああ！」

「エエ！」

俺達は足を踏み出し、第二階層を進むと。

「っ！　早速かよ！」

俺達の目の前に立ち塞がるように、この第二階層を徘徊（はいかい）する幽鬼（レブナント）、“アイム”が現れた。

「ウエエ……気持ち悪いですワ……」

アイムの姿を見た瞬間、サンドラが顔をしかめる。
確かに、あんな下半身からウネウネと動く無数の大蛇を生やした、素っ裸の幽鬼（レブナント）なんてなあ……こういうの、エロゲとかに出てきそう。

「……叩き斬る！」
『（コクリ！）』

先輩が顔を赤らめながら明らかに嫌悪感を示すと、［関聖帝君］も激しく同意するとばかりに力強く頷き、青龍偃月刀（えんげつ）の切っ先をアイムへと向けた。

「……［シン］。お前の呪符で、アイツの動きを止めるんだ」
『は、はう……できれば近づきたくないのです……絶対に、年齢制限がかかる気がするのです……』

奇遇だな、俺もお前と同意見だ。

だけど。

「……お前はあのクネクネした蛇を、いつまでも眺めていたいか？」
『！　（フルフル！）』

俺は［シン］の耳元でそうささやくと、［シン］は真っ青な顔で首を左右に激しく振った。

『は、はうはうー……迷惑な、本当に迷惑な幽鬼（レブナント）なのですッッッ！』

［シン］は半ばヤケクソになりながら突撃すると、アイムが下半身の大蛇を前面に展開して迎え撃つ。

「［シン］！　幽鬼（レブナント）はその蛇でお前を拘束するつもりだ！　気をつけろ！」

『はうはうはうはう！？　迷惑極まりないのですううううう！』

［シン］は蛇の目と鼻の先で急旋回し、あっという間に背後に回り込……っ！？

『はうはう！？　後ろにも蛇がいるのです！？』

前面の蛇よりは少ないものの、アイムは後方にも蛇を展開させてきやがった！

「［シン］！？」

『はう！　【神行法・瞬】！』

後方の蛇が襲い掛かる瞬間、［シン］はアイムの頭上へと瞬間移動した。

『【縛】！　【縛】！　【縛】なのですううううう！』

［シン］は目にも止まらない速さで次々にアイムに呪符を貼り付け、その動きを拘束するけど……うん、貼り過ぎだ。

だけど、そのおかげでアイムの蛇一匹に至るまで、完全に動きが止まったぞ！

「よくやったぞ［シン］！　あとはこの私が、この不埒な幽鬼（レブナント）を小間切れにしてくれるッッッ！」

「全部すり潰してやりますわヨッッッ！」

これまで見たことがないほど険しい表情の先輩とサンドラが、幽鬼（レブナント）

鬼に一気に襲いかかる。

「はあああああああああああッッッ！」

「アアアアアアアアアアアッッッ！」

二人は雄叫びを上げながら、何度も斬撃を繰り出し、ひたすら叩き潰す。

「フーッ……フーッ……！」

「ハアッ……ハアッ……！」

結局、アイムは［関聖帝君］と［ペルーン］の地面すらえぐり取るほどのすさまじい連撃によって、その姿を幽子とマテリアルに変えた。

そんな中。

「よし……っ！」

俺は一人コッソリ、拳を握って小さくガッツポーズをしていた。

というのも、この幽鬼（レブナント）のレベルは八十五。先輩の［関聖帝君］より十も差がついているにもかかわらず、俺達は無傷で倒すことができた。

これなら……この第二階層でも通用する！

俺はそんな手ごたえを感じながら、今もなお忌々し気にマテリアルを踏みつけている先輩、サンドラ、そして［シン］を眺めていた。

ぱらいそ領域　第二階層（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

七十二の幽鬼（レブナント）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

七十二の幽鬼（レブナント）

「あ、あはは……三人共、もうそのくらいにして今日は引き返そう……」

俺は先輩とサンドラ、そして［シン］に、おずおずと告げる。

というか、三人のあまりの剣幕に、メッチャ声を掛けづらいんだけど。

「フン、次に見た時は、こんなものでは済まさん！」

「モ、モウ二度と遭遇したくなんてありませんワ！」

『はう！　次は逃げるのです！』

と、三者三様にわめいてはいるものの……実はあのアイム、特殊な幽鬼（レブナント）だからリポップしないんだよなあ……。

というか、この第二階層には七十二の幽鬼（レブナント）がいて、それを全て撃破することで第三階層へとつながる転送装置が現れる仕組みになっている。

「しかし望月くん、またこのような幽鬼（レブナント）が現れるのは不快だが、たった一体を倒しただけで引き返すのか？」

「はい。これからは、この第二階層に来て幽鬼（レブナント）を一体だけ倒して引き返します」

本当は第一階層の時みたいに周回して幽子を稼げればいいんだけど、ここの幽鬼（レブナント）がリポップしない上に、一体あたりの強さが第一階層とは比べ物にならないし。

「エエー……急にリスクを冒すって言い出したかと思ったら、今度はまた安全策ですノ？」
「はは、そう言うなよ。それに、幽子稼ぎは第一階層がメインなのは変わらないし、この第二階層に来たのは、どちらかといえば色んなタイプの幽鬼（レブナント）に戦うことに慣れるためなんだから」
「そうなんですノ？」

説明を聞いてキョトン、としたサンドラに、俺は頷く。
今回はアイムがスキルを発動する前に倒したけど、実は七十二の幽鬼（レブナント）は主人公を除く一周目で仲間にできるキャラが持つ特殊スキルを持っていたりする。

つまり……今後、そういった仲間キャラと戦ったりする機会がある場合に、俺達は混乱せずに戦うことができるってわけだ。

本当ならわざわざヒロインや仲間キャラへの対策なんて不要なんだけど、悠木との戦いから始まってメイザース学園との交流戦なんかを考えれば、対処できるようにしておいたほうがいい。

それに……嫌な予感がするんだ。
あの小森チユキの様子を見てからというもの、俺の中から一向に不安が拭えない。

だから……今、できることをするんだ。

万が一、他のヒロインや仲間キャラ達と戦うことになった時のために。

◇

「むう……望月くんの指示通り、あの一体を倒すだけで引き返して正解だったな……」

ポーン・オブ・フィジカルの最後の一体を青龍偃月刀（えんげつ）で一刀両断にし、先輩が息を吐いた。

そもそも第一階層は出入りすれば幽鬼（レブナント）がリポップする仕様だから、第二階層に行って戻ってくれば、当然わらわらと復活している。

「はは……でも、コイツ等を大量に倒したことで、これまでのクイーン・オブ・フロストやキング・オブ・フレイムを周回するよりも、多く幽子は手に入れてますから」

「フフ、そうですわネ」

そう、この転送装置前に陣取るポーン・オブ・フィジカルだけで二十体もいるし、それ以外にも“ビショップ・オブ・ストーム”に“ルーク・オブ・アクア”が二体ずつ、“ナイト・オブ・ブリッツ”が十体も控えてる。

で、それらの幽鬼（レブナント）もすべからくレベル八十なんだ。今日一日だけでいつもの七倍……いや、八倍の幽子を手に入れた計算だからな。

「それもこれも、あの二体の幽鬼（レブナント）で戦い慣れをしたってことが大きいよな。経験を積んだことで、数が多くても気後れすることなく冷静に対処できるし」

そう言って、俺はポケットからガイストリーダーを取り出すと。

「はは！　［シン］のレベルが六十九になったぞ！」

『はう！　やったのです！　やったのです！』

一緒にガイストリーダーの画面を見ていた［シン］がはしゃぎ回

る。

「さすがに先輩はこの前上がったばかりだからレベルアップしてないかもだけど、サンドラの［ペルーン］も同じように……「フフ！　エエ！　レベル六十七ですわヨ！」……やっぱり！　やったな！」

俺とサンドラは、両手を上げてハイタッチをした。

「ふふ……望月くんの予想を裏切って悪いが、［関聖帝君］がまさかのレベルアップだ！」

そう言うと、先輩がガイストリーダーを高々と掲げた。

「はは！　すげえ！　まさか三人一気に上がるなんて！」
「うむ！」

先輩も輪に加わり、俺達は歓声を上げる。

「フフ！　でしたらここを出たら、お祝いをしませんこト？」
「おお！　いいなそ……「テスト勉強が先だ」……で、ですよねー……」

チクショウ、サンドラの提案に乗じて今日のテスト勉強をうやむやにしてやろうと思ったのに、先輩はキッチリ覚えてたか……。

「ふふ……だが、今日のテスト勉強が終わったら、お祝いということでカナエさんにお願いして豪華な夕食を用意してもらうことにしよう。もちろん、美味しいデザートもつけてな」

そう言うと、先輩はウインクして微笑んだ。

いや、その仕草はメッチャ可愛いんですけど……できればテスト勉強をなしにしてくれるほうが、俺は嬉しいです……。

七十二の幽鬼（レブナント）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

勉強会の後は、みんなで食事（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

勉強会の後は、みんなで食事

「うぐぅ……」

“ぱらいそ”領域（エリア）を出た後、俺とサンドラは先輩の家でテスト勉強の真っ最中なんだけど……チクショウ、分からん。

「ふふ……望月くん、ここはこの式を代入してだな……」

そんな俺の様子を見た先輩は、苦笑しながら俺の隣に来て顔を寄せ、丁寧に教えてくれた。

というか先輩、そのー……大きな胸が背中に当たって、集中できません。

「……ということだから、もう一度解いてみるといい」

「は、はい！」

だけど、全然頭に入ってなかったとはとても言えず、俺は自力で問題を解いてみる。

「ア、ここ間違えてますわヨ？　これハ……」

するとサンドラがすかさず俺のミスを指摘し、詳しく説明してくれた。サンドラ、ナイス！

「ふむ……では、今日のところはここまでにしようか」

「終わったー！」

先輩の終了の合図と共に、俺は拳を突き上げた。

『はう、終わったのです？』

すると、今まで姿を見せなかった［シン］が、ヒョコッと現れた。

「おう、終わったぞ！」

『はうはうはう！　やっとアイスが食べられるのです！』

コノヤロウ……マスターの俺が、口から魂抜けてたっていうのに……！

そんなはしゃぐ［シン］をジト目で見ながら拳を震わせていた、その時。

「お嬢様、皆様、食事の用意ができました」

「うむ！　みんな、食堂に移動しよう！」

「「はい」」

迎えに来てくれたカナエさんの隣を、先輩が並んで歩く。

で、俺達はその後をついて行ってるんだけど……先輩、メッチャはしゃいでません？

「マ、マア、先輩は食べることが好きな方ですからラ……」

サンドラは少し顔を引きつらせながら、そう呟いた。

まあ、そこが先輩の魅力の一つではあるんだけど。

そして、俺達は食堂へと到着すると。

「おお……！」

なんと、テーブルの上に所狭しと豪華な料理の数々が並べられていた。
何ですかコレは。誰かのお誕生日パーティーですか？
「お嬢様からのオーダーで、腕によりをかけさせていただきました」
「は、はあ……」
恭しく一礼をしながらそう告げるカナエさんに、俺には曖昧な返事しかできない。
『［シン］のアイスは！　アイスはどこなのです！』
「はい、こちらにご用意しております」
慌ててテーブルの上を確認する［シン］に、カナエさんが指し示す。
そこには……アレって、冷蔵庫？
「こちらの冷凍庫に、［シン］様のための“アイスケーキ”をご用意いたしております」
『はうはうはうはう！　ま、まさか伝説の“アイスケーキ”なのですか！？』
いや、そんな伝説聞いたことねーよ。
というか。
「なんだよ［シン］。アイスケーキ食べたかったの？」
『はう！　当然なのです！　前にお母様と一緒にテレビで見た時から、［シン］の憧れなのです！』

グイ、と思い切り詰め寄って興奮しながら訴える［シン］。
というか［シン］、何気に母さんとテレビ見たりしてるんだな。

「ふふ……ではみんな、料理が冷めないうちに席に着いて食べよう」

澄ました様子で静かに告げる先輩。
だけどその真紅の瞳は、さっきから料理にばかり目がいってますよ？

ということで、俺達は席に着くと。

『「「「いただきます！」」」』

手を合わせ、食事を始めた。

◇

「ふう……ごちそうさまでした」

いやー、食べたなー……。
というか、普段めったに食べられないようなものばかりな上、カナエさんの料理は本当に美味い。

「うむ！　やはりカナエさんの料理は最高だ！」

先輩はといえば、食べるスピードが一向に衰えず、今も次々と口の中に放り込んでいる。
ウーン、あの主張が激しい大きな胸を考えたら、それだけ栄養が必要なのかもしれない。

「ワ、ワタクシはもう無理ですワ……」

頑張って食べてはみたものの、元々少食なサンドラはあまり食べられずに机に突っ伏していた。

多分、この差が胸のサイズに現れてるんじゃないだろうか。

『はうはうはう！　まだまだ食べられ……あーっ！　関姉さま食べ過ぎなのです！』

『……（プイ）』

『……！　……！』

コッチはコッチで［シン］と［関聖帝君］がアイスケーキを取り合いしていて、それを［ペルーン］が必死に仲裁に入ってる……な、なかなか見ない光景だな……。

「ふふ、［関聖帝君］もアイスケーキには目がないか」

『（コクリ！）』

先輩の言葉に力強く頷く［関聖帝君］。

もし俺が別の世界の人間で、『ガイスト×レブナント』のゲームをプレイしてたら、まさか準ラスボスと最強の精霊（ガイスト）が食いしん坊だなんて、思いもしなかっただろうなあ。二次創作ではありそうだけど。

「それにしても、カナエさんってどちらで料理を覚えたんですか？」

おかわりの水を注いでくれたカナエさんに、俺は何となく聞いてみる。

いや、カナエさんの見た目の年齢って大学生……いや、高校生っていっても通用するくらいなんだけど、この料理のレパートリーの

数々といい、礼儀作法といい、一朝一夕で身につくようなものじゃないと思うんだけど。

「私が藤堂家にお仕えするようになったのは、今から五年前。ちょうどお嬢様が中学生になられた頃です」

へえー……って、そうするとカナエさんの年齢は一体いくつなんだ？

「……もう五年になるのだが、カナエさんの容姿はその頃から一切変わっていないんだ……多分、二十……「お嬢様はデザートはいらないようですね」……あああああ!?　ち、違う！　違うんだ！　ごめんなさい！」

カナエさんの非情な一言に、先輩が慌てて謝る。

やっぱり、女性に年齢を聞いたりするのはタブーだよなあ……俺、聞かなくてよかった。

その後、カナエさんに何とか許してもらい、デザートのシフォンケーキを食べてご満悦の先輩を眺めながら、俺は口元を緩めた。

勉強会の後は、みんなで食事（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

期末テストの結果（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

期末テストの結果

「ア、成績上がったじゃなイ！」

帰ってきた俺の期末テストの結果を見て、サンドラが嬉しそうに微笑む。

「はは……サンドラと先輩のおかげで、前回よりもかなり上がったよ」

うん、まさか俺が、学年で二十位以内に入れるだなんて思いもよらなかった。

本当に、先輩とサンドラには頭が上がらないな。

「で、サンドラはどうだった？」

「ワタクシ？　今回は三位でしたワ」

サンドラは三位かあ……やっぱり頭いいなあ。

「フフ、私（ヤー）は二位ヨ」

「ボクは五位だったよ！」

喜んでいたのも束の間、会話に加わってきたプラーミャと立花の成績を聞き、俺は現実に打ちひしがれた。

チクショウ！　プラーミャはともかく、主人公はちゃんと『学力』パラメータを上げないと成績イマイチのはずだろうが！　なんで最初っから成績いいんだよ！

「あはは！　今度はボクが勉強を教えてあげるね！」
「あー……そうだなー……」
嬉しそうに告げる立花に、俺は気のない返事を返した。
「お！　みんないるじゃねーか！」
すると今度は、加隈の奴がわざわざ俺達の教室にやってきた。
その右手に、期末テストの結果を携えて。
「なあなあ、期……「帰れ」……ちょ！？　まだ最後まで言ってないだろ！？」
何言ってんだ？　最後まで言わなくても、自慢しにきたことぐらい分かるんだよ！
「へへ！　実は俺、なんと学年で七位だったんだぜ！　すごくね？」
「やかましい！　とっと自分の教室に帰れ！」
「ヒデエ１？」
俺が教室の扉を指し示すと、加隈は半ベソかきながら教室を出て行った。何しに来たんだよ……って、自慢しに来たのか。マジ来んな。
「そうなると、学年一位って誰なのかなあ」
「そうネ……この私（ヤー）に勝てる人がこの学園にいるなんて、意外だワ」
というか、ここまで自信満々に言い放つプラーミャもどうかと思うぞ？

「ホホ、みんないるの」

今度は土御門さんが教室にやってきたぞ。

ひょっとして彼女も加隈と同じで、俺に成績を自慢しに……！

「わらわも“アトランティス　”領域（エリア）を踏破したのでの。今日からどうするのか、あらかじめ方針を聞こうと思ったのじゃが……その目はどうしたのかえ……？」

「え、えーと……」

土御門さんにおずおずと尋ねられ、俺は思わずしどろもどろになる。

いや、まさか期末テストの自慢にきたんじゃないかって警戒してたとは、とても言えない……。

「フフフフ！　ヨーヘイはアナタに馬鹿にされるんじゃないかって、警戒してるのヨ！」

「プラーミャ！？」

なんで直球でそんなこと言うんだよ！？　しかも、よく俺の考えが分かったな！？

「ホ、そんなに成績が悪かったのかえ？」

「い、いや、その……に、二十位……」

俺は上目遣いで答えると。

「別に悪くないと思うがの」

土御門さんは拍子抜けしたかのような表情を浮かべた。

「じゃあシキ、アナタの成績はどうだったノ？」
「わらわかえ？　四位じゃったが……」
あー……やっぱり土御門さんも成績いいなあ……。
こんなことなら、ズルみたいなモンだけど、『攻略サイト』にあった主人公の『学力』パラメータアップのためのアイテムを手に入れとくんだったなあ……。
「ププ、ヨーヘイったら落ち込んでるシ」
「モウ！　プラーミャもヨーヘイをからかうのはおよしなさイ！」
やめてくれサンドラ……こういう時、肩を持たれると逆にみじめになる……。
「失礼。望月くんはいるか」
「先輩！」
すると今度は、先輩がやって来た。
「ふふ……期末テストの結果はどうだった？」
「は、はい……」
やっぱりそうですよね、気になりますよね……。
俺は無言で先輩に結果を見せる。
「！　すごいじゃないか望月くん！　前回よりかなり上がっているぞ！」
「あ、あはは、そうですね……」
「ああ！　この調子で頑張れば、来年の今頃には、学年トップだっ

て狙えるとも！」

先輩はズイ、と顔を近づけ、真紅の瞳をキラキラさせながらそう言ってくれた。

「い、いやあ、さすがにそれは無理なんじゃ……「そんなことはない！　君は期末テストの勉強だけでこの成績を残せたんだ！　普段から勉強を怠らなければ、もっといい成績になるに決まっている！」」

謙遜する俺の肩をつかみ、先輩は嬉しそうに俺を見つめる。

はは……こんなに期待されたんじゃ、勉強ももっと頑張らないと、だな。

「あはは、でしたら先輩、これからも俺に勉強を教えてもらってもいいですか？」

「！　も、もちろんだとも！」

そうお願いしたら、先輩は二つ返事で頷いてくれた。

「チョ、チョットお待ちになっテ！　ワタクシも、ヨーヘイの勉強のお手伝いをしますわヨ！」

俺と先輩の会話を聞いていたサンドラも、そんなことを言ってくれた。

本当に、二人共……！

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩く。

二人の優しさに応えるためにも、頑張ってみるか！

「ふふ……君は、いつだって全力だな」

「当然ですワ！　だっテ……ヨーヘイですもノ！」

二人が柔らかい表情で俺を見つめている、その時、教室の前を歩く、賀茂の姿が目に入……っ！？

「アイツ……！」

「む、望月くんどうした？」

俺の雰囲気が変わったことに気づいた先輩が、心配そうに尋ねるけど……俺は、それどころじゃなかった。

だって。

賀茂の奴は、『学力』パラメータアップのためのアイテムの一つ、『超実践学術理論』を持っていたんだから。

期末テストの結果（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

日常パートのアイテム（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

日常パートのアイテム

「アイツ……！」
「む、望月くんどうした？」

俺の雰囲気が変わったことに気づいた先輩が、心配そうに尋ねるけど……俺は、それどころじゃなかった。

だって。

賀茂の奴は、『学力』パラメータアップのためのアイテムの一つ、『超実践学術理論』を持っていたんだから。

「ア！　ヨ、ヨーヘイ！」
「望月くん！」

サンドラと先輩の制止も聞かず、俺は教室を飛び出した。

「賀茂！」
「ん？　望月、どうした？」

仲間である“大谷カスミ”と“佐々木キョウカ”の二人と談笑しながら歩いている賀茂を呼び止めると、賀茂は不思議そうな表情を浮かべながらこちらへと振り向いた。

「お前……その左手に持ってる本……それ、どうしたんだ？」
「ああ、コレ？　この前、本屋で偶然見つけたんだよ」

そう言うと、賀茂は本を軽く持ち上げる。

すると。

「か、賀茂くん、早く教室に戻ろ？」

「そ、そうだよ！」

大谷カスミと佐々木キョウカは、何故か賀茂の奴の腕を引っ張って、俺との会話を打ち切るように促す。

まるで、俺から逃げようとしているかのように。

「はは、悪い。そういうことらしいから、俺はもう行くぞ」

「あ、ああ……」

そう言って賀茂は踵（きびす）を返し、教室へと戻ろうとした瞬間。

「あ、そうそう。オレ、今回の期末テスト、学年一位だったぜ」

急にクルリ、とこちらを向いてそう告げると、嬉しそうに口の端を持ち上げた。

「んじゃ」

そして、手をヒラヒラさせながら、賀茂は今度こそ教室に戻って行った。

だけど、賀茂もそうだけど、それ以上に俺にはあのヒロイン二人が気になった。

去り際に見せた、まるで俺に何かを訴えるかのような目。

「望月くん……」
「ヨーヘイ……どうしたんですノ……？」
いつの間にか、先輩とサンドラが心配そうに俺を見つめていた。
「ああいや、何でもない……」
そう告げると、俺はゆっくりとかぶりを振った。
◇
「はあああああああああああああッッッ！」
放課後、“ぱらいそ”領域（エリア）の第二階層に来た俺達は、七十二の幽鬼（レブナント）の一体、“ムルムル”と交戦していた。
「二人共、来るぞ！」
「分かった！」
「了解ですワ！」
俺の言葉に反応した［ペルーン］が【ガーディアン】を展開し、その陰に隠れて先輩とサンドラ、二体の精霊（ガイスト）が、すぐさま耳を塞ぐ。
もちろん、俺と［シン］も。
『アアアアアアアアアアアアッッッ！』
その瞬間、ムルムルが絶叫すると、地面が、壁が、一斉に震えた。
これこそ、特殊スキルの一つである【スクリーム】。音の衝撃波によってダメージを与えるだけじゃなく、聴覚破壊と恐慌状態のデバフを付与する。

「クッソ！　騒音は立派な迷惑行為だろ！　ちょっとはマナーを守れよ！」

『はうはうはう！　うるさいのです！　うるさいのです！』

などと大声で抗議するけど、この絶叫のせいで聞こえてないだろうなー……って、音が止んだぞ！

「みんな！　今だ！」

「一気に叩き斬る！」

「食らうのですワ！　【裁きの鉄槌】！」

『はうはうはう！　【神行法・瞬】からのー、【爆】！　【雷】！』

［関聖帝君］、［ペルーン］、そして［シン］による一斉攻撃を受け、ムルムルは身を守る甲冑はおろか、跨（またが）っているハゲワシの魔獣もろともメチャクチャに攻撃を受ける。

だけど、さすがは“ぱらいそ”領域（エリア）第二階層の幽鬼（レブナント）。並の領域（エリア）ボスやあの“柱”であっても、ここまでダメージを受けたら倒せるのに、まだ耐え続けていた。

だけど。

「トドメだッッッ！」

――斬ッッッ！

［関聖帝君］の青龍偃月刀がうなりを上げ、とうとうムルムルを一刀両断に斬り伏せた。

「ハッ……ハアッ……やったか……！」

肩で息をする先輩の目の前で、ムルムルが幽子とマテリアルに姿を変える。

「フウ……やっぱり、第一階層の敵とは比べものにならないくらい強いですわネ……」

サンドラが大量のマテリアルを眺めながら、そう呟いた。

「ああ……単純に強いだけじゃなく、昨日の幽鬼（レブナント）にも言えることだけど、とにかくコイツ等の持つスキルがかなり厄介だ。もし、同じスキルを持った精霊使い（ガイスト）がいたら、それこそ面倒だな……」

「ふむ……冗談にしては笑えないな」

俺の言葉に先輩が神妙な面持ちになる。

だけど、印象付ける意味でも、ここで二人にはしっかりと言っておかないと。

「さて……とりあえず今日も無事に一体倒したが、第一階層のようにまた出現したりするんだろうか？」

「サア……どうなんですノ？」

先輩とサンドラが、コッチを見るけど……イヤ、これ答えづらいな。

「は、はは……さすがにこんな特殊なスキルを持つ幽鬼（レブナント）が雑魚扱いってことはさすがにないと思うんですけど……」

俺は苦笑しながら頭を掻（か）いた。

「まあそうだろうな。第一階層の幽鬼（レブナント）は確かに強いが、それでも使用するスキルは各属性魔法だけで、あとは平凡な物理攻撃しかないからな」
「そうですわネ」
ホッ……どうやら俺の説明に納得してくれたみたいだ。
「うん？　だがそうすると、この第二階層の特殊スキル持ちの幽鬼（レブナント）は何体いるんだ？」
「さ、さすがに何十体もいないのではないかしラ……」
「そ、そうだなー……」
うぐぅ……第二階層には、あと六十体近くいるだなんて到底言えない……。
眉根を寄せる二人を見やりながら、俺はただ乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

日常パートのアイテム（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

四つ目の領域へ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

四つ目の領域へ

「フフ……やっと次の領域に行けるのネ！」

“ぱらいそ”領域でムルムルを倒した次の日の昼休み、俺はみんなにこれから攻略する領域について話を持ちかけた。

するとプラーミャが口の端を持ち上げ、パシン、と拳で手のひらを叩く。まあ、プラーミャは“カタコンベ”領域は不完全燃焼っぽかったからなあ。

「それで、今度はどこを攻略するんですノ？」

「ああ、それは……“バベル”領域ってところだ」

「「「「「「“バベル”領域！？」」」」」」

みんなが揃って俺が告げた領域の名を復唱する。

「ああ、これを見てくれ」

そう言うと、俺はあらかじめ持ってきたカバンの中から、一冊の本を取り出した。

「望月さん、これは？」

「はい……どこかいい領域がないかと図書館で調べていた時、偶然見つけたんです」

ハイ、嘘……とも言い切れないか。

もちろん“バベル”領域も、二周目特典である五つの領域の一つなんだけど、この領域については他の四つと違い、手順を踏む必要

がある。

その手順というのが、この本に記されているんだ。

「えーと……なになに？　『“バベル”は一つを拒むもの』……なんだコレ？」

加隈が最初の一行を呼んだだけで、不思議そうに首を傾げた。

「ホ……つまり、ここに記されていることを読み解くことこそが、その“バベル”領域（エリア）とやらに至る鍵、ということじゃな？」

扇で口元を隠しながら、土御門さんがしげしげと本を眺めながら呟く。

さすが土御門さん、理解が早い。

「それで今日はこの本を解読して、書かれている“バベル”領域（エリア）を見つけようと思うんだけど……」

そう言って、みんなの顔色を窺（うかが）う。

今回は完璧な理由があるから、さすがに“バベル”領域（エリア）に関して俺が疑われるようなことは……「ふむ……このような本、どうやって見つけたのだ？」……って！？

そんな声に俺は勢いよく顔を上げると、先輩がニヤニヤしてる……。

「あ、あはは！……ホ、ホラ、図書館で期末テストの勉強をしてた時、息抜きで本を漁ってたら偶然見つけたんですよ……」

こうなることも考えて、あらかじめ用意しておいた言い訳を並べ立てる。

だけど。

「ふふ……まあ、そういうことにしておこう」

見ると、先輩だけじゃなくて他のみんなまでニヤニヤしてやがる……ま、まあ、今さらかあ……。

結局、俺はそんなみんなに対し、苦笑するしかなかった。

◇

「えーと……ここをこう……お、上手くいった」

俺達は本に書いてあった通り、“バベル”領域（エリア）を出現させるための手順を、二手に分かれて踏んでいく。

んで、俺は先輩、サンドラ、そしてプラーミャと一緒に益田市のはずれにある臨海公園に来てるんだけど……。

「ふふ、だが望月くんが、こんなにワガママだとは思わなかったぞ？」

「エエ、まさかあんなことを言い出すとは思いませんでしたワ？」

「本当ネ。しかも、氷室先輩じゃなくて私（ヤー）だなんテ」

「み、みんな、もう言わないでくれよー……」

口の端を持ち上げながら、三人がからかうように見つめてくるので、俺としてはいたたまれない。

「ですけド、どうしてワタクシ達……特に、氷室先輩を外してプラーミャを加えたんですノ？」

サンドラが不思議そうに尋ねる。

「あー……今度の“バベル”領域（エリア）の攻略、実はこの四人のチームにしようと思ってな」

「そうなノ？」

本当はプラーミャじゃなくて、氷室先輩でも全然問題はない。

ただし、コッチのチームに関しては。

一方で、向こうのチームは攻防一体の強さがあり、かつ、回復スキルを持つ立花、トリッキーな動きで予想外の攻撃が得意スタイルの加隈、そして、強力な【式神】スキルを持つ土御門さん。これだけ見れば、充分バランスがとれているのは間違いない、

だけど。

「……向こうには、チームのブレーンとして機能する奴がいない」

そう、個々の能力は全員高いけど、我が強いこともあって、チームの総合力としてはそれほど高くない。

本来なら、それを立花が担えればいいんだけど、残念ながらアイツも自己中なところが結構あるからなあ……。

その点、氷室先輩なら年長ということもあって三人も指示に従いやすいし、何より、その冷静沈着な性格と［ポリアフ］の持つ【オブザーバトリー】による解析能力を活かした作戦立案、まさにうってつけの存在だ。

これまでの領域（エリア）なら今まで通りでもよかったんだけど、この“バベル”領域（エリア）に関しては、組織だって行動しないと痛い目に遭うからな。

なにせ、この『ガイスト×レブナント』の世界で、最も長く、そして最も高い領域（エリア）なのだから。

「なるほど……確かに望月くんの言う通り、氷室くんはまとめ役にぴったりだな」

「ええ。それに、我が強いということに関してならプラーミャが一番ですが、コッチのチームならサンドラもいるし、元々この四人のチームが始まりですから、絶対に上手くいきますから」

俺の言葉に、先輩とサンドラが頷く。

だけど。

「チョットヨーヘイ！　ソノ『我が強いということに関してならプラーミャが一番』って、どういう意味ヨ！」

「えー、言ったまんま……「イイ度胸ネ。今すぐハルバードで焼き尽くしてやろうかしラ？」……ゴメンナサイ」

プラーミャにギロリ、と睨まれ、俺は平身低頭で謝った。

「フフ……プラーミャも照れ隠しはそれくらいにしたラ？」

「ッ！？　サンドラ！？」

クスクスと笑うサンドラに、バツが悪くなったプラーミャが口を

尖らせた。

「それよりも、望月くん」

「ええ……立花達も無事に封印を解除したみたいですね」

俺と先輩は、目の前に現れた扉を見て頷き合った。

四つ目の領域へ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

俺と同じ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
これにて第七章ラストです！

俺と同じ

「ええ……立花達も無事に封印を解除したみたいですね」

俺と先輩は、目の前に現れた扉を見て頷き合った。

「それでヨーヘイ、“バベル”領域（エリア）にはこのまま入るノ？」

「いや、とりあえずは立花達が合流するのを待とう」

尋ねるプラーミャにそう答えると、俺はスマホを取り出してメッセージを打ち込む。

「これでよし、と」

立花達に一斉にメッセージを送り、スマホをポケットに戻そうとして。

――ピリリリリ。

「お、もう返事が返ってきた」

もう一度スマホの画面を見ると。

『あれ？　ボク達、まだ封印を解除してないよ？』

「え……？」

立花のメッセージを見て、俺は思わず呆けてしまった。

「む、これはどういうことだ？」

俺の隣でスマホを覗き込む先輩が呟く。

でも、“バベル”領域（エリア）への扉は、俺達の目の前に確かに出現しているわけで……。

「ネ、ネエ……これってつまり、立花サン達のほうの封印が既に解かれていタ、ってことですノ……？」

扉を見やりながら、サンドラがおずおずと尋ねる。

確かに、サンドラの言う通りかもしれない……いや、それしか考えられない。

問題は、その封印を一体誰が解いたかってことだ。

「先輩……一応聞きますけど、この“バベル”領域（エリア）って、学園も“GSMO（グスモ）”も知らないですよね……？」

「ああ……少なくとも、私は聞いたことがない。望月くんが把握している領域（エリア）以外は、益田市にあるものは全て網羅しているがな」

つまり、この領域（エリア）の存在を知ってる奴はいないはず。

この俺を除いては。

「偶然、誰かが意図しない形で封印を解いタ……それしか考えられないわネ……」

プラーミャが神妙な面持ちでそう呟くが、その推測は間違ってる。

一応、“バベル”領域（エリア）は俺が借りてきた図書館の本を読めば、その存在くらいは確認できるかもだが、封印は絶対に解けないんだ。

だって封印を解くには、『ガイスト×レブナント』を一度はクリアしないと分からない内容なんだから。

「……とにかく、立花達がコッチに来るのを待とう」

「うむ……」

俺達は、扉をぼんやりと眺めながら、ただ四人の合流を待ち続けた。

心の中にくすぶる、得も言われぬ不快さを感じながら。

◇

「ア、来たんじゃないかしラ」

プラーミャが指差す方向へと視線を向けると、太陽が落ちて辺りが薄暗くなる中、遠くに四人の人影が見えた。

「ふむ……暗くてよく分からないが、見る限りうちの学園の制服のようだから、おそらく間違いないだろう」

「ですわネ」

先輩とサンドラがそう言いながら頷く。

だけど……ちょっとおかしくないか？

立花達のチームは、立花、加隈、土御門さん、そして氷室先輩の四人だ。

なのに、見える人影の制服から判断すれば、男一人に女三人。

つまり。

「先輩、サンドラ、プラーミャ……気をつけろ」
「「「っ！？」」」
俺は敬語も忘れてそう告げると、先輩達は一瞬息を飲んだ後、すぐさま身構えた。
「［シン］」
『はう……いつでも行けるのです』
さあ……姿を現わ……っ！？
「ん？　ひょっとして、望月か？」
暗がりの中、街灯にさらされて現れたのは、賀茂だった。
「賀茂……どうしてここに？」
「オレ？　いや、実は図書館で見つけた本を調べたら、ここに古代の隠し領域（エリア）があることが分かったんでな。それならと、仲間達と一緒に探しに来たんだ」
「へえ……」
仲間、ねえ。
よく見ると、この前ルフランで会った大谷カスミ達とも違う女子をはべらせてやがるな。
これが前に言ってた、『領域（エリア）に応じてメンバーを入れ替える』ってヤツか。
だけど……俺はこの女子達も知っている。
なにせ、三人共『ガイスト×レブナント』のヒロインだからな。

それに。

「あ、小森先輩」
「っ！？」

俺は賀茂のチームの中にコソコソと混じっていた、小森先輩にわざとらしく声をかけた。

「……望月、小森先輩を知ってるのか？」
「ん？　おお、生徒会の関係でサッカー部に行った時に、チョットな」

低い声で尋ねる賀茂に、俺ははぐらかすようにヘラヘラしながら答えた、

「まあいいや。それで賀茂、お前の言う隠し領域（エリア）っての、俺達も見たいんだけどいいか？」
「……いや、今日は下見だけだから、もう帰る」
「あっそ」
「みんな、行こうか」

手をヒラヒラさせる俺を一瞥（いちべつ）すると、賀茂はヒロイン達を連れて去って行く。

そんな中、小森先輩が一度だけこちらへと振り返ると、不安と、まるで俺達を心配するかのような、そんな表情を浮かべていた。

「ふうん……そういうことかよ」

この件で、今までのことが色々と繋がった。

どうして、メイザース学園との交流戦でクラス代表になれたのか。
どうして、主人公用のパラメータアップのアイテムを持っていたのか。
どうして、チームの仲間が全員、ゲームのヒロインなのか。
つまり……賀茂も、俺と同じってわけか。

「も、望月くん……」
「「ヨーヘイ……」」

見ると、先輩とサンドラばかりか、プラーミャまで心配そうに俺を見ていた。

「先輩……例の小森先輩の件ですけど、それだけじゃなくて賀茂についても調査と監視をお願いしていいですか？」
「む……そ、それは構わないが……そうか、君はそう睨んだんだな？」

先輩の問い掛けに、俺は無言で頷く。

賀茂……俺達と関係のないところで、オマエがヒロイン達とよろしくやる分には、何も言うつもりはない。
だけど、オマエがもし、アレで得た知識を悪用しているんなら……俺の大切な人達を巻き込むってんなら、俺は黙っちゃいない。

だから、その時は。

――俺が、オマエを叩き潰す！

俺と同じ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これで第七章が終了となり、幕間を数話はさんで、一年生編ラストとなる第八章へと進みます！

いよいよ明かされた、ヨーヘイと同じ『攻略サイト』を持つ存在。

そんな相手との決着をつける第八章を、どうぞお楽しみに！

……あ、クリスマスと正月イベは、第八章に持ち越しをさせていただきます……。

ということで、次回の恒例の幕間は、先輩視点！　今日の夜更新です！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

被験体（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今日から幕間です！

被験体

■藤堂サクヤ視点

「ふう……」

望月くんの言う“バベル”領域（エリア）の扉を見つけ、賀茂カズマ達のチームとの邂逅（かいこう）、そして立花くん達と合流した後、私達は解散となった。

できれば“バベル”領域（エリア）の下見くらいはしておきたかったところだが。

『今日、“バベル”領域（エリア）に入るのはやめて、攻略は明日の放課後からにしよう』

望月くんにそう言われてしまったら、全員それに従うしかない。

しかも、彼にあんな真剣なまなざしを見せられてしまっては、な……。

不安に思った私は、望月くんにそれとなく尋ねてみたが、彼は苦笑するばかりで一切教えてはくれなかった。

それが……私にはとても歯がゆい。

私は、彼のためなら何だってしてあげたいのに。

彼のためなら、何だってできるのに。

「……相変わらず、彼はやきもきさせてくれる」

とはいえ、彼があんな表情をするのは、私達を守ろうとしたり、想いに応えようとしたりする時だ。
つまり……彼はまた私達、あるいは誰かを救おうとしているんじゃないだろうか。

そしてそれは、サッカー部のマネージャー、“小森チユキ”が関係しているんだろう。

「おっと、時間だ」

そんなことをずっと思案していたら、いつの間にか研究所に行く時間になっていた。
いつもならこんな夜遅くに研究所に行くようなことはないんだが、お父様から珍しく呼び出しを受けてしまったのだ。

まあ、私としてもお父様に用事があったので、ちょうどよかったのだが。

私は右手の“エリネドの指輪”を外し、部屋を出る。

すると。

「お嬢様、研究所までお送りいたします」

部屋の前にいたカナエさんが、そう言って深々とお辞儀をした。

「む、研究所なら徒歩で向かうが……」
「いいえお嬢様、さすがに暗闇の中を女子高生一人だけで歩いて行かせるわけにはまいりません」

「いや、私には［関聖帝君］がいるから、万が一ということは……」
「望月様にこのことをお伝えしても？」」

カナエさんの申し出をやんわりと断ろうとしたら、逆にそんなことを言われてしまった……。

確かに望月くんが知ったら、絶対に叱られてしまうな。

「ふふ……そう言われてしまっては、従うしかないな」
「はい」」

結局、私はカナエさんに研究所まで車で送ってもらった。

◇

「む、来たか」

研究所のいつもの部屋に入ると、作業をしていたお父様は仕事の手を止め、私の傍へとやって来た。

「お父様、このような時間から“ウルズの泥水”の供給を始めるなんて、珍しいですね」
「ああいや、サクヤを呼んだのはその件ではない」

？　どういうことだ？

私がこの研究所に来る理由なんて、それ以外ないというのに。

「高坂くん、彼を呼んできてくれ」
「はい」」

お父様の指示を受け、高坂さんが部屋から出て行く。

だが……彼とは一体……？

ま、まあ、その彼とやらが来る前に、こちらの用件を済ませてしまおう。

「お父様……実は、お願いがあるのですが……」

「ん？　なんだね？」

「先日お願いした“小森チユキ”の件についてですが、もう一人、“GSMO（グスモ）”の監視対象に加えてほしいのです」

「ほう……？」

お父様の視線が、鋭いものに変わる。

「はい……一一一の、“賀茂カズマ”を監視してください」

「その理由は？」

当然、お父様がそう尋ねるのも想定内だ。

なので、私はあらかじめ用意しておいた答えを告げる。

「もちろん、その“小森チユキ”の件に、その男が絡んでいるからです」

望月くんは彼を監視する理由について教えてはくれなかったが、小森チユキが賀茂カズマと一緒にいたことを考えれば、何らか関与していることくらいは分かる。

それに……去り際に見せた、小森チユキの瞳。

あれは、不安と私達を心配するかのような、そんな瞳だった。

「ふうむ……やはり、そちらにも監視をつける必要があるな……」

意外だった。

さすがに、もっと色々と理由を聞かれると思ったのに、まさかこんなアッサリと受け入れてくれるなんて。

だけど、『やはり』とはどういう意味だ？

「……実は、“小森チユキ”の監視をしている“GSMO（グスモ）”職員から、早速報告があった」

「っ！　そ、それは？」

「うむ……彼女の通話記録やスマホのメッセージの履歴を調べたところ、二学期に入ってから、ある特定の者とのやり取りが多くなっていたのだ」

「そ、それってもしかして！？」

「ああ……その相手が、“賀茂カズマ”だ」

やはり……望月くんの言う小森チユキの異変には、あの賀茂カズマが関与していたのか……！

「他にも、彼女は賀茂カズマとチームを組んで領域（エリア）攻略をしているとも聞いていたので、その時は特に気にすることもなかったんだが……サクヤがそう言うということは、チームを組んでいること自体にも何かあるかもしれん……」

お父様は顎に手を当てて思案すると、おもむろにポケットからスマホを取り出した。

「……ああ、私だ。悪いがアレイスター学園の一―一に所属する“賀茂カズマ”について、監視対象に加えてくれ……ああ、同じように身辺を徹底的に洗え」

おそらく、電話の相手は“ＧＳＭＯ（グスモ）”の職員だろう。やはり学園を守るとなれば、お父様の行動は早いな。

「お父様、ありがとうございます」

「ふふ……生徒の安全を守るのは、学園長として当然の務めだ」

そうですね……学園を守るのは、あそこがお母様との大切な思い出の場所だから、ですよね……。

「所長、連れてきました」

「ああ、すまない」

お父様の指示を受けた高坂さんが、誰かを連れて戻ってき……っ!?

「こ、この男は……！」

「ああ、彼は今後、この研究所において“被験体”として協力してくれることになった。なので、生徒会長であるサクヤに、学園内での面倒を見てもらおうと思ってな」

そうか……確かにこの男が出てくるためには、こんな手段を取るしか方法はない、か……。

「……分かりました。お任せください」

「うむ。先程の件については、“ＧＳＭＯ（グスモ）”からサクヤにも逐次（ちくじ）報告させるようにする」

「ありがとうございます」

私はお父様に一礼をすると、そのまま部屋を出た。

だけど。

――ダンッ！

「……望月くんに、なんと伝えればいいんだ……！」

私は……私は……っ！

彼のこの事実を知った時の望月くんのことを想像し、私は壁に手を思い切り打ちつけ、唇を噛んだ。

被験体（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大切な家族（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今回はまさかの先輩のパパン視点です！

大切な家族

■藤堂マサシゲ視点

『ご主人様。お嬢様は無事、お帰りになられました』

「そうか……ありがとう……」

そう報告するお手伝いさんの“神直（かみなお）カナエ”さんに、私は礼を述べる。

『いえ……ご主人様も、ご無理なさらないよう……』

「ああ……」

私は短く返事をした後、通話を切った。

ふ……私がこうやって研究に専念できるのも、神直さんがサクヤの面倒を見てくれているおかげ、だからな。本当にありがたい。

「へえ……所長がそんな表情を浮かべるなんて、珍しいですね」

「む……そ、そうか……？」

高坂くんに指摘され、私は思わず顔をしかめた。

だが……その指摘も、あながち間違いではないがな。

思えば、彼女がうちの家にお手伝いとして来てくれたのは、ツクヨを亡くして失意のどん底にいた五年前だったな。

これまでもお手伝いは何人か来てくれたが、ここまで長く、そしてサクヤのことを気にかけてくれたお手伝いは他にいない。

本当に……感謝しかない。

「それで、サクヤさんのお願いは聞き入れたんですね」

「聞いていたのか？」

「すいません、聞くつもりはなかったのですが、真剣に話をされているお二人を見て、つい……」

そう言うと、高坂くんは苦笑した。

「ふう……まあ、サクヤも生徒会長だし、同級生の女子生徒の身を案じる気持ちも分かるしな。それに……」

「それに？」

「……サクヤの言う通り、不審な点が多すぎる」

そうなのだ。

サクヤにも言ったが、小森チユキは賀茂カズマとばかりやり取りをしていて、他の生徒達との通話記録などがほとんど見られなかった。

一学期の頃は、同じサッカー部の部員達と、マメに連絡をしていたのに。

「ふう……所長も大変ですね。ここの研究と陣頭指揮に加えて、学園長の仕事もだなんて……」

「ふふ、仕方あるまい。あのアレイスター学園は、私とツクヨの夢なんだから」

「夢、ですか……」

そう……私とツクヨが、未来にはばたく精霊使い（ガイスト）を育てる機関を

作ろうと、国を説得して設立したのだからな……。
そのおかげで、今ではメイザース学園をはじめとして各地で精霊（ガイスト）使いを養成する学校が数多くできた。

「そういえば、“ＧＳＭＯ（グスモ）”も所長が設立したんですよね？　今はトップの座を所長の教え子だった人に引き継がれましたが」
「さすがによく知ってるな。まあ、君ともかれこれ十年以上の付き合いなのだから、当然といえば当然か」

ただ、高坂くんの場合は、最初は私の弟子ではなくてツクヨの弟子だったのだがな。

「ハハ……まあ、私に手伝えることがあれば何でも言ってください。何でしたら、サクヤさんの面倒も……「駄目に決まっているだろう」……ですよね……」

全く……高坂くんはもう三十二歳だろう。十七歳のサクヤと釣り合うわけがない。
……いや、そもそもサクヤをどこの馬の骨とも分からん男に渡すつもりなど毛頭ないのだからな。

特に、“望月ヨーヘイ”くんには。

た、確かに彼は、“ＧＳＭＯ（グスモ）”の報告を見る限りでも、努力家で仲間想い、それに先のメイザース学園との交流戦でも素晴らしい活躍をした。それは認めよう。

だが！　そんなこと程度で私がサクヤとの仲を認めるなど、あり得ないのだ！

「しょ、所長！　お、落ち着いてください！」
「む……？」

おっと、怒りのあまり興奮してしまっていたようだな……。

「コホン……とにかく、サクヤの提案に関しては早急に手を打った。彼に関しては、君に一任する」
「分かりました。唯一の成功例である彼を分析し、さらなる精霊使（ガイスト）いを生み出すことができれば、また私達の理想に近づきますからね……」
「うむ」

本当に、今回の一件で彼を手に入れることができたのは僥倖（ぎょうこう）だ。
あとは、ツクヨが戻ってくる前に、精霊使（ガイスト）いで溢（あふ）れる世界にしたいが……さすがにそれは無理だな。
だが、いずれ私とツクヨでそれを実現し、愛するサクヤにその後を引き継いで……。

「所長？」
「ん？　ああいや、何でもない」

ふふ……どうやらツクヨとサクヤとの未来を考えていたら、思わず笑っていたようだ。
まあ、私は今できる精一杯をしようではないか。

私とツクヨの、理想のために。
大切な家族との、未来のために。

「……では高坂くん、あとは任せたぞ」
「はい」

私はそう言い残し、部屋を後にする。

「……ププ」

――笑いを吹き出しそうになっている、高坂くんに気づかないまま。

大切な家族（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

最強クラスの精霊（ガイスト）（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今回は例の人物視点です！

■???視点

「クソッ！　あの野郎、またオレの先回りをしやがって！」

家に帰るなり、オレは部屋の壁を拳で殴った。

『はう……マスター……』

すると［　］が、心配そうにオレを見つめる。

「……まあ、元々アイツの全部を奪ってやることには変わりないんだ。むしろ、アイツにアイテムも何もかも回収させたことで、オレの手間が省けたって考えればいいか」

『はう！　そうなのです！　アイツを倒して、根こそぎ手に入れてやるのです！』

オレの苦し紛れの言葉に、［　］は全力で同意した。

ははは……全く、可愛い道具だよ、お前は。

「んじゃ、手始めにアイツの手足をもぎ取るところから始めてみるか？」

口の端をニイ、と吊り上げてそう呟くと、オレはスマホを取り出して電話をかける。

『……はい、大谷です……』

「そんなのは分かってるよ。それよりオマエにちょっとやってほしいことがあるんだけど」
『っ！？』
そう告げると、スマホ越しに大谷妹が息を飲む音が聞こえた。
「はは、今回はいつもに比べりゃ全然楽勝だから、そんな身構えなくってもいいって」
『ほ、本当……？』
「おう。もちろん、オレへの奉仕とかも特別サービスで免除してやるしさ」
まあ、ソレについては姉のほうにさせるけどな。
『そ、それで、私は何を……？』
「おっと、そうだったな。オマエ、小森のチビと協力して、そうだな……あとでメッセージを送るから、そこに書いてあるものを手に入れてこい」
『……』
ん？　返事をしないな。
「そうかー……つまりお前は、『壊れたお姉ちゃんのペンダント』はもう捨てていいんだな」
『っ！？　やる！　やりますから！』
はは、最初っからそう言えばいいのに。
「んじゃ、よろしくな」

そして、俺は通話終了のボタンをタップした。

『はう！　バカな女なのです！　最初からマスターの指示に従えばいいのです！』

「ホントだよなー、そんなんだから、俺に“キーアイテム”を奪われちまうんだよな！」

そう言って、俺と［　　］は腹を抱えて笑い合う。

「ははははは！　……おっと、サッサとメッセージを送っておかないとな」

俺はメッセージを打ち込み、大谷に送信……ああそうだ、念のために小森にも同じメッセージを送っておこう。

ということで、宛先に小森も追加し、今度こそメッセージを送信した。

「はは、あの三人は分からねーけど、少なくともアイツに関しては姉を何とかすれば大丈夫だろ。となると、厄介なのは残りの二人だよなあ……」

さすがに二人同時に真正面から相手したら……って、別にオレが戦う必要はねーか。

それに、数で押し切ったらあの二人も潰れるだろ。

で、残るアイツはこのオレがキッチリトドメ刺せばいいか。

それに、いくらアイツが予想外の精霊（ガイスト）に進化していたとしても、オレの［　　］には敵うはずがない。

「だって……オレの［　　］は、『ガイスト×レブナント』におい

て最強の幽鬼（レブナント）なんだからな」

そう呟くと、［　　］が微笑みながら寄り添ってきた。

だけど夏休みの終わり頃、エゴサして『攻略サイト』の存在を知った時に、オレは怒りよりも先に驚いたね。

まさかオレがモブですらない存在で、なのにオレは最強の精霊（ガイスト）の幽鬼（レブナント）のマスターだったんだから。

……いや、

あとは、“グラハム塔”領域（エリア）で効率よく周回してレベルをカンストさせ、一対一ならあの［関聖帝君］にだって負ける要素はない。

『はう……ですがマスター、これ以上ヒロインを増やすつもりなのですか……？』

先程の大谷とのやり取りを一部始終見ていた［　　］は、口を尖らせながらプイ、と顔を背けた。

ウーン……なんでオレの幽鬼（レブナント）は、こんなに嫉妬深いんだ？

……まあ、幽鬼（レブナント）なのに手を出したオレが悪いんだけど。

「はは……まあまあ、まずはアイツ等をメチャクチャにしないと、オレとお前のハピエンが遠のいちまうからな。だから、仕方ないんだよ」

『はうはう！？　な、なら仕方ないのです……』

はは、相変わらずチョロいな。アッサリ機嫌直したぞ。

つーか、最弱のクソザコモブのくせに、あんな可愛いヒロインばかり仲間にしてやがるからいけないんだよ。

だけど……やっぱヒロイン全員、既にアイツのお手付きなのかなあ……。

「とにかく、明日から忙しくなるな」

『はう！　大丈夫なのです！　マスターには［　　］がいるのです！　最強なのです！』

「おう！　当然！」

俺の胸に飛び込んできた［　　］を抱き留めると。

『ん……ちゅ、くちゅ、ちゅぷ……』

［　　］の唇に舌を滑り込ませ、絡め合う。

『んん……ぷあ……マスター……』

「オレには……この“賀茂カズマ”にはお前だけが頼りなんだ。だから、頼んだぞ？」

『はう！　もちろんなのです！　この［禍津日神（まがつひのかみ）］に任せるのです！　だから……はん……んちゅ……は……っ……』

この愛しい幽鬼（レブナント）を強く抱きしめ、オレ達は激しく求め合った。

最強クラスの精霊（ガイスト）（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

すいません、チョットだけエッチい感じになりました……。

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ご都合主義な精霊使い（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「クソッ！」

先輩達と別れて家に帰るなり、俺は部屋の壁を思い切り叩いた。

『はう……マスター……』

すると［シン］が、心配そうに俺を見つめる。

「はは、悪い悪い、ちょっと気が立っちまった……」

『はう、［シン］はいいのです。ただ、マスターにもっと身体を大事にしてほしいのです』

そう言うと、［シン］が上目遣いで俺と右手の拳を交互に見た。

あー、全く……相棒にこんな心配させてどうするんだよ……。

「……そうだな、気をつける」

とはいえ、ここにきて俺と同じ『ガイスト×レブナント』の世界を知っている奴が現れるだなんて思いもよらなかった。

確かに、『攻略サイト』なんてモンがネットで見れる環境があるんだから、俺以外に知ってる奴がいてもおかしくないとは思っていたけど、な。

『はう……それで、これからどうするのですか？』

「そうだな……」

［シン］におずおずと尋ねられ、俺は腕組みをして思案する。
仮に賀茂の奴が『攻略サイト』を知っているとして、今のところ俺達に何か仕掛けてきたってことはない。
やっていることといえば、ゲームのヒロインばかりを仲間にしてるくらいだしな。
ただ。
「小森先輩のことを考えると、まともなやり方で仲間にしてるとも思えないけどな」
まあここは先輩経由で“ＧＳＭＯ（グスモ）”の調査をしてくれてるから、おのずと分かりそうではあるけど。
「……まず、賀茂の目的を知ることを最優先にして、その上で仲間にされているヒロイン達が嫌な目に遭わされてるなら、それを助けてやりたい気持ちはある……んだけど……」
そう……俺は、ヒロイン達を助けることに若干躊躇（ちゅうちょ）している。
というのも、こちらから下手に干渉することによって、俺の大切な友達に……先輩に、危害を加えてくるんじゃないか、と。
もちろん、そんなことになったら全力で賀茂を潰すつもりではあるけど、それでも、今後接触を避けることで無事にハピエンを迎えることができるなら、それでもいいんじゃないかとも思っている。
『はう……マスターは優しいから、結局は放っておけないと思うのです。だったら、最初から悩まずに、倒す方向で考えたほうが［シン］はいいと思うのです』
「［シン］……」

［シン］は、そのオニキスの瞳で俺を見つめ、普段の朗らかな笑顔とは違う、凛とした表情でそう告げた。

だけど……はは、さすがに俺のこと、よく理解してやがる……。

「［シン］、おいで」

俺は手招きして［シン］を呼ぶと、その小さな身体を優しく抱きしめる。

「確かに［シン］の言う通りだな。こんなことで悩むなんて俺らしくない」

『はう……』

「だから、俺は賀茂をいずれ排除しようとは思う。だけど、それは今じゃない。まずは賀茂とその仲間について調べて、本当に邪魔になる存在だということが確認できてからだ」

そうだ、何かやらかす前にいきなり先手を打つっていうのもアリだけど、そのせいで賀茂とその仲間がパニックになって、とんでもない事態を引き起こす可能性だってある。

だから……潰すなら確実に、かつ、俺の大切なものが傷つかない、そんなやり方じゃないとな。

『えへへー……マスターの手、あったかくて気持ちいいのです……』

おっと、どうやら無意識のうちに［シン］の頭を撫でていたみたいだ。

「はは、こんなモンでよければ、いくらでもしてやるぞ」

『はう！　だからマスターは大大、大好きなのです！』
「わっと！」

［シン］は、嬉しそうに微笑みながら、俺の首に抱きついて頬を寄せた。

◇

「おはようございます！」

次の日の朝、いつもの待ち合わせ場所である十字路で待ってくれていた先輩に、元気に挨拶する。

「ふふ、おはよう」

先輩はそんな俺を見てニコリ、と微笑むと、俺達は隣に並んで一緒に学園に向かって歩き始めた。

「そうだ望月くん、例の小森チユキの件についてだが……“ＧＳＭＯ（グスモ）”による調査の結果、二学期から賀茂カズマとの頻繁なやり取りが確認できた」
「っ！　……そうですか」

……これで、小森チユキの異変には、賀茂が何かしら関与していることが確実、だな。

「お父……学園長もその報告を受けて不審に思い、昨日の夜から賀茂カズマも調査・監視の対象となった」
「昨日の夜！？　し、仕事が早いですね……」
「ふふ……お父様は気になることがあると、すぐに行動に移すタイ

プだからな」

あー……短絡的に『ユグドラシル計画』を立案したり、大事な娘である先輩を平気で苗床にしたりするところからも、そんな人だとは思いますけどね。もちろん、悪い意味で。

とはいえ、今回に限って言えばありがたい。これで、俺達が先手を打ちやすくなるってことだからな。

「それで……これからどうするのだ……？」

先輩が神妙な面持ちで俺の顔を覗き込む。

『はう！　マスターは昨日の夜、ハッキリと言ったのです！　『賀茂をいずれ排除しようとは思う』って！　そして、『まずは賀茂とその仲間について調べて、本当に邪魔になる存在だということが確認できたら』って！』

「ほう……？」

［シン］の言葉を受け、先輩が興味深そうに俺を見つめた。

というか［シン］め、なんで俺の台詞（セリフ）を奪うんだよ。

「はは……［シン］の言った通りですよ。まずは賀茂のやっていることを見極めて、その上で俺の大切なものに手を出そうとしているなら、賀茂も、そしてその仲間も、真っ先に潰してやろう……そう考えています」

俺は嘘偽りなく、俺の思いを先輩に告げた。

「ふふ……望月くんはブレないな……」

「え？　そ、そうですか……？」

先輩の言葉に、俺は思わずキョトン、としてしまった。
意外だな……てっきり俺が好戦的な台詞（セリフ）を吐いたから、反対のことを言われると思ったのに。

「ああ、そうだとも。君は、いつだって私達のことを第一に考えるじゃないか。私は、それが心から嬉しい……」
「先輩……」

頬を赤らめながら嬉しそうに微笑む先輩。
そんな先輩を見たら、余計に大切に想うに決まってるじゃないですか……。

「ふふ、どうやら学園に着いてしまったようだ」
「ええ、そうですね……っ！？」

話題を変えるように先輩がそう呟き、俺も学園の正面を見て、思わず息を飲んだ。

だって。

「クク……少々待たせたてしまったな、“望月ヨーヘイ”」
「はは……最高のタイミングで来やがって……まるで主人公気取りかよ……！」

現れたのは、あのメイザース学園との戦いを経て心を通わせた、先輩……藤堂サクヤに次ぐ強さを誇る、作られた精霊使い（ガイスト）。

――アレイスター学園の制服を着た、“中条シド”だった。

ご都合主義な精霊使い（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

幕間はこれで終わりとなり、次はとうとう第八章に突入します！
賀茂の正体も明らかになった今、これまでの集大成として直接対決に挑んでいくこととなりますので、どうぞお楽しみに！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

初めて、名前で（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ一年生編ラストとなる第八章の開始です！

初めて、名前で

「クク……少々待たせたてしまったな、“望月ヨーヘイ”」
「はは……最高のタイミングで来やがって……まるで主人公気取りかよ……！」

俺達の目の前に現れたのは、あのメイザース学園との戦いを経て心を通わせた、先輩……藤堂サクヤに次ぐ強さを誇る、作られた精霊（ガイスト）使い。

――アレイスター学園の制服を着た、“中条シド”だった。

「というか、まさかこんなに早く来てくれるなんて思いもよらなかったぞ！」

俺は中条に駆け寄り、その背中をバシン、と叩いた。

「クク……まあ、その辺りは上手くやった」
「そうか……」

中条は曖昧に答えたが、理由を知っている俺は思わず眉根を寄せる。

おそらくコイツは、先輩のお父さんに従属し、かつ、自分の身体を実験台として差し出すことで、あの施設から出ることが認められたんだろう。

『攻略サイト』のキャラ紹介のページにも書いてあったように、人工的に生み出された唯一の精霊（ガイスト）使いとして。

「クク……全く、そんな顔をするな。貴様は、ただ我を利用すればよいのだ」
「……そんな言い方するなよ」
微笑みながらそう告げる中条に、俺は唇を噛む。
そうだ……中条は、俺の頼みに応えるために、こんな自分を犠牲にしてまで来てくれたんだから、俺が負い目を感じるのは当然だ。
「望月くん……か、彼のことについては、その、後で伝えようと思ってはいたんだ……」
先輩が、申し訳なさそうな表情で話しかける。
多分、中条がここにいる意味を含めて全て知っていたからこそ、俺に話すことができなかったんだろう。
この俺を、気遣って。
「はは……大丈夫ですよ、先輩。それに、こんな頼もしい友達が加わったんです。“バベル”領域（エリア）の攻略も含め、全部片づけてしまいましょう！」
俺は中条の胸をドン、と拳で叩いてそう告げた。
「クク！　任せろ！　この我が来たからには、仇なす者はまとめて蹴散らしてくれる！」
はは、来て早々頼もしい奴だな。
「ふ、ふふ……望月くん、君はそうやって、かつての敵でさえも簡単に懐に入れてしまうのだな……」

「あはは、まさか。俺だって選ぶ権利はありますよ」
「ククク……なら、我は貴様に選ばれたということか」
嬉しそうに笑う中条に向かって、俺は力強く頷いた。
「そういや中条は、先輩と同じ学年なんだよな？　ということは、俺の先輩になるのか……」
ウーン……ここまで気安くなったら、今さらコイツのことを“中条先輩”って呼びたくないなあ……。
「ククク、今まで通り呼び捨てで構わん」
「はは、そう言ってくれると助かる」
相変わらず、この中条は妙に器がデカイよなあ……まあ、何も考えてないだけかもしれないけど。
「おっと、早く教室に入らないと遅刻しちまう」
「ククク、そうだな。ではサクヤ殿、行こうではないか！」
「「ハア！？」」
コイツ！　今、先輩のことを下の名前で呼びやがった！
「オ、オイ中条！　いきなり先輩を下の名前で読んだりするなよ！　俺だってまだ呼んでないんだぞ！　オマケに先輩と一緒に行こうとしやがって！」
「その通りだぞ！　だ、大体、私の名前は、まだ望月くんにも呼んでもらってないというのに！」
中条シドの不用意な発言に対し、俺と先輩は憤慨（ふんがい）した……って！？

「あ、せ、先輩！？」
「あうあうあう！？　も、望月くん！？」
い、今の言葉通りだと、せ、先輩は俺に名前で呼んでほしい、のかな……。
お、俺としてはぜひとも名前で呼びたいんだけど……。
「ク、親しみを込めて名前で呼ぶのは当然だろう。それに、今日からサクヤ殿とは同じクラスなのだからな」
「「ハアアアアアアア！？」」
な、なんで！？　どうして先輩と同じクラスになるんだよ！？
「……中条シド、それはお父……学園長からの指示か……？」
「ク……いや、高坂という男がそうした。何でも、サクヤ殿に面倒を見てもらうように、とな」
コノヤロウ、施設を出ることだけじゃなくて、先輩に近づくことまで条件にしたんじゃないだろうな……？
「そうか……だが中条、貴様に二つだけ言っておく。私のことを二度と名前で呼ぶな！　そして、この私の手の届く範囲に近づくな！　分かったな！」
「っ！？　な、何故だ……！」
先輩の言葉に、中条がわなわなと震える。
だけど、俺からすれば手の届く範囲どころか、先輩の目の前に姿を見せないでほしい。

だってコイツ、先輩のことが好きなんだもん。つまり、俺の敵だ。
それはあのメイザース学園との一件の時に呟いたコイツの言葉で把握済みだ。

俺は、先輩絡みに関しては容赦しないのだ。

「とりあえず、本当に遅刻しそうなので行きましょう。そ、その……“サクヤ”さん……」

俺は中条にあえて見せつけるために、勇気を振りしぼって名前で呼んでみた、んだけど……急に不安になり、先輩の様子をチラリ、と窺う。

すると。

「っ！　うん……うん……！」

先輩……サクヤさんが顔を上気させ、その真紅の瞳に涙を湛えていた。

そんな先輩が、俺には誰よりも綺麗に見えて……。

「あ……」

「い、行きましょう……」

先輩の手を握り、スタスタと校舎へと入っていった。

「ク……望月ヨーヘイ……！　やはり貴様は、我の最大のライバルだ……！」

悔しそうに呟く、中条を放ったらかしにして。

初めて、名前で（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

幕間の最後からなだれ込むように第八章が開始しました！

これから、ヨーヘイ達ＶＳ賀茂＋ヒロイン多数との戦いがはじまります！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

敵の解析（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

敵の解析

「ククク……“中条シド”だ。よろしく頼む」

昼休み、俺はみんなに食堂に来てもらい、中条を紹介した。

メイザース学園との一件で既に戦ったことがあるサンドラ、立花、プラーミャ、そして、元々メイザース学園で仲間だった土御門さんは、それほど驚いた様子は見せなかった。

「フフ……まあ、こうなることは薄々分かってましたワ」

「そうネ」

「あはは……まあ、望月くんだからしょうがないよね」

サンドラとプラーミャがクスクスと笑い、立花は苦笑する。

だけど立花、俺だからしょうがないってどういう意味だよ？

「だ、だけどよー……一応、メイザース学園側だったワケじゃん？あとで面倒なことになったりしねーワケ？」

どうやら加隈は、中条が仲間に加わることに乗り気じゃないみたいだな。

「ホ……加隈よ、それはわらわに対する当てつけかえ？」

「い、いや！　そういうワケじゃ！」

土御門さんに冷たい視線を送られ、加隈が慌てて否定した。

「ですが、中条さんが加入したことで、私達の戦力はかなりアップ

しました。なにせ、望月さんとサンドラさんが、二人掛かりでやっと倒したほどの実力者なんですから」

氷室先輩は静かに、ただ事実だけを告げると……あー……サンドラがジト目でメッチャ睨んでる。あの時の無茶な作戦、まだ怒ってるんだな……。

「それで望月くん。これからどうする？」

先輩……サクヤさんが、ジッと俺を見つめる。

サクヤさんが言いたいのは、これからあの賀茂カズマをどうするのか、って意味だろうな。

「そうですね……とりあえずは、昨日見つけた“バベル”領域（エリア）の攻略をしつつ、中条には他の三つの領域（エリア）と“カタコンベ”領域（エリア）を並行して攻略してもらうことにしましょう」

朝もサクヤさんに言ったけど、まずは賀茂の目的や動向を探るのが先決だ。

その上で、アイツをどうするのかを考えないと。

「ふふ……分かった。では、昨日決めたチーム分けで“バベル”領域（エリア）を攻略して、空いている者で中条と共に他の領域（エリア）で各属性反射を取得させるということでよいな？」

最終確認とばかりにサクヤさんが告げると、俺達は全員頷いた。

「じゃあ中条は、お互いを知ってもらう意味でも、それぞれのチームに交互に加わるような形にしよう。ということで、今日のところは俺、サ……先輩、サンドラ、プラーミャのチームな」

「クク、承知した」

俺の提案に、中条が口の端を持ち上げながら同意した。

だけど。

「……まあ、そうだな」

サクヤさんは不機嫌そうにギロリ、と俺を睨んだ後、プイ、と顔を背けてしまった。

あははー……あとでちゃんと理由を説明しておかないと、だな……。

「と、とにかく、話はこれで終わりだから、早くメシ食っちまおうぜ！」

俺はごまかすようにそう言うと、みんな思い思いに食事をした。

そんな中。

「……氷室先輩、ちょっと」

俺は食事をしている氷室先輩を手招きし、食堂の外に連れ出した。

「？　……どうしました？」

「はい……実は、氷室先輩にどうしてもお願いしたいことがあるんです」

そう言うと、俺はポケットから一枚の紙を取り出す。

「……これは？」
「うちの学園にいる生徒から、俺がピックアップしたリストです」
そう……これは、『ガイスト×レブナント』で主人公が現時点において仲間にすることができるヒロインで、かつ、アレイスター学園の生徒や先生に関するリスト。
昨日の夜、『攻略サイト』から拾って書き出しておいたんだ。
「このリストに載っている人達について、［ポリアフ］の【オブザーバトリー】で解析してほしいんです」
「……理由を尋ねても？」
俺の言葉を受け、氷室先輩の視線が鋭いものに変わる。
「ここに載っているのは、今後、俺達に危害を加えそうな奴です。確か【オブザーバトリー】は、敵意がある精霊（ガイスト）なら解析できるスキルですよね？」
これは、氷室先輩の［スノーホワイト］が［ポリアフ］にクラスチェンジした時にハッキリと教えてもらったから間違いないはず。
これなら、敵……つまり、賀茂の奴に与（くみ）しているかどうかが分かる。
「この中には、あの小森さんも含まれていますね……」
そう言うと、氷室先輩が口元を押さえながら考え込んだ。
そして。
「……分かりました。とりあえずは、放課後までにできる限り解析

してみます」
「！　ありがとうございます！」
引き受けてくれた氷室先輩に、俺は深々と頭を下げた。
「ふふ、いいんですよ。だって望月さん、昨日現れた彼……“賀茂カズマ”が敵だと認定したからですよね？」
あー……さすがは氷室先輩、俺の考えなんてお見通し、かあ……。
「はい。今は何かアクションを起こしたってわけじゃないですけど、いざという時に対処できないんじゃ困りますから」
「ええ、そうですね」
氷室先輩が、口の端を吊り上げて暗い笑みを浮かべる。
つまり、氷室先輩が本気になった証拠だ。
「では、よろしくお願いします」
「はい」
そして、俺と氷室先輩は何食わぬ顔で食堂へと戻った。

敵の解析（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷室先輩も！？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷室先輩も！？

昼食を済ませ、昼休みも終わりそうなので俺達は食器を返却口へと返しに行くと。

「……」

……サクヤさんの鋭い視線が、俺の背中にメッチャ刺さってる……。

こ、これは早めに弁明をしたほうがよさそうだな。

俺はそそくさと食器を返却し、続く先輩とすれ違いざま。

「……ちょ、ちょっと次の授業、サボってくれませんか？」

「っ！？」

小さな声で耳打ちすると、俺はすぐに離れて食堂の出口へと向かった。

「？　ヨーヘイ、教室に戻りませんノ？」

「お、おお……悪い、ちょっと寄るところがあるから、先に戻っておいてくれ」

「？」

サンドラは不思議そうに首を傾げたけれど、プラーミャに腕を引っ張られて教室へ戻って行った。

さて……。

「……望月くん」
「……行きましょう、か……」

同じく食堂を出たサクヤさんを連れて、俺は学園の敷地内にある初心者用の領域（エリア）につながる小屋の前へとやって来た。

「それで……私をこんなところに連れてきて、どういうつもりだ？」

サクヤさんはそう言うと、ギロリ、と睨む。
ウーン……全然機嫌が直らない……。

「あ、あははー……ここなら、遠慮する必要ないですから、その……“サクヤ”さん」
「っ！？　……う、うむ！」

サクヤさんの名前を告げた瞬間、その険しかった表情がやわらかいものに変わった。

「そ、その……さすがにみんなのいてる前で、いきなり名前で呼んだりしたら、絶対変に勘繰られますし……」
「あ……う、うむ、確かに……」

ホッ……どうやら分かってくれたみたいだ。

「だ、だから、その……サクヤさんって呼ぶのは、二人っきりの時に……」
「う、うん……」

そう言うとサクヤさんは恥ずかしそうに俯（うつむ）く。

「そ、それで、実は先輩に、一つだけお願いしたいことが、そのー……ありまして……」
「お願い？　も、もちろん、望月くんのお願いなら何でも聞くとも！」
上目遣いでおずおずと尋ねると、すっかり機嫌がよくなったサクヤさんは、ズイ、と身体を乗り出して嬉しそうに承諾してくれた。
「あの……お、俺だけサクヤさん、って呼ぶの、フェアじゃないと思うんです……」
「っ！？　そ、それって……！」
「あ、あははー……できれば俺も、その……“ヨーヘイ”って、呼んでもらえると……」
ううう……ちょ、ちょっと調子に乗り過ぎただろうか……？
俺はチラリ、と先輩の様子を窺うと。
「！　と、当然だとも！　そ、その……“ヨーヘイ”、くん……」
「っ！　は、はい！」
うわあ……モジモジしながら俺の名前を呼ぶ先輩、最高に尊い……！
お願いして正解だった！
「そ、それじゃ、俺の用事は終わりましたから、授業に……っ！？」
「そ、その……今から行っても五時間目の途中だし、だから……」
「あ、そ、そうですね……」
俺とサクヤさんは、五時間目の授業が終わるまでの間、初心者用

の領域（エリア）で二人っきりで過ごした。

もちろん、お互いを下の名前で呼び合いながら。

◇

「さあ……いよいよ、だな……」

放課後、俺達九人は街の外れにある“バベル”領域（エリア）の扉の前に集合していた。

もちろん、これから攻略を開始するために。

「では、当初の予定通り、私とヨ……望月くん、サンドラ、プラーミャに中条を加えたチーム、そして氷室くん、立花くん、土御門くん、加隈くんのチームで攻略を行う。ああ、それと……」

サクヤさんは全員の顔を見回すと、すう、と息を吸った。

「……各自、この“バベル”領域（エリア）では、最大限警戒するんだ。今までのように、敵は幽鬼（レブナント）だけとは限らないのだからな」

サクヤさんの言う通り、この領域（エリア）で気をつけないといけないのは幽鬼（レブナント）だけじゃない。

あの賀茂が“バベル”領域（エリア）への攻略を考えている可能性が高い今、連中が手を出してこないとも限らないんだからな。

「ハア……今回も、望月くんと一緒のチームじゃなかった……」

そう言って、立花があからさまに落ち込んだ表情を見せた。

「はは……ま、まあ、別にこの領域（エリア）の攻略で最後ってわけじゃないんだし、そのうち一緒に領域（エリア）攻略をすることもあるだろ……」
「！　そ、そうだよね！　ようし！　次こそは……！」

立花はフンス、と意気込む。
いや、俺と一緒のチームになることよりも、“バベル”領域（エリア）の攻略に意気込めよ。

「ま、任せろ立花！　今回も、この俺がバッチリサポートすっからさ！」

加隈が立花の前に立ち、ドン、と胸を叩いた。
いや、何のアピールだよ。そもそも立花が意気込んでるのは、次の攻略で俺のチームになることだからな？　残念だけど。

「そうですね……今回の件に関しては、ぜひとも見返りが欲しいところです」
「あ、あはは……」

いつの間にか俺の傍にいた氷室先輩に耳元でささやかれ、俺は思わず愛想笑いをする。
確かに、今回については氷室先輩に頼りっきりだ。

“バベル”領域（エリア）攻略での立花達のチームの引率に加え、賀茂の仲間の可能性があるヒロインの解析までお願いしてるし……。

だけど、氷室先輩が欲しい見返りってなんだろう……。

すると。

「……私のことも“カズラ”と呼んでほしいですね……藤堂さんみたいに……（ボソッ）」

「っ！？　どど、どうしてそれをっ！？」

氷室先輩の言葉に、俺は思わず聞き返した。

い、いや、あの五時間目の時は誰もいなかったことは確認したし、いくら氷室先輩でも分からないがずなのに！？

それとも、ひょ、ひょっとして、［ポリアフ］の解析スキルはそんなことまで分かるのか！？

「ふふ……先程の藤堂さんの発言から推測をしてカマをかけたんですが……どうやら正解だったみたいですねて……」

そう言って、氷室先輩はニタア、と口の端を吊り上げた。

チクショウ！　はめられた！？

「さあ、おっしゃってみてください」

ううう……べ、別に嫌なわけじゃないけど、恥ずかしい……。

「そ、その……カ、カズラ、さん……」

「っ！　こ、これは……想像以上です……！」

一体何が想像以上なのかは分からないけど、氷室先輩は満足したのか、鼻を押さえながら軽い足取りで立花達の元へと行った。

「……このこと、サクヤさんにバレないようにしないと……」

俺は氷室先輩の背中を眺めながら、ポツリ、とそう呟いた。

氷室先輩も！？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バベル領域（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

バベル領域

「ほう……これは壮観だな」

“バベル”領域（エリア）の扉をくぐり、目の前にそびえ立つ塔の外観を眺めながら、中条が呟いた。

確かに、塔が高すぎて頂上が見えない……。

「ネ、ネエ……ひょっとしてこの領域（エリア）、この塔の最上階がゴールですノ……？」

サンドラが不安そうな表情を浮かべ、おずおずと尋ねる。

「ああ……ゴールはこのてっぺんだ」

そう……ここ“バベル”領域（エリア）は、二周目特典の五つの領域（エリア）……いや、『ガイスト×レブナント』に登場する全ての領域（エリア）で最長を誇っており、頂上までの階層の数は、ゆうに三百。そのため、踏破までには数か月はかかるだろうな。

「……まあ、ここで見上げるばかりでは始まらない。攻略を開始しよう」

「「「はい！」」」

「うむ」

先輩の言葉を受け、俺達は塔の中へと入ると。

「思ったより、中は普通なのネ」

拍子抜けしたのか、プラーミャが息を吐いて肩を竦(すく)めた。
確かに中の様子は、一見はレンガ造りの構成になっていて普通な感じがする。
だけど。
「む、来たか……って、な、なんだアレは!?」
「ヒ、ヒドイ……」
「フザケルんじゃないわヨ!」
「ふむ……不快、だな……」
通路の向こうから、一体の幽鬼(レブナント)がやって来たんだけど、その姿にみんなが驚き、怒り、嫌悪した。
当然だ。だって、瞳から血を流して号泣する四人のニンゲンが四つん這(ば)いになりながら、同じく全身をおかしな方向に曲げたニンゲンの塊によってできた車を引いているのだから。
そしてその上には、花びらを全身にまとった金髪のイケメンが、微笑みながら手綱を握っていた。
あの幽鬼(レブナント)の名は、“ヘリオガバルス”。『攻略サイト』内における『嫌いな幽鬼(レブナント)トップテン』でも、七位に君臨している。
『はう……！　許せない、許せないのです！』
「あ、オ、オイ!?」
激高した［シン］が、俺の制止を聞かずにヘリオガバルスへと突っ込んでいった。

「クソッ！　みんな、［シン］の援護を頼みます！」
「っ！　分かった！」

［関聖帝君］達が、［シン］に追随するようにヘリオガバルスへと突撃するが、［シン］が速すぎて距離が開くばかりだ。
［シン］のバカヤロウ……闇雲に突撃しやがって……！

俺もいても立ってもいられず、精霊（ガイスト）達の後を追いかけていく。

『はう！　食らうのです！』

床を蹴って勢いよく飛び上がった［シン］は、ヘリオガバルスの頭上を舞い、呪符を貼り付けようとその手を伸ばした。

その瞬間。

『っ！？　何なのです！？』

ヘリオガバルスが乗っていたニンゲンの塊の車から無数の手が伸びて［シン］へと迫る。
まるで巻き込もうと……自分と同じ境遇に遭わせようとでもするかのように。

「［シン］！　今すぐ離れろおおおおおおおおッッッ！」
『っ！？　【神行法・瞬】！』

俺の声で我に返った［シン］は、一瞬のうちに移動してヘリオガバルスから距離を空けた。

『何なのです！？　［シン］は、この人達を助けようと……解放し

てあげようとしただけなのに！？』

「バカ！　コイツ等は、全部まとめて一体の幽鬼（レブナント）だ！」

立ち尽くしながら目を見開く［シン］に追いつき、俺はその小さな身体を守るように抱きしめる。

そう……見た目こそはまるで幽鬼（レブナント）がニンゲンを虐げているようにも見えるけど、そもそもこんな領域（エリア）にニンゲンが囚われているわけがないだから、気づけよ。

ただ、少なくともこの幽鬼（レブナント）をデザインした奴は、趣味が悪いことだけは確かだけどな。

「みんな！　このニンゲン達から先に攻撃するんだ！」

「クク……承知した！　【ツァーンラート】」

中条の［デウス・エクス・マキナ］が、全身の歯車を飛ばすと、ニンゲン達はその全身をズタズタに引き裂かれた。

……その光景は、見ているコッチとしては気分のいいモンじゃない。

「……せめて、この私が苦痛を与えることなく倒してやろう」

サクヤさんは静かにそう告げると、一気に詰め寄った［関聖帝君］の青龍偃月刀（えんげつ）がうなりを上げる。

――斬ッッッ！

横薙ぎに払われた巨大な刃は、塊となり果てていた残る全てのニンゲンを両断した。

「オマエハ……オマエだけハアアアアアアアアッッッ！」

「燃やし尽くしてやルッッッ！」

苦虫を噛み潰した表情のヘリオガバルスの頭上から、稲妻をまとった巨大なメイスと炎をまとったハルバートが振り下ろされる。

――ドオオオオオオオオオンッッッ！

激しい轟音と共に、ヘリオガバルスの全身の骨を砕かれ、焦げ付き、縦に潰された。

その姿はまるで、踏みつぶされた空き缶のようだった。

「ハアッ……ハアッ……最悪の気分ですワ……」

幽子とマテリアルに姿を変えたヘリオガバルスを一瞥しながら、サンドラは吐き捨てるように呟く。

「……だけど、コイツはただの幽鬼（レブナント）で、領域（エリア）ボスでも何でもないんだ。だから……俺達はコレに慣れるしかないんだ……」

そう……こんな幽鬼（レブナント）が、最上階までにわんさかいやがる。

俺達にできることは、ただ割り切るだけだ。

このゲームの制作者からすれば、リアル描写を多くしてウケをよくしたつもりなんだろうけど、俺達にはここが現実（リアル）なんだ。

本当に、この世界はクソゲーだよ。

『はう……』

そんな俺の思いに気づいたのか、腕の中にいる［シン］が、キュ、

と俺の制服を握りしめた。

バベル領域（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

口直し？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

口直し？

――斬ッッッ！

「……今日はここまでにしよう」

“バベル”領域（エリア）の第六階層。

現れた幽鬼（レブナント）、“ルキウス・アルクィニウス”を一刀の下に斬り伏せると、先輩が眉根を寄せながら告げた。

この幽鬼（レブナント）も、一目でニンゲンの皮だと分かるようなコスチュームを身にまとい、血まみれのニンゲンに棺桶を引きずらせながら、その上で仁王立ちするといった出で立ちだった。

「……氷室先輩達のほうは大丈夫かしラ……」

サンドラが心配そうな表情を浮かべ、そう呟く。

「フン……マア、ユーイチ以外は大丈夫……と言いたいところだけド……」

さすがのプラーミャも、鼻を鳴らすがいつもの威勢はなかった。

「ふむ……ここが趣味の悪い領域（エリア）であることは分かった。その上で」

中条が顎をさすりながら、俺を見やる。

「この領域（エリア）は、本当に攻略に値するようなところなのか？」

……まあ、初めて俺達と領域攻略するコイツからすれば、そんな疑問が湧くのは仕方ない、か。

「うむ……これまでに攻略してきた三つの領域もそうだが、おそらくこの領域においても、何かしらの属性反射スキルが手に入るものとみている」

「ほう……属性反射スキル、とな」

俺に代わり、サクヤさんが中条に説明すると、興味が湧いたのか、中条の声が僅かに弾んだ。

「そうだ。ちなみに、既に攻略した三つの領域では、【火属性反射】、【水属性反射】、【氷属性反射】、【闇属性反射】を手に入れた」

「クク……その四つの属性反射スキルだけでも破格だというのに、まださらなる属性反射スキルを手に入れようというのか」

サクヤさんの話を受け、中条が嬉しそうに笑う。

そう……この“バベル”領域では、クリア報酬として【聖属性反射】と【邪属性反射】を手に入れることができる。

さらには初回クリア特典として、相手のスキル攻撃を一回だけ封じることができる“ギュゲスの指輪”と、たった一度だけ装着者が死に瀕した時に身代わりとなって全回復させる“ハルモニアのネックレス”が手に入る。

本当は、“バベル”領域については半年くらいかけてゆっくり攻略しようと思っていたが、賀茂も攻略しようと考えているなら話は別だ。

あの“ハルモニアのネックレス”だけは、絶対にアイツには……いや、誰にも取られるわけにはいかない。

「とにかく、時間はかかるかもしれないけど、俺達はこの“バベル”領域（エリア）を攻略しよう」

その言葉にみんなが頷いて賛同の意を示すと、俺達は“バベル”領域（エリア）を出た。

◇

「食らうのですワ！　【裁きの鉄槌】！」

“バベル”領域（エリア）を出て解散すると、いつものように俺、サクヤさん、サンドラの三人で“ぱらいそ”領域（エリア）に来ていた。

で、俺達は今まさに七十二の幽鬼（レブナント）の一体、“パイモン”と交戦中である。

『はう！　［シン］の鬱憤（うっぷん）を、オマエ達で晴らすのです！　【裂】！　【凍】！』

何枚も貼り付けた呪符を一斉に発動させると、パイモンの凍って脆（もろ）くなった全身をズタズタに斬り裂く。

「トドメだッッッ！」

――斬ッッッ！

最後は［関聖帝君］の青龍偃月刀で一刀両断にすると、パイモン

はようやく幽子とマテリアルへと変わった。

「ふう……気持ち悪いことには変わりないが、それでも、“ババベル”領域（エリア）の幽鬼（レブナント）に比べればましだな」

「エエ……」

二人が、マテリアルを眺めながら眉根を寄せた。

だけど、“ババベル”領域（エリア）の幽鬼（レブナント）の平均レベルが六十五なのに対し、七十二の幽鬼（レブナント）は八十五。さらにはヒロイン・仲間キャラの持つ特殊スキルの一つを使うことができるんだ。

ハッキリ言って、難易度はコッチのほうが断然上なのに、俺達に与える印象はまるで違うな。

「それにしてモ……あの“ババベル”領域（エリア）の幽鬼（レブナント）を思い出すだけで、虫唾が走りますわネ……」

「うむ……できれば、少しでも気分転換をしたいところだが、な……」

『はう……［シン］も心がつらいのです……』

そう言うと、三人が何かを期待するような瞳でコッチを見る。

あー……ハイハイ、分かりましたよ……。

「あはは……じゃあここを出たら、気分転換にルフランにでも行きましょうか」

「！　う、うむ！　ちょうど相談したいこともあるしな！」

「エエ！　そうですワ！　ワタクシも相談しないといけないことがあるんですノ！」

『はうはうはう！　アイスなのです！　食べた上にお持ち帰りもするのです！』

「は、はは……」

俺の提案を受け、三人が、ぱあ、と満面の笑顔を見せる。
シ、［シン］はともかく、二人の相談したいことってなんだ？
チョットだけ嫌な予感がしつつ、俺は指で頬を掻(か)きながら苦笑した。

口直し？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

精霊の口づけ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

精霊の口づけ

「ふふ！　たくさん食べるぞ！」

ルフランへと向かう途中、サクヤさんが嬉しそうに宣言する。

はは、俺としてもサクヤさんが美味しそうに食べる姿を眺めるのは望むところ……いや、むしろご褒美ですよ。

「フフ……モチロン、このワタクシも今日ばかりは食べますわヨ！」

「お！　いつも少食のサンドラが珍しいな！」

「エエ！　ストレス発散には、甘いものが一番なんですノ！」

そうかー、女の子はそうだよなー。

『はうはう！　当然［シン］もたくさん食べるのです！』

「［シン］はなー、いつも勝手に食べてるよなー」

『はう！？　そそ、そんなことないのです！？　普段は控えめなのです！？』

俺がジト目で睨むと、［シン］は焦った表情で否定しつつ、サッと目を逸らした。

というか、俺の財布の中身がお前の食いっぷりのせいで、いつもあっという間に飛んでいくんだけど。

とはいえ。

「はは……今日は［シン］も頑張ったから、たくさん食べていいぞ」

『はう！　やっぱりマスターは優しいのです！　大好きなのです！』

「うおっ！？」

満面の笑みを浮かべた［シン］が飛びついてきて、俺は思わずよろめいてしまった。

『えへへー、そんな大好きなマスターに、お礼のしるしなのです』

「ん？　お礼のしるし、って何……っ！？」

――ちゅ。

なんと［シン］は、俺の頬にキスをした！？

と、といってもまあ、娘がお父さんにするような、愛情表現みたいなモンだろうけど。

だけど。

「なななななななな！？」

「アアアアアアアア！？」

サクヤさんとサンドラは、真っ青な顔をしながら大声で叫んだ。

イヤイヤ二人共……子どもの、しかも精霊（ガイスト）のしたことなんだから、これくらいでそんなに驚かなくても……。

「シシシ、［シン］！　いくらヨ……望月くんの精霊（ガイスト）だからとはいえ、もっとわきまえるべきではないのか！？」

「そそ、そうですわヨ！　それに、ヨーヘイもヨーヘイですワ！　こういうことは、ちゃんと教えておかないといけませんのヨ！」

「えええー……」

［シン］ばかりか、俺にまで飛び火してきた……。

『えへへー、それなら藤姉さまもアレク姉さまも、同じようにすればいいのです』

そう言うと［シン］は、にぱー、と笑いながらコテン、と首を傾げた。

でも、一見無邪気なように見えるその姿が、今日に限っては何故か挑発的に見えたのは気のせいだろうか……。

「そそ、そんなこと！　わわ、私がヨ……望月くんにそんなことをするなんて……するなんて……する……」

「なな、何言ってますノ！　ワタクシがヨーヘイの頬にキス……する、んですの……？」

すると二人は、とろん、と熱を帯びた瞳で俺を見つめる。

イイイ、イヤ、二人共何考えてるの！？　［シン］と違って二人がしたら、意味が変わっちまうからな！？

「と、とにかく！　早く行きますよ！」

「あ……」

「ア……」

二人が一瞬残念そうな表情を浮かべたけど、俺はあえてそれに気づかないフリをして、スタスタと先に進む。

『んふふー……［シン］の勝ち、なのです……（ボソッ）』

「［シン］、何か言ったか？」

『はう！　なんにも言ってないのです！』

？　［シン］の奴、何か呟いたような気がしたんだけどなあ……。

俺は首を傾げつつも、とりあえず［シン］を抱えたまままルフランを目指した。

◇

『んふふー！　ウマウマなのです！　どんどん持ってこいなのです！』

既にテーブルの上にはジェラートが五つもあるってのに、まだ注文するのかよ……。

「ふふ！　このカボチャのモンブランの濃厚な甘さときたらもう！」
「ヤッパリ、このサワークリームタップリのスメタンニクこそ至高ですワ！」

ウンウン、二人共美味しそうに食べてなにより。
さて……それじゃ俺も、ガトーショコラでも食べ……「じー」……サクヤさんがメッチャ見てる。
食べたいんですね？　分かります。

俺はス、とガトーショコラを皿ごと差し出す。

「むむ、その……いいのか？」
「……（コクリ）」

おずおずと尋ねる先輩に、無言で頷いた。

「う、うむ！　では……！」

そして今日も、サクヤさんは遠慮なくガトーショコラをフォークで削りに削ると、そのまま口へと運ぶ。

「！　ふふ……美味しいな、ヨーヘイくん！」

うん、喜んでくれてなにより……って！？

「……ヘエ、先輩はヨーヘイのこと、下の名前で呼ぶんですのネ……？」

サンドラがとてつもなく低い声でそう言うと、ギロリ、と俺を睨みつけた！？　というか俺かよ！？

「あうあうあう！？　そそ、その、だな……これには深いわけが……」

答えに困ったサクヤさんが、縋るような瞳で俺に助けを求めてくる！？

いや、俺じゃムリですよ！？

「ヨーヘイ、どういうこト？」

「うえ！？　い、いや、そのー……」

さて、どう答えようか。

ありのまま『俺が先輩に頼んで下の名前で呼んでもらうことにした』なんて言ったら、この楽しかった空間が地獄と化すのは必然だよなあ……。

「じ、実は、中条の奴がサ……先輩のことを下の名前で呼んで馴れ馴れしくするモンだから、先輩は虫よけの意味でそう言ったんだよ

……」

ただし、実際に見かねて下の名前で言ったのは、先輩じゃなくて俺だけどな。

「フウン……なんだか、悔しいですワ……」

口を尖らせ、サンドラが俯く。

「じゃ、じゃあサンドラも俺のこと“ヨーヘイ”……って、これじゃいつもと変わらないな……」

そういえば、サンドラに関してはお互いにファーストネームで、しかも俺に至っては愛称の“サンドラ”で呼んでるし。

うん、これ以上の親しい呼び方はないな。

すると。

「むううううううう！　そ、それはズルいではないか！　わ、私なんて、やっと“ヨーヘイ”くんに“サクヤ”さんと呼んでもらえるようになったのに！」

「あああああああ！？」

サクヤさん！？　なんで傷口を広げるような真似を！？

「ヘエー……ヨーヘイは、先輩をサクヤさんって呼ぶんですノ……？」

「いいい、いや、さすがに片方だけ下の名前で呼ぶのはフェアじゃないというか、なんとか……」

く、くそう！　この状況、なんとかならねーのか！
俺は藁（わら）にもすがる思いで［シン］を見やると。

『プークスクス！　マスターが修羅場ってるのです！』

チクショウ！　マスターの生命の危機だってのに笑いやがって！

結局、頼りにならない俺の精霊（ガイスト）を尻目に、俺はサンドラとサクヤさんから責められ続けた。

精霊の口づけ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

二人の相談（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

二人の相談

「そ、そういえば二人の相談事っていうのは、何なんです！？」

俺はこの修羅場な状況をなんとかしようと、そんなことを尋ねて話題を逸らそうと試みる。

「大体……うん？　相談……」

「ア、そういえバ……」

どうやら二人共そのことを失念していたらしく、思考がそちらのほうへと切り替わったみたいだ。よ、よかった……。

「そ、その……私の相談というのは、ホ、ホラ！　もうすぐクリスマスだろう？　今年はせっかくだから、うちの家でパーティーでもしてはどうかと、思ってな……」

そうか！　期末テストも終わったし、もうすぐ冬休みだもんな！

「いいですね！　じゃあみんなで、盛大にクリスマスパーティーをしましょう！」

「う、うむ！　ヨーヘイくんならそう言ってくれると思ったよ！」

俺が二つ返事でその話に乗ると、サクヤさんが嬉しそうにしながら身を乗り出した。

「フフ……ルーシでは十二月三十一日がクリスマスみたいなものですけド、たまにはポピュラーなクリスマスもいいですわネ」

「へえー、ルーシじゃ十二月二十四日じゃないんだな」
「エエ。元々は一月七日なんですけド、新年のお祝いとクリスマスを一緒にお祝いしてしまいますのヨ」
そう言うと、サンドラがクスリ、と微笑む。
「そっかー……じゃあサンドラは、コッチでクリスマスをしてから実家でもクリスマスするんだなー」
「ア……実は、そのことで相談ガ……」
え？　サンドラの相談も、サクヤさんと同じでクリスマスの話なの？
「……ワタクシ、冬休みは東方国で過ごそうと思ってますノ……」
「そうなの？」
いや、意外だな……俺はてっきり、冬休みはルーシに帰省するもんだと思ってたけど……。
「ふむ……となると、サンドラの相談の内容とは？」
「ソ、ソノ……プラーミャは多分、冬休みはルーシで過ごすと思いますシ、そそ、そうなると、ワタクシは新年を一人っきりで過ごすことになっテ……」
ああ……そういうことか……。
「よし！　だったら、年末年始も一緒に遊ぼうぜ！　というか、うちの家のおせち料理をサンドラに食わせてやるよ！」
「ッ！　ほ、本当ですノ！」
「おう！」

そう言うと、ぱああ、と笑顔を見せるサンドラに向けてサムズアップした。

まあ、おせち料理なんて毎年食いきれないほどだし、少食のサンドラが一人増えたところでなんら問題は……「むむむむ！　だ、だったら私も、今年のお正月はヨーヘイくんの家で過ごすぞ！」……って、サクヤさん！？

「い、いや、そりゃ俺としてはサクヤさんとも一緒に正月を過ごせると嬉しいですけど……」

俺はフンス、と鼻息荒く気合いを入れているサクヤさんの顔を覗き込むと。

「だ、大丈夫だ！　お正月は毎年、私とカナエさんの二人で過ごしているからな！」

何故か自信満々にそう告げるサクヤさん。

だけど……そんなのって、悲しすぎるじゃないですか……。

俺はすう、と息を吸って二人を見やる。

「……分かりました。というか、サクヤさんもサンドラも、今年の正月は俺の家で過ごす！　これは決定事項だからな！　拒否は認めない！」

「っ！　わ、分かったとも！」

「エエ！　きょ、強制ですものネ！」

俺の言葉に、二人が満面の笑みで応えた。

『はうはうはう！　なんだか楽しそうなのです！　［シン］も全力で楽しむのです！』
「はは！　当然！　［シン］にも特別なアイスを用意しといてやるからな！」
『わあい！　なのです！』
はは……こうなりゃ、今度のクリスマスも正月も、全力で楽しまないとな！

俺は、喜ぶ三人の表情を眺めながら、口元をゆるっゆるにしていた。

◇

「くあ……！」

次の日の朝。
俺はベッドから出ると、カーテンを開けてあくびをした。

『すぴー……すぴー……』
「はは……相変わらず、気持ちよさそうに寝やがって」

ベッドの上で幸せそうに寝息を立てる［シン］を見て苦笑する。
とはいえ、起こしてやるつもりはさらさらない。いい加減、ちゃんと自分で起きる習慣を身につけさせないと……って、俺は［シン］のオカンかよ……。

軽く溜息を吐いた俺は、制服に着替えてリビングに降りると。

「あらあら、ヨーヘイおはよう」

「おはよー」

キッチンに立つ母さんと挨拶を交わし、定位置に座る。

「ほほう、今日は昨日のカレーか」

まあ、カレーをした次の日の定番だよな。

それに、カレーに関しては二日目が美味い。これも常識だ。

「いただきます」

俺は手を合わせてからスプーンを取り、勢いよく口の中へかき込む。

うむ！　やっぱり二日目のカレーは上手い！

「あらあら、そんなに慌てて食べたら喉を詰めるわよ？」

「モグモグ……大丈夫だって！」

俺は根拠のないサムズアップをすると、一気に平らげた。

「ごちそうさま！」

「うふふ、昨日より美味しそうに食べたわね」

「そりゃあ、二日目のカレーは別格だからな！」

うむうむ、このテンプレだけは絶対に譲れ……『はうはうはうはう！　寝坊なのです！　遅刻なのです！』……ああ、朝のコレもテンプレだよなあ……。

『はうはう！　お母様、おはようございますなのです！』

「あらあら、［シン］ちゃんおはよう」

［シン］は敬礼ポーズで挨拶をすると、母さんが微笑みながら挨拶を返した。

『そして……はうはうはうはう！　どうして起こしてくれないのですか！　そのせいで、［シン］がだらしないみたいなのです！　イメージダウン必至なのです！』

「いや、だらしないのは間違いないだろ。というか、スマホのアラームがあんなに鳴ってるのに、よくそのまま寝られるよな」

猛抗議しながらポカポカと叩く［シン］を、俺はジト目で見やる。

『はううう！　ヒドイのです！　ヒドイのです！』

「ハイハイ、あんまり時間ないから早く支度しろよ」

それだけ言い残すと、俺は洗面所へと向かう。

歯を磨き、顔を洗って……と。

「よっし！」

気合いを入れるため、俺はパシン、と両頬を叩く。

「おーい［シン］、そろそろ行くぞー」

『はうはう！　今行くのです！』

［シン］はバタバタとリビングから出てくると、今度は洗面所へ向かった。

そして。

『はう！　お待たせなのです！』
「おう、んじゃ……」
『「行ってきます！」』
「うふふ……いってらっしゃい」

母さんに見送られ、俺と［シン］は家を出た。

……今日は、サクヤさんからは“ＧＳＭＯ（グスモ）”の調査の状況を、氷室先輩からはヒロイン達の解析結果を、それぞれ報告してくれることになっている。

その結果……賀茂を無視するのか、それとも全力で潰すのかが決まる。

「賀茂……！」

俺は、手のひらを拳でパシン、と叩いた。

二人の相談（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

カズラさん（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「……そうですか」

いつもの十字路でサクヤさんと合流し、“ＧＳＭＯ（グスモ）”の調査結果を聞いた俺は俯（うつむ）く。

薄々分かっていたこととはいえ、やはり賀茂の奴は小森先輩以外のヒロインについても色々とやり取りをしていたみたいで、その数は学園の内外合わせて十四人。

というか、そんなにヒロインばかりを仲間にしてどうすんだよ。

しかも、その中にはあの“伊藤アスカ”が含まれていたし……。

「……つまり、それだけの人数が賀茂と何らかの関与があるってことかあ……」

「ああ……その上で、今日は“ＧＳＭＯ（グスモ）”が賀茂と接触した者全員に聞き取りを行う手筈になっている」

「聞き取り、ねえ……」

多分、“ＧＳＭＯ（グスモ）”が聞き取りを行ったところで、ヒロイン達はまともに話してはくれないだろう。

そんな簡単に話せるのなら、最初からアクションを起こしていたはずだから。

「ですが、“ＧＳＭＯ（グスモ）”が接触することで、変に賀茂の奴に勘繰られたりすることはないんですか？」

「ああ、その点については抜かりない。というのも、接触するのは

該当者の友人達だからな」
「へ……？」

サクヤさんの説明に、俺は思わず気の抜けた返事をした。

「ふふ……“ＧＳＭＯ（グスモ）”の職員も、一流の精霊使い（ガイスト）なのだぞ？　しかも、その中には特殊なスキルを持つ者もいる。例えば……【擬態】、とかな」
「あ……！」

サクヤさんの言葉に、俺はハッ、となる。
確かに“ＧＳＭＯ（グスモ）”は、その組織の特殊性から潜入捜査などもするはず。であれば、変装スキルなどを持っている職員がいてもおかしくない。

「それで……どうする？」

サクヤさんが俺の顔を覗き込みながら尋ねる。

「……ちょっと別件で調べていることもあるので、そちらの情報と合わせてってことになりますけど、多分、賀茂を潰すことになるかと」

いや、多分じゃなくて絶対、だな。
氷室先輩の解析結果を聞いてからとはいえ、ヒロインだけを……それも十四人もかかわりがあるなんてあり得ない。
絶対に、何か弱みを握られ……って。

「あ、そういえばサクヤさん。あの伊藤アスカ元先生なんですけど、クラス代表選考会の後、例の施設に入っていたりします？」

「む？　ああ……そういえば、彼女は“ＧＳＭＯ（グスモ）”に連行されて施設に入ったきりだったな」
「そうですか……」
……なら、他のヒロインは何も言わないかもだけど、伊藤アスカなら話してくれるかもしれないな。
「サクヤさん、あの施設って、仮に強力な精霊使い（ガイスト）が襲撃したとして、制圧できたりしますか？」
「何を言い出すかと思えば……あの施設には何人もの“ＧＳＭＯ（グスモ）”の職員がいるばかりか、対精霊使い（ガイスト）のセキュリティが何重にも施されている。中条のように特別な精霊使い（ガイスト）でもない限り、そんなことは不可能だ」
そう説明すると、サクヤさんが肩を竦めた。
だけど、これは伊藤アスカと交渉する上で、大きな交渉材料になりそうだ。
「よっし！」
俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩く。
「サクヤさん。今日の放課後、俺達のチームは予定変更です。施設に収容されている伊藤アスカに会いに行きましょう」
「分かった。なら私は、お父……学園長に面会の申請と、カナエさんに連絡して車を手配しておこう」
「ありがとうございます」
さて……伊藤アスカは、何を語ってくれるかな……。

◇

昼休みになり、俺と氷室先輩はみんなを先に食堂に行かせ、廊下の陰で話をしていた。

もちろん、昨日お願いしたヒロインの解析結果についての報告を受けるために。

「……ということで、これが［ポリアフ］の解析に引っ掛かった人達です」

「はは……ものの見事に、“GSMO”の調査結果と一致してやがる……」

氷室先輩の［ポリアフ］の解析に引っ掛かったヒロインの数は九人。

“GSMO”の調査結果で判明した、賀茂と接触のあったヒロイン十四人のうち、伊藤アスカを除くアレイスター学園の関係者も九人だ。

「……これだけの数の生徒を引き入れているなんて、少々厄介ですね……」

「ええ……サ……先輩の話では、今日中に“GSMO”が賀茂と接触した生徒達全員に聞き取りを行うとのことです」

「ですが、それってまずくないでしょうか……」

俺の話を聞いた氷室先輩は、口元を押さえながらポツリ、と告げた。

「というと？」

「よく考えてみてください。“GSMO”から一斉にその生徒達に

接触したとなると、例の賀茂カズマが変に行動に移す危険がある、ということです」

「ああ、それについては、変装や擬態ができるスキルを持つ“GS（グ）MO（スモ）”職員が、生徒の友人などに扮して接触するらしいです」

「なるほど……」

俺の説明に、氷室先輩が納得するように頷いた。

「その上で、今日の放課後に伊藤アスカ元先生と面談しようと思うんですが……氷室先ぱ……「“カズラ”です」……カズラさんも、一緒に行きませんか？」

くそう、キッチリ名前呼びを強要してくる。

「そうですね……ですが、私もご一緒してもよろしいのですか？」

ん？　名前呼びは強要するのに、同行に関しては遠慮がちって何か変だな……。

「ええと……どうしてですか？」

「事情を知る者が最低でも一人、賀茂カズマの近くにいたほうがいいかと。何かあった場合、すぐに対処することもできますし、場合によっては……」

すると、氷室先輩が俺のすぐ傍に寄って耳打ちする……って！？

「カ、カズラさん！？」

「ふふ……大丈夫、ですよ？」

ス、と離れると、氷室先輩がニタア、と嗤った。

「……絶対に、無茶しないでくださいね？　カズラさんだって、俺の大切な人なんですから……」

「はい……その言葉だけで充分です」

氷室先輩……カズラさんは、キュ、と胸の前で手を握った。

カズラさん（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

元先生との面会へ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

元先生との面会へ

「えー！　望月くん、今日は行かないの！？」

放課後になり、“バベル”領域（エリア）へ行こうと誘ってきた立花に断りを入れると、立花は驚きの声を上げた。

「はは、悪いな。ちょっと今日は、別件で用事があるんだ」

「そんなあ……で、でも、今日一日でボク達のチームの攻略が進み過ぎたら、望月くんのチームと差がついちゃうよ？　それでもいいの？」

どうやら立花は、俺を煽（あお）ることで来させようとしてるみたいだけど……というか、子どもみたいな奴だなあ……。

「まあ、今回は立花達に花を持たせることにするよ。それより今日は、本当なら中条は立花達と一緒に攻略する予定なんだけど、コッチの用事に付き合ってもらわないといけないから、悪いけど借りてくぞ」

「そ、それはいいけど……」

あからさまに落ち込んだ様子の立花は、口を尖らせて俯（うつむ）いてしまった。

「はは……今度、この埋め合わせはするから」

「ホント？　絶対だよ？」

「おう！」

窺(うかが)うような視線で尋ねる立花に、俺は胸をドン、と叩いた。

「モウ！　アオイもあんまりヨーヘイを困らせないノ！」

「そ、そう言うけどさあ……」

プラーミャにたしなめられ、思わずシュン、としてしまう立花。

さすがは同じチームで行動している期間が長いだけあって、あのワガママな立花も言うことを聞くんだなあ……って。

「それじゃ、俺達は行くから」

「望月くん！　絶対だからね！　約束だよ！」

念を押してくる立花に苦笑しつつ、俺はサンドラ、プラーミャと一緒に教室を出て校門へと向かう。

「ふふ……三人とも待っていたぞ」

校門には既に二人がいて、サクヤさんが俺達を見るなりニコリ、と微笑んだ。

「クク……しかし望月ヨーヘイ、別チームの予定だった我まで駆り出して向かうところとは、一体どこなのだ？」

「あー、今日は益田市の郊外にある精霊(ガイスト)使いの更生施設に向かう」

「「「更生施設？」」」

俺の説明に、中条だけじゃなくサンドラ、プラーミャも声を上げた。

「まあまあみんな、話は後だ。とりあえず、車に乗りたまえ」

そう言うと、サクヤさんは校門前に横付けされている黒色のワゴン車を指差す。
今日は人数が多いこともあって、さすがにいつもの高級外車ではないんだなあ。
ということで、俺達は車へと乗りこんだ。
「では、まいります」
運転手のカナエさんがそう告げると、車は発進し、施設を目指す。
「そ、それデ、更生施設に行ってどうするんですノ？」
「ああ、ちょっと会って話を聞きたい相手がいるんでな」
そう……施設に収容されている伊藤アスカに、賀茂について話を聞かないといけない。
よくよく考えると、あのクラス代表選考会の時も伊藤アスカの様子はおかしかった。
元々、俺のことをよく思っていなかったけど、先生や大勢の生徒達がいる中、あんな屁理屈だらけのジャッジをしたり、選考会終了後に俺を襲撃したり……。
……あれがもし、賀茂の指示でしたことだったら。
「クク……だが、話を聞くだけなら、わざわざ我が同行する必要はないように思うが？」
「ああ、中条に関しては、今回の施設での面談がどうこうってわけじゃないんだ」
「ほう……というと？」

「単に、お前を知られたくないだけなんだよ」

今回の件、俺は賀茂……いや、賀茂と大勢のヒロイン達と戦うことになると考えている。

その時、少しでも俺達にアドバンテージがあるように、中条には切り札になってもらうつもりだからな。

そうなると、できる限り賀茂に中条のことを知られたくない。

それに……おそらくは、今日にも……。

「クク……貴様のことだ。それも誰かのため、というやつなのだろう？」

「はは、どうだろうな」

くつくつと笑う中条に、俺はおどけてみせる。

というか、そんな恥ずかしいことを肯定するのはどうもなあ……。

「アラ？　よく分かってるじゃなイ」

「本当ですわネ」

なんだよ二人共、さも当然とばかりにそんなこと言いやがって。

「ふふ……さあ、着いたぞ」

そんな俺達を柔らかい表情で見つめていたサクヤさんが静かに告げると、山のふもとに立つ白色の建物……伊藤アスカのいる更生施設が見えた。

「あそこに、あの時私（ヤー）の戦いを汚した教師がいるのネ……！」

プラーミャがギリ、と歯噛みしながら、建物を睨みつける。
確かにあのジャッジは、プラーミャの誇りを傷つける行為だったから……。

「だけど、俺はあの時のプラーミャとの戦いをしっかりと刻んであるから」

そう言うと、俺は自分の胸を手で押さえた。

「……ソウ」

プラーミャは僅(わず)かに俺を見やった後、プイ、と顔を逸らしてしまった。

「フフ……プラーミャったら照れてますワ」
「ッ！　サ、サンドラ！　そんなことないかラ！」
「本当ニ？　その割には、口元が思いっきり緩んでますわヨ？」
「～～～～～～～～！」

はは……どうやらそういうことらしい。

「では皆様、お降りください」

車が施設の駐車場に止まり、俺達は車を下りた。

「お嬢様、私はこちらでお待ちしております」
「ああ……みんな、では行こう」

施設の職員、そしてサクヤさんの後に続き、施設の廊下を歩く。

「こちらが面会室になります。どうぞ」

職員に通され、俺達は面会室へと入ると。

「な、なによ……っ！？　い、今さら私に何の用！？」

俺達を見た途端、怯える伊藤アスカの姿があった。

元先生との面会へ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

伊藤アスカ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

伊藤アスカ

「な、なによ……っ！？　い、今さら私に何の用！？」

面会室に入ると、俺達を見た途端、怯える伊藤アスカがいた。

というか施設に入ってる以上、俺達がどうこうできることなんてないことくらい、分かりそうなモンだけどな……。

「ふむ……この反応を見るに、どうやら“ＧＳＭＯ（グスモ）はまだこの女に接触はしていないようだな」

サクヤさんはそう言うと、ジロリ、と伊藤アスカを一瞥（いちべつ）した。

だけど、サクヤさんの言う通りなら、逆に話が早いかも。

「ええと……あえて先生と呼ばせてもらいますよ。俺達、先生に聞きたいことがあってここに来たんですよ」

「きき、聞きたいこと！？　わ、私には話すことなんてないから！帰って！」

見るからに怯えた様子で、俺達から遠ざかろうとする伊藤アスカ。

「ハア……別に俺達は先生に何かしようなんて考えてませんよ。むしろ俺達は、先生に協力できるかもしれませんし」

「ど……どういう意味……？」

俺の言葉を受け、伊藤アスカは少しだけ興味を持ち始めたみたいで、その身体が少し前に出てきた。

「先生……単刀直入に言います。ひょっとして、“賀茂カズマ”の奴に何か弱みでも握られていたりしませんか？」

「っ！？」

そう告げた途端、伊藤アスカの表情が引きつる。

だけどこの反応を見る限り、間違いなさそうだな……。

「先生……俺達は今、賀茂と一緒にいる生徒達について調べてるんです。先生と同じように、賀茂に弱みを握られて、嫌な目に遭わされてるんじゃないかって……ですから先生、俺達に協力してもらえませんか？」

真正面から攻めてみたんだけど……どうだ？

「……」

……無言、か。

ひょっとしたら、警戒をしているのかもしれないな。

「先生もご存知かもしれませんが、この施設は名だたる精霊使い（ガイスト）であっても、侵入することは困難です。たとえ、賀茂であっても」

俺は少しでも安心させるため、そう告げた。

「……」

しばらく、沈黙が続く。

すると。

「……あなた達には、大切なものってある？」
「え……？」

突然、伊藤アスカがポツリ、と呟く。
だけど今、コイツは大切なものって、確かに言った。

……ひょっとして！？

「まさか、先生が大切にしてるナニカを賀茂の奴に奪われたってことですか！？」

俺は思わず立ち上がり、伊藤アスカに問い質す。
ハッキリとは言わなかったけど、伊藤アスカが大切にしてるものっていったら、アレしかない。

ヒロイン攻略のためのキーアイテム……伊藤アスカなら、『古ぼけた本』がまさにソレだ。

「つまり先生は、賀茂カズマにその大切なものを奪われて、そのことで脅されたから、アイツの指示でクラス代表選考会の不正ジャッジや終わった後の襲撃をした、ってことですか？」
「……（コクリ）」

顔をくしゃくしゃにした伊藤アスカは、俺の質問に対しゆっくりと頷く。
それを見た瞬間、俺の腹の底から、とてつもないほどの怒りがこみ上げてきた。

――ガアンッッッ！

「アノヤロオオオオオオ！　絶対に……絶対に許さねえッッッ！」
「ヨ、ヨーヘイくん！？」
「「ヨーヘイ！？」」

あまりの怒りに目の前のテーブルを殴りつけた俺に驚き、先輩とサンドラ、プラーミャが思わず俺の名前を叫んだ。

「ふむ……貴様がこんなに怒りをあらわにするとは……それほどのものなのか？」
「当たり前だろッッッ！」

ヒロインや仲間キャラにとってのキーアイテムっていうのは、ソイツ等のこれまでの生き様そのものって言っても間違いじゃない。
そんな大切なものを一方的に奪って、それを脅しに使って従わせやがるなんて……マジでクソじゃねーか！

「……サクヤさん、調査に当たっている“ＧＳＭＯ（グスモ）”の人達に伝えてほしいんですけど、聞き取りを行う際、大切なものが奪われていないか、それも聞いてもらうようにしてもらっていいですか？」
「う、うむ……すぐにでも伝えよう」

そう言うと、サクヤさんは面会室を飛び出した。
多分、学園長に電話しに行ったんだろう。

「大切なもノ……」

するとサンドラが、何か考え込むような仕草をした。

「サンドラ、どうしたノ？」
「……ワタクシにも、二番目に大切なものがあるんですノ。十歳の

頃、家族で撮った『思い出の写真』ガ」

プラーミャの問いかけに、サンドラがおずおずと答える。

そう……サンドラが今告げたものこそ、彼女のキーアイテムだ。

「サンドラ……もし、その『思い出の写真』が奪われて、燃やすとか破って捨てるとか言われたら、どうする？」

「ッ！　決まってますワ！　何としても取り返しますわヨ！」

「だけど下手な真似をしたら、アッサリ処分されちまうんだぞ？　それで、どうやって取り返すんだ？」

「ソ、ソレハ……し、従うフリをして、隙を窺ウ……ッ！」

どうやらサンドラも気づいたみたいだ。

なんでヒロイン達が、あの賀茂に従っているのかを。

「そうだよ！　あのクズは、彼女達から大切なモンを奪って、いいように操ってやがるんだよ！　そんなの……そんなの、許してたまるか！」

「エエ……エエ……！　ヨーヘイの言う通りですワ！　そんな、人の心を踏みにじるようなことト、絶対に許してはいけませんノ！」

俺とサンドラは、ここが面会室だということも忘れて憤慨する。

「ヨーヘイくん、学園長に伝えた。すぐにでも聞き取りをするとのことだ」

電話を終えて戻ってきたサクヤさんが、険しい表情でそう告げた。

すると。

「……ねえ」

伊藤アスカが、俯きながら尋ねかける。

「……なんですか？」

「……あなた達、“賀茂カズマ”をやっつけるんでしょ……？　だ、だったら、その……」

「約束はできませんけど……アイツが持っている先生の大切なものを回収できたら、その時は先生にお渡しします」

「っ！　あ、りがとう……ありがとう……っ！」

おずおずと尋ねる伊藤アスカにそう告げると、彼女は何度も礼を言いながらぽろぽろと涙を零した。

「……みんな、行こう」

「クク……もう聞かなくてもいいのか？」

「ああ、充分だ」

中条にそう告げると、俺はみんなよりも真っ先に面会室を出た。

そして。

――ガンッッッ！

俺は、廊下の壁を拳で思い切り叩いた。

賀茂カズマへの怒りで。

そして、たった今伊藤アスカと交わした、果たせない約束へのやるせなさで。

伊藤アスカ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

不幸な目に遭わせないために（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「では、今日のところはこれで解散としようか」

施設を出た俺達は、カナエさんの運転で駅前まで戻ってきた。

みんなは俺を慮ってか、誰一人として会話をしたりしなかった。

「クク……だが結局のところ、我は別に必要なかったのではないか？」

「それを言うなら、私も同じネ」

そう言うと、中条とプラーミャがチラリ、と俺を見る。

「そうだな……あの施設に行って、みんなと伊藤アスカと面会したこと自体には、あまり意味がないかもしれないな」

でも、施設に行ったことについては意味があるけどな。

「とにかく、サ……先輩が言ったように、今日はもう解散だ。みんな、付き合ってくれてありがとう」

「ふむ……まあ、それはいいとして、貴様は何故、サ……藤堂殿のことを、わざわざ先輩などと言い直すのだ？」

うぐぅ！？　中条め、今それを言うか！？

「そうネ。今さらだと思うけド？」

「プラーミャまで！？」

「だってヨーヘイ、気が動転してたのか知らないけど、先輩のこと

をずっと“サクヤさん”って言ってたわヨ？」
「何っ！？」

うあああ！？　俺、なにしてんだよ！？

「全ク……ファーストネームで呼ぶくらいで大袈裟ネ。それだったら私（ヤー）やサンドラだって同じでしょうニ」
「そ、それはそうだけど……」

呆れた表情でプラーミャは言うけど、それでサンドラはメッチャキレたんだからな？

「ふふ……ま、まあ、私も言いづらいから、その……これからはいつも“ヨーヘイくん”と呼ぶようにするよ……」
「はは……そ、そうですね……」

俺とサクヤさんはお互い顔を見合わせ、苦笑した。

「それじゃ、私（ヤー）は先に帰るわネ」
「ククク……我も、まだ引っ越ししたばかりで部屋が片づいておらんのでな。これで失礼するぞ」

そう言って、プラーミャと中条は帰って行った。

「それでヨーヘイ、今日も“ぱらいそ”領域（エリア）に行くんですわよネ？」
「ん？　ああ、そのつもりだけど」
「フフ、でしたら早く行きまショ」

サンドラは微笑みながら俺の手を引っ張る。

「むむ！　そ、そうだな！　早く行こうじゃないか！」

すると、何故か妙に対抗意識を燃やしたサクヤさんも、俺の手を引っ張った。

「あ、あはは……じゃ、行くか」

そんな二人を見て苦笑しつつ、俺達は学園へと向かった。

◇

「これで終わりだあああああああああッッッ！」

――斬ッッッ！

サクヤさんが“ぱらいそ”領域（エリア）の第二階層にいる七十二の幽鬼（レブナント）の一体、“オセ”を一刀両断にすると、その姿を幽子とマテリアルに変えた。

「フウ……ですけド、今回の幽鬼（レブナント）も厄介でしたわネ……」

「うむ……まさか、突然二体に分かれるとはな……」

地面に転がる大量のマテリアルを眺めながら、二人が呟くだけど、今サクヤさんが言ったそのスキルこそ、小森先輩の精霊（ガイスト）である［フィアラル］の持つ特殊スキル、【ダブル】だ。

これから小森先輩と戦うかもしれないことを考えると、あらかじめスキルに対応できるようになったので良かったと思っている。

「よし！　それじゃ、戻ろうぜ！」

「うむ！」
「エエ！」
『ハイなのです！』

三人に声をかけ、俺達は“ぱらいそ　”領域（エリア）を後にする。

「あ、そうだ……二人共、この後って時間あるかな？」
「ん？　私は大丈夫だが……」
「ワタクシもですワ」

そう尋ねると、二人は少し期待に満ちた瞳で答えた。
はは、まあ期待通りでもあるんだけど。

「それじゃ、ルフランでスイーツを食べてから帰りましょうか」
「！　うむ！」
「そうしましょウ！」
『わあい！　なのです！』

嬉しそうにはしゃぐ三人を見て、俺も思わず顔を綻（ほころ）ばせる。

「うん、それじゃ行こう」

ということで、俺達は一路ルフランへと向かう。

その途中。

「ん？　望月じゃないか」

路地から現れたのは、賀茂だった。
それも、自身の精霊（ガイスト）、“瀬織津姫（せおりつひめ）”と一緒に。

「賀茂……」
「藤堂先輩とサンドラさんも一緒ということは、これからルフランに行くのか？」
「そうだけど……というか賀茂は、精霊（ガイスト）なんて召喚してどこに行くんだ？」
「ああ……ちょっと、な」

ふうん、ちょっと、ねえ。

「ま、俺達は行くから」
「ああ、またな」

賀茂は手をヒラヒラさせると、俺達とは反対の方向へと去って行った。

「……ヨーヘイくん、血が……」
「え……？」

すると先輩はハンカチを取り出し、俺の口を拭（ぬぐ）ってくれた。
どうやら俺は、賀茂に対する怒りで唇を強く噛んだせいで切れてしまっていたみたいだ。

「ヨーヘイ……ワタクシは、先輩みたいにまだ事情をあまり把握してませんノ。だから、詳しく教えてくださいまシ」

サンドラがサクヤさんと入れ替わるように正面に立ち、アクアマリンの瞳で俺の顔を見つめる。

「ああ……そのことを話したくて、俺は二人をルフランに誘ったん

だ。二人にも、一緒に戦ってもらうために」
『はうはう！　［シン］だってマスターと一緒に戦うのです！　悪い奴は、やっつけてやるのです！』
　すると、仲間外れにされたとでも思ったのか、［シン］が会話に割り込んで手を挙げながらピョンピョンと飛び跳ねた。
「バッカ、当然だろ？　だって［シン］は、俺の大切な相棒なんだから」
『えへへー、なのです』
　俺はその綺麗な黒髪をくしゃ、と撫でると、［シン］は嬉しそうに目を細める。
「さあ、行こう」
　この後、ルフランに行った俺達は、賀茂カズマに対する今後の対応について、時間の許す限り話し合った。
　俺の大切な人達を、絶対に不幸な目に遭わせないために。

不幸な目に遭わせないために（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

チョロイン主人公（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「ふふーん、望月くんがサボったから、ボク達は第十四階層まで進んだんだからね！」

伊藤アスカと面会した次の日の朝、教室に入るなり立花が舌をンベー、と出しながら煽ってきた。というか、本当に子どもというか、小学生女子というか……。

「ま、まあ、俺もすぐに追いついてやるよ。立花は俺のライバルだからな」

「！　う、うん！」

とまあ、こうやって定期的にライバル又は友達認定してやると、立花はすぐに機嫌が良くなるんだけど。こういうところ、男だけど可愛い。男だけど。俺はソッチ系じゃないけど。

「それよりさ……立花達、昨日の“バベル”領域攻略で、なにかおかしなこととかってなかったか？」

俺は窺うように立花に尋ねる。

「んー……別に、おかしなことなんてなかったけど？　いつも通り、加隈くんが鬱陶しかった」

「そ、そうか……」

おおう……加隈、そろそろ本気で嫌われかねないから、適度に距離を保ったほうがいいぞ……？

「そんなことより！　今度の冬休みはどうするの？」
「冬休み？」
おっと、そういえば。
「冬休みというか、クリスマスなんだけどさ。サクヤさんの家で、クリスマスをしようって話になってるんだけど、当然、立花も来るよな？」
「！　行く行く！　もちろんだよ！」
「おわっ！？」
勢いよく詰め寄り、立花は何度も首を縦に振った。
というか、メッチャ瞳をキラキラさせてるし。よっぽど嬉しいんだなあ。
「えへへー、クリスマスは望月くんと一緒だあ……」
「お、おう……俺というか、みんな、な……」
「まあそれは置いといて……望月くんはいつから藤堂先輩のこと、“サクヤさん”って呼ぶようになったのかなあ？」
すると、立花の雰囲気が打って変わり、暗い笑みを浮かべながら問い質す。こ、怖え……。
「お、おう……中条が転校してきてから、かな……」
「ズルイ！」
いや、ズルイってなんだよ……。
「じゃ、じゃあボクだって、望月くんのこと、その……ヨ、“ヨー

ヘイ〝くんって呼ぶんだから！」
「んー……まあ、いいんじゃないか？　加隈の奴だって、俺のこと下の名前で呼んでるし」
まあ、友達同士なんだし、下の名前で呼び合っても普通だろ。加隈には下の名前で呼んでやらないけど。なんとなく。
――キーンコーン。
「お、チャイムが鳴ったぞ。早く席に着こうぜ、〝アオイ〟」
「っ！　う、うん！　そ、その……〝ヨーヘイ〟くん！」
立花改めアオイは頬を赤らめながら、最高にご機嫌な様子で席に着いた。
チョロイ、チョロ過ぎる。
◇
「あれ？　今日は人数が少ないな……」
昼休みになり、俺はサンドラ、プラーミャ、立花と一緒に食堂に来ると、サクヤさんと中条がいるだけだった。
「サクヤさん、氷室先輩は？」
「う、うむ……一応、廊下で会ったので声を掛けたのだが、言葉を濁され、どこかへ行ってしまったのだ……」
「そ、そうですか……」
そう言うと、俺は肩を落とした。

だけど……まあ、しょうがない、か……。

「そういえバ、シキとユーイチも変な感じだったわネ」
「土御門さんと加隈の奴も？」
「エエ……朝、下駄箱で会ったら、気まずそうな顔をして二人共そそくさと自分達の教室に向かってしまいましたワ……」

プラーミャの言葉を補足するように、サンドラが説明する。
あの二人が、なあ……。

「まあまあ、誰だってそんな気分の時もあるだろう。それより、せっかくのランチが冷めないうちに、早く食べよう」
「え、ええ、そうですね……」

サクヤさんの言葉を受け、俺達はほんの少ししこりが残ったまま、食事を始める。

その時。

「よう、望月」
「賀茂……」

にこやかな表情の賀茂が、食堂に入ってくるなり声を掛けてきやがった。

「せっかくだし、俺達と一緒に食べないか？」

コイツ、いきなり何言い出しやがるんだ？
というか、何を企んで……っ！？

見ると、賀茂が連れてきた連中の中に、加隈と土御門さんの姿があった。

「ん？　ああ……実は、今日から二人にも、あの“バベル”領域（エリア）の攻略を手伝ってもらうことになったんだよ」

「へえ……」

俺は短く返事をすると、土御門さんと加隈を一瞥する。

二人は余程気まずいのか、サッと目を逸らしてしまった。

「……悪いけど、ボクは失礼するよ」

すると立花が席を立ち、転校してきたばかりの時に見せた、あの拒絶するような表情を浮かべながら賀茂を……そして、加隈と土御門さんを見やり、そのまま食堂を出て行ってしまった。

本当にアイツは、自分と関わり合いがなければ冷徹な一面があるよな……。

まあ、仲間やヒロインを選び放題の主人公の特性を考えれば、そういう仕様なのかもしれないけど……。

「クク……どうする、望月ヨーヘイ」

「どうするって言われてもなあ……まあ、俺達はこの面子（めんつ）でいつも昼メシ食ってるから、悪いけど遠慮するよ」

中条の問い掛けに答える形で、俺は賀茂に断りを入れる。

というかこんな気まずい中で昼メシ食うなんて、どんな罰ゲームだよ。

「そっか、残念だな。できれば望月とは、“バベル”領域（エリア）のことや

仲間のことで情報交換をしたかったんだが、な」

そう言うと、賀茂達は俺達から離れ、窓際奥の席を陣取った。

「……ヨーヘイくん、よく堪えたな……」

隣に座るサクヤさんが、テーブルの下で強く握りしめていた俺の拳に、そっと手を添える。

「はは……まあ、そうですね……」

だって、こんなところでアクションを起こしたところで、賀茂の息の根を止められるわけじゃない。

やるなら、二度とこんな真似ができないように、徹底的にしないと。

だから賀茂……土御門さんと加隈を卑怯な手で引き入れて、悦に浸りながら俺を煽ろうとしたつもりなんだろうけど。残念だったな、その手には乗らない。

俺は、席で談笑する賀茂を見やると、みんなとの食事を再開した。

チョロイン主人公（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

追い込んでみる（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

追い込んでみる

「えへへ……まさかこんな形で、ヨーヘイくんとチームを組むことになるなんてね」

放課後、“バベル”領域（エリア）に来た俺達は第十二階層を攻略していた。

まあ、確かにアオイの言う通り、この六人で攻略することになるなんてなあ……。

「ふむ……賀茂カズマに取り込まれた加隈くんや土御門くんはともかく、氷室くんも領域（エリア）攻略に同行しないとはな……」

「あはは……まあ、家庭の事情ということなら仕方ないですよ……」

六時間目の授業中、カズラさんからスマホにメッセージが届いた。

『家庭の事情で、これからしばらくの間は領域（エリア）攻略に同行できない』、と。

「マア、あの男の毒牙にかかったわけではないようですのデ、良かったですワ」

「はは、そうだな……」

サンドラの言葉に、俺は乾いた笑みを浮かべる。

「クク……しかし、ここの領域（エリア）の幽鬼（レブナント）はその醜悪な姿もさることながら、それなりに歯ごたえはあるな」

そう言うと、中条はくつくつと笑った。

まあ、“バベル”領域（エリア）は二周目特典の五つの領域（エリア）の中でも、難易

度が高いからな。

「そういえば中条の精霊（ガイスト）って、レベルとかステータスはどうなってるんだ？」

「む、［デウス・エクス・マキナ］か？」

中条はおもむろにガイストリーダーを取り出し、画面を俺に向ける。

――――――――――――――――

名前　：デウス・エクス・マキナ
属性　：機械仕掛けの神（♀）
ＬＶ　：７５
力　　：Ａ＋
魔力　：ＳＳ
耐久　：Ｓ
敏捷　：Ｓ＋
知力　：Ｓ－
運　　：ＳＳ
スキル：　【ツァーンラート】【カイロス】【クロノス】【カステン】【火属性無効】【水属性無効】【氷属性無効】【風属性無効】【光属性無効】【闇属性無効】【聖属性無効】【邪属性無効】【状態異常無効】【物理弱点】【雷属性弱点】

――――――――――――――――

あー……能力自体はやっぱり規格外だけど、それでも、『攻略サイト』のステータスと同じだなあ。レベルだって主人公とのラストバトルの時と同じ、七十五だし。

「……確かにすごい強さだね……ヨーヘイくんがサンドラさんと二人掛かりで戦ったのも頷けるよ……」
「……悔しいけどネ」

アオイとプラーミャも、［デウス・エクス・マキナ］のステータスを見て唸る。

「そういう二人は、今はレベルいくつなんだ？」
「あ、あはは……実は、クラスチェンジをしてから全然上がらなくて、［伏犠］もレベル七十二だよ……」
「フン……七十、ヨ……」

そうかー……やっぱり二人も、クラスチェンジ後のレベル上げの壁に悩まされてたかあ……。

「ま、まあ、コツコツ幽鬼を倒して幽子を稼ぐしかないよね……」

そう言うと、アオイはガックリと肩を落とす。
このレベル問題に関しては、何かしら手を打たないと、だな。

「クク……どうやら次が来たようだぞ」

そう言いながら中条が向ける視線の先から、またヘリオガバルスがやってきた。それも四体も。

「はは……第十二階層まで来ると、わらわらと現れるのな……」
『むふー！　［シン］がまとめて消し去ってやるのです！』

やはり心の底から嫌いなんだろう。［シン］は一気に飛び出し、

ヘリオガバルスに肉薄すると。

『はう！　【爆】！　【裂】！　【凍】！　【雷】！』

『『『『ッッッ！？』』』』

四体まとめて呪符を大量に貼り付け、一気に畳みかけた。

「トドメだよ！　【朱雀】！」

アオイの［伏犠（ふっき）］が最強スキルを放ち、ヘリオガバルスを焦げ跡だけ残して消滅させると、マテリアルが床に転がり、幽子は精霊（ガイスト）達に吸収されていった。

「さあ、次の階層に進も……っ！？」

サクヤさんが第十三階層へと繋がる階段に一歩踏み入れたところで、その動きがピタリ、と止まる。

すると。

「はは……望月達は、まだこんなところでモタモタしてたのか」

階段の上から現れたのは、賀茂だった。

「別にいいんだよ。俺達は慎重に攻略する主義なんでな」

賀茂の皮肉に、俺は肩を竦（すく）めながら返した。

「そうか。そんなやり方をしているから、二人に見限られたんじゃないか？　なあ？　加隈、土御門」

口の端を吊り上げ、賀茂は後ろへ振り返りながら声を掛ける。
そこには、俯いた様子の二人が、大谷カスミ達に囲まれていた。

まるで、逃がさないとばかりに。

「ふうん……ソレ、加隈と土御門さんがそう言ったワケ？」
「何なら本人に聞いてみるといい」

そう言うと、賀茂が二人を顎で指し示す。

「加隈……土御門さん……」
「「……」」

名前を呼ぶが、二人は俯くばかりで無言のままだ。

「……加隈くん、見損なったよ」
「フン……シキにとっての貴族の矜持は、所詮この程度のものだったのネ」
「「っ！　……」」

アオイとプラーミャに冷たい視線と言葉を浴びせかけられ、一瞬だけ顔を上げるが、また元のように俯いた。

……んじゃ、チョットだけ追い込んでみるか。

「……そういや土御門さん。いつも持ってる、『揚羽蝶紋入り扇』はどうしたの？」
「っ！？」

俺の問い掛けに、土御門さんが息を飲んだ。

追い込んでみる（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

煽りコンボ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

煽りコンボ

「……そういや土御門さん。いつも持ってる、『揚羽蝶紋入り扇』はどうしたの？」
「っ！？」

俺の問い掛けに、土御門さんが息を飲んだ。

「ははあ……ひょっとして、誰かに盗られたりでもした？　アレ、土御門さんにとっては命より大切なものだもんなあ」
「アラ、そうなノ？　そんな大切なものを奪われるなんて、どうかしてるんじゃなイ？」

いやプラーミャ、なんでこうもピッタリ息を合わせて煽れるんだよ。最初に煽ったのは俺だけども。

とはいえ、ナイスタイミングだけどな。
だって。

「っ！　お主達に何が分かるのじゃ！　あの扇は……あの扇は……！」
「そ、そうだぜ！　オマエ等には、何よりも大切なモンとかねーのかよ！」
「そうよ！　この無神経！」
「サイテー！」

今まで俯くだけだった二人からだけじゃなく、他のヒロイン達まで加わって、俺達に罵詈雑言を浴びせかけるんだから。

ということで、俺はサクヤさん達にも目配せをすると。

「ふふ……大切なものなら、奪われないようにしておかねばな」

「エエ、管理が甘いとしか言いようがありませんワ？」

はは、さすが二人は俺の意図をすぐに汲み取ってくれる。

「ククククク！　そもそも何故、我等がこのように罵られているのだ？」

「ホントだよね！　文句があるなら、自分達の大切なものを奪った奴に言えばいいのに！」

おおう、中条とアオイまで、うまい具合に煽(あお)ってくれる。

ウンウン、みんなには後でルフランのスイーツ奢(おご)ってやるぞ。

「だってよ、賀茂」

そう言って、俺はヘラヘラしながら見やる。

みんなからキーアイテムを奪ったのはオマエなんだろうから、当然、オマエが罵られる立場だよなあ？

なのに、コイツは。

「ははははは！　確かに！　自分の大切なものを奪われるなんて、マヌケとしか言いようがないな！」

そんなみんなを見て、腹を抱えて笑い転げやがった。

全部、オマエのせいなのに。

「いやあ、俺もそう思うわ。といっても一番のクズは、その大切なもの奪って、それで脅しかけていいようにアゴで使う奴だけどな」
「そうか？　俺は、ただマヌケな奴が悪いと思うがな」
はは……いい根性してやがる。
「それにしても……そんな大切なものを奪ったバカは、それをどうやって保管してるんだろうなあ？　逆にソレが取り返されたりなんかしたら、ソッチのほうが余計マヌケだろうな」
「ははははは！　本当にオマエは面白いことを言うな！　そんなの、奪った奴からしたら、絶対に奪われないところにしまうに決まってるだろ！」
ふうん……絶対に奪われない場所、ねえ……。
「んじゃ、せいぜい奪われないように気をつけるんだな」
「ああ、そうするさ」
俺は踵（きびす）を返すと。
「みんな、サッサと行こうぜ」
「ふふ……そうだな」
俺達は、ニヤニヤと嗤（わら）う賀茂と、射殺すような視線を送り続ける加隈達を無視し、“バベル”領域（エリア）を後にした。
◇
「サクヤさん、どうでした？」
「……全員怯えた表情で、貝のように口をつぐんだとのことだ」

“バベル”領域（エリア）を出た後、俺達はルフランに来て今後のことについて話し合いをしていた。

そして、サクヤさんに“ＧＳＭＯ（グスモ）”の聞き取り調査の結果を聞いたんだけど……まあ、やっぱり何も話さなかったかあ……。

「クク……それで、これからどうするつもりだ？」

「はは、あれだけケンカを売ったんだ。当然、向こうから何かしらアクションを起こすんじゃないか？」

嬉しそうに尋ねる中条に、俺はおどけながら答える。

まあ、残る俺達の中でキーアイテムを持っているのはサンドラだけだし、まずはそこを狙ってくるんじゃないかとは思うけどな。

といっても。

「フフ……ワタクシの『思い出の写真』を、どうやって奪うつもりなのかしラ？」

「フフ……バカネ、姿を見せた瞬間、私（ヤー）がハルバードで叩き潰してやるワ」

同じ顔をした二人が、同じ妖しい表情でクスクスと嗤（わら）う。

おおう……こうなると、超不気味だな……。

「あはは。そもそもみんなも、ボクみたいにこうやって、肌身離さずに持っていればいいのにね」

そう言うと、アオイは制服から一枚のメダルを取り出した。

「アオイ……それって……」

「うん……キミと一緒に遊んだ時の、ゲーセンのメダルだよ……」

そう言うと、アオイはメダルを胸元でキュ、と抱きしめた。

あー……まさか、主人公なのにキーアイテムを持つことになるだなんて、誰が予想するんだよ……。

まあ、さすがに賀茂も知らないだろうから、大丈夫だろ。

「なんにせよ、向こうの出方を見極めつつ、賀茂の奴がみんなの大切なものをどこに隠してるのか、それを突き止めるのが先決だろうな」

といっても、賀茂の次の行動は大体読める。

だから。

「サンドラ、プラーミャ……絶対に気をつけるんだぞ？」

「「エエ！」」

俺の言葉に、二人の姉妹は力強く頷いた。

煽りコンボ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

待ち構える（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

待ち構える

「うう……寒いなあ……」

ルフランで解散した後、俺は一旦家に帰って夕食を済ませた後、サンドラとプラーミャが住んでいるマンションの前に来ている。

もちろん、賀茂達がサンドラの『思い出の写真』を奪いに来ないか、見張るために。

とはいえ、さすがに十二月中旬ともなると、ちゃんと厚着をしていても寒くて仕方がない。

『はうはう！　［シン］が絶対にやっつけてやるのです！　お仕置きするのです！』

妙にやる気を見せている［シン］が、ブンブンと両手を振り回す。

しっかし、精霊（ガイスト）は寒いって感じたりしないのかな……って、おっと、ちゃんと見張っておかないと。

俺は曲がり角の陰に隠れ、改めてマンションの入口を見つめていると。

――ぴと。

「へ！？」

急に頬に温かいものを感じ、俺は思わず飛び退くと。

「フフ……こんなところで何をしてるんですノ？」
「サ、サンドラ！？」
なんと、現れたのは缶コーヒーを持ったサンドラだった。
「え、ええと……」
「フフ、こんなところにいてたら風邪を引いてしまいますワ。ですかラ」
するとサンドラは、俺の手を取ると。
「ホラ、行きますわヨ」
「え、ええ！？」
そのまま引っ張られ、俺はマンションの中に連れて行かれた。
そして。
「……ハア、本当にヨーヘイって過保護よネ」
玄関に入るなり、出迎えたプラーミャに呆れ顔で溜息を吐かれた。
「い、いや、その……た、たまたま通りかかったっていうか、何つーか……」
「ハイハイ、言い訳はいいかラ。そんなことより、早く中に入りなさいヨ」
「ええー……」
プラーミャは苦笑しながら手招きし、それに合わせてサンドラに

背中を押され、そのまま足崩し的に部屋の中に入った。

「それデ、ヨーヘイは缶コーヒーと紅茶でいいかしラ？」

「んお？　お、おお……」

サンドラに勧められるまま、俺は頷く。

いや、この缶コーヒーも俺のなのかよ。

「だけド、こんな時間にマンションの前でウロウロしてたら、普通にストーカーに間違えられてもおかしくないわヨ？」

「うぐう！？」

プラーミャにジト目で睨まれながら指摘され、俺は思わず変な声を出してしまう。

チクショウ、何一つ反論できない……。

「……マア、そんなお節介なところがヨーヘイらしいけど……（ボソッ）」

「？　何か言ったか？」

「イイエ？」

ポツリ、と呟いたプラーミャは、とぼけながらかぶりを振った。

というか、ちゃんと聞こえてるんだよ。悪かったな、お節介で。

俺は誤魔化すようにプルトップを開け、ぬるくなった缶コーヒーを口に含む。

「フフ……［シン］はアイスでいいですわよネ？」

『わあい！　これは高いアイスなのです！　ストロベリー味なのです！』

コラコラ、あまりうちの［シン］を甘やかさないでくれ。次からハードルが上がる。

「ですけド、ヨーヘイったら一体いつまで見張っているつもりだったんですノ？」

「いつまでって……そりゃあ、アイツ等が現れる……「プ、ホラ、やっぱり過保護じゃなイ」」

俺の話の途中でプラーミャが吹き出し、そんな指摘をしやがる……。

「フフ……でしたら、この暖かい部屋で待てばいいですワ」

「お、おう……だけど……」

俺はチラリ、とサンドラとプラーミャを見やる。

というか二人共、自分の家だからって、ちょっと無防備すぎるんじゃないですかね？

一応、俺も男なんだけど……。

「それデ……やっぱりヨーヘイは、今日にでも連中が来るって考えてるのよネ？」

プラーミャの様子が一転し、真剣な表情で尋ねる。

「……ああ。さすがにあれだけ俺に煽られたら、何かしらの動きがあるはずだ。何といっても、加隈と土御門さんが速攻で大切なものを奪われてるんだからな」

「そうネ……ユーイチに関しては、その通りヨ」

？　プラーミャの奴、変な言い方するなあ……。

「ですけド、わざわざ家の中まで侵入して、しかもどれが大切なものかも分からないのに、そんなことが可能なんですノ？」

そう言うと、サンドラは怪訝な表情を浮かべた。

だけど、その質問に関しては、答えはイエスだ。

まず、賀茂の仲間の一人である“吉川サヤ”の精霊（ガイスト）、「ウォルシンガム」の持つ隠密スキル、【スニークアップ】と【光学迷彩】があれば、誰にも気づかれずに侵入することも可能だろう。

扉の鍵などはなんとかしないといけないけど、それだって警備室からマスターキーを入手すれば、別に不可能じゃない。

キーアイテムの選別だって、そもそも賀茂には俺と同じ『攻略サイト』か、それに類するものを持ち合わせているんだから、始めからサンドラのキーアイテムだって把握してる。

「……いずれにしろ、賀茂には何人もの仲間……いや、操り人形の駒がいるんだ。侵入したり、大切なものを見つけるためのスキルを持ってる奴がいても、おかしくない」

「そ、そうですわネ……」

せめて氷室先輩がいれば、［ポリアフ］の【オブザーバトリー】で隠蔽スキルを看破できるんだけど、そういうわけにはいかないしなあ……。

「とにかく……今日は俺、明日の朝まで監視してるから」

「フエエエエエエエ！？」

「ニャアアアアアア！？」

俺の言葉に、サンドラとプラーミャが奇声を上げた。なんで？

待ち構える（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

不法侵入（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

不法侵入

「……」

俺は今、目を瞑り、耳を押さえて必死で無になろうとしている。

賀茂達がやってくるかもしれないのに、こんなことをしてていいのかって？

じゃあ、あの音を聞いても冷静でいられる自信があるのか？

――ザアアアア……。

ハイ。今、サンドラがお風呂の真っ最中です。

いや、というかこんな時間なんだから、当然お風呂くらい入るよね？

「……ヨーヘイ、ちゃんと耳は塞いでいるでしょうネ」

「イエス！　マム！」

「聞こえてるじゃないノ！」

「アイタ！？」

とまあ、プラーミャにバッチリ監視されてはいるんだけどな。

とはいえ、俺だって健全な十六歳男子なんだぞ？　女子のお風呂シーン、しかも最高クラスの美少女ときたら、その……なあ？

「フン、あの連中より先に、ヨーヘイを焼き尽くす必要がありそうネ」

「ヒイイ」

くそう……こんなの、どうすりゃいいんだよ……って、シャワーの音が止まったぞ？

それから、しばらくすると。

「フウ……お先ですワ」

お風呂から上がってパジャマに着替えたサンドラが、俺達がいるリビングへやってきた。

だ、だけど……うおお！？　サ、サンドラのパジャマ姿、破壊力バツグンだぞ！？

い、いやだって、確かにサンドラは背も低くて胸もペッタンコだけど、それでも妖精みたいにメッチャ美少女が、お風呂上りで透き通るほど白い肌を薄っすらピンクに染めて珠（たま）のような汗をキラキラさせ、なおかつ、いつもはツインサイドテールにまとめてる金髪も、湿り気を帯びたまま下ろしていて……。

「？　どうしたんですノ？」

「はえ！？　あ、ああいや、ナンデモナイデス……」

「？　変なヨーヘイ」

ううう……普段とは違うサンドラに見惚れてただなんて、恥ずかしくて言えない……。

「じゃあ、次は私（ヤー）が入ってくるワ」

そう言うと、プラーミャはスタスタと脱衣所へと向か……って？

突然、プラーミャがクルリ、と振り返ると。

「……覗くなヨ？」
「ヒイイ！？」

プラーミャにギロリ、と睨まれ、俺は思わず悲鳴を上げる。
と、というか覗くわけねーだろ！　見たいのはやまやまだけど、俺だってそれくらいの理性はあるわ！

「……マサカ」
「いや！？　覗いてないから！？　つーかプラーミャと一緒にいたんだからできるわけねーだろ！？」

胸元を隠したサンドラにジト目で睨まれ、俺は悪くもないのに必死で言い訳を繰り返していた。

……まあ、下心もないわけじゃないけど。

◇

「……来ませんわネ」

夜の十二時を回り、俺とサンドラ、プラーミャは、今も玄関のドアを眺め続けている。

「さすがにこんな時間だし、もう来ないんじゃなイ？」

サンドラと色違いのパジャマ姿で俺の右隣にいるプラーミャが、そう尋ねる。

「プラーミャ、油断は禁物ですわヨ……例えば、夜襲を仕掛ける時

は明け方を狙ったりしますもノ……」

俺の左隣にいるサンドラが、プラーミャをたしなめた。

というか……二人からシャンプーと石鹸のいい香りがしてクラクラするんだけど……。

「ヨーヘイ、聞いてますノ！」
「チョット！　聞いてるノ！」
「うお！？　き、聞いてる聞いてる！」

いや、これはなかなか集中力がそがれて大変……だけど、ゴチソウサマです。

すると。

――カチャリ。

「「「ッ！？」」」

俺達は一斉にドアを凝視する。

「……鍵が開いた、な」
「「エエ……」」

つまり……連中が来た、ってことだ。

「……［シン］」
『ハイなのです……』

サンドラとプラーミャも、精霊（ガイスト）を召喚して臨戦態勢に入る。

そして。

――きい……。

「っ！　今だ！　玄関を囲めえええええ！」

『はうはうはう！　【堅】！』

「【ガーディアン】！」

［シン］が呪符を、サンドラの［ペルーン］が盾を展開し、玄関を隙間なく埋める。

こうすれば、さすがに入っては来れ……っ！？

――ガシャアアアアアンッッッ！

「プラーミャ！　ベランダだッッッ！」

「分かってるわヨ！」

突然窓ガラスの割れる音が響き渡り、プラーミャが慌てて駆け寄る。

「クソッ（チョルト）！　イイ加減、姿を現わしなさいヨ！」

プラーミャの叫んだ言葉を聞き、部屋に侵入した奴の正体を確信した。

「……“吉川サヤ”、いるんだろう？」

「っ！？」

俺の言葉に、一瞬息を飲んだ音が聞こえる。

「！　ソコッッッ！」

当然プラーミャがその隙を見逃すはずもなく、［スヴァローグ］がハルバードを横薙ぎにした。

部屋の壁や家具を巻き込んで蹴散らしてしまったけど、吉川サヤの姿が見えない以上、広範囲に攻撃するしかないからな……後で片づけを手伝おう。

すると。

「クッ……！」

かろうじてハルバードを躱したものの、顔を歪めた吉川サヤがその姿を現わした。

「ふう……というかさ、こんな時間に窓ガラスを割って入ってくるなんて、普通に不法侵入だろ。あ、もちろん」

俺はポケットからスマホを取り出し、カメラのアプリを起動させると。

「バッチリ撮影させてもらうぞ。後でこれを証拠として通報するから」

「フフ……つまり、こうなったら逃げても無駄、ってことネ」

そう言うと、プラーミャがニタア、と口の端を上げた。

不法侵入（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大切なものを守るため（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

俺はポケットからスマホを取り出し、カメラのアプリを起動させると。

「バッチリ撮影させてもらうぞ。後でこれを証拠として通報するから」

「フフ……つまり、こうなったら逃げても無駄、ってことネ」

そう言うと、プラーミャがニタア、と口の端を上げた。

「で？　どうする？　今、玄関にいる奴と一緒に、俺達と戦う？　それとも、このまま何もしないで逃げる？　あるいは……っ！？」

交渉をしようと話を切り出した瞬間、吉川サヤの［ウォルシンガム］が素早くリビングを飛び出した！？

「［シン］！」

『はう！　行かせないのです！』

俺の指示で玄関から［シン］が［ウォルシンガム］を追う。

だけど。

「……私達の勝ち」

吉川サヤがポツリ、と呟いた。

『はうはうはう！？　何を……っ！？』

――ガシャアアアアン！

またもガラスの割れる音と［シン］の慌てる声が聞こえる。

「オイ！　オマエ、何をした！」

「……別に」

俺は詰め寄るが、吉川サヤはプイ、と顔を背けた。

どうやら、まともに答える気はないらしい。

「ヨーヘイ、退いテ」

「プラーミャ」

俺と入れ替わるようにプラーミャが吉川サヤに詰め寄ると、その胸倉をグイ、とつかんだ。

「別に答えてくれなくてもいいワ。タダ……アナタは私（ヤー）とサンドラの部屋をメチャクチャにしたんだもノ。当然の償いは受けてもらうワ」

「っ！？」

プラーミャの見せる嗤（わら）い顔に、吉川サヤは思わず顔を引きつらせた。

「そうネ……まず、ルーシ帝国の貴族である私（ヤー）達にこんな真似したんですもノ。ちゃあんと弁償してもらわないと、ネ」

うおお……確かにここまでメチャクチャに（大半はプラーミャだ

けど）したんだから、結構な金がかかりそうだなあ……。
　オマケに、精霊（ガイスト）を使って犯罪行為をしたんだから、施設行きも免れないだろうし、完全に詰んでるんじゃないのか？

「モチロン、私達（ヤー）を倒して、一部始終を撮影したヨーヘイのスマホを奪って逃げる、なんて選択肢もないわけじゃないけド……アナタにできル？」

　そう言うと、プラーミャがクスクスと笑う。

「それともう一つ」

　俺はプラーミャの言葉に続き、吉川サヤに話しかける。
　これから、最も残酷な言葉を告げるために。

「俺達はアイツ……賀茂に奪われた、みんなの大切なものを取り返すつもりでいる」
「っ！」

　そう告げた瞬間、吉川サヤは目を見開いた。
　はは……そうだよな、期待しちまうよな。

　だけど。

「……俺は、オマエの大切なものを、取り返した瞬間に叩き壊すから」
「っ！？　ど、どうしてよ！　なんでそんなことを！？」

　すると吉川サヤは、必死の形相でプラーミャを振り払って俺に詰め寄る。

まるで、縋るように。
まるで、懇願するように。

「どうして？　なんで？　当然だろ」

確かに、吉川サヤはあの賀茂に脅され、やむを得ずこんな真似をしたということは理解できる。
でも、だからといって俺がそれを許すなんて期待したら、それこそお門違いだ。

だって。

「オマエは、俺の大切なものに手を出した。大切なものを奪われた、オマエなら分かるだろう？」
「あ……ああ……！」

俺の言葉を聞き、吉川サヤは膝から崩れ落ちる。

そして。

「お、お願い！　お願いします！　謝る！　謝るから！　だから私の『おばあちゃのオルゴール』だけは壊さないでえええええ！」

俺の足にしがみ付き、泣き叫びながら訴える吉川サヤ。
でも、俺はそんな彼女を、表情を変えずに振り払った。

◇

「アアモウ！　逃げられてしまいましたワ！」

玄関から侵入しようとした吉川サヤの仲間を取り逃がし、サンドラがプリプリと怒る。

「はは、まあまあ……」

そんなサンドラを、俺は苦笑しながらなだめていると。

『はう！　無事に守ったのです！』

戻ってきた［シン］が、笑顔でサンドラの『思い出の写真』を掲げる。

「はは！　でかしたぞ［シン］！」

『えっへん、なのです！』

俺がガシガシと乱暴に頭を撫でて褒めてやると、［シン］は人差し指で鼻の下をこすりながら胸を張った。

「デ、コイツはどうするノ？」

プラーミャは眉根を寄せながら、すすり泣く吉川サヤを見やる。

「……そりゃあ、いつまでもこんなところにいられても困るし、サッサとご退場願うだけだろ」

「そうネ」

そう言うと、プラーミャは引きずるようにして吉川サヤを玄関のほうへと追いやろうとするけど。

「わ、私……どうしたら……」
「知らないわヨ。何にしても、自業自得でショ？」
「うううううううう……っ！」

冷たく言い放つプラーミャ。
そして、吉川サヤはまた号泣した。

「ソ、ソノ……二人共、少し冷たいような気がするんですけド……」

そんな俺とプラーミャの様子に、サンドラが少し困惑しながら話す。

「当たり前だよ。俺だって、大切なもの……サンドラやプラーミャ、サクヤさん、氷室先輩達を傷つけるような奴がいたら、絶対に容赦しない。それがたとえ、自分の意思じゃなかったとしても」
「ア……」

そうとも。俺が妙な優しさなんか見せたりしたせいで、その結果、大切な人達が酷い目に遭うなんてことには絶対にさせるわけにはいかないんだ。
そのせいで、たとえ賀茂に操られているヒロイン全員から、恨まれるようなことになっても。

「本当にモウ……ヨーヘイのバカ……」
「はは、バカなのはもう自覚してる」

頬を赤らめ、口元を緩めながら悪態を吐くサンドラに、俺はそう言って苦笑した。

大切なものを守るため（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

アナタは、悪くなイ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

アナタは、悪くなイ

「さて……どういうことか、説明してもらおうか」
「あ、あはは－……」

あの後、俺達は警察に通報すると、警察と一緒に“GSMO（グスモ）”の職員もやって来た。
まあ、精霊使い（ガイスト）がらみだから、当然と言えば当然なんだけど。

で……その“GSMO（グスモ）”経由で学園にも話が入り、そこからサクヤさんの耳にも入ったわけで……。

「ソ、ソノ……ヨーヘイはワタクシ達を守ろうとして、寒い中見張りをしたりしてくれただけですノ」
「そんなことは分かっている！　私が聞いているのは、どうして事前に相談しなかったのかと言っているのだ！」

サンドラが代わりに弁明してくれたけど、そのことが余計にサクヤさんの逆鱗に触れてしまったみたいだ……。

「ヨーヘイくん！　サンドラ！　プラーミャ！　今回はたまたま撃退できたが、万が一のことだってあるんだぞ！」
「す、すいません……」

サクヤさんの言葉に、俺は素直に謝る。
だって、安全を考えるなら、確かにサクヤさんの言う通りだから。

とはいえ、今回の件に関しては、大勢で待ち構えたりするわけに

もいかなかった。
そんなことをしたら、警戒して絶対にサンドラ達の家に襲撃しようとはしなかっただろうし。

賀茂の尻尾をつかむためにも、こうするしかなかったんだから。

「ハア……君のことだから、賀茂カズマを追い込むためにこうしたということも理解できる。だが……それでも、せめて私には一言教えてほしかった……」
「っ！　本当に、すいません！」

寂しそうに告げるサクヤさんを見て、俺は必死で謝った。
くそう……そんな叱り方、反則ですよ。俺があなたのそんな姿を見ることが嫌いなの、知ってるくせに……。

「……もう、こんなことはするな」
「はい……」

俺はもう一度、サクヤさんに深々と頭を下げた。

その時。

「ま、待って！？　もう一度、彼と話をさせて！」

“ＧＳＭＯ（グスモ）”に連行されようとしている吉川サヤが、俺の姿を見つけた瞬間、わめきちらした。
そんな彼女に、俺は三人と一緒に近づくと。

「何か用かよ」

そう、冷たく言い放った。

「っ！　お願い！　アレだけは……『おばあちゃんのオルゴール』だけは、絶対に壊さないで！」

「オイオイ……またそれかよ。いい加減、虫がよすぎるぞ。なんでこんな真似したオマエのお願いを聞いてやらないといけないんだよ」

吐き捨てるようにそう言うと、吉川サヤが懲りずに俺に縋(すが)りついてきた。

「お願い！　何でもします！　何だったら、賀茂くんにしてあげたようなこと……ううん、もっとすごいことだって……！」

その言葉を聞いた瞬間、俺の中で気持ち悪いナニカがこみ上げてきた。

忌避……嫌悪……侮蔑……そんな色んなものがない交ぜになった、ナニカが。

だけど。

「……そんなものいらねーよ。その代わり、オマエは賀茂が何をしているか、何をされたか、何をさせられたか……それを“ＧＳＭＯ(グスモ)”に洗いざらい話せ。そしたら、オマエの大切なものは壊さないでいてやる」

「っ！　ほ、本当に！　絶対よ！」

俺はわざとそう言ってやると、吉川サヤは、ぱあああ、と満面の笑みを浮かべ、その後は大人しく“ＧＳＭＯ(グスモ)”の職員に連れて行かれた。

それを自白することが、自分自身を傷つけ、破滅に追いやられる

ことになることに、気づきもしないで。

「はは……これで、賀茂の奴も終わり、だな」

そう……ここまで話が大きくなり、しかも、吉川サヤの供述も取れれば、当然ながら賀茂がこれまでしでかしたことも明るみになる。

アイツのことだから、全部ヒロイン達に罪を押し付けて逃げ切ろうとするだろうけど、それだって、壊れてしまった吉川サヤは、『賀茂の指示でやった』と話すだろう。

そうなれば、アイツも共犯として処罰されることになる。

賀茂……オマエはこれから、この世界の、社会のルールに則って、裁かれるんだよ。

そして、吉川サヤも終わるけど。

「はは……俺、ちょっと外の空気吸ってきます」

そう言うと、俺はマンションの外に出た。

「ンー……！」

まだ薄暗い深夜の中、軽く伸びをしていると。

「あ……」

後ろから、ギュ、と優しく抱きしめられた。

「アナタは……何も悪くないわヨ……」

しかも、プラーミャかよ……。

「はは……当然だろ？　なんで俺が悪いんだよ……」

「アナタは、悪くなイ……悪いのは、彼女達にあんな真似をさせた賀茂カズマと、本当に大切なものに気づいていない、彼女達だからラ……だからラ……」

そう言うと、プラーミャが抱きしめる力を強めた。

「ありがとう……プラーミャ……」

静かにお礼を言うと、そっと、プラーミャの小さな手に俺の手を添えた。

アナタは、悪くなイ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

呼び出し（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

呼び出し

「オイオイ……早速かよ……」

そのまま朝を迎え、一旦家に帰って準備を整えてから俺はサクヤさんと一緒に登校すると、学園中がざわついていた。

もちろん、昨夜の一件で。

「……さすがに広まるのが早い気がするが……それもやむなし、か……」

「？　どういうことですか？」

ポツリ、と呟くサクヤさんに、俺は尋ねると。

「ああ……今朝、お父……学園長から聞いたが、賀茂カズマと関係があった生徒全員を、“ＧＳＭＯ（グスモ）”が朝一番で聞き取りを行うそうだ。それも、今までのようなぬるいやり方ではなく、正式に事件として、な……」

「そうですか……」

まあ、それも仕方ない。

アイツ等は、それだけのことをしでかしたんだ……って。

「そうすると、加隈と土御門さんはどうなるんですか？」

「ん？　ああ……二人に関しては、学園長の話ではまだ“ＧＳＭＯ（グスモ）”としてもつかんでいないみたいだし、今回の聞き取りの対象にはならないだろう」

サクヤさんのその言葉に、俺は安堵の息を吐いた。
吉川サヤに告げた言葉通りなら、俺もあの二人を切り捨てるのが正しいんだろうけど……俺だって、そんな簡単に割り切れたりはしない。

すると。

「……君が気に病むことなんて、一切ないんだ。彼女達がしでかしたことは、たとえ自分の意思ではないにせよ、それでも実行したことには変わりない。そして、大切な友人である加隈くんと土御門くんの身を案じることだって、なにも悪いことじゃない」

そう言って、サクヤさんは俺の手を握ってくれた。
はは……プラーミャといい、サクヤさんといい……なんで俺の大切な人達は、こんなに優しいんだよ……。

「はい……ありがとうございます……」
「ん……」

そして、俺とサクヤさんは手を繋いだまま、校舎の中に入ると。

「サクヤさん……学園長がお呼びです……」
「そうか……ヨーヘイくん、すまないが私はここで」
「あ、はい」

呼びに来た“ＧＳＭＯ（グスモ）”の職員と一緒に、サクヤさんは学園長室へと向かう。

俺はそんなサクヤさんの背中を、見えなくなるまで眺めていた。

◇

「ヨーヘイ！　おはようございますワ！」

教室に入るなり、満面の笑みを浮かべたサンドラが駆け寄ってきた。

昨日の夜にあんなことがあって、なのに、こんなに明るく振舞うなんて……。

「はは……おはよう、サンドラ……」

「フエ……」

気づけば、俺はサンドラの頭を優しく撫でていた。

サンドラの気遣いが嬉しくて。

サンドラの思いやりが嬉しくて。

「フン、朝からサンドラに馴れ馴れしく触らないデ！」

すると、プラーミャが俺とサンドラの間に割って入ってきた。

「プラーミャも……昨日はありがとな……」

「ニャ！？　べべ、別ニ！」

はは、プラーミャが珍しく照れてやがる。

「そ、そんなことより！　ここまで話が大きくなったんだから、次は当然、あの賀茂カズマをやっつけるんでショ！」

「ああ」

プラーミャの照れ隠しの言葉に、俺は力強く頷く。
こうなったら、もう賀茂の奴に逃げ場はない。
後は、ヒロイン達から奪ったキーアイテムを回収すれば……「ヨーヘイくん！」……って、アオイ？

「どうした、そんなに慌てて」
「た、大変だよ！　賀茂カズマ達が、いなくなっちゃったんだ！」
「どういうことだ？」

アオイの言っている意味が分からず、俺は思わず尋ね返す。

「ボ、ボクもさっき加隈くんの様子を見に一―二に行ったんだよ！　そしたら加隈くん、学園に来てなくて、電話をかけてもつながらなくて！　それで、今度は一―一の教室から出てきた“ＧＳＭＯ（グスモ）”の職員達が、『賀茂カズマが行方不明だ』って会話をしているのを聞いて！」
「「「っ！？」」」

その説明に、俺達は息を飲む。
つまり、吉川サヤが俺達に捕まった時点で、こうなることを予測して先手を打って逃げたってことか……？

「だけど、今さらそんな真似をしたところで、さすがに国相手に逃げ切れるわけないだろうに……」

そう呟き、俺は腕組みをして思案する。

大体、俺はただこの世界が『ガイスト×レブナント』っていうゲームの世界で、『攻略サイト』でそのことを知ってるってだけの、ただのクソザコモブの存在だ。

そしてそれは、賀茂も同じなわけで。

「なのに賀茂は、自分が特別なんだって、勘違いしやがったんだな……」

そう言ってはみるものの、俺だってそんな気持ちがないかといえば、それは嘘になる。

ただ……俺は、恵まれていただけだ。

「「ヨーヘイ……」」

「ヨーヘイくん……」

見ると、三人が心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

そうだ……俺には、心配してくれる……傍にいてくれる大切な人達がいる。

アイツには、そんな奴がいないんだろうな。

「そうだな……サクヤさんと中条と合流して、アイツ等が行きそうな場所を探……っ！？」

――ピコン。

その時、俺のスマホから、メッセージの着信音が鳴った。

俺はポケットからスマホを取り出し、画面を確認すると……送り主は、加隈だった。

「誰からなノ？」

「ああ……加隈の奴だ」

尋ねるプラーミャにそう告げて、俺はメッセージアプリを開く。

そこには。

『“バベル”領域（エリア）に来い』

そんな、たった一行のメッセージだけがあった。

俺は三人を見つめながら、ゆっくりと告げる。

「行こう……“バベル”領域（エリア）へ」

呼び出し（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

わらわの認めた男（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

わらわの認めた男

「さあて……」

加隈からメッセージが届いた後、俺達はサクヤさん、中条と合流し、授業をサボって“バベル”領域（エリア）の扉の前に来ている。

もちろん、賀茂カズマとケリをつけるために。

「クク……こちらが六人であるのに対し、向こうは土御門達を含めて十六人。倍以上の戦力差だな」

「ああ……」

くつくつと笑う中条に、俺は静かに頷く。

確かに、数の上ではこちらが圧倒的に不利だ。しかも、賀茂の奴も『攻略サイト』か、それに近いナニカを持っている。

当然、自分自身とヒロイン達の強化はしてあるはずだ。

だけど。

「……コッチには、サクヤさんと中条が……サンドラが、プラーミャが、そして、アオイがいる」

そう。俺達には、『ガイスト×レブナント』における最強の精霊（ガイスト）使いと、その次に強い奴、さらには主人公だっているんだ。

それだけじゃない。サンドラだって、ゲームに名前しか登場しないプラーミャだって、本来のゲームの仕様とは違う強さがあるんだ。

そして……『ガイスト×レブナント』最弱だった俺には、最速で最高の相棒がいる。

だから。

「賀茂……オマエが“バベル”領域（エリア）で手ぐすね引いて待ち構えていようが、俺達は絶対に負けない……いや、俺がこの最高の人達と一緒に、返り討ちにしやるよッッッ！」

「「「「「おー！」」」」」

俺達は気勢を上げると、いよいよ“バベル”領域（エリア）の扉をくぐる。

「……誰もいませんわネ」

「そうだな……だけど、階層を進んで行けば絶対にいるはずだから、警戒は怠らないようにしよう」

俺達はいつも以上に慎重に、そして、最短距離で各階層を進んでいく。

途中、わらわらとヘリオガバルスが現れるのは鬱陶（うっとう）しかったけど、今じゃ賀茂よりもこの幽鬼（レブナント）のほうが可愛く見えるってんだから、いよいよ憎さ極まれりって感じだ。

「ふむ……次で第十階層、か……」

上へと続く階段に足を掛けたところで、サクヤさんがポツリ、と呟く。

「そうですね……キリがいいですし、ひょっとしたら第十階層で待ち構えているかもしれません」

「そうだな……それに、さすがに賀茂カズマや他の連中も、それほ

ど上の階層まで進んでいるとも思えん」
「ええ」
サクヤさんの言葉に、俺は頷いた。
「だけど……どうしてアイツは、この領域（エリア）に逃げ込んだんだろう？」
アオイが誰ともなく尋ねるけど、俺からすればアイツがここを選んだことに、少しだけ頷ける。
まず、この“バベル”領域（エリア）は、二周目特典の五つの領域（エリア）の一つであること。これは、少なくとも『攻略サイト』でその存在を知っている俺を除けば、普通なら誰も知らない領域（エリア）だってことだ。
オマケに、ここの幽鬼（レブナント）もゲーム本編の領域（エリア）と比べれば難易度が高く、おいそれと賀茂を追いかけることもできない。
じゃあ残る四つの領域（エリア）のどれかでもいいじゃないかって話もあるけど、“アルカトラズ”、“アトランティス”、“葦原中国（あしのはらなかつくに）”の三つに関しては、既に俺達が踏破済みだから、仮にその三つのどれかに逃げ込んだとしたら、領域（エリア）を知り尽くしている俺達に分がある。
残る一つの領域（エリア）、“金剛界”領域（エリア）って可能性もあったけど、『ガイスト×レブナント』最長の領域（エリア）であるここを選んだほうが、時間が稼げるからな。
で、俺達をここで倒した上で、全部の責任を俺になすりつける……ってところまでが賀茂のシナリオなんだろうけど。
「……まあ、俺達がやることは、賀茂の野郎をぶちのめして、サッ

サと退場してもらうだけだ」

この、『ガイスト×レブナント』っていうゲームのシナリオから、な。

「あはは、そうだね。じゃあもちろん、その役目はヨーヘイくんがしてくれるんだよね？」

アオイは、俺の顔を覗き込みながらそう尋ねる。

だから。

「ああ！　俺と［シン］で、必ずな！」

『はう！　なのです！』

俺と［シン］は、みんなに向けてガッツポーズをしてみせた。

「ふふ……露払いは、この私達に任せてくれ」

「エエ！　どんな相手でも、このワタクシが全て防いでみせますワ！」

そうして最高の雰囲気のまま、俺達は第十階層の階段を昇り切ると。

「ホホ……こんなところまで、わざわざご苦労じゃのう？」

現れたのは、土御門さんとヒロイン達……全部で十人かな。

「……土御門さん、君が最初に相手してくれるのか？」

「ホ、異なことを。そんなことは、見れば分かるえ？　［導摩法師

」」

土御門さんは［導摩法師］を召喚すると、紙片をばらまいて何体もの【式神】を出した。

相変わらず、厄介なスキルだな……。

「ホホホホホ！　こうなっては、圧倒的に戦力に差があるのう！　……さて、望月……どうするのじゃ？」

勝ち誇るように高笑いをしたかと思うと、急に真剣な表情になった土御門さんが、アメジストの瞳でジッと見つめる。

どうするって？　そんなの、決まってる！

「もちろん、俺達は賀茂のところへと向かう。そして、俺達がアイツをブッ倒す！　たとえ、君が邪魔をしてもだ！」

「ホホ！　それでこそ、望月ヨーヘイ！　わらわが認めた男じゃ！」

嬉しそうにそう叫ぶと、土御門さんは突然クルリ、と翻り、残る九人のヒロイン達を見据えた。

わらわの認めた男（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

吉備真備（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

吉備真備

「ホホ！　それでこそ、望月ヨーヘイ！　わらわが認めた男じゃ！」

嬉しそうにそう叫ぶと、土御門さんは突然クルリ、と翻り、残る九人のヒロイン達を見据えた。

「つ、土御門さん……君は、賀茂の奴に『揚羽蝶紋入り扇』を賀茂に奪われて、従っていたんじゃないのか……？」

俺は事態が飲み込めず、おずおずと尋ねる。

すると。

「ホホ、まさか！　そもそも、あやつに奪われたのはレプリカじゃ！」

「レ、レプリカあ！？」

そんな答えを聞いて、驚きのあまり、俺は思わず声を上げた。

「ホホホホホ！　あのような大切なもの、普段から持ち歩くような愚かな真似をするわけがなかろう！　立花から受け取ってすぐ、本家である実家に渡しておるわ！」

「は、はあ……」

腹を抱えて笑う土御門さんに、俺は気の抜けた返事をする。

「フフ……全く、シキからメッセージをもらった時は驚いたワ。『

仲間と偽って、いざという時に裏切ったほうが賀茂カズマに与えるダメージが大きいから』って、そんなメッセージを送ってくるんだもノ」

「プ、プラーミャ、お前知ってたの！？」

「エエ。賀茂カズマの仲間として現れた前日の夜にネ」

な、何だよ……知ってたんなら、ちゃんと教えろよ……。

「ホホ……それに、仮に本物を奪われたとしても、お主を裏切るなぞあり得ぬとも。お主は……このわらわに、大切なものを二つもくれたのじゃから……」

「へ……？」

い、いや、『揚羽蝶紋入り扇』はアオイが渡したモンだし、俺はこれといって何かをあげてなんか……。

「ホ……まあそういうことゆえ、ここはわらわに任せて皆は先へ行くのじゃ」

「ちょ、ちょっと待て！？　ひょっとして土御門さん、一人で相手するつもりなのか！？」

い、いや、いくらなんでもそれは無茶だろ！？

相手はヒロインが九人、しかも賀茂が精霊（ガイスト）のステータスアップを施し済みってことを考えたら、明らかに分が悪すぎる！

「ホホ、望月よ……わらわを侮るな。わらわは……わらわは、お主にもらったのじゃ！　華族としての誇りを！　矜持を！　そして、その優しさを！」

土御門さんがおもむろにカバンから何かを取り出す。

「あ……」

あれは『攻略サイト』から書き写した、“グラハム塔”領域（エリア）の『攻略ノート』……。

「じゃから……わらわは絶対に負けぬ！　見るがよい！」

そして、土御門さんが［導摩法師］の背中にそっと触れると。

「クラスチェンジ……開放！」

「えええええ！？」

そう叫ぶやいなや、［導摩法師］が幽子の渦に包まれる。

い、いや、確かにクラスチェンジの条件は全部満たしてるけど、それにしてもここでかよ！？

それに、クラスチェンジなんかしちまったら、確かにステータスはアップするが、特殊スキルである【式神】がなくなっちまう！

そうなったら……それこそヒロイン九人の相手は絶対に無理だ！

「クソッ！　プラーミャ！　悪いが土御門さんをサポートして一緒に……「フフ、私（ヤー）がサポートする必要なんてないワ」……って、何言ってんだよ！？」

「ヨーヘイこそ何を言ってるノ？　私（ヤー）と戦った土御門シキを、みくびらないデ。だから……アナタは黙って見てなさイ」

プラーミャにピシャリ、と言われ、俺は思わず口をつぐんでしまった。

だ、だけど、土御門さんもプラーミャも、どこからそんな自信が

……って!?

徐々に幽子の渦が霧散し、中からクラスチェンジした土御門さんの精霊（ガイスト）がその姿を現わす。

それは。

「……［ヘル］、じゃない……」

現れたのは、［導摩法師］と同じように、漆黒の生地に金の五芒星の刺繍を施した東方国の華族の男性用装束をまとい、腰には黄金の太刀を佩（は）いた、黒髪美人のお姉さんが現れた。

「ホホ……これこそが、わらわの生まれ変わった精霊（ガイスト）……［吉備真備（きびのまき）］じゃ！」

土御門さんがそう宣言すると、［吉備真備］は恭（うやうや）しく一礼をした……って、イヤイヤ、みんなクラスチェンジするとゲーム通りじゃないし今さらではあるけど、それでも驚くに決まってる！

「ホホ、【式神使（しきしんし）】」

そう言って［吉備真備］が紙片をばらまくと……あれは、【式神】!?

だ、だけど、鬼をベースにした【式神】とは違って、よく見ると、狛犬……かなあ？

「この【式神使】は神獣であるがゆえ、鬼よりも強いのじゃて。そして……当然、いくらでも生み出すことができるえ？」

［吉備真備］はさらに紙片をばらまき、次々と【式神使】を出現させる。

「ホ……これで、わらわが大丈夫だということが分かったじゃろ？」

そう言って、扇で口元を隠した土御門さんがニコリ、と微笑んだ。

た、確かにあの［導摩法師］をさらに強化した感じだし、対等に戦えるのかもしれない。

「分かった……だけど、これだけは約束してくれ。絶対に、無茶はしないと。いざとなったら逃げだしたって構わないから」

「ホホ……承知。その時は、お主の元へ逃げるとするかの」

はは……全く、こんな冗談ばっかり言って……。

「ああ！　その時は、この俺が全力で君を守るから！」

「ホ！？　そそ、そうじゃの……」

ん？　あんなに余裕の表情だった土御門さんが、わたわたしながら扇で顔を隠してしまった……。

「と、とにかく！　望月は早く先に行くのじゃ！」

「お、おう、分かった……みんな、行こう」

土御門さんに促され、俺はみんなに声をかけて先へと急ぐ。

そして。

「頑張れ！　土御門さん！」

「っ！　ホホ！　当然じゃ！」

俺はクルリ、と振り返って拳を突き上げ、激励の言葉を叫ぶと、土御門さんは最高の笑顔を見せながら手を振り、俺達を見送ってくれた。

吉備真備（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クリスマスの約束（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「土御門さん……大丈夫、だろうか……」

賀茂のいる第二十階層へと向かう中、俺はポツリ、と呟く。

「フフ……シキなら大丈夫ヨ。それに見たでショ？　あの子の精霊（ガイスト）」

「ま、まあそうなんだけどさあ……」

苦笑しながらプラーミャはそう話すけど、それでも一対九、多勢に無勢だ。

「それに、シキが連中の仲間のフリをしてたのだって、連中の実力を見極めてたからヨ？」

「そうなのか！？」

「ソ。その上で倒せるって判断したんだから、ヨーヘイは気にしなくてもいいノ」

何だよ……だけど、土御門さんも無茶するよなあ……。

もし思惑がバレたら、それこそどんな目に遭ってたか分からないだろうに……。

「マア、危険を感じたらすぐに離れるようにッテ、私（ヤー）も注意していたカラ」

「そ、そうか……だけどプラーミャって、意外とお節介で仲間想いだよな」

「ッ！　ヨーヘイに言われたくないわヨ！」

「イテッ！？」

何故か顔をしかめたプラーミャに、思い切り蹴られてしまった……。

というか、相変わらず俺にだけは容赦ないなあ……。

「……サンドラ。どうやら本気で警戒しなければならない時がきたようだぞ」

「……そうですわネ。いつかこんな時が来るとは思ってましたけド……」

？　サクヤさんとサンドラ、小声で何を話してるんだ？

ま、まあいいか……。

「だけど、早く賀茂カズマをやっつけて、クリスマスの準備したいね！」

隣に並んだアオイが、ニコニコしながらそんなことを言ってきた。

というか、緊張感のない話題だなあ……まあ、暗いよりは全然いいけど。

「そうだな。いい加減、こんな面倒なことはサッサと片づけないとな。それに、プレゼントも用意したりしないといけないし……っ！？」

そう話した瞬間、サクヤさん、サンドラ、そしてアオイが瞳をキラキラさせてコッチ見てる！？

「そそ、そうだな！　わ、私ももちろんプレゼントの準備をしているとも！　うん！」

「とと、当然ですワ！　か、覚悟するんですわヨ！　ヨーヘイ！」

「うわあ……ヨーヘイくんのプレゼント、楽しみだなあ……！」

顔を真っ赤にして焦るサクヤさんとサンドラに、まるで俺からプレゼントをもらうことが既定路線だとばかりに妄想を始めるアオイ。

いやコレ、みんなの期待値がメッチャ高くない？

「マ、マア……私（ヤー）はクリスマスもプレゼントも、どうでもいいんだけド？」

嘘吐け。じゃあなんでさっきからソワソワしながら、コッチをチラ見してやがるんだよ。

「クク……クリスマス、か……」

すると中条が、くつくつと思い出し笑いをしていた。

俺はそんな中条をからかおうかと思ったけど、よくよく考えたら中条の過去は結構悲惨なので、あえて話題を振るのは止めた。

いやだって、『攻略サイト』の中条のプロフィールによると、孤児だった中条は小さい頃から施設で育って、小学生になろうかって時に『ユグドラシル計画』の一つである“全国民精霊（ガイスト）使い化”の被験者に選ばれ、それからはモルモットのように扱われてきたんだよなあ……。

しかも、計画の主任研究者だったサクヤさんのお母さんが他界したことで『ユグドラシル計画』が中断して、その隙にメイザース学園の学園長で、同じく『ユグドラシル計画』の研究者の一人だった“麻岡マキ”に連れていかれてさあ……。

挙句、サクヤさんのお母さんの意志を歪曲して引き継いだサクヤ

さんのお父さん、藤堂マサシゲの研究を入手しろと、麻岡マキからただの捨て駒として命令されて……。

「む、な、なんだ？」

「へ？　あ、ああいや、何でもない……」

「クク、変な奴だな」

くそう、不覚にも中条に同情して、泣きそうになっちまったじゃねーかよ……。

というか『ガイスト×レブナント』に登場するキャラって、どんな不幸自慢だよってくらい不遇な奴が多いんだよなあ。

あのいつもヘラヘラしながらアオイのケツ追っかけてる加隈だって、それなりに重い設定があったりするし。

いくらイベントや面白くするための設定とはいえ、このゲームを作った連中は、絶対に人の心を無視したクズ野郎だと思う。

「そ、それで！　中条も当然クリスマスパーティーには参加するんだろうな！」

「クク、我も一緒でいいのか？」

「何言ってやがる！　お前がいないと始まらないだろうが！」

そう言って、俺は半ば強引に中条と肩を組んだ。

コイツも、俺と一緒にサクヤさんを守ってくれると誓ってくれた、大事な親友だからな。

「クク……全く、貴様という奴は……よかろう！　ならば我の「デウス・エクス・マキナ」で、見事に余興を務めてみせようではないか！」

「いや、何やらかす気だよ！？」

忘れてた……コイツ、今まで壮絶な人生を送らされてきたせいで、あんまり一般常識が通じない設定だった……。

「フフ……クリスマス、楽しみだな」

「サクヤさん……はい！」

肩にポン、と手を置いたサクヤさんに、俺は元気よく返事をした。

「ヨーヘイ、ですけどその前ニ」

「ああ……賀茂を倒して、スッキリしないとな」

そう言って、次の第十五階層へとたどり着くと。

「……へえ」

そこには、大谷姉妹と佐々木キョウカ、そして、小森先輩が待ち構えていた。

クリスマスの約束（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

二人の姉妹（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

二人の姉妹

「……へえ」

“バベル”領域（エリア）の第十五階層にたどり着くと、そこには大谷姉妹と佐々木キョウカ、そして、小森先輩が待ち構えていた。

「フウン……それでアナタ達、なんで私（ヤー）達のことを睨んでるのかしラ？」

そう言うと、プラーミャはまるで小馬鹿にするかのように四人のヒロインを見つめる。

「……分からない？」

「エエ、全然」

「アンタ達のせいで、私達の人生がメチャクチャになったからでしょ！　アンタ達が……アンタ達が、余計な真似をしなければ……！」

煽るプラーミャにキレた小森先輩が、怒りに満ちた表情で難癖をつけた。

いや、なんで俺達が小森先輩達の人生壊したみたいな言われ方、されなきゃいけないんだよ……。

「……貴様達が大切なものを奪われ、あの賀茂カズマに脅迫されて望まぬことをさせられていることに関しては、ほんの少しではあるが同情の余地もある。だが！」

そう言うと、サクヤさんは小森先輩をギロリ、と睨みつける。

「だからといって賀茂カズマに加担して悪に手を染め、あまつさえそれを他人に転嫁して非難するなど、言語道断だ！」

「っ！　ア、アンタみたいな誰からも相手にされないような人に、どうこう言われたくないわよ！　どうせ大切なものもない、薄っぺらい人間なんでしょ！」

サクヤさんに一喝され、小森先輩……小森チユキがなじる。

当然、俺はその言葉が許せなくて。

「フザケルナ！　オマエなんかにサクヤさんの何が分かる！　自分が大切なものを奪われたことを棚に上げて、サクヤさんのことを悪く言ってんじゃ……っ！？」

するとサクヤさんは、俺の肩に手をおいてニコリ、と微笑み、静かにかぶりを振って制止した。

「ふふ……貴様には悪いが、私にも大切なものがある。ただ、その大切なものは……大切な人との絆は、切れたりすることも、ましてや他人に奪われるようなことも、永遠にあり得ない」

小森チユキ達に静かにそう告げると、サクヤさんは自身の左手にそっと触れる。

俺との絆である、“シルウィアヌスの指輪”に。

「ハッ！　笑える！　バケモノみたいなアンタなんかのこと慕うようなバカ、いたとしても自分のことさえも理解できない底辺のクズか、同じバケモノくらいのものよ！」

「そうそう！　言えてる！」

「ホント、笑えるし！」

駄目だ……もう我慢ならない。

コイツ等だけは、絶対に……「フフ、バーカ」……って、プラーミャ！？

「アナタ達、大切なものを奪った賀茂カズマに服従してるんでショ？　ひょっとしテ、底辺のクズって自分達のこと言ってるのかしラ？」

小森チユキ達を見やりながら、クスクスと笑うプラーミャ。

はは……相変わらず、煽りスキルは俺達の中で最強なんじゃないか？

「フフ、そうですわネ。ワタクシも、この方達のような惨めな姿にはなりたくないものですワ」

「「ネー」」

同じく嘲笑（あざわら）うサンドラと一緒に、二人が頷き合った。

「いい度胸してるじゃない！　ルーシからの留学生だか何だか知らないけど、痛い目に遭わせて病院送りに……いえ、自分達の国に送り返してやるわ！」

「フフ、聞いた？　プラーミャ」

「エエ、バッチリ」

精霊（ガイスト）を召喚して臨戦態勢になる小森チユキ達に向け、サンドラとプラーミャがニタア、と口の端を吊り上げると。

「悪いですけド、アナタ達のような不遜な輩、このワタクシ達がす

り潰して差し上げますワ。［ペルーン］」
「私（ヤー）はゴミの焼却処分が得意だから、安心なさイ。［スヴァローグ］」

二人も自分達の精霊（ガイスト）を召喚した。

「フフ……そういうことですので、ヨーヘイ達は先に行ってくださいまシ」
「この底辺のクズ達は、私（ヤー）とサンドラが躾（しつ）けておくワ」

サンドラ……プラーミャ……。

「……分かった。だけど、決して無茶だけはするなよ。二人も俺にとって、大切な人なんだからな」
「ニャ！？　わ、分かってるわヨ！」

プラーミャは眉根を寄せると、プイ、と顔をしかめてしまった。

「モウ……プラーミャもいい加減、認めなさいナ」
「……放っといてヨ」

呆れた表情を浮かべて諭すサンドラに、プラーミャは口を尖らせながら、なおも悪態を吐く。
だけどプラーミャに何を認めろっていうんだろう？

「ふふ……ヨーヘイくん、二人の実力ならこの程度の相手、軽く蹴散らしてくれるだろう。だから……私達はこの先へ」

そう告げるサクヤさんの言葉に、アオイと中条もゆっくりと頷く。

「サクヤさん……みんな……ああ、行こう！」
「ヨーヘイ！　絶対に賀茂カズマをぶちのめすんですのヨ！」
「ヨーヘイ！　チョットでも苦戦したら、タダじゃかないかラ！」

先へ進もうとする俺達に向けて、サンドラとプラーミャはメイスとハルバードを突き出して激励した。
はは……二人にそう言われたんじゃ、やるしかないよな！

だから。

「任せろ！　お前達もそんな残念ヒロイン共、全員ぶちのめしてやれ！」
「「エエ（ダー）！」」

俺も右手を掲げて応え、次の階層へ向けて駆けた。

二人の姉妹（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

待っていたのは（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

待っていたのは

「二人共……気をつけろよ……」

サンドラ、プラーミャの二人と別れ、俺達は第十八階層にたどり着くと、早速現れた幽鬼（レブナント）、ルキウス・アルクィヌニウスを瞬殺した。

で、俺は二人と別れてからここまで、幾度となく振り返ってはそんなことを呟いていたりする。

「ふふ……大丈夫だよ、ヨーヘイくん。君だって、あの二人の強さは知っているだろう？」

「そ、それはそうですけど……」

サクヤさんはそう言うけど、小森チユキをはじめとしたヒロイン達も賀茂によってステータスの底上げがされているはずだし、何より、サンドラとプラーミャの二人に対して向こうは四人。数の上でも二人が不利だ。

とはいえ、俺だって二人の勝利をこれっぽっちも疑ってるわけじゃない。

ただ……心配してしまうのはどうしようもない。

「まあ、ヨーヘイくんが心配性なのは、今に始まった話ではないが、な」

そう言って、サクヤさんは苦笑する。

うぐぅ、否定できない。

「クク……ここまで第十階層で九人、第十五階層で四人が待ち構えていた。となると、後は……」
「……ああ。残るは賀茂と、加隈の二人だ」

中条の言葉を引き継ぎ、俺は静かに答える。
ただしこの数も、“ＧＳＭＯ（グスモ）”の調査で判明しているのが、だけどな。

「ねえ、ヨーヘイくん」
「ん？　どうした？」

いつになく神妙な面持ちで声をかけるアオイ。
一体どうしたんだろう……。

「加隈くんがもし、ボク達の前に立ち塞がった時、その時は……このボクに戦わせてほしいんだ」
「アオイが？」

アオイの申し出を受け、俺は一瞬キョトン、としてしまった。
いや、もちろん加隈が立ち塞がるのなら、俺達は友達であるアイツを倒さないといけない。
特にアオイの場合、いつも鬱陶しそうにしてはいるものの、アイツとは同じチームでもあるから、俺なんかよりも戦いづらいはずだろうに。

「あはは……加隈くんって、いつもはかなりウザいんだけど、それでもボクの大事な仲間だし、こんな時くらいは、ちゃんと相手してあげようかな、って」
「そっか……そうだな……」

苦笑するアオイに、俺は頷く。
まあ、加隈の奴にしても、大好きなアオイに痛めつけられるなら本望だろ。

「クク……第十九階層への階段が見えたぞ」
「ああ」

俺達は、次の階層へと続く階段を駆け上がる。

すると。

「……ヨーヘイ、立花、師匠、中条」

加隈が、悲しそうな表情で待ち構えていた。

「よう……まさか、お前一人で俺達の相手をさせられたのか？」
「……」

加隈は無言で後ろへと振り返る。

そこには。

「ふふ……遅かったですね、みなさん」
「氷室くん！？」

なんと、カズラさんがニタア、と口の端を三日月のゆに吊り上げて現れた。

「……君も、賀茂カズマに大切なものを奪われてしまった、という

わけか……」
「さあ、どうでしょうか」

サクヤさんの言葉を受け、カズラさんは曖昧に答えた。
だけど、カズラさんのキーアイテムは『屋上の鍵』。大切なものではあるけれど、俺達を裏切るほどのものじゃない。

「クク、まあよい。貴様も他の者達と同様、我等と戦うためにここにいるという理解でよいか？」
「ええ、そう受け取っていただいて構いません」
「そんな！？」

さあて……この二人を突破すれば、次はいよいよ賀茂の奴を残すのみ、なんだけど……。

「ヨーヘイくん……さっき話した通り、加隈くんとはこのボクが戦うから」
「っ！？　た、立花と戦う、のか……」

アオイの言葉を聞き、加隈は唇を噛む。
まあ、加隈としてはアオイと戦いたくはないんだろうけど、それでも、アオイは覚悟を決めて対峙してるんだ。

だったら。

「加隈……お前も賀茂の下について俺達と戦うことを受け入れたんだろう？　なら、目を逸らさずにアオイと戦え！」
「っ！」

そう……コイツだって、覚悟を決めてここにいるんだ。

なら、もう戦う以外の選択肢はないんだよ。

「……チッ。ヨーヘイもキツイこと言いやがるよな……」

「ならお前は、お前の大切なものを諦めるのか？」

「……いや、それはゼッテー無理だ。つか、こんなことになるんなら、もっと大事にしておくんだったよ……」

俺の問いかけに、加隈は自嘲気味に笑う。

だけど……その瞳は、覚悟が決まったみたいだ。

「ヨーヘイくん……氷室くんは、この私に任せてはもらえないだろうか？」

「サクヤさん？」

意外にも、サクヤさんが氷室先輩の相手を買って出た。

「ふふ……やはり、氷室くんはこの私の大切な友達で、そして対等なライバルだからな……立花くんと同じく、彼女の相手をすべきはこの私だ」

「そうですか……」

サクヤさんの言葉を受け、俺はそう呟く。

そして。

「中条……ここはサクヤさんとアオイに任せて、俺達は賀茂のところへ向かおう」

「クク……だが、この二人が我等をすんなりと通してくれるか？」

くつくつと笑いながら中条はそう尋ねるが、それについては問題ない。

俺はゆっくりと歩を進め、カズラさんと加隈、二人の間をすり抜けて先に進もうとするが。

――ス。

カズラさんが身を引き、俺に進路を譲ってくれた。

「……加隈。お前の大切な、『形見のライター』は俺が必ず取り返す。だから……ちょっとアオイと遊びながら待ってろ」

「っ！？　お前、なんでそれを！？」

目を見開く加隈の問いかけを無視し、今度はカズラさんに向き直る。

「……望月さん、賀茂カズマはこの上……第二十階層であなたを待っています」

「そうですか……」

「それと……みんなの大切なものは、賀茂カズマが別の場所に保管しています。それで……」

するとカズラさんは、俺の傍に寄ってそっと耳打ちした。

はは……さすがはカズラさん、だな。

「じゃあ……後は任せました、カズラさん。行くぞ、中条」

「ウ、ウム……」

珍しく困惑の表情を浮かべる中条を引きつれ、俺は第二十階層へ

と続く階段に、足をかけた。

待っていたのは（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

一体の幽鬼（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

一体の幽鬼

「そ、それで、先程の氷室カズラとのやり取りは一体なんだったのだ！？」

「はは、まあまあ……」

階段を昇る最中、中条の奴がしきりに尋ねるが、俺は適当にはぐらかす。

だって、俺は賀茂の精霊（ガイスト）のスキルを何一つ知らないんだ。ひょっとしたら、この会話だって聞かれている可能性だって考えられる。

だから、迂闊なことをまだ話すことはできない。

「とにかく、全ては賀茂の野郎をぶちのめしてからだ。だから中条……頼りにしてるぞ！」

「っ！　……クク」

バシン、とその背中を叩くと、中条が嬉しそうに含み笑いをした。

はは……コイツも、こんな笑顔を見せるんだな……。

そして、とうとう俺達は賀茂のいる第二十階層へと到着した。

「む……てっきり待ち構えていると思ったのだがな……」

「ああ……」

俺と中条は辺りを見回すが、少なくとも視界には賀茂の奴はいない。

「となると、この第二十階層をくまなく探すしか……「はは、その必要はない」……っ！？」

振り向くと、賀茂と、賀茂の一精霊である［瀬織津姫（せおりつひめ）］が俺達の背後にいた。

だ、だけど、一体いつの間に！？

「賀茂……！」

「オイオイ、そう睨むなよ。それよりも、少し場所を変えよう。コッチだ」

賀茂と［瀬織津姫］は踵（きびす）を返し、スタスタと階層の奥へと歩いていってしまった。

「……中条、俺達も行こう」

「……そうだな」

無造作に歩く賀茂の背中を眺めながら、俺達もその後をついて行く。

もちろん、罠の可能性だってあるわけだから、最大限に警戒をしながら。

「ここだ」

「っ！？　こ、これは……！」

なんと、第二十階層の中央に、かなりの広さの部屋があった。

もちろん、本来の“バベル”領域（エリア）にはないはずのものが。

「む、ここは、何か特殊な階層なのか？」

「はは、そんなわけあるかよ。これは、オレが作ったんだ」

「「作った！？」」

そんなバカな！？　元々この領域（エリア）は入り組んだ迷路みたいになっているところだぞ！？

それを、こんな広さの部屋を作るとなると、一体どれだけの壁を壊したっていうんだよ！？

「まあ、オレの精霊（ガイスト）ならこれくらい簡単だからな。オマエの、ただ速いだけの精霊（ガイスト）と違って」

「っ！　何だと！」

［シン］を馬鹿にされ、俺は思わず声を荒げる。

俺の……俺の相棒を、よく知りもしないで！

「はは、だってそうだろ？　オマエの［神行太保（しんこうたいほう）］はスピード特化型の精霊（ガイスト）だ。まあ、どうやってその精霊（ガイスト）を手に入れたのかは知らねーけど、あのゴブリンが強くなるには、他に選択肢がないから仕方ないか」

そう言うと、賀茂はヘラヘラと笑った。

確かにコイツの言う通り、初期の精霊（ガイスト）がどれであっても、条件なくクラスチェンジできる精霊（ガイスト）は、限定コード配布の［神行太保］しかない。

だけど。

「［シン］は……いや、［ゴブ美］は、俺と一緒に死ぬような思いをして、それでようやくこの姿を手に入れたんだ……たった一つの奇跡をな！　それを！　オマエごときが語るなあああああ！」

「ははははは！　オイ、聞いたかよ！　その奇跡とやらで手に入れ

たのが速いだけの精霊（ガイスト）だなんて、笑うしかねーだろ！」
『はうはうはう！　マスターの言う通りなのです！』
腹を抱えて笑う賀茂に同調し、［瀬織津姫］も一緒になって笑う。
クソが！　俺の相棒を馬鹿にしやがって！
すると。
『プークスクス、ソッチこそ、［シン］のスピードを見たら驚くこと請け合いなのです！　後でほえ面をかくことが確定なのです！　決定事項なのです！』
ニュ、と俺の背中越しに現れた［シン］が、見下すような視線で嘲笑（ちょうしょう）した。
［シン］……。
『この［シン］と同じ話し方をするバカは知らないのです！　［シン］が最速だということを！』
『はう！　ただ速いだけの分際で、偉そうなのです！　マスター！　このチビをやっつけてやるのです！』
どうやら［シン］の言葉が癇（かん）に障（さわ）ったらしく、［瀬織津姫］が顔を真っ赤にして怒る。
はは、この精霊（ガイスト）、煽（あお）り耐性がかなり低そうだな。
「オイオイ、それくらい言わせてやれよ……だって、コイツは速さしか取り柄がないんだぞ？　しかもその速さだって、お前と同じなんだし」
『はう……ですけど……』

賀茂が苦笑しながら窘めると、［瀬織津姫］がシュン、と落ち込んだ。

「ふうん……だけど、オマエの［瀬織津姫］が［シン］と同じ速さだなんてあり得ねーだろ。ただのモブですらない、オマエの精霊が」

そう……俺の［シン］は、主人公や最強の精霊使いであるサクヤさん、中条も差し置いて最速の精霊なんだ。

ただでさえ主要キャラの精霊のステータスは圧倒的なのに、登場すらしない奴の精霊のステータスがそれ以上に高いなんてことはあり得ない。

「はは……オマエ、ちゃんと『攻略サイト』を読み込んだのか？」

「っ！？」

ニヤニヤと馬鹿にするように俺に問いかける賀茂。

だけど……俺の頭はそれどころじゃない。

コイツ、今……確かに言った。

『攻略サイト』、と。

「アレにもバッチリ書いてあっただろ。精霊を最強、最悪にすることができる、たった一つのイベント用アイテムのことが」

賀茂の言う、『最強、最悪にすることができる、たった一つのイベント用アイテム』……って！？

「まさかっ！？」

「はは！　そのまさかだよ！　［瀬織津姫］！」

『ハイなのです！』

賀茂の叫びに呼応し、［瀬織津姫］がス、と賀茂の前に立った。

すると……賀茂はポケットから青銅のレリーフを取り出した！？

やっぱり！　あの野郎、アレに手を出してやがった！

「［シン］！　賀茂の奴が持っている、あの青銅のレリーフを奪え！」

『！　了解なのです！』

俺の指示を受け、［シン］は一気に賀茂に詰め寄る。

だけど。

「はは！　間に合わねえよ！　【反魂（はんごん）】！」

賀茂の宣言に合わせ、［瀬織津姫］の身体が禍々しい幽子に包まれた。

チクショウ！　間に合わなかったか！

「……望月ヨーヘイ、これは一体何なのだ……？」

顔を引きつらせ、中条が尋ねる。

「これは……最悪の幽鬼（レブナント）を呼ぶ儀式、だよ……」

俺はポツリ、と呟いた。

そう……『ガイスト×レブナント』にはいくつかのバッドエンド

が存在する。
ラスボス戦で全滅する場合、謎を全て解かずにラストを迎えた場合のほかに、もう一つ。
それは。
「『闇堕ち……エンド』……」
禍々しい幽子の渦が薄れ、その中から現れたのは。
――額から一本の角を生やした、一体の幽鬼（レブナント）だった。

一体の幽鬼（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

火蓋（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

火蓋

禍々しい幽子の渦が薄れ、その中から現れたのは、額から一本の角を生やした、一体の幽鬼（レブナント）だった。

その容姿は、元の［瀬織津姫（せおりつひめ）］とは打って変わり、その顔に花魁（おいらん）のような紅化粧（べに）を施し、上半身は胸元が大きく開いた鈴懸（すずかけ）、下半身は不釣り合いなホットパンツ、さらには金属の手甲と金属のブーツをまとい、その両手には二振りの剣（つるぎ）を携（たずさ）えていた。

「チクショウ！　賀茂の野郎、最悪だ！　この世界をメチャクチャにする気かよ！？」

「も、望月ヨーヘイ、何を言っている！？」

困惑した中条が、叫ぶ俺の肩を揺すりながら話しかけるが、今は相手している余裕はない。

だって、あの青銅のレリーフは間違いない。

あれこそは、『死返玉（まかるがえしのたま）』。

この『ガイスト×レブナント』において、学園長である藤堂マサシゲの策略によって現実に絶望した主人公が、その魂と引き換えに世界の破滅へと導いた、最低最悪のアイテム。

主人公の精霊（ガイスト）をラスボス級の幽鬼（レブナント）へと姿を変え、その後は『世界は混乱と狂気に包まれた』と、その一行だけがエンドロールとして流れるって、『攻略サイト』には書いてあった。

つまり。

「オマエエエエエッッッ！　本気でこの世界を滅ぼす気かッッッ！」

「ははははは！　馬鹿じゃないか？　そんなわけないだろう。大体、オレはヒロインの全てをモノにして、最高のハーレムエンドを迎えるんだよ！　それに」

高笑いをする賀茂がそう答え、チラリ、と自身の幽鬼（レブナント）を見やると。

「オイ、お前はこの俺の意に反して、世界を滅ぼしたりなんて考えてたりするのか？」

『はうはう！　まさか！　［禍津日神（まがつひのかみ）］は、そんなくだらないことはしないのです！　それよりも、［禍津日神（まがつひのかみ）］はマスターと幸せな日々を永遠に過ごすのです！』

「ま、そういうことだ。だから、オレ達はこの世界を滅ぼそうなんて、これっぽっちも考えちゃいない。それどころか、ラスボスも、真のラスボスも、このオレがキッチリ倒してやるつもりだよ」

そう言うと、賀茂は口の端を持ち上げる。

「……俺がその話を信じるとでも思っているのか？」

「いや？　別に信じてもらおうとも思わないし、そもそも、オマエにはこの世界から退場してもらうつもりだし」

「っ！？」

その言葉に、俺の背中に冷たいものが走った。

つまりコイツは、この俺を消し去ろうと……そう考えてるってことか。

「はは、だってそうだろ？　オレと同じ『攻略サイト』持ちは、サッサといなくなってもらうに限る。要は邪魔なんだ、目障りなんだよ」

「まあ、な」

賀茂の言葉に、俺は首肯する。

俺だって、オマエは目障りだよ。

オマエは、サクヤさんを救う上で邪魔な存在でしかないんだから。

「はは、だからオマエは安心して死んでくれ。なあに、学園長や“GSMO”の連中も、オマエを殺した後にこのオレがキッチリ潰してやるから。それでオレの生活は、今まで通りだ」

『はうはう！　さすがはマスターなのです！　［禍津日神］は、そんなマスターと一緒になれて幸せなのです！』

そう言うと、幽鬼……［禍津日神］は恍惚の表情を浮かべて賀茂を見つめる。

ここまでの賀茂と［禍津日神］の会話を聞いて分かった。

もう……コイツ等は壊れてやがる。

それが、あの『死返玉』の影響によるものなのかどうか、それは分からないけど、な。

だったら。

「……賀茂。オマエは、もうニンゲンをやめるってことでいいんだな？」

「ハッ！　何を言い出すかと思えば……大体、オレは特別なんだよ

！　選ばれたんだよ！　その証拠が、あの『攻略サイト』なんだよ！　だから……オレは、モブですらない自分をやめて、天辺に君臨するんだよ！　この世界でなあッッッ！」

賀茂は右の人差し指を真上へ突き上げ、高らかに宣言する。
その姿は、尊大で、傲慢で、そして、滑稽に見えた。

「そうか……だったら俺も、宣言してやるよ」

同じように、俺も右手人差し指を上へと突きつけると。

「俺は！　この『攻略サイト』の力で……最高の相棒と、最高の女性、最高の友達と一緒に、最高のハピエンを迎えてやる！　そのために……賀茂カズマ、オマエはこの俺達が潰してやる！」
「はは！　やってみやがれえええええ！　［禍津日神］ッッッ！」
『ハイなのです！』

賀茂の合図と共に、［禍津日神］は両手の剣を構えて突進する。

「［シン］！　中条！　このクズは、俺達の手で絶対に倒すぞ！」
『もちろんなのです！　こんな……こんな奴に、絶対に負けないのです！』
「クク……貴様に聞きたいことは山ほどあるが、今はこの男を全力で屠ってみせようぞ！」

［シン］も、中条の［デウス・エクス・マキナ］も、［禍津日神］に向けて突撃した。

そして。

『はうはうはう！　【爆】！　【堅】！』
「【ツァーンラート】！」
『はう！　【破敵剣（はてきのつるぎ）】！　【護身剣（ごしんのつるぎ）】！』

俺達と賀茂の、互いにとって最高の結末を手に入れるための、戦いの火蓋が切られた。

火蓋（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

それぞれの戦い①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

それぞれの戦い①

■土御門シキ視点

「ホ、ホホ……もう終わりかえ？」

望月達を送り出した後、わらわは賀茂に付き従う九人の者共と交戦しておるが……クラスチェンジをしたとはいえ、やはりこの人数差は堪(こた)えるの……。

じゃが。

「「「ク……ッ！」」」

六人は既に打倒し、残るは三人。

こうなれば、此奴等(こやつら)の実力からして、余程のことがない限りわらわが負けることはないじゃろう。

「どうして!?　私達はレベルも八十、クラスチェンジだってしているのよ!?　なのに、なんでこんな奴一人に、こんなに手こずるのよ！」

納得できないのか、女子生徒の一人が喚(わめ)き散らしておるわ。

「ホホ……レベルに関して言うのなら、わらわの［吉備真備(きびのまきび)］も八十以上じゃ。となれば、精霊(ガイスト)の元々のスペックが違うのじゃろうのう？」

わらわは扇で口元を隠しながら、クスクスと笑う。
ただでさえ頭に血が昇っておるのじゃ。わらわのこのような態度は、さぞ屈辱じゃろうて。

「フザケんじゃないわよ！　二人共、行くわよ！」
「「ええ！」」

とうとうキレた此奴等は、各々の最強のスキルで襲い掛かってきた。
ならば……これで決着をつけようぞ！

「ホ！　【聳狐】！　【炎駒】！　【索冥】！　【角端】！　【黄麟】！」

［吉備真備］が呪を唱えるように唇を動かしながら、二本の指で素早く五芒星の印を切ると、紙片が五色の霊獣へと変わる。

そして。

「さあ！　全て蹴散らしてしまうのじゃ！」
『『『『『クオオオオオオオオンッッッ！』』』』』

五体の【式神使】が、彼奴等の精霊へと向かって行く。

「キャ！？　な、何なのよコイツ！？」
「ア、アッチ行け！」
「こ、来ないで！」

三人が、にじり寄る【式神使】を追い払うように、各々の精霊が武器を振るうが……そのような腰の引いた攻撃なぞ、まるで話にな

らぬえ？

そして……五体の【式神使】は一斉に精霊（ガイスト）に飛びかかると、角を、牙を、爪を突き立て、抉（えぐ）り、裂いていった。

「ヒ、ヒイ！？　痛い！？　痛い！？」
「イヤアアアアアアッッッ！？」
「ギャ！？　ヒッ！？」

精霊（ガイスト）と痛みを共有する三人は悲鳴を上げ、床にのたうち回る。
ホホ、その痛みは想像を絶することじゃろうのう？

なにせ、五体の【式神使】の攻撃は、ただただ敵に苦痛を与える仕様なのじゃから。

「ホ……それで、どうするのじゃ？　このまま、その身が骨と化すまで耐えるつもりかの？」
「「「ヒイイ！？　お願い止めて！？　助けて！？」」」
「ホホホホホ！　どうしてやろうかのう！」

わらわはわざと高笑いをし、聞く耳をもたぬふりをした。
此奴等（こやつら）は、あの賀茂カズマに弱みを握られておったとはいえ、それでも、悪事を働いたことは事実じゃ。

それに……もしここで甘い顔をすれば、万が一にも、望月に……わらわの大切な人に、危害を加えるやもしれん。

ならば。

「ホホ……では即刻この領域（エリア）から立ち去り、全てを洗いざらい告白

するのじゃ。さすれば、今回は見逃してやる。そして」

彼女達を見回した後、すう、と息を吸うと。

「後はわらわ達が……望月ヨーヘイが、お主達の大切なものとやらを取り返してみせようぞ」

「「「「「っ！　ほ、本当に！？」」」」」

倒れている者も含め、全員の瞳に希望の光が宿る。

ホホ……全く、現金な連中じゃの。

じゃが……甘い。

「ただし……今言ったことを守らねば、その時はお主達の大切なものは、永遠に戻ってこぬと知れ」

「「「「っ！　わ、分かった！」」」」

ホ、これで此奴等は終わったの。

もう、会うこともないじゃろうて。

「ホホ、じゃから……お主達は外に出て、真っ直ぐ学園へと向かうのじゃ！」

そう言い残し、わらわは踵を返して彼女達から離れる。

さて……勝手なことを言ってしもうたが、まあ、大丈夫じゃろ。

とはいえ、あのお節介でお人好しな望月ヨーヘイのことじゃ。なんだかんだで、此奴等を助けてしまうかもしれんがの。

なにせ、このわらわをも救ってしまうような男なのじゃから。

「ホホ……［吉備真備（きびのまきび）］、わらわ達はこれから、あの男の……望月ヨーヘイの、影となるのじゃ。望月を、守るために」

『（コクリ！）』

わらわの言葉に、［吉備真備（きびのまきび）］が真剣な表情で頷く。

「ホ……ならば、わらわも望月に合流するとするかえ」

そう言ってクスクスと笑いながら、わらわは次の階層へと繋がる階段に足を踏み入れた。

それぞれの戦い①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

それぞれの戦い②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

それぞれの戦い②

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

「食らエ！　【ブラヴァー】！」

――ドオオオオオオオオオン！

ヨーヘイ達を先へと行かせ、ワタクシとプラーミャは賀茂カズマの駒である四人と交戦中、なんですけド……。

「アアモウ！　また幻ヨ！」

先程から、四人のうちの一人の【水属性魔法】で本体の幻を生み出し、ワタクシ達の攻撃が思うように当たらなイ。

本当に、面倒な魔法ですわネ……。

「サンドラ！　この【ミラージュミスト】を使う奴と、一度戦ったことがあるんでショ？　その時はどうやって倒したのヨ」

「エエト、その時ハ……」

あれハ、ワタクシがヨーヘイとの勝負にこだわって、“グラハム塔”領域（エリア）で領域（エリア）ボスのタロースと戦っていた時に、悠木サンが乱入してきたんでしたわよネ……。

フフ、今思い出したら、懐かしいですワ。

「モウ！　どうせヨーヘイとのこと考えて思い出し笑いしてるんで

ショ！　今はそれどころじゃないノ！」
「フエ!?　ゴ、ゴメンなのですワ……」
そ、そうでしたわネ……今は戦闘中ですもノ、気を引き締めないト。
あの時は、［シン］の呪符で【水属性魔法】そのものを無効化したんでしたわネ。
かといってワタクシとプラーミャに、そんなスキルはなイ。
だったラ。
「プラーミャ！　この厄介な【水属性魔法】を、アナタの炎で全て蒸発させてくださいまシ！」
「！　フフ、それいいわネ！」
ワタクシの言葉を受け、プラーミャがハルバードを構えて見えない相手に突進するト。
「サア！　姿をあらわしなさイ！　【ヴァルカン】！」
床から無数の火柱が立ち、階層の気温がみるみる上昇していク。
というか、さすがにこれはワタクシも暑いですワ……。
ということデ。
「【ガーディアン】」
ワタクシは周囲に盾を展開して、熱そのものを遮断しタ。

盾の隙間から様子を窺い、しばらくするト。

「くう……っ！」

暑さで顔を歪めた四人が、徐々に姿を現わしタ。

「フフ……やっと出てきたわネ」

そんな彼女達を眺めながら、プラーミャがニタア、と口の端を吊り上げル。

「ヒッ！？　【ミラージュ……「させるかアアアアアアアアッッッ！」」

一人が再度【ミラージュミスト】を展開しようとするけド、それよりも先に「スヴァローグ」のハルバードの刃が迫っタ。

そしテ。

「キャアアアアアアアアッッッ！？」

「お姉ちゃん！？」

ハルバードの一撃を食らイ、黒の修道服をまとった精霊が弾き飛ばされると同時に大学生の女性も倒れ、その妹と思われる学園の生徒が慌てて駆け寄ル。

当然、このワタクシがそれを見逃すはずもなク。

「隙だらけですワ！　【裁きの鉄槌】！」

「アアアアアアアッッッ！？」

まるで魔女のような白色の服をまとい、その手に杖を持った精霊（ガイスト）の脳天にメイスを叩きつけ、周囲に稲妻がほとばしル。

妹である彼女も、大学生の姉と並んでその場に倒れこんダ。

「フフ……これデ」

「エエ……あと二人」

慄く二人を見やりながら、ワタクシとプラーミャは口の端を吊り上げタ。

「ね、ねえ……提案だけど、ここで私達を見逃すことはできない……？」

「ハア！？　アンタ、何言ってるの！？」

残る二人のうちの一人……確か、ワタクシ達と同級生ですわネ……彼女が、そんな提案をすると、もう一人のワタクシ達と変わらない身長の女子生徒が、声を荒げタ。

「アンタ、分かってるノ！？　そんな真似をして賀茂カズマにバレたりしたら、私達の大切なものが永遠に戻らなくなっちゃうんだよ！？」

「っ！　じゃあ小森先輩は、この二人に勝てるっていうんですか！　あの二人を見てくださいよ！」

そう言って、同級生の彼女は倒れる二人を指差す。

「そ、それに、ひょっとしたら彼女達なら、あの賀茂カズマだって倒せるかもしれないし、何より、最強の生徒会長までいるんですか

ら！」
「う、ううう……」

フフ……二人共、本当に切羽詰まっている感じですわネ。
ですけド。

「……甘いわネ。私（ヤー）とサンドラが、見逃すと思ってるノ？」
「「っ！？」」

プラーミャの言葉に、二人が息を飲む。
モチロン、ワタクシもプラーミャの言うことに完全に同意ですワ。

だっテ。

「アナタ達は、ワタクシ達の大切な人を馬鹿にしタ」
「……別に、私（ヤー）はそんなことないけド……」
「フフ、嘘おっしゃイ。あの時のアナタの表情、どんな悪魔（デェーモン）よりも怖かったですわヨ？」
「ッ！？　モ、モウ！」

フフ……本当に、プラーミャは不器用ですわネ。
ですけド、ワタクシもこればかりは譲るつもりはないんですのヨ？

「と、とにかク！　この二人をサッサと倒して、ヨーヘイ達と合流するわヨ！」
「フフ……エエ！」

ワタクシ達の精霊（ガイスト）は改めて武器を構え、二人の精霊（ガイスト）を見据えるト。

「これデ、終わりですわヨ！　【裁きの鉄槌】ッッッ！」
「トドメヨ！　【絨毯(じゅうたん)爆撃】ッッッ！」

［ペルーン］と［スヴァローグ］がジャンプし、巨大なメイスとハルバードを叩き下ろス。

「「キャアアアアアアアアッッツ！？」」

二人の精霊(ガイスト)が吹き飛び、そのまま床に叩きつけられタ。
その身体に、焦げ付くほどの雷(いかずち)と炎を浴びながラ。

「フン！　そこで大人しく寝てるのネ！」

プラーミャが鼻を鳴らし、［スヴァローグ］がハルバードを払ウ。

「サア……行きましょウ。ヨーヘイが、ワタクシ達を待っていますワ！」
「エエ！」

ワタクシ達は、愛するヨーヘイの元へと、一気に階段を駆け上がっタ。

それぞれの戦い②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

それぞれの戦い③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

それぞれの戦い③

■藤堂サクヤ視点

「……どうした、来ないのか……？」

ヨーヘイくんと中条を賀茂カズマの元へと送り出した後、私は氷室くんと対峙している。

だが……先程、彼女はヨーヘイくんと何かを話していた、な……って、そうではないだろう！

私は気持ちを切り替えるために、ブンブン、と首を左右に振る。

「ふふ……せっかくですので、このまま藤堂さんと戦いたいのはやまやまなのですが、あと少しだけ待ってくれますか？」

「？　どういうことだ？」

氷室くんの言っている意味が分からず、私は思わず尋ね返した。

待つ？　一体何を待つというのだ？

そうしている間にも。

「あはははは！　行け！　【窮奇（きゅうき）】！」

「チクショオオオオオオ！」

立花くんの精霊（ガイスト）、［女媧（じょか）］の放った【窮奇（きゅうき）】が、加隈くんの精霊（ガイスト）である［ロキ］の身体を引き裂いた。

……どうやら、立花くんと加隈くんの戦いは、決着を迎えたようだ。

「立花さんも加隈さんも、勝手に戦うのは自由ですが、もう少し静かにしてください」

「「っ！？」」

だが、そんな二人の戦いが耳障りだったのか、氷室くんはそう冷たく言い放ち、立花くんと、倒れている加隈くんまでもが思わず息を飲んだ。

そんな氷室くんの声は、直接言われたわけではない私でさえも、うすら寒いものを感じるほどだった。

この階層に、沈黙が続く。

すると。

「っ！　接触した！」

突然、氷室くんが反応を示した。

彼女は一体、何をしていたのだろうか……。

「ふう……これでもう、戦うフリをする必要もなくなりましたね」

「！　そ、それはどういうことだ！？」

言っている意味が分からず、私は氷室くんに詰め寄る。

「そうですね……では、説明しますね」

それから、氷室くんがこれまでの経緯等を含め、全てを話してく

れた。

まず、私達が伊藤アスカと面会をした日、あの賀茂カズマから接触があったとのこと。

その時、氷室くんが大切にしている、学園の『屋上の鍵』を奪ったと告げられたらしい。

実際に確認してみると、確かにその鍵を奪われていた。

肌身離さず、持ち歩いていたはずなのに。

そして、『屋上の鍵』を返してほしければ、ヨーヘイくんを裏切って自分の駒になれ、と言ったそうだ。

だが驚くべきは、氷室くんもヨーヘイくんも、こうなることはあらかじめ予測していたと言う。

伊藤アスカの面会に氷室くんが同行しなかったのも、賀茂カズマが接触してくるのを待っていたからというのだから、この戦いが終わったら二人を説教せねばなるまい。

「……そして、いやいや従う体(てい)で賀茂カズマの陣営に潜り込んだ私は、望月さんとの打ち合わせ通り、無理やり従わされている加隈さんや彼女達の大切なものがどこにあるのか、同じく従うフリをしていた土御門さんと一緒に探っていたんです」

「そ、そうか……」

い、いや、そんな危険な真似を、ヨーヘイくんはどうしてこの私に話してくれないのだ……。

先日のサンドラとプラーミャの部屋が襲われた件もそうだ。

あの時も、私に何も言わずに一人だけで二人を守りに行って、まるで私を除け者にするかのように……。

「ふふ……このことについては、望月さんはかなり難色を示されたんですが、私が無理やり押し切ってこうしたんです」

「……」

「なので、望月さんは叱らないであげてくださいね？」

氷室くんはそう言うが、多分、私はヨーヘイくんを叱るだろう。

……いや、違う。私は、叱るんじゃなくて怒ると思う。

ヨーヘイくんが教えてくれなかったことが、悔しくて。

ヨーヘイくんに、『必要ない』と思われているんじゃないかと、不安で仕方がなくて。

「とにかく、望月さんは賀茂カズマと接触しました。これであの男が、私達の行動を監視することはできないでしょう。だから……加隈さんも、賀茂カズマの指示をバカみたいに受け入れる必要はないですよ」

「！　そ、そっか……」

氷室くんの言葉を受けた加隈くんは、ごろん、と仰向けになった。

「ハア……もう、こんなことしちゃダメだよ！」

「イテテ……お、おう……悪い……」

頬を膨らませた立花くんに叱られ、加隈くんがシュン、とする。

だが、彼の口元は緩んでいた。

「それで……これから、どうするのだ？」

「はい……賀茂カズマは、みんなの大切なものを、普通は絶対に分からないような場所に保管しています。ですので私は、これからそれを回収に向かいます」

「そうか……って、絶対に分からない場所！？」

氷室くんの言葉の矛盾に、私は思わず聞き返す。

「ふふ……他の人達なら分からないでしょうけど、賀茂カズマが私の行動を監視するように、私もあの男の行動を監視していましたから」

「あ……！」

私は、氷室くんの肩の上で誇らしげな顔で胸を張る［ポリアフ］を見やる。

そうだった、［ポリアフ］には【オブザーバトリー】があったのだ。

「なので、私は賀茂カズマが望月さんと接触するのを待っていたんです。あの男の目が、私に届かなくなるのを」

「そうだったのか……だ、だが、賀茂カズマはどうしてヨーヘイくんと接触すると、監視の目が解けるのだ？」

私はこの際なので、氷室くんに疑問をぶつけてみる。

すると。

「……それが、あの男の精霊（ガイスト）……いえ、もっとおぞましいものの能力だからです……」

いつも無表情の氷室くんが珍しく顔をしかめ、ス、と私の傍に寄

った。

そして。

「っ！？　そ、それは本当か！？」

「はい……ですので、藤堂さんは望月さんと合流し、彼を助けてあげてください。私はこの二人と一緒に、みんなの大切なものの回収に向かいます」

「い、いや！？　そのような相手だったら、君も一緒に加勢したほうが……！」

私は氷室くんも一緒に連れて行こうとするが、彼女は少し哀しそうな表情でかぶりを振った。

「……望月さんも、大切なものを人質に取られている状態だと、全力で戦えない可能性があります。だから、この私が彼の憂いを絶ってあげないと」

「氷室くん……」

「ふふ……ですから、あなたに望月さんを託します。私の代わりに、どうか彼を守ってください……！」

悔しそうな表情でそう告げる氷室くん。

私は……！

「……分かった。君の分まで、この私がヨーヘイくんを守ってみせる！　そして、君がみんなの大切なものを回収に向かったことを、彼に確かに伝えるとも！」

「はい……よろしくお願いします……」

私達は頷き合うと、お互い踵を返してそれぞれの場所に向かう。

私は、ヨーヘイくんの元へ。
氷室くんは、大切なものが保管されている場所へ。
お互いが誰よりも大切に想っている、ヨーヘイくんを支えるために。

それぞれの戦い③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

マガツヒノカミ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

マガツヒノカミ

賀茂カズマ、そして［禍津日神（まがつひのかみ）］との戦闘を開始して数分が経過し、今もその攻防が続いているが……。

「クソッ！　［シン］！」

『はうはう！　【堅……っ！？】』

呪符を展開して防御しているはずなのに、［禍津日神（まがつひのかみ）］の剣がすり抜け、［シン］へと襲い掛かる。

『はう！　【神行法・瞬】！』

間一髪、［シン］はその場を離れ、［禍津日神（まがつひのかみ）］の攻撃を躱（かわ）した。

「チクショウ！　さっきから攻撃も防御も、何も通用しねえ！」

「ク……ッ！　【ツァーンラート】！」

中条は苦し紛れに【ツァーンラート】を放つが、コッチもまた「禍津日神（まがつひのかみ）」の身体をすり抜けてしまい、ダメージを与えることができない。

「ククク……ッ！　これではまるで相手にならんッ！」

「ははははは！　オイオイ、最初の威勢はどうしたんだよ！」

俺と中条が距離を取ると、賀茂が嘲笑（ちょうしょう）を浮かべる。

あの面（ツラ）はムカツクが、たしかにこのままじゃジリ貧だ……。

さて……どうする……？

「クク……ならば、奴がおかしな真似をしようが、それ自体を無効化するほかあるまい！」

「あ！　オイ！」

飛び出す中条を制止しようとするが、そんなものお構いなしに賀茂に飛び込んでいった。

だけど……中条の言う通り、［デウス・エクス・マキナ］のチートスキルに賭けるしかない、か……。

「はは！　何だよ、ひょっとして【クロノス】で攻撃したら、［禍津日神］のスキルを無効化できるとでも考えてるのか？　浅はかだな、オイ！」

「っ！？　貴様、何故【クロノス】を知っている！」

「そんなの、あそこにいるクソザコモブに聞いてみろよ！」

「クッ！　食らえ！　【クロノス】！」

中条は賀茂の言葉を無視し、【クロノス】を放つ。

すると、瞬きをする間もなく、無数の金属の歯車が［禍津日神］のほんの数ミリの位置に突然現れ、一斉に襲い掛かった。

だけど。

「っ！？　なあっ！？」

中条が驚きの声を上げるが、それも仕方がない。

だって……あれだけあった歯車が［禍津日神］に触れるその瞬間、全て消え去ってしまったんだから。

「はは！　どうしたよ望月！　所詮（しょせん）クソザコモブは、『攻略サイト』に載ってないと何にも対処できないか？」

「……」

ケタケタと嗤（わら）う賀茂を、俺は無言で睨む。

悔しいが、賀茂の言う通りだ。

俺も『闇堕ちエンド』の内容自体は知っているが、どうやって主人公が世界を破滅に追い込んだのか、そこまで『攻略サイト』で言及されているわけじゃない。

だけど……もう一度思い出せ！

あの『攻略サイト』には、何と書いてあった？

そもそも『闇堕ちエンド』は、ゲームの攻略において主人公がヒロインや仲間キャラとの好感度が少ない場合、藤堂マサシゲの言葉に騙されたヒロイン達が最終決戦を前に主人公を裏切ってしまうものだ。

そして、打ちひしがれる主人公に近づいた藤堂マサシゲは、『死返玉（まかるかえしのたま）』を手渡し、主人公の精霊（ガイスト）を幽鬼（レブナント）に変えてしまう。

後は……すぐ傍にいた藤堂マサシゲを憎しみのまま消し去り、例の一行のエンドロー……っ！？

まさかっ！？

「空間を操るスキルかっ！？」

「へえ……クソザコモブのくせに、よく分かったな。そうさ、［禍（ま）津日神（がつひのかみ）］のスキルは、空間を自由に操る能力だよ」

チクショウ！　なんだよそのふざけたスキルは！

「ハハハハハ！　だから言っただろう！　オマエの［神行太保（しんこうたいほう）］みたいに、ただ速いだけの精霊（ガイスト）とは訳が違うんだよ！」

高笑いする賀茂を睨みながら、俺はギリ、と歯噛みする。

「オマエは！　あの『攻略サイト』でソレを……『死返玉（まかるがえしのたま）』を見つけたってことかよ！」

「いや？　コレは、言ってみたらただの偶然だ」

「偶然だと！？」

声を荒げる俺とは対照的に、賀茂はとぼけた表情で肩を竦（すく）めた。

「そうさ。確かにオレも、夏休みにたまたまエゴサして『攻略サイト』を見つけた時には驚いたよ。しかも、このオレがほんの一回だけ『賀茂』って名前が出るだけの、モブ以下の扱いなんだぜ？　許せるかよ」

「……」

「だけどな、オレの［瀬織津姫］がたまたま持っていたアイテム……それが、『死返玉（まかるがえしのたま）』だったんだよ」

「っ！？」

何だと！？　『死返玉（まかるがえしのたま）』は、藤堂マサシゲが持っていたんじゃないのか！？

「さすがにあの時は驚いたね。コレって、オレに世界を滅ぼせって意味だろ？　だから、モブ以下扱いされてキレていたオレは、こんな世界メチャクチャにしてやるって考えて、【反魂】をしてやった

んだよ」
「そ、それで……それで、どうなったんだ……？」
愉快そうに話す賀茂に、俺はおずおずと尋ねる。
すると。
「アン？　そりゃ、見ての通りだよ。［瀬織津姫］は［禍津日神（まがつひのかみ）］になって、オレは最強の称号を手に入れたってワケだ。しかも、元はオレの精霊（ガイスト）なわけだから、［禍津日神（まがつひのかみ）］」になっても絶対服従だしな」
『はうはう！　マスターを世界一お慕いしているのは当然なのです！』
［禍津日神（まがつひのかみ）］は嬉しそうにそう言うと、賀茂に抱きついて頬ずりをした。
だけど……そうか、精霊（ガイスト）使い本人が世界を破滅させようなんて考えなければ、あの『闇堕ちエンド』の結末になるとは限らない、ってことか……。
とはいえ……俺に、こんな幽鬼（レブナント）を倒すことができる、のか……？
すると。
『はうはう！　だから何なのです！　［シン］は、マスターと一緒に悪い幽鬼（レブナント）をやっつけるのが使命なのです！　だから……だからオマエなんか、この［シン］とマスターで、倒してみせるのです！』
「［シン］……」

［シン］はオニキスの瞳で［禍津日神（まがつひのかみ）］を見据える。
絶対に倒すんだっていう、覚悟と決意、そして意志を込めて。
……はは、だったらマスターの俺が、日和（ひよ）ってる場合じゃないよな。
「そうだとも！　賀茂……そして［禍津日神（まがつひのかみ）］！　オマエ達は、この俺と最高の相棒が、まとめて叩き潰してやるッッッ！」
『はう！　なのです！』
そう宣言すると、俺と［シン］は、賀茂と［禍津日神（まがつひのかみ）］に向けて拳を突き出した。

マガツヒノカミ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

最強の援軍（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「そうだとも！　賀茂……そして［禍津日神（まがつひのかみ）］！　オマエ達は、この俺と最高の相棒が、まとめて叩き潰してやるッッッ！」

『はう！　なのです！』

そう宣言すると、俺と［シン］は、賀茂と［禍津日神（まがつひのかみ）］に向けて拳を突き出した。

だけど。

「？　それで？」

「そ、それでってなんだよ！　聞いてなかったのか？　俺と［シン］で、オマエ達を……「いや、それは聞こえてるから」」

キョトン、とした様子で聞き直す賀茂に、俺がもう一度宣言しようとしたが、遮られてしまった。

い、いや、普通はここで煽（あお）り返してきたり、悪役ムーブをするのがお約束だろ！？

「というか、オマエ……本気でオレに勝てると思ってるのか？　それも、たった二人で」

「な、何だと！」

呆れた表情で告げる賀茂に、俺は声を荒げる。

「言っておくが、［禍津日神（まがつひのかみ）］のステータスは、オール“ＳＳ”だ。オマケにオマエも見た通り、空間を操るっていう規格外のスキルも

ある」

「……」

「それだけじゃない。パッシブスキルも【全属性無効】、【物理無効】、【状態異常無効】まであるんだ。オマエ達の攻撃は、ほぼほぼ通用しないんだよ」

賀茂の説明に、俺は思わず目を見開く。

何だよそれ……そんなの、ステータスは最強、防御も完璧、スキルは最凶……って。

「……ははっ」

気がつくと、俺は笑っていた。

確かに、この賀茂カズマと［禍津日神（まがつひのかみ）］は真のラスボス以上の強さを誇る、最悪の敵だ。

だけど……これまでも、最低のところから這い上がってきたのが俺達だ。

だから。

「それを聞いたからって、引き下がったりするかよッッッ！　［シン］！」

『はうはう！　行くのです！』

俺の合図と共に、［シン］が［禍津日神（まがつひのかみ）］に向かって突撃する。

たとえ【全属性無効】、【物理無効】のスキルを持っていても、『ガイスト×レブナント』ではスキル攻撃ならダメージを与えられる。

なら！　当然、［シン］の呪符による攻撃は通用する！

『はう！　後ろを取ったのです！』

『はうはう！？　速いのです！？』

スピードを活かして一気に回り込んだ［シン］が、［禍津日神（まがつひのかみ）］の背中に呪符を貼り付けようと、手を伸ば……『プークスクス。バーカ、なのです』……何っ！？

『はう！？』

なんと、伸ばした［シン］の手が、突然消え……っ！？

『アアアアアアアアッッッ！？』

「うわあああああああッッッ！？」

［シン］の右腕……肘から先がなくなり、それと同時に俺の右腕にも激痛が走る。

それに合わせ、右手が全く動かなくなってしまった。

『痛いのです！？　痛いのです！？』

「グギギ……ッ！？」

痛みのあまり、のたうち回る［シン］。

俺も、なんとかこの激痛に耐えるため、歯を食いしばる。

「っ！？　【カイロス】！」

中条が慌てて［デウス・エクス・マキナ］のスキル、【カイロス】を発動すると、［シン］の頭上に歯車が現れ、カチリ、と巻き戻し

た。

『っ！　……マキ姉さま、ありがとうなのです……！』

「中条……助かった……」

ついさっきまでの、右腕を失ったことによる激痛で脂汗びっしょりになった俺と［シン］は、二人に礼を言う。

「はは。中条シドって、戦ってみると面倒な奴だなあ……つーか、藤堂サクヤと同じ準ラスボスのくせに、なんでこんなクソザコモブに加担してやがるんだよ」

そう言うと、賀茂がヘラヘラしながら肩を竦める。

すると。

「クク……なんで我が望月ヨーヘイに加担するか、だと？」

中条は賀茂を見据えながら、不敵な笑みを浮かべた。

「決まっている。この男は……望月ヨーヘイは、我がただ一人認めたライバルだ！　友だ！　そんな友が、大切なものを守るために戦うというのなら、共に戦うのが友というものだ！」

「中条……」

何だよ……俺だけじゃなくて、お前も勝手に俺のこと、友達認定してやがったのかよ……つーか、重いんだよ。

だけど……ありがとう。

「はは……そうだな……中条は全力で戦って、認め合った、俺の大切な友達だ。だから中条は、こんなクソザコモブな俺を助けてくれるんだ。本当に、お節介極まりないな」
「クク……貴様こそ、逆の立場なら同じようにするだろうに」
俺と中条は、くつくつと笑い合う。
「なあ、賀茂。オマエには、こんな友達がいるか？」
「友達？　なんだソレ。オレに必要なのは、ハーレム要員だけだよ」
俺の問いかけに、賀茂は小馬鹿にするかのように嘲笑（あざわら）う。
「ふうん。そのハーレム要員も、キーアイテムを奪って服従させてるだけだよなあ？」
「ああ、そのほうが手っ取り早いだろ？」
賀茂は悪びれもせず、そう言い放つ。
はは……ヒロイン達も、完全にモノ扱いかよ。
「じゃあさ、オマエがつらい時、苦しい時、誰もオマエを支えてくれる奴もいないんだな。オマエが嬉しい時、楽しい時、だれもオマエと一緒に喜んでくれる奴がいないんだな」
「いや、そんな奴いらねーだろ。つーか、このオレがピンチになるなんてあり得ないし。だって、［禍津日神（まがつひのかみ）］は最強だぜ？」
はは……その言葉を聞いて安心した。
結局、賀茂カズマって奴はクソザコモブの俺なんかよりも、よっぽど弱いじゃねーか。
「ははははは！　だからオマエは、モブ以下なんだよ！」

「っ！　調子に乗るなよ！　クソザコモブが！」

俺が大声で笑ったことになのか、モブ以下と罵ったことになのか、賀茂は怒りで顔を真っ赤にすると。

「サッサとこの世界から消してやる！」

『はう！　【破敵剣（はてきのつるぎ）】！』

賀茂の叫びに呼応し、［禍津日神（まがつひのかみ）］が右手の剣を振り上げ、襲い掛かる。

その時。

「ハアアアアアアアアアアッッッ！」

『っ！？　ギャウッ！？』

「ぐあっ！？」

突然、［禍津日神（まがつひのかみ）］が宙に弾き飛ばされ、遠く離れた部屋の壁に激突した。

「ふふ……待たせたな」

はは……相変わらず、最高のタイミングで来るんだから……っ！

現れたのは、俺が尊敬して……憧れてやまない、世界一大切な女性（ひと）。

――藤堂サクヤさんだった。

最強の援軍（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大切な双子の姉妹（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「ふむ……ヨーヘイくんにしては珍しく、苦戦しているようだな」

弾き飛ばされて頭を振る［禍津日神（まがつひのかみ）］を見やりながら、サクヤさんが呟く。

「はい……あの［禍津日神（まがつひのかみ）］は、空間を操るスキルを持っています。それに、スキル攻撃以外を全て無効化するスキルも」

「ほう？」

俺の説明を聞き、サクヤさんは顔をしかめる賀茂へと視線を移した。

「まあ、空間を操るということについては氷室くんに聞いたからさほど驚かないが……だが、そうか、それほど厄介なのだな」

そう言うと、何故かサクヤさんは口の端を持ち上げた。

「はは……ここで最強の精霊使（ガイスト）いの登場かよ……つっても、オマエの［関聖帝君］は物理攻撃主体の精霊（ガイスト）。オレの［禍津日神（まがつひのかみ）］には勝てねえよ」

「ふふ……ならば、試してみるか！」

「っ！」

その言葉を合図に、［関聖帝君］が［禍津日神（まがつひのかみ）］に突進し、青龍偃月刀（えんげつ）を肩に担ぐ。

「おおおおおおおおおおッッッ！」
咆哮と共に、［関聖帝君］が青龍偃月刀を袈裟斬りに振り下ろすと。
『はうはうはう！　【護身剣（ごしんのつるぎ）】！』
［禍津日神（まがつひのかみ）］が左手に持つ剣を構え……って、あの青龍偃月刀を受け止める気か！？

そして。
「っ！？」
『はうはう！　ざんねーん、なのです！　【破敵剣（はてきのつるぎ）】！』
青龍偃月刀は［禍津日神（まがつひのかみ）］の左手の剣どころか、その身体すらもすり抜けてしまうと、返す刀で［禍津日神（まがつひのかみ）］は右手の剣を突き出した。
「クッ！　【クロノス】！」
だけど、［デウス・エクス・マキナ］の【クロノス】によって、一瞬のうちに［関聖帝君］と［禍津日神（まがつひのかみ）］の距離が開いた。
「……確かに、これは面倒な相手だな」
「サクヤさん……ええ」
額から一筋の汗を零（こぼ）したサクヤさんに、俺はゆっくりと頷く。
「ははははは！　最初の一撃は不意打ちだったから防げなかったが、

まともに相手すれば、あの藤堂サクヤと［関聖帝君］もこんなモンだ！」

「ふ……言うじゃないか……」

サクヤさんはまだ余裕の笑みを浮かべているけど、内心では焦っているはず。

俺だって、戦いながら少しずつ情報を得てはいるものの、これだけで済むとも思えないし、何か奥の手を隠し持っているような気もする。

でも……それでも、サクヤさんは示してくれた。

賀茂カズマを……［禍津日神（まがつひのかみ）］を、倒す手段を。

「む……ふふ、ヨーヘイくん、私はどうすればいい？」

「え……？」

こちらを見たサクヤさんが、微笑みを浮かべてそう尋ねる。

だけど……はは、相変わらず俺の心をバッチリ読み取るんですね。

「はい……サクヤさん、中条、俺で、同時に［禍津日神（まがつひのかみ）］に掛かりましょう」

そう……さっきの［関聖帝君］による不意打ちを見て分かった。

［禍津日神（まがつひのかみ）］の空間を操る能力は、精霊使い（ガイスト）である賀茂、又は［禍津日神（まがつひのかみ）］が認識していない限り、発動しない。

なら、コッチの手数を増やして、処理できないほどの攻撃を仕掛ければ、アイツ等も防げないはずだ。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、パシン、と両頬を叩く。

「サクヤさん！　中条！　そして［シン］！　［禍津日神（まがつひのかみ）］を一気に仕留めるぞ！」

「！　分かった！」

「クク……任せろ！」

『はうはうはう！　今度こそやっつけるのです！』

その言葉を合図に、［シン］、［関聖帝君］、［デウス・エクス・マキナ］が三方向から同時に仕掛ける。

『はうはう！　食らえ！　なのです！』

「やあああああああああああッッッ！」

「クク……【ツァーンラート】！」

さすがに、この数の攻撃は捌き切れな……「はは！　本当にバカだな！」……何だとっ！？

三体の精霊（ガイスト）による同時攻撃は、［禍津日神（まがつひのかみ）］の身体をスルリ、とすり抜けて終わってしまった！？

『はう！　【破敵剣（はてきのつるぎ）】！』

『あうっ！？』

『『ッ！？』』

［禍津日神（まがつひのかみ）］がクルクルと独楽（こま）のように回り、［シン］達に胴斬りを与える。

「っ！？　つう……！」
「ク……ッ！」
「むう……！」

飛び退いたおかげで何とか致命傷は免れたものの、俺達は浅くないダメージを負ってしまった。

「ははははは！　さっきのまぐれがあったからって、それが通用するってことにはならねえだろ！　つーか、［禍津日神（まがつひのかみ）］は最強なんだよ！」

賀茂は高笑いしながらそう言うが、それでも、まぐれでも何でもダメージを与えたことは事実だ。
だから……活路はある！

「［シン］！　もう一度行くぞ！」
『っ！　はう！　了解なのです！』

そして［シン］は、もう一度［禍津日神（まがつひのかみ）］へと突撃する。

「ははははは！　よほど死にたいらしいな！　［禍津日神（まがつひのかみ）］！　ひと思いに殺してやれ！」
『はう！　任せるのです！　【破敵剣（はてきのつるぎ）】！』

右手の剣を構え、向かってくる［シン］に照準を合わせる。

「［シン］！　躱（かわ）せええええええ！」
『はう！　【神行法・瞬】！』

［禍津日神（まがつひのかみ）］の視界から掻（か）き消え、一瞬で背後を突い……っ！？

『ばあ』

クルリ、と翻って舌をペロリ、と出し、醜悪な笑みを浮かべた［禍津日神（まがつひのかみ）］は容赦なく剣を……「【ガーディアン】」……っ！？

突然、［シン］と［禍津日神（まがつひのかみ）］の間に、重厚な盾が現れた。

そして。

「【ブラヴァー】」

『っ！？』

勢いよく飛んできた炎をまとった巨大なハルバードが襲い掛かり、［禍津日神（まがつひのかみ）］がたまらず飛び退いた。

はは……！　ここでさらに、強力な援軍かよ！

「フフ……ワタクシの盾に、防げないものなんてないんですのヨ？」

「フン、この私（ヤー）が、全部焼き尽くしてあげル」

声のする部屋の入口へと視線を向けると、俺の大切な双子の姉妹……クスクスと笑うサンドラと、鼻を鳴らすプラーミャがいた。

大切な双子の姉妹（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

泥棒猫（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「フフ……ワタクシの盾に、防げないものなんてないんですのヨ？」
「フン、この私（ヤー）が、全部焼き尽くしてあげル」

声のする部屋の入口へと視線を向けると、俺の大切な姉妹……クスクスと笑うサンドラと、鼻を鳴らすプラーミャがいた。

「二人共！」
「ヨーヘイ！　あの四人は、ワタクシとプラーミャがキッチリと倒してきましたワ！」
「フフ……思いのほか歯ごたえがなかったわネ」

手を振りながら嬉しそうに駆け寄ってくるサンドラと、澄ました表情のプラーミャ。

「二人共……無事でよかった……」

元気そうな二人の様子に安堵した俺は、ホッと息を吐いた。

「フフ、ヨーヘイったら、本当に心配性ですわネ」
「そうネ。大体、私（ヤー）が負けるわケ……ッ！？

その時、割り込むように［禍津日神（まがつひのかみ）］が俺達に襲い掛かってきた。

だけど。

「フフ……【ガーディアン】」

『っ！？　【破敵剣（はてきのつるぎ）】が通らないのです！？』

突き刺そうとした右手の剣が［ペルーン］が展開した盾を貫通できず、［禍津日神（まがつひのかみ）］が驚きの表情を見せる。

「全ク……無粋なのヨ！」

『……チッ』

さらに［スヴァローグ］から振り下ろされたハルバードによる追撃を躱（かわ）して距離を取り、［禍津日神（まがつひのかみ）］は顔を歪めて舌打ちした。

「はは、その顔のほうが幽鬼（レブナント）っぽくて似合ってるぞ」

『っ!!　ウルサイのです！　クソザコモブのくせに生意気なのです！』

そう言って俺が煽（あお）ると、［禍津日神（まがつひのかみ）］は顔を真っ赤にして怒り出した。

「……チッ。その盾、厄介だな」

「何だよ、ちょっと『攻略サイト』にないことがあると、オマエも対処できないのな」

だけど、賀茂との戦いにおいて、このアドバンテージは大きい。

まず、サンドラとプラーミャの精霊（ガイスト）については、あの『攻略サイト』には一切載っていないから、賀茂も迂闊（うかつ）には戦えない。

何より、［ペルーン］の【ガーディアン】が持つ【絶対防御】が、［禍津日神（まがつひのかみ）］の空間を操る能力すらも遮断してしまうっていうのは、これ以上ないくらい僥倖（ぎょうこう）だ。

これなら……！

「みんな！　コッチはこれで五人！　これなら、あの［禍津日神（まがつひのかみ）］にだって攻撃が届くはず！　だから……もう一度一斉に……「ホホ、六人じゃ」……って、土御門さん！」

はは！　ここでさらに増援かよ……！

「ホ、真打登場、といったところかの？」

扇で口元を隠しながら現れた土御門さんが、そう言って目を細める。

「土御門さん、その……怪我とかは……？」

「ホホ、大丈夫じゃ。まあ、何とも歯ごたえのない相手だったわ」

そう言って土御門さんはクスクスと笑うけど……『ガイスト×レブナント』にヒロインとして登場するキャラ九人を相手して、決して楽な戦いだったはずがない。

なのに……。

「……土御門さん、よかった……」

「ホホ！？　なな、なんじゃ……その……もう……」

俺は思わず土御門さんの細い手を握りしめると、彼女は頬を赤らめ、俯（うつむ）いてしまった。

「あああああああ！　テメエ等、マジでイライラさせんな！」

『はう！　全くなのです！　目障りなのです！』

そんな俺達の様子を見て、醜悪に顔を歪める賀茂と［禍津日神（まがつひのかみ）］。

「はは、何だよオマエ、ひょっとして嫉妬してるのか？」

「ハア！？　なんでテメエみたいなクソザコモブに嫉妬なんざするんだよ！　フザケロ！」

必死になって否定するあたり、図星だな。

「ふふ……ヨーヘイくん、それも仕方ないだろう。なにせ、私達にはこんなに仲間がいるのに、賀茂カズマには誰もいないんだから」

「っ！　ウルセエ！　ちょっと準ラスボスだからって、調子に乗ってんじゃ……『は、はう！？』……オ、オイ、どうした！？」

賀茂がサクヤさんに食って掛かろうとしたところで、［禍津日神（まがつひのかみ）］が驚きの声を上げる。

『だ、誰かが［禍津日神（まがつひのかみ）］の保管庫に侵入したのです！？　あり得ないのです！？』

「ど、どういうことだよ！？」

賀茂と［禍津日神（まがつひのかみ）］が慌てふためいているけど……俺には、侵入したのが誰なのか知っている。

「はは……！　さすがは氷室先輩！」

「うむ！　それでこそ、私の親友だ！」

俺とサクヤさんは顔を見合わせ、頷き合う。

そう……俺は賀茂に従うフリをして潜入したカズラさんに、みんなの大切なものの隠し場所について探してもらっていたんだ。

そして、カズラさんは見事それをやり遂げた。

いくら［ポリアフ］の【オブザーバトリー】が優秀で、カズラさんにしかできないからって、本当に、こんな危険なことを買って出て……。

すると。

『はう！　この泥棒猫め！　こうしてやるのです！』

［禍津日神（まがつひのかみ）］が空間に穴を開け、そこに上半身を突っ込んで身じろぎをしている……!?

「っ！　［シン］！　みんな！　［禍津日神（まがつひのかみ）］に仕掛けるんだ！」

俺は慌ててみんなに指示すると、一斉に襲い掛かった。

「オ、オイ！　［禍津日神（まがつひのかみ）］！」

『！　もう！　もう！　本当に鬱陶（うっとう）しい連中なのです！』

さすがにまずいと思ったのか、賀茂の焦った声に気づいた［禍津日神（まがつひのかみ）］は穴から顔を出すと、［シン］達を迎え撃つ。

カズラさん……頼むから、無事であってくれ……！

泥棒猫（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

それぞれの戦い④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

それぞれの戦い④

■氷室カズラ視点

「それで氷室先輩、どこに向かっているんですか？」

藤堂さんと別れ、私は立花さん、加隈さんと一緒に“バベル”領域（エリア）を下りている。

途中、サンドラさんとプラーミャさんともすれ違いましたが、彼女達はその綺麗な瞳に決意を込め、第二十階層を目指していました。

その時、『アナタの分も必ズ』と告げられた時は、思わず力強く頷いてしまいました。

とはいえ、私も望月さんから託された……申し出た、が正しいですが、この際どうでもいいですね。とにかく、加隈さんをはじめ、みなさんが奪われた大切なものを奪還するという、大切な使命があります。

それを果たさないことには、彼も十全に戦うことができませんから……って、立花さんの質問に答えていませんでしたね。

「私達は今、第一階層に戻っています」

「「第一階層！？」」

驚く二人に、私は静かに頷いて見せる。

ふふ……確かに、まさかこの領域（エリア）の入口付近に保管しているだなんて、誰も気づかないですよね。

この、私以外は。

「ホ……まさか、氷室先輩とこのようなところで会うとはのう。しかも、立花と加隈まで一緒とは」

「ふふ……ちょっと約束がありまして」

「ホホ！　確かにのう！」

土御門さんが扇で口元を隠しながら、カラカラと笑う。

まあ、彼女も私と一緒に大切なものを探した仲ですからね。

「それで、土御門さんは当然、彼のお手伝いに？」

「ホ、当然じゃ。今のわらわがあるのは、望月のおかげじゃからのう」

そう言って土御門さんが目を細めますが、そんな、ただの恩返しみたいな理由じゃないでしょうに。

「では、よろしくお願いします」

「ホホ、お互いにの」

私達と土御門さんはそのまま別れ、引き続き第一階層を目指しますが、［ポリアフ］の【オブザーバトリー】で幽鬼（レブナント）を回避しながら進んでいるため、順調そのものです。

そして。

「うわあ……こんなに早く、第一階層まで戻ってこれちゃったよ……」

「だ、だな……」

まあ、二人が驚くのも無理はありませんね。
おそらくかかった時間は、普通に下りた場合の半分以下のはずですから。

「さて……コッチです」

私は二人を引きつれ、第一階層の入口から正反対の場所を目指す。
そこに、賀茂カズマの精霊（ガイスト）……いえ、幽鬼（レブナント）の能力で作った保管庫がある。

「ここですね」
「ええ！？　だ、だけど、見た限り何もないし、どこかに通じる部屋みたいなものもなさそうだけど！？」

まあ、普通の人に見えるはずがありません。
だってその保管庫は、別の空間に存在するのですから。

「［ポリアフ］」

私は［ポリアフ］を召喚し、この場所を隅々まで確認すると。

「！　……ここですね」

［ポリアフ］の【オブザーバトリー】の能力は、敵対する精霊（ガイスト）と幽鬼（レブナント）を識別し、解析するもの。
だから……幽鬼（レブナント）の能力で作られた空間ならば、［ポリアフ］の瞳で全てを見通せる。

私は、その作られた空間に手を伸ばした。

すると。

「っ！？　氷室先輩の腕が消えたぞ！？」

「ふふ……加隈さん、正確には、私の腕が別の空間との境目を通過した、ですよ？」

私は手探りで探し、何かに触れた。

「やはり、間違いないですね」

私はいくつか手繰り寄せて空間の境目から掻き出す。

「っ！　お、俺の……『形見のライター』……！」

そう叫ぶと、加隈さんは大事そうにそのライターを握りしめた。

どうやら、加隈さんの大切なものだったみたいですね。

「加隈くん……よかったね……」

「ああ……ああ……っ！」

……さあ、他の方の分も回収を……っ！？

突然、その保管庫に穴が開き、賀茂カズマの幽鬼［禍津日神］の上半身が姿を現した。

その表情を、怒りに変えて。

『はう！　この泥棒猫め！　こうしてやるのです！』

［禍津日神（まがつひのかみ）］はその手に持つ二振りの剣を振るい、私に襲い掛かった。

「っ！？　間に合わ……アアアアアアアアッッッ！？」

斬撃を受け、私の胸から血が溢（あふ）れ出す。

「氷室先輩！？　【饕餮（とうてつ）】！」

立花さんが慌てて［女媧（じょか）］を召喚し、そのスキルで私の怪我を回復させようとするけど、トドメを刺さんとばかりに［禍津日神（まがつひのかみ）］が右手の剣を突き出した。

ああ……望月、さ……「っ！　［シン］！　みんな！　［禍津日神（まがつひのかみ）］に仕掛けるんだ！」……この声は……望月さんっ！

おそらく、望月さんは私の危機を察知して、［禍津日神（まがつひのかみ）］の注意をあちら側に向けるために、わざと攻撃を仕掛けたんですね……。

ふふ……望月さんのおかげで、この氷室カズラ、命を拾うことができました……。

「「氷室先輩！　大丈夫ですか……っ！？」」

立花さんと加隈さんが駆け寄ると、顔を真っ赤にして顔を逸らしてしまった。

あ……先程の［禍津日神（まがつひのかみ）］の攻撃で、胸元が開いてしまいましたね。

「そ、その……どうぞ……！」

「ええ、お借りします」

顔を真っ赤にした立花さんから上着を受け取り、それを羽織って胸元を隠す。

「さあ……残りも全て回収して、急いで向かいましょう。望月さんの元へ！」

「「はい！」」

私達は残る大切なものを保管庫から全て回収すると、第二十階層を目指して駆け上がった。

それぞれの戦い④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

可哀想な精霊（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

可哀想な精霊

「食らえエエエエエエエ！　【ブラヴァー】！」

プラーミャの［スヴァローグ］が、巨大なハルバードに紅蓮の炎をまとわせて投てきする。

氷室先輩がみんなの大切なものの回収に取りかかってから、俺達と賀茂……［禍津日神（まがつひのかみ）］との戦いはさらに激化していた。

『はう！　そんな攻撃当たらないのです！』

「ククク……ならばこれはどうだ！　【クロノス】！」

『はうはう！　そんなもの……「ホホ、甘いわえ？　【獅子】！【狛犬】！」……アアモウ！』

次々とくる波状攻撃に、［禍津日神（まがつひのかみ）］は苛立（いら）ちを隠せない様子だ。

「ハアアアアアアアアアアアッッッ！」

『クッ！　【破敵剣（はてきのつるぎ）】！』

「フフ……【ガーディアン】！」

「もらったッッッ！」

『っ！？　【護身剣（ごしんのつるぎ）】！』

サクヤさんの［関聖帝君］が放つ青龍偃月刀（えんげつ）に対し、［禍津日神（まがつひのかみ）］はカウンター気味に右手の剣を突き出すが、それも［ペルーン］の　【ガーディアン】によって阻まれる。

だけど青龍偃月刀もまた、［禍津日神（まがつひのかみ）］の身体をすり抜けてしまった。

そして。

『はう！　獲ったのです！　【裂】！』

『あうっ！？』

よしっ！　とうとう一撃を与えることができたぞっ！

隙を突いて貼り付けた［シン］の呪符が発動した瞬間、俺は思わずガッツポーズをした。

「ふふ！　いける、いけるぞ！」

「「エエ！」」

はは！　やっぱり六対一ともなると、さすがの［禍津日神（まがつひのかみ）］も手数が足らないみたいだな！

「クソッ！　クソッ！　クソッ！　鬱陶（うっとう）しい奴等め！　［禍津日神（まがつひのかみ）］！　サッサとこのクズ共を片づけちまえ！」

『アアアアアアッッッ！　【破敵剣（はてきのつるぎ）】！　【護身剣（ごしんのつるぎ）】！』

賀茂がガシガシと髪を掻（か）きむしりながら指示すると、［禍津日神（まがつひのかみ）］が二振りの剣を構えて突撃してきた。

というか、［シン］のモノマネみたいな話し方はやめたのかよ。

まあ、さすがにそんな余裕もないか。

「ッ！　【ガーディアン】！」

［禍津日神（まがつひのかみ）］のなりふり構わない突進も、［ペルーン］が展開する盾によって阻まれてしまう。

「賀茂……コッチの攻撃はオマエ達に届き始め、逆に［禍津日神（まがつひのかみ）］の攻撃は通用しなくなった。この意味が分かるよな？」

「……」

俺は静かにそう告げると、賀茂は忌々し気に俺を睨んだ。

はは、悔しいよな？　あれだけ自分達は最強だのなんだの言っておきながら、俺達にこんなに抑え込まれることになったんだからな。

だけど……俺は、絶対に容赦はしない。

でないと、コイツはまた俺の大切なものに手を出そうとするから。

すると。

「プ」

突然、賀茂が吹き出す。

「ははははは！　馬鹿じゃねえの？　ひょっとして、ちょっと攻撃がかすったり［禍津日神（まがつひのかみ）］の攻撃が防げたからって、調子に乗ってんの？　舐めるな！」

腹を抱えて笑い出したかと思うと、賀茂はその顔を歪め、吠えた。

「オイ！　お前が真面目にやらないからオレが馬鹿にされただろ！　サッサとコイツ等を倒しちまえよ！　グズ！　ノロマ！」

『っ！　わ、分かっているのです！』

賀茂が喚（わめ）き散らし、［禍津日神（まがつひのかみ）］が焦った表情を見せる。

コイツ……自分の相棒に、なんて言い草だよ。

『はう……こうなってくると、少し可哀想に思えてしまうのです……』

そう呟くと、「シン」がその身体を寄せ、俺に抱きつく。

『［シン］は優しいマスターに出逢えたから幸せですけど、［禍津日神］は、あれじゃ道具扱い……ううん、それ以下なのです』

『っ！　だ、黙れ！　黙れ黙れ！　マスターはこの［禍津日神］だけを愛してくれているのです！　オマエのような雑魚に、何が分かるのですッッッ！』

［シン］の言葉がよほど刺さったのか、［禍津日神］は絶叫する。

まるで、［シン］が言い放った事実から、耳を塞ぐかのように。

「ふむ……確かに［シン］の言う通りだ。主人が違うだけで、こうも扱いにまで差が出るとはな……」

サクヤさんが、その真紅の瞳に憐憫を湛え、［禍津日神］を見やる。

「フフ……ですけど先輩、それは仕方ありませんワ。だって……［シン］の主は、ヨーヘイですもノ」

「フン……マア、こんな精霊の身代わりになってまで傷つこうとするような精霊使いなんて、そうそういないシ」

そう言うと、サンドラとプラーミャが俺を見つめた。

「ホ……とはいえ、望月は精霊だけに優しいわけではないがの」

「クク……まあ、だからこそ我のライバルなのだがな」

今度は土御門さんが扇で口元を隠しながら微笑み、中条がくつくつと笑う。

『マスター……［シン］は、こんなに優しいマスターのおかげで幸せなのですけど、オマエは可哀想なのです……だから、せめてこの［シン］が、オマエを解放してやるのです……！』

［シン］が、悔しそうに歯噛みする［禍津日神（まがつひのかみ）］を見据えた。

その、輝くオニキスの瞳で。

「あああああ！　マジでイライラするッッッ！　いいぜオマエ等！　全員、コノオレガ、ブチ殺シテヤルウウウウウウウウッッッ！」

『フザケルナ……フザケルナフザケルナフザケルナ……コノ［禍津日神（まがつひのかみ）］ヲ……コノワタシヲ、ソンナ目デ見ルナアアアアアアアアッッッ！』

『「「「「「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」」」」」』

一人の精霊使い（ガイスト）と一体の幽鬼（レブナント）の叫びが“ バベル　”領域（エリア）にこだまし、幽子の渦に包まれた。

可哀想な精霊（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

氷の微笑の援軍（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

氷の微笑の援軍

一人の精霊使い（ガイスト）と一体の幽鬼（レブナント）の叫びが“バベル”領域（エリア）にこだまし、幽子の渦に包まれた。

「っ！？　ヨ、ヨーヘイくん……これは……っ！？」

「ま、まさか……！？」

俺達は、幽子の渦を凝視する。

ここにいる全員が、一度は見覚えがあるこの現象。

これは……闇堕ち……！？

俺達が見守る中、幽子の渦が徐々に薄れ、現れたのは。

『アハア♪』

その目を漆黒に変え、舌を大きく出した賀茂と。

『ケタケタケタケタ♪』

カクカクとした動きを見せる［禍津日神（まがつひのかみ）］……ではなく、それよりももっと醜悪な、巫女姿のひび割れたミイラだった。

そして。

「っ！？　……ここで、コイツまで登場すんのかよ……！」

追加で現れた一体の巨大な幽鬼（レブナント）を凝視し、俺は歯噛みする。

コイツは、九つの柱の一柱……“アースガルズの守護者”である“フレスヴェルグ”。

金色（こんじき）の羽をその身にまとう、巨大な鷲（わし）の姿をした幽鬼（レブナント）は、九つの柱で最強。しかも、その討伐に当たっての推奨レベルは七十三。

俺達のレベルを考えれば、それほどの強さではないのかもしれないが、さらに醜悪に変化した［禍津日神（まがつひのかみ）］とも戦わないといけないんだ。ここで戦力を分散しないといけないのはキツイ。

さて……どうやって……っ！？

『ハハハハハ！　ソウカ……ソウカ！　コレコソガ、［禍津日神（まがつひのかみ）］ノ真ノ姿ダッタノカ！』

変わり果てた［禍津日神（まがつひのかみ）］を眺めながら、闇堕ちした賀茂が高らかに嗤（わら）う。

というか、それよりも聞き捨てならない言葉を吐いたぞ！？

「オ、オイ！？　それはどういう意味だ！？」

「ハハハハ……アン？　何ダ、コノクソザコモブ、マダイタノカ」

まるで道端の石ころでも見るかのような視線で、賀茂が俺を見やる。

だけど……はは、この賀茂から感じるプレッシャーはなんだよ……っ！

『ハハ、クソザコモブニモ分カルヨウニ教エテヤル。［禍津日神（まがつひのかみ）］ハ、本来ノ姿デアル幽鬼（レブナント）ノ神ニクラスチェンジシタンダヨ！　コノ、

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］ニナアッッッ！』
「いざなみの……みこと……？」

理解が追いつかず、俺は賀茂が放った言葉を反芻（はんすう）する。
どういうことだよ……『闇堕ちエンド』を引き起こしたのは、［禍津日神（まがつひのかみ）］じゃないのかよ……。

「ヨーヘイ！　ボーッとしてるんじゃないわヨ！」
「うお！？」

グイ、と無理やり身体を引っ張られ、俺は思わずよろけると。

――ヒュ。

俺がついさっきまでいた場所で、空を切る音がした……って！？

それを見た瞬間、俺は戦慄を覚える。
だって……床が、あり得ないほどの滑らかさで抉（えぐ）られていたのだから。

『ッ！　来ますわヨ！　【ガーディアン】！』

俺は転がるようにサンドラの［ペルーン］が展開する盾の陰に隠れる。

――ギインッッッ！

重厚な盾に激しくぶつかる……いや、この音は一体、なんて表現したらいいんだ！？
とにかく、今まで聞いたことがにないような、そんな音が俺の耳

に残っていた。

「クッ！？　こちらも面倒なッッ！」

サンドラの盾の裏側へ回り込むようにフレスヴェルグが旋回し、その巨大な爪を振りかざして襲い掛かる

「ホ！　【八咫烏（やたがらす）】！」

土御門さんの［吉備真備（きびのまきび）］が紙片を【式神使】に変え、フレスヴェルグに対抗した。

「ヨーヘイくん……どうする……？」

俺にそっと身体を寄せ、サクヤさんが尋ねる。

確かにこんなジリ貧の状態じゃ、手も足も出ないままやられちまう……。

せめて……せめて、さっきのようにこの六人で［伊邪那美命（いざなみのみこと）］と戦える状況が作り出せたなら……！

「ふむ……ならば、まずはあの“柱”から何とかするしかあるまい……」

そう言うと、サクヤさんは右手薬指から“エリネドの指輪”をはずすと、ス、と一歩前に出た。

「サ、サクヤさん！？」

「ヨーヘイくん……あの“柱”はこの私と［関聖帝君（レプナント）］が引き受けた！　君達五人は、賀茂カズマと醜悪な幽鬼を！」

そう叫んだ後、サクヤさんと［関聖帝君］が盾の陰から飛び出し、フレスヴェルグへと突撃していった。

「っ！　みんな！　俺達はあの幽鬼（レブナント）を倒すぞ！」

「ククク！　任せろ！　【ツァーンラート】！」

中条の［デウス・エクス・マキナ］が、無数の歯車を展開して［伊邪那美命（いざなみのみこと）］へと攻撃を仕掛ける。

だけど。

――ヒュ、ヒュ、ヒュ。

「っ！？　な、なんだと！？」

さっき俺が聞いた風切り音が鳴ったかと思うと、あれだけあった金属の歯車が、一瞬にして掻（か）き消えてしまった。

『ハハハハハ！　コウナッタ［伊邪那美命（いざなみのみこと）］ニ、オマエ等ノ攻撃ナンザ通用スルワケネエダロ！　大人シク死ンドケ！』

「させませんワ！　【ガーディアン】！」

――ギインッッッ！　ギインッッッ！　ギインッッッ！

クソッ！　これじゃ防戦一方だ！

なんとか……なんとか、こちらも攻撃に……っ！？

『ハハ……ソウイヤ、クソザコモブノ大切ナモノハ、アレッテコトデイインダヨナア？」

そう言うと、賀茂はニタア、と口の端を吊り上げ、フレスヴェルグと対峙しているサクヤさんを見た。

ま、まさか！？

「やめろおおおおおおおおおおおッッッ！」

『ハハハハハ！　オマエノ目ノ前デ、藤堂サクヤヲ消シ飛バシテヤルヨ！　［伊邪那美命（いざなみのみこと）］！』

『カタカタカタカタ！』

俺の必死の叫びもむなしく、もはや会話することすらできなくなった［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、その細くしわがれ、ひび割れた腕を……「ファイア」……っ！？

――タン、タン、タン、タン。

『ッ！？』

規則的な乾いた音が等間隔で響き渡り、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の振り上げようとした腕がマリオネットのように不自然に跳ねた。

そして……その聞き慣れた声は……！

「カズラさん！」

「ふふ……遅くなりました」

そう言うと、カズラさんはニコリ、と微笑んだ。

氷の微笑の援軍（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

絆（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「カズラさん！」
「ふふ……遅くなりました」

そう言うと、カズラさんはニコリ、と微笑んだ。

『チイッ！　テメエエエエエ！　ヨクモ裏切ッテクレタナッッッ！』
「面白いことを言いますね。私は一度だってあなたの仲間になどなった覚えはありませんが？」

忌々し気に睨みながら賀茂が吠えるが、カズラさんは全く意に介さず、無表情のままクイ、と眼鏡を持ち上げた。

「ヨーヘイくん！」
「ヨーヘイ！」

カズラさんの後ろから、アオイと加隈もその姿を覗(のぞ)かせて俺の名を呼ぶ。

「はは！　アオイ！　加隈！」
「もうボクが来たから大丈夫！　あんなクズ、サッサとやっつけちゃおうよ！」
「俺も！　もうアイツの操り人形にはならねえぜ！　今までの借り、まとめて叩き返してやるッッッ！」

駆け寄る二人とハイタッチを交わすと、俺達は賀茂を睨みつけた。

そして。

「望月さん、皆さんの大切なものは無事回収してあります。もう、遠慮はいりません。思う存分、あの男に苦痛を味合わせてやりましょう」

そう言うと、カズラさんはニタア、と口の端を持ち上げた。

だけど……だけど……っ！

「え……！？」

「本当に……無茶をして……っ！」

俺は感極まって、カズラさんを抱きしめた。

だって、カズラさんが羽織っている男子の……多分、アオイの制服の隙間から、ズタズタになったカズラさんの制服やブラウスが見えたから。

つまり……カズラさんは、［禍津日神（まがつひのかみ）］が向こうの空間に上半身を覗（のぞ）かせていた時に、大怪我を負っていたってことの証拠だから……！

「ふふ……これで充分……いえ、それ以上に、私は報われました……」

カズラさんが胸の中から俺の顔を覗き込むと、頬を緩めた。

「モウ！　そんなことしてる場合じゃないでショ！」

「うおお！？」

プラーミャに襟首をつかまれ、カズラさんから無理やり引っぺがされてしまった。

「ウウ……こ、今回は仕方ないですワ……さすがニ、ここまで身体を張られてしまいますト……！」

「ホ……ホホ……つ、次こそはわらわも……！」

すぐ傍では、拳を握りしめながら、わなわなと震えているサンドラと土御門さんが。

そして。

「むううううううううううう！」

フレスヴェルグの両脚の爪を弾き消しながら、プクー、と頬を膨らませたサクヤさんが、思いっ切りコッチを睨みつけてる!?

『プークスクス！　マスターが空気も読まずに修羅場っているのです！　ワルイ男なのです！』

チクショウ！　［シン］の奴、腹を抱えて転げ回ってやがる！

すると。

「キサマアアアアアアア！　クソザコモブノクセニ、コノオレヲ無視シテンジャネエエエエエエ！」

俺を射殺すような視線で睨みつけながら、賀茂が絶叫してやがる。

だけど。

「……ははっ！」

気づけば、俺は笑っていた。

今、俺の周りにはアレイスター学園に入って積み上げてきた大切なもの……大切な女性が、親友が、そして最高の相棒がいる。

それが、どれだけ俺の心を満たしてくれるか。

それが、どれだけ俺に幸せを与えてくれるか。

「……アイツには、分からないんだろうなあ」

ポツリ、と呟いてから、俺はもう一度、賀茂を見やる。

アイツは、大切なものを『攻略サイト』を利用して楽に手に入れようとした。

だから、ヒロイン達を手に入れても大切なものにはなり得ず、アイツの中でただのオモチャに成り下がっちまったんだろうなあ……。

「クソッ！　クソッ！　ソンナ目デオレを見ルナッッッ！　オレノホウガ、クソザコモブノオマエナンカヨリモ、圧倒的ニ上ナンダヨ！　オレハ……オレハ、成リ上ガッタンダ！　ソコニイル主人公ナンカヨリモナアアアアッッッ！」

顔を歪めながら必死で叫ぶ賀茂。

俺には、その姿が憐れに思えてならなかった。

だって……アイツは、ひょっとしたら俺だったかもしれないから。

「ふふ……それはない」
「ナニッ！？」

フレスヴェルグを押し返しながら、サクヤさんが静かに告げる。

「私は、ヨーヘイくんが入学したその次の日からこれまで、ずっと傍で見てきたから知っている。彼はいつだって一生懸命で、歯を食いしばって、一歩一歩しっかりとその足で踏みしめて、そうやって今を手に入れたんだ」
「そうですワ！　ヨーヘイは、いつだって誰よりも頑張っていましたワ！　それモ、いつもいつも、周りにいる誰かのためニ！」

サクヤさんの言葉を引き継ぐように、サンドラが胸元でキュ、と拳を握りながら叫ぶ。

「そうネ……ホント、ヨーヘイはお節介ばかリして、人の背中ばかり押しテ……それこそ見境なく、ネ」

そう言うと、プラーミャが鼻を鳴らした。

「そうだよ！　ヨーヘイくんは、いつも身体を張って、間違っていたら止めてくれる！　それが、たとえ大切な友達だったとしても！」
「そうだぜ！　コイツは、腐ってちまって沈み込んでるような、そんなどうしようもない奴だって、わざわざ手を突っ込んで引き上げやがるんだ！　そんな奴なんだよ！」

アオイ……加隈……。

「そうですね。望月さん……いえ、ヨーヘイさんは、嫉妬と悔しさで打ちひしがれている人がいたら、たとえ誤解を生んで嫌われよう

とも、荒療治で救ってしてしまう人ですから……」

カズラさんはクスリ、と笑い、そっと胸に手を当てた。

「ホ……まあ、そんなお節介ばかりしておるくせに、手柄ばかり人に譲っておるしの」

そう言って、土御門さんがニヤニヤと笑う。

あ……ひょっとして『揚羽蝶紋入り扇』の件、バレてる？

「ククク……我のライバルは、大切な誰かのために身体を張る男だ。それこそ文字通りにな。そればかりか、大切な女性のためにと、敵であった我に頭まで下げる始末だ」

中条は俺とサクヤさんを交互に見やり、くつくつと笑う。

い、いや、バラすなよ！？　……って、ほらあ！　サクヤさんがコッチ見てるじゃねーかよ！

「ふふ……つくづく……つくづく、君は……っ！」

「あ、あはは……」

顔をくしゃくしゃにしたサクヤさんに見つめられ、俺は思わず苦笑する。

「……賀茂カズマ、これで分かっただろう。ヨーヘイくんは、貴様とは違う。ヨーヘイくんは、そのひたむきさで、優しさで、私達との絆を手に入れたのだ。だから……」

グイ、と制服の袖で顔を拭い、サクヤさんが俺を見やる。

はは……ええ、分かってますよ。

俺は賀茂を見据え、すう、と大きく息を吸うと。

「賀茂……俺はオマエを倒す。この、大切な人達との絆で。だから……かかって来やがれッッッ！」

絆（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

最速の相棒（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「賀茂……俺はオマエを倒す。この、大切な人達との絆で。だから……かかって来やがれッッッ！」

俺は賀茂を見据え、そう言い放った。

これまでの、俺の想いの丈の全てを込めて。

「フ、フ、フザケルナアアアアアアアッッッ！　ナニガ絆ダ！　所詮ハコイツ等全員、キャラデシカネエンダヨ！　イチイチ感情移入シテンジャネエヨッッッ！」

賀茂は頭をガシガシと掻きむしりながらわめき散らす。

だけど……今のアイツの言葉で分かった。これまでの行動原理も全て。

要は、コイツにとってこの世界はゲームでしかなくて、自分はキャラクターじゃなくてプレイヤーだって思い込んじまってるんだな。

だから、ヒロイン達の大切なものを奪って服従させたりしても、賀茂にとっちゃテイムしてるような感覚なのかもしれない。

いや、それどころか、トロフィー集めに近いのかも。

この世界は、俺にとっても、賀茂にとっても現実でしかないのに。

「ハア……もういいよ」

「ハア！？」

俺は溜息を吐いた後、ポツリ、と呟く。

正直、いくら『攻略サイト』でここがゲームの世界だと知ったからって、そんなゲーマー感覚でメチャクチャにされたらかなわない。

俺はこの世界のシナリオをぶっ壊して、サクヤさんを救わなきゃいけないんだから。

だから。

「［シン］……アイツは……賀茂カズマは、絶対に終わらせなきゃいけない。お前に全部を託すかたちになって悪いけど……っ！？」

正面に向き合う［シン］に、俺は頭を下げてお願いしようとすると、背伸びをした［シン］が、人差し指を俺の口に当てて遮った。

『はう！　マスターはいっつもそれなのです！　そもそも、相棒にそんな遠慮は無用なのです！　だから……だから、マスターはただ言えばいいのです！　『アイツを倒せ』と！』

「［シン］……」

そう言って、にぱー、と笑う［シン］。

俺は……。

『は、はう……』

「ありがとう、［シン］……アイツと戦わせるような真似をしておきながら、こんなことを言っても説得力がないかもしれないが……絶対に、無茶だけはするな。お前は、俺のたった一人の、大切な相棒なんだから……」

［シン］を強く抱きしめ、俺はそうささやく。
はは……ホント、我ながら嫌になるくらい矛盾したことを言ってるな……。
だけど……この戦い、お前だけを戦わせたりしないからな！
『えへへー……これで、［シン］は最強で最速なのです！　だから……』
俺の胸で頬ずりをした後、［シン］はクルリ、と翻って［伊邪那美命］を見据える。
そして。
『あのミイラオバケなキモチワルイ幽鬼は、この［シン］が絶対に倒すのです！　マスターと、［シン］の未来のために！』
ビッ！　と人差し指を突きつけ、［シン］が吠える。
［シン］と、俺の想いを乗せて。
『カタカタカタカタ！』
はは！　［シン］の気迫を当てられた［伊邪那美命］が激怒して、口を激しくカタカタさせてやがる！
「ヨーヘイ！　［シン］！　守りはこのワタクシがサポートしますワ！　だからあんなヤツ、ぶん殴ってくださいまシ！」
「おう！」
『ハイなのです！』

拳を突き出したサンドラの檄に応えるため、［シン］はクラウチングスタートの体勢を取る。
俺は、そんな［シン］の小さな背中に両手を当てると。
「行けえええええええ！　［シン］ッッッ！」
『はうはうはうはうはうううううッッッ！
一気にロケットスタートを切った［シン］が、真正面から［伊邪那美命］に突撃した。
というか［シン］の奴、いつもよりも速い！？
『ハッ！　タダ速イダケノ精霊ナンザ通用シナイッテ何度モ……ッ！？』
余裕を見せてヘラヘラ嗤っていた賀茂だったが、［シン］のあまりの速さを目の当たりにして様子が一変する。
『カタカタカタ！』
［シン］を迎撃しようと、［伊邪那美命］がひび割れた両腕を突き出すが。
『ッ！？』
『はう！　遅いのです！』
一瞬で［伊邪那美命］の視界から掻き消え、［シン］は背後へと回り込む。
『ハハハハハ！　裏ヲ取ッテクルコトハ分カッテタンダヨ！』

クルリ、と翻った［伊邪那美命］が、口を開けてニタア、と目を細めた。

『はうはう！　甘いのです！　［シン］は、こんなものじゃないのです！』

『ナンダトッ！？』

はは！　そうだとも！

この九か月、［シン］は休まず疾走丸を飲み続けたんだ！

速さが［シン］と同じ？　『敏捷』ステータスが“ＳＳ”？　ハッ！　何言ってやがる！

俺の……俺の相棒は、そんなモンはとっくに凌駕してるんだよ！

『クッ！　［伊邪那美命］ッッッ！　サッサトソノ目障リナ雑魚ヲブッ殺シヤガレッッッ！』

『カタカタカタカタ！』

賀茂の指示を受けて［伊邪那美命］は必死で追うが、［シン］は縦横無尽に動き回り、その姿を捉えさせない。

でも……それでも、あの［伊邪那美命］に呪符を貼り付ける隙が、どうしても生まれない……っ！

サンドラ達も隙を窺っているけど、［シン］と［伊邪那美命］の異次元の攻防に、手が出せないでいる。

その時。

「ヨーヘイくん！　あと……あと三分だけ待っていてくれ！　それで、こちらの準備が整うから！」

俺達の戦力を賀茂に集中させるため、たった一人でフレスヴェルグと対峙してくれているサクヤさんが、そう叫んだ。

最速の相棒（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

三分間の攻防（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

三分間の攻防

「ヨーヘイくん！　あと……あと三分だけ待っていてくれ！　それで、こちらの準備が整うから！」

俺達の戦力を賀茂に集中させるため、たった一人でフレスヴェルグと対峙してくれているサクヤさんが、そう叫んだ。

というか、サクヤさんが『あと三分』と言ったってことは……まさか！？

「サクヤさん！　アレを使う気ですか！？」

俺は思わずサクヤさんに向かって叫ぶと、サクヤさんは無言で頷いた。

『ッ！？　［伊邪那美命（いざなみのみこと）］！　サッサトコイツ等ヲ早ク片ヅケテ……イヤ、先ニアノ“藤堂サクヤ”ヲ始末シロッッッ！』

「っ！？」

そうだった！？　賀茂の奴も『攻略サイト』で知ってるんだった！

「［シン］！　みんな！　あの幽鬼（レブナント）を絶対にサクヤさんに近づけさせるな！」

『はう！　分かったのです！　それー！』

俺の指示にいち早く動いた［シン］は、サクヤさんと［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の間にある床に、次々と呪符を貼り付けていく。

いや、それだけじゃない。
さらに何重にも【堅】を展開し、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］を行かせまいとした。

「ッ！　何か考えがあってのことですわよネ！　だったラ！　【ガーディアン】！」

同じくサンドラも、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の前に無数の盾を展開する。

「ボクも！　【窮奇（きゅうき）】！　【饕餮（とうてつ）】！　【渾敦（こんとん）】！　【檮杌（とうごつ）】！」
「ホホ！　【式神使】よ！　彼奴（あやつ）を止めるのじゃ！」

さらには、アオイの【四凶】と土御門さんの【式神使】が［伊邪那美命（いざなみのみこと）］を行かせまいと大量に群がっていく。

だけど。

『「「「「っ！？」」」」』

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］は、呪符も、無数の盾も、【四凶】も、【式神使】も、全てそのひび割れた両腕で消滅させながらゆっくりと歩を進める。

まるで、無人の野を歩くかのように。

「ッ！　燃え尽きてしまエッッッ！　【ブラヴァー】！」
「ファイア」

苦し紛れに放ったプラーミャのハルバードと、カズラさんの遠距離射撃が襲い掛かるが、それも［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が軽く腕を払うだけで、全て消滅してしまった。

クソ……ッ！　俺達は、足止めすることすらできないのかよ……っ！

すると。

「クク……これならば、倒すよりも簡単ではないか。【カイロス】」

中条が【カイロス】を発動させると、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の頭上に浮遊する金属の円盤が高速回転し、一瞬のうちに［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が最初の位置に戻っていた。

「はは！　中条！」

「ククク……あとは、三分間これを繰り返す……っ！？」

いつの間にか、［デウス・エクス・マキナ］の脇腹に、ぽっかりと穴が開いていた。

「中条おおおおおおおおおおおッッッ！」

「っ！？　【リリノエ】！　【カホウポネカ】！」

カズラさんの［ポリアフ］が三体に分かれ、一体は中条の元へ、もう一体は［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に迫る。

［デウス・エクス・マキナ］の傍に寄った［ポリアフ］が穴の開いた脇腹の上で舞うと、キラキラとした氷の結晶がその穴を覆っていく。

「クウ……す、すまぬ……」

中条はうめき声を上げながら、上半身を起こした。
どうやら［ポリアフ］の回復スキルのおかげで、中条の傷が塞がったみたいだ……。

「よ、良かった……」

だけど、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に向かったもう一体は、氷の鎖で拘束しようとしたところを消滅させられてしまった。

「……こうなっては、打つ手がありませんね……」

カズラさんが、ポツリ、と呟く。
俺はスマホを取り出し時間を確認すると……クソッ！　あと一分もあるのかよ！

どうする！？　このままだと時間を稼ぐどころか、サクヤさんが……！

「ハハハハハ！　ドウシタ！　モウ終ワリカ？　ダッタラ、本音ヲ言エバモノニシタイトコロダッタガ、藤堂サクヤハココデ始末シテヤル！　［伊邪那美命（いざなみのみこと）］」

今までゆっくり歩くだけだった［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、ここにきて一気に駆けるだと！？

「っ！　［シン］！」

『はう！　行かせないのです！　藤姉さまを……マスターの大切な女性（ひと）を、傷つけさせるわけにはいかないのですッッッ！』

［シン］はそのスピードで一気に追い抜くと、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の

前に無数に呪符を展開する。
たとえ［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に、何度も呪符を消滅させられても。
「チクショウ……あと三十秒……！」
スマホを強く握りしめながら、ギリ、と歯噛みする。
もう駄目かと思った、その時。
「……【フォース】」
俺の後ろにいた加隈が、ポツリ、と呟いた。

三分間の攻防（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

千里行（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

千里行

「……【フォース】」

俺の後ろにいた加隈が、ポツリ、と呟いた。

『ハハハハハ！　コイツ等ニハモウ、オ前ヲ止メル手段ハモウナイ！　ダカラ……藤堂サクヤヲ消セ！　［伊邪那美命（いざなみのみこと）］！』

『ケタケタケタケタ！』

賀茂の言葉を受け、嬉しそうに嗤（わら）う［伊邪那美命（いざなみのみこと）］。

そして。

――ブオン。

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の両腕の風切り音と一緒に、フレスヴェルグと戦っていたサクヤさんの姿が……掻（か）き消えてしまった。

「あ……ああ……」

俺は力なく声を出し、立ちすくむ。

他のみんなも、あまりの出来事に訳が分からず、呆然（ぼうぜん）としていた。

『ハハッ！　ヤットダ！　ヤットクソザコモブノ絶望スル顔ガ見レタ！　コウナッタラ、後ハタダ全員ヲ消スダケダダガ……ソウダナ。女連中ニ関シテハ、跪（ひざまず）イテオレノ足ヲ舐メ、今後ハオレノタメダケ

ニ尽クスッテイウンナラ、助ケテヤル』

そう言うと、賀茂は下卑（げひ）た笑みを浮かべ、サンドラ、プラーミャ、カズラさん、土御門さんをねっとりと舐め回すように見つめた。

『アアソレト、男ハイラネーカラ、ココデ抹消ナ』

賀茂がそんな最低な言葉を放っているにもかかわらず、みんなは一切反応を示さない。

おそらく、サクヤさんが目の前で消えてしまったショックから、立ち直れていないんだろう。

その時。

「――【千里行】」

そんな静かな声が、賀茂の下品な笑い声に紛れて聞こえた。

はは……加隈の奴、やってくれたな！

『ッ！？　ナ、ナンダ！？』

突然、フレスヴェルグの目の前で幽子の渦が巻き起こり、賀茂が驚きの声を上げる。

「ははっ！　加隈、教えてやれよ！」

俺は笑いながら後ろへ振り向き、加隈を見て促す。

「ヘッ！　オマエの幽鬼（レブナント）が消した師匠さあ、アレ、俺がそっくり同

じモンを俺の［ロキ］が作ったんだよ！」

『ッ！？　マサカ、【フォース】カ！？』

ははは、さすがに『攻略サイト』を見てるだけあって、加隈のスキルについても知っていたか。

そう……加隈の［ロキ］が持つスキル、【フォース】は、［ロキ］の視界に入ったものの一部を一枚絵のように切り取り、指定した相手の視界に投影して騙す、といったもの。

実際、このスキルは状態異常扱いとはならないことから、【状態異常無効】のスキルを持っていようが、そもそも状態異常攻撃が通用しないイベントボスだろうが、関係なく通用する。

ただ、スキル使用条件が厳しいことと一度使うとしばらくは使えないから、なかなか使いどころが難しいんだけどな。

それを……加隈はこの土壇場で決めてくれたんだ。

そして、幽子の渦が徐々に薄れてゆき、中から現れたのは……サクヤさんと、巨大な赤い馬に乗った、［関聖帝君］の姿だった。

「はは……！」

サクヤさんの……［関聖帝君］と赤い馬……【赤兎馬】の威風堂々とした姿に、俺は打ち震える。

だけど、それもしょうがないだろ！　俺は今、『ガイスト×レブナント』最強と呼ばれた、精霊（ガイスト）使いと精霊（ガイスト）の真の姿を目の当たりにしてるんだからな！

「ふふ……行け！　［関聖帝君］！」
『（コクリ！）』
サクヤさんの合図で【赤兎馬】がいななき、人馬一体の精霊（ガイスト）がフレスヴェルグへと迫る。
フレスヴェルグはその巨大な爪を振りかざして待ち構えるが。
「おおおおおおおおおおおッッッ！」
サクヤさんの咆哮と共に、［関聖帝君］が馬上から青龍偃月刀（えんげつ）を繰り出した。
それも、五連撃。
――斬ッッッ！
『グオオオオオオオオオオオッッッ！？』
メッタ切りにされたフレスヴェルグが、断末魔の叫び声を上げながら床に転がり落ち、その姿を幽子に変えてサクヤさんに吸収されていく。
「っ！　サクヤさん！」
俺はその名を叫ぶと、サクヤさんに向けて全力で走った。
世界一大切な女性（ひと）を、支えるために。
「う……っ……ふふ、ありがとう……」
「はは……あなたを支えるのは、俺だけの特権ですから……」

“ウルズの泥水”が供給されてよろめくサクヤさんを抱き留め、俺達は微笑み合う。

あとは。

「ふふ……さあ、私の［関聖帝君］と【赤兎馬】が放つ青龍偃月刀の刃、貴様に受け止めることができるか？」

『ッ！？』

口の端を持ち上げて挑発するサクヤさんに、賀茂は思わず息を飲んだ。

そうだよな？　『攻略サイト』を熟読した、オマエなら分かるよな？

あの【千里行】の、桁外れの威力を。

『攻略サイト』によれば、五人単位のチームである主人公達に対し、物理防御、属性防御、状態異常防御を全て無視した、【一刀両断】の三倍の威力を誇る攻撃がランダムに五回行われる。

プレイヤー側は、この【千里行】が発動された瞬間、誰か一人でもいいから食らわないようにと神に祈るらしい。

だって、五人全員が一撃ずつ食らったら、その時点で全滅してしまうのだから。

なのでサクヤさんと［関聖帝君］の攻略法は、防御や回復は一切度外視して、とにかく五人の最強スキルをぶつけ続けて三分以内に倒すこと。

「ヨーヘイくん……もう、大丈夫だ」

無事に“ウルズの泥水”を吸収し終わったサクヤさんが、俺からス、と離れ、賀茂と［伊邪那美命（いざなみのみこと）］を見据える。

そして。

「では……参るッッッ！」

千里行（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

失くした繋がり（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

失くした繋がり

「では……参るッッッ！」

サクヤさんがそう叫ぶと、［関聖帝君］を乗せた【赤兎馬】が飛ぶように走った。

「はは！　［シン］！　みんな！　俺達も一気に賀茂と［伊邪那美命（いざなみのみこと）］を攻撃するぞ！」

『ハイなのです！』

「「「「「「「「「「おおおおおおおおおおッッッ！」」」」」」」」」」

俺の檄（げき）に、［シン］が……みんなが応える。

よし！　サクヤさんがその圧倒的な強さを目の当たりにしたおかげで、みんなの士気が戻ったぞ！

『クッ！　ラスボスデモナイタダノ精霊（ガイスト）ニ、コノ［伊邪那美命（いざなみのみこと）］ガ負ケルワケネーダロ！』

『カタカタカタカタ！』

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、両腕を突き出し、［関聖帝君］を待ち構える。

「食らえええええええええええええッッッ！」

［関聖帝君］が青龍偃月刀を振り上げ、フレスヴェルグに見せた五連撃を［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に向けて放った。

――ギイイイイイイイイインンンッッッ！

『カタカタカタ……カタッ！？』
「むうっ！？」

なんと、［関聖帝君］の青龍偃月刀と［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の両腕が激突した瞬間、激しい音と共にお互いが後方へと弾かれた。
だけど……さすがにあの両腕も、【千里行】までは掻（か）き消すことはできなかったみたいだな。

賀茂の奴もこの結果が意外だったのか、漆黒の目を見開いてやがる。
というかオマエ……そんなにボケッとしていていいのか？

『はうはう！　隙ありなのです！　【爆】！』
『ッ！？　ガギッ！？』

弾かれて硬直した一瞬の隙を突いて、［シン］がそのスピードを活かして素早く呪符による攻撃を放った。

「はは！　油断しすぎじゃねーの？」
『ク、クソオオオオオッッッ！　クソザコモブノ分際デッッッ！』

はは、賀茂の野郎悔しがってやがる。
だけど……とうとう俺達の攻撃が届いたぞ！

「みんな！　もう一度行くぞ！」
「ああ！　［関聖帝君］！」

口の端を持ち上げたサクヤさんが、体勢を立て直した［関聖帝君

」を再度突撃させる。

『クソッ！　クソッ！　今度コソ消シ飛バシチマエッッッ！』

『カタカタカタカタッッッ！』

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］も、先程の［関聖帝君］の攻撃を踏まえ、低く構えて迎え撃った。

だけど。

――ギイイイイイイイインンンッッッ！

「っ！　ぬうっ！？」

『カタッ！？』

やはり激突した瞬間に弾かれる両者。

そしてこの後もさっきと同じパターンで。

「ファイア」

「ククク……【ツァーンラート】」

「行けえええ！　【窮奇（きゅうき）】！」

カズラさん、中条、そしてアオイによる遠距離攻撃が一斉に放たれ、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に襲い掛かった。

『ッ！　カタカタカタッッッ！』

さすがに同じ手は食わないとばかりに、三人の攻撃を左腕で掻（か）き消す。

「ホホ、甘いの！」
『ッ！？　ガダガダガダッッッ！？』
三人の攻撃の陰に隠れるようにいた土御門さんの五体の【式神使】が、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に噛みついた。
『アアアアッッッ！　バカヤロウ！　何ヤッテヤガルンダヨ！
ソンナモン、トットト消シチマエ！』
『カタカタッッッ！』
賀茂の指示を受けた［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、左腕で【式神使】を消し去る……んだけど。
この時、俺は違和感を覚えた。
そういや賀茂の奴、なんで平気な面（ツラ）しながら［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に指示が出せるんだ？
見た限り、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］もさっきの［シン］の呪符と［吉備真備（きび）］の【式神使】による噛みつきでダメージを負っているのは間違いない。
だったら、ダメージを共有する精霊使（ガイスト）いにも同じような影響が出て……っ！？
ここまで考えて、俺は気づく。
賀茂の奴が、一切ダメージを負っていないことに。
［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、精霊（ガイスト）ではなく幽鬼（レブナント）であることに。
これって……［瀬織津姫（せおりつひめ）］から［禍津日神（まがつひのかみ）］、そして［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に……つまり、精霊（ガイスト）から幽鬼（レブナント）に変質しちまったから、賀茂の手：

から離れちまったってこと、なのか……？

俺はチラリ、と賀茂を見やる。

『クソッ！　何ナンダヨチクショウ！　ソレデモ俺ノ精霊（ガイスト）カヨ！』

賀茂は自身の相棒である［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に怒鳴り散らしている。

けど、もうコイツ等の繋がりは切れてしまっていて……。

「クソッッッ！」

『はう！？　マスター！？』

やるせなさのあまり、俺は床に拳を叩きつけると、驚いた［シン］が慌てて止める。

『ど、どうしたので……っ！？』

俺は心配そうに覗き込む［シン］を、ギュ、と抱きしめた。

もし俺が賀茂みたいに、この大切な相棒を失うかと思ったら、つらくて……怖くて……。

すると。

『マスター……』

［シン］は抱きしめ返しながら、俺の背中をさすってくれた。

心配ないよ、と、そう言ってくれているかのように。

『えへへー……マスターが抱きしめてくれたから、［シン］は元気百倍なのです。［シン］は絶対に、この温もりを手放したりしない

のです……』

「［シン］……」

そんな［シン］の言葉は、まるで俺の恐れや不安を理解しているかのような、俺の想いに応えるかのような、そんな言葉で。

『マスター……［シン］は、あの幽鬼（レブナント）を倒すのです。たとえそれで、あのクズが不幸な目に遭うとしても』

俺からそっと離れて微笑んだ［シン］が、キッ、と賀茂と［伊邪那美命（いざなみのみこと）］を交互に見据えた。

そうだな……相棒はこんなに覚悟を決めてるのに、マスターの俺が日和（ひよ）ってちゃ話にならない。

俺は……この相棒と一緒に戦うだけだ。

相棒と、いつまでも一緒にいるために。

「よっし！」

俺は改めて気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩く。

「［シン］！　やるぞ！　ここで……ここで、この戦いを終わらせるんだ！」

『ハイなのです！』

失くした繋がり（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

相棒の咆哮（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

相棒の咆哮

「［シン］！　やるぞ！　ここで……ここで、この戦いを終わらせるんだ！」

『ハイなのです！』

そう叫び、俺と［シン］が臨戦態勢に構えると。

「ウルセエエエ！　クソザコモブノ分際デ、調子コイテンジャネエゾッッッ！　ツーカ［伊邪那美命（いざなみのみこと）］！　オマエガシッカリシネエカラ、コノオレガ馬鹿ニサレテンダゾ！　分カッテンノカヨ！」

『……』

賀茂の心無い言葉に、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が俯（うつむ）く。

その姿を見た瞬間、俺は腹の底から怒りがこみ上げてきて。

「バカヤロウッッッ！　コイツはオマエの相棒だろうが！　なのにその言い草はなんだよ！　相棒だからって、いつまでも一緒にいられる保証なんかないんだぞ！」

俺は、賀茂を大声で怒鳴りつけた。

『ハア？　オマエ、馬鹿ジャネエノ？　精霊（ガイスト）ハマスターデアル精霊（ガイスト）使イト一心同体ナンダ。離レルワケネーダロ』

賀茂は小馬鹿にするかのように話すが……俺には、それが滑稽（こっけい）でならなかった。

そんな未来が、もうすぐ訪れるというのに。

『ハア……ダリイナア……［伊邪那美命（いざなみのみこと）］、モウサッサト終ワラセロ』

『……（コクリ）』

呆れた表情を浮かべた賀茂が、面倒臭そうに手を振りながら指示をする。

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］も、それに応えるように頷いた。

「……サクヤさん、サンドラ、プラーミャ、カズラさん、アオイ、中条、土御門さん、加隈……そして、［シン］」

全員の名を呼び、俺はみんなを見る。

みんなも、ジッと俺を見ていた。

「次の……次の攻防で、この戦いを……終わらせよう」

『「「「「「「「「おおーッッッ！」」」」」」」」』

気勢を上げた俺達は、それぞれ配置につく。

サクヤさんは、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の正面へ。

サンドラとプラーミャが、サクヤさんの脇を固める。

アオイ、中条、土御門さん、加隈は、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の真後ろに。

カズラさんは、サクヤさんの背中越しから［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に照準を合わせていた。

俺と［シン］は、あえてみんなから離れた場所にいた。

「［シン］……この戦い、決めるのはお前だ。お前のその世界一のスピードだけが、みんなが作った［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の隙を突くことが

できるんだ」

『はう！　もちろんなのです！　［シン］の……［シン］の、マスターと一緒に勝ち取った“ＳＳＳ＋”で、この戦いを勝利に導いてみせるのですッッッ！』

そう叫ぶと、［シン］がクラウチングスタートの体勢を取る。

そして。

「ハアアアアアアアアアアッッッ！」

［関聖帝君］が、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に向かって一騎駆けを開始した。

『ッ！　［伊邪那美命（いざなみのみこと）］！』

『カタカタカタカタッッッ！』

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、あえて右腕だけを突き出す。

これは、少々力負けしたとしても、その後の俺達による波状攻撃を迎撃するためだろう。

――ギイイイイイインンンッッッ！

青龍偃月刀と全てを消し去る腕との激突により、この空間に三度（みたび）激しい音が鳴り響く。

「むうん！」

『ガタガタッ！？』

さすがに片腕では受け止めきれなかった［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、後方へを弾き飛ばされた。

「あはははは！　待ってたよ！　【朱雀】！　そして……【竜の息吹】！」
「クク……【クロノス】！」
「ホホ！　行くのじゃ！　【聳狐（しょうこ）】！　【炎駒（えんく）】！　【索冥（さくめい）】！　【角端（かくたん）】！　【黄麟（きりん）】！」
「行っくぜえええええ！　【ブレイク】！」

飛んで向かってくる［伊邪那美命（いざなみのみこと）］に対し、四人が最強スキルを放つ。

『ッ！　カタカタカタ！』
「「「「っ！？」」」」

だけど、そこは片腕を温存していただけあって、全員のスキル攻撃を全て掻（か）き消した。
たとえ【クロノス】による、都合のいい攻撃であっても。

「ファイア」

――タン、タン、タン、タン。

そこへ狙い澄ましたかのように、カズラさんの［ポリアフ］が狙撃する。

『ッ！？　ガダッ！？』
「よし！」

やはり両腕を行使してしまったために［ポリアフ］から放たれた銃弾を全て捌き切ることができず、数発がそのひび割れた身体に撃

ち込まれた。

「フフ……食らいなさい！　【絨毯爆撃（じゅうたん）】！」

そして、その瞬間を狙っていたかのように、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の頭上に飛び上がっていた［スヴァローグ］が、炎をまとった巨大なハルバードによる槍衾（やりぶすま）を展開する。

「ガチガチガチガチ！」

すると［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、歯を鳴らし、相打ち覚悟とばかりに右手を大きく突き出した！？

「っ！？　プラーミャ！？」

それを見た俺は思わず叫ぶ。

「フフ……【ガーディアン】！」

そんなことも織り込み済みだったんだろう。

サンドラが【ガーディアン】を展開し、【絶対防御】で［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の右腕を相殺した。

そして。

――ドガガガガガガガガッッッ！

『ガダガダガダガダッッッ！？』

プラーミャの攻撃をもろに食らい、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が、床に叩き

つけられた。

「これで、終わりだあああああああああッッッ！」

体勢を立て直し終えていた［関聖帝君］が、二度目の【千里行】を放つ。

っ！　今だ！

「［シイイイイイイイイイイイイン］！」

『はうはうはうはうはう！』

俺の合図で［シン］が弾丸のように飛び出す。

最後の、決着をつけるために。

――斬ッッッ！

『ガギャアアアアアアアアッッッ！？』

［関聖帝君］の青龍偃月刀が半月を描くように舞い、［伊邪那美命］の両腕を叩き斬った。

『はう！　これで終わりなのですッッッ！　【神行法・転】！』

スキルを放って硬直した［関聖帝君］と入れ替わり、［シン］が大量の呪符を貼……っ！？

――パカリ。

突然、［伊邪那美命］が大きく口を開け、その中で凝縮された幽

子が光り輝いた。

俺の頭に最悪の光景がよぎる。

［シン］を……永遠に失ってしまう光景が。

「シ、［シン］！　逃げ……っ！？」

俺は無意識に必死に手を伸ばして叫ぼうとした。

その瞬間。

『はうううううッッッ！』

『ッ！？』

［シン］が幽子の光に包まれ、俺の目の前から……一瞬で、掻き消え……た……。

俺は膝から崩れ落ち、呆然と……って！？

ここで俺は違和感に気づく。

この俺が、無事であることに。

そして。

『【爆】！　【裂】！　【凍】！　【雷】！　そして……【流】！』

『ガギ！？　ガギャ！？　ゴガゲゲゲゲガゲギギゴゴゴゴ！？』

いつの間にか［伊邪那美命（いざなみのみこと）］が呪符で覆われ、五つの属性の特性を持ったスキル攻撃が発動した。

その身体を崩壊させながら床に落ちる［伊邪那美命（いざなみのみこと）］。

その後ろから。

「あ……ああ……！」

『はううううううううううッッッ！』

俺の世界一の、たった一人の大切な相棒が、両の拳を高々と突き上げて咆哮（ほうこう）した。

相棒の咆哮（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

報われない（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

報われない

『はうううううううううッッッ！』

身体を崩壊させながら床に落ちる［伊邪那美命（いざなみのみこと）］のその後ろで、俺の世界一の、たった一人の大切な相棒が、両の拳を高々と突き上げて咆哮（ほうこう）した。

「はは……バ、バカヤロウ……ッ！」

その姿を見た俺は、たまらず駆け出すと。

『はうっ！？』

「コノヤロウ！　心配させやがって！　心配……させ、やがって……っ！」

［シン］のその小さな身体を目一杯強く抱きしめた。

本当はもっと、労いの言葉だったり賞賛の言葉をかけるべきなのに、俺の口から出たのはそんな言葉だった。

『はう……［シン］が傷ついたらマスターも傷ついちゃうのに、そんな真似するわけないのです……だけど、やっぱりマスターなのです……［シン］のたった一人の、大大大好きなマスターなのです……』

そう言うと、［シン］も俺を抱きしめ返す。

絶対に離すまいとするかのように、強く……強く……。

「ふふ……見事だったぞ、［シン］」
『（コクリ！）』

するとサクヤさんと［関聖帝君］が俺達の傍にやってきて、肩をポン、と叩いて労いの言葉をかけてくれた。

「フフ！　さすがは［シン］ですわネ！」
「フン！　……マア、よくやったワ」

続いてサンドラとプラーミャがやって来て俺達の背中をバシン、と叩く。
というかサンドラはともかくプラーミャ、お前はもうちょっと手加減しろよ！？

「……みなさん、あれを」

カズラさんも傍に来たかと思うと、俺のすぐ後ろを指差す。
そこには……身体がボロボロに崩れ落ちていく、［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の姿があった。

『アアアアア！　チクショウ！　ナンデ……ナンデ、最強最悪デアルハズノ［伊邪那美命（いざなみのみこと）］ガ、コンナクソザコモブニ負ケルンダヨ！　オカシイダロ！』

一方の賀茂は、忌々し気な表情を浮かべながら、ガシガシと頭を掻（か）いて悪態を吐く。

……いい加減、コイツの目を覚まさせてやらないと。

「賀茂……今は、そんなこと言ってる場合じゃないだろう！　早く、

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の傍に！」
『アン？　何言ッテンダ？　ナンデコノオレガ、ソンナコトシナイトイケネーンダヨ！　ツーカ、コノオレニ指図スルナ！』
この期に及んでもなお、暴言を吐き続ける賀茂。
『あ……マ、マスター！？』
「ヨーヘイくん！？」
気がつけば俺は抱きしめていた［シン］から離れ、賀茂の目の前にやって来ると。
――バキッッッ！」
『グアッ！？』
「バカヤロウ！　オマエ……オマエ、それでいいのかよ！　アイツは……オマエの相棒は、もうすぐこの世界から消えてなくなるんだぞ！」
俺は賀茂を思い切り殴り飛ばすと、胸倉をつかんで大声で叫んだ。
『ッツウ……オイテメエ！　何シヤガル！　オマケニオレノ［伊邪那美命（いざなみのみこと）］ガ消エルダト？　何ヲ根拠ニ！』
「分からねーのかよ！　アイツがあんなにボロボロなのに、オマエは一切ダメージを負ってないんだぞ！　つまり……！」
俺は残酷な言葉を告げるため、すう、と息を吸うと。
「つまり！　もうオマエの精霊（ガイスト）じゃなくなっちまってるんだよ！　もう……ただの幽鬼（レブナント）でしかないんだよ……！」

そう……『死返玉（まかるがえしのたま）』によって［瀬織津姫（せおりつひめ）］は［禍津日神（まがつひのかみ）］……［伊邪那美命（いざなみのみこと）］へと変質し、幽鬼（レブナント）となった。

つまりそれは、マスターである賀茂との決別を示すもので……。

「……オマエも、まがりなりにもアイツのマスターだったんだろ。最後くらい、アイツの傍にいてやれ……」

『グエッ！？』

俺は賀茂の襟首をつかんだまま、ずるずると引きずり、そして……崩れてもう上半身しか残っていない［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の傍に放り投げた。

『カタ……マス、タア……』

残る右手を懸命に伸ばし、マスターである賀茂に触れようとする［伊邪那美命（いざなみのみこと）］。

だけど。

『ハア！？　フザケンナヨ！　ソンナモン、『死返玉（まかるがえしのたま）』ヲ壊シチマエバ、元ニ……！』

ポケットから『死返玉（まかるがえしのたま）』を取り出し、賀茂はそれを壊そうと必死で床に打ちつける。

『クソッ！　クソッ！　ナンデ……ナンデ壊レナインダヨオオオオオオッッッ！？』

『アア……マスタ、ア……オ慕イ、シテ……』

［伊邪那美命（いざなみのみこと）］の右手が賀茂の身体に触れた直後、その右手も、腕も、肩も、胸も、首も、顔も……全て、砂のように崩れ去る。

……残されたのは、マテリアルと大量の幽子だけだった。

『オ、オイ……冗談、ダロ……？　オマエガイナクナッチマッタラ、オレハドウナルンダヨ……？　タダデサエモブ以下ッテ評価ナノニ……クソッ！　［瀬織津姫（せおりつひめ）］！　来イ！　早ク来ネエカ！　早ク……フザケンナヨ！　チクショオオオオオオオ！』

賀茂は狂ったように何度も召喚を試みるけど、当然、その呼びかけに応じて［瀬織津姫（せおりつひめ）］が姿を現わすことはない。

もう……永遠に。

『はう……［シン］は悲しいのです……［伊邪那美命（いざなみのみこと）］は……ううん、［瀬織津姫（せおりつひめ）］は、たとえ幽鬼（レブナント）になってもマスターである賀茂のために尽くしたのに……なのに……っ！』

いつの間にか俺の隣に来ていた［シン］が、悔しそうな表情を浮かべながら、ぽろぽろと涙を零（こぼ）した。

「……精霊（ガイスト）は、マスターを選べない、もんな……こんなの、悲しいよなあ……尽くしたマスターに、消えてもなお、優しく労ってもらえないだなんて……っ！」

俺は［シン］の小さな手をギュ、と握りしめながら、未（いま）だに罵倒と［瀬織津姫（せおりつひめ）］の召喚を繰り返す賀茂と、床に転がるマテリアルを眺めていた。

報われない（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

待っていたヒロイン達（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

待っていたヒロイン達

『チ、チクショウ！　離セ！』

戦いが終わり、俺達は“バベル”領域（エリア）の出口へと向かって階層を下りている。

精霊（ガイスト）を失くした、賀茂を連れて。

「フン！　別に、私（ヤー）はアナタをここに置き去りにしてもいいのヨ！」

「エエ……ヨーヘイに感謝しますのネ」

サンドラとプラーミャが、わめく賀茂に冷たく言い放つ。

だけど、そんな真似をしたら精霊（ガイスト）使いでなくなってしまった賀茂は、五分と保（も）たずに幽鬼（レブナント）に食い散らかされてしまうだろうな。

「ところでヨーヘイくん。賀茂の奴は、どうしてボク達の時みたいに闇堕ちから元に戻らないの？」

隣にやってきたアオイが、不思議そうに尋ねる。

「そりゃ当然だろ？　だって賀茂の心は、何一つ救われてないんだから」

そう。そもそも闇堕ちっていうのは、単に“柱”を倒したら救われるってモンでもなくて、闇堕ちしたキャラクターが心に抱えているものから救って、はじめて元に戻れるんだ。

プラーミャのサンドラへの想い、アオイの本当の友達への渇望、

カズラさんのライバルとしての対等な立場への執着、土御門さんの『土御門家』再興への願い……。

だけど……賀茂に関しては、心を救う手立ては何一つない。

だって、賀茂が闇堕ちした最大の原因は、底なしに果てしない欲なんだから。

……これから賀茂は、その過剰に求めた欲に対する代償を支払うことになるんだ。

そして、たどり着いた第十五階層で、賀茂に従わされていた小森チユキ、佐々木キョウカ、大谷姉妹の四人と遭遇する。

どうやらこの四人は、サンドラとプラーミャに打ちのめされたダメージが大きくて、思うように身動きが取れなかったみたいだ。

「カズラさん、アオイ。悪いけど、この四人の手当てを」

「……分かりました」

「えー！　だってコイツ等、ボク達を襲ってきたんだよ！　なのに……「アオイ、頼む」……って、わ、分かったよお……」

ごねはしたけど、結局は俺の頼みを聞いてくれたアオイが、カズラさんと一緒に四人を回復した。

「あ……あの……」

「……」

回復を終えた小森チユキがおずおずと声を掛けてくるが、俺はあえてそれを無視した。

どうせコイツは、自分の大切なものがどうなったか聞きたいんだろうけど、俺だって聖人君子じゃないんだ。

サクヤさんにあんな言葉を浴びせたコイツと、口もききたくない。

「ホラホラ！　回復したんだカラ、あとは自分達で帰れるでショ！　私達（ヤー）は暇じゃないのヨ！」

そう言うと、プラーミャがシッ、シッ、と追い払う仕草をした。

これ以上こちらに話す意思がないと感じたのか、四人は気まずそうにしながらここから立ち去って行った。

すると。

「ふふ……全く、君は仕方がないな……でも、ありがとう……」

どうやら俺のそんな気持ちに気づいていたらしいサクヤさんは、苦笑しながら俺の手をキュ、と握った。

ですけど、誰だって大切な女性（ひと）を貶（けな）されたら、普通にキレると思います。

そうして、俺達は途中現れる幽鬼（レブナント）を倒し、“バベル領域（エリア）”から元の世界へと戻った……んだけど。

「あれ？　皆さん、まだいたんですか？」

第十五階層にいた四人のほか、第十階層の九人も領域（エリア）の扉の前で待ち構えていた。

不安と、期待に満ちた目で。

「ホホ、わらわはあの時言ったはずじゃがのう？　『全てを洗いざらい告白』すれば、お主達の大切なものを取り返してみせると。そ

れで、ちゃんと告白は済ませたのかえ？」

「「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」

ははは……分かりやすい反応だなあ。

結局、自分の大切なものに固執するばかりで、それ以外はシカトかよ。

「ホ、ならばこうも言ったことは覚えておろう？　『言ったことを守らねば、その時はお主達の大切なものは、永遠に戻ってこぬと知れ』、となっ」

「「「「「「「「「…………………………」」」」」」」」」

土御門さんの容赦ない一言に、みんなが一斉に俯いた。

「クク……我等はもうここに用はない。早く今回の元凶である賀茂カズマを連れて、学園に戻ろうぞ」

「はは、だな」

中条の言葉に頷き、俺達は賀茂に従っていた十三人を置き去りにして駅へと向かう。

その時。

「お、お願いします！　私の……私の、『ボロボロのハチマキ』を返してよお……！」

小森チユキが俺の足にしがみつき、泣いて懇願した。

「っ！　私も！　私も返してください！　お願いします！」

「何でもしますから！　お願い！」

……本当に、勝手だな。

「ッ！　さっきから聞いていましたラ、自分勝手なことばかリ！　今まで散々ヨーヘイを傷つけるような言葉を投げつけテ！　なじっテ！　そこのクズに従って危害まで加えてきテ！　なのニ……なのにアナタ達ハ……ッ！」

顔を真っ赤にして怒るサンドラ。
というか、こんなサンドラの姿を見るのは、俺も初めてだ。

「フン、聞いたでしょウ？　アナタ達が今すべきことハ、ヨーヘイの足にしがみつくことじゃなくて、今すぐ学園に戻って全部話すことだっテ。それでモ、このままただ縋り続けるっていうのなら、この私（ヤー）がアナタ達の大切なもの、燃やし尽くしてあげル」
「「「「「「「「っ！？」」」」」」」」

そう言ってニタア、と嗤（わら）ったプラーミャを見た十三人は、顔を引きつらせて一目散に駅に向かって走って行った。
というか、最初からそうしとけよ。

「ふふ……だが、ヨーヘイくんは彼女達に返してあげるんだろう？」
「フウ……マア、仕方ないですわネ。だっテ……ヨーヘイですもノ」
俺を見ながらクスクスと笑うサクヤさんと、溜息を吐いて肩を竦めるサンドラ。
他にも、カズラさんをはじめみんなが俺を見つめながら苦笑していた。

はは……何だかこそばゆい、な。

「さあ！　みんな、俺達も学園に戻ろう！」
『はうはう！』
俺はそんな照れくささを隠すかのように大声でそう告げると、駅に向かって［シン］と一緒に走った。

待っていたヒロイン達（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

出逢ってから、ずっと（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
これにて第八章、ラストです！

出逢ってから、ずっと

「おはようございます！」

賀茂を倒した次の日の朝、いつもの待ち合わせ場所で俺を待つサクヤさんに元気に挨拶をする。

「ふふ……おはよう、今日はいつになく元気だな」

「はは、そうですかね」

サクヤさんに指摘され、俺は思わず頭を掻いて苦笑する。

まあ、本音を言えばカラ元気に近いんだけど。

といっても。

「あ……」

「ふふ……私には、無理をして元気に振舞う姿を見せなくても、いいんだぞ……？」

そんな俺の気持ちに気づいてるサクヤさんは、俺の手をキュ、と握り、柔らかい微笑みを浮かべた。

はは……やっぱりあなたにはお見通しですよね……。

「それで……賀茂と、彼女達のことについてだが……」

そう言うと、サクヤさんが少し言い淀む。

俺が無理して振舞っていることもあってか、サクヤさんは気遣ってくれているんだけど……。

「サクヤさん、教えてください。アイツ等がその後、どうなったのかを」
「う、うむ……」
それからサクヤさんは学園に着くまでの間、訥々（とつとつ）と説明してくれた。
まず、賀茂カズマについては、やはり今回の事件の全ての黒幕ということで、“ＧＳＭＯ（グスモ）”に連行されて取り調べを受けている最中とのことだ。
ただ、昨日の取り調べの状況では『コンナハズジャ……』だの、『オレハ選バレタ人間ナノニ……』だの、ブツブツと愚痴をこぼしてばかりで、ヒロイン達に対して行った数々の所業については完全黙秘をしているらしい。
「……賀茂カズマの供述については、これからも取り調べを行って全容を明らかにするとのことなのだが、あの男はもう精霊使い（ガイスト）ではない。それで、引き続き“ＧＳＭＯ（グスモ）”の管理下に置くのか、それとも一般の警察機関に委ねるのか、整理しあぐねているそうだ」
「ああー……」
「ただ、お父……学園長としては、引き続き“ＧＳＭＯ（グスモ）”の管理下に置きたいらしい。精霊使い（ガイスト）が自身の精霊（ガイスト）を失うという現象も、今までに例をみないことであるからな」
確かに『攻略サイト』に記されているゲーム本編の内容を見ても、精霊（ガイスト）が消えてなくなるなんてイベントはない。
研究者でもある学園長……藤堂マサシゲからすれば、恰好の研究対象だろうな。

「あとは……何やら『攻略サイト』などという言葉を時折呟いているらしい」

「っ！？　……『攻略サイト』、ですか……？」

「ああ……だが、それに関しては“ＧＳＭＯ（グスモ）”もゲームか何かの話だろうということで、それ以上のことはないんだがな」

ふう……『攻略サイト』って言葉が出た時はヒヤリとしたけど、特に興味を持たれなくてよかった。

あんなものが知れてしまったら、大混乱に陥（おちい）るところだからな……。

「じゃあ賀茂に関して、しばらくは“ＧＳＭＯ（グスモ）”が取り調べを行うような形になるんですね」

「まあ、そういうことだ」

精霊（ガイスト）も失くしてしまったし、賀茂の奴もさすがに今後は俺達に絡んでくることもなく、これからはモブ以下……いや、犯罪者としての人生を歩んでいくことになるんだろうな……。

「次に、小森チユキをはじめとした女子生徒達だが……」

ヒロイン達については、本人達が素直に自供していることや、賀茂カズマに弱みを握られて操られていたことを考慮し、ほとんどが停学処分程度で済みそうとのことだ。

とはいえ、サンドラとプラーミャの部屋を襲撃した実行犯である吉川サヤと、姿は確認できなかったものの玄関側から襲撃していたもう一人のヒロインの正体……小森チユキは、退学処分になるらしい。

これも、吉川サヤと小森チユキが自供したことで分かったものだ。

「……まあ、それも午前中に行われる職員会議の結果次第だがな」
「そうですか……」
「“ＧＳＭＯ（グスモ）”の職員達も不思議がっていたよ……どうしてあんなガラクタのようなものを奪われたからといって、犯罪に手を染めてしまうほどに追い詰められていたのか、と」

そう言って、サクヤさんが苦笑した。
それもそうだろう。他の人からすればキーアイテムなんて、なんの価値もないからな。

だけど……『ガイスト×レブナント』のキャラにとっては、何物にも代えがたい、想いの詰まった宝物だ……。

「ふふ……だが、私には彼女達の気持ちは分かる。私だって、もし君がくれた絆を奪われてしまったら、どんなことをしてでも取り戻そうとするだろうから……」

サクヤさんは俺のつかんだ右手ごと自分の左手をかざし、“シルウィアヌスの指輪”を嬉しそうに見つめる。

「でも……退学となる小森チユキと吉川サヤはともかく、それ以外の生徒達にとっては、停学後の復帰はつらいものになるだろう、な……」

そう……ヒロイン達がしたことは、全て“ＧＳＭＯ（グスモ）”に自供しているのだ。
当然、賀茂にされたことも、学園に知られてしまうわけで。

すると。

「……ヨーヘイくん、これだけは覚えていてくれ」

急に立ち止まり、正面に立ったサクヤさんが真紅の瞳で俺を見つめる。

「……何を、ですか……？」

俺は、おずおずと尋ねると。

「今回の事件、ヨーヘイくんは頑張った。彼女達の大切なものを取り戻し、彼女達に返してあげたことも含めて。だから……彼女達の顛末（てんまつ）がどうだったとしても、私は君を誇りに思う」

「……ありがとうございます」

俺はサクヤさんにお礼を言うと、俯（うつむ）いてしまった。

サクヤさんは褒めてくれたが、俺のしたことは結局、ヒロイン達の人生をメチャクチャにしたわけだから。

なのに。

「あ……サクヤさん……」

「私がこんなことを言ったところで、誰よりも優しい君が苦しんでいることも分かる。彼女達を不幸にしたんだと、自分自身を責めていることも理解している……だから君の苦しみを、私にも分けてくれ。君が苦しむのなら、私も一緒に苦しむ。自分が罪深いと考えるなら、私も一緒にその罪を背負う。だから……」

そう言って、サクヤさんが俺をギュ、と強く抱きしめてくれた。

本当に、あなたって人は……。

「はい……ありがとうございます……」

俺は……俺は出逢ってからずっと、あなたに救われています。

――世界一大切な、あなたに。

出逢ってから、ずっと（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

第八章が終わり、明日からは少し長い幕間をお送りする予定！
そして、そんな長い幕間の後、いよいよヨーヘイが二年生になり、物語の核心に迫っていくことになります！
どうぞお楽しみに！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

あと一週間（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今回から幕間のスタートとなります！

あと一週間

■藤堂サクヤ視点

「……ふむ、そういうことか……」

賀茂カズマの一連の事件が解決した三日後。

お父様の研究室でいつものように管に繋がれて“ウルズの泥水”の供給を受ける中、私はその時のことについてお父様に説明をしていた。

「はい……賀茂カズマの精霊（ガイスト）は確かに幽鬼（レブナント）に変質し、その後、私達に倒されたことで幽子とマテリアルとなって消失。完全に、賀茂カズマとのリンクが切れておりました」

そう……この現象は、本来であればあり得ないこと。

そもそも精霊（ガイスト）というものは、精霊使（ガイスト）いの内面……精神に作用して生まれる存在というのが通説だ。

なのに賀茂カズマの精霊（ガイスト）は、精霊使（ガイスト）いと完全に切り離される形で、私達と相対した。

その存在を、幽鬼（レブナント）に変えて。

それだけじゃない。

あの精霊（ガイスト）……いや、幽鬼（レブナント）は、自らの意思を持ち、確固たる個人としての想いで賀茂カズマに使役されていた節がある。

そして……私は、そんな精霊（ガイスト）を他にも知っている。

ヨーヘイくんが最も大切にしている精霊（ガイスト）……［神行太保］を。

「ふむ……賀茂カズマに関しては、引き続き“ＧＳＭＯ（グスモ）”による取り調べを続け、少しでも情報を引き出すこととして……もう一つ気になっているのは、例の“柱”の件だ」

「“柱”……ですか？」

お父様の言葉に、私は思わず聞き返す。

賀茂カズマとその幽鬼（レブナント）は確かに異常ではあったが、“柱”に関してはこれまでと変わったところはない。

いつものように精霊使い（ガイスト）が闇堕ちすれば、その瞳を漆黒に変えて九つの柱の一柱が現れるだけ。

今回だって、それは同じだったのだが……。

「ああいや、普通は“柱”が出現し、それをサクヤ達が倒すことで闇堕ちした精霊使い（ガイスト）は元に戻るという話だったのでな。なのに、賀茂カズマに関しては未だに闇堕ちしたままだ」

「ああ……」

そういえば、あの男についてはそうだったな。

だが、そのことに関してはヨーヘイくんが教えてくれた仮説が正しいと考えている。

賀茂カズマ以外の闇堕ちした四人……プラーミャ、立花くん、氷室くん、土御門くんは、“柱”の討伐に加えてそれぞれの心の闇の部分が晴れたことで、元に戻ったのだ。

一方、賀茂カズマの心の闇は、単に“柱”を倒すというだけで晴れることは決してない。
何故なら、賀茂カズマの心の闇……それは、際限のない欲求が根底にあるのだから。

「まあ……賀茂カズマの分析に関しては高坂くんにさせることにしたから、すぐに結果が分かるだろう。何といっても彼は、“ツクヨ”の優秀な一番弟子だしな」
「……」

高坂さんがお母様の一番弟子ということで、お父様は全幅の信頼を置いているようだが、私はあの男を一切信頼していない。

あの、私を値踏みするような眼差し……まるでお母様と私を、比較でもしているかのように。

すると。

「所長、取り急ぎ賀茂カズマの検査結果のデータですが……」

噂をしていた高坂さんがやって来て、お父様に書類を手渡す。
そして彼の、あのまとわりつくような視線に、私は心の中で舌打ちをした。

「っ！？　こ、これは……！」
「はい……彼の中に、考えられないほどの“ウルズの泥水”が内包されています。その量、おそらく“柱”一体に匹敵するかと」
「っ！？」

高坂さんの言葉を聞き、私も思わず息を飲む。

あの賀茂カズマの中に“ウルズの泥水”が！？　それも“柱”と同等だと！？

「ううむ……これは、何としてでも解明を急がねば、な……」

「はい。そのことで、実は所長に折り入って提案があるのですが……」

「む？　なんだね……」

どうやら私に聞かれてはまずい話なのか、高坂さんはお父様にそっと耳打ちをした。

「……高坂くん、本気かね……？」

「はい。それに、もう壊れてしまっているようでもありますから」

そう告げた高坂さんの瞳が、一瞬妖しく光ったように見えた。

「……分かった。元々、この件については君に任せたのだからな」

「！　はい！　必ずや成果を出し、そして……悲願を！」

何かを決心するかのような表情を見せたお父様がゆっくりと頷くと、高坂さんは顔を紅潮させ、満面の笑みを浮かべる。

そんな彼の姿に、私は何とも言えない不安を覚えた。

◇

『あはは、それでですね……』

研究所から帰ってきた私は、少しでも不安を払拭しようと、すぐに彼……ヨーヘイくんに電話を掛け、雑談をしていた。

ああ……彼の声を聞くと、さっきまでの不安が嘘のように消え、本当に心から安らげる……。

『？　サクヤさん？』

「え？　あ、ああ、すまない……ふふ、ついヨーヘイくんの声を聞き入ってしまっていたようだ」

『あああああ！？　そ、そういうこと急に言うの、やめてくださいよ！？』

ふふ、ヨーヘイくんが恥ずかしそうに慌てている。

いつもは彼に焦らされることばかりだから、お返しができてちょっと嬉しい。

「ふふ、すまないな」

『ハア……サクヤさんは……あ、そうそう、来週のクリスマスのことなんですけど、本当に俺達も準備の手伝いに行かなくて大丈夫なんですか？　さすがに、サクヤさんとカナエさんの二人だと大変だと思うんですけど……』

「ああ、心配ない。むしろカナエさんが張り切っていて、私も手を出させてもらえないくらいなんだ」

ヨーヘイくんにそう告げたが……ほんの少しだけ嘘を吐いた。

正確には、『邪魔になるからお嬢様は絶対に手を出さないでください』と、カナエさんに釘を刺されてしまったのだ。

わ、私だってヨーヘイくんに『美味しい』って言ってもらうために、一生懸命クリスマスに向けた料理の勉強をしていたというのに、試作品を一口食べた瞬間、『あなたは望月様を異世界転生させる気ですか？』と、真剣な表情で言われてしまった……。

『そ、それならいいんですけど……』
「う、うむ……っと、もうこんな時間だな」
私は時計の針をチラリ、と見ると、既に深夜十一時を指していた。
相変わらず、ヨーヘイくんと話をしていると時間が経つのが早いな……。
『じゃあ、そろそろ切りますね』
「あ、ああ……その、おやすみなさい……」
『はい。おやすみなさい、サクヤさん』
通話終了のボタンをタップし、スマホを机の上に置く。
「ふふ……さて、じゃあ続きをするとしようか！」
私はフンス、と気合いを入れると、机の脇に置いてある籐（とう）のカゴから、毛糸の玉と編み棒を取り出す。
「クリスマスまであと一週間……それまでに、なんとかして完成させないとな」
私はヨーヘイくんの喜ぶ姿を思い浮かべながら、今日もプレゼント用のマフラーを編んだ。

あと一週間（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

まずは幕間第一弾としてクリスマス編をお送りしていきます。
その後はお正月編、バレンタイン編ときて、“ババル”領域の踏破、二年生へと進級します！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ワタクシは、帰らなイ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今回はサンドラ視点です！

ワタクシは、帰らなイ

■アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ視点

「フウ……」

あの賀茂カズマの事件が終わってから三日後、ワタクシは今、リビングでスマホを握りしめながら息を吐いていル。

それモ、かれこれ一時間以上モ。

「……サンドラ、さっきからジッと固まったままヨ？」

「ッ！　わ、分かってますわヨ！」

同じくリビングで本を読んでいるプラーミャが、ジト目で責めるように見つめル。

で、ですけド、いざとなったらそれなりに勇気がいりますのヨ！

「フウン……私（ヤー）は別にいいけド」

クウウ……プラーミャは我関せずというか、そんな態度を見せていますわネ……。

「ヨ、ヨシ！」

ワタクシはフンス、と気合いを入れると、スマホの画面をスワイプし、相手の連絡先を開ク。

その相手は……ルーシにいるパパ。

今日こそ、今年の冬休みはルーシに帰省しないことを伝えないト。
震える人差し指で発信ボタンをタップし、画面を見つメ……『ハイ』……って、出るのが速すぎませんこト！？

「ア……モ、モシモシ……」
『ム……その声は、サンドラなのカ？』

スマホの向こうからそう尋ねるパパ。
ですけド、発信者表示がされているので、ワタクシだということは分かっているはずなのですガ……。

『フム……サンドラ、ちゃんと『レイフテンベルクスカヤ家』の後継者として、相応しい振る舞いを忘れてはいないだろうナ？』

パパは、二言目からそんなことを言い出しタ。
ヨーヘイと出逢う前の……以前のワタクシでしたら、こんな言葉を聞いた瞬間、緊張で身体が硬直してしまったでしょうけド、真実を知った今となっては、ただただ滑稽（こっけい）でしかなイ。

「エ、エエ……モチロン、ワタクシは“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”として、恥じることない生活を送っておりますワ」
『ウム、ならいイ。ところで、そノ……もうすぐ冬休みとなるのだろウ？　聞くところによれば、東方国の冬はルーシと比べれば生ぬるイ。もう一度心身を鍛え直す意味でも、ルーシに戻ってくるべきと考えるガ？』

ど、どうしましょウ……この訳の分からないパパの言い分を聞いていますト、思わず吹き出しそうになってしまいますワ……。
で、ですけド、せっかくパパが切り出してくださいましたことで

すシ、ここはちゃんと話をしておくタイミングですわネ！

「パ、パパ！　ワ、ワタクシ……冬休みはコチラで過ごしますワ！」

言っタ！　言いましたワ！

こうなったらもう後には引けなイ！　サア！　パパと戦うんですのヨ！　サンドラ！　……ッテ、パパから何の反応も返ってきませんわネ……。

「ア、アノ……パパ……？」

『……ハッ！？　あ、ああいヤ……そ、そんなことは絶対に許さン！　お前は『レイフテンベルクスカヤ家』の後継者なのだゾ！　それが新年を他国で迎えるなド、何を考えているのダ！』

しばらくの沈黙の後、捲（まく）し立てるようにパパが大声で叫ブ。

ですけド、予想通りの反応ですワ。

「イイエ（ニェット）！　ワタクシは絶対に帰りませン！　ワタクシは……ワタクシは、この東方国で新年を迎えますノ！　『レイフテンベルクスカヤ家』のワタクシではなく、“アレクサンドラ＝レイフテンベルクスカヤ”としテ！」

ソウ……ワタクシは、『レイフテンベルクスカヤ家』ではなく、ただのワタクシとして生きていくんですノ。

そして、ソ、ソノ……できれば、ヨーヘイの隣でいつまでモ……。

『ええイ！　駄目ダ駄目ダ！　そんなことは認めんゾ！　お前は『レイフテンベルクスカヤ家』の後継者としテ……『アナタ、少し替わりなさイ』……ッテ、ママ！？』

スマホの向こう側が、何やら騒がしいですわネ……。

『モシモシ、サンドラ？』

「ママ！？」

なんト、パパに替わってママが電話に出てきましたワ！？

『この際なのでハッキリ聞きまス……アナタ、好きな人ができたんでしょウ？』

「フエエエエエエエエエエエ！？」

ど、どうしてそんなことを突然聞くんですノ！？　というカ、どうしてそれが分かったんですノ！？

『ウフフ……その反応、ヤッパリネ』

「……」

『マアいいワ。私（ヤー）からアナタに言うことは一つだけヨ』

ママのいつもとは違う雰囲気に、ワタクシはゴクリ、と唾を飲ム。

お願いヨーヘイ……ワタクシに……ワタクシに、ママと戦う勇気をくださいまシ……！

『『レイフテンベルクスカヤ家』の後継者として、絶対にその相手を捕まえるのですヨ！　そしテ、そのまま婿（むこ）に迎えるノ！』

「フ……フエ……フエエエエエエエエエエエエエ！？」

その言葉を聞いた瞬間、ワタクシは思わず絶叫しタ。

エエ！？　ヨーヘイをお婿様ニ！？

イイ、イエ、もちろんワタクシとしても、ソ、ソノ……お婿様…

…ヨーヘイヲ……。

『な、何を言っているんだママ！　そんなことが認められるわケ…
…『アナタは黙っていなさイ！』……ウグウ……ッ！』

大声で喚き散らすパパを、ママがピシャリ、と黙らせル。
ワタクシが東方国に来てからモ、相変わらず我が家ではママが強いのネ……。

『ウフフ、そういうことだから、私は全力で応援するワ！』
「ママ……」

まさカ、ママがワタクシを応援してくれるなんて思いませんでしたワ……。

『ダ、ダガ！　プラーミャも冬休みは帰らないと言ってきているのだゾ！？　そ、それでハ、私はどうすればいいのダ！』
『知りませン。むしろ、どちらかが婿を連れて帰ってきたら最高ではありませんカ』

電話の向こうで言い争う二人。
ですけド、聞き捨てならないことを言ってましたわネ……。

ということデ、ワタクシはプラーミャを見やるト……ア、目を逸らされタ。

それに、ママがポロリ、とこぼした言葉。

『知りませン。むしろ、どちらかが婿を連れて帰ってきたら最高ではありませんカ』

コレってつまり、プラーミャがその気になっタ……ということで、よろしいんですわよネ？

「フフ……」

気づけば、ワタクシは笑っていた。

あのプライドの高いプラーミャが、ここまでしたんですもノ。

だったラ。

「プラーミャ……コレだけは、絶対に譲りませんのヨ？」

「ッ！？」

フフ……多分ワタクシ、思い切り口の端を吊り上げているのでしょうネ。

あのプラーミャが、顔を青くしていますもノ。

「そういうことですのデ、冬休みは東方国で過ごしまス。よろしいですわよネ？　二人共？」

『『ッ！？』』

雰囲気が変わったワタクシに驚いたのか、ママとパパが息を飲んだことが分かっタ。

『デハ、ごきげんよウ』

そう告げると、ワタクシは通話終了ボタンをタップした。

フウ……ただでさえ先輩という高い壁がいますのニ、ここにきて

プラーミャも正式参戦。オマケに氷室先輩と土御門サン、それに、今はメイザース学園にいる悠木サンまで……。

とはいエ、絶対に譲ってなるものですカ！

世界で一番大好きなヨーヘイの隣は、ワタクシのものですワ！

ワタクシは左手薬指の“リネットの指輪”を見つめながら、決意を新たにしタ。

ワタクシは、帰らなイ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

親友（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

親友

『はうううう……ルフランじゃないのです。ここじゃ最高のアイスが食べられないのです……』

賀茂との戦いを終えた次の土曜日の午後、俺は駅前のファミレスに来ていた。

んで、目の前の［シン］が席に着くなり文句を垂れ流してやがる……。

「ワガママ言うな。というか、ファミレスにも一応アイスはあるぞ」

『はう！　ホントなのですか！』

はは、チョロイ、チョロ過ぎる。

ということで俺はメニューを広げ、［シン］に見せてやると。

『んふふー、三種類もあるのです！　これは、［シン］に全部制覇しろという運命（デスティニー）を感じるのです！』

「そんな運命ねーよ」

まあ、ゴキゲンになったようで良かったけど。

「それよりアイツ、遅いなあ……」

俺はスマホの時計を見ながら、そう呟く。

といっても、まだ待ち合わせ時間から五分程度しか過ぎてはいないんだけど。

どうやらサクヤさんとサンドラが待ち合わせの一時間以上前に来ることに慣れすぎて、感覚が麻痺(まひ)してるのかもしれない。

すると。

「お、きたきた」

入口を見ると、店に入ってきた中条の姿があった。

というのも、珍しく今日は中条に誘われてこのファミレスに来ていたのだ。

「ウーン……だけど、一体何の用事なんだろうな？　誘ってきた時、一緒に遊びに行くって雰囲気でもなかったし……」

俺は腕組みをしながら首を捻(ひね)る。

でも、昨日声を掛けてきた時の中条の表情は、いつになく真剣なものだった。

「ククク……待たせたな」

「いや、俺達もついさっき来たところだ」

中条は俺の向かいに座ってテーブルの呼出ボタンを押すと、店員のお姉さんがすぐにやって来た。

「いらっしゃいませー、ご注文はお決まりでしょうか？」

「ククク、ドリンクバー……『はう！　はう！　それとアイスを三種類全部所望するのです！』」

中条の注文に割り込み、［シン］が勢いよく手を挙げてアイスを注文した。

「ククク……そういうことで、ドリンクバー二つとアイス三種類だ」
「かしこまりましたー！」
注文を取り終えた店員のお姉さんが、ぱたぱたと戻っていく。
なんだろう……動きがよちよちしていて可愛い。
「さて……では行こうぞ！」
「へ……？」
スック、と立ち上がった中条に呼びかけられ、俺は思わずキョトンとしてしまった。
「どうした？　貴様はドリンクを取りに行かないのか？」
「ああー……」
そういや、ドリンクバーを注文したんだった。
学園に入学してからは、いつもルフランだっただけに、すっかりこのシステムを忘れてたなあ……。
ということで、俺達はドリンクバーで好きなものをコップに注いで席に戻った、んだけど……。
「……中条。お前の飲み物、一体何だ？」
「ククク……これは、我がコーヒーとコーラ、それにティーパックで香りづけをしたスペシャルドリンクだ」
「マジでか」
うん……絶対に不味いっていうことは分かるんだけど、それでも、チョットどんな味がするのか気になるのは仕方ないよな。

「ま、まあいいや……それで、今日俺を誘った理由は何だ？　しかも、ご丁寧に『みんなは呼ぶな』と釘を刺して」
「クク……そんなもの、貴様も分かっているだろう？」
そう言って中条はくつくつと笑うが、正直ピンとこない。
ええー……何かあったっけ？
「む、本当に忘れてしまっているのか？　賀茂と戦った時、我が言ったではないか。『貴様に聞きたいことは山ほどある』、と」
「あ……」
そういやあの時の俺と賀茂との会話、その場にいたコイツは聞いていたんだった。
あの、『攻略サイト』というワードを。
「望月ヨーヘイ……説明してくれ。あの時、賀茂カズマが言っていた『攻略サイト』とは何なのか。そして、それを貴様も何故知っているのかを」
「……」
どうする……？
正直、『攻略サイト』のことを中条に知られてしまったことは失敗だった。
アレには、来年のクリスマスまでの全てのことが記されている。
そんなものを仮にもイベントボスである中条が読んで、『ユグドラシル計画』どころか、この『ガイスト×レブナント』の世界の全てを知ってしまったら……。

……いや、違うな。

コイツは……“中条シド”という男は、もうイベントボスなんかじゃない。

俺と戦い、一緒にサクヤさんを守るために戦うと自分を犠牲にしてまで駆けつけてくれた、俺の大切な友達（ダチ）だ。

だったら。

「……中条。これから話すこと、絶対に秘密にすることができるか？　俺達を絶対に裏切らないと、誓えるか？」

俺は中条を見据え、低い声でそう尋ねる。

「クク……愚問だ。我は、貴様と戦い敗れた時から……貴様がたった一人の女性のために敵であった我に頭を下げた時から、我は貴様に与（くみ）すると決めた。貴様という男に惚れこんだのだ。だから、そんなことは絶対にあり得ぬ」

「中条……」

はは、なんだよ……中条のくせに、そんな台詞（セリフ）吐きやがって……。

「分かった。じゃあ、お前に全てを話す」

俺は覚悟を決めてスマホを取り出し、『攻略サイト』のページを開くと。

「……読んでみろ」

「うむ……何々、『“ガイスト×レブナント”攻略まとめ』……

……っ！？」

俺からスマホを受け取って画面をスワイプしていた中条の表情が、一瞬で固まる。
それもそうだろう。
だって、そこには全てが記されているんだから。
「……望月ヨーヘイ。ここに記されていることは、全て真実なのか？」
中条の問いかけに、俺は無言で頷く。
「そうか……」
ポツリ、と呟いた中条は、俺にスマホを返した。
「……これで色々と得心した。貴様はこの『攻略サイト』で全てを知り、行動していたのだな？　そして、それはあの賀茂カズマも」
「ああ……」
はは……こりゃ、一発くらいブン殴られるかもな。
だって、中条達の企みを先回りして潰した上に、コイツにとって知られたくない過去も、全部俺に筒抜けだったわけだから。
だけど。
「……クク」
「……中条？」
くつくつと笑う中条に、思わず声を掛ける。
さ、さすがに刺激が強すぎたか……？

「ククク……ハハハハハハハ！　全く、貴様という奴は！」
「っ！？　お、おい！？」

すると中条の奴は、ファミレスの店内だというのに、大声で笑い出した！？
い、いや、その反応にも驚きだけど、もうちょっと周りを気にしろよ！？

「ク……スマンスマン。だが、貴様はつくづく……つくづく面白い！　このようなものがあれば、賀茂カズマのように欲望のままに思い通りできただろうに、貴様のやっていることは藤堂殿を救うこととは！　そればかりか、明らかに敵である我の全てを知った上で、ここまで信頼を見せるなどと！」
「は、はは……」

中条に改めて指摘され、俺は苦笑するしかない。
だって、確かに中条の言う通り、普通に考えたら馬鹿な真似してるよなあ……。

「ク……だが、そんな我をも必要と……友と呼ぶ貴様に、我はただ感謝するしかない。そしてこの『攻略サイト』を持つ者が、貴様で本当に良かった……」
「……いや、もっと要領がよかったり、頭のいい奴だったら、上手く立ち回れるんだろうけどな……」
「ク……何を言う。貴様がそのような男だったならば、我が心を許したりなどするものか。だから望月ヨーヘイ……貴様は胸を張れ。貴様は、それだけの男なのだと」
「中条……」

全く……『攻略サイト』が真実だって頷いたってのに中条の奴、早速『攻略サイト』の内容とかけ離れた態度を見せやがって……。

「クク……任せろ。これから先、藤堂殿がこのような結末を迎えぬよう、我も全力で貴様を手助けする。だから……我を頼れ！　友よ！」

そう言って、中条がス、と右手を差し出す。

「はは……ああ、頼りにしてるぞ！　親友！」

俺は中条の右手を強く握り返すと、俺達は強く頷き合った。

親友（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

プレゼントの物色（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

プレゼントの物色

「くあ……！」

日曜日の朝、今日はいつもの休日より早めに起きると、相変わらず気持ちよさそうに俺の上に乗っかって寝ている［シン］をどけてベッドから降りる。

「ウーン、今日もいい天気だなあ……」

さすがに十二月ともなると寒くて仕方ないから、少しでも晴れているほうがありがたい。
特に、今日みたいに一日中出かけるような日は。

「うう……！　は、早く着替えちまおう……」

起きたばっかりでまだ部屋も寒いので、俺は慌てて服に着替え、リビングへ向かう。

「母さん、おはよう」
「あら、おはよう。今日は日曜なのに早いわね」
「あー……今日はちょっと忙しいから」

俺はテーブルに座ると、母さんが朝食の用意をしてくれた。
ふむふむ、今日は豚汁と玉子焼きかあ……寒い日にはもってこいだな。

「いただきます！」

俺は手を合わせて朝食をかき込む。うん、美味い。

すると。

『はうはうはう！　寝坊してしまったのですううううう！』

平日と勘違いしているのか、［シン］が慌てた様子でリビングへと下りてきた。

「うふふ、おはよう［シン］ちゃん」

『はう！　おはようございますなのです！　お母様！』

ビシッ！　と敬礼ポーズを取ると、［シン］が俺の隣の席に座る。

そして、母さんからス、と今日もアイスが差し出された。

『んふふー……やっぱり朝一番のアイスは格別なのです』

「……お前、こんな寒い日の朝からアイスなんかよく食えるな……」

『何を言ってるのですか！　アイスに季節は関係ないのです！　常在戦場なのです！』

「いや、なんでだよ」

アイスごときでいちいち身体を張れるか。

「まあいいや。ところで［シン］、今日は日曜日なのにお前までこんな早起きする必要なかったんじゃないのか？」

『はう！　でもでも、マスターはお出かけするのです！　なら、それについて行くのが［シン］の務めなのです！　そして、ご褒美にルフランのアイスを食べるのです！』

「下心丸出しじゃねーか」

といっても、［シン］のことだからこうなるのは分かってたんだけどな。

「ご馳走さま。今日の朝メシも美味かったよ」

「あらあら、お粗末様。だけど、学園に入学してからはいつも美味しそうに食べてくれるから、私も作り甲斐あるわ」

「はは……」

嬉しそうに微笑む母さんに対し、俺は苦笑するしかない。

だって、今まで美味しくないと感じていたのは、結局のところ俺が母さんの想いを勘違いしてたからだもんなあ……。

俺はちょっと気まずくなり、そそくさとリビングを出て洗面所に向かう。

で、歯磨きと身支度を整えてから部屋に戻った。

「さてさて……念のため、今日のプランを確認しておかないと……」

俺はスマホを取り出し、昨日の夜にあらかじめブクマしておいたページを開く。

「ウーン……かなり効率的に回らないと、今日一日じゃ終わらないぞ……」

これは気合い入れてかからないと、だな。

『はう？　マスター、まだお出かけしないのですか？』

アイスを食べてご満悦で戻ってきた［シン］が、人差し指をくわえながらコテン、と首を傾げた。

「ん？　もうしばらくしたら出かけるぞ。あんまり早いと、店がまだ開いてないからな」

『お店、なのです？』

「ああ」

そう……今日は、今度のクリスマスに向けたプレゼントを買いに行くのだ。

ハッキリ言ってしまえば、単純にヒロインの好感度を上げるならネット通販で好感度アップのアイテムを購入すればいいんだろうけど、そもそも準ラスボスのサクヤさんと名前しか登場しないプラーミャの好感度アップアイテムなんて分からないから無意味だ。

何より、一緒に戦ってくれる、支えてくれるみんなへの感謝の気持ちを込めてプレゼントしたい。

だから、ちゃんと俺自身の目で選んで買いたいからな。

そのために、泣く泣くサクヤさんやサンドラ達のお誘いを蹴ってまで、今日のスケジュールを確保したんだから。

「まあ、というわけで俺は今日、十四人分ものプレゼントを買わないといけないんだよ」

『はうはう！　これでマスターはモテモテなのです！　クリスマスの夜に血の雨が降るのです！』

「いや、なんでだよ」

というか、プレゼントの相手には男もいるんだけど。

言っておくが、『ガイスト×レブナント』にＢＬの要素はないからな。

「さて……それじゃ、そろそろ行くか」

『はう！　お出かけなのです！　ショッピングなのです！』

ということで、俺と［シン］はクリスマスプレゼントを買うために駅前に向かった。

◇

「ウーン……やっぱり、コッチのほうが似合うかなあ……」

雑貨屋に来た俺達は、早速プレゼントを物色している。

なお、男連中と子ども達に関しては選ぶのが比較的簡単だったので、買い物はアッサリ終わった。

というか、少なくとも男相手に真面目に選ぶつもりもないのだ。

「まあ無難なところでいけば、アクセサリー系がいいのかな……」

とはいえ、アクセサリーに関してはセンスを問われそうだし、それはそれで難しい……。

だけど。

「お、これなんかいいな」

見つけたのは、様々な色の水晶が選べるタイプのネックレスだった。

しかも、細いチェーンの部分はシルバーであしらわれているし、

これならいいかも。

一応、素材はプラチナも選べるみたいだけど、あまり高くなりすぎてしまうと、もらう側が気を遣っちゃうからな。程々がいいのだ。

「すいません。このネックレスなんですけど……」

俺は店員さんを呼び、水晶の色を指定して注文する。

もちろん、色に関してはサクヤさん達の瞳の色に合わせたものだ。

「分かりました。プレゼント用のラッピングはしますか？」

「はい、お願いします」

店員さんがラッピングしている間、他のものも物色したりしていると。

『はうー……綺麗なのです……』

［シン］が、陳列されている髪留めをウットリとした表情で見つめていた。

へえー……悪くないデザインだな。といっても、今日は買わないけど。

「お待たせしましたー！」

「あ、ありがとうございます。そういえば……」

俺は店員さんに少し質問した後、ラッピングされたネックレスを受け取って店を後にした。

「さあて、意外と早く買い物が終わったな。んじゃ、ルフランにで

も行くか」
『わあい！　なのです！』
買い物を済ませてホクホクの俺は、両手を上げて喜ぶ［シン］と一緒にルフランへと向かった。
あ、もちろん［シン］のためのクリスマス用の特別なアイスケーキも、ルフランでバッチリ注文したとも。

プレゼントの物色（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クリスマスパーティー①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クリスマスパーティー①

今日は十二月二十四日。
クリスマスイブで、アレイスター学園の二学期終業式の日でもある。

もちろん、今日の夜はサクヤさんの家でクリスマスパーティーが催されるのだけど。

「ヨーヘイ、今日は男子だけでサクヤさんの家に行ってくださいまシ」
「え？　そうなの？」

朝の教室に入るなり、サンドラからそう告げられて思わずキョトン、とした。
いや、それは別に構わないんだけど、何でまた……。

「えへへー！　じゃあ今日は藤堂先輩の家に着くまで、ボクがヨーヘイくんを独り占めできるね！」
「いや、なんでだよ」

というか中条と加隈を忘れるなよ。加隈が知ったら泣くぞ？

「フフ……女の子には、色々と準備があるんですノ」
「そ、そうか……」

サンドラが人差し指を口に当て、悪戯（いたずら）っぽく微笑んだ。
不覚にも、メッチャ可愛いと思ってしまったのは内緒だ。

「マア、私はそんなのいらないって言ったんだけド」
「アラ？　ならプラーミャは止めておきまス？」
「ニャ！？　そ、そんなコト言ってないでショ！？」

肩を竦めながら否定の意思を示したプラーミャだったけど、ニヤニヤしたサンドラにそう言われると慌てて打ち消した。
最近、サンドラとプラーミャのパワーバランスが変わっているような気がするのは、俺だけだろうか。

――キーンコーン。

「あ、チャイムが鳴った」
「フフ、では講堂に向かいますわヨ」
「モ、モウ！　サンドラ！」

ということで、照れ隠しなのか顔を真っ赤にして言い訳をするプラーミャをからかいながら、俺達は終業式に出るために講堂へと向かった。

◇

「あ！　ヨーヘイくん！」
「ククク……待っていたぞ」

約束の時間の一時間前、待ち合わせ場所の駅前に来ると、アオイと中条が既に来ていた。というか、アオイはともかく中条まで来るの早くない？
とはいえ、一時間前に来ている俺もどうかと思うけど。

「え、えーと……一応聞くけど、加隈はさすがにまだ来てないよな？」
「うん、さすがに集合時間の一時間前だしね」
いや、分かってるなら何でお前はこんな時間に来てるんだよ。
「クク、我もクリスマスを皆で祝うなど、記憶の中では初めての経験でな……つい胸が高ぶってしまった」
「ああー……」
くつくつと笑いながらそう語る中条を眺めながら、事情を知ってるだけにメッチャ切なくなってきた。
「えへへー、実はボクもなんだ」
「アオイも！？」
アオイの言葉に、俺は思わず驚きの声を上げる。
そして、改めて事情を聞いてみると、アオイの家は両親が仕事第一な人達で、いつも放ったらかしにされて、毎年のクリスマスはお手伝いさんと二人だけだったらしい。
いや、中条に関しては『攻略サイト』で生い立ちを知ってるけど、主人公についてはプロフィールが詳しく載っていないからなあ。
多分、できる限りプレイヤー目線にしてストーリーに入り込みやすいようにっていう開発者サイドの配慮なのかもしれないけど……裏設定ではこんな重い過去だったなんて……。
「二人共……今日は思いっ切り楽しもうな！」
「うん！　当然だよ！」
「クク……承知した」

そう言って、加隈が来るまでコンビニで買った暖かいものを飲みながら雑談していると。

「悪い！　遅くなっちまった！　……って、別に俺、遅刻じゃねーよな……？」

焦った表情でやって来た加隈が、おずおずと尋ねる。

「ああ……お前は遅刻してない。むしろ、ちゃんと十分前に来て偉いと思うぞ？」

「な、なんだよ……とっくにみんな揃ってるから、焦っちまったじゃねーか」

俺の言葉に安堵した加隈は、ホッと胸を撫で下ろした。

「へへ……だけどさ、俺も今日のクリスマスパーティー、楽しみにしてんだよな！」

「お、そうなのか？」

「ああ！　実は俺、小学二年生の時に親父が死んじまって、おふくろと二人暮らしでさ……おふくろも、俺を育てるために一生懸命働いてくれてたから、クリスマスをまともに祝ったことなくてな……」

チクショウ！　なんだってこんな重い話のオンパレードなんだよ！　というか、どれだけ登場キャラを不幸な境遇にさせたら気が済むんだ！　別の世界とはいえ、是非とも開発者にクレーム入れたいぞ！

「そっかー……加隈くんもそうだったんだね……」

「ククク……よもや、皆が同じ境遇とはな……」

「お前達……」

アオイ、中条、加隈がしんみりとした表情で見つめ合う。
だけど……スマン、俺の家は普通にクリスマスを祝ってた……。

「ようし！　んじゃ、今日は楽しんでやろうじゃねーか！」
「うん！　目一杯楽しもう！」
「クク！　当然だ！」
「だよな！　ヨーヘイ！」

三人が気勢を上げた後、加隈が嬉しそうに俺の肩をポン、と叩いて同意を求める。
うぐう、俺はどんなノリで頷けばいいんだよ……。

「おっと、こうしちゃいられねー！　早く行かねーと、みんな待ってるぜ！」

加隈の先導の元、俺達は一路サクヤさんの家を目指す。
俺一人、そのテンションについていけないまま。

そして。

「「「おおー！」」」

三人がサクヤさんの家を見上げ、感嘆の声を漏らす。

「そういえば、中条はともかくアオイと加隈もサクヤさんの家は初めてだっけ？」
「う、うん。ふわあああ……藤堂先輩って、お金持ちなんだねー……」
「おう……俺の家とは比べモンにならねー……」

「クク……家族のいる家とは、羨ましいな……」

……アオイはともかく、加隈と中条の反応に、俺は何も答えることができない……。

「と、とりあえずインターホンを押すぞ！」

一刻も早くこの雰囲気から逃れたい俺は、門に備え付けられているインターホンを押すと。

『……はい』

「あ、こんにちは。望月です」

『望月様、お待ちしておりました。今、門を開けます』

応対してくれたカナエさんがインターホン越しにそう告げると、門が自動で開いていく。

「「「おおー！」」」

俺は慣れたからもう驚いたりしないけど、初めての三人はこんな反応しても仕方ないか。

『では、今からお迎えにあがりますので』

「あ、はい」

インターホンを切り、しばらくすると……っ！？

「カ、カナエさん！？」

「皆様、ようこそお越しくださいました」

現れたのは、なんとサンタの衣装を着たカナエさんだった。
しかも、ミニスカートで。

「では、どうぞこちらへ」

カナエさんの先導の元、俺達は家の中へと入っていく……んだけど……。

「「……」」

中条と加隈が、無言のまま前を歩くカナエさんを凝視している……。

い、いや、確かにカナエさんは綺麗だしスタイルも抜群ではあるけれど、さすがにその視線はどうかと思うぞ？

一方で、何故かアオイはカナエさんを眺めながらしきりに首を傾げていた。

だけど、その反応も失礼だと思うぞ。

「どうぞお入りくださいませ」

カナエさんが恭しく一礼をし、扉を開けると。

「「「「「「「「「メリークリスマス！」」」」」」」」」

「「「「うおおおおおおおっ！？」」」」

現れたのは、扉の両サイドからクラッカーを鳴らすカズラさんの弟妹（きょうだい）のタカシとニコちゃんミコちゃん。

さらに、カナエさんと同じくミニスカサンタの衣装を着たサクヤさん、サンドラ、プラーミャ、カズラさん、土御門さん、そして…

…“悠木”だった。

クリスマスパーティー①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クリスマスパーティー②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クリスマスパーティー②

「「「「「「「「「メリークリスマス！」」」」」」」」」
「「「「うおおおおおおおおっ！？」」」」

現れたのは、扉の両サイドからクラッカーを鳴らすカズラさんの弟妹（きょうだい）のタカシとニコちゃんミコちゃん。
さらに、カナエさんと同じくミニスカサンタの衣装を着たサクヤさん、サンドラ、プラーミャ、カズラさん、土御門さん、そして……“悠木”だった。

「え、ええと……みんな、どうしてその恰好を……？」

男子を代表して、俺はみんなにおずおずと尋ねてみる。

「ふ、ふふ……！　私は知っているぞ！　クリスマスパーティーでは皆、サンタやトナカイの衣装を着るのだと！」

顔を真っ赤にしたサクヤさんが腰に手を当て、大声で宣言する。
い、いや、あながち間違ってはいないですけども！？

「そうです。それに、この衣装のほうが男子には喜ばれますから」

そう言うと、カズラさんが少し胸をはだけた。
も、もちろん男子は大喜びですけど！？

「ホ、ホホ……恥ずかしい……！」

そして土御門さんに至っては、扇で顔を隠して俯いてしまった。
ですよね！　恥ずかしいですよね！

「ネ、ネエ……コレって、ひょっとしテ……」
「ど、どうやら少し違うみたいですわネ……」

サンドラとプラーミャが、不安そうな表情でヒソヒソと話をしている。
あー、あの二人は騙されたんだな？

「ゆ、悠木はどうして……？」

いや、もちろん悠木が今日のクリスマスパーティーに参加することは当然知ってたけど、まさか悠木までミニスカサンタの衣装を着るとは思わなかった。
い、一応、この中では一番常識人だと思っていたのに……。

「だ、だって……このほうが喜ぶからって……！」

手で顔を覆いながら指差したその先には、カナエさんの姿があった。
犯人はあなたですか……。

「ワ、ワタクシ達ばかりがこのような恰好では、不公平ですワ！　ヨーヘイ達も早く着替えてきてくださいまシ！」
「「「「へ……？」」」」

サンドラ達に衣装を手渡され、俺達は呆けた声を漏らした。
え、ええとー……これは、トナカイの衣装？　だと思うけど、アレ？　アオイだけサンタ？

「ふふ……更衣室までご案内します」
「「「「は、はあ……」」」」
恭しく一礼したカナエさんが、俺達を更衣室へと案内する。
そして……うん、嫌な予感しかしない。
「こちらでお着替えを済まされましたら、また会場へお越しくださいませ」
そう告げると、カナエさんは会場へ戻って行ってしまった……。
「と、とりあえず着替えてみるか……」
「そ、そうだな……」
俺達は手渡された衣装に着替えをする……着替え……って!?
「な、なんだよコレ!?」
いざ衣装を広げてみると、トナカイの被り物にトナカイの手足の形をしたグローブとブーツ、それに競泳用の水着みたいな茶色のパンツだった。
オマケに、真っ赤な鼻をイメージしたボールみたいなものに、ゴム紐タイプの蝶ネクタイまで……。
すると。
「あああああ!?」
「ど、どうしたアオイ!?」
「ボ、ボクの衣装、ミニスカサンタだよ!?」

「「「ええー……」」」

アオイの叫びに、俺、中条、加隈は変な声を上げた。
コレ……絶対に俺達を笑いものにする気じゃん……。

「ク、ククク……よかろう！　これがクリスマスパーティーの正装だというのなら、甘んじて受け入れるのみ！」
「「「中条！？」」」

あああああ！？　中条の中の常識が、非常識に塗り替えられていく！？
ただでさえ中条の常識は真っ白な状態なんだから、こういった間違った注意は止めろよな！？

「う、うん！　ボクも負けてられないもんね！」
「アオイ！？」

お前は一体、誰と争うつもりなんだよ！？

「ヨーヘイ……諦めようぜ……多分、俺とお前が抵抗したところで、痛い目に遭うのがオチだろ……」
「加隈……」

乾いた笑みを浮かべた加隈が、ポン、と俺の肩を叩く。
ううう……やっぱり受け入れるしかないのかあ……。

で、俺達は渋々衣装に着替えたわけだけど……。

「は、恥ずかしいな……」

ミニスカサンタの衣装に着替え、顔を真っ赤にしながらモジモジするアオイ。
アオイが男だと知らなかったら、間違いなく鼻を伸ばしていたことだろう……って！？

「お……おお……！」
「待て加隈！　落ち着け！」

全力で見惚れている加隈が、ゆっくりとアオイに近づきながら手を伸ばしたので、俺は慌てて止めた。
というか、俺達はトナカイの衣装を着てるんだぞ！？　完全にヤバイだろ！　アウトだろ！

「クク……スースーするな」
「当たり前だろ！　俺達はパンイチなんだぞ！？」

うう……この姿を、これからサクヤさん達に見られるなんて、考えるだけでもつらすぎる……っ！

「ま、まあまあヨーヘイくん、みんな待ってるからそろそろ行こうよ、ね？」
「アオイ……」
「そ、それで、その……ボク、似合ってるかな……？」

頬を赤らめながら、上目遣いで尋ねるアオイ。
こ、これ、俺はどう答えればいいんだ！？

そのまま『似合ってる』って答えるのが正解なのか、それとも、アオイが男であることを踏まえて『似合ってない』と答えるべきなのか……。

「そ、その……あ、あくまで客観的に見てってことなら、似合ってる、と思うぞ……？」

俺はできる限りアオイが傷つかないようにと、性別なんかも尊重してそう答えると。

「！　う、うん！　……えへへー、ヨーヘイくんに褒められちゃったよ……」

「お、おう……」

そうかー、ここは褒めるのが正解なのかー……アオイ、お前はそれでいいのか！？

「じゃ、じゃあ行こ！」

「わ！？　ちょ！？」

俺はアオイに腕を引っ張られ、中条と加隈は俺達の後を追いながら、更衣室を出てパーティー会場へと向かった。

クリスマスパーティー②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クリスマスパーティー③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クリスマスパーティー③

「い、行くぞ……みんな、心の準備はいいな……？」
「「「……（コクリ）」」」

パーティー会場となる部屋の前に立つ俺達は、意を決して扉に手を掛ける。

そして。

「み、みんな！　お待たせ！」

扉を開け放ち、部屋の中に入ると……女性陣が全員固まってしまった。

こ、これはどう受け止めたらいいんだ……？
やっぱり俺達のこの恰好はセンシティブだったりするのか？　だ、だけど、衣装はむしろ女性陣から受け取ったんだから、俺達が責められるいわれはないよな……？

「オ、オイ……さすがにマズイんじゃねーの……？」

加隈が俺の隣に来て耳打ちする。

すると。

「う、うむ……みんな、な、なかなか似合ってるぞ……？」
「エ、エエ……ピッタリですワ……」

耳まで真っ赤にしたサクヤさんとサンドラが、恥ずかしそうに顔を逸らす。

「プ、ププ……！」

「ホホ……こ、これはまた……！」

チクショウ！　プラーミャと土御門さん、完全に笑ってるじゃねーか！

「ヨーヘイさん……そのお姿、ぜひ写真に収めても？」

表情を一切変えず、カズラさんがそんなことを尋ねてきた！？　だ、だけど、少し鼻息が荒いように感じるのは気のせいですよね？　ね！

「「わあい！　トナカイさんだー！」」

うんうん、ニコちゃんとミコちゃんは、素直で可愛いなあ……。

「……兄ちゃん、お疲れ」

「少年……」

ポン、と背中を叩き、少年が労ってくれた。

うん……多分、この中で少年が一番大人なんじゃないだろうか……。

「……わ、私は、悪くない……かな……」

上目遣いでそう評価する悠木。

うう……お世辞だとしても、そんなことを言ったら変態扱いされかねないから、止めたほうがいいと思う。

『プークスクス！　マスターが変態さんなのです！　好感度が大暴落間違いなしなのです！』

「よし［シン］、お前のクリスマス仕様のアイスケーキはなしな」

『はうはう！？　ヒドイのです！　横暴なのです！』

マスターである俺を馬鹿にする相棒なんぞに、くれてやるアイスはない！

「皆様、そろそろパーティーを始められては？」

「う、うむ、そうだな……ではみんな、グラスを持ってくれ」

サクヤさんの音頭で、俺達は一斉にジュースの入ったグラスを手に取る。

「みんな、本当によく頑張った。今日は思う存分楽しんで、日頃の疲れを癒そう！　メリークリスマス！」

『「「「「「「「「「メリークリスマス！」」」」」」」」」』

ということで、いよいよクリスマスパーティーが始まったわけだけど……サクヤさんのスピーチ、どこかオヤジくさいような気がするけど気のせいだろうか。

◇

「クク……ハハハハハ！　では、とうとう我がこの日のために用意した余興を披露する時が来たようだな！」

パーティーも進み、調子に乗った中条が前に出て余興を披露するらしい。
というか中条、メッチャはしゃいでるな。
「ソ、ソウですワ！　コレを食べてくださいまシ！」
するとサンドラが、皿に料理を持って俺に差し出してきたのは、鮮やかな色をしたパイ？
「ええと、これは？」
「ソ、ソノ……“セリョートカ・ポド・シューボイ”というルーシの料理なんですノ……」
「ルーシの？　てことはひょっとして……？」
おずおずと尋ねてみると、サンドラは頬を赤くしながら頷いた。
そうかー、サンドラ手作りなんだな。
「おう！　じゃあ早速……」
俺は皿を受け取り、一口サイズに切り分けて口に含むと。
「おおー！　これ、酢漬けの白身魚とポテトと、上に乗っているこれは……」
「ア、コレはビーツですワ！」
「へえー、そのビーツが色鮮やかにアクセントになっていて、超美味いんだけど！」
「！　ホ、ホントですノ！　よかっタア……」
両手を合わせて口元に寄せ、嬉しそうにはにかむサンドラ。

と、というかサンドラ、メッチャ可愛く見えるんだけど……。

「むううううううう……カ、カナエさんさえ認めてくれれば、私だってヨーヘイくんに料理を作ろうと思っていたのに……っ！」

そんな俺とサンドラを見て、悔しそうに歯噛みするサクヤさん。

いや、それはカナエさんの英断だと思います。

「……ね、ねえ、ちょっといいかな……」

今度は悠木がやって来て、遠慮がちにそんなことを言った。

「はは、そんなのいいに決まってるだろ。というか悠木、ちゃんと食べてるか？」

「……あ、うん。もうお腹いっぱいかな」

俺が尋ねると、悠木は舌をぺろ、と出して、おどけた表情を見せる。

ウーン……こんな悠木を見ると、さすがは『ガイスト×レブナント』のメインヒロインって感じだよなあ……。

「……あ、それでね？　実は望月くんに話しておきたいことがあったの」

「話しておきたいこと？」

……って、なんだろう？

「……ええと、実は私の精霊（ガイスト）、またクラスチェンジをしたの」

「「はあ！？」」

悠木の言葉に、俺だけじゃなくその場にいたサクヤさんとサンドラも驚きの声を上げた。

い、いや、クラスチェンジは一回限りだろ!?　そんなことあり得るのかよ!?

「そ、それってどういうことだよ!?」

「……うん。交流戦が終わった後、いつものように領域（エリア）攻略しながら鍛えてたんだけど……その時、あの選択肢が頭の中に現れたの」

「選択肢って……施設で悠木が言っていたヤツか!?」

俺の問いかけに、悠木がゆっくりと頷く。

だ、だけどあの選択肢は、俺の仲間になるか敵対するかの選択肢だったはず。

いや、今なら俺の仲間になりたいって悠木が言ったら二つ返事で受け入れるし、むしろもう俺達の仲間だし。

「……それで、現れた選択肢は『望月ヨーヘイを支えたいか』というものだったわ」

「俺を……支えたい？」

「……もちろん、私の答えは『はい』の一択だったんだけど、そしたら［クヴァシル］が勝手に召喚されて、私の目の前で幽子の渦に包まれて……」

だ、駄目だ……頭が混乱してきた……。

［シン］じゃあるまいし、精霊（ガイスト）が勝手に召喚されるなんてことはあり得ないし、何よりクラスチェンジの開放は、マスターである精霊（ガイスト）使いにその選択を委ねられているはずなのに……。

「……でね？　幽子の渦が薄れて、中から現れたのは［クヴァシル

」ではなくて、別の精霊……いい、見てて。［ハンニバル］」
「「「っ！？」」」

悠木が俺達の目の前で精霊を召喚すると……現れたのは、古代ヨーロッパの人々が着ていたキトンという服装の上から、兜と胸当て、それに赤のマントをまとい、手には装飾された青銅のショートソードを携えた、銀髪の綺麗な女性だった。

「ほ、本当に、［クヴァシル］が別の精霊に……」
「……うん。だけど、私は嬉しかった。これで、望月くんの役に立てるって思ったから」

こ、この精霊があの［クヴァシル］に負けないくらい……いや、それ以上に強いってことはひしひしと感じるんだけど、それでも、俺の役に立てるって言われたら、その……な、何だか照れるなあ……。

「……だから望月くん、これから先、何か困ったりすることがあったら、遠慮なく私に言って？　その時は、私は何を差し置いても、どんなに離れていたってあなたの元に駆けつけるから。それこそが、私が［ハンニバル］を手に入れた意味だと思うから」
「お、おお……」

俺の手を両手でギュ、と強く握り、潤んだ瞳でそう告げる悠木。
その申し出は本当に心強くて、すごく嬉しいことは間違いない……間違いないんだけど……。

俺はチラリ、と後ろを見やると。

「むううううううううううう！」

「キイイイイイイイイイイイイイイイ！」

……サクヤさんとサンドラが、俺達を睨みながら歯ぎしりしていた。

クリスマスパーティー③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

クリスマスパーティー④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

クリスマスパーティー④

「皆様、お待たせいたしました」

クリスマスパーティーも中盤に差し掛かり、お手伝いのカナエさんが今日の主役、クリスマスケーキを持って来てくれた……って!?

なんと、運ばれてきたケーキは、一メートル四方のサイズの大きさだった。

い、いや、デカくない!?　この人数で食べきれるのか!?

「ふむ……カナエさん、ひょっとしたら、これでは足りないかもしれないな……」

「サクヤさん!?」

不安そうにケーキを眺めるサクヤさんの言葉に、俺は思わず振り返る。

足りますよ!?　いや、絶対に余りますから!

「お嬢様、ご安心ください。ケーキはもう一つございます」

「まだあるの!?」

こ、こんなの二つも食べたら、絶対にお腹がパンクするぞ!?

「フフ……その勝負、この私(ヤー)が受けてたとうじゃないイ!」

「「わあい!　ケーキをたくさん食べられるー!」」

不敵な笑みを浮かべるプラーミャに、無邪気に喜ぶニコちゃんミ

コちゃん。
よく見ると、他のみんなも何故か気合いが入っていた。いや、みんな本気かよ!?
「ふふ……余ればお持ち帰りして、お父さんとお母さんにも食べさせてあげないと」
おおっと、俺以外にも現実的にケーキを見据えるカズラさんがいた。
さすがはカズラさん、氷室家を一手支えてるだけのことはある。
『はうー……［シン］はどちらかといえば、アイスのほうが好きなのです……』
どうやら［シン］にはあのケーキの豪華さは伝わらなかったみたいだ。
だけど安心しろ。
「んじゃ、ちょっと俺は席を外しますね」
ということで、俺はあらかじめ用意し、カナエさんに預けておいた例のものを厨房から取り出し、ワゴンに乗せて会場へと運ぶ。
そして。
「［シン］！　お前の分はコッチだ！」
『っ！　はうはうはう！』
はは、ワゴンの上にある、ルフランに特注で作ってもらったブッシュ・ド・ノエルのアイスケーキに釘付けになってるな。

『マ、マスター……これ、ひょっとして全部［シン］のものなのです……？』

「おう！　今日は特別な日だからな！　好きなだけ食べていいぞ！」

俺は自慢げにそう告げると……あ、あれ？　［シン］の奴、肩が震えてない？

「うおっ！？」

『はうはうはう！　マスター大好き！　大大大好きなのですうううううううう！』

勢いよく飛び込んできた［シン］が、嬉し泣きをしながら頬ずりをする。

「はは……学園に入学してから、［シン］には本当に助けてもらってるしな。これくらい用意するのは、マスターとして当然だろ？」

『はうううううううううううう！』

［シン］を抱きしめながら優しく頭を撫でてやると、［シン］はますます泣いてしまった。

「ふふ……これは私達も負けていられないな。［関聖帝君］」

「エエ！［ペルーン］！」

すると、みんなが次々と精霊(ガイスト)を召喚しだした！？

「さあ、［関聖帝君］！　それに他のみんなも、一緒にケーキを食べよう！」

「「「「「「「「「おー！」」」」」」」」」

はは……精霊達も嬉しそうな顔してるなあ……。

『えへへー、みんな楽しそうなのです。みんな……絶対に、今日という日を忘れないのです……』

「はは、何言ってるんだよ［シン］。来年も、再来年も、ずっとずっとこうやってクリスマスを過ごすに決まってるだろ」

『はう……そうだったのです……［シン］は、マスターとずっと一緒に過ごすのです……』

楽しそうにはしゃぐみんなと精霊達を眺めながら、［シン］は、ぴと、と俺に寄り添った。

◇

「皆様……名残惜しいですが、そろそろお時間のようです……」

ケーキを食べた後も、俺達は大いにはしゃぎまくったんだけど、楽しい時間はあっという間に過ぎてしまい、お開きの時間になってしまった……って、大事なことを忘れてた！？

俺は慌てて更衣室に置いていたボックス型のリュックと紙袋を取ってくると。

「あー……こんなタイミングで悪いんだけど……」

ううん、いざとなると照れくさいモンだな……。

「クク……いつもの威勢はどうした、望月ヨーヘイ」

「う、うるせー！　そ、その、大したものじゃないんだけど、俺か

らの感謝の気持ちっていうか、ホ、ホラ、クリスマスだしプレゼントは付き物かなってことで……」

リュックの中から、あらかじめ買っておいたプレゼントを取り出す。

「と、ということで、順番に渡していくから、名前を呼ばれたら取りに来てほしいんだけど……まずは、少年！　ニコちゃん！　ミコちゃん！」

「へへ、やったぜ！」

「「わあーい！」」

三人が嬉しそうに目の前にやって来ると。

「少年には『ナイツ＝シュヴァルツヴァルト』のブースターパック二十個と限定カードケースな」

「おー！　やったー！」

「で、ニコちゃんとミコちゃんには“ふんわりケーキ工場”と、“毛糸ミシン”だ。なんと、本当に作れるんだぞ！」

「「わあい！　お兄ちゃんありがとー！」」

よかった、三人共喜んでくれたみたいだ……って。

「ああ、そうそう。コッチはミャー太に渡してくれるかな？　ネコ用の最高級缶詰め」

「「うん！」」

よしよし……うん。カズラさん、そんなジト目で睨まないでください。決してこれは、ミャー太に対するポイント稼ぎとかじゃないですから。

「じゃ、じゃあ次にカナエさん」
「私にもいただけるのですか？」
自分を指差しながら、キョトンとするカナエさん。
だけど、こんなに準備してもらったこともあるけど、何よりいつもサクヤさんを支えてくださっているんですから、ちゃんと労わないと。
ということで。
「カナエさんには香水です。ほら、いつも車で送っていただく時、カナエさんから良い香りがしていましたから……」
「うふふ、ありがとうございます。大切に使わせていただきます」
カナエさんは恭しく一礼すると、俺のプレゼントを嬉しそうに受け取ってくれた。
「んで、次はアオイ、中条、加隈だな」
「わあい！　ボク、ヨーヘイくんのプレゼントをすっごく楽しみにしてたんだー！」
「クク……まさか、初めてのプレゼントが貴様からとはな……」
「あー……俺としちゃ、可愛い女の子からもらいたかったんだけどなー……」
三者三様の反応を見せるけど、俺的には加隈の意見に完全同意だな。
むしろ、俺からもらって喜ぶアオイと中条がおかしいと思う。
だけど。

「……加隈、だったら辞退したら？　別に望月くんも、好きでプレゼントを用意したんじゃないだろうし」
「うえ！？　ゆ、悠木！？」

絶対零度の視線を向けられ、加隈は思わず身体を震わせた。というか、見ているコッチも怖いんだけど！？

「と、とにかく、サッサと渡すぞ。アオイはホレ、最新のゲーミングマウスとキーボードな」
「わあああ……！」

はは、アオイの奴、瞳をキラキラさせてやがる。
そのミニスカサンタの姿と相まって、完全に女子だな。

「で、中条はよく分かんなかったからゲームな。冬休み、それで一緒に遊ぼうぜ」
「！　う、うむ！」

どうやら殊の外喜んでくれてるみたいだ。
でも、プレゼントもさることながら冬休みに遊ぶことも嬉しいのかな。

「加隈は……お前もよく分かんないしヘッドホンにした」
「おお！　コレ、最新のヤツじゃん！」

お、意外とこれで正解だったみたいだ。
なら良かった。

「じゃあ後は、サクヤさん始め、残っているみんな来てくれるかな」

「う、うむ！」

ということで、サクヤさん、サンドラ、プラーミャ、カズラさん、土御門さん、悠木が並ぶ。

「はは……色々考えたり悩んだりしたんだけど、結局こんな形に落ち着きまして……」

そう言うと、一人ずつ綺麗にラッピングされた細長い箱を手渡す。

「ヨ、ヨーヘイ、開けてもいいんですノ？」

「ああ」

みんなは丁寧にラッピングを外し、箱の蓋を開けると。

「「「「「あ……」」」」」

「はは……い、一応、みんなの瞳の色と同じ水晶をあしらったシルバーネックレスなんだけど……」

そう言って、俺は頭を掻きながら苦笑する。

「ふふ……また一つ、大切なものができてしまったな……」

「エエ……」

みんなが。口元を緩めながらプレゼントを眺める。

「と、ということで！　みんな、その……これからもよろしく！」

俺は照れくさいのをごまかすように、大声でそう言って頭を下げた。

クリスマスパーティー④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

来年の、約束（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

来年の、約束

「「「「「「「「「「「「ありがとうございました！」」」」」」」」」」」」

クリスマスパーティーが終わり、後片づけも済ませた俺達は、ここまで準備をしてくれたカナエさんに一斉にお礼を言った。

「うふふ、またぜひいらしてくださいませ」

そう言うと、カナエさんは見事なカーテシーをした。

なんだろう……カナエさんって、言うなれば貴族のお屋敷で働く一流メイドっぽいよな。もちろん良い意味で。

そして。

「では皆さん、お疲れ様でした」

「「「バイバーイ！」」」

まず、カズラさんが少年、ニコちゃんミコちゃんを連れて家路につく。

少年はともかく、ニコちゃんミコちゃんはまだ小さいからなあ。早く寝させてあげないと。

「ホ、ではわらわも、これで失礼するえ」

「あー……土御門さんはこれから実家に帰るのかあ……」

そう……土御門さんは、『土御門家』の再興に向けた足がかりを

得たことで、正式に『土御門家』を継ぐことになったそうだ。
そのため、正月には分家筋を全て呼んで、盛大にお披露目会を行うらしい。うん、聞いただけで大変そうだ。

「ホホ……今年はやむを得ぬが、そ、その……もし望月がよければ、来年は……（ボソッ）」
「？　土御門さん？」
「ホ、ホホホホホ！？　な、何でもないわえ！　で、ではの！」

何故か焦った様子の土御門さんが、足早に帰って行ってしまった……。
だけど、最後なんて言ったんだろう？

「じゃあボク達も帰るね！」
「クク……ではな」
「じゃーなー！」
「……望月くん、またね」

どうやらアオイ、中条、加隈、そして悠木は、四人で一緒に帰るみたいだ。
というか、あの四人って意外にも家が近所だったらしい。

「フフ……さあプラーミャ、ワタクシ達も帰りますわヨ」
「エエ。じゃあヨーヘイ、明日は忘れずに迎えに来るのヨ！」
「ええー……」

プラーミャにビシッ！　と指を突きつけられ、俺は思わず溜息をもらす。
というか学園に来るんだから、現地集合でいいじゃん。二人の家に寄ってだと、遠回りだろ……。

「ふふ……まあまあ、明日は私も一緒に付き合うから」
「あ、あはは……そうですね……」

クスクスと笑うサクヤさんに慰められて、俺は苦笑した。
というか、みんな家路についたのになんで俺はまだ帰らないかというと……それは、まだもらってないからだ。

サクヤさんからのプレゼントを。

い、いや、サンドラを始め、みんなからはプレゼントを受け取ったんだけど、サクヤさんは後片づけなんかで忙しかったりしてたから、わ、渡しそびれてるんだと思うんだよね……。

……などと色々と言い訳めいたことを言ってみるけど、実は俺へのプレゼントなんてない、ってことだったら、それはそれでこの状況、ただただ心が痛いだけである。

「む……ふふ、ヨーヘイくん、どうした？」
「へ……？　あ、ああいや、何でもないです……」

くそう……やっぱりサクヤさん、俺へのプレゼントは用意してないのかなあ……。

「あ、あはは……じゃ、じゃあ俺も、そろそろ……「そ、その！」……っ！　は、はい！」

あ、ヤバイ、声が上ずってしまった！？
というか、こんなに食いついたらサクヤさんも引いちまうだろ！？　落ち着け、俺！

「そ、その……ヨーヘイくん、少し目を瞑っていてくれないか……？」
「は、はい！」
サクヤさんに言われるまま、俺は直立不動で目を閉じる。
こ、これって、当然プレゼントをくれる流れだよな！？
すると。
――ファサ。
「え……？」
「あう……そ、その、何分初めてのことでな……至らないところもあると思うのだが……」
なんと、サクヤさんは俺の首にマフラーを掛けてくれたのだ。それも、手編みのものを。
「こ、これ、俺がもらってもいいんですか？」
「も、もちろん……だって、君のために編んだのだから……」
恥ずかしそうに俯きながら、サクヤさんがそう告げる。
はは……！　まさか、こんな最高のプレゼントをもらえるなんて！
「あ、ありがとうございます！　俺……一生大切にしますから！」
「あう！？　そそ、そうか……そんなに喜んでくれるなら、その……ま、また編もうかな……」
そう言うと、サクヤさんがチラリ、と俺の顔を覗き込んだ。

「は、はい！　ぜひお願いします！　そ、その……来年のクリスマスに！」

「あ……ふふ、さすがにクリスマスイブに来年のクリスマスの約束をするのは、少々早いんじゃないか？」

サクヤさんが嬉しそうにはにかむ。

だけど……俺は、サクヤさんと来年の約束がしたいんだ。

この『ガイスト×レブナント』のラストである、来年のクリスマスの約束を。

だから。

「お願いします……俺と、約束してください。来年のクリスマス、また同じように手編みのプレゼントをしてくれる、と」

「あう……うん」

サクヤさんは、耳まで真っ赤にしながら、頷いてくれた。

「ははは！　よっし！　早く来年のクリスマスにならないかな！」

「あうあう！？　も、もう！　ヨーヘイくんは……！」

ポカポカと恥ずかしそうに俺を叩くサクヤさんは、すごく可愛くて、綺麗で……。

俺……絶対にあなたを、救ってみせますから……。

だから……これからもずっと、俺の隣にいてくださいね。

来年の、約束（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

精霊の宝物（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

精霊の宝物

『はうー！　あのアイスケーキ、最高だったのですー！』

サクヤさんとも別れて家に帰ってきてからも、［シン］はずっとあのルフランのアイスケーキの余韻に浸っていた。

ま、まあ、こんなに喜んでくれて何よりだ。

『はうはう！　マスターにこんなにしてもらえる精霊（ガイスト）は、きっと［シン］だけなのです！　［シン］は世界一幸せな精霊（ガイスト）なのです！』

いや、アイスケーキくらいで大袈裟な……。

だけど、そこまで喜んでもらえたなら、用意しておいた甲斐があったな。

『ところでマスター、藤姉さまは手編みのマフラーだとして、アレク姉さまやミャーさん、カズ姉さま達はどんなプレゼントだったのです？』

どうやら［シン］は、プレゼントが何なのか気になるらしい。

「じゃあ、一緒に見てみるか？」

『ハイなのです！』

ということで、俺はボックス型のリュックから綺麗にラッピングされたプレゼントの数々を取り出す。

「ええと……まずは土御門さんから……」

俺はラッピングを開けると、中から細長い木箱が……。

「……何というか、高そうな匂いがプンプンするんだけど……」

で、おそるおそる木箱の蓋を開けてみると、中に入っていたのは扇だった。

「おおー！　ひょっとして、土御門さんが使ってるやつと同じものかな？」

だ、だけど、作りといいつやといい、絶対に高いんだろうなあ……。

「ま、まあ、これは大切に取っておこう……んで、次は悠木かー」

うん、悠木はどんなものをくれたのかなー……って。

「これは……本革のブックカバーだなあ」

コレ、意外と高いんだよなあ。

アイツ、結構無理したんじゃないだろうか……。

「次だ次！　サンドラ！」

サンドラのプレゼントのラッピングを開けると……。

「お、おおう……まさかの懐中時計……」

それも、アンティークな感じの絶対に高いヤツ……。

「は、はう……アレク姉さま、色々と重いのです……」
「言うな……」
さ、さすがにこれは、肌身離さず持っていないとサンドラが怒りそうだなあ……。
「次！　カズラさん！」
包装を開けて出てきたものは……うん、眼鏡ケースと眼鏡だった。
「俺、左右共、視力は一・五あるんだけど……」
さ、さすがに眼鏡をかける機会はないよなー……。
「あとは……アオイとプラーミャかー……」
てことで、二人同時に開いてみると。
「アオイはゲームのコントローラーに、プラーミャは……ぬいぐるみ……」
それも、確かアイツが家族だと言い張った、“メリー”とかいう名前の。
『わあい！　このぬいぐるみ、可愛いのです！　可愛いのです！』
「そ、そうだな……」
ま、万が一このぬいぐるみに何かあったら……俺、絶対に燃やされる……。

「だけど、さあ……」

うん、アオイとプラーミャはともかく、他のみんながくれたプレゼント……実は、彼女達の好感度アップのクリスマスプレゼントだったりする。

要は、俺がもらったものと同じものをヒロイン達にプレゼントすると、好感度がメッチャ上がるという、ヒロイン攻略の上で欠かせないものばかり。

「……みんな、ネット通販で買ったのかなあ……」

俺は床に並べたプレゼントを眺めながら、首を傾げる。

すると。

『はう……そういえば、［シン］はマスターにあげられるものが何もないのです……たくさん……たくさん感謝しているですのに……』

そう言って、［シン］は落ち込んでしまった。

……全く、しょうがない奴だなあ。

『はう!?』

「そんなことねーよ。俺はいつだって、［シン］に色々な、大切なものをもらってる。むしろ、俺が［シン］に返し足りないくらいだ」

『はう……マスター……』

ガシガシと［シン］の頭を撫でながらそう言うけど、それでも［シン］は納得できないのか、俯いてしまった。

んー……でも、アレを渡すにはちょうどいいかも。

俺は机の引き出しにしまってあったものを取り出すと。

「ほら、［シン］」

『はう……？　これは何なのです……？』

「そりゃあもちろん、クリスマスプレゼントだよ」

そう……みんなのネックレスを買う時に物色しておいて、後でネット通販で買っておいたのだ。

ちょうどあの雑貨屋がネット販売をしていたっていうのが大きかったな。

さすがに、プレゼントを［シン］の目の前で買うのも気が引けるからなあ。

「まあまあ、開けてみろよ」

『はう』

［シン］は丁寧に、丁寧にラッピングを開けると。

『はう……！　これ……！』

「お、おう……一応、髪留めなんだけどな……」

元々、［シン］は髪留めをしているわけだし、だったらいいんじゃないかってことでこれを選んでみたんだけど……や、やっぱりモノはモノでも食いモノ（ただしアイス）が良かったか……？

『はう……［シン］は……［シン］は、幸せすぎるのです……！』

「わっと！」

［シン］が涙をぽろぽろと零しながら、俺の胸に飛び込んできた。
プレゼントの髪飾りを、大切に握りしめながら。

「はは……俺達は来年のクリスマスを無事に迎えて、そっから先も一緒に楽しく過ごすんだ。こんなくらいで幸せだなんて言ってどうするんだよ」

『はう！　はう！　マスター！　マスタアアアア！』

「そんなことよりも、せっかくだから［シン］が髪飾りをつけたところを見たいんだけど？」

『はうはう！　だ、だったらマスターにつけてほしいのです！』

ぐしぐしと俺の胸に顔をこすりつけながら、［シン］はプレゼントの髪飾りを手渡してきた。

「おう！　んじゃ、じっとしてろよ」

俺は元々ある［シン］の髪飾りのすぐ上に、髪飾りをつけてやると。

『に、似合うですか……？』

「おう！　バッチリ！」

おずおずと尋ねる［シン］に向かって、ニカッと笑いながらサムズアップした。

『はう……［シン］は、今日を……この幸せな日を、絶対に忘れないのです……』

「はは……だったら俺は、これ以上お前を幸せにして、その幸せな

一日を上書きしてやるよ」

そう言うと、俺は世界一大切な、この小さな相棒を優しく抱きしめた。

◇

『はうはう！　寝坊してしまったのです！　［シン］を置いてけぼりにするマスターはヒドイのです！』

次の日の朝、俺はリビングで朝ご飯を食べていると、［シン］がプンスカ怒りながら慌てて下りてきた。

いや、ちゃんと自分で起きろよ。

「うふふ、［シン］ちゃんおはよう」

『はう！　おはようございますなのです！』

母さんが朝の挨拶をすると、［シン］が背筋をピン、と伸ばして最敬礼のポーズをした。

すると。

「あらあら［シン］ちゃん、その髪飾りはどうしたの？」

『あ……えへへー……［シン］の宝物なのです……』

左手でそっと髪飾りに触れると、［シン］はそう言って嬉しそうにはにかんだ。

精霊の宝物（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

絆の強さ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

絆の強さ

「お待ちしてましたワ！」

クリスマスパーティーから一夜明けた次の日の朝。
俺はサンドラとプラーミャが住むマンションに、二人を迎えにやって来た。

「えーと……悪い、ちょっと早く来すぎ、だよなあ……」

ウーン……いつもの感覚で、約束の時間の一時間以上前に来てしまったんだよなあ。というか、サンドラ達の家に行くんだから、早めに出る必要ないのに。

「フフ、大丈夫ですわヨ？　それに、ホラ」

クスリ、と笑ったサンドラが、リビングへを振り返ると。

「ヨーヘイ、遅イ！」

既に準備を終えていたプラーミャが腕組みしながら出てきて、早速お怒りのご様子だった。
だけど、一時間以上前に来た俺が遅いんなら、一体何時間前に来るのが正解なんだろうか……。

「マアマア、ヨーヘイも許してあげてくださいまシ。プラーミャったら、今日は朝六時からソワソワしてましたのヨ？」

「チョ！？　サンドラ！？」

サンドラに暴露され、プラーミャは顔を真っ赤にしながらわたわたする。
そうかそうか、そんなに待ち遠しかったのか。遠足に行く前の子どもみたいだな。

「はは、別に今日行くところは逃げたりしないから」
「ッ！　そ、そういうことじゃなくテ……モウ！」

俺は少しからかい気味にそう告げると、プラーミャが口を尖らせてプイ、と顔を背けてしまった。

「マ、マアマア……ヨーヘイがこういう男の子だって、アナタも知ってるでショ？」
「……フン」

サンドラが苦笑しながらたしなめ、プラーミャが鼻を鳴らした。
イヤイヤ、別に俺はあまりからかったりはしないほうだと思うんだけど。

まあ、だけど。

「プラーミャ、その服、超似合ってる」

未(いま)だに機嫌が直らないプラーミャに対し、そう言ってサムズアップした。
実際、お出かけ用のプラーミャはなかなかのもので、赤のニットワンピースに黒のタイツというコーデだった。
一方、サンドラもプラーミャと色違いでモスグリーンのワンピース、白タイツという出で立ちで、その妖精のような容姿とも相まっ

て……うん、良き。

すると。

「モウ！　……ヨーヘイの、バカ」

そう言って口元を緩めるプラーミャの姿を見ると、サンドラと双子なんだなあ、としみじみ思う。

だって、反応が全く同じだし。

「フフ……では、少し早いですけど行きますわヨ」

「ソ、ソウネ」

サンドラが微笑み……いや、いつもより少し口の端を吊り上げ気味に嗤うと、プラーミャが若干顔を引きつらせながら返事した。

で、二人はコートを羽織り、“ウリャンカ”と呼ばれるルーシ特有の帽子を被る。

「んじゃ、行こうか」

俺達はサンドラ達のマンションを出て、学園へと向かった。

◇

「ふふ……来たな」

「おはようございます」

学園に着くと、校門の前にサクヤさんとカズラさんが既に来ていた。

だけど二人共、まだ約束の時間までかなりあるんですけど？

「だが、立花くん達が来るまでにはまだ時間が……「おーい！　ヨーヘイくん！　みんな！」」

時計を見てサクヤさんが何かを告げようとした時、アオイが笑顔で手を振りながら駆け寄ってきた。

「えへへ、おはよ！」

「おう、おはよう。ところで、加隈は？」

「もう！　ボクを加隈くんとセットにしないでよ！」

どうやら俺の尋ね方がお気に召さなかったようで、アオイはプンスカと怒り出した。

でも、最近はアオイと加隈は一緒にいる機会が多いし、何より加隈はセットで呼ばれたいと思うぞ？

「あとは加隈さんと中条さんだけですが、まだ待ち合わせ時間まで三十分以上ありますから、このままここにいて風邪を引いてもいけませんので、とりあえず校舎の中にでも入って待っていますか？」

「うむ……そうだな」

カズラさんの言葉に、サクヤさんが首肯する。

もちろん俺も賛成だけど、だったら時間通りに来ればよかったんじゃないかとも思う。早く来てる俺が言うのもなんだけど。

「あ、じゃあ俺が中条に『校舎にいる』ってメッセージを送っておくから、アオイも加隈に連絡しといてくれるか？」

「もー！　だからボクは加隈くんの保護者じゃないよ！」

いや、俺もそこまで言ってないけど……。

まあ、アオイはブツブツ言いながらも、加隈にメッセージを送る。
おっと、俺も中条に連絡しておかないと。

で、生徒会室に来て雑談をすること三十分。
加隈と中条も合流し、俺達は初心者用の領域（エリア）の扉の前にやって来た。

「あれ？　ここって……」
「そうだ。そして、この中に今日の目的の場所がある」

不思議そうな表情を浮かべるアオイを促し、俺達は扉をくぐって中に入る。
その行先はもちろん、“ぱらいそ”領域（エリア）。

先日の賀茂との戦いで、みんなは俺なんかを信頼して、一緒に全力で戦ってくれた。支えてくれた。
だから……俺も、みんなに応えたかったんだ。

このことをサクヤさんとサンドラに相談したら、二人は二つ返事で賛同してくれた。
やはり二人も、この前の戦いで俺達の戦力の底上げが必要だと感じたらしい。

それと。

『ふふ……それに、私達（・・・）だけは、君から特別な絆を貰っているから、な……』
『エエ……そうですワ』

そう言って、二人が左手薬指をそっと触れたのが今も印象に残ってる。
そして、そんな印象に負けないくらいの幸福感も。

「コ、コレ……」
「すごい、ですね……」

プラーミャ、カズラさん、アオイ、中条、加隈がそれぞれ感嘆の声を漏らす。

「はは……この第一階層は雰囲気こそ“ぱらいそ”だけど、実際はかなり凶悪だからな？」
「う、うん……」

俺の言葉にアオイが首を竦めるが、お化け屋敷じゃあるまいし、そんなアトラクションじみたものはないから安心しろ。

だけど。

「……土御門さんも、一緒に来れたらよかったんだけどな（ポツリ）」

そう……土御門さんは『土御門家』の後継者としての襲名披露の関係で、クリスマスパーティーのあと、早々に実家に帰っているのだ。

とはいえ、正月三が日が明ければすぐに戻ってくると言っていたし、その時にあらためて連れてこよう。

「サア！　コッチですワ！」

勝手知ったるサンドラが、みんなを先導する。

そして。

「「「「「っ！？」」」」」

俺、サクヤさん、サンドラを除く五人が、通路で待ち構えるクイーン・オブ・フロストを見て息を飲んだ。

「……確かに、今まで出会った幽鬼（レブナント）とは比べものにならないですね」

［ポリアフ］の【オブザーバトリー】で解析したカズラさんが、緊張した様子でそう告げる。

「はは。ですけどアレは、俺達の糧ですから。［シン］」

『ハイなのです！　それー！』

［シン］は一気に飛び出し、クイーン・オブ・フロストに肉薄すると。

『【縛】』

『ッ！？』

クイーン・オブ・フロストは呪符によって拘束され、ただのオブジェに成り下がる。

「さあ、あとはみんなで倒すだけですよ」

「クク……確かに貴様の言う通り、この幽鬼（レブナント）は我等の糧、だな」

五人は一斉に攻撃を仕掛け、クイーン・オブ・フロストは瞬く間

に幽子とマテリアルにその姿を変えた。

「成程……こうやっテ、高レベルの幽鬼（レブナント）を倒して鍛えるのネ……」

「といっても俺達の実力じゃ、まだ第二階層が限界だけどな。そして、俺達は延々とこの作業を繰り返すだけだ」

「フフ……だけド、強くなれるんでショ？」

「ああ……それは、この俺が保証する」

クスクスと笑うプラーミャに、俺は力強く頷いた。

その後も、俺達は順調に“ぱらいそ”領域（エリア）に巣食う幽鬼（レブナント）を倒し続け。

「あは！　やった！　レベルが上がったよ！」

「俺もだ！」

五人がガイストリーダーを眺めながら、嬉しそうにはしゃぐ。

はは……クラスチェンジしたらなかなかレベルアップしないからな。喜びもひとしおだろう。

「フフ……これでワタクシ達も、もっともっと強くなりますわネ」

「そうだな……私達の強さは、個々の強さじゃない。絆の強さなのだから」

「サンドラ……サクヤさん……」

隣で微笑む二人に、俺は口元を緩めながら強く頷いた。

絆の強さ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

大晦日（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

大晦日

『はう！　はう！　大晦日なのです！』

十二月三十一日の大晦日、［シン］が飛び跳ねながらはしゃぐ。

といっても、母さんに頼まれてスーパーに買い出しに出かけてるだけなんだけど。

だけど……母さん、よくオッケーしてくれたよなあ。

サクヤさんやサンドラを始め、明日の正月は大挙して家にやってくることに。

いや、元々約束していたサクヤさんとサンドラはともかく、プラーミャもルーシに帰らずに東方国に残ることになってるし、アオイは両親と疎遠状態だし、中条はそもそも身寄りがないし……。

一応、カズラさんが氷室家のおせち料理の一部も提供してくれることになっているものの、それでも、これだけの大人数分を母さんに準備してもらう羽目になって、俺としてはいたたまれない……。

そんなことを考え、トボトボと歩いていると。

『はうはう！　明日のお正月も、きっと特別なアイスが食べられるのです！　そうに違いないのです！』

などと、［シン］が淡い期待を寄せているが。

「［シン］……言っとくが、別に正月用のアイスを買う予定はない

ぞ？」
『はう！？』
あんなに嬉しそうにはしゃいでいた［シン］はピタリ、と立ち止まり、この世の終わりみたいな表情でこちらを見る。
「当たり前だろ？　俺達はおせち料理のお使い頼まれただけなんだし」
『で、ですけど、クリスマスには特別なアイスケーキを食べたのですし、今回も同じではないのですか……？』
「んー……少なくとも俺は用意してないし、母さんもそのつもりはないんじゃないか？」
『は、はうううううううう……！』
おおう……［シン］の奴、泣き崩れやがった……。
だが、スマン。俺もこれ以上、母さんに負担をかけるような真似はしたくないんだよ。
「ホラ、［シン］。早く行くぞ」
『はう！？　ヒ、ヒドイのです！　［シン］を置いて行かないでほしいのですううううう！』
ということで、俺達はスーパーにやって来たわけだけど。
「あ、カズラさん！」
「ヨーヘイさん、こんにちは」
偶然にも、買い物かごを持ったカズラさんと出逢った。
「カズラさんも明日のお正月の買い出しですか？」

「ええ、ちょうど醤油を切らしてしまいまして。おせち料理は醤油をよく使いますから」
「ああー……」
確かにおせち料理って、煮物が多いイメージだよなあ……。
といっても、俺は作ったことがないからよく分からないけど……って。
「ということは、おせち料理もカズラさんが作るんですか？」
「そうですね、お母さんと半分ずつ分担します」
「へえー……」
カズラさんのおせち料理……うーん、明日が待ち遠しい！
「ですので、明日は楽しみにしていてください」
「もちろんですよ！　カズラさんの料理は、全部美味しいですからね！」
「ふ、ふふ……では私はこれで……」
「はい！」
何故か口元……というか、鼻のあたりを押さえたカズラさんは、醤油を取ってそそくさとレジに向かった。
ま、まあ、おせち料理の準備は大変だから、長話しして邪魔しちゃ悪いしなあ……。
「……それで［シン］、何シレッとカゴにアイスを放り込んでるんだ？」
『はう！？　こここ、これはその……』
俺に指摘され、［シン］が俺に背中を向けたまま直立不動になる。

しかもカゴに入ってるアイス、高いヤツばっかりじゃねーか。

「……戻してこい」

『はうううううううう！』

俺はス、とアイス売り場を指差すと、［シン］は半ベソをかきながらアイスを戻しに……って、何回もコッチを振り返ったところでダメだからな。

◇

「ごちそうさまでした！」

「あらあら、お粗末様でした」

夕食を終え、俺はお茶を飲んで一息吐いた。

というか、今日は大晦日だけあってすき焼きだったりする。

『はうううう……』

「なんだよ、まだ落ち込んでるのか？」

どうやらアイスの一件をまだ引きずっているらしく、［シン］はいつものアイスをちびちびとかじりながら俯いていた。

「ハア……」

俺は溜息を吐き、チラリ、と母さんを見やる。

だが母さんは、無言で首を左右に振った。

チクショウ、明日までこの状況で耐えろ、と？

結局、いたたまれなくなった俺は、落ち込む［シン］を置いて部屋に戻った。

「それにしても……」

今年一年、色んなことがあったなあ……。

アレイスター学園の入学直前で、『攻略サイト』なるものを発見して、この世界が『ガイスト×レブナント』なんていうゲームの世界だって知って……。

俺はおもむろにベッドに寝転がり、スマホを取り出して『攻略サイト』のページを眺める。

俺がクソザコモブだったってことは心の底から気に入らないが、この『攻略サイト』のおかげでサクヤさんやサンドラ、みんなと出逢えて、仲良くなれたんだよなー……。

「ま、だけど［シン］……［ゴブ美］に関しては、クソザコモブのままだったとしても俺の精霊（ガイスト）だったんだけど」

とはいえ、『攻略サイト』を知らなかったら、多分俺は［ゴブ美］につらく当たっていたと思う。

それで、自分の境遇に悲観して、全部［ゴブ美］のせいにするような、クズ野郎に成り下がってただろうな。じゃなきゃ、『攻略サイト』にあるような、ひねくれた性格なわけないし。

「くあ……」

あー……晩メシ食って寝転がったモンだから、眠くなってきた……。

俺はスマホを放り投げ、そのままひと眠りした。

◇

――ピリリリリリ。

「……んあ？」

スマホが鳴り、俺は目を覚ます。

というか、スマホはどこだ……って。

『ハイなのです』

「お、おお……悪いな［シン］」

いつの間にかベッドに腰かけていた［シン］がスマホを手渡してくれたので礼を言う。

で、スマホ画面を確認すると……

「あ、サクヤさんだ」

俺は慌てて通話ボタンをタップする。

「もしもし」

『あ……ヨ、ヨーヘイくん、今大丈夫、かな……？』

「もちろん！　というか、どうしたんです？」

『う、うむ……ホ、ホラ、あと一時間で今年が終わろうとしているだろう？　そ、それで……』

サクヤさんの言葉を受け、俺はスマホの時計を確認すると……あ、

もうこんな時間だった。
うあー……俺、風呂も入らないで三時間以上寝てたのかよ……。
「あはは……ですけど、新年を迎える前にサクヤさんと電話なんて、嬉しいですね……」
『あう！？　う、うん……だから私も、君に電話をしたわけで……』
う……今日のサクヤさん、いつになく素直な感じがする。
というか可愛い、尊い……逢いたい。
……よし。
俺はサクヤさんと電話をしながら掛けてあるモッズコートを羽織ると、そのまま洗面台へと向かい、歯磨きを済ませる。
『む？　ヨーヘイくん、一体何をしているのだ？』
「あははー、いえ、別に」
そう言うと、スマホを手で押さえて［シン］に声を掛ける。
「［シン］、出掛けるぞ」
『ハイなのです！』
ということで、俺達は家を出て足早に歩く。
『むむむむ、君は一体何をしているのだ？　しかも……何やら車の音が聞こえるような……』
「まあまあ、それより……」
俺は誤魔化しながら、サクヤさんと雑談を繰り返す。

そんな様子に、［シン］は両手で口元を押さえながら声を殺して笑っていた。

そして。

「サクヤさん！　窓を見てください！」

『窓？　……って！？　ヨーヘイくん！？』

サクヤさんが驚いた表情を浮かべながら、窓から顔を出した。

というかサクヤさんの部屋着、その……身体のラインがクッキリと出ていて、破壊力抜群なんだけど……。

『「ちょ、ちょっと待っていてくれ！」』

スマホと部屋の窓からサクヤさんの声が同時に響くと、サクヤさんは窓を閉めてしまった。

そして。

「ハア……ハア……きゅ、急に来たから驚いてしまったぞ……」

「あ、あはは……すいません。声を聞いていたら、明日まで待ちきれなくなって、来てしまいました……」

「あうあうあうあうあう！？」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にするサクヤさん。だけど、そんなサクヤさんが俺はすごく愛しくて……。

「あう……ま、全く、ヨーヘイくんにも困ったものだ……」

「はは、こう言ってはなんですけど、サクヤさんが俺に電話したりするからですよ？」

「むむ……相変わらず意地悪だな……」

サクヤさんにジト目で見られ、俺は苦笑する。

『はうはう！　マスターは意外と束縛するタイプなのかもです！』

「「［シン］！？」」

［シン］の不意を突いた言葉に、俺とサクヤさんは思わず声を上げた。

い、いや、俺は別に束縛なんて……。

チラリ、とサクヤさんを見ると……あ、目が合った。

「プ……ふふ、私もヨーヘイくんの束縛なら大歓迎だぞ？」

「サクヤさんまで！？」

く、くそう……ここぞとばかりに、いつものお返しをされてしまった……。

「それよりもヨーヘイくん、どうやら時間のようだ」

「あ……」

スマホを見ると、時刻は二十三時五十九分を示していた。

そして。

「サクヤさん、［シン］……明けましておめでとうございます」

「うん……ヨーヘイくん、［シン］、明けましておめでとう」

『はう！　明けましておめでとうなのです！』

俺達は微笑み合いながら、新年の挨拶を交わした。

大晦日（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、活動報告を投稿させていただきましたが、ガイスト×レブナントの情報解禁です！

ＴＯブックス様から来年１月８日発売です！

しかも！イラストはＨＩＭＡ先生です！

Ｗｅｂ版と合わせて書籍でもお読みいただけますと狂気乱舞いたします！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お正月　前編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お正月　前編

「ヨーヘイ、そんなにウロウロしてもしょうがないでしょう？」

正月の昼前、俺は腕組みをしながらリビングでウロウロしていたところを、母さんにたしなめられる。

とはいえ、そう言われても落ち着かないものはしょうがない……って。

「あれ？　そういえば父さんは？」

「お父さん？　お父さんなら出かけてるわよ？　ホラ、サクヤちゃん達が来たら邪魔になるし」

「そ、そう……」

おうふ……父さん、正月早々扱いがヒドイ。

ま、まあ、何も言わないでおこう……。

すると。

――ピンポーン。

「来た！」

俺は慌ててインターホンのディスプレイを見ると……サンドラだ！

「ちょ、ちょっと待って！」

急いで玄関に向かい、扉を開ける。

「あ、明けましておめでとうですワ！」
「フ、フン！　ソノ……あ、明けましておめでとウ……」
「明けましておめでとうございます」

なんと、サンドラとプラーミャのほかに、サクヤさんとカズラさんもいた。
そして、サクヤさんは昨日の夜に新年の挨拶をしたモンだから、何も言わずにただ勝ち誇った顔をしていた。

「みんな、明けましておめでとうございます！　ホラホラ、中に入って！」

俺は四人を家の中へ招き入れ、リビングに通す。

「「「「お母様、明けましておめでとうございます！」」」」
「あらあら、明けましておめでとう」

で、四人は母さんとも新年の挨拶を交わした。

「さあさ、みんな座って」
「う、うむ」
「あ、ヨーヘイさん。こちら、うちのおせち料理です」
「あ、ありがとうございます！」

カズラさんからおせち料理を受け取り、うちのおせち料理の隣に並べる。
だけど……みんな、なかなか座らないなあ。

そんな中。

『はう！　［シン］はマスターの隣に陣取るのです！』
「「「「っ！？」」」」

そんな［シン］の何気ない言葉に、四人が一斉に反応した。

「う、うむ……なら私は、［シン］とは反対隣に……」
「藤堂さん、何を言ってるんですか？　ヨーヘイさんのお世話をしないといけないので、私が隣に座りますが」
「チョ、チョットお待ちになっテ！？　そんなのズルイですワ！」

いや、カズラさん、俺の世話ってなんですか？　それにサンドラも、ズルイってなんだよ。

「ハア……だったラ、くじでもして決めればいいじゃなイ」

呆れた表情のプラーミャが、三人にそう言い放つ。
だけど。

「むううううう！　くじなんてものは言語道断だ！」
「そうですワ！」

おおっと、サクヤさんとサンドラさんが真っ先に反対したぞ？

「ヘエ……サンドラ、ひょっとして負けるのが怖いノ？」
「ッ！？」

プラーミャがニヤリ、と口の端を持ち上げて煽ると、サンドラは眉根を寄せた。

「何と言われてモ、これぱかりは譲れませんワ！　そもそもプラーミャは別にヨーヘイの隣じゃなくてもいいんでしょウ？　だったラ、大人しく端っこに座りなさいナ！」
「ッ！？　ヤ、私（ヤー）の座る場所は、私（ヤー）が決めるノ！　いくらサンドラだって、指図されたくないワ！」

いや二人共、姉妹ゲンカは自分の家でしてくれよ……。

『……マスター、どうするのです？』

心配そうに［シン］が尋ねるが、どうしたらいいかなんて俺にも分からねーよ……。

その時。

――ピンポーン。

「お、お客さんだ」

俺はインターホンを確認しにいくと……あ、アオイと中条だ。

「悪い、チョット二人を迎えに行ってくる。その間にみんなは適当に座っといてよ」
「「「「あ！」」」」

ここぞとばかりに、俺は逃げるように席を離れて玄関に向かう。

「ヨーヘイくん、明けましておめでとう！」
「クク……めでたいな！　望月ヨーヘイ！」
「おう。二人共、明けましておめでとう」

ということで、少し遅れてやって来た二人も家に入れ、リビングに戻ると。

「「「「……」」」」

四人は相変わらず立ったまま、お互い牽制し合っていた。いや、何してんの？

「ヨーヘイくん！　一緒に座ろ！」

「わ！？　チョ！？」

俺はアオイに強引に腕を引っ張られ、そのまま席に着く。すると、当然［シン］は俺の隣に座るわけで……。

「ふふ……立花くん、いい度胸だ……」

「……すぐに奪い返してみせますワ……」

「なかなか命知らずですね」

「フン！　覚えてなさいヨ！」

ヒイイ！？　四人共、目が座ってる！？

俺が四人にたじろいでいる中、アオイの奴はといえば、さらに四人を煽るかのようにベー、と舌を出してるし！？

『プークスクス、新年早々から修羅場なのです！』

チクショウ！　［シン］の奴、楽しそうにしやがって！

「あらあら……ところで、誰かお皿とお箸を運ぶのを手伝ってくれないかしら？」

「「「「！」」」」

一触即発の中、母さんの何気ない一言に、四人が一斉に反応する。

「お、お母様！　でしたら私……「イイエ！　ワタクシがお手伝いしますワ！　……ッテ！？」」

「こちらでよろしいですか？」

「あらあら、ありがとう。お願いね」

サクヤさんとサンドラが争っている間に、カズラさんが母さんからお皿とお箸を受け取って運んできてくれた。

こういうところ、普段からしているから気が利くんだろうなあ。

「お母様、コップも持って行ってよろしいですカ？」

「あらあ、気が利くのね」

そして、意外にもプラーミャが自分から率先して動いているという……いや、できるんならいつもしろよ。というか、引っ越しの時のアレは何だったんだよ。

「むう……まあいい。とにかく、せっかくのお正月だから楽しもう。ということでヨーヘイくん、一言頼む」

「うえ！？　お、俺！？」

サクヤさんに突然振られ、思わず自分を指差した。

「ふふ、当然だとも。今日こうやって私達が集まることができたのは、君のおかげなんだから」

「フフ……そういえばそうですわネ。元々、お正月を一緒に過ごすことにしたのモ、ヨーヘイのお節介から始まったんですもノ」

うぐう……確かに俺が言い出しっぺだけれども……だからってこういうの、慣れてないんだけどなあ。
そもそも、俺はそういう器じゃないし。

「あはは、というかヨーヘイくんじゃなかったら、ボク達はこうして一緒にいたりしなかったからね」
「ええ、そうですね。ヨーヘイさんだから、私達はここにいるんです」

アオイにカズラさんまで!?

「クク……諦めろ。そもそも、我を導いたのは貴様なのだ。ならば、最後までその義務を果たせ」
「ええー……」

いや、たかだか正月に誘った程度で義務とか言い出したよコイツ……。

「モウ！　いいからサッサとしなさイ！　私（ヤー）はお腹が空いてるの！」
「理不尽だ！」

プラーミャに凄まれ、俺は思わずたじろぐ。
チクショウ、相変わらず俺だけにはつらく当たりやがって……。

「ううん、分かったよ……と、とにかく、今日はみんな来てくれてありがとう。去年はみんなに助けられて、俺はここまで頑張ってこれました」

俺は渋々といった様子で話し始めるが、意外にもみんなは俺の話

を真剣に聞いてくれていた。

「そ、それで、今年もみんなには迷惑をかけると思うし、時には、つらいこともあると思う」

そう……俺は、サクヤさんを救うには、みんなに一緒に戦ってもらわないといけないんだ。当然、傷ついたりもするだろう。

だから。

「俺にできることなんてたかが知れてる。だから、これからもみんなの力を、俺に貸してください」

そう言うと、俺は頭を深々と下げた。

「ふふ……何を言う。今まで君が、私達にどれほど尽くしてきたと想っているのだ……」

「そうですワ！　今度は……ワタクシ達がアナタに返す番ですノ！」

「フン！　……マア、しょうがないわネ」

「ヨーヘイさん……私はいつでもあなたの傍に」

「あはは！　当然だよ！　だって……ボク達は、本当の友達だもん！」

「クク……我は貴様について行くと決めた。なら、最後までついて行くまでだ」

みんなの言葉を受け、俺の頬に涙が伝う。

「は……はは……！　グス、じゃあ、みんな……これからも、よろしくお願いしましゅ！？」

チクショウ！？　こんな場面で舌噛んだ！？

「プ」
「ププ」
「「「「「「あはははははははははは！」」」」」」

はは……挨拶して舌噛んだのは、入学したあの日と同じなんだけど、その反応は全然違うや……。

『はう……マスタア、［シン］は……［シン］は、嬉しいのです……！』
「ああ……そう、だな……」

クソザコモブとゴブリンだったあの日から、俺達は今を手に入れたんだ。

俺と［シン］は、大切な人達の笑い声に包まれながら、ただ、喜びを噛みしめていた。

お正月　前編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、活動報告を投稿させていただきましたが、ガイスト×レブナントの情報解禁です！

ＴＯブックス様から来年１月８日発売です！

しかも！イラストはＨＩＭＡ先生です！

Ｗｅｂ版と合わせて書籍でもお読みいただけますと狂気乱舞いたします！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お正月　後編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お正月　後編

『むふふー、お母様もマスターも、やっぱり［シン］には優しいのです！』

鏡餅の形をしたアイスを頬張り、ご満悦の［シン］。

まあ、国民的アイスなアレを段重ねし、その上にミカンをのせただけのシンプルなものなんだけど、騙されてくれて何よりだ。

一方で。

「むううううううう！　ら、来年のお正月こそは、この私も……！」

「ソ、ソウですワ！　その時には、ルーシの新年の料理を振る舞いますのヨ……！」

カズラさんが持って来てくれたおせち料理に舌鼓を打ちながら、サクヤさんとサンドラが悔しそうに歯噛みする。

「ふふ……ヨーヘイさんも、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

そのおせちをカズラさんが小皿に取り分け、俺に手渡してくれた。

いや、マジで美味そうだなあ……。

「だけど、加隈くんや土御門さん、それに悠木さんも、来れたらよかったんだけどねー」

黒豆を口に含みながら、アオイがそんなことを言った。
確かにアオイの言う通り、三人が来れなかったのは残念だけど、それもしょうがない。

土御門さんは『土御門家』の新年会合で、家の継承者としての襲名披露があるし、加隈の家は母子家庭だから、人一倍母親想いのアイツとしては、正月抜けるなんてことは難しいだろうし。
悠木だって、久しぶりにコッチに戻ってきたんだ。ご両親からすれば、正月くらいは一緒に過ごしたいだろうからな。

「マ、別に私達が気にするような話じゃないんだけド」

いや、お前はルーシに帰らなくてよかったのかよ。何気に、お前とサンドラが一番実家から離れてるんだけど。

「クク……だが、おせち料理とは美味いものだな。また食べたいものだ……」

中条……正月早々、俺達をしんみりさせるようなこと言うなよ……。
ホラ、みんな押し黙っちまったじゃねーかよ。

「と、とにかく！　早く食っちまって、初詣に行こうぜ！」
「う、うむ！　そうだな！」

といっても、さすがに七人もいるから食べ終わるのもあっという間だったな。

で、俺達は後片づけを済ませ、駅前近くにある“益田神社”へと向かった。

なお、中条が母さんからおせち料理を詰めたタッパーを手渡され、涙ぐんでいたのは内緒だ。

◇

『はう！　はう！　人がたくさんいるのです！』
「うおお……やっぱり正月だけあって、人が多いなあ……」

神社に向かう参道沿いには多くの露店が立ち並び、その中を長蛇の列が続いている。

「こ、これ、お参りするまでに結構かかりそうだね……」
「サ、サスガに一時間はかからないとは思うけド……」

あまりの列の長さに、アオイとプラーミャが呆けた表情を浮かべた。

「とにかク！　並ばないことにはお参りもできませんわヨ！　早ク早ク！」
「ちょ！？」

サンドラにグイ、と腕を引っ張られながら俺は列に並ぶと、みんなもそれに続く。
一応、ほんの少しずつとはいえ、列も前に進んではいるけど、こう動かずにいると、寒いなあ……って。

「わ、悪い、チョット列離れる」
「ア！　ヨーヘイ！？」

俺は露店の中に甘酒のお店を見つけたので、七人分買ってまた列

に戻った。

「みんな、これを飲んで温まろう」
「うむ……ふー……ふー……」

サクヤさんは甘酒の入ったコップを受け取り、息を吹きかけて冷ます。

というか、そんな仕草一つとっても可愛いと思ってしまうのは、仕方ないよな。

「ふう……やっぱり、甘酒は温まりますね」

雪のような白さの肌を桜色に染め、カズラさんが、ほう、と息を吐いた。

なんだろう……すごく色っぽく見える……。

『はうう……プールや学園祭の時はあったのに、ここにはかき氷のお店がないのです……』

そう言って、あからさまに落ち込んだ様子を見せる［シン］。

というか、こんなクソ寒い時にかき氷なんか売っても、客は［シン］ぐらいしか期待できないだろ。

そうして、俺達は雑談したり追加で甘酒を買いに行っては飲んだりしながら、列に並ぶこと一時間半。

「や、やっとお参りできますわネ……」
「ホ、ホントネ……」

次で俺達の番となり、疲れた顔のサンドラとプラーミャがホッと

息を吐いた。

「ふふ……確かに、少々長かったですね」

「うむ……何度か甘酒を飲んだとはいえ、身体が冷えてしまったな」

そんな会話をするサクヤさんとカズラさんだけど、寒いなんて様子は微塵も感じられないんですけど。むしろお二人が普段通り過ぎて、困惑してます。

「あーあ……ヨーヘイくんがくっつかせてくれたら、ボクも寒くなかったんだけどなー……」

アオイは口を尖らせながら抗議するが、なんで俺が男にくっつかれないといけないんだよ。それだったら、最初からサクヤさんに頼むっつーの。

「クク……どうやら我等の番だな」

お、本当だ。

俺達は七人一斉に賽銭箱の前に並ぶ……んだけど。

「むむ！　鈴を鳴らすのはこの私に……！」

「エー！　ワタクシも鳴らしたいですワ！」

「私（ヤー）モ！」

「ここは公平に、私が鳴らすということで……」

「やだよ！　ボクが鳴らすんだ！」

とまあ、五人が誰が鈴を鳴らすかで言い争ってる……。

「……で、中条はいいのか？」

「クク……別に、誰が鳴らしたところでご利益の結果が変わるものではないからな」

ま、ごもっとも。

「フフ！　私（ヤー）の勝ちヨ！」

「「「「ぐぬぬぬ……！」」」」

お、どうやら誰が鳴らすか決まったみたいだな。

ということで、今度こそ……。

――がらん、がらん。

俺達は賽銭箱にお金を投げ込み、柏手を打って少し長めにお祈りをした後、俺達はその場を離れる。

「ふふ……ヨーヘイくんは何をお願いしたんだ？」

「あははー……内緒です」

「む……そう言われると気になるな……」

サクヤさんは願い事の内容を聞き出そうと、しきりの俺の顔を覗き込むけど……イヤイヤ、ご利益がなくなったら嫌なので、秘密ですよ？

それに……俺の願いなんて、これしかないですから。

――来年も、再来年も、それから先もずっと、サクヤさんと一緒にいられますように。

お正月　後編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、ついつい調子に乗ってハイファンの短編を投稿しました！

落ちこぼれな黒魔法師の私、絶望の中で最強の【無間魔法】に目覚めたらパーティーを追放されたので、勇者パーティーと共に魔王を滅ぼして愛する人と幸せになります

下のタグから行けますので、こちらもぜひお読みくださいませ！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

招集命令（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

招集命令

『……すまない』

みんなと楽しく過ごした元日の夜。
サクヤさんからの電話に出た途端、聞こえてきたのは謝罪の言葉だった。

「え、ええと……どうして謝っているんですか……？」

意味が分からず、俺はおずおずと尋ねる。
というか、サクヤさんが俺に謝るようなことなんて何一つないだけに、余計に不安に駆られてしまう。

『あう……じ、実は……』

サクヤさんから簡単に説明を受けると……。

「えええええええええええええええええ！？」

俺は自分の部屋で、思わず絶叫してしまった。
いや、だって、学園長……つまり、サクヤさんのお父さんである“藤堂マサシゲ”から、家に遊びに来るようにとのお誘いがあったんだぞ！？　驚くに決まってる！

「だだ、だけど、なんで急にそんなことに！？」

『そそ、その、私がいつも君と一緒にいることを知って、『普段、サクヤがお世話になっているのなら、挨拶をしないとな……この私

が、直々に』だなんて言い出したのだ！　わ、私もどうしたらいいのか……！？』

電話の向こう側で、オロオロしているサクヤさん。

いや、オロオロしたいのは俺なんですけど！？

「そ、それで、学園長はいつ来るようにっておっしゃってるんですか……？」

「そそ、それがその……明日　（ボソッ）」

あ、明日！？　いきなり明日！？　急すぎるだろ！？

「どど、どうして明日なんですか！？」

『いい、今すぐにでも会わせろというくらいの勢いで、なんでもその……明日はそのために休みを取ったからとか何とか……！』

イ、イヤイヤ！　忙しい中無理して休みを取って、しかもわざわざ俺なんかに会う必要なくない！？

『そ、それで……お父様はこう言うのだ……『来なかったら、サクヤとは金輪際会わせない』、と』

「えええええええええええ！？」

な、何だよソレ！？　完全に横暴じゃねーか！？

『だだ、だから、ヨーヘイくんに……家に、来てほしいのだ……』

声が尻すぼみになりながらも、サクヤさんは懇願する。

いや、こんな理不尽な条件を出された以上、選択肢は一つしかない。

「……分かりました。明日、サクヤさんの家にお伺いします」
『っ！　す、すまない……』
「いえ……サクヤさんは何も悪くないですよ……」
そう……悪いのは、サクヤさんのお父さん……“藤堂マサシゲ”なのだから。
だから。
「……絶対に返り討ちにしてやる（ボソッ）」
『ヨーヘイくん！？』
「じゃ、じゃあ明日！」
驚きの声を上げたサクヤさんを尻目に、俺は通話終了のボタンをタップした。
◇
「さあ……いよいよだ……！」
次の日、約束の時間である朝十一時よりも少し前。
俺はサクヤさんの家の前で仁王立ちしながら決意を固める。
『はうう……こんな真剣な表情のマスター、見たことがないのです……』
隣に立つ［シン］が、俺の顔を覗き込んで慄（おのの）いている。
だけど、それも当然だ。だって、俺はサクヤさんのお父さんのご機嫌取りに来たわけじゃない。
ただ……戦いを挑むために来たのだから。

『は、はう……今日は大人しくしてるのです。絶対に、姿を見せないのですううううう……』

［シン］は顔を引きつらせ、戻って行ってしまった。

まあ、いても絶対に楽しくないからな。

「よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩くと。

「さあ……行くぞ！」

意を決し、インターホンを押した。

すると。

『望月様、お待ちしておりました。今お迎えにあがります』

カナエさんが応対してくれ、しばらくすると玄関まで俺を迎えに来てくれた。

「旦那様とお嬢様がお待ちしております。どうぞこちらへ」

「は、はい……！」

カナエさんに案内され、俺は応接室へとやって来た。

「旦那様、望月様がいらっしゃいました」

「うむ……」

学園長……お父さんが、普段よりも低い声で返事をすると、俺は中へと通された。

「お、お邪魔します」

「望月くん……よく来てくれた。まあ、座りたまえ」

「は、はい、失礼します……」

出迎えてくれたお父さんに促され、俺はソファーに座る。

「ヨ、ヨーヘイくん、ようこそ……」

既にソファーに座っていたサクヤさんもいつものような余裕は一切なく、緊張した面持ちで挨拶をした。

そして……俺と二人を隔てるローテーブルの上に乗っている、このおせち料理は一体……。

「……これは、カナエさんが作ってくれたものでな。我が家では、いつも彼女のおせち料理で正月を迎えるのだ」

「そ、そうですか……」

で、お父さんはそれを俺に聞かせてどうしろと？

「望月様、どうぞ」

カナエさんが俺の傍に来て、テーブルに紅茶を置いてくれた。

「さて……望月くん、まずはサクヤがお世話になっているみたいで、礼を言わせてほしい」

「あ、い、いえ！　俺も、サクヤさんにはお世話になってますから！」

いきなり頭を下げ始めたお父さんに、焦った俺は手をわたわたさせる。

「……君はいつも、サクヤのことを下の名前で呼んでいるのかな……？」

「っ！？」

その言葉で、場が一瞬で凍りつく。

や、やっぱりそういうことか……！

「はは、はい……おかげさまで、サクヤさんとは下の名前で呼び合うほど、親しくさせていただいております」

「むう！？　そ、そうか……」

お父さんは思い切り眉根を寄せるが、それ以上は言及せずに湯飲みを持ってお茶を口に含んだ。

「お、おっとそうだった。望月くん、まあ食べたまえ」

「へ……？　あ、ああ……い、いただきます……」

気持ちを落ち着かせたいためなのか、それとも話題を変えたかったのか、とにかくお父さんがおせち料理を勧めてきたので、俺は箸を手にした。

というか、食べなかったら食べなかったで、いちゃもんをつけられそうだし。

「カナエさん、私にもビールをもらえるか？」

「かしこまりました」

どうやらお父さんは、アルコールの力を借りる決断をしたようだ。
うん……イヤな予感しかしない。

「ふう……さあ、始めようか」

そう言うと、お父さんの瞳がギラリ、と輝いた。

招集命令（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、ハイファンの短編を投稿しました！

落ちこぼれな黒魔法師の私、絶望の中で最強の【無間魔法】に目覚めたらパーティーを追放されたので、勇者パーティーと共に魔王を滅ぼして愛する人と幸せになります

下のタグから行けますので、こちらもぜひお読みくださいませ！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お父さんのプレッシャー（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

お父さんのプレッシャー

「ふう……さあ、始めようか」

そう言うと、お父さんの瞳がギラリ、と輝いた。

「え、ええと……何を、でしょうか……？」

俺はあえてとぼけながらそう尋ねる。

だって本題に触れた瞬間、刈られる予感しかしないし。

「ああ……そのことについて君は一切気にする必要はない。君はただ、この私の質問に答え続ければいい」

「は、はあ……」

質問？　しかも、『答え続ければ』ということは、いくつも質問があるってことか？

「まず……君はどうやって、そこまでサクヤと仲良くなったのかな？」

「へ！？」

どうやってサクヤさんと仲良くなったかって……そんなの、お父さんも知ってるじゃん！？

「あ、あの……それについては学園長もご存知じゃ……」

「……今の私は学園長などではない。私は、サクヤの父として尋ねている」

「っ！？」

お父さんにギロリ、と睨まれ、俺は思わず息を飲む。

ううう……こ、これは下手に答えるわけにはいかないぞ……！

「そ、その……サクヤさんは、俺が初心者用の領域（エリア）に入ろうとした時に、声を掛けてくれたことがきっかけで……」

入学した次の日のあの出来事を、俺は訥々（とつとつ）と説明する。

あの日、俺はサクヤさんに出逢って、俺と［ゴブ美］を認めてもらって、そして、サクヤさんの優しさに触れて……。

「……ははっ」

「……何がおかしいのかな？」

「はえ！？」

ヤベ、あの時のことを思い出しながら説明してるうちに、無意識に笑ってた……。

「ふふ……そうだったな。もう、あの出逢いから九か月も経ったのだな……」

一緒に話を聞いていたサクヤさんも、思い出しながらクスクスと笑う。

でも、そんなサクヤさんの態度も気に入らないのか、お父さんは眉根を寄せた。

「旦那様、ビールをお持ちしました」

「う、うむ、ありがとう」

ちょうど苦虫を噛み潰した表情のお父さんの空気を変えるように、カナエさんがビールを持って来た。
おかげで、お父さんの表情が若干和らいでくれた。カナエさん、ナイス。

「……コホン、まあいい。では次の質問だ。きっかけはそうだったとして、君は何故、今もサクヤと行動を共にするのかな？　わざわざ生徒会に押し掛けてまで」
「そ、それは……」

そんなの、理由なんて一つしかない。
俺が、ずっとサクヤさんの傍にいたいからだ。

でも……それを言ったらこの人、キレるんだろうなあ……。
そしてサクヤさん、そんな期待に満ちた瞳で答えを待つのはやめてください。

「……あ、まあ、サクヤさんは俺にとって、尊敬する憧れの女性（ひと）でして……できる限り傍にいて、模範にしようかなあ、と……」

ど、どうだ？　これなら、俺がサクヤさんを追っかけていても不思議じゃないし、嘘は一切吐いてないからな……？

なのに。

「く、くう……！　た、確かに君の言う通り、サクヤは学園の生徒の誰よりも優れた、自慢の娘だが……！」

シレッとサクヤさんをベタ褒めしつつ、どうしてそんなに悔しそうにしてるんですかね？

「む、むう……その言葉は素直に嬉しいが、そ、その……他には……？」

いやいやサクヤさん、余計なことを言って今後サクヤさんと一緒にいることを禁止されたらどうするんですか？

なので、そのおねだりについてはまた別の機会で。

「な、なら！　サクヤによれば、君は一年生なのに既に学園でも優れた精霊使い（ガイスト）だと聞く！　もはや、うちのサクヤのサポートがなくても、充分に学園生活を送ることができると思うのだが！」

うぐう！？　ここにきて、サクヤさんが俺のことをベタ褒めしてくれていたことが仇（あだ）となったか！？

だが！　俺はくじけない！

「そ、そんなことはありません！　俺は今でもサクヤさんがいなければ全然です！　この前の賀茂の起こした事件でも、決め手となったのはサクヤさんでしたから！」

「むう！？　た、確かに君の言う通り、サクヤは二年生になってから急激な成長を遂げているからな……！」

「はい！　そして俺も、そんなサクヤさんのおかげで、ここまで強くなれたんです！　そして、それはこれからも！」

「むむむむむむ……！」

ふふ……ここまでサクヤさんを持ち上げれば、お父さんも何も言えまい。

その証拠に見ろ。お父さんの顔、メッチャゆるっゆるだ。

そして。

「あうあうあうあうあうあうあうあう……まま、全く、ヨーヘイくんは加減というものをだな……」

顔を真っ赤にした先輩が何か言ってるが、嬉しそうだからよしとしとこう。

「くううう……！　サクヤが褒められるのは嬉しいが、あの表情を見てしまうとやり切れん……！」

悔しそうにするお父さんは、コップを手に取ってビールを一気にあおった。

「つ、次だ！　なら、君はサクヤを……」

それから、お父さんと押し問答を続けること十数分。

「ほ、ほほう？　サクヤにそんな一面があったとはな……」
「そうなんですよ！　それが、その……すごく可愛いというか……」
「うむうむ！　そうだろうそうだろう！」

ビールが回ってきたのか、お父さんは俺がサクヤさんを手放しに褒めるたびに、上機嫌に笑顔を見せた。ふふ、チョロイ。

「あうあうあう！？　ヨヨ、ヨーヘイくん、もう……もう……！」

当然サクヤさんもサクヤさんで、その表情が最高にゆるっゆるになっていたりもするんだけど。

「うふふ……望月様、お見事です」

「カナエさん！？」

背後からそっと告げられ、俺は思わず仰け反ってしまった。というか心臓に悪い。

「ふむ……だが、私はどうやら君を誤解していたようだ」

腕組みをしながらウンウンと頷くお父さん。

どうやら、俺のことを認めてくれたみたい……「だが！」……え！？　まだ何かあるの！？

「娘は……サクヤは、絶対に誰にもやらん！　たとえ君であってもだ！」

顔を真っ赤にしたお父さんは、ムフー！　と鼻息荒くそう告げると。

「そういうことだから……な……！」

――コテン。

……どうやら酔っぱらったみたいで、ソファーに倒れ込んで寝てしまった……。

「お、お父様……」

そしてそんなお父さんを、サクヤさんは残念なものを見るかのような視線を向ける。

「……とりあえず、毛布でも取ってくる」

「は、はい……」

こめかみを押さえ、サクヤさんは席を立ってリビングを出た。

それを見送った後、俺は視線をお父さんへと戻す。

「……そんなに可愛いくせに、大切なくせに、なんで……なんで、そんな真似するんだよ……！」

俺は拳をギュ、と握りしめながら、眠るお父さんを……藤堂マサシゲを、ただ睨んでいた。

お父さんのプレッシャー（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

土御門さんとハプニング（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

土御門さんとハプニング

「ホホ、待たせたの」

今日は一月四日、俺は益田駅に来ていた。
実家から戻ってきた、土御門さんを出迎えるために。

「はは。お帰り、土御門さん」
「ホ、ホホ……何とも、こうやって出迎えてもらうと、そ、その……」

そう言うと、土御門さんは急に声が尻すぼみになり、扇で顔を隠してしまった。

「それより、カバン持つよ」
「ホ……も、もうこれ以上優しくされると、ひう……っ！」

……な、何というか、その……土御門さんの反応、ちょっとおかしくない？
いや、自惚(うぬぼ)れかもしれないけど、確かに土御門さんは俺に好意的だったと思う。でも、こんな恥ずかしがったりするようなこと、ほぼほぼ記憶にないんだけど？

「ま、まあいいや……とにかく、荷物を置いて早く行こう」
「ホホ、そ、そうじゃの……」

ということで、俺達は土御門さんの住んでいる寮に荷物を運んだ後、そのまま学園へと向かう。

そして。

「ホ……この初心者用の領域（エリア）の中に、更なる領域（エリア）があるのじゃな？」

「ああ」

そう……土御門さんは、実家で『土御門家』の後継者としての襲名披露があった関係で、まだ“ぱらいそ”領域（エリア）に入っていない。

だから、改めて俺が案内をすることにしたんだけど、土御門さんにメッセージを送って尋ねたら、『益田市に戻ってくる一月四日に、お願いしたい』とのことだったのだ。

しかも、『できれば俺と二人で』という補足付きで。

本当は、“ぱらいそ”領域（エリア）はかなり危険でもあるので、サクヤさん達に同行してもらおうと思っていたんだけど……まあ、【火属性反射】と【氷属性反射】もあるし、何より［吉備真備（きびのまきび）］の【式神使】は強力極まりないスキルだから、第一階層だけなら大丈夫だろうと判断した。

「それじゃ、行こうか」

「うむ」

俺達は初心者用の領域（エリア）の扉をくぐり、“ぱらいそ”領域（エリア）へと向かう。

すると。

「遅イ！　待ちくたびれたわヨ！」

……ええと、なんでプラーミャが“ぱらいそ”領域（エリア）の扉の前にいるんですかね？

「……望月、これはどういうことじゃ？」

「へ！？」

土御門さんが鋭い視線で俺を睨みながら問い質（ただ）してくるけど……

いや、むしろ俺が知りたいんだけど！？

「フフ……馬鹿ネ。シキがコッチに帰ってくるのが今日だっテ、アナタ自身が言ってたじゃなイ」

「そ、それはそうじゃが……」

「デ、念のため私（ヤー）が駅前で待機してると、ヨーヘイがやって来てアナタを迎えてるでショ？　だからラ、先回りしてココに来たのヨ」

へえー、つまりプラーミャは、土御門さんをサプライズで迎えに行ったら、まさか俺が来てたから、先読みして待ち構えていた、と。

いや怖（こえ）えよ。

「ホ……お主も存外暇なんじゃの」

土御門さんが煽（あお）るようにプラーミャに告げるけど……ええと、眉がヒクヒクしてる

「ソウネ……忙しい私（ヤー）が“ぱらいそ”領域（エリア）攻略に付き合ってあげるんだから、嬉しいでショ？」

「ホホ……！」

うおお……いや二人共、普段は仲いいよね？　なのに険悪そうに見えるのはどういうことなんだ？

「え、えーと……じゃあ、この三人で“ぱらいそ”領域（エリア）に入るということで、その……いいよな……？」

俺は二人におずおずと尋ねると。

「エエ、私（ヤー）はそれで構わないワ」

「ホ……まあ、ここまできて否やはないの」

ホッ……とりあえず、お互い折れたようで何よりだ。

ということで、俺達は“ぱらいそ”領域（エリア）の中に入ると。

「ホ……ホホ……！」

“ぱらいそ”領域（エリア）の雰囲気に飲まれ、土御門さんが声を失う。

「フフ……こんなところで驚いてちゃ、アレを見たらヘタリ込んじゃうんじゃないかしラ？」

「ホ……言うわえ」

プラーミャの悪態に反応し、土御門さんがキッ、と睨んだ。

いやいや、雰囲気最悪なんだけど！？

『……藤姉さまとアレク姉さまがいない中、まさかの修羅場勃発なのです。やっぱり、あの二人のどちらかに来てもらうべきだったと、［シン］は今さらながら具申するのです』

「［シン］……ホント今さらだな。そしてお前、今までどこ行ってたんだよ」

『はう！　とばっちりを受けそうだったので、バッチリ避難してた

のです！』

コノヤロウ！　少しはマスターをフォローしろよ！

その後、クイーン・オブ・フロストとキング・オブ・フレイムを俺達三人で倒した……んだけど……。

「フン！　マア、私（ヤー）一人で充分だったわネ！」

「ホホ、ならば一人で行けばよかろう？　わらわは望月にゆっくり案内してもらうゆえ」

「何ですっテ！」

とまあ、相変わらずギスギスした雰囲気は変わっていない。

ハア……プラーミャもいるし、第二階層も行ってもいいかと思ったんだけど……うん、今日はこのへんで切り上げよう。

「よし、それじゃあここまでにしよう」

「ハア？　何を言ってるのヨーヘイ。第二階層にも行くわヨ」

呆れた表情を浮かべながらプラーミャがそう告げるけど……。

「いや、こんなに二人が険悪なままじゃ、いざという時に危険だろ。何より、お前も知っているように第二階層の幽鬼（レブナント）は特殊なんだぞ？」

「フン！　そんなこと分かってるわヨ！　大体、私（ヤー）とシキの連携を甘くみないデ！」

「ホホ、プラーミャの言う通りじゃ」

そう言うと、二人は顔を見合わせながら互いに相槌を打つ。何なんだよチクショウ。

「……分かったよ。だけど、ちょっとでも連携に問題があると感じたら、すぐに引き返すからな」

俺は渋々了承した後、第二階層へと続く階段に足を掛け……っ！？

――ズルッ。

「「っ！？」」

あろうことか足を滑らせてしまい、そのまま後ろに倒れ込んでしまった……んだけど。

――フニュン。

……ええと、この柔らかいクッションはなんだろうか……？

俺はおそるおそる顔を上げてみると。

「～～～～～～～～～！」

……どうやら俺は、土御門さんの胸にダイブしたようだ。

だけど、このちょうど良いサイズといい、弾力といい、そのー……これは良き！

「ヨーヘイ……死ぬ前に言い残すことはあル？」

「ヒイイ」

ハルバードに業火をまとわせ、腕組みしながら仁王立ちするプラーミャ。

その後、俺は立ち上がれないほどコテンパンにされたのは言うまでもない。

だけど。

「ホ……じゃ、じゃが、これを既成事実として……（ボソッ）」

……うん、聞かなかったことにしよう。

土御門さんとハプニング（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バレンタインデー①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

バレンタインデー①

今日は二月十四日。
東方国の男子が一斉にソワソワする日だ。

それは、当然この俺も。

「ううう……サクヤさん、多分チョコをくれると思うけど……」

家を出た俺は、そんなことを呟きながらサクヤさんの待つ十字路に向かう。

『はうはう！　マスターが何を心配しているのか、一切理解できないのです！　そもそも、マスターは自分の胃袋を心配するべきなのです！』
「胃袋を？」

ハテ？　俺の腹の調子は別に悪くないんだけど？

『今日は絶対、マスターがモテモテな日なのです！　むしろ血の雨が降るのです！』
「なんで！？」

モテモテ？　俺が？　ナイナイ。
大体、俺はクソザコモブ設定なんだぞ？

とはいえ、そんな中でもサクヤさんとサンドラは、まずチョコをくれると思う。

あと、カズラさんについても恋愛ルートに入ってしまっている関係で、チョコイベがあるのは既定路線だ。

なので、この三つで打ち止めだろう。

それでも、俺にしたら大勝利どころか他の男連中に圧勝だけど。

だって考えてもみろ。学園一の美少女と言っても過言じゃないサクヤさんだぞ？　サンドラだって妖精みたいな美しさで、一年生の中ではダントツだし、カズラさんもサクヤさんにちっとも負けていない……いや、それどころか、胸に関しては確実に勝利しているんだから。

だけど。

「……血の雨は降らないだろうけど、血反吐を吐くことにはなるかもな……」

そう……俺の心配事はただ一つ。

サクヤさんのチョコが、市販品なのか手作りなのか……ということだ。

いや、考えてもみろよ。

サクヤさんは炭化したハンバーグをご飯の上に乗せ、さらにそこにカラメルソースをかけたお弁当を作ってきたという、誰にも負けない実績を持ってるんだぞ？

なら……もし手作りだったら、どうなるかは言わずもがな、だ。

『プークスクス、その時が楽しみなのです』

「［シン］！？　チョット酷くない！？」

チクショウ！　お前は俺の精霊（ガイスト）だろうが！　心配するどころか、楽しみにしてるってどういうことだよ！？

などと、［シン］をギャースカ言い合いをしているうちに、いつもの十字路に到着した。

「ふふ。ヨーヘイくん、おはよう」
「サクヤさん！　おはようございます！」

いつもと違い不安と期待で一杯の俺は、上ずった声で挨拶をしながらサクヤさんに駆け寄る。

「ところで、今日の“バベル”領域（エリア）の攻略と“ぱらいそ”領域（エリア）のノルマなんだが……」

とまあ、サクヤさんは一切浮かれた様子もなく、むしろいつもより少し真剣な様子で話し始める。
特に“ぱらいそ”領域（エリア）に関しては、人数が九人になったことで第二階層の攻略が一気に攻略が進み、七十二の幽鬼（レブナント）全てを撃破してしまったのだ。

「ふふ……まさか、サンドラや氷室くん、立花くん達と同じスキルを使う幽鬼（レブナント）が現れるなんて、思いもよらなかったがな」
「あははー……」

そう言ってニヤニヤしながら見つめるサクヤさんに、俺は苦笑するしかない。
だって、彼女の真紅の瞳は『本当は知っていたのだろう？』と明確に語っていたんだから。

「ふふ、まあいい。それで、私達のレベルも全員九十近くとなったのだから、そろそろ次の階層の攻略を視野に入れてもいいんじゃないか？」

「そうですね……確かに」

第三階層攻略に必要なレベルが九十ということを考えると、サクヤさんの言う通り次に進んでもいいな……。

だけど。

「……いえ、やっぱり焦りは禁物です。とりあえず、三学期が終了するまでは“ぱらいそ”領域（エリア）は第二階層までにして、むしろ“バベル”領域（エリア）の攻略に注力しましょう」

「む……まあ、君がそう言うなら……」

俺の提案に納得はしていないものの、サクヤさんは頷いてくれた。

一応、第三階層の攻略に関しても多分それほど問題ないとは思うけど、それでも、“バベル”領域（エリア）攻略によって手に入る【聖属性反射】と【邪属性反射】を得てからのほうが確実だ。

本当は、そもそもアオイ達を“ぱらいそ”領域（エリア）に連れてくるつもりがなかった関係で、第三階層の攻略まで視野に入れてなかったからな。

でも、信頼する仲間が増えたことで、一気に戦力が上がって第三階層……いや、将来的には第四階層、第五階層にも挑めるまでになった。それなら、二周目特典の五つの領域（エリア）攻略を優先的にこなしたほうがいいだろう。

「といっても、“バベル”領域（エリア）の攻略も第二百五十階層を超えましたし、残りは五十階層弱。早ければ、三月のはじめには踏破できそうですけどね」
「そうだな」

その後、俺とサクヤさんは雑談をしながら学園へと向かう。
そしてどうやら、チョコに関してはまだみたいだな……。

「ふふ、ではまた昼休み」
「はい！」

下駄箱で上履きに履き替え、サクヤさんは手を振りながら自分の教室へ向かう。

すると。

――クルリ。

「そ、そうそう。今日の“ぱらいそ”領域（エリア）でのレベル上げ後、その……私に時間をもらえないだろうか……」
「あ……も、もちろん！」
「う、うむ……ではな」

サクヤさんは小さくガッツポーズをした後、今度こそ自分の教室へと向かって行った。

俺？　もちろん、思い切りガッツポーズしてますが何か？

バレンタインデー①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バレンタインデー②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

バレンタインデー②

「ア！　ヨーヘイ、おはようなのですワ！」

サクヤさんと別れて教室に入ると、サンドラが笑顔で駆け寄ってきた。

「おう、おはよう」

「フフ……ところで、今日はバレンタインの日ですわよネ？　東方国でハ、女の子が男の子にチョコレートを差し上げるんだとカ」

そう言って、何故か意味深に微笑むサンドラ。

ええとー……これってつまり、期待していいんだよな？

「ですのデ、ワタクシも東方国の風習にならって“スィローク”を作ってまいりましたノ」

「そ、そっか……その、ありがとう……」

いや、正直言ってメッチャ嬉しいんだけど。

しかも、今のサンドラの口振りからすると、手作りチョコってことだよな？

「……」

「……」

で、俺はその手作りチョコを期待しながら待ってるんだけど……

アレ？

「え、ええとー……サンドラ……？」

チョコをもらう側の俺から明確に催促することができず、ちょっと遠慮がちに声をかけてみる……んだけど。

「ソ、ソノー……作ったのは作ったんですのヨ？　ええ、それはもう、最高のものヲ」

そう言うと、サンドラはチラリ、と席に座っているプラーミャを見やる。

だけど……サンドラの目つきが厳しくないか？　どう考えても、妹に向けるようなものじゃないと思うんだけど……。

「プ、プラーミャがどうかしたの、か……？」

「……今朝、通学途中にプラーミャが“スィローク”の入った保冷バッグを落としてしまいましたノ……」

そう告げた瞬間、サンドラが両手で勢いよく顔を覆った。

そしてそれは、席に座るプラーミャも一緒に。

「だ、だけど、別に落としたくらいで大したことないんじゃないのか？　言ってもチョコなんだし……」

「ヨーヘイ……“スィローク”は、カッテージチーズをチョコレートでコーティングしたものなんですノ。なので、落とした時にその衝撃デ……」

「あー……」

つまり、落として形が崩れちまったんだなー。

「で、ですのデ！　もう一度作り直しをいたしますので、そノ……

もう少し時間をくださいまシ！」

そう言って、サンドラは悲壮な表情で詰め寄ってきた。

「え、ええと……もしよかったら、その落とした“スィローク”を見せてもらってもいいかな……」

「エ、エエ……プラーミャ」

「ッ！？」

戸惑うサンドラが、今まで聞いたこともないような低い声で声をかけると、プラーミャは身体をビクッとさせた後、立ち上がって保冷バッグを持ってきた。

だけど……未(いま)だかつて、俺はプラーミャのこんな悲痛な表情を見たことがない。

「コ、コレですワ……」

サンドラが保冷バッグの蓋をゆっくりと開くと、中には……あー、一つずつ綺麗に包装されたスティック状のチョコの形が、確かに折れ曲がったりしているなあ。

「へえー……」

「チョット！？　ヨーヘイ！？」

俺はその折れた“スィローク”を手に取り、包装を取る。

そして。

「はむ……美味っ！　メッチャ美味っ！」

「「ッ！」」

俺の反応を見た瞬間、二人はぱあ、とその表情を明るくさせた。

「いや、マジで美味いんだけど！　俺、こんな美味いスイーツ食べたの初めてかも！」

「ホ、ホントですノ！」

「ソソ、ソウ？　べ、別にルーシじゃ珍しくないんだけド？」

サンドラが嬉しそうに尋ね、プラーミャがツンを発揮しながらも口元をこれ以上ないほどに緩ませる。

というかこれ……。

「ひょっとして、二人で作ったのか？」

「フフ……エエ、プラーミャも手伝ってくれたんですノ」

「た、たまたまネ！」

サンドラがそう告げると、プラーミャは恥ずかしそうにプイ、と顔を背けた。

「はは……こんな美味いバレンタインチョコ、初めてだよ。ま、まあ、女の子からチョコをもらうこと自体、二人が初めてなんだけどな」

「ソ、ソウなんですのネ！」

「ヤ、私（ヤー）に感謝しなさいヨ！」

さっきまでの落ち込んだ様子はどこへ行ったのか、サンドラもプラーミャも、最高の笑顔を見せた。

はは……こういうところ、姉妹揃って可愛いというか何というか……。

「それで……この“スィロック”は、このまま受け取っていいんだよな？」
「フフ！　もちろんですワ！」
「保冷バッグは後で返しなさいヨ！」
ということで、サンドラとプラーミャからチョコをもらったぞ！
……って、そういえば。
「え、ええとー……俺が全部もらってしまってるけど、これ、ひょっとして他の奴の分が入ってたりはしない、よな……？」
念のため、二人にそう尋ねてみる。
いや、俺としてはぜひとも全部持ち帰りたいんだけど……。
「フフ！　それは全部ヨーヘイのですワ！」
「フン！　というカ、ヨーヘイにしか作ってないシ！」
「ッ！？　プラーミャ！？」
プラーミャの失言にサンドラが慌てて口を塞ぐ。
あ、あはは……まさか、俺だけ手作り“スィロック”をもらえるなんて……本当に嬉しいんだけど。
「二人共……本当に、ありがとう……」
「ア……フフ」
「……フン」
俺は深々と頭を下げて礼を言うと、二人も嬉しそうに口元を緩めた。
――キーンコーン。

「あ、もうＨＲの時間か。二人共、これ……大事に食べるよ！」
「「エエ！」」

俺は自分の席に着き、ボックス型のリュックに保冷バッグを入れて、と……アレ？　机の中に何か入ってる？

机の中に手を入れ、それを取り出してみると……まさかのチョコだった。
だけど、一体誰が……って！？

見ると、アオイの奴が嬉しそうにサムズアップしてやがる！？
というか、このチョコお前のかよ！？

結局、ＨＲの間中、俺はニコニコしたアオイにジッと見つめられていた……。

……とにかく、俺としてはこのチョコがただの“友チョコ”であることを祈るばかりだ。

バレンタインデー②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バレンタインデー③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

バレンタインデー③

「ふふ……ヨーヘイさん、お待ちしていました」

昼休み、メッセージで呼び出された俺は屋上に来ると、カズラさんが学園の景色を眺めながら待っていた。

「え、ええと……それで、わざわざ屋上に呼び出してどうしたんですか……？」

俺はおずおずと尋ねるが、本当は分かっている。

これは、カズラさんのバレンタインイベだということを。

一定以上の好感度がある時、こうやって思い出の場所である屋上に呼び出され、チョコをもらえるのだ。

ちなみに、もらえるチョコの種類は、その時点の好感度の高さによってランク付けされる仕様だ。

「はい……今日はバレンタイン。ヨーヘイさんのために、チョコを作ってきたんです」

その言葉を聞いた瞬間、確信した。

カズラさんの好感度、ＭＡＸである。

「あ、あはは－……ありがとう、ございい、ます……」

綺麗に包装されたチョコを、俺はそっと受け取る。

さて……ここでカズラさんルートに入った時、俺は誓ったはずだ

よな？　フラグは全部へし折ると。

なのに、なんでここまで好感度が上がってるのかなあ……。

俺、特にイベントをこなした覚えはないんだけど。

「ふふ……お返し、期待してますね？」

そう言って、クスリ、と微笑むカズラさん。

その表情は、冬晴れの空と澄んだ空気の中、すごく綺麗に映った。

◇

――キーンコーン。

一日の授業が終わり、クラスのみんなが帰り支度を始める。

当然俺も、いつものように“ぱらいそ”領域（エリア）へと向かう、んだけど……。

「ホ、望月はいるかえ？」

珍しいことに、土御門さんが俺達の教室に顔を出した。

いつもは領域（エリア）の扉の前で集まるのに……。

「……ヨーヘイ、シキが呼んでるわヨ」

何故か不機嫌そうに、プラーミャが顎で指し示す。いや、お前達仲良いのか悪いのか、よく分からんな。

「はは、どうしたの？」

多分バレンタインチョコだとは分かっていながらも、そんな風に尋ねる俺は悪くないと思う。

だって、当然みたいな顔でチョコ受け取ったりなんかしたら、どれだけ自意識過剰なんだよって話だ。

そして、コッチを凝視してるサンドラ、プラーミャ、アオイに何言われるか分からないし。

「ホホ……こ、これは、わらわが作った抹茶チョコでの……お、お主の口にあうかどうか分からぬが……」

「はは……そんなことないよ。俺なんかのために、ありがとう……大事に食べるよ」

そう言って俺は微笑むと、土御門さんは真っ赤になった顔を扇で隠してしまった。

……土御門さんに関しても、その好感度が俺に向かないよう『揚羽蝶紋入り扇』もアオイに手渡すように仕向けたっていうのに、どうしてこうなった。

いや、土御門さんの好意は素直に嬉しいんだけど、だからといって俺には、その……ううう、胃が痛い……。

「アーモウ！　ヨーヘイ！　シキ！　サッサと領域（エリア）に行くわヨ！」

「わ！？　ちょ！？」

「ホ！？」

プラーミャが俺と土御門さんの間に無理やり割って入り、眉根を寄せながらそう告げた。

「ホラホラ、ヨーヘイはカバンを取って来なさいナ」

苦笑するサンドラに背中を押されながら席へと戻った俺は、ボックス型のリュックを背負うと、みんなで“ぱらいそ”領域（エリア）へと向かった。

◇

「ふう……これで今日のノルマは達成だな」

『はうううう……やっぱり疾走丸はすごく不味いのです……』

今日十個目の疾走丸を飲んだ［シン］はこれ以上ないほど顔をしかめる。

まあ……強くなるためだ。我慢しろ。

「クク……望月ヨーヘイ、今日はこの後、“バベル”領域（エリア）には行かないのか？」

「あー……」

いつものようにアッチの攻略に行ってもいいけど、できれば今日はやめておきたいなあ……。

この後、サクヤさんとの約束もあるし。

「クク……できれば我としては、この後は家でゆっくり初めてもらったバレンタインチョコの味を噛みしめたいのだが……」

「お、中条ももらったのか」

「ええ……意外にも、クラスの女子のほとんどの方が、中条さんにあげていましたね……」

俺の問いかけに、カズラさんが答える。そういえば、二人は同じ

クラスだったっけ。
だけど……まあ、話し方は独特だけど、何気に中条はイケメンだからなあ……。

「あと補足をしますと、中条さんはクラスのみなさんに分け隔てなく優しく接していますので、かなり好感度が高いですね」
「へえー……」

いやホント、『攻略サイト』にあったような冷酷無比な性格はどこ行ったんだよ？　むしろ仲間キャラよりもいい奴なんだけど。

「チクショウ……俺なんて……俺なんて……」

そんな俺達の会話を聞いていた加隈は、半ベソをかきながらいじけてしまった。
あー……コイツ、チョコもらえなかったんだな……。

「ま、そういうことなら今日はここまでにしよう」
「う、うむ！　そうだな！」

俺の言葉を受け、サクヤさんが、ぱあ、と満面の笑みを浮かべる。
だけど……ほらあ、みんな勘づいちゃったじゃないですかー……脇が甘いにもほどがある……。

「……ヨーヘイ、せっかくですからこの後、ルフランに行きませんこと？」
「ヨーヘイさん、よろしければうちに夕食を食べに来ませんか？」

早速俺とサクヤさんの邪魔をしようと、サンドラとカズラさんが絡んできたし。

「あ、あははー……悪い！　今日はもう帰る！　［シン］、行くぞ！」

『はうはう！？　待ってくださいなのですううううう！』

「「あ！」」

そう言うと、俺はみんなを……サクヤさんすらも置き去りにして、一目散に領域（エリア）を出た。

……といっても、サクヤさんとはあらかじめ待ち合わせ場所を決めてあるんだけど、ね。

バレンタインデー③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バレンタインデー④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

バレンタインデー④

「ふう……」

“ぱらいそ”領域（エリア）を飛び出した後、俺は待ち合わせ場所である益田港の臨海公園……“アルカトラズ”領域（エリア）の扉がある場所に来ている。

『はうはう！　マスターのチョコも、藤姉さまの分で打ち止めなのです！』

「いや、言い方」

でも……チョコをもらうのも初めてながら、こんなにたくさんもらえるなんてなあ……いや、マジで嬉しい。

本来だったら、クソザコモブの俺はチョコどころか声すらかけてもらえない底辺ボッチな日々を過ごすはずだったんだから、境遇が完全に逆転したよなあ。

『はう！　もし［シン］がもらうのなら、チョコはチョコでもチョコアイスがいいのです！』

「だろうな。知ってる」

などとぱたぱたとはしゃぐ［シン］にツッコミを入れながら待っていると。

「あ……」

向こうのほうから、サクヤさんが歩いてきた。

「サクヤさーん！」

当然俺は、サクヤさんの元に駆け寄る。

「ふふ……そんなに慌てて走ると、転んでしまうぞ？」

「はは、その時はサクヤさんに手当てしてもらうから、むしろご褒美ですね」

「あう！？　もも、もう！」

顔を赤くしながら、照れ隠しとばかりにポカポカと俺を叩くサクヤさん。

いや、メッチャ可愛いんだけど。

「そ、それで……」

「あ、そうだったな……」

サクヤさんはカバンの中から、綺麗にラッピングされた箱を取り出す。

「そ、その……カナエさんに教わって、私が作ってみたのだが……」

『「っ！？」』

その言葉に、俺と［シン］に戦慄が走る。

できれば市販のチョコに一縷（いちる）の望みをかけたけど、駄目だったかあ……！

「あ、ありがとうございます……！」

俺は振り絞るように声を出して礼を言うと、おそるおそるチョコ

を受け取る。

「そ、それで……もしよかったら、ヨーヘイくんがチョコを食べるところを、み、見てみたい……」

『「っ！？」』

な、なにいッッッ！？

この俺は、膝をついて前のめりに倒れることすら許されないというんですか！？

『は……はう……シ、［シン］にもダメージがくる、のですか……？』

チョコの箱を凝視しながら、［シン］が今にも泣きそうな表情を浮かべる。だけど……すまん、耐えてくれ！

俺はゆっくりとリボンに手をかけ、紐解いていく。

包装も丁寧に取り除き、箱をを空けると……い、今のところ、見た目は普通、だな……。

「さ、さあ！　食べてみてくれ……！」

ううう……サクヤさんが、期待と不安に満ちた表情で俺を見つめてくる……。

「い、いきます……！」

俺はチョコを一粒つまみ、それを口の中へと運ぶ。

そして、ゆっくりと咀嚼（そしゃく）すると……っ！？

「う、美味い……」
「ほ、本当か！」

俺のその一言に、サクヤさんがぱあ、と顔を綻ばせる。
いや、チョコの味としては普通の部類に入るとは思うんだけど、予想していた味が味だから、振れ幅が大きいせいでメッチャ美味く感じるんだけど。

「いや、本当に美味しいですよ！　これ、サクヤさんが作ったんですよね！」
「う、うん！　カナエさんに見守ってもらいながら、頑張って作ったんだ！」

そうか……カナエさん、つきっきりで監視してくれたんですね……あなたは女神ですか？　でも、できればお弁当の時もそうしてほしかったです。

「はは！　本当に美味いですよ！　ホラ、先輩も！」

そう言ってチョコを一粒つまむと、先輩の口元へ差し出す。

「あ、う、うん……はむ」

恥ずかしそうにしながら、サクヤさんは俺の指からついばむようにしながらチョコを口に含んだ。
こ、これは……ヤバイ、メッチャドキドキする……というかサクヤさん可愛い。

「ふふ……確かに君の言う通り、我ながら美味しくできたな……」
「ええ！　で、でしたらもう一つ……」

「ん……はむ」

二回目で慣れたのか、サクヤさんは今度はすぐに口に入れた。

だけど……サクヤさんの唇が、俺の指に触れた……うん、今日は洗わない。ゼッタイ。

「ふふ……全く、これでは私に食べさせるばかりで、君が食べてないじゃないか」

「あ、あははー……」

だって、こうやってサクヤさんに食べさせるの、その……俺にとって最高のご褒美なので。

「な、ならお返しだ」

そう言うと、今度はサクヤさんがチョコをつまみ、俺の口へと運ぶ。

「はむ……もぐ……うん、美味い！」

俺はパクリ、と口に入れるてそう言うと……アレ？　サクヤさん、自分の指をジッと見つめてどうしたんだろう……。

すると。

――パク。

えええええええええ！？

なんと、サクヤさんはあろうことか、自分の人差し指をくわえて

しまった!?

「ん？　あ、ああ……指にチョコがついてしまったのでな」

俺は、サクヤさんが口からちゅぽん、と抜いた、濡れた人差し指に釘付けになる。

「ふふ、では次だ」

そう言って、サクヤさんはその人差し指でチョコをつまみ、さっきと同じように俺の口へと運ぶ。

うう……サクヤさん、無自覚が過ぎる……！

結局、俺はそんなサクヤさんにドキドキしながら、一緒にチョコを食べさせ合った。

◇

「ただいまー」

サクヤさんとの心臓の悪いバレンタインチョコの食べ合いを終え、家に帰ってくると。

「あらあら、そういえばヨーヘイに荷物が届いていたわよ」

「荷物？」

ウーン、別にネットで何か注文した記憶もないし、一体何だろう……。

俺はテーブルに乗っているその荷物の宛先を見てみる。

「あ……」

送り主は、なんと悠木だった。

ということは……。

早速箱を開封して中を見てみると……案の定、バレンタインのチョコだった。

「はは……それじゃ、悠木にお礼を言わないと、だな」

俺は口元を緩めながら届いたチョコを持って自分の部屋に向かい、しばらくの間悠木と電話した。

バレンタインデー④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

後半に向けて（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

後半に向けて

■???視点

「ふう……今日も疲れたなあ……」

領域（エリア）でのレベル上げのノルマをこなした後、『　』は部屋に戻ってベッドの上に寝転がる。

いや、というかちょっと『　』をこき使い過ぎじゃないか？

『　』だって色々とやることあるんだし、指示されたことだけやってるわけにもいかないんだけど。

それに。

「全く……アイツもアイツで、今まで何やってたんだよ……クリスマスに会った時から、全然変わってないじゃないか……」

そう、今日は久しぶりに一緒に領域（エリア）攻略に行ったが、成長の後は見られず、レベルも九十のままだった。

せめて『　』と会うまでに、レベルカンストくらいしといてほしいんだけど。

「ま……そういう『　』も、まだレベル八十七なんだけどな」

『は、はうう……』

そう言ってジロリ、と見やると、［　］は申し訳なさそうに俯（うつむ）いてしまった。

「はは、馬鹿だなあ……今のは別に、お前を責めてるわけじゃないぞ？　『　』は、お前とのレベル上げの時間が充分に取れないことにイラついてんの」

『はう！　よ、よかったのです……』

はは、本当に可愛い精霊（ガイスト）だな。

正直、こんな『　』にはもったいないくらいだ。

『はうはう！　それで、これからどうするのですか？』

「んー……とにかく、『　』達が本格的に動くことになるのは四月以降……つまり、上の学年に進級してからだな。それまでは、とにかく［　］のレベルを上げて強くなっておかないと」

そう……『ガイスト×レブナント』の物語の後半となる四月以降こそ、『　』達がいよいよ動く番だ。

絶対にあの人を救って、最高のクリスマスを迎えるために。

とはいえ。

「……正直、惜しいといえば惜しいんだよなあ」

『　』は天井を見上げながら、ポツリ、と呟く。

いや、できれば『　』も、彼女も救いたい。

けど、『　』が目指すのはクリスマスのその後……つまり、『ガイスト×レブナント』のエンディング後の未来だ。

正直、ゲーム本編をいくらいじったところで、このクソゲーを司る、いわゆる“神”に敵うわけがないんだから。

だけど……ゲームの枠外なら、その“神”の範疇じゃない。
つまりゲームさえクリアしちまえば、あとはキャラのご自由に、ということだ。

だからこそ……あの“神”も、こんな無茶なオーダーを受け入れやがったんだからな。

『はう……マスターは、またあの女のことを考えていたのですか？』

嫉妬にかられた［　　］が、ジト目で『　　』を睨んできやがる……。

「ハア……ほら、おいで」

そう言って手招きすると、［　　］は相変わらず何か言いたそうな視線を向けるが、それでも、俺の腕の中へとやってきた。

「お前は、この『　　』の大切な相棒だ。それは分かるな？」

『はう……』

「この『　　』が他の女に恋慕していることが気に入らないことも分かる。だけど……アイツはともかく、あの女性だけは特別なんだ。それこそ……この『　　』の全てを差し出してもよいほどに」

『っ！？　マスター！？』

「はは……まあ聞いてくれ。そうは言ったが、『　　』だって傷ついたり、ましてや死んだりするなんてゴメンだ。そんなことになったら、それこそ全部無意味になっちまうだろ」

慌てる［　　］を落ち着かせ、俺は耳元で諭すようにそうささやく。

「……大体、『　』がお前を傷つけてしまうようなこと、するわけがない」
『マスター……』
そう……『　』は、あの賀茂の馬鹿とは違う。
アイツは自分のたった一人の精霊（ガイスト）を、あろうことか闇堕ちエンドにだけ登場する、最悪の幽鬼（レブナント）に変質させやがった。
どうやってそんな真似ができたのか今でも気になるところだが、それ以上にアイツ、ちゃんと『攻略サイト』をシッカリ見とけよなあ……。
そうすれば、精霊使い（ガイスト）と精霊（ガイスト）とのリンクが切れて、幽鬼（レブナント）に成り下がった元相棒に消されるラストだったことに気づくはずなのに。
「……そうは言っても、あの精霊（ガイスト）は最後までマスターに尽くそうとしたんだ。結局は、精霊使い（ガイスト）としては幸せだったかもな」
まあ、人としては最悪だけどな。
この……『　』みたいに。
その時。
――ピリリリリリ。
スマホが鳴り、画面を見てみると……相手は木崎セシルだった。
「……もしもし」
『あ……『　』様……』

電話の向こう側から、遠慮がちな木崎セシルの声が聞こえた。
はは……多分、今日の領域（エリア）攻略に関しての謝罪だろう。

「あー……先に言っとくけど、今日の件については別に謝る必要はないからな」
『っ！？　で、ですがっ！？』

罪悪感からか、木崎セシルは納得ができないようだ。

「はは……こんなくだらないこと、いちいち気にするな。それよりも、春からは一緒に過ごすことになるんだ。そこから、色々とやってもらわなきゃならないことがあるんだからな」
『！　は、はい！』

まあ、こうやってちゃんと次の仕事があるってことを示してやれば、まだ『　』が必要としていることが理解できるからな。相変わらずチョロイ。

「何なら、春からは一緒に暮らすか？」
『い、いいんですか……？』
「もちろん。『　』は、愛するセシルと一緒に過ごしたい」
『……私もです。ずっと……ずっと、あなたの傍にいたい……』

オイオイ、木崎セシルの奴、感極まって泣き出しやがったぞ。
クソ女のくせに、キモチワルイな。

「まあ、そういうことだから……セシル、そろそろ切るぞ」
『は、はい！　お疲れのところ、すいませんでした！』
「いや、『　』もセシルの声を聞けて嬉しかったよ」

『はい……』

そして、木崎セシルとの通話を終えると。

『マスター……あの女と一緒に暮らすなんて、聞いてないのです……』

頬をプクー、と膨らませた［　］が、『　』を睨みつけていた。

「ま、まあまあ……それも、次のクリスマスまでだから……」

そう言って必死になだめ、ようやく［　］は機嫌が直った。

「さあて……コッチも色々と準備が整った。いよいよ面白くなってきたぞ」

あの人からの指示通り、必要なものはとりあえず揃った。

あとは……行動に移すだけ。

『　』さん……この『　』が、あなたを必ず救ってみせますからね……！

後半に向けて（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の朝更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バベル領域、踏破　前編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
今日は三話更新予定！

バベル領域、踏破　前編

――キーンコーン。

三月になり、春の日差しが教室に差し込む中、一日の授業終了を告げるチャイムが鳴った。

すると。

「ヨーヘイ！　行きますわヨ！」

張り切った様子のサンドラが、早速俺を誘いに来た。

今日は、いよいよあの“バベル”領域（エリア）の踏破に挑むのだ。

いやあ、ここまで来るのは大変だったなあ……。

なにせ、“バベル”《エリア》が全部で三百階層もあるモンだから、結局四か月近くかかっちまった……。

「フフ……あの領域（エリア）では、一体何が手に入るのかしラ？」

サンドラはニヤニヤしながら、俺の顔を覗（のぞ）き込む。

さすがに二周目特典である五つの領域（エリア）も四つ目ともなると、サンドラだって俺が全てを知ってること、薄々勘づいてるよなあ……。

「はは……それは、踏破してみてのお楽しみってことで」

「フフ！　そうですわネ！」

苦笑する俺に向け、サンドラははにかんだ。

こうやって俺を気遣って深入りしないでいてくれるところ、本当に感謝しかない。

「それじゃ」

「エエ！」

俺達はアオイとプラーミャも連れて教室を出ると、校門で待つサクヤさん達と合流した。

◇

「ハアアアアアアアアアッッッ！」

“ バベル ”領域（エリア）の第二百九十七階層。

現れた幽鬼（レブナント）、“ カリギュラ ”を、［関聖帝君］が【一刀両断】にする。

さすがにここまで攻略をすると、幽鬼（レブナント）の気持ち悪さ、不快さには慣れたなあ。

本当は、慣れちゃいけないんだけど、な……。

「ですけド、向こうは大丈夫かしラ……」

「問題ないだろ。アッチはカズラさんがみんなをちゃんとグリップしてるだろうし、何より、中条は頼りになる」

そう、中条はサクヤさん、アオイに次ぐ精霊使（ガイスト）いなんだ。しかも、レベルが九十を超えた今、こんな“ バベル ”領域（エリア）なんかでつまづく要素は何一つない。

「さあ、残すところはあと三つ。今日で必ず踏破するぞ」

「「「はい！」」」

サクヤさんの号令に俺達は頷き、次の階層の階段を上る。

「ふふ……しかし、この四人のチームだと、“アルカトラズ”領域（エリア）を思い出すな」

「あはは、そうですね」

あの時は、夏休みにわざわざルーシからサンドラに会いにプラーミャがやって来て、闇堕ちまでして大変だったなあ……。

「……ヨーヘイ、なんで私（ヤー）を見てるノ？」

「え？　あ、ああいや、別に……」

おっと、無意識にプラーミャを見ちまった。

あれからコイツも、少しは当たりが柔らかくなった……のか？

「フフ……まあ、ヨーヘイがプラーミャをジト目で見たくなる気持ちも分からなくはないですわネ」

「サンドラ！？」

そう言ってクスクスと笑うサンドラに、プラーミャが猛抗議する。

「ふふ……ほらほら、早く行くぞ」

苦笑するサクヤさんに促され、第二百九十八階層も順調にこなし、次の第二百九十九層。

「あ！　ヨーヘイくん！」

「お、アオイ達もここまで来てたのか」

はは……最後の階層の直前で、まさかこうやってアオイ達と合流できるとはなあ。
なかなかタイミングがいい。

「クク……次が最後の階層なのだろう？　それで、領域（エリア）ボスはどのような奴なのだ？」

俺が『攻略サイト』を持っていることを知っている中条が、小声で尋ねる。

「ああ……ここの領域（エリア）ボスは二体いて、うち一体はまあ……筋骨隆々で、上半身裸で、尊大で、なかなかいけすかない幽鬼（レブナント）だよ」

そう……“バベル”領域（エリア）の二体いるボスのち、その一体の名は“ユリウス・カエサル”。
ショートソードと金属のバックラーを携え、聖属性魔法と物理攻撃でバランスよく攻撃を仕掛けてくる、なかなか厄介なボスだ。

そしてもう一体は“クレオパトラ”。
邪属性魔法の使い手で、ユリウス・カエサルと戦っているプレイヤーに対し、ひたすらデバフをかけて戦いを長引かせる、迷惑極まりないボスである。

「……ま、レベル九十以上ある俺達にとっては、大した相手じゃないけどな」
「クク……そうか。貴様がそう言うのなら、そうなのだろうな」

そう言って、中条はくつくつと笑う。
しかしコイツも、よくもまあ俺の言葉をここまで信じてくれるよ

なあ……。

本当に、主人公と対をなすライバルキャラだったのに、今じゃ完全に最高の仲間キャラじゃないか。

まあ……中条は秘密も知る、俺にとって最高の親友、だもんな……。

「むー！　ヨーヘイくん、中条先輩とばかりしゃべってずるいよ！」

「いや、何だよソレ」

全く……アオイの奴は、俺が男と話をしてもヤキモチを焼くのな。というか、こういう時こそ加隈の役目だろうが。何やってるんだよ……って、悔しそうに俺を見るな。

「ふふ……確かに、ヨーヘイさんに余裕があるのも頷けますね」

どうやらカズラさんは、既に領域（エリア）ボスの解析を終えたみたいだ。だけど、まだボスのいる階層にたどり着いてないのに、ここからでも解析が可能になってるのか……。

レベルが上がったことで、ますますスキル効果も上昇しているなあ……。

ちなみに［シン］もレベルが上がり、呪符の効果も上がっている。そして……『敏捷』ステータスも、今では“ＳＳＳＳ”に到達した。

あの［関聖帝君］ですら、そのあまりの速さに［シン］を捉えることができないほどに。

「［シン］……領域（エリア）ボス戦、頼んだぞ」

『はう！　任せるのです！　この［シン］が、必ずやっつけてみせるのです！』

［シン］が自信に満ちた表情で、胸をドン、と叩く。

はは……俺の相棒は、本当に頼もしいな。

「さあ……みんな、準備はいいか？」

『「「「「「「「「「「おー！」」」」」」」」」』

サクヤさんの問いかけに、みんなが応える。

「では、いくぞ！」

俺達は、領域（エリア）ボスのいる最後の階層……第三百階層の階段に、足をかけた。

バベル領域、踏破　前編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は今日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

バベル領域、踏破　後編（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

バベル領域、踏破　後編

「ここで最後……だな」

俺達が“バベル”領域（エリア）の第三百階層へと足を踏み入れると、今までの迷宮のように入り組んだものではなく、ただ一つのフロアが眼前に広がっていた。

「あ！　あれ！」

アオイが指差した先……そこに、二つの石棺（せきかん）が鎮座されていた。

あの中に……ここの領域（エリア）ボスが……。

俺達はその石棺へおそるおそる近づいていくと。

――ズズ……。

「「「「「「っ!?」」」」」」

石棺の蓋がゆっくりと開き、中からむくり、と起き上がる幽鬼（レブナント）。

「みんな！　来るぞ！」

俺はそう号令をかけると、みんなが精霊（ガイスト）を召喚する。

そして……石棺から姿を現わした領域（エリア）ボス、ユリウス・カエサルとクレオパトラは、ギロリ、とこちらを睨むと。

――タッ！

ユリウス・カエサルがショートソードとバックラーを構え、一気に俺達へと突撃してくる。

「みなさん、後ろへ！　【ガーディアン】！」

サンドラの［ペルーン］がいくつも盾を展開し、ユリウス・カエサルの接近を拒む。

「ホホ！　今のうちに拘束してしまおうかの！」

そう言うと、土御門さんの［吉備真備（きびのまきび）］が紙片をばらまき、【式神使】を大量に生み出した。

そして、盾を避けてこちらへと来ようとするユリウス・カエサルに、【式神使】達がまとわりついていく。

『ッ！』

ユリウス・カエサルは、ショートソードで【式神使】を切り刻んでいくが、ここは多勢に無勢。あっという間に取りつかれてしまい、その身体を床に押し付けられてしまった。

その時。

「あれは！？」

クレオパトラが放つ上級邪属性魔法、【スクリーム・オブ・ゴースト】が、【式神使】の中に入り込んだ瞬間、【式神使】は次々とただの紙片に戻っていく。

……なるほど、スキルでしかない【式神使】には、即死系の魔法も通用しちまうってことか……。

「ならば！　［関聖帝君］！」
「クク……！　［デウス・エクス・マキナ］！」
「［シン］！　お前も行け！」
『ハイなのです！』

それを見て、【状態異常無効】のスキルを持つ三体の精霊が、一斉に領域ボスに襲い掛かる。

「おおおおおおおおおおおおおッッッ！」

［関聖帝君］がユリウス・カエサルに青龍偃月刀を振り下ろす。
だが、ユリウス・カエサルはバックラーでその巨大な刃を受け流してしまった。

「ふっ！」

それでも、［関聖帝君］は息を吐くと同時に刀を返し、ユリウス・カエサルの左腕を斬り飛ばした。

その直後。

「アアアアアアッッッ！　【ブラヴァー】ッッッ！」
「ファイア」

俺達の後ろから、［スヴァローグ］の炎をまとったハルバートと、［ポリアフ］の弾丸がクレオパトラへと射出された。

「クク……【クロノス】」
『ッ！？』

中条がそう告げた瞬間、ハルバードと弾丸がいつの間にかクレオパトラの目と鼻の先に現れると。

『アアアアアアアアアッッッ！？』

躱す間もなくその攻撃全てが命中し、クレオパトラはもんどり打って倒れた。

『はう！　トドメなのです！　【爆】！　【裂】！』

［シン］の貼り付けた大量の呪符により、クレオパトラは身体中が爆発し、ズタズタに引き裂かれ、その姿を幽子とマテリアルへと変えた。

「これで！　終わりだよ！　【竜の息吹】ッッッ！」

［関聖帝君］が身を引いた瞬間、その後ろで大きく口を開けた「伏犠」が、ユリウス・カエサル目がけて【竜の息吹】を放つと、その姿は消滅し、残ったのは幽子とマテリアルだけだった。

「よし！　やったぞ！」
「うむ！」
「エエ！」

俺は拳を高々と突き上げ、勝利宣言をした。
だけど……はは、終わってみれば一切危なげもなく、余裕で完勝したな。

「ふふ……私達は強くなった、な」

サクヤさんはニコリ、と微笑みながら、俺の肩をポン、と叩いた。

「サクヤさん……はい！」

「フフ、ヨーヘイは分かってますノ？　ワタクシ達の強さは、全部アナタがくれたんですのヨ？」

そう言って、クスクスと笑うサンドラ。

「はは……違うよ。みんなは最初からこれくらいの力は持ち合わせていたんだ。俺はただ、そのきっかけを与えたに過ぎない。それよりも」

俺は［シン］を見やると、何かを悟った［シン］はこちらへとやって来た。

「俺と［シン］……［ゴブ美］の強さは、サクヤさんが、サンドラが、プラーミャが、カズラさんが、アオイが、土御門さんが、中条が、加隈が……みんながくれたものなんだ。俺達は、本当に感謝しかないよ」

『はう！　マスターの言葉ももっとですけど、マスター自身がいつも一生懸命だからなのです！　いつも誰かのために戦ってきたからなのです！　本当に、マスターの謙遜にも困りものなのです！』

「［シン］！？」

何だよ！？　せっかくいい感じに締めようと思ったのに！？

「ハハハハハ！　［シン］の言う通りだな！」

「フフフ！　エエ！」
「二人まで……」

豪快に笑うサクヤさんとサンドラを、俺は思わずジト目で睨んでしまった……って。

「おっと、それよりも早くスキルを取得しましょう！」
「うむ！　そうだな！」
「フフ、今度はどんなスキルかしらネ」

みんなで二つの石棺の元へと向かうと、中には水晶の玉がそれぞれ入っていた。

そして、精霊（ガイスト）がそれに触れると……。

「フフ……【聖属性反射】を手に入れましたワ！」
「こちらは【邪属性反射】、ですね」

みんなが二つの属性反射スキルを手に入れて、顔を綻ばせる。

さて……その間に。

そんな中、俺は［シン］と共に静かに下の階層へと下り、第二百九十九階層の一番奥の行き止まりへと向かうと……案の定、木箱が二つ置かれていた。

「さあ……いよいよ蓋を開け……「何をしてるノ？」……ああ、クリア報酬のアイテムを……っ！？」

俺は慌てて後ろを振り返ると。

「全ク……コソコソしてると思ったラ……」

声の主は、プラーミャだった。

バベル領域、踏破　後編（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

そして、この後の更新で、「ガイスト×レブナント」一年生編のラストです！

次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

想いを伝えても、いいですか？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
とうとう一年生編、ラストです！

想いを伝えても、いいですか？

「全ク……コソコソしてると思ったラ……」

声の主は、プラーミャだった。

あー……後にしようと思ってたのに……まあ、一緒だからいいか。

「はは……このこと、他のみんなには内緒だぞ？」

「ヘエ……ダッタラ、ヨーヘイに何か口止め料でも支払ってもらおうかしラ？」

プラーミャはグイ、と顔を近づけて微笑んだ。

「そうだな、これはぜひ口止めしておかないと」

ということで、俺は木箱の蓋を開けると。

「コレは……ネックレスと指輪？」

そう……この“バベル”領域（エリア）のクリア報酬である“ハルモニアのネックレス”と“ギュゲスの指輪”。

前者は、たった一度だけ装着者が瀕死の状態の時、身代わりとなって装着者を全回復させるという代物。

後者は、精霊、幽鬼（ガイスト）関係（レプナント）なく相手のどんなスキル攻撃でも、一度だけ封じることができるアイテムだ。

そして、一度でも使用すると、どちらのアイテムも壊れてなくなってしまう。

ということで。

「こっちの“ギュゲスの指輪”は……プラーミャ、お前が持っていてくれ」
「っ！？」

そう告げた瞬間、プラーミャが息を飲んだ。

「チョ、チョット待ッテ！？　確かに口止め料って言ったけど、そんな大切なものをもらおうなんて思ってないわヨ！？」

そう言って、プラーミャが慌てふためく。
はは……いつも遠慮しないプラーミャにしては、珍しいな。

「いや……この指輪は、ぜひともプラーミャに持っていてほしいんだ」

元々、“ギュゲスの指輪”についてはプラーミャに渡そうと考えていた。
だって……俺は確かに、プラーミャにも救われたんだ。

賀茂に指示されて吉川サヤがサンドラ達の部屋を襲撃した時、俺は……彼女を破滅に追い込んだ。
あの時の俺は……いや、今でも、俺のあの行動は正しいと思っている。

でも、だからってあの選択をしたことを……自分自身を許せるかってことに関しては別だ。

だけど……プラーミャは、許してくれた。

自分自身を許せそうにない俺を、プラーミャが許してくれたんだ。

あの時の俺が、どれほど救われたか……どれほど嬉しかったか……。

「……だからプラーミャ、この指輪を受け取ってくれ。俺の……大切なプラーミャへの、絆の証として」

そう言って、もう一度指輪を差し出す。

すると。

「……サンドラの言う通り、本当にヨーヘイってズルイわよネ……」

「な、なんだよそのズルイってのは……」

「ウルサイ……ヨーヘイの、バカ……」

そう言うと、プラーミャは俺の手から指輪を取ると、その左手薬指にはめた。

「フフ……あとで返してって言っても、絶対に返さないからネ」

「当然だ。その指輪は、プラーミャのものなんだから」

俺はサムズアップしながらそう言うと……っ！？

「ヨーヘイが、悪いんだからネ……」

プラーミャは、突き出した俺の手を、愛おしそうに頬に寄せた。

「……サテ、早く戻らないと、またサンドラと藤堂先輩が拗ねてしまうワ。帰りまショ？」

すると、俺の手をパッと放したプラーミャは、クルリ、と翻(ひるがえ)ってそんなことを言った。

「はは……そうだな」

「ン……」

プラーミャは一切俺のほうへと振り返ることなく、俺の前を歩きながらそのまま上の階層へと向かう。

だけど……そんなプラーミャの足取りは、どこか軽かった。

◇

「ふう……さあて」

“バベル”領域(エリア)を踏破して家に帰ってきた俺は、スマホを手に取る。

画面に表示されているのは、サクヤさんの電話番号だ。

「よし」

俺は発信ボタンをタップした。

――プルルルル……プルルルル……ガチャ。

『もしもし』

「あ、サクヤさん。ヨーヘイですけど……」

『ふふ……どうしたんだ？』

電話に出たサクヤさんが、笑いながら尋ねる。

「実は、これから逢えないかなー……と」

『ん？　ああ、それは大丈夫だが……』

「ありがとうございます！　じゃあ、今からサクヤさんの家に向かいますね！」

『あ、う、うん……ま、待ってる……』

俺は通話終了のボタンをタップすると、掛けてあるモッズコートを羽織り、サクヤさんの家へと足早に向かった。

そして。

「ふふ……だ、だがヨーヘイくん、急にどうしたんだ？」

家から出てきたサクヤさんが、そう言ってはにかんだ。

「はい……あ、あの、これ……」

そう言うと、俺はポケットからハンカチで丁寧にくるんだネックレスを取り出す。

「それは……？」

「はい……“バベル”領域（エリア）で入手した、“ハルモニアのネックレス”といいます。これを着けていると、たった一度だけ、着けている者の命を救ってくれます」

「っ！？」

俺の説明を聞いた瞬間、サクヤさんが息を飲んだ。

「ま、まさか……っ！？」
「はい……このネックレスを、サクヤさんに受け取ってほしいんです」

そう……『ガイスト×レブナント』では、主人公と戦ったサクヤさんの身体にある種を、父親である藤堂マサシゲが殺して奪い、ラスボスを覚醒させ、最終決戦を迎える。
もちろん、俺はそんな未来を全力で阻止するつもりだけど、万が一ということがある。

だから。

「……サクヤさん、このネックレス、つけてくれますか……？」
「……」

サクヤさんは、俺の顔とネックレスを交互に見つめると……その真紅の瞳から、涙が零れた。

「本当に……本当に、君は……！」

そして、サクヤさんが俺の身体を抱きしめた。
強く……ただ、強く……。

「私は……君からもらってばかりだ……」
「あはは……俺だって、サクヤさんからもらってばっかりです。あなたに出逢ってから、ずっと……」

そう言うと、俺はサクヤさんを抱きしめ返した。
強く……ただ、強く……。

「ふ、ふふ……私は、世界一幸せだよ……私は……君に出逢えて、本当によかった……」
「俺もです……」

それからしばらくの間、俺とサクヤさんは抱きしめ合った。
お互いがお互いに出逢えた、そんな幸せを噛みしめて。

サクヤさん……俺が、あなたを必ず救ってみせます。

だから……クリスマスを超えた、その時は……。

――俺の想いを、あなたに伝えてもいいですか……？

想いを伝えても、いいですか？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

これにて一年生編終了となります！

ここから後半となる二年生編へと突入するのですが、この「ガイ×レブ」をさらによい作品にするため、少しだけ充電期間とさせていただきます。

次回は１２月１日から再開予定！どうぞお楽しみに！

また本日、新作ファンタジーを始めました！

辺境最前線の防衛戦術　～王命により過酷な辺境の地に左遷された幼馴染の女将軍を助けるため、補佐官の俺は恩寵【模擬戦】で最悪の盤面を覆す！～

久々の連載小説！しかも中華ファンタジーです！

下記のタグから見れますので、ぜひともお読みくださいませ！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

二年生の朝（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
いよいよ二年生編、スタートです！

二年生の朝

「くあ……！」

春休みが終わり、今日からいよいよ俺も二年生に進級する。
で、いつもより早く起きた俺は、カーテンを開けて朝日を眺めている、んだけど……。

「すぴー……すぴー……」

コノヤロウ、［シン］はそんなことお構いなしに気持ちよさそうに寝やがって。
分かってるのか？　二年生になったってことは、『ガイスト×レブナント』が後半戦に入ったってことなんだぞ？

俺は残り八か月とちょっとで、サクヤさんが死ぬことになる運命のクリスマスを防ぐための手立てを講じないといけないんだからな。

一年生の時は、“アルカトラズ”領域（エリア）で“シルウィアヌスの指輪”、“アトランティス”領域（エリア）で“エリネドの指輪”、そして“バベル”領域（エリア）で“ハルモニアのネックレス”を手に入れ、それらを全てサクヤさんに渡した。

“シルウィアヌスの指輪”があれば、サクヤさんの体内にある種が成長し切ることもなくラスボスの登場を防げるだろうし、それが叶わなかったとしても、“ハルモニアのネックレス”がサクヤさんの生命を一度だけ絶対に守ってくれる。

でも。

「……元々のシナリオから、色々と状況が変わっちまってるのも事実だからなあ」

そう……本来ならラスボスの封印を守護する“九つの柱”は、学園の中でしか出現しない仕様になっているはずなのに、二周目特典の領域（エリア）である“アルカトラズ”領域（エリア）で出現した。

しかも、『ガイスト×レブナント』には名前だけしか登場しない、プラーミャが闇堕ちして。

とはいえ、それは俺が元のシナリオを全く無視して、好き勝手に動いている影響なのかもしれないけど。

それに……説明のつかないナニカによって、元のシナリオに戻そうとする作用が働いていたりもするし。

そのことについて一番分かりやすいのが、悠木による“グラハム塔”領域（エリア）での襲撃と、立花の入学時にあった加隈の扱いだ。

悠木に関しては、アイツの口からハッキリと告げられた。

まるで俺を抹消するか仲間に引き入れるかの選択肢が現れ、それを実行することしか考えられなくなった、と。

結果として俺が仲間になることを拒絶したから悠木は俺を襲撃してきたが、それが失敗して『ガイスト×レブナント』の舞台から退場することになった瞬間、その思考が正常に戻った。

加隈に関しては、本来は主人公の親友キャラとして常にチームを組むお調子者ってポジだったのに、俺がクラスを移って以降、気づけばクソザコモブの役割を与えられ、クラス内で腐っていた。

その後も、学園祭にかこつけて行われたサクヤさんへのリコール騒ぎで、元生徒会長の牧村クニオが俺の排除に動いたし。もちろんその理由も、『全てを元通りにする』ため。

要は、本来のシナリオであるサクヤさんとカズラさんの生徒会長選挙戦での一騎討ちをさせるために。

「まあ……いずれにせよ、シナリオ通りに事を進めるつもりはないけどな」

だってシナリオ通りに進むということは、運命のクリスマスイブでサクヤさんが死んでしまうということだから。

そんな未来、俺には絶対に受け入れられない。

俺は充電してあったスマホを手に取り、『攻略サイト』のページを開く。

「はは……全てはコイツの存在を知ってから、だよな」

一年前の昨日、俺は入学を前にして興味本位でエゴサした結果、偶然にもこのサイトを発見した。

そこには、この世界がゲームの世界で、俺は主人公に真っ先に絡んでいくクソザコモブというキャラだということが書いてあった。

主人公にバトルのやり方を教える、チュートリアルのための存在として。

そのことを考えると、今じゃどうして前のクラス……一一二であんな理不尽な扱いを受けたのかある程度理解できる。

だって、主人公と戦う敵（エネミー）が、クラスの連中……ましてや主人公の

仲間キャラと仲良くしてたらシャレにならないからな。

だから、ゲームキャラとしてシナリオ通り立ち回れるよう、そんなゲーム側の配慮があったんだろう。

「［ゴブ美］……」

俺は今もスヤスヤと眠っている［シン］を眺め、ポツリ、と呟く。

［ゴブ美］も単にゴブリンだってだけで、あのクラスの連中から心ない言葉をぶつけられて、笑われて、蔑まれて……。

入学した日のクラスでの出来事を思い出し、俺はギュ、と拳を握った。

俺は……あの日の［ゴブ美］の涙を忘れない。

大切なたった一人の相棒への、理不尽な仕打ちを。

だから。

「［ゴブ美］……いや、［シン］。絶対にもっともっと強くなって、もっともっと見返してやろうぜ。お前がどんな精霊よりも、頑張り屋ですごい奴なんだってことを」

すると。

『えへへ……もちろんなのです。［シン］は、世界一優しくてすごいマスターと一緒に、もっともっと強くなるのです。これからも、ずっと』

「［シン］……なんだ、起きてたのかよ……」

『はう！　窓の外を眺めながらあんなにブツブツと呟かれたら、気

になって寝られないのです！』

オイオイ、俺のせいかよ……。

『まあそれも、今日の帰りにルフランでアイスを食べさせてくれたら許してあげるのです』

「偉そうだな！　オイ！」

フフン、と鼻を鳴らす［シン］に、俺は思わずツッコミを入れる。

ハア……全く、しょうがないなあ……。

「分かったよ……ただし、疾走丸のノルマはいつもの倍な」

『はう！？　ヒドイのです！　ヒドイのです！』

何言ってやがる、報酬を得るにはそれなりの対価を払わないといけないんだよ。

それに。

「ただでさえ、これからは『敏捷』ステータスが上がりにくくなるんだ。量をもっと増やさないとな」

『はううう……』

ガックリと肩を落とす［シン］を見て、俺は苦笑する。

だけど、［シン］の『敏捷』ステータスは今や“ＳＳＳＳ”になったんだから、ステータスアップのための必要量が増えちまうのも仕方がないだろ。

「よっし！」

気合いを入れるため、俺はパシン、と両頬を叩くと。

「［シン］！　今日もよろしくな！」

『はう！』

はにかむ［シン］と、コツン、と拳を合わせた。

二年生の朝（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

そして、大変お待たせしました！

本日から物語の後半戦、二年生編が始まりました！

後半では、これまでの謎（伏線）をキッチリ回収していきますので、どうぞお楽しみに！

また、二年生編については基本的に一日一話投稿とさせていただきます。

これまでより若干更新ペースが落ちますが、どうかご了承くださいませ。

次話は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

新しいクラス（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

新しいクラス

「おはようございます！」

家を出ていつもの十字路、サクヤさんが今日も俺達を待っていてくれた。

うんうん、今日も最高の一日になりそうだ。

「ふふ、おはよう。今日から君も二年生だな」

「はは……ですね」

挨拶を交わした後、俺はサクヤさんの隣に並んで一緒に学園を目指す。

「ところで、今日の入学式もサクヤさんが祝辞を述べるんですか？」

「ああ、これは生徒会長の役目だからな」

はは……そういや、去年の入学式の時は綺麗な人だなー、くらいの感覚でサクヤさんを眺めてたけど、まさかこんなに仲良くなるだなんて誰が予想してただろうか。

「じゃあ、去年は聞き流していた分、今日はシッカリ聞かないと」

「む……それは酷いな……これでも祝辞の内容は悩みながら考えているのだぞ？」

おっと、サクヤさんにジト目で睨まれてしまった。

でも、よっぽど仲が良かったり尊敬する人だったりじゃないと、普通は俺みたいに聞き流すだけだと思います。

「ハア……まあいい。私も新入生達がつまらなくならないよう、祝辞は工夫せねばな……」
「あはは……今の俺なら絶対に聞き漏らさないんですけどね……」
肩を落とすサクヤさんを見つめながら、俺は苦笑した。
「あ！　ヨーヘイくんおはよう！」
「ん？　おー」
後ろから駆け寄って来て挨拶をするアオイに、俺は軽く手を挙げた。
「えへへ、また同じクラスだったらいいのにね！」
「そうだなー、何だかんだで、一一三は楽しかったからなあ」
うん、サンドラやプラーミャ、それにアオイがいて、担任の葛西先生もいい人だったし、クラスの他の連中だって気さくに話しかけたりしてくれたもんなあ。一一二の連中とは大違いだ。
「お、俺も！　今度こそ立花と同じクラスになるからな！」
「お、おー……」
いつの間にかアオイの背後にピッタリとマークしていた加隈が、決意を込めてそう宣言する。
だけど加隈よ……俺はお前の未来が心配だよ。このままじゃ、いつかストーカーとして捕まる日が来るぞ？
「ふふ……では、早く学園へと行こう。君達も自分のクラスがきになるだろうしな」

そんな俺達の様子を眺めながら、クスリ、と笑うサクヤさん。
うん……やっぱり最高に可愛い。

「そ、そうだぜ！　早く行こうぜ！」
「あ！　ヤ、ヤメテよ！」

調子に乗った加隈に腕を引っ張られ、嫌そうな顔をしながら引きずられていくアオイ。可哀想な奴……。

それよりも。

「サクヤさん」
「ふふ……ん？　ヨーヘイくんどうした？」

俺が少し真剣な表情で名前を呼ぶと、微笑ましそうにアオイと加隈を見ていたサクヤさんが不思議そうな表情を浮かべて尋ねる。

「サクヤさんが学園を卒業するまでの残り一年間、絶対に最高なものにしましょうね」
「あう……う、うん……」

顔を赤くして俯(うつむ)くサクヤさんと手を繋ぎながら、俺達は学園へと向かった。

◇

「えーと……俺のクラスは、と……」

学園に着いた俺は、下駄箱のところに掲げられているクラス名簿

を確認すると。

「お、あったあった」

俺のクラスは“二―二”だった。

ふむふむ……確か『攻略サイト』によれば、主人公達は全員二―一で、一度も主人公のチームで一緒に領域攻略をしたことがない仲間キャラは他のクラスになるって仕様だったよなあ。

ん？　俺、そういやアオイと一緒のチームで領域攻略したことあったっけ？

首を捻りながら思い返してみるけど……うん、ないな。

一応、メイザース学園との交流戦イベで中条と土御門さんを迎え撃った時に一緒に戦ったり、チームではなく全員で領域攻略をしたことはあったけど、ちゃんとチームとしてとなると一度もないや。

「だから、こんなクラス分けになったのか……」

そう……アオイとサンドラ、加隈、土御門さんは同じチームで領域攻略したことがあるから二―一、そして、俺と仲間キャラではないプラーミャが二―二になった。

すると。

「ヨーヘイ……」

今にも泣きそうな表情のサンドラが隣に来て、かすれた声で俺の名を呼んだ。

「お、おう……そ、そんなに落ち込んで、その、どうしたんだ……？」
「一緒のクラスに、なれませんでしたワ……」
ああー……俺やプラーミャとクラスが分かれちまったことがショックなのか……。
そういえば一年の時は、クラスではこの三人にアオイを含めた四人でいることが多かったし、それ以外のクラスメイトの中にはとりわけ仲が良いってほどの奴もいなかったしなあ……。
「ハア……全ク、休み時間や放課後になればいつもヨーヘイと一緒じゃなイ。いい加減、元気出しなさいヨ」
「プラーミャ……ッ！」
サンドラが、励ますプラーミャをしばらくジーッと見ていたかと思うと、急にそのアクアマリンの瞳を見開いた。
「ネ、ネエ……ワタクシとプラーミャって、双子……ですわよネ？」
「？　そうだけド？」
「だったラ！　今日からアナタが“サンドラ”になるんですのヨ！　ワタクシは“プラーミャ”として、二―二で励みますワ！」
「ナナ、ナニ言ってるノ！？」
プラーミャにしがみつきながら、必死の形相でそう提案するサンドラ。当然プラーミャは困惑しきりだ。
「サンドラ……プラーミャの言う通りだ。なんなら、俺は休み時間のたびに二―一に顔を出すから……」
「ッ！　本当ですわヨ！　絶対！　約束ですワ！」
「うお！？」

思い切り胸倉をつかみ、サンドラがガックンガックン俺を揺らす。
うぐぅ、頭が揺れてキモチワルイ……。

「マ、マア、私(ヤー)もヨーヘイと一緒に教室に顔を出すカラ……」
「ッ！　プラーミャ、それで勝ったと思わないことですワ！」
「エ、エエー……」

あー……プラーミャも大変そうだなー……って、あ。

呆けた表情のプラーミャの向こう側に、サンドラと同じく顔を真っ青にするアオイの姿が……う、うん……見なかったことにしよう……。

新しいクラス（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

新入生、林ヒョウカ（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

新入生、林ヒョウカ

『……次に、在校生の祝辞を行います。在校生代表、藤堂サクヤ』

「はい」

司会に呼ばれ、サクヤさんが壇上へと向かう。

なお、今は入学式の真っ最中で、俺は隣のクラスのアオイに絡まれていた。

「ねえ……ヨーヘイくん、聞いてるの？」

「お、おう……と、とりあえずサクヤさんの祝辞があるから、静かにしようぜ？」

「むー……違うクラスになった途端、ヨーヘイくんが冷たいよお……」

とまあ、終始こんな感じで手に負えない。

「そうですワ……ヨーヘイったら冷たいんですノ……ワタクシがこんなにも落ち込んでいるのニ、ヨーヘイはちっとも寂しそうじゃありませんシ……」

椅子の上で体育座りをして膝を抱えながら俯く（うつむ）サンドラ。いや、寂しいもなにも、基本的に授業以外はずっと一緒にいるじゃん。なんなら、放課後は領域（エリア）攻略から生徒会活動、果てはルフランの寄り道まで一緒じゃん。

「ホ……なかなかままならぬものよのう……」

扇で口元を隠しながら、憂いを帯びた瞳でそう告げるのは土御門さん。
本当に、俺も二人に絡まれてるこの状況がままならないんだけど。
「……以上で、お祝いの言葉といたします」
あああああ!?　サクヤさんの祝辞が終わっちまった!?
チクショウ！　コイツ等のせいで聞き逃しちまったじゃねーか！
『続きまして、新入生答辞を行います。新入生代表、“林（リン）ヒョウカ”』
「はい」
名前を呼ばれた銀髪ストレートロングの新入生が、壇上へと向かう。
「お！　あの子、何気に可愛くね？」
急に絡んできた加隈が、そんなことを言ってきやがった。
というかお前、アオイ一筋じゃないのかよ。いや、そもそも新入生は女子だけど、希望する性別は合ってるか？
「フン。別に、大したことないわネ」
などと鼻を鳴らしながらそんな憎まれ口を叩くプラーミャ。
とりあえず俺が一番言いたいのは、なんで入学式だってのに俺の周りにはいつものメンバーが固まってるんだよ。普通こういうの、出席番号順だったりするんじゃないのかよ。
そんなことを思いながらも、気を取り直して答辞を述べる彼女を

見る。
その銀色の髪を際立たせるようなラピスラズリの瞳、整った鼻筋、健康的な桜色の唇。
スタイルも良く、胸の大きさもサクヤさんやプラーミャとも遜色（そんしょく）ない。

……ああ。もちろん俺は、この新入生のことを知っている。
東方国の隣の国、“中原王国”からの留学生で、『ガイスト×レブナント』に登場するメインヒロインの一人、“林ヒョウカ”。
そして……俺が、チーム四人目のメンバーとして加えようと考えていた精霊使（ガイスト）いだ。

◇

「フン……ヨーヘイ、あんなのが好みなノ？」
「へ……？」

教室へと戻る中、不機嫌そうに鼻を鳴らすプラーミャに突然そんなことを聞かれ、俺は思わず呆けた声を漏らした。

「……さっきの新入生ヨ」
「ああー」

なるほど……俺が彼女をジッと見ていたから気になったんだな。

「いや、好みかどうかって言われたら、別にそんなことはないかなあ」

まあ、林ヒョウカの精霊（ガイスト）の実力に関しては、文句なしの評価だけ

どな。
なにせ、この『ガイスト×レブナント』における数少ない回復スキル持ちで、その能力はあの木崎セシルの［フレイヤ］にも匹敵する。
今でこそうちのチームにはカズラさんやアオイ、中条という回復スキル持ちがいるけど、元々のメンバー構成ではスピードタイプの［シン］以外、全員が物理攻撃主体の精霊（ガイスト）だけだったからなあ。
そういう意味でも、優秀な回復スキル持ちをチームに加えたかったんだ。
「……ヨーヘイ、まさかあの子をメンバーに加える気じゃないでしょうネ……？」
プラーミャがそう言って鋭い視線で俺を見つめる。
どうやら、コイツ的には林ヒョウカを加えることには反対みたいだ。
「いや、俺にそんなつもりはないよ。今のメンバーで充分だ」
そう……今の俺達は回復スキル持ちが充実しているから、あえて彼女を加える必要もない。
それよりも、今はこのメンバーでレベルや連携の底上げをするほうが重要だ。
「フウン……ならいいけド」
プラーミャはそう言うと興味なさそうにプイ、と顔を背けた。
「あー……ヨーヘイくんがクラスに戻っちゃう……」

「ホントですワ……」
「ホホ……残念至極じゃのう……」

ええと……三人共、教室の扉の陰からコッチを見るの、やめてくれないかなあ……。

「ま、まあ、立花の面倒は俺が見るから、ヨーヘイは心配しなくても大丈夫だぞ！」

少し胸を張りながら加隈はサムズアップするが……イヤイヤ、俺は何一つ心配なんてしてないし、なんならアオイの世話は全部お前に任せたいんだけど。

「ヨーヘイ……」

俺の傍に来て、制服の袖をつまんで悲しそうに俯くサンドラ。
いや、メッチャ後ろ髪引かれるんだけど。

「はは、ＨＲが終わったら今日は終わりだろ？　だったら、すぐに教室に誘いに来るから一緒にルフランに行こうぜ」

そう言うと、俺は励ますようにサンドラの髪を撫でた。

「ア……フフ……」

どうやらサンドラも機嫌が直ったらしく、嬉しそうに目を細める。

「ッ！　ホ、ホラ、ヨーヘイ！　サッサと教室に入るわヨ！」
「お、おう……じゃ、サンドラ、後でな」
「エエ！　後デ！」

プラーミャに強引に腕を引っ張られ、少し名残惜しそうなサンドラに見送られながら俺は教室に戻った。

新入生、林ヒョウカ（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

お姫様のお世話？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

――キーンコーン。

今日の授業の終了を告げるチャイムが鳴り、クラスの連中が帰り支度を始める。

一応、このクラスには一―二だった連中も一定程度いるが、勢力としては少数なので肩身の狭い思いをしていた。

というのも、一―三だったクラスのみんなが、やっぱり過去のこともあってか一―二だった奴等に白い目を向けているのだ。

それどころか。

「よ、望月。俺達も同じクラスになったんだし、アイツ等には好き勝手言わせねーよ」

「ホントホント、一年の時は自分達のこと棚に上げてよくあんなこと言えたよねー」

「まあ、ドッチにしろ二年でも期待してるぜ！」

とまあ、むしろ俺を励ましたり期待してくれたり、本当に好意的に接してくれるのが嬉しくてたまらない。

いや、一―三のみんなは本当に最高だよな。あの学園祭の時も俺達生徒会を手伝ってくれたりして、ノリだっていいし。

「ははっ」

そんなみんなの優しさに、俺は思わず笑ってしまった。

「……モウ、キモイワルイわネ」
「うえ!?」

いつの間にか帰り支度を終えたプラーミャが傍にいて、ジト目で俺を見ていた。

「お、おう。とりあえず、サンドラの所に行くか」
「エエ」

俺はヒューズボックスを持つと、プラーミャと一緒にサンドラ達のいる教室へと向かう……んだけど。

「サンドラさん？　先生に呼ばれて立花くん達と一緒に教室を出て行ったけど？」

サンドラ達の姿が見当たらなかったので一一三だった奴に聞いてみると、そんな答えが返ってきた。

「ウーン……それって、用件は何なのかって分かるか？」
「ううん。みんなも、不思議そうに首を傾げて出て行ったよ」
「そっか、ありがとう」

俺はお礼を言ってソイツと別れると、プラーミャへと向き直る。

「だそうだけど、どうする？」
「……ここで待っててても退屈だシ、先に先輩のところに行くわヨ」
「そうだな」

てことで、俺達は三年生の教室がある四階へと移動する。

「む、望月ヨーヘイにプラーミャではないか」

真っ先に出会ったのは、中条だった。

「オッス。サクヤさんに会いに来たんだけど、どのクラスだっけ？」

「うむ、藤堂殿は我と同じクラスだからな、コッチだ」

中条に案内され、サクヤさんのいる教室……“三―二”へ来ると。

「ん？　ヨーヘイくんじゃないか！」

帰る支度をしていたサクヤさんが、ぱあぁ、と笑顔を見せ、駆け寄ってきた。

「そ、それにしても、わざわざ迎えに来てくれるだなんて珍しいな」

「はは……いや、サンドラ達が先生に呼ばれていなかったんで、プラーミャと一緒に先にコッチに合流しにきました」

「う、うむ、そうか！　私も帰る準備は終わったから、いつでも行けるぞ！」

何というか、こうやって教室まで迎えに来ただけでこんなに嬉しそうにするんだったら、今度からはサクヤさんを迎えに来よう。そうしよう。

すると。

「いや、本当にあの後輩クンと一緒にいると雰囲気変わるな……」

「ていうか、去年から本当に柔らかくなったよねー……」

などと、コッチを見ながらひそひそと話をしている先輩方……ち

ょっと恥ずかしい。

「そ、そろそろカズラさんの教室に行きましょうか。確か、三―一でしたよね？」

「あ、う、うむ。なら行こう」

俺達は教室を出て今度はカズラさんの教室に向かうと。

「氷室さん？　ああー……先生に呼ばれて夏目さんと一緒にどこか行ったけど？」

まさか、カズラさんまで先生に呼ばれて席を外してるとは思わなかった。

だけど……俺の脳裏に、あることが思い浮かぶ。

「み、みんな、ちょっと職員室に行ってみよう」

「ん？　ああ、それはいいが……」

「職員室になにかあるノ？」

俺の提案に、サクヤさん、プラーミャ、中条が首を傾げる。

でも……もしアレの件だったとしたら、ちょっとメンドクサイことになるかもしれない。

お、お願いだから違っていてくれよー……。

◇

「失礼します」

職員室へやって来ると、サクヤさんが一切躊躇（ちゅうちょ）することなく扉を

開けた。
なるほど……サクヤさんの中で様子見って言葉は皆無なんですね？
だけど……俺の嫌な予感ってヤツは、どうしても当たるらしい。

「ア！　ヨーヘイ！」
「ヨーヘイくん！」
「ヨーヘイさん」

とまあ、みんなが職員室の中に揃っていて、俺達を見るなり笑顔になった。
そんな中、俺はそのみんなの前にいる一人の女の子に注目して仕方がない。

「ふむふむ……あちらの御仁は誰なのじゃ？」

とまあ、『のじゃ』語を駆使するこの女の子、それこそが入学式で答辞を行ったメインキャラの一人、林ヒョウカ。
なお、『のじゃ』語を使うのは、彼女が“中原王国”のお姫様というやんごとない身分だからだ。というか入学式の答辞の時のじゃべり方はどうしたんだよ。ネコ被り過ぎだろ。

そして、主人公やメインキャラと一緒に職員室にいるってことは、林ヒョウカのイベに突入しているということ。
だとすると。

「サンドラ達がこの職員室に呼ばれたのは、その新入生の世話を頼まれたから、ってことでいいんだよな？」
「アラ……よくご存じですわネ」

このことを知っていたことが不思議だったのか、サンドラがまじまじと俺の顔を覗き込む。

ちなみに、なんで林ヒョウカの世話を生徒側で気を遣ってしなければならないのかについては、俺も知らん。ゲームの仕様としか言いようがない。

「ふむ……だが氷室くんには彼女の世話の話が来て、私に一報もないというのは解せんな」

顎に手を当て、そう呟くサクヤさん。

だけど、それについては仕方がない。

だって、俺やサクヤさん、プラーミャに中条は、いずれも主人公の敵やライバル、果ては名前しか出ていない存在なのだから。

「あはは、じゃあヨーヘイくんも、ボク達と一緒に林さんのお世話を……「イヤなのじゃ！」」

立花が俺達を引きこもうとした瞬間、林ヒョウカは明確に俺達を拒絶した。

お姫様のお世話？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

主人公に一目惚れ？（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「あはは、じゃあヨーヘイくんも、ボク達と一緒に林さんのお世話を……「イヤなのじゃ！」」

立花が俺達を引きこもうとした瞬間、林ヒョウカは明確に俺達を拒絶した。

「えっと、ど、どうしてかな……？」

「わらわは、あくまでもこのメンバーがいいのじゃ！　何より、あの男は三白眼で目つきが悪いのじゃ！」

「ええー……」

ビシッ！　と指を突き付けられ、俺は思わず声を漏らす。

いや、目つきが悪いからダメって、どんな理由だよ……。

「む……それは聞き捨てならない……「それにそこの赤髪女！　あやつも怖そうだからダメじゃ！」……こ、怖そう……私が……」

おおう……思いのほか、サクヤさんが心にダメージを負ってしまった……。

「そのストーカーをしそうな男も、ましてや生意気そうなちびっ子のくせに胸だけは無駄に育ってるあやつも、まとめてイヤなのじゃ！」

「ナニヨ！　私（ヤー）だってアナタみたいな中途半端な『のじゃ』属性、お呼びじゃないのヨ！」

「お、落ち着けプラーミャ！？」

今にもつかみ掛かりそうな勢いのプラーミャを、俺とサンドラが必死でなだめる。

チクショウ……そういや『攻略サイト』でも、林ヒョウカは男兄弟しかいない中、一人だけ女の子だったから国王陛下に溺愛されて、超ワガママな設定なのを忘れてた……。

オマケに。

「ヨーヘイくん達にそんなこと言っちゃダメだよ？　ボクの大切な友達なんだから」

「仕方ないのじゃ……アオイに感謝するのじゃな」

……主人公のアオイに対してはメッチャ言うことを聞くし。

まあこれは、ひとえに林ヒョウカが主人公……というかアオイの奴に一目惚れしたからなんだけど。

「とにかく！　わらわにこやつ等の供は要らぬ！　どこへなりと行くがよい！」

もう用はないとばかりに、林ヒョウカが職員室の扉を指差した。

いや、そんなこと言われてもなあ……。

「ゴ、ゴメンねヨーヘイくん……」

「きょ、今日のところはヨーヘイ達は先に帰っていてくださいまシ……」

「……後ほどメッセージを送ります」

とまあ、林ヒョウカ以外のみんなが申し訳なさそうにそう言うので、俺達は渋々職員室を出ることにした。

「ふむ……どういうことか、お父……学園長に聞いてみる」

そう言うと、サクヤさんはスマホを取り出して電話を掛けた。

「もしもし、お父様ですか？　はい……実は新入生の林ヒョウカのことでお話が……はい……はい……ええ！？　で、ですが、それでは学園の秩序が……は、はい……」

うん、どうやらあまり思わしくない答えが返ってきたみたいだな……。

「ふう……」

「どうでした……？」

通話を切って一息吐いた先輩に、俺はおずおずと尋ねる。

「うむ……今回の件については、東方国政府だけでなく中原王国からも国賓として扱うようにとの通達があったとのことだ。なので、この学園でも彼女の世話をする生徒をピックアップしたらしいのだが……」

「それが、サンドラやアオイ達だった、ってことですか？」

「ああ……」

ふむ……やっぱりこれは、林ヒョウカのイベに突入していることは間違いなさそうだ。

何より、このイベの特徴として主人公とその仲間が林キョウカに指定されて面倒を見る羽目になるところから始まる。

とはいえ。

「ウーン……その前にアオイに一目惚れするきっかけとなるフラグ、絶対に立ってないと思うんだけどなあ……」

そう……この林キョウカのイベを始めるためには、一年生の三学期の時に、留学に当たってこの学園に視察に来ていた林キョウカと主人公……つまりアオイが接触していないといけない。

そして、そのイベントが起こる日が三月三日の午後。

あいにく、その日は俺達全員で“バベル”領域（エリア）の攻略をしていて、放課後になるなり真っ直ぐに領域（エリア）に向かっていた。

日中も、アオイは一度たりとも俺の傍から離れたことがなかったし、学園の中庭での偶然の出逢いは起こっていないはずだ。

「……ますます分からん」

ひょっとしたら短い休み時間の間にフラグが立ったのかもしれないし、俺も絶対にそうだと言い切れないんだけど……どうにも納得ができない。

「モウ！　こんなところにいてたら気分が悪いワ！　サッサとルフランにでも行くわヨ！」

あの林ヒョウカの態度が気に入らないプラーミャが、ぷりぷりと怒りながら俺の腕を引っ張った。

「うむ……ここで考えていても仕方がない。それに、さすがにお腹も空いてきたからな」

「ですねー……」

結局、林ヒョウカの件については後からサンドラ達に話を聞くことにし、俺達はルフランへと向かった。

主人公に一目惚れ？（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日、明後日はお休みをいただき、次回は水曜の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

限定イベント（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

限定イベント

「ふふ……やはりルフランのランチは格別だな」

学園を出てルフランに来た俺達は、早速ランチプレートを頼んで舌鼓を売っている。

特にサクヤさんに至っては、今日の日替わりプレートがスペアリブとあってご満悦の様子。何よりである。

「それにしてモ、あの一年生本当にムカツクわネ」

未だに怒りが冷めやらないプラーミャは、怒りに任せてスペアリブをナイフで骨ごと小間切れにしていた。食べ物は大事にしろよな。

「モグ……だが、さすがにあれは少々やり過ぎではないのか？　たとえ中原王国の姫君とはいえ、平等をうたうアレイスター学園としてこれを許すのはどうなのだ？」

パンをかじりながら、至極もっともなことを言うのは中条。もしこの場に『ガイスト×レブナント』のユーザーがいたら、そのあまりのギャップに卒倒するに違いないだろうな。

というか、俺も既に『攻略サイト』が眉唾なんじゃないかと思えなくもないし。

『はう！　うまうまなのです！　やはりアイスはルフランがナンバーワンなのです！』

ハア……［シン］は悩みがなさそうでいいよなあ……。

まあ、戦略パートは俺で戦闘パートは精霊【ガイスト】が担うんだから当たり前なんだけど。

「とにかく、この件については私からもう一度お父……学園長にかけ合おう。それとプラーミャは家でサンドラに彼女の様子などを詳しく聞いておいてくれ」

「ハア……メンドクサイわネ……」

「ふふ、そう言うな。一番大変なのはサンドラ達なのだぞ？」

溜息を吐いて露骨に嫌な顔をしたプラーミャに、先輩は苦笑する。

「クク……それで望月ヨーヘイ、これからどうする？　例の“ぱらいそ”領域（エリア）のその先でも目指してみるか？」

くつくつと笑いながら中条が尋ねた。

まあ、俺達の精霊（ガイスト）のレベルも全員が九十五に到達しており、もうすぐカンストしそうになっているし、何より“ぱらいそ”領域（エリア）の第三階層での推奨レベルは九十。もう俺達の実力なら攻略可能だ。

「それもいいが、実は他に行きたい領域（エリア）があるんだ」

そう答えると、三人が興味深そうに俺を見つめた。

「それで……その領域（エリア）とは？」

「はい……それは、“梁山泊（りょうざんぱく）”領域（エリア）と呼ばれるところです」

「「「“梁山泊”領域（エリア）！？」」」

驚きの声を上げる三人に、俺はゆっくりと頷く。

「た、確かに梁山泊は、［シン］……いや、［神行太保］のルーツ

ともなっている舞台ではあるが……」
「ええ……俺は、学園の図書室で偶然にもその領域（エリア）について発見することができました」
「じゃ、じゃア、その“梁山泊”領域（エリア）というのは、学園の中にあるのネ？」
「ああ」

そう……“梁山泊”領域（エリア）こそ、［シン］のために用意された場所。
あの『攻略サイト』によれば、当初はイベント会場での特典コードの配布とされていたのだが、他の精霊（ガイスト）には様々なイベントがあるのに対し、［神行太保］にはなかったからということで、後日アップデートされたとのことだ。

そして、“梁山泊”領域（エリア）を踏破したら、［シン］は最強のスキルを手に入れることができるんだ。

「……“梁山泊”領域（エリア）の攻略は、ハッキリ言ってしまえば俺と［シン］のためだけの領域（エリア）だから、みんなにとって恩恵は精々そこそこのアイテムを入手できるくらいだ。だから、みんながその領域（エリア）に行く必要はないと思ってる」

元々、“梁山泊”領域（エリア）については俺と［シン］だけで攻略するつもりをしていた。
なんのメリットもないのにみんなをつき合わせるのは申し訳ないし、な。

なので、俺はこの［シン］の限定イベをソロで攻略できるように、レベルを九十以上まであらかじめ上げておいたんだ。
これなら、たとえ俺達だけだって攻略は……「ふむ、面白い」……って？

「サ、サクヤさん？」
「ふふ……そんな領域（エリア）があるのなら、是非行ってみたいな。それに、君と［シン］が更なる強さを手に入れる瞬間にも立ち会いたい」
「ハア……ま、今度『機動魔法少女』のコラボカフェに付き合ってよネ」
「クク……我が友は、更なる高みを目指すか。面白い！」

三人のその言葉に、優しさに、俺の胸がかあ、と熱くなる。

「はは……本当に、みんなときたら……！」
「ふふ、何を言う。君はそれ以上に私達に与えてくれたのだ。当然だとも」
「べ、別に、私（ヤー）はそんなことないけド……」
「クク……望月ヨーヘイは自分を過小評価するところが欠点だな」

俺を優しく見つめながら、それぞれ違った反応を見せる三人。

『はう……やっぱりマスターは［シン］のマスターなのです。それこそ、どんな主人公よりも主人公してるのです』
「［シン］……」

にぱー、と笑う［シン］の頭を優しく撫でる。

「はは……よっし！」

俺は気合いを入れるため、両頬をパシン、と叩いた。

「だったら早く昼食を済ませて、“梁山泊”領域（エリア）に行こう！」
「ふふ、ああ！」

「マ、仕方ないわネ」
「クク……！」
『はうはうはう！　［シン］最強伝説の一ページが、また塗り替えられるのです！』
そうして俺達は食事を済ませ、また学園へと向かった。

限定イベント（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

次回は明日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

梁山泊領域（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「それで……その“梁山泊”領域（エリア）というのは、学園のどこにあるのだ？」

学園に着くなり、サクヤさんが尋ねる。

「はは……実は……」

そう言うと、俺は目の前にある玄関前に設置されている噴水を指差した。

「エ？　ひょっとしてこの噴水ガ？」

「ああ、まあ見てくれ。［シン］」

俺は［シン］に噴水の水に触れるように指示をする。

『はう？　これでいいのですか？』

「はは、［シン］見てみろ」

『っ！？』

すると、透明だった噴水の水の色が、みるみるうちにマーブル模様に変化した。

「さあ、行きましょう」

「え！？　い、行くってどこに！？」

「ここですよ」

俺は［シン］の手を取り、そのまま噴水の中へとダイブした。

『はうはうはう！？　こ、ここはどこなのですか！？』

突然変わった景色に、［シン］が慌てた声を出す。

だけど、それもそうだろう。今まで学園の玄関前にいたはずなのに、目の前には巨大な池のほとりと、そびえ立つ山が現れたんだから。

「ヨーヘイくん！」

「サクヤさん、みんな」

俺達の後を追って噴水に飛び込んだサクヤさん達とも合流し、目の前の池のほとりを眺める。

「ヨーヘイ、ここガ……？」

「ああ、“梁山泊（エリア）”領域だ」

プラーミャの問いかけに、俺はそう告げて頷いた」

「クク……まるで水墨画の世界にでも迷い込んだかのようだな。それで、肝心の領域（エリア）の奥へはどうやって向かうのだ？」

「それは、あれだよ」

俺の指差した池の岸に桟橋があり、そこに一艘（そう）の船が停泊していた。

「ふむ……あの船に乗って奥へと進むのか」

「はい……ただ、一つだけ問題が」

「問題？」

そう告げると、先輩が訝し気な表情を浮かべた。

「ええ……この“梁山泊”領域（エリア）では、モブの幽鬼（レブナント）に関しては船上で戦うことになるんです」

この領域（エリア）の厄介なところは、足場が悪く、かつ狭い船の上で幽鬼（レブナント）と戦わなければならない。

とはいえ、中ボスである百七の幽鬼（レブナント）に関しては、ちゃんと地に足をつけて戦えるんだけど。

「［シン］は【神行法】があるので足場の悪さをものともしませんが、サクヤさん達は苦労するかもしれません」

「だろうな。だが」

そう言うと、サクヤさんがふ、と表情を緩めた。

「別に一歩も動かずとも、向こうから襲い掛かってくるのであれば、特に困ったりはしない」

「はは、そうかもですね」

サクヤさんの答えに、俺はクスリ、と笑ってしまった。

確かにサクヤさんの言う通り、この領域（エリア）に登場する幽鬼（レブナント）のレベルは六十だし、なにより［関聖帝君］はあの準ラスボスとして登場する時と比べてそのレベルは十五以上も開きがある。

要は、今のサクヤさんは一人で真のラスボスと対峙することができるほどの強さを誇っているんだ。所詮ここの幽鬼（レブナント）じゃ相手にならない。

「フフ……私（ヤー）なら、【ブラヴァー】でまとめて燃やし尽くしてあげるけド」
「クク……まあ我も、遠距離攻撃は得意だしな」
ははは……本当に、俺の仲間はみんな頼もしいな。
『はう！　［シン］も負けていられないのです！』
「ああ、そうだな」
そして俺達は桟橋へと向かい、船に乗り込んだ。
◇
「むむ……なかなか漕（こ）ぐのが大変だな……」
船に備え付けられているオールを漕ぎながら、先輩が顔をしかめる。
一応、十人以上も乗れる船なんだけど、漕ぎ手が四人しかいないからなかなか大変だ。
「ハア……あの一年生、恨むわヨ」
「クク……我はこうやって船に乗ったのは初めてなのだが、意外と楽しいものだな」
疲れてきたのか、プラーミャがゲッソリとした表情を浮かべているのに対し、中条は嬉々としてオールを漕いでいる。
その時。
「む！　みんな、来たぞ！」

水の中から、まるで待ち構えていたかのように幽鬼（レブナント）、“水虎（すいこ）”が四体現れた。

「［シン］！　また水の中に潜っちまう前に、コイツ等を全員倒せ！」

『ハイなのです！　【神行法・跳】！』

船の上から一気に跳躍すると、［シン］は水虎の頭にある皿へ素早く呪符を貼り付けた。

『【爆】』

『『『ギイッッッ！？』』』

一斉に水虎の頭を爆破し、それと共に皿が粉々に破壊された。というか、水虎……河童って、こんな鳴き声するのな。

「トドメヨ！　【ブラヴァー】！」

「クク……【ツァーンラート】」

炎をまとった巨大なハルバードと金属の無数の歯車が、水上でもんどり打つ水虎に間髪入れずに襲い掛かった。

「フン！　他愛ないわネ！」

腰に手を当てながらサンドラが鼻を鳴らしたタイミングで、水虎は幽子とマテリアルに変わった……けど。

「あーあ……池の上だから、マテリアルが全部池の底に沈んじまったなあ……」

『はうううう……［シン］のアイス代が……』

一応、マテリアルは金になるから、できれば回収したかったけど……仕方ないかあ……。

「ふふ、マテリアルなら毎日“ぱらいそ”領域（エリア）で入手しているのだから、いいじゃないか」

「ですよねー……」

苦笑しながら慰めるサクヤさんに、俺は肩を落としながら頷いた。

すると。

「ア！　アレ！」

プラーミャが指差したその先には、『第一〇八門』と書かれた看板が掲げられた赤い鳥居と小さな島が現れた。

梁山泊領域（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日はお休みし、次回は明後日土曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

地煞星①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

地煞星①

「ア！　アレ！」

プラーミャが指差したその先には、『第一〇八門』と書かれた看板が掲げられた赤い鳥居と小さな島が現れた。

「あれか……」

それを見て、俺はポツリ、と呟く。

あれは、この“梁山泊”領域（エリア）における長く厳しい道のりの始まりを告げる門。

「［シン］」

『ハイなのです！』

その名を告げると、［シン］はビシッ！　と敬礼ポーズをする。

「あの門から先、［シン］はつらい戦いを強いられると思う」

『……』

「だけど……これだけは忘れないでくれ。お前の背中には、この俺がいる。それだけじゃない。サクヤさんやプラーミャ、中条が……そして、今この場にはいないが、サンドラ、カズラさん、アオイ、土御門さん、加隈、悠木もだ。だから」

俺はジッと見つめる［シン］のオニキスの瞳を見ると。

「だから、百七の試練、やり遂げてみせろ！」

『了解なのです！』

はは……これから何があるかも分からないのに、お前は俺のことを全面的に信頼してくれるんだな……。

まあ、だからこそ俺の相棒なんだけど、な。

「よっし！」

島の桟橋（さんばし）に船をつけ、俺は両頬をパシン、と叩いて気合いを入れる。

「さあ……行くぞ！」

『ハイ！』

赤い鳥居……『第一〇八門』をくぐり、中に入ると。

『……』

石造りの舞台の上に坐（ざ）する、馬の頭をした長身で線の細い幽鬼（レブナント）……いや、精霊（ガイスト）と言ったほうが正しいか。

あれこそが、この『第一〇八門』を守護する［金毛犬（きんもうけん）］。

［シン］が、これから戦う相手だ。

「［シン］。ここから先、お前は俺達の力を借りることなく、お前自身の力で各門の守護者と戦わないといけない」

『……』

「だが……その全てを倒し、この領域（エリア）の守護神を倒した暁には、お前は誰にも負けない新たな力を手に入れることができる」

『はう……なら、［シン］のすべきことはたった一つなのです』

俺の言葉に頷くと、［シン］は［金毛犬］をキッ、と見据えた。

『［シン］は全ての守護者と守護神をやっつけて、さらに強くなるのです！　そもそも、マスターが［シン］の背中を押してくれる限り、［シン］は絶対に負けないのです！』

「ああ！　頑張れ！」

『ハイなのです！』

俺は［シン］の小さな背中をバシン、と叩くと、そのままの勢いで［金毛犬］に突進した。

「ヨーヘイくん……今の話は一体……？」

「……この“梁山泊”領域（エリア）は、［シン］にとっていわばルーツとも呼べる場所なんです……」

おずおずと尋ねるサクヤさんに、俺は答える。

そう……『攻略サイト』にあった［シン］の設定では、元々［シン］……［神行太保］は、この“梁山泊”領域（エリア）の『第二十門』を守護する精霊（ガイスト）だった。

それを東都ゲームショウのイベント用として特別限定配布されたんだからな。

「今［シン］が戦っている精霊（ガイスト）も元は［シン］の仲間で、こうやって［シン］が強くなるために一肌脱いでくれているってわけです」

「そうか……ここが、［シン］にとってそんな大切な場所だったなんてな……」

そう言うと、サクヤさんは視線を［シン］と［金毛犬］へと移した。

すると。

『それー！　なのです！』
『っ！？』

［金毛犬］の背後を突き、呪符を展開すると。

『【裂】』
『うおおおおおおおおおッッッ！？』

無数の裂傷を負った［金毛犬］が、舞台の上でもんどり打って倒れた。

『はう！　［シン］の勝ちなのです！』

両の拳を高々と突き上げ、勝ち名乗りを上げる［シン］。

『ふふ……［神行太保］の心の強さ、しかと見た。この［金毛犬］、お主の力となろう』
『はうはうはう！？』

［金毛犬］は『狗』と記された宝珠に変化し、［シン］の身体の中へと吸い込まれていった。

『こ、これは何なのです……？』
「それは、［金毛犬］が［シン］のことを認めたっていう証だよ」
『そ、そうなのですね……』

［シン］は宝珠が吸い込まれたみぞおちの辺りをそっと抑える。

「さあ、残りは百六！　サクサク行くぞ！」
『はう！　了解なのです！』

俺達は船へと戻り、次の島……『第一〇七門』を目指す……んだけど。

「ヨ、ヨーヘイ……まさかとは思うけド、あと百六回もこれをするなんてこト……ないわよネ？」
「いや、今プラーミャが言った通りだぞ？」
「ッ！？　ソ、ソウ……デ、デモ、今日は途中で切り上げるのよネ？」

俺の言葉を聞いて急に焦った表情を浮かべるプラーミャ。
ひょっとして、何か用事でもあったりするんだろうか……。

「すまんプラーミャ……この領域（エリア）は、ラスボスの守護神を倒すまで出られない……」
「エエエエエエエ！？　そ、そんナ……」

プラーミャは船底に両手を突き、ガックリとうなだれる。

「ヤ、私（ヤー）の『空戦強襲型機動魔法少女サイトウカナ』ガ……」

なるほど……確か今日は、夕方から新シリーズに向けての特番があるんだったな。

「プラーミャ……心配するな、その特番ならバッチリ予約してある」
「ッ！　ヨーヘイ！」

絶望に満ちていた琥珀色の瞳に希望の光を湛(たた)えて見つめるプラーミャに、俺は力強く頷いた。

地煞星①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、本日から新作のハイファンタジーの連載を開始しました！

「裏切者の英雄譚～仲間に裏切られ、“裏切者”扱いされた斥候は、地の底に封印されし邪神様を餌付けした結果、最強の力を与えられました～」

絶対に面白いので、ぜひぜひお読みくださいませ！

広告と評価の下にあるバナーから行けます！　どうぞよろしくお願いします！

明日はお休みし、次回は明後日月曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

地煞星②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『どうした？　そんなものか？』
『ぐぎぎ……！』

俺達は“梁山泊”領域（エリア）の『第九十八門』に来ると、ここを守護する精霊（ガイスト）、［没面目（ぼつめんもく）］と［シン］が相撲を取っている……んだけど。

「あー……やっぱり体格差がなあ……」
「うむ……」

そう……百三十センチほどしかない［シン］と、ニメートル近いサイズの［没面目］とじゃ、さすがに話にならない。
だけど、『攻略サイト』では普通にバトルするだけのはずなのに、何だって相撲なんかする羽目に……。

「［シン］！　そんなデブに負けたら承知しないわヨ！」
『……それがしは断じてデブなどではない』

プラーミャのヤジに、［没面目］が低い声でクレームを入れてきた。意外と気にしてるのな。

『はう！　押してダメなら引いてみるのです！』
『む』

腰に巻いている太いベルトのようなものに手をかけ、［シン］が下手投げの要領で体勢を崩しにかかる。

だが。

『っ！　ビ、ビクともしないのです！』

『ふふ……相撲に関しては、“梁山泊”一のそれがしぞ！』

『はう！？』

［没面目］は下からアッパーカットの要領で［シン］の顎目がけて張り手を見舞うと、ただでさえ体重の軽い［シン］は空中へ高々と吹き飛ばされた。

『クッ……押しても引いてもダメなら……っ！』

［シン］は【神行法・跳】で空中を軽やかに駆け、［没面目］の背後を取った。

『それー！　なのです！』

そのまま土俵の外へと押し出そうとするが……。

『フン……残念だが遊びはここまで。終わりだ』

『はうううううう！？』

［没面目］はむんず、と［シン］の襟首をつかみ、そのまま舞台へと叩きつけ……っ！？

『はう！　この時を待ってたのです！　【神行法・転】！』

『っ！？』

［シン］が舞台にその身体が触れる直前、［没面目］と身体が入れ替わる。

そして。

『はうううううううううッッッ！』

『うおおおおおおおおおッッッ！？』

［没面目］は自分が仕掛けた勢いそのまま、舞台へと転がった。

『はう！　［シン］の勝利なので……「はは！　やったな！」……マスター！』

［シン］の勝利を確信した瞬間、気づけば俺は舞台に上がって駆け寄り、その小さくも誇らしい身体を高々と持ち上げた。

『はう！　やったのです！』

「ああ……本当に、お前はすごい奴だよ」

『あ……えへへー……』

俺は［シン］を抱きしめて頭を撫でてやると、［シン］は嬉しそうに目を細めた。

『ふふ……体格差をものともせず、それがしの力を利用してこの巨体を舞台へと叩きつけたその能力、機転……見事！』

特に怪我をした様子もなく、［没面目］はニコリ、と微笑みながら立ち上がった。

その様子からも、どうやら最初から手加減をしていたみたいだな……。

『この［没面目］、お主に力を貸そう』

［没面目］は『悪』と記された宝珠に変化すると、［シン］の身体の中へ吸い込まれた。

『はう……これで、十一個目なのです』

「そうだな……これで残りは九十六。まだまだ先は長いぞ？」

『全然大丈夫なのです！　［シン］は一〇七全部の精霊（ガイスト）を倒して、絶対に強くなるのです！　それに……』

「ん？　それに？」

『はう！　マスターが［シン］を信じて見守ってくれているのです！　それだけで、［シン］はいつだって強くなれるのです』

「［シン］……」

ははは……全く、俺の相棒はどこまでも最高の相棒だよ。

にぱー、と笑う［シン］を見つめながら、俺は口元を緩めた。

◇

「クク……急に雲行きが怪しくなってきたな」

［毛頭星］を倒し、『第六十一門』へと向かう途中、中条の言葉に俺は空を見上げた。

「あー……まあ、次の相手がアレだからなあ……」

「「「アレ……？」」」

おっと、ついつい余計なことを呟いちまった。まあ、今さらか。

「ああ。この『第六十一門』を守護する政令（ガイスト）は［混世魔王（こんせいまおう）］といっ

て、［シン］と同じように【方術】を使う」
「「「っ！？」」」

そう告げると、三人が息を飲んだ。

「で、では、まさに［シン］対［シン］のようなものか？」
「はは、まさか。【方術】とは言っても、［シン］が呪符を使うのに対して、［混世魔王］は剣を媒介に使うんです」
「「「剣を！？　どうやって！？」」」

三人が驚きの声を上げるが、俺が言えるのはここまで。

「あとは……［シン］、お前自身が確かめるんだ。これは、［シン］のための戦いなんだから」
『はう！　分かったのです！』

そう言って［シン］を見ると、［シン］はビシッ、と敬礼ポーズをした。

一応、『攻略サイト』によれば［混世魔王］は［シン］の兄妹弟子という設定だからな。マスターである俺が［シン］に加担したと知れば、ひょっとしたら力を貸してくれなくなる可能性もあるし。

「着いたわヨ」

島の桟橋に船をつけ、俺達は『第六十一門』の看板が掲げられた鳥居をくぐった。

『ははは……待っていたぞ！　“妹”よ！』
『はう！？』

舞台の中央で腕組みをしながら豪快に笑う、［混世魔王］の姿があった。

地煞星②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、下記の新作ハイファンタジーの絶賛連載中です！

「裏切者の英雄譚～仲間に裏切られ、“裏切者”扱いされた斥候は、地の底に封印されし邪神様を餌付けした結果、最強の力を与えられました～」

絶対に面白いので、ぜひぜひお読みくださいませ！

広告と評価の下にあるバナーから行けます！　どうぞよろしくお願いします！

明日はお休みし、次回は明後日水曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

地煞星③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『ははは……待っていたぞ！　“妹”よ！』
『はう！？』

舞台の中央で腕組みをしながら豪快に笑う、［混世魔王］の姿があった。

『ええとー……［シン］、こんな精霊（ガイスト）知らないのです。なのに突然“妹”だなんて言われても困惑するのです』

そう言うと、［シン］は目の前の［混世魔王］を見ながら眉根を寄せた。

『ははは、無理もあるまい。お主は我等兄姉（きょうだい）と共にこの“梁山泊”領域（エリア）を守護する予定であったが、突然、元あった精霊（ガイスト）と同化してしまったのだからな』
『「「「「同化！？」」」」』

［混世魔王］から放たれた言葉に、俺達は全員驚きの声を上げた。

「も、望月ヨーヘイ……このことは、アレには……」
「い、いや……そんなことは一切載ってない……」

あの『攻略サイト』の存在を知っている中条に尋ねられるが、俺はかぶりを振った。

そもそも、［神行太保］はゲームショウでのコード限定配布でしかなくて、実際にどんな経緯でクラスチェンジするのかなんて、そ

んなものは記されていない。

だけど……アイツは確かに言った。

［シン］が［混世魔王］と兄妹で、本来守護者の一人であった［シン］が［ゴブ美］と同化したのだと。

『はうはうはう！　違うのです！　違うのです！　［シン］はずっと大大大好きなマスターの精霊（ガイスト）で、オマエの言うように精霊（ガイスト）同士がくっついたりしてないのです！』

『ははは……混乱するのも、記憶がないのだから無理はない。だが、それも全ての試練を終えれば分かるぞ？』

顔を真っ赤にして否定する［シン］に、［混世魔王］は苦笑しながら答える。

だけど……その［シン］を見つめる瞳は柔らかかった。

『ははは！　では始めよう！　【風神】！　【雷神】！』

［混世魔王］はそう宣言し、剣を高々と掲げる。

すると空に暗雲が立ち込め、中から二体の龍が現れた。

『この二体の龍こそ、我が最大の【方術】。［神行太保］よ、見事倒してみせよ！』

『はう！　舐めないでほしいのです！　【神行法・跳】！』

［シン］は空を駆け上がり、二体の龍と対峙した。

『それー！　なのです！』

大きく口を開ける二体の龍に対し、［シン］は一気に距離を詰め

てその長い胴体に大量の呪符を貼り付けた。

『ほう……［神行太保］のあの速さ……余程鍛えたのだろうな……』

どうやら［混世魔王］にとっても［シン］のそのスピードは予想外だったらしく、その目を丸くした。

『くらえ！　【爆】！　【凍】！』

『『ッ！？』』

大量の呪符が一斉に発動し、二体の龍は長い身体をくねらせながら悲鳴を上げ……っ！？

「［シン］！」

『はう！？』

二体の龍は、一瞬の隙を突いて［シン］に身体を巻きつけ、締め上げる。

『ぐぎぎ……！』

『ははは、どうする？　こうなっては、その龍は［神行太保］が潰れてしまうまで絶対に離れぬぞ？』

余裕の表情でそう語る［混世魔王］だが……腕組みしている手で二の腕を思いっ切り握りしめているモンだから、道袍（どうほう）の袖が破れてるぞ。

全く……どうやらこの［混世魔王］、シスコンのようだな。

『舐めるな！　なのです！　【神行法・瞬】！』

［シン］の身体が一瞬にして消え、龍の額の上でしゃがみ込むと。

『【爆】！　【凍】！　【爆】！　【凍】！　【爆】！　【凍】！　【爆】！』

『グオオオオオオッッッ！？』

爆炎と氷結が交互に行われ、龍は悲鳴を上げた。

あれは……はは、アオイの［ジークフリート］と戦った時のヤツか。

『まず一匹！　【裂】！』

熱による膨張と凍結による収縮を繰り返した龍の額は、最後の呪符によって真っ二つに裂け、大量の幽子をまき散らしながら消滅した。

『グオオオオオオッッッ！』

残り一体が巨大な口を開き、［シン］に襲い掛かる。

『はう！　口の中がガラ空きなのです！　【流】！』

［シン］は龍の口の中へあえて突っ込むと、呪符によって出現した大量の水流が、龍の中から吐き出された。

『お口チャック！　なのです！　【爆】！　【爆】』

『～～～～～～～～～～！？』

爆破の威力によって強制的に口を閉じさせられ、逃げ場のなくなった水流は一気に龍の体内で溢れ続け、そして。

――パアンッッッ！

激しい音と共に、龍の身体が破裂してしまった。

『はう！　次は……『うむ！　見事！　さすがは我が“妹”だ！』……はうはうはう！？』

［シン］が［混世魔王］の前に立った瞬間、いつの間にか背後にいた［混世魔王］に思い切り頭を撫でられた。

だ、だが……ひょっとして［混世魔王］が使ったのは、【神行法】、なのか……？

『ははは……良い主人に巡り逢え、大きく成長したようだな……』

『はう……マスターが最高のマスターなのも、［シン］が強くなったのも事実なのですが……』

『“妹”の成長が見れて満足だ。この［混世魔王］、喜んで［神行太保］の力となろうぞ』

そう言うと、［混世魔王］は『然』と記された宝珠に変化し、［シン］の身体へ……『ああ、そうそう』……って、まだ喋れるのかよ！？

『二人の姉には気をつけるのだぞ？　あの二人、我と違って［神行太保］への執着がすごいからな』

『はうはうはう！？』

『ははは、ではな』

余計な一言を告げ、［混世魔王］は今度こそ［シン］の身体へと入っていった。

だけど、お前も充分シスコンだと思うけど、さらにシスコンな姉が二人もいるのかよ……。

『はうううう……そんな余計な情報、いらなかったのです……』

「だよなあ……」

俺はガックリ、と肩を落とす［シン］の背中を叩いて慰めた。

◇

『はうはうはう!?』

『フハハハハハ！　どうしたどうした！　このままでは拙者の一撃を食らって木端微塵になってしまうぞ！』

“梁山泊”領域（エリア）『第五十一門』。

現在、［シン］はここの守護者である［轟天雷（ごうてんらい）］の四門の大砲から放たれる玉をを必死に躱（かわ）している。

とりあえず、十分間その砲撃を躱し続ければいいんだけど……。

『はうはうはう!?　なんで　［シン］と同じ速さなのですか!?　そんなこと、あり得るのですか!?』

『フハハハハハハ！　それはコッチの台詞（セリフ）だ！　よもや大砲の玉と同じ速さで動ける精霊（ガイスト）など、聞いたことがない！』

『はうううううううう!』

まあ、こんな感じで玉を躱し続け、十分が経過した。

『フハハハハハハ！　よくぞ全ての砲撃を躱し切った！』

『ゼエ……ゼエ……』

『この［轟天雷］、喜んでお主の力となろう！　そして、今度こそお主よりも速い大砲を造り出してみせようぞ！』
『はう！？』

肩で息をしていた［シン］だったが、［轟天雷］の意味の分からない言葉に目を丸くする。
いや、［シン］の中に宝珠の状態で入っちまうのにどうやって新しい大砲なんて開発するんだよ……。

そうこうしているうちに、［轟天雷］は『軸』と記された宝珠に変化し、［シン］の身体へと入っていった。

地煞星③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日はお休みし、次回は明後日金曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

地煞星④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『はう……』

“梁山泊”領域（エリア）の『第三十八門』を突破し、次を目指している中、いつも元気な［シン］が珍しく溜息を吐いた。

まあ……言ってしまえばここまで、決して楽な戦いじゃなかったからなあ……。

特に『第三十八門』と『第三十九門』は本当に強敵だった。下手をしたら、サンドラやプラーミャ、カズラさんに匹敵するかもしれない。

「ヨーヘイくん……ここで出現する幽鬼（レブナント）……いや、精霊（ガイスト）か。見ている限り、明らかに“ぱらいそ”領域（エリア）で出現する幽鬼（レブナント）に匹敵すると思うんだが……」

「ですね……」

サクヤさんの問いかけに、俺は頷く。まあ、これに関しては仕様だからとしか言いようがない。

というのも、幽鬼（レブナント）の水虎に関してはともかく、一〇七の精霊（ガイスト）については、［シン］のレベルに応じてそのレベルが同様に上がっていくのだから。

これは、この“梁山泊”領域（エリア）の精霊（ガイスト）達が、［シン］と一緒に戦うのだから仕方なくもあるんだけど。

「［シン］……次の『第三十七門』を超えれば、いよいよ次のステージに進む。だから……頑張れ！」

そう言って［シン］を励ますが……ハア、俺は［シン］のマスターとして、無力だな……。

だけど。

『っ！　はうはうはう！　マスターの言葉で［シン］は元気百倍になったのです！　残りも全部やっつけて、［シン］の最強伝説の幕を開けるのです！』

はは……俺なんかに気を遣って無理しやがって……。

「よし！　この“梁山泊　”領域（エリア）を踏破したあかつきには、［シン］に好きなだけアイスを食わせてやるぞ！　それこそ、クリスマスの時のアイスケーキ以上のものだってな！」

『はう！　すす、すごいのです！　大盤振る舞いなのです！』

それを聞いた途端、オニキスの瞳をキラキラと輝かせて［シン］は水辺の上を縦横無尽に飛び回った。はは、現金な奴。

そして。

「ククク……見えたようだぞ」

中条の言葉を受け、俺達は船の進む先へと視線を向けると、『第三十七門』の看板を掲げた赤い鳥居が姿を現わした。

「さあ、行こうか」

『はう！　なのです！』

桟橋に船をつけ、鳥居をくぐって中に入る。

『……待ってた』

舞台の上にたたずむ、道袍（どうほう）をまとった黒髪の美しい女性の精霊（ガイスト）。

あれこそが、“梁山泊”領域（エリア）『第三十七門』を守護する精霊（ガイスト）であり、地煞星（ちさつせい）七十二員の頭領。

その名は、［神機軍師］。

そして、［シン］や［混世魔王］と同じ【方術】の使い手で、【八陣】のスキルを駆使する。

『はう！　頑張るのです！　やっつけてやるのです！』

［シン］は［神機軍師］を見やりながらフンス、と気合いを入れると。

『……悲しい』

『はう！？』

よよよ、と泣く仕草をする［神機軍師］を見て、［シン］は面食らってしまったようだ。

『……感動の再会、期待してた……』

『はう……ひょ、ひょっとして……？』

『……私はあなたの姉、［神機軍師］』

……うん、そうだろうとは思ってた。

［混世魔王］を除くと、【方術】使いは二人しかいないし。

『……でも、これからは［神行太保］と一緒にずっといられるから、嬉しい』
『は、はう……それは、［シン］が勝った場合なの……です？』
頬を赤らめながらクスリ、と笑った［神機軍師］を見て、［シン］は顔を引きつらせながら条件確認をした。
『！　……まさか。この私が［神行太保］を傷つけるなんてあり得ない』
『だ、だったら、すぐに力を貸してくれるのですか？』
おずおずと尋ねる［シン］。
だけど、［神機軍師］は静かにかぶりを振った。
『……なので、私は他のことで試す。【長蛇】』
「っ！？」
そう告げた瞬間、突然俺の影が大蛇に変化し、全身を締め上げてきた！？
『な、何をするのです！』
『……決まってる。あなたのマスターであるこの男を殺し、［神行太保］を呪縛から解き放って私達は永遠に一緒にいる』
「貴様あああああああああああッッッ！」
「フザケルんじゃないわヨッッッ！」
［神機軍師］の言葉を聞いた瞬間、サクヤさんとプラーミャが［関聖帝君］と［スヴァローグ］を召喚して吠えた。

『……言っておくけど、私を攻撃したらそれで終わり』
「それがどうしたッッッ！　貴様はこの私の大切な人に手を出した！　タダで済むと思うなッッッ！」

サクヤさんが叫び、［関聖帝君］が青龍偃月刀（えんげつ）を構えて突進する。
それはプラーミャの［スヴァローグ］も同じで、【ブラヴァー】の体勢に入っていた。

「サクヤさん！　プラーミャ！」
「「っ！」」

二人の名を告げた瞬間、［関聖帝君］と［スヴァローグ］がピタリ、と止まった。

「二人共ゴメン……気持ちは嬉しいけど、この［神機軍師］を含め、［シン］には絶対に“梁山泊”領域（エリア）の精霊（ガイスト）が必要なんだ」

そう……［シン］がここで新たな力を得ることが、サクヤさんを救うことにつながるから。
この、クソッタレなシナリオをぶっ壊すことに必要だから。

「はは……言っとくが、俺と［シン］は魂でつながった正真正銘の相棒なんだ。オマエが何をしようが、絶対に切れないからな」
『そ、そうなのです！　［シン］のマスターは……［シン］の大切な人は、マスターだけなのです！』
『……関係ない』
「っ！？　あぐ……っ！？」

チクショウ……締め上げる力を強くしてきやがった。

『っ！　このおおおおお！　マスターを離せえええええええッッッ！』

今まで見たことのないほどの怒りの表情を見せ、［シン］は［神機軍師］に突撃した。

『……［神行太保］の愛を一身に受ける存在……ムカツク』

「あああああああああッッッ！？」

さらに締めつけが強くなり、俺の身体がミシ、ミシ、と軋み出した。

クソ……本気かよ……っ！

その時。

「クク……【カイロス】」

中条がくつくつと笑いながらそう告げた瞬間、俺の身体にまとわりついていた大蛇の影は、一瞬にして消え去った。

地煞星④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日はお休みし、次回は明後日日曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

地煞星⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「ククク……【カイロス】」

中条がくつくつと笑いながらそう告げた瞬間、俺の身体にまとわりついていた大蛇の影は、一瞬にして消え去った。

『……どういうこと？』

「ククク……貴様、何かしたのか？」

訝（いぶか）し気な表情でこちらを睨みつける［神機軍師］に対し、とぼけながら薄ら笑いを浮かべる中条。

あの［神機軍師］の影でできた大蛇は、中条の［デウス・エクス・マキナ］による【カイロス】によって一瞬で時を戻されてしまったことで消えてしまった。

全く……本当に俺の親友は、どこまでも頼もしい奴だな。

「［シン］！　コッチは心配するな！　お前は、その［神機軍師］に集中するんだ！」

『！　ハイなのです！』

俺は拳を突き出して激励すると、［シン］は安堵の表情を浮かべた後、視線を［神機軍師］へと戻して力強く頷いた。

「……後は、［シン］を見守ろう」

「マ、アナタの精霊（ガイスト）なら大丈夫かもネ」

「ク……その間、貴様はこの我が守ろう」
「サクヤさん……プラーミャ……中条……」
優しく見つめる三人に、俺の胸が熱くなる。
「……ああ！」
俺は頷き、［シン］を見つめた。
『……［神行太保］のマスター、本当に目障り』
『はう！　目障りなのはオマエなのです！　よくも［シン］のマスターにやってくれたのです！』
『……はう、［神行太保］に嫌われた……』
そう言って、シュン、と落ち込んで俯く［神機軍師］。
だけど。
『……これも全部、あの男のせい。こうなったら……絶対にコロス！　コロスコロスコロス！　【鶴翼】、【雁行（がんこう）】！』
またも［神機軍師］は巨大な鶴の影と無数の鳥……あれは、雁（がん）か！？
それらが一斉に俺目がけて襲ってきやがるだと！？
「やらせるかッッッ！　［関聖帝君］！」
『（コクリ！）』
［関聖帝君］が俺の前に立ち、その青龍偃月刀（えんげつ）を巨大な鶴の影に振り下ろした。

「ふっ！」

――斬ッッッ！

真っ二つになった巨大の鶴の影に、さらに返す刀で横薙ぎにすると、影はその姿を消した。

『フフ……燃やし尽くしてあげル！　【ブラヴァー】！』

［スヴァローグ］が投てきの体勢を取り、その巨大なハルバードに炎をまとわせる。

「アアアアアアアアアアッッッ！」

プラーミャの叫びと共にハルバードが雁の群れへと放たれ、炎が渦となって全ての影を巻き込んだ。

「フン！」

腰に手を当て、鼻を鳴らすプラーミャ。

というかサクヤさんもプラーミャも、本気（マジ）で強いなあ……当たり前だけど。

『一度ならず二度までも！　［シン］は絶対に許さないのです！　【神行法・瞬】！』

『……っ！？』

［シン］は一瞬にして［神機軍師］の背後に回ると、その背中に

大量の呪符を貼り付けた。

『【爆】！　【雷】！』

『……あああああああああああッッッ！？』

すさまじい電撃に襲われながら、［神機軍師］が吹き飛……っ！？

『い、石の人形なのです！？』

『……悲しい』

よよよ、と袖で涙を拭く真似をして、石の人形の陰から［神機軍師］が姿を現した。

『……少し、お仕置きが必要』

『っ！？』

［神機軍師］の雰囲気が変わり、［シン］は思わず飛び退いた。

『……【石兵八陣】』

『な、何なのです！？』

突然、［シン］を中心にして囲むように巨大な石兵が八方向に舞台の上に出現した。

「こ、これは……！」

その異様な光景に、俺はゴクリ、と息を飲む。

あの『攻略サイト』によれば、これこそが地煞星（ちさつせい）を束ねる［神機軍師］の最大スキル。

あの石兵の結界によって起きる五つの属性によるすさまじい攻撃

が、今まさに［シン］に襲い掛かろうとしていた。

「［シン］……！」

気づけば俺は拳を思いきり握りしめ、ただ［シン］を見守っていた。

ここを……ここを乗り越えれば、［シン］は強くなれるんだ……だから……だから……っ！

「っ！」

「ヨ、ヨーヘイくん！？」

「ヨーヘイ！？」

なのに……気づけば、俺は飛び出していた。

舞台の上で困惑している、［シン］の元へと。

『……泣いて謝ったら許してあげる。お姉ちゃんは優しいから』

『っ！？　け、【堅】！』

すぐに［シン］は呪符を展開して防御結界を張る。

そこへ、業火、激流、暴風、氷結、迅雷（じんらい）が一斉に［シン］へと襲い掛かった。

『クッ……！　ま、まだまだ……なのです……っ！？』

結界をすり抜けて、［シン］の背中へ炎が迫る。

だけど。

「ぐあああああああああッッッ！？」

『っ！？　マ、マスター！？』

は、はは……なんとか、間に合ったみたいだな……。

『ど、どうして！？　どうして来たのですか！？』

「はは……お、俺も、最後まで見届けようって思ってたのに、シ、［シン］が酷い目に遭うと思ったら、気がついたら飛び出してたよ……」

この“梁山泊”領域（エリア）では、あくまでも［シン］の試練のための領域（エリア）だから、ここだけは俺と［シン］はダメージを共有しない。

だからこそ、俺は［シン］の代わりにダメージを肩代わり、できた……わけ、で……。

『マスター……マスタアア……っ』

「そ、そんな顔するな。それより……この【石兵八陣】にも、弱点がある……」

そう言うと、俺は八体の石兵のうち、ひび割れた一体を指差した。

『あれは……』

「そう……この【石兵八陣】、一体だけが不完全なんだ……」

といっても、それはあくまでもこの試練限定で、［シン］がその力を得れば弱点はなくなるけどな……。というか、これ自体が［神機軍師］が課した試練なんだから当然だ。

『分かったのです……すぐに……すぐに終わらせるのですッッッ！

【神行法・瞬】！』

［シン］は一瞬にしてひび割れた石兵の背後につくと。

『食らえなのです！　【裂】！』

呪符によって、石兵のひび割れた部分がさらに広がり、粉々に砕けたかと思うとついさっきまでの炎や風、その他諸々が一瞬にして消え去った。

そして。

『オマエだけは……オマエだけは、絶対に許さないのですッッッ！』

「ああ……同感だな」

「燃やし尽くしてやルッッッ！」

「クク……消えろ」

いつの間にか、［シン］が呪符を貼り付け、［関聖帝君］と［スヴァローグ］が切っ先を喉笛に突きつけ、そして［デウス・エクス・マキナ］が無数の金属の歯車を［神機軍師］の目と鼻の先で静止していた。

『……ふう、これは［神行太保］だけの戦いではなかったの？』

「最初にそれを破ったのは貴様だ。なら、ここで幽子となっても文句は言えまい」

「幽子にするだけで済ますつもりもないけド」

「クク……同感だ」

『［シン］は……オマエなんかを姉だなんて認めない。オマエなんていらない。マスターを傷つけた、オマエなんて』

『……』

最後の［シン］の言葉がトドメとなったのか、［神機軍師］はその涙を零し……っ！？

『……合格』

その言葉を聞いた瞬間、俺の背中の傷が……痛みが消えた！？

「こ、これは一体……」

『……さっきの石兵八陣は、試すために私が作った幻術。［神行太保］と、その主との絆を試すための』

「絆を……試す……？」

俺の呟きに、［神機軍師］がコクリ、と頷いた。

『……私の大切な妹を、託すに足るかどうか。自分のためだけに妹を使役するクズなのか、それとも、妹のために傷つくこともいとわない高潔な主なのかを。そして、あなたになら妹を任せられる』

「……」

はは……全部、コイツの掌の上かよ……。

さすがは百七の精霊（ガイスト）の中で一、二を争う知略の持ち主。［神機軍師］の名は伊達じゃない。

『……［神行太保］、あなたは本当に良い主に巡り合えた。大切にしなさい』

『はう……ね、姉さま……』

『っ！　……ふふ、これからいつも一緒』

［神機軍師］は『魁』と記された宝珠になると、［シン］の身体の中へと入って行った。

「さあ……［シン］これで地煞星（ちさつせい）と呼ばれる七十二の精霊（ガイスト）がお前に力を貸してくれることとなった」

『はう

「あとは……残り、三十五人！」

『はう！』

俺は［シン］の手を取ると、次の天罡星（てんこうせい）『第三十六門』へ向かうため船へと戻った。

地煞星⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日はお休みし、次回は明後日火曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

天罡星①

「さあ……いよいよ、残り後半戦だ」
『はう！　かかってこいなのです！』

“梁山泊”領域（エリア）、『第三十六門』へ向けて船をこぐ中、［シン］がムン、と気合いを入れた。
地煞星（ちさつせい）七十二員を全て仲間にし、次はいよいよ天罡星（てんこうせい）の三十五人の精霊（ガイスト）と戦う。
その実力は、地煞星（ちさつせい）を超えるほどだ。気を引き締めないと、だな。

「む、見えたぞ！」

船の先に、『第三十六門』の看板を掲げた鳥居が見える。
あそこに……まず最初の精霊（ガイスト）、［浪子（ろうし）］がいる。

船を桟橋へと繋げ、俺達は鳥居をくぐって舞台へとやって来た、んだけど……。

「あれ？　誰もいない？」

なんと、本来なら舞台の上にいるはずの精霊（ガイスト）が、どこにも見当たらない。
いや、門を守護する精霊（ガイスト）がフラフラしてていいのかよ……。
すると。

『やあやあ、お客様とは珍しいですね』
『「「「「っ！？」」」」』

突然後ろから声を掛けられ、俺達は慌てて振り向くと……そこにいたのは、竹ぼうきを持った人のよさそうな青年だった。

『え、ええとー……兄さまがここの守護者、なのです？』
『はい。［浪子］と申します』

おずおずと尋ねる［シン］に、［浪子］を名乗る青年はにこやかに微笑みながらお辞儀をした。

『それで、［神行太保］はここへはどのような用事ですか？』
『はう！　そ、そのー……悪い奴をやっつけるために、兄さまの力を貸してほしいのです！』
『へえ……』

［シン］の話を聞き、［浪子］は顎をさすりながら思案をする。

そして。

『はい、いいですよ』
『ホ、ホントなのですか！？』
『ええ。元々、我々“梁山泊”の守護者は、悪漢を誅（ちゅう）するために集（つど）ったのですから』

んー……まあ、それはあくまでも物語の設定なんだけどな。
でも、どうやら話が早く済みそうで良かっ……『ただし』……って、そんな簡単にいくはずないかあ……。

『はう！　な、何かあるのですか！？』
『いえいえ、大したことじゃありません。［神行太保］に力を貸すとなると、ここを留守にしないといけませんので、まずは綺麗に掃除をしてからにしようかと』
『掃除……ですか？』
『はい。なので、［神行太保］はこの『第三十六門』全てを掃除してください』

なるほど……［浪子］が仲間になる条件は、掃除か。

「な、なあ、少しいいか？」
『？　あなたは？』
「俺は、その［シン］のマスター、“望月ヨーヘイ”だ。その［シン］がする掃除を、俺も手伝ってもいいか？」
『はう！？』

まあ、いくら小さな島だとはいえ、［シン］一人だと大変だろうし、だったら人手が多いほうが早く終わるからな。

『はは、もちろん構いませんとも』
「よし！」

［浪子］は快諾し、俺は小さくガッツポーズした。

「ふふ……ならば、私達が掃除を手伝っても構うまい？」
「エー……私（ヤー）はイヤ！」
「クク……掃除はこの我が最も得意とするところ。よかろう！　我の真の実力、見せてくれる！」

プラーミャは置いといて、サクヤさんと中条も手伝ってくれるみ

たいだ。本当に助かる。
ただし……サクヤさんに関しては戦力になるかどうか微妙だけど。

『では、よろしくお願いします』
『はう！　了解なのです！』

［シン］が［浪子］から竹ぼうきを受け取り、俺達はいざ掃除を開始した。

◇

『はうはうはうはう！』
「コラコラ！　ちゃんと丁寧にしないと汚れが残ったままになるだろ！」

鳥居の上を雑巾（ぞうきん）がけする［シン］に注意する。
確かに早く終わるに越したことはないけど、だからといって手を抜いて［浪子］が認めなかったら本末転倒だからな。

「ヨ、ヨーヘイ……」

手伝いもせずぶらぶらしていたプラーミャ声を掛けてきた。

「？　どうしたプラーミャ」
「ソ、ソノ……先輩に掃除を任せて、本当によかったノ？」
「あー……じゃあお前、サクヤさんに『手伝わないでください』って言えるか？」

そう言って、俺は張り切って掃除という名の破壊を繰り返すサクヤさんを指差した。

「……無理ネ」
「だろ？　だから、尻拭いは中条に任せよう」
そう……中条は、この掃除に関して獅子奮迅の活躍を見せていた。
隅から隅まで丁寧に掃除をし、サクヤさんが何かを破壊するたびに【カイロス】で元通りにしていく。
なにより、それを嬉々としてこなしているのだ。うん、いいオカンになりそうだな。
そして。
「うむ！　私達は見事に掃除をやり遂げたぞ！」
腰に手を当て、満足げに頷くサクヤさん。
多分、サクヤさんが手伝わなかったら、倍は早く終わっていただろうなあ……って、コラコラ、［シン］もプラーミャも、ジト目でサクヤさんを睨むな。
『はは……一通り確認させてもらったけど、ここまで綺麗にしてくれるなんて思いもよらなかったよ』
「クク……当然だ！　この我が掃除をしたのだからな！」
そう言って高笑いをする中条。その姿といい台詞（セリフ）といい、まさに悪役に相応しい姿だった。
『本当は、［神行太保］とマスターの絆を試そうと思ったのに、それ以上の絆を見せつけられたら認めるしかないよ』
『はう……そ、そうだったのですね……』

なるほど……というか、［神機軍師］といいコイツといい、［シン］じゃなくて俺までセットで試すのな。

ひょっとしたら、この先も……。

すると、［浪子］は『巧』と記された宝珠に……アレ？　地煞星（ちさつせい）が白色だったのに対して、コッチは金色なんだな。

『はう！　天罡星（てんこうせい）一人目ゲットなのです！』

無事に宝珠は［シン］の身体へと入り、［シン］は高々と右の拳を突き上げた。

天罡星①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日、明後日はお休みし、次回はクリスマスイブの金曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「お、見えてきたぞ」

“梁山泊”領域（エリア）の『第三十一門』の看板を見て、俺は呟く。

「クク……望月ヨーヘイ、ここはどんな精霊（ガイスト）が守護しているんだ？」

腕組みしながら中条が尋ねるが、コイツ、もう俺が全部知ってる前提で聞いてきやがる。

一応、俺の『攻略サイト』のことについてはみんなには秘密なんだから、気をつけろよ……。

「うむ……それは私も気になるところだ」

「そうネ」

いや、二人もちょっとは疑問に思おうよ……って、まあ今さらか。

「この『第三十一門』……いや、ここから『第二十六門』まで、連続で水中戦又は水上戦になると思う」

「ほう……？」

そう……『第二十六門』から『第三十一門』までの六人は、いずれも水の中での戦いに長けた精霊（ガイスト）だ。

何より、たまに俺達を襲ってくる幽鬼（レブナント）の“水虎”は、その六人の手下だからな。というか、精霊（ガイスト）が幽鬼（レブナント）を使役すんなよ。

『はう！　水の中だろうと水の上だろうと、［シン］がすることは

ただ一つ！　全部倒して［シン］の養分にしてやることなのです！』

はは、頼もしいな。
だけど、精霊（ガイスト）を養分扱いするのはどうかと思うぞ？

「さあ着いたぞ」

船を桟橋につけ、鳥居をくぐって中に入ると……アレ？　ひい…
…ふう……みい……なんで六人もいるんだ？

『ガハハ！　待っていたぞ！』
『もう待ちくたびれたでやんす』
『でんな』

六人は、まるで芸人みたいなノリで話しかけてきた。緊張感ないなあ……。

『はう！　質問なのです！』
『［神行太保］くん、どうぞ！』
『一つの門に守護者は一体のはずなのに、なんで六人もいるのですか？』
『ガハハハハ！　いい質問だ！』

中央にいる一番偉そうな奴は、腕組みしながら豪快に笑う。

『アレでやんす。あっし達は六人全員でこの“梁山泊”領域（エリア）の船団を統轄しているでやんすよ』
『そうでんな。なので、ワテ等はいっそのことまとめて［神行太保］を相手にしたらええんちゃうかという話になったんですわ』
「へ、へえー……」

ウーン……どうやら俺は、このノリがあまり得意じゃないみたいだ。結構お笑い好きなのにおかしいなあ……。

すると。

「プ……ふふふ……っ！　や、『やんす』とか『でんな』って……！」

……どうやら、サクヤさんにはツボだったみたいだ。

コラコラ、プラーミャはそんなゴミでも見るような視線を向けてやるな。一応は［シン］の仲間なんだぞ？

『で、どうだ？　俺達全員を一度に相手取る根性はあるか？』

「チョ、チョット待て！？　さすがに今の提案は聞き捨てならないぞ！」

偉そうなオッサン精霊（ガイスト）……多分、［混江龍（こんこうりゅう）］だろう。その言葉に、俺は思わず待ったをかける。

いや、さすがに六対一なんて条件が厳し過ぎるだろ！

『はう！　それで構わないのです！』

「［シン］！？　お前、分かってるのか！？　ただでさえここの精霊（ガイスト）は全員ラスボス級なんだぞ！？」

俺は何とか思い直すように説得を試みるが……［シン］は、ゆっくりとかぶりを振った。

『相手が六人いるからって、ここで引き下がってちゃいけないのです！　［シン］は……［シン］は強くなって、マスターの言う理不

尽な未来を変えないといけないのです！』

「［シン］……」

その決意を秘めたオニキスの瞳の強い輝きを前に、俺は何も言えなくなってしまった。

まさか、［シン］がそこまで考えていてくれるだなんて、思ってもいなくて……。

「……分かったよ。だけど、絶対に無理だけはするな」

『はう！　ありがとうなのです！』

にぱー、と笑ったかと思うと、［シン］は六人へと向き直る。

『ガハハハハ！　気に入った！　さすがはアイツの姐御分の［神行太保］だ！』

『でやんす！』

『でんな！』

「モ、モウ無理……！」

このシリアスな雰囲気を台無しにするかのように、サクヤさんはお腹を押さえてうずくまった。

そして。

『はう！　先手必勝なのです！　【神行法・瞬】！』

『『『『『『っ！？』』』』』』

［シン］が一瞬で目の前から掻き消え、いつの間にか六人のうちの一人……というか、同じ顔の奴が三人もいるから、精霊なのか特定できないし。

『それー！　【爆】！　【裂】！』
『グフウッ……でやんす！？』

いや、苦しんでる時までその語尾やめろよ！？
だけど、これで一人……っ！？

『はう！？』
『デュフフ……水の中に引きずり込んでさえしまえば、コッチのものでんな！』

今度は双子の精霊（ガイスト）……［船火児（せんかじ）］と［浪裏白跳（ろうりはくちょう）］が、［シン］の足首をつかんで水の中へと沈めてしまった！？

「シ、［シン］！」

俺はたまらず［シン］が沈んでいった島の端まで駆け寄った。

すると。

「え……？　水が、凍ってる……？」
『はう！　どんなに水の中が得意でも、どんなに水を操ろうとも、固めてしまえば問題ないのです！　【凍】！』
『『ググ……悔しいでんな……！』』

どうやら、［シン］は呪符を展開させて水を凍らせ、逆にあの二人を拘束してしまったようだ。

「はは……やるなあ……！」
『ガハハハハ！　あっという間に三人も戦闘不能にしちまうたあ、

やるじゃねえか！』

『まだまだ！　これからなのです！』

そう叫ぶと、［シン］はまた［混江龍］へと突撃していった。

天罡星②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、本日から新作のローファンタジーの連載を開始しました！

「箱庭世界――ダイオラマ――　～外れスキル【空気扱い】がまさかの規格外だったため、現実とソシャゲのはざまで可愛い幼馴染達と共に無双する……って、アレ？　ひょっとしてヒロイン全員ヤンデレ！？～」

絶対に面白いので、ぜひぜひお読みくださいませ！

広告と評価の下にあるバナーから行けます！　どうぞよろしくお願いします！

明日はお休みし、次回は明後日日曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『ガハハハハ！　あっという間に三人も戦闘不能にしちまうたあ、やるじゃねえか！』
『まだまだ！　これからなのです！』

そう叫ぶと、［シン］はまた［混江龍］へと突撃していった。

『はうはう！　【神行法・転】！』

［混江龍］のすぐ隣にいた精霊（ガイスト）……ええと、［活閻羅（かつえんら）］、いや、コイツは［立地太歳（りっちたいさい）］か？　ああもう、ややこしい！　とにかく、［シン］は一瞬にしてソイツと体を入れ替え、［混江龍］の背後をついた。

『はう！　これで……っ！？』
『ガハハハハ！　甘えッッッ！　【霜鋒（そうほう）！】！』

クルリ、と振り返った［混江龍］は、結晶のように煌（きら）めく宝剣をその右手に出現させると、［シン］へ向けて横薙ぎに払った。
その動きに……［シン］を倒すことに、一切の躊躇（ちゅうちょ）もなく。

『クッ！　【神行法・瞬】！』

だけど［シン］も、【神行法・瞬】で一瞬にして距離を置き、また正面で対峙する。

「……やっぱり［混江龍］は一筋縄ではいかない、か……」

そんな二人の様子を見ながら、俺はポツリ、と呟いた。

「む……ヨーヘイくん、それはどういう意味だ？」

「ええ……早い話、他の百六の精霊（ガイスト）とは違い、この［混江龍］は決して［シン］の力になろうと戦っているわけではないってことです」

「っ！？」

俺の答えに、サクヤさんが息を飲んだ。

そう……他の“梁山泊”領域（エリア）の精霊達（ガイスト）があくまでも［シン］のために力を試しているのに対し、［混江龍］はあくまでも自分が認められるかどうか、その一点しか見ていない。

だからさっきの攻撃のように、［シン］がその宝剣で切り刻まれ、幽子となって消滅してしまったとしても、所詮はその程度ということで何も思わないだろう。

だけど。

「［シン］！　絶対に［混江龍］をお前の全てでねじ伏せろ！　そうすれば、ソイツは絶対に［シン］の力になってくれるはずだ！」

だからこそ、認めた相手に対しては絶対的な忠誠を誓ってくれるのだから。

『はう！　了解なのです！』

『ガハ！　やれるものならやってみやがれ！』

俺の檄（げき）を受け、超スピードで突撃する［シン］に対し、宝剣を正眼に構えて迎え撃つ［混江龍］。

勝負は……この一瞬で決まる。

『はうはうはうはうはうッッッ！』

『ガハハハハハハハハッッッ！』

［シン］と［混江龍］の宝剣が交錯しようとした、その時。

『あっし達のことを忘れてもらっちゃ困るでやんす！』

『やんす！』

まるで狙いすましていたかのように、［活閻羅（かつえんら）］と［立地太歳（りっちたいさい）］が両サイドから挟み撃ちにしてきた。

だが。

『はう！　そんなのお見通しだったのです！　【神行法・転】！』

［シン］は待ってましたとばかりに、［混江龍］とその身体を入れ替えた。

『わ！？　バカ野郎！？』

『『うおおおお！　でやんす！』』

二人の攻撃は、見事に［混江龍］へと決まり、二人もまた防ごうとした［混江龍］の【霜鋒】の餌食となった。

『グヘエ……ッ！？』

『『やられた……でやんす……』』

『はうううう！　［シン］の勝ちなのです！』

勝利の雄たけびを上げ、［シン］は両手を天高く突き上げた。

◇

『イテテテ……いやあ、参った参った。俺達の負けだ！』
『はう！　これからは、この［シン］こそがみんなのボスなのです！　キッチリ従うのです！』

苦笑する［混江龍］達に、［シン］はビシッ！　と人差し指を突きつけた。

『ああ……確かに認めるぜ。お前さんは俺達のボスだ。これからは、俺達がキッチリと露払いしてやるとも』
『『『でやんす！』』』
『『でんな！』』

そう言うと、六人はそれぞれ『寿』、『剣』、『平』、『罪』、『損』、『敗』の宝珠となり、［シン］の身体の中へと吸収されていった。

『んふふー、［シン］も偉くなったのです』

お腹をさすりながら、ほくそ笑む［シン］。
だけど……確かにこれで、［シン］は水中戦についても対応できる強さを手に入れた。

「さあ……残るはあと二十四人だ！」
『はう！　全員まとめてやっつけてやるのです！』

戻ってきた［シン］とハイタッチを交わし、俺達は次の『第二十五門』へと向かった。

天罡星③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、新作のローファンタジーが連載中です！

「箱庭世界――ダイオラマ――」

絶対に面白いので、ぜひぜひお読みくださいませ！

広告と評価の下にあるバナーから行けます！　どうぞよろしくお願いします！

今日は二話投稿！　次回はこの後更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星④（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『はう！　マスター、次の相手はどんな精霊（ガイスト）なのですか？』

『第二十四門』を守護する精霊（ガイスト）、［没遮欄（ぼっしゃらん）］を無事に仲間にして次への守護者の元へと向かっている途中、［シン］が元気よく手を挙げて尋ねる。

「ああ、次の『第二十三門』は［九紋龍（くもんりゅう）］と言ってな。百七人の精霊（ガイスト）の中でも短気で向こう見ずな性格らしいぞ」

『はうはう……なんだか不安でしかないのです……』

そう言うと、［シン］は俯いてしまった。

「はは、だがその強さは百七人の中でもかなりのものらしいし、味方にすれば心強いことは間違いないって」

『はうー……そもそも［シン］には、マスターがいれば充分なのです……』

コノヤロウ、可愛いこというなあ……。

『はう!?』

「はは……そうかもしれないけど、俺は［シン］がますます強くなってくれるほうが嬉しいぞ？　そうすれば、それだけ［シン］が傷ついたりしないってことだからな」

「えへへー……なのです」

［シン］の頭を撫で、微笑みながらそう告げると、［シン］は嬉し

そうに目を細めた。

「ふふ……どうやら次の島が見えたぞ」

そんな俺達を微笑ましそうに見つめていたサクヤさんが、前方の島を指差した。

はは……さあて、行くか！

◇

『フン……こんなチビ助が、この俺様の相手かよ』

そう言って、全身に龍の刺青（いれずみ）を入れた精霊（ガイスト）、［九紋龍］が鼻を鳴らした。

『はう！　馬鹿にするなです！　オマエなんか、［シン］にかかれば圧勝なのです！　瞬殺なのです！』

『ハッ！　おもしれえ！　やれるもんならやってみな！』

『ぐぬぬぬぬ……！』

お互いのおでこを突き合わせ、歯ぎしりしながら睨み合う二人。

いや、子どもかよ……。

『おい！　オマエ！　このチビが痛い目に遭っても、文句言いやがるんじゃねえぞ！』

「はは……ああ、言わないとも」

こちらを指差してすごむ［九紋龍］に、俺は思わず苦笑した。

だけど……お前じゃ［シン］を痛い目に遭わせることはできないよ。

だって、俺の［シン］は史上最速なんだから。

『おっしゃ！　かかってきやがれ！』

『はう！　行くのです！』

両刃の三尖刀を構えて気勢を上げる［九紋龍］に、［シン］が一直線に向かって行く。

『ハハッ！　やっぱりコイツ馬鹿だぜ！　そんなモン、俺に倒してくださいって言ってるようなモンだろ！』

［九紋龍］は三尖刀の先を連続して繰り出す。そのあまりの速さに、穂先が残像となって無数に見えた。

「……まるデ、私の【絨毯爆撃】みたいネ……」

「ああ、そうだな」

「マ、だったらアイツじゃやられるのがオチネ」

そう言って、プラーミャは肩を竦めた。

「ククク……どうしてそう言い切れるのだ？」

「アー……アンタは知らないのよネ。私の［スヴァローグ］は、一度［シン］に【絨毯爆撃】を全弾躱されたのヨ」

そうだったな……あれは、メイザース学園との対抗戦前のクラス代表決定戦で戦った時だっけ。

正直、あの戦いは紙一重だったのを覚えてる。

「ム……ナニヨ」

「いや、別に」

その時のことを思い出してクスリ、と笑っていると、プラーミャが口を尖らせながらジロリ、と睨んだ。

おっと、［シン］の戦いに集中するか。

『っ！？　躱（かわ）しただと！？』

『はう！　取ったのです！』

案の定［シン］は［九紋龍］の三尖刀の連撃を全てすり抜け、その背後に回ってペタリ、と呪符を貼り付けた。

『食らえ！　なのです！　【爆】！　【雷】……っ！？』

『はは！　甘えッッッ！』

すると［九紋龍］の身体に刻まれた刺青（いれずみ）の九つの龍が具現化し、呪符を食い破って一斉に［シン］へと襲い掛かってきた。

『はう……ならッッッ！』

それでも［シン］はその龍一体一体の眉間に呪符を貼り付けると。

『蛇は蛇らしく、大人しく冬眠してるのです！　【凍】！』

九つの龍は、たちまち凍ってしまった。

『ちいっ！　コノヤロッ！』

『遅い！　【爆】！』

『ぐはッッッ！？』

まずいと思ったのか、［九紋龍］は振り向きざまに三尖刀（さんせんとう）を振り下ろすが、それよりも先に［シン］が呪符を貼り付け、その全身を爆破した。

『い、いててて……っ！？』

『……まだやるですか？』

もんどり打って倒れた［九紋龍］が状態を起こした瞬間、［シン］が呪符を額にペタリ、と貼り付けてすごんだ。

『……チクショウ。次は覚えてやがれ』

プイ、と顔を背け、口を尖らせながら［九紋龍］はそう告げると、『微』と記された宝珠となって［シン］の身体の中へと入っていった。

『次って……まだあるのですか……』

そう言って、［シン］は深く溜息を吐いた。

「はは、さすがの［シン］も、［九紋龍］が相手じゃ大変だったか？」

『はう！　大変というより、相手をするのがメンドクサイのです！　あれじゃ駄々っ子と一緒なのです！』

駆け寄ってそう告げると、［シン］は顔をしかめながら答えた。

はは……子どもの［シン］にすら子ども扱いされる［九紋龍］って一体……。

そうして俺達は、次の『第二十二門』へと向かった、んだけど…

…。

「……誰もいない」

そこには、いるはずの守護者、［黒旋風（こくせんぷう）］の姿がなかった。

天罡星④（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、新作のローファンタジーを絶賛連載中です！

「箱庭世界――ダイオラマ――」

絶対に面白いので、ぜひぜひお読みくださいませ！

広告と評価の下にあるバナーから行けます！　どうぞよろしくお願いします！

明日はお休みし、次回は明後日火曜日の夜更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星⑤（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

「……誰もいない」

“梁山泊”領域（エリア）の『第二十二門』。

そこには、いるはずの守護者、［黒旋風（こくせんぷう）］の姿がなかった。

『はう……これはどういうことなのです？』

「……分からん」

コテン、と首を傾げる［シン］に、俺はかぶりを振る。

いや、［シン］のことを誰よりも慕っている設定のあの精霊（ガイスト）が、［シン］に逢わないなんてどうしても考えらえないんだけどなあ……。

「ふむ……とにかく、ここに精霊（ガイスト）がいない以上、先を急いだほうがいいのではないか？」

サクヤさんがポン、と俺の肩に手を置いてそう促す。

ハア……［黒旋風］は絶対に［シン］にとって力になってくれるはずだから、絶対に加えておきたかったんだけど……。

「……仕方ない。先を急ごう」

俺はみんなにそう告げると、桟橋まで戻って船に乗り込み、次を目指した。

◇

『はう！　ここもクリアなのです！』

『第二十一門』の守護者、［赤髪鬼］を無事仲間に加え、［シン］が嬉しそうにはしゃぐ。

だけど［シン］……クリアって、完全にゲーム感覚なのな。

「さて……次はいよいよ『第二十門』、か……」

「？　何かあるノ？」

俺の呟きを聞いたプラーミャが、不思議そうに尋ねる。

「ああ……実は、『第二十門』は本来［シン］が守護すべき場所だったんだ」

「［シン］が！？」

驚くプラーミャに、俺はゆっくりと頷く。

そう……『第二十門』こそが、［シン］……いや、［神行太保］の本来の居場所。

ただ、果たして［ゴブ美］が［シン］の仮の姿だったのかどうかは分からないし、［シン］自身にも“梁山泊”領域（エリア）の記憶も一切ないから何とも言えないがな。

「クク……まあ、まずは行ってみようではないか」

「ああ……」

俺達は船に乗り込み、その『第二十門』を目指す。

すると。

「？　何故誰もいないはずの『第二十門』に人影があるのだ？　それも四人も」
「さ、さあ……」
首を傾げるサクヤさんに、俺も曖昧に返事した。
い、いや、本当にどういうことだ？
そして、島の岸が近づくにつれ、四人の人影のうちの一人が、耳をつんざくような大声で叫んだ。
『おおおおおおおおおい！　“姐御”おおおおおおおおおお！』
「うるさっ！？」
俺達は思わず耳を塞ぐ。
というか、どんな肺活量してんだよ……。
『はううう……迷惑なのです……』
［シン］も耳を塞ぎながら、顔をしかめる。
だけど、“姐御”って一体誰のことを言ってるんだ？
とりあえず、桟橋へと船をつけると、四人のうちの一人がこちらへと駆け寄ってきた。
『姐御！　逢いたかったし！』
『はう！？』
突然、金髪ポニテの、どこからどう見ても女子高生……いや、白ギャルにしか見えない奴が、思いっ切り［シン］に抱きついてきた

!?

「え、ええと……」

『は？　今ウチは忙しいんだし。話しかけんなし』

おおう……メッチャ睨まれた……。

『は、はう……ところで、誰なのです……？』

“姐御”!?　ウチのこと忘れたし!?』

おずおずと尋ねる［シン］の言葉にショックを隠せないのか、この白ギャルは今にも泣きそうな表情を浮かべた。

いや、思い当たるふしがないわけじゃないんだが……だけど、ちょっと結びつかなすぎる。

『ハア……姐御、ウチは妹分の［黒旋風］だし……』

「えええええええええ!?」

『はうはうはうはう!?』

その名を聞いた瞬間、俺は思わず絶叫し、それにつられて［シン］も驚いた。

い、いや、［黒旋風］って『攻略サイト』では色黒な肌のヤンキーみたいな喋り方する女子なかったの!?　なんで白ギャルみたいになってんだよ!?

『あーあ……やっぱり気づかれないと思ったよ……』

『まあ、私達はあまりにも変わってしまいましたからね……』

『（コクコク）』

残りの三人もやって来て、そんなことを言い放つ……って、やっ

ぱりコイツ等も女子高生にしか見えないんだけど。

『あー……アタシは『第十三門』の守護者、［花和尚（かおしょう）］で、コッチが……』

『［行者（ぎょうじゃ）］です。そしてこちらは［青面獣（せいめんじゅう）］です』

『（ペコリ）』

なるほどー……コッチの［黒旋風］と同じツインテギャルが［花和尚］で、どこぞのお嬢様みたいにおしとやかそうなのが［行者］、黒髪ロングの無表情眼鏡女子が［青面獣］な。いや、分かんねーよ。

「……なあ、一つ……いや、できればいくつも聞きたいんだが、いいか……？」

「ん？　アタシに答えられることならいいよ」

「あ、ありがとう……」

気さくにそんなことを言ってくれた［花和尚］に、戸惑いながらも俺は礼を述べた。

「じゃ、じゃあ聞くけど、四人のその変わり果てた姿はどうしたんだ……？」

四人の守護者を指差しながら、俺はおずおずと尋ねる。

いやだって、『攻略サイト』ではこの四人、超武闘派でコスチュームも甲冑とか物々しい武器とか持ってる連中のはずなのに……。

『ふふ……いえ、［神行太保］が現世で活躍していると聞きましたので、私達も現世で恥ずかしくない恰好をしようと、そこにいる［黒旋風］が提案してきたのですよ』

『当たり前だし！　なんたって姐御に恥をかかせるわけにはいかな

いし！』

［シン］をまるで締め上げるように抱きしめながら、［黒旋風］は自慢げに語る……って。

「と、ということは、お……君達は、［シン］に力を貸してくれるのか？」

『あは！　そんなのモチロンだし！』

『んー、アタシも面白そうだしねー』

『ふふ……この二人のお目付け役が必要でしょう？』

『……アイス食べたい』

この四人が無条件で仲間になってくれるのは心強いが……［青面獣］、うちの［シン］みたいなこと言い出したぞ……。

「わ、分かった。それで、次の質問だが、なんで自分達の守護する門を離れて、この『第二十門』に集結してるのはどうしてだ……？」

『そんなの、姐御を盛大に迎えるために決まってるし！』

『あはは……そしてアタシ達は、このバカに付き合わされたってワケ』

ハア……なるほどねー……。

『あは！　それじゃみんな、サッサと姐御の中に入るし！』

『［神行太保］、マメに替わりなよ？』

『ふふ……現世、楽しみだわ』

『……（コクリ）』

そう言って四人はそれぞれ『殺』、『狐』、『傷』、『暗』の宝珠に変化すると、［シン］の身体の中へと入っていった。

『な、なんだか釈然としないのです……』
「だ、だなー……」
ま、まあ、戦ったりする必要がなかったので良かったけど。
「あ、あの我々と同じ女子高生のような精霊（ガイスト）、本当に強いのだろうか……」
「あー……あんな格好をしてますが、それに関しては間違いないですね。しかも四人は、この“梁山泊”領域（エリア）きってのパワーファイターですから」
「あ、あれでか！？」
いや、驚くのも無理ないよなあ……。
だって、全員見た目は可愛い女子高生だし。
「ま、まあ、一応は鳥居の先に向かいましょうか……」
「そ、そうだな……」
そうして俺達は、『第二十門』の鳥居をくぐった。

天罡星⑤（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日はお休みし、次回は明後日木曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星⑥（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『はう？　そういえばマスター、ここには誰もいないのに、どうして来たのですか？』

『第二十門』の舞台の前へとやって来て、［シン］が首をコテン、と傾けながら尋ねる。

「ああ……ここは［シン］が本来守護する場所だってことは説明したよな？」

『ハイなのです』

「だから、ここには当然［シン］にゆかりのあるものが置いてあるわけだ。例えば……」

俺はおもむろに舞台に上がると、その中央の床を調べる。

お、ここだな。

一つだけ色の違う部分に足を乗せ、強く踏み込んでみる。

すると。

『はう!?　床が開いたのです!?』

うん……『攻略サイト』のとおり、隠し階段があったな。

「さあ、行こう」

俺達は隠し階段を下っていくが、徐々に暗くなってきたので、プ

ラーミャと［スヴァローグ］に先頭に行ってもらってハルバードに炎をまとってもらった。

「……ヨーヘイ、［スヴァローグ］は松明（たいまつ）代わりじゃないわヨ」

「（コクコク！）」

ジト目で睨むプラーミャと［スヴァローグ］に、俺は思わず視線を逸らしてしまった。

ま、まあ、この領域（エリア）から出たら、ルフランでスイーツでも奢って……「し、仕方ないからラ、『機動魔法少女オールスターズ！』の映画に付き合ってくれたラ、許してあげるわヨ……」……おっと、ソッチのほうをご所望か。

「分かった。バッチリ一番いい席を取っといてやる」

「約束ヨ」

まあ、俺も観に行こうと思ってたところだし丁度いいか。

「むむむむ！　わ、私もその映画鑑賞に一緒に行くからな！」

すると、何故かサクヤさんが口をへの字に曲げ、手を挙げて宣言した。

いや、もちろん俺は大歓迎だけど……。

「フフ……『機動魔法少女』のなんたるかを知らない先輩に、その資格はあるのかしラ？」

「っ！　そ、そんなもの！　これから予習すれば……！」

いやいやサクヤさん、そんな資格いらないですから。なんなら、メインのちびっ子達のほとんどが資格ないですから。

「……にわかには『機動魔法少女』を語ってほしくないワ」
「むむ……」

ウーン……プラーミャにしては珍しく、先輩に対して言葉が厳しいなあ……。
いや、もちろん俺に対しては常に厳しいけど、それでも、先輩にはいつも敬意を払っているふしがあったし。

「それよりモ……着いたみたいネ」

もうこれ以上話す必要はないとばかりにプラーミャが視線を前に戻し、そう告げた。
確かにプラーミャの言うとおり、階段はここまでになっていた。

「クク……それで、ここには何があるのだ？」
「ああ……ここに、［シン］の新しい装備がある」
「「新しい装備！？」」
『はう！？』

俺の言葉に、みんなが驚きの声を上げる。

「まあ、それはこの奥にある部屋を見るまでのお楽しみだよ」

そう言って、俺はみんなを先導するように先に進み、一番奥の部屋の扉の前に立った。

「［シン］……この扉は、［シン］にしか開けない。さあ」
『はう……』

［シン］の背中を押して扉の前へと誘導すると、［シン］はおずおずと扉に手をかけた。

そして。

――ガチャ。

『っ！　開いたのです！』

扉は何の抵抗もなく開き、俺達は中に入る。

すると、中には金色に輝く手甲とブーツ、それに真紅の道袍（どうほう）が鎮座していた。

『あれは……？』

「あれが、［シン］の新たな装備、『駆神大聖（くじんたいせい）』だ」

『『駆神大聖』！？』

驚く［シン］に、俺はゆっくりと頷いた。

「この装備は、［シン］の『敏捷』ステータスを二段階引き上げてくれる」

『そ、それって……』

「そうだ。今の［シン］の『敏捷』ステータスが“ＳＳＳＳ”だから、“ＳＳＳＳＳ”になるってことだな」

実際、そこまでいくとどれほどのスピードになるのか想像がつかないけど、もう［シン］の姿をとらえることすら、誰にも不可能になってしまうんじゃないだろうか。

まあ、もはや［シン］の存在自体が『ガイスト×レブナント』のゲームからすればバグみたいなものだから、今さら驚いたりもしな

いけど。

「さあ、［シン］。あの『駆神大聖』を身にまとうんだ」

『はう！』

［シン］はオニキスの瞳で『駆神大聖』を見据え、ゆっくりと近づいた。

その時。

『！　はうはうはう！』

なんと、『駆神大聖』は自ら［シン］の元へとやって来ると、鈍色の手甲やブーツ、それに白の道袍（どうほう）が全て『駆神大聖』へと変わった。

「はは、似合ってるぞ」

『はうはう！　なんだか強くなったような気分なのです！』

身体をくるり、と一回転させ、［シン］がまじまじと自分の姿を見た。

そんな［シン］を見て口元を緩めながら、俺はおもむろにガイストリーダーを取り出した。

さあ……［シン］の『敏捷』ステータスは、想像通り“ＳＳＳＳ”になって……っ！？

「こ、これは……！」

「ヨーヘイくん、どうした……っ！？」

「ナ、ナニよコレ……！」

「クク……こんなことが……！」

三人が俺の後ろから一覗き込み、俺と同様目を見開く。

だって。

――――――――――――――――

名前　：シン（神行太保）

属性　：神仙（♀）

ＬＶ　：９３

力　　：Ｄ＋

魔力　：ＳＳ

耐久　：Ｃ－

敏捷　：ＥＸ

知力　：Ｓ＋

運　　：Ａ－

スキル：【方術】【神行法】【水属性反射】

【火属性反射】【氷属性反射】【闇属性反射】

【聖属性反射】【邪属性反射】【状態異常無効】

【物理弱点】【繁殖】

――――――――――――――――

今まで見たこともない、“ＥＸ”というステータスが表示されているのだから。

「……極限まで能力を高めた者の、最終到達点、なのか……？」

「わ、分かりません……ここが最高点なのか、それとも、さらに上があるのか……」

ただ。

「［シン］は、間違いなく最速になりました」

『駆神大聖』を身にまとい、威風堂々とした姿の［シン］を見つめ、俺は両の拳を強く握りしめた。

「ふふ……さすがは［シン］、さすがはヨーヘイくん、だな」

「……マア、ヨーヘイなら当然かもネ」

そう言って、サクヤさんとプラーミャが、俺の拳にそっと手を添え、微笑んで祝福してくれた。

天罡星⑥（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日はお休みし、次回は元日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星⑦（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

『はう！　［シン］はこれで誰にも負けないのです！　最強なのです！　無敵なのです！』

“梁山泊”領域（エリア）の『第二十門』で専用装備の『駆神大聖』を手に入れ、［シン］は船上で両手を突き上げながら気勢を上げる。

「コラコラ、暴れると船が揺れるだろ……大人しくしてろ」

『はう！？　マスターが全然ノリノリじゃないのです！　ここはもっと盛大にはしゃぐところなのです！』

「なんでだよ……」

俺の肩をポカポカと叩きながら猛抗議する［シン］に、思わず溜息を吐く。

「ふふ……［シン］、もちろんヨーヘイくんだって嬉しくてはしゃぎたいところだとも。その証拠に、ほら」

そう言って、サクヤさんが俺の手を取った！？

「見るといい。嬉しさのあまり拳を強く握りすぎて、、手のひらに爪が食い込んだ跡ができてしまっているのを」

『はう！　本当なのです！』

「うあああああ！？　サ、サクヤさん！？」

うおお……メッチャ恥ずかしい……。

だ、だけど、俺だって相棒がこんなに速く……強くなってくれた

んだ、超嬉しいに決まってるし、それこそ大声で叫びたくなるのを必死で抑えてもしょうがないよな……。

『んふふー、マスターは素直じゃないのです』

「う、うるせー……」

脇腹をつつきながらからかってくる［シン］に、俺は口を尖らせてプイ、と顔を背けた。

◇

『はうはうはう！　それじゃ［シン］を捕まえることができないのです！』

『むうっ！？』

［シン］は今、『第六門』の守護者、［豹子頭］と戦っている。

だけど、シングルナンバーの守護者だから相当の強さを誇っているにもかかわらず、更なるスピードを手に入れた［シン］は全くつけ入る隙を与えずに［豹子頭］を翻弄する。

というか、それにしてもこの［豹子頭］、メッチャ好戦的だったよなあ……。

ここに来るなり、金属製の棒を突き付けて、『我、汝と一騎討ちを所望する』なんて言って、［シン］が挑むまで一切聞く耳を持たないんだからなあ。メンドクサイ。

オマケに、いざ戦いが始まると仏頂面から一転、口の端を吊り上げて嬉しそうに嗤いやがるし……キモチワルイ。

悪い奴ではないんだろうけど、俺はあまり得意なタイプじゃない

かな。

そんなことを考えていると……お、そろそろ決着がつきそうだ。

『はう！　これで終わりなのです！　【雷】！』

『グガガガガガガガガッッッ！？』

周囲に展開した呪符を一気に発動させ、電撃が一斉に［豹子頭］の持つ金属の棒へと襲い掛かった。

要は、あの棒を避雷針と同じ役割を果たしてしまったってわけだ。

はは……だけど、そんな頭を使った戦術を練れるようになるだなんて、［シン］は心身共に成長したな……。

『まだやるですか？』

『……いや、我の敗北を認めよう』

ついさっきまでのキモチワルイ嗤（わら）いとは打って変わり、［豹子頭］はほれぼれするほどの笑みを零（こぼ）した。

うん、どうやらコイツ、戦闘になると性格が変わるバトルジャンキーで間違いなさそうだ。そういうの、本当に困る。

『この［豹子頭］、喜んで汝（なんじ）の力となろう』

そう言うと、［豹子頭］が『雄』と記された宝珠へと変わり、［シン］の身体の中へと入っていった。

『はうはう！　これで残すはあと五人なのです！』

「お、よく覚えてたな」

『マスターヒドイのです！　ヒドイのです！　［シン］のこと見くびりすぎなのです！』

頬をプクー、と膨らませながら、［シン］がポカポカと叩いてきた。痛い痛い。

「はは……ま、やっぱり［シン］は俺の自慢だよ」

『ははははう！？　また無自覚にそうやって……』

ながめるように［シン］の頭を撫でながらそう言うと、［シン］は顔を真っ赤にしてモジモジする。はは、照れてやがる。

「うむ……ヨーヘイくんはそういったことは改めるべきだな」

「エエ……本当に、ヨーヘイのバカ……」

ええー……なんでサクヤさんとプラーミャまでジト目で睨んでるんですかねー……。

「さ、さあ！　次はいよいよ『第五門』！　“梁山泊”領域（エリア）最強の守護者が待ってるぞ！」

『はう！？　最強なのですか！？』

「ああ！」

もちろん、知力や魔力、そういったものを含めて総合的に見た場合は違うけど、それでも、桁外れの武をもって戦いを挑む者を全て打ち倒す。

それこそが……『第五門』の守護者、［大刀（だいとう）］だ。

「まあ、そういう意味ではサクヤさんの［関聖帝君］と同じですね」

「む……ふふ、君に認められると、こそばゆいながらも誇らしくなるな……」

イヤイヤ、『ガイスト×レブナント』最強の精霊使い（ガイスト）が何言ってるんですか。

あなたには、これからもずっと、俺にとっての最強であり続けてほしいんですから。

そして俺達は船に乗って『第五門』を目指すと。

「誰か立っているな……って、あ、あれは！？」

島に立つ人物を見て、サクヤさんが驚くのも頷ける。

だって。

その姿は、まさに『関聖帝君』なのだから。

天罡星⑦（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

明日はお休みし、次回は明後日月曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星⑧（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

天罡星⑧

「誰か立っているな……って、あ、あれは!?」

“梁山泊”領域（エリア）の『第五門』、その島の岸に立つ一人の精霊（ガイスト）を見て、サクヤさんが驚きの声を上げる。

それもそのはず。

だって、ここの守護者である［大刀（だいとう）］は、まさに［関聖帝君］と瓜二つなのだから。

「クク……望月ヨーヘイ、これはどういうことなのだ?」

「……実は、俺にもよく分からないんだ……」

中条の問い掛けに、俺はかぶりを振った。

いや、『攻略サイト』には当たり前だけど何にも書いてないし、なによりラスボス級のサクヤさんがこの領域（エリア）に来るなんてシナリオもエピソードもないんだから当然なんだけど。

「と、とにかく、早く島に乗り込むぞ!」

俺達は大急ぎで船を漕ぎ、桟橋に船をつけた。

それを見ていた［大刀］も、青龍偃月刀を携えてこちらへゆっくり歩いてくる。

「［関聖帝君］」

サクヤさんは［関聖帝君］を召喚し、身構えた。

『……ようこそお越しくださいました。ご先祖様』

「「「「はあ！？」」」」

やって来た［大刀］から放たれた一言に、俺達四人は一斉に驚きの声を上げた。

い、いやいや、ご先祖様ってどういうこと！？

すると。

「あ……か、［関聖帝君］……？」

［関聖帝君］は前に出て［大刀］と対峙すると、フ、口元を緩めた。

『お主がこの私の子孫、とな……？』

「「「「しゃ、しゃべった！？」」」」

『ははは、はうはう！？』

い、いや、［関聖帝君］ってしゃべれるのかよ！？　驚きしかないんだけど！？

「か、［関聖帝君］……な、なんで話せるのだ……？」

『すいませんマスター……私は、最初から会話ができました……』

おずおずと尋ねるサクヤさんに、［関聖帝君］は申し訳なさそうに跪いた。

「な、なら、どうして……」

『それは……現世では精霊（ガイスト）は話すことができないのが当たり前で、私が話せることが知られては、マスターに良からぬことが起こると思ったのです……』

「「あ……」」

そこまで言って、俺とサクヤさんは気づく。

この［関聖帝君］は、サクヤさんのお父さん……藤堂マサシゲによって、その身体をさらに研究対象とされてしまうことを恐れてのものだということに。

「……そうか。だが、できればもっと早くに知りたかった、な……」

『申し訳、ありません……』

ほんの少しだけ寂しそうに微笑むサクヤさん。

［関聖帝君］は、唇を噛みながら頭（こうべ）を垂れた。

『はうう……マスターとお話ができるのは、［シン］だけの専売特許だと思っていたのです……』

「はは……まあまあ、お前だって［関聖帝君］と会話できるほうがいいだろ？」

『……元々、精霊（ガイスト）は精霊（ガイスト）同士で会話ができるのです』

「へ……？」

［シン］からボソッとそんなことを告げられ、俺は思わず呆けた声を漏らしてしまった。

い、いや、お前等会話できたのかよ……って。

「ま、まさか、俺達の悪口とか言ってたりしないよな……？」

『はう、それはないのですけど、［シン］はよく他のみんなに問い詰められるのです……マスターのせいで』

「お、俺のせい！？」

そう言って、［シン］がジト目で睨む。
えー……一体俺が何をしたって言うんだよ……。

「で、では、［関聖帝君］とこの精霊（ガイスト）が瓜二つなのは、先祖と子孫だから、ということなのか？」
『どうやらそのようです』
『はい……私はご先祖様である［関聖帝君］の子孫です。今でこそ［大刀］と名乗っておりますが、元の名は［関勝（かんしょう）］と申します』

へえ……［関勝］ねえ。

『では［関勝］よ、尋ねるがお主は［シン］と試すため、ここで待ち構えているということでよいな？』
『滅相もございません。ご先祖様と共にある［神行太保］は、それだけで信ずるに値するもの。私がこうして参りましたのは、ご先祖様にお渡しするものがあるため』
『私に渡すもの……とな……？』
『はい、どうぞこちらへ』

［大刀］もとい［関勝］が鳥居の奥へと手招きするので、俺達は彼女の後についていく。

すると。

『どうぞこちらです』

舞台に上がるなり、地響きと共に中央に地下へと続く階段が現れた。
あ、これ……あの『第二十門』と同じだなあ。

「……プラーミャ、また頼めるか？」
「マタ！？　ヨーヘイ、私（ヤー）のこと便利屋か何かと勘違いしてなイ！？」
「そ、そんなことないって！　メッチャ頼りにしてるし！」
腑に落ちないものの、プラーミャは［スヴァローグ］を召喚して先頭を歩く。
そして。
『……あれは？』
『あれこそが、『関家（かん）』に代々伝わる宝武具、『黄龍偃月刀』にございます……』
『黄龍……偃月刀……』
ポツリ、と呟き、［関聖帝君］はその『黄龍偃月刀』を手に取る。
『……力が、私の中に流れ込んでくる』
成程……まさか、［シン］だけじゃなくて［関聖帝君］にもパワーアップするためのアイテムが用意されているだなんて、思いもよらなかった。
あくまでもひょっとしたらだけど……実は、サクヤさんも俺と同じように、本当なら二周目から仲間になるキャラクターとして、シナリオ上用意されてたんじゃないだろうか。
それなら、同じように限定イベントがあってもつじつまが合う。

「サクヤさん……念のため、ガイストリーダーを」
「う、うむ……」

俺が促すと、サクヤさんはガイストリーダーを取り出し、画面を眺める、

「っ！？」

そこには。

――――――――――――――――
名前　：関聖帝君
属性　：軍神（♀）
ＬＶ　：９６
力　　：ＥＸ
魔力　：Ｂ－
耐久　：ＳＳ
敏捷　：Ａ＋
知力　：Ｓ
運　　：Ａ
スキル：【一刀両断・改】【乱戦】【大喝】【威圧】【統率】【千里行】【水属性反射】【火属性反射】【氷属性反射】【闇属性反射】【聖属性反射】【邪属性反射】【物理耐性】【状態異常無効】【水属性弱点】
――――――――――――――――

［シン］と同様、『力』ステータスには“ＥＸ”の表示があった。

『これでご先祖様は、たとえどのような相手であっても、全てを撃

ち滅ぼすことができる、最強の刀となりました』

『……そう、か』

ギュ、と『黄龍偃月刀』を握りしめ、［関聖帝君］は静かに目を瞑る。

『これで、私は無事に役目を果たすことができました。これからは、ご先祖様の活躍を［シン］と共に見届けるといたしましょう』

そう言うと、［関勝］は『勇』と記された宝玉へと変わり、［シン］の身体の中へと入っていった。

「ふふ……ヨーヘイくんと［シン］が強くなるのを見届けに来たというのに、まさかこの私達までもが強くなるなんて、な……」

嬉しそうに微笑むサクヤさんと、その隣にたたずむ［関聖帝君］

そんな二人の姿に、俺はただ見惚れていた。

天罡星⑧（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、現実恋愛ジャンルの短編で投稿しておりました「幼馴染の恋人と親友に裏切られた僕は、君のいるこの街から逃げ出した。」ですが、このたび、

「幼馴染の元彼女と元親友に裏切られて逃げた僕が、理不尽な目に遭って逃げ続ける彼女と出逢い、一緒に本当の幸せをつかむまで。」として連載版で続編を開始しました。

元々、この短編はここでの終わりがベストと思って書いたものなので、この連載版に関してはただの作者の自己満足というか、ご要望いただいた読者の皆様へのボーナスステージ程度に思っていただけると幸いです。

興味のある方は、ぜひ下のランキングタグからお読みくださいませ。

明日はお休みし、次回は明後日水曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星⑨（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

俺達は“梁山泊”領域（エリア）『第五門』を後にし、次を目指す。

でも。

「ハア……絶対に、碌なことにならないだろうなあ……」

そう呟き、俺は頭を抱える。

というのも、次の『第四門』は、まさに道士系精霊（ガイスト）の頂点に立つ、長女格の［入雲竜（にゅううんりゅう）］が待ち構えているのだ。

［神機軍師］の時のこともあるから、絶対にただじゃ済まない……。

『はうはう……マスター、［シン］が慰めてあげるのです……よしよし』

「イヤイヤ、お前のことだからな？　むしろお前がヒドイ目に遭うんだからな？」

『はう！？』

コイツ……気づいてなかったのかよ……。

「ク、ククク……まあ、あの時のような事態になっても、この我が貴様を護ってみせるとも」

「中条……」

ううう……本当にコイツ、いい奴だなあ……。

「むむむむ！　わ、私だって、新たに手に入れた『黄龍偃月刀』の力、存分に振るってみせるとも！」
「……フン、私（ヤー）に頼めば、全部燃やし尽くしてあげるのニ……」
いやいや二人共、なんで中条に対抗意識燃やしてるの？
『プークスクス、相変わらずマスターがモテモテでしどろもどろになってやがるのです……って、や、やだなあ、なんで関姉さまとローグ姉さまがここにいるのです……？』
で、［シン］は［シン］で［関聖帝君］と［スヴァローグ］に絡まれてやがるし……。
というか、今二人の精霊（ガイスト）は、［シン］に何を言ってるんだろう……気になる。
「ア！　見えたわヨ！」
次の舞台となる『第四門』の鳥居を、プラーミャが指差した。
頼むから……普通の精霊（ガイスト）であってくれよお……！
俺は鳥居を眺めながら、祈るように両手を合わせた。
◇
『ああ～ん♪　［シン］ちゃん！　［シン］ちゃん！』
『チョ！？　は、離れてほしいのです！？　苦しいのです！？』
「「「「「……」」」」」
俺達が『第四門』に乗り込むなり、何故か［シン］はここを守護する精霊（ガイスト）、［入雲竜］に熱烈な歓迎を受けていた。

というか、［シン］が［入雲竜］の巨大な胸に挟まれ、メッチャ息苦しそう……。

ちなみに、［入雲竜］の胸がどれくらいすごいのかというと、あの氷室先輩ですら遥かに凌駕するほどで、しかもやたらと胸の部分がはだけた道袍を着ているものだから、俺は目のやり場に困って仕方がない。

「ク、ククク……我は夢でも見ているのか……！」

そうだな……中条、お前にとっては夢であったほうが幸せかもしれない。

だって、さっきから［入雲竜］の胸の谷間を凝視しすぎているから、サクヤさんとプラーミャがゴミでも見るような目でお前を見てるぞ。

『ふにゅ～……』

『ウフフ！　それ！　それ！』

変な掛け声と共に、［入雲竜］が［シン］の顔を巨大な胸でもにゅもにゅしてる……。

「……ヨ、ヨーヘイくんは、ああいったのが、その……す、好きなのか……？」

「へ……？　あ、ああいや、その……どうなんでしょう……」

サクヤさんが顔を真っ赤にしながらおずおずと尋ねてきたので、俺は曖昧に返事をした。

ほ、本当はああいったのに憧れがないこともなくもないわけじゃないけど、そんなことを言った瞬間、これまで築き上げてきたもの

が脆くも崩れ去るだろうからな……って。

「……プラーミャ、何してるんだ？」

「ファ！？　ナナナ、ナンデモナイワヨ！？」

あろうことか、プラーミャは［入雲竜］がしているようなことを、自分の胸で実践していた。おかげでプラーミャの胸がもみくちゃになってて、その……くそう、俺は健全な男子高校生なんだよ！　こんなのもたねーよ！

『アラアラ……ウフフ、［シン］ちゃんのマスターもしてあげましょうか？』

「っ！？　いいい、いえ！　結構です！」

［入雲竜］の魅力的な提案に、俺は思わず吸い込まれそうになったが、サクヤさんとプラーミャに背中をつねられたおかげで我に返ることができた。

お、おおう……マジであれは、とんでもない精神攻撃だなあ……。

「そ、それよりもだ！　私達はあなたに［シン］とヨーヘイくんに助力してもらうため、ここまでやって来たのだ！」

「ソ、ソウヨ！　サッサと本題に入りなさイ！」

とうとう我慢できなくなったサクヤさんとプラーミャが、顔を真っ赤にして［入雲竜］に怒鳴りつけた。

『アラアラ……なんだったら、あなた達にもこの極意を教えてあげてもいいけど？』

「「ウグッ！？」」

い、いやいや二人共、なんで真剣に悩んでんの？
ちゃんと本題に入ろうよ……。

「……真面目な話、俺達に力を貸してくれませんか？　俺は……俺達は、このクソッタレな未来を変えたくて、そのための力が欲しくて、ここに来ました」

『……』

「だから……お願いします！」

俺はそう言って、深々と頭を下げた。

相手が精霊（ガイスト）だとか、そんなの関係ない。

ただ、俺はサクヤさんが消えてしまう未来なんて、絶対に受け入れたくないから。変えたいから。

だから。

『……［シン］ちゃんはどうなの？』

『はう……［シン］も、マスターと一緒に強くなりたいのです！　マスターと……マスターと、ずっと一緒にいたいのです！　だから！』

［シン］は俺の隣へ来ると、一緒になって深々と頭を下げる。

本当に、俺の相棒は……。

『……ウフフ、私は最初から、あなた達に助力するつもりでしたから、大丈夫よ』

『「っ！」』

『［シン］ちゃん……本当に、あなたは良いマスターに出逢えてよかったわね……』

『はう……お姉様……』

慈愛の表情で［シン］を見つめる［入雲竜］。

そして。

『［シン］のマスター……この［入雲竜］、あなたの力となりましょう。だから一緒に、この世界を共に変えましょう。そのために……理不尽な力に打ち勝つのです』

「っ！？」

［入雲竜］の言葉に、俺は思わず息を飲んだ。

ひょっとして、［入雲竜］はこの世界がゲームの世界で、そして、俺が何と戦っているか知っているってのか！？

「ま、待って……！」

俺はそのことを問い掛けようと手を伸ばすが……それよりも早く、［入雲竜］は『間』と記された宝珠となって、［シン］の身体の中へと消えていった。

天罡星⑨（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

また、

「幼馴染の元彼女と元親友に裏切られて逃げた僕が、理不尽な目に遭って逃げ続ける彼女と出逢い、一緒に本当の幸せをつかむまで。」についても絶賛連載中です！

下のランキングタグからぜひぜひ！

明日はお休みし、次回は明後日金曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星⑩（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
明日は「ガイスト×レブナント」の発売日です！
どうぞよろしくお願いします！

“梁山泊”領域（エリア）『第四門』を出て、俺達は次の『第三門』へと向かっている。

けど。

「……」

俺は、あの［入雲竜］の言葉が頭から離れず、今も船に揺られながら思考を巡らせている。

何故、彼女はあんなことを俺に言ったのか。

どうして、そのことを知っているのか。

「ヨーヘイくん……」

サクヤさんが俺の手に自身の手を添え、心配そうに俺を見つめた。

「はは……すいません、ちょっと考え事してました……」

「それはいい……だが、もし悩んでいることがあるなら……困っていることがあるなら、遠慮なく私に言ってくれ。私は……君の力になりたい」

「ありがとう、ございます……」

いつか真実を、サクヤさんにも明かさなければいけない時が来るそれは……意外と近いかもしれない、な……。

すると。

――ポン。

「心配するな。貴様には我もいる。［入雲竜］の告げた理不尽な力、貴様なら打ち破れるとも。何より、貴様によって我は理不尽な力から解放されたのだからな」

「中条……」

そう、だったな……。

お前も、本当なら終盤まで争う主人公のライバルだったんだもんな……。

でも、お前は今じゃ、この世界がゲームである真実を共有する、俺の大切な親友だ。

それに、サクヤさんも、サンドラも、プラーミャも、カズラさんも、アオイも、土御門さんも、加隈もいる。

何より、俺には最高の相棒……［シン］がいる。

俺は……一人じゃない。

「うん……行こう！」

「クク……それでこそ、我が友、望月ヨーヘイだ」

中条は嬉しそうに、くつくつと笑う。

全く……本当にこのゲームって、表と裏のキャラ設定違い過ぎるよな。

◇

『お待ちしておりました』

何故か『第三門』の守護者である［知多星（ちたせい）］が桟橋で待ち構えていて、恭しく一礼した。

「え、ええと……待ってたっていうのは……？」

『ふふ……［神行太保］とそのマスターであるあなたに、お話したいことがあるからです。どうぞこちらへ』

そう言って、［知多星］は俺達を島の中央へと案内する。

だけど……話したいことっていうのは一体……。

『ひょっとしたら、［入雲竜］から既に聞かされていると思ったのですが……その様子では、［神行太保］を可愛がり過ぎて、肝心なことを告げなかったようですね……』

［知多星］はこめかみを押さえ、眉根を寄せながらかぶりを振った。

「……それって、理不尽な力のこと、か……？」

『ふふ……どうやら、大事な部分だけはちゃんと告げていたようですね……』

俺の言葉を聞いて、［知多星］は満足そうに頷く。

『では、私からはこの“梁山泊”領域（エリア）の真実をお話しておきましょうか』

「ここの真実！？」

『はい。そもそもこの領域（エリア）、他の領域（エリア）と比べて不思議に思いません

でしたか？』
「そ、それは……」
そう……『攻略サイト』では、百七人の精霊（ガイスト）と戦闘を含めた色々なミニゲームで攻略していき、最後に［シン］は最強のスキルを手に入れるイベントのために用意されたもの。
でも、実際に来てみると、確かに精霊（ガイスト）とバトルをしたりすることもあるけど、全員が俺達人間とも会話による意思疎通ができた。
何より……ここのボスに幽鬼（レブナント）は一体もいない。
『ふふ……どうやらこの“梁山泊”領域（エリア）については、神……いえ、“管理者”と呼んだほうが正しいのでしょうか？　その影響が及ばないのです』
「っ！？　か、“管理者”！？」
［知多星］から告げられたワード……“管理者”という言葉に、俺は思わず聞き返した。
『“管理者”については、この私から詳しくお話をするのは控えておきましょう。この後に控える私達の二人の主が答えてくれるでしょうから』
「……」
『それで、この“梁山泊”領域（エリア）は“管理者”の影響を受けないおかげで、このように意思を持って私達は行動しています。あなた達と、共に戦うために』
「……じゃあ、最初から俺達を待っていた、と？」
『はい』

［知多星］は肯定の意味を込めてニコリ、と微笑む。

『とはいえ、［神行太保］を使役するマスターが悪意を持っているのであれば、共に戦うに値しないですから……色々、試させていただきましたが』

成程……それが、精霊（ガイスト）達の試練ってわけだな。

「それで……俺はどうなんだ？」

『もちろん、少なくとも私を含め百五人は合格と判断しました』

「百五人……ってことは、上の二人は違うってことだよな？」

『さあ……あの二人の考えは私には及ばないところですから』

そう言って、［知多星］は誤魔化すかのように口元を押さえ、クスクスと笑った。

すると。

『ん？　……どうやら、上の二人が待ちくたびれているようですので、私の話はここまでといたしましょう』

「ま、待ってくれ！　俺には聞きたいことがまだまだあるんだ！」

『ふふ……それは、上の二人が答えてくれますのでご安心を。それと、『第二門』の守護者も『第一門』で待つとのことですので、そちらは素通りしてよいとのことです』

それだけ告げると、［知多星］は『機』と記された宝玉へと変わり、［シン］の中へと吸い込まれていってしまった。

「ソ、ソノ……ヨーヘイ、今の話っテ……？」

ずっと俺達の会話を見守っていたプラーミャがおずおずと尋ねる。
まあ、そうだよな……訳が分からない、よな……。

「プラーミャ、私達はただ見守っていればいいんだ……だって、ヨーヘイくんなのだからな」
「ア……フフ、そうだったわネ」

サクヤさんがおどけながらそう言うと、プラーミャも微笑みながら肩を竦めた。

はは……本当に、俺の大切な人達は……。

「クク……ならば、二人が待つという『第一門』へと行こうではないか！」
「ああ！」

俺達は、『第三門』を後にして、次の目的地、『第一門』へと向かった。

天罡星⑩（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

そしてそして！　明日はいよいよ「ガイスト×レブナント」の発売日です！

早い書店ですと、今日にも発売されているところもございます！

ぜひぜひ、お買い求めくださいますようお願いいたします！

次回は明日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

天罡星⑪（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
本日は「ガイスト×レブナント」の発売日！
どうぞよろしくお願いします！

『はう！　次が『第一門』ということは、これで全部なのですか？』

船の上で、［シン］が指をくわえながら尋ねる。

「ああ。『第一門』を守護する［呼保義（こほうぎ）］こそが、この“梁山泊”領域（エリア）の精霊（ガイスト）を束ねる最後の守護者だ」

そう……［呼保義］と『第二門』の守護者である［玉麒麟（ぎょくきりん）］を仲間に加えれば、このイベントはクリアとなり、［シン］は新たな力を得ることとなる。

それよりも。

「この世界の真実、か……」

俺が知っているのは、この世界が『ガイスト×レブナント』というゲームの世界で、俺達はそのゲームのキャラクターだっていうこと。

そして、このゲームの結末を知っていて、このままだとサクヤさんには最悪のシナリオが待っているっていうことだ。

「……ヨーヘイくん、今は悩んでいても仕方がない。まずは、その守護者に話を聞こうではないか」

「はは……ですね」

俺とサクヤさんは頷き合っていると。

「ッ！　見えたワ！」

俺達の“梁山泊”領域（エリア）攻略の終着点、『第一門』へと到着した。

「ふむ……さすがに出迎えてまで、ということはないか」

桟橋に船をつけて島に足を踏み入れると、サクヤさんがポツリ、と呟いた。

「ククク……いずれにせよ、この鳥居の向こうにはいるのだ。慌てる必要はあるまい」

「ま、それはそうだな」

俺達は鳥居をくぐり、［呼保義］と［玉麒麟］の待つ舞台へと向かうと。

『待っていたわ』

『待っていたぞ』

中原王国の鎧をまとった屈強な中年の男と、涼やかな表情を浮かべた黒髪の綺麗な女性が舞台の上で控えていた。

男の名は、『第二門』の守護者、［玉麒麟］

そして……この女性こそが、“梁山泊”領域（エリア）『第一門』の守護者であり、百七人の精霊（ガイスト）を束ねる頭領……［呼保義］。

「それで……［知多星］から聞いたが、俺達に真実を教えてくれる、んだよな……？」

『ええ、もちろん』

［呼保義］はニコリ、と微笑んだ瞬間、舞台の上に円卓と人数分の椅子が出現した。

『ふふ……どうぞお掛けになって？』

「は、はあ……」

勧められるまま俺達は椅子に座る……っ！？

『大丈夫。毒などは入っておりませんよ』

突然目の前に現れた、湯気の立ったお茶を見て驚く俺達に、［呼保義］はクスクスと笑いながらそう言った。

『ふむ……［呼保義］殿、彼等にはどこから話をするかの……？』

『そうですね……』

［呼保義］は、口元に手を当てて思案する。

『……まず、この世界がどのようなものなのか、ご存知ですか？』

「この世界、ですか……？」

どうする……？　俺と、『攻略サイト』のことを告げた中条はこの世界がゲームの世界だってことは知っているが、それをサクヤさんとプラーミャに知られてもいいんだろうか……。

『ふふ、ご安心ください。今は私と［玉麒麟］、それにあなたと［シン］だけですから』

「っ！？」
『はう！？』

周りを見ると、いつの間にか霧に包まれ、一緒に席に座っていたはずのサクヤさん達の姿がなかった。

『……これは、我が時の狭間へとお主達二人のみを連れてきただけだ。話が終われば、すぐに戻れる』
「そ、そうか……」
『それで……答えを聞かせてもらえますか？』
「あ、ああ……ここは“ゲームの世界”、だろ……？」

俺は二人の表情を窺いながら、おずおずと告げた。

『……ゲームというものが何を意味するのかは分かりませんが、少なくともここは、別の世界にある物語です』
「……」
『ふふ……ですが、本音を言うと［神行太保］のマスターが知っているとは思いませんでした』

あれ？　わざわざ俺に尋ねてきたから、知ってるモンだと思ってたのに……。

『ふむ……これは興味深いな……』
『ふふ……［神行太保］のマスターは、特別な存在のようですね』

ええと……二人してまじまじと見るの、やめてほしいなあ……。

『はう！　［シン］のマスターはすごいのです！　素敵なのです！　天下無双なのです！』

「いや、最後はおかしい」

俺は冷静に［シン］にツッコミを入れると、［呼保義］がクスクスと笑った。

『では、［シン］のマスター……あなたは、その物語の結末がどうなるか、ご存知ですか？』

「……（コクリ）」

『そうですか……』

俺が頷くのを見て、［呼保義］が一瞬悲しそうな表情を浮かべた。

『物語通りに進めていっても、おそらくあなた自身には特に影響はないでしょう。元々、あなたはこの物語に関与する人物ではありませんから』

「はは……でしょうね」

『……それでもなお、こうやってこの“梁山泊”領域（エリア）に来たということは、あなたがこの物語を変えたいから……ですね……？』

「はい」

こんなの、問われるまでもない。

俺は、この物語の結末をぶっ壊して、サクヤさんを救うんだ。

そして……サクヤさんの隣に、俺は……。

『……どうやら、私達がお教えできることはほとんどないみたいですね』

『ふむ……それはそれで物足りぬがな……』

「い、いやいや、まだ“管理者”について教えてもらってないぞ！？」

苦笑しながら頷き合う二人を見て、俺は思わずツッコんでしまった。

そもそも、その“管理者”について教えてもらえるって、［知多星］からは聞いてたんだぞ!?

『ふふ……心配しないで？　それについては、あの御方が教えてくれますから』

「あの御方……って、アンタで終わりじゃないのか!?」

おかしいぞ!?　“梁山泊”領域（エリア）は頭領である［呼保義］を仲間に引き入れた時点で踏破になるはずだろ!?

なのに、なんで次が……!?

『ほら、あなたの仲間達が待っています。私達と共に戻りましょう』

「あ！　オ、オイ!?」

［呼保義］と［玉麒麟］は、それぞれ『慈』と『罡』と記された宝玉に姿を変え、［シン］の中へと入っていった。

天罡星⑪（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

そしてそして、とうとう「ガイスト×レブナント」が発売となりました！

どうぞ書店や通販、電子書籍などでお買い求めくださいませ！

ＨＩＭＡ先生の超絶美麗イラストが目印です！

本当に、本当にどうぞよろしくお願いします！

明日はお休みし、次回は明後日月曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

托塔天王①（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！
「ガイスト×レブナント」第一巻は絶賛発売中！
どうぞよろしくお願いします！

托塔天王①

「あ！　オ、オイ！？」

［呼保義］と［玉麒麟］は、それぞれ『慈』と『罡』と記された宝玉に姿を変え、［シン］の中へと入っていった。

それと共に、いつの間にか席に座っているサクヤさん達が現れた。

「？　ヨーヘイくん、どうした……って！？」

「アノ二人はどこに行ったノ！？」

「二人は、無事に［シン］の仲間になりました」

驚いて周囲を見回す二人に、俺はさっきの経緯（いきさつ）を伝えた。

「そうか……つまり、彼女達が呼ぶ“あの御方”とやらが、まだ後ろに控えている、と」

「はい……」

だけど、『攻略サイト』によればこの“梁山泊”領域（エリア）はこの『第一門』の守護者、［呼保義］でラストのはず。

それなのに、どうしてまだいるのか……。

「……望月ヨーヘイ。この領域（エリア）を攻略すれば、どのような能力を手に入れることができるのだ？」

「ああ……」

中条の問い掛けに、俺は答えるのを躊躇する。

もちろんコイツは俺の『攻略サイト』のことを知っているから構わないが、サクヤさんとプラーミャは知らない……って、もう今さら、か……。

「……ここで手に入るスキルは、この領域（エリア）と同じ、【梁山泊】。能力は、これまで出会った百七の精霊（ガイスト）が持つスキルが使用可能になる」

「「「っ！？」」」

俺の答えを聞き、三人が息を飲んだ。

それはそうだろう。今まで見てきた一癖も二癖もある精霊（ガイスト）のスキル、その全てを使えるなんて破格すぎるから。

「そ、それはすさまじい、な……」

「ええ……そして、俺達は無事、百七の精霊を仲間にできた。だから、これで終わりのはずなんだけど……」

ガイストリーダーを取り出し、［シン］に触れさせてみるが……。

「……やっぱり、［シン］のスキル欄には【梁山泊】のスキルは表示されていない」

つまり、まだそのスキルを取得できていないってことだ。

「ヨーヘイくん……心配するな。つまりは、この後に控えるものを仲間にすれば、無事そのスキルは手に入るということだろうから……」

「サクヤさん……ええ」

だけど……ここは“梁山泊”領域（エリア）の終着点。

ここから先、どこへ向かえば……。

すると。

「ッ！？　ヨ、ヨーヘイ！」
「うお！？」

プラーミャが俺の顔を両手で挟み、グイ、と明後日の方向へと向けた。

「……船頭と、船がコッチに向かってきてる」

船は桟橋に繋がれると、船頭がこちらへとやって来た。

『……“あの御方”の元へ、ご案内いたします』
「「「「っ！？」」」」

そうか……こうやって、次へと進むのか。
だが、そうすると目の前の船頭は一体何者なんだ……？

精霊（ガイスト）？　それとも、幽鬼（レブナント）か……？

『へへ……あたしは［白衣秀士（はくいしゅうし）］と申しまして……器の小ささから百八の守護者に選ばれずに、“あの御方”の小間使いをしております……』
「そ、そう……」

ということは、一応は精霊（ガイスト）ってことでいいんだよな……。

『さあ、どうぞこちらへ……』
「あ、ああ……」

怪しいところはあるが、それでも信じてついて行かないことには先に進めない。
俺達は案内されるまま、船に乗り込むと。
『では、行きますよ。しっかりとつかまっていてくだせえ』
「うわ！？」
すると船は猛スピードで湖の上を走る。
ふ、振り落とされる……っ！？
『ああ、そうそう』
「っ……な、なんだ？」
『この船からオマエ等が落ちて死んでも、それはあたしの責任じゃありませんから』
「「「「っ！？」」」」
ニタア、と口の端を吊り上げる、目の前の［白衣秀士］。
「っ！　舐めるな！　［関聖帝君］！」
ギリ、と歯噛みしたサクヤさんは、［関聖帝君］を召喚するが。
『おっと。あたしを倒したら、“あの御方”にはたどり着けやせんので。オマエ達にできるのは、振り落とされないようにつかまっていることだけなんですよ』
「この……っ！」
ハア……面倒な奴だなあ……。

「……それは構わないけどさあ……オマエ、“あの御方”って奴のところに着いた時点で、ただで済むとは思うなよ？」

俺はこれ以上なく低い声でそう告げる。

「フフ……そうネ。その時は、この私（ヤー）が燃やし尽くしてあげル」

「クク……ならば我は、同じ苦痛を永遠に受けるよう、何度も繰り返してやろう」

はは……プラーミャも中条も、キレたらおっかないなあ……。

「ふ、ふふ……ならば、『黄龍偃月刀』の試し切りをさせてもらうとしよう」

『っ！？』

獰猛な笑みを浮かべるサクヤさんに、［白衣秀士］は顔から一気に冷や汗を垂らしながら、戦慄する。

バーカ、調子に乗るからだ。

ま、だからこそ百八の守護者に選ばれなかったんだろうけど。

『……』

お、船のスピードが落ち着いたぞ。

全く……最初から素直に案内しろよな。

ということで。

『……こ、この先に、“あの御方”はおられます』

ひときわ立派な鳥居がそびえ立つ島に到着し、［白衣秀士］はその先にある長い階段を指差した。

この階段を上った先に、その“あの御方”って奴が……。

「みんな、行こう！」
「うむ！」
「エエ！」
「クク……」
『はう！』

俺達は階段を上り、一番上へとたどり着くと。

『……お待ちしてましたよ？』

鬼の形相をした仮面を被った、一人の貴婦人恭しく一礼した。

「あ、あなたは……？」
『はい。この“梁山泊”領域（エリア）を束ねる守護神、［托塔天王（たくとうてんのう）］です』

托塔天王①（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

１／８に発売された「ガイスト×レブナント」もどうぞよろしくお願いします！

どうぞ書店や通販、電子書籍などでお買い求めくださいませ！

ＨＩＭＡ先生の超絶美麗イラストが目印です！

明日、明後日はお休みし、次回は明々後日木曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

托塔天王②（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

托塔天王②

『はい。この“梁山泊”領域（エリア）を束ねる守護神、［托塔天王（たくとうてんのう）］です。
鬼の形相をした仮面を被った、一人の貴婦人が恭しく一礼した。
「“梁山泊”領域（エリア）の、守護神……」
彼女……［托塔天王］が告げた言葉を、俺は反芻（はんすう）する。
というか、こんなの『攻略サイト』のどこにも載ってないぞ!?
色々と不思議なことがあり過ぎて、頭が混乱するんだけど!・
『うふふ……［神行太保］……いえ、今は［シン］と呼ばれているのですね』
『はう!?』
声を掛けられ、［シン］がピン、と背筋を伸ばした。
ん？　この反応……。
「［シン］……ひょっとして、［托塔天王］のことを知っているのか？」
『し、知らないのです！　ですけど、身体が勝手に緊張してしまうのです！』
『うふふ、それも仕方ありません。［シン］に……いえ、［ゴブ美］の魂に融合した、［神行太保］の守護者であった頃の記憶が宿っているのですから』
『「［ゴブ美］の魂と融合したあっ!?」』

［托塔天王］から放たれた言葉に、俺と［シン］は驚愕した。
い、いや、［シン］のこの姿は［ゴブ美］のクラスチェンジした姿でしかないはずだろ！？
なのに、別の精霊（ガイスト）……［神行太保］と［ゴブ美］がくっついたってことなのかよ！？　そんなことがあり得るのかよ！？
『……本来であれば、［ゴブ美］はクラスチェンジ先として［ホブゴブリン］もしくは［レッドキャップ］しかなかったはず。なのに［神行太保］へとクラスチェンジをした。おかしいと思いませんか？』
「そ、それは……」
確かに、［托塔天王］の説明には一理ある。
だけど、元々［神行太保］はゲームイベントで配布された精霊（ガイスト）で、それはどんな精霊（ガイスト）……たとえアオイの［ジークフリート］であったとしても使役することが可能だ。
だから、ゲームの世界として捉えるなら、別に［ゴブ美］が［シン］になっても不思議じゃない。
『うふふ、納得いかないって顔をしていますね。ですが、よくよく考えてみてください。果たしてあなた達は、本当に［神行太保］へと至る道を経て、クラスチェンジしたのですか？』
「っ！？」
そ、そうだった……俺達は、ただ［レッドキャップ］にクラスチェンジをしようとしたら、偶然［神行太保］にクラスチェンジをしたのであって、決して配布された限定コードを使ったわけじゃない。
だから、本来ならこのクラスチェンジはあり得なかったんだ。

『……これは、私達の意思によって、［神行太保］をあなた達に託した結果なのです』
「アンタ達の、意思……」
『はい』

本当に、訳が分からない……。
結局、どうして“梁山泊”領域（エリア）の精霊（ガイスト）達は、こんなことを……。

『既に［呼保義］達からも聞いているかと思いますが……私達は、この世界の“管理者”と戦っています』
「“管理者”……そうだ！　俺はソイツが何者なのか聞きたいんだ！」

俺は［托塔天王］に詰め寄る。

『うふふ……“管理者”とは、この世界の秩序を守る者。この物語を、同じ結末へと導くための』
「っ！？」

［托塔天王］にそう告げられ、俺はハッとなる。
入学早々俺にヘイトが集まったことも、アオイが二学期に入学することも、加隈の奴が俺と入れ替わってクソザコモブのポジに成り代わってしまったことも……全ては、その“管理者”って奴の力が働いたから、ってことか……。

『うふふ……あなたは、ここが別の世界の物語だということにあまり驚かないのですね？』
「ああ……［知多星］からも聞かされているしな……」

ここで、あえて『攻略サイト』の話をする必要はないだろう。

［知多星］だって、そのことまでは知らなかったようだし。

『そうですか……なら、話は早いですね。そして、私達“梁山泊”は、そんな常に迎える同じ結末に対して、疑問を抱いておりました』

「……」

『おかしいとは思いませんか？　どうして私達は、そのような物語に付き合わなければいけないのか。どうして、理不尽な扱いを受ける者と幸福に満ち溢（あふ）れる者が最初から決められているのか』

ああ……俺も、そう思うよ。

なんで、サクヤさんが死ななきゃならないのか。

なんで、サクヤさんが苦しい思いをしなきゃいけないのか。

そのために、俺は……。

『私達はそんな決まった結末を覆すために、それを成し遂げる者を探しました』

「……」

『ええ……そして見つけたのは、あなた達です』

そう、か……［ゴブ美］の［シン］へのクラスチェンジは、“梁山泊”領域（エリア）の精霊（ガイスト）達の手によって……。

『うふふ……私達も驚きましたよ。この物語で主人公に真っ先にやられてしまうあなたが、物語が始まる前に必死にあがいているじゃないですか。しかも、物語ではあり得ない行動をしながら』

そう言って、［托塔天王］はクスクス、と笑う。

ああ、そうだよ。だって、アレしかあの時の俺達には強くなる手

段がなかったんだから。

『……そんな、物語とかけ離れた行動を繰り返すあなたなら、ひょっとしたら物語を覆すことができるのではないか、そう考え、［神行太保］を託したのです』

「そっか……」

……どんな思惑があったにせよ、俺と［ゴブ美］に希望を与えてくれたことは間違いない。

ただ、感謝しかない……。

『……私達“梁山泊”は、あなた達と共に戦いましょう。“管理者”と』

「ああ……！」

『ハイなのです！　コテンパンにやっつけてやるのです！』

俺と［シン］は拳にグッと力を込める。

『ですが』

ん？　まだあるのか？

『うふふ……私にも、あなた達を少し試させてもらってもいいですか？』

そう言うと、［托塔天王］の鬼の面がニタア、と不気味に嗤（わら）った。

托塔天王②（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

１／８に発売された「ガイスト×レブナント」もどうぞよろしくお願いします！

どうぞ書店や通販、電子書籍などでお買い求めくださいませ！

ＨＩＭＡ先生の超絶美麗イラストが目印です！

明日、明後日はお休みし、次回は明々後日日曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

托塔天王③（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

托塔天王③

『うふふ……私にも、あなた達を少し試させてもらってもいいですか？』

そう言うと、［托塔天王］の鬼の面がニタア、と不気味に嗤った。

ハア……やっぱり、そんな気はしたんだよなあ……。

「……［シン］」

『ハイなのです』

俺達も［托塔天王］を見据え、迎撃態勢を取る。

さあ……始めようか。

「行くぞ、［シン］！　先手必勝だ！」

『はうはうはうはう！』

俺の合図で［シン］は一気に飛び出す……って、は、速くて目で追えない！？

というか、『駆神大聖』を手に入れたことによって得た『敏捷』ステータス“ＥＸ”の本気の速さ、とんでもないな……。

『はう！　獲ったのです！』

一瞬にして背後に回っていた［シン］が呪符を大量に展開する……っ！？

『ふふ……』

突然［托塔天王］は二体に分かれた。

「あ、あれはっ!?　まさか［両頭蛇（りょうとうだ）］と［双尾蠍（そうびかつ）］のスキルか!?」

『か、関係ないのです!　【爆】……っ!?』

『後ろがガラ空きですよ?』

いつの間にか三体目の［托塔天王］が、［シン］の背後についているだと!?

『クッ!　【神行法・転】!』

［シン］はすぐさま［托塔天王］と体を入れ替え、再び背後をつく。

だが。

『はうはう!?　消えたのです!?』

『ふふ……スキルを解除すれば、分身もなくなるのは必定』

クソッ……見事にスキルを使いこなしてやがる……。

「……なあ、［托塔天王］」

『なんでしょうか?』

「ひょっとして、“梁山泊”の精霊（ガイスト）、百八人全てのスキルが使える……なんてことはないよな?」

俺は分かっていながらも、あえてそんな質問をした。

『ふふ……もちろん、使えますよ』
「はは……そうかよ……」
チクショウ……結局、予想どおりかよ……！
『ふふ……では、こんな攻撃はどうかしら？』
［托塔天王］の右手に青龍偃月刀が現れ、ゆっくりと構える。
……今度は、［大刀］のスキル、【一刀両断】かよ……。
『はあああああああああああああッッッ！』
掛け声一閃、［托塔天王］はすさまじい一撃を繰り出す。
『はう！　そのスキルじゃ［シン］には通用しないのです！』
『っ！？』
捉えたと思われた【一刀両断】だったが、［シン］のあまりの速さが残像を生み出し、青龍偃月刀の刃がスウ、とその残像をすり抜けていった。
――ぺた。
『はう。【雷】』
『っ！？』
［托塔天王］の全身に電撃がほとばしり、彼女の膝が落ちそうになる。
でも、どうやら耐え切ったみたいだ。

『ふ……ふふ……本当に、厄介なスピードですね……』
『はう、だったらあなたも、［シン］の真似っ子をすればいいのです』
『……無茶を言いますね。ステータスはスキルじゃありませんから、私でもその動きは無理ですよ……』

そうだ。
［シン］のあのスピードは、俺達が数えきれない努力を積み重ねて手に入れた結晶。
そう簡単に、同じことをできるはずがないんだ。

『はう！　なら、ここで一気に仕留めるです！』

さらにスピードを上げ、［シン］は数多くの残像と共に［托塔天王］へと迫る。
というか、これじゃ“分身の術”だよな……。

でも。

『……ふふ』
『っ！？』

嗤(わら)いながら肩を揺らす［托塔天王］。
い、一体何が……っ！？

「シ、［シン］！　今すぐ［托塔天王］から離れろおおおおお！」
『っ！　はう！』

俺の叫びを聞いた［シン］は、急停止をしてそのまま一気に飛び退いた。

『惜しい。あと少しでした』

本当に、間一髪だった。

あとちょっと遅れていたら、あの［神機軍師］の最大スキル、【石兵八陣】の餌食になっていたところだ……。

『ですが……ふふ、あなた達はよいコンビですね』

「当然だ！　俺と［シン］の絆を舐めるな！」

『はう！　そのとおりなのです！　［シン］のマスターはマスターしかあり得ないのです！』

微笑みながら告げた［托塔天王］に向け、俺と［シン］は気勢を上げた。

そうとも！　俺の相棒は、［シン］以外にあり得ないんだ！

『ふふ……ではその絆、本物かどうか試してみましょうか。【宝塔不壊】』

『「っ！？」』

そう告げた瞬間、俺達と［托塔天王］との間に巨大な塔がそびえ立っただと！？

『さあ……この［托塔天王］の誇るこの攻撃、防げるでしょうか？』

すると巨大な塔の各階にある窓から、一斉に大砲が向けられた。

その数、百八門。

「は、はは……これじゃ、［豪天雷］のほうがまだ可愛げがあった

な……」

『はう……』

塔を見上げながら、背中に冷たいものを感じる。

『ふふ……いきますよ？』

［托塔天王］が右手を構えた、その時。

『放てえええええええええええッッッ！』

号令と共に、百八門の大砲が一斉に火を吹いた。

「［シン］！」

『はうはうはうはう！　絶対に全部躱（かわ）しきってみせるのです！　【神行法・跳】！』

［シン］は俺に被害が出ないようにと、空中を蹴って一気に駆け上がっていく。

そして。

『さあ……かかってこいなのですッッッ！』

大砲……それを備える塔に向け、［シン］は咆哮した。

托塔天王③（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

１／８に発売された「ガイスト×レブナント」もどうぞよろしくお願いします！

お近くの書店や通販、電子書籍などでお買い求めくださいませ！

ＨＩＭＡ先生の超絶美麗イラストが目印です！

明日、明後日はお休みし、次回は明々後日水曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

九天玄女（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

九天玄女

『さあ……かかってこいなのですッッッ！』

大砲……それを備える塔に向け、［シン］は咆哮（ほうこう）した。

「［シン］……！」

そんな［シン］の姿を見て、俺はギュ、と拳を握る。

あの百八門もの大砲が、逃げ場もないほど一斉に放たれるんだ。

普通だったらひとたまりもない。

でも……俺は、［シン］ならやってくれると信じている！

［シン］は……［シン］こそが、最高の精霊（ガイスト）だッッッ！

「行けえええええええええ！　［シイイイイイイイイイイン］！」

『はうううううううううううッッッ！

迫りくる百八つの弾丸。

それぞれが、［シン］の体内に入っていった宝玉と同じ色をしている。

おそらく、一人一人に刻まれた文字もあるんだろう。

『はう！　はう！　はう！』

その弾丸一つ一つが、［シン］の残像に触れてはそのまますり抜ける。

まるで、百八の精霊（ガイスト）達を嘲笑（あざわら）うかのように。

「そうヨ！　［シン］は、私の精霊（ヤーガイスト）、［スヴァローグ］の【絨毯爆撃（じゅうたん）】すらも躱（かわ）し切ったのヨ！　そんなモノ、当たるはずがないワ！」
「クク……［シン］を捉えるなら、せめて【クロノス】がなければな」

後ろから、プラーミャと中条が声援を送る。
そうだ……俺達は、二人と……みんなと戦って、競って、支え合ってここまで来たんだ。

「ふふ……私はこの一年以上、ずっと彼等を誰よりも一番傍（そば）で見続けてきた」

そう言うと、サクヤさんはクスリ、と笑う。

そして。

「その私だからこそ言おう！　［托塔天王］だか百八の精霊（ガイスト）だか知らんが、刮目するのだな！　ヨーヘイくんと［シン］の魂の強さをッッッ！」

はは……そうですね。
あなただけはずっと、俺達を見守ってくれました。

だから……そんなあなたに、俺達の全てを見せます！

『ふふ！　面白い！　面白いですよ！　ならその魂の強さというものを、存分に楽しませてもらいますよ！』
「っ！？」
『はう！？』

なんと、次々と躱したはずの宝玉が、いつの間にか［シン］を四方八方から囲みながら浮遊していた。

『さあ……終わりですッッッ！』

［托塔天王］が掲げた右手の拳を握りしめた瞬間、百八つの弾丸がまるで［シン］に吸い寄せられるかのように向かって行く。

『はうううううううううッッッ！』

悲鳴に似た叫びと共に、無情にも百八つの弾丸が一つの弾丸を形成した。

［シン］……っ！

俺は……俺は、信じている！

お前が、こんなものでやられるような奴じゃないことを！

すると。

――ぺた。

『はう……終わりなのです。【裂】』

いつの間にか［托塔天王］の目の前にいた［シン］は、その鬼の面に呪符を張り付け、静かに呟いた。

『ふふ……見、事……』

鬼の面が粉々に砕けた瞬間、巨大な塔も、百八つの弾丸も消滅した。

◇

『ふふ……予想外、まさに予想外の強さでした』

鬼の面が砕かれ、顔の一部が露わになった［托塔天王］が、口元を緩める。

というか……うん。一部だけ覗（のぞ）く素顔から察するに、メッチャ美人だな……サクヤさんには負けるけど。

「それで、俺達は合格か？」

『もちろんです。むしろ、あなた達と共に戦えることに、これほど名誉だと感じることはありません』

そう言うと、［托塔天王］はそっと胸に手を当てた。

『……これからあなた達は、九つの柱や五つの領域（エリア）のボス、さらには封印されし原初の王“ヴーリ”などでは比べものにならないほど強大な者と戦うこととなります』

「……」

ははは……ラスボスである“ヴーリ”ですら相手にならないって、真のラスボス以外あり得ないんだけど。

そんなことを考えながら乾いた笑みを浮かべていると。

「

『ふふ……おそらく、あなたが今想像した御方すらも、なお及ばないかもしれませんね』

「っ！？」

［托塔天王］の言葉に、俺は思わず息を飲んだ。

真のラスボスでも勝てない、のかよ……。

『……ですが、“管理者”を倒さねば、結局はこの世界でも同じ物語が繰り返されるだけとなってしまいます』

「……つまり、やるしかないってことだよな」

はは……何だかんだ言ったところで、結局やることは変わらない。

このクソみたいなゲームのシナリオをぶっ壊して、サクヤさんが死ぬっていう結末を絶対に回避して、クリスマスから先へ進む。

それが、俺の望みなんだから。

『ふふ……さすがは［シン］のマスター。そんな覚悟は最初から決まっていましたか』

そう言うと、［托塔天応］は嬉しそうにはにかんだ。

『［シン］、そして［シン］のマスター……私達“梁山泊（エリア）領域”の精霊（ガイスト）は、あなた達と共にあらんことを……』

『「「「「っ！？」」」」』

突然、［托塔天王］の鬼の面が全て砕け散ると共に、その身体が幽子に包まれた。

これはまるで……クラスチェンジみたいだな……。

幽子の渦は徐々に薄れ、中から現れたのは……っ！？

「こ、これは……」

神々しいまでの輝きを放つ、黒髪黒目の、まるでおとぎ話にでてくるかのような、そんな絶世の美女の姿がそこにあった。

『この【九天玄女（きゅうてんげんにょ）】……永遠に、マスターと共に……』

そう言ってニコリ、と微笑むと、【九天玄女】はすう、と、まるで幽体のようになって［シン］と同化した。

九天玄女（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

１／８に発売された「ガイスト×レブナント」もどうぞよろしくお願いします！

お近くの書店や通販、電子書籍などでお買い求めくださいませ！

ＨＩＭＡ先生の超絶美麗イラストが目印です！

明日、明後日はお休みし、次回は明々後日水曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

梁山泊領域、踏破（前書き）

ご覧いただき、ありがとうございます！

梁山泊領域、踏破

「［シン］！」

【九天玄女】が溶け込むように同化し、呆けている［シン］に俺は堪(たま)らず駆け寄った。

『はう……マスター……』

「大丈夫か!?　どこかおかしなところはないか!?」

［シン］の身体をペタペタと触り、異常がないかどうか確認する。

ふう……どうやら、目に見えて異常はない……って。

「どうした［シン］!?　やっぱりどこかに異常が!?」

『ははははは!?　そ、そんなに［シン］の身体を触っちゃヤなのです……マスターはデリカシーがなさすぎなのです……』

顔を真っ赤にした［シン］が恥ずかしそうに抗議をするが……一体どうしたっていうんだよ……。

「ハア……ヨーヘイ、［シン］だって精霊(ガイスト)ではあるけド、それと同じように女の子なのヨ？　そんな身体に触ったりしたラ、［シン］だって怒るわヨ」

「あ……そ、そうか……」

プラーミャに指摘され、俺はようやく気づく。

そういや［シン］も女の子だったな……。

「その……す、すまん……」
『はうう……仕方ないので、アイス三つで勘弁してあげるのです』
「はは……」

口を尖らせ、プイ、と顔を背けながらそう話す［シン］に、俺は思わず苦笑した。

「ふふ……とにかく、これでこの“梁山泊”一領域【エリア】も踏破、ということになるのかな？」
「そうですね……これで［シン］は、新たなスキルである【梁山泊】が無事に手に入れたと思いますが……」

本来のイベントならそれで終わりだけど、その後に予想外のことが起きたため、俺は少し不安になる。

「ふむ……とにかく、一度ガイストリーダーで確認してみてはどうだ？」
「はい」

俺はポケットから取り出し、［シン］のステータスを確認すると……っ！？

――――――――――――――――
名前：シン（神行太保）
属性：神仙（♀）
ＬＶ：９３
力：Ｄ＋
魔力：ＳＳ
耐久：Ｃ－
敏捷：ＥＸ

知力　：Ｓ＋
運　　：Ａ－
スキル：【方術】【神行法】【九天玄女】
【水属性反射】【火属性反射】【氷属性反射】
【闇属性反射】【聖属性反射】【邪属性反射】
【状態異常無効】【物理弱点】【繁殖】
――――――――――――――――――――

そこに表示されていたのは、【梁山泊】ではなく【九天玄女】のスキル。

「こ、これは……」
「ど、どういうことヨ……」
「ク、ククク……よもやあの美女が、スキルとはな……」

後ろから画面を覗き込む三人と同様、俺も困惑している。
どうして【梁山泊】のスキルを得ることができなかったのか……
そして、どうして【九天玄女】が代わりにスキルとして表示されているのか……。

「う、うむ……ヨーヘイくん、こうなったら一度、その【九天玄女】のスキルを使ってみてはどうだろう……？」

確かにサクヤさんの言うとおり、どんなスキルか分からないのであれば、使ってみるしかない。

「……［シン］」
『はう、やってみるのです』

俺の呼びかけに、［シン］はフンス、と気合いを入れると。

『いくのです！　【九天玄女】！』

両手を空へと突き上げ、スキル……【九天玄女】を発動させる……って。

「あ、あれ？」

『はう？』

辺りは静まり返るばかりで、何も起こらない……ぞ？

「シ、［シン］、ちゃんとスキルは使ったのか？」

『はうはう！　確かにいつもの要領で【九天玄女】を発動してみたのです！　絶対に、何か起こっているはずなのです！』

［シン］は必死にそう訴えるけど……。

俺は振り返ってサクヤさん達に目で確認するが……うん、ですよね……。

「な、なあ、もう一回試してみてくれ」

『はうはうはう！　もう一度！　【九天玄女】！』

同じように両手を掲げて大声で叫ぶが、結果は同じだった。

「ど、どういうことだ……？」

『はうううう……』

俺と［シン］は、この結果に思わずうなだれる。

いや、ちゃんとステータスにスキルが表示されているんだから、使用できて当然だろ！？

なのに、なんでうんともすんとも言わないんだよ!?

「ふむ……ひょっとしたら、その【九天玄女】には発動条件があるのかもしれないな……」

「発動、条件……？」

サクヤさんの言葉に、俺は振り返っておずおずと聞き返した。

「うむ。基本的に、スキルに関してはアクティブスキルとパッシブスキルがあるが、このうちアクティブスキルに関しては一定化の条件が整って初めて使用可能となるものが、稀（まれ）ではあるが存在する」

確かにサクヤさんの言うとおり、そういったスキルがあることは俺も把握している。

でも、本来手に入れる予定だったスキル、【梁山泊】については常時発動可能のスキルだった。

だから、【九天玄女】も同じだと思ったんだけどな……。

「……いずれにせよ、その【九天玄女】がヨーヘイくんに対して害をなすスキルではないことは確かだ。ならば、ますは発動条件などを一緒に調べていこうじゃないか」

「サクヤさん……」

そう言ってニコリ、と微笑むサクヤさんに、俺は思わず見惚れる。

そうだ、な……肝心のクリスマスまでは、まだ半年以上もあるんだ。だったら、今このタイミングで焦ったりする必要はない、か……。

「はは……やっぱりサクヤさんは最高ですよ」

「あう!?　きゅきゅ、急に何を言いだすんだ!?」

俺の言葉に、サクヤさんは顔を真っ赤にしてオロオロする。
はは、普段の凛とした姿も素敵だけど、こういう仕草も可愛いなあ……。

「ム……ヨーヘイ！　もう用が済んだなら帰るわヨ！」
「うお！？」

何故かむくれた表情のプラーミャに強引に腕を引っ張られ、俺は思わずよろめいた。
でも、そうだな……ここでの目的は全て果たした。

なら。

「よし！　んじゃ、帰ろう！　今日は“梁山泊”領域（エリア）踏破記念ってことで、俺がルフランでスイーツ奢るぞ！」
『わあい！　なのです！』
「うむ！　それは楽しみだ！」
「フン……言っとくけド、私（ヤー）は二つ食べるからラ」
「クク……友と一緒にカフェで過ごすのも一興、だな」

そして俺達は、“梁山泊”領域（エリア）を後にした。

梁山泊領域、踏破（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました！

そして……更新が遅くなってしまい、申し訳ありません。
リアルが忙しかったことと体調を崩してしまったことが重なり、９日ぶりの更新となってしまいました。
また、今後についても他作品の公募等に向けた執筆等もあり、しばらくはできれば毎週金曜日の夜更新とさせていただければと思います。
楽しみにしていただいている読者の皆様には申し訳ありませんが、どうぞご理解のほどよろしくお願いします！

また、本日よりハイファンタジー？異世界恋愛？の新作の投稿を始めました。
ページ下のタグから行けますのでぜひ。

『僕は、七度目の人生で家族を捨てることにした　～過去六回の人生全てにおいて家族に裏切られて殺された僕は、復讐のために怪物と噂される大公家の令嬢に自分を身売りした結果、最高に幸せになりました～』

ということで、次回は来週金曜日の夜に更新！

少しでも面白い！　続きが読みたい！　と思っていただけたら、ブクマ、評価をよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n4613gz/

【５月コミカライズ開始！２巻６／１０発売！】ガイスト×レブナント　クソザコモブな俺は、相棒の精霊を美少女に進化させて最強に！

2022年9月9日02時20分発行